東方有機愛 ～Brain Powerd～

学徒兵叩き売り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方有機愛　～Ｂｒａｉｎ　Ｐｏｗｅｒｄ～

【Ｎコード】
Ｎ３８８９Ｕ

【作者名】
学徒兵叩き売り

【あらすじ】
幻想郷に、奇妙な物体・・・いや、生物が現れた。
山のような巨体を持つ、《オルファン》と呼ばれるその者の出現と共に、幻想郷の各地にて、謎の円盤が発見される。
そうしてそこから現れる《アンチボディ》。
彼らは何故幻想郷に現れたのか。
何故幻想郷に生きる者達との交流を望むのか。
そして、何故同じアンチボディ同士で争うのか。
それを知ることは出来ずとも、ただ少女達は、孤独な彼らと愛を育

むだけだった・・・

※

ということで、この小説は、アニメ作品、『ブレンパワード』と、『東方ｐｒｏｊｅｃｔ』を題材にした二次創作作品です。
前作の∀ガンダムに引き続き、大好きな白富野作品を題材に、のんびりとマイペースに、読者を置いてけぼりにしながら連載していきたいと思います。

作中で設定が詳しく説明されてない作品ですので、作者の独自的な解釈がかなり多いです。
また、これまでの作者の小説をご覧になられた方々ならお分かりになられると思いますが、登場キャラクターの性格が原作からかけ離れていることが多いので、どうかご了承ください。

それと、前作同様、富野節にも挑戦しつつ、盛大に大コケさせて頂いております。

もうひとつ、この小説では意図的に説明を省いているところや、説明はしていても、上手くできていなかったり、不足している部分が多いです。
ですので、両作品のことを詳しく知らない人には、やや分かりづらい部分もあるかもしれないので、ご了承ください。
まぁ、かくいう作者自身、実際のところは中途半端な知識しかないのですが・・・

え～ということで、

この小説は見られたものではないので読んではいけません。

by，禿モドキ

導入『孤独なるさまよい』

現と夢の境界がある。
彼女はそれを《スキマ》と呼んでいた。

現の世から爪弾きにされ、忘れ去られようとしている者達が最期に行き着き、そして、その最期の向こう側へと渡っていく場所である。

自分が存在しているのか、否か、そのどちらとも分からない曖昧な認識が顕在化する。
自分が不必要なものなのか、そうでないのかも分からないまま、ただ形だけをその場に成す。
そんな冷ややかな絶望の中で、人は、あるいは遍く幻想は、このスキマを通り、幻想郷へと往く。

彼女はその様を、幾度となくここで、眺めてきた。
忘れ去られ、このスキマにやってくる者達は決して多くはない、が、少なくもない。
自然の摂理とは、即ち生きるということは、新生と忘却であり、それが最も顕著なのは『人間』である。
『人間』ほど、生きることを言葉として理解しようとする生き物はいまい。そして、生きるということをみっともないほどに実践しようとする者達は・・・
彼らは、日が経つごとに新しきものを創造し、そして古きものを忘

れ去る。
人間とは、常に幻想を生み出している生き物なのだ。
だから幻想郷は生まれた、そして、幻想郷はいつまでも消えることはない。

そんなことはどうでもよかった。
そんなことは彼女にとっては、幻想郷の礎を築いた当時から分かっていることだったし、今更その証とも呼べる、スキマに満ちる混沌とした認識の波を見つめたところで、特別感傷を受けることはなかった。
これらの幻想の数々がやってきた、現世の姿を脳裏に思い浮かべるようなことだってしなかった。
そんなことをせずとも、彼女はいつでも現世に行けるわけだし、そもそも興味がなかったからだ。

だが、今回はそうではなかった。

彼女が興味を惹かれるのは、もっと単純で簡単で、それでいて永遠に分かることができないようなものか・・・

あるいは、『あのようなもの』である。

「・・・あれは一体・・・」
彼女は珍しく、感嘆と言える声を出していた。
その眼には、認識の曖昧になった『何か』の群れが造り出す混沌と

したスキマの空間の中においては、不釣り合いなほどの存在感を醸し出すあるものが見えた。
それが何なのかは具体的には分からない。
ただ、『美しいな』と思える何か・・・

それは、まるで宝石のような均整で濁りの無い金色をしていながら、同時に、荒々しき山のように巨大であった。
そして、滑らかな曲線を持つその姿は、まるで仙骨や腸骨、あるいはもっと直接的に、子宮さえも彷彿とさせるほどに艶めかしくも、決して生々しくはなく、むしろ神秘的とさえ感じさせた。
彼女は、彼女自身の性格を言葉に言い表せば、『無関心』というのは入るだろうとは自覚していたが、そんな彼女がその美しい『そのもの』の姿に見惚れてしまっていたことも、おかしなことではないだろうと考えられた。
『そのもの』は、光があるのかも分からないが、それゆえに暗黒と言い切れるであろうこのスキマの中においても、眩いほどの金色の光を放っている。
が、あくまでも一つの鉱石の塊のように見えた・・・少なくともそう見えた。
そして『そのもの』は、ただ美しいだけの存在ではなかった。

「ん・・・？」
彼女は、両掌をそれぞれ両方の耳に当てて、耳を澄ませた。
何かが聞こえるような気がしたからだ。
が、何も聞こえない。
何かが蠢くような音さえも聞こえないスキマは、その不気味なまでの静けさに関しては、何も変わっていなかった。
だが・・・やはり何かが聞こえる、ように感じる。
それは音ではなく、彼女の鼓膜ではなく、もっと感覚的に、心と呼べる部分に直接伝わっていた。

何かを語りかけているのか？
一体何を・・・

『そのもの』は相変わらず静かであり、相変わらず美しかった。
だが彼女は、その美しさに一片の『感情』を感じたような気がした。
そうしてその瞬間、彼女は、数秒前に『そのもの』に感じた、鉱石のようだ、という認識を改めた。

これは鉱石ではない、物体などではない。
生物だ。
これは・・・いや、『彼』・・・あるいは『彼女』は、生きている。

「このようなものが、私のスキマの中に・・・」
彼女は、考えあぐねるかのように、僅かに眉をひそめた。
彼女と親しい間柄の者でも（そもそも、そういう者達が彼女にいるのかどうかさえ、はっきりとは分からない）、あまり見たことがないような表情である。
幻想郷の全てを、そして、そこに生きる者達にとっては自分達以上の幻想である現世においてもほとんど全てのものを知っているはずの彼女でさえ、理解しかねる『そのもの』。
何かを伝え、そして、こちらを待っているように感じさせる『そのもの』に対し、彼女の身体は、気がついたときには動き始めていた。

「ふ・・・」
彼女は、何故かも分からず薄ら笑いを浮かべながら、スキマの中を漂い、『そのもの』へと近づいていった。

近づけば近づくほど、『そのもの』の大きさと、眩い輝きに圧倒されるようである。
はっきりとそのディテールを確認できるところまで近づくと、『そのもの』の表面には、いくつかの溝（スリット）が奔っていることに気がついた。
その溝はかなり深いようで、そこから『そのもの』の体内に入ることができそうだ。
また、そのような溝以外にも、表面には、いくつかの緑色の光の筋が小刻みにその光を疾走させ、生命が脈打つ様を感じさせた。
が、それ以上に、彼女の眼を惹いたものがあった。

「あれは・・・」

金色に輝く『そのもの』の、中央（と呼べるのかは分からないが、最も中心である部分と感じられた）に、女性の姿をした彫刻のようなものがあったのである。
それを見た瞬間、またしても『そのもの』に対し、物体的な、さらに言えば人工的な印象を受けると同時に、相反するはずの生物的な印象もより強く感じた。
なにより・・・

「この声のようなものは・・・あれが発しているのね」

彼女にはそう感じられた。
『そのもの』の姿を見た時から感じられた、何かが語りかけるような感覚が、その女性の姿をした彫刻から一番強く発せられているように思えた。
彼女は改めて、今度ははっきりとした意識をもって『そのもの』の正体を確かめ、何をこちらに伝えようとしているのかを知るために、女性の姿の彫刻へとさらに近づいていった。

相当近くにまで近づいたが、例の感覚は、ただこの彫刻から発せら

れると分かるだけで、具体的に何なのかは分からない。
彼女はとうとう、実際の人間の数十倍はありそうな彫刻に対し垂直になるような形で、そのすぐ傍に降り立ってしまった。
「ん・・・」
その瞬間、『そのもの』の肉体から発せられている、その鉱物的な姿からは考えられないような生物としての熱が、足元から静かに頬を掠めたものだから、驚いた・・・ような表情は浮かべた。
『そのもの』が発する光もまた、その輝きを一層強くしながらも、決してそれは、眼を刺すような光ではなかった。
とにかく自然に、自分が本来いるべき場所に立っているような、そんな穏やかさをもって、『そのもの』の身体に立つ彼女を包み込んでいた。

そんな中で彼女は、何かを確かめるように、周囲をきょろきょろと見回していた。
が、どれほど見回しても、例の感覚の根幹となる人や物は見えなかった。
となれば、やはりこの女性の彫刻。
これが、こちらに何かを伝えようとしているのは間違いないのだろう。

彼女は、辺りに配らせていた目線をただ一点、眼前に横たわっている女性の横顔へと向け、大きな声で言った。
「私を呼んだのは貴方のようね。私の声が聞こえているのなら、返事をしなさい」
そう言って、彼女は一度深く眼を閉じ、そして、『そのもの』の返事を待った。
耳を澄ませる必要はもうない。
ただ、心に呼びかけてくる声に意識を傾けるだけでいい。

そして、ほんの三秒ほどの沈黙がその場を過ぎた時だった。

――・・・誰？――

彼女は眼を見開いた。

聞こえた。今度は確かに、はっきりと声が聞こえた・・・と思う。

少女の声。

これは、『そのもの』の声だ。

待ち望んでいたというのに、まるで呆気に取られたかのように、再び女性の彫刻の横顔を眺める彼女に、その声はもう一度聞いてきた。

――あなた、誰？――

その二度目の問いを聞いて、ようやく彼女は、応えた。

「私は誰だっていいでしょう・・・・・・あぁ、いえ・・・」

彼女はすぐに自分の発言を撤回し、こう言いなおした。

「そうねぇ・・・私の名前を教えてあげましょう。そうして、貴方の名前も教えてほしいんだけど」

『そのもの』は何も応えなかった。

そして、『そのもの』と同じように、しばらく黙りこんでいた彼女は、ふっ、と短く嘆息を漏らしてから、言った。

「私は、八雲　紫・・・で、貴方は？・・・貴方は何ていうの」

やはり、『そのもの』は何も応えなかった。

沈黙が、十秒も二十秒も続いた。

彼女・・・紫は、向こうから呼びかけておいてこちらからの質問には答える素振りも見せない『そのもの』に対し、所謂百年の恋も冷

めるといった具合の呆れを感じつつ、もう一度先程と同じ質問を続けようとした。
が、ちょうどその時だった。
『そのもの』は応えた。

――――・・・オルファン――――

「・・・オルファン・・・それが貴方の名前なわけね」
そう聞き返す紫に対し、またしても『そのもの』は返事を寄越さなかった。
だがその沈黙は、即ちその通りだと言っているのと同じことだった。
紫は改めて『そのもの』・・・オルファンに対して、言った。
「そういうことなら、オルファン。貴方は私をここに呼んで、私はそれに応えた・・・・・一緒に話でもしましょうか」

その声に対し、オルファンはようやく応えた。
だがその応答は、言葉ではない。
もっと、言い様の無いものだった。

突然、足元で輝いていた光が、その激しさを増した。
何も見えなくなる。
いや、そんなものではない。
身体がこのまま見えなくなって消え去っていくとさえ思えた。
実際、ただの気のせいだろうが、自分の身体が見えないエネルギーに押し上げられ、ふっと浮き上がるような気分になった。
それほどの光が身体を包み込み、紫は思わず身を強張らせて眼を閉じた。
光を瞼を通り越して網膜に焼きつき、彼女の視界を真っ白に染め上

げる。
このまま眼を少しでも開ければ、本当に自分がどこか遠い世界へ吹き飛ばされる感覚が味わえるのではないか、などと考えてしまえたが、それも長くは続かなかった。

光はやがて消え去り、紫の閉ざされたた視界の中は、一転して闇の中へと包まれた。
いや、正しく言えば、うっすらとした闇の中で、何かを感じられた。
先ほどまで自分を包み込んでいた、黄金色とは違う何かを・・・

紫は、静かに眼を開けた。

そうして、彼女の視界には、一面に広がる花畑と、同じく一面に広がる星空。そして、花畑の中でうずくまっている小さな影が映っていた。
どこまで続いているのかも分からない、いくつもの種類の花が咲いている花畑。
無数に咲き誇るそれぞれの花は、いつも視界の端で瞥見する時とは比べ物にならないほどに、生々しい命の色を見せつけているようだった。
紫は、先ほどまで金色のオルファンの身体に立っていたはずなのに、急に花畑の中に立っているという不可解な状況を気にすることもなく（このような支離滅裂な状況には慣れている）、周囲を見渡すこともなく、ただ、眼前に見える影・・・少女の影を見つめていた。
その背を向けてうずくまる姿からは、言い様の無い寂寞を感じられた。

そうして、自分でも少し戸惑うほどに迷いの無い足取りで、紫は自分の膝くらいの高さの花を踏みしめて、彼女のすぐ傍にまで歩み寄った。

その時の感覚は、確かに花畑を歩き、色とりどりの花を踏みしめるようで、そうではない奇妙なものだった。
少女の傍まで歩み寄った紫は、足を屈めて、しゃがみこむ彼女に顔を近づけ、そうして、彼女の後姿を間近で見た。

黒い洋服を着て、黒い髪をして、その黒い髪には黒いリボンまでついている。
きっと、彼女の瞳の色も同じように黒いのだろう。そう思えるほど、染みつくように黒色が似合っていた。
そうしてこの少女が、静かに啜り泣いていることが、ここまで近くに寄って、初めて分かった。
そんな彼女の後ろで、何故かは分からないが、花畑に膝をつき耳元にまで顔を寄せてから紫は、ささやくように言った。
「貴方、オルファンね」

その声を聞き、少女の・・・オルファンの啜り泣く声は止んだ。
そうして、彼女の顔が、ゆっくりとこちらを振り向いた。

思っていた通りの黒い瞳をこちらに向けるオルファンは、相変わらず何も応えなかった。
そうして、彼女の眼に射ぬかれるように見つめられた紫もまた、何故だか、すぐには言葉が出なかった。

十秒も二十秒も、あるいはもっと長い間、じっとしてお互いに見つめ合う中で、ようやく紫は、思い出したかのように一言口を開くことができた。

「ようやく、泣くのにも飽きたみたいね」

何故第一声でこんなことを言ったのかは、彼女自身よくは分からなかったが、それが悪い言葉でないことだけは、はっきりと分かることができた。

そうして、この時の紫は、気づいていなかった。
オルファンはこの時、スキマを抜け、幻想郷の空の中へと現出したことに。

今この時、幻想郷は、この孤独なる魂達との出会いを果たした。

第一話『温もりの中の出逢い』　その1

幻想郷は、全てを受け入れる。
が、全てを受け入れた結果、何もかもがいい形で安定しているかと聞かれれば、そうではない。
この世に混在する人間と妖怪のパワーバランスはあまりに大きく、人間はどこまでいっても、妖怪の食糧か、そうでなくとも、体のいい遊び相手でしかなかった。

それだけではない。
同じ妖怪同士にしても、単純な力の強弱の差もあれば、性質にも違いがあり、全てが等しくいられることはほとんどない。
だからこそ、そんな妖怪同士の、あるいは人間と妖怪のパワーバランスを均等にするために、《スペルカードルール》も生まれた。全てのものが等しい立場でいられれば、こんなものは必要ではない。

力を持ちすぎる妖怪は、多くの場合畏怖の対象となり、避けられる。
が、それが力によるものならまだしも、力がなくとも何らかの異様な能力を持つ者達もまた、多くの場合は疎まれていた。
それら、異能であるが故に疎まれてきた妖怪の多くは、そこにいるだけで、他の者達になんらかの影響を及ぼす。
力が無い故に、自分達を疎む声を威圧して黙らせることもできない彼らは、一部の妖怪との約定により、地下深くへと落ちのびるしかなかった。

そして彼ら移民（immigrant）の徒、暗き地の底で万年を過ごす。

地の底に追いやられた妖怪の中の一人（？）に、古明地　さとりがいる。そして、その能力故か、非常に大人しく、自分の屋敷からは滅多に出ることもない彼女には、対照的な性格を持つと言える妹が一人いた。

彼女、さとりの妹は、何を考えているのか分からず、放浪癖まであり、いつもどこかをフラフラと歩きまわっていた。

時には、この地下の都、旧都から地上へと抜け出て、知らず知らずの内に向こうでコネクションを作ったりもしているらしい。

地下の妖怪達は、約定の下、決して地上に出ることはないということを誓っているのだから、妹のこの行動は、姉としてさとりが慎ませねばならないものであるが、それもできない。

彼女の妹は、気がついた時にはその場からいなくなり、気がついた時にはまたその場に帰ってきているのである。

彼女の行動は予想することが到底できない。

彼女は、あらゆるものの表層の意識をすり抜けて、無意識の中で行動できる。

何故そんなことができるのかということについては、ここで説明することはしない。ただ、そういう能力があるということである。

そうして、その能力故に、彼女は極端に人から認識されることがない。言うなれば石ころ帽子のようなものなのであった。

だから、どこで、それこそ地上でフラフラしていたところで、ほとんどは誰にも気に留められることがない。地上で誰か友達を作っているらしいことさえ、随分珍しいことなのだ。

それはともかくとして、今この時もまた、さとりの妹、こいしは、古明地の屋敷《地霊殿》からいなくなっていた。
しかしながら、そんなのはいつものことであるし、別に気に留めることはない。
もしかしたら、地上の怖い妖怪に眼をつけられ、地下の妖怪が無闇に地上に出たことが批難されるという心配は当然あるわけだが、そんなことを気にしてこいしを探しにいくこともできないので、今はとりあえず、何も考えないでおく。
性格上いろいろなことを気にする性質であるさとりでも、何度も同じことを考えていると、どうでもよくなってしまうものだ。とりあえず、彼女が帰ってくるのを、屋敷の中で待つばかりであった。

そうしてしばらくすると、こいしは何事もなかったように、何事もないような顔でその場にいるわけである。
彼女は、（またしても詳しい理由を説明はしないが）感情の起伏が極端に乏しいため、いつも同じように、うっすら笑っている。その顔をして、隣にいたりするのがいつものことだった。
が、今回はそうではなかった。
昼ごろのことだった。

「お姉ちゃーん！ただいまーっ！」

あまりに突然に、こいしの、いつもと違う調子の声が屋敷の玄関から聞こえてきたものだから、驚いた。
突然の事に、書斎の中でペットと一緒に何気なく本を読んでいたさとりは、びくりと身震いまでしながら、慌てて玄関まで駆けていった。

ペットであるお燐（本名は火焔猫　燐だが、そんな風に呼ばれたことはほとんどない）と、お空（本名は霊烏寺　空だが、以下同文である）も連れていく。

書斎は二階にあり、そこからドアを開けてすぐ傍の、半円を描く螺旋階段を降りればそこが玄関である。わざわざ階段を下りずとも、ドアを出たところの廊下の手すりから身を乗り出せば、さとりとこいし、そして何匹かのペットで生活するには広すぎるような玄関の様子はよく見えた。

そういう風にして、書斎を出るなり、手すりから玄関の方を眺めたさとりは、再び驚くこととなった。

「こいし、その方達は・・・」

さとりは思わず、いつもは半開きになっている眼を丸くしながら、階下の妹に呼びかけていた。

彼女の傍には、三人の妖怪が・・・

姉の声に気付いたこいしは、階上のさとりを見上げながら、言った。

「お姉ちゃん。いえっ、お姉様ぁ、いきなりだけどねぇー、地上に冒険にいきましょ」

「へ・・・へぇ？」

さとりは、丸く見開いた眼を今度は点にして、その場でしばらく固まってしまった。

そうして、ようやく口をパクパクさせながら、うわ言のようにこう聞き返していた。

「冒険するって？・・・地上に・・・冒険するっていうのは・・・・・？」

事態がよく分からず、あたふたするさとりの姿を見て、妹はへらへらと笑っていた。そうしてその隣にいた一人の妖怪が、こう呼びか

けてくる。
「どうもこんちは、さとりちゃん。まぁ、まずは聞きなよ」
そう言ってから、その妖怪は、自分達が何故ここにいるのかを大まかに説明した。
とはいっても、彼女はそこから一言も口は聞いていない。
しかしながら、確かに彼女は説明していたし、さとりはその説明を聞いていた。
さとりは、他の者達が考えていることを読み取ることができる能力を持っている。
それが、彼女が他の妖怪と同じように地下に追いやられた理由であり、彼女が、その中でも殊更忌み嫌われている理由であった。
さとりは、自身の能力によりあの妖怪、黒谷　ヤマメの思考を読み取ることで、彼女から説明を受けたわけである。
要するにこうだ。
こいしは、いつものように放浪し、地上にまで出た。
そうして、いつものように目的もなくその辺をフラフラしてから、いざ地底に帰ろうとしたその時、あるものが地上と旧都を結ぶ抜け穴の傍に見えたという。
ヤマメや、他二人の妖怪の下に突然現れたこいしは、いつも以上に喜色満面の様子でこう言ってきた。
「すっごい大きな山があったの。でもそれは金色に光っていて、山じゃないの。生きているみたいだったのよ．．．キレイだったよ！」

そのこいしの説明はあまり上手だとは言えないものであったが、この時のこいしは、いつになく興奮している様子だった。
あのようなこいしは、誰も、さとりでさえも、あまり見ないものであった。
それほどのものだというのなら、興味もある。
それに、山ほどに大きな何かが、いつの間にか旧都のすぐ真上ほどの位置に出現したというのに、それに気付いたものは、その姿を実際に見たこいし以外には誰もいなかった。
彼女の話では、昨日は無かったのに、さらに言えば、今日の朝は無かったのに、地上に散歩に出て昼に帰ってきたその時にはあったというのだ。
まったく予兆がない中で、そのような得体の知れない何かが出現したということだ。

そうして、そんなことを考えている中で、まるで見計らったかのようにこいしが、「みんなも一度見てみるといいよっ」と言ってくれば、その通りにしようかとも考えてしまう。

そうしてこいしと、他三人の妖怪、ヤマメと、常に彼女と共に行動するキスメと、彼女らと同じくこいしの話を聞いた水橋　パルスィらは、気づかれないようにこっそりと地上へと抜け、こいしの言う何かを実際に見てみようと考えていた。
他にも、いい加減地の底で大人しくしているのにも飽きたという理由もあるのだが・・・というか、実際はそれが一番の理由だったりするのだが。

話は逸れるが、ここで、この三人の妖怪について説明する。

黒谷　ヤマメは、昔人間を散々虐め抜いてきた狂暴な妖怪、土蜘蛛である。
病というものを支配する能力があり、その能力があれば、人間の千人や万人は皆殺しにすることができる。現に、千人とまではいかないが、何人もの人をその能力で困らせてきた。
もっとも、実際に殺した、のかどうかまでは定かではない。彼女が人間の敵であった土蜘蛛とまったく同じものかは分からないのだ。
それに、土蜘蛛は昔、源なにがしとかいう者に退治されている。
退治されてしまえば、この幻想郷にいるわけはないだろうから、やはり、別物だろう。
それに、彼女はそのような、誰やら彼やらに退治されるような悪い妖怪では（おそらく）なく、自分の能力により人々を困らせてきたことをどういう形にしろ申し訳ないと思い、地底にて大人しく安住することを決めた心優しく気前のよい妖怪である。
心を読める能力故、気味悪がられ、あまり人の寄りつかなかったさとりにも、別段不気味がることなく接してくれるので、さとりとしては信頼できる数少ない妖怪の一人だ。
もちろん、彼女や、他の二人もさとりの能力を『変だな』、程度には考えているが、結局のところ『だからどうしたというのだろうか』という結論に行きついたりする。
彼女等は、この幻想郷でも稀有な、自分の面白みだけのために行動する者だった。
何があろうと、暢気に構えていられる、そういう少女達だったわけだ。

キスメは、釣瓶落としとかいう妖怪で、いつも風呂の桶のようなものに入っていて、頑なに出てこようとしない。
鬼火を落とすとかいう大層な能力があるが、いきなり頭上から落ちてくるのは彼女の方である。
ひとりきりでは、常に桶に入っているため歩くこともできず、精々

ぴょんぴょん飛びまわったり、横になって転がるしかないので、いつもヤマメの生み出す蜘蛛の糸に引っ張ってもらって、彼女と共に行動している。
ヤマメ同様、明るい性格で、さとりにも気楽に接してくれる。

水橋　パルスィは、嫉妬を操る妖怪、橋姫だ。
土蜘蛛同様、源なにがしに退治されたそうだが、上記と同じ理由でおそらくそれとは別の妖怪だろう。
彼女は、嫉妬を自在に操れるそうだが、実際に操れているのかどうかを疑いたくなるほど、不健全そうに、いつも何かを妬んでいる。
何かを口を開いたかと思えば「妬ましい」と言い、目つきが悪い。
彼女の眼は緑色で非常に綺麗なのだが・・・それに、一時はやたらと爪を噛む癖があったりもした、今はそんなことはないが。
が、実際のところ、彼女と深く付き合ってみると、その人となりの良さが分かってくる。
実は彼女は非常に親切な妖怪で、道案内などを進んでする（常に「妬ましい」と口ぐちに言うため、精神衛生上良くないという評判だが）。
また、彼女の妬みは、最終的には自分自身に向けられたもので、他人に迷惑をかけることは少ない・・・無いとは言えないが。
そういう意味では、彼女の嫉妬心は健全なものであると言える。
そして、ありとあらゆるものに嫉妬し、物事を斜に構えてみることで、客観的に物事を考えることもできたりする。
一見すれば、非常に嫌味な妖怪に見えるが、彼女もさとりに対し真摯に付き合ってくれる、いい妖怪だ。

話は戻る。
そんな三人なので、さとりは彼女らがこの場にいることに対しては、

他の得体のしれない妖怪に会った時のように後ろ向きな気分になったりはしないのだが、ヤマメから聞かせて貰った事の経緯に関しては、理解はできても、すぐに納得できる気分ではなかった。

「地上に出るって・・・冗談をおっしゃるのは・・・」

何があるのかは知らないが、地上に出るというのは、地底の妖怪にとっては禁忌となる行為である。と、さとりは認識している。
それを、まるで散歩にでも出かけるような感覚で実行してしまおうというのだから、彼女は一層、怒ってさえいた。
彼女が怒ったところで、むしろ愛嬌がある程なのだが。

さとりは、改めて螺旋階段を降りていく。お燐とお空もその後についてくる。
そんな中で、地底の妖怪の約定のことをこいし達に言った。
「地底の妖怪が地上に出てしまえば、強大な妖怪達の反感を招きます。私達の立場が益々危うくなるようなことにだって、なってしまうかもしれないんです」

それに、ヤマメが愉快そうに笑って応えた。
「益々危うくって、これ以上悪くぁならないでしょ。まさかぁ、マグマの中に突きだされちゃったり・・・オッホ、こわっ」
「冗談じゃないんですよぅっ」
さとりはプンプンして言い返した。
が、誰もその様子にびっくりしたりはせず、むしろ逆に彼女のことを可愛げに見ていることが、さとり自身分かっていたので、さらにプンプンしそうになる。
ましてや、お燐が「さとり様かわいい~♪」などと言ってくるものだから。
が、さとりには、ヤマメ達も、冗談を言いつつも自分達の身の程は

弁えていることが分かった。
が、しかし。

ヤマメは、愉快そうに笑ったままで言う。
「だから、誰にも見つからないよう、地上の妖怪にも見つからないよう、こっそり冒険するのさ。こいしちゃんの言う綺麗な山を一目見て、誰かに見つかりそうならすぐ帰る。そうでなけりゃ、そのままその山の中にまで入っていく」
「そういうの、よくないですよ・・・」
「ん、そうだねぇ～」
「うにゅ。そう」
地上に出ないという選択肢を考えていない彼女に、一周回っていたたまれない気持ちになってくるさとり（お燐とお空も続く）に、今度はパルスィが、自分の考えがさとりに知られていることを承知で、それを言葉にする。

「妬ましいことですけど、さとりさんの言う事は全面的に正しいわ。だけど、考えてみれば、これ、一種の『異変』だと思うのよ」
「異変？」
「えぇ・・・こいしの言うような、山のように大きな物体が地底のすぐ真上辺りに現れたというのに、それを私達はまったく知らなかった・・・音も何もしなかったんだから。何より、今までそんなもの無かったのが、まるで当然のことのようにあるっていうのは、おかしなことでしょ」
「それで異変だと言うなら、解決する人もちゃんといるでしょう・・・」
さとりの言葉に、お燐とお空が、
「あいつだねぇ」
「・・・・・え、誰？」
と続く。

二人は、さとりの言う『異変を解決する者』に、いろいろな意味でお世話になったことがある。

それはともかくとして、パルスィは続ける。

「あの妬ましい者を待っている間に、何か大変な事態に発展することだってあるかもしれないでしょう。自分達の住む場所で異変が起きれば、それを解決するべきは私だと思わないの？」

「・・・聞かれても・・・」

さとりは口を噤んだ。

パルスィの言う事も、的を射ている。

あの博麗の巫女を頼りにするのが正しいことだろうが、自分達で可能な限り異変を解決しようとすれば、より最善の結果を得られるかもしれない。

こいしの言う山のような物体が異変であるなら・・・

それに、かくいうパルスィやヤマメ達は、今も頭の中で、『ちょっとぐらい地上に顔を出しただけで怒られるなんて、そんな酷なことはないだろう』と考えているのだ。

そうして、さらにキスメが桶の中から、駄目押しするように、

「大丈夫っ、準備は万端だし、誰にも見つからないよ！思い立ったが吉日とも言うでしょ」

などと言ってくる。

こうなってしまうと、その能力故、少し人の顔色をうかがうようなところもあるさとりは、反対する言葉を失い始めていた。

このような性格も改善すべきだろうとは思いつつも、それは当分はできないことなのだろうと、冷ややかな実感を持ちつつ、彼女は仕方がないと言った具合に、言った。

「誰にも見つからないように、こいしの見つけたという何かを調べる・・・それだけですね？他意は・・・・・・ありませんね」
さとりに言われずとも、こいし達のやろうとすることはあくまでも、件の山のような生物を一目見て、あわよくば自分達で詳しく調べてみることにある。
それ以外には、何もやるつもりはない。

そうして、そのことを改めて確認したさとりは、それ以後結論を口に出すことはしなかったが、彼女が諦めてこいし達に同行することを決めたということは、その表情を見れば分かることだった。

ただ、お燐とお空だけが、分かっていないのか、それとも確認するためか、さとりに対し、
「いくんですか～？」と聞いてきたので、さとりは応えた。
「えぇ」
「んにゃ～。そんなあっさり地上に出ていいんですか？これじゃぁ、この前の異変の時にあたいが一生懸命頑張ってたのが馬鹿みたいじゃないですかぁ～っ」
「それはそれよ・・・今回は、目立たない様、誰にも迷惑をかけないように行われることなのよ・・・そうですね？」
お燐に対し言い返しつつ、さとりは、ヤマメに対して繰り返し聞いた。
ヤマメは、軽く頷いて、まずは『そりゃ当然』とさとりに心の声で伝えてから、改めて言葉によって応えた。
「日時やらの詳しいことはもう決まってるよ。地上の妖怪は勿論、こっちの妖怪にも見つからないようにしないとね・・・特に勇儀さんにはねぇ」
「あの人怒ると怖いから・・・鬼だし」キスメが続く。
「そうでもないじゃない？・・・まぁ、見つからないようにはしないといけないけどね」と、パルスィが返す。

それに対しさとりが言う。
「日時とかのこと、詳しく聞かせて頂きたいです」
が、その声に対する答えがくる前に、パルスィの心がこう呟いていた。
――――いい加減立ち話も疲れた・・・――――
そんなぼやきを事前に聞いてしまえば、後から彼女の口を衝いて出た、
「その前に・・・ずっと玄関で立たされるのもそろそろ妬ましくなってきたんだけど」という言葉にも、すぐ応えることができた。
「済みませんでした。椅子に腰かけてゆっくり話しましょう・・・どうぞお上がりください」
「お言葉に甘えて」
「お邪魔しまーす」
「とっくにお邪魔してるけどねぇ～」
そうして彼女等は、地霊殿の大部屋にて、例の生物の調査についていろいろと話し合っていた。
とはいえ、さとりだけでなく、こいしやヤマメ達だって重々承知なように、地底の妖怪が地上に出るというのは、基本的には慎むべき行為である。
地底の誰かに見つかれば、必ず注意はされるだろうし、下手すれば、引っ張り戻されることだって大いにあり得る。

そのためまずは、地底の妖怪に見つからないように、旧都から続く抜け穴を通って地上に出る必要があるが、これについてはそれほど問題はない。

地上に出るのがいけないことなら、その地上へ続く抜け穴に近寄るような者だって、そうそういはしない。

ヤマメやパルスィは、その近くまでよく行くし、他にも僅かながらに抜け穴の近くをフラフラする妖怪もいるが、そういう者達の行動パターンは、彼女らには大体分かっているので、眼を盗んで抜け穴を通ることは容易い。

そして、抜け穴に行くまでの道のりに関しても、活気あふれる旧都の中にあっては、何事も無い具合に、散歩しているように振舞っていれば、怪しまれることはないだろうし、繁栄の中で多くの建物が建造されたことで複雑化している旧都の構造を利用すれば、人目を避けることなど、そこら辺にいる妖精のアホでも難しくないことだ。

もう一つ、地上に出たその後、妖怪に見つからないようにしなければいけないのだが、これに関しても、やや不安はあるが、問題はなさそうである。

地上の妖怪で、好き好んで地底を訪問しようとする妖怪はほとんどいない。

しかも地底とその抜け穴の近くは、地理的にも何の面白みもない荒野であるため、その周囲は、常日頃から人影も妖怪の影もない。

何より、地底からの間欠泉により、硫黄を始めとする有害な瘴気（ガス）が発生しているところもあり、むしろ危険区域に指定され、寄りつくことを禁じられているほどだ。

とはいえ、朝方はまずい。

さらに言えば、今日中でないといけない。

なんだかんだと言って朝は、天狗達が飛びまわってパトロールやら何やらをやっているから、かなり眼につく危険は高い。

人が寄りつくべきでない場所でも偵察するのが天狗の職務であるし、

高度な飛行能力を持つ天狗ならば、有毒ガスの届かない範囲から見下ろすこともできる。
そして、こいしの見つけた例のものも、明日の朝にはそのパトロールにより必ず見つかってしまうだろう。
今日の朝方にはなかったそうだから、まだ見つかってはいないようだが・・・
天狗に見つかってしまえば（こいしの言葉では、例のものは山のように巨大だという）何らかの異変だと判断され、興味を持った妖怪がたくさんやってくるかもしれないし、いい加減に時間が過ぎた頃合いにはあの博麗の巫女もやってくるだろう。
そうなる前に、行動を起こす必要があった。

となれば、今すぐにでも・・・とはいかず、諸々の事情を考慮し、彼女らの探検は、早速今夜から決行されることとなった。
こいしがヤマメ達を連れて地霊殿に帰ってきて、このような話をしている内に、昼も過ぎていた。
時間的な猶予はほとんど無かった。

夜が更けてくるまでの四、五時間という間、さとり達は、地上へ抜けるためのルートを確認したり、こいしから改めてその例の生物についていろいろ話を聞かせてもらったりした。
そういうことをしていると、最初は気が乗らなかったさとりも、気分が高揚してくるものだった。
彼女だって、出られるものなら、地上には出てみたかった。
当に忘れてしまった地上を覆う空の光景を見てみたかった。

そして、そんなことをしていれば、あっという間に出発の時間は来た。

さとり達は、地霊殿を出て、地上へと向かう。
予定通り、旧都に出てからは、何も問題なく事が進んだ。

地獄の改革によりただの空き地となった場所を鬼の力で開発し、今では地上のどの里にも負けない賑やかな都となった旧都は、昼夜問わず賑やかである。
軒先の明かりや、行燈の明かりが灯り、多くの妖怪が肩をぶつけるほどに行きかう中にあっては、さとり達が地上に出るという目論見で歩いていても、気にする者などいない。
勿論、地上へ出る抜け穴、すなわち旧都の果てに近づくにつれ人の姿は少なくなってくるが、入り組んだ都の構造までは変わらないため、家々の間の細い路地を縫って歩けば、人目に付くことはない。
そんなことを続けていけば、すぐにでも旧都の外へと出ることができた。
後はそのまま真っ直ぐ進めば抜け穴であり、地上へと辿り着く。
ヤマメとパルスィが計算した通り、この時は、誰もこの界隈にいる者はない。
大手を広げて歩こうが、大声を出して駆け足になろうが、誰にも見つからずに済んだ。

お燐が愉快そうに、「楽勝だねぇ～こりゃっ！」と笑っていた。
それに対し、さとりは厳しく・・・まぁさして厳しくはないが、「悪いことをしてるんだから、はしゃがないの」と注意した。
が、そういうさとり自身、地上へと続くそれなりに勾配のかかった抜け穴の中を進み、その向こう側から、地の底から見ればいっそ明るいとさえ思える夜空の光が差し込む様が見えてくれば、益々気分が高まってくるのを感じていた。

そしてそれは、ただ、自分達が今まで眼にすることがほとんど、いや、まったく無かった地上の世界に出るという事以上の『何か』からもたらされる気分の高揚であるというのが、彼女には分かっていた。
もっとも、その、心に呼びかけてくるような『何か』が、具体的に何なのかは分からない・・・
だが、抜け穴を出て、地上に出たその時、この気分の正体は分かるのだろう。
そう思っていた。

そして、抜け穴の出口から見えていたいくつかの細やかな光の群れは、少しずつその数を増して増殖していく。
薄暗い抜け穴の闇の中で膨れ上がっていくその光の群れは、やがて真黒な影を押しつぶしていき、みるみる内に視界を埋め尽くしていく。
その光もまた、さとりにとっては相当に久しぶり・・・というよりも、もうほとんど初めて見るものだった。
手をかざせば、それらの光はそのまま吹き払えそうだったが、そんなことはできないということは、さとりには分かっていた。
あれは星であり、遥か彼方にて燃える、その見た目以上に雄々しい炎なのである。
地上の人間や妖怪は、その天に燃える星の群れを見て想いを馳せ、世の行く末を占ったりもする。
そうやって、追いやられた地底の妖怪にはできないことをする。
まるで星を自分のものとしたかのように。
本当は、星は誰のものでもないのに・・・
気がついた時には、さとりの視界の全てを、星々が成す光の奔流が

埋め尽くしていた。
地上に出たのだ。

「地上だぁー・・・」
キスメの声が聞こえる中で、抜け穴を上りきったさとり達は、そのままぞろぞろと、穴から身体を出して、次々に荒野の中へと足を踏み出していた。
キスメの声に、パルスィが続く。
「思っていたような感慨はないのね」

その言葉が嘘だと分かる程の心の高揚が、この場にいる全ての妖怪から感じられたが、夜空の織りなすスペクタクルに見惚れているのは早々にやめて、本来の目的を思い出す辺り、確かに、それほど大きな感慨はないとも言えた。

それに、頭上に向けられていた視界を、無限に広がる地平線と水平に向け、辺りを見回してすぐに見えた『そのもの』の姿を見れば、夜空に映る星の群れの光景も、そこまで感動的なものではない、とさえ思えた。

さとり達は、自分達からほんの五百mも離れていない位置に佇む・・・いや、悠々とそびえる『そのもの』を見た。
それは、こいしが言葉で語っていたよりも遥かに大いなる存在感を醸し出し、さながら押し寄せる壁に如く、彼女らの心に迫った。

「・・・・・っ」
さとりは息を呑んだ。
そうして、抜け穴を上っている時に感じた何かが語りかけてくるような感覚は、『そのもの』が発していることを知った。
その認識は、さとりに、これまでとはまた別の、言い様の無い感情

を与えていた。

さとりは、他の妖怪達同様、棒立ちになっていた身体を、ほんの数秒わなわなとふるわせてから、うわ言のように言った。

「こいし、皆さん・・・行きましょう」

その声に、パルスィが、

「行く前に・・・ちょっと待って・・・」と応えつつ、辺りを見渡す。

妖怪がいないかどうか探っているのだ。

ヤマメ達他の妖怪も同じように周囲をきょろきょろと見渡す。

「誰もいないみたいねぇ」とお空。

念の為にと、ヤマメが、

「さとりちゃんの方でも探してみてくれる?その能力でさ」と言ってきた。

それどころではないといった心境ながらも、彼女の言う事は聞こえているさとりは、気を取り直しつつ、

「私の能力はそんな便利なものではないです・・・でも、周りには誰もいないように感じます」と応えた。

それを聞いてようやくパルスィとヤマメが、

「なら、行ってみようか、あの山みたいな生き物に」

「一応、気をつけてね」と続けて、さとり達は、抜け穴から離れて、眼前に見える『そのもの』へ向けて歩を進めていく。

お燐とお空の軽快な声が響いた。

「よぉし行こうっ」

「おおー」

近づくにつれ『そのもの』は、その圧巻と称せる姿をさとり達に対

し見せつけてくる。
宵の闇の中においても、月と星の明かりに照らされているだけで、
『そのもの』は、まるで昼の陽光に照らされているかのように色濃く金色に輝いていたが、その輝きは決して眩いものではなかった。
闇夜の中においても、自然に溶け込むように、それでいて、非現実的なまでのはっきりと見える金色の光を見せてくる。
いよいよもって神秘的な気分に包まれてくるようだ。
さとりのような人の心を読む能力は持っていない（過去形として持ってはいたが）こいしでも、さとりと彼女のペット、そしてヤマメ達が、『そのもの』の姿にいっそ驚愕しているのが眼に見えていた。
そうして、自分だけ事前にあれを見ているため、多少は感動も薄いのをいいことに、得意げになって、
「どう？すごいでしょっ」と呟いていた。
これには、他の者達も同意する。

お空とお燐は口々に、
「大きいーっ、大きいわー」
「こんなにすごいなんてねぇ～」と漏らして、ヤマメとキスメとパルスィも、
「思ってたよりもすごいっ、綺麗だねぇ」
「宝石？にしては大きすぎるし・・・なんなのあれ？」
「生き物らしいって話だったでしょ・・・なんて妬ましい・・・こんなものが突然旧都の上に現れたなんて・・・」と、感嘆を漏らしていた。
そんな中で、さとりだけは、『そのもの』の姿をじっと見つめたまま、
「えぇ・・・・・えぇ・・・」と、口々に語られる感銘の言葉に、相槌を打つばかりだった。
あまり、感動しているという様子には見えない。
それにこいしが、不思議がるように、あるいは不満がるような表情

をしながら（彼女に親しいものしか分からない程度に微かに）言う。
「お姉様はどうなのーっ？」

「不思議ね・・・本当に」
さとりは、ただそうとだけ呟いて、急にちょこちょこと駆け足になって、少しだけ急いだ様子で『そのもの』へとさらに近づいていった。
突然のことだったのできょとんとしつつ、この行動が、さとりもまた大きな感銘を受けているという風に解釈した。
「言葉も出ないってああいうことなのね～」と、こいし。
それに、お空とお燐が続く。
「さとり様にしては珍しいわ」
「ホントだにゃー」
などと言いつつ、彼女達もひとまずさとりの後を追って、急ぎ足で駆けていった。

そうして、さらに『そのもの』の近くにまで寄っていくことで、そのディテールが段々と見えてきた。
どうやらこの生物らしきもの、そこら中を奔っている溝から中に入れそうなのである。
これはいよいよ、冒険らしくなりそうだった。

が、その前に、『そのもの』に次いで、あるものがさとり達の感性に大きく干渉していた。
先ほどから周囲に立ちこめている、良いとは言い切れない臭気だ。
そして、辺りに立ちこめている熱気・・・

元々屋敷に引きこもりがちなさとりである。

しばらく走っているとすぐに息切れして、百m走った程の場所で立ち止り、膝に手を当てて息を喘がせていた。
それと一緒に他の妖怪達も足を止めつつ、ヤマメが言った。
「この辺り・・・硫黄泉が湧いてるんだ」
「いおうせん?」と、お空が聞くが、それにはお燐が応えた。
「温泉だよぅ。健康にはいいけど、人を殺すこともできるほどのものさ」
それを聞きつつ、お空が立ちこめる嫌な臭気に、思わず顔の前を手であおぎながら、続けた。
「卵の匂いがするけど・・・この卵は嫌な卵の臭いだわ・・・臭くない?」
「・・・悪い匂いじゃないんじゃないかなぁ?死体が腐るような匂いじゃないのよさ」
「・・・お燐嫌いよっ」
「にゃっ・・・」

パルスィが二人のやり取りに続く。
「硫黄は生物にも必要な物質だけど、過剰摂取は中毒を起こす・・・あの生物は大丈夫なのかしら?あの金色ってもしかして、硫黄の金色なんじゃ?」
「硫黄なら黄色でしょ」とキスメ。

地底から湧き上がる間欠泉が地上に硫黄泉を作っているのも事前に知っていたし、この臭気や熱気だって、想定の範囲内ではあるが、よく考えてみると、この硫黄泉のすぐ傍に『そのもの』がいるのだ。この場に立ちこめる硫黄ガスと間欠泉による高温は、妖怪はまだしも、並の生物にとってはまさしく地獄と称することができるほどの環境だろう。
あの金色の何者かにとっても、ここは住みやすい環境ではなさそうだ・・・

もしかしたら、あれは、かなり弱ってしまっているのではないか？

今になってそういった不安を感じ始めたヤマメ達だったが、それに対し、柄にもなく駆けだしてしまって息が切れていたのがようやく元に戻ってきたさとりが応えた。

「心配は、いらないと思います・・・あれは多分、元気です」

確証はない・・・が、『そのもの』が発していると思われるこの、言葉のように語りかけてくる感覚は、自分のこの発言が間違いないものであると思わせた。

もちろん、ヤマメ達が一斉に、『確証はあるのか？』と考えると、それに対しては、

「確証はありませんけど・・・」と応えるしかないのだが・・・

が、さとりは改めて、

「とにかく、今はあれの下に向かいましょう」と続け、再び、今度は急ぎ過ぎず、早歩きで『そのもの』に近づいていった。

周囲に点在していた小さな硫黄泉は、前に進むにつれその数を減らしてはいるが、『そのもの』が眼の前に見えるほどになっても、人間ならまず近づこうとはしないような数はあった。

さて、近いとは言ったが、五百m前後の距離は、そうすぐに踏破できる距離ではなく、さとり達は、数分してようやく、『そのもの』のすぐ近くにまで来ることができた。

さとり達は、先ほどまで自分達が硫黄泉のことについて気にしていたことをすっかり忘れるほどに、眼の前にまで迫った『そのもの』の姿に圧倒されていた。

抜け穴を出てすぐに見た時も充分大きいと思えたのだが、今となっ

ては、あの時は縮尺の感覚がおかしかったのだとさえ思えた。
頭上をどこまで見上げても、金色の滑らかな斜面の頂きは見えず、左右に首を振っても、『そのもの』の端の様子を伺うことはできなかった。
何から何まで、凄まじいスケールだ。
『そのもの』の具体的な大きさなどは、見当もつけることができないだろう。
まさしく山のようだ。
これは、地底の妖怪もその存在を知る、妖怪の山よりも高いのではないか？とさえ思えた。
そうして、それほどまでに近づいて尚、『そのもの』の表面には一切の粗さは見受けられず、均整な金色の肌を見せつけていた。

そして、最初はただの細い線のようだった溝も、ここまで近づいてくれば、さとり達一同が横一列に並んでも優々と入れそうなほどに、巨大で広大な虚空となって穿たれていた。
そしてやはり、この虚空の奥に進んでいけば、『そのもの』の体内に入ることはできそうである。

一同が、『そのもの』の姿を口をあんぐりとして見上げている中で、ヤマメが、ぼんやりとした口調で言った。
「最初はそんな雰囲気なかったけど．．．確かにこれ、生きてるみたいねぇ」
それにさとりが、
「えぇ」と応えると、彼女達は、いい加減びっくりすることを止めた。

皆が、『そのもの』の中へと進入する心構えをしたことを確認したさとりは、自分が先導になり、自分の立っていた大地を軽く蹴ると、そのまま宙に浮きあがり、流れるように眼の前の虚空へと入ってい

った。
妖怪にもなると、空を飛ぶくらいは簡単なことである。
もちろん、空を飛ぶとは言っても、その程度にも妖怪それぞれで差はある。が、大地を走るだけの速さで空を飛ぶくらいのことなら、いかなる妖怪でも可能なことであった。
勿論、キスメのような例外もいる。
こいし達も、さとりの後を追って、宙に浮きあがり、溝の中へと入っていった。
この中では唯一空を飛べないキスメは、ヤマメの糸に引っ張られながら移動する。

いつもはこんな風に先頭をきるような自主性はほとんど見せないさとりが、珍しく疲れを気にしないほどに行動していることについては、今回ばかりは誰も気にしていなかったし、さとり自身でさえ、自分が何故そうなのかという理由は分からなかった。

溝の中に入り、虚空に進入したさとり達の前には・・・何かとても不思議な光景が広がっていた。
『そのもの』の体内である。
だがそこは、『そのもの』を生物だと仮定したとして、大分不釣り合いな空間に見えた。
溝から中に進入してすぐに、褐色がかった黄土色をした、今しがた入った溝よりかは細く浅い溝がいくつも奔る急な斜面が姿を現していた。
それは、非常に均整な表面をしており、高度な金属細工のように見えた。

その一方で、どこか生物的な印象も受けた。
逆に言えば、完全な生物でなければ、完全な物体でもない、奇妙な統合があったのだ。
生物の体内を思わせるようなグロテスクな光景ではない。
だが、ただの金属の塊というには、あまりにも複雑な構造をし過ぎている。
これはまるで、人体のようであった。見た目での類似を抜きにすれば。
人は、恒常性を維持するため、体内の機構がいくつも複雑に組み合わさって、奇跡の如く生命を保っている。
それは、機械などでは到底実現できない、原子レベルでの作業であった。
『そのもの』の内部は、それを思わせるのだ。

生物であって物質であるが、同時にそのどちらでもない。
みるみる『そのもの』の存在が、不可思議なものに思えてきた。
まぁ、それは外見からしても、その大きさからしても、当の昔に思っていることだが。

斜面は、さながら二次関数のグラフのごとく急な曲線を描き、さとり達が昇っている途中には、ほとんど９０。になっていた。
が、百ｍほど昇ったところで、今度はその斜面が、急になだらかなものになっていき、もう二十ｍも昇らない内には、地面とほとんど水平になっていた。
地面が見えないので、本当に水平かどうかなど分からないが・・・

とにかく、これなら降り立っても大丈夫そうだ。
溝から入ってすぐは、この足場（壁面）の溝も、人ひとりがすっぽ

り入れそうなほどに広く深かったのだが、今では、小指が入るかどうかの広さになっている。
それに、広さに関しても、始めのころは豪邸が二、三軒でも建てられそうなほどのものだったのが、旧都のちょっと広いぐらいの往来程度のものになっていた。
横幅はそれぐらいだが、縦の広さはまだかなりのものだ。

どういう理由でそうなっているのかは知らないが、こういう光景を見ると、まさしく、何かに繋がる通路といった印象を受けずにはいられない。
一同がゆっくりと足場に降り立っていく中で、キスメが、
「ワクワクしてきたよ～っ」と言っていた。

さて、足場の上に足をつければ、そこからすることと言えば、その何かに繋がっているとしか思えないこの通路を、奥へ奥へと進んでいくことだけだ。
『そのもの』の体内は、陽の光がまったく入っていないはずなのに、増してや今は夜だというのに、それなりの明るさはあった。
少なくとも、何百mか先は見渡せるぐらいにはだ。
それでも、この通路の奥は見えなかった。

ヤマメが、早速一歩を踏み出そうとするが、ちょうどその時、さとりの微かな声を聞いた。

「温かい・・・」
「ん？」
ヤマメは、その声の調子があまりにも穏やかなものだったので、不思議そうな顔で彼女の方に眼を向けていた。
彼女は、虚空をぼんやりと見つめて、抽象的な表現ではあるが、まるでそのまま溶けてしまいそうな表情をしていた。

が、ヤマメの注意がこちらに向いたことに気づいたさとりは、はっとした様子で我に返り、ヤマメの眼を見返しながら言った。
「本当に、不思議な気分です・・・奥に進みましょう」
「ん、そうしよう」

そうしてさとり達は、歩き始めた。
今度はさとりは、いそいそと歩を進めるヤマメ達の後ろの方をついてきていた。

さて、この先、何があるのか分からない。
何か妙なものが見つかるかもしれない。
『そのもの』は、あまりそうは見えないが、生物であるようなのだ。
もしかしたら、何かの穴に落っこちて、そのまま胃袋だとかに落としこまれ、消化されてしまうかもしれない。
そう思うと、生物でも鉱物でもない様子の通路の壁面や足場も、なにやら不気味なものに見えてくる。

パルスィが、
「気をつけて進まないとね」と呟いた、その矢先だった。

「あら?・・・わっ!」
さとりの短い悲鳴が、その場でかすかに響いた。
咄嗟にヤマメ達が声のした方を振り向くが、そこにさとりの姿はなかった。
ただそこには、壁面に穿たれた、人が二、三人引きずり込まれそうな大きさの穴だけだった。

「いわんこっちゃないわーっ!」

パルスィが叫ぶ。
彼女らは、慌てて壁面の壁の傍にまで歩み寄り、大きく穿たれた穴の奥を覗き見てみた。
斜めに急な傾斜を描いているらしいこの穴は、相当深いところまで続いているらしく、その先を見ることは到底できなかった。
ヤマメが、分かり切っていることを言う。
「この穴に落っこちてったんだ・・・なんでこんなものがこんなとこにあるのぉ？」

「さとり様ぁーっ！」
突如お空が、大声を上げて、主人を追うように穴の中に足を突っ込んで、自ら引きずり込まれていった。
「うっ・・・にゅぅーーーー・・・・・・っ！」
穴に飛び込むと同時に、彼女の悲鳴が、一気に下の方へと遠ざかっていく。
「おぉーい、お空ーっ！」
その様子を見て、お燐も同じように穴の中へと飛び込んでいく。
さとりとお空の両方を追ってだ。
「待ってよぉ～」
さらには、面白がってこいしまでも、穴の中へと飛び込んでいく。

立て続けに四人が穴の中に引きずり込まれ、ヤマメ達は、その場に取り残される結果となった。
このまま、さとり達のことは気にせず、自分達だけでこの中を探索してもいいのだが、それはそれで申し訳がなさそうだ。
いずれはここから外に出て地底へと戻らなければならないのに、途中ではぐれてしまっては、誰かが帰ることができなくなるという可哀想な事態に発展するかもしれない。
どうせ遭難するなら、みんなで仲良く遭難する方がいいか・・・
それに、さとり達が引きずりこまれたこの穴。

何に繋がっているのかは知らないが・・・それこそ、前述したように胃袋にでも繋がっているのかもしれないが、もしかしたら、この先で思わぬものを見つけることができるかもしれない。

「仕方ない・・・私達も追いましょう」

というパルスィの言葉には一同同意し、ヤマメ達も、先に穴に引きずりこまれていったさとり達の後を追い、得体のしれない虚空の中へと入っていった。

※

理由は知らないが、ここはとても温かかった。

何か、自分がいるべき場所にいるような、そういう穏やかな熱を、さとりは、『そのもの』の体内に入ってから、ずっと感じられていた。

そして、遠目から『そのもの』の姿を眺めていた時より感じていた例の感覚も、中に入ることで一層強くなっていた。

とはいえ、相変わらずこの感覚は曖昧なもので、何が何を言っているのか、具体的なことは一切分からなかった。

ただ、何かがこちらに、何かを呼びかけている・・・その声とも分からない何かだけが強くなっている感覚だった。

とても不思議ではあったが、不気味ではなかった。

むしろさとりは、この中に入ってからずっと、自分を呼ぶ何者かに、早く会いたいとばかり思っていたのだ。

ヤマメ達が先を行き、通路の中を歩いていた中でも、彼女は、一番

後ろをついて歩く中で、両側にそびえる壁面に手を当て、その表面を手のひらでなぞったりしていた。
そうして、『そのもの』の肉とも呼べるこの壁面は、金属のように固いはずなのに、柔らかく感じられ、そして、生物としての温かさを感じられたのだ。

さとりはもしかしたら、自分を呼ぶその何者かには、もう既に会っているのではないかと思えた。

壁面は、金属の固さを持っているようでいて、強く押せばへこみ、手を離せば元に戻るような、強い弾性も持っていた。
それが益々不思議であったし、手のひらが柔らかいものに吸い込まれるような感覚が非常に心地よかったため、さとりは、ヤマメ達についていくことは忘れずに、しかしながら夢中になって壁面を押したりなぞったりして遊びながら歩いていた。
そんなことをしつつ、チラリとヤマメ達の背中を眺めていた丁度その時、微かに力を込められたさとりの手のひらは空を掠めて、彼女の身体は、何故あったのかも分からないまま穴の中に引きずり込まれていた。
そうしてそのまま、つんのめるようにうつ伏せに倒れ、管のようになっている穴の中を滑っていた。

「う？・・・うぅーっ・・・」

何が起こったのか訳が分からず、ただ、身体中の血流が滞り、意識が朦朧としていく感覚に呻き声を上げながら、真っ暗な中、成すがままにされるしかなかった。

それが、十秒か二十秒続いてようやく、何かの上を滑っていたらし

いさとりの身体は、その動きを止めた。
そこでようやく彼女は、自分が何かの穴の中に引きずり込まれ、その中を落ちていたということを知った。
もともとそれほど身体が強いわけではない（妖怪にしては弱すぎるし、下手をすれば、単純な力だったら人間にだって勝てるかどうかというものであった）彼女が、いきなり訳も分からず数十m、もしかしたら数百mの距離を落ちるように滑っていたのである。
頭の中は混乱のるつぼであり、さらには、落下の勢いで血流が悪くなって、余計に頭がくらくらしていた。
穴の中は非常になだらかなスロープになっていて、どこも出っ張ったりしていなかったし、穴から出たときも、そのまま自然な傾斜を描いて、今いる足場とほとんど平行に出口が開口していたため、身体を打ったりはしていなかったが。

「ん・・・んぅん・・・」
万歳をした姿勢でうつ伏せに倒れていたさとりは、頭痛のする頭を押さえながら、ゆっくり上体を起こして、その場で尻餅をつくような姿勢で座りこんだ。
眼もかすむが、そのかすむ眼でもよく凝らしてみれば、穴に落ちた結果辿り着いたここが、大分広い空間であることは分かった。
「なんなの・・・？」
さとりは、まさしくその言葉通りの心境になりながらも、とにかく今は、頭痛と目眩とぼやける視界が元に戻るのを待った。

が、そうする間もなく、さとりは、自分が落ちてきた穴の奥の方から、微かに聞こえてくる声を聞いた。
その声は、みるみる内に大きくなっていく。
「・・・ぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！」
「お空だわっ」
さとりは慌てて、立ちくらみを起こしながら立ち上がり、その場か

ら数歩離れた。

「ううううう、にゅっ！？」

丁度その瞬間、盛大に転がりながら穴から飛び出してきたお空が、そのままごろごろと数m転がったところで、仰向けに大の字の姿勢になって止まった。

「ぅぅーー・・・」

眼をぐるぐると渦巻きにしながら尚も呻くお空。

自分を追ってきたらしいということは、勿論さとりには分かっていた。

そして、さらに続けざまに穴を落ちてきたお燐にしてもそうだろう。

お空のように転がり出たりはせず、さながら猫のように（実際お燐は猫だが）まるまって穴から出てきたお燐は、

「あー、びっくりしたぁ」

と、さしてびっくりしていない口調で吐き捨てつつ、その場で立ち上がって、さとりの姿を確認すると、こちらの方に歩み寄りつつ、

「さとり様、無事だったんですねぇ～っ、心配したんですよぅ」

と、安心した様子を見せた。

その後、そのすぐ近くでお空がノビているのに気付くと、慌てて彼女の傍にしゃがみこんで、

「おぉ～い大丈夫かい？」と呼びかけながら、その頬をぺしぺし叩いていた。

それからまた続けざまに、今度はこいしが、体育座りをして穴から出てきた。

同時に、片膝と両手をばっと上に向け、意味の分からないポーズを一瞬とってから、何事も無かったようにさとりの方に歩み寄ってきた。

「お姉様大丈夫～？」

その頃にはさとりも、徐々に頭痛が収まってきていたため、
「えぇ、びっくりしたけど・・・」
と返した。

さらにしばらくすると、ヤマメと彼女に抱えられたキスメ、それに続いてパルスィが、順々に穴から出てきた。
これで仲良く、みんな揃って穴の中に引きずりこまれたわけだ。
ヤマメ達は、穴から出てさとりを見るなり、『早速大変なことをしてくれたなぁ』と考えていたため、さとりは申し訳なさそうに、
「不注意でした。済みません・・・本当に」
と謝罪した。

が、それにはヤマメが、
「何を謝ってるんだよ。いんだよぅそういうことはね」と返してきた。
キスメが、「それに、案外穴に落っこちたのはよかったかもしれないよ?」と続く。
それに、さらにパルスィが続ける。
「随分広い場所に出た・・・ここは一体なに?」

その声に、一同は改めて、自分達が出てきたこの空間の様子を見回した。
さとりも、そろそろぼやけていた視界が元に戻ってきたいたので、同じように、自分がどこにいるのかを確かめた。
それと一緒に、今まで大の字になってノビていたお空も、いい加減に眼を覚ましていた。

これまでと同様、暗い黄土色っぽい色合いの、溝の入った壁面が、一面に広がっている。
空間の広さは大したもので、かつては地獄の一角であった旧都がそ

のまますっぽり入りそうなほどだ。
縦の広さは、一応天井は見える程度のものだ。
空間の形は、完全な立方や球形ではなく、不規則に歪んでいるように見えた。
その様子は、先ほどよりかは、『生物の体内』という印象を強く持つことができたが、金属のように見える黄土色の壁面が、いくつも重なって層を成している様が、多くの金属資源が眠る洞窟の奥底のようでもあった。
実際、旧都の近くにもいくつか、地層の違いにより壁が縞模様を描いているように見える場所があったりした。それと同じような感じだ。
益々、『そのもの』が生物であることを強く確認できると同時に、まるで遺跡のようであるという印象も強く持つこととなった。
そうして、そんな壁面には、さとりが引きずりこまれたのとよく似た穴が、いくつか開口していた。
時には大きさも同じ穴が壁面の真ん中に開いていたり、はるかに大きな穴が天井からぽっかりと口を開けたりもしていた。
また、シャッターが閉じるように、あるいは、それこそ人体の『弁』が閉じるように出口がふさがっている穴もあった。
そういった穴の全てが、何らかの空間と繋がっているのだろう。
空間自体は、その果ては見えている。
満遍なく眺めたところ、何かがあるといった雰囲気は感じられない。
となれば、今さっきやったのと同じように、穴を通って別の場所へと探索していくべきなのだろうが、『そのもの』の体内は、思っていたよりもずっと複雑な構造をしているらしい。
下手に奥まで進んでしまうと、迷ってしまう可能性がある。
今なら、落ちてきた穴を戻れば、そのまますぐ地底に帰ることもできるだろうが・・・
さて、どうしようか・・・

皆がそう考える声を聞いたさとりは、その次の瞬間、何かが胸を打つのを感じた。
今までの、何かが呼びかけてくるような感覚とは別であり、より曖昧で、しかしながら鋭いものであった。
ただ、何かを感じたとしか認識できないものであったが、それが今までよりもずっと強く感じられたのだ。
何かが、起こるのかもしれない・・・

さとりの脳裏を、そんな言葉が過ぎった時だった。

第一話　その2

「そこ！誰かいるわ・・・」
と、びっくりしたようなパルスィの声が聞こえ、彼女が、空間の一角を指差した。
その方向に眼を向けると、確かに、一定の明かりを感じる空間の中に、ひとつの影があるのが見えた。
キスメが桶の中でぎくりとして、言う。
「まさか、妖怪？・・・隠れないとっ」
「隠れるところなんてないよぉ」と、こいし。
それにヤマメが、
「見つかったら、まずいよっ・・・」と返す。

そんなことを言い合っている内に、こちらが向こうを見つけたのと同じように、向こうもこちらに気づいたらしく、影は少しずつこちらに近づいてきていた。
パルスィが、「見つかった！」と、慌てた様子で叫び、その焦燥を助長するように、ヤマメがあることに気が付いて、言った。
「あ、あの妖怪って、確か・・・」
その声に、お空が、
「何なの？」と聞く。

「あれは確か・・・あたし達に地底で暮らすように言ってきた妖怪の一匹だよ」
「えぇっ？それって・・・」と、お燐がびっくりする。
「一番会っちゃいけない奴だ！」

さとりは、この場の空気が、冷たく張りつめるのを感じた。
自分達に近づいてくるあの影。女性の姿に見える影は、どうやら、自分達が地底で暮らすことになった原因とも呼べる者らしく、即ち、地底の妖怪に、決して地上に出ないという約定を結ばせた者だということだ。
地底にいる妖怪達のほとんどが、鬼の勇儀でさえも、反抗することをしなかった、あるいは出来なかったような妖怪。
そのうちの一人だ。
それほどの妖怪だということだ。
そう、確かさとりも、彼女のことは知っている。

「確か・・・八雲・・・・・・紫とかいった・・・」

彼女に自分達が見つかったということは、かなり良くない。
それこそ、さとりが最初のころに言っていた、自分達の立場が危うくなるという事態が現実のものになるかもしれないのだ。
妖精や人間、あるいは大したことのない妖怪だったら、この場で殺して喰ってしまえば何にもならないわけだが、今回は相手が悪すぎた。
そして、それはさとり以外の皆も分かっていることだった。
ただ一人何も分かっていないのは、頭の弱いお空だけだった。

さらにその影、八雲　紫の影は近づいてきて、とうとう、さとり達の眼の前にまで来てしまった。
彼女は、何を考えているのかも分からない、得体のしれない不気味な表情をしていた。微かに、笑っていたようにも見える。その笑顔は恐ろしく不気味なものに見えた。

ヤマメは、大慌てで両手をバタバタさせながら言う。
「あの、これはねぇちょっと深いわけがあってぇ～・・・とっても

ふかぁ〜〜い・・・・・・ねっ？」
いきなり同意を求められたキスメが、桶の中で部分首を縦に振り、応える。
「うんうん！こわ〜い妖怪に許してもらえるような、そういう理由が・・・ねっ、ねぇっ？」
それに続いて、パルスィも、あくまでも冷静でいようとしながら言う。
「八雲　紫さんでしょう？・・・私達は別に、地上の者達に迷惑をかけにきたというわけではなくて・・・えー・・・正直に言わせて頂くと、ただの知的好奇心だったわけでありまして・・・地上の妖怪に何か迷惑がかかるということでしたら、すぐに地底に戻る用意もできています・・・・・ですから、要するに・・・今回ばかりは、勘弁していただきたいという・・・ということであります」

口々に続ける声がまるで聞こえていないかのように、紫は何の反応も示さなかった。
ただ、さとり達の前で、少しの間立ち止っていたかと思うと、また一歩一歩を歩を進めて、じっと立ち尽くしていたさとりのすぐ眼の前、それこそ、額と額がくっつくようなほどの位置にまで近づいた。
もっとも、紫の背丈はさとりよりも一回り高かったため、額と額が、ということはないだろうが。
とにかく、さとりが戦慄して仰け反るように身を退かなければ、本当に紫が彼女の額にキスでもするのではないかというほど近くだった。

さとりが生唾を呑み下し、お燐が不安そうに「さとり様ぁーっ？」と叫んでから、数秒間だけ、静寂がその場を支配した。
紫は、眼の前で恐縮しながらこちらを見上げるさとりの眼を逆に見下ろしながら、微かに呟いた。

「ん・・・これから、多くの妖怪達が、貴方と出会うことになると・・・・・そういうことね」
「・・・っ・・・？」
さとりには、彼女が何を言ったのかよく分からなかった。
驚くほど豊満な彼女の胸に顎の方がうずまりそうになるほどの距離だったので、彼女の声は鮮明に聞こえたはずだったし、現にそうだったのだろうが、紫の言葉の意味が、あまりにも理解しがたいものだったのだ。
そうして、そんな声が聞こえたと認識したその次の瞬間には、紫は踵を返して、さとりから離れていった。

「・・・・・・っ？」
「うにゅ？」
ヤマメ達も、一体どういうことだろうと戸惑うと同時に、最悪の事態に発展した時には、玉砕覚悟で戦う気概で紫の動きを鋭く警戒していた。
お空だけは、暢気にぽかんとその様子を眺めていたが・・・
さとりから数歩離れたところで、紫はくるりとこちらに振り返り、静かに言った。
「いいわよ別に、好きなように」
それだけ言って彼女は、またさとり達に背中を向けて、歩き始めた。

「え？・・・どういう・・・」
パルスィが、戸惑った様子で呟く。
他の者達も同様、その言葉通りのことを考えていた。

が、さとりだけは、この時、胸をほっとなでおろすような安堵感を得ることができていた。
彼女の能力をもってしても、紫の考えていたことはまったく読み取

ることができなかったが、この時だけは、おそらく紫は、こちらのことをあまり気にしていないのだろうと考えられた。
それは、またしても何故か分からない。
が、さとりは漠然と、あの紫は、『そのもの』と同じ立場に立っているように思えた。
もしかしたら、先ほどからこちらを呼んでいるように思えるこの感覚は、あの紫にものなのか？

そんなことを考えたさとりの思考は、瞬時にかき消された。
彼女の視界の中に、あるものが見えたからだ。

生物のようでいて、単なる遺跡のようにも見えるこの空間の一角、天井と壁面の境目のような場所に穿たれていた巨大な穴の奥から飛び出してきたあるものが・・・

それは、円盤であった。
いくつもの細長い三角形が連なることでほとんど円形に近い多角形を成し、プリズムのごとく不規則な光を発する薄い円盤が、突然穴の中からこぼれるように落ちてきた。
そのまま自由落下に従い真っ直ぐに落ちていたかと思うと、足場に激突すると思ったその瞬間、今度は宙に舞う落葉のごとく、ふわりとその場で浮遊して、そこからゆっくりとかぶさるように足場について、さとり達から大分離れたところに静止した。
まったく音も立てずに現れ、そして落下し、着地したものだから、偶然その様子を目の当たりにしたさとり以外は、誰もそれに気付かなかったし、見ることが無い以上、興味を示すこともなかった。
そして、唯一その様子を見ることができたさとりは、距離が遠い故にはっきりとした大きさは分からないが、決して小さくはないその

円盤を、食い入るように見つめることしかできなくなっていた。

「貴方だったのね・・・」

さとりはここでようやく理解できた。

例の感覚は、あれが発していたものだ。

この空間に来てから新しく感じられた、もうひとつの強い感覚。

それは間違いなく、あの円盤が発しているもの。

そして、鋭いが、曖昧でもあるその感覚は今や、はっきりと認識できるあの円盤の意志としてさとりの心に作用していた。

あれは、求めているのだ。

何か・・・いや、誰かを。

誰でもなく、誰でもいい、とにかく自分以外の誰かとの接触を。

あの円盤もまた、生きているのだ。

「貴方は・・・」

さとりは、自分を、いや、誰かを呼ぶその声に応え、足場に横たわる円盤の方へと駆けだした。

「さとりちゃん、どうした?」

彼女の行動に気付いたヤマメが、慌ててさとりの方に振り返り呼びかけるが、返事はない。

そこでようやく彼女や他の妖怪達も、あの円盤のことに気がついた。

急ぎさとりの後を追おうとするが、その前に、未だ何をしてくるのか分からないあの八雲　紫の方を、横目にチラリと見る。

彼女の方は、相変わらずこちらに背を向け、どこかに行こうとしていたらしいが、こちらと同様、あの円盤の存在に気付いたらしく、少し驚いた横顔を覗うことができた。

そうして、こいしやお燐達がさとりの後を追い、パルスィがそれに続く。

そんな中で、さとりの方と紫をちらちらと何度か交互に見やってか

ら、どうやら紫には何もする気がないらしいということを確認してから、ヤマメも駆けだした。

ちょうどその時、紫の横顔から驚愕の表情は消え、それにとってかわり、何かを納得したようなうっすらとした笑みが浮かんでいた。
彼女には、さとりが駆け寄っていくあの円盤が何なのか、分かっていた。
教えてもらっていたのだ。
『彼女』から。

さとりは、息せききりながら、円盤のすぐ傍にまで歩みよっていた。
やはり、円盤はかなり大きなものだ。
その直径は、十mを優に超えている。
厚さはそれほどでもないようだ。少なくとも、さとりの膝にもまったく届かない程度のものだ。

足場にぴたりと張り付くようになっているその円盤の傍にしゃがみこんださとりは、何の迷いもなく、青白いとも、赤いともつかない光を放つ円盤の表面に触れた。

彼女は、身震いするほどに驚いた。
これもまた、『そのもの』のように生命の熱を帯びていたのだが、それがとても強かった。
温かいというよりかは、いっそ熱いとさえ思えるほどに。
だがその熱さは、不快な熱さではない。温もりの延長である熱気だった。

何かの本で読んだ気がするが、人間の小児は、成人に比べれば僅かながらに体温が高いらしい。
それを実感したような気分だった。
・・・いや、そんなものでもない。
これではまるで、『生まれる』ようではないか・・・

さとりは今度は、両手で軽く円盤の表面に触れながら、そのまま上半身でもたれかかるようにして、右耳を当てた。
そして、彼女の耳には、確かに聞こえた。
まったく同じものではない・・・だが、確かにそれだと分かる音が。

今、誕生しようとしている。

さとりが耳を離して、上半身もまた円盤から離した時、ようやくヤマメ達も、彼女の傍にまで駆け寄っていた。
突然さとりが円盤に触れたり、さらには身体をべったりくっつけたりするものだから、それを不思議がっているのが分かった。
さとりがしゃがんだままヤマメ達の方に振り返り、口を開く。

「みなさん、これは・・・」
だが、全て言い終えるその前だった。

円盤が突如、眩く発光を始めた。
「うっ！？」
眼を逸らしていても突き刺さってくるような光に、痛みさえも感じて、さとりは思わず眼を閉じ、立ち上がって円盤から離れようと再び駆けだした。
彼女からそう遠くない位置にいたヤマメ達も咄嗟に眼を閉じて、その場から退避する。

「わっ！」というキスメの呻き声と、「みんな離れて！」というパルスィの声はよく聞こえた。
だが、それらの声が聞こえた次の瞬間、光だけではなく、金属が擦れるような奇妙な音が円盤から発せられ、空間にこだました。

とにかく、光の影響を受けない位置にまで逃げようとするさとり。
いきなりばっと発光したものだから、相当強い光だと思っていたが、実際はそうでもないらしい。あるいは、光が強かったのは、最初の一瞬だけだったのだろうか。
二十mほど離れれば、眼を開けていても問題がないほどだった。
ちょうどその位置に、ヤマメ達もいた。

「にゃんだぁいきなりっ？」というお燐の声が聞こえる中で、ゆっくりと眼を開いたさとりは、改めて、発光し、奇妙な音を発する円盤の方を向いた。

円盤は激しい回転運動を起こしながら、表面からいくつもの光の粒子を吐きだしているように見えた。
また外周からは、真っ直ぐに伸びる光の筋が、円形に沿って外に向かって伸びていた。
そしてその光が少しずつ角度を変え、円盤に対し垂直になっていく。
表面から発せられる光の粒子は、激しい回転運動に乗って大きな光の渦を形成している。
白い光の筋が段々と上を向いていくにつれて、光は一点に集中していき、金属が擦れるような音も段々と強くなる。

「なにが起こって・・・あぁもう！妬ましいっ」
あまりに突然でかつ不可思議な事態に、パルスィが苦々しく叫ぶ。
が、その心の奥底には、何かすごいものと対面していることの興奮があるのは確かだった。

そして、それと似たような興奮を、さとりもまた感じているのだから。
だが、彼女の心の中には、それ以上に大きな感情が満たされていた。
やはりというべきか、それが具体的に何なのかは分からない。
だが、はっきりと確信できることもあった。
この気持ちは、今まさに生まれようとしている、何かに向けた、肯定的な感情であるということだ。

「なんか見えるよぉっ？」
お空の言う通り、スクリューにかき回される水中の泡のごとく激しい渦を作る光の粒子の中に、何かが見えた。
小さな金属の粒のようなもの。
それらがお互いに組み合わさり、何かを形作っていく。
最初は何も存在していなかったはずの場所に、薄い金属の板のようなものが出現し、それがさらに無数に重なり、組み合わさっていく。
いつの間にか、そこには確かに何かが形を成しつつあった。

あの姿は・・・・・・人だろうか？
光の渦の中に人の姿が見えた。

そして・・・

「光が弱まっていく！」
ヤマメの声を聞くまでもなかった。

円盤から放出されていた光は徐々にその輝きを弱めていき、最後には完全に消え去り、何事もなかったかのように静けさを取り戻していた。

だが、それは完全に元に戻ったとは言い切れるものではなかった。
光が放出される前と、放出された今とでは、明らかに違うものがひとつあった。

円盤の上に佇む、ひとつの大きな影である。

「な・・・なぁにあれ？」
キスメがうわ言のように呟く。
そして、この場にいるほとんどの者もまた、言葉に出さずとも、まったく同じことを考えていた。
しかし、さとりはその考えを読み取ることができなかった。
光の中から誕生した・・・そうとしか形容できないあの、四肢を持つ奇妙な影に見惚れるばかりで、自身の能力さえ正常には機能しなかった。

光の中から現れたそれは、薄い紫色をし、足元の円盤と同様、十ｍを超えるような背丈であった。
が、頭と思しき部分が少し大きく感じ、頭身が低く感じられるので、遠目に見るだけではもう少し小さいようにも見えた。
その頭部からは、まるで兎の耳を彷彿とさせるものが生えており、流線形の頭部には、細い線のようなものが引かれており、その中に、金色の筋のようなものが見えていた。
それが、時折黄色とも緑ともつかない色に発光するその様は、命の鼓動を感じられる。
鎧のような硬質な印象を受けながらも、やはりというべきか、どこか、生々しさも感じさせるあの巨人　（と言えるだろうか？）は、確かに生きていた。

そして、しばらくの静寂を破って聞こえてきたその音は・・・

「んん・・・？」
再び聞こえてきた金属が軋むような音に、元が猫である故か大分耳のいいお燐が、両手を猫の方の耳の前にかざして、その音に神経を集中させた。
その様子を見たお空もまた、同じように耳を澄ませるが、そうする頃には、その音は、耳を澄ませなくともはっきりと聞こえるほどに大きくなっていた。

それは確かに、金属が軋む音には聞こえたが、円盤が発光している時に聞いた音とはまったく違う。
前に聞こえた音は、水面に湧き立つ泡のように澄んでいるようでいて、その節々に、鉄が弾ける奇妙な音を混ぜ合わせていたが、今聞こえるこの音は、もっと鈍い。
が、不快感を感じさせるような音ではなかった。

そう、この音は、金属が擦れるのと同時に、もっと別の音・・・いや、声にも聞こえたのだ。

お空が、ぽかんとした顔で呟いた。
「赤ちゃんが泣いてるわ・・・どこ？」
それに、お燐がぼーっとした顔で、ある一点を指差しながら応えた。
「あそこ・・・あれだよぅ」
「・・・あれぇっ？」
お燐が指差したのは、他でもない、光の中から現れた巨人だった。

今、彼女らの鼓膜を震わせるこの音は、赤子の泣き声のようにも聞こえた。
『ような』というよりかは、そのものである。
金属が擦れ合う中で、本当にどこかで赤ん坊が泣いているのではないかと思えるほどに、そっくりだった。

そしてその音は、あの巨人が発しているように聞こえた。

突如、あまりに突如眼の前に現れたその姿。
これこそ、さとり達が探検の末に辿り着くべき何かであるのは間違いないのだろうが、彼女らの中の多くの者にとっては、事態があまりに目まぐるしく、突拍子もなく動き過ぎているため、今はまだ、戸惑いがあるばかりだった。
それを現すように、パルスィが苦々しい口調で言う。
「どういうの・・・？あれは何者なの？・・・地上の妖怪には会うしで、どうなっているの・・・」

この場は、まずどうしたらいいのか。
それすらも考えあぐねる中で、ただ一人、さとりだけは、いち早く行動を起こそうとする心があった。

彼女はすでに今、自分の眼の前にいる者の声を聞き取っていたし、それに応えることしか考えてはいなかった。

「やっぱり、あの子！」
弾けるように言いながら、再び円盤の方へ、その上に佇む巨人の方へ駆け寄るさとり。
ヤマメがびっくりした様子で、
「さとりちゃんどうしたのーっ？」と呼びかける。
さとりは立ち止まり、振り向きざまに言った。
「あの子は、生まれたばかりで不安がっています。心配することはないって、感じさせてあげないと」
その声に、キスメが、「へぇ？」と、素っ頓狂な声を出す。
それに続いて、パルスィが言う。
「それが分かるっていうの？あれの考えてることが？」
さとりは応える。

「はい。あの子は、友人を欲しがっているんです」
「友人って？」
パルスィが思わずおうむ返しに聞き返そうとした時、突然こいしが、姉の言葉に同意を示した。
「んー。なんとなくだけど、分かるわ、それーっ」
それを聞いて、お燐とお空も笑顔で続く。
「友達かぁ～！」
「友達は大歓迎！」

彼女らの声を聞いたさとりは、微かに笑みを浮かべると、踵を返して、さらに円盤の方へ駆け寄っていった。
こいしとお燐達も、その後を追っていく。

――あの子らは、たまに分からないことを言うなぁ・・・――
そんなことを考えながら不思議そうに頭を掻いて、こう考えたこともさとりには知られているのだろうかとも思ったヤマメは、
「おぉい、待ってよぉっ」と、同じようにさとりの後を追っていった。
キスメは彼女に引きずられ、パルスィも後に続く。

再び円盤の傍に駆け寄ったさとりは、その勢いのまま、地面を蹴って軽く飛び上がり、その上へと乗った。
はっきりとは見ていなかったのでよくは分からなかったが、巨人を生み出した後、独特な光沢を持っていた円盤は、その光を大分弱らせていた。
ほとんどなくなっていると言ってもいいほどだ。
チラリとだけ、色を失ったような円盤の表面を見たさとりは、まるで抜け殻のようだ、とだけ感じた。

だがそれ以上に、今は。

円盤の上に乗り上がると、すぐ眼の前には、生み出された巨人の薄紫色をしたつま先が見えていた。
改めてすぐ近くにまで寄ってみると、やはりかなり大きい。
さとりの十倍・・・とまではさすがにいかないが、七、八倍以上の背丈は優にありそうだ。
やはり、大体十mほどだろう。
これほど大きく、しかも、人の姿に近しい生物は、そうそういない。
まるで海坊主だ。
いや、海のない幻想郷に海坊主などいない。
となれば、他に見当がつくのは、さとりやヤマメ達が地底に生きるようになるよりさらに昔に、我がもの顔で幻想郷をのし歩いていた、勇儀の友人ほどのものだろう。

要するに、この薄紫の巨人は、多くの者にとっては、間違いなく畏怖の対象となり得るだろうということだった。
現にヤマメ達であっても、この生き物らしい何かが、今この場で暴れ出したりすれば、大変なことだと思っているのだ。

だから、さとりが何かに動かされるように、円盤に対してやったのと同じように、自分の身体を大きなつま先にぴったりとくっつけた時は、『大丈夫なのか?』と、胸中で叫びもした。

さとりは、今回ははっきりと自分自身で意識しながら、自分の身体を、眼の前にある何者かのつま先へと触れさせていた。
緩やかに広げられた両腕もまた、抱きつくように薄紫の、金属板のような『皮膚』とも呼べそうな部分へと密着させ、軽く広げられた手のひらが、柔らかくそれに触れていた。
そうして、右頬も同じようにしてそこに触れさせ、眼を閉じてみる

と、とても気持ちが良かった。

「固いのに柔らかいし・・・ぽかぽかしている・・・」

やはり、これまで同様、『この子』もまた、生物としての温かさと柔らかさを持っていた。

そしてそれは、今までよりもずっと強く、良い感触として感じられた。

とにかく、とても気分が良かった。

素直にそうとだけ表現できる熱を感じ、さとりはぼんやりと眼を開けて、無意識のうちに微笑を浮かべていた。

――――もっと奥の方に・・・この子の奥の方に入っていけば、もっと気持ちよさそうね・・・――――

そんなことを考えた時だった。

さとりははっとして、抱きついていた身体を離し、その場から少しだけ後ずさりした。

遅れて円盤の傍まで寄ってきた一同の中で、お燐がびっくりした声を上げる。

「動いたーっ！」

金属の擦れる音（今度は、あくまでも金属質で、なんというか、現実的な音に聞こえた）と共に、佇立した姿勢だった巨人が、さとりがいるのとは別の方の、左足のつま先を少しずつ後ろに下げつつ、膝と思しき部分を屈め始めた。

その動きは、この場にいる全てのものに、座ろうとしているのだということを理解させる動作であった。

「うわぁぁ～・・・っ」キスメの圧倒されるような声が聞こえる。

が、その驚嘆は、さとりには聞こえなかった。
さとりには分かっていた。
『この子』は、こちらの思ったことに応えてくれているのだ。
自身の奥・・・最も奥の方へと、導いてくれようとしている。
それに気付いた時、彼女は、この生まれたばかりの『この子』に対して、理由のない好意を抱いていた。

ゆっくりと腰をかがめる中で、薄紫の巨人の頭部に奔る細い溝の中を、いくつかの小さな光の筋が、きらきらと煌めいた。
それと同時に、巨人の身体から何かが振動するような・・・上手く形容できないが、ぶるぶると言えそうな、そういう音が聞こえてきた。
それはまるで獣の呻く、あるいは嘶く声のようでもあったが、本当のそれよりはずっと静かで、穏やかなものであった。
そうして巨人は、片膝をついた姿勢にまで屈んだところで、再び静止した。
金属が擦れる音も、ぶるぶるという振動音も、片膝をつくまで続き、その後は聞こえなくなった。

さとりはようやく、後ろの方にいるのであろうヤマメ達の事を意識しなおすことができ、ちらりと背後を振り返った。
こいしとお空だけは、ぼーっと何の気なしに薄紫の巨人の頭を見上げているが、それ以外は皆一様に、戸惑った様子で、眼が泳いでいた。
が、これでも一時よりかは落ちついているというのが、さとりには分かっている。
ヤマメ達も、そろそろ理解できてきているのだ。
『この子』には、何の危険もないのだということに。
さとりには、当に確信できていることだった。

ヤマメ達のことはそれだけにして、再び『この子』の方に向きなおったさとりの前で、その股の金属の肌が、空気の抜けるような乾いた音と共に、開いた。
何かを覆っていたものが、取り払われるようにスライドしたのだ。
突然、見た目だけなら硬質そうな鋼板が軽やかに動いたものだからさすがに少し驚いたが、それも一瞬のことだった。
さとりはすぐに、表皮が取り払われることで現れた人ひとりくぐれそうな穴と、その奥に見える空間に眼を向けていた。

あそこが、『この子』がこちらを招きいれようとしている、自身の奥深い部分なのだろう。
そうして、それをさとりの前にさらけ出すというのは即ち、『この子』もまた、今さとりが感じているような、理由のない好意を感じているということだ。
実際どうなのか知らないが、さとりにはそう思えた。

そうして、後は勝手に身体が動いた。
さとりは、自分の前に倒れるように傾いてきた、『この子』の奥の部分を覆っていた表皮の近くに歩み寄ると、『この子』の誕生と共に生気を失った円盤の表面を蹴って、その上へとよじ登った。

いい加減落ちついて来ていたというのに、またさとりが急に妙なことをしだしたものだから、ヤマメが再びびっくりして、言う。
「どうするんだいっ？」
それにさとりが、表皮の上によじ登ってから、振り向きざまに応える。
「この子と一緒になります．．．危険ではないはずです。皆さんには分かりませんか？」
その声にパルスィが、眉を八の字にして返す。

「そりゃ・・・ぼんやりと、分かるような気はするけどさぁ・・・」
それだけ言うと、後は、さとりが巨人の股間部に開いた女性器を彷彿とさせる穴の中に潜り込んでいくのを、見ていることしかできなかった。
しかし、さとりが言ったように、そして自分が応えたように、あの巨人は、決して危険な存在ではないように思えた。

穴を潜り、『この子』が自分を招く、最も奥深くの空間へと入ったさとり。
その中は、これまで見てきたのと同様、黄色っぽい金属質な、いくつもの溝の入った壁が、球状に近い形で張り巡らされている光景だった。
中はそれほど広くは感じられないが、外見から見た『この子』の体躯の大きさから考えれば、腰から股間にかけてのほとんどのスペースを占めているように思われる。
そう思えば、実際はかなり広い空間だと思いなおすこともできた。

さとりは無言で、空間の奥へと入りこんでいき、正面に見えた彎曲する壁面に、背中からもたれかかった。

「やっぱりだわ・・・凄くいい気分がする」
空間の中は、とても穏やかな温かさに包まれていた。
背中に当たる壁面の感触もとても柔らかく感じた。
理由はないが、気持ちが落ち着いていくのが感じられる。
自分が本来いるべき場所にいるような・・・いや、自分がかつていた場所に戻ってきたような、そういう、言い様のない安心感のようなものがあった。
我が家である地霊殿で、お燐達が自分によくしてくれる時に感じる

ような気分を、今同じように感じられた。

それが、『この子』もまた自分と同じような気分を感じているからというのが、さとりにはなんとなくだが分かっていた。
『この子』はとても寂しそうな気持ちをしていたが、今はもうそれは感じられなかった。

さとりは、すでに何の恐れもなければ疑問も感じない心で、呼びかけていた。
いや、『この子』が何かを聞いてきたから、それに応えただけだ。

「私は？・・・さとりって言うのよ。初めまして・・・あなたはなんて言うの？・・・・・・・・・分からないの？」
『この子』は、自分のことを『よく分からない』と言った。
何も知らずに、突然生まれてしまって、とても不安だったと。
だから、自分の名前を教えてくれたさとりに、もっといろいろなことを教えてもらって、この漠然とした気持ちを整理したいと言った。

さとりはそれにただ一言、応えた。
「あなたに分からないことは、私には分からないわ・・・分かることだってあるけど・・・」
その声を聞いてから、『この子』は訂正した。
分からないというよりかは、思い出すのに時間がかかっているというのだ。

その時だった。
穴を隔てた向こうから、ヤマメ達の何やら叫ぶ声が聞こえてきた。
一体何事かと、外にいる彼女らの思考を読み取ろうとする間もなかった。
突然、穴の向こう側で一つの影が揺らめいたと思うと、その影が、

穴の縁に左足をつけ、同じように右手で縁を掴みながら、さとりのいる空間へと身を乗り出していたのである。
その影は、八雲　紫であった。

「あなたっ？」
さとりも『この子』も、驚愕した。
さとりは、温かく柔らかい壁面に背中を預けたままびくりとして、『この子』もまた、ぶるぶると鳴き声を発した。
ヤマメ達が叫んでいたのは、紫がこちらに入ってこようとしていたからだ。
一体どうしたのだ？
そう考えながら、心で身構えるさとりに対し、左足と右手で身体を支える紫は、にこやかな表情で呟くように言ってきた。
「その者の名はブレンパワード・・・・・・貴方の名はブレン・・・」

「《ブレンパワード》・・・？」
さとりは、紫に対し咄嗟に身構えていた警戒心を一瞬で忘れ去った。
彼女が呟いたその名・・・それが、今自分とひとつになっている『この子』の名だというのだ。
『この子』、ブレンパワードは、『思い出した』と言った。
そう言う声が、さとりには聞こえた。

さとりは、ようやく知ったその名をよく頭に刻みつけつつも、不安そうでもあり警戒もしている表情で紫に言い返した。
「何故貴方がそれを・・・」
紫はそれに応えず、さとりではなく、《ブレン》に対し呼びかけるように続けた。
「貴方もやがては思い出すでしょう・・・己の使命のため、必要なものを搾取するといい・・・“ビープレート”となり得るものの情

報を・・・」
「・・・・・・」
さとりは、無言でその声を聞く中で、紫が、何かとても大切なことを言っているらしいことを聞き逃さなかった。
そうして今度は、自分に対して呼びかけられる彼女の言葉に、しっかりと耳を傾けた。
「これから、状況は目まぐるしく変わっていく・・・貴方達はただ、ブレンを通して、オルファン達に教えてあげればいい・・・“ビープレート”なり得るものを・・・・・・・・・・分からないことがあれば、その時は、またお会いしましょう」
それだけ言って紫は、穴の縁を軽く蹴って、飛び降りるようにその場を離れた。

「・・・ちょっと待って！」
さとりは慌てて身体を前に出し、彼女を呼び止めようとした。
何かとても大切なことを説明していたようだが、何を言っていたのかまったく分からなかった。
心の内を読み取ろうとしても、彼女の心は混沌としていて、何も感じることができなかった。
一体何を説明したかったのか、自分は何をすればいいのか。
ブレンという名のこの生き物は、結局何者なのか。
それを教えてもらわなければいけない。

だが、穴の外に身を乗り出して辺りを見回しても、紫の姿はまったく見えなかった。
忽然と、まるで最初からいなかったかのように姿を消していた。
「・・・どういうの・・・」
呆然とし、一言だけ呟いたさとりは、再び穴の中へと身体を戻し、先ほどと同じように、ブレンの身体の中に身を預ける。
分かったことはある。

『この子』の名はブレンであること。
そして、このブレンは、とても優しい性格をしているらしいことだ。
動揺しているさとりのことを心配して不安そうにしているのが分かるのだから、彼女は、紫に聞きたかったことは全て頭の中から取り払って、冗談っぽく、
「変な奴ね、さっきの」と笑った。

もう一つ分かることはある。
ブレンも段々と大切なことを思い出し、それを、さとりに伝えてくれるということだ。

ブレンは言う。
自分達は、母なる存在、オルファンより、ある目的のために生み出されたと。
オルファンとは、今さとり達が体内にいる。この巨大な生物のことだ。

そうしてブレンは、自分が何らかの目的で生み出されたことは分かっても、その目的が何なのかは分からなかった。
ただ、何かとても価値のあるものを探しているということだけしか、はっきりとしていなかった。
きっとそれが、紫の言っていた、“ビープレート”というものなのだろう。

そして一番大事なことはだ。
その目的は、こうやってさとりを自分に触れさせていることで、達成できそうだということだった。
だからブレンは、今とても落ち着いているという。

さとりは、ブレンの胎内に身体をもたれかかったまま、にこやかに応えた。
「それが分かれば十分ね・・・」
そうして、眠るように眼を閉じて、そのまま座りこんで、もっと深くブレンに身体を預けようとした、その時だった。

ヤマメが大声でこちらを呼びかけている声が、ようやく聞こえた。
どうやらずっと呼びかけていたらしい。
さとりは慌てて、座りかけていた身体を起こして、もう一度穴の外へと身体を乗り出し、ブレンの立つ足元の円盤の傍にいるヤマメ達の姿を見た。

ヤマメがほっとした表情を浮かべつつ、言った。
「大丈夫かいーっ?あの妖怪に変なことされなかったかーっ?」
それに、さとりは応える。
「なにもされませんでした」
それに続けて、今度はパルスィが聞いてくる。
「そいつは何者なの?どういう奴なの」
「この子は、ブレン・・・ブレンパワードと言います。とてもいい子です」
こいしが返す。
「いい子のブレンパワードっ?」
「えぇ、そうよ。この子は私といると気分が落ち着くらしいの・・・・なんでここにいるのかは、分からないみたいよ」

ブレンが急に何かを伝えてきたので、さとりは、「ちょっと待って」と短く言って、その声に耳を澄ませた。
そうして、ブレンの言った言葉を皆に伝えた。
「この子、外に出たいと言ってます。出させてあげましょう」
「出させるって〜・・・」お燐がよく分からない様子で聞き返す。

さとりはその声は聞かずに、続けて言う。
「出ていく方法はブレンが知っています。皆さんも、この子の手のひらに乗って、一緒に出ましょう・・・もうそろそろ夜明けも近いでしょう？」
それには、ヤマメが応える。
「え？あぁ・・・そうだねぇ。そろそろここから出る頃合いではあるけど・・・」
キスメが続く。
「そいつも連れてくのー？」
「はい。せっかく出逢ったのに、ひとりぼっちで置いてけぼりにするなんてできませんよ・・・もう行きますから、いいですね？」
それだけ言うとさとりは、再びブレンの胎内へと戻っていた。
ヤマメ達も、ひとまずこれ以上はなにも言わず、さとりの言う通りにすることにした。

ブレンの胎内に戻ったさとりは、先ほどのようにまた背中からもたれかかった。
そうして今度は左右に腕を広げ、手のひらをブレンの胎盤に触れさせる。
こうすることで、互いの気持ちがよく伝わるような気がしたからだ。
そうした上で、さとりは呼びかける。
「外に出ましょう、ブレン・・・あの人達も連れてね。私によくしてくれる方達なんです」
その声に、ブレンはすぐに応えた。

円盤の上で膝を立てていたブレンは、ゆっくりとその身体を立ち上がらせる。
そうして、ずっと開きっぱなしだった、胎内の穴を包み込むための表皮が閉じた。

一瞬だけさとりの視界が暗くなるが、その次の瞬間には、胎内の一部分から光が灯り、外の様子を映し出した。
その光景は、さきほどまでさとりが見ていたものよりかは、少しだけ上から見下ろすような視点に変わっていた。
ブレンが見ている光景が、さとりに対しても、視覚的な映像として伝わっているのだ。
今ブレンは、さとりの大切な者達の方を向いており、彼女らの驚く様子がよく見えた。

そうして今度は、起立したブレンの身体が、ふわりと宙に浮き上がる。
その瞬間、その身体の周囲に、一瞬だけ薄い光の膜のようなものが現れ、そして消えた。
宙に浮いたブレンは、そのままゆっくりと空中を遊泳し、ヤマメ達の後ろに回り込んで、足場の上に降り立った。
益々びっくりした様子で、ヤマメ達が眼を白黒させるのがよく見える。

ブレンは、彼女らの前でもう一度屈みこむと同時に、両手のひらを彼女らの前に差し出した。
突然前に差し出されたブレンの手のひらに眼を釘づけにされた彼女らが、次いでパクパクと何か言い合うのが見える。
声は聞こえなかったが、さとりには心を読むことで、読唇術のように会話の内容を知ることができる。
『どうするの？』とか、『乗れっていってんでしょ？乗るしかないわ』とか、口ぐちに話し合っている。

そうして、言い合ってもどうにもならないため、順々にブレンの手のひらの上へと乗っていく。
その手のひらは見た目ほど広くはなく、六人ほどの妖怪を乗せると

さすがにこぼれ落ちてしまいそうだったが、そういうことにならないよう、両手で包み込むようにして支えた。
大分窮屈そうで、一同の身体がおしくらまんじゅうしていたが、落ちるような心配はまずないだろう。
ヤマメ達は大分困ったような顔をしていたが、こいしやお燐達は、押し合いへしあいしながら楽しそうに笑っていた。
さとりがその様子を見守る中で、ブレンは、彼女らを支える両手を持ち上げつつ、再び立ち上がり、宙に浮いた。
「ん・・・行こう」
さとりの声と共に、ブレンは天井へ向けゆっくりと飛び上がっていった。

そうして、空間の上、天井にある、ブレンほどの巨体でも容易にくぐれるような穴を通り、そこからいろいろな空間に出入りしながら、上へ下へ、あるいは前へと進んでいく。
ブレンが見て、さとりもまた見る視界は、決してひとどころに留まることはなく、オルファンと呼ばれる者の体内は、大まかには似たものであっても、まったく同じ外見をしている場所はひとつとして無かった。
当に分かっていたことだったが、このオルファンもまた、ひとつの生物であるということだ。
そしてブレンはこのオルファンから生み出された存在であるという。

ブレンが、何かを得るために生み出された存在であるなら、その何かを求める当人が、このオルファンだ。
一体何を求めているのか・・・
オルファンと触れ合えば、それが何なのか分かるのだろうか・・・？

さとりは、ブレンと共に外に出た後はいずれ、ブレンにとっての母なる存在だというオルファンとも、話をしてみたいと思った。

そうしていくつかの空間に入り、すぐにそこを抜けるというのを繰り返している内に、さとり達の視界に、ほんの一時間ほど前に見ていたばかりなのに、ひどく懐かしいものに見える光が見えてきた。
星々の光だ。
ブレンはようやく、オルファンの外へと抜け出し、満天の星空の下へとその身を晒した。

さとりには、この時のブレンの感慨が身にしみて伝わった。
緩やかな速度で、夜空の中を漂うブレンに対し、彼女は呼びかけた。

「ここは幻想郷と呼ばれて、妖怪が住む世界なの・・・私達の住む場所はここから地の底に降りたところにある。これからそこに帰らなければならないけど・・・・・・貴方が望むなら、もう少しぐらいはここにいても・・・・・そう、すぐに帰ってもいいの？・・・でも、とてもいい景色でしょう。私もそう思うよ・・・もう少しぐらいは、眺めていましょう」

果ての見えない夜空が広がり、無数の星が、触れられそうな光で大地を照らす。
そんな光景に感動しているのは、ブレンだけではなかった。
さとりにしても、ヤマメ達にしても、そうだった。

どうやらブレンは、オルファンのかなり上の方から外に出たらしく、大地がずっと下の方に見え、そしてその代わり、夜空はずっと近くに迫っているように感じられた。
誰のものでもない星の光は、全てのものを等しく照らす。
それは、今この時においては、地の底に追いやられた妖怪であって

さえ例外ではなかったのだ。

それに、幻想郷の空を覆うスペクタクルは、これだけではない。
急に、空が弾けるように輝いた。ように見えた。
どこからか差し込んできた白い光が、夜空全体を照らし、星々の光をかき消した。
その姿からは、力を感じた。
鬼でさえも敵わないほどの、大きな力だ。
これは、太陽の光だった。
朝日が昇り来る光だ。

光の源となる方向に眼を向ければ、空と大地の境界から真っ白な光が、痛いほどに眼をついてくる。
幻想郷に住まう妖怪達にとっては、それは敵となる光であったし、それは地底の妖怪であっても例外ではないのだろう。
夜に生きる妖怪にとって、朝は自分達の存在を否定する時だ。
だが、今この時においては、さとり達にとっては、そんなことは関係なかった。
もうずっと見ることがなかった昇天の光が、焼き尽くさんほどに自分達の身を照らしてくる。
太陽の光は、妖怪にはまだしも、生物全体にとっては、命の源であり、歓喜の光だった。
それが、身にしみて理解できるような気がした。

さとり達と、そしてブレンは、眼が痛くなって見ていられなくなるまで日の出の光を見つめ続けてから、ようやく、地底へと戻るべく抜け穴へと向かっていった。

さとり達が想定していなかったのは、ブレンを連れて地底に戻れば、この巨体だ。
かならず人目につくということだった。
こっそりと、誰にも気づかれずに外に出るという目論見は、すっかり破綻してしまっていた。
結局彼女らはこの後、地底の妖怪達を地上に出さないよう約定していた鬼の星熊　勇儀に、こっぴどく叱られることになるのだが、その直前の、驚愕した様子の彼女の顔を見て、気がついた。

さとり達と、このブレン、そしてオルファンとの出会いが、これから始まるであろう、異変の幕開けとなるものであるということを．．．

※

幻想郷には、天狗と呼ばれる妖怪達もいる。
古くからこの世界に住まう彼らは、幻想郷の中においては珍しく、確固とした組織体制を確立していた。
そうして、億に達する、それこそ、幻想郷が生まれる以前からの長い年月を生き続けていた。
そんな天狗の中において、殊、情報統制を担当する部門が、烏天狗である。

彼らは、幻想郷を偵察することで得た情報を纏め、管理する。
そうすることで、幻想郷の歴史となり得る事実を、後世に伝えるのだ。
日々起こる出来事の数々を、『新聞』に残すことで。

そのために、彼らは陽が昇れば幻想郷の各地を飛び、日が沈んでも、各地を飛ぶ。
そうして、必要な情報を得れば、それを新聞として纏め、管理する。
その功績が実れば、すなわち新聞の評判がよくなれば、天狗の中での立場も上がるとなれば、誰もが仕事に熱意を燃やした。
組織体制が出来上がれば、その中での地位もあるし、上の地位へとのし上がろうとする野心も持つ。出世を望む。
他の、自警団的立場を持つ白狼天狗やら、あるいはその他中間管理職に比べ、出世の道が分かりやすいため、天狗の中でも特に働いている（と自負している）のが、烏天狗だ。

そうして、日の出間もない幻想郷の空の中で、今日もまた、一人の・・・いや、二人の天狗が、幻想郷の歴史となるスクープを求めて、飛んでいた。

「ついてくんなって言ってるのが聞こえないの？頭の弱い奴よねぇ・・・おぉ、よわいよわい」
「ついて来てるのが自分だってのが分からないようなアホに言われたくないね」

射命丸　文と、姫海棠　はたてだ。

この二人の関係を極力簡潔に言えば、仕事仲間であり、永遠の宿敵であり、『喧嘩するほど仲がいい』という言葉の意味をよく教えてくれるような関係であった。

文の新聞・・・彼女の持つ特殊な映写機により撮られた精密な写真は掲載されており、幻想郷の出来事を詳細に伝える、幻想郷のジャーナリズムのスタンダード、清く正しい（当人談）《文々。新聞》と、はたての新聞、《花果子念報》は、常にその発行部数を競い、幻想郷第一の新聞の座を奪い合っている（当人達談）。

はたては、偶然手に入れた《携帯電話》なるものを用い、念写により文の取る写真同様、精密な画像を新聞に掲載していた。

だが、文の新聞に載る、出来ごとに対し近い位置から撮られた写真と、自分の新聞に載る写真に何か決定的な違いがあるらしいことと、携帯電話にも実は映写機としての機能があるということを最近知ったこともあり、これまでは天狗の本拠地である妖怪の山の中に篭りきっていた彼女もまた、烏天狗としての本分を思い出すべく、幻想郷の各地を飛び回る日々を始めた。

で、その結果、毎日のように文と会っては、紙面での戦いをその場に持ちこんでしまうわけだ。

「まぁ、ついてくるのも当然よね・・・あんたはこうやって私の取材内容を横取りすれば、山に引きこもってるよりも楽に記事のネタを得られるってのが分かっちゃったんだから」

と、へらへら笑う文に、はたてが、

「さっすが、自分自身がやってることなら説明も上手ねぇ文は・・・言ってて恥ずかしくないのかな、自分の悪だくみを堂々と白状しちゃってさ」と返す。

そんなことを延々と繰り返す。

「・・・まぁ仮に、あんたの記事が先に書かれたとしても、私の記事の内容の方がいい、てのは分かり切ってることだからね」
「そうやって上の方から見下してた結果、どん底の方まで落ちていった奴をたくさん知ってる・・・まぁ、今の内に言いたいことは言っておいた方が良いよね。後でなんにも言えなくなるわけだから。ねぇ？一応、なんにも分かってない文に忠告はさせてもらうけどさぁ」
「・・・でかい口を叩くならまずはそれ相応の立場に立ってからにしなさいよね」
「既に立ってるんだからでかい口も叩けてるんでしょうが」

音も置き去りにしてしまうほどの速さで飛行しながら、口巧者に悪口を言い合っていた二人だが、表向きの仲の悪さが真実ではないことを示すかのように、突然、息の合った具合に二人、まったく同時に空中で急停止した。

この辺りは確か、地底の都、旧都があるあたりだ。
近頃発生した間欠泉により、硫黄泉が数多く発生し、有毒なガスが充満している。
天狗と言えど、この周囲を通過する時は注意して、やや高度を上げるべきだ。
実際のところそれほど問題はないわけだが、念のためだ。

が、文達が急停止したのは、そのためではない。
地底からの有毒ガス以上に注意すべき・・・いや、注意という問題ではないあるものが姿を見せていたからだ。

「ちょっと文、あれなに？」
「・・・・・・」

はたての声には耳を貸さず、文はじっと、翼をはためかせて宙を漂う自分の眼下に見えるその姿を見た。

黄金に輝く山・・・
生物が生きるには過酷すぎる環境の中にあって、まるで生きているかのような存在感を出す、謎の物体。
いや、物体ではない・・・
それは、現に生きていた。

幻想郷ではこれまで、いくつもの異変が発生してきたわけだが。異変というのはいつも、誰も気づかないところで発生し、誰も気づかないところで終わる。
なので、いかに幻想郷の出来事の情報を素早く収集する文であっても、異変の詳細な情報を得ることはできなかった。

そういうことを考えれば、今日の彼女らは幸運であった。
これから幻想郷に起こるであろう異変を、事前に察知することができたのだから。

そしてこの近くにあるのは、前述したように、地底の旧都だ。
これほど巨大なものが現れていれば、何らかの情報があるはず。

文とはたての、今日の取材先は決定した。

第二話『パラレル・リバイバル』

さとり達がブレンと出会ったその翌日、昼ごろのことであった。

幻想郷の一角に鬱蒼と広がる樹海。
妖気に満ちた魔法の森の中。
例え昼間であったとしても、その中は生い茂る木々によりうす暗く、しっとりと湿った空気を漂わせていた。

その陰鬱な雰囲気と、多くの妖怪が住まう危険性から、人間のまったく寄りつかないこの森だが。そこに住まう妖精と妖怪、そして、ひとりのごく普通の人間は、森の暗い雰囲気とは裏腹に、実にのんびりと暮らしていた。

魔法使いの霧雨　魔理沙は、妖怪の山の麓の湖の中に建つ洋館から盗んできた百何冊目かの魔道書を、散らかった家の中のぎりぎり座れる椅子に腰かけ、ぎりぎりそれだと分かる机で頬づえをつきながら読んでいた。
盗んだ、とは説明したが、魔理沙曰く、盗んだのではなくただ借りているだけだという。
魔法使いではあるが、あくまでもただの人間である魔理沙の寿命は、妖怪に比べれば短い。
自分が本を盗んでくる妖怪。あるいは、紅魔館にも魔法使いは住ん

でいるが、彼女などはもう魔理沙の十倍の年月を生きているし、これからも、魔理沙の何百倍もの年月を生き続けるだろう。
いや、純粋に魔法使いという妖怪の一種として生まれたものならば、老いることはないため、寿命などはない。
そのため、最早何倍などと言い表すことさえできない。それほどの者達なら、いずれ魔理沙が死んだ時には、貸したものが全て返ってくるはずだ。
だから魔理沙は、盗んだものを返せとどれほど催促されても、自分が死ぬ時まで返そうとはしない。
そうして、いろいろな者から何度も物を借りて、それが家の中で溜まりこんでしまい、散らかってしまう。
が、魔理沙にとっては、別にそういうことはどうでもよかった。
彼女の服が黒いのは、汚れても目立たないからである。
そういうガサツな性格をしているのが魔理沙だったが、その一方で彼女には、自分の目標のために直向きに努力できる強かさもあった。
今まで盗んできたもので、特に魔道書などは、眼を通さなかったことは一度としてなかった。まぁ、全てしっかりと読破しているかは別としてだが・・・
そうして、常に新しい魔法を身につけ、自分の力を高めているのである。
だから彼女は、魔法が使える以外はただの人間でありながら、一端の妖怪にすら対等に渡り合えるほどの強さを持っていた。

そうして今日も彼女は、紅魔館から借りてきた魔道書に眼を通していた。

が、そんな昼下がりのある時だった。
木が圧し折れるような耳障りな音が、魔理沙の鼓膜を震わせた。

しかも、ただ一度だけではなく、十回近く、繰り返し響き渡る。
そうして、最後の木が折れる鈍い音と共に、草木の中に何かが入りこむガサガサという音が聞こえると、それ以後、他に音は聞こえなくなった。森の鳥達が驚いて飛び去っていく鳴き声などは聞こえるが・・・

さて、魔理沙は、この突然の騒音にもさして驚くことはなかった。
ただ、いっそうんざりした様子で、一度大きなため息をつきつつ、
「今日も元気だぜ」と呟くだけだ。

実を言うと、木の折れる音などというのは、彼女としてはすでに聞きなれたものだったのである。
魔法の森ではよく妖精同士の遊びとか喧嘩とかで、木が折れたりする。
だから今更、ベキベキというあまりいい心地ではない音を聞いたところで、驚きはしない。

とはいえ、今回は少し変でもあった。
一本や二本ならともかく、十本近い木々が立て続けに折れるようなことはさすがにほとんどなかった。
これには魔理沙の方でも、先ほどのような台詞を言いつつも、『何かあったのか？』と疑問を抱かずにはいられなかった。
まぁ、例え単なる妖精達の喧嘩にしても、そのまま放っておくとこちらの家にまで迷惑がかかる恐れがあるから、外に出て喧嘩の仲裁をし、喧嘩している妖精の両方とも退治するわけだが。

「今日は一段と数が多いみたいだなぁ・・・戦争でも始めるつもりなのか？」
などとひとりごちながら椅子から立ち上がり、机に立てかけられていた大きな竹箒を手に取る。

そうして、散らかった家の中でガラクタとしか思えないものの上をよけながら、外に出るドアの前に歩み寄った魔理沙は、そのまま勢いよくドアを開け放ち、ずんずんと外にまで足を踏み出した。

その先で魔理沙を待っていたのは、彼女の予想していたのとはまったく違った光景であった。
とても予想できるものではなかった。
家から数歩足を踏み出して、そこでぴたりと立ち止ってしまった魔理沙は、そのままその場で立ち尽くし、よく分からないといった表情を浮かべ、呟いていた。

「なんだぁこれ・・・？」
魔理沙の眼の前には、鬱蒼とした森林へと続く一面の草木があった。
その中の数本は、まるで切り裂かれたかのように幹が抉られ、そのまま真っ二つにされて吹き飛んでいるものもあれば、まだかろうじで繋ぎ合わさっていながらも、ぐったりとその場で横倒しになっているものもあった。そして、そんな折れた木の内の一本の傍で、折れた木に生える葉や、地面に生える草に包まれて鎮座する、大きな円盤があった。
妖精や妖怪の姿など、その痕跡さえも見せてはいない。
魔理沙はしばらくの間何もいえず、その場でぼーっとしていることしかできなかった。

どうやらあの円盤が、木々を圧し折ったらしいが・・・とてもそうは見えない。

彼女はようやく、苦笑いをして、
「ＵＦＯだなんて、今更時代遅れだぜ・・・」などと呟いたが、そ

ういう問題でないことは分かっていた。
少し前に、幻想郷にいくつもの円盤が現れることがあったが、それとこれとは明らかに違うものだ。あの時の円盤は、手で掴めそうなほどの大きさしかなかったが、今魔理沙の眼の前にあるものは、そんなものより遥かに巨大だ。
彼女が両手を広げて寝そべっても、有り余るほどに広い直径をしているのが、遠目に見ても分かった。
なんせ、魔理沙の身体よりも太い木が千切れるように折れていても、おかしく感じないほどの大きさなのだから。
「なんなんだ？一体」

そもそも、どうやってこの円盤はこれらの木々を圧し折ったのだろう。
大きさといい、金属質な見た目といい、少なくとも、木ぐらいは簡単に圧し折れそうではあるが・・・誰かがここまで投げ込んできたのか？
一体誰が。
いや、もしかしたら・・・
この円盤がひとりでに動いて、太い木の幹を切り裂いたのではないか？

そんなことはないだろう。と、魔理沙は、自分の考えを自分で否定しようとしたが、それができなかった。
なんとなく思いついた考えが、どうも、奇妙な真実味を帯びているように思えたのだ。

それこそまさかだ。
あんな、どう見てもただの大きな金属の円盤でしかない物体・・・自らの意志など持っているはずのない物体が、ひとりでに動くわけがない。

しかし・・・

魔理沙の眼の前で、微動だにせず静止している円盤の表面から、青色とも緑ともつかない奇妙な色合いの光が発せられていた。森の木々の間から差し込む太陽の光を反射したのだろう。
だが魔理沙にはそれが、この円盤そのものに命があって、それが、何かをこちらに伝えているようにさえ見えた。

彼女は、立ち尽くしたまま、顔をふるふると左右に振って、不思議そうに言った。
「昨日は、変なキノコなんて食べてない・・・狂ったりするはずはないんだがなぁ・・・」

一瞬だけ感じたそれも、単なる幻覚か何かだろう。
そう結論づけようとしたが、その時だった。

あまりに突然のことだった。
青天の霹靂とまで表現すると言い過ぎかもしれないが、魔理沙はそれほどまでに驚いた。先の先まで、単なる金属の円盤だと思っていた物体が、草木をがさがさと揺らしながら、ゆっくりと回転を始めたのである。
風などはなにも吹いていないし、何か力をかけるようなものは見えない。
どう見ても、円盤がひとりでに動いているようにしか見えなかった。

「まさかだろ?」
魔理沙はいよいよ、自分が幻覚か何かでも見ているのかと思えたが、そこで考えを改めた。

よくよく考えれば、この幻想郷に、たったひとつの常識などは存在しない。
もし円盤が生きているようにひとりでに回転を始めたとしても、それはそれで正しいことなのだろう。
魔理沙にも、そういう風に考えられるだけの柔軟な頭はあった。
円盤は段々とその回転を激しくしていき、数秒すれば、小さな竜巻でも発生するのではないかと思えるほどに高速になっていた。
現に、自らの圧し折った木々の幹は、回転の風圧により押しのけられ、周囲の草や葉が、風圧に乗って渦を作っていたのだから。
円盤から少し離れていたところに立っていた魔理沙のところにも、風に煽られた葉が飛んでくるほどなのだから、相当な風圧だろう。
彼女の頭にかかっている黒い三角帽子も吹き飛びそうになるので、それを咄嗟に押さえ、僅かに身をかがめた。
「何かするつもりなのかぁ？・・・こいつっ」
吹き付ける強い風の中で、呻くように言う魔理沙。
彼女の心は確かに混乱していたが、その一方では、この謎の物体に対する興味も、それと同じほどに多大にあった。

この円盤は、確かに生きている。
そうして今こいつは、明らかに何かをしようとしている。
その何かに、足を突っ込んでみるのも面白そうだ。
そう考えていた。

そんな魔理沙の眼前で、円盤は依然光速で回転を続けつつ、草が押しのけられはっきりとその全容が見れるようになった表面を、徐々に地面から浮かせていた。
そうして、這うようにゆっくりだったその上昇が、突然急になって、円盤がぐらりと傾きながら魔理沙の目線よりも上の高さまで飛び上がった時には、彼女も思わず、
「わぁっ？」と叫んだ。

しかもその次には、一層激しく回転するその円盤が、ゆらゆらとこの葉のようにはためきながらこちらに向かってきたのだから、お小水の一滴でも漏れ出そうな気分になった。

「うわぁ！うわぁぁ～っ？」

大慌てで、その場から逃げだそうとする魔理沙だったが、あまりに咄嗟のことで足がもつれ、逃げるもなにも、その場で尻餅をついて倒れ込んでしまった。

そうして、そんなことはお構いなしに、円盤は魔理沙の方に迫ってくる。

なるほど、自分がこれから見るのは幻覚じゃなくて、彼岸の世界だったわけだ。あるいは冥界か。

などということを考える魔理沙だったが、結局のところは、そうでもなかった。円盤は、魔理沙から十mほど離れたところでぴたりと止まった。もっとも、回転運動は依然続けているが、静止の一瞬、鋭い風が彼女の身体を吹きつけ、魔理沙はむっとして眼を閉じた。三角帽子が、その風に煽られて、とうとう後ろの方へと吹き飛んでしまう。

どうやら死にはしなかったようだが、いよいよもって頭が混乱してくる。

魔理沙は、うんざりしたような声で、捲し立てるように言った。

「まったくっ・・・どういうつもりなんだ・・・驚かすつもりでこういうことしたってんなら、そりゃ見事に達成したわけだが・・・・・つくづくなんなんだぜこいつは」

しかしその一方で魔理沙には、妙に澄み渡ったひとつの考えもあった。

この円盤は、ずっとこちらを呼んでいたのかもしれない。

しかし、いくら呼んでもこないものだから、向こうから飛んできたのだ。

それこそ『まさか』と言った感じだ。
魔理沙は自分の勘が鋭いと思ったことはない。
勘が鋭いというなら、もっと別の奴がいる。
魔理沙はまたしても、自分の中の考えを否定しようとしたが、結局、これもできなかった。
自分の頭の中にある、何の根拠もない考えが、妙に現実味を帯びていたからだ。

尻餅をつく彼女の前の円盤は、回転運動は続けつつ、それ以上何か動き出すような気配はないように思えた。まぁもちろん、ただそう見えるだけだ。
その次の瞬間には、回転する円盤が鋭いギロチンのようになって、こちらの首をはね飛ばすかもしれないのだ。

そう考える中で、円盤は少しだけ、回転の速度を緩めたような気がした。

魔理沙は、円盤の次なる動きに注意しつつひとまず立ち上がり、円盤に背中を向けて、後ろの方に吹き飛ばされた帽子の方へと歩み寄り、拾い上げて被り直した。
と、ちょうどそうした時だった。

背後から突然発せられた鋭い光に、魔理沙は三度驚いた。
つくづくあの円盤は、想定の範囲外の行動をする。
咄嗟に背後に振りかえると、回転運動を続ける円盤が、思わず目を

閉じるほどの眩い光を発していた。しかもそれは、光というよりかは、発光する無数の粒子とも呼べるものであった。
いくつもの小さな粒が円盤の表面から発せられ。それぞれが、緑色のような、青色のような、あるいは白っぽい光を発し、それが集まってひとつの巨大な光に見えるのだ。
そして、光はそれだけではない。
円盤の外周から伸びる細長い光の筋が、表面から渦を作っている光の粒子の群れを囲むように、少しずつ上へと傾いている。

首だけ振り返って見ていたのが、改めて身体全体を向け直した魔理沙は、呆然とした顔つきでその光の饗宴を眺めていた。
その脳裏には、やはり多大な混乱があったわけだが、その一方で、また別の感情もあった。今しがた自分が否定しようとし、叶わなかった感覚だ。

やはりこの円盤は、ずっとこちらを呼んでいた。
そうして、これから自分が起こす事象に、巻き込もうという腹積もりなのだ。

なるほど、それならもうそれでいい。
こちらとて、元からそのつもりだった。

魔理沙は、今度はもう何が起ころうとも驚いたりはしないと心を引き締め、円盤が起こす光の渦の中で見える、無数の金属の板のようなものが継ぎ合わさっていくような光景を見つめていた。
そうしてやがて、激しくも、眼に刺すようなものではなかった光の渦が、少しずつその勢いを弱めていき、ついには、円盤の回転と共に、完全に消えてなくなってしまった。そうして、そこで見えたものは・・・

魔理沙は、相変わらずぼーっとした顔で、呟いた。
「・・・わけがわからないなぁ」
確かに驚きはしなかったが、びっくりしなければ、混乱もしないというわけではない。
結局魔理沙は、円盤の上で佇立するその巨人との出逢いを、多大な混乱と共に迎え入れていた。

しばらくの間、その場で立ち尽くして、何も言わない魔理沙。
とにかく今は、あれが何なのか自分なりに考えようとしたのだ。
が、どれだけ頭で考えたところで、あれが何なのか分かるわけがない。
思い切って、あの円盤の上に乗って、あの巨人にいろいろ触れてみようか、と考えた。巨人は、全高十mほどの背をしていた。
魔法の森の木々より高いか低いかという背丈だが、あまり威圧感のようなものは感じない。
それに、巨人の全身を覆う黒い色は、魔理沙の好きな色であった。
だからというわけではないが、彼女は今この時においては、下手すれば自分の身体など踏み潰せそうな巨体を持つあの巨人に対して、特別恐怖心は抱いていなかった。
そうして、円盤の方へ駆け足で近付こうとした。
が、それと同時に、今まで魔理沙と同じようにその場で立ち尽くしていた巨人が、急に動き出し、円盤の上に片膝をついてしゃがみこんだ。それには思わず魔理沙も、踏み出そうとした足の動きを止めざるを得なかったが、しゃがみこんだ巨人の股間を覆っていた黒い金属質の装甲が開き、その奥に人がくぐれそうな小さな穴と、さらにその奥に何か空間が広がっているのが見えた魔理沙は、改めて足を踏み出して、円盤の方へ駆け寄っていった。
あの巨人はこちらを、あの穴の向こうにある空間へと招き入れてい

るのだ。
だったら、その誘いに乗るのが魔理沙だ。
脛ぐらいの高さしか厚さのない円盤の上に飛び乗り、そのまま横倒しに開いた装甲の上に上る。
そうして、ぽっかりと空いた丸い穴に顔を突っ込んで、奥の様子を見る。

特別何かというわけでもない。いくつもの溝が入った金属質な何かが球形に張り巡らされているだけのようだ。
「・・・・・・」
魔理沙は、思い切って穴を潜って、その空間の中に入りこんだ。
そうして、球形の空間の中で座りこみ、背中を溝の入った壁面にあずける。
実際にこうやって身体で触れてみて分かったが、この壁面、見た目以上に柔らかかったし、温かくもあった。
自分の意志を持って動いたのを見ると、この巨人もどうやら生物のようではあるが・・・

さて。
「おいあんた。こうして欲しかったんだろ？言う通りにしたが。次はどうすればいいんだ？これからどうなるっていうんだぜ」
魔理沙は、自分の声が聞こえるのか分からないが、とにかく今自分が乗り込んでいる巨人に対して呼びかけた。
そうしてその声に、巨人からすぐに返事は来た。
とはいえ、聴覚的に聞こえるような返事ではない。
頭に直接語りかけるような、思念としての返事だった。
今この場にいる魔理沙でなければ理解できないような性質の言葉であった。

「・・・律儀に感謝してくれるのはいいんだが。その前に、あんたの名前ぐらいは教えてもらいたいな」
その魔理沙の問いに、再び巨人は返事する。
「・・・《ブレンパワード》？・・・なるほど、そういう名前か・・・それで、何者なんだ？・・・・・・・・・分からないのか？・・・いや、謝るなって。分からないなら別にいいさ。あんた、生まれたばっかりみたいだからな、分からないのも当然か」
ほんのひと回りの会話だったが、魔理沙には、このブレンパワードという存在が、悪い者ではないと感じられた。
こいつは、非常に真面目な奴だ。と思えた。

魔理沙は続けて聞き、それにブレンパワードが応える。
「・・・それで、なんであんたはあたしなんかをこんなところに招き入れたんだ？・・・誰でもよかった？・・・あぁなんだそうかい・・・・・誰かいないと、何かいけないような気がするって。まさか、あたしがこうやってないと、死ぬとかいうのかよ・・・・・・そうかもしれないって・・・・・・そうか・・・」
ブレンの話を聞けば、彼は、誰かがこうやって自分の胎内にいることを必要としているらしい。
そうしなければ、生死に関わるほどに危険だというが・・・
まぁ、胎内に別の生物がいることで生命を維持できる生き物はいくつかいる。
その一種ということか。

「なぁ。もう一度聞くが、ブレンは自分が何者なのか分からないか？何かやりたいこととかはないのか？こんなところで、あたしを乗せてじっとしているわけにもいかないだろ」
魔理沙のこの問いに、ブレンは何かを思い出したのか、こう応えた。
「・・・・・・何か探してるだって？・・・・・・《ビープレート

》・・・なんだそりゃ・・・・・・あんたにも分からないのか？・・・まぁいいや、じゃぁあたしと今から、その《ビープレート》ってのを探しにいくか、なぁ？」

一度この、ブレンパワードとやらに乗り込んだ以上、ブレンのやることに少しぐらいは付き合ってやる必要がある。

《ビープレート》というのが一体何なのかは見当もつかないが、ブレンがそれを探しているというのなら、せめて今日1日ぐらいはそれに付き合ってやるべきだろう。

そういう考えの下の魔理沙の言葉だったが、これにはブレンは返事はしなかった。

その代わり、ブレンは突如、ブルブルと鳴き声のようなものを発しながら、その場で立ち上がり、がんがんと円盤の上で足踏みを始めた。微かな振動を受ける魔理沙には、ブレンが何かに怯えているのが分かった。

「おい、どうしたっ？何かあったのか？・・・・・・何かいるって・・・怖い奴がっ？」

ブレンはそのまましばらく地団駄を踏んでいたが、急にそれを止めると、魔理沙がくぐった穴を、装甲で再び覆い隠した。

一瞬だけ胎内が暗くなるが、ブレンの見る視界が壁面に映し出される。

その視界において、ブレンは円盤の上に置かれていたあるものに眼をつけ、それを右手で掴み取った。

「なんだそれ？」

どうやら、ブレンと共に円盤から発生したものらしい。

黒っぽい色をした金属から、一本の細長い、空洞のある銀色の筒状の構造物が伸びている。

そこの一部から横に、取っ手のようなものが飛び出しており、ブレンはそれを掴んでいた。

そうしてその物体の先端部、銀色の筒の空洞を前の方に向けて、構える。

魔理沙には一瞬それが何なのか分からなかったが、ブレンがそれを構える様子は、何かに似ていた。

そうだ、少し前に、魔法の森のはずれにある雑貨屋のようなものから借りてきた本で見た。

人が機関銃やらなにやらを構える姿に似ているような気がした。

「それ・・・鉄砲か何かかっ？」

魔理沙の戸惑うような声に、ブレンは返事を寄越さなかった。

「ブレン、おい！」

突如ブレンは、円盤の上から、どういう原理かは分からないがまったく力を込めずに浮きあがり、魔法の森の木々よりも高い位置へと上昇した。

魔理沙にはその時、ブレンの身体が結界のようなものに包まれるのが見えたような気がした。

魔法の森の木々の上へと飛び上がったブレンは、周囲にきょろきょろと眼を向ける。

ブレンが何かに衝き動かされ、焦燥しているのが分かった。

一体何を焦っているのか判然としないが、とにかく魔理沙は、ブレンに対して呼びかける。

「どうしたブレンっ？落ちつけよ。怖がっちゃ駄目だぜ。こういうときにこそ、あたしに頼るんだ」

その声を聞いてようやく、ブレンの抱いていた不安や焦燥も和らいできた。

しかし、尚もブレンは、ブルブルと呻きながら、辺りを見回している。何かを探しているのか？

魔理沙は改めて、ブレンに聞く。

「何かいるのか？・・・怖い奴なんだな。敵か？・・・分からない？・・・だが戦わなきゃいけないって・・・・・・どういうことだ？・・・・・・まぁ、いいぜ、あたしぐらいの力なら、貸してやる」

ブレンは、自分自身にさえ、何故自分が焦っているのか分からなかった。

とにかく、何か恐ろしい者がいて、それと戦わなければいけないということだった。理由が分からないのに戦うというのも変な話ではあるが、まぁ世の中そういうこともあるだろう。

魔理沙は、これから始まるらしい戦いに恐怖しているブレンに、覚悟を分け与える心を決めた。

その時だった。

魔法の森の一角から突如、青々とした葉っぱを巻き上げながら、ひとつの大きな影が飛び出してきた。

ブレンの意識が、その影の方に集中する。そして、魔理沙もそれに続いて、その影を視界に捉える。

「あいつかっ？」

木々の間から飛び出し、ブレンの前方に静止したその影。

それは、ブレンとかなり似通った姿をしていた。

金属質で、鎧を思わせるようなフォルムもそうであるし、十ｍほどの全高にしてもそうだ。頭部の形などに違いはあるため、まったく同じものではないことは分かったし、身体の色も白っぽいが・・・一見するだけでは、魔理沙にはあれが、ブレンが敵と同じように認識するような存在だとは思えなかった。

しかし、ブレンは確かにあの敵らしきものを警戒している。

それ以上に、なにより・・・

眼の前の白い巨人は、その右手に持っていた筒状の物体をこちらに向けた。
それを見て、ブレンの警戒心が一気に跳ね上がる。
それは、魔理沙も同じだった。
あの敵が持っている物体は、ブレンが持っているものと同じようなものだろう。
そして彼女はそれを、兵隊が持つ銃と同類の・・・すなわち武器だと認識していた。それが、自分達の方に向けられているのだから。

魔理沙が、
「や、やっぱり敵かぁっ？」と呻くと同時に、敵が構えた銃の先端部から、鋭い光の矢が放たれた。
ブレンを生み出した円盤が放出していた光と似たような光だ。
だがそれは、その時に見た光よりも、ずっと恐ろしいものに見えた。
咄嗟にその場から回避しようとする魔理沙だったが、実際に行動するのはブレンである。
魔理沙の思考をブレンは読み取り、そこから行動できるようだが、その思考に対し、ブレンの動きが間に合わなかった。
例え魔理沙であっても、考えるだけで身体は追いつかなかっただろう。
ブレンの胸のあたりに、鋭い光の矢が直撃する。

「うっ！」
思わず呻く魔理沙。
しかし、光の矢はブレンの胸を直接貫きはしなかった。
装甲の直前で見えない力の干渉を受け、光の矢は寸前でかき消された。
魔理沙には、ブレンの周囲に、再び結界のようなものが出現するのが見えた。

それが、あの白い巨人の放った光を打ち消したのだ。

これでもう、疑うことはない。
理由はどうあれ、あの白い奴は敵だ。
魔理沙がそう認識すると同時に、ブレンもまた、自分の中にあった焦燥を、全て闘争心へと変えようとした。
そうして、自分の握っていた光の銃の銃口を敵に向け、反撃を図る。
が、それを魔理沙が制止した。
「待てブレン！飛べっ！」
咄嗟にその指示に従い、その場からさらに高度を上げ、魔法の森から上空へと飛び上がるブレン。
白い装甲の敵が、その後を追跡しつつ、光の矢をさらに数発連射してくる。
しかし、一度はっきりとした敵の姿が見えてしまえば、魔理沙もブレンも、冷静でいられた。
立て続けに迫る光の矢も、今度は紙一重のところで回避できる。

魔理沙がブレンに飛べと言ったのは、すぐ足元に魔法の森があったからであった。
あの敵が放つ（恐らくブレンも同じものを撃てるのであろう）光は、かなり強力な物理的破壊力を持つものだろう。
もしあのまま戦っていれば、魔法の森に大きな被害が出ていたかもしれない。森に住む妖精達を危険にさらすことになっていただろう。
だからまずは、被害を最小限に抑えるべく、上空に退避してから戦うことにしたのだ。
魔理沙のこの考えを、ブレンは瞬時に読み取ってくれていた。

やはりこのブレン。真面目だし律儀だし、人の言う事をよく聞ける良い奴だ。
魔理沙は改めてそう認識した。

ある程度高度を上げ、広大であるはずの魔法の森の全体像さえも見えてくるほどまで上昇したところで、魔理沙は叫ぶ。

「よしっ、こっちからも攻めるぞ！」

その声と共に、ブレンが立て続けに放たれた敵の光線を回避すると同時に、その場で急停止をかけつつ、さながらバック宙のように縦に反回転し頭を地面に向けながら、背後から迫る敵の方へと向いた。すかさず右手に持った銃、《ブレンバー》の銃口を敵に向け、一射する。

こちらの突然の反撃に意表を突かれたのか、敵は咄嗟に回避しようとするが、間に合わない。

ブレンバーより放たれた光の矢が装甲に直撃する。

と、思われたが、敵もこちらと同様、何らかの結界を展開しているらしく、先ほどこちらがそうしたように、光を打ち消してしまった。が、そんなことは分かっている。

魔理沙は、敵がこちらの反撃にむざむざ当たる辺り、大した実力ではないと判断しつつ、ブレンに立て続けに攻撃するよう命じた。

ブレンはその指示を即座に実行する。魔理沙が考え、ブレンが直感に従いそれを行う、というシステムが構築されていた。

ブレンは、返す刀で敵に対し接近を仕掛けつつ、ブレンバーを連射する。

数条の光の矢が敵に迫るが、今度ばかりは向こうも甘んじて受けるつもりはないようだ。

冷静にそれらを回避する。

だが、実際のところ、それは回避するというよりかは、ただ回避させられているだけだった。

魔理沙が回避するように意図して、ブレンバーを撃たせたのだ。

彼女はつくづく、この敵が甘いことを確信できた。

この程度の誘いこみ、幻想郷の妖怪達ならば、容易に看破できていただろう。

白い装甲の敵が、光の矢の応酬を無事に切り抜け、すかさず反撃すべく銃口を前方に向ける。

しかしすでにその時には、ブレンの姿はその視界からは消え去っていた。

白い巨人が、突然消滅した敵の気配に怯んだその瞬間、その足元から急接近したブレンが、下からすくい上げるようにブレンバーを振り上げる。

そして、斬ってくれと言わんばかりに真っ直ぐに伸ばされていた敵の右腕に、ブレンバーの、銃身と兼ねる鋭い切り口に纏われた光が食い込み、千切るように切断する。

そうして、続けざまに左手のひらを広げると、ひるむ敵の股間にある薄い装甲を掴んだ。

魔理沙が叫ぶ。

「誰だか知らないが、懲らしめてやるっ！」

その声と同時に、ブレンが勢いよく左腕を引くと、敵の装甲が呆気なく引きちぎられた。

魔理沙はこのまま、自分と同じく、この敵の胎内に入っているであろう何者か。こちらに喧嘩を吹っ掛け、ブレンを怯えさせた何者かを引きずり出してやろうと考えた。

が、しかし。

「んっ？」

立て続けのダメージにひるみ、一瞬動きの止まった敵機の股間に穿

たれた穴の奥を見ることは十分可能だった。
だが魔理沙はそこに、何者の姿をも見出すことができなかった。
確かに、はっきりと中の様子は見た。
だが、誰も乗っているようには見えなかった。
間違いない。この敵は無人で・・・ひとりで動いていた。
となれば、こちらに攻撃を仕掛けてきたのも、この敵自らの意志によるもの・・・というのか？
もしこいつに何者かが乗っているとしたなら、ただその者に操られていただけとも考えられるが・・・
そうではない。
この、ブレンそっくりの白い生物は、自らこちらを敵か何かと認識し、襲ってきたのだ。
となれば、やることは決定してしまった。

敵の胎内が無人であることを確認する時間は、魔理沙とブレンにもまた僅かな隙を生じさせる。
右腕が切断されたダメージから持ち直した敵は、残る左腕のスリットから、薄い光の刃を発振させ、それでブレンを切りつけてきた。
だが、この動きも魔理沙には予想できていたし、対処するつもりではいた。咄嗟に敵の動きを見切り、左側面へと回りこむブレンパワード。
すなわち、敵から見て右側面は、腕が斬り飛ばされたこともあり、胴体がガラ空きになっていた。
そこに一撃を加えれば、それで終わりだ。

「いけぇーーっ！」
魔理沙の喚声と共に、ブレンが、再びブレンバーを横なぎに振り抜く。
金属同士がぶつかるような鋭い音が響いたと思うと、その次の瞬間には、ブレンバーを包む光と熱が、白い装甲を両断し、敵の上半身

と下半身を二つに両断した。
その勢いのまま前方へと流れ、真っ二つにされた敵に背中を向けるブレン。
だが、その隙を突くようなことなど、敵にはできるわけがなかった。
一瞬の交錯の後、魔理沙は背後で何かが破裂し砕けるような、爆発を聞いた。
急ぎ背後を振り返るブレン、そして魔理沙の視界には、先ほど両断した敵がいた位置に広がる、白い爆煙が映った。
丁度、両断された上半身と下半身、二つの爆発が発生している。
それにより膨張した煙は、爆煙というよりかは、石灰を思いっきり砕いた時の埃のようにも見えた。

終わってみれば呆気ないものだ。
魔理沙とブレンは、無事敵に打ち勝った。
そして、煙が拡散したその後には、何も残っていない。
あの白い姿の、ブレンとそっくりだった敵は、跡形もなく吹き飛んで、死に絶えてしまった。
その認識が後になって現れ、魔理沙は、自分とブレンのやった行いを思い直した。

戦いの余韻に浸るように、その場で浮遊するブレンの中で、魔理沙は呟いた。
「とんでもないことをしてしまったなぁブレン・・・なぁ、あいつは一体何者だったんだ?・・・・・分からないって。あいつをやっつけちゃったけど、それでよかったのか?・・・・・それも分からないのかよ・・・」
別に魔理沙は、虫も殺さないような非暴力主義者ではないし、殺さなければどうしようもないという状況なら友人だって殺せると自負

しているため、あの白い敵を殺したことそのものには、不快感は感じなかった。だが、訳も分からないまま攻撃され、結果的に相手を殺すというのは、悪くなくとも、いい気分にはならない。
そうして魔理沙は、先ほどまでは愛着さえ感じていたこのブレンパワードのことを、ほんの少しだけ、理解しがたい恐ろしいものだと感じてしまった。
だが、その考えはすぐに捨て去った。

ブレンも、恐れていたからだ。
向こうから仕掛けてきたのだから、仕方ないことだと正当化しながらも、生まれてすぐに何かを殺してしまったという行為を、とても恐ろしいものだと分かっていたからだ。
そのことは、魔理沙の心からブレンに対する不安を消した。
同時に、彼ら、ブレンパワードの事を、よりよく理解する必要が出てきたとも感じた。
片足を突っ込むなどというものではない。
ここまでくれば、状況の一部となって、とことんまで付き合ってやる。

神妙な顔つきをしていた魔理沙は、半分諦めたように、穏やかな笑みを浮かべながら、ブレンに呼びかけた。
「・・・まぁ、過ぎたもんはしょうがないぜ・・・・・・よくやった。よくやったブレン。あたしの家に戻ろうぜ」
その言葉に、胎内の壁面を伝って感じられていたブレンの不安がみるみる和らいでいくのが感じられた。
事態の一部となることを決意しつつ魔理沙は、このブレンの純粋さには、こちらも素直に応えていかないといけないな、と感じた。
とにかく今日のところは一度、魔理沙の家のすぐ傍でブレンを休ませて、また明日からいろいろと考えることにした。

そして、翌日の早朝。

一度家の中へと戻っていった魔理沙だが、ブレンが呼んでいるような気がしたので、またしてもその胎内へと戻り、結局そこで一夜を明かしてしまった。

しかし、ブレンの胎内は非常に温かく、布団に包まって寝るよりもずっと気持ちがよかった。

普段以上に快眠できたためか、彼女はいつもよりも少し早く起きることができた。

すでに金属とは異なる材質であることを身にしみて実感した胎内の壁面にもたれかかった身体を起きあがらせ、共に目覚めたブレンに呼びかける。

「・・・一晩一緒にいると、あんたのことが好きになってきたぜ、ブレン・・・・・・ちょっと外の空気でも吸うか～」

そうして、ブレンに装甲を開けさせ、穴を潜って外に抜け出る。

開いた装甲がちょうど足場になっており、そこに足を踏み出し、大きな欠伸をしながら背伸びをした魔理沙は、その時まで、自分の眼の前に、ひとりの天狗がいることに気付かなかった。

射命丸　文だ。

何でこんな時に、こんなところに彼女がいるのかはともかくとして、あまりに突然眼の前に見えたものだから、魔理沙は驚愕して、びくりと身震いまでした。

そうして、文もまた、びっくりした様子で眼を白黒させながら魔理沙の顔を見つめていた。また、魔理沙の方へ向けていた目線を、少

し上の方に移し、また魔理沙の方を見るというのを繰り返す。
ブレンを見ているのだ。
彼女も、その姿に驚いているようである。

だが、こちらを指差しながら言ってきた彼女の言葉は、文の驚愕の意味が、魔理沙が認識するものとは違うことを示していた。
「あ・・・貴方のところにも、ブレンがいたんですね・・・」

その言葉を聞いた途端、魔理沙は、自分の心臓がどくんと脈打つ気がした。
そして、はっとした顔つきで、文に聞き返す。
「知ってるのか?ブレンのこと・・・」
「えぇ、知ってますよぉ・・・」
「ど、どこかにいたのか?こいつと同じ、ブレンパワードが・・・」
「えぇ、いました」
「どこだっ?」
「地底です」
「・・・・・・」

魔理沙は思い知った。
自分が一部となろうとしている状況は、思っていたよりもずっと大きなものになりそうだということを。

彼女は、何かにとり憑かれたかのように、文から目線を外して、その代わり、自分の前に現れた奇妙な存在、ブレンパワードの顔と思わしき部分を見上げながら、うわ言のように呟いた。
「多分これから、もっと増えるぞ・・・ブレン、お前の友達だ・・・それに、昨日やっつけたあいつみたいのも、たくさん現れるんじゃないか・・・?」

彼女の言う通りだった。
状況はすでに、彼女達が考えているよりも大きく、しかしながら、
静かに進行し始めていた。

※

魔理沙がブレンと出会ったのと、同じころにまで遡る。

妖怪の山の麓の大きな湖。
その奥にある小島に建つ、極彩色の異様な外観を持つ屋敷、紅魔館。
そこで働く何十人かのメイドの長である十六夜　咲夜は、館の門番をしている妖怪の紅　美鈴に、廊下で呼びとめられた。
いつもなにかにつけてあたふたする美鈴だったが、今回の彼女の慌てぶりは異常とも言えた。

「大変ですっ！！た・・・大変なんですよぅ～っ！」
「・・・どうしたの」
「・・・す、すごい。すごいものが、来て・・・か、壁を・・・壁を吹っ飛ばしたんですっ！」
「ちゃんと説明しなさい」
「き、来てください！とにかく、一緒に来れば分かりますっ！」
そのまま、美鈴が咲夜の腕を引っ張って、館の外へと連れ出そうと

する。
他にもやる仕事があるというのに、ほとほとうんざりする咲夜であったが、今回の美鈴の様子は、今までにないものだった。
状況の把握ぐらいはしておいた方がいいかもしれない。
今の美鈴は混乱しきっている様子で、彼女の説明を聞くだけでは、とても状況の把握はできない。
なので、面倒ではあるが、彼女の成すがままにさせて、美鈴を驚愕せしめたその現場に向かうことにした。

そして、館の外まで連れられ、広大な庭を先に進み、紅魔館の敷地の外を隔てる門の近くにまで来た。そうして、そこに広がっている光景を垣間見た咲夜は、確かに、美鈴が慌てるのも当然だと納得できた。

館の壁に、全高十mはありそうな、紅い色の巨人が倒れ込み、煉瓦を散乱させていたのである。
これには咲夜も、呆然とした。

美鈴が何やら喚いていたが、その声は聞かなかった。

とにかく、まずは紅魔館の主にこのことを伝え、メイド達にも伝達しておかなければ・・・
そう考える中で、咲夜は、紅い煉瓦の壁を崩して倒れるその巨人が、こちらを見ているように感じた。

第三話『慮る妖怪達』

驚愕から我に返ることができた文は、地底のブレンパワードと、オルファンなる存在についての話をした。

先日、はたてと共に硫黄泉地帯に佇むオルファンの姿を見、地底への取材を決心した彼女は、やがて、地霊殿の庭先に鎮座するブレンの下へと辿り着いていた。
魔理沙のブレンと姿形はほぼ同じだが、色彩が薄い紫色であるという違いのあるそのブレンは、さとりの所有物・・・いや、彼女曰く友人であった。
文とはたてはさとりに対しいろいろと、根掘り葉掘り話を聞いたが、彼女もまた、多くの事は知らないらしい。
ブレンやオルファンという名と、ブレンがオルファンの生み出した一種の抗体、《アンチボディ》であること。そして、ブレンとオルファンは、ビープレートという名の何かを求めているらしいということを知るだけだった。

そんな話を聞けば、魔理沙としては、地底に赴こうと思わずにはいられなかった。
彼女は朝早くからブレンと共に、もう一体のブレンがいる地底へと行くべく、魔法の森から飛び立った。
文の方は、今回もブレンやオルファンについて取材をするべく、先んじて地底へと向かった。

ブレンの胎内に座り、ブレンと共に幻想郷の空を飛行する魔理沙。
ブレンの移動する速度はそれほど速くないように見えたが、身体の大きさが人間などよりずっと大きいためか、実際は、見た目よりかは速く移動していた。
魔理沙が、
「さっきの天狗は、地底っていう場所にアポ・・・え～、アポ・・・アポストロフィ～・・・じゃなくて、アポ、イ・・・そう、アポイントメントにいったぜ。しばらくしたらまた会える。お前の仲間と一緒にな」などと言っている内に、段々と地底に繋がる硫黄泉地帯が見えてきた。

いや、正しくは、そこに佇む『そのもの』の姿がだ。

未だ日が昇って間もない、朝露がかかった地平線の向こうから覗くその影は、一目では山と見間違えるほどに巨大であった。
が、この近くには山など存在しないことは魔理沙には分かっている。
となれば、あれこそが文の言っていた・・・

魔理沙が、たまげた、と言った具合の表情を浮かべる。ブレンもまた驚いているようだったが、ブレンの場合は、驚き以上に、もっと別の感情があるように感じられた。

「あれがオルファンっていう奴かぁ～・・・」
そんな魔理沙の声と同時に、ブレンが、急かされるように速度を上げ、未だ遠くに見えるオルファンの方へと飛んでいく。

それは突然のことだったが、しかし魔理沙には、ブレンが急く理由は分かっていた。

朝霧の中に隠れていたその影は、近づくにつれてさらに大きくなっていき、やがて、灰色の靄（もや）の向こうから、その金色の姿を、眼の前にまではっきりと現した。

その姿に、魔理沙の中の感慨はより大きくなる。

ブレンは実際のところ、それよりもわずかに高い位置から、オルファンを見下ろすような形になっていたわけだが、それでもその金色の肉体（と、呼べるであろうもの）の大きさは実感できた。

大地が、どこまでも下に見えていたからだ。そしてその逆に、空にかかる雲が、本当に手に取ることができそうなほどに近くに見えた。

「・・・すごいっ」

率直に感嘆を漏らしつつ、魔理沙は、ブレンに対しても呼びかけていた。

「・・・分かるんだな？あんたはここから生まれたってことらしいんだ。昨日みたいに、円盤になってな・・・・・・そうか、思い出せたみたいで、よかったぜ」

オルファンは、ブレンにとっての母であり、故郷であるようだ。

具体的にオルファンとブレンがどういう関係なのかは、当のブレンにも分からなかったようだが、とにかくブレンは、このオルファンの姿を実際に目の当たりにすることができて、とても喜んでいたし、安心もしていた。

その心は、母に再会したことと、故郷へと帰ってきたことが同時に起きたような感覚であった。

そうして、そんな気分のブレンの胎内に包まれていれば、魔理沙も、自分の気持ちが落ち着くような気がした。

が、そんな中で、魔理沙はふと考える。

――――・・・確か、さとりが出逢ったっていうブレンも、円盤の姿をしていたそうだし、オルファンから生み出されたものだ・・・こいつと同じだ・・・・・・もしかして、ブレンはもっとたくさんいるんじゃないか？この幻想郷のどこかに・・・・・・それに、昨日のあの白い奴だ・・・あいつは結局なんだったんだぜ。あれも、オルファンから生み出されたものなのか？――――

深い思考が脳裏を錯綜しそうになるが、結局のところ、疑問の答えは今のところは分からない。

ブレン達も、多くのことを理解できているわけではなさそうだし、彼らにこれ以上の仲間がいるのか。それも、後々になれば分かるであろうことだった。

そうして次に魔理沙は、あることに気がついた。こちらもようやくオルファンのすぐ近くに来ることができたらしい。

となれば、この近辺はすでに硫黄泉地帯の中に入っているはずだ。

だが、その割には何か違和感があった。

試しに魔理沙は、ブレンにこう促す。

「ちょっと降りてみてくれ、あっちの方に行ってくれ」

ブレンはその指示に従い、母であり故郷であるものへの感慨はひとまず置いておき、高度を下げつつ、魔理沙の指示した方向へと移動していく。硫黄泉地帯のさらに奥の方だ。

そうして、はっきりとした姿も見せなかった大地が、段々と眼に見えるほどに近づいてきたところで、魔理沙の中の違和感の正体がは

っきりとしてきた。

「何か変だ」彼女は思わず呟く。

そうして、『何が変なのだ』と聞いてくるブレンに対し、こう続けた。

「この辺りは、間欠泉と身体に悪い瘴気があふれ出てる硫黄泉だったはずだ・・・もっとこう、空気が黄色っぽくて、妙な臭いもするし、熱っぽいんだ・・・・・だけどブレン、あんたなら分かると思うが・・・ここは、そうじゃないだろう？」

魔理沙とブレンの視界に広がる光景は、硫黄泉と称されるもののそれではなかった。

地面から噴き出すはずの高温の地下水はまったく見えず、それと一緒に噴き出てくる有毒ガスも、ほとんどないように見えた。地熱により、ちょうど人間が浸かれる程度の温度であるはずの硫黄泉は、湯気のひとつも立ち昇らせていないし、そもそも硫黄を含有しているようには見えない、澄んだ色になっていた。

温度も低いようだし、これではただの泉か池だ。

これは明らかにおかしかった。

人間なら誰も近寄ろうとはしないこの界隈にも、魔理沙は何度か足を踏み入れたことがあるから、この違いはよく目立った。

完全に地質が変わってしまっている。

一体なぜこんなことに・・・

この状況の原因として、魔理沙の脳裏に最初に浮かぶものは、オルファン以外にはなかった。彼女は思わず背後を振り向き、ブレンが高度を下げたことにより、より一層その巨大さが際立って見えるオルファンに眼を向けた。

「・・・・・・」

はっきりとは言えないが、何か変な気分になってきた魔理沙は、そこでようやく、ここに来たもう一つの目的のことを思い出した。
この先の、ぽっかりと空いた巨大な風穴を抜けた奥、地底の屋敷にいるという、もう一体のブレンパワードを見ることだ。
ひとまず今は、その目的を達成しておいた方が良いだろう。

「とにかく、いくか」
魔理沙がそう伝えると同時に、ブレンはさらに前へと進んでいく。

地底への抜け穴が近づいてくるにつれ、硫黄泉は、段々とその本来の姿を取り戻し、ようやく辺りにも、多少なりとも熱気が立ち込めてくるが、それも本来の調子に比べればずっと弱く、なおさらこの状況のおかしさを際立たせるだけだった。

とりあえず、抜け穴がはっきりと見える位置にまで近づいてきた。
そこで魔理沙は、抜け穴の入口のところであぐらをかいて座る、ひとつの人影を見つけた。
「ん？・・・あれは確か・・・」

魔理沙は、その人影に見覚えがあった。
あれは確か、そう。
鬼の星熊　勇儀だ。
初めて魔理沙が旧都に来た時は、非常に身軽そうな（上半身だけだが）服装をしていたが、今は、あれが普段着なのか、青い着物に身を包んでいた。肩のあたりまで襟がはだけてしまっていた。
ブレンが抜け穴の方に近づいていくと共に、彼女の姿も段々と近づいてきて、こちらの方を向いているのがよく分かった。
その場ですくっと立ち上がった彼女の顔は、大分不機嫌そうにして

いた。
が、それも少しの間のことで、すぐに、なんともないといった感じの表情に変わっていた。
もっとも、機嫌が良さそうにはとても見えない。

抜け穴のすぐ傍にまで近づき、生ぬるい熱を放つ大地に降り立つブレン。
同時に魔理沙は、胎内を覆う装甲板を開けさせ、この場と外界を隔てる穴から身を乗り出した。
そうして、ブレンの足元に立つ勇儀の方を見ながら、大声で言った。
「あんた、星熊なんたらって鬼だろうっ？どうしたんだぜー？」

それに勇儀が、魔理沙が及びにつかないような大声で返してくる。
「勇儀だー！降りて話をしろー！」
それに対し、また魔理沙が返事しつつ、ブレンに対しても呼びかける。
「降りるぐらいなら、こっちの方に乗ってもらうぜーっ。なぁブレン、いいよな？乗せてやってくれ」

魔理沙の言葉を聞くブレンは、初対面である勇儀のことを少しだけ怖がっていたようだが（鬼の放つ気を感じ取ったのだろう）彼女の言う通りにする。
やはり、少しだけムスっとしている様子の勇儀の前に膝を立ててしゃがみこみ、左腕を彼女の方に差し出した。

ちなみにだが、昨日あの白い敵と戦っていたときに使ったブレンバーは、右前腕部の装甲に、後ろ向きで引っ掛けている。

これに乗れと、自分の方に差し出された巨大な手のひらを見て、勇儀は一瞬、一層ムっとした顔を浮かべたが、すぐに元に戻り、しず

しずとその上に足を乗せた。
彼女が乗ったのを確認して、ブレンは、左手のひらを魔理沙が乗る股間部の装甲の方へと持っていく。
そうしている内に立ち上がって、魔理沙の指示を受ける前に、旧都へと向かうべく、ほんの僅かに身体を浮かせ、抜け穴の中へと入っていった。

ブレンの手のひらに乗ってすぐ傍まで来た勇儀に、魔理沙が言う。
「どうしたんだぜ。何怒ってるんだ?」
それを聞いた勇儀は、いきなり肩を揺らして苦々しげに声を上げて笑った。
「あは、はっはっはっはっ。いや、顔に出るもんだなぁ・・・だが、怒ってたわけじゃない」
鬼というのは、非常に正直な妖怪で、その分、気分というのが顔に出やすいらしい。
が、魔理沙の冷やかしを聞いて、勇儀はすっかり強張った顔を解きほぐすことができた。

そうして、もう一度「どうしたんだ?」と聞く魔理沙にこう応えた。
「外の様子は見たね・・・変なことになってるのは、あっちだけじゃないんだ。それを感じてくれれば、私があんな顔してた理由も、分かるさね」
「・・・?」

どういうことだ?と、聞き返そうと考えたその時、魔理沙の身体を肌寒い空気が通り抜けて、彼女は、勇儀の言葉の意味が分かった気がした。
「なんだか、肌寒いな」
思わずそう呟く。
そしてこの肌寒さは、地上の、硫黄泉でなくなった硫黄泉同様、少

しおかしなものだった。

地底というのは、その地熱により、年中温かかったはずだ。
とてもではないが、肌寒さなど感じるわけがないのだ。

気がつけば魔理沙は、両腕を抱えて擦っていたらしく、その様子を見た勇儀が辟易した様子で、ちょうど傍にあったブレンの中指に肘をかけて、言った。
「まぁ、そういうことなんで、旧都の妖怪も風邪をひきそうで困ってるのさ・・・まぁ、妖怪が風邪なんざひくわけがないけどねぇ」

「・・・そういうわけか・・・」
勇儀が言いたかったことがよく理解でき、少しうつむき気味になって呟く魔理沙。
それに対し、勇儀が続けて言う。
「これもみんな、『あれ』が原因なんだろうかね」
「『あれ』・・・オルファンか・・・・・・ん・・・そうなんだろうなぁ」
今の魔理沙には、地上の変貌と、地底のこの肌寒さの原因がオルファンにあることを否めなかった。
これは異変だ。そしてこの異変は、オルファンが引き起こしている、のであろう。
そうしてそのオルファンから生み出されたのが・・・

魔理沙は思わず、今朝と同じようにブレンの方を振り返って、その顔を見上げていた。
あの白い敵を殺した時に感じた、ブレンに対する言い様のない感覚をもう一度感じられ、彼女の横顔には、僅かに不安の色が浮かんだ。

それを見て勇儀が、へらへら笑いながら言う。
「なんか勘違いしてるのかもしれんが、私は別にあのオルファンやそいつを悪い奴だと言ってるんじゃない。ま、今のところだけどね・・・さとりちゃんの方を見てるからな。よく分かる。ブレンパワードっていうのは、悪い子じゃぁないんだろう？」
その声にはっとした魔理沙は、再び勇儀の方を振り向いて、しばらく黙りこんだ後、何故か照れくさくなって、帽子の奥の頭を掻きながら、
「へ、へへへ・・・まぁ、そうだな。悪い子じゃないぜ」と応えていた。
「とはいえ。そのブレンと会うために、さとりちゃんらは地上に出てしまったし、旧都が未だかつてない冬になっちまったわけだから、いい事ではないんだろうけどねぇ・・・」

そんなことを話していると、魔理沙と勇儀を乗せたブレンは、抜け穴を通って、旧都の上空へと出ていた。
その姿は、ブレンにとっては初めて見るものであり、驚くべきものであったようだ。

そもそも、改めて考えてみれば、ブレンはまだ生まれたばかりのはずだ。
見るものの全てを、驚愕と感動をもって迎えても、何も変ではない。
魔理沙は、こうしたブレンの様子を感じれば、僅かに感じる恐れよりも、好意の方をより強く抱くことができた。

さて、そんなブレンが、この旧都の上空を、『寒いところだ』という。

その通りで、本来なら熱気すら感じられる旧都の上空は、抜け穴を通っていた時よりかはましだが、肌寒いと感じるほどになっていた。
旧都は、地下であるというのに、時折雪が降る時がある。
その理由を知る者はほとんどおらず、幻想郷に古くから生き、地底の最古参である勇儀であっても、詳しくは知らないそうだ。
それはともかくとして、普段の地底に来ると、暖かい中に雪が降るという不条理さに戸惑うのだが、今回ばかりは、雪が降っていることに違和感を感じることはなかった。

旧都に到着したのなら、このまま、さとりが出逢ったもう一体のブレンに会いにいくことにする。

装甲の上に立ったまま魔理沙が、ブレンに対し指示する。
「あっちに行ってくれ。もうすぐ友達に会えるぜ」
それに従って、ブレンが魔理沙の指示した方向、地霊殿の方へと進む。

そんな様子を見て、勇儀が面白そうに言ってくる。
「言うことよく聞いてくれてるじゃないのさ。早速飼い慣らしたのかい？」
「飼い慣らすって・・・そういうんじゃないぜ。こいつ自身がよくできた奴なだけさ・・・・・下手に怒られたら、あたしなんて簡単に潰されるんだから、怖いぜ」
かく言いつつも、全く怖がっていない様子の魔理沙を見て、ますます面白がって笑う勇儀。

「はっはっは！でも、実際こいつって、相当な力を持ってそうだよなぁ・・・さとりちゃんのブレンにしてもそうだが、なんでこいつらはわざわざ他の奴を身体ん中に入れるんだろうな。そうしなきゃ生きていけないとまでいうじゃないか」

「ん。そうだぜ・・・確かに、不思議な話だ・・・・・なぁっ。不思議だなぁブレンっ・・・あはは、当のブレンも不思議がってるぜ」
「はっはは」

いろいろと話をしている内に、地霊殿が近くに見えてきた。
そして、ブレンが何かを感じたらしい。
おそらく、さとりのブレンのことを感じたのだろう。

地霊殿というのは、その広さの割には、住んでいる者の数はほんの僅かである。住んでいる動物、と言えばむしろ多いほどなのだが。そういうこともある上に、屋敷の主が、手放しに無害だと言える者ではないため、決して悪趣味ではない外装からは、どことなく不気味な印象を受ける。
地霊殿にしろ紅魔館にしろ、幻想郷の大所帯にはろくな場所がないな。などと思い直す魔理沙は、そんな地霊殿の玄関の前に立ってこちらに手を降る文の姿を見た。
勇儀が、思い出したように言う。
「そういやぁ。あんたの前にあの天狗が来てたっけな・・・あいつも、こっちのブレンのことを知ってる・・・今回来たのは、あんたを招くためだったのか」

ブレンがさらに地霊殿に近づく。
妖怪同様、飛行能力をもつブレンならば、背の高い地霊殿の屋根を飛び越えることは容易い。
アポを終えて魔理沙達が来るのを待っていたらしく、文もまたこち

らの方へと飛んできて、ブレンの手のひらの上、勇儀の隣に降り立った。

魔理沙と一瞬に勇儀がいるのは意外だったらしく、無駄に恭しい態度になって、彼女に挨拶していた。

「あやや～。どうも勇儀さん、幾ばくかぶりで～」

天狗は昔から鬼との関わりも強く、殊更強大な力を有する鬼に対する恐れは大きかったが、付き合い方次第では鬼ほどいいコネクションになる存在もいないというのも分かっているのだ。

勇儀が返事する。

「ん、今日も取材か・・・確か、もう一匹いなかったか？」

彼女の言葉には、魔理沙の方が、「もう一匹？」と聞き返していた。

しかしすぐに、勇儀の言っているのが誰なのかは分かった。

最近、文と共にそこら中を飛び回っているはたてのことだろう。

魔理沙が自己解決すると共に、文が勇儀の問いに応える。

「中庭にいます。ブレンの様子を観察して、生態系を調査すると言ってましたけど、まぁ～実際できてるかどうか」

「なら、あたしらもそっちにいくかね。よぉ魔理沙」

返す刀で聞いてきた勇儀に、魔理沙は返事する。

「そうしよう。ブレン、行こうぜ」

魔理沙の言葉を待たずして、ブレンは動きだした。

すでに地霊殿の広い屋根がすぐ足元に見えるほど近くまで来ていたので、その屋根の上を通り過ぎれば、眼下の屋根よりもさらに広い中庭はすぐだった。

そうして、魔理沙が初めて見たときよりかは大分落ち着いた、閑静な趣のその中に立つ姿を、見逃しはしなかった。

ブレンパワードだ。
文が言っていた通り、薄い紫色をしていたが、それ以外は魔理沙のブレンと瓜二つの姿だ。
魔理沙のブレン、《マリサブレン》もまた、自分と同じくオルファンから生み出された同胞である者の姿に、感化されているようである。
鋼鉄に近しい肉体が、微かにうち震えていた。
しかしながら、そういう中にも、冷静な感覚が確かに存在するのも、魔理沙には感じられた。

生まれたばかりであっても、ブレンには、己と性質を同じくするものがいるということが、本能的に分かっていたのかもしれない。

魔理沙は、脳裏で呟いた。
――まぁ、生き物なんだから、そういうこともあるな――

マリサブレンが、中庭へと降りていき、《サトリブレン》の傍に降り立つ。
サトリブレンの方も、初めて見る別のブレンの存在を見て、ブルブルと鳴いていた。
その姿勢は、中庭の地面の上に、尻餅をついて座りこむような感じで、大分くつろいでいるように見える。
ブレンが何と言ってるのかは、さすがに魔理沙にも分からなかったが、嫌がっていないことは確かなようだった。

サトリブレンの足元には、はたてがおり、彼女も、眼の前に降り立ったマリサブレンの姿に、
「おぉっ」と喚声を上げていた。

それから少しだけして、座っていたサトリブレンの股間の装甲が開き、その向こうから、あのブレンが生命のために必要とする者であろう、さとりが出てきた。
そうして、魔理沙がそうしているのと同じように、足場代わりの装甲板の上に足を踏み出しつつ、彼女の方を向いて、大声で呼びかけてきた。

「こんにちわ。お話は伺っています。その子が、あなたのブレンパワードなんですね」
「あぁー、そうだぜ」
と、返事する魔理沙。
さとりは彼女の脳裏にある考えを早速読み取り、こう続けた。
「ブレンについて、いろいろと話したいことがお在りでしたら、屋敷の中に入りましょう」
「ブレンはどうするんだぜー？」
「ブレンもまた、ブレン同士で話したいことがあるみたいです。私のブレンは大分寂しがり屋でして、常に私が胎内にいないと、辛そうになるのです」
「それなら、こっちも似たようなもんだな」
「ですが今は、ようやく友達と会えたこともありますし、私がいなくても大丈夫そうなんです・・・ずっとここで話をするのも難ですから、中に行きましょう」
「そうだけど、あたし達がいなくなったら、ブレン達も危ないんじゃないかー？そう聞いたぜ」
「一度胎内に入ったなら、しばらくは離れていても問題はないようです」
このさとりの説明は、魔理沙としては初耳だった。
ブレンは胎内に他の生物を入れておかなければ、何らかの生命にかかわる危機に直結するということは知っているが・・・
魔理沙は頭上を見上げ、己のブレンに問うていた。

「そうなのか？おい、ブレン・・・・・・なんだ、そーなのかー。ちゃんと説明してほしいぜ」
どうやら本当にそうらしく、ブレンは、別に常に胎内に生物を納めておく必要はなかったようだ。
それに、改めてブレンの言葉を聞いてみると・・・

「・・・なるほどな。さとりの言う通りみたいだぜ。ブレンはブレンで、話したいことがあるんだな・・・なら、お互いに、お互いの話を済ませるとするぜ」
そう言って魔理沙は、装甲板からすぐ傍の、勇儀と文が乗っている手のひらへと飛び移った。
そうして、マリサブレンがしゃがみこみ手のひらを地面に近づけるので、そこから魔理沙達三人は、地霊殿の庭へと降りる。
さとりもまた、装甲板から地面に降り、魔理沙達の方へ歩み寄ってくる。

そうして彼女の、「それでは、ご案内します」という言葉には、「ん」と返しつつ、彼女の案内の下（今更必要ではないのだが）、屋敷の中へと移動していく。

と、そうしようとしたその前に、サトリブレンの足元にいたはたての方も歩み寄ってきて、
「私も同行させてくださいよ～」と言ってきた。
それに続いて文が、
「じゃ、今度は私の方がブレンを観察させていただきましょうかね・・・後で互いの情報を交換するわよ」と言う。
「分かったわ・・・あんただけ情報を独占するんじゃないわよ」
「他人に注意するなら、まず自分でそれをしないようにせねばね」
「よく言うよ。そうやって悪事の責任逃れをするあたり、駄目だねぇ」

相変わらず、趣味でやってるのかと思えるような言い合いを始めてしまった二人に対し、勇儀が一喝する。
「喧嘩するなら、ほたてとやら、ここに残れっ」
ぴしゃりと言い放った勇儀の言葉に二人ともびくりとして、はたてが慌てた様子で取り繕う。
「あぁ～いえいえっ。今終わりましたから、ご同行させて頂きますぅ～・・・後、ほたてじゃなくてはたてですぅ～・・・まぁ、ホタテじゃないけど、股の付け根にアワビならありますね」
「ぶっ！」
はたての冗談に噴き出した勇儀の姿を見て一同、『鬼ってこういうの好きだよなぁ・・・』などと思いつつ、改めてさとりの案内の下、地霊殿の中へと入っていく。
さとりだけは、どうして鬼がこんな意味も分からない冗談が好きなのかが分からなかった。

そのまま、屋敷の中の客間へと案内された。
相変わらず、住む妖怪の少なさの割には広すぎる客間であったが、その分、魔理沙達を含めて話をするには十二分であった。
椅子も充分に数があるし、大きな机に一同で面と向かい合って座ることもできた。

そうして早速、魔理沙の考えを読んださとりが、開口一番に言う。
「私とブレンの出逢いはですね・・・」

それからさとりは、自分とブレンが出逢った経緯を詳しく語り、ま

た、ブレンから伝えられた彼らの性質についても話した。
とはいえ、それほど多くのことを分かっているわけではない。
これまでのことで魔理沙が知ってきたのと同じようなことしか、さとりにもまた分からなかったようだ。大体予想はできていた。

ブレンは、オルファンが生み出した抗体（アンチボディ）であり、ビープレートを得るために存在している。
そうして、何故かは分からないが、胎内に別の生物を入れておく必要がある。
また、自分達が求めるビープレートが何なのかは、ブレンにも分かっていない。
後は、ほとんど分からないことばかりだ。
ブレンの肉体は、鉱物と生物の中間のような位置にあるようだが、具体的にどういう性質なのかという、生物学的な部分のことは、到底分かることができない。
さとりはそういう専門的なことはなにも分からないし、いかな勉強家である魔理沙でも、そうそうすぐに、ブレンの生態を究明できるわけがなかった。

と、ここではたてが話に加わってくる。

なんでも彼女と文は、先日オルファンの発見と共に知ったブレンの存在を、妖怪の山の天狗の長に報告したという。
その長は文達に、オルファンとブレンパワードに関する調査を正式な任務として命じたそうだ。
必要であれば、調査のために河童やらの専門知識を持つ妖怪を使ってもいいとも言われていた。
これ幸いと、昨日の晩の内に彼女らは、河童に対し協力を要請しており、今、山に住む河童の一部はオルファンの調査のために準備を進めており、近々この近くにまでやってくるそうだ。

それだけではない。
河童の専門はあくまでも機械的、あるいは地質的、物理的、科学的なものだが、オルファンやブレンは生物的な側面も持ち、そのような面での知識も必要であった。
さらにいえば、鉱物と生物、有機と無機が複雑に混合しているらしいことを考えると、化学的な知識も要るだろう。
そのようなことを考え、すでに文達は、河童以外にもそういう生身の面の専門知識を持つ者に対しても協力を呼び掛けて、それを了承されており、河童同様、現在調査の準備を進めてもらっているという。

生物と化学の知識を持つ・・・
そういう医者のような知識を持つ者は、魔理沙の頭の中では一人しか思いつかなかった。

そういう話を聞いた上で、魔理沙もまた、自分とブレンが遭遇し戦った、白いアンチボディについて語った。
これはさとり達にとっては初めて聞く話で、大分驚いていた様子だった。

「そっちのブレンは何も知らなかったのか?」と聞く魔理沙に、さとりは応える。
「・・・抗体となるものは自分だけでないということは言ってましたけど、それは、他のブレンのことを言っているのだと思っていました・・・・・ブレン以外の抗体がいるなんて・・・」

結局、分からないことを解決するつもりだったが、益々謎が深まる

ばかりだ。
ブレンやオルファンが具体的に何なのか、
彼らの求めるビープレートとは何なのか。
そして、件の白いアンチボディは何者なのか。

それだけではない。

はたてが言う。
「それにねぇ～。ブレンやらオルファンって、どこの生物なのかなぁ？幻想郷に元々住んでるものとは違うみたいだけど・・・」
魔理沙にもさとりにも薄々分かっていたことだが、ブレンやオルファンは、幻想郷古来の生物ではない可能性が高い。
つまり、ここは別の世界から、いわゆる神隠しにあったということだろう。
だとすれば、オルファンの究極の目的はビープレートの発見として、もうひとつ、元の世界に帰ることがある。
そしてそれは、ブレンと出逢い、関わりを持ったさとり達のやるべきことでもあった。

「なら、ブレンやオルファンを元の世界に帰すために、私達が方法を考えないといけませんね」
さとりのその言葉に、魔理沙が返す。
「でも、オルファンはあんなに大きいし、ブレンも、ここにいる二体以外にも、いくつかいるだろうぜ？あいつひとりじゃどうにもできそうにないなぁ」
魔理沙の言う『あいつ』がいれば、幻想郷に神隠しにあった人間や、あるいは小さな物体などなら、すぐに元の世界に送り返すことはできる。
が、オルファンほどに巨大な物体を幻想郷の外に出すことなど、可能なのだろうか。

魔理沙には、見当もつかない。いや、多分無理だろう。
だからこそ、さとりの言うように、方法を考えねばならないのだが・・・

結局のところ、悩みの種が増えただけか。
辟易する魔理沙とさとりであるが、ここではたてが、悩みの種がこれだけでないことを宣言した。
「おぉっと、まだあるわ。地底のこの寒さについても、考えないといけないでしょ」
それを聞いた勇儀が、思い出したように言う。
「そうだった。大事なことがあったねぇ」

が、それには、魔理沙が再び言い返す。
「それこそ分からないことだぜ」
さとりが付け足すように続く。
「お空の話では、地底の熱そのものは発生していて、奥の方はまだ暖かいそうです」
それを聞きつつ、はたてが言う。

「私だって、何で地熱が弱まっているのかは分からないけど、河童が来てくれれば、事態の究明もしてくれるはずよ」
「河童かぁ・・・こういう時には、頼りにできる連中だよな」と勇儀。
「私達天狗も頼りにできますよぉう～・・・・・・まぁ～、それはともかくとして、事態の究明もできれば、オルファンの生態に関する手掛かりぐらいは掴めそうですよね」

魔理沙が、人差し指をびっと差し出して、言った。
「結論。今のところは待ってろ・・・ってことだな」

「・・・・・・・・」

まぁ、確かにその通りだ。という認識がこの場に収まった。
話をした意味など、あまりなかったということか・・・

「はぁ～あ・・・」

魔理沙が大きなため息をついたのと、ほとんど同時だった。

客間の入り口のドアが勢いよく開き、その向こうから、大きな声が聞こえてきた。
「いたいた、お姉様。またブレンの身体洗ってあげましょうよーっ」
魔理沙達が声のした方を向くと、大きなブラシを持ったこいしが、部屋の中へと入ってきていた。

こいしだけではない。
ヤマメにキスメ、パルスィも、こいし同様に大きなブラシを持って、ツカツカと入ってくる。
彼女らが順々に言ってくる。
「なんか用でもあったかい？おや、魔理沙に、勇儀さんまで？」
「何か話でもしてたの？」
「勇儀さん、今日も妬ましく」

「なんだこいつら？」という魔理沙に、さとりが応える。
「そういえば、説明するのを忘れていました。ブレンは、身体を洗ってあげると、とても喜んでくれるんです」
「へぇ～っ」

それは、魔理沙にも初耳だった。
「ヤマメさん達は、最近よく来てくれて、ブレンを喜ばしてくださるんです・・・今からいくんですね？」
説明ついでに聞いてきたさとりに、ヤマメが応える。
「ん、そういうこと。なんなら、あんたらも一緒にいくかい？よろしければ、星熊さんもどうです」

魔理沙が笑顔で返す。
「そういうことを最初に言ってくれればよかったんだぜ。ブラシ他にあるんだろ？」
勇儀も続く。
「そうだなぁ。面白そうだし、付き合う」
ブレンと身近に接しているさとりも当然、
「私もいきます。もちろんね」と返す。

そうして、続々と席から立ち上がり、こいし達のいる方へと歩み寄る。
が、はたてだけは、じっと席に座り込んだままだった。

しかし、試しに勇儀が、
「おい天狗。あんたはどうだ？」と聞くと、別に嫌そうでもない様子ですくっと立ち上がった。
「はいぃ～やらせていただきます～。まぁ、文の奴も手伝うんだろうしね」

そうして改めて、こいしが言う。
「それじゃ、みんな総出で！」

さとり達一同は、揃ってブラシやらバケツやらを持って、再び中庭へと出ていった。
地霊殿は、その広さ相応に、そういった掃除用具も多かった。
実際使われていたかどうかは、新品同然の姿を見れば一目で分かる。
そもそも何で置いてあったのか・・・
まぁ、古びて汚れたものでブレンの身体を洗ってやるわけにもいかないので、それは逆に助かった。

中庭に出ると、サトリブレンの隣にマリサブレンが、同じ格好で座っていた。
向こうも向こうで、いろいろな話をしていたのだろう。
はっきりとは分からないが、大分仲がよくなったみたいだ。

ゆっくりとブレンの方へと歩み寄りながら、魔理沙はちょうど近くにいた文の方に、一本余分に持ってきていたブラシを放り投げた。
そして、慌ててそれを掴んだ文に向けて、一言いう。
「ほれ、あんたの分だぜ。手伝いなよ」
この説明は、あまりにも要約しすぎていた。
案の定、文は訳が分からない様子で、「はぁ？」と頓狂な声を上げていたが、それからすぐ、納得できた様子で、
「あぁあ、はいはい分かったわ。手伝わせてもらいましょう」と言い直した。
魔理沙よりも先にサトリブレンのことを聞いていた文達は、その性質も分かっていた。
だから、魔理沙やさとり達がブラシを持って出揃ってきたのが、ブレンの身体を洗うためだということも、すぐに分かった。

地上に間欠泉が噴き出すなら、地下には豊富な地下水がある。

地霊殿の中庭にも、いくつか井戸があった。
地下水脈と直接繋がっているため渇れることもない、澄んだ水の溜まった井戸だ。
勿論、いかに地熱が豊富な地底でも、冷たい水が湧き立つところはある。
そもそも、地熱が直に伝達するような地形なら、さすがに旧都に妖怪など住んでいない。
そういう井戸のよく冷えた水をバケツに入れてくる。
井戸はすぐ近くにいくつかあるので、水が汚れたら、すぐに取り替えればいい。

後はその水にブラシをつけて、ブレンを洗ってやる。
金属のようなその身体を擦るのだ。
さとり達の話では、あまり強く擦りすぎると、嫌がるという。
それを聞いて、勇儀がギクリとしていた。
彼女も、こうやってブレンと深く関わるのは初めてらしいので、何をギクリとすることがあるのかと思ったが、少し考えてみると、分かる話だった。
なんせ、鬼の力は規格外なわけだ。

さとりはもちろんとして、彼女のペットらとこいし、ヤマメ達は、サトリブレンの方にわらわらと集まっていく。
魔理沙が寂しそうに、残る勇儀や、文達に方を見ながら、
「あたしはひとりでブレンを洗ってやるのか・・・ひもじいぜ」と呟くと、思った通り、彼女らは皆、
「あんたのブレンは、私に任せな・・・・・・まぁ～、怒らせたら悪いけど・・・」
「どれ、ブラシでゴシゴシして喜ぶんなら、その様子もしっかりと確認しておかないとねぇ」

「天狗自慢のスピードでセンズ・・・げふげふっ・・・擦りまくってやるぅ～」

などと言いながら、魔理沙の方に集まってくれた。

はたての冗談に、勇儀がまた、「ぶっ！」と吹きだしていた。

さて、彼女らを連れて、座りこんでいたマリサブレンの方へと近寄り、さっそく、何も考えずにその身体をブラシで擦ってやる。

最初のころは、『何をやっているんだ?』ぐらいにしか感じていなかったブレンも、段々と気分がよくなっていくのが、魔理沙にはなんとなく分かった。

そうなると魔理沙の方も、訳もなく嬉しくなってきた。

彼女は、ブレンのつま先とか足の部分を、力を込めてブラシで擦っていた。

結構な力をこめており、生身の人間やらにやったら大分痛そうなので、こちらも最初のころは少し気が引けたが、洗うついでに改めてよく観察してみると、ブレンの皮膚（と言っていいだろう）は、僅かに人肌の柔らかさのようなものを感じさせつつも、あくまでそれは感覚的なものであり、どちらかと言えば金属に近い質感をしていた。

なので、拳で叩けば、こちらが怪我しそうなほどに硬い。

もし遠慮なく思いっきり本気で殴ったら、こっちの拳が砕けるだけで、ブレンに笑われるのがオチだろう。

鬼の勇儀が殴ればさすがに大惨事だろうが・・・

それほどのものなので、ブラシで擦るなら、強いぐらいがちょうど

いいらしかった。
もちろん、強すぎてもよくない。
あまり調子に乗ってきつく擦りすぎると、さすがにブレンも嫌そうにしたので、申し訳なく感じられた。
適度な加減というのが必要ということか。
そんなことを考えていれば、夢中にもなれそうだった。

「そうかぁ、本当にいい気分なんだなぁ・・・・・・そういやぁ、あの白いのと戦った時も、埃がいっぱいついたもんなぁ。よぉし！それみんな落として、きれいにしてやるぜ！待ってろよ」
そうブレンに呼びかけ、次いで、文達に対しても、言う。
「文とはたては飛べるんだから、頭とか肩の方を擦ってやってくれよー」
それにはすぐに返事がきた。
「言われなくてもそうしてます～」
「任せときんさい。おぉ、おぉよしよし、これぐらいがちょうど良さそうだねぇ」
「勇儀さんも、上手にできてらっしゃるみたいじゃないですか、さっすが、鬼様は力加減も見事ですねぇ～」
文の調子のいい声に、勇儀の返事がくる。
「こんなの擦ってるなんて言わないぐらいなんだけどねぇ・・・・・・おぉ、あんた、最初あたしのこと怖がってたろう？今はそんなことないよねぇ～・・・・・え？やっぱりちょっと怖い？・・・正直者め、気に入ったっ！いい奴だよやっぱあんたぁ～っ」

そんな、彼女らと、ブレンのやり取りを傍から聞きつつ、
「へっへ」と笑みを浮かべながら、静かにブレンの身体を洗う魔理沙。
こうしていると、この不思議な存在であるブレンをよりよく理解できそうに思えた。

いや、もしかしたら、本当に彼らのことを、文字通り身にしみて理解できているような気分がした。
頭で考えるより、実際に身体で行動して触れ合ってみた方が、大事なことに気が付くかもしれない。

そんな認識が頭をよぎり、魔理沙は脳裏でこう呟いていた。

――――もしかしたらこうしていることが、ブレンやオルファンの求めてる、ビープレートに繋がるかもしれない・・・・・・いや、それはないかな。こうやってるだけで見つかるようなものなら、それこそビープレートって、一体何なんだぜ・・・・・・ま、今はいっか。ブレン、これからもっと仲良くなろうぜ――――

魔理沙達とは別に、さとり達も、ブレンの身体を一生懸命に洗っていた。
現実的なことを言えば、別にブレンの身体を洗ってやっても、ブレンの方は喜んでくれるだろうが、洗ってやってる側のさとり達には利益などない。
なので、実際問題、彼女らのやってることは、無価値であった。
ヤマメ達に至っては、それこそ、骨折り損の草臥れ儲けという言葉がよく似合う。
が、何故だか彼女らは、そういう利益だとかなんだとかは一切抜きにして、自主的にブレンを喜ばせてやろうとしていた。
ブレンがいい気分でいると、何故だから、その場がとても和やかになるような気がした。
そしてその和やかさは、とてもいいものだ。

人間というのは、ある善行をすれば自己満足で気分がよくなる、だから世の中には、わざわざ善いことばかりをする者もいるという話だったが、そういうことが、もっと清らかになったような気分だった。

見返りだとかそういうことではなくて、純粋に気が楽になるのだ。

だから、別に肉体的な労働だとかは特別、苦ではなかった。

それは特に、さとりに言えることだった。

彼女は、ブレンが喜ぶなら、動けなくなるまで頑張るつもりだった。

そして、彼女がブレンに好意を抱けるのは、サトリブレンには、そういうさとりのことを気遣ってくれるような優しさがあったからだ。

さとりが、汗を流して、僅かに息を荒くしながら、足を伸ばして座っていたブレンの踵の内側辺りを擦っていた時だった。

ずっと閉ざされていた胎内に繋がる股間部の装甲板が急に開いたものだから、さとりは、そこから覗いたブレンの胎内に眼が釘付けになった。

ブレンが、この中に入って、少し休んでいいと言った。

そういう声が、さとりには聞こえていた。

その声を聞いてようやく、さとりは自分が、身体もさして強くないくせに一生懸命になりすぎていたことに気づき、目眩すらも起こしだした。

今まで溜まっていた疲れが一気に感じられ、足の力が抜けそうになる。

「あら・・・じ、自分の身体なのに、分からなかった・・・」

頑張りすぎた。これ以上やっていたら、身体が壊れていたかもしれない。

ここは、ブレンの言葉に甘えて、胎内で休んでおいた方が良さそうだった。

ブラシをその場に置いて、ブレンが招き入れる胎内の方へと歩いていくさとり。

その様子をちらりと見たパルスィが、

「さとりさん、サボるの駄目よ」と呼び掛けてくる。

「すみません・・・でも少し疲れてしまって・・・ブレンが休んでいいと言ってるんです」

「・・・ん。妬ましい・・・だけどまぁ、疲れたのなら休んだ方がいいわね」

「はい」

パルスィにも後押しされたので、さとりはそのまま装甲の上に乗り、穴を潜ってブレンの胎内へと入った。

そうして、壁面にもたれかかって、眠るように身体を預ける。

そうすると、先程までは目眩すら起こるほどだった身体の疲れが、みるみる無くなっていくように感じられた。

ブレンの胎内にいれば気分が楽になるのは分かっていることだったが、さすがにこんなに早く疲れが吹っ飛ぶものだとは思わなかった。

これではまるで、休んでいるというよりか、生命の力をブレンから与えられているようだ。

もしかしたら、本当にそうなのかもしれない。

さとりは、もうひとつブレンの持つ特性というものを理解できた気がした。

「当たり前だろうけど、貴方にも、生命は宿っているのね・・・それをわざわざ私に分けてくれるなんて・・・・・・いつかお返しし

なければね・・・困った時は、私の生命を吸っていいからね・・・」

疲れが無くなってくると、今度は眠気を感じるようになってきた。
さとりは、自分が言ったように、己の生命をブレンに預ける・・・
というより、ブレンと共有することが、彼らの求めるビープレートになり得るものなのかもしれないと感じた。

しかし、今はそういうことは考えなくてもいい。
今は、ただ、ブレンの発する穏やかな温かさに包まれて、眠ればいい・・・

※

魔理沙の家がある魔法の森は、そこに住む者達には失礼ながら、あまりに静かで、陰鬱な場所であった。

が、そこ以上に静かで、かつ陰鬱で、ある種洗練されたような暗さを持つ場所がある。
それが、迷いの竹林と呼ばれる地であった。

その名通り、一度足を踏み入れると容易には抜け出すことができないこの地を訪れる人間は、少ない。いないわけではないが。
が、そうやってこの森に入りこんだ者達であっても、その深部に到達することは、到底できないだろう。

森そのものの習性と併せて、意図的に森を歪めている力があるから

だ。

その力の源とも呼べるのが、竹林の中に佇む屋敷、永遠亭だった。

魔理沙が、幻想郷の大所帯にはろくなものがないと嘯いていたが、それが正しいものと思わせるような、殺風景で、不気味な屋敷だ。

そしてその屋敷のすぐそばには、月光を思わせる薄い黄色をした巨人が・・・

巨人の足下には、いくつかの影・・・永遠亭の住人達がいた。

八意　永琳は、昨日の、宵も更けてきたという時分に、妖怪の山の天狗が屋敷を訪問してきたものだから、当時は驚いた。

しかもその天狗が、オルファンやらブレンパワードやら、初めて聞く言葉をつらつらと並べ立てて、捲し立てるように話をしてきたので、天狗の頭がおかしくなって、医者である永琳に診てもらいにきたのかと疑ったほどだ。

が、話をちゃんと聞けば、その内容が理解できないような永琳ではなかった。

そして天狗は、自分達が発見した、オルファンとブレンパワードなる存在の調査に協力してほしいと、永琳に要請していた。

それらは基本的には生物であるらしく、天狗や、河童の知識だけではその生態を解明することは難しい。

なので、医学、即ちそれに通づる生物学と化学の知識を持つ永琳の協力が必要だそうだ。
どうにも眉唾な話ではあったが、天狗がわざわざこんな突拍子もない嘘をつくとも思えなかったし、嘘をついて一体何を企んでいるかも分からなかった。
それに、実際にブレンパワードなる存在がいるというのなら、一目ぐらいは見ておいた方がいいだろう、と思えた。

永琳はとりあえず、実際に天狗達の調査に協力するかは別として、ブレンがいるという地底に赴くことに決め、天狗を帰した。

その翌日の早朝のことだ。
まさか、天狗達の言っていたブレンパワードとやらが、永遠亭の目の前で誕生するとは思っていなかった。
突然屋敷の前に円盤のような物体が飛んできて、それが眩く発光したかと思うと、そこからいくつもの金属の板が組合わさるようにして、巨人が現れた。
永琳達が知るわけがないが、さとりや魔理沙がブレンと出会った時と、ほとんど同じだった。

そうして、今に至る。
屋敷の前に佇立するブレンを、永琳達が見上げている。
彼女の他には、永琳亭の主と言ってもいい蓬莱山　輝夜と、永琳の弟子と言える鈴仙・優曇華院・イナバと、迷いの竹林に古くから生

きる因幡　てゐがいた。

事前に天狗（文のことだ）から話を聞いていた永琳には、自分達の目の前に現れたそれがブレンパワードであることはすぐに分かった。輝夜達も、今しがた永琳から話を聞いて、ブレンのことを知った。

鈴仙が、さすがに威容と称せるブレンの姿を見ながら、戸惑った様子で言う。

「これがブレンパワード・・・とかいうもの？」

永琳が続く。

「えぇ・・・・・確かめにいく必要はなかった。ブレンパワードは確かに実在していたんだわ」

今度は因幡が聞いてくる。

「お師匠様」

鈴仙もそうだが、彼女は永琳に尊敬の念を抱いていて、彼女を師と仰いでいる。

勿論永琳には、そう呼ばれるだけの能力はあった。

「こいつって、どういう奴なんです？」

「天狗の話では、オルファンという生物が生み出した抗体だそうよ」

「有害なものをやっつける、あの？」と鈴仙。

「さぁ、その抗体とは違うかもしれないけど・・・あと、あれは生き物らしくて、胎内に他の生物を宿して共生する必要があるらしわ」

「どういうことです～？」と、因幡が聞く。

「胎内に他の生き物を宿す・・・誰かと一緒にいないと、危険ということでしょう」

「つまり、誰かがあれの胎内に入らないといけない、ってことですか・・・」

鈴仙のその声と共に、静かにその場佇んでいたブレンが、やはりさ

とりや魔理沙のブレンがそうしたように、その場でしゃがみ込んで、股間部を覆っていた装甲を開いた。
この時も永琳は、事前に天狗から話を聞いて、開いた装甲の向こうにある空間に妖怪なり人間が入りこめるということは分かっていた。改めて鈴仙達にも、
「穴が見えるでしょう、あの奥に入れるのよ・・・地底にいるというブレンパワードも、そうやって地底の妖怪と共生関係になったの・・・一度胎内に誰かを宿したら、ブレンパワードの身の安全は確保されるようね」

となれば、後はこの場の誰かが、あのブレンの胎内に入ればいいだけだ。
勿論、そのまま無視し続けてもいい。そうなればブレンは、どういう形でかは分からないが、死ぬようだ。

しかし、仮にも医者である永琳は、そういう非情なことはしたくはなかったし、他の者達にしても、見殺しにするのはさすがに気が引けた。

なら、早い内に、ブレンに乗り込む者を決めようか・・・まぁ、率先する者がいなけれな、自分が乗ろう。などと永琳が考えた、その時だった。

今まで会話に加わっていなかった輝夜が、急に前へと躍り出て、そのままスタスタとブレンの方に歩いていった。
「輝夜様っ？」びっくりした様子で呼びかける鈴仙の声に、輝夜は立ち止まって、その方を向いた。
「私が乗ることにするわ」

「えぇーっ！？」
輝夜の返事に対する鈴仙のこの驚きようは、どうも大袈裟すぎるような気がするが、彼女ら永遠亭に住まう者達にとっては、まだ軽いリアクションだった。

輝夜の人となりを簡単に説明すれば、『自主的というものから完全に決別を果たしたような人物』と言える。
要するに、自分からは何ひとつやろうとはしないのだ。というか、他人に言われたって何もやろうとしない。
つまり、何もやらない。そういう者だった。
普段だって、屋敷の部屋の中でごろごろしているのが当たり前だったのだから、そんな輝夜が突然こういう行動をとれば、驚いてしまうのは仕方がなかった。

だからといって勿論、そんな彼女の起こした行動を止めるつもりは、誰にもなかった。
しかしながら、さすがに、何故急に？という疑問は感じずにはいられない。

ともかくとして永琳が、「どうぞ．．．ですが、何が起こるか分かりませんから、気をつけて、私達も出来得る限りすぐに対応します」と伝えると、輝夜は一言、
「任せるわ」とだけ応えて、再びブレンの方へと歩み寄り、地面についた装甲の上に乗りつつ、ぽっかりと空いた穴の中の向こう側へと入っていく。

その様子を見ながら鈴仙とてゐが、不思議そうに
「どうしたんだろう、輝夜様」
「ねぇ～？」
と言い合っている声を聞く永琳には、天性の怠け者である輝夜のこ

の自主性の理由が、ぼんやりと理解できていた。

彼女は、静かにその巨体を竹林の薄暗い空気に浸しているブレンパワードから、何か言い様のないものを感じていた。
具体的に何か分からないが、とても確かに感じられるものだ。

ブレンパワードは、遥か遠くの世界からやってきた。

幻想郷の外とか、そういう領域ではない。
この幻想郷の空を貫き、真空の海を渡ったその先、つまり、永琳達の還ること叶わぬ故郷・・・さらにその向こう側から・・・

もしかしたら輝夜もまた、永琳の抱くこの意識を感じていたのかもしれない。

ブレンパワードに、オルファン。
彼らは、一体何者なのか？

永琳は、眼の前にいるこのブレンパワードなる存在のことを、深く理解する必要があると考えた。

そして・・・

ブレンの胎内へと入った輝夜は、金属と生物の中間のような感触の壁面に身体を預ける。
やはりその中は、穏やかな温かさに包まれていた。

だが、輝夜は、その感覚や、肌で感じられるブレンの意志の存在に驚くよりも先に、ブレンが何かに怯えているらしいことに気を取られた。

「えー・・・私が偉大なる蓬莱山　輝夜その人であります、崇め奉りなさ・・・・・ちょっと、聞いてる?何を怖がってんの・・・・・え?私じゃない?・・・じゃあ一体何を・・・・・・分かんないって。分かんないものを怖がってどうするの・・・・・・それでも怖いって・・・ねぇ～・・・」

さすがに輝夜は、初対面（?）であるこのブレンパワードを、妙な奴だと評価せざるを得なかった。

しかし、このブレンの怯えようは、相当なものだ。

そういえば、ブレンはこうやって誰かを乗せていないと、死ぬ恐れがあるという話を思い出した。

それを怖がっているのだろうか。

だとしたら、輝夜がこの場にいる以上、その心配は無用になった。

それに気付いた輝夜は、ころころと、彼女本来の威厳ある立場にはあまり似合わない笑いを浮かべて、ブレンに呼びかけた。

「永琳に聞いたわ。貴方、誰かがここにいないと死ぬんでしょう。なら、もう心配いらないじゃない、怖がることなんてないわ・・・・・そうよ、何を怖がることがあるのかしら・・・ん～!そうよ、そう。何が怖いもんか」

輝夜が呼びかけることによって、ブレンも少しは安心できたらしかった。

そうして、今になってようやく、自分の胎内にいる彼女のことが気になり始めていた。

「私が誰だって?やっぱり聞いてなかったわねぇ。蓬莱山　輝夜の名を知らないことはないでしょう?・・・・・・え?知らない・・・」

輝夜は気づいていなかった。
ブレンが抱いていた恐怖は、何も死ぬことへの恐怖ではない。
彼女が解きほぐしつつある恐怖は、もっと別のものへと向けた恐れであった。
しかしそれは、ブレン自身ですら気づいていない。
生まれたばかりで何も思い出せないブレンでは、自分の中の恐怖の正体に気づくことはできなかった。

自分達、ブレンパワードと対をなす者が、すぐ近くにいるということを．．．

第四話『戦士の目覚め』　その１

あたふたする美鈴のことは放っておいて、紅魔館の咲夜は、館にいる他の者達に事態を報せに行った。
館の主人である吸血鬼、レミリア・スカーレット、それと、居候のようなものである魔法使いのパチュリー・ノーレッジにだ。
館に何十人といるメイド達には、適当にひとりにだけ伝えておけば、後はそのメイドが他の者達に伝達してくれる。
ついでに咲夜は、館の敷地の壁を吹き飛ばした巨人をこちらでどかすかもしれないので、適当な数のメイドを連れてきておくようにも伝えていた。

レミリアもパチュリーも、咲夜と美鈴が発見した巨人に興味があるらしく、咲夜と共に、現場に赴くようだった。
それに、事態を察知してか、レミリアの妹であるフランドールも気がついた時には、一同に加わっていた。こちらからは何も伝えていないのだが。
また、パチュリーと同じように紅魔館で住まわせてもらい、雑務の手伝いをしてもらっている小悪魔のこあもついてきていた。
そして、咲夜の指示に従って結構な数を揃えてきたメイド達も合流し、彼女らは、美鈴が待って・・・というより、うろたえている、巨人の衝突現場へと向かった。

到着すると、案の定、まだ落ち着けていない様子の美鈴が、
「あぁ咲夜さんっ！それに、お嬢様方まで・・・どうするんですかこいつ～っ」
と、大声で呼び掛けてくる。
それにパチュリーが辟易して、
「落ち着きなさい」と返す。

改めて実際に見てみたその巨人の姿は、美鈴がこうなるのも分からなくはない威容だ。
館の敷地の煉瓦を崩して倒れ込んだ姿勢のまま、巨人は動いていないようだった。

となれば、まずはこいつをどうにかしてこの場からどかすことが先決だろう。
その後はどうするべきか・・・
場合によっては、このまま亡き者にしてしまうか？
いや、そもそも、まったくもって微動だにしないのを見ると、すでに死んでしまってるのではないか？
あれが生物であるとして、外傷と呼べるようなものはそんなに多くは見えないが・・・

咲夜と共にこの場にやってきたパチュリーやメイド達が、ぼーっと眼前の巨人を見つめる中で、レミリアが言った。

吸血鬼というのは日光が弱点であり、陽の光を浴びれば死にいたる。
が、レミリアにしてもフランドールにしても、日傘のひとつでも差せば、真昼でも外に出ることはできた。

それで本当に弱点と呼べるのかは分からないが、少なくともレミリアもフランも、生身で日光を浴びることだけはできないと言う。

「中々いい血の色をしているじゃない」
それは、あの巨人の身体を見ての一言だった。
パチュリーが続く。
「何者なのかしら．．．」

この場にいる誰も、こんな巨人は、今まで見たことがなかった。
鉄のような身体をしているが、生物にも見える。
どういう経緯で、紅魔館の敷地の壁に突っ込んできたのかはこの際どうでもいいとして、この生物、らしきものは、一体どこにいたのか、という疑問が浮かび上がってくる。

まぁ、それを考えるのも後だ。
ひとまず咲夜が、この場に集まったメイドを総動員させて、十m前後の背丈がありそうなこの巨人を、どかせるように指示しようとした。

が、口を開けた咲夜だったが、次いで起こった突然の事態に、声を出すことはできなかった。
今まで、まるで銅像か何かのように微動だにしなかった巨人が、重く鈍い金属音を発しながら、微かに震えだしたのである。
震えるというよりかは、小刻みに痙攣しているようにも見えた。
もっとも、痙攣とは称したが、その動きは速くはない。むしろ、大分ゆっくりだ。
ただ、崩れた煉瓦にもたれかかるようになっている身体や、前に伸ばされた右腕の指先が、ガクガクと動くその様子が、痙攣の動きに見えたからだ。

「動きましたよっ？」
こあが驚嘆する。
「生きてたんだ」と、フランが続いた。

振動とも呼べないような、緩やかな揺れを繰り返している巨人。
時が経つにつれ、ほとんど金属のように見えていたその肉体から、何かを感じられるようになってきた。
生命の持つ力のようなものか？
死に体だった肉体が、少しずつ蘇っていく、ように見えた。

人に近い姿をしていたその巨人の、頭部と思われる部分の一部、薄い溝の中で、いくつかの光が奔った。
それを見逃さなかった咲夜は、初めてこの何者かを見た時と同じように、あの光がこちらに何かを伝えてきているように感じられた。

「・・・・・・何を、言ってる？」
微かに眉をひそめ、細めた眼を巨人に向ける咲夜。
その視線を別のところに逸らすことは、できなかった。

振動を続けていた巨人だが、しばらくすると、震えるばかりだった右腕が、かすかにだが曲がり始めていた。
最初は、月が地平線から出て沈むほどだったのが、少しずつ速くなっていく。
そして、緩く開かれていただけの右掌が突然ばっと、強張ると同時に、それが、強く地面に打ち付けられた。
金属が軋むような鈍い音が、咲夜達の鼓膜を震わせる。
そうして、ブルブルと呻くような音を発しながら、曲げられた右腕が再び少しずつ伸びていき、崩れた煉瓦の上に倒れていた巨人の上体が、段々と起き上がっていく。

「立ち上がる気かっ!?」美鈴が叫ぶ。
彼女だけでなく、何人かのメイド達も、うろたえるような声を上げていた。

煉瓦の向こう側に隠れて見えない両の脚にも力が込められ、そのまま巨人は、流れるようにその場で立ち上がった。

「おおぉっ!?」
美鈴を筆頭にして、いくつかの喚声が上がった。

立ち上がってみると、巨人のその身体の大きさがはっきりと分かる。
そして、太陽に照らされギラギラと光る紅い色・・・ただの紅色ではなく、深紅の中に暗黒の混ぜ合わさった血の色をしたその体色は、生命の持つ生々しさを表現しているようであった。

「何をする気なの?」というパチュリーの声が聞こえた、その次だった。
別段何をするわけでなく、巨人は、自分が崩した煉瓦とは逆の方へゆっくりと、仰向けになって倒れていった。
転倒の瞬間、その巨体の割には乾いて小さかったが、普通に生きていて聞くことはないような大きな音が、昼間の空に響き渡った。

その音の余韻もあってか、巨人の転倒の様子を見た咲夜達は、しばらくの間何も言わず、呆然としていたが、少し間を置くと、メイド達が発するいくつかのざわめきが聞こえてきた。
恐らく、何であの巨人は、わざわざ一度起き上がって、もう一度倒れたのだとか、そもそもあの巨人は何なのかということを言い合っているのだろう。

そして咲夜には、そういうことより、再び倒れてしまったあの巨人が大丈夫なのかという、不安があった。
何を不安がることがあるのか、分からなかったが。
それに、あの巨人がこちらに伝えようとしていた何か。
その正体は、確かめておく必要があるのではないか？
そう思えた。

この場にざわめきが起こるが、それもしばらくすると、収まってくる。
紅魔館の敷地と反対側に倒れ込んだことで、巨人の姿は、煉瓦やまだ健在の壁に隠れて、あまり見えなくなってしまっていた。
壁の向こう側に出ていって、巨人の姿を間近で観察しようとする者もいない。

メイドのひとりが咲夜に、「一応、向こうから勝手にどいてくれたんですけど、どうしますか？」と聞いてくる。
咲夜はとりあえず、
「今は撤収しましょう。今後どうするかは、また後で決める」と応えておいた。
それを聞いたメイド達は、何事もなかったかのように、とぼとぼと館の方へと戻っていく。

その様子を傍目に見ながら、続いて咲夜は、その場に残っていたレミリアに、
「どうなさいます、お嬢様」と聞いた。
が、咲夜の声を聞いた途端レミリアは、メイド達の後を追うように、踵を返すと、館に戻っていこうとした。
咲夜が慌てて、「お嬢様っ」と呼びかけると、レミリアは立ち止り、くるりと上体だけこちらに向けて言ってきた。

「あれの対処なら、あんたと・・・後、美鈴あたりに任せる。好きなようにしなさいよ。あれの調子が戻ったんなら、そのままどこへなりと帰してやれないいし、暴れ出したら、始末すればいい・・・壊れた煉瓦は、後でメイド達に修理させときなさい」
「始末、ですか」
「大きいからできない、とかは言わせないわよ」
「いえ」
咲夜の返事を聞くと、レミリアはもう言うことはないという具合に、再び背中を、日傘の合間から見せ、改めて館に戻ろうとした。
が、咲夜は後ひとつだけ、レミリアに聞いた。

「ご興味が失せましたか」
その問いに、レミリアは再び立ち止り、今度は身体を振り向けもせずに応えた。
「別に、そういうわけじゃないわね」

それからは、咲夜ももう、館に戻っていくレミリアを呼び止めはしなかった。

レミリアが帰っていくと、それに続いて、フランも、
「面白かったような、つまらなかったような・・・でも、あいつ、いい子そうだったねぇ」と呟きながら、館に戻っていく。
パチュリーも同じように、こあを連れて、その後に続いていた。
ただ一言咲夜に、
「個人的に、あれについて調べてみましょう。分かったことがあったら、話す」とだけ伝えていた。

さて、皆が去り、この場に残るのは、咲夜と美鈴だけになってしま

った。
咲夜と共に、レミリアからあの巨人の対処を任された美鈴が不安そうに、
「咲夜さん～っ・・・ど・・・どぉしましょぅ～・・・」と聞いてくる。
それに咲夜は、淡泊に、
「お嬢様から任された以上、あれをどうするか考えて、それを実践する。それでいいでしょう」と応えた。
「そりゃぁ～、そうですけど・・・」
「とりあえず、あれの様子を見てみましょう」

二人は、煉瓦が崩れたことで、仕切るものがなくなってしまった紅魔館の敷地の内と外の境界を跨いで、敷地の外の方へと出ていった。
巨人が崩した煉瓦には、あれの重圧で押しつぶされて、粉のような状態にまで文字通り粉砕されているものもある。
それを見た美鈴が、益々不安がって、
「それにお嬢様が、あれが暴れ出したら始末しろって・・・・・・で、できるんですかねぇ」とぼやく。
「弱気な。如何様にでもなるだろ。貴方らしくないわね」
「む・・・そ、そうですねぇ。お嬢様方が危険になったなら、命がけでお守りするぐらいの気概を持たねば・・・うむっ」
「そうね」

勝手にうろたえたり、勝手に気合いを入れたりする美鈴のことは軽くあしらいつつ、粉塵と化した煉瓦を踏みしめて、外へと出た咲夜は、改めて、巨人の姿を見た。
とはいえ、仰向けに倒れた巨人の脚の裏と、股が見えただけだったが。

そこから、左側に回り込むようにして、巨人の全体像を眺めた咲夜と美鈴は、やがて、じっと黙したまま宙空を見つめる巨人の横顔を垣間見た。

「む・・・むっ」

近くで見ると益々大きく見えるその横顔を見て、美鈴が眉をぴくぴくして、身体を強張らせていたが、段々とその緊張はほぐされていた。

その代わり、彼女の顔には、なんとも言えない表情が浮かび上がっていた。

彼女も感じ取ったのだろう。

咲夜達の眼前の巨人は、大分弱っているらしかった。

どういう存在であれ、それが、死の淵さえ見えるほどに弱まっていれば、恐怖というのはそれほど感じない。

そうして美鈴のようなものは、このような弱り果てた者は、何者であろうと、『可哀想だな』と思える心があった。

彼女が、「・・・とりあえず、何をするにしても、元気になるぐらいまでは待ってやった方がいいですね」と呟くのには、

「えぇ、そうねぇ」と返した。

そうして、その時だった。

ずっと宙空を見つめていた巨人が、突然その首をもたげ、咲夜達の方を向いた。

哀愁は感じつつも、その動きには、未だ十分の威圧感はあった。

美鈴が、「うっ?」と呻き、その身体を再び強張らせる中で、咲夜は微動だにせず、巨人が放つ視線を一身に受けていた。

しかしその顔には、戸惑いにも似た、疑念の表情が浮かんでいた。

この者はずっと咲夜に、あるいはもっと別の者かもしれないが、とにかく誰かに、何かを伝えていた。
そういう意味では、咲夜が今こうしてこの巨人の前に立っているということは、この者の呼ぶ声に応えたということでもある。
そうして今この時、咲夜には、巨人が自分に何を伝えていたのかを知った。

だがそれは、あまりにも不可解な感情だったのだ。

それは、『拒絶』と『恥』だった。
この巨人は、咲夜達が今この場にいることを良しとしていなかった。
咲夜達に、ここから、己の下から去るようにと言っていた。

咲夜は、遅れて理解した。

この者は負けたのだ。
戦いか、何かに敗れた。
そうしてこの者は、それを恥じていた。
戦いに敗れ、尚弱り果てながら生きている身を恥じ、それを、咲夜達に見られることを恥じた。
だからこの者は今、咲夜達を拒んでいた。

しかし咲夜は、その拒絶に甘んじて応えたりはしなかった。
むしろ、意固地なまでに、この場に留まり、眼の前の巨人の姿をはっきりと眼に焼きつけようとしていた。

敗北を生き恥とする心は、即ち誇りだ。
誇りがあるからこそ、生き恥も晒す。
こいつは、戦士だ。

咲夜は確信した。

彼女も、レミリアに忠誠を誓い紅魔郷で暮らすようになる前は、数多の妖怪をその身ひとつと、銀に煌めくナイフだけで狩り続けていた。

その当時の事を思い出せば、咲夜自身もまた、戦士（ハンター）であったはずだ。

咲夜は、弱々しくも大きな憤りを浮かべこちらを見る巨人に向けて、言った。

「何が恥なものなのかしら・・・だけど、あなたの気持ちは、分からなくはない」

突然の彼女の声に、美鈴が戸惑ったようにそちらを向く。

そんなことは気にも留めず、咲夜は続けた。

「貴方の誇りも、理解できる・・・なら、私にその身を晒すことを恥とする心を持つことそのものを、恥と知るべきだわ・・・・・・

そう、そうよ。誰が貴方を笑えるものか・・・」

咲夜は無意識の内に、この者のことを気に入っていた。

そして、巨人もまた、未だに頑なに己の身を恥じつつも、それそのものを恥だと言う彼女のことに、意識を傾けているのは確かだった。

いや、最早巨人だとかいう風に呼ぶことはできまい。

誇りを持つ者なら、そんな呼び方はできないだろう。

咲夜は言った。

「己に誇りを抱くなら。その名を聞かせて頂けないかしら」

その声言葉への応えは、力強いものだった。

「そうか、《グランチャー》・・・・・・それが・・・」

※

迷いの竹林の中に佇む屋敷は、永遠亭だけではない。
あらゆるものの進入を拒むかのようなこの天然の迷宮の中に、人工の建造物はもうひとつあった。
しかし、永遠亭に比べてそれは、あまりにみすぼらしく、人の生活の気配すらも感じさせることはない。
だが、確かにその屋敷に住む者はいたし、その者に会うためだけに、迷いの竹林に足を踏み入れるものだっていた。

上白沢　慧音にとって、藤原　妹紅は、友人であると言えた。
が、二人の関係を友人とすれば、その中でも、最も親しい間柄であると言えた。
あるいは、友人とは呼べない、もっと計算づくで、ある種運命づけられたような関係であるかもしれなかった。
ただ一つはっきりとしていることは、自らを完全な孤独だと嘯いていた妹紅のその心を開かせたのは、慧音と、もう一人ぐらいしかいないということだ。

慧音は、この日も、妹紅に会うために迷いの竹林へと入り、彼女の屋敷へと向かっていた。
妹紅の屋敷は、ほとんど廃屋同然の状態になっており、前述通り、

外見だけでは、人が住めるような環境ではないように見えた。
が、しかし、妹紅は自ら望んでこの場所に住み続けている。
その理由は定かではない。
妹紅自身でさえ、今となっては忘れてしまっていた。
外界との接触を断つために竹林で生活するにおいて、住めるような場所がここしかなかったからか、
あるいは、当に過去の者達となった彼女の家族達や親族達が、古き日の彼女と共に過ごしていたのか。
そんなことも、その当時から数千の歳月が過ぎた今となっては知る由もないことだ。

そして慧音の眼に移る屋敷の姿は、相変わらず、いつも通りのみすぼらしさを見せていた。
時折、この場の時間が止まっているようにさえ見える迷いの竹林において、眼に見える変化というものを感じることは難しい。

だが、慧音の顔には、驚愕に近い表情が張り付いていた。
変化のないこの世界において、あまりに大きな変化が、はっきりと眼に見えたからだ。

何の変わり映えもしないように見える屋敷のすぐ傍に、全高十mはありそうな巨人が、膝を立てて座っていたのである。
その身体は、濃い緑色をしていた。

「な、なんで妹紅の屋敷の前に、こんなものが・・・」
慧音にはある能力があり、その能力故、幻想郷の歴史を管理する役目がある。
だから、幻想郷に住まう生物、妖怪や、ただ魂だけの存在などを含

めたものや、建造物、構造物のことは、大体知っている。

だが、こんなものは初めて見た。

彼女の知る歴史の中に、こんな物体、あるいは生物は存在していなかった。

そもそも、これは何なのだろうか。

生物のようにも、単なる鉱物の塊のようなものにも見える。

とにかく、こんなもの、慧音自身の中にある知識を信じれば、今まで幻想郷の表舞台には現れていなかった・・・あるいは、そもそも幻想郷に存在していなかったか・・・

つまり、神隠しにあったということか？

とにかく、この何者かの正体はともかくとして、慧音は、これほどのものが屋敷の眼の前にいて、妹紅はどうしているのだろうかということを心配した。

が、そんなことを考えると同時に、屋敷の戸が開いて、その向こうから妹紅当人が出てきた。

そして、巨人の方を見てじっと立ち尽くしている慧音に向けて、彼女は呼びかけてきた。

「よく来たねぇ、慧音」

その声に、ようやく妹紅のことに気づいた慧音は、そちらを振り向きつつ、

「・・・え、えぇ、こんにちは」と返事した。

そうして次に、この巨人が一体何者なのか聞こうとしたが、慧音が聞くより先に、妹紅が続けて言った。

「そいつかい？・・・詳しいことを話すからさ、中に入りなよ」

「・・・はい。お邪魔します」

ひとまず、妹紅に導かれるままに、屋敷の中へと入っていく。
屋敷の中は、外から見た時と比べれば、まだ人が住むのには不自由がなさそうな様相をしていた。
まぁ、家の外より中の方が汚れたり壊れたりするようなことは、余程住み方が悪くなければ、ないことだろう。
そんな屋敷の一部屋に入り、座敷の上に向かい合って座った二人は、話を始めた。

開口一番、妹紅が、あの巨人の名を語る。

「《グランチャー》？」
聞き返した慧音に、妹紅は応える。
「うん、あいつはそう名乗っていた」
「・・・何者なんです？」
「詳しいことは分からない・・・ただ、生物であるのことは確からしい・・・・・それにあいつは、身体の中に別の生物を入れていないと危ないらしいんだ。だから時々私が、あいつの中に入ってやってる」
「そうですか・・・・・・どこから来たとか、そういうのは分からないんですか？」
「さぁねぇ・・・ただ、この迷いの竹林のことは、初めて見る場所だと言ってた。竹だって見たことがなかったらしい」
妹紅のこの言葉は、少し意外だった。
「竹も知らないんですか？・・・・・・神隠しにあったのは確からしいけど、外の世界にだって竹ならあるだろうし・・・見たこともないというのは・・・」
「もしかしたら、もっと別のところからきたのかもしれない」
「別の場所・・・そうかもしれませんね・・・」
こう応えつつも、慧音には、妹紅の言う別の場所がどこなのかは分

からなかった。
妹紅にだって、皆目見当はついていないだろう。

妹紅が続けて言う。
「それとあいつ、何かをやっつけることが目的らしい」
「やっつける？何を・・・」
「あぁ。何でもグランチャーには本能的に敵だと考えられる何かがいるらしんだ。何かは分からないけど・・・・・・それが、この竹林のどこかにいるらしいんだ」
「グランチャーの敵だというものが、ここに？・・・なんだか、怖い話ですね」
「・・・あぁ。あいつも最初のころは、大分警戒していた・・・今は少し落ち着いているけどね・・・でも、いずれは決着をつけないといけないと言っていた」
「決着を・・・だけど、何のために」
「それは分からない」
「理由も分からないのに戦うのか？」
「うん・・・何故だか分からないけど、とにかく、戦わなければいけないそうなんだ。そうすることで、何かを見つけられるような気がすると・・・」
「戦うことで見つけられるもの・・・？」

妹紅の話を聞いても、未だグランチャーという名の生物の具体的な正体は分かっていなかった。
しかし、今までの話を考えれば、グランチャーとは、戦うことそのものを本能的に目的としているらしい。
それについては、あまりいい印象を持てなかった。

「・・・そのグランチャー、妹紅はどう思います？」
慧音がそう聞くと、妹紅は、こう応える。

その言葉は、慧音にとっては意外なものであった。
「悪い奴ではないと思う・・・私にもよくしてくれてるし、なんていうか・・・直向きさを感じるんだ」
「直向きさ・・・」
「うん。グランチャーは、自分の目的を達成するために努力できる奴だと思う・・・それが、戦うことだとしてもな・・・そういうところは、尊敬できると思う」
「・・・・・そういえば妹紅、グランチャーは言葉を発することができるのですか?グランチャーと実際に会話したような口ぶりですけど」
「耳で聞こえるような言葉は言わない。ただ、あいつの胎内に入っていれば、心の中に直接話しかけてくるんだ」
「・・・・・・」
慧音は、自分が一目垣間見たあの巨人、グランチャーについて、詳しく知ってみようという、使命感を感じた。
彼女自身が、知ることそのものに意欲を燃やせる人間であることもその理由だし、もうひとつは、妹紅のグランチャーに対する考え方を、自分も共有するべきだと考えたからだ。
そのためには、一度、妹紅と同じように、グランチャーと話をするべきなのだろう。
そうして慧音は、妹紅に対してこう切り出していた。
「・・・よかったら、私もグランチャーの胎内に入れていただけないでしょうか。私も、一度話をしてみたいのです」
それに、妹紅は応える。
「・・・グランチャーがいいって言ってくれるかどうかだけど・・・そうだな、一度行ってみようか」

二人は、屋敷から再び外に出て、そのすぐ傍で鎮座しているグランチャーの前まで歩み寄った。
改めてその姿を見た慧音は、どこか鎧や甲冑のようなものを思わせるその姿に、どうしてもいい印象を持てなかった。
もちろん、そういった先入観で遍くもの全てを偏見するのはよくないが、心にべったりと張り付いたものは、どうしてもなくすことができない。

そんな慧音を余所に、妹紅はグランチャーの足元で、眼前の彼の者に向けて呼びかけていた。
「グランチャー！この人は、私の友達で、上白沢　慧音って言うんだ。この人が、あんたと話をしたいって言ってるんだが、どうする？」
妹紅の声を聞いたグランチャーが、僅かにブルブルと呻いたような音が聞こえた。
同時に、股間部を覆っていた金属の装甲が開き、その向こうに大きな穴が見えた。
これはつまり、慧音が胎内に入ることを許可したということなのだろうか。

妹紅が言うには、実際そのようだ。
「入っていいみたいだ。慧音、よかったね」
「え、えぇ・・・それじゃあ」
慧音は、自分から言い出した手前だが、恐る恐るになりながらグランチャーの方へと近づき、地面に降りた装甲の上に乗って、そのまま穴を潜り、向こう側の空間へと入っていった。
慧音の身体が胎内へと入ると同時に、開かれていた装甲が、再び閉ざされた。
妹紅は、ひとまずグランチャーの様子を見守る。

だが彼女には、グランチャーが、あまり喜んでいるようには見えなかった。

慧音がグランチャーの胎内に入り、その奇妙な感触の壁面に身体を預ける。
それと同時にグランチャーは、明確な不快感を示していた。

しかし、その不快感が理不尽なものではないということは、慧音には分かった。
「・・・ん、いや、済まない・・・どうしても、君のことをいい風に考えることができなかった・・・でも、今はそういう考えは忘れるから、許してくれ・・・・・・そう、そうだ。本当に悪かった・・・・・なんだ、いい奴じゃないか、君」
口では忘れると言っているが、慧音にはやはり、どうしてもグランチャーに対する先入観を消すことはできなかった。
そしてそれを、グランチャーも感じているのだろう。
しかし、それでもなお、慧音の言う事をひとまず聞いて、眼に見えて不快感を現すことがなくなったところを見ると、慧音も、グランチャーに対する考えを改めることができた。

そうして、慧音は続けていう。
「妹紅から話は聞いた・・・君達は何でも、何らかの敵を倒すことを目的としているそうだが・・・」
そう言った瞬間だった。
突如グランチャーは、凄まじいまでの敵意の念を放出しだしたので

ある。
それは決して、慧音に向けたものではなかった。
グランチャーの語る、何らかの敵に対して向けたものなのだろう。
それが、慧音の言葉により再燃したというのだろうか・・・
その思念の威圧感は、半端なものではなかった。
最早敵意というよりかは、殺気と言った方がいい。
あまりに突然のことだったものだから、慧音は、さすがに戸惑いを隠すことができなかった。

「ど、どうしたっ？・・・・・・何故、そうまで闘争心を現す・・・」

さらにグランチャーは、慧音の精神に呼びかけてくる。
その声は、自分の抱く敵意に、慧音を賛同させようとするものだった。

「そ、その意志を理解しろって・・・・・・それはできない。君のその意志は、危険なものだ・・・今分かった、やはり私は、君のことをよく思うことはできそうにない・・・・・・そうだな。そうである以上、もうここにいることはできないだろう・・・お互い、離れた方がよさそうだ・・・・・・・・・一応、君のことを認めたいとは思っていたんだが・・・」

グランチャーの意志を慧音が拒絶すると、彼の者は、彼女に対し抱いていた不快感を、より大きく放出していた。
賛同する気がなければ、去れ。
そう言う声も聞こえた気がする。
慧音の方も、これ以上グランチャーと話をすることはできないと考えた。
初めは、単なる先入観として、決して確かな形をもってはいなかったグランチャーに対する疑念も、今では確固たるものになっていた。
妹紅には悪いが、このグランチャーを、どうしてもいい奴だと思え

なくなっていた。

閉ざされていた装甲が再び開き、慧音はすぐさま穴を潜って、グランチャーの胎内から外に出た。

そうして、そのまま装甲板から飛び降りるように地面に足をつけた彼女に対し、妹紅が、どうしたんだという具合に聞いてくる。

「グランチャーの奴、なんだか機嫌がよくなかったみたいだが・・・もしかして、何か変なことでも言ったのか？」

「・・・否定はできません。初対面で、上手く話ができませんでした・・・でも、確かに彼は、悪い奴ではなさそうです。一応、何事もなく、穏便には事を終わらせてくれましたから」

その慧音の言葉は、自分自身に言い聞かせたものであった。

確かにグランチャーは、決して悪しきものではない、ように思える。

実際彼の者は、こちらの言う事に協調してくれるし、自身の感情を抑えることもできていた。

ただ、突如爆発した、何者かも分からない、敵と呼べる者に対する敵意は、明らかに異常だった。

まるで、その敵意と闘争心だけが、生命のエネルギーの根幹であるかと主張するようでさえあった。

慧音が考えていた、グランチャーとは戦うためにのみ存在しているものではないのか、という考えが、確かなものに思えてきた。

決めつけるのはよくないかもしれないが、あれに乗っているのは、危険なことだ。

どうしてもそう思えてしまった。

慧音は思わず妹紅に、グランチャーとは関わらないように、呼びか

けようとしていた。
「妹紅・・・あのグランチャーには・・・」
「ん？」
「・・・いや、何でもない・・・」
しかし慧音は、その先の言葉を言う事ができなかった。

慧音はともかくとして、妹紅はグランチャーに対して好意的に思っているようだ。
慧音が胎内に入った時は、異様なまでの闘争心と不快感を露わにしていたが、もしかしたら妹紅と一緒にいるときには、あの時よりもずっと落ちついているかもしれない。
ただ今回だけが異常だった可能性もある。
それに、戦うことそのものが目的だとして、その目的にだって、何らかの理由があるはずだ。

そう、確か妹紅は、グランチャーが戦うことで何かを得ようとしているらしいと言っていた。
その何かを知ることができれば、グランチャーの見せたあの闘争心だって、認めることができるのではないか？

慧音は、妹紅に対し、グランチャーとの関わりをなくすように言わなかった。
その代わりに、こう伝える。
「妹紅・・・グランチャーに対し、よくしてやってください・・・だけど、グランチャーが何かよからぬことをしでかすようなら、止めてやった方がいい」
「もちろん、そうする」

妹紅のその返事を聞きつつ、慧音は、機会があればもう一度、グランチャーに対し対話を試みようと考えた。

そうして、戦うことの先に、何があるのかを確かめてみたかった。

だが・・・

グランチャーのあの闘争心に触れてからというもの、慧音の身体の奥底には、何か不気味な感覚があった。

自分の身体の奥底から、何かが呼び起こされるような気分だ。

この気分の正体も、確かめなければならないような気がした。

でなければ、妹紅に対して言った、『何かよからぬこと』が、実際に引き起こされてしまうような気がしたからだ。

慧音がこの感覚を抱いていて、妹紅がそうでないという確証だって、どこにもなかった。

第四話　その2

紅魔館に、謎の巨人、グランチャーが現れ、咲夜と美鈴がその対処を任されてから、二日が経った。

館の敷地の前で仰向けになって倒れたグランチャーも、時間が経てば回復し、どこかに去るなり、その場で暴れ出すなりするだろうと考えられたが、そんな様子は一向に見えてこない。
グランチャーは、いつまでもその場に倒れたままで、回復の兆しを見せなかった。
むしろ、益々体力を失っていっているように、二人には見えた。

昨日は、何かあるかもしれないと、試しに一度、紅魔館から離れて小島の周囲をいろいろと捜索してみた。
そうしたところ、湖近くの畔（ほとり）に、ひとつの巨大な棒状の構造物が発見された。
どういうものなのかは分からないが、何かグランチャーとの共通点があるように感じたので、メイド達を数人呼び寄せて、グランチャーの前まで運んでいった。
グランチャーの身体に比べれば比較的小さい構造物だったので、メ

イドが十人前後いれば、運び出すことはそれほど苦ではなかった。
構造物を仰向けに倒れたままのグランチャーの横に置いて、メイド達は帰す。

グランチャーはやはり、この構造物のことを知っていた。
これは、グランチャーが戦うための武器だそうだ。
そして、時が経つにつれ、段々と咲夜に対する警戒を解いていったグランチャーは、確かに、自分が敗北していることを語ってくれた。
咲夜が驚いたのは、このグランチャーが、まだ生まれて間もないということだった。

生まれてすぐ、グランチャーはある二体の敵に襲われ、戦うことを余儀なくされた。
どうにかして敵を撃退することには成功したが、グランチャーも体力を消耗し、気がついた時には、紅魔館の壁に衝突していたという。
そしてそれからは、最早立つこともできないほどに、憔悴しきっていた。
その敵の正体は分からないが、グランチャーはそれらの存在を、襲ってきたからという理由だけでなく、もっと奥の方にある、本能の部分で、敵であると認識していた。

結局、武器となるものを発見するという収穫はあっても、グランチャーが蘇ることはなかった。
おそらく後はもう、このまま死を待つだけなのだろう。
気がつけば、グランチャーの鎧のような身体の一部が、灰色に近い色に変色し始めていた。
赤々とした血の色が、少しずつ失せていっているのだ。
どこかに生気のようなものを感じさせていた肉体も、この時には、完全にただの鉱物・・・いや、脆い岩の塊のようになっていた。

美鈴にはその様子が、グランチャーの死の実感として見えたようで、非常に物悲しそうな表情しているのが、咲夜の網膜に焼きついていた。

そうして二日目、今に至る。
グランチャーは益々弱り、身体の変色も広がっているようだった。
彼の者が崩した煉瓦の修理も、そろそろ始まろうという時期だった。

死にゆくグランチャーの様子を傍から見守るばかりだった美鈴が、咲夜に、
「どうにかする方法はないんでしょうか・・・」と聞いてくる。
それには咲夜は、
「方法はあるかもしれない・・・しかし重要なのは、グランチャーの気持ちの問題でしょう」と応えた。

グランチャーはすでに、自分に迫りつつある死を受け入れていた。
敵に敗れ、満身創痍で今に至り、再起することもできない以上、最早どうすることもできない。
ならば、みっともなく死を恐れるのではなく、むしろ受け入れた方がいい。
そんな考えが、グランチャーの死をより早めていくようだった。
こうなってしまえば、ただでさえ見当もつかない咲夜達に、グランチャーを蘇らせる方法など分かるはずもなかった。

今はもう、死にゆくグランチャーを放っておくことしかできないのか・・・

そんな考えが脳裏をよぎったその時、二人の下に、パチュリーがやってきた。
紅魔館の図書館で、グランチャーの生態を知る手掛かりを探していた彼女が、あることに気付いたらしく、咲夜達に報せに来たのだ。

彼女は言う。
「世の中には、他の生物を寄生させることで生きる生物がいるそうよ」
「・・・そ、それで？」と美鈴。
「多分この、グランチャーとやらも、その生物の一種である可能性があるわ」
「確証は」と咲夜が聞くと、
「ないけど、当のグランチャーに聞けば分かるんじゃないかしら」
と応える。

それを聞いた咲夜は、その次の瞬間には、グランチャーを問いただしていた。
「さっきの話は聞いたわね、グランチャー。どうなの？」

グランチャーは、確かにその通りだと応えた。
自分は、胎内に他の生物を宿すことで生存していると。
例えばそれは、咲夜や美鈴でもいいのだ。
逆に今は、自分の胎内に他の生物を宿していないので、生命活動が破綻してしまっているという。

咲夜は言う。
「なら、私が貴方の胎内に宿れば、貴方の生命を繋げることができるかもしれない・・・どうすればいいの？いや・・・そもそもなんで、すぐにそうしなかったの・・・そうしなければ、自分が死ぬこ

とを知っていながら・・・」
だが、咲夜のこの言葉を、グランチャーは拒んだ。
「何故拒むっ・・・私がいれば蘇ることができるのは確かなのね・・・なら、むざむざ死を迎えるより、生き残った方がいいでしょう・・・貴方を撃った敵にも、復讐することができる・・・」
グランチャーは、咲夜を拒む理由を語る。
「・・・今更戦って、勝てる相手ではないって・・・二度敗北するなら、死を受け入れた方がいい・・・それに、私を巻き込むことはできない・・・・・・何を今更・・・っ」

生き延びる術があるというのに、それをしようとしないグランチャーに対し、咲夜が、憤りすら感じる。
だが、その次の瞬間だった。
穏やかな目線で迫り来る死を諦観していたはずのグランチャーが、突如、その魂を震わせ、声や音としては聞こえない、心に響く叫びを発した。

「・・・来たって、何が・・・・・・敵が!?」
グランチャーの意識は、遥か向こう、妖怪の山へと続く湖の上空へと向けられていた。
「何なんですぅっ!?」という美鈴の声は無視して、咲夜も、グランチャーが見ている方向に眼を向ける。
美鈴とパチュリーも、それに釣られて、同じ方を向く。

彼女らの視界には、まだ昼になりきっていない日差しの空に浮かぶ、いくつかの影が映った。
その影は、どこかグランチャーと似ていた。
いや、似ているというものではない、そっくりだ。
細部は違うが、それこそ単なる個性の違いというだけで、グランチャーとまったく同種の生物であるように見えた。

遠目から見たのでは、本当にその細部の違いさえ曖昧にしか判断できない。
グランチャーと体色が違うらしいことだけは、はっきりと分かった。二つとも、白っぽい色をしている。
その影は初めは小さなものであったが、段々とこちらに近づき、大きさを増していく。
パチュリーが、「あれって・・・」と呟き、美鈴が叫ぶ。
「グランチャーの仲間かっ?」
咲夜はそれに、焦燥に駆られた声で、
「馬鹿な!グランチャーはあれを敵だと言っているのよっ」と言い返した。

咲夜の焦燥には理由があった。
彼女は直感的に理解した。
空から迫るあの影は、グランチャーが戦った敵と同じものだ。グランチャー自身、そう言っているのだから。
そして奴らは、未だ完全に倒すことができていないグランチャーに、止めを刺しにきた。

このままではまずい。
今のグランチャーでは、逃げることさえできないだろう。
彼の者が、本当にその生命を終えてしまう。
彼の者が望む結果になってしまうというのか。
咲夜は、むざむざそうさせるつもりはなかった。

彼女は、グランチャーへと呼びかける。
「見なさい、雪辱を晴らす機会が向こうからやってきたわよ。このままあいつらにいいようにされて、滅ぼされていいというの?・・・」
しかし、グランチャーは咲夜の言葉を尚も拒む。

だが、咲夜はそれでも、固く言い続けた。
「・・・逃げろだって?そうはいかない・・・私はここに居させてもらう・・・どうする?このままだと、あいつらは貴方を攻撃する。それに巻き込まれて、間違いなく私は死ぬでしょうね」

「あいつら、近づいてくるわ・・・」というパチュリーの声に、慌てる美鈴が続く。
「あれが敵っていうなら、攻撃してくる・・・咲夜さん、どうしますっ?さ・・・咲夜さぁーんっ!」

「己に誇りを持つなら、グランチャーっ!死なせるなっ!私を守る戦いをしなさい!」
咲夜の叫び声が響いた、その時だった。

グランチャーの奥に眠っていた闘争心は呼び覚まされ、その股間部の装甲が、乾いた音と共に開いた。
三人の目線が、一斉にそちらの方を向いた。

「な、なんだぁ~?」と、素っ頓狂な声を出す美鈴に、パチュリーが返す。
「・・・もしかしてあそこに、入れってことじゃないの?」

そんな声を聞くよりも先に、咲夜はグランチャーの身体の傍まで駆け寄ると、勢いよく地面を蹴って、横倒しになっているグランチャーの腰にまでひと息に飛び乗った。
「なにする気ですぅーっ?」
「咲夜、行くのね?」と呼びかけてくる二人に向かって、咲夜は大声で返す。

「美鈴!パチュリー様を連れて、出来る限り安全な場所へっ。館の

中のみんなにも、伝えておきなさい」
「咲夜さんはどうするんですっ！」
「戦うに決まっているでしょう。グランチャーと」
「勝てるんですかぁっ？敵は二つもいるんですよっ？」
「勝てるわ。完全かつ瀟洒に・・・」

美鈴はこれ以上はなにも言わず、ただ一言、
「・・・お気をつけてーっ！」とだけ言い残して、パチュリーと共にこの場から去っていった。
その後ろ姿をチラリとだけ見て、咲夜は、すぐ足元にぽっかりと空いていた大きな穴の中へと、つま先から飛び込んでいった。

同時に、グランチャーの胎内へと入りこんだ咲夜は、その場に充満する闘志の熱に包み込まれる。
胎内を覆う奇妙な質感の壁面に、そのまま寝そべるように身を預けると、グランチャーの発するこの闘志が、咲夜にも戦う気概を喚起させていた。

先程まで、大人しく死を受け入れていたのが嘘のようだ。
グランチャーの魂は今、完全に蘇っていた。

咲夜は、グランチャーを賞賛する。
「熱い・・・やはり貴方は、戦士だった・・・」
すでに、戦う覚悟は決まっている。
石のように脆くなりつつあったその肉体も変質を止め、鮮やかな血の色を、より色濃くしていくのが分かる。

だが、先程グランチャーが言っていたように、彼の者の肉体の疲弊は、かなり深刻なものであり、咲夜が胎内に入ったことで、確かに死に一直線に進むことは止められたようだが、このまま、一度自ら

を打ち倒したあの二体の敵に対抗できるかは、分からなかった。

まずは、満身創痍のグランチャーを蘇らせなければなるまい。
咲夜にはその方法が、確証はなくとも見当がついていた。
グランチャーが咲夜の身体を胎内に取り込んだのは、何も、最低限生存するためだけではないはずだ。

「グランチャー・・・貴方は私を胎内に入れることで、私の生命を吸い取ることができるのではなくて？」
咲夜の言う通りだった。
グランチャーは、咲夜の身体を取り込むことで、彼女の思考を戦闘にフィードバックし、彼女の体力、さらに言えば、生命力（オーガニックエナジー）を吸収し、己の力を高めることができた。

壁面に映し込まれる外の光景の中、二つの影がいよいよその細部まで分かるほど近くに見えてくる中で、咲夜はグランチャーに言った。
「ならグランチャー、私の生命を吸って。そして、勝つのよ・・・心配することはない。死ななければ、何をしたって・・・・・・そうよ。私も、貴方の復讐に力を貸す・・・さぁ！」

壁面に映る二体の敵は両方とも、細長い棒状の物体を持っていた。
その持ち方を見るに、恐らく銃器として使うものだろう。
あれに狙われ、グランチャーは一度敗北したのか・・・

そんな認識をするなかで咲夜は、自分の持つ生命力が、グランチャーに吸収されることによる疲労を感じていた。
だが、それに入れ替わるように、グランチャーの肉体に力が宿っていくのも分かった。
「そう、グランチャー・・・遠慮せず、私の生命を糧となさい・・・・・ぐっ・・・」

本当にグランチャーは、一切遠慮することなく、咲夜の生命力を吸っていた。
たがその分、憔悴していた肉体は、一気に本来の力を取り戻していく。

いや、それだけではない。
グランチャーは、自らの生命を捧げてまでこちらに協力する咲夜に、多大な信頼を感じていた。
その信頼に応えようとする意志が、グランチャーの中の闘志を、闘志以上の領域にまで高めていた。
これなら、どうにか対抗できるかもしれない。
「よし、グランチャー、いけるっ」

が、咲夜がそう意気込んだその時だった。

敵の動きが、思っていたよりもずっと早かった。
こちらが行動を起こそうとするその瞬間には、二体の白い巨人が、硬質な棒状の物体の先端部。そこに穿たれる空洞を、こちらに向けていた。

「うっ！」
咲夜が呻く方が早いか否かその空洞から、奇妙な色彩の、鋭さを感じさせる光が放たれ、それが矢となってグランチャーに向かった。

今から回避しようとしても、遅すぎる。
咲夜ひとりならば、彼女自身の能力もあって、これしきの攻撃は難なくかわせるだろうが、グランチャーと一緒にいたのでは無理な話だった。

まずい、直撃だ。

だが、その一瞬、グランチャーは地面に寝かしていた左手を前へと突きだし、その五本の指をばっと開いた。
その時咲夜には、開かれた手のひらから、何か薄い光の膜のようなものが広がり、グランチャーの身体全体を包み込むように見えた。

敵が放った二本の光の矢がグランチャーの身体を突き刺し、咲夜の視界が、一瞬真っ白に感光する。

いや、突き刺さってはいない。
一瞬だけ網膜を突いた光は、その次の瞬間には、咲夜の視界の中で、四方へと拡散していった。
グランチャーを包む薄い膜が、光を押し退けているのだ。

「これは・・・っ」
思わず叫ぶ中で咲夜は、この薄い膜が、グランチャーの中の生命力（オーガニックエナジー）が変質したものであることを理解した。
咲夜の生命を吸い、また、自らの生命をも高めた結果得た力・・・
チャクラとでも呼べるものに・・・

「《チャクラシールド》とでも言うのっ？」

二体の敵が、グランチャーを一撃で撃破できなかったことに怯みつつも、続けざまに光の矢を放ってくる。
たが。

向こうは大方、グランチャーがすでに虫の息であり、一撃で容易に始末できると踏んでいたのだろう。
しかし実際は、始末するどころか、ダメージすら与えられていない。
そのことが呼び込んだ敵の隙は、咲夜にとっては永遠に近いもので

あった。

敵が光を撃ち放つよりも先に、グランチャーの右手が、傍らにあった銃、《ソードエクステンション》を手に取りつつ、寝たままの姿勢でその場から飛び上がり、退避していた。

一発の光の矢がグランチャーの足を掠め、もう一発は遥か下方を通過し、紅魔館の敷地と外を隔てる壁に命中した。

咲夜は「あっ！」と声を上げ、グランチャーが一部を崩壊させた煉瓦の壁が、より盛大に砕かれ、辺りに飛散していく光景に目を向けた。

「メイド達の仕事を増やして・・・っ」

こんなことを言えるあたり、すでに咲夜には一切の恐怖も、敗北の可能性を感じることもなかった。

そしてグランチャーもまた、同じであるようだ。

先程まで、勝てる見込みがないと言っていたのに、今は最早、負けることの方が考えられなかった。

確証はないし、これは、自信とも違う感覚だ。

ただ、何としても勝利し、雪辱を晴らすという執念が、勝利を確信させていた。

「仕留めるっ！」

敵の攻撃を回避したグランチャーは、すかさず敵の側面へと回りこむように、宙を飛んだ。

チャクラシールドで攻撃を防がれただけでなく、続けざまの攻撃を回避したグランチャーの動きにさらに戸惑う様子を見せる二体の敵の内、近い距離にいた一気に向けて、反撃のソードエクステンションを放つ。

敵が放ったのと同じ鋭い光が、吸い込まれるように白い肉体へと伸び、浴びせられる。
しかし、敵もこちらと同じく、チャクラシールドを展開しているらしい。
真っ直ぐに伸びた光の矢は、そのまま敵を貫くことはなく、拡散してしまった。

しかし、グランチャーに乗っていると分かる。
チャクラシールドは、オーガニックエナジーを物理的な障壁として展開するもので、つまり簡単に言えば、攻撃を防ぐことができるかわりに、体力を消耗するということだ。
あの二体の敵も、その姿を見れば、グランチャーと似た生態を持つものだと判断できる。
となれば、こちらと同じく、チャクラシールドで攻撃を防御することにも限界があるはずだ。
連続して攻撃を与え続ければ、シールドが展開できないところまで追い詰めることができる。
そうでなくとも、チャクラシールドで防ぎきれない攻撃を浴びせれば、一撃で葬ることも可能だろう。
例えば、グランチャーの持つソードエクステンション。
その名の通りこの武器は、銃器としてだけでなく、銃身にチャクラを集中させれば、強力な斬撃を繰り出すことができる。
密集させたチャクラの光を叩きつければ、シールドも破れるだろう。

グランチャーの攻撃をチャクラシールドで防ぎつつも、再び大きな隙を見せた敵に接近を試みようとする、その時だった。
咲夜は突如、何者かの声を聞く。

（うわっ！こいつぅ、よくもぉーっ！）

「・・・っ!?」

その声に気を取られ、咲夜は、敵に接近する行動をグランチャーに起こさせることができなかった。

しかし、これ幸いと敵が放つ反撃のチャクラ光に、みすみす当たるような愚行はしない。

咄嗟に、紙一重のところでグランチャーに回避させるが、咲夜は、戦闘に集中させていた思考を、先の一瞬聞こえた何者かの声に向けることを余儀なくされた。

「今の声は・・・グランチャーではないわね・・・」

咲夜の声と共に、今度は別の声が、敵の放つチャクラ光の飛来と共に聞こえた。

（こいつ、ホントにこの前のと同じ敵なのかぁ～っ?）

再度グランチャーを回避させつつ、咲夜はこの声が、自分のいる胎内の壁から反響するように聞こえていることに気づいた。

が、先程言ったように、決してグランチャーの声ではない。

どうやら、音の振動が空気を伝い、グランチャーの胎内にまで響き渡ったようだ。

しかしその音は、実際に空気を震わせることによる聴覚的な音ではない。

グランチャーは、オーガニック的な意識の波が身体に伝わり、それが反響となって、咲夜に聞こえているらしいということを伝えてくる。

つまりこの声は、あの二体の敵が発しているということだ。

だとすれば、あの白い、グランチャーと根幹を同じとする白い巨人の意志だというのか・・・

いや、何か違う。

「まさか・・・っ」
改めて考えてみれば、あの敵がグランチャーと同類だと考えるならば、真っ先に想定しておくべきことがあった。
あれにもまた、咲夜と同じように、何者かが乗りこんでいる・・・かもしれない。
その考えが頭を過ぎった瞬間には、咲夜は、あの二体の敵に乗っているであろう何者かに向けて、大声で呼びかけていた。
ただ叫ぶだけで向こうに聞こえるのかは分からなかったが、これば かりは、グランチャーにどうにかしてもらうしかなかった。
彼の者に、咲夜の声をオーガニック的な波として放出させる。

「その者！聞こえるか、応えなさいっ」
咲夜のこの声に、驚愕した様子の二つの声が返ってきた。
（なにこいつーっ！？）
（人が乗ってるなんて聞いてないよ！）
「聞こえるなら応えなさい！貴方達、何のつもりっ？何故グランチャーを攻撃する」
（んなこと知らないわーっ！）
「何・・・っ」
飛んできた野蛮な返答を聞いて、咲夜は、おそらくこの声の主達が、妖精であるらしいと判断した。
妖精といえば、紅魔館の方からでも、時々湖の上で遊んでいるのが見えるし、時折、お人よしな美鈴が館の中まで連れてくるようなこともあった。
そのため咲夜にも、顔を知っていれば、声も聞きおぼえている妖精が何匹かいる。
だがこの妖精達は、そういう者達とは別の妖精らしい。
湖より少し遠いところに棲んでいる妖精なのだろうか？

そういうことは今はどうでもよかった。

妖精相手に話をするのは、会話がうまく成り立たず気が乗らない咲夜だったのだが、こんな状況ではそういうことを言っていられない。
咲夜は、続けて叫んでいた。
「何者だ、貴方達っ？」
（ブレンパワードだぁー！悪い奴をやっつける！ブレンを守る！）
「《ブレンパワード》・・・っ」
もう一匹の妖精が叫んだその名に、グランチャーが反応した。
この名こそ、彼らが本能的に敵と定める者達の名だ。
そして向こうもまたこちらのことを、本能的に敵と定め、だからこそ攻撃してきた。
咲夜が問いただしたところで、答えがないのは当然だった。
なんせ、理由などなかったわけなのだから。

となれば、最早口論の必要はない。
グランチャーの意志はすでに、敵の撃破にのみ集中していた。

直感的に思ったことでしかないが、あのブレンパワードという二体の敵は、グランチャーに比べれば、遥かに戦闘に適応していないようだ。
こちらに叫んできた妖精達の声は野蛮な物言いではあったが、その声からは、何か優しく、甘い考えを感じた。
ストイックになりきれていないという印象を受けた。
そしてそれはそのまま、あのブレンパワードという敵の性格であると考える。

こちらは違う。
考えることをひとまず止め、グランチャーの意志に身を委ねた咲夜は、己の中に、闘志を超え、敵意を超えた、『殺意』とも呼べるものが沸き上がってくるのを感じた。

相手が妖精なら、最悪殺してしまっても、元通りに蘇る。
グランチャーとブレンパワードも、お互いを敵だと認識しているなら、戦いを止めることはできない。
そうである以上・・・

咲夜の中の殺意は、熱いものではなかった。
むしろ逆に、冬の湖に浸したナイフの如く、冷めていて、鋭さがあった。

ブレンパワードに乗り込んでいる妖精の、
（あんたには悪いけど、少し痛い目見てもらうよ！）という声が聞こえる。

確かに、咲夜の考える通りだった。
この妖精達は甘かった。
痛い目だとか、そういう懲らしめるような表現をしている内は、戦闘に赴く気概において、咲夜のグランチャーに完全に負けていた。

「やるか・・・」
静かに呟く咲夜。
その『やる』という言葉の意味は、その言葉の響きに比べれば、どこまでも恐ろしいものだった。

彼女の声と共に、グランチャーが、俄然空を飛ぶ燕の如き速さで一体のブレンに接近していく。

（うわっ！）
（速いって、はやいよっ！）
妖精達の驚嘆と共に、ブレンパワードがチャクラの光を放つ。
当然グランチャーはそれを最小限の動きで回避し、何事もなかった

ように接近を続ける。
ブレンパワードもまた、こちらの動きに完全に意表を突かれたらしく、チャクラ光を放つだけで、ほとんど棒立ちになっていた。
こんな状態では、懐に飛び込めない方がおかしかった。

ブレンパワードに肉薄したグランチャーは、右手に握るソードエクステンションの銃身にチャクラを集中させ、敵の腰部目掛け、横なぎの一閃を放つ。

（こ、怖いよぉー！けへ・・・っ！・・・・・・――）
奇妙な悲鳴と共に、グランチャーと同様に、その場に妖精がいるであろう股間部が抉られ、ブレンパワードの肉体が二つに両断される。
グランチャーが急ぎその場から離脱すると、二つに断たれたブレンの肉体が、粉のようになって爆発を起こす。

咲夜とて、人間にすら見くびられるほどの美鈴のお人好しは分からなくもなかったし、平時の彼女なら、いくら蘇るからといって、妖精を殺めることには躊躇(ためら)いがあるはずだった。
だが、今の咲夜には、自分とグランチャーが殺めた妖精に対し、何の感慨もなかった。
それが当然のことだと思えていた。
すでに彼女の殺意は、もう一体のブレンパワードの方へと向いていた。

しかし、向こうもただ、やられてばかりではいないようだ。

（わぁー！）
妖精の叫び声と共に、グランチャーの背後から接近したブレンが、右手に握る銃、ブレンバーを高々と掲げ、そのまま勢いよく唐竹割りを放ってくる。

しかし、グランチャーは素早く背後を振り返りつつ、降り下ろされる刃をソードエクステンションで受け止めた。
金属が衝突する音と共に、収束されたチャクラ同士がぶつかる、ブン、という音が鳴り響き、斬撃は阻まれる。
だが、そんなことはお構い無しに、ブレンはさらに連続でブレンバーを降り下ろし、ソードエクステンションの銃身を叩いてくる。
最早がむしゃらだ。
こんなことをしてどうなるものでもない。

（よくもやったなーっ！あたしのブレンは絶対にやらせないぞー！）
「ブレンパワードとやらの生命が大事なら、初めからグランチャーを攻撃しなければよかった・・・！それしきの不完全なアンチボディでっ」
妖精の叫びに咲夜が返したその言葉は、咲夜自身でさえ初めて口にしたものだった。
しかし、その意味は、よく分かる。
グランチャーは今になって、自らが何者かが生み出した抗体、すなわち《アンチボディ》であることを思い出した。
そして、あのブレンパワードもまた、同じアンチボディである。

ただ、抗体として生み出される母体が違った。
その異なる二つの母体から生み出された異なる二つの種族（アンチボディ）は、血液型のAとBの違いの如く。例え家族の臓器であっても、移植すれば破壊しようとする免疫機構のごとく、お互いを排除し合うことを、プログラムのごとく決定されていた。
それこそが、グランチャーとブレンパワードが、本能的に戦う理由のひとつか。
そして、ブレンパワードの母体である、『その者』の名は・・・

咲夜は叫ぶ。
「オルファンに伝えておきなさい。いずれ必ず、グランチャーが貴方を打ち倒しにいく」
（オ・・・オルファンって・・・何・・・何いってんのあんたっ？）
「そんなことすら分からないような出来損ないは、滅びろということよ！」
咲夜の叫びに続いて、ブレンの降り下ろす斬撃を受け続けていたグランチャーが、空いている左手を握りしめ、ブレンの胸へと叩きつけた。
鈍い金属音が響き、ブレンの肉体が大きくよろめく。

それだけではなかった。
拳が命中すると同時に、腕部を覆っていた装甲を走るスリットから、圧縮されたチャクラが刃となって飛び出す。
それが、ブレンの胸に突き刺さり、貫いた。
ソードエクステンション以上に鋭いチャクラの光を吸い込んだブレンの胸から、小さな爆発が吹き出し、石灰の粉のような煙が四散していく。

空気が弾けるような音が響き、ブレンが後方へと吹き飛ばされていく。
同時に咲夜の耳に、妖精の叫び声が聞こえる。
（ブレェーンっ！！）

その叫びは、妖精を殺めたことに何の情も示さなかった咲夜でも、悲痛なものだと感じられるものだった。

咲夜がその身をグランチャーに捧げ、この一瞬の闘争を共有しているのと同じように、ブレンもあの妖精と、生命を共有しているのだろう。

咲夜は、そのようなことだけは、ブレンであっても認めることはできた。
が、それだけで生き残ること、生き残らせることができるほど、甘いものでもない。

咲夜は冷酷にグランチャーに命じ、そしてグランチャーもその指示に応え、冷酷にブレンパワードへと接近する。
そして、胸部の装甲が剥がれ、いくつもの金属板が積層したような肉体にも穴が空いた痛ましい姿のブレンパワードの身体を、下からすくい上げるように切り裂いた。

（こんなこと・・・っ――――）
妖精は、痛みを感じる間もなくソードエクステンションの光に焼かれ、ブレンの肉体もまた、股間部から、左斜めに胸のあたりまで切り裂かれた。
苦痛を感じているのか、あるいは・・・それすらも伺い知ることのできない頭部に、グランチャーが蹴りを浴びせ、ブレンの肉体が、地面に向かって落下していく。
だが、地面に衝突するよりも前に、ブレンは己の肉体が粉砕される爆発を膨れ上がらせ、巨大なひとつの煙の塊へと転じた。
後はやがて、風に運ばれ、空気と混ざり合い、その生命の余韻すらも消し去ることだろう。

戦いは終わった。
終わってみれば、呆気ないものだ。
グランチャーが一度敗北したのが嘘であるかのように、彼の者は二体のブレンパワードを圧倒し、勝利を収めた。

己が撃破した敵が発生させた煙の雲を見つめていた咲夜は、ここでようやく、自分がグランチャーにその生命をぎりぎりのところまで捧げていたことを思い出した。
疲労困憊の状態だったのが、グランチャーとブレンとの戦いに振り回されていたのだ。
最早そのまま昏倒したっておかしくはない状態だった。
「・・・うっ」
途端に、目眩すら起こしそうになるほどの疲労が遅い、彼女は、力なく胎内の壁に身体を預け、座りこんだ。
「今頃になって・・・疲れが出てくるとは・・・」
そう呟きながら、咲夜は、ほんの少しずつながら、闘争心と殺意以外の感情も思い出していた。
思い返してみれば、自分の手で、妖精を二匹殺したわけだ。
その事実を改めて咀嚼し、咲夜はさらに呟く。
「・・・あの氷の妖精や、その取り巻きとは違ったからこそ、遠慮することはなかったけど・・・・・・知り合いじゃなけれな人間でも妖精でも、何でも殺せるというのも・・・」

かくいう彼女がいたからこそグランチャーは勝利することができたとも言えるわけだが、それでも彼の者は、咲夜に対し、感謝するようなことはなかった。
だが、咲夜もそれで構わなかった。
自分とグランチャーの関係は、お互いを感謝するようなものではない。
ただ、事実として共生し、協力し、共に敵を倒す。という、それだけのことだった。
だが、その事実こそ、咲夜とブレンを、感謝の言葉も必要ない、一蓮托生とも言える関係にしているのは間違いなかった。
そしてグランチャーのこの戦いにも、目的があることも分かった。

「ひとまず・・・紅魔館に戻りましょう・・・皆が心配しているかもしれない」
咲夜の言葉を聞き、グランチャーは、紅魔館の方へと戻っていった。
ブレンとの戦いの間に、大分離れたところまで移動してしまっていたようだ。
館の安全を考えればそれでこそいい。
が、それでもまだ、敵が放ったチャクラ光の流れ弾が、どこかに当たっていないかという不安もあった。

しかし、館の姿がすぐ近くにまで見えるようになれば、その心配も無用だったということが分かった。
館のその威容には、何の異変も生じていない。
咲夜はグランチャーを紅魔館の敷地の中にまで入らせ、極彩色の館の傍にまで近づかせていた。

少なくとも咲夜個人には、このグランチャーを部外者扱いするつもりはなかった。
一度生命まで捧げた相手を、突き放すことはできなかった。
となれば、紅魔館のその深紅の姿を間近で見せるのも当然のことだろう。

館の上空に移動し、そこから少しずつ高度下げ、地面へと降りていく。
咲夜の眼には、館の玄関から、美鈴やパチュリーとこあ、さらに、レミリアとフランが飛び出してきて、ブレンの足元から何やら叫んできているのが見えた。
どうやら、いろいろと賞賛の声を向けているらしかった。

その様子をちらりとだけ見つつ、咲夜は次いで、目線を正面へと向け、どことも言えない虚空へと眼を向けていた。
しかしその視線の先には、確かにあるものが見えていた。
形も大きさも色も、何もかも分からないが、とにかく、その存在そのものが彼女の眼には見えた。

彼女は、身動きすることもできないような疲労感に苛まれ、眠るようにグランチャーの胎内に身体を預けながら、呟いていた。

「《オルファン》・・・それがグランチャーの敵・・・そして、その奴が生み出す《ブレンパワード》・・・・・・それが、この幻想郷に・・・」

戦いはこれで終わりではない。
おそらく、ブレンパワードは先程の二体だけではないだろうし、グランチャーだって、この一体だけではないはずだ。
そして彼らは同じアンチボディとして、種族そのものの本能として戦う。
だというのなら、むしろ今こそが始まりなのだろう。

咲夜の身体には、これから始まる、グランチャーとブレンパワードの戦いに赴く、言い様のない高揚感のようなものがあった。
それが、咲夜当人のものではなく、グランチャーから与えられ、まるで薬物か何かのように作用しているものだということは、彼女には分かっていた。
グランチャーには、そういう性質がある。
搭乗者の人格に少しずつ作用し、本来ならばあり得ないような感情すらも呼び起こす。

それが、闘争心であった。
だが咲夜は、それを承知であえて、彼女の人格を変質させるほどのこの闘争心を受け入れ、グランチャーと共生することを決めた。

それは、こうやって一度、彼の者と生死を共有したという責任感からくるものでもあったし、
それ以上に、グランチャーに好意を持つことができているからであった。

そしてグランチャーは、ブレンパワードを、そしてオルファンを打ち倒したその先に、何か偉大なものがあると言っていた。
その名を．．．

「見つけようじゃない。グランチャー．．．ビープレートを．．．．．．そして私が、貴方達を新しい世界へと連れていってあげましょう．．．」

第五話『地の底に集う者達』　その１

さとりがブレンと出会ってから一週間という時分になって、文達からの要請を受けた、にとりを筆頭とする河童の一団が地底にやってきた。
にとり達からすれば、天狗の頼みでなければ来たくもなかった地である。

のんびり観光したりせず、パルスィの案内の下、地霊殿までまっすぐ向かってきた。

玄関から屋敷に入ると、すぐにさとりが出迎えてきてくれた。
ついでに、にとり達を呼んだ当人である文と、魔理沙もきた。
にとり達河童の一団と、さとり達が一同に会してようやく少しだけ閉塞感を感じるあたり、地霊殿の無駄な広さが実感できるようだった。

さとりの、
「ようこそお越しくださいました」という挨拶を聞きながら、にとりは、さとりの持つ能力のことを思いだし、つい考えてしまった。
その心の声を聞いたさとりがさらに言う。
「えぇ・・・不気味でございましょう。それが当たり前の反応です

ものね、気にしませんよ」

早速雰囲気が気まずくなるのを感じて、にとりは辟易しながら返した。

「そういうことを言わなけりゃ、可愛げもあるのになぁ」

「そうですか」

出てきて早速だがにとりが可哀想になってきたので、場を取り繕うように、文が続いて言う。

もっとも、さとりだって意識して場の雰囲気を悪くしようとしているわけではないのだから、彼女もまた可哀想ではあるが。

「どうも～、にとりさん。ホント、よく来てくださいました～」

「天狗様の頼みなら、聞かないと後が怖いですからねぇ」

「分かってるぅっ」

「それに、ブレンパワードでしたっけ？あれにも興味ありますからね」

それだけ言ってにとりは、あることに気が付いた。

この前こちらに協力を要請してきた天狗は、文の他にあと一人いたのだが、今はそのもう一人の天狗がいない。

にとりは気になって、文に問うた。

「そういや、ほたてさんは？」

「はたてです。今は妖怪の山に報告にいって、我らが長の天魔様からの次の指示を受けてきているところです」

「あぁ、そうっすか・・・・・よう魔理沙～！」

文の応えには曖昧に返事しつつ、にとりは魔理沙に向かって、こちらから挨拶していた。

彼女と魔理沙は、地底に何かあった時に調査をけしかけ、けしかけ

られるぐらいには仲がよかった。
というか、魔理沙は会ったものなら、大体誰とでも仲良くなれた。

にとりの声に魔理沙も、
「元気そうじゃないか」と返す。
それに、「まぁね」と続けたにとりだったが、突然その身体を、
「うぶるる・・・」と震わせた。
今更その理由は、考えるまでもない。

「なんかさむい～・・・」と、声も身体と同じく震わせるにとりに、さとりがその寒さの原因を語る。
「ここの地熱が弱くなっているんです。これでもまだ、少しずつよくなってる方なんですよ・・・地上の様子もなんだか変だったでしょう？」
「確かに変だったけど・・・・・・何で地熱が？」
と聞こうとしたにとりだが、その時になって、地底に入る前、熱を失った硫黄泉と一緒に見えた、巨大な物体・・・ではなく、生物のことを思い出す。
あれが、文とはたての言っていた、《オルファン》というものだ。

「あの、オルファンとか言う奴のせいなの？」
というにとりに、さとりが、「多分そうです」と応える。
「なるほどねぇ～・・・とりあえず、いろいろ話を聞いて、それから調査を始めるとしようか。ブレンパワードも実際に見せて貰おうかな」
「えぇ、部屋にご案内します」

話もついたことだし、河童一同、さとりの案内についていくか。
と、にとりが、
「よぉし、みんないくぞぉ～っ」と呼び掛けながら、後ろを振り返

る。
だがそこには、他の河童は一匹もいなかった。

「・・・あれ？」
呆然とした様子のにとりに、魔理沙がへらへら笑いながら言う。
「みんな、勝手に方々（ほうぼう）に行っちゃったぜ」
それに続いてさとりが、戸惑った様子で聞く。
「河童とは、みんなこう身勝手なのですか？・・・もしかして、貴方もそうなんですか？」

「・・・・・・しょ・・・職人気質だと言えっ」

とりあえず、どこへなりと去ってしまった他の河童は放っておいて、にとりにだけ、いろいろと話をすることにした。

そういえば、彼女ら河童が来てくれたのはいいが、もう一人、文達が呼んでいたはずの、永琳はまだ来ていなかった。

まぁ、向こうは向こうで準備しているところなのだろう。
地底に来てくれるとは言っているのだ。
後何日かすれば、来てくれるだろう。

※

文を一旦地底に残して、はたては一同妖怪の山へと帰還していた。
任務として任されている以上、彼女らは割と真剣にオルファンとアンチボディのことを調査しようと考え、この二、三日は、地霊殿に滞在させてもらっていた。

とはいえ、真剣に調査するならするで、そうして分かったことを報告する必要もあった。

天狗に生まれてしまえば、多少の長距離でも、散歩感覚でひとっ飛びできる。
地底から妖怪の山までは、すぐだった。

天狗の本拠は、山の一角にある巨大な滝の中だ。
その中の洞窟が、天然の、時に人口の要害を造り上げている。

その滝の前まで飛んできたはたてはそのまま、ごうごう音を立てて落ちる水流の中に飛び込もうとする。

が、その時だった。

「ちょっっとお待ちなさーーっい！」
「んわおっ！」
突然何者かに飛び付かれたはたては、そのまま体勢を崩して落下し、遥か下方にある滝壺の隣の、鬱蒼と繁る林の中へと突っ込んだ。
突然不意に飛び付かれ、がっしりと背中まで腕を回されれば、天狗自慢の羽根も、充分に羽ばたくことができない。
何事か？と思う暇もなかった。
身体が空を切る感覚を味わい、その何秒か後に感じたのは、無数の

冷たい葉が身体に当たる感触だ。
そしてそれを感じたと思えたその時には、背中から全身に広がる、突き上げるような衝撃が身を襲っていた。

木々の葉がどうやらクッションになってくれたようだが、受け身も取れず数十、下手すれば数百mに達する高さから地面に落ちれば、いかな天狗と言えど死んだかと思える。

もちろん、ただ自由落下に任せて墜落していたわけではなく、何者かに抱きつかれながらも、はたては満足に動かない翼をどうにかして羽ばたかせて、落下に逆らった。
おかげで、少しは地面と衝突する衝撃を弱めることができた。
それでも、背中から強かに激突するその瞬間、腹の底の方から、「ぐえぇ～・・・っ」と変な声が出るほどの衝撃はあった。

はたてに飛びついてきた何者かも、一緒に地面に叩きつけられたらしい。
はたての妙な声と同時に、その者の身体が彼女から離れた。

仰向けに倒れた身体をすぐさま立ち上がらせたはたては、
「だぁーっ！いきなり何すんのっ！」と叫びながら、同じように自分の近くに倒れていた何者かの方を振り向いた。
その者は、はたてと同様にすぐに起き上がりながらも、座り込んだまま両手のひらをぶんぶん振って、
「すみませーん！悪気はなかったんですぅっ！」と大声を出す。

その者の顔を見て、はたては驚愕した。
「あ、あんたっ・・・確か、山の頂上にある神社の巫女の・・・」

「風祝の、東風谷　早苗です」

あまり遠くない過去に外の世界からこの幻想郷にやってきた神が、妖怪の山の山頂に神社を建立した。
そこの巫女が早苗だ。
非常に元気があるし、割と真面目であるのだが、それが妙なところに作用して、狂気じみたエキセントリックな性格をしているということで、彼女の事はあまり良くない意味で有名だ。
最近では、『妖怪退治が今のマイブームです』などと口走っているため、山の妖怪達は、いつ自分達が襲われるかとひやひやしている。
実際そういうことをやりかねないし、実際にやられると、ちょっとした異変に発展しそうな実力を持っている。

しかし、そういう早苗だが、いくらエキセントリックとはいえ、飛んでいる天狗に抱きついて地面に叩き落とそうとするとは・・・
とうとう本格的に、頭のお花が満開になったのか？

「な・・・何のつもりか知らないけど、よくもやってくれたわねぇ・・・」
怒るというよりかは、いっそ呆れかえるようなはたての声に対する早苗の返事は、意外にも大分落ち着いていた。

「本当にすみません。ですけど、大事なことを聞きたかったんです・・・天狗のアジトに入ったら、簡単には聞けなくなってしまうから、こうするしかなかったんです」

「はぁ・・・」
はたては、頓狂な相槌を打ち、頭の中に浮かんだことをそのまま口にした。
「あんたなんかが私に何を聞くって？」

その問いに対する早苗の応えはこうだった。

「いえ、なんとなくなんですけどね」

「・・・・・なんとなくで天狗を突き落とすな」

「でも、大事なことなんですよぅっ」

「分かった。何でも聞いてみなよ・・・まともな質問じゃないと応えないけどね」

「はい。それじゃ・・・あのぅ・・・」

どうせ、大したことなど聞いてこないだろう。

そう考えていたはたてだった。

が、次いで早苗の口から発せられた一言を聞いて、彼女は久方ぶり、それこそ、何十、何百年かぶりに、心の臓を跳ねあげられる感覚に見舞われた。

見事に出し抜かれた気分を味わうことになった。

そうしてこの早苗が、ただエキセントリックで元気なだけの少女などではないということも実感できた。

「はたてさんですよね。貴方、さっきまでどこにいらしたんです？」

「・・・どこって、普通に取材に行ってたんだよ。彼岸の船渡しが迷いの竹林にサボタージュして、スーファミで遊んでたとか、魔法の森の人形遣いが、身長１μｍの人形を作るのに成功したけど、動かすことができなかったとか、どうでもいいことをいっぱいね。写真もあるけど見る？」

早苗の問いは、別に何もおかしなものではなかったのだが、それはいつもの話である。

今のはたてにとっては、彼女のこの問いは、明らかにただならぬ意味合いを含んでいるように聞こえた。

彼女が、こちらに駆け引きを吹っ掛けてきているのが分かったのだ。
はたての返事は、そんな彼女の心の中の動揺が一切感じられないような、至って平素なものであった。と、少なくともはたては自負していた。
実際、彼女の言った出来事は起こったものであるし、写真だって撮っている。もう何ヶ月か前のものであるが。
なので、早苗が見せろと言っても見せることはできる。

しかしながら、別にこうやって嘘をついてでも、オルファンやブレンパワードのことを知られてはいけないというわけではない。
天魔からの任務は極秘のものではないし、すでにオルファンを発見している妖怪だってどこかにはいるかもしれない。なんせあの大きさだ。
しかしはたては、早苗のこの問いに、明らかに意図があることを察し、それを警戒して、適当な嘘をついた。
何の意図があるのかは、知るわけもないが。

もちろん、もしかしたら向こうは特に何の気なしにただの興味で聞いてきているかもしれないが、その時も、嘘をつき通しておいても別に悪いことにはならない。
はたては自分の嘘が、ばれない嘘だという自信はあった。
後は適当に、揚げ足を取られないように気をつけつつ彼女をあしらって、早く天魔に調査の報告をするだけだ。

そんな考えに屈託していたはたては、再び、そしてより大きな胸の動悸を感じることとなった。

早苗が突然、両腕を組んで、得意顔になる。
その様子は、傍から見れば単に少し調子に乗っている元気なお嬢さ

んの姿だったが、はたてにはそれが異様に不気味に見えた。
「ふっふっふ・・・私はよぉーく知ってるんですよ。天狗というのは冷静な妖怪だけれど、その冷静さがあるからこそ、逆に分かりやすい・・・・・・つまるところねぇ！貴方は嘘をついているでしょっ？」
「うっ！」

これぱかりは、さすがのはたても身震いした。
そうして思わず、
「な、ばれるなんて・・・っ」と吐き捨てる。

が、それを聞いた早苗は、今度はケロっとして言う。
「いえ。実は言うとなぁーんにも分かってなかったんですけどね。でも、今の反応を見てよく分かりました」
「あっ！」
はたては今度は、口を大きく開けて、まさに青天の霹靂といった気分になった。

そして、確信を得た様子の早苗が、少しだけ真面目な顔つきになって、身体を強張らせるはたてにずいっと顔を寄せて、言った。
「嘘をついたことは怒りません・・・でも、《オルファン》と《ブレンパワード》のことは、教えていただきますよ」
「・・・・・・」
そこまで聞いて、ようやく理解できた。

これは、別に駆け引きでもなんでもなかった。
早苗は初めから、オルファンのこともブレンのことも知っていたのだ。
なるほど、嘘とかそういう以前の問題だったわけだ。
はたては、涙目になって呟いた。

「と、ほ、ほ・・・知ってるんなら初めからそう聞けばよかったのに・・・」
「あはははは・・・いや～」
「・・・でも、なんであんたなんかがオルファンとブレンのことを？別に私と文の後を尾行してたわけでもないはずなのに・・・」
「神奈子様と諏訪子様がご存知でしたんです」
「守矢の二柱が？」
早苗の語った名に、山頂の神社、守矢神社に祭られる二つの神の姿を思い浮かべるはたて。
もちろん、早苗の応えがはたての疑問を解決するわけがなかった。
あの二つの神こそ、とてもではないが、オルファンとブレンのことなど知るはずがない。
実際にあれを見る機会などないのだから。
まさか、神ならばなんでも知っているというわけでもあるまい。

「・・・いや、なんでそのお二方が知ってるわけ」
「さぁ～・・・とにかく知ってるとしか聞いてないですねぇ・・・・・そんなことはどうでもいいんですっ。教えてください！オルファンとブレンパワードのことをっ」

催促する早苗に、はたては諦めたようにため息をついた。
しかし、前述通り、別にオルファンとブレンのことを誰かに教えるのは一向に構わない。
先程のやり取りは、単なる早苗のお遊びとして気にはせず、はたては彼女の希望を聞き入れて、オルファンとブレンに関することを、簡単にだが話しておいた。
一応、後には天魔への報告も残っているから、大体のことだけ話して、手短に終わらせたかった。
説明不足だとか文句を言われる前に、
「興味があるんなら、どうぞ地底にくればいいわよ。歓迎はしなく

はないし、邪魔しないんなら好きにしていいから」と言っておいた。
どうせ、どういうものにでも興味を示して、異様な行動力を発揮する早苗だ。
言われなくとも、勝手に地底に赴いていたことだろう。

この一言で、『百聞は一見に如かず』ということを早苗に伝えれば、後は向こうも、あれとはなんだこれとはなんだと、質問攻めをしてくることもなかった。
天魔への報告もあるからとも伝えれば、早苗は大人しく、「ありがとうございました～」とお礼だけ残して、後は嵐の過ぎ去る瞬間のごとくあっさりとこの場から去っていった。

大分道草を喰って時間を費やしてしまったが、これでようやく、はたては天魔の下に報告へ行くことができた。
だが、だからといって、今しがた去っていった早苗のことは、すぐさま忘れるというわけにもいかない。

彼女、そして彼女が崇める守矢の二神は、オルファンとブレンのことを知っていた。
彼女らは本来なら、まだ何も知らないはずだ。
実際にはオルファンも、ブレンも見ていないはずである。
名前だけ知っていて、こちらに対し詳しい話を聞いてくるのがその証明だ。

つまり彼女らは、何者かから名前だけ教えられたということだろう。
もしかしたら、地底にいる誰かが教えたのか？
・・・その可能性もほとんどない。
誰にもそんなことをする理由はなかったし、仮にそういうことをし

ていても、さとりの能力があれば、全て把握できる。
おそらく、今地底にいる者達以外に、オルファンとブレンのことを知る者がいる。
はたてはすでに、天魔への報告が終わったその次には、真実を突き止めるべく守矢神社へと赴くことを決めていた。

※

さとりはにとりを屋敷の一室に招き、そこでブレンの性質や、オルファンの体内の様子を分かっている範囲で説明する。
そうして、改めてにとりを連れて、ブレンのいる中庭へと赴く。

中庭に出て、ブレンの姿が目に見えるところに来ると、さとり達は目を見張った。というか、点にした。

二体のブレンの足元に、何匹もの河童が群がっている。
面白そうに装甲をバンバン叩いているのは当然のこと。さらには、座り込んでいるブレンの装甲にしがみついたり、上に乗ったりしている者もいる。
そういう連中がいろいろ何かを言っているがやがやと言う喧騒も、よく聞こえてきた。

棒立ちになった文が、無表情に言う。
「河童がここまで身勝手な妖怪だってことは、まぁ、分かってましたけどね」
それににとりが、反論する気のない表情になって言い返す。
「だ、だから、職人気質だと言ってください。あれぐらい興味があるってことなんですよ・・・多分」
その声を聞いてか聞かずか、さとりが困り顔になって言う。
「ブレンが戸惑っている・・・やめていただかないと・・・」

よく見ると、河童の外にも、あたふたしているお燐とお空にこいしの姿が見えた。
河童達に、ブレンにまとわりついたり装甲に乗ったりしないように呼び掛けている。
意識を向ければ、彼女らの声も聞こえてきた。

「にゃーっ！やめるのー！靴はいたまま身体に乗らないんだよぅーっ！」
「排除、排除排除排除排除排除・・・排除不可能・・・うにゅぅぅ・・・」
「やめないと、死体にしてお部屋に飾るわよーっ」
が、河童達はそんな言葉にも聞く耳持たず、ブレンの装甲をバンバン叩き、上から足蹴にしたりしていた。

さとりとしては、そういうのを見るのはいたたまれなく、思わず河童の群れの方に駆け出して、スペルカードの二、三枚でもお見舞いしようとした。
が、駆け出そうとした彼女の右手を魔理沙が掴んで、その動きを制止した。

「な、何を・・・っ」
怪訝そうな声を上げるさとりに対し魔理沙は、なだめるように言う。
「まぁまぁ・・・あんたが怒っても、それこそ何にもならん。それより、ああいう手合いへの対処にもってこいな奴がいるぜ・・・あんただってこの前、こっぴどくお叱りを受けたそうじゃないか」
「・・・あぁ。そうですね」
それを聞いた文が続く。
「なら、呼んできますね」

そうして文が、中庭から飛び立っていく。
が、三分もしない間に彼女は戻ってきて、それからすぐに、屋敷の中から、爆発音に似た轟音が何度も聞こえてきた。

びっくりする間もなく、この音の原因はすぐに分かった。
憤怒の形相の勇儀が、中庭に続く屋敷のドアを突き破って、入ってきた。

「ぶるあぁぁぁあぁーー!!お前等ぁぁ!谷河童サンドにしてくれるわあああぁぁぁーーーっ!!」

そんな一喝（？）を聞けば、さすがの河童も、今まではしゃぎ回っていたのが、ぴたりと動きを止め、口も利かなくなる。

「河童共、こっちに集合ーっ!早く来んと尻小玉抜きとってそこに土塊詰め込んだるぞぉっ!!」
更なる怒声に、河童達は突き動かされたようにひぃひぃ悲鳴を上げながら、勇儀の方に集まっていく。
その様子を見て、文が苦笑いしながら言った。
「さすがだわーこの方・・・私、山に帰りたくなってきた・・・」

勇儀は、彼女の前に整列し自主的に起立気を付けの姿勢になった河童達に、大声で説教を始めた。

おかげで、河童が離れたからブレンも少しは安心した様子だ。
身体は大分汚れてしまったから、後で洗ってやらないといけないが。

とにかく、気を取り直して、にとりが言う。
「それじゃ、私もブレンをいろいろ調べさせてもらおうかな」
先程の河童達の好き放題を見ているさとりとしては、快く了承はできず、
「うぅん・・・」と、よくわからない声を出して、返事を渋っていた。

だが、にとりは決してブレンを困らせるようなことはしないということは、その心を読めば分かる。
勇儀の叱咤する声を聞けば、そういう気もなくなるということでもあった。

改めて声に出して、自分が誠実であることを主張するにとり。
「大丈夫だって！私ぁ、あんな馬鹿な河童共とは違う」
それには魔理沙がつっこむ。
「あんただってその馬鹿な河童の一匹なんだぜ？」
「いや、河童は河童だけど、馬鹿じゃあない」

そこまで言われれば、さとりもにとりのことを信用する。
「ブレンのことを調べるというのなら、ご自由になさってください。
ただ、嫌がるようなことをしたときには、ブレンに貴方を握り潰すことを許しますからね」

「そういう怖がらせ方なら、なんてこたないねぇ。そんなことにはならないんだから・・・じゃ、行きますよ～」
「はい」

さとりからの許可を得たにとりは、勇み足でブレンの方へと歩み寄っていく。
それに、後ろからさとりがついてきていた。

にとりが不思議そうに、振り返りざま、
「あんたがついてきたって、役に立たないよ」と聞く。
「私はブレンの友達なんです。貴方とは関係なく、ブレンと一緒にいたいんです」
「そ」

魔理沙達は向こうで、いろいろと話をするつもりだろう。
そのうちマリサブレンの方に行ったり、こちらに顔を見せに来るだろう。

さとりがブレンのそばまで歩み寄ると、まるで待ち受けていたかのように、座り込んでいたブレンの股間の装甲が開く。
そうして、彼女は慣れた様子でその装甲の上に乗り、穴の中へ入っていく。
彼女が穴を潜って胎内に入ると、にとりが、
「どんな気分なのー？」と聞く間もなく、装甲は閉ざされた。

それを見ているばかりのにとりは、軽いため息を一つついてから、沈黙を続けているブレンの、爪先辺りの装甲に軽く手を触れた。

その意外な感触に、にとりは驚いた。

ブレンは、感覚的に見れば、確かに沈黙していたように見えた。
だが、実際それは間違いで、この鉱物の塊に見える者は、確かに生きて、その生命の鼓動を響かせていた。
そうすると、本来はとても固い感触がしているはずのブレンの装甲も、どこか柔らかいものに感じられた。

よくもまぁ、今しがた勇儀に怒られている他の河童達は、こいつを叩いたり踏んづけたりできたものだ。と思った。

そして、どういう生き物でも、何かを知るというなら、互いの意志疎通をした方がいい。
ブレンのことを知るというのなら、まずは彼と、友達になることから始めるべきなのだろう。
にとりはそういうことは得意な方ではなかった。
ブレンには、ただ話しかけるだけで心を交わせることはいいのだが・・・

自分達のようなエンジニア連中では、ブレンの調査など、できそうにない。
とにかく、さとり達の言っていた、硫黄泉の異常と地底の気温低下の原因は、どうにか調べておこうか。
そんなことを考えながらにとりは、ブレンに向かって、楽な気持ちで話しかけていた。

「おい、ブレンパワード。今からさとりと話するんだろうけど、ちょっとぐらいは、私も混ぜてよ・・・私の仲間に、いろいろ乱暴されて嫌だったねぇ。身体も泥だらけだ・・・みんなに代わって、私が謝るよ、ごめんな。だから勘弁してくれよ・・・・・・・・ま、こんなこと言って、返事が聞こえるわけなんて・・・・・・・・え？・・・・気にしてない？泥がつくのは、逆にきもちいいって・・・あぁ、で

も、踏んづけられるのは、そりゃ嫌だな・・・そっか、それでも許してくれるか～！いい奴だなぁブレン！あんたのこと好きになっちゃうよぉ～っ」

それからしばらくして、河童の説教を終えた勇儀が、サトリブレンの下にきて、さとり顔を見せた。
彼女が厳しく教え込んだので、先程までは好き放題やっていた河童達も、これからは大人しく、さとりやブレンに迷惑がかからないように作業に勤しんでくれるそうだ。
それを聞いて、ひとまずは安心したさとりは、勇儀に対し、屋敷を破壊しながら中庭に突っ込んできた責任は取るようにと言及した。
実際見てはいないが、勇儀は怒り心頭になるあまり、完全に一直線に駆け抜けていた。
そのせいで、地霊殿の屋敷の壁が、彼女によって吹き飛ばされていたのである。
正直な話を言えば、さとりとして勇儀の方が河童よりも遥かに迷惑であったのだ。

心を読めば悪気はなかったということは分かるから、きつく怒るようなことはできないのがさとりなのだが・・・

※

はたてからオルファンとブレンパワードのことを聞きだした早苗は、

それからすぐに、守矢神社へと戻っていた。
昔は、どこぞの山と大地の上で最も高い山の座を競い合っていたらしいこの妖怪の山の山頂に神社が立てば、そこからは雲が頭上でなく、足元に見える時さえある。
もっとも、富士だかなんだかいう山もこの山も、実際のところは、大地で一番などと冗談でも言えないような標高しかないことは、早苗はよく知っていた。

それはともかくとして、神社の境内へと降り立った早苗を早速、この神社に祭られている二つの神が出迎えた。
大地の神、八坂　神奈子と、洩矢　諏訪子だ。
早苗に対しオルファンとブレンの存在を教え、はたての下に赴かせたのが、この二人であった。

早苗の前に歩み寄り、神奈子が聞く。
「どうだった、早苗」
それに、早苗は返す。
「神奈子様と諏訪子様が仰った通り、やっぱりオルファンもブレンパワードも実在しましたっ」
「それはよかった」

神奈子のこの言葉が、早苗は少し気になった。それはよかったとは、なんだか確信がないような言い方だ。みんな知っていれば、こんな言い方はしないのではないか？
そうして、はたてが投げかけてきた質問を、もう一度思い出す。
早苗は神社に戻ってから、まず二人に聞きたいことがあったのだ。
彼女は、藪から棒、単刀直入に聞いた。

「どうしてお二方は、あれの存在をご存知でしたんです・・・やっぱり、神で在らせられれば、何でもお見通しというのですか？」

その質問を聞いた神奈子が、
「あっ」と声を出し、申し訳なさそうな笑みを浮かべて返してきた。
「そういえば、説明を忘れていたわねぇ～」
そうして、諏訪子が続いて、早苗の問いに答える。

「あたし達の前に、妖怪が現れてね。あれについて教えていったんだよ」
「妖怪って？」
「八雲　紫って奴だったね」
「・・・それって・・・えぇ～、っと・・・」
早苗は、諏訪子の語る名を、眼を上の方に向けてぼーっとした顔を浮かべ、頭の中で反趨した。
そうして、その名の持つ妖怪のことを思い出す。
「・・・確か・・・幻想郷の基礎を築いた妖怪ですよね」
「そうね・・・さすが早苗、よく勉強してるぅ～。えらいっ！」と神奈子。
こちらを誉める神奈子の声に、頭をぽりぽり掻きながら、
「ぅえっへへへへ～」と笑う早苗に、諏訪子が説明を続ける。
「まぁ、突然現れて、オルファンとブレンパワードの名前だけ言ってすぐに帰ったんだけどね。あんまり意味が分からなかったから、ただちょっかい出してきただけだと思ってたけど・・・本当にあったんだねぇ」
そうして、また神奈子が続いて言う。
「私達も実は、あれのこと全然知らないの。天狗から話を聞いたなら、いろいろ教えてよ」
それに早苗は、笑顔で、
「はいっ。大体のことしか聞いてませんけど、残さずお教えします！」と応えた。

そうして彼女は、はたてから聞いたことを受け売りで、神奈子達に

伝えた。
とはいえ、今しがた断った通り、詳しいことまでは聞いておらず、まさしく大体のことを、ざっくばらんに伝えることしかできなかった。
そうしてはたてが、オルファンとブレンについて詳しく知りたいのなら、地底に来ればいいと言っていたことも話す。
それはそのまま、早苗の、オルファンを見に行きたいという希望を表すことにもなった。

神奈子はにこやかに、
「行きたいのなら行けばいいわ・・・早苗の考えてることは分かる」
と言う。
待ち望んだ言葉ではあっても、早苗はびっくりして、
「えぇっ？いいんですかぁ？」と聞き返す。
それには今度は、諏訪子が返す。
「あの紫とかいう妖怪が、何の理由もなくオルファンとかブレンパワードとかいう名前を言ってくるとは思えないしね。調べていれば、何かあるかもしれない」
神奈子が続く。
「私達は元々、あれを調べさせるために、早苗を天狗のところに行かせたのよ」
二人の言葉に早苗は、「そうだったんですか・・・」と応える。

二人からこういう話を聞けば、早苗の決意は瞬時に固まる。
早苗は、いますぐにでも、オルファンとブレンのいる地底に赴くべく、守矢神社を飛び立とうとした。
心を決めると、すぐさま行動に移れるその気の早さが、早苗のアイデンティティのひとつであった。

一応は単なる人間である早苗だが、彼女も、妖怪と同じように空を

飛ぶことができた。
吹き抜ける風に乗って宙に浮き上がるというぐらいの『奇跡』なら、息をするように起こせるのが彼女だった。
彼女には、奇跡を起こす程度の能力があった。

が、いの一番に神社から飛び立つ前に、早苗は二人にこう聞く。
「あの・・・何日も時間をかけて調べてきても構いませんか？」
それに神奈子が、すぐに応えた。
「何日と言わず、好きなように、納得するまで調べてくればいい。早苗が調べてきたことを私達に話してもらうんだから」
「そうですか・・・でも、神奈子様も諏訪子様も、寂しくはございませんか？」
早苗のその言葉に、神奈子は益々笑顔になって応えた。
「寂しくって死ぬほど、ヤワな神様じゃなーいのっ」
諏訪子が続く。
「神社の仕事なら、そこら辺の暇な妖怪をつらまえてやらせるよ・・・『後々の互いの関係のために～』、とか、『今恩を着せとけば、後で何かと利用できますよ～』、とか適当なこと言えば、天狗だって手伝うだろうしね」
「そうですか・・・なら・・・っ」

聞くことも聞いたし、改めて飛び立とうとした早苗だが、それを、今度は神奈子の方が呼びとめた。
「ちょっと待ちなよ。その前に、話をしておく相手がやってくるわ」
「え？」
「あれを」
神奈子が視線を向ける方に同じく眼を向けた早苗は、妖怪の山の山頂よりもさらに高いところで、黒い翼を広げるひとつの人影を見た。
神奈子が、「そろそろ来るころだと思っていた」と続ける。

あれは、はたてだ。

第五話　その２

天魔への報告を終え、任務の継続を指示されたはたては、そこからすぐさま守矢神社へと赴いた。
早苗にオルファンとブレンの存在を吹きかけた当人達に、話を聞くためだ。

妖怪の山頂まで一気に飛び上がり、眼下に、確かにそこが神社だと分かる鳥居やら社殿やら社務所やらを見た。
そして、鳥居から少し離れた石畳の上には、三つの人影・・・早苗と神奈子と諏訪子が見える。
はたてはすぐさま、彼女達の傍にまで降り立った。

向こうにも、はたての姿は見えていたし、彼女がここにくることもどうやら分かっていたようだ。
彼女が眼の前に降り立っても、別に驚く素振りは見せなかった。
そうしてはたては、向こうにこちらが来るのが分かっていたのなら、何故来たのかも分かっているのだろうと考え、開口一番、眼前の神奈子に言った。

「よい時に拝謁致しました。八坂の神様。私がここに来た理由はご存知でしょうか？」
「うむ。勿論知っています・・・それに、そちらが何を質問しようというつもりなのかも、知っている」
「なら話は早い。こちらの質問が分かっておられるのなら、是非とも答えて頂きたいのですが」

「・・・八雲　紫という妖怪が、我々の前に現れて、オルファンとブレンパワードの名を言った・・・それだけです」
「・・・・・・八雲　紫・・・？」

はたての脳裏では、神奈子が語ったその名がどういうものであるのか、記憶の奥底から引っ張りだしていた。
そして、すぐに思い出すことができた。
彼女は思わず、「あいつかぁーっ」と声を上げる。

さとりの話では、彼女達もまた、紫に会っていた。
そうして、彼女の姿が見えたすぐ後に、ブレンを生み出す円盤が現れて、それと共にブレンが誕生した。
それからさとりがブレンの胎内に入った後も、彼女に対し、オルファンとブレンのことや、ビープレートの存在を、名前だけだが伝えていた。
神奈子の語るその名は、さとりが出会った妖怪と同じものだろう。

その話を聞いた当初は、彼女が明らかに何かを知っているようだったので気になったが、元々紫が胡散臭い妖怪だったということもあり、いろいろ考えたところで答えなどでないので、あっさり聞き流してすぐに忘れてしまった。
だが、今になって再び彼女の名を聞かされるとは。

何でも知っている風にどっしりと構えていた神奈子も、はたてが紫のことを知っているらしいことには、意外そうにしていた。
そうして、「貴方達も、紫に会ったのか？」と聞いてくる。
はたてはそれに応える。
「私は顔も見てませんけどね・・・でも、地底の古明地　さとりさ

んは、実際に紫と会ったし、貴方方と同じように、オルファンとブレンのことを名前だけ教えられたそうですよ」
「へぇ～・・・そうだったのか」
「でも、なんたって貴方方になんか教えたんです？何の意味があるんです」
「それは、我々にも分かりません」
「んん～・・・・・・」

どうやらまた一つ、やるべきことが増えたようだ。
重要な人物らしいことが分かっていて、それをあっさり忘れるのはよくないことだった。
八雲　紫はやはり、オルファンに関する何か根本的な事実を知っているようである。
彼女からいろいろ話を聞けば、オルファンとブレンのこと、ひいては異変そのものの核心に触れることもできるかもしれない。
彼女を発見し、そして捕獲するのが、今後の目的になりそうだ。

とにかく、はたてとしては、これで知りたいことは分かった。
神奈子達がブレン達のことを知っている理由も判然とした。
そうである以上、いつまでもこの場に残っておくのも時間の無駄だろう。
早苗に付き合わされたこともあって天魔への報告も遅れ、思っていたより時間がかかってしまった。
さっさと地底に戻ろう。

「まぁ、これで用事はすみました。来ていきなりですけど、これで失礼させていただきます」
とだけ言い残して、そそくさと神社から飛び立とうとしたはたてだったが、それを神奈子が呼びとめた。

「ちょっと待て、天狗よ・・・早苗を連れて行きなさい」
そう言って神奈子は、傍らに立っていた早苗の背中をぽんぽんと叩いた。
ちらりとだけ神奈子の方を向いた早苗は、そのまま神奈子に後押しされて、はたての前にずいっと躍り出る。
「は・・・はぁ？」と、疑問符を浮かべるはたてに、早苗が言う。
「来るなら勝手に来いと言ったじゃないですか。だから、行かせて頂くんですっ」
「・・・・・・確かに、勝手に来いと言ったけど・・・行動が早すぎるでしょ」
「『思い立ったが吉日』って言葉をご存知ないんですかぁ？天狗なのに学が足りませんねぇ～・・・ちょめっ♪」
「・・・・・・あぁ、はいはい。分かったよ。準備も何もいらないのね？」
「えぇ、この身ひとつで、行かせていただきますっ」

実際、早苗ひとりが調査に首を突っ込んだところで特に迷惑でもないし、だからこそはたては早苗を焚きつけるようなことも言ったのだ。
仕方がないか・・・などと思いつつはたては、神奈子達に対して言う。
「え～・・・んじゃぁ、貴方んとこの巫女は、我々が預からしていただきますんで」
それに、神奈子と諏訪子が返事する。
「任せる」
「変なことしたら祟るからねぇ」
「しませんよ・・・それじゃぁ早苗、行きましょうか」

はたての声に、「はい」と返して、次いで早苗は、巫女のいなくなる神社で彼女を待つ身になる二つの神に、大きな声で言った。

「それでは、神奈子様、諏訪子様っ。東風谷　早苗、行ってきまぁーーすっ！」
「「いってらっしゃぁーーいっ！」」
二神の大きな返事を聞き流しつつ、はたては神社の境内から飛び上がり、文やさとり達、そしてブレンが待つ地底へと戻っていった。
早苗も、その後に続く。

一気に遠くの方へと飛び去っていく早苗の姿を眼で追い、やがてそれが、空にかかる薄霧の中に見えなくなる。
それと同時に、にこやかに早苗を見送っていた神奈子と諏訪子は、突然かしこまった顔つきになり、くるりと背後を振り返った。
そして、神奈子が静かに言う。

「これでご満足かな。八雲　紫よ」

その声に導かれたように、二人の眼前の空間に、突如巨大な裂け目が奔った。
一見すれば見逃してしまいそうな、とても細い一本の線だったが、それが線としての形を持っているのはほんの一瞬だった。
空間に入った裂け目はそこから、薄皮を開くかのように広がり、その奥にある空間を二人に見せつけた。
裂け目というよりかは、最早穴と形容した方がいいほどの広さになったその奥に見える光景を、上手く表現する言葉はなかった。
強いて言えば、混沌としか言い様がないものが、異様なる空間の中

に充満していた。

そして、そこから顔を覗かせた者。
それこそ、八雲　紫であった。

神奈子の目線ほどの高さで大きく開いた裂け目・・・『スキマ』の入口の縁に肘をかける彼女に、諏訪子が問う。
「しかしあんた・・・何を考えてんの」
「さてねぇ」
紫の返答は、どう贔屓目に見ても返答と呼べるものではなかった。
今度は神奈子が聞く。
「オルファンとブレンパワード・・・あれは一体何者だ」
「その内分かるわ」
曖昧な返事しか寄越さない紫を、諏訪子と神奈子が入れ違いに問いただしていく。
「大体あんたは、なんであれのことを知ったの」
「あれと出逢った時に知ったのよ・・・あれほど大きなものなら、誰だって見つけられるでしょう」
「オルファンとブレンパワードという名は、どうして知った。教えてもらったのか」
「まぁね」
「なんであたし達に、あれのことを話したの・・・それに何で、早苗を行かせるように頼んだわけ？」

実を言うと、神奈子達が早苗にブレン達を調べさせようとしたのは、紫に頼まれたからであった。
しかし二人は、その理由などは一切聞かされていない。
今こうやって聞いたとしても、
「後で分かるわ」と、適当な答えを聞かされるばかりだった。

だが神奈子達は、紫のこの得体のしれない催促を聞き入れて、早苗を行かせた。
だとして神奈子達は、何も知らずに不安のまま、早苗を送り出したのかと聞かれれば、それは違う。
何の企みがあるのかは知らないが、紫が何かを考えているのなら、こちらもその考えを都合よく利用させてもらうつもりだった。
ロクな回答を寄越さない紫に対し質問するのを止めて、二人は揃って両腕を組んで、妙に得意そうな表情で眼を深く閉じ、コクコクと頷いていた。
そうして、閉じていた眼を開くと、神奈子が、その表情と同じくらい得意げな口調で言った。

「よぉし！いいだろうっ・・・そちらには何か目論見があるようだが。こちらにだって考えはある・・・大地の神である私が、地底の熱と硫黄がオルファンに吸収されていることに気づかないと思ったか？ふはっはっはっはっ！」
いきなり大きな笑い声を上げる神奈子に続いて、諏訪子が、彼女よりかは冷静な声で言う。
「熱は大地の有するエネルギー。それをオルファンが吸収するっていうことは、オルファンは何かを行うつもりだねぇ・・・でも、エネルギーは保存されるもんだから、オルファンが何をするにしてもその時に、間欠泉が冷水になって、硫黄泉がただの池になるほどに吸い込まれて溜めこんだエネルギーは何らかの形で放出される。オルファンが行おうとする行為そのものが、びっくりするぐらいのエネルギーの塊ってわけだねぇ・・・・・・そのエネルギーをこっちが利用するか。オルファンの動きをこっちが制御できるようになれば・・・」
「莫大なエネルギーが手に入る。そして、幻想郷に産業革命を呼び起こす礎にもなるといういうものだっ。まぁ見ているがよいスキマ妖怪め。あんたの目論見が、ちゃんと成就するかどうかをなぁ～！

はははははは！」
組んでいた腕を解いて、右手のひらを紫の前にばっと広げ、また高らかに笑う神奈子。

その様子を見て紫は、滑稽そうに含み笑いを浮かべるばかりだった。実際、神奈子の姿は、早苗や諏訪子に比べればいっそ老成しているように見える格好の割には、どこか子供じみた純粋さがあった。それは、紫が皮肉っぽく笑うだけの滑稽さは醸し出していただろう。

二人の言葉をじっと聞いていた紫は、静かに、
「どうぞ、見せていただきましょうか・・・」とだけ言い残すと、そのまま裂け目の縁にかかっていた肘を離して、染み込むようにスキマの闇の中へと消えていった。
それと共に、ぽっかりと空いていた空間の裂け目も徐々に狭くなっていき、やがて元の一本の線に戻った。
そうしてその線もまた、修正液を垂らしたように、端から消え去っていく。
最終的には、紫がいた形跡さえも感じなくなった。

紫が去り、この場に残った二人。
神奈子は、相変わらず得意満面で、にやにやしながら言う。
「あいつ、滅らず口を叩くだけ叩いて帰っていったわね」
それに対し、諏訪子が冷ややかな口調でこんなことを言った。
「ねぇ神奈子」
「なに」
「あんた神様なんだから、もうちょっと威厳のある話し方をしなよ」
「・・・え?あったじゃない、威厳」
「・・・・・・あんたがあったと思うなら、それでいいよ」

この親あってこの子ありという言葉もあるが、この神あってこの巫

女ありということも、世の中にはあるのかもしれない。
神奈子も、早苗に負けず劣らず、面白い正確をしていた。
そうして諏訪子は、そんな神奈子に一度こっぴどく負けてしまったものだから、妙に恥ずかしくなってくるのだ。
もちろん、諏訪子が敗北するだけの力が神奈子にあることだって、ちゃんと認めてはいるのだが・・・

※

地底へと向かい、空を飛ぶはたて。
連れていくことになった手前だ。このまま早苗を置き去りにして一気に飛んでいくこともできるのだが、そんなことをすれば、後で彼女に何をされるか知れたものではない。
仕方がないからはたては、天狗から見れば歩くような速さで空を飛ぶ（それでも十分に高速だが）早苗の傍にぴったりとついて飛んだ。

そんな中ではたては、傍らを飛ぶ早苗に、冷やかすように言った。
「しかし、巫女が神社をほっぽり出すってのも、おかしな話だと思わない？」
「異変が起これば、それを解決するのが人間の役目であって、巫女の役目でもあるのです・・・今回のことは、明らかに異変でしょう」
「・・・そりゃそうだね」
早苗の言葉に相槌打ちつつはたては、思い出した。
異変を解決するのが巫女だというのなら、もう一人、そういう人間がいる。

しかし、まだそいつはオルファンのこともアンチボディのことも知っていないようだ。
今の事態を異変と考えるなら、早い内に彼女にも事態の説明を行い、こちらに来てもらう必要があるのではないか？
いや、そもそも件の八雲　紫が、早苗の時と同じように、すでに嗾（けしか）けにいっているのではないだろうか。

しかし、あの博麗の巫女が来たところで、オルファンとアンチボディの異変が解決するというのだろうか。
あの巨大な生物を一体どうすれば、異変が解決するというのか・・・

そんなことを考えていたはたてだが、やはりというか、答えが見つかりそうにないため、思考に屈託することをやめる。
そうして何の気なしに、もう一度早苗に、
「ちょっと」と話かけていた。

が、はたての声に、早苗は反応を見せない。
前の方を、やけに真面目な顔つきでぼーっと見つめているばかりだ。
何か考え事をしているようである。
もしかしたら、先程までのこちらと同じように、異変についていろいろ考えを巡らせていたのかもしれない。
しばらくして早苗は、はたてに呼ばれていたのに気付いて、
「なんです？」と聞き返してくるが、それにはたては、
「考え事してたんなら、もういいよ。なんでもないよ」と返した。

「そうですか」と返した早苗は、こちらを見向きもしなくなったはたてのことを、同じく意識の外にやって、再び真っ直ぐに前を見て、そして、考えた。
その思考は、はたてが考えていたようなものとは全く違うものであるし、むしろ、思考と呼べるかどうかさえはっきりとは分からない

ほどのものだった。

彼女の行動原理には余計な思考などというものはなく、もっと単純で、分かりやすいものだった。

――神奈子様も諏訪子様も、あまり多くを語ってくださらなかったけど、私には分かる。あの方達の野心を叶える者こそ、この私なのね！・・・なら、見ていてください神奈子様、諏訪子様！この早苗が、やっちゃいますからねっ！――

※

地霊殿の中庭では、勇儀の説教を聞いてすっかり改心してくれた河童達が、自分達が泥だらけにしたサトリブレンの身体を一生懸命に洗ってくれた。

ブレンは、土の臭いも好きだったが、それが自分から取れていくのも同じぐらいに好きだった。

実を言うと今ブレンの胎内に入っているさとりだって、靴を履いたままでいるので、当然胎内だって少なからず汚れてしまっている。

なので、ブレンがそういうことを構わないと言ってくれるのは、気が楽だった。

しかし、その内ちゃんと胎内もキレイに洗ってやった方がよさそうだ。

勇儀の方は、さとりから強い調子で言われた手前、自分が破壊した地霊殿の屋敷の修理をたったひとりで行っていた。

たとえ一人でも、屋敷の改修ぐらいは寝ながらでもできるのが勇儀だ。
その気になれば、改修はおろか一から建て直すことだって、やれと言われればやるつもりだった。

そんな中で、さとりはずっとブレンの胎内にいて、彼の者と話をしていた。
そうして彼女は、ブレンと話をする中で、自分自身の心にもまた語りかけていた。

ブレンと出会ってからというもの、広大で、それゆえに閑散としていて殺風景だった地霊殿が、少しずつ賑やかになってきた。
ヤマメ達や勇儀は以前から何度か顔を見せてきてくれるが、それだけでない。
文とはたてがやってきて、マリサブレンと共に魔理沙がやってきて、そして今、にとり達河童がやってきた。
さとりは正直な話をすれば、人と付き合うのは苦手だった。
自分の能力のことを考えれば、それも仕方がないことだ。
そうしてその能力故に彼女は、ヤマメ達とはまた別の妖怪からは総じて嫌われているか、そうでなくとも、よくは見られていなかった。
だから、そんなさとりの住む地霊殿では、ほんの僅かな人影しか見ることはない。
しかしそれが、ほんの一週間も経っていない内に、十人は優に超える妖怪達の顔を見ることになってしまった。

人づきあいが苦手になってしまえば、人の顔を見るのだっていい気分にはならない。

そういう意味では、ブレンとの出会いはさとりに対し、彼女が嫌がるものを強要しているとも言えた。
だがさとりは、そうやって短絡的に考えて、ブレンのことを嫌いになるようなことはしなかった。
どんなに苦手でも、人付き合いはした方がいいのは間違いなかった。
そうしなければ、嫌われ者を通り越して、皆から忘れ去られてしまう。
忘れられたものが生きるこの幻想郷でも忘れ去られてしまうことなど、笑い話にもならない。
そうして、自分でさえ、自分自身のことを認められなくなれば、その先に待っているのは・・・

さとりは、ブレンとの出逢いと、そこから続く、地霊殿に集まってくる妖怪達との出逢いを、自分が自分であることを認めるための機会だと考えた。
そうしてそれに、真っ直ぐに向き合うことを決めた。
その決意は、今まで臆病だったさとりがしたこともないような、固い決意だった。

そして何より、さとりが好意を抱くブレンパワードは、こうやって多くの者と出逢うことを喜んでいた。

「ん・・・私は河童なんて、どれも同じだと思うけど、ホントは違うのよね・・・・・・そうね、いろんな妖怪の顔を見るのは、楽しいね・・・後で、もっとたくさん会えるからね・・・・・・私も貴方みたいに、人と会えることを楽しめるようになる・・・私の能力なら、そうやって人と仲良くなることだって、出来るはずなんだから。嫌われるんじゃなくて、好きになってもらえるような使い方だって、できるはず・・・」
自分を励ますようなその言葉には、絶対的な自信はなかった。

さとりの心に不安がないことは、さとり自身よく分かっている。
そうして、強張る心を解してくれるのは、ブレンだった。
「・・・ブレンも、そう思ってくれるのね・・・ありがとう」

突然、胎内を覆う装甲板の向こうから、にとりの声が聞こえてきた。
「ねぇー。ちょっと開けてよー」
その声にさとりは、ブレンに装甲を開くように念じる。
そうして、胎内の壁面に映し出されていた外の光景が消え去り、それに入れ替わるように、閉ざされていた装甲板が開いた。

ブレンの胎内は、いくつもの薄い板が渦を描くように折り重なったようになっているのだが（それを《スリットウェハー》とか言うらしい）、それらの一枚一枚が滑るように動くことで、胎内と外を出入りする穴が穿たれるようだ。
その穴の向こうから、にとりが顔を覗かせる。
彼女は別に、ブレンの身体を汚したりしていなかったのだが、それでも気前よくその身体を掃除してくれていた。

「どうなさったんです？」
と、さとりが聞く。
「いやね。ちょっと話をつけておきたいことがあってね」
「はい？」
「こいつの身体を洗ったら、あたし達の方で、地上の調査に行ってくるよ。それで、あらかた調査が済んだ後は、あのオルファンの調査も始めたい・・・・・・さとりは最初に行ったっきり、オルファンには行ってないんだろう？」
「・・・ええ、そうでしたね・・・・・・オルファンを・・・ですか」
「うん。まぁそれは、え～・・・八意　永琳だっけ？そいつが来てからでいいけどね・・・で、調査の時には、ブレンも連れていきた

いんだけど、どうだろう」
「私はいいですよ・・・ブレンは？・・・・・・・ん。ブレンもいいと言ってますよ」
「なんとなくだけど、私にも聞こえたね」

にとりの言う通り、さとりは最初にオルファンの中に入ってから、その後は一度も入ることはなかった。
オルファンの中で出逢ったブレンのことを理解することに夢中になっていて、オルファンのことは後回しにしてしまっていた。
だがさとりは以前に、ブレンと同じように、オルファンとも対話をしてみたいと考えていた。
そろそろ、それを実行する時期ということか・・・
ブレンもまた、生まれて間もなく出ていってしまった、母の胎内に戻りたがっている。

そのことを再確認するさとりは、穴から覗くにとりの顔が、突然どこか別の方向を向くのが見えた。
何事かと、ブレンの胎内から立ち上がり穴から身体を外に乗り出して、にとりと同じ方を向くさとり。

別にどうということではなかった。
中庭に、見知った人影が降りてきている。
天狗の山に一時戻っていたはたてだ。
やるべきことを終えて、地霊殿に戻ってきたのだろう。

だが、彼女に続いてもう一つ、中庭に降りてくる影があった。
それは、さとりにも見覚えがない者だった。

その一方でにとりが、驚いた様子の声をあげる。
「なんであいつが一緒にいるんだぁ～？」

どうやらにとりの方は、あの人間らしい何者かのことを知っているらしい。
さとりはにとりに、
「なんなんです？」と聞く。
「東風谷　早苗って言う奴だよ。妖怪の山の神社で巫女をやっている．．．ここには正直．．．地霊の皆殺しとかいう目的でしか来ないような奴だよ」
それにはさとりも、眼を見張って驚愕し、狼狽した。
「えぇっ？そ、それって．．．」
「いや、皆殺しは言い過ぎた。でも、神社の巫女なんだったら、妖怪退治くらいするだろ？そういうことだよ」
「それは．．．そうですね」
「別に悪い奴じゃないんだ。ただ、なんか目的がないとこんなとこ来ないでしょ」
「．．．」
にとりの言った恐ろしい言葉は、どうやら彼女の冗談だったらしいとして、さとりは、この地霊殿に早苗という名の人間が、なぜ訪れたのかを考えた。
だがそんなことをする間もなく、さとりの思考は、中庭を隈なく響き渡るような大きな声にかき消された。

「皆さんこんにちわーーーっ！東風谷　早苗っていいまーーす！」

さとりは、つくづく実感した。
これからどんどん、人妖は増えていく。
オルファンとアンチボディの異変に関わっていく者達がだ。
そうして、あのような者達とよりよく協力していくことが、この異変を解決し、オルファンとブレンの求めるビープレートを手に入れ

る結果になるのだろう。

※

日が沈み、夜が訪れようとしている。
大地の上に静かに佇むオルファンの肉体が、赤く燃える夕陽に照らされ、炎の色に染め上げられる。

そうして、オルファンの身体の最も高い場所、山の頂上とも呼べる部分に立ち、眼下に、赤熱する金属のごとき肉体を見下ろせば、自分の身体が炎に焼かれているような感覚にさえなる。

紫は、夕陽に染まるオルファンの身体の上に立ち、その眼に幻想郷の大地を見下ろしていた。

彼女は、自分の足元にいる、彼女自身が及びもつかないほどには偉大な存在であろうオルファンに対して、語りかけていた。

「まだ、事態は始まってもいない・・・後は、弱り果てた貴方の生命が回復するのを待つだけ・・・・・・そうしてようやく、始まりとなる」

まるで自分自身が燃えているかのように、全身を炎の色に燃やすオルファンだったが、実際それは間違いではなかった。
オルファンは、地底の熱を吸収し、周囲に満ち満ちていた硫黄を取りこんで、自身が活動するための力、オーガニックエナジーに変換していた。
今オルファンの体内には、燃え上がらんばかりの灼熱地獄の炎が宿っていたのである。

幻想郷へと降り立ったオルファンは、極限にまで弱り果て、死に瀕してさえいた。
そうして、どうにかして己の肉体を蘇らせるため、エネルギーを求めた。
それは、どんなものでも構わなかった。
とにかく、生物が生きていく上で必要となるものを取りこむことができれば、それをオーガニックエナジーに変換し、己の生命力とすることができた。

そうして、オルファンがこの旧都近くの硫黄泉に降り立ったのは幸運だった。
ここには、生物が生きるためのエネルギーが、有り余るほどに存在していた。
それらを一気に吸収したオルファンは、少しずつその本来の生命力を取り戻しつつあった。
そうして、完全に蘇ったその時にこそ、自らの目的、ビープレートを求めるべく行動を開始するのだ。

だが、紫はそんなオルファンに対して言う。

「・・・私達が、貴方達の求めるビープレートとなり得るかは分からない・・・・・・そうして、もし私達が貴方達の目的を果たせな

かった時、貴方が何をするつもりなのかも知っている・・・・・・
だけど、私達がそれを簡単に許すとは思わないようにね・・・貴方達の銀河旅行を・・・」

紫の言葉と同時に、彼女の眼前に、一体の紫色をした巨人・・・アンチボディが姿を現す。
そのアンチボディは、どこかから移動してきたのではなく、何もなかった空間から突然出現してきたようであった。
紫の前に躍り出るような動きは、誰にも、紫でさえも視認することはできなかった。

そうして、夕陽に照らされ、紫というよりかはいっそ黒色に身体を染めるそのアンチボディは、ブレンとも、魔理沙とマリサブレンが戦い、咲夜や妹紅が出逢ったグランチャーとも違う形状をしていた。
肩を覆う大きな装甲から伸びるいくつもの絹のようなものが、まさしくこれが生物であることを確信させる動きを見せる。

「幻想郷にやってきたのは、貴方達だけではない・・・貴方達の敵となる者達もよ・・・・・・グランチャーもブレンと同じように、人々と出逢っているし・・・何より、バロンズゥが私の手にある・・・」

紫の声に反応するかのように、奇怪な姿のアンチボディが、震えるような、あるいは呻くような小さな鳴き声を上げる。それだけは、ブレンやグランチャーと同じだった。

そうして紫の方に、眼・・・と思われるものを向けるそのアンチボディ、《バロンズゥ》の隣に、突然、一体のブレンパワードが現れる。
それもまた、バロンズゥと同じく、空間に突然出現したようだった。

あるいは、何か速度の波のようなものに乗って、視覚することが到底かなわないような速さで移動したようでもあった。

そのブレンもまた、紫色の身体をしており、ブレンパワードであるのは確かだろうが、サトリブレンやマリサブレンとは細部の形状が異なっていた。身体もひと回り大きい。

そして彼の者もまた、紫の方をじっと見ていた。

その眼を見返しながら、紫は、僅かに困ったような笑みを浮かべて、言った。

「そうして貴方はそれを承知で、私にブレンを託した・・・私を狂言回しにするつもりなのね・・・・・異なる者同士が戦うことでも、ビープレートを得られるかもしれないから・・・・・いいでしょう。さっきは嫌なこと言ったけど、私だって貴方にはよい結果を迎えて欲しいものね・・・だけどそのためには、貴方は決して、私達の行為に仇を返すような真似をしていはいけないのよ。もしこの言葉を聞き入れないというのならその時は・・・このバロンズゥでブレンを打ち倒し、貴方を滅ぼす」

その言葉に、バロンズゥが再び鳴く。

それに呼応して、ブレンも同じく、ブルブルと呻いた。

この二体のアンチボディは、敵同士であった。

しかも、磁力のプラスのマイナスだとか、陰と陽とかいうもののごとく、はっきりと、根本的な部分で反発し合っていた。

紫が、今度はおかしそうに笑う。

「ふふ・・・怖がらせすぎたわね・・・・・・今のは忘れましょう。私貴方のこと、好きになれそうよ・・・・・・要するにね、私が言

いたいのは、私が貴方のことを好きになった時は、貴方も同じように私のことを好きにならないと、折り合いがつかないということなのよ・・・それが分かったのなら・・・」

紫は、手に持っていた日傘を広げると、オルファンの身体を蹴ってその場に跳び上がり、風に吹かれるようにゆっくりと宙を舞った。
そして・・・

「またお会いしましょう。オルファン」
そんな声が静かに響き渡り、紫の身体は、彼女のすぐ傍に出現したスキマに飲み込まれて、消えた。
二体のアンチボディも、いつの間にかその場から消え去っていた。
そうしてその場には誰もいなくなり、その巨体を静かに夕陽に燃やす、オルファンだけが残った。

今オルファンは、地底の熱と硫黄をオーガニックエナジーに変換することで、力を取り戻している。
だが、それはあまりに不十分なものであった。
これだけでは、オルファンが本当に求める力には程遠い。
生きるために必要なものを吸収するだけでは駄目なのだ。
必要なのは、生きる力そのもの。
生物が発するオーガニックエナジーそのものだった。
それらを吸収することでオルファンは、少なくとも自身の本当の目的・・・ビープレートの発見に次ぐ目的を達成することができる。

だが、そのためには、膨大なオーガニックエナジーが必要となる。
それこそ、この地に住まう人と妖怪と、あるいは魂だけの存在、ありとあらゆる者のオーガニックエナジーがだ。
例え幽霊だろうと亡霊だろうと、それそのものが存在するためのオーガニックエナジーは、ほんの僅かながらにある。
そしてもし、幻想郷の生物のオーガニックエナジーを吸い取ればどうなるか。
それは、熱を失い、単なる冷水の池に変わり果てた硫黄泉を見れば、分かることだった。
生物が生物としての力を失えば・・・

だからこそ紫は、そうすることを許さないと言ったのだ。

オルファンとは、遥か銀河の彼方、
この幻想郷の空の遥か向こう、那由多の先の星の海を旅する宇宙船だった。

第六話『憎悪の行き着く処』　その１

グランチャーと出逢ってから、ある程度の日が過ぎた。
妹紅は、より深くこの奇妙な生物との信頼を深めようと考えていた。
そうしてこの日もまた、今が昼なのか夜なのかさえはっきりと判別できない迷いの竹林の中、グランチャーの胎内に入る。

そうして、いくつも積層した金属質な板が、人肌のような弾力を生む胎内の壁面に身体を預け、グランチャーに対し語りかける。
「・・・グランチャー。あんたの敵が、この迷いの竹林にいる・・・だからかなぁ、あんたがたまに、ちょっと怖い奴に思える・・・・・・なぁ？そいつをやっつけたらさ。あんたも、楽になれるのかな・・・・・分からないか・・・そうか・・・・・・・」
妹紅には、気楽に話しかけられるようなほどに深い関係の者は、あまり多くない。
数千年前、不死の絶望の中で彷徨っていた時などは、彼女の言葉を聞いてくれるのは、辺りに漂う闇と、冷たい空気ばかりだった。
その当時のことを思い出せば、今だって身体が燃え尽きていくような苦しみを味わうことだってある彼女は、自分の話を黙って聞いてくれるような者がいるだけでも、幸せだった。
それが、このグランチャーでもあった。
そうして妹紅は、自分の好きな相手のために、自分の暇を迷いなく使える者だった。
彼女は言う。

「あたしが手伝うよ・・・どんな奴なのか知らないけど、あんたの敵は、私が一緒にやっつける・・・・・・それでさ、あんた、他にやりたいことないの?それもみんな、付き合うよ」
笑顔でそう言う妹紅。

しかし彼女は突然、グランチャーの問いかけるような言葉を聞いた。
『そっちはどうなんだ』、と言ったように聞こえた。

「・・・私・・・?」
妹紅は思わず聞き返す。
「私のやりたいこと?・・・・・・」
それまで笑顔だった妹紅は、このグランチャーの問いに、少しだけ表情を暗くした。
というか、呆然とするような表情を浮かべていた。
グランチャーにやりたいことを聞いた妹紅本人が、自分のやりたいことが分からなかったからだ。
あまりに長い年月を生きてきた妹紅には最早、普通の人間としての欲求は、失われて久しかった。
自分の生きる目的が、なくなっていたのである。
それを、あまりに突然思い知らされることになった。
妹紅は寂しげに微笑んで、呟いた。
「意地悪するんだな・・・」

その妹紅の静かな声に、グランチャーは謝罪する意思を見せながらも、さらに問いかけてくる。
「・・・敵?・・・・・・え?・・・私の、敵って・・・」
グランチャーは聞く。
己に敵と定める者がいるように、妹紅にもまた、敵となる者がいるのではないかと。

戸惑う妹紅の脳裏には、いつの間にか、ひとりの少女の顔が浮かんでいた。
そうだ、確かに彼女は・・・
「・・・いるよ・・・確かに、私にも敵はいる・・・・・・でも・・・」
妹紅は、自分の頭に思い浮かんだその敵の存在を、すぐに否定しようとした。
確かに彼女は、妹紅の敵だ。
だが、グランチャーが今聞いている敵とは、なんだかもっとおぞましいもの感じさせる、そういう表現だった。
彼女は・・・輝夜は、そういうのとは違う。
妹紅はそう思っていた。
「あいつはそんな・・・憎むような、恨むような奴じゃない・・・」
そう語る妹紅だが、グランチャーは尚も聞いてきた。
心に直接語りかけるその声に妹紅は、得体のしれない執拗さを感じた。

「グランチャー・・・・・・？」

彼の者は問う。
本当にそうなのか？
仮にも敵と認識していたものが、消え去ることはあるかもしれない。
しかしそれで本当によかったのか？
敵として頭に思い浮かんできた以上、自分の心の中には、確かに憎しみがあったはずではないのか？
それは本当に全て解決し、忘れ去られてしまったのか？
そうして彼の者は、妹紅に対し、彼女が忘れた、忘れようとしてい

たものを思い出させようとしていた。

妹紅が気がついた時には、彼女の心は、グランチャーが生み出す怨念の渦の中に取り込まれつつあった。

そうして初めて彼女は、グランチャーの持つ性質・・・彼の者の本性を思い知ったのである。

だが、それに気付いた時には、もう遅かった。

彼女の脳裏に、閃光のような何かが過る。

それは、記憶だった。

眼を見開き、うつむけた顔で虚空を見つめる妹紅が、うわ言のように呟く。

「・・・・・・そ、そうだよ・・・何も、何も解決なんてしてないじゃないか・・・みんな死んでしまった。もう永遠に帰ってこない・・・私の方から、みんなところに行くことだってできやしない・・・・・・いろんな人が、私のことを怖がって、嫌がって・・・とても・・・・・・とても辛かったんだ・・・・・・・・・私をそうしたのは？・・・そうだよ、あいつなんだ・・・私の中の気持ちは、なんにも解決しちゃいない・・・」

妹紅のその独白を、グランチャーはじっと聞く。

そして、妹紅の中に蘇ってきた絶望を、熱気ある怨念で包み込んでいた。

本性を現したグランチャー。しかし妹紅は、彼の者を恐れることも、拒むこともできなかった。

グランチャーがそうさせているということもあるが、彼女は、感じていたのだ。

彼の者は、妹紅の中にある怨念を呼び起こしながら、それを共に共

有し、彼女のことを守ろうとしている。

妹紅とグランチャーの間に築かれつつあった信頼は、決して崩れてはいなかった。
むしろ、互いの中にある怨念と敵意を共有することで、より一層強まっていく。

グランチャーは、さらに妹紅に語りかける。

今、生きる目的がないと言った。
だが、新たに目的を見つけることはできる。
それが、憎しみから来る敵を見つけること・・・そして、戦うことだ。

妹紅の脳裏に、またひとつ、古き記憶が蘇る。
輝夜の姿を初めて見た時、彼女の中に湧き上がってきた、漆黒の感情だ。
それが今そのまま、彼女の心では蘇ろうとしていた。

グランチャーは尚も語りかける。
やるべきことをやるために、まずは、妹紅自身の怨念に、憎悪に決着をつけろ。
憎む敵を、倒せ。
そうしてから、一緒に、探すべきものを探しにいこう。

「・・・グランチャー・・・・・・」

妹紅は、深く沈んだ自分の視界の中で、両の手のひらを広げてみた。
しっとりと汗で湿っていて、力なく広げられている十本の指が、それぞれ、ほんの僅かに震えていた。

それは、ふつふつとわき出てくる憎しみに押しのけられつつある彼女の理性が見せる、最後の戸惑いであった。
だが、いつの間にか呼び起こされ、そしていつの間にか逃れられないところまで来てしまった彼女の中の異質なる炎を消すことは、もう不可能であった。
手の震えは、すぐに止まった。

妹紅は自分の身体が、グランチャーとより深く繋がる感覚に見舞われていた。
緩やかに開かれていた両手のひらを、今一度強く握りしめる。
そうして彼女は、熱が充満しているように思えるグランチャーの胎内の中で、うつむき気味のまま、静かに前を向いた。
そして低い声で、唸るように呟く。

「・・・輝夜・・・・・・・私はな・・・私は・・・・・・・」

それからしばらくして妹紅は、幽鬼のようにおぼつかなく、しかしながら固い足取りで、一人永遠亭へと赴いていた。

※

妹紅とグランチャーの関係を知った慧音は、それからしばらくの間、妹紅の屋敷に居座らせてもらっていた。

人間の里で寺子屋を営んでいる彼女であるが、年がら年中授業しているわけでもない。
今は、教えるべき里の子供もそれほど多くないため、長期の休校ということにさせてもらっていた。

そうして慧音が妹紅の屋敷に残っているのは、グランチャーのことを理解するためだった。

妹紅は今、用事があるからと永遠亭へと行っていた。
慧音にそのことを語った時の妹紅の顔つきが、とても暗く、そして険しいものだったのが非常に気になった。

しかし、そうやって心配になったからといって、妹紅の用事に自分がついていくわけにもいかない。

ひとまず慧音は、屋敷で待つことにした。
そして、妹紅からの許しは得ている。
今日もまた、彼女が出会ったグランチャーと、対話をしてみる。

屋敷の外に出て、そのすぐ横で鎮座している緑色の巨人、グランチャーの傍(かたわ)らにまで歩み寄る。
そうして、左足首の左側に、背中からもたれかかった。

この前のように胎内に入ることはしなかった。
したくなかったのだ。
また、あの異様なまでの敵を感じることは、嫌だった。

どうしてもグランチャーのことを信頼できない慧音。

それでもなお、彼の者のことを理解しようとする彼女に対し、グランチャーもまた誠意を見せていた。
もちろん、その誠意の奥に僅ながらの不快感を感じることは否めないが、それは仕方のないことだろう。
自分のことを嫌いだと分かっている相手に、好意を持って付き合える者などいはしない。

慧音は、静かにグランチャーへと語りかけていた。
「・・・やはり貴方は、いい者なんだろうと思える・・・でも、そんな貴方が、あれほどまでに荒んだ意思を放出する・・・・・・何故だよ」

慧音の問いに対しグランチャーは、『ただ本能に従っているだけ』と応える。

本能か・・・
つまり、生まれたその時から定められていること。

「・・・でも、本能という言葉で表すには、貴方の意思は、怨念に満ち満ちていた・・・本当に貴方は、戦うことしかできないのか？」

グランチャーは訂正した。
戦うことそのものも、確かに彼の者の目的ではある。
しかしそれ以上に、彼の者には求めるものがあった。
それを手に入れるための最大の方法が、戦うことだった。

「・・・もっと、他にやり方はないのか？・・・貴方の求めるそれは、本当に戦うことでしか得られないものなのかい？もっと、他に方法が・・・・・・駄目？無いのか・・・？」

グランチャーは確かに、自分の目的を果たすために、戦う以外のやり方があるのは分かっていた。
妹紅と心を通わせている時は、何も考えず、純粋にその瞬間を楽しむこともできた。
おそらくそれも、彼の者の求める何かを掴むきっかけになるかもしれない。

しかしグランチャーは、それを信じることができないと言う。
今この迷いの竹林には、己の敵となるものが隠れている。
グランチャーは、その敵を討ち果たすことに己の生命を懸ける。この時は、ただそのことしか考えられなかった。

敵を討ち果たすこと。
戦うことが、グランチャーにとっては、生きることそのものだった。

「・・・・・・」

戦うことが生きることだというのは、慧音にだって分からないことではなかった。

いつぞや、医学への造詣が深い・・・というか、医学そのものである永琳から話を聞かせてもらった。

生物が生きることは、そのものが戦いだ。
肉体は、四六時中外界から侵入する細菌の猛威に晒される。
そうしてそれと戦うための免疫機能が身体には備わっている。

永琳に説明されるまでもない。

よく分かっている話だ。

そして、生物が生きているということを示す、バイタルサインというものが存在する。
熱や呼吸、脈拍などだ。
それらが確認できるかぎり、生命を確かめることができる。

それらのバイタルサインは、体内に侵入した病原体と身体の持つ免疫機能が対抗することで、大きく変動する。
身体が病に抗うことで、熱は高まり、脈は早くなる。
そうして、いよいよ死に貧する時、人の身体は逆に、冷たく凍えていき、血潮の流れは止まる。

永琳は言っていた。
「要するに生物は、戦う力があって初めて、生きていくことができるものなのよね・・・だからまぁ、戦うことは確かに生きることなのよ・・・後は・・・」

慧音は、後に続く永琳の言葉を、自分の口でもう一度呟いてみた。
「戦いの質・・・どんな戦いをするか・・・」

当時、何故永琳がこんなことを言ったのか、慧音は思い出してみた。

確か、ある日、月が真っ赤な色に見えて、これは変だと思い、永琳に診てもらった。
その時彼女が冗談混じりに、月が赤く見えたのは、月に住む兎が戦

争をしているからだと言った。
そんなまさかと、慧音はその言葉は聞き流している。
もちろん彼女は、月には実際に兎も住んでいるし、高度な文明社会が築かれているということは知っている。
だから、今の幻想郷では想像できないほどの高度な文明の下に生きる月の住人達が、戦争という野蛮な行為をしていることが信じられなかった。
歴史を創造するほどの立場になれば、戦争の悲惨さぐらいはよく理解できるし、真っ当な文化人がやるべきことは、思想、あるいは経済的な面での行き違いを、戦争ではなく話し合いによる協調と妥協で解決していくことだと心得ていた。
そんな考えを、当時も永琳に対して語った。
その時永琳は、
「その通りね」と笑みを浮かべながら、先の言葉を語った。
今になって、その言葉の意味が、何となく理解できるようだった。
というか、最初から分かっていた。
戦うことそのものを否定することは慧音にはできないし、彼女には初めから、グランチャーの戦いを認める気持ちがあった。
彼女が、グランチャーに対して言いたいこと。
それは、もっと別にあった。
グランチャーの踵にもたれかかったまま、慧音は静かに言う。
「・・・グランチャー・・・貴方が戦うことは、認める。それがき

っと、貴方が生きることの意味なんだろうから・・・・・・だけど・・・」

それだけ言って、慧音は少しの間沈黙した。
その沈黙は、言葉を選ぶための沈黙ではない。
すでに心の中に定まっている言葉を、確かなものにするための沈黙だった。

「グランチャー。貴方は、妹紅のこと、好きなんだな?・・・・・・そうなんだな・・・・・・なら約束して。貴方が何をしようと、妹紅を哀しませたり、辛い思いをさせたりしないと・・・・・・もしそれができないというのなら・・・私は、貴方のことを絶対に信じないし、認めない・・・でも、もし約束して、それを守ってくれれば、私は・・・」

最後まで言う必要はなかった。
グランチャーは、慧音の約束を飲んで、それを守ることを誓ってくれた。
その声ではない声は、やはり誠実さを感じさせるものだった。
この誠実さを感じてなおグランチャーを疑うようなことは、さすがにできない。

それに、誠実さと共に、グランチャーの示す意志の中には、妹紅に対する好意もまた確かに存在していた。
それが慧音には、嬉しかった。

「・・・グランチャー・・・」
慧音は静かな笑みを浮かべ、自分達の前に現れたこの奇妙な存在の名を呼んでいた。

しかし、慧音のこの好意は、初めから裏切られた後だった。
いや、グランチャーにとっては、確かに慧音の言葉を聞き入れ、彼女との約束を守っていたのかもしれない。
彼の者の本能に宿る怨念は、純粋なものであった。
それを他の者に感化させることは、グランチャーにとっては、悪しき事でも何でもなかったのである。

※

天狗から地底に来るよう催促を受けていた矢先に、ブレンと遭遇した永琳。
せっかくなので、向こうに行く前にあらかたその性質を理解しておこうと考えていた。
それに、地底にいる者達がブレンの調査のために永琳を必要とするのなら、永遠亭に現れたブレンも、一緒に連れていった方がいいだろう。
しかしこのブレンは、竹林の外に出ること・・・というか、永遠亭を離れることを、非常に恐れていた。
その原因というのが、何か恐ろしいものがこの竹林に潜んでいるから。ということだった。
それをどうにかしない限りは、ブレンを地底に連れていくことはできないし、永琳が天狗の要請を聞き入れることさえできはしない。
とりあえず今のところは、個人的にブレンを調査しておくとしよう。

ブレンの恐れる何者かの捜索は、因幡が率いる竹林の兎達が協力して行ってくれている。
竹林の兎には、ある特異な性質があり、彼らが互いに協力すれば、天狗にも負けないような能力を発揮できる。
もうしばらくすれば、ブレンの恐れる何かの正体も掴めるだろう。

そういう中で永琳は、屋敷の横で座りこんでいるブレンのすぐ傍にいた。
その胎内には今、輝夜がいる。
いくら生物の学を持っているからといって、輝夜を乗せてその場にいるだけで、ブレンの持つ性質がある程度理解できるのを見ると、永琳は異常であるのだろう。

彼女についてきて、一緒にブレンの姿を眺めている鈴仙に対し、彼女は言う。
「段々と分かってきたわ・・・このブレンは、他の生物の持つ生きる力をエネルギーにしているのよ」
「生きる力？」鈴仙が聞き返す。
「えぇ、代謝産物だとか、酸素を初めとする四つの元素だとか、栄養素だとか、そういうものは基本的に必要としていない・・・ただ本当に、生きる力そのものを必要としているのよ」
「・・・え～っと・・・どういうことなんです？」
「理詰めて考えることのできない。もっと霊的なものを力の源にしているのね」
「・・・変な生き物ですねぇ」
「そうねぇ・・・それ以上に変なのが、ブレンはその生きる力、オ

ーガニックエナジーを、自ら生み出すことができないようなの。だからああやって、他の生物を胎内に宿して、そのオーガニックエナジーを吸収している」

「・・・自分一人じゃ生きていけないっていうんですか？」

「まったくもってその通りでねぇ・・・ブレンの身体は、原子レベルの細かい成分（ビット）で構成されているの、人間で言う細胞みたいなもんね。オーガニックエナジーがそこに供給されないと、やっぱり人間の細胞と同じく壊死していく。再生も難しいようね・・・だから他の生物からオーガニックエナジーが吸収できないと、ブレンの身体は、岩の塊みたいになって死ぬ」

「あんなに大きいのに、そんな難儀な生き方をしてるんですか？」

「そうねぇ～・・・あれほどの大きさの生物が、単体で生きていけないなんていう例は稀有だわ。私は輝夜様の方が寄生体になってブレンを助けるという風に考えていたけど、実際寄生体と呼べるのはブレンの方だった。しかもその依存性はかなり強いのね・・・寄生体の方が宿主よりも身体が大きいなんて、おかしな話ね」

「どうしてああいう具合に生まれてしまったんでしょう？」

「・・・・・もしかしたら、ブレンが宿主から吸収しているのは、オーガニックエナジーだけではないかもしれないわ」

「え？」

「・・・ブレンは、ビープレートと呼ばれるものを探しているという・・・・・それを見つけ出すために必要な情報を、搾取しているのかもしれないわ」

「・・・つまり・・・」

「ブレンは今、輝夜様のことを観察して、そこから必要なものを取りこんでいるのかもしれない」

「・・・なんかブレンって、ちょっと恐ろしい生き物なんじゃないかと思えてきました」

永琳の言い方を大袈裟に考えると、ブレンは今輝夜の身体から彼女の生命力を吸い取って、それ以外にも、いろいろなものを絞り取る

だけ絞り取って利用している、と考えられる。
つまりブレンパワードにとって輝夜は、都合のいい餌か何かではないのだろうか？

そんな可能性を考えて、冷や汗をかく鈴仙を笑いながら、永琳は言う。
「あくまで仮説だけどね・・・あの顔を見なさい」
「・・・」
永琳に言われるまま鈴仙は、目線をやや上に向けて宙空をぼんやり見つめるブレンの横顔を見た。
鈴仙には、虫やら鳥やらの顔を見て、どういう顔なのか見当もつかない。
兎の顔なら、遠目から見ても何を考えているのか分かるのだが・・・だからそれと同じように、ブレンのこの横顔を見ても、何も分からなかった。

「・・・どういう顔なんです？」と聞く鈴仙に、永琳は、
「いい顔じゃない」と応えた。

ブレンが一体何者なのか。
その疑問への解答は、すぐに導き出せるものではないだろう。
それ以上に考えるべきなのは、自分達が今、このブレン達をどのように扱い、どう付き合っていくかだ。
もちろん、それを考えるために、彼らの性質を理解しておく必要もあるのだが・・・

永琳はふと、ブレンの顔を眺めていた視線を、別のところに向けた。
ブレンに対して正面に位置している、無数の竹が一面に生い茂る殺風景にだ。
鈴仙も釣られてそちらに眼を向ける。

そこには、妹紅の姿が見えた。
その姿に、永琳はかすかに眉をひそめる。

無数の竹を背にしてその場に立ち尽くしていた妹紅は、驚愕した表情で眼を見開き、彼女の眼前にいるブレンの姿を眼の当たりにしていた。
初めてブレンの姿を見れば、当然驚くのも無理はないが、永琳にも鈴仙にも、彼女の驚きようは少し異常に見えた。
そうして永琳は、見開かれた妹紅の眼の中に、驚愕というもの以上のもっとおぞましい念が宿っているように見えた。

永琳が、輝夜が乗った状態のブレンを観察したいと言っていたので、輝夜はまたブレンの胎内へと乗りこんでいた。
何日か日が経てば、最初は何かに怯えきっていたブレンも、少しずつ落ちついてきた。
それでも輝夜が
「永琳が呼ばれててさ、貴方を連れて地底に行きたいんだって。一緒に行ってあげなよ」と呼びかけると、それは固く拒絶していた。
輝夜は、大きな鼻息をひとつついてから、仏頂面で、「なんでさー」と聞く。
怖いから、だそうだ。とても恐ろしい者が、この竹林にいる。
この屋敷から少しでも離れれば、そいつに見つかりそうだというのだ。

「そうはいうけどねぇ～。いつまでもこんなところでじっとして動

かないと、健康に悪いわよ？・・・あ、私が言えることじゃないや・・・・・まぁ、それはそれでさ。今ここの兎達が、貴方の怖がってる奴を探しているわよ。そいつが見つかったら、私達でなんとかするからさ。そうしたら、貴方は永琳についていくのよ。よいなー？」

ブレンは、そんなことはしなくていいという。

そんなことをすれば、もっと怖いことになる。死ぬかもしれないというのだ。

「死ぬって・・・そんなに怖い奴なの？・・・・・・・そうか、そりゃ確かに臆病にもなるかも・・・・・・でも、だからってこのままじゃぁさ・・・・・・・・・・ん？」

言いかけたところで輝夜は、胎内に映しこまれる外の景色の中に、見覚えのある姿があるのが見えた。

他でもない、藤原　妹紅だ。

彼女は、ブレンの姿を見て驚いているようで、眼を大きく見張っていた。

いや、何か変だ。

具体的に何が変なのかは分からないが、とにかく何か妙な印象を受けた。

しばらくその場で立ち尽くして妹紅は、見開いた眼を今度は細くして、ゆっくりとこちらに歩み寄ってくる。

その足取りはどこか荒々しく、細められた眼は、まるで睨みつけるようだった。

「な・・・なに？」

何か尋常ならざる雰囲気に戸惑う輝夜。

そんな中でも妹紅はずんずんとこちらに歩み寄り、ついには、閉ざされているブレンの股間部の装甲板の眼の前にまで近づいてきていた。

そうして次の瞬間、彼女の両手のひらが装甲板を強く叩く音が胎内で反響し、輝夜は身ぶるいした。

「ひゃっ！・・・な・・・っ」

そうして次いで聞こえたのは、低く唸る妹紅の声だった。

「輝夜・・・いるんだろう・・・出てこい」

「・・・はっ？」

「ここを開けるんだよ・・・っ」

その言葉を聞いた途端、ブレンが、恐怖する言葉を輝夜に伝えた。

妹紅のことを、怖いというのだ。

その恐れは、ブレンが初めから抱いていた正体不明の何者かに対する恐れと同じものだった。

まさか、ブレンの恐れていた何者かというのは、妹紅のことだったのか？

しかし、そうだとして、一体何故？

とにかく、妹紅が装甲を開けろと催促している。

それを聞き入れないわけにもいかないだろう。

輝夜は、怯えるブレンをなだめつつ、装甲を開けることを促す。

「何を怖がってんのよ。こいつはそんな悪い奴じゃないよ・・・とにかく、ここを開けよう、私が話をするからさ。そうすれば、あいつだってここから離れて、怖くなくなるわよ」

その輝夜の声をブレンは聞きいれた。

輝夜は外にいる妹紅に、

「分かったから、ちょっと離れて。そこにいたら潰されるわよ」と呼びかける。

そうして、妹紅の身体が横に離れるのを確認してから、ブレンに装甲を開けさせた。

胎内を覆うスリットウェハーが滑り、大きな穴を作る。

その場から離れていた妹紅が、開いた装甲の上に乗って、穴からこちらを覗き見る。

その異様な炎を湛える眼を見てしまうと、彼女の前に出ることが気が引ける輝夜であったが、妹紅が何故こんな顔をするのかは、確かめなければいけない。

輝夜はその場で立ち上がり、穴の向こうで待つ妹紅の顔に自分の顔を近づけていった。

が、その時だった。

気がついた時には輝夜は、自分の襟首を、妹紅の右手に乱暴に掴み上げられていた。

その様子は、永琳達にも見えた。

突然ブレンの胎内へと右腕を突っ込んだ妹紅は、そこから輝夜の身体を外に引きずり出した。

そして、彼女を掴み上げたまま装甲から地面に降り、何が起こったのか分からない様子で、成すがままになっている輝夜の身体を、乱暴に地面へと叩きつける。

その一部始終を垣間見た鈴仙は、

「な、なにすんのーっ！」と叫びながら、妹紅の方へと駆け寄っていく。
そうして、輝夜を地面に放り投げた勢いでふらつく妹紅に掴みかかろうとするが、逆に、妹紅の両手が鈴仙の襟首をつかみ取って、異様な力で引きよせていた。

「うわっ！」
そのまま鈴仙は、抵抗のしようがないほどの力で妹紅の腕に振り回され、ブレンの踵の辺りの装甲に、背中から叩きつけられた。

「かっは・・・っ！」
脊椎が砕けそうな衝撃に、意識が虚無の彼方に吹き飛んでいく。
後頭部も盛大に叩きつけられ、実際彼女は脳震盪を起こしてしまっていた。
そのまま彼女は、立ち尽くしていた永琳の方へと投げ返される。

よたよたと、千鳥足でこちらに戻ってくる鈴仙の身体を受け止めつつ永琳は、
「ウドンゲっ？」と呼びかける。
「う・・・ぅぅん・・・」
意識がはっきりとしていない。
命に別状がないのは間違いないだろうが。まさか背中から叩きつけられただけでこんなことになるとは・・・

しかし、鈴仙のことは心配であるが、それ以上、妹紅だ。
彼女はすでに、自分が投げ捨てた鈴仙のことなど見向きもせず、彼女の足元で起き上がろうとしている輝夜の前で、右脚を上げていた。
そうして、彼女の胸の中心部に目掛けて、勢いよく踏みつける。

「・・・っ！？」

さすがに永琳も思わず息を呑むが、輝夜は咄嗟に、踏めつけてくる妹紅の右脚を、両手で掴んで受け止めていた。
歯を食いしばる彼女の表情には、力以上に、この状況に対する戸惑いが込められているようだった。
そうして、細められた眼を妹紅に向ける輝夜に、妹紅はまた、低い唸るような声で言った。
「思い知らせてやる・・・あんたに・・・私が・・・・・・っ」

永琳は、意識朦朧の鈴仙をその場に寝かせて、慌てて妹紅の方に駆け寄っていく。
そうしている間にも、妹紅は自らの右手のひらを眼前に広げる。
そこには突如として小さな炎の玉が生まれ、煌々たる光で、強張る妹紅の表情を照らしていた。
そうして妹紅は有無を言わさず、自身の右手に発生した火の玉を、苦悶する輝夜の顔に投げつけようとする。

ちょうどその時、永琳が妹紅の身体に組みついた。
広げられた右手を永琳の左手が掴むように握りしめ、生み出された炎を消す。
同時に、妹紅の身体を押しのけて、輝夜の身体から引き離す。

「一体なにをするの、妹紅・・・っ」
さすがに焦燥した様子の永琳に、妹紅は俄然、爆発するような叫びをあげた。
「離せよぉーっ!!」
「どういうつもりなのっ」
「離せって言ってるっ!」
永琳の問いに耳を貸す気配もない妹紅は、永琳の脇腹を、残っていた左手で拳を作り、殴りつける。

深くめり込む妹紅の拳であったが、鈴仙を昏倒せしめたほどの彼女の力であっても、永琳が相手では、せいぜい、「うく・・・っ」と、小さな呻き声を出させることしかできなかった。

「妹紅・・・っ！」

尚も呼びかける永琳だが、妹紅はやはり、その声を聞かない。

「はぁぁぁぁぁ・・・・・・っ！！」

ただ、腹の底から湧き出るような、憤怒のこもった息を吐き捨てるだけだった。

「・・・っ」

永琳はやむをえず、掴んでいた彼女の右手から手を離し、妹紅を解放した。

彼女は、永琳から数歩後ずさり、その場で立ち尽くしていた。

その眼は、ようやく立ち上がった輝夜の姿を、きつく睨みつけている。

永琳の方も妹紅から離れ、輝夜の方へと歩み寄る。

もしまた妹紅が彼女に掴みかかったりしたときは、今度は再起不能にするつもりだった。

そうして、険しい視線を浴びながら輝夜は、戸惑った表情で妹紅に聞く。

「ど・・・どうしたのよ。妹紅・・・」

その声に妹紅は、再び怒りの色をその顔に張り付かせ、再び輝夜の身体に掴みかかろうとしたが、そこをどうにか堪えた。

そうして、少しは落ち着いた表情で、しかし、より一層荒々しくなった口調で、応える。

「・・・お前はいつだってそうだったっ、何にも分かっちゃいない・・・他人の気持ちなんか考えずに、傍から嘲笑って、面白がって・・

・・・・気に喰わなんだよっ！」
「・・・なにを・・・」
突然の妹紅の罵倒に、輝夜は戸惑った。
そうして同時に、異様なまでの怒りを表す妹紅の表情に、少しずつ、哀しみの色が宿っていくのが見えた。

「・・・だって・・・だってそうだろうっ・・・あんたは自分の退屈しのぎのために、出来もしない難題を押し付けて、多くの人達を嘲笑った・・・私の家族をめちゃくちゃにしたんだ、輝夜はぁーっ！」
「・・・・・・あ・・・っ？」
この時ようやく、輝夜には、妹紅のこの怒りの源が分かった。
そうして、妹紅の表情に浮かんでくるのが、怒りよりも哀しみなっていく、その理由も。

見開かれた彼女の眼には、僅かずつ、涙が溜まり始めていた。
「あんたは・・・忘れちまったんだろうけどなぁ・・・・・・あんたなんかが現れなければ、私達の家族は、何も変わらないで・・・みんな普通に暮らせていけたのに・・・・・・みんなを、みんなを返してよっ！」
「・・・・・・」
「それだけじゃない！私の生命はっ・・・あんたなんか現れないで、蓬莱の薬なんて、そんなものなければ、私だってみんなと一緒に、普通に暮らせて。みんなと一緒に死ぬことだってできた！・・・こんな身の上になって、いつまでも生き続けることなんてなかったのに・・・」
「・・・妹紅・・・」
妹紅の眼には、いつの間にか涙があふれ出んばかりに溜まり、彼女の叫びは、竹林に響き渡る絶叫となっていた。
「そうだ！そうだよっ！！私だって、自分から望んでこんなことに

なった自分を嫌いながら、生きていく必要なんてなかったんだっ！・・・あんたさえいなけりゃ！・・・あ、あんたなんかがいるから・・・私はぁーーっ！！」

「・・・・・・・っ」

絶句する輝夜の眼の前で、妹紅は涙を流しながら、深くうつむき、身体を震わせながら黙りこんだ。

いくつもの雫がまっすぐに落ち、彼女の足元に染みをつくる。

だが、しばらくして妹紅は、その涙を振り払うように激しく頭を左右に振って、そうしてから顔を上げて、哀しみが吹きとび再び怒りだけに支配された表情で、言った。

「だからだっ・・・私は、私の中の絶望と同じものを、あんたに味わわせてやらなきゃならないんだよ・・・・・・輝夜。殺してやるよ・・・死ぬことができないんなら、何度でも殺してやる。そうして、生きていることが嫌になるまで、絶望の中に落とし込んでやるからな・・・っ！」

妹紅の中の怒りが輝夜に理解できて、永琳に理解できないわけがなかった。

彼女は、妹紅の叫びを聞き入れて、その上で、その眼前に躍り出てから、厳しい口調で言い放った。

「しかしそれで、貴方の気持ちの解決ができるわけが・・・」

が、しかし、言いかけたところで永琳は後ろから、輝夜に腰を押された。

「輝夜様？」

「永琳、いいから・・・」

どくように催促する輝夜の言う通りにし、とにかく数歩後ずさった永琳。
彼女に入れ替わり妹紅の前に立った輝夜は、突然、落ちるように両膝をついて地面に座りこむと、同じく両手のひらを地面につき、怒れる妹紅の前に跪いた。
永琳も妹紅も、その姿に驚く。
そうして輝夜は、何の淀みもない澄んだ眼で妹紅を見上げながら、静かにただ一言、言い放つ。

「妹紅・・・ごめん・・・・・・ごめん・・・」

それは、何の他意もない、謝罪の言葉だった。
普段の輝夜では、こんなことは到底できなかった。
謝罪こそすれ、跪くようなことは、自分の立場からくる強い自尊心を持つ輝夜には、できないことだった。
だがこの時の輝夜は、何故だか全ての自我を忘れて、ただただ純粋に、妹紅に対する罪の意識を感じて、彼女に対し、一言でもいいから謝りたいと、心の底から思った。
輝夜はさらに、深く眼を閉じ頭を下げてから、もう一度静かに謝罪する。

「ごめんよ妹紅・・・・・・許してよ・・・」

永琳は最早何も言えず、ただ立ち尽くすばかりだった。
長い沈黙が、二人の間を過る。

そして輝夜は、妹紅の囁くような声を聞いた。
「顔あげろよ」

「・・・妹紅・・・許してくれるの・・・？」

閉じていた眼を開き、ゆっくりと顔を上げ、妹紅を見上げる輝夜。
しかし彼女は、これまで以上の戦慄する感覚に、胸が突き刺される痛みを覚えた。

妹紅の怒りは、何ひとつとして収まってはいなかった。
むしろ、輝夜を見下ろすその眼には、もうどうすることもできない黒い炎が燃え上がっている。

「今更そんなことしたって・・・遅いんだよ・・・・・・・もう何やっても遅いんだよ。輝夜・・・っ」
その声はとても静かなものだったが、この世のものとは思えない怨嗟の声となって、輝夜の鼓膜を震わせた。

輝夜は、地に突っ伏した身体をわなわなと震わせて、泣き出しそうな顔になりながら、大声で妹紅に語りかける。
「い、嫌よ、怒らないでっ・・・ごめんよ！・・・・・・・どうしてそんなに・・・」
妹紅はなにも応えなかった。
ただ一言吐き捨てるように、「もうみっともないことはやめろ・・・っ」とだけ呟いて、踵を返し、どこかへと去ろうとしていた。
一歩一歩歩を進め、段々と遠ざかっていく彼女の背中。
そこから覗く彼女の右手は、張り裂けそうなほどに強く握られ、震えていた。

輝夜は立ち上がり、尚も妹紅に呼びかける。
「妹紅・・・わ・・・私のこと、嫌いになったのっ？私のこと嫌いなのっ！？」
妹紅は立ち止り、振り向きもしないまま、叫んだ。

「黙れよっ!!嫌いだよ、大嫌いだっ!もう絶対に許さないからな!」

「・・・っ」

そうして妹紅は再び歩を進め、少しずつ輝夜から遠ざかっていく。

そうしてやがて、生い茂る竹の中に埋もれるように消えていき、見えなくなった。

その場で立ち尽くし、一部始終を見守っていた永琳は、幽鬼のごとくじっと立ったままの輝夜の傍に歩み寄って、静かに呼びかけた。

「輝夜様・・・」

しかし輝夜はその言葉には応えず、おぼつかない足取りでブレンパワードの方へと歩み寄っていき、装甲の上に乗ってから穴を潜って、胎内へと入っていった。

それから少しの間、沈黙が続いたと思うと、永琳の耳には、彼女の泣き声が聞こえてきた。

叫ぶようなその、彼女の慟哭の合間には、妹紅の名を呼ぶ声も聞こえた。

永琳には、妹紅をどうすることもできなかったように、今の輝夜もどうすることもできそうになかった。

ただ苦々しく、「何故こうなった・・・っ」と吐き捨て、ほったらかしにしていた鈴仙の方へと歩み寄ることしかできなかった。

仰向けに倒れて気を失っている鈴仙の前にしゃがみこむ。
脳震盪により意識を喪失しているが、決して重度のものではなさそうだ。
下手に身体を揺すったりせず、安静にしておいた方がいい。

輝夜の慟哭が響く中、永琳は立ち上がって、鈴仙の頭を冷やすために冷水につけた手拭いでも持ってこようとした。
ちょうどその時、どこからともなく、彼女の前に因幡がやってきた。

輝夜の泣き叫ぶ声に戸惑いながらも因幡は、
「どうしたんです?もしかして、働かないことを馬鹿にされたりしちゃった?・・・あれ、ウドンゲの奴こんなところで寝てる~」
と、面白おかしく聞いてくる。
さすがに今の永琳には、彼女の調子に合わせることはできなかった。
「正直、そんな冗談を言えるような状況ではないのよね」
「えぇ?」
「まぁ、とにかく。そっちはどうしたの?」と、永琳が聞く。

彼女の表情に、どうやらかなり深刻な事態が発生したらしいことを察しつつも、因幡は、永琳の問いに応える。
「ほら、ブレンが何かに怯えてるらしいから、その原因を探してたんですよ。それでね?それっぽいものが見つけられたんです」
「そう・・・それは?」
「ブレンと似たような、抗体(アンチボディ)が見つかったんです。でも、細かい形はブレンとは大分違うんですよ・・・もしかしたらあれが、ブレンが怖がってるものなんじゃないかなぁ~って・・・ブレンの敵だったりするんじゃないですかぁ?」
「ふむ・・・それってどこにいたの?」
「妹紅の屋敷のすぐ傍にいたよ」

「え・・・っ」

因幡の言葉に、永琳は眼を見張った。
因幡の報告はほとんど憶測の域であったが、永琳の脳裏では、それがすべて間違いのないものとして確定された。
そして、それが間違いないものだとすると、あの妹紅の怒りの原因も、そして、これから何が起ころうとしているのかも、すべて頭の中で導き出されていた。

「師匠～？」
何事かと呼びかけてくる因幡のに対し、永琳は険しい表情を浮かべ、額から汗を流しながら、静かに応えた。
「・・・予想以上に、マズイことになるかもしれない・・・」
「はぁ？」

事の経緯を知らない因幡の声は素っ頓狂なものであり、この場に訪れようとしている事態に対しては、かなり不釣り合いなものだった。

第六話　その2

一時間も経たない内に、妹紅は屋敷に帰ってきた。
戸をくぐって、座敷で待っていた慧音に顔を見せた妹紅は、静かな声で、こうとだけ言う。

「ようやく、見つけたよ」
「え？」
この妹紅の言葉に、慧音は呆気にとられた声を発して、
「見つけたって、何をですか？」と問う。

「・・・グランチャーの敵だ・・・」
「あっ？・・・そ、そうですか・・・どういった者なのです？」
「グランチャーと似たような姿をしていた・・・多分、同類の生き物だろう」
「・・・なら、その者をこれから・・・」
「あぁ・・・あいつを倒しに行く・・・・・・そして、輝夜の奴に、私の絶望を教えてやらなきゃいけないんだ」

「・・・・・・え？」
慧音は、今しがた妹紅が何を言ったのかよく分からなかった。
彼女は、グランチャーの敵である何者かを見つけ出したらしい。
なら、これからやるべきは、その者を倒すことだ。
それがグランチャーの生きる目的であることは、慧音にだって理解できるのだから、当然のことだと思えた。
しかし、その後に語った慧音の言葉。

それはあまりにも不可解で、突拍子もないものであったように思えた。

彼女が何と言ったのか、その言葉と意味を心の中で確かめた慧音は、わけがわからないといった様子で、妹紅を問いただしていた。

「何故ここで輝夜様の名がっ？・・・関係ないのではないですか？」

その声を聞いた妹紅は一時だけ、『もっともだな』という表情を浮かべつつ、次の瞬間には、慧音の眼を異様な気色を湛えた表情で見つめながら、応えていた。

もちろん、慧音の疑問に答える理由だってあったのだ。

「グランチャーの敵の中に、輝夜がいた・・・あれと輝夜は、結託していたんだ」

「・・・しかし、輝夜様を戦う対象にする必要はないのではないでしょうか・・・グランチャーのことを考えれば、輝夜様だって、やむを得ずあれに乗ったのかもしれませんよ。そうしなければ、きっと死んでいたかもしれないから・・・ですから・・・」

慧音のその声は最後まで続くことはなかった。

妹紅の、「慧音、そういうことじゃない！」という険しい声が、慧音の言葉を遮った。

そうして妹紅は、座りこんでいた慧音の傍まで歩み寄ると、その場にしゃがみ込んで、自分の目線を、慧音の眼線と同じ高さにした。

互いの息遣いさえ聞こえそうなほど近くに迫った妹紅の表情だったが、慧音はそれを見て、思わず息を呑んだ。

妹紅の表情が、あまりに険しかったからだ。

戸惑う慧音に対し、妹紅が言う。

「グランチャーの戦いと、私の憎しみは別なんだ・・・グランチャーはグランチャーとして自分の目的を果たし、私は、私の成すべきことを成す」

「・・・憎しみ？」
慧音は、妹紅の呟いたひとつの言葉を、もう一度反趨していた。
彼女が妹紅と出逢って間もないころ、同じように彼女から聞いた言葉だった。
生きることへの諦観に、暗く沈んでいた時に、呟いていた言葉だ。
その時の妹紅と、今の妹紅は、違う表情をしていた。
しかし、その心の奥底にあるものは、同じもののように見えた。
その当時の記憶は、今も確かに残っている。

「妹紅・・・君は今も、輝夜様のことを・・・」
呟くように言う慧音に、妹紅は応える。
「そうだ。私はあいつのせいで、今のような身の上になってしまったんだ・・・その憎しみは、精算しなくちゃいけないんだよ・・・っ」
「で・・・でも、輝夜様は君への謝罪の気持ちを持って、貴方と付き合ってくれている・・・もう、許して差し上げてもいいんじゃないか・・・？」
「いや、駄目なんだ。許せないんだよ・・・というより、許しちゃいけないんだ・・・・・終わった後に何をしたって、どんなに謝ったって、何の慰めにもならないんだよっ・・・私のこの気持ちには、何の整理もつかない・・・あいつとの決着をつけない限り、私はどこにもいけないんだよ」
「・・・・・だから・・・だからいくの？妹紅・・・」
「そうだ・・・今から行ってくる・・・待っていてくれ」

微かに身体を震わせながら聞く声に、妹紅はこう応え、その場で立ち上がり踵を返すと、慧音から離れていく。
慧音は慌てて立ち上がり、すがりつくように妹紅の後を追い、その両肩に手を当てながら、言った。

「妹紅！そういうことをしても、気持ちの整理なんてつかない。もっと嫌な気持ちを増やしていくだけだ・・・君は・・・君はそういうことを言う人ではないはずだよ・・・っ」

その声を聞いた妹紅は、ぴたりと動かなくなり、しばらく沈黙を続けた。

だが、その身体が、微かに震えだし、彼女は突然、肩にすがりついていた慧音の両手を振りほどき、身体ごと彼女の方に振りかえると、逆に慧音の両肩に力づよく手を置いて、絞り出すように言った。

「慧音！・・・あんたなら、私の気持ちも分かってくれると思っていた・・・・・私は、私はどうしても、今のこの状況のことを、認めることができない・・・っ！」

その言葉を聞いた慧音の顔には、堪えようのないほどの苦しみの色が見えた。

そうして彼女もまた、絞り出すような、微かな声で言う。

その眼には、微かにだが、涙が見えた。

「今の状況って・・・妹紅・・・・・確かに君がそんな身体になったのは、とても辛いことだし、哀しいことだけど・・・それでも・・・君がそんな身体になっても、君と私が出逢うことだってできた・・・・・そんなことまで、みんな・・・みんな認められないっていうの・・・？」

その言葉を聞いた妹紅の顔から、憎しみの色は僅かに消えた。

しかし、根本的なところにある憎しみ火種を消すことはできない。

慧音のこの言葉であっても、ほんの一瞬、妹紅の中にある怨念を僅かにかき消すことしかできなかった。

そして、またすぐにその炎は同じように燃え上がってしまう。

「・・・それも違うな・・・私は、あんたと一緒に生きていくためも、私の過去をどうにかしなくちゃいけないんだ・・・今の状況って言ったのはそれだよ・・・・・私の人生に、認められる部分が

あったとしても、全ての元凶であるあいつだけは、のうのうと生かしておいちゃいけないんだっ」

そこまで吐き捨てた妹紅は、慧音の肩に置いた両手を離して、再び踵を返し、歩きはじめる。

慧音はそんな彼女に、尚もすがりつこうとした。

今度は、その身体に全身で抱きつこうとする。

「妹紅、やめてよ！」

だが、彼女の身体は、鋭く突きつけられた妹紅の手のひらに突き離され、その衝撃でよろよろと後ずさった慧音は、力なく膝を折って、座敷の上に尻餅をついて座りこんでしまった。

ただ、ドンと突き離されただけの衝撃だったが、慧音にとってそれは、心臓を巨大な岩石で押しつぶされたような苦痛として感じられた。

座りこんだ姿勢で動けなくなり、愕然とした表情で妹紅を見つめる慧音。

妹紅もまた、彼女に背中を向けたまま、ちらりとだけその横顔を見せて、静かに呟く。

「・・・あんたさえ、私の気持ちを分かってくれれば・・・何も辛くなんてなかったのに・・・」

そんな言葉を、乾いた空気の中に反響させ、妹紅は歩を進め、やがて屋敷から外に出ていってしまった。

慧音はその背中を、光のなくなった眼で、追うことしかできなかった。

屋敷を出た妹紅はそのまま真っ直ぐ、グランチャーの下へと向かった。
そうして、グランチャーの方は妹紅に言われるまでもなく、股間部の装甲を開き、胎内へと妹紅を招いていた。
彼女が屋敷に戻ってきたその時から、すでに彼女のやろうとしていることは全て分かっている。
妹紅もまた、迷いない足取りで胎内へと入り、スリットウェハーの壁面に背中を預ける。

そうして妹紅は、グランチャーに語りかける。
慧音に自身の気持ちを認められず、彼女自身慧音を突き離してしまった今の妹紅には、信じられる者も、信じる権利のある者も、グランチャーしかいなかった。
「グランチャー・・・あんたも私も、まだ生まれてすらいなかったんだ・・・・・本当に生まれるために、まだ、やるべきことがあるんだよ・・・それを今から、果たしに行こう。私の生命なら、いくらでもあんたに貸す。だから、あんたの生命も、ちょっぴりだけ、私に貸してくれ」
妹紅の言葉に、グランチャーは実直に応える。
動き出したグランチャーの右手が、傍らに置いてあった細長い金属質の構造物、ソードエクステンションの銃身を握る。
そして、全長十mほどの肉体が、力強く立ち上がった。

妹紅の叫びが、グランチャーの胎内にこだまする。
「これから私達の、本当の生命が始まるんだ、いくぞぉーっ！」

その叫び呼応して、グランチャーの肉体が地面から浮きあがり、彼の者は、自らの、そして妹紅の敵がいる、永遠亭へと向けて動き始

めた。

慧音がその後を追って屋敷から出たのは、グランチャーが宙に浮き上がる独特の音を耳にした、その数分も後のことだった。
それまでずっと、慧音は身動きひとつ取ることすらできなかった。

慧音は、妹紅と初めて出逢ったその時からずっと、彼女の気持ちを理解しようと心がけていたし、実際それは実現しているように思えていた。
だが、実際はこれだ。
慧音は、妹紅の中にある憎しみの本当の大きさを知ることができなかったし、それゆえに、彼女から突き離された。
彼女の手のひらに押された胸の痛みは、未だ取れていなかった。

それでも、何かに衝き動かされるように屋敷から飛び出した慧音。
辺りを見渡すと、そこには妹紅の姿はないし、グランチャーの姿さえもなかった。
すでに、彼女らの目的を果たすべく、飛びだってしまったのだろう。

そうして慧音には、今ようやく、グランチャーがあの時発した異様なまでの敵意の意味が理解できた。
グランチャーはあれを他の生物に感化させることで、怨念を呼び起こし、自らの闘争心に賛同させる。
妹紅もまた、グランチャーにより憎しみを呼び起こされたのだろう。
本当の本当に、彼女はあのようなことを言うような者ではなかったのだ。

ただ、グランチャーにより、荒んだ心を植えこまれただけだ。

慧音の脳裏を過ぎったその考えは、あくまでも憶測であり、妹紅のことを信じたい彼女が都合よくグランチャーに悪意をなすりつけているだけとも言えた。

それを承知の上で、慧音にはこの考えが、間違いないという確信を持っていた。

そうしてその確信が、慧音の、竹林の竹をも吹き飛ばさんばかりの叫びを呼び起こしていた。

「グランチャァァーーーっ！！お前、お前ぇーっ！そうやってお前は、私との約束だって破って、妹紅のことを道具のように扱うっ！お前の中にある戦う力、生きる力は、それしきのものだというのか！お前の今からやろうとしている戦いは、人の気持ちを踏みにじって、自分の目的のためだけに利用するような、一番安直で、最も愚かしい戦いなんだよっ！グランチャァーっ！貴様はぁ！その程度の生命体だったというのかぁーーっ！！」

その叫びの余韻も冷めやらぬ中、慧音は妹紅とグランチャーを追って、永遠亭に向けて駆け出していた。

※

ひとしきり泣き叫べば、少しは心も晴れた。

ブレンの胎内、スリットウェハーの壁面に力なくもたれかかる輝夜は、突然顔を覗かせてきた永琳の声を聞いた。

その表情には、深刻な焦りの色が見えた。

「・・・なに・・・」

輝夜は、心が落ちつこうとも決して消え去ることはない空虚な気持ちから、投げやりな口調で聞いていた。

それに永琳は、応える。

「輝夜・・・泣きっ面に蜂といった感じだけど、大変な事態になりそうよ」

「・・・だからなに・・・っ」

「妹紅が、あなたの敵になるかもしれない」

「・・・・・・え・・・えっ!?」

今まで無気力だった輝夜も、こんな言葉を聞けば、人が変わったように驚くのも無理はない。

次いで彼女は、まったくもって意味が分からないといった具合に、永琳に捲し立てていた。

「ど、どういうことよ!なんでよーっ!?」

「詳しい事情を話せば。ブレンが敵として恐れている者がいるということだったわよね・・・それが妹紅の屋敷で発見されたのよ。それで、兎を何匹か偵察に向かわせているのだけど、そいつが今こちらに真っ直ぐに向かってきている・・・それにはおそらく、妹紅が乗っている」

「だ・・・だからなんでよっ?」

「妹紅の屋敷のすぐ傍にいるアンチボディなら、妹紅が乗っている可能性が一番高いでしょう・・・」

「・・・それで・・・それで・・・だ、だから!あんたはなにが言いたいのさ!」

「ブレンがあれほど恐れる相手なら、どうあっても戦うことは避けられない・・・戦うのよ」

「・・・え・・・え・・・・・・っ？」

「・・・ブレンに関してはどうしても、戦うしかないのよ。私がブレンに乗って戦うこともできるけど、ブレンは相性のいい者と一緒でないと十分オーガニックエナジーを吸収できないから、力が発揮できないの。もしかしたら、負けてしまうかもしれない・・・だから、ずっとブレンに乗っている、輝夜が一緒に戦うしかないわ」

「・・・な、なんでよぅ～・・・っ」

「・・・それに、妹紅のあの怒り・・・あれは恐らく、彼女のアンチボディにより呼び起こされた感情よ・・・このブレンにも似たような性質はある。貴方が妹紅の前で跪いてみせた、あの他人を思いやるような優しさは、ブレンから与えられたものだと考えられるわ・・・だから、今の妹紅は本当の彼女ではない。アンチボディに操られているのよ・・・それを、あなたとブレンの優しさで、解放してあげるしかない。そのために、敵を倒すのよ」

「・・・・・・っ」

先の事の戸惑いと哀しみも冷めやらぬ内に、訳の分からないことを言われ、混乱の極地に至りつつあった輝夜だったが、永琳のこの言葉にはっとする。

妹紅は、操られているのか？

自分のことを嫌いだと言ったあの言葉は、本心ではないと。

それを救う方法はある。

妹紅の乗るアンチボディを倒せば、それで済む。

それは輝夜にとっては、大きな救いとなるのは確かだった。

そうして今妹紅は、恐らく輝夜を倒す・・・殺すのではない、もっと徹底的に打ちのめすためにこちらに向かっている。

だというのなら・・・

輝夜は、わなわなと身体が震えていたのを止め、永琳に聞いた。
「わ・・・私はどうすれば・・・」
「もう一度言うけど、戦って、敵のアンチボディを倒すのよ。そうして、ブレンと妹紅の両方を守るの。もちろん、貴方とブレンだけを戦わせはしない。今鈴仙が眼を覚ましたから、私達で出来得るかぎりそちらを援護する・・・・・・それでいいわね？」
輝夜は永琳の言葉に、すぐには返事することができなかった。
深く眼を閉じ、自分の脳裏に浮かんでくる千年に渡る妹紅との記憶・・・思い出を一から追想して、それから、応えた。

「・・・しょうがない・・・やればいいんでしょ。やるわよ」
「・・・ん」
永琳はそれ以上何も言わず、ただ一度頷いて、その場から離れた。
それからすぐに股間部の装甲が閉ざされ、ブレンの胎内は、ひとつの閉鎖空間となった。

輝夜の中に戦う決意を見たブレンもまた、己の中にある恐怖心を打ち消そうと励み、ゆっくりと立ち上がっていく。
そして、左肘のところにひっかけられていたブレンバーを、右手に握り直す。

そんな中で輝夜は、ブレンに対して語りかけていた。
「・・・怖いわね。訳も分からないまま・・・なんでこんなことになったんだろう・・・・・・私はね、その妹紅ってのとは、昔、ずっと戦っていたんだよ・・・でもね、今回の戦いは、その時よりも、ずっと怖いの・・・」
ブレンだって戦いを恐怖している、輝夜だって、もう飽き飽きしているはずの妹紅との戦いを恐怖している。
二人は今、互いに恐怖を共有していた。
そうすると、互いの恐怖に対して互いで励まし合える気がして、少

しだけ気持ちが和らぐようだった。

「・・・永琳は、妹紅が怒ってるのはアンチボディのせいだっていうけど、そんなことはないはずなのよね・・・・・・妹紅は確かに、あいつの本心から私を怒ってるし、憎んでる。きっとそれは、永遠に消えないでしょうね・・・・・・私はずっと、それから逃げていたのかもしれない。妹紅の中の憎しみを打ち消そうと思って、あいつとずっと戦ってきた。それで、段々と妹紅の顔が柔らかくなっていくから、安心していたけど・・・本当は全然、そんなことはなかった・・・・・・多分、このままじゃいけない・・・もう一度、あいつの憎しみを、真っ正面から受け止めて、認めてあげなくちゃいけないわ！そうやって、お互いが納得できるまで、戦って戦って、戦いぬいて。それからもう一度、話をしたい・・・」

どれほど言葉を続けても、輝夜の中にある恐怖心は消えない。むしろ、長々と続ける言葉が、妹紅との戦いを恐れていることを暗示しているようでさえあった。

しかし、決して間違ったことを言っているわけではないはずだ。だかこそ、恐怖の代わりに、それ以上に大きな、戦う勇気を心に宿すのだ。

「そういや、昔は妹紅に対して、こんな風に考えることなんてなかったのに、急にあいつのことが認められるようになった・・・それも、ブレンといるからなのかな・・・・・・あいつの中の憎しみが確かなものなら、私のこの気持ちだって、私の本心なんだわ・・・・・・ようやく分かったよ・・・私妹紅のこと、いい奴なんだって思うよ」

妹紅に対してやるべきことだって、同じだ。

何をやろうと、今の彼女の境遇は変わるわけがないし、事実はいつまでも消えることはない。

なら、彼女の中の憎しみが消えることもない。
だからせめて、あえて憎しみをその身で受けて、お互いが納得できるように理解するのだ。
その上で、憎しみが見えなくなるほどの、新しい絆を創ればいい。
それなら、できるはずだ。

「ブレン・・・もしかしたら、貴方は死ぬかもしれない・・・それでも、私に付き合ってくれるかしら？・・・・・・・」
ブレンの返事は力強かった。
「よーし！じゃあ行こう、ブレン！」

永琳の眼にも、ブレンが戦う決意を固め、ゆっくりと立ち上がる様子が見えた。
場の空気が張り詰め、重苦しく固まるのが肌で感じられるようだ。
妹紅が乗っていると思われるアンチボディを偵察している兎からの情報を、その習性により逐一知ることのできる因幡が、伝えてくる。
「奴（やっこ）さんは、もう大分近いところまで来てますねぇ。ここに来るまで、もう二分もないみたいですよ」
それを聞いた永琳は、軽く頷きつつも、傍にいる鈴仙に言う。
脳震盪による意識の喪失から、先程解放されたばかりだった。
「頭痛い？」
「いえ・・・もう大丈夫です、いけます」
「輝夜様を援護する・・・私達だけで敵を倒すつもりで、遠慮せずにいくわよ。いつぞやみたいに、怖くて逃げださないようにね？」
永琳の言ういつぞやというのは、もう大分昔のことだ。
「あはは・・・師匠と一緒なら、生命だって惜しくはありません」

永琳の言葉に鈴仙は、固い覚悟のこもった声を返す。
が、その一方で因幡は、
「んじゃ、私は怖いんで逃げ出させてもらいます～」とだけ言い残して、そそくさとその場を後にして、どこかへと去っていった。

「あれ？あいつったら・・・」と、ぼやく鈴仙には、永琳はこう言っておく。
「まぁ、てゐが逃げるのは別にいいでしょう。彼女を無理に付き合わせることもないわ」
「・・・そうですね・・・」
「それよりも・・・来るわよ鈴仙」
「はいっ」

鈴仙の意気込む声が聞こえると同時に、竹林の上空から、ひとつの巨大な緑色の影が急降下し、永琳達の前に姿を現していた。
間違いない。
兎達の報告にある、アンチボディだ。
その姿をはっきりと網膜に焼き付ける間もなく、永琳は大地を蹴って飛び上がりつつ、大声で言った。
「飛びませ、鈴仙！」
「了解ーっ！」
力強い返事と共に後に続く鈴仙と共に、緑色の巨人、グランチャーの眼前に躍り出る。

そして、永琳はその右手のひらをグランチャーの前に広げ、鈴仙は右手をさながら拳銃のような形にすると、その銃口、人差し指を真っ直ぐに突きつける。
そうして二人は同時に、自らの持つ弾幕、スペルカードを撃ち放っ

た。

「散符『真実の月（インビジブルフルムーン）』！・・・いけっ！」

「いざや！天呪『アポロ１３』っ！」

瞬間的に無数に散布された光り輝く細長い弾。

一方は、ほんの数発だったものが、突如その一発一発が分裂を繰り返し、放射状に直進する無数の弾幕を形成し、もう一方は、円形に散らばったところで固定された弾幕が、永琳を中心に一度密集していき、そこから一挙に四方に拡散されていく。

双方とも、二人の最強のスペルカードでこそなかったが、拡散する弾幕のその密度は侮れないものである。

しかもそれがふたつ同時に放たれれば、回避の難度も、破壊力も並み大抵のものではなかった。ルールに従う正式な決闘では、反則の誹りを受けかねない離れ業だ。

グランチャーに対し、千に達するのではないかと思えるほどの弾幕が迫る。

広範囲に拡散して展開されているため、回避もできない。

あわよくばこれで撃破。そうでなくとも、多少のダメージを与え、輝夜の手助けぐらいにはなるはずだ。

そう確信する鈴仙であったが、その次の瞬間には、自身の隣で弾幕を放っていた永琳の、呻く声を聞いていた。

「・・・うっ？」

「・・・？」

次の瞬間、グランチャーは左腕を眼前に掲げると、それを勢いよく横なぎに振り抜いた。

同時に、左腕を覆う装甲の溝から放出された鋭い光が、二人の撃ち放った弾幕をかき消していく。

まさしく幕として迫った光の弾が、真っ向から切り裂かれ、多くの光弾は消滅し、残っている弾幕も、風に吹き消されるように軌道を乱し、どことも言えない方向へと吹き飛んでいった。

「嘘でしょうっ!?」鈴仙が思わず叫ぶ。

さらに続けざまにグランチャーは、右腕に握るソードエクステンションの銃口を、二人に向ける。

「はぁぁ・・・っ!」

鈴仙は、全身が委縮し、血の気が失せるのを感じながらも、咄嗟にその場から退避する。

それからほんの刹那の時間を置いて、鋭い光の矢が、竹林の中を通過する。

「うわぁぁーーっ!」

その威力は規格外だ。

仮にあれを弾幕だと仮定して、あれほどの一撃を放てるのは、幻想郷広しと言えど、指で数えるぐらいだろう。

威力に関して言えば、おそらく、幻想郷のいかなる妖怪の放つ弾幕よりも強力だ。

まぁ、それもそうだろう。

辛くも光の矢の猛威から逃れる鈴仙の悲鳴を聞きつつ、永琳は脳裏でそう納得していた。

しかし、これほどまでにアンチボディの持つ戦闘力が強大だとは思わなかった。

大きさだけでも何倍も違えば、生身では到底対抗することはできないものなのか・・・

やむを得ず、グランチャーから距離を取る二人の脳裏に、声が響きわたった。
それは、グランチャーの放つオーガニックエナジーの波を伝って聞こえる声だった。
そうしてそれは、間違いなく妹紅のものであった。

――残念だがなぁ！今そんな弾幕（遊び道具）を撃ったって、通用しないんだよ。私達の戦いは、本気の勝負なんだ！――

「やっぱり、妹紅だわっ！」

「・・・っ」

――あんた達は放っておいてやる、そこで見てるんだな！・・・でなけりゃ、輝夜の前にあんた達から先に殺してやるぞ！――

妹紅のその声が、グランチャーの放つ怨念の波の中で響いた、その瞬間だった。
グランチャーの背後から、輝夜の乗るブレンパワードが迫る。
その右手に握られているブレンバーは、すでに高々と頭上に掲げられ、真っ向唐竹割りの要領で振り下ろされようとしていた。
そして、輝夜の叫びが、同じくオーガニックエナジーの波の中で響いた。

――妹紅ーーっ！！――
――輝夜っ！来たな！――

グランチャーはすぐさま機体を反回転させつつ、振り下ろされるブレンバーの刀身をソードエクステンションで受け止める。
チャクラを纏った二つの刃がぶつかり合うことで生じる衝撃が、永琳と鈴仙の身体を吹き飛ばした。

「ふわっ！圧倒的だーっ！」
「輝夜！」

ブレンは、振り抜いたブレンバーをすぐに構えなおすと、勢いよく竹林の上空へと逃げた。
永琳達を巻き込むまいとしたためだろう。
その動きを、妹紅の
――――待てっ！――――という叫びと共に、グランチャーが追う。

嵐のように始まった二体のアンチボディの戦いは、そのまま竹林の外へと舞台を移していく。
竹林の合間から見える空には、夜の暗黒が張り付いている。
その中に点々と、星々の光が見えた。

「痛っ」
「く・・・っ」
吹き飛ばされた勢いのまま地面に叩きつけられた永琳と鈴仙が眼を向けるころには、すでにブレンとグランチャーの姿は見えなくなっていた。

上体を起き上がらせつつ、鈴仙が苦々しく呻く。
「なんにもできなかった・・・なんて生き物なのっ？」
それに対し永琳は、諦観が一周回って得ることができた冷静さで、応えた。
「どうやらアンチボディというのは、まさしくその名の通り、抗体として異物を攻撃するために生まれたらしい・・・戦うことに適応しているんだわ・・・」
「でも、なんのために？」
「・・・それは分からない」
「・・・・・・」

何にせよ確かなことは、永琳と鈴仙では、輝夜の戦いを手助けすることは到底できそうにないということだった。
妹紅の言う通り、この場で、輝夜が無事でいることを祈ることしかできないのか・・・

そんなことを考えてからしばらくして、生い茂る竹の影から、因幡がひょっこり顔を出してきた。
「終わった？」
「いえ、まだよ」
「でも、ブレンがいないじゃないですか」
「私達を巻き込まないために、戦場を移したわ・・・だからてゐも、ここで輝夜様を待ってなさい」
「そうするうさ～」
永琳の言葉に対する因幡の飄々とした返事を聞いて、鈴仙はひとつ大きなため息をついて、それと一緒にこう吐き捨てた。
「気楽なもんだよ・・・やっぱりてゐは賢かったね。無駄なことやって、痛い目見ずに済んだんだから」
「それほどでもない」

※

高々と空の上に飛び上がってしまえば、迷いの竹林といえどもその果ては見えるものだ。
しかし、無数の竹が似たり寄ったりな高さで群生するそこは、上から見下ろせばさながら緑色の絨毯であった。

それが宵闇に浮かぶ月に照らされれば、幻想的な風景と称することもできる。もっとも、今その風景を確と眼に焼きつけることなどできないが。

その緑色の絨毯の上で、互いにチャクラの刃を振り抜いた二体のアンチボディが、その刃を衝突させながら肉迫する。

オーガニックエナジーが衝突する音と振動の中で、妹紅が叫んだ。

「逃げずに正面から戦うことだけは誉めてやるよ．．．だか、覚悟の方は出来てるんだろうなぁ！？」

スリットウェハーを通して伝わるブレンの恐怖と勇猛をその身で感じながら、輝夜がそれに叫び返す。

「覚悟って、なにさっ！」

「ひとりきりで生き、ひとりきりで心を殺す覚悟だっ！」

「あんたには出来ていたのっ？」

押し合う二つの刃。

ブレンは肉体を素早く後ろに下がらせつつ、ブレンバーを手元に引き寄せ、構えなおす。

そのまま振り抜かれたグランチャーのソードエクステンションの刃が、空を切る。

それにより生じた隙を逃さず、ブレンバーを横なぎに振り抜くブレン。

しかし、グランチャーはすぐさま機体を上昇させ、回避を図る。

一本の刃の線を描いたブレンバーの軌道には、グランチャーのつま先さえ位置してはいなかった。

妹紅の声が、オーガニックエナジーの波の中で響く。

「出来ていたも何も、私はずっとそうやって生きてきた！周りにちやほやされて、不自由なく暮らしていたあんたとは違うっ！ひとり

きりでいることが当たり前だった！」
「でも、今は違うじゃない！」

輝夜の叫びに返すのは、グランチャーが構えるソードエクステンションから放たれるチャクラ光であった。
ブレンは咄嗟にそれを回避しつつ、ブレンバーで反撃のチャクラ光を撃つ。
グランチャーもまたそれを回避し、やはり、応射を放ってくる。
それをまたブレンが回避し・・・というのが繰り返され、二体のアンチボディは、目まぐるしい射撃戦を展開していた。

そんな中で、輝夜も妹紅も、互いのアンチボディの状態に細心の注意を払いつつも、争う声を続けた。
妹紅が叫ぶ。
「そうだ！今は違う、私の生命の価値はどんどん変わっていくんだ。そんな中で、永遠に変わらないものがあっちゃいけないんだよっ！」
「それは・・・？」
「あんたへの恨みだ！これがある限り私は、どうすることもできないんだ！」
「だから・・・だから私を・・・っ」

「集束（コンセントレイト）！・・・チャクラフラッシュっ！」
妹紅の叫びと共に、グランチャーが突然、左手をブレンの方に広げる。
何事かと思うその瞬間には、開かれた手のひらから、集束されたオーガニックエナジーが厚いチャクラの壁となってブレンに迫った。
ソードエクステンションの光の何倍ものオーガニックエナジーが一点に集められている。
しかも、チャクラの光が及びうる範囲も広い。回避もできそうになかった。

妹紅の叫びに呼応するかのように、輝夜もまた叫ぶ。
「チ・・・チャクラシールドっ！」
ブレンが両腕を左右に広げる。
同時にその正面に、オーガニックエナジーが生み出す薄い光の膜、チャクラシールドが展開された。
グランチャーが放つチャクラの壁を、同じくチャクラの壁にぶつけて打ち消す。

放射状に、オーロラのような色彩となって迫るチャクラフラッシュが、チャクラシールドに激突する。
巨大なオーガニックエナジーがぶつかり合う音が、まるで雷が永遠に鳴り響いているような、激しいスパークの音を響かせた。
シールドだけでは防ぎきれないオーガニックエナジーの衝撃波が、ブレンの身体と、その中にいる輝夜を揺らす。
「うわっ！うわぁわわわ・・・っ」
がくがくと揺れる身体と一緒に、発せられる悲鳴までも、がくがくと揺れていた。

しかし、衝撃波は透過されながらも、チャクラ光の持つ破壊力自体は何とか打ち消すことができているらしい。
激しい振動にきつく眼を閉じ身体を強張らせていた輝夜だったが、その揺れが収まると同時に眼を見開く。
ちょうどその瞬間、ソードエクステンションを構えたグランチャーが再度接近を図り、その姿を輝夜の眼前に迫らせていた。
「うぅー・・・っ！」

しかしこの局面にあって輝夜の心からは、何故だか恐怖がなくなりつつあるのを感じた。

グランチャーが放つ狂暴な攻撃のひとつひとつ、そこには確かに、妹紅の持つ怒りも込められているのが分かった。
そしてそれは確かに、妹紅が心の底から放つものだった。
今更この怒りに対し、謝ることも、ましてや甘んじて滅びることを受け入れることもできない。
ただできることは、この怒りを受け入れて、真っ向からぶつかり合うことだけだ。
だからこそ輝夜は、恐怖する以上に、立ち向かう覚悟を持った。
それは、妹紅に対するものではない。
彼女は妹紅は殺さない、その怨念を殺す。
そうして、未だ恐怖の方が勝っているブレンを、後押ししてやるのだ。

輝夜の思念に従い、ブレンが、振り抜かれるソードエクステンションの刃をブレンバーで受け止める中で、輝夜は妹紅に対し、力強く叫んでいた。
頭では言うだけ無駄だと分かっているが、それでもなお、説き伏せるような言葉を吐かずにはいられない。
「妹紅！昔のことを精算する必要なんて、ないじゃないのさ！今が幸せなら、それいいでしょっ？」
「幸せなんかじゃないから、あんたが憎いんだろう！」
「そうやって、今あるものから逃げちゃ駄目でしょ！後ろ向きになる時間があるなら、前に歩いていった方が、いいじゃない！そうするんだよ、妹紅ーーっ！」
「知った風な口をぉっ！」
「知った風で悪いかぁー！私だってあんたの気持ちは分かるよぉー！」
「分かるわけがないっ！」
「分かる！」
「馬鹿なぁーっ！！」

再度互いに衝突し、押し合う二つの刃。
ブレンパワードが、残っている左手のひらに、集束できうる限り最大のオーガニックエナジーを展開する。
輝夜の中にある生命力さえ吸い取って集められたそれは、ピンポイントに圧縮されたチャクラシールドとなった。
その左手が、ソードエクステンションの刃を掴む。
本来ならば、そこでブレンの左手が両断されるはずだったが、圧縮されたチャクラの光によって、それができない。
「う・・・っ！」
妹紅は思わず呻いた。

左手でソードエクステンションを受け止めたことで、ブレンバーを持つ右腕が自由になった。
ブレンはすかさず、その刀身をグランチャーの左腕の付け根目掛けて突きつける。
集束されたチャクラの刃が、左肩の関節にあるスリットウェハーを溶断し、グランチャーの肩の周辺に、白い爆発を発生させる。
そうして、爆発の勢いで身体から切り離された左腕が、まるでそれそのものが生物であるように、空中できりもみしながら落下していく。

輝夜の咄嗟の起点により深手を負ったグランチャーは、そのまま大きくよろめきながらブレンから離れ、落ちるように高度を下げていく。

そんな中、妹紅と輝夜、二人の叫びが、ほとんど同時に、オーガニックエナジーが生み出す思念の波の中に響き渡った。

「輝夜ぁーーーっ！！」

「妹紅ぉーーーっ！！」

※

竹林の中で、二人の戦いの帰結を待つ永琳達。
しかし、二体のアンチボディの姿は見えず、時折聞こえるオーガニックエナジーの衝突音だけが、遠くに聞こえるばかりだった。
結局、永琳も鈴仙も因幡も、じっとその場で立つか、座るか、寝るかして、空を見上げながら、姿も見えないブレンの勝利を祈るばかりだった。
先程、特に大きな衝突音がひとつ聞こえたのだが、戦いはどうやら苛烈を極めているらしい。
もしかしたらもう、決着はつきつつあるのかもしれない。

鈴仙が不安そうに、
「どうなるんでしょう・・・」と言うのには、永琳は、
「終わって見なければ分からない」と応えた。

そして、その次の瞬間だった。

「八意　永琳！」
突如遠くの方から、大きな声が聞こえてきた。
聞きなれた声だ。

空を見上げるのをやめた永琳は、その声のした方向を向く。
その時にはもう、こちらに駆け寄ってくる慧音の姿が、近くにまで

見えていた。
永琳の眼の前にまで駆け寄ってきた慧音は、焦燥しきった様子で、息も絶え絶えなまま、喘ぎ喘ぎに聞いてきた。

「グランチャーは・・・・・・妹紅、は・・・どこに・・・っ？」
突然の登場だったが、彼女がここに来た目的は、永琳にはすぐ分かった。
彼女は、気が気でない様子で辺りを何度も見渡す慧音の両肩に手を置いて、落ちつくように催促してから、応えた。
「今、輝夜様がどうにかしてくれているわ」
その声を聞いた慧音は、ひとまず、物狂いのようにきょろきょろ視線を巡らせることはやめて、永琳の方だけを見ていたが、それでもまだ、瞳の焦点は定まっていなかった。
彼女は、捲し立てるように、荒くなった息を整えることもせず、言ってくる。
「も・・・妹紅を・・・助けて、やってください・・・彼女は、自分の気持ちを、とても辛いと言っていたんです・・・・・・彼女だって、本当は、望んで輝夜様と戦っているわけじゃ・・・・・・お、お願いですから・・・お願いで・・・」
言葉の途中で、慧音は強くせき込んだ。
息も絶え絶えなのに、長々とこんなことを言えば、それも当然だ。
喘息の発作でも起きたのかと思えるほどに咳を続ける慧音の背中をさすりながら、
「落ち着きなさいって言ってるのも聞こえないぐらいなのねぇ、いやはや」と苦笑する永琳は、咳の合間に、過呼吸気味の呼吸をしながら小刻みに痙攣している慧音を、その場に座らせた。
恐らく、永遠亭まで全力疾走で駆けてきたのだろう。
とりあえず今は、落ちつかせるのが先決だ。
が、そんな永琳の心配を余所に慧音は、身体を支えられて地面に座

りながらも、尚言葉を続けていた。
身体を支える永琳の腕を強く掴みながら、彼女は言う。
「・・・わ・・・私は、妹紅のことを突き離して、哀しませてしまった・・・本当は、彼女の中にある怨念も全部含めて、認めてあげなくては・・・い、いけなかったのに・・・・・・永琳、頼みがあります」
「なに・・・聞いたげるから、それ言ったらもう黙っとくのよ」
「・・・はい・・・・・・お、お願いですから。妹紅を敵だと思って、殺したりしないでください・・・お願いだから・・・」
流れ出る汗と一緒に、眼下から何かを流しながら言う慧音の言葉を聞いた永琳は、一瞬だけ表情を失い、その次の瞬間には、いっそ愉快そうな笑みを浮かべて、
「そんなことなら・・・言う必要もなかったのにねぇ」と呟いた。
「・・・・・・」
「輝夜様が妹紅のことを心底敵だと思ったことは、一度として無かったわ・・・多分」

第六話　その3

左腕を根元から切断され、グランチャーが苦しんでいるのが、我が身のことのように分かる。
衝撃により激しく揺れる胎内の中で、妹紅はその名を叫んだ。
「くっそぉ・・・グランチャァァーーーっ！」

左腕が根元から千切れ飛んだら、生身の人間なら致命傷だろう。
いや、アンチボディにしたって、相当なダメージだ。
しかしそれでもなお、グランチャーの闘争心は消えてはいない。
彼の者は未だなお、己の目的を果たすために、戦うことを諦めてはいなかった。
ならそれは、妹紅だって同じだ。
自分達が一気に追い詰められたこの状況の中、彼女の中の怨念も、より一層激しく燃え上がる。
しかし同時に、炎となって心を焼き尽くすその炎の奥底に、もうひとつ別の感情がある気がした。
妹紅には、初めから分かっていた。
自分の中にあるこの憎しみは、確かに自分の心である。
しかしその中の多くは、グランチャーによって意図的に呼び起こされたものであることを。
グランチャーは妹紅のその怒りをオーガニックエナジーとして利用している。
妹紅のことを半分は道具として扱っていたのだ。
それが妹紅には分かっていた。
それでも彼女は、グランチャーに裏切られたような気分になどなら

なかったし、彼の者のことを嫌ったりもしなかった。
グランチャーは、妹紅のことを利用しながらも、確かに妹紅に好意を持っていたからだ。
だから妹紅は、その好意には応えたいと思っていた。

「うおおおぉぉぉぉっ！！」

妹紅の雄たけびと共に、グランチャーが最後の力を発揮する。
妹紅の発する怒りから、無尽蔵のオーガニックエナジーを生み出し、左腕を失って尚その力をより一層強めていた。
妹紅の不死の身体から、生きる力そのものが吸い取られていく。

しかしその瞬間、グランチャーの胎内から突然何かがせり出してきた。
それは、スリットウェハーが突然変異してできた、金属の構造物であった。
左腕が切断され不安定になったグランチャーの肉体が、膨大するオーガニックエナジーによって変調を来していたのである。
胎内を突き破ってせり出してきたスリットウェハーは、みるみる内にその中で膨張を始め、妹紅の身体を包み込んでいく。
やがて、生物としての柔らかさを感じさせない冷たい感触が、ゆっくりと身体にめり込んでいく感覚が、妹紅を襲った。
膨張していく壁面の中から飛び出してきた一本の柱状の物体が、妹紅の腹部に喰い込んでいる。
それでもなお、スリットウェハーの膨張が止まる気配はない。
腹部だけでなく、背中、広背筋の真ん中あたりからも何かが食い込み、脊椎をミシミシと圧迫していた。
しかし妹紅は、そんなことには構わなかった。

例え左腕は失っても、右腕とソードエクステンションは健在である。
空中できりもみしていたグランチャーは、すぐさま体勢を立て直し

つつ、一切怯む気配も見せず、隻腕になった肉体を躍動させ、右手に握るソードエクステンションの銃口をブレンに突きつけ、さらに鋭く、色鮮やかになったチャクラ光を撃ち放つ。

同時に、最早動く余地すらないほどに狭くなった胎内の中で、妹紅は叫んだ。

「輝夜っ！分かると言ったなっ？何故だ！」

その叫びに、輝夜が応える。

「・・・私だって、自分の我儘で、故郷を捨てたっ・・・だからもう、戻ることもできない。でもいつかきっと、そのことを後悔して、自分自身が許せなくなる日が来るかもしれない・・・ううん、もう来てるかもしれない！同じなんだと思うよ、この気持ちは、あんたとさっ！」

「そんなことで、自分を許してもらおうと思ってるのかよっ！」

「違うよっ！」

「じゃあなんだよっ！」

先程の攻防に対する恐怖に囚われることなく、グランチャーは再度、蛮勇と呼べるほどに勇ましく、ブレンパワードへ接近戦を挑む。

ブレンの方も、それを真っ向から受け止める覚悟を決めていた。

すでに恐怖は消えている。

真っ直ぐにグランチャーを見据え、ブレンバーを構えている。

そんな中で、輝夜の叫びが妹紅の心を震わせる。

「何でもないよっ！妹紅、来なよ！言いたいことはみんな言って、ぶつかってこいっ！」

「こいつ・・・っ」

「その上で、いろんなことに決着をつけよう！・・・そのつもりで来たんでしょっ・・・私がみんな受け止めてやるから！」

グランチャーの振り下ろした刃をブレンが受け止め、三度、チャクラの光が衝突する光と音、そして衝撃波が空気を弾けさせた。
輝夜の言葉を聞いた妹紅は、自分の身体が、スリットウェハーに押しつぶされていく感覚の中で、引きつった笑みを浮かべた。
いや、それは笑みというよりかは、獣が牙を向くようなものだったかもしれない。

「くっ・・・へへっ！・・・・・・輝夜、殺してやるぞぉぉーーーっ！！」

いっそ歓喜するほどの、妹紅の絶叫。
しかし、その絶叫は次の瞬間には、腹の奥から湧き出てくる、嘔吐の呻きに変わっていた。

「うぅぅっ！！？・・・ぶ・・・っ」

膨張し、身体にめり込んでいたスリットウェハーがとうとう腹部の皮膚を破り、小腸の間をかき分けながら、体内にまで喰い込んできた。
背中の方からも、何かが圧し折れるような鈍い音が、全身を伝わり鼓膜を震わせる。

「――――――――――――っ！」

全身に高圧電流が奔るような異様な感覚に見舞われ、妹紅の中の時は一瞬静止した。
例え何があろうとも死ぬことはない肉体であっても、痛みは感じるし、場合によっては気を失うことだってある。
ましてこれは、常人にとっては、拷問だとかそういうものを通り越して、痛みで即死してもおかしくはないものだった。
さらに、脊椎を突き破ったスリットウェハーはそのまま俄然伸長の速さを上げ、心臓を胸骨の方へと押しやって、その形を変形させていった。
平らに潰されながらも伸縮を繰り返していたそれが、とうとう耐え

きれなくなり、一部から破裂し、秒間で１００ｍＬ近い量の血液が、胸膜へと排出されていく。
胸椎の折れる音も、先程の脊椎骨折の音よりかは、比較的小さく響いた。
これでは、妖怪だって生きていられるかどうかは怪しかった。
ましてや、元が普通の人間の肉体である妹紅では・・・

この事態に怯んだのは、妹紅だけではない。
グランチャーもまた、自分の胎内で起こっている異変にようやく気がつき、その肉体が、ぴたりと動きを止めた。

「なに・・・っ？」
輝夜は、突然静止したグランチャーに戸惑いながらも、ソードエクステンションが押し込む力を失ったため、一度ブレンを後退させる。

その様子を見ることもできず、妹紅は、眼を見開いて、微かに開いた唇を震わせながら、荒い呼吸音を狭い空間の中で響かせた。
しかしその表情は段々と緩んでいき、やがてなんとも言えない、眠りにつく直前のような、ぼんやりとした表情に変わっていた。
しかし、唇の震えは止まらない。

「・・・・・グ・・・ラン、チャー・・・」
その名を呼ぶ声も、まどろみの中にいるような、静かで弱々しい声である。
そして妹紅の心の中からは、いつの間にか、憎しみの炎は消え去り始めていた。

「・・・チャ・・・チャンスかもしれない」
今の妹紅の状態を知る由もない輝夜は、グランチャーの動きがぴたりと静止したこの瞬間を逃さなかった。
ブレンの構えたブレンバーから放たれたチャクラ光が、グランチャーに直撃し、左わき腹から股間部にかけての装甲を吹き飛ばす。
グランチャーの身体が大きく仰け反り、砕かれた装甲が白い粉のようになって霧散していく。
股間を覆っていたスリットウェハーも引き剥がされ、そこでようやく輝夜は、グランチャーの肉体が砕けた損傷部から、妹紅の姿を見た。
膨張した壁面に身体を押しつぶされているその姿に、思わず息を呑む。
「妹紅っ?・・・な、なにあれ・・・っ」

大きく仰け反ったグランチャーが、再度体勢を立て直す。
そうして、ブレンに対し反撃を仕掛けるべく、ソードエクステンションの銃口を向けようとするが、右腕がガタガタと震えるばかりで、ほとんど動いていなかった。
ブレンを通して輝夜には、グランチャーの中のオーガニックエナジーが、急速に失われていくのを感じた。
生命力の源となる妹紅のオーガニックエナジーが、消えかかっていたのだ。
そしてグランチャー自身、すでにその肉体のダメージは抗う事ができないレベルにまで来ていた。
最早後は、死を待つだけの身となっていたのである。

「・・・・・・っ」
ならば後にやることは、ただ一つだ。
グランチャーに止めを刺す。

妹紅ならば、例えグランチャーの爆発に巻き込まれても、生きていられるだろう。
とにかくこれで、全てを終わらせる。
「ブレン・・・これで・・・っ」
輝夜はブレンに命じ、今度こそ急所に命中させるべく彼の者は、ブレンバーの銃口をしかと向けた。

敵のアンチボディがこちらに止めを刺そうとしている様子が、妹紅にも見えた。
だが、グランチャーはすでに満身創痍、宙に浮いたまま、動くことができない。
最早敗北することが決まり切っていた。
それでもグランチャーは、未だ諦めていなかった。
戦うことが生きる目的であるのなら、生きている限り、それを失ってはいけない。
だからグランチャーは、なおも、ソードエクステンションの銃口をブレンへと向けようとしている。

しかし妹紅には、もうグランチャーと共に戦うことはできなかった。
身体がもう、戦うことを諦めてしまっている。
いくら不死身といえど、蘇るべきその場所に異物があるままでは、生き返ったところで意味がない。
ただ、身体から血が失われることによる酸欠の苦しみを、長々と感じ続けるばかりだった。
もう、戦う気持ちが萎えてしまっていた。
だからその代わりに妹紅は、静かな声で、グランチャーへと呼びかけていた。
肺はまだ動くのだから、細胞が死滅するまで声を出すことはできた

し、例え死んだ後でも、そこからすぐに肺だけでも蘇らせれば、声が出せなくなることもなかった。

「グランチャー・・・・・・私はな・・・あんたが私のことを操ってたことだって、分かってるんだよ・・・えぇ？よくもやってくれたよな、グランチャー・・・・・・でもね・・・」

みっともないまでに動こうとするグランチャーだったが、オーガニックエナジーは失われていき、とうとう震えることさえできなくなっていく。

「それでもあんたのこと、好きだよ・・・・・・あんたはただ、戦わなきゃいけないように生まれてきてしまっただけなんだよな・・・そうやって生まれてきてしまったから、どうしようもないんだよな・・・その気持ち、分かるよ・・・・・・それに、あんた、私と初めて会った時、自分が何をすればいいのか分からなくて、不安だった・・・ひとりぼっちでいることが怖くて、辛かったんだ・・・それで私がお前の身体に入った時、とても喜んでくれた・・・・・・あんたって怖いけど、かわいいところもあるんだよな」

ついにグランチャーも、戦う意志を失い始めていた。

どうあっても、敗北する運命から逃れることができないと分かれば、いかに闘争の化身のようなグランチャーであっても、その気性を保ち続けることはできない。

そうして、戦うことが生きる意味であるグランチャーにとってそのことは、何よりも過酷な認識であった。

「・・・心配するなよ・・・みんなみんな、お前のことを悪者みたいに思ってるみたいだけど・・・私だけは、あんたのこと、好きでいてやる・・・最後の最後まで、一緒にいよう・・・・・・それで・・・・・・ごめん。勝たせてやれなくて・・・死ぬのは、怖いだろ

う?・・・・・・私のこと、恨んでくれてもいいよ・・・」

妹紅はその時、思った。
自分がグランチャーに対してごめんと言うこの気持ち。
これは、輝夜が自分に対して跪いて見せたあの時の気持ちと、同じものではないのだろうか・・・

ブレンバーから、集束されたチャクラが巨大な光の渦となって迫る。
虚ろな眼でその光を見つめ、自分がその中に包み込まれる感覚を受けながら、妹紅の魂は、その声を聞いた。
彼女の思念だけの声が、光の中で静かに反響する。

――恨まないのか?・・・一緒に戦えてよかった?・・・・・・・
感謝してくれるのか?私なんかに・・・・・・・それに・・・あんた達の、本当の目的?・・・・それは・・・――

チャクラ光の矢が胴を貫いたその時、グランチャーの声は途絶えた。
彼の者は死に、その魂も消えた。
身体を膨大な熱が通過し、身体を焼き尽くしていく感覚すらも忘れながら、ブレンバーの直撃を受け今まさに爆発しようとするグランチャーの胎内の中で、妹紅は、彼女にしか聞こえないような声で、囁くように言った。
それは、今その身を滅ぼしたグランチャーに対する、愛情を込めた囁き声であった。
「・・・あんた達は・・・・・・・」

その瞬間、妹紅の身体は、膨れ上がる爆発の中に包み込まれた。

「や・・・やったぁーっ！？」
グランチャーが爆発し、白い煙に転じていく姿を見て、輝夜が喚声を上げる。
しかしそれも、僅かな間のことでしかなかった。

「妹紅は・・・っ？」
輝夜は急ぎ、ブレンを爆煙の下へと向かわせる。
そうして、爆発に巻き込まれたのであろう妹紅の姿を、ブレンに探させた。
ブレンバーの銃身は左の肘にひっかけさせる。

ある程度膨張したところの大きさのままで、しばらくその場に漂っている白い爆煙の周囲を飛行するブレンが、やがて、風に煽られながら落下していく妹紅の姿を発見した。
大分下方にまで落ちている。
「いた、妹紅！」

輝夜は慌てて、ブレンを、落下する妹紅の身体と同じ高度にまで降下させて、彼女の身体の落下の速さと合わせつつ、両手のひらで、すくい上げるように妹紅を受け止めさせた。
竹林の竹が、すぐ足元に見えていた。
後もう少しで妹紅の身体が、この竹の群れの内の一本に突き刺さっていたかもしれない。
まぁ、例えそんなことになっても生きていられるのが妹紅だが。

ブレンの手のひらの上に妹紅の姿を確認した輝夜は、
「ブレン。落とさないでね」と呼びかけつつ、ブレンに手のひらを

股間部の傍まで持っていかせ、同時に、装甲を開かせた。
輝夜は、穴を潜って胎内から外に出て、眼の前にまで寄せられたブレンの手のひらの上に飛び移る。
そうして、力なく、まるで糸が切れた人形のごとくぐったりと横たわる妹紅の傍しゃがみ込んだ。
腹を突き破られ、脊椎と心臓と胸骨を砕かれた傷は、すでに元通りに治っていた。
そしてその顔は、先に見せた怒りに引きつった顔が忘れられるほどに、眠るように静かなものだったが、輝夜にはそれが、永遠の睡夢の中にいるように思えて仕方がなかった。

・・・妹紅に限ってそんなことはないはず。
輝夜は、真っ白に透き通った妹紅の頬を軽く叩いて、呼びかけた。
「妹紅・・・妹紅っ」
その呼びかけに応えたのか、深く閉ざされていた妹紅の眼が、ゆっくりと開かれていく。

「妹紅・・・」
その様子に、安堵した表情浮かべる輝夜だったが、その次の瞬間、頬に当てていた手首を掴み返すその力の強さに、息を呑んだ。
「う・・・っ！」

もしかして、妹紅はここにきてまだこちらを恨んでいるのか。
安堵の表情が一瞬で吹き飛び、額から冷や汗を流す輝夜だったが、そんな彼女に対し、妹紅は静かな声で言った。

「・・・輝夜・・・・・・ごめん」
「・・・・・え？」
「すまなかった・・・」
「すまなかったって・・・」

「こんなことになってしまって・・・」

その声を聞けば、妹紅からはすでに、憎しみの炎が消えつつあることが分かった。
それを感じた輝夜はすぐに緊張を解いて、笑顔で応える。
「終わったことなんだし、今更あーだこーだ言わないわよ」
「そうか・・・」
「別にいいよ。許したげるわよ」
「・・・・・・私も、許す」
「え？」
「あんたがごめんって言ったこと・・・」
「・・・あ・・・そりゃ、よかった」
「・・・でもね」
続けて言おうとする妹紅の表情。
それを見た輝夜は、心の底から安堵することができなかった。
妹紅の中ではおそらく、肝心なことは、何ひとつとして解決していないのだ。
それもそうだ。
ああやって戦ったところで、妹紅が死ぬことは断じてない。
今こうやって彼女が生きているのがその証拠だ。
妹紅が抱いていた憎悪と絶望の根本的な部分は、何ひとつ解決していない。
彼女が生きている限り。

それを察し、またしても強張った面持ちになる輝夜の顔は見ず、空に浮かぶ月を見つめながら、妹紅は呟いた。
「輝夜の言う通りだった・・・こんなことしても、私の気持ちが解決することなんてなかった・・・・・余計に虚しくなるだけだったよ・・・」
「・・・・・・」

そうして彼女は、微かに震える右手で、眼を覆い隠す。
何故そんなことをしているのかは、輝夜にはよく分かった。
「・・・・・・私はこれから・・・どうやって生きていけばいい・・・憎しみも、自己嫌悪の気持ちも忘れて、生きていくことができるのか・・・？素直な気持ちで・・・・・・」

「それは・・・・・・」
輝夜はそんな妹紅の沈痛な声に応えようとして、それができなかった。
妹紅に対し、言ってやる言葉が思いつかなかった。
手で眼を覆い隠したまま、また人形のように物言わなくなった妹紅と共に、黙りこんでしまった輝夜。
だが、彼女の脳裏に、あるものが浮かんでくる。

あるのだ、妹紅が生きていく目的。
憎しみも、絶望も忘れて生きている、ひとつの価値が。
輝夜は、その場で滞空を続けていたブレンに、永遠亭の方へ降下するように命じた。
そうして、改めて妹紅に対して、返す言葉を投げかけた。

「簡単な話だったじゃないの。生きていけるわ、あんたなら」
「・・・・・・？」
覆い隠していた手で眼下を何度か拭ってから、その手を離して、妹紅は眼だけを輝夜の方に向けて、不思議そうな表情を浮かべた。

輝夜の言っていた言葉の意味。
それは、すぐに実感として知ることができた。

永遠亭の近くにまで降り立ったブレン。
地面に座り込んだ彼の者の手のひらもまた地面に降ろされた時、妹紅は突然、慧音に抱きつかれていた。
胸にしがみ付いて、涙を流しながら、彼女は嗚咽混じりに、とにかくいろいろなことを言っていた。

「妹紅・・・っ！無事でよかった・・・怪我もしてないし、五体無事で・・・よかった、本当に・・・・・・妹紅・・・！」
「・・・・・・」
「妹紅のことを・・・突き放すようなことを言ってしまって・・・っ」

妹紅は、何も考えなかった。
ただ、抱きついてくる慧音の身体がとても温かく、気持ちがいいな、ということをぼんやりと思いながら、ただ一言、
「気にしてないよ」と呟きながら、涙をぬぐった右手で、慧音の背中に触れていた。

そんな中で、それ見たことかという感じの、輝夜の声が聞こえてくる。
「今のあんたがひとりぼっちだなんて言えるような奴は、どこにもいないだろうねぇ」
妹紅はその声をぼんやりと聞いて、慧音の身体の感触をじっと確かめていたが、しばらくして、うっすらと笑みを浮かべながら、呟いていた。
「・・・・・・ちがいねぇや・・・」

しばらく妹紅にしがみ付いて泣きじゃくっていた慧音だったが、思い出したように顔を上げて、輝夜の方を向いて、感謝の言葉を口にしていた。
「輝夜様・・・ありがとうございます。妹紅を無事に、助けてくださって・・・」
「いやぁ～・・・こいつの場合、無事で済まない方が難しいからね・・・お茶の子さいさいだった」

続いて、永琳と鈴仙と因幡の三人が遅れてこちらに来た。
妹紅の身体を眺めながら、永琳が言う。
「大分お疲れのようね・・・あのアンチボディが、貴方の生命力を吸収する性質を持っていたことは知っているわ・・・いくら不死と言ったって、生命力そのものを吸い取られては、身動きだって取れないでしょう？」
「・・・まぁな・・・」
「しばらくの間は永遠亭で療養していた方がいいでしょうね」
永琳の言葉に、妹紅は戸惑った表情を浮かべ、聞いていた。
「・・・いいのか？私は輝夜を殺そうとしたぞ」
「だから、次何か仕出かさないか監視することも含めて、こっちで大人しくしてもらうわけよ」
「・・・そうかい」
妹紅は永琳の申し出に対し、可も不可も応えなかったが、断るとはっきり言わない限りは、要するに好きにしろということなのだろう。
永琳は次の言葉を言わず、鈴仙と因幡に、
「担架を持ってきて、妹紅を搬送しましょう」と伝える。
それに二人は、
「すぐに持ってきます」

「臨時給料の話し合いはまた後日・・・」などと応えて、すぐにその場を後にした。

それからしばらくもしない内に、二人は担架を担いできて、それに妹紅を乗せると、そそくさと永遠亭の中へと運んでいった。
それに慧音もついていく。

そうしてその場には、永琳と輝夜とブレンだけが残った。

手のひらから、胎内に繋がる装甲板へと乗り移って、スリットウェハーの穴の縁に手をつく輝夜に対し、永琳は恭しい態度で言った。
「お見事・・・さすが、我ら月の民の姫、蓬莱山　輝夜様に在らせられる・・・」
それに輝夜は、にたにた笑って、もう片方の手をひらひらさせながら返す。
「はっはっは、崇め奉るがよいわ・・・・・・て、永琳はそんな態度しなくていいでしょうが」
「いえね。本当に見事だったわ・・・よくやったわね」
「ん」

調子のいい笑みを浮かべていた輝夜だが、急に畏(かしこ)まった顔つきになって、言った。
「にしても、妹紅の乗ってたあのアンチボディ・・・一体何者だったの？」
「・・・それは分からない・・・・・・でも、輝夜。あれを倒したのだから、ブレンにはもう恐れはないわね？」
「ん？・・・そうね。この竹林には、もうブレンを怖がらせるような奴はいないわ」

「ならこれで、地底に赴くこともできるというものよ」
「ブレンもそこにいくのね」
「えぇ・・・輝夜は、永遠亭でゆっくりしていればいいわ・・・戦闘でなければ、私がブレンに乗っても大丈夫だろうし、時間をかけてお互い信頼していけば、もしまたあのアンチボディのような敵と戦うことになってもどうにかなるはずよ」
「いや・・・そうはいかない。私もブレンと一緒にいくよ」
「えぇ？」
輝夜の言葉に、永琳はびっくりした。

興味本位でブレンに乗って、結果的に戦うことにはなった輝夜だが、さすがに竹林の外に出て、地底にまで行くようなことはないだろうと考えていた。
彼女の天性のめんどくさがりな体質を考えれば、なおさらである。
だから、輝夜のこの積極的な言葉は、非常に意外なものだった。
この積極性が、ブレンへの気持ちから来るものなら、彼女とブレンの間の絆は、思っている以上に深いものなのかもしれない。

それに、輝夜が永琳についていくと言って、それを止める必要はなにもなかった。
呆気に取られるのは大概にして、永琳は改めて、輝夜の声に応える。
「なら、そうしましょう。いくら私がブレンに乗っても、今の輝夜ほどいい関係を築けるとも思えないしね・・・・・・それとあと、もう一人。いや、二人になるのかしら？連れていくべき者がいるわね」
「・・・妹紅ね」

知るべきものは、ブレンやオルファンのことだけではない。
妹紅の乗っていたあのアンチボディについても、知っておくべきことは多いはずだ。

そのためにも、ブレンの調査への協力を要請してきている地底には、あのアンチボディのことを唯一詳しく知っているであろう妹紅も一緒に来てもらう必要があった。

永琳は、そのことを伝えるためにも、妹紅に永遠亭で安静にさせていた。

「しばらくしたら、妹紅に話してみましょう・・・・・・輝夜は、しばらくここにいるわね？」

聞いてくる永琳の言葉に輝夜は、「ん」と応えた。

そうして永琳もまた、輝夜を残して、永遠亭へと歩いていく。

その背中を眼で追うのは早々にやめて、輝夜は、スリットウェハーの穴の縁に手をついたまま、ブレンの顔を見上げながら、にこやかに呼びかけた。

「永琳の奴。私のことだけ誉めてたけど・・・ブレンだって、よく頑張ったよね」

その声にブレンは、ぶるぶると鳴き声を返していた。

※

さすが不死身の蓬莱人と言えようか。

グランチャーにオーガニックエナジーの多くを吸い取られ、常人なら即死の負傷を経て神経を苛まれていた妹紅は、担架で運ばれて永遠亭の一室に寝かしつけられるなり、まさしく死人のように眠り続けていた。

が、それもほんの二時間足らずのことで、いつの間にやら彼女の体力は、健常な状態にまで回復しつつあった。

「ん・・・ぅぅん・・・」

一応、眠る直前まで意識はあったので、自分が布団に横になっていることぐらいはちゃんと分かっている。

それより、自分は一体いつまで寝ていたのだろうかということを考えながら眼を開けた妹紅。

彼女の視界には、こちらの顔を覗う慧音と、永琳の顔があった。

慧音は、こちらが眼を覚ましたことに安堵しているようだったが、その一方で、それ以外の感情も併せ持っているように見えた。

そんな慧音が、開口一番こう言ってくる。

「妹紅。大丈夫ですか?・・・・・・いきなりで済まないんですけど、永琳から話があるそうなんです」

「・・・話だって?」

慧音から感じるもう一つの感情は、この事に対するものだろう。

聞き返す妹紅に対し、永琳が、事前に慧音にも話しておいた、詳しい事情を説明する。

ちなみに、グランチャーに対する基本的なことは、彼女も慧音から聞いて知っていた。

輝夜が乗るのと同じブレンパワードが、地底に何体か存在しており、そこにいる者達が、ブレンの調査のため、永琳の協力を要請している。

そしてそれに、妹紅を連れていこうということだった。

それを聞いた妹紅は、まずこう返した。

「慧音はどうするんだ」

慧音は、すぐに応える。

「私は、妹紅についていきます」
それを聞いた妹紅は、しばらく天井の方をぼーっと眺めて、次いで永琳の方に眼を向けて、問うた。

「・・・それは、なんでだ?」
「なんでって?」
「グランチャーがブレンパワードの敵だから、次戦った時、楽に倒すためか?」
その妹紅の問いに、永琳は、一度小さく咳払いしてから、応えた。
「正直なことを言えば、それもある」
「・・・っ」
妹紅が、訝しむ顔を浮かべるのが、よく見えた。
それに構わず永琳は続ける。
「が、それ以上に、ブレンとグランチャーというのは、同じアンチボディであり、言うなれば同類であるのよ・・・だというのに、互いに争い、命を奪い合ったりする・・・・・・どうしてそんなことをするのか、知りたいとは思わない?」

ブレンとグランチャーが何故戦うのか。
グランチャーの言っていた、戦いの先にある目的。
それを言っているのか・・・

妹紅の顔から、憤りの色が多少消え去った。
そして彼女は静かに、「そうだな」と応える。
永琳は続けて言った。
「ブレンは、自分達が必要とする何かを手に入れることを、最大の目的としている。グランチャーもそうなんじゃない?」
「・・・そうだ」
「そしておそらくその何かは、ブレンにもグランチャーにも共通しているものなのよ・・・・・・なら、その何かが何なのか。それを

知るためには、ブレンとグランチャーの両方について、理解を深める必要がある・・・だからこそ、そのためにも、貴方がグランチャーから感じたことを、共有する必要があるの・・・・・・まぁ、嫌なら別に・・・」

「分かった。一緒に行かせてもらう」

永琳が最後まで言うより先に、妹紅ははっきりと言った。

「二つ返事なんてもんじゃないわね・・・ホントにいいの？」と聞く永琳の声を聞きながら、妹紅は布団から起き上がる。

「妹紅っ・・・寝てないと」と、彼女をもう一度寝かしつけようとする慧音を、

「いいから」となだめつつ、妹紅は言った。

「さすが永琳だ。輝夜の保護者だよ。あんたの考え方は、参考になった・・・・・・グランチャーだけじゃなくて、ブレンパワードのことも、両方理解して初めて、あいつらの求めているものが手に入る・・・・・・そうすれば、死んでいったあいつの魂だって、きっと浮かばれるだろうからな・・・私にできることなら、やらせてもらうよ」

その声に永琳は、笑みを浮かべて、言った。

「感謝します」

それから夜が明ける頃には、妹紅の身体はほぼ完全な状態に回復していた。

となれば、彼女と慧音、永琳は、輝夜の乗るブレンの手のひらに乗せられ、永遠亭を後にする。

皆が手のひらの上に乗ったのを確認したブレンが立ちあがろうとする直前、永琳は、見送りにきている鈴仙と因幡に呼びかけていた。
永遠亭の留守は、二人に任せることにしていた。
「大分長い外出になりそうだけど。大丈夫ね？」
それに二人は応える。
「任せていてください」
「私の経営術なら、何の問題もありませんって」
「頼りにさせてもらうわよ．．．輝夜、上げていいわよ」

永琳の声を聞いた輝夜が、ブレンを立ち上がらせ、飛び立つように指示する。
一瞬だけ淡い光に包まれたブレンの身体が、大地を蹴るような動作すらないままに、直立した姿勢のまま宙に飛び上がった。

そうして、鈴仙達に留守を任せた彼女らは、早々に、地底へと向かっていった。

生い茂る竹よりも高く飛び上がったブレンが、そのまま、やはり立ったままの姿勢で、滑るように空中を移動していく。
そんな中で、手のひらの上に乗り、長い髪を風に煽られ、こちらが落ちないよう支えるように曲げられたブレンの指から顔を出しながら、慧音が周りの風景を眺めていた。
そんな中、遥か遠くにある地平線から出てきて間もない朝日の光が、空を黄色い色に染め上げ、大地の色を蘇らせつつあった。
薄く広がる雲には、強い光のより真っ白に見えるところと、深い影が落ち込んでいるところができて、それが何かの模様のようにさえ見えた。
そうしてそれが、大地と空の上が、まったく別の世界であることを

如実に示している。

「朝日だ・・・綺麗だなぁ」と呟くその横顔を、妹紅はぼんやりと眺めていた。

そうして、輝夜が少し前に言っていた言葉が思い出された。
妹紅が、憎しみを忘れて純粋な気持ちで生きていくことができるか、と呟いた時、輝夜は、できる、とはっきり言ってのけた。
憎しみ以外の生きる目的が、確かにあるからと。
そしてそれは、慧音のことでもあったわけだ。

妹紅は無意識のうちに、慧音の身体にそっと近づいて、彼女の肩から腕の方まで這うように指で撫でて、そうして、彼女の身体を両の腕でしっかりと抱きしめていた。
次いで、彼女の耳元で、囁いていた。
「ホント、綺麗だな・・・綺麗だよ」

慧音は、「ふ・・・ふふ・・・っ」と笑みをもらしながら、妹紅の腕の中で気恥ずかしそうにもぞもぞしていた。
そのまましばらく、じっと抱きついたままでいようかと思ったが、急に永琳の呆れた声が聞こえてきた。

「甘ったるわねぇ～・・・やめなさい、はしたない」
その声を聞いてやっと、自分達が他人様に見られていることに気がついて、二人は顔を真っ赤にしながら身体を離した。

そうして、むすっとしながら、ブレンの指に肘をかけてもたれかかった妹紅は、今度は、そのブレンの顔を見上げていた。

そうして、脳裏で呟く。

――こいつがブレンパワード・・・グランチャーの、敵か・・・
――

その『敵』という表現は、妹紅が輝夜に対し抱いていた敵という言葉とは、何か違う印象をもたらしていた。
恨みや、他の様々な感情をぶつけるような相手だとか、己の自尊心を証明するためだとか、あるいは慧音が時折話す、戦争というものにおいての敵だとか、そういうものとは違う感じだ。
このブレンと、そしてグランチャーは、きっと何故自分達が戦っているのか、自分達自身でさえ分かっていないのだろう。現にグランチャーはそうだった。

――グランチャーだって、本当の本当は戦いたくなかった・・・
それは、こいつだって同じなんだ・・・・・何かを得るためだからって、無理して戦わずに済む方法があるなら、それを見つけてやりたいな・・・――

そんなことを考えながら、妹紅の脳裏には、ぼんやりとしたひとつの考えが浮かんでいた。

妹紅が、慧音と、あるいは、輝夜だってそうかもしれない・・・そういう風に、誰かと一緒いるからというだけで、生きていくことが哀しくなくなるような、そういう気持ちを、ブレンやグランチャーも感じることができるのではないだろうか。

だとすれば、本当に大切なことは、そういう気持ちなのではないか？

そんなことを考えながら、チラリと慧音の方を向いた瞬間、ちょうど彼女もこちらを向いていて、お互いの視線がぴたりとあった。

そうして、笑顔を見せる慧音のことを見つめる妹紅には、確信することができた。

そうして彼女は、その笑顔に笑顔を返す中で、心の奥で、もうどこにいるのかも分からないグランチャーの魂に向かって呼びかけていた。

――そうだ。この気持ちだ・・・・・・あんたにもこれを、教えてあげたかった・・・――

第七話『ビギニング』　その1

さらに二、三日が経つが、地底には未だ永琳達は来ていなかった。
それで困ることはあまりないが、このままいつまでもやってこないのでは、博識な竹林の医者だとかの礼儀というものを疑いたくもなってくる。
もちろん、そういう結果にはならないだろうと考えながら、さとり達はひとまず待てるだけ待っておくことにした。
そういう中で、河童達が地上の調査を行っており、その進捗具合は悪くなかった。

それだけではない。
ブレン達の身体を洗う時便利だろうからと、暇つぶしに、井戸から水をくみ上げる貯水機を開発して、そこからホースで直接ブレンに水をかけて洗えるように配慮してくれたりもした。
別に大したことはしていないとにとり達は言い張っているが・・・なるほど、河童は物づくりをさせてそれが上手くいった時は、どの妖怪よりも価値のあるものだと感じられるものだ。
普段は、その『上手くいった時』をお目にかかることができないことが多いわけだが、以前の勇儀の一喝が、かなりいい効果を出しているらしかった。

で、そんな河童達が作り上げた汲み上げポンプから供給される水をホースから出して、今日も地霊殿を訪れたヤマメ達と一緒に、さと

り達はブレンの身体を洗っていた。

「ほれー！ほれぇ～っ！」

ホースの先を握って、それを強く指で押して穴を狭くしながら、新たなる居候となった早苗がマリサブレンにビュービューと勢いよく水をかけているのが見える。

その合間に、魔理沙がブラシでブレンの身体を擦っていたわけだが、時折彼女の身体に盛大に水がかかって、

「馬鹿っ、ひっかけるなー！」という声が聞こえてくる。

「あっはっはは！これ楽しいですねぇ～っ」

愉快そうに笑っている早苗の姿を、自分のブレンを洗ってやる中で見ていたさとりは、一休みするついでに、水を撒く役をしていたはたての傍にいって、彼女に話しかけていた。

「あの早苗さんという方。いい人みたいですね・・・前にはたてさんがおっしゃったことは、冗談だったのですね」

その声に、はたてはさとりの方を向いて、水を撒く方には見向きもせずに応えた。

「まぁねぇ・・・まぁ、そりゃ、いい人だとは思うけどねぇ・・・」

「そうでもないんですか？」

「いや、いい人だよ・・・ちょっと変なところでやり過ぎな性格もしてるけど・・・」

「妖怪退治とかのことですか？」

「それもあるね」

「もしかして、後で私達も退治されたり・・・」

「は、しないと思うよ。今のところはあくまで、この異変を解決するつもりみたいだからね」

「そうですか。なら、よろしいじゃないですか」

「ん・・・でも、一体どうやってこの異変を解決するつもりなのかしら」
「それを今、考えてるんじゃないんですか？」

いろいろと話をしている時だった。
突然さとりの耳に、溺れるような文の叫び声が聞こえてきた。
「いい加減・・・うぷ・・・・・は・・・はたて、あんたっ・・・ぶっ・・・やめなさいって・・・！」
声のする方に振り向いてみると、はたての持っているホースから勢いよく吐き出されている水が、文の顔面にものの見事に漏れなく浴びせられていた。
彼女がジタバタして顔を逸らそうとしても、その場所にまた正確に水が浴びせられていた。
はたては文の方はまったく見ておらず、さとりの方を向いてにたにたしているばかりだ。
さとりはもう一度はたての方を向いて、言った。
「・・・よく見もせずにあんな正確に浴びせられますね・・・後ろにも眼が付いてるんですか？」
それを聞いたはたてが、面白そうに笑いながら、
「そりゃないですよ。それはどっちかっていうと、貴方の方じゃない～？」

そうして、ホースを押す指の力を弱めると、吐き出される水の量も少なくなった。
それと同時に、憤怒の形相の文がずんずんとはたての方に歩いて来て、叫ぶように言う。
「こんの・・・のろまなケナガゾウ以下の悪党めっ・・・そんなに私のこと嫌いならトドメを刺してやるんだから・・・っ」
「おぉっとしまった怒らせてしまったようだぞ？こうなったら射命丸　文ちゃんのびしょぬれのセクシーな写真を撮りまくってエロい

人（主に星熊　勇儀とか）にばら撒くしかなさそうだ」
「何を言うー！逆にあんたの顔写真をどアップで撮って糾弾の材料にしてやるわ！」
「うおぉーーーっ！」
「あちょぉーーっ！」

気がついた時には文とはたては互いにカメラと携帯電話を構えて、眼にもとまらない速さで中庭を飛び回りながら、互いの姿を写真に写そうとした。
ひゅんひゅん空が切れる音と共に、カメラのシャッター音が小刻みに響く。

さとりが、
「お二人ともーっ？」と呼びかけても、その声が聞こえていないらしいことは、白熱する二人の意識を読み取れば分かることだった。

「・・・変な人ばかりねぇ・・・」と呟きながら頭を掻いていると、ブレンのいる方から、お燐とパルスィの声が聞こえてきた。
「水が撒かれてないよー」
「妬ましいわね。もっとかけてくださいよ」
その声を聞いたさとりは、ホースをほったらかしにしてしまったはたてに変わってホースを握って、ブレンの方に向けた。
「私が撒きます。いきますねー？」
そうして、ブレンに向かって水を撒いていた。

そんな中、今度はさとりの方に、声をかけている者がいた。
「さとり、ちょっといいかい？」
にとりだ。
さとりは、眼を逸らして水が誰かにかかるといけないので、声のした方には顔を向けず、じっとブレンの方を見ながら応えた。

「どうなさいました？」
「ん。地上の調査があらかた済んだんで、ちょっと報告しておこうと思ってね」
「あぁ、はい・・・すみませんけど、今ブレンの身体を洗ってやっているんで、このままお聞きしてもよろしいですか」
「ちょっとだけ私にもかけて。それならいいよ」
「・・・はい？」
いきなりそんなことを言われて戸惑うさとりだが、とりあえず、にとりの言う通り、持っていたホースの先を彼女に向けて、水を浴びせかけてやった。
胸のあたりから盛大に水を浴びながら、にとりは笑顔で、
「ひゃ～、冷たい！気持ちいい♪」などと言っていた。

・・・河童だから、水を浴びるのは好きなのだろうか。
まぁ多分そうなのだろう。
でなければ、この肌寒い今の地底で、冷水をかけられてびしょびしょになって喜ぶわけがないのだから。
にとりが、「もういいよ」と言ったので、またホースの先をブレンへと向け直した。

「じゃあ言うよ」
と前置きして、にとりは説明を始めた。
「やっぱりね、地底からの熱は、オルファンに吸収されていたみたいなんだ。それ以外にも、硫黄も吸い取られてるよ。硫黄泉の色が澄んでいたからね・・・だから今となっちゃ、ここの上は、危険地帯でも何でもなくなってるよ。その気になれば、人間だって住めそうだ」
「そうなんですか」
「でも、ちょっとずつ吸収される熱が少なくなってきてるよ」
「・・・ということは・・・」

「地上もじきに、元のアツアツの硫黄泉に元通りするだろうね・・・・・ただ面白いのが、オルファンの周りだけは、一向に熱の吸収が弱まる気配がないんだ。一定の熱量を保った状態でずっと安定しているよ・・・しかも・・・」

「しかも？」

「なんと驚くべきことに、オルファンの周囲に、植物が芽を出し始めているーっ」

「そうなんですかっ？」

地熱をオルファンが吸収していることや、その熱もいずれは元通りになることはある程度予想していたことで、予定調和といった感じだが、さすがにこれには驚いた。

生物が棲むにはあまりに過酷で。草木の一本も生えないのが通例である旧都の地上に、まさか植物が芽を出すとは・・・

オルファンが熱を吸収したおかげで生物が棲みやすい環境になったと言えるのかもしれない。

間欠泉となって吹きだす熱と硫黄がなくなれば、それも豊富な水となるのだから、確かに植物が育つ可能性もあるが、それにしたって、あまりにも早すぎる。

「私は植物のことあんまし詳しくないんでなんとも言えない・・・後で来る専門家さんに任せるよ・・・地上の調査とオルファンのことについては、今のところ分かってるのはこれぐらいだね・・・後はまた、今後の状況を見ながら調査を続けることにするよ」と、にとり。

「そうですか」

「で、もう一つ、ブレンのことなんだけどね」

「はい」

「ブレンの身体は、1ミクロン単位の小さな物質で構成されてるみたいなんだ・・・でも、それがどういう物質なのかは、ちょっと分

からないね。今まで見たこともない物質なんだ、《ビット》とでも名付けておこうかな」

「1ミクロン・・・？」

「1m（メートル）なら分かるでしょ？あれの1／1000の、さらに1／100だよ。要するに、もんのすごい小さいってこと・・・私達の身体だって、それぐらいの大きさのもので構成されてるんだよ？知ってた？」

「細胞ですね。それは知ってます・・・っていうことはそのビットが、ブレンを構成する細胞のようなものなんですね」

「そういうことだね・・・で、試しに実験してみたんだ。ブレンの身体に、ひとつ深い傷をつけてみたんよだ。人間なら失血死しちゃうぐらいの深ぁーい傷をね」

「なっ？なんてことなさるんですか～！」

これにはさすがにさとりも、ブレンに向いていた顔を振り向けて、にとりに向かって大声を出していた。

珍しく大声を出すさとりに、にとりが両手を小刻みに振って、「いやぁごめんごめん・・・」と顔をひきつらせて謝る。

が、それも早々にやめて、説明を続けた。

「でも、ちゃんとブレンには許可を得てるよ。ブレンには分かってたんだろうねぇ・・・傷をつけたその次の日には、その傷はなくなってたよ」

「そ・・・そうですか・・・」

「ブレンのビットはどうやら、再生することができるらしい。え～・・・新陳代謝・・・というのかな？あれをやってるのかもしれないね。詳しいことは分からないけど・・・多少の傷なら、元通りに再生するんだ・・・腕とかが吹っ飛んでも元通りになるかは分からないけどね」

ブレンに意図的に傷をつけたのは頂けないが、そんなにとりのおかげで、いろいろと分かってきたこともある。

そうして、知らず知らずの内に、状況は少しずつ変化してきているようだ。
もしかしたらその内、大きな動きがあるかもしれない。
それに対応するためにも、竹林からやってくる八意誰かさんという者が来て、オルファンの詳しい調査に乗り出すべきなのだが・・・まだ来ないのだろうか？

そんなことを考えていた時だった。
素足のままにブレンの頭の上に乗って、そこから生えている兎の耳のようなものをゴシゴシ擦っていたこいしが、急に大きな声を上げた。
「ブレンだわー！」
その声に、さとりのみならず、ヤマメ達もびっくりして、ブレンの頭上にいるこいしが指差す方を見た。

地霊殿の屋敷の屋根を超えて、ひとつの巨大な影が、中庭の上に姿を現していた。
さすがにあれを見間違えるような盲目はひとりもいない。
あれはブレンだ。

さとりの意識の中にある、ブレンと初めて会った日に見て未だに鮮烈に記憶に残っている月の光に似た色合いをしているブレンパワードだ。
その姿を垣間見たさとりの耳に、ブレンがいるのとは別の方から、固い物がぶつかり合うごつん、という音と呻くような声が一緒に聞こえたので、ちらりとだけその方を向くと、文とはたてがもつれあって一緒に地面に落ちるのが見えた。
写真の撮り合いをしていた中で、ブレンの登場に驚いた二人は、そ

のまま互いに正面衝突してしまったのだろう。
ぐったりと地面に倒れた二人は、眼を渦巻きにして気を失っていた。

「・・・・・・」

冷めた眼で二人を見るのは止めて、改めてブレンの方を見る。
月光の色のブレンは、ゆっくりと中庭へと降下してくる。
広げられた両手のひらの上には、三人ほどの人影があるのが見えた。
ホースで水を撒くことも忘れているさとりが、傍らのにとりに言う。
「もしかして、あれが八意　なんとかさんなのでしょうか・・・」
「かもしれないけど・・・三人もいるぞ、誰だ?」
そんなことを話している内に、ブレンが地面に足をつけ、そのまましゃがみ込み、手のひらを地面へと降ろした。

とにかく、客人がブレンと共にやってきたのなら、誰であろうとちゃんと歓迎しないといけない。
さとりはにとりに、「あの、代わりに水を撒いていただけます?」と伝え、
にとりがそれに、「んー」と応えたので、彼女にホースを手渡しつつ、降り立ったブレンの方へと歩み寄っていった。
そんな中、手のひらから地面に降りた、左右で色が違う妙な服を来た誰かが、跪くように片膝をついて座りこむと、ブレンの股間の装甲が開き、その向こうから、妙に神々しいをオーラを漂わせた、ひとりの少女が姿を現した。
実際は存在もしていない後光に照らされながら穴から出て、装甲の上に立ったその少女が、声高らかに言う。

「我こそがー、蓬莱山　輝夜その人であーる!崇めなさい、平伏しなさい」

「お・・・おぉー・・・」

その神々しさに見惚れて、眼を丸くしていたさとりだが、その次の瞬間には、じとっとした眼つきに変わって、呟いていた。
「・・・どちら様でしょう」

「いや・・・平伏なさい」
「お客様なんですから歓迎は致しますけど、見ず知らずの方に対して平伏することは」
尊大な態度で佇んでいたその少女・・・多分蓬莱山　輝夜と言うんだろう。彼女は、思い出したように大口を開けて、喚くように捲し立てていた。
「見ず知らずて・・・貴方私のことを知らないのっ？ホントに！？」
「え・・・えぇ」
「はぁーっ！？これだから学のない奴は！土曜日学校行ってない奴はっ！・・・もう嫌、寝る」
先程まで燦然と輝いていた後光もいつの間にか消え去り、その場で地団駄を踏んでいた輝夜の姿に、先程までその場で跪いていた女性が立ち上がって、なだめるようなことを言っていた。
「ま・・・まぁまぁ、地底の妖怪が、輝夜様のことをご存知ないのも仕方がないことでしょう・・・ここで怒ってしまっては、威厳が損なわれます・・・・・・っていうか寝たいだけでしょ貴方」

何故か知らないが怒らせてしまったらしく、申し訳なく思うさとりもまた、
「あの・・・何だかよく分からないのですが、申し訳ございません」
と謝る。
それを聞いた輝夜は、ひとまず喚くのは止め、再び尊大な・・・というか、ぞんざいな態度で言った。
「なら、今回は地底の妖怪に対し、啓蒙の意味合いを込めて、自己紹介させて頂きましょう・・・私の名は蓬莱山　輝夜・・・・・・さて、分かりましたね？私の名前は？」

「・・・蓬莱山・・・輝夜・・・・・・」
「敬称は・・・っ？」
「蓬莱山　輝夜・・・・・・様・・・」
「よろしい、許してしんぜましょう」

――・・・本当、地上には変な人が多いなぁ・・・――
などと考えつつ、さとりは、二言目にはこう聞いた。
「あ・・・あの、輝夜様・・・私達は今しがたまで八意　なにがしという方をお待ちしていたのですが・・・ご存知ないですか？」

その問いには、輝夜ではなく、もう一人の方が応えた。
「それは私です。八意　永琳と申しますわ」
「あぁっ、そうですか・・・初めまして。自己紹介が遅れましたが、私、古明地　さとりと申します」
「初めまして、よろしく」
そういって、にこやかに差し出して握手を求めてきた永琳の手を、さとりも握り返す。
こちらは、大分親切そうな淑女だ・・・見た目の年齢的にも・・・が、にこやかに握手する中で、その腹の内では、
――この方が悪名高きあの・・・思っていたよりも普通の妖怪ね――
などと呟く声が聞こえたので、あくまでも『そういう者か』という認識に終始していた。

握り返した手を離すと、今度は永琳とは別にいた二人がさとりの前に歩み寄って、話しかけてくる。
最初に声をかけてきた、灰のごとく真っ白で透き通った髪の毛の、男のような服装をしている少女が、ぶっきらぼうな口調で言う。
「一応、自己紹介はしておく・・・・・・藤原　妹紅って言うんだ」
続いて、もう一人の少女が、恭しく言う。
「上白沢　慧音と申します・・・さとりさんのことは永琳から聞い

て知っております・・・お会いできて、光栄です」
「あぁ、はい・・・」
慧音という・・・どうやら人間らしい者は、永琳同様親切そうな人だし、やはり永琳同様、さとりの能力のことを頭で考えつつも、だからこそ失礼ないように、余計なことは考えないよう励んでいるのが分かった。
気難しそうだが、悪い人でないのは確かだろう。

だが、もう一方の妹紅という名の少女。
彼女の脳裏に見えるある存在のことが、さとりは気になっていた。
失礼を承知で、妹紅本人に対し、単刀直入に聞いてみた。
「妹紅さん・・・もしかしてあなたは・・・」

彼女は、さとりが何を聞こうとしているのかを察したのだろう。
全て言うより先に、応えた。
「そうだ・・・そこにいるブレンパワードの敵である、グランチャーに乗っていた。今はもういないけどな」
「グランチャー？」
ブレンの敵のことは知っているが、その名前は初耳だ。
「知らないのか？」と聞く妹紅に、さとりは、
「名前は、知りませんでした・・・」と頷いた。

そこで、永琳が間に入ってくる。
「やはり、妹紅を連れてきたのはよかったみたいね・・・さとりさん。まずはいろいろ、話をさせていただきたいのですが」
「あぁはい。構いませんが、少しだけ待って頂けませんか？ブレン達の身体を洗っているところなんです」
「洗って・・・？」
さとりの声を聞いた永琳は、ようやく、身体を洗われているブレンの姿に眼を向けた。

さとりが続ける。
「ブレンは、身体を洗ってあげると喜ぶんです。ですからああやって、時間があるときに洗ってあげてるんです」
それを聞いた妹紅が、「へぇ・・・」と呟いた。
その顔には、言いようのない寂しさのようなものが感じられた。
そしてその寂しさの原因を、さとりならば知ることができた。
妹紅はすでに、自分の乗っていたグランチャーを失っている。
彼女は、グランチャーのことを信頼していた。
それが、さとりには伝わった。
そうして、彼女を見るさとりの眼には、同情の色を隠すことはできなかった。
そんな彼女の目線に気付いた妹紅は、バツが悪そうな顔をして、細めた眼をさとりの方に向けながら、苦々しく呟いた。
「なるほど、あんたが嫌われるのも、分かるよ」
その声は、さとりの胸に痛烈に刺さった。
はっとした顔をし、そのまま呆然となったさとりが、震える声で応えた。
「あ・・・あ、あの・・・・・・す・・・すみません・・・っ」
その声にはっとするのは、今度は妹紅の方だった。
彼女の中にある不快感は、そっくりそのままさとりに対する罪悪感に代わり、彼女はますます居心地が悪そうな顔つきになって、吐き捨てていた。
「いや・・・違う。悪気があったんじゃない・・・・・・私の方こそ、妙なことを言って悪かった・・・」
「いえ・・・いえ・・・・・・誰だって、心の奥にある気持ちを知られることは、嫌ですものね・・・」
そうとだけ言って、きゅっと口をつぐんで俯き気味になったさとり

を見て、妹紅は、
「ちぃ・・・っ」と舌打ちをした。

その舌打ちは、さとりに対するものでなく、この重苦しい空気そのもの。
そして、それを呼びこんだ自分自身に対するものであった。
妹紅は、そのまま何も言わずに踵を返すと、中庭の奥の方へ向かって、投げやりな足取りで歩いていった。
「も、妹紅・・・」
戸惑った様子で彼女に呼びかける慧音は、さとりに、
「不快な思いをさせてしまったのなら、申し訳ございません。許してあげてください」と謝罪してから、去っていく妹紅の背中を追いかけていった。

同様に、眼だけで彼女の背中を追うさとりの心には、慧音が言うような不快な思いなどはなにもなかった。
むしろ、妹紅を怒らせた原因とも言える同情の念が、より強く感じられるばかりだった。
――世の中には、私よりもずっと不幸で寂しい人が、たくさんいるんだわ・・・――
さとりは脳裏で、ぼんやりと呟いていた。
何か、現実というものの一端に触れたような気がした。

そんなさとりに、困った様子で、
「悪い人じゃないのよ。嫌いにならないようにね」と言ってくる永琳に、さとりは曖昧に
「・・・はい」と返事した。
そうして続けざまに改めて

「さっきも言ったように、ブレンの身体を洗うまで、待って頂けますか?」と言う。
永琳はそれに、
「勿論・・・でも、話が終わってからでいいんで。輝夜様のブレンの身体も洗ってくださる?私達もご一緒しますから」と応えた。
それにさとりはまた、
「はい」と返事する。

そうしていつの間にやら、輝夜は装甲から地面に降りていた。
そうしてさとりに対し、偉そうな態度で、
「そういうわけなんで、頑張って、私のブレンを洗いなさい」と言ってくる。
それにはさすがに少しむっとしたさとりが、
「輝夜様は、洗わないんですか?」と聞くと、さも当たり前のように、けらけら笑いながら
「洗うわけないでしょめんどくさい」と応えた。
「・・・」
じと~っとした眼つきで輝夜の顔を眺めながらさとりは、こんな奴に乗られてブレンもかわいそうだな、と思い、輝夜のブレン・・・カグヤブレンの考えを読んでみたのだが、これで案外、向こうは輝夜のことを面白がって笑うばかりだった。
別に何も不満ではないようだ。
ブレンの顔を見上げながらぽかんとするさとりは、ブレンもブレンで、いろんな奴がいるんだなぁ、と実感した。

と、永琳が、中庭でのびている文とはたての姿を発見し、そちらの方へ歩み寄っていた。
彼女を地底に来るように催促していた本人達が、眼をぐるぐる回して気絶していたのである。
横たわる二人の前に立って、

「ちょっと？なにを気持ちよさそうに添い寝していらっしゃるの？」
と呼びかける。

そこでようやく、意識を取り戻し、
「あや～・・・」とか、
「・・・ちぇ・・・橙（ちぇーん）メールが来・・・あ、夢か」とか呻いていた二人が、永琳の姿に気がついた。
そこで俄然、異様な速さでびしっと起立した二人は、永琳を歓迎する声を仲良く発した。
「あ～ややや。ようやく来てくださいました。お待ちしていたんですよぅ～」
「どうぞ、その知識を遺憾なくお使いください～」

その声に永琳はひとまず、
「任せておいて・・・まぁその前に、ブレン達の身体を洗うのが先だそうだけどね」と応えた。

そんなやり取りを傍から見ていた魔理沙達は魔理沙達で。とにかくマリサブレンの身体をごしごし洗っていた。
この前手伝ってくれた勇儀は、今は地上の調査をしている河童の教官役をし、
「アッテーンショッ！！」と叫んでは、河童の
「Ｓｉｒ！ｙｅｓ　ｓｉｒ！」という返事に耳を傾けているようだし、文とはたてはさっきの具合だったため、水撒き役を早苗にやってもらって、ひとり気楽にブラシでブレンを擦っていた。
これで案外、一人きりで洗っていると、思っていたよりも事が捗った。

ブレンの方も、魔理沙ひとりである分、そこまで念入りに洗ってもらうつもりもないようだった（マリサブレンはそういうところで妥協ができる性格だった）ので、実際のところ彼女がブレンの身体を洗い終えたのは、ヤマメ達が群がってサトリブレンを洗っていたのとさほど違わない時間だった。

「早苗、もういいぜ、ポンプ止めてきてくれ」と言うと、
「はーいっ」という返事と共に、早苗は素早く井戸をくみ上げる河童製貯水機を止めにいき、一緒にホースも片づけにいった。
そうしてすぐに戻ってくるなり、突然、両手をばっと左右に広げ、
「ブレぇーン！」などと叫びながら、マリサブレンの踵の辺りの装甲にしがみついた。
そうして、「ぶにゅぅ～・・・」という妙な声と共に、助平な本すら買えないような年齢の割には大分ふくよかな（一部分）が身体を押しつけて、両手ですりすり装甲を撫で、頬ずりしていた早苗は、気持ちがよさそうに呟いていた。
「はぁ～っ・・・かたいのにやわらかひぃ・・・」

呆れた顔で、
「なにをやっとるんだぜ」という魔理沙に、早苗は返す。
「えぇ？魔理沙さんだってこういうことやってるんでしょ？」
「いや、さすがにそんな抱きつくようなことはやってないよ」
「でも、さとりさんがブレンの身体に触れると気持ちいいって・・・あの方がこの前こうやってるの見ましたよ？」
「いやな、それは別にいいんだよ。あたしが言いたいのは・・・」
「なんですかぁ？私の身体が汚れてて、ブレンを洗った意味がないとか言うんですかーっ？失礼ですねぇ、私の身体でいつも清潔で、いい匂いがするんですよっ・・・ねぇ～ブレン、そうですよねぇ～♪」
「やることが大袈裟だし、急過ぎるんだよ～・・・」

魔理沙のぼやきは無視して、ブレンの身体に抱きついていた早苗だが、ふと、永琳の姿に気づき、彼女を方を見ながら、言った。
「あれ？あの人誰ですかぁ？」
どうやら、今の今まで気づかなかったようである。
魔理沙はますます呆れて、いっそ笑みを浮かべながら応える。
「あんたは何も見てないんだなぁ・・・あいつは、八意　永琳って言うんだ。射命丸達が呼んだって話だったろ？」
「あぁ～そうでした。名前は聞いたことあります・・・でも、どんな方なんです？」
「おいしゃしゃ・・・おいしゃ、ひゃ・・・おいひゃ、きゃん・・・あぁーもう　めんどくさいっ！！ポタン砲、撃てぇーっ！・・・じゃなかった、お、い、しゃ、さん、だ、お医者さん、言えた・・・・・なんでも、CTスキャンを開発してノーベル医学・生理学賞を受賞したゴッドフリー・N・ハウンズフィールドとか、アラン・M・コーマックとかより、ずっとすごい奴・・・だそうだぜ。多分言ってるだけだと思うけどな」
「へぇ～そうなんだ、すごぉぉ～いっ！・・・多分言ってるだけなんでしょうけどね」

そんなことを話している内に、ブレンの身体を洗い終えたさとり達が早々に後片付けをして、永琳と他数名と共に地霊殿の中に入っていくのが見えた。
魔理沙達も、その後を追うことにする。

ブレンを洗っている間に服が濡れた者もいるので、そういう者達はまず着替えるなり何なりしてから、例によって客間へと集まった。
そうして永琳が、永遠亭にいるうちにカグヤブレンを調査して分かったことを話す。
結局彼女の話にも、さとり達が知っている部分が多かったのだが、だからこそ、そろそろブレンの持つ性質というのが大体分かってきたようにも思えた。
最も肝心なのが、ブレンは生物のオーガニックエナジーを動力源にして生きているということだ。
だからこそ胎内にさとり達を入れて、その生命力を吸収している。
それができなければ、ブレンは死ぬ。

となれば、ブレンの母とも呼べるオルファンにしても、そうなのではないか？
他の生物のオーガニックエナジーを吸収して生きているのでは・・・

それを踏まえて、にとりが現在のオルファンの状況について説明する。
オルファンは地底の熱と、間欠泉による吹きだし地上に充満していた硫黄を吸収しているという。
また、オルファンの周囲で、植物が育ちつつあるという。
熱は生物が生きている、あるいは活発に活動を行っている証明となるもので、生きることとは密接なつながりがあるし、硫黄も生体には必要な物質だ。多すぎると中毒になり最悪死にいたるが、規格外の巨体を持つオルファンならば、地上の硫黄を吸い尽くすぐらいが十分なのかもしれない。
しかし、永琳の話を聞くに、ブレンにしても、おそらくオルファンにしても、必要としているのはオーガニックエナジーそのものでえあって、他の生物に必要なものが彼らにもまた必要であるとは限ら

ない。
そこで永琳は、こんなことを仮定していた。

「多分オルファンは、生体に必要なエネルギーを吸収し、それを仮のオーガニックエナジーに変換しているんだわ」
「仮の？」魔理沙が聞く。
「本当の意味でのオーガニックエナジーではないけど、一応は同じものとして扱えるエネルギーといった感じで」
それに、今度は早苗が続いた。
「なるほどねぇ～。そんなことができるっていうんなら、手当たり次第になんでも吸収するはずですね」
「ん・・・しかしあくまでもそれは仮のものであるし、量的にも十分であるとは言えないでしょう・・・本来ならば、生物から発せられる正真正銘のオーガニックエナジーを吸収するべきだし、実際オルファンはそうしようとしているかもしれないわ」
「・・・ですけど、どうやって？」と、さとりが聞く。
「・・・オルファンの周囲に植物が生長しつつあるけど・・・多分それでしょう・・・オルファンは自分の周りに植物を繁殖させて、そこからオーガニックエナジーを吸収するつもりだと思えるわ・・・そのためにも、仮のオーガニックエナジーを生み出して、代謝を行っている。実際に調べてみないと分からないけど。オルファンは常に代謝による老廃物を外に排出しているはずよ。そうしてそれが、植物や、あるいは生物にとっての栄養になるのかも」
「ふぅ～～ん」と、魔理沙。
「・・・もう一度言うけど、実際調べてみないと何も分からないわ。これ以上いろいろ考えても、推論の域を逸することはないでしょう」

要するに永琳が言っているのは、今から早速オルファンの調査に出かけようということだ。
今はちょうど、昼頃だと思われる。調査はしやすい時間帯ではなか

ろうか。

永琳の言葉にさとりが、

「では、実際に調べに行きましょうか」と応える。

その時、同じく客間に集まっていたヤマメ達が、こう言ってくる。

「なら、あたし達も連れて行ってよ」

「私達にだって、オルファンのことを知る権利はあるよね」

「そういうことよ。妬ましいことは仰らないようにね。連れて行ってもらうから」

ヤマメ達がこう言うなら、当然こいし達も同じだった。

「オルファンを一番最初に見つけたのは私なんだよ?私がいっちゃいけないなんてこと、ないよね～」

「あたい達もいきますよぉ～」

「うにゅ～」

そうして、オルファンの調査が目的である文達は、言わずもがなだ。

ヤマメやこいし達にように何か言ったりはせず、勝手についてくるつもりだった。

「私がついて行っても何にもならんけど、個人的な興味は満たさせてほしいな」と、にとり。

そうして早苗も当然のように、にこにこ笑いながら、

「皆さんがついていって、私がいかない道理はないですね」と言う。

彼女らを全員連れていくと、かなりの大所帯になる。

あまり人手が多すぎると逆に調査が難航するように思えた。

さとりは困ったような顔で、

「皆さん、遊びにいくんじゃないんですよ?」と言うと、それに全

員から、
「分かってるってーっ」という返事が来る。
仕方がないか、と思うさとりだが、ふとあることを思い出した。
そうしてそれを、文とはたてに向かって聞く。
「あの。私達地底の妖怪がこんな真昼時から地上に出ていっていいのでしょうか・・・よくないですよね？」
が、それに対し文が、問題ないといった様子で応える。
「そういや、説明していませんでした・・・天魔様からの勅命では、調査の際には地底の妖怪の協力を得ても構わないということでしたよ。必要なら、地上に出すことも構いませんって・・・もちろん、悪さをしないように、しっかり監視するように命じられていましたけどね・・・妖怪の山の天狗が許可すれば、それは幻想郷の妖怪の半数が許可したと考えていいですよ」
「でも、半数でしょう？・・・地底の妖怪が地上に出たとあっては、人間の反感だって高まるだろうし、退治する必要だって出てくるのでは・・・」
そうやって、渋るような声を出すさとりは、次いで早苗に対して聞いてみた。
「早苗さんはどうなんです？私達が地上に出てもいいんですか？守矢神社の巫女である貴方は・・・」
その質問に早苗は、何の迷いもなく応えた。
「いいですけど？」
「お・・・お早いお返事ですね・・・」
「人間の反感とかそういうものは、気づかれなきゃ気にする必要もないですよ・・・んで、現人神である私の許しが下れば、それは人間の総意となりましょうっ。これで妖怪の五割と、人間の全部です。多数決で考えれば、もう問題はありませんね」
そこまで言われてしまうと、ここでやっぱり駄目ですなどと言うのは逆に失礼だ。

さとりはくよくよ悩むのはやめて、
「分かりました。みんなで行きましょう」と応えた。

そうなれば、準備もせずさっそくブレン達の下に戻って、出発するべきなのだが、ここでさとりは、もうひとつあることを思い出し、永琳に対して聞いていた。
「あの・・・貴方方のブレンの身体を洗って差し上げる約束でしたが、どうします？」
「今綺麗になったってまた汚れるだろうし、オルファンの調査が済んでからでいいですよ・・・ブレンに対しては輝夜様からそう伝えていただきます」
「あれ・・・そういえばその輝夜様がいらっしゃいませんね」
「別の部屋で寝てますよ」
「え・・・ちょっと、人の屋敷で勝手に・・・」
「許して差し上げてください・・・今から起こしてきますから」
「・・・・・・はぁ・・・」

とにかくさとり達は、客間から再び中庭へと出て、ブレンの下へと集まった。
そうして、各々自分のブレンに乗りこみつつ、ヤマメ達は前にそうやってように手のひらに乗ってもらう。
しかし今回は、文達や、早苗ににとり、それに永琳もいるし、大分人数が多かった。
とはいえ、文達と早苗はブレンが移動するのと同じ速さで容易く空を飛べるので、ブレンに乗せてもらう必要はなかった。
それに、ブレンの数も多くなっている。
それぞれ人数を分けてブレンに乗せてやれば、そう苦労するものではなかった。

サトリブレンにはこいしとお燐とお空を乗せて、マリサブレンにはヤマメとキスメとパルスィを乗せて、カグヤブレンには、にとりと永琳、そして今の今までどこかに行って姿を見せなかった妹紅と慧音に乗ってもらった。
そうして、早速中庭から三機のブレンが飛び立ち、地上へと向けて動き出す。

初めてブレンと出逢った日から、さとりは再び地上に出ることができなかった。
しかしこうやってブレンと共に、もう一度地上の空へと上がり、真昼の太陽の輝きをその身に浴びれば、また新たな感動を覚えることができた。
朝日が昇り来る瞬間を眺めていた時には、その光はとても穏やかなものに見えたが、今の太陽の光は突き刺すように鋭い。
眼を向けても、眼が焼けてしまいそうになって、直視することはできなかった。
心の奥底から湧き出るような感慨はあるが、身体の方は、差し込んでくる鋭い陽光をいっそ拒んでいるような気さえした。
地底で生き続けていると、身体が太陽を必要としなくなるのだろう。
必要としないということは、ほとんど害であるのと同じようなものだった。
スリットウェハーにもたれかかりながら、さとりはぼんやりとした表情で呟いていた。
「私達は、長く陽の光を忘れてきた・・・こんなんじゃ、もし地上に戻れと言われても、難しいかもしれないわね・・・」

そんな中で、前方に見える、巨大な黄金の物体を眼に映す。
思えば、『そのもの』の姿を眼に映すのも、久しぶりだった。ほんの一週間と少しぐらいだったが。

真昼の陽光に照らされるオルファンもまた、夜にその姿を見た時とはまた違って、その金色の肉体をより一層燦然と輝かせ、生命の力をいっそ恐ろしいほどに顕示しているようだった。
それを眺めるさとりは、オルファンが今すぐにでも大地から飛び上がって、空の彼方まで行ってしまいそうだとさえ思えた。
あんな巨体が空に飛び上がるなど、冗談みたいな話だ。
単なる気のせいだろう。

そんなことを考えながらさとりは、ようやくオルファンと対話する機会を得ることができたと感じ、また呟いていた。
「ブレン・・・貴方達を理解するためには、オルファンもまた理解する必要がある・・・だけど、オルファンは貴方と同じように、私と語り合うことができるのかしら・・・あんなに大きなオルファンに、私は見えているの・・・？」

ふとブレンの足元の方を見ると、地上の調査を続行している河童達と、勇儀の姿が見えた。
向こうがこちらに気づいたらしく、大きく手を振ってきている。
ブレンの手のひらに乗っているこいし達が、それに手を振り返していた。

第七話　その2

カグヤブレンの両手のひらの上には、永琳達が乗っている。
妹紅と慧音は互いに寄り添いあい、カグヤブレンの指にもたれかかって、近づいてくるオルファンの方にじっと眼を向けていた。

その一方で、にとりはこの機会に、永琳といろいろ話すことにした。
二人は、同じく文達から調査に協力してくれるよう呼び寄せられた、つまりそれだけの知識を持つ者同士というわけで、それゆえ互いのことには多少は興味があった。
ブレンの親指に肘をかけてもたれかかっている永琳に、にとりが言う。

「あんたのこと全然知らなかったけど、さすがですよ、永琳さん。オルファンの周りに植物が生えてるのは、オルファン自身がそうさせたことだなんて、私にゃ思いもよりませんでした」
「貴方達河童が事前にいろいろ調査をしてくれたおかげよ。その辺の手回しの良さは、尊敬するわ」
「いやぁ～、はっはっは・・・偶然っ、偶然ですよ」
にとりの謙遜する声を聞きつつ永琳は、ちらりとオルファンの方を向いていた。
その顔に急に、不穏な色が見え始めるのがにとりには見えた。
「どうしたんです？」と聞く彼女に、永琳が応える。
「いえね・・・貴方には、何か気になることとかない？」
「えぇ？」
藪から棒に聞いてきた永琳の質問ににとりは素っ頓狂な声を出すが、

同時に、ぐるぐると回り始めた脳みそが、すぐさまある疑問に行きついていた。

「あ・・・あぁー。そういや、確かに気になることはありますよ・・・オルファンが植物を生み出してそのオーガニックエナジーを吸収するとは言うけど、実際オルファンってどれぐらいのオーガニックエナジーを吸収しているんでしょうかねぇ・・・仮のエネルギーにしても、地底が冬になるぐらい熱を吸収して、硫黄泉がただの池になるぐらい硫黄も吸収して、それで実際オルファンには何も起こってないように見えるんだから・・・有り余ってるって感じじゃなさそうですよね」

「そうね。オルファンが活動するために最低限必要なオーガニックエナジーがどれぐらいなのか・・・それにオルファンだって、何らかの行動を起こそうとしているのかもしれないし、それにさらにどれだけのオーガニックエナジーが必要なのか・・・それを全て補うには、一体どれだけの植物が必要なのか・・・」

「ここいら一帯、全部密林になっちゃったりして・・・」

「あっはは・・・無いとは言えないわよ」

にとりの冗談を笑って返す永琳だが、そんな彼女の脳裏には、ある恐ろしい仮説があった。

その仮説は、にとりに対しては伝えないでおく。

いくら植物からオーガニックエナジーを吸収するにしても、それにも限界はあるだろう。

それに、この周辺は元々は草木の一本も生えることがないはずの地なのだ。

いくらオルファンが地ならししているからといって、一帯が全て植物で埋め尽くされることはまずないだろう。

ということは、オルファンが生きるのに、あるいは何らかの行動を起こすのに必要なオーガニックエナジーを、別のものから補う必要が出てくる。

そうして、ブレンパワードが良い例だが、オーガニックエナジーは、人間や妖怪に豊富にあるようだ。
つまり、人妖は、オルファンが必要とする生命力の主要な供給源となる。
そしてここの地下には、数多くの地霊達がいる。
オーガニックエナジーを吸収された生物は、急激に体力を消耗する。
妹紅が良い例だ。
もし、生物の持つ全てのオーガニックエナジーが吸収されれば・・・
一体？

永琳の中の考えは、あくまでも仮説であるが、仮説として考えられるだけの可能性はあった。
オルファンの調査を進めるにつれ、『そのもの』が一体何をやろうとしているのか知ることはできるだろう。
もしそれが、永琳の脳裏に過る最悪の事態に直結するものだとしたら・・・
その時は、しかるべき対処をしなければ、大変なことになる。

そんなことを考えている内に、どうやらブレン達はオルファンに大分近いところまで来ていたようだ。
ブレンの手のひらから身を乗り出して、眼下の様子を見たにとりが、
「あっ」と声を上げる。
そうして永琳に対して、言ってきた。
「植物が増えてきてるっ、昨日の今日のことだったのに・・・・・・
あんたの言った通りでしたよ。オルファンが生長を促してるんだ・・・」
「ふむ・・・」

妖怪達を乗せたブレンは、オルファンの巨体のすぐ傍、金色の肉体に奔る大きな溝の前にまで到達した。
なにやらいくつか歓声が発せられているのが聞こえるが、そういうのには構わず、中に進入していく。
そうして、初めてさとり達がオルファンに入った時と同じように、急なこう配を描くスリットウェハーの壁面に沿って上昇していく。
その次に到達したのは、さとり達の時とは違って、三体のブレンが集まっても問題ない広さの、広大な通路だった。
オルファンが作り出した仮のオーガニックエナジーのおかげか、体内は、さとり達が来た時以上に明るくなっていた。
やはり薄暗さは感じ、そこかしこに暗い影が落ちてはいるが、それを含めて、空間の端から端まで見渡せそうになっている。
オルファンが、本来の生命力を取り戻している証拠なのだろうか。

広大な通路のところどころには、ブレンでも楽にくぐれそうなほどの大きな穴が、いくつか穿たれている。
それぞれの穴が、それぞれ別の空間に繋がっているのだろう。

さて、これからいよいよ調査が始まるわけだが・・・

意気込むさとりは突然、どこからともなく輝夜の声が響いてくるのを聞いた。
（二人とも聞こえるー？）
「えぇっ？・・・輝夜様？」

突然の声にびっくりするさとりに続いて、今度は魔理沙の声も聞こえてきた。
（なんなんだぜっ？）
彼女も驚いているようだ。
二人に対し、輝夜が説明する。

（アンチボディ同士は、オーガニックエナジーを使って離れていても会話できるのよ・・・なにぃ～知らなかったのぉ？）
（へぇ～、試してなかったぜ）
「そんなことができたなんて・・・」
やはり、まだまだアンチボディについて分からないことは多い。
そのことを実感する二人だったが、これは幸いと、魔理沙がこう切り出す。
（なら、あたし達のブレンをそれぞれ手分けさせて、中を調査しようぜ・・・この広いオルファンの身体ん中で、みんな仲良く一緒になって進んだんじゃなぁ）
「効率がよくないですよね」
（ん～っ。私もそれを言おうと思っていたところなのよ）
などという輝夜だったが、外から何か話しかけられているのか、
（ん・・・？）とその声にしばらく耳を傾けて、次いで二人に言ってきた。

（私のブレンは、出来る限り奥の方まで探索してみる。あんた達は、大人しくそこら辺をちまちま調べときなさい）
「永琳さんとにとりさんがいらっしゃりますからね」
（分かった、任せるぜ・・・中は複雑そうだからな、四時間後ぐらいになったら、一旦外に出てから合流しようぜ。迷うなよ）
輝夜の申し出を二人が聞き入れ、魔理沙の言葉も耳に入れつつ、三体のブレンは早速、それぞれ近いところにあった穴を潜ってオルファンの体内を奥へと進んでいった。

どうやらオーガニックエナジーによる通信は、ブレンの体外にいる者にも聞こえているらしい。
カグヤブレンが奥の方まで探索すると聞いて、文と早苗は、カグヤブレンの方へと同行していく。
文としては奥の方まで踏み込むことでオルファンの核心的な部分を知ることができるからだろうが、早苗に関してはただ面白そうだからだろう。
はたての方は、文と一緒に行ったって意味がないだろうと考え、サトリブレンの方についてくることにしていた。

※

マリサブレンが穴を潜り、大きな筒状の空洞の中を進んでいく。
その内部は、スリットウェハーがいくつも積層し、まるで人肌にできる皺のようなものを形作っており、それが生物的な印象を与える。
だが生々しさは感じさせなかった。
ブレンの胎内の中で魔理沙は、輝夜に教えられたオーガニックエナジーによる通信を使って、散り散りになった他のブレンに呼びかけていた。
「おぉーい聞こえるか?・・・聞こえないのか?・・・・・・駄目みたいだぜ」
どれほど呼びかけても、返事はなかった。
どうやら、通信にも有効な範囲というものがあるらしい。
分かれていった他のブレンの様子を知ることはできないようだ。
まぁ、それならそれで、勝手気ままにやらせてもらうだけだ。

しばらくスリットウェハーの作る空洞の中を進んでいたマリサブレンが、穴を抜けて、大きな空間へと出た。
「おぉーっ」と歓声をあげながら、魔理沙が周囲の様子を見回す。
空間全体に張り巡らされたスリットウェハーの壁面が、まるで天然の遺跡か、あるいは芸術品のような、言いようのない光景を生み出している。
そうしてそれが、光源があるのかも分からないのに、はっきりとその眼に見える。
壁のいたるところに空いてある大きな穴から、また別の場所に向かうことができそうだ。

魔理沙は、試しに、胎内に繋がる装甲を開き、外へと身を乗り出した。
すぐ傍にあるブレンの手のひらの上では、ヤマメ達がいろいろと言っていた。
「久しぶりだなぁ～」
「何か、前とちょっと違うね」
それと一緒に、パルスィが魔理沙の方に呼びかけてくる。
「ちょっと降ろしてみてよ」
「ん？・・・あぁ、分かったぜ」
言われる通り、ブレンを一旦地面（？）に降下させ、しゃがみ込ませる。
そうして手のひらを降ろすと、ヤマメ達はそこから飛び降りて、積層する金属質の板の上へと足をつけた。
それと一緒に、魔理沙も地面へと降りた。

ヤマメが、大きく広がる空間を見上げ、身体をぐるぐる回しながら言う。
「へぇー・・・なんか、元気になってるように見えるなぁ～」
「元気に、ねぇ・・・分かるのか？」と聞く魔理沙に、パルスィが

妙に意地らしい顔で、
「貴方は初めてだろうけど、私達は前に来てるからね、分かるのよ」
と言う。
それに魔理沙はむすっとして、口答えした。
「鬱陶しいなぁ、退治するぜー・・・？それに、あんたらだって対して分かってないだろ」
「まぁ、そうなのよね・・・妬ましいけど」
「ふんっ」

小さく鼻息を鳴らしつつ、魔理沙の心の中には、あるひとつの違和感があった。
確かにパルスィの言う通り、魔理沙は初めてオルファンの胎内に入った。
そのため、生物であるオルファンの体内が一体どれほどのものなのか分からなかった。
そうして、実際に眼でみた体内の光景・・・この妙に小奇麗で、生物的な動きを一切していない空間にも、何か妙な印象を受けていた。
彼女は、脳裏で呟く。

――本当にオルファンって、生き物なのか？・・・生き物の身体って、それぞれの部分でちゃんとした機能があるっていうらしいけど・・・この空間には一体どういう役割があるっていうんだ？・・・どうも、ただのがらんどうにしか見えないぜ・・・・・・そうだ。ブレンにしてもこのオルファンにしても、生きてるのは間違いないんだろうけど、どうやって生きてるのかが分からないんだ。そもそも、オーガニックエナジーっていうのは何なんだ？ビープレートって？・・・それを求めるためにブレンは生まれてきたっていうけど・・・それはまたどうしてなんだ？ブレンって一体、何者なんだろう・・・――

実を言うと、地底に集まってきた人妖達の中で一番知的好奇心が強いのは、文でもはたてでもにとりでも、ましてや永琳や慧音でもなく、魔理沙だと言える。
所詮彼女は元は単なる人間であり、その知識は、妖怪達と比べれば無いに等しいものだった。
だから、出来る限り勉強して考えて、その上で自分なりに知識を蓄えてきた。
幻想郷においては、知恵だって力にはなる。
そうやって今まで上手い具合にやってきたのが魔理沙だ。
彼女はその気になれば、冥界だろうが魔界だろうが地獄だろうが行く覚悟はできるし（実際地獄以外には行った）、興味があれば、頭がおかしくなることさえ厭わなかった。
おかげで、狂気というものには慣れたものだ。

そんな魔理沙は、今回の異変においてもいろいろと考えを巡らせていた。
が、さすがに今回のような古今例のない異変では、いろいろ考えても答えが出てくる見込みがない。
それは文やはたて、それこそ永琳のような者でさえそうなので、何も恥じることではない。
それでも魔理沙は、どうしても気になった。
ブレンがどうやって生きているのか、何故生きるのか、そうして、彼らが求めるビープレートとは何なのか。
そう、一番大事なのがそれだ。
ブレンはビープレートを手に入れるために生きている。
実際彼らは自分達を、ビープレートを得るために生み出された抗体だと言っている。
だとして、そのビープレートを得た時、彼らはどうなるのか？
生きる目的を達したその先に、彼らは一体何をするのか．．．

ふと、その場でしゃがみ込むブレンの顔に眼を向けた魔理沙は、この奇妙な生物が、何かとても宗教的な、あるいはまた普遍的で概念的な宿命の下に生きているような気がした。

さとりや永琳達は、彼らを生物だと言っているが、もしかしたらそれは違うかもしれない。

魔理沙は脳裏で、自分達の前に現れた、ブレンパワード、グランチャー、あるいはオルファンという存在そのものに、語りかけていた。

――もしかしてあんた達は・・・生物とか物体とかそういうのじゃなくて・・・・・ただの・・・『場』なんじゃぁないのか・・・

――

彼女の眼の前にいるマリサブレンは、その問いに応えることはなかった。

※

魔理沙の持つ違和感は、彼女ひとりのものではなかった。

カグヤブレンは、とにかくまずはオルファンの最深部とも呼べる場所を見つけ出し、そこを調査するべく、広い空間に出ても止まることなく、すぐに空間に空いてある穴に入りこんで、別の空間へと向かう。

同じ場所をぐるぐる回る可能性もあるので、そんなことにならないよう、自分達がどうやって進んでいるのかという進路を、頭の中で

描いておく。
この場にいる者の多くは、初めて入った場所であろうと、それができるような者達ばかりだった。
ブレンの方もさすがに、ここから生み出されたこともあってオルファンの内部の構造は大まかには分かっているらしく、その移動に迷いはないようだった。
これならいずれ、最深部と呼べる場所にも到達することができるだろう。

そんな中で永琳は、生物であるはずのこのオルファンの体内が、とてもではないが、生物のそれに見えないことに、ある意味では驚いていた。
ブレンが素通りしている空間は、細部は違うながらも大体同じような見た目をしていた。
生物の体内にあって、これほど似たり寄ったりで同じような空間がいくつも続いていることは稀有である。
人間の大腸とかは似たようなものが長く続いているが、それはひとつの空間として考えられる。
これはそういうものではなく、壁に隔たれ、管を通らなければ行き来できないような、ひとつながりでないまったく別の空間だった。
ましてそれが、外見上は何の機能も果たしていないことなど・・・
永琳は、ブレンはともかくとして、このオルファンが本当に生物であるのか、疑いたくなってきた。

滑空するブレンの手のひらに乗って、流れていくスリットウェハーの壁面を眺めていた永琳の視界に突然、ぬっと早苗の顔が見えた。
「ん・・・っ？」
さすがに少しだけびっくりした永琳に、早苗がまたしても突然、質問を投げかけてくる。
「八意先生。このオルファンには、オーガニックエナジーがたくさ

んあるんですよね？」
「え？・・・ええぇ、そうね」
「それはどこかに蓄えられたりしてるんですか？」
「ん～・・・・・・調べてみないとはっきりと言い切れないけど・・・オーガニックエナジー自体は恐らく不可視のものだろうから、眼に見える形で蓄えられているということはないでしょうね」
「そうですか・・・なら、オルファンの中のオーガニックエナジーを別のエネルギーに変換したりとかはできないんですか？」
「・・・？」

永琳は、早苗が何故こういう質問をするのか分からなかった。
オルファンの中のオーガニックエナジーを妖怪達の生活に利用しようという魂胆ではないだろうが・・・

実はそれがそのまま正解であることを知らない永琳は、とにかく、早苗の質問に応える。
「そうしたくば、まずはオルファンが自身のオーガニックエナジーを別の形に変換する必要があるかもしれないわね。オーガニックエナジーからそのままエネルギーに変換するのは困難でしょう。だから、オルファンが運動したり、あるいは熱を発したりするときに、それを利用すればいいでしょう」
それを聞いた早苗は、急に顔をぱっと輝かせた。
「そうなんですか～っ」
「・・・・・・」

永琳には、早苗が考えている何かが良い事なのか悪い事なのかの判断はできなかった。（何かを考えているらしいことは間違いないだろう）
しかし、彼女の、あるいは彼女の向こうにいる何者かが何を企もうと、それを実現できるとは思えなかった。

オルファンがそれを許すと思えなかったのだ。

※

さとり達、そしてサトリブレンは、とりあえずのんびりとした心持ちでオルファンの中を探索することにした。
難しいことは永琳達が調べてくれるだろうし、自分達のやるべきことは、この巨大な生物・・・オルファンと互いの理解を深めることだ。
そして、そのためにまずは語り合うことだ。
穴を抜け、そこから出た広い空間の中をゆっくりと浮遊するサトリブレン。
その胎内でさとりは、自分達が今包み込まれるように、あるいは飲み込まれるようにその体内にいる、オルファンに向けて語りかけていた。

「オルファンさん。聞こえていますか?今、ブレンのオーガニックエナジーを介して、貴方に呼びかけています・・・聞こえていますか?」
しかし、返事はなかった。
初めてオルファンの体内に入った時は、『その者』の発する声のようなものが聞こえたのだが・・・
「あの時の声を、もう一度聞かせてください・・・そうでなくとも、貴方の気持ちを、少しでいいから・・・・・・」
遺憾なことだが、人間にしても妖怪にしても、言葉として分かるも

の（思念を含んで）でなければ、自分のすぐ眼の前にいる者の気持ちさえ、完全に理解することはできない。
あるいは、同じ人間同士なら、互いの微妙な表情の違いから考えていることが分かるというが・・・
なら、さとりとオルファンが同じような顔をしているかと聞かれれば、その答えは分かり切ったものだ。
だから、オルファンのことを理解するためには、『その者』の意志を、言葉として分からなければならない。
そうしなければ、彼らが何を求めているのかも、そのためにさとり達がどうすればいいのかも、分からないのだ。

「・・・・・・」

さとりはとにかく、ただじっと耳を、あるいは心を澄ませ、オルファンの発する声を聞こうとした。
そうして、他のありとあらゆる音、自分の呼吸の音さえ聞こえなくなるほどに彼女の心を研ぎ澄まされた時、彼女の精神に直接、何かが響いた。

それは声ではない。
鼓動の音だ。
心臓の鼓動にも似た音。
それは、さとりの心臓が発する音ではない。もっと別のところから響く音だ。

「・・・っ」

さとりにはこれが、オルファンから彼女に向けた返事であるように思えて仕方がなかった。
その音はただの一度微かに聞こえただけで、それ以後はまったく聞こえなくなった。
だが、その音の源ははっきりと分かった。
この空間からさらに奥へと進んだところだ、大分近い。

さとりはすぐさまブレンに、その場所へと続くであろう穴を潜らせて奥へと進ませた。

彼女の心は僅かに逸り、それに呼応して、移動するブレンの動きもやや急いたものになる。

スピードを少しだけ増したブレンの背を、はたてが追いかけていく。

僅かなうねりを見せながらも、ほとんど直線に近い円筒状の道を通り、そして穴を通りぬけてその空間へと出た時、さとりは眼を見張った。

「こ・・・これ・・・っ！」

それは、円盤だった。

広大な空間の中に、ブレンが生まれた時に見たあの円盤が、いくつも寝かされていたのである。

その数はもう、二十か三十近くはある。

どう見ても、ブレンが生まれたその時の円盤、そのものだ。

ということはこの全てが、ブレンパワードを生み出すという可能性も大いにあるだろう。

他にこの空間の中に、ブレンが何十体といても一斉にくぐれそうな大きな穴があるのも見えたのだが、今はそういうものは眼に付かなかった。

さすがに驚いて声を失うさとり。

彼女の耳には、胎内の外で響くこいし達の声も聞こえていた。

「すごぉい！これみんなブレンになるの？」

「壮観だにゃ～」

「でも、みんな大人しくしてるわね。全然動かないよ？」

そんな声に続いて、はたてが装甲の前に浮遊し、こんこんと叩いて開けるように催促してくる。

さとりはそれに従い装甲を開いて、胎内から外に身を乗り出した。

同時に、はたてが言う。

「これだけの円盤がみんなブレンを生み出したら、乗せる人を探すのが大変ねぇ・・・」

言いながらはたては、空間に眠るいくつもの円盤を、携帯のカメラで撮影している。

「そうですね・・・こいしやヤマメさん達がみんな乗ったって、まだ足りませんよ・・・」

そんなことを呟きながら、ブレンの足元に見える無数の円盤に眼を向けるさとり。

そして、その時だった。

沈黙を続けていた円盤の数々が、突如息を吹き返したかのように一斉にふわりと浮きあがった。

こいし達の喚声が聞こえる。

「わぁーーっ！」

「にゃぁーっ！」

「うにゅーっ！」

はたては反射的に、携帯電話のカメラのシャッターを連射していた。

「・・・・・っ」

息を呑むさとりの眼前に浮き上がった無数の円盤は次いで、一斉にどこかへと向かって、素早い動きで飛んでいった。

その先にあるのは、あの、ブレン数十体でもくぐれそうな巨大な穴

の向こうだ。
吸い込まれるように、全ての円盤が穴の中へと入っていく。
その様子もカメラで撮影しつつ、はたてが叫ぶ。
「なんなのぉあれ～っ？」

さとりは瞬間、今度は自分の心臓が大きく鼓動する音を聞いた。
しかしそれは、さとり自身がもたらした鼓動ではない。
別の何かに感化され、さとりの身体が反応する音だった。
先に聞こえた何者かの鼓動の音は、この無数の円盤によるものだった。
そしてさとりには、この動き始めた円盤こそが、さとりの呼びかけに対するオルファンの解答であるように思えたのだ。

さとりは咄嗟に、はたてに呼びかけていた。
「はたてさんっ、追いますよ！」
「うん、お願いっ」
「こいし達も、いいわね？振り落とされないようにっ」
「いっちゃってよお姉様～」
「いつでもいいですよ～」
「振り落とされたって、飛べますから」

「ん・・・ブレンっ」
最後にブレンに呼びかけると同時に、その背中からオーガニックエナジーの波が淡い光となって、一瞬だけ光の輪のようなものを形成する。
瞬間、両手を左右に広げたブレンは、吹き抜ける風のような速さで、円盤を追い穴の中へと入っていった。

※

オルファンの最深部を目指して進んでいたカグヤブレンは、再び広い空間へと出た。
しかしそこはひとつの空間というより、今まで通ってきたような、別の場所を繋ぐ通路のようなものに見えた。
見渡してみると、長い円筒状をしているように見えたので、おそらくそうだろう。
しかしその広さは他の細い通路とは比にならないようなものだ。
円筒の直径は、オルファンの全体像の十数分の一ぐらいに思える。
全長数百ｋｍの巨体の中での十数分の一だ。

さすがにこれまでの単調な光景と違う様相であったため、カグヤブレンも足を止めてしまった。
そうして永琳はこの巨大な通路が、人間で言う大動脈にあたる部分のように思えて、ようやくオルファンの持つ生物的な面を見ることができたような気がした。

だとして、穴の向こうから高速で飛来してきたその物体は、さしずめ赤血球か何かか？
いや、そんなわけはない。
突如カグヤブレンの眼の前を通過してきたその物体に、永琳は見覚えがあった。
そう、このカグヤブレンが現れたその日に一緒に見た・・・

「円盤（プレート）だわ・・・っ」

今までずっとブレンの手のひらの上で座りこんで、何の気なしに流れていくオルファンの胎内をぼんやりと眺めていた妹紅と慧音も、この時ばかりは、無数の円盤の姿をじっと眼に入れていた。

妹紅もまた、グランチャーと出逢ったその日、この円盤を見ている。

カグヤブレンにしてもグランチャーにしても、生み出されてからしばらくの間は、この円盤の残骸（？）の上にいた。

なので今更、見間違えるわけもなかった。

妹紅は、瞬く間に視界から消え去った円盤の姿を網膜に焼きつけつつ、呟く。

「やっぱり、同じなのか・・・グランチャーもブレンも・・・」

円盤が通過した後も、その場に佇んでいたカグヤブレン。

その股間部の装甲が開き、慌てた様子の輝夜が身を乗り出してきて、永琳に聞いた。

「ちょっ・・・何あれっ？」

それには永琳もさすがに、

「アンチボディの原形となるプレートがいくつも飛んできて、どこかに去っていった・・・それしか分からないわ」と、曖昧な答えを出した。

その次の瞬間には、円盤の群れを追っていたサトリブレンが輝夜達の前に現れた。

カグヤブレンの存在に気がついたらしく、急停止したサトリブレン。

胎内に続く穴から身を乗り出しているさとりが、大声で呼びかけてくる。

「輝夜様ーっ？」

それに輝夜も大声で返した。

「なにやってんのーっ？あの円盤は何よ～っ」

「分かりませんっ・・・でも、何かありそうだからとにかく追っていたんですーっ」

その声に続いて、永琳が輝夜に言いかける。

「私達も追いましょう」

「ん？・・・うん」

永琳の言葉に頷いた輝夜は、続けてさとりに言う。

「私達も一緒にいくよっ」

「分かりました。急ぎましょう、行きますよ！」

それだけ言い残し、サトリブレンは再び加速して、円盤を追っていった。

カグヤブレンもその後に続く。

話している間に、円盤が大分遠いところまで飛んで行ってしまっていた。

このまま見失うわけにはいかないので、二体のブレンはさらに加速する。

その速度はかなりのもので、天狗でなければ追いつくことが難しいほどになっていた。

そのため、さすがに置いてかれそうになった早苗が、文の身体にしがみ付いていた。

「ひぃーっ、ひぃ～っ、速いぃぃ～っ！」

と喚いている。

「あやっ・・・あややや・・・お、重い・・・っ」

しかし、それだけの加速を生じたおかげで、どうにか飛行する円盤の群れに追いつくことができた。
円盤の速度自体は大したものではないので、一度追いついてしまえば多少は速度を落としても振り切られることはなかった。

早苗を乗せて飛んだためさすがに疲れた文が、早苗を抱えたままカグヤブレンの手のひらに転がり落ちるように降り、折りたたまれた指にもたれかかった。
「あやぁ～～、疲れたっ！」
「はぁ～、疲れました～・・・」
「あんたは何もやってないでしょ」
「いやぁ、あはは・・・ありがとうございました～」

引き続き円盤を追っていた二体のブレンだったが、突如一点に密集していた円盤が、いくつかの纏まりに分かれた。
同時に、巨大な通路もまたいくつかの道に枝分かれし、それぞれの円盤の纏まりが別々の道へと進んでいった。

仕方がないので、サトリブレンとカグヤブレンも分かれて、適当な道へ入って円盤を追っていく。

そうして引き続き円盤を追っていたサトリブレン。
しかし、枝分かれしてからの通路は、それほど長くは続かなかった。

一分するかしないかという内に、通路はその終着点へと到達する。
しかしそこは・・・

装甲を開けて穴から身を乗り出したまま、加速による風に身体を煽られながらじっと円盤を眼で追っていたさとりは、突然突き刺さってきた鋭い光に、思わず眼を閉じた。
「う・・・っ!?」

痛みすら感じてしまいそうなその光の余韻が瞼の裏で残る中で、少しずつ瞼を開き、眼の前の光景を網膜に映すさとり。
そうして、うっすらと開けられたその眼に映るのは、広大な青空と、そこにかかる雲であった。

ブレンは、オルファンの外へと抜け出していた。

そして円盤もまた、オルファンの外へと出て、尚も加速を続けていた。
このままどこまで遠くにいってしまいそうな勢いだ。
さすがにこれ以上追い続けることはできそうにない。

空にかかる雲がブレンの兎のような耳を掠めそうになる中で、さとりは彼の者に静止するように命じて、それに応じたブレンが、手のひらに乗るこいし達が辛くないよう徐々に減速しながら停止した。
その間にも、円盤は速度を緩めることなく、遥か彼方へと飛んで行ってしまう。
一時間か、あるいは二時間かぶりの太陽が熱いほどに身体を照らす中でさとりは、周囲をきょろきょろと見回した。
枝分かれした通路は、大分近いところで開口していたらしく、他の

円盤のまとまりもどこかへと飛び去っていく様子を見ることができた。
カグヤブレンの姿も見える。
同じくこちらに気づいたらしく、近づいてきていた。

そうして、すぐそばで寄り添い合うように近づいた二体のブレン。
さとりも輝夜の方も、ブレンの手にひらの上に乗って、大声を出さなくても互いの声が聞こえるような位置から互いに呼び合おうとした。

が、開口一番切り出したのは、永琳だった。
「分かったわ」と彼女が言う。
それににとりが、はっとして、
「あぁ、そうか！」と声を上げた。

輝夜に呼びかけるのはやめて、
「・・・一体何が分かったんです」と聞くさとりに、永琳は応える。
「いえね、オルファンに入る前ににとりと、オルファンがオーガニックエナジーを求めているのだけどその源をどう得るのかということを話していたの・・・その答えが分かったのよ」
「・・・それは？」
「あのプレートは、アンチボディを生み出す。そしてアンチボディにも、生物のオーガニックエナジーを吸収する機能はある・・・・・で、アンチボディは、一度吸収したオーガニックエナジーを、自身の胎内で蓄え、しかも増幅することができるのよ」
それにはこいしや早苗が、
「えぇ、なんで～？」
「どうしてなんですぅ？」と聞く。
文の方も、
「確証があるんですか？」と疑問を口にしていた。

しかし永琳には、一応はっきりとこう言える理由があった。
彼女はそれを説明する。

「アンチボディは、生まれてから誰も胎内に乗っていなければ、速い段階で死にいたる。でも、一度誰かを乗せてしまえば、かなり長い間ほったらかしにしても、ブレンは死ぬことはないようね」
それを聞いたはたてが合点がいった様子で言う。
「あぁ、なるほど。それは、ブレンの中でオーガニックエナジーが蓄えられて、しかも増幅されているからなんですね」
「そういうことよ・・・そのことは、実際にブレンに乗っているさとりさんや輝夜様には実感できてるんじゃないかしら？それに、妹紅にもね」

その言葉通り、さとりには、永琳の言っていることがなんとなく実感として湧いていた。
ブレンに乗れば、オーガニックエナジーが吸収されるというのはすでに分かっていることだが、だとすれば、ブレンに乗っているだけで身体が疲れてしまうということではないか？
だがさとりには、そういう感覚は今の内はなかった。
むしろブレンは、さとりが疲れた時などは、自らのオーガニックエナジーを彼女に分けたりもしていた。
そんなことは、ブレン自身がオーガニックエナジーを生み出せるように、あるいは増幅できるようになっていなければできないことではないだろうか・・・

そうして、輝夜の方も、思い出したように呟く。
「そういやそうだわねぇ。私一人の生命力なんて大したもんじゃないはずなのに、よくブレンはグランチャーとあんな激しく戦えたと思うよ・・・オーガニックエナジーが増幅されてるっていうなら、納得できるわ」

それに妹紅が続く。
「・・・確かに、そうだ」

そうして慧音が、結論に至ったのか、口を開いた。
「ということは・・・オルファンはブレンを媒介して効率よくオーガニックエナジーを吸収しようとしているのですか?・・・あの円盤は、幻想郷の各地に散らばることで、より多くの者とブレンが出逢えるようにと・・・」
それに、永琳は頷く。
「ん・・・オルファンが地熱と硫黄を吸収していたのは、あのプレートを生み出すためだったのかもしれないわね。プレートを生み出すにしても、おそらくオーガニックエナジーは必要でしょうから・・・そしてプレートは、あれで全部じゃないでしょう。これからも新しいプレートが生み出されて、今回みたいに幻想郷の各地に散らばっていく可能性があるわ」

「・・・これから、どうなるのでしょう・・・私達はどうすれば・・・」そう呟くさとりには、はたてが返した。
「まずは、調査でしょ」
それに文が、「だよね」と続く。
「魔理沙達がまだ中にいるだろうし、まずはあいつらと合流するまで、調査を続行しましょうよ」
その言葉にさとりは、
「・・・そうですね。まずは、そうですよね」と応えた。

そうして、永琳が言う。
「なら、私達は引き続き、オルファンの最深部を探りますから。貴方方は、今度はオルファンの外周を調べてみてください・・・オル

ファンが植物の生長を促しているとすれば、豊富な栄養素を含んだ老廃物が、どこかから排出されているかもしれないから」

それを聞いたこいしが、
「ろうはいぶつ？」と聞き返す。
ついでお燐が、
「それってつまり・・・」と呟き、次の瞬間には、さーっと顔を青ざめた。
「うにゅ？え、なに？」
お空にはなんで顔を青ざめるのか分からなかったようだ。
しかしお燐が、「えんがちょだよ・・・えんがちょ」と呟くと、お空もようやく、ただでさえ地底暮らしで白い顔を、より一層蒼白とさせた。
老廃物と聞いて綺麗なものを思い浮かべる者は少ないだろう。
しかももし、老廃物＝排泄物という風に結び付けてしまえば、そこから彷彿とするものは、ほとんど決まり切っていた。

こいしが涙目になって、
「そんなの探せっていうのぉ～っ？」と喚く。
永琳は困った様子で、なだめた。
「オルファンが実際にそれを出しているっていうなら、見つけておいたほうがいいでしょう・・・さとりさんはどうなんです？」
そう聞かれたさとりは、別段嫌そうではない様子で応えた。
「こんな綺麗なオルファンなら、排泄されるものだって綺麗なものかもしれないし・・・確かに、見つけたほうがいいですからね・・・」
それにこいしが、「えぇー・・・」と苦言を呈する。
さとりはむっとして、言った。
「そんなに嫌なら、貴方達は先に帰ってなさい」
「んっ・・・そうまで言われたら、付き合うしかないわ。お姉様の

好きなよぉにっ」

こいし達も説得できたようなので、さとりは改めて永琳に、

「それでは、いい結果が出せるかは分かりませんけど、調べさせてもらいます」と伝えた。

「お願いね。後、オルファンの周囲に生えている植物をいくつか、採取しておいてほしいの。後でいろいろ調べますから」

「分かりました」

「その内魔理沙達と合流すると思うから、その後は私達を待っていてね」

「はい」

それだけ言ってカグヤブレンは、オルファンの最深部に向かうべく来た道を戻り、体内へと再進入していった。

さとり達も、永琳に言われたとおり、オルファンの周囲の様子を調べるべく地上へと降下していった。

地上には河童達や勇儀もいるだろうから、彼女らにも手伝ってもらおう。

第七話　その3

再度オルファンの体内に入ったカグヤブレンは、引き続き最深部を目指して進む。
すでにこれまでで大分奥の方まで進めていたらしく、ブレンにはすでに、ぼんやりと自分がどこに向かうべきなのかというのが分かっていた。
迷いなく進むブレンが目指す場所は、どうやら、オルファンの上部、三日月のような傾斜を描いているその中心部のようだ。
外から見た時、その周辺に中に入れそうな穴がかなり少なかったことや、近くに女性を模した彫刻のようなものがあった（それがます、オルファンを生物でなくただの構造物だと思わせる要因なっていた）ことから、もしかしたらとは思っていたが、どうやらその通りだったらしい。
そこが、オルファンの最深部、この生物のもっとも重要な部分のひとつであるようだ。

留まることなく進んでいたブレンだったが、何本目かの通路を進んでいる内に、その動きを止めた。

それもそのはずだ。
通路が段々と狭くなっており、ブレンの身体ではこれ以上奥に進めそうになかったからだ。
スリットウェハーの壁面が、まるで遠近感のつきすぎた絵画のごと

く、吸い込まれるように小さくなっていた。
そしてブレンは、ここから奥に進んだところがオルファンの最も奥の部分であり、そこに何かがあると言っている。

「ここから先は、私達が進むべきね」と永琳。
輝夜がブレンをその場に降ろして座らせると、永琳は手のひらの上から飛び降りた。
疲れも落ち着いていたので、再度自分で飛んでブレンの後についていた文が、永琳の傍に降り立って、
「なら、私もいきます」と言う。
にとりも、小さい身体でブレンの手のひらから飛び降りつつ、
「永琳さんが行くところなら、私も行った方がいいですよねぇ」と続いた。
早苗は最早何もいわず、にこにこした顔で永琳の後ろにいた。

「輝夜様はどうなさいます」と永琳が聞くと、
「私はブレンといるよ」という返事が帰ってきた。
それに、妹紅と慧音も続く。
「私もだ」
「えぇ、私もここにいさせて頂きます」

「ん」

輝夜と妹紅と慧音、そしてブレンを残して、永琳達は通路を奥へと進んでいった。
通路はみるみる内に細く、狭くなっていく。

果ては、一列に並んで歩かないと窮屈でどうしようもなくなるほどの狭さになっていた。

そんな通路を進む中で、先頭を行く永琳の後ろからにとりが言う。この狭い通路の中では、普通の話し声でも反響して大きく聞こえる。

「永琳さん。オルファンがブレンを生み出したんなら、ここって一応はブレンの巣って考えてもいいんですよね？」

「・・・そのまま＝(イコール)ではないだろうけど、そう考えられるわね」

「だったらなんで、こんなブレンが通れないような通路があるんですかねぇ・・・そもそもここって、何が通るための道なんだろう」

そのにとりの声に、文が

「そういやそうですねぇ」と続いた。

そして早苗が冗談交じりに、

「私達人妖を招き入れるためだったりして～」と笑顔で言った、その瞬間だった。

永琳は、眼の前に現れたそれに、思わず立ち止まってしまった。

急に彼女が立ち止ったものだから、すぐ後ろを歩いていた文がその背中にぶつかり、またその背中ににとりがぶつかりといった具合に、玉突き事故が怒ってしまった。

「あやーもうっ！狭いんだから急に立ち止らないでください！」と喚く文だったが、その次には、前方に何かがあるのに気がつき、

「ん？・・・んっ？」と、永琳の身体の横から覗き見てみた。

同時にそれを見た文も、驚いた様子で、

「えぇ～っ？なにこれ・・・」と息を漏らした。

永琳の呟く声が、狭い空間にこだまする。

「早苗さん・・・あなたの言っていたことも、あながち間違いではないかもしれないわよ・・・」

それを聞いた早苗だったが、列の一番後ろにいたため、何がなんだか分からず、プンプンした様子で、

「もうぅ～なんなんですかーっ？」と吐き捨てる。

それに、文が応えた。

「階段よ・・・なんか知らないけど、階段があんだけど・・・」

「階段って・・・えぇっ？」早苗もまた驚いた。

「なんじゃそりゃぁ～っ？」早苗同様、事態がよく分からなかったにとりも、驚嘆を吐く。

永琳の眼の前には、まさしく階段としか呼べないようないくつもの小さな段差が連なって、上へと向かってせり上がっていた。

形はそこまで規則的ではなく、自然にできたもののようにも思えるが、生物の体内で自然とこのような形の構造ができることはごく稀だ。

そしてこの通路が、仮に何かを通らせるためのものだとして・・・

永琳は、呟くように言う。

「世の中は広く生物は多しと言えど、傾斜を階段で昇るようなものは、人間か妖怪ぐらいのものでしょう・・・ブレンパワードは言わずもがな・・・」

それに文が、ぼんやりとした口調で続く。

「ってことは・・・もしかするともしかして・・・」

そのもしかしてに続く台詞は言わなかったし、永琳も何も応えることはなかった。

ただ一言、

「とにかく進みましょう」とだけ言って、再び前へと進み始める。

そうして、眼前にあった階段へと近づき、迷いない足取りで一段一段踏みしめ、昇っていった。
後ろから文達も続いていく。
実際に階段に足をかけて、ようやくにとりと早苗も、階段があることを不思議がるような声を発することができた。
「なんでこんなもんが・・・？」
「変なのぉ～」

階段は大分長く続いているように感じられた。
もちろん、釈迦院御坂遊歩道に比べればその１／１０ほどしかないわけだが、なんせ周りの壁が大分狭いために閉塞感があって、妙に長々と階段を上っている感覚があった。
実際は、ゆっくりと上っていっても五分ほどしかかからなかったが、感覚としてはそれよりも長く上っていたように思える。

が、そんな階段も終わり、永琳達はある空間へと出た。
そこには・・・

早苗が大きな感嘆を漏らす。
「わぁーすごぉ～いっ！」
スリットウェハーの足場の向こう側に、透明に透ける巨大な横向きの長方形の窓のようなものがあった。
それが縦にならんで、その向こうにある景色を映し出していた。
一面の青空とそこにかかる雲、緑色の大地と、それらを隔てる地平線がはっきりと見える。

おそらくあの窓のようなものは、オルファンの上部に見えていた緑色に光る溝のようなものであろうと考えられる。

外観からはただの緑色の光に見え、内側からは透明に見えるという、偏光ガラスのような原理になっているのだろう。
勿論それも憶測であるし、もしかしたらもっと別のものなのかもしれないので、確実とは言い切れないが。
そしてここがおそらく、このオルファンの最も奥深くの部分なのだろう。

空間にせり出している足場は、それほど広くはなかった。
百人単位の人が集まれば窮屈さで潰される人が出てくる程のものだ。
だが、実際の空間の広さはそれ以上だった。
なんせ、足場が一切ないスペースがかなり広がっていたからだ。
今永琳達が立っている足場は、ある程度のところで急傾斜して、それが天然のガードレールのようになっている。
にとりがそこから身を乗り出して眼下の様子を覗き見た。
その瞬間、彼女は足をがたがた震えさせながら、涙目でこちらの方を振り返り、後ずさりしてきた。

「た・・・高いようぅ～、底が見えない・・・こ・・・怖いよぉぅ～～・・・」
それを聞いた早苗が、入れ替わるように身を乗り出して、にとりがそうしたように眼下を見る。
そうして笑いながら、その場にへたりこんだにとりの頭をぽんぽん叩いて、言った。
「何をおっしゃってるんですか～っ、妖怪があれしきの奈落を怖がっちゃいけませんよ～」
「妖怪だけど、私泳ぐの得意なだけで、飛ぶのは苦手なんだよう～・・・そ、そりゃ、ブレンに乗ってる時はまだどうにかなったさ・・・で、でもあれ、底が真っ暗で・・・食べられそうだよぅ～・・・」
「あぁはいはい・・・はいはいはいはい、はーいはい・・・」

とういうことで、にとりが怖がるほどの広大なデッドスペース（？）と、あの窓のようなものから見える外の景色が、実際の広さ以上の解放感を生み出していた。

二人のやりとりを傍から見ていた永琳に、文が話しかける。
「でもここって、一体どういう場所なんでしょう・・・」
オルファンの最深部に来ることができたのはいいが、結局ここも、見た目が特異なだけで、面白そうなものはあまりないように見える。

しかし、周囲を見回した永琳は、あるものを発見し、それを指さしながら文に返した。
「あれを」
「ん？」
永琳の指さす方を向いた文の眼には、大きな黒色の板のようなものが見えた。
これまで、オルファンの体内はスリットウェハーによる積層構造をしており、それが複雑な様相を見せていたのだが、この黒い板は、光沢すら感じられるほど、滑らかなで単純な表面をしている。
それはまるで、外の世界から流れ着いてくる電化製品にある電光板、いわゆるモニターに見えなくもなかった。
いや、実際そうなのかもしれない。

永琳が改めて言う。
「ブレンの胎内のスリットウェハーにも、確か似たようなものがあった。外の景色を映し出すのと同時に、時には黒い画面にいくつかの言葉を浮かび上がらせることもある・・・そうやって、意志の疎通を図る」
「じゃあ、あれも・・・」
「おそらくそうでしょう」
「ってことは・・・」

ここには何もないと思っていたが、そんなことはまったくなかった。むしろ、これまでの調査が全て、いい意味で無駄になる可能性さえあった。
あの黒い板が、こちらに全ての真実を教えてくれる可能性があったからだ。

早速その黒い板の方へと駆け寄る永琳と文。
近くに寄ってみて分かったが、この板のすぐ下に、永琳の腹ぐらいの高さの四角い物体があった。
それもまた、生物的な印象をあまり感じさせない、均整な形と表面をしていた。
色彩自体は、足場に張り巡らされているスリットウェハーと同じ、黄土色っぽい色合いをしていたが。
立方の上面はかなり傾き、斜めを向いていた。
なぜそうなっているのかは、永琳がその構造物のすぐ傍まで近づくことで分かった。
上面が、ちょうど永琳が見た時に正面を向いているように見える。
そうなるように傾いていたのだ。

そうして永琳は、おあつらえ向きに見やすくなっているその構造物の表面を、右手のひらでなぞってみた。
その時の、何かの鼓動が全身に伝わるような奇妙な感覚が、永琳にある確信をもたらす。
彼女は、文の方に振り返りながら、こう言った。

「これが、あの表示板を動かす装置のようなものかもしれない・・・・・というか、こちらからオルファンに呼びかけるための・・・・」
「そうですか・・・」

永琳の中の確信は、これだけではない。
彼女の中にあったある考えが、間違いないというもう一つの確信があった。
それは文やにとりにも・・・言いだしっぺであることを考えれば早苗にもあった考えであった。

「オルファンは、私達人妖がここに来ることを、最初から想定していたんだわ・・・・・あるいは、この幻想郷に現れてから私達の生態に合わせて、この場所の構造を変化させた・・・」
それには文が、賛同しようと考えつつも、疑問を口にする。
「前者にしろ後者にしろ・・・そんなことが生き物にできるんですか？」
「・・・分かっている通り、ブレンパワードは他の生物と共存することで生きている・・・となれば、オルファンだってそうでしょう。なら、その共存する生物に合わせて性質を変えることだって、出来なくはないはず・・・」
「・・・かも、しれませんねぇ・・・」

遅れて、永琳達の傍に歩み寄ってきたにとりと早苗が、呼びかけてくる。
「なんなんです？これ」
「テレビか何かですかぁ、すごい大きい・・・パブリックビューイングってヤツ？」
その声に、永琳が応える。
「これを使って、オルファンと会話することが可能かもしれないわ」

「えぇっ？そりゃ大収穫ですねぇ～！」と、にとりが大きな声で応える。
それに続いて早苗が、わくわくした顔で、
「じゃ、早速やってみてくださいよっ」と催促してくる。

「・・・・・・」
調子がいいものだが、永琳としては、言われずともそうするつもりだった。
眼の前にあるこの操作盤らしきものを動かして、オルファンの意思を呼び起こしてみる。
もちろん、古今初めて眼にするようなものだ。
すぐにひょいと動かせるものではないかもしれないが、試行錯誤しながら、どうにかしてみよう。
そう考え、眼の前にあるこの滑らかな箱のようなものを、思い思いに触れてみる永琳。
すぐに動かせるものではないと分かっていたが、一時間以上、いや、二時間近く試行錯誤（暗中模索と言った方がいいかもしれない）しても、眼の前の黒い表示板がウンともスンとも応えないのでは、早苗達のわくわくはすっかり消え失せ、さすがの永琳も冷や汗を流して焦るものだった。
早苗が、もう何度目か、
「まぁだですかぁ～～・・・」とぼやくのを聞いた永琳は、眼の前の黄土色の表面をベタベタ触ることをやめ、大きなため息をひとつはいてから、後ろを振り返り、肩をすくめて苦笑いしながら応えた。
「だめだこりゃ」
完全にお手上げといった様子の永琳に、早苗が不満そうに、
「えぇ～～・・・」と吐き捨てた。
続けて、永琳目掛けて辛辣な言葉を並べたてる。

「貴方って賢くてすごいお方なんでしょぉ～？なのにこんなものも動かせないなんて・・・なんか、メッキが剥げてきたってヤツ？これじゃ貴方、ただのおばさんじゃないですかぁ～・・・」
「あぁもっ・・・喧(やかま)しいわねぇ。そんなに言うなら貴方がやってみなさい、できるのっ？できないでしょっ」
「お断りしますぅ～、できないですぅ～」
「そうでしょ・・・なら文句言わないっ」
「はぁい」

不満げな表情のままの早苗に続いて文の方が、彼女よりかはずっと淑女的なことを言ってくる。
「でも、あんだけいろんなことをやって何の変化も無しっていうのは、なんか変ですよね」
「ん・・・根本的な部分で、何かが間違っているのかもしれないわ・・・まずはそれが何なのかを分からないと」
「どうします？今のところは、オルファンと対話するのは諦めますか？」
「・・・そうするしかなさそうねぇ・・・一応最深部に来れたし、こういうものがあることも分かった。ここに来る道筋も分かったし。また後で私がひとりでいろいろ試してみるわ」
それににとりが続く。
「じゃぁ、戻りましょうか・・・大分時間が経って、魔理沙達も待ってるだろうし」
「そうね。それに、本当はもっと優先すべきことがあったのだから」
永琳のその言葉に、文が続く。
「あのいくつもの円盤ですね？」
「そうよ・・・戻りましょう」

永琳達はひとまず、この黒い表示板のことは置いておいて、最深部から出て来た道を引き返して、ブレンの下へと戻ることにした。

オルファンの調査については、今回だけで全てこなせるわけがないというのは分かり切っていた。
それでも、オルファンの生態を知る手掛かりになり得るものが発見できただけでも、収穫は大きい。
後は時間をかけて、核心的な部分に触れていけばいいだけだ。

それよりもまずは、眼の前にある事態に対応することが先だ。
先程、オルファンから抜け出して幻想郷の各地に飛んでいった二、三十の円盤（プレート）。
あれが全てそのままブレンパワードを生み出したとすれば、より多くの人妖がブレンと出逢うことになる。
それに、それらのブレンがグランチャーと出逢ってしまえば・・・

どうやら、オルファンが出現してから発生したこの異変は、いよいよもって異変として本格的に始動してしまったようだ。
これからやるべきことは、少なくはない。

ブレンと共に待つ輝夜達の下へと戻ってきた永琳達は、すぐさまブレンをオルファンの外へと出して、外部の調査を行っているさとり達と、すでに調査を終え外に出ている魔理沙達と合流し、地底へと戻ることにした。

※

地霊殿に戻ってすぐ、一同は再び客間に集まって話し合いを始めていた。
オルファンから外へと放たれたプレート（永琳が《オーガニックプレート》と名付けた）をどうするかというのを決めるためだ。
永琳達が調査の末に辿りついたオルファンの最深部の話もしていたが、この状況では、残念ながらそれは二の次になっていた。
永琳に命じられ、さとり達がオルファンの周囲で発生している植物の一部を採取してきたのだが、その調査も後になるだろう。

にとりが言う。
「オーガニックプレートっていうのは、どれくらいの時間があればブレンを生み出すのかなぁ？」
それには、魔理沙が応えて、輝夜が続く。
「あたしが見た時は、家の前で動きを止めてからすぐにブレンを生んだぜ」
「私の時もそうだったわ」
妹紅は何も言わなかったが、彼女の場合もそうだった。
そして、さとりにしてもそうだ。
彼女が言う。
「私の時もそうでした．．．っていうことはブレンは、周りに人妖がいれば、すぐに生み出されるものなのでしょうか．．．オーガニックエナジーに反応するとかして．．．」
それには魔理沙が返した。
「でも、あたしが戦ったグランチャーは無人だった。多分誰もいないところで生まれたんだと思うぜ」
にとりが続く。
「じゃ、アンチボディが好きな時に好きなように生まれるって考えることにするかい？今の内はさ．．．大事なことは別にあるもんね」
にとりの言う大事なこととというのが何なのかは、皆大体分かってい

た。

なんであろうと、オーガニックプレートが幻想郷の各地に飛来すれば、そこからアンチボディが発生するはずである。

そしてアンチボディは、胎内に別の生物を宿さなければ、どれくらいの時間でかは分からないが、死に至る。

そうならないためには、誰かがアンチボディに乗りこめばいいのだが、今はまだ、幻想郷にいる者の多くはアンチボディのことなど知る由もない。

プレートから生み出されるブレンと出逢うことができるかも分からないし、ちゃんとブレンに乗りこんでくれるかも分からなかった。

人間の前に現れた場合などは、恐れられて、逃げだされるかもしれない。

オルファンは何らかの目的があってプレートを外に吐き出したはずだ。

その目的を果たすためには、まずプレートから生み出されるブレンが生きている必要があるのは間違いないことだろう。

永琳が言う。

「まずは、幻想郷の人妖に、広くアンチボディについて理解してもらう必要があるわね」

それを聞いて、椅子に座りこんでいたのを突然すくっと立ち上がったのは、文とはたてだ。

彼女らの大きな声が客間に響く。

「広く知ってもらうということにおいて、何よりも役に立つのはぁっ？」

「そう、私達ですね！」

今回ばかりは、彼女らの言う通りだった。

さとりの方が、二人に応える。

「そうですね・・・新聞ほど、事実を幅広い範囲で伝えられるものはございません・・・」

が、それに続いて、魔理沙の方が言う。

「でもいいのか？あんたらは極秘任務だとかでオルファンとブレンを調べてるんだろ？事実は知られない方がいいんじゃないか？」

その言葉に対する文の返事はすぐだった。

「これは異変なんだから、どの道大衆に知ってもらうつもりではいました。しかも、こういう事態になったんなら、嫌が応にもアンチボディの存在は人々に知られます。どうせ知られるなら、いいように知られた方がいいでしょ・・・もちろん、天魔様への許可は頂く必要はありますけどね」

すでに二人の頭の中は、オルファンとアンチボディの存在を伝えるための記事の制作に没入しつつあった。

となれば、はたてが、

「そういうわけなんで、早速記事の内容を考えてきましょう・・・今回は、花果子念報と文々。新聞の共同制作です。足引っ張んなよ～文」と言い、それに文が、

「こういう真面目な場面で私が足を引っ張ると考える辺り、あんたの心も狭いわねぇ～・・・・・その辺にある部屋を借りますけどいいですねぇ」と口ごたえしつつ聞いてくる文が、客間を後にしてどこかへと去っていくのには、何も言わなかった。

どうせ嫌だと言っても、向こうは勝手にそこら辺の部屋を占拠するだろうし、だったら別に向こうの問いに応える必要はないのだ。

ひとまず今のところは、彼女らの記事に任せて、幻想郷の人々がオルファンとアンチボディの存在を知り、その上でいいように行動してくれることを祈るばかりだ。

オルファンの調査も終わり、そうしてこんな話し合いもしていると、いつの間にやら夜も更けてくるという時間になりつつあった。
別に、夜になったからといって地底の様子に変化はないし、妖怪の生活も変わらない。むしろ妖怪は夜にこそ活性化するものだ。
が、オルファンの行動に対する対処も一応は決まった今、これ以上やるべきことはあまりなかった。
なので、仕方がないから、ヤマメ達は一旦屋敷から帰ることにした。

別れの挨拶混じりに、
「いろいろ大変なことになってきたけど・・・まぁ、のんびりいこうよ」
「その内になんとかなるだろうしね」
「こういう場面では、妬みを持つのはよくないわ」
などと言う声を聞き、客間を出て帰っていく彼女らを玄関まで見送ると、魔理沙やにとりも、自分に割り当てられた部屋へと去っていった。
輝夜も、すっかり疲れた様子で、
「ここに来てすぐだってのに。いろんなことが起こり過ぎて、まいっちゃうわ～・・・寝よ」などと言いながら、部屋に戻っていく。

妹紅と慧音は、気がついた時にはどこかへと姿を消していた。
勝手に適当な部屋を探して、そこに居つくつもりだろう。

随分と不遜なものだが、まぁ、仕方がないか・・・
そう考えながら、部屋に戻っていく者達の背中をひとりひとり眼で追っていたさとりは、未だ自分の傍にくっつてきている永琳と早苗のことが気になった。

「あの・・・」と彼女が語りかけると、永琳が、さとりの聞こうと

する声も遮って、こんな言葉を投げかけてくる。
「さとりさん・・・貴方、オルファンのことどう思う?」
「え?」
「貴方は初め、オルファンの呼ぶような声を聞いたそうじゃない・・・それは、今回の調査の時も聞こえたのかしら?」
「・・・いえ、聞こえませんでした・・・ただ、各地に散らばっていったあのプレート・・・あれが、オルファンの意志であるということは、はっきりと分かりました。でも、そんなこと、誰にでも分かることですよね・・・」
「それで・・・どう思うの?」
「どう思うって・・・・・・悪い人ではないと思います」

その応えに、永琳はしばらく黙りこんでいたが、それも決して長い間ではなかった。
永琳は続けざまに、こう切り出す。
「さとりさん。今から、もう一度オルファンの調査に行きましょう・・・彼の者の最深部に入って、私が話していたあの装置を、今度こそ作動させるの」
「・・・それは、そうするべきですけど・・・どうして私をお誘いするのですか?」
「もしかしたら、貴方が必要であるかもしれないのよ。詳しいことは分からないけど、貴方がいてこそ、オルファンの意思を呼び出すことができるかもしれない」
「・・・・・・だから貴方は、ずっとここに残っていらしたんですね・・・」
「そういうことね・・・こっちのお嬢さんは知らないけどね・・・・・・まさか、私がこう切り出すことを承知で、一緒に残っていたわけでもないでしょう」
かく言う永琳にチラリと一瞥された早苗が、胸を張って、得意げに応えた。

「そのまさかですよっ」
「・・・・・」
早苗のこのいかにもな発言が、嘘だと分かり切っていながらも、彼女の顔がまったく嘘をついているように見えないものだから、永琳は、
「それこそ、まさか・・・」などと呟きながら、苦笑して見せた。
そんな永琳に、早苗は続けざま、
「一緒についていきます。駄目だと言ってもいきますからねっ」と言う。

こう言われては永琳も、
「勝手になさい」と応えるしかない。
そうして次いでさとりに対して聞く。
「どうする？もう夜も更けて来ましたけど、さっそく行きますか？」
「はい・・・文さんとはたてさんが記事を考えてくださってますし、私達の知らない事実があるというのなら、それを早く知って、彼女達に教えて差し上げないと」
それを聞いた早苗が、元気よく、
「なら早速、いこいこ出発～っ♪」などと意気込んだ、その瞬間だった。

さとりは改まって、
「ちょっと待ってください」と呼びとめる。
「なんです？」
「なに？」
早苗だけでなく、永琳にも聞き返されたさとりは、ある大事なことを思い出し、それを二人に話していた。
「その前に、輝夜様のブレンの身体を洗ってあげる約束でした・・・」
「あ・・・」

「もう他のみんなは眠ってしまったし・・・どうしましょう・・・すっかり忘れてしまっていました・・・」

申し訳なさそうな表情のさとりに、永琳が、仕方ないという表情を浮かべて応えた。

「私達三人でやりましょう。約束は守ってあげないとね・・・・・・早苗さん、調査に同行するなら、貴方も付き合いなさい」

「わっかりましたーっ」

そうしてさとり達は、地上にはすっかり月も昇り始めてきたという時分から、カグヤブレンとの約束を果たそうと、中庭へと出ていった。

そうして、オルファンと彼女は、それをじっと待つ。

第八話『エボリューション』　その1

文とはたては、地霊殿の一室に篭り、夜を徹して記事を仕上げるつもりだった。
とはいえ、新聞というのは要するに事実だけをつらつらと並べ立てればそれだけで成立するし、それが正しい新聞のあり方であるわけだから、今回の異変にしたって、決して書きあげるのに苦労するようなものではないはずだった。
とはいえ、今回はその事実を連ねるということに関して、簡単ではなかった。
なんせ、正体も分からないオルファンとアンチボディだ。
自分達の中で分かっていることを改めて並べて、そこから大衆に伝えるべき内容を吟味して新聞としての体裁を成すというのは、徹夜してもできるかどうか、というものだった。
それに、事実を正確に偏見なく書きあげるためには、文達はブレンパワードと深く関わりすぎていた。
ブレンとは別のもう一体のアンチボディ、グランチャーについての考え方が、どうしても『事実を正確に・・・』というものに当てはまらないものになっていた。

だがそんなとき、二人には頼るべき者がひとりだけいた。
いっそ一緒に部屋に連れ込んでおけばよかったと考えたその時、その当人が招かれるように部屋へと入ってきた。
妹紅だ。

扉の開く音を聞き、そのまま部屋へと入ってくる妹紅の方に二人は振り返り、文がこう呼びかけた。
「どうなさったんです？」
それに妹紅が、ぶっきらぼうな口調で応える。
「新聞の記事を作ってるんだろ？」
「はい」
「グランチャーのことも書くんだな」
「そりゃ、勿論ね」
「どういう風に書くんだ．．．概ね、お前等のことだ、ブレンパワードの敵であり、撃破するべき対象。見つけても乗ってはいけません．．．ってか？」
冷やかすように、薄ら笑いを浮かべて言う妹紅に、文は大きく肩をすくめてから、応えた。

「妹紅さんは、私達のことをなぁんにも分かっていないんですねぇ～．．．私を誰だと思っています？清く正しい射命丸ですよ？そして、清く正しいのは私ひとりではありません。天狗の新聞は、ひとつの例外もなく、事実を正確に伝えるものなのです」
それを聞いた妹紅が、憤りのようなものを浮かべて、言い返す。
「信じられんな．．．そういう台詞ですら嘘なんだから．．．」
そう言いながら、乱暴な足取りで、椅子に座っていた文の方に歩み寄っていく。
そのまま彼女に掴みかからんとする勢いであったし、多分妹紅としては実際そうするつもりだったのだろう。
だから彼女は、文のすぐ傍に歩み寄った瞬間、突然椅子からすくっと立ち上がった彼女の姿に、驚いた。
そうして、風が吹けば煽られそうな、飄々としたいつもの態度とは

違う表情を浮かべた彼女の声がすぐ近くで響いた。

「ですから、ずっと貴方を呼ぼうと思ってえいたのです・・・ブレンだけでなく、グランチャーのことも正確に伝えるためには、貴方の協力が必要です・・・・・・よく来て下さいました・・・」

「・・・・・・・・・」

文の言葉に、しばらく呆然としていた妹紅だが、すっと差し出された文の右手を見て、その手を握り返さないほど、礼儀を知らないというわけでもなかった。

※

さとりと永琳と早苗の三人で、じっくりと時間をかけてカグヤブレンの身体を洗ってやった。

終わるころには、もう後三、四時間で夜も明けるという頃合いになっていたが、ブレンが非常に喜んでくれていたし、遅ればせながら約束を守ってくれたことで、さとり達をよく信頼してくれたようだ。

今日・・・いや、もう昨日になったか？とにかくまだこの地霊殿に来てすぐだったカグヤブレンとも、すぐに仲良くなれそうだ。

そうしてさとり達は、サトリブレンに乗り、再びオルファンへと赴くことにした。

さとりがブレンの胎内へと入る。

早苗と永琳は、今回はブレンの手のひらには乗らず、自分達で飛ん

でついてくるようだ。

スリットウェハーの壁面に手をつきながら、さとりはブレンに囁く。
「もう一度、オルファンのところに行きます・・・今度こそ、あの方の声を聞いてみたい・・・・・・ブレン、行きましょう」
さとりに応え、座りこんでいたブレンがゆっくりと立ち上がっていく。
そんな中さとりは、マリサブレンとカグヤブレンにも挨拶をした。
「マリサブレン、カグヤブレン・・・もし私達が夜明けの後も帰ってこなかったら、他の人達に伝えておいてください・・・多分、そんなことはないと思いますけどね」

それだけ伝え終わると、サトリブレンは中庭から飛び上がり、地上へと向かうべく旧都の上空を直立したまま滑空した。

そのまま旧都を抜け、地上への抜け穴も出て、再び地上へと出る。
さとりの眼には再び、満天の夜空。そこを埋め尽くす光の群れが見えた。

そのスペクタクルを見上げていたさとりは、続いて目線を正面へと向けて、遠くに見えるオルファンの姿を網膜に映した。
星と月の明かりに照らされているだけなのに、それよりもさらに色鮮やかに輝いているように見える。
ブレンがその方へと真っ直ぐに進み、黄金の巨体が段々と大きくなっていくにつれ、さとりは、自分達がひとつの星の傍にまで来ているような錯覚さえ感じた。

もちろん、それはただの錯覚である。
夜空に浮かぶ星の傍に寄った時には、さとりの身体など跡形もなく蒸発するだろう。それぐらいのことはさとりにだって分かっていた。だけども・・・

さとりは、眼前に見える黄金に輝くオルファンをじっと見つめながら、考えた。

あれは確かに、意思を持っている。
そうして自分達はこれから、その意思と語り合いにいくのだ。

そんなことを脳裏に呟いている内に、いつの間にかさとりは、ブレンが開け放っていた装甲の上へと身を乗り出していた。
ブレンが、当たり前のように胎内を覆っていた装甲をスライドさせ、さとりもまた当然のように、スリットウェハーの穴を出て装甲の上へと立っていた。

すぐさまさとりの傍へと飛んできた永琳の、不思議そうな声が聞こえてくる。
「どうなさったの？」
その声を聞いた時、さとりは自分が何故こんなことをしたのかという理由も、自分自身よく分かっていることに気がついた。
そうしてさとりは、不思議がる永琳にこう返す。

「・・・オルファンと語り合うためには、まずはこちらから呼びかけなければいけないでしょう？・・・一方的に押しかけるような真似をしては・・・」
それを聞いた永琳は、一瞬だけはっとして、その次には、小さな笑みを浮かべていた。
そこには、僅かながらに自嘲の念も含まれていたように見えたが、

さとりには関係ない。
「少し離れていてください・・・お声もかけて下さらないよう・・・」
そう呼びかけ、それを聞き入れた永琳がブレンから離れていく中で、さとりはもう一度、オルファンに対して正面を向いた。
そうして、ゆっくりと両腕を左右に広げる。
吹き抜ける風が身体に満遍なく辺り、重いものが圧し掛かってくるような感覚が来る。
それと一緒に、オルファンの発する意思の波も受け止めようとしていた。
そうしてブレンも、さとりと同じように両腕を広げる。

さとりは頭の中で、オルファンに向けて語りかけた。

――オルファンさん・・・・・・今から私達がまた、そちらに赴きます・・・・・・私の声が聞こえているのかは分かりませんが、もし聞こえているのなら。返事をしてください・・・今すぐでなくとも構いません・・・――

返事は来ない。
が、さとりの方から、返事は今でなくていいと言ったのだ。
構わずに彼女は続けた。

――私達は、貴方のやろうとしていることを知りたいのです・・・そうして、それを手伝いたい・・・・・・ビープレートというものがあるのでしょう?それを一緒に、探して差し上げます・・・・・・貴方は私達のことを、どう思っているのですか?初めて見るような者達だから、不安なのですか?・・・大丈夫ですよ・・・・・・大丈夫ですから・・・だから・・・・・・――

その時だった。
さとりは、自分の言葉に応えるような声を聞いた。
しかしそれは、オルファンやブレンの発する心に語りかけるような声ではない。
空気を震わせ、それが鼓膜へと伝わる、実際に音として聞こえる声だ。
それが、すぐ眼の前で発せられるのが聞こえた。

「・・・そう。それでいいんじゃないかしら？」

吐き捨てられる息のような、温かい空気が顔に当たった。
慌てて眼を見開いたさとりは、まさしく眼と鼻の先ほどに近づいたその顔に、身震いするほどに驚いた。
「あぁっ！？」
左右の開いた手を一瞬で縮めて、思わず後ずさりしようとした拍子につまづいて、後ろ向きに倒れそうになる。
しかし、左肩と右腕を掴まれ身体を支えられ、再び前へと引き寄せられることで、なんとかそうならずには済んだ。
その代わり、眼の前に見えたその顔が、ますます近くに寄ってきてしまっていた。
引き寄せられる勢いのまま抱きつかれるように彼女と身体が密着したものだから、本当に鼻先が当たってしまいそうになっていた。

ここでさとりは、眼の前のこの顔に、はっきりと見覚えがあるのを思い出した。
そう、彼女は・・・

「貴方・・・八雲・・・・・・・」

さとりに声に続いて、永琳と早苗の、
「どうしたの、さとりさんっ？」
「何者ですかーっ！」
という声が響く。
瞬間、眼の前の顔・・・八雲　紫は、「くす・・・っ」と、微かな笑みを浮かべると、ただ一言、さとりの耳元に唇を寄せて、囁いた。

「一方的に知ろうとすれば、何も分からない・・・・・・こちらからまず教えて、そうして、相手から教わろうとする・・・その心があれば、知ろうとするもの以上のことを、知ることができる・・・それが分かっているなら・・・」

そして、肩に寄せた手を背中に回して、軽くぽんぽんと叩くと、一瞬の内に、紫の身体の感触が消え失せた。
彼女は、さとりから離れると、みるみる内に空の中へと遠ざかっていって、気がついた時にはその姿を見ることができなくなっていた。

早苗が、「あれぇ？」と素っ頓狂な声をあげるのが聞こえる。
それに続いて、再びさとりの傍に飛んできた永琳が呼びかけてくる。
ついでに、早苗も一緒にさとりに近づいてきた。
「あれは一体・・・？」
それにさとりは、ぼんやりとした表情で応えた。
「・・・あれ、八雲　紫でした」
「紫って確か・・・」
「あぁー！あのっ？」
永琳も早苗も、紫の名は知っている。

永琳としては、彼女とは一度ならず二度も三度も敵同士になったこ

とがあり、ただならぬ因縁を持っていた。
早苗も勿論知っている。なんせ、神奈子と諏訪子にオルファンとブレンのことを教えたのが彼女なのだから。
そんな妖怪が、さとりの前に現れ、そしてすぐに姿を消した。

初めてブレンと出逢った時と同じだ。
何かを伝えて、そしてすぐに去っていく。
しかしさとりは、ただそれだけのことが、とても重要なことであろうように思えていた。
そうしてさとりには、彼女の声が、オルファンが呼びかけてくるあの声と、同じものであるように思えて仕方がなかった。
実際は、何もかも違うはずなのに・・・

紫の出現にはブレンの方も驚いていたようだったが、彼女が去ると共に気を取り直して、前進を続けていた。
さらにオルファンに接近していく。
今回は、内部の調査はほとんどせず、直接オルファンの最深部へと直行するつもりだった。
なので、可能な限り最深部が近いところから進入するべく、オルファンの上部にあった大きな溝から中へと入る。
サトリブレンにも、そして永琳にも、すでに内部の状態はある程度分かっている。
体内に入ってからは、迷いなくブレンは進んだ。

そうしてしばらくして、何本目かの通路をある程度進んだところで、ブレンがその動きを止めた。
すでに、カグヤブレンが通ったのと同じ通路に差し掛かっていた。
そしてカグヤブレンの時と同じで、これ以上奥に進むことができないから止まったようだ。
さとり達は一旦ブレンから離れて、自分達だけで最深部へと進むことにした。

永琳達が一度上った、生物の体内としてはあり得ないものである、数百段の階段を上って、上へ上へと進んでいく。
そうして、五分もしない内に彼女らは、広い空間へと出た。
オルファンの最深部だ。

例え真夜中であっても空間にはある程度の明かりを感じられ、いくつもの巨大な長方形の窓からは、夜空に浮かぶ無数の光がはっきりと見えた。
その姿は、神秘的だと思えるだけのものではあった。
いや、実際神秘的だ、どこまでも。
月明かりに照らされ、スリットウェハーの地面が金色に近い色彩の淡い光を放っているのを見れば、自分がこの世から解脱して涅槃に至っているとも感じさせた。

「・・・ここが、永琳さん達が見つけた・・・」
驚嘆を漏らして周囲を見回すさとりに、永琳が応える。
「そうよ・・・で、あれを動かして欲しいの」
そうして、永琳が指差した方に眼を向けると、真黒な色をした巨大な黒い板と、その直下に、上面が傾いた四角形の物体が見えた。
あれで、オルファンの意思を読み取るということか・・・

早速さとりは、その四角い物体の方へと歩み寄っていく。その後ろ

を、永琳達がついて歩いた。
さとりがその眼の前に立ち止った時、永琳が、
「私が動かした時は、うんともすんとも反応しなかった・・・今のところは、あなたを頼りにするしかないわ」と、わざわざ不安にさせるような台詞を言ってくるが、さとりはそれを聞き流した。
大事なのは、オルファンの意思を呼び出すことではない。
オルファンと互いの意思を疎通することを確かめることだ。
さとりには、オルファンはこちらの呼ぶ声を聞いてくれればしっかり返事してくれる者だという確信があった。
だから今見つけるべきは、オルファンの声を聞く方法ではなく、こちらの意思を伝える方法であるはずだ。

さとりは、眼の前にある構造物の上面に手のひらをついて、微かに呟いた。
「今来ましたよ、オルファンさん・・・・・・先程の声がもし聞こえていたのなら・・・貴方の声も、私達に・・・・・・」

返事は来ない。
「オルファンさん・・・」
もう一度呼びかけたが、真黒な表示板には何の反応もないし、さとりの心に返ってくる声もない。
後ろで永琳が、小さなため息をつくのが聞こえた。
早苗のため息などは、もっと大きく、露骨なものだった。

が、さとりにはすでに、そういう者達のことは、存在から忘れられていた。
さとりは何故だか、小さな笑みを浮かべ、四角い構造物から数歩後ずさりしたところで、あぐらをかいて座りこんだ。

そうして、笑顔のままで、どことも言えない所を見つめながら、語

りかけるように言った。
「オルファンさん・・・貴方、どこから来たのですか?きっと、この幻想郷に昔からいたわけじゃないのですよね・・・今、寂しいんでしょう?貴方がもといた場所には多分、貴方の友達がいたんですよね・・・友達じゃないにしても、自分とそっくりな何かが・・・それに、貴方にもやりたいことがたくさんあったろうし、身体だって、今よりもずっと元気だったんでしょう?」

「なにぃこの妖怪?」という早苗の声を永琳が、
「静かに」と制する。

「・・・でも今は、そんな自分の友達もいなくなって、身体も傷ついて、元気じゃなくなって、何もできなくなってしまった・・・頼れるのは、ブレンだけ。でも、ブレンは貴方という身体を守る抗体でしかない・・・だから、友達にはなれないんじゃないでしょうか・・・・・貴方が寂しいと思う気持ち、分かりますよ・・・私だって、長い間孤独でしたからね・・・・・・信じてください。友達がいないなら、私が・・・私達が、貴方の・・・・・・」

さとりが、続く言葉を言いかけた、その時だった。
今まで沈黙を続けていた真黒な板に、突然無数の光が流れるように現れ、板の端から端まで流れるとその場で消えていった。
あらゆる色彩に彩られた奇妙な形の光の群れが、黒い画面の中を飛び交っていく。
時には真っ直ぐに画面を横切ったり、あるいは蛇行したり、突然現れたと思うと、ゆっくりと薄まりながら消えていったり・・・とにかくいろいろな動きをしていた。

「・・・・・・っ」
息を呑むさとりの後ろで、早苗が叫ぶ。
「や・・・やったのー！？」
それを余所に永琳は、画面を流れる無数の光のひとつひとつが、何かの形を成していることを見逃さなかった。
うわ言のような彼女の声が聞こえる。
「ローマ字に、古代ギリシアの文字に・・・大陸から伝わってきた漢字に・・・・・・なじみ深い平仮名まであるわね・・・・・・やっぱりだわ・・・」
「・・・・・・」
永琳の声を傍から聞くさとりは、彼女の言う『やっぱり』という表現が、どういう意味かということが分かっていた。

やはりオルファンは、自分達妖怪、あるいは人間に対して意思の疎通を図る方法を身につけているということだ。
そして今、その方法を用いて、こちらとの対話を望んでいる。
さとりの言葉が、オルファンに伝わった。

永琳が、さとりに代わってオルファンに呼びかける。
「オルファン・・・私達の質問に、応えて頂けるかしら・・・」
その言葉に続いて、さとり達の眼前の黒い画面は、無数の光の文字を錯綜させることをやめ、あるひとつの言葉を浮かび上がらせた。

『いいだろう』

その言葉を眼に入れ、永琳は続けざまに問う。
「貴方は一体どこから来たの？」
その声に、再びオルファンは応える。

『一分からない《Ｉ　ｄｏｎ'ｔ　ｓｅｅ》』

「ブレンパワードというのは何者なの？グランチャーとは・・・」

『ブレンパワードは抗体・・・グランチャーとはブレンパワードと相反するもの』

オルファンのこの応えに、さとりが衝き動かされたように問う。

「相反するとは・・・っ？」

『相反する・・・ただそれだけ・・・』

「それだけって・・・」

永琳が再び問う。

彼女自身が、もっとも聞きたがっていた質問だ。

「貴方はこれから、何をしようというの？」

『銀河へと飛び立ち、いるべき場所に帰る』

「銀河・・・っ？」

永琳は思わずおうむ返しをした。

そうして、さらに問いただす声を発する。

「銀河・・・つまり宇宙が、貴方の本来いるべき場所だと・・・そこに帰るのが貴方の目的だと・・・」

『その（？的？）通り』

その応えに早苗が、興奮した様子の声を発する。

「すごいじゃないですか、オルファンさん！貴方は、銀河を旅行するお船だったんですねっ？」

『そう』

が、永琳があくまでも冷静に、質問を続ける。
「しかし、今の貴方にそうするだけのオーガニックエナジーがあるの？」

『ありはしない』

「なら・・・一体どうやって・・・」
そう問うた永琳の言葉には、何かに気がついたらしいさとりが応えた。

「もしかして・・・そのためのビープレートですか？」
それを聞いたオルファンが、こう返す。

『賢いね』
「え？・・・いえ・・・」

オルファンは、銀河を旅する船だった。
そうして、その役割を果たすために、この幻想郷から飛び立ち、銀河の海の中へと戻ろうとしている。
いつぞや、さとりの頭の中でぼんやりと浮かび上がっていたことがまさか真実だとは、当人は思わなかった。

だがオルファンが銀河に飛び立つためには、おそらく膨大な量のオーガニックエナジーが必要となるだろう。
これほどの巨体が、重力に逆らい空に跳び、大気の層を振り切って宇宙に上がるのだ。
オーガニックエナジーがそのまま運動に関わるとして、その量は半端なものにはならないだろう。
そして、その大量のオーガニックエナジーの源となるのが、ビープ

レートなのではないか？

あくまでも憶測だが、ビープレートとは、無限のオーガニックエナジーを生み出すものではないだろうか・・・

いや、さとりの言葉にオルファンが応えている以上、その確率がかなり高い。

が、しかし、一番肝心なことがまだ分かっていなかった。

永琳が問う。

「そのビープレートとは、一体何なの？」

『分からない』

「分からないものを見つけるなどと・・・・・・じゃぁ、もしビープレートが見つからなかった時、貴方は一体どうするつもりなの？」

核心をつこうとするその永琳の問いに対するオルファンの応えは、彼女が想定する中で、最悪のものだった。

『この地のオーガニックエナジーで補うまで』

「えっ」

「どぉいう意味？」

さとりと早苗の発する疑問詞を聞きながら、永琳はその眼を大きく見開いて驚愕した。

そして、オルファンのこの応えの重大さに遅れて気がついたさとりが、慌てて聞き返す。

「待ってください・・・貴方が銀河旅行を始めるために必要なエネルギーなんですよ・・・？一体どれほどの生き物から、どれほどのオーガニックエナジーを吸い取ろうというんです？」

『ビープレートの代用となるだけのオーガニックエナジーなど、どれほど吸い取っても足らない。全部吸い取る』

「全部・・・・・・っ」

さとりは言葉を失った。

早苗がしばらく、どういうことだろうかと考えを巡らせていたが、最終的に結論に到達したのか、

「え・・・ええぇぇぇぇぇぇぇーーーーっ！？」

と、驚愕の極致といった具合の声を発した。

永琳は、彼女らしからぬ困惑しきった表情で、俯きながら片手で額を押さえていた。

戦慄がその場を駆け抜ける中で、オルファンの方から語りかける言葉が、真黒い画面の中に浮かび上がった。

『だから、見つけて。ビープレート』

その言葉を最後に、オルファンは再び沈黙を続けた。

※

地底なんぞに居ついてしまえば、今が朝なのか夜なのかも分からない。

部屋に篭りきって記事を作成したいた文とはたて、そしてそれに協力していた妹紅。

徹夜の甲斐もあって、幻想郷の大衆に事実を公平に伝えるには充分

な記事を作ることはできた。
ただ、大分頭を使って疲れが溜まってしまった。
妖怪と言えど、疲れる時は疲れる。
記事が完成すると同時に、二人はすぐさまベッドに飛び込んで、寝に入ってしまった。
妹紅も、ふらふらになりながら部屋を後にし、慧音が寝ている部屋へと戻っていく。
が、そのころにはもう、日も上り始めていた。

部屋自体が狭いためか、ベッドもひとつしかなかった。
この際だからやむをえず、そのベッドで二人寄り添って、すやすや寝息を立てながら寝ていた文とはたてだが、二、三時間も経たない内に、突然ドアを開いて呼んできた永琳の声に、飛び上がざるを得なくなった。
「文さん、はたてさん！」
「んわおっ！？」
「なぁんですかぁ～っ！？」

即座にベッドから跳び起きつつも、疲労も残っているし、僅かしか寝ていないため眠気もたっぷりなものだから、頭がどうかしてしまったような顔つきでふらふらしている二人。
それを見ながら永琳は、もう少しタイミングをずらしてから来るべきだったかと考えつつも、構わず切り出した。
「オルファンの目的が分かりました・・・彼の者はこの幻想郷を飛び立って、銀河旅行をするつもりです・・・・・・そして、そのためにもしかしたら、幻想郷のオーガニックエナジーが吸い尽くされるのかもしれないのです・・・・・・生き物が全滅するかもしれません・・・っ！」

それを聞いた瞬間、二人は相変わらずぼけーっとした顔を浮かべていたが、みるみるとその顔が青ざめていき、やがて、呆然とした顔で互いを見つめ合うと、右手で眼の前にある顔の頬を渾身の力でひっぱたいた。

「痛っ！・・・いっ・・・・・・・～～～～っ！」

「あひっ！・・・粘膜が切れた・・・・・いたたた・・・っ！」

ほっぺたをひっぱたかれたらそりゃ痛いのは当然だ。

が、これですっかり二人は眠気も吹っ飛び、本来の調子を取り戻したようだった。

だからこそ混乱が隠しきれない様子で、永琳を問いただす。

「銀河旅行ってっ？どういうことですか！」

「生き物が全滅するなんて、冗談じゃないんですよねぇっ？」

はたての焦燥した声に、永琳は、

「残念ながら」とだけ応える。

そうして、険しい表情で、こう続けた。

「またひとつ、やらねばならないことが増えたわ・・・・・・どうやら、記事の方は完成させてくれたようだけど・・・内容を追加する必要も出てきたようね・・・」

それを聞いて、最早うんざりすることすらできなくなった文が、こう聞く。

「そのことは、他の皆さんにも伝えてあるのですね？」

「・・・えぇ・・・おかげで、ちょっとした騒動よ」

「・・・でしょうねぇ」

「今はみんな、中庭の方に集まっているわ」

「・・・私達もいきましょうか」

ひとまず文達は、他の者達も集まっている中庭へと向かうことにした。

※

中庭では、ヤマメ達や、河童と勇儀を除けば、地霊殿の住人と居候がほぼ全て集まっていた。
そうして、ブレン達も相変わらず鎮座していたわけだが、互いの距離は大分離れていた。
少し前までは、いろいろな人妖がブレンの傍にべったりとくっついていたのが当たり前のようになっていたのだが、今や多くの者は、ブレンに近づくことができないでいた。

オルファンの目的を知り、そのために、幻想郷のオーガニックエナジーが吸い尽くされる可能性が出てくると、オルファンが生み出した抗体であるブレンパワードのことだって、恐れずにはいられなかった。
ブレンだって、生物のオーガニックエナジーを吸収することはできる。
もしかしたら、この場にいる人妖だけなら、すぐさま死に至らしめることだってできるかもしれないのだ。
そうなれば、どうしても近寄れなくなることも、仕方がないことであった。

が、しかし、そんな中でもひとり、ブレンのことを恐れない者がいた。
さとりだ。そして、彼女のペットと、妹であるこいしもだ。

彼女達は、皆の前に立って、オルファンもブレンも決して悪しき存在ではないと説得しようとしていた。
が、そんなことは、さとり以外の者だってみんな分かっているのである。
ただ、それでも事実として、オルファンは幻想郷の全てのオーガニックエナジーを吸収するかもしれないというのだ。
当事者であるオルファンがそう語っている。
そうである以上、魔理沙にしても、他の誰にしても、オルファンにまったく恐れを抱かないというのも無理な話だった。
むしろ一同の中には、今のうちにオルファンを破壊しておいた方がいいのではないかという考えすらあった。

それを代表して、にとりが言う。
「なぁさとり・・・やっぱり今の内に、オルファンもブレンも、みんなやっちゃった方がいいんじゃないのか？」
だがさとりは、頑なにそれを聞こうとはしなかった。
「駄目ですっ・・・ビープレートの存在を皆さんはお忘れですか？・・・あれがあれば、オルファンが必要とするオーガニックエナジーの全てを補うことができるはずなんです。そうすれば、私達の生命も失われずに済みます！」
そして、さとりほどいろいろなことを考えていないこいし達だが、彼女達もとにかく、ブレンのことは信じていた。
彼女達だって、さとりと同じぐらい、ブレンとは長く交流していた。
ブレンやオルファンが、自分達を殺してしまうかもしれないという事実を、信じられなかった。
それ以上に彼女らは、ブレンを信じているさとりのことを信じてい

た。
だからとにかく、さとりに言葉に、
「そうだよぉー！」
「みんにゃどうしたのさぁ～っ」
「怖がっちゃって、バッカみたいじゃない！」
と続く。

が、そんな彼女らの言葉に、慧音が返す。
彼女の言葉は、実に理に叶っていた。
「しかし、私達はそのビープレートが一体何なのか、どこにあるのかも知らないのですよ？もしかしたら、そもそもここにはないかもしれない・・・そんなものを、本当に発見できるとお思いですか？もし見つけられなかった時、私達は死ぬんです、それは疑いようのないことです・・・・・私としては、確証のないビープレートという存在よりも、確証のある存亡の危機の方を優先してしまう・・・彼らには可哀想だけど、どうしても、殺意だって湧いてしまうのです」
慧音は実際、オルファンやブレンに対し、申し訳ない気持ちを抱いていた。
が、それ以上に、自分の生命の方が大事だった。
仕方がないことだろう。批難することはできない。

だからこそ彼女の率直な言葉には理屈が通っており、さとりにははっきりとした反論を述べることができなかった。
存在しないものをオルファンが探せと言うはずがないが、オルファン自身ビープレートが何か分からない以上、そうとも言い切れない。
それに、仮にビープレートが確かに存在するといっても、それを見つけられるかどうかはまた別だった。
さとりはどうしても、ブレンと友達になったから、可哀想だからという、感情論でしか言い返すことができない。

「で・・・でも・・・・・・ですけど・・・」
俯き気味になって、聞こえないような小さな声で、言い返す言葉を絞りだそうとするさとり。

そんな中で、遅ればせながら、永琳達が中庭へと入ってきた。
ここまでくるとさとりは、類稀なる智慧を持っているらしい永琳にすがるしかなかった。

突然、
「永琳さん!貴方は、どうお思いなんですかっ?オルファンのことを!」と聞いてきたさとりの声に、永琳と、その隣にいた文達はびっくりした。
が、事態を察した永琳は、すぐさま落ちついた様子で、こう応える。
「申し訳ないけど・・・私個人からすれば、『ビープレートを見つけないとお前達を殺す』、なんていう相手の、言う通りにすることはできないわ」

要するに、最後にすがりついた相手も、さとり達の意思に賛同することはなかったということだ。
「・・・そんな・・・」
身体から力が抜けるような感覚に襲われ、微かな声を吐き捨てたさとりに、畳みかけるように永琳が言う。
「これも私個人の意見だけど、方法があるというのなら、早い内にオルファンもブレンも、どうにかしてしまった方がいいと思うわ・・・もしその確かな方法があるとすれば、この内の誰かがすぐに行動を起こしていたでしょうね・・・」
それを聞いたさとりが、さらに戦慄して、眼の前にいる者達を問いただす。
「・・・そうなんですか?・・・・・・み、皆さん、そうなんですかっ?」

一同が重苦しい表情をする中で、すっと手を上げる者がひとりいた。
魔理沙だ。

愕然とした表情で、
「貴方・・・」と呟くさとりの方に、上げた手を降ろしつつゆっくりと歩み寄りながら、魔理沙は言う。
「私のスペルカードは、パワーだぜ。しかも、私の持ってるミニ八卦炉も合わせれば、オルファンはともかく、ここにいるブレンぐらいなら、纏めてやっちゃうこともできる・・・・・実はずっと、そうしようと考えていた。オルファンが生き物のオーガニックエナジーを吸い取るっていうなら、ブレンだってもしかすると、ここにいるみんなの生命を吸って、殺してしまうかもしれないんだ」
そして口外に、
――――そして、永琳の声を聞いて、踏ん切りがついたぜ――――という心の声がつけ足されるが聞こえる。
その言葉にさとりは、思わず魔理沙の身体に飛びついて、しがみ付こうとした。
が、それを予想していた魔理沙は、
「離れていてくれっ！」と鋭く言い放ち、さとりの身体を突き離した。
魔理沙の手に突き飛ばされた勢いのまま、よろよろと後ずさりして、地面に尻餅をつくさとり。
それに、こいしとお燐達が駆け寄る。
「姉様っ？お姉ちゃーんっ！」
「大丈夫ですかぁ～・・・」

「・・・・・・・・っ」
言葉を失うさとりは、ただじっと、ブレン達の方を見つめる魔理沙の横顔を見た。

強張った頬が、ひくひくと引きつっているのが見える。
魔理沙もまた、ブレンのことは好きだった。
それでも、もしかしたらブレン達が、幻想郷を滅ぼす先兵になるかもしれないという認識には、抗うことができなかったのだ。
彼女の心の声が聞こえる。

――ブレンは、友達だ・・・・・・でも、私には他にも友達がたくさんいる・・・そんな友達がみんな死んじゃうのかもしれないと考えれば、ブレンもやっちゃえるのが、私なんだ・・・・・・可哀想だけど・・・本当に、可哀想だけど・・・――

その声を聞いたさとりは、自分の中の哀しみに、抗う術を失った。
友達になれたと思えた相手を、どうあっても殺さなければならない状況がいたたまれなくなって、彼女はもう、自分の中の感情が抑えきれなくなった。
そうして彼女は、眼から涙を流して、口を大きく開け、叫ぶように泣いた。
わんわんと、中庭全体の空気が揺れるほどの泣き声が、魔理沙の、皆の鼓膜を揺らした。
そうして、そんなさとりの、見た目相応の子供のような鳴き声に混じって、彼女の悲痛な声が聞こえる。
「あんまりだよぉ・・・・・・どうしてこんな・・・！おかしいよぉーっ！」
彼女に釣られて、こいし達も、大声をあげて泣き始めた。
「うわぁぁ～～～ん！お姉ちゃーーーーん！」
「にゃあ～～ん！」
「バカだよみんなぁー！バカぁぁーーっ！」
彼女らの泣き声を一番身近で聞く魔理沙としては、最早いてもたってもいられなかった。

緊張しきった顔を一層強張らせ、眼をきつく閉じる。
そうして、握りしめた拳を震わせながら、彼女はゆっくりと歩を進めた。
三体のブレン全てが眼に見えるところで立ち止ると閉じた眼を鋭く開き、頭にのった三角帽子を脱ぐと、その内側から、彼女の持つ便利ツール兼最終兵器、ミニ八卦炉を取り出す。
これがあれば、魔理沙の魔法の威力は格段に上昇し、仮に向こうが反撃するとしても、その隙をあたえず、後悔する間もなく、ブレン達を消滅させることができる。
すでに魔理沙の中には、ブレンを殺める決意はできていた。
確固たるものだとは言い切れない。
それでも、心の中に芽生える良心の呵責を振り切れるだけのものではあった。

八卦炉を起動させ、両手で掴み、眼前に突きつける。
みるみる内に出力は上昇していき、そこに魔理沙の持つ魔力が集中され、絶大な威力の一撃となって集束されていく。
後はこれをブレン達目掛けて打ち放てば、それで済む。
地霊殿の屋敷もいくらか吹っ飛ぶかもしれないが、もうそんなことは考えられなかった。
歯を食いしばり、眼の前にいるブレン達から眼を逸らしながら、魔理沙は呟いた。

「こ・・・これは、私達の、お前達に対する答えだ・・・・・・さ、さよなら、ブレンっ・・・・・・恋符『マスター・・・・・・」
そうして、彼女のスペルカードが打ち放たれようとしたその時だった。

魔理沙は突然、眼の前で発せられる声を聞いた。

「そうはさせない」

「――――!?・・・マ・・・『マスタァ・・・・・・スパァーク』っ!!」

勢いに任せ、つきだした両手から膨大な弾幕の光を放つ魔理沙。

だが、その打ち放たれた光がブレンを消滅させることも、地霊殿の敷地を吹き飛ばすこともなかった。

つきだされた魔理沙の両腕が、彼女の眼の前に現れた何者かの胸の中に飲み込まれ、恋符の光が、その中へと放たれていたのである。

いや、違う。

何者かの胸のところにある大きな裂け目の中に魔理沙の両手と八卦炉が飲み込まれ、その向こう側へと恋符が受け流されていた。

そして魔理沙には、こちらの右肩に手を当て、顔をぬっと寄せてくるその者に見覚えがあったし、その者の名は最近何度も聞いていた。

「お前・・・ゆ・・・紫かっ?」

魔理沙のその声に、彼女の視界を埋め尽くすほどに大きく映ったその顔が、微かに笑った。

オルファンの出現と共に、何度か現れていた妖怪が、今一度その姿を現した。

紫の身体が近づくことで、彼女の胸の前に展開していたスキマの中に、魔理沙の腕がさらに深く入りこむ。

そして、スキマの中の異様な感触・・・腕が凍りつきそうな・・・

それ以外は形容することもできない感覚を味わった魔理沙は、

「うわっ!」と呻き声を上げながら、恋符の照射を中断し、すぐさま紫の身体から後ずさりして、スキマから両腕を引き抜いた。

そして、少しだけ距離を取ると、戸惑った顔つきで、眼前の妖怪の

姿を見つめる。
「な・・・何しにきたんだ?」
そう聞く魔理沙の声に、紫は嘲るように肩を揺らして笑いながら、応えた。
「短絡的にもブレンを殺めようとする愚かしい行為を、食い止めにきたのよ」
「なんだって・・・?」
聞き返した魔理沙の声には返事せず、紫は突如、その場から姿を消した。

いや、気がついた時には、魔理沙につき飛ばされたまま座りこんでいたさとりの傍にいた。
瞬時に移動したというよりかは、まるで初めからそこにいたかのように、ごくごく自然に、さとりの眼の前に立っていた。

紫の出現に驚き、そして戸惑うさとりとこいし達は、最早泣くことも忘れて、見開いた眼を紫に向けていた。
その顔を見た紫は、何が面白いのか、くすくすと笑いながら、こう呟いた。
「あの娘と同じねぇ・・・もう泣くのには飽きたのかしら・・・?」
「・・・・・・貴方は一体?」
さとりは紫の問うような声には応えず、逆にこちらから質問した。
しかしこの質問には、向こうもまた何も応えず(さとりも、何を聞こうとしているのか分からなかった)、紫はただ一言、
「後は任せて」とだけ言った。

そして、さとりから離れながら、魔理沙と、遠くで集まっているにとり達と、永琳の方をじっくりと見回し、両手を広げ、まるで演劇

の最中であるかのように、声高らかに言った。
「貴方達の浅ましい行動には、ほとほと辟易する気分だわー！学がなく、短絡的かつ一方的！事実にだけ眼を向けて、可能性を考えることを放棄し、自分の身だけを可愛がって・・・・・・こんなのが、この幻想郷の妖怪なのかしらっ？おぉ～やだやだ・・・」
それを聞いた一同が、『何っ？』と顔で言う。
そんなことを気にせず、紫は続けた。

「貴方達にひとつ、いい事を教えてあげましょう・・・・・・誰かが、ビープレートなどどこにも存在しないかもしれないと言ったわね」
「私です」と、慧音が歩みでる。
「そ」と簡単な反応をしてから、紫は異質な笑みを浮かべたまま、続けた。
「存在しないことに、何の問題があるのかしら・・・・・・ビープレートとはその場に出来あいの品物としてあるものではない・・・・・後から生み出されるものなのよ」
「なんだってっ？」
慧音の驚く声と共に、永琳が紫の方へと歩み寄りながら、言う。
「どういうことかしら・・・」

「そのまんまの意味よ・・・ビープレートとは、貴方達が自らで生み出すものであるのよ。どこにあるものでもない・・・貴方達が探すべきは、ビープレートそのものではなく、ビープレートを生み出しうる何か・・・あるいはその方法・・・・・・分かる？要するにビープレートはどこかに存在するものではない。むしろ、どこにだって存在するものなのよ」
その言葉を聞いて、今度は文が割りこんできた。
「つまり・・・何ですか？私達で、ビープレートを生み出せと？」
「そうよ・・・・・・そして、もう一度考えてみなさい・・・貴方

達自身が、オルファンとブレンをどう思っているのかを。事実を全て抜きにしてね・・・それをもう一度自分の心に語りかけ、可能性のひとつひとつをしっかりと見直せば、そこから自ずと、本当にやるべきことが見えてくるはず・・・」

そう語る紫のすぐ傍にはすでに、巨大なスキマが出現していた。
彼女はその中に入り、この場を去ろうとしているのだ。
またしても、含みを持たせた言葉だけを言って、帰ろうというのか？
それを許さなかったのは、さとりだ。
彼女は、今度はこそ紫に対し聞きたいことを聞こうと、スキマに入ろうとする彼女の身体に、後ろからしがみ付いた。

「ひゃ？」
と、変な声をあげた紫を、さとりは大声で問いただす。
「ま・・・待ってください！八雲　紫さんっ」
「んもうっ・・・なに？」
「貴方・・・一体オルファンの何を知っているのです・・・貴方はオルファンにとってどういう存在なのですかっ？」
「別に、何者でもないわ」
「う・・・嘘ですよぉ！貴方は、オルファンのいろいろなことを知っている・・・どうすれば、オルファンのことを理解することができるのですかっ？」
その声を聞いた紫は、またしても小さな笑みを浮かべて、お腹の辺りに回されたさとりの腕を、ぽんぽんと叩きながら、応えた。
「なんてことない・・・貴方だってその内、同じくらい分かるようになるわ・・・心がけ次第で」
「え・・・？」
「手を離しなさいって・・・それとも私と一緒に、スキマの中を旅します？」
「・・・・・・」

相変わらず、質問の答えになっていない紫の言葉だが、さとりにはいつもそれが、物事の核心をつく真理であるように思えて仕方がなかった。
そうして、今回の彼女の言葉。
それを聞いたさとりは、なんとなくだが理解した。
紫は、オルファンと友達になっているのだ。
とても深いところまで。
そして、もしかすると・・・

紫の身体にしがみつくさとりの腕の力が弱まったので、そのまま彼女はさとりの腕を丁寧に離してから、改めてスキマの中へと入っていった。

頭の中に芽生えた考えに屈託して、思わず力を抜いてしまったさとりが、
「あっ」と声を上げる。
しかしその時にはもう、紫の身体を呑みこんだスキマはぴたりと閉じ、消滅しつつあった。
こうなっては、再び追いすがることもできない。
さとりには、閉ざされたスキマがゆっくりと消えていくのを、見ていることしかできなかった。

ただ、聞きたいことは聞けたように思える。
さとりは今一度、紫から大切なことを伝えられたような気がした。
そして、彼女が度々さとり達の前に現れ、思わせぶりな発言をする、その理由も知ったような気がした。

彼女は思わず、うわ言のように呟いていた。
「・・・・・・オルファンさんは、私達と友達になりたがっている・・・貴方はそれを伝えたくて・・・・・・でも、友達になれって言

ったただけでなれるような友達って、ホントの友達じゃないから・・・
考えさせて・・・・・・それで・・・」

そうして次の瞬間には、今しがた、オルファンとブレンを殺めようかと考えていた者達の方へと、振り向いていた。

第八話　その2

紫の出現は、にとり達、そして永琳達にとっても突然のことであった。
しかし、混乱の中で彼女が言った言葉を、そのまま聞き逃して、忘れてしまうような者達ではない。
嵐のように現れ、そして嵐のように去っていた紫の存在が、一同の心に楔を打ち込んでいるのは間違いなかった。
重苦しい静寂が張り巡らされる中で、文は、突然の出現と共に、まるで舞台に立つようにこちらを小馬鹿にして、考えろと言った紫の言葉の、言う通りにしてみることにした。
「私達にとって・・・ブレンとは・・・・・・」
黙りこんで、とにかく自分の中の意思と対話してみる。

初めてオルファンの姿を見た時、そして、その後訪れた地霊殿でブレンを見た時、その時のさとりの表情。
ブレンが身体を洗ってやると喜ぶのを知って、実際にそうしてやった時の気持ち。
天魔からオルファンとブレンの調査を任された時の使命感。
マリサブレンの存在を知り、ブレンが単体の生物でないことを知った時。

特別考えなければいけないことではなかった。
考えれば、いや、考えずともすぐに分かる。なんせ自分の気持ちなのだから。

ビープレートの事も、何もかも分からないまま、恐ろしさだけのためにブレンを殺すことは、天狗としての恥だ。

それに遅れて気がついた文は、沈黙が支配する空気の中で突然、大声を上げて笑いだした。

「あやややや！あっやや！」

「んえ？」

突然の笑い声に、傍にいたはたてがびっくりして、素っ頓狂な声を上げる。

頭がおかしくなったのかと疑う彼女に、文は言った。

「確かに、あの妖怪の言う通りだったわ。私達、眼先の一番分かりやすい可能性に屈託して、私達の本当の心を忘れていたんじゃない？そりゃ確かに、浅ましいし、愚かだったわぁ・・・笑える話じゃない」

それを聞いてはたても一瞬間を置いて、

「・・・あぁー・・・確かにね」と呟いた。

文の言いたいことは、なんとなく分かった。

オルファンが幻想郷のオーガニックエナジーを吸い尽くすかもしれないというのは、確かに恐ろしい話だ。

が、改めて考えれば、それが間違いないこととというわけではない。

もう一つの可能性があった。

さとりが、それをずっと伝えてくれていたではないか。

そのことを理解した途端、はたても何故だか無性に面白くなって、大声をあげて笑い始めた。

「あっはっははは！いや、そうだよぉー！簡単な話だった・・・死

ぬのが嫌なら、ビープレートを見つければ済む話だったんだ！それをなんか、無駄に怖がっちゃってさ、バッカみたいだよねぇ～」

文とはたてに続いて肩を揺らして笑い始めたのは、慧音と、その傍らにいる妹紅だった。

ビープレートが、どこにもないかもしれないと言ったのは彼女である。

だが、そんな彼女の考えも、紫の言葉で、見事に覆されてしまったわけだ。

勿論、紫の言った言葉が真実であるとは思えない。

それでも慧音は、大いに笑った。

「どうせ、ビープレートがどこにでもあるなんて、口から出まかせなんだろう・・・・・・でもなんか、それでもいいような気がしてきたよ」

妹紅が続く。

「私達・・・見事に、あいつに一杯喰わされたみたいだな」

彼女らが何を言ってるのかは理解できつつも、いきなり変な笑い声を出されたのでは、さすがに気が狂ったのかと思うのも無理はない。

事の推移をぼーっと眺めていたにとりだが、前述通り、文達が笑う理由は、分かっていた。

自分の中で今一度考えを巡らせつつ、彼女は、遠くに見えるサトリブレンの姿を見た。

そうすると脳裏に、ひとつの記憶が蘇ってくる。

そしてにとりは、声を上げて笑ったりはしないながらも、笑顔を浮かべて、ブレンの方へと歩きはじめていた。

ブレンに対する恐れは、ほとんどなくなっていた。

「・・・河童達が踏んづけても文句ひとつ言わなかったあんたに、もっと酷いことなんて・・・・・やっぱ、できないよな」

にとりの後に続くように、他の者達も、ブレンへの恐れを捨て、もう一度、彼らの下へと歩み寄っていく。
誰一人として、ブレンを恐れる者はいなかった。

永琳だけは、すぐにその後についていかず、ブレンの下に向かう彼らの背中をしばらく眺めていた。
そうして、諦めたように苦笑いして、呟いた。
「さすが、扇動するのが上手ねぇ・・・伊達に妖怪を率いて月と戦争起こしてないわ・・・・・・」

そう呟いた上で永琳も、その八雲　紫のずる賢い扇動に乗って、ブレンのことを信じることにした。
というか、信じる信じないの問題ではない。紫の言葉だって、扇動などではないはずなのだ。
要するに、はたてが言った通りで、こちらがビープレートを見つけ出せばいいだけの話である。
それに、オルファンだってすぐに、銀河旅行をするつもりでもないだろう。
こちらがビープレートを見つけるまでの間、待っていてくれるよう説得することだって、できるはずだ。
そういう可能性に懸けて、それを実現させればいいだけの話だ。
それができるのが、この幻想郷に生きる者達の力であるはずだ。
永琳もまた、少し遅れて、ブレンの下へと歩いていった。

だが、出遅れたのは、永琳だけでない。
彼女は、自分とほとんど同じタイミングで、諦めたようにブレンの下へと歩み寄っていく者がいるのに気がついた。
早苗だ。
ゆっくりと歩を進める彼女の横顔は、未だ納得できていないように

見えた。
永琳はそれを、彼女がまだブレンと交流を深めておらず、地霊殿に来て間もないから彼らを信頼できていないからだと考えた。
それは確かに間違いではなかったのだが、それ以上の思惑が早苗にあることを、気づくことができなかった。

オルファンとブレンを拒絶しようとする考えを改善しようとしていたさとりだったが、実際にそれが実現してしまうと、何が起こっているのか分からなくなるものだった。
ついさっきまで、ブレンと人妖達の間にあった大きな隔たりが、いつの間にか消え去っていた。
ブレンの方へと歩み寄っていく中で、自分の脇を通り過ぎていく人影を見送りながら、さとりはぼーっと、その場で立ち尽くしていた。
こいし達が、傍に歩み寄って呼びかけてくる。

「お姉様ぁ、何かよく分からないけど、よかったねっ」
「みんな分かってくれたみたいじゃないですかぁ」
「何かよく分からないけど」
そうして続けてこいしが、
「私達もブレンのところにいこうよっ。それで、疑ったりしてごめんって謝らなくっちゃね！」と言う。

それにさとりは、
「えぇ、先に行ってね・・・私もすぐ行くから」と返した。
それを聞いたこいしが、「分かった～」と返事して、彼女らは、バ

タバタとサトリブレンの方へと駆けだしていった。
その背中を追いつつ、その向こう側に見えるサトリブレンがこちらを呼んでいたため、さとりも続いてそちらに向かおうとする。
だが、皆の前に出て説得しようとしていた緊張が今になって影響しているのか、身体が上手く動かず、そのまま崩れるように座りこんでしまった。

「あ・・・あっ？」
自分自身予想していなかった脱力に驚きながらも、ブレンの傍に駆け寄っていくことができないらしいと考えたさとりは、彼の者の身体に触れることは諦めて、ただ遠くから、呼びかけることにした。
「・・・・・・よかったね、ブレン・・・」
さとりは先程までブレンが、ずっと皆から嫌われていると思って哀しんでいることが伝わっていた。
だから、そんなブレンの心を慰めてやろうと、皆がブレンを疑う中で、ずっと彼らの味方でいた。
涙を流して、彼らを信頼し続けていたのだ。
そんなさとりに対し、彼女のブレンは、感謝してくれていた。
だが、感謝の気持ちと共に、彼の者の心の中には、大きな罪悪の気持ちもあった。
さとり達がビープレートを探すとして、もしそれを見つけられなかった時、幻想郷のオーガニックエナジーは吸い尽くされる。
さとり達がオルファンからそれを聞き、ブレン達もそのことを思い出した今、それもまた間違いないことだったのだ。
さとり達がブレンへの信頼を取り戻した今、幻想郷の存続に関わる大きな賭けも始まったのである。
そのことを申し訳なく思うブレンに、さとりは笑顔で返した。
「問題ない・・・ビープレートなんて、すぐに見つかるわ・・・・・

・それに、もしどうしても見つけられない時は・・・その時は、私達で、きちんとけじめをつけるから」
最後の言葉だけは、低く、そして小さかった。
世の中にありとあらゆる可能性があるのなら、もちろん悪い可能性だってある。
ブレン達を信頼する以上、彼らを殺戮の尖兵にするわけにはいかないという覚悟も、さとり達は決めなければならなくなった。

それでも今は、そんなことは気にせず、その場に座り込んだままのさとりの下に、魔理沙が歩み寄ってきた。
そして、彼女もさとりの隣に座りこんで、こう言う。
「・・・悪かったな」
「・・・いえ」
ブレンを真っ先に殺めようとしたことを言っているのなら、さとりはもう気にしていなかった。
さとりの返事を聞いた魔理沙は、自分のブレンの方を見ながら、続けて、呟くように言った。
「・・・あんたは、ブレンと出逢った時、どういう風なこと考えた？」
「え？」
さとりは、魔理沙の方を振り向きながら、聞き返した。
そうして、彼女の問いを再度頭の中で反響させて、応える。
「いい子だと思いましたよ」
それを聞いた魔理沙は、「へへ・・・へ」と笑ってから、返した。
「私の方は、あいつらのやろうとしていることを、手伝ってやろうって考えたのさ・・・・・それなのに、ああいうことをしちゃって・・・紫に笑われるのも仕方がないな・・・」

そうして、もう一度、「えへへ」と笑ってから、さとりの方を向いて、突然聞いた。
「あいつ・・・何者なんだろうな・・・・・・私達に、何をさせようとしてるんだ？」
その問いは突然のものだったが、さとりにはもう、その答えは分かっていた。
彼女は、もう一度ブレンの方を見つつ、応える。
「紫さんですね・・・ブレンだけじゃない・・・オルファンとも、友達になってほしいんじゃないですか？」
「それだけなのか？」
「それだけだと、思いますよ」
さとりの応えに意外そうな表情をした魔理沙だったが、その次に瞬間には、愉快そうに笑い声を上げていた。
「あっははは！なるほどなぁ、ただそれだけかぁ・・・・・・なれるのか？私達に・・・」
「なれますよ・・・きっと」
さとりのその言葉を最後に、二人は何も言わなくなった。
ただじっと、お互いのブレンの方を眺めていた。
地の底が、ほんの少しずつ、その本来の熱を取り戻しているような気がした。

※

オルファンの目的を知った事により起こった小さな騒動も、何事も

ないように収束した。
とはいえ、発生した事態はまだ終わっていない。
オルファンは銀河旅行のために大量のオーガニックエナジーを必要としているようだし、そのための手始めなのか、アンチボディを発生させるオーガニックプレートを各地に送り出していた。
文とはたては、その対処のために新聞の記事を制作してある。
そして、オルファンの目的を新たに知った今、その内容を改訂する必要が出てきた。

文達は、永琳を連れて、再び部屋の中へと閉じこもり、記事の内容をさらに考えることになった。
が、もしかしたら、改訂の必要もないかもしれない。
重要なのは、オルファンの目的と、そのために幻想郷が崩壊する危険性なのだが、そんなものを大衆に知らしめるわけにはいかなかった。
情報操作は常に大衆からの批判を招くものであるが、時としてそれが必要であり、功を成す時もある。

文とはたてが共同で制作し、一応は文々。新聞の号外として発行されるらしい記事の内容に一度眼を通した永琳は、二人に対し、すぐさまこう言った。
「このまんまでいいでしょう」
その言葉には、二人は別に不思議がることはなく、むしろ永琳の発言に納得しているようだった。
文が応える。
「下手に、オルファンが銀河旅行をするつもりだとか幻想郷が危ないとか、そんなこと書いてちゃ、変な運動に発展するかもしれませんもんね」
はたても続く。
「新聞は事実を大衆に伝えるものですけど、分かりやすく伝えなく

ちゃいけないのが、ジャーナリストの辛いところですねぇ」
それにはただ、「ふっ」と含み笑いだけを返して、永琳は次いでこう伝えた。
「それじゃぁ早速、天狗の長に記事を見せて、発行の許可を頂いてきますか？・・・一応あの方には、事実を伝えておいた方がいいでしょう」
「えぇ、そうしましょう」
「早速ね」

一応記事は完成し、文達は、天魔への検問を受けに（彼（彼女？）から直々の任務であるため、普通の新聞と違い、向こうの検問が必要であった）、妖怪の山へと帰還することにした。

飛び立つために再び中庭に出てみると、すっかりブレンと人妖達の仲も元通りになっているようだった。
先程のことなど、まるでなかったようだ。

※

さとりも、ようやく動かなくなっていた身体が動くようになったので、改めてブレンと一緒にいようと、そちらの方へと向かっていった。

魔理沙もまた、自身のブレンへと歩み寄り、その胎内へと入る。
スリットウェハーにもたれかかり、その温かさに包み込まれれば、ブレンが自分達の生命を吸い尽くそうとしていることなど、考えら

れなくなる。

魔理沙は、深く眼を閉じながら呟いた。

「ホントに、悪いことをしてしまうところだった・・・後もうちょっとで、あんたのことをやっちゃうかもしれなかったんだな・・・・それを止めてくれたってんなら、あの紫にだって、感謝しないとな」

もちろん、ブレンを殺めることを止め、オルファンに対する疑念を払拭した紫が、幻想郷消滅の主犯になる恐れもある。

ブレンもオルファンも、信じる。

が、信じた結果、危険な可能性が消えるわけがなかった。

そのことを踏まえて、魔理沙はさらに言った。

「でもおかげで、これからいろいろと大変なことになりそうだ・・・ブレンの数は今よりもっと増えるだろう・・・グランチャーだって、多分今もどこかにいるかもしれない。あいつらがブレンとオルファンの敵だってんなら、私達の居場所を知られる結果にもなる・・・・・オルファンが襲われることになるかもしれない・・・その上で、ビープレートも探す。それができなきゃ、今度こそオルファンもあんた達も、みぃーんなやっちゃう」

前途多難とはまさにこのことなのだろうか・・・

まぁ、くよくよ考えても仕方がないか。

そんなことを考えながら、ふと眼を開けて、スリットウェハーに映る外の景色に眼を向けた魔理沙は、あるひとつの違和感が存在するのに気がついた。

中庭の端で、ひとつの人影が、その場を行ったり来たりしてうろうろしている。

早苗だ。

何かを考え込んでいるらしい早苗の横顔が、右を向いたり左を向い

たりして、魔理沙の網膜に、異様に強く焼き付いていた。
その表情は決して穏やかなものではない。
まるで、何かが納得できていないような、そんな面持ちだった。
しかし、そんな表情をしている早苗が一体何を考えているのか、などということは、さとりのような能力を持っていない魔理沙には分からない。
「なんなんだろう・・・」
自分が何故あんなものに眼を惹かれたのかも分からない魔理沙は、そう呟きながら、だったら実際に、さとりに彼女の心を内を読んでもらおうか？などと考えた。
が、そんな折、幻想郷の各地に配布する新聞の記事を完成させたという文とはたてが中庭にやってきた。
そして天狗の長への検閲のため、山に帰還しに飛び立っていったのを見て、数分前の考えは、魔理沙の頭から吹き飛んでいた。

それから、さらに数分後のことだった。
早苗が忽然と姿を消したのは。

※

金色の肉体を持つオルファンは、夜であれば淡い金色の光に包まれ神秘的な姿を成し、夕焼けに照らされれば、炎のごとく赤く燃える。
そうして真昼の陽光を浴びれば、地上にもう一つの太陽が出来たかのように、いっそ激しいほど鮮やかに輝きを放つ。

さすがに、そんなオルファンの身体の上に直接乗っていると、眼が眩む。
なので紫は、自身の有するアンチボディ、バロンズゥの胎内へと入り、そこで、酒を飲んでいた。
自分で瓶から盃に酒を持って、それを自分で飲んでいた。
だが決してそれは、たったひとりでの孤独な酒盛りなどではない。

開け放たれた装甲から見える外の景色。
ある境界を境に、その色彩を全く変える地上と空の姿を見つめながら、何杯目かの酒を飲んで、紫は呟いた。
「いや絶景・・・酒の肴ねぇ」

紫がこの場にいるのは、今回もまたオルファンと語り合うためだった。
紫とて、いつもいつもこうやってオルファンの上にいるわけではない。
気が向いた時だけ、こうやってオルファンのすぐ傍に居座るのだ。
そして今回、紫がそうしているのは、自らの意思によるものではなかった。
オルファンの方が、彼女を呼び寄せ、ここにいさせたのである。
それは、あることを聞くためだった。

オルファンの問いが、紫の頭の中で響く。
紫はそれに、静かに応えた。

「あら・・・私の言ったことが嘘八百だなんて、貴方に言えるかしら？貴方だって、ビープレートのことは分かっていない・・・なら、私の言ったことだって、真実である可能性は大いにあるじゃない」
オルファンが聞いていたのは、紫がさとり達に対して語った、ビー

プレートについてのことだった。
オルファンはその紫の発言を遥か遠くから聞いていた。
そして、彼女の言葉が真実であるかどうか、疑ったのだ。
そんなオルファンの問いに対する答えは、否定でも肯定でもなかった。
というか、肯定も否定も両方していた。
ビープレートは、紫の言う通りどこにでも存在し、無から生み出されるものなのかもしれない。
が、同時にそうではない可能性もある。紫が言っていたのはそういうことだ。
是と非はいつも隣り合わせで対応している。
まさしく、是非共、ということだ。

オルファンは、ある意味呆れたように紫に言った。
それを聞いた紫は、面白そうに笑って、応えた。
「そりゃ、そうよ。世の中本当の本当に絶対的なものなんてないんだから・・・実際のところ、その時にならなきゃ、事実なんて分からない・・・・・・ビープレートが何なのかだって、その時になるまで分からない。だからまぁ、私の言ったことだって、今はまだ嘘でも真でもないってわけよ・・・・・・そう、例えばそれは、私のこの胸の内にあって、貴方が触れれば、すぐに手に入るものかもしれないのよ？」

それだけ言うと紫は、またひと口酒を啜ってから、「ふふん」と含み笑いを浮かべた。

そんな紫に、オルファンは続けて言う。
それは、あくまでも不遜で、胡散臭い態度の紫を茶化すような言葉であり、同時に、そんな彼女の本心に感謝するような言葉だった。

紫がさとり達に対し、可能性の範囲で無いとは言えないというだけの（紫自身がそう言っている）出鱈目を吹きこんででも、オルファンに対する猜疑心を払拭したその理由が、オルファンには分かっていたのだ。

それを指摘された紫は、急にだらしない口調で、
「お酒が回ってきたわ・・・うぃ～・・・っく」と呟き、大きなしゃっくりをした。
彼女の顔が、ほんのりと赤くなっている。

そんなことはお構いなしにオルファンは、紫のことを、素直じゃない、不器用だなどと言って冷やかしていた。
紫はへらへらと笑いながら、こう返す。
「へっへ・・・なぁに言ってんのかしら・・・」
そうして、もう一度盃に持った酒に口をつけた。

オルファンには、このような態度を取る紫の本心も、やはり分かっていたのである。
紫の顔が赤くなっているのは、何も酒のせいだけではなかった。

※

天魔からの検閲は無事に終わった。
オルファンの目的については取りあげずに大衆に伝えるというのには、天魔も同意していた。
しかし、オーガニックエナジーの吸収により幻想郷の生物が全滅す

る危険はやはり重大なものであり、引き続きの調査と共に、オルファンの動向の偵察も、新たな任務として与えられた。
そうして、場合によっては、天狗を総動員してオルファンを破壊するとも言っていた。
それについては、文達も文句はなかった。
かくして、文とはたての共同により制作された文々。新聞号外が、河童の開発した印刷術によりすぐさま増刷されることとなった。
翌日早朝から、さっそく幻想郷の各地に配られることになるだろう。
新聞の配達は文が行うため、彼女は今日のところは妖怪の山に居続けることにした。

はたての方は、天魔からの命令でもあるオルファンの偵察を怠らないためにも、すぐに地底へと戻ることにした。

天狗のスピードをもってすれば、地底まではすぐだ。
オルファンの近くで、引き続き地表の調査をしている河童と勇儀にひとこと挨拶してから、すっかり恐ろしくもなくなってしまった地底への入口を通って、旧都へと抜ける。
そうしてそこからはもう十秒もしない内に、地霊殿の中庭を足元に見ていた。

が、なにやら様子が変だった。
小さな人影がひとどころに集まって、口々に言い合っている。
何事か起こっているようだった。

また騒動か・・・
などと頭の中でぼやきつつ、すぐさま中庭へと降り立ったはたてに、団子のように集まっていた一同の視線が突き刺さった。

同時に、その中からさとりが前に出てきて、突然こう聞いてきた。
「お帰りなさい・・・あの、早苗さんを見ませんでしたか?勇儀さん達から、見たとかいう話を聞きませんでした?」
「・・・?」
何故いきなりこんな質問をしてくるのか分からなかったが、とにかくはたてはこう応えた。
「今の今帰ってきて、見るわけがないでしょ。勇儀さんも、見ていない様子だったよ」
「そうですか・・・」
「どうかしたの?」
「どこかにいなくなってしまったんです。何も言わないで突然姿を消して、いろんなところを探したんですけど、どこにもいらっしゃらないで・・・魔理沙さんが少し前に姿を見たんですけど、その時もなんだか様子が変で・・・」

「へぇ~・・・・・」
はたての返事は、実に淡泊なものであったが、無表情だった彼女の脳裏に、数日前、早苗が自分の身体にしがみ付いてきた感触と、そのすぐ後に感じた、早苗に対する得体のしれない思いが蘇ってきた。
そうしてはたての無表情だった顔が、みるみる内に険しく変わっていく。
彼女には何か、無性に嫌な予感がしていた。

今度はさとりが、
「どうなさったんです?」と聞く番だった。
それにはたてはすぐ、
「もう一回出掛けてくる・・・早苗のいそうなところに、心当たりがある」と応えた。
「どこです?」
「守矢神社よ」

「えぇっ？」
驚くさとりのことは放っておいて、はたてはすぐさま、来た道を戻り、妖怪の山へと最大速度で帰っていた。

「わぁーーっ！」
はたてが瞬間的に加速することにより生じる風圧と音波が、すぐ傍にいたさとりの身体を煽り、鼓膜を破裂せんがほどに震わせた。
痛みを感じるほどの音に、思わずさとりは両手で耳を塞ぎ、吹き付ける風に眼を閉じるしかなく、飛び立っていくはたての姿を眼で追うこともできなかった。

※

本気を出せば、地底から妖怪の山とて数秒だ。
巨大な霊山の姿を眼にしたはたては、もうその次の瞬間には、守矢神社の石畳の上にその身を降ろしていた。
猛烈な風に吹き付けられ、呆然とする三つの人影が、すぐ眼の前に見える。

やはりだ。
守矢神社の二つの神と、そして早苗がいた。
彼女はやはり、ここに戻ってきていた。
突然のはたての来訪にびっくりして眼を丸くし、言葉を失っていた三人。
だが、その次には、早苗は天狗のスピードに賞賛しているのか何なのかは分からないが、

「おぉ～っ、御苦労さまです」と、よく分からない発言をし、びっと敬礼した。
その態度は、いつもの早苗と変わらないように見えたが、はたてにはその態度に裏があることはお見通しだった。
お見通し、というわけではないが、今のはたてには何もかもが偽りであるように見えた。
彼女は絶対に何かを企んでいる。
そのためにここに戻ってきたのだ。

はたてはいの一番、三人の中で頭一つ抜けて背が高い神奈子に向かって切り出した。
「またまた突然の来訪をお詫びします・・・で、八坂様」
「なんです？」神様としての威厳を示すためか、急にキリッと眼を細めたその滑稽さも、神奈子らしかった。しかしそれも、今のはたてには、何か表面に張り付けられただけの仮面のようなものに見えた。
そんな疑念を真実として証明すべく、はたては問うた。
「今の今まで、何の話をしていらしたんです？」
それに神奈子は、すぐさま応えた。
「早苗が、もう知りたいことは大分知ったし、なんだか飽きてきたってことで、帰ってきた。で、いろいろオルファンについての話を聞かせてもらっていました・・・なるほどねぇ、オルファンはもしかしたら、幻想郷の全ての生命力を吸い尽くすかもしれない」

はたてはびくりとした。
自分の予想が見事に的中してしまったからだ。
早苗が守矢神社に戻り、神奈子達にオルファンのことを話すだろうと考えていたのだが、そのものずばりだった。
しかしはたてが驚いたのは、神奈子がそのことを堂々と白状したことだった。

事実をはぐらかして嘘をつくだろうとばかり思っていたし、それを揚げ足を取って揺さぶろうと考えていたのだが・・・

神奈子に続いて、諏訪子が言う。

「なに?貴方、早苗が心配でついてきてくれたの?それとも、早苗が変なことすると思って、疑ってた?」

その言葉に、はたてはさらにびくりとして、大きな身震いをした。

それを見た神奈子と諏訪子が二人して、

「なにを怖がってるんだ・・・んへっへへへ」

「あっははは、変なのぉ~」と、和やかな笑い声をあげる。

それと一緒に早苗も、

「ふふふふ」と笑っていた。

その声が非常に穏やかで、何事もないような響きをしているものだから、はたてには自分の早苗達に対する疑念が、過度なものではないかという考えが芽生えてしまった。

いや、そうでもないだろう。そのはずだ。

この者達には、何か裏がある。

それを知るために、はたてはあくまで疑念を捨てることなく、質問を続けた。

「なんでいきなり挨拶もせずに、さとりさん達の下から姿を消したんです?貴方ってそんな、すぐに異変から身を引くような性格はしてなかったと思うんですが・・・」

それに早苗が、落ちついた様子で応える。

「・・・迷惑をおかけしないよう、誰にも気づかれずにこっそり出ていこうと思ったんですけど、駄目でした?ご迷惑でした・・・よね、こうやってここまで来てくださってるんですから・・・」

かくいう早苗の態度は、実際とても申し訳なさそうにしていた。

はたても思わず、「・・・いや」と渋る。

「・・・異変については・・・なんか、私がいてもあんまり意味が

ないように感じて、なんかこう～・・・どうでもよくなっちゃったんです。だって、永琳さんやさとりさんが勝手にいろんなことを調べちゃうんだから・・・」

はたては今度は、神奈子に向かって聞いた。

「まぁ、それはそれとして、早苗さんから話を聞いて、貴方方はどうなさるおつもりなんです？」

「どうなさるねぇ～・・・まぁ、幻想郷が危ないと聞いちゃ、オルファンを破壊したくもなるけど・・・・・・・しかしながら、天狗の方でいろいろ手を尽くしているのでしょう？なら、それに従うのも悪くはないかもしれませんね」

「ホントにそれだけですか？ホントは他になんか理由があって、早苗さんはここに戻ってきたんじゃないですか？」

「いや、別に」

「・・・・・そんなこと言って、私は貴方方の本心なんて当にお見通しなのですよ？」

この前早苗は使ってきた手法を、今一度使ってみた。

が、当然のこととして、神奈子は、それにへらへらと笑いながら、しかし少しだけ怒った様子で

「なんだよ、疑っておるのか？心外だなぁ～・・・」と応える。

さらに続いて、ほんの少しだけ恥ずかしそうにしながら、こう言った。

「まぁ、正直に言うと、私達の方も、早苗にはすぐ帰ってきて欲しかったんだ・・・寂しくなるわけがないって言って送り出した手前なんだけど・・・もうずっとずっと寂しくって。夜も眠れなかったんですよぉ」

諏訪子がけろけろ鳴きながら、続いた。

「私はそうでもなかったけどねぇ～・・・まぁ、早く帰ってきてくれないかなぁ～、とは思ってたよ」

それを聞いた早苗が、満面の笑みを浮かべて、こう締めくくった。

「そんなお二方の気持ちが、私の脳みそにビビーッ、っと来たのですよ。それが真相です！」

「・・・・・・はぁ～・・・」

はたては、諦めたように、大きなため息をひとつついた。

これはもう駄目だ。

こんなことを言う連中の本心を聞きだすことなど、出来そうにない。

もしかしたら、本当は裏で何も考えてなどおらず、彼女らの言う通りなのかもしれない。

そういうことは、この場にさとりを連れてくれば全て分かることだが、さすがに地底の妖怪をこの山にまで連れて来たら、こちらの責任問題になるし、地底の立場を危うくするだろう。

最早打つ手はなしと言ったところか。

この際彼女らに襲いかかって拷問にでもかければ、本当のことを白状するかもしれないが、さすがにそういうこともできない。

そもそも返り討ちにあうだけだろう。

こうなれば、早苗達が本当はものすごい善人であることを信じるしかない。

はたては、三人に、

「・・・いろいろと詮索して、申し訳ありませんでした。別に、変に疑ってたわけじゃないんですよぅ～・・・・・・それじゃ」と、さすがに信じられないような嘘をついてから、守矢神社を後にしていった。

さとり達には、どう伝えておくべきか・・・

やはり、早苗達は何かよからぬことを考えているはずだ。

どうせ、こちらがいなくなったそのすぐ後には、自分達の目論見を話し合っているのだろうから。

そのことは、しっかりと伝えておく必要があるだろう。

そのはたての考えは、ものの見事に的中していた。

飛び立っていったはたての姿が遠くに見えなくなると同時に、神奈子が、両腕を組み、肩を揺らして、

「くっくっくっく・・・」と、喉を鳴らして笑った。

そうして続けざまに、嘲笑うかのような声が彼女の口をついてでた。

「天狗と言えど、所詮はあれしきか・・・この私を揺さぶろうなどと、二年は早いっ！」

「現実的な年数だね・・・」と諏訪子。

「いやぁ・・・あんましそんな百億年とか突拍子もない表現したら、何か逆に格好悪いなぁ～、って」

「・・・・・・」

早苗が胸を張って言う。

「それはそうと！邪魔な天狗もいなくなりましたし、これからどうするか考えましょう！」

そうして三人は、自分達の野望の実現のための話し合いを始めた。

早苗が神社に戻ってきたのは、そのためだった。

彼女らの企みである、オルファンの持つオーガニックエナジーの利用であるが、それにひとつの大きな障害が出てきてしまった。

オルファンがオーガニックエナジーを吸収すると、幻想郷が滅亡す

るというのだ。
が、その問題をクリアする方法はあった。

「早苗の言った、ビープレートというものがあれば、幻想郷が滅びずに済む、そして、オルファンは無限に近いオーガニックエナジーを得る・・・・・・それはつまり・・・」
諏訪子の言葉に、神奈子が声を張り上げて続いた。
「私達が無限のエネルギーを得ることができるってことかぁー！」
それに、早苗が続く。
「でも、そのままオルファンに銀河旅行をさせるわけにはいきません・・・・・・オルファンの持つエネルギーをすぐに変換する方法を考えないと・・・」
「あるいは、オルファンのオーガニックエナジーを、宇宙に飛び立つことができないギリギリのところで抑えるか・・・」と、諏訪子。
しかし早苗がそれに、
「でも、そんな方法があるのでしょうか・・・」と返す。

が、それに神奈子が、人差し指をぴん、と立てて応えた。
「脅せばいいじゃないのっ」
「お・・・」
「脅すぅ？」
「そうよ。早苗の話では、オルファンと話をする方法はあるみたいだし、それでオルファンに、『銀河旅行なんてやめないと、怖いぞ～』って脅しをかければいいのよ・・・もしビープレートが見つけられなくても、同じように、幻想郷のオーガニックエナジーを吸い尽くさないように脅せば、この地も守れる。最高の方法じゃな～い！」

なるほど～、といった表情の諏訪子と早苗だが、その問題点はすぐに見つかった。

諏訪子が呆れ顔で言う。
「オルファンをどうやって脅せばいいんだよぅ～・・・さすがに神である私達だって、あんな大きな生き物を脅したところで何にもならないって・・・」
早苗が続く。
「それに、オルファンにはブレンパワードがいるんです。脅しなんてかけてる間もなく、やっつけられちゃいますよぉ・・・・・・まずは、ブレンをどうにかする方法を考えないと・・・」
そんな二人の言葉だが、神奈子は、『そう言うと思った』といった表情で、腕を組んだままうんうんと頷いていた。
そうして、二人に対し、こう応えた。
「あるじゃないっ。ブレンパワードを倒すことが出来る方法が・・・」
それを聞いた早苗は、しばらく不思議そうに黙っていたが、あることに気づいて、「あっ！」と声を上げた。
続いて、『さすが神奈子様！』ときらきらする眼で叫びながら、言った。
「グランチャーですねーっ？」
「その通り！グランチャーがブレンパワードの敵であるなら、彼らを使ってブレンパワードを全滅させて、オルファンを脅す。しかも、グランチャーもビープレートを探しているのなら、例えブレンがいなくとも、無限のオーガニックエナジーは手に入れられるっ！」
諏訪子が続いて、感心した様子で言った。
「なるほどぉー！私達の目論見をみんな纏めて解決してくれるかもしれないんだ！」
「凄いじゃないですかグランチャーって！まるで私達の救世主！」
「そうよ早苗！そしてこれからやるべきことが、まずひとつっ。ブレンが何体もいるのなら、グランチャーだって・・・」

「えぇ！幻想郷の各地にいるグランチャーを集めて、戦力を纏める・・・そのためにもまず、私だけのグランチャーを見つけなくっちゃっ！」

早苗達の野望を事前に予想することなど、おそらく誰にもできないだろう。
それもそのはずだ。
彼女らの恐ろしい（と、自分達で考えている）計画は、今この時になって初めて始動したわけなのだから。
その内容を、はたても、山の天狗達も、さとり達も、誰も知ることはできなかった。

だがそれ以上に、早苗達の野心よりも早く事態が発展していくことは、彼女達でさえ予想することはできなかった。

神奈子が言う通り、幻想郷の各地にはすでに多くのグランチャーが存在している。
その一体一体が、今もなお自らの敵に対して、怨念の炎を燃やしていたのだ。

第九話『鮮烈なる咲夜』　その1

謎の巨人、グランチャーと出逢い、そしてその胎内に入ることである種の共生関係になった日から、咲夜はよく紅魔館の外に出ていくことがあった。
それ以前も、主人からの遣いで外に出ることは別に少なくはなかったのだが、最近になってそれが特に多くなっていた。
主人であるレミリアから買い出しなどを初めとする雑用を任され外へと出ていくのに、グランチャーを連れていくようなこともあったし、何の用事も任されていないのに、突然グランチャーと共に姿を消すこともあった。
その理由は、本人が語っている。

グランチャーの敵である、ブレンパワードを探しだし、そして消す為だ。
そのために咲夜は、グランチャーと共に外へと繰り出していく。
そして、実際ブレンパワードを発見し、撃破して帰ってくることもあった。
ブレンパワードを撃破したと報告するのを、もう二回か三回は聞いた気がする。

それを聞くたび、館の門番である美鈴は、咲夜が少しずつ荒んでいっているような気がしてならなかった。
館の主人であるレミリアやパチュリーはそのことに気づいていない

し、グランチャーの能力や、その質実剛健な性格に感心しているため、咲夜がグランチャーと共にブレンを撃破しにいくことには、まったく反対していないようだった。

そんな中で美鈴にはどうしても、このままではいけないように思えて仕方がなかった。
ブレンを撃破したという報告と共に、ブレンに乗り込んでいた妖精や妖怪を殺したという話も聞いているからだ。

そして今日もまた、咲夜はレミリアから頼まれた紅茶の茶葉の買い出しに、早朝からグランチャーを連れていった。
人間の里にいくらしく、さすがに里にまでグランチャーを連れていくことはないと咲夜は語っていたが、そんなことは関係ない。

美鈴としては、グランチャーと共に飛び去っていく咲夜のことが心配でならなかった。

そうして彼女らは、昼前には戻ってきた。
紅魔館の門の上を通り過ぎていくグランチャーの姿を見上げた美鈴は、自分の仕事も放り投げて、その後を追う。

紅魔館の館の正面扉の近くにグランチャーは降り立つ。
そうして、装甲が開き、そこから覗く穴の中から装甲の上に乗り、地面に飛び降りた咲夜は、戸を開けて館の中に入り、そしてすぐ、

数人のメイドを連れて出てきた。
その時ようやく、美鈴も、グランチャーに追いつくことができた。

そうして咲夜がもう一度グランチャーの胎内に入ると、そこから買い出し用の大きな袋を持って再び出てきて、それをメイド達に渡した。
あれに買い出ししてきた茶葉が入っており、それをメイド達に運ばせているんだろう。

装甲の上で、メイド達が館の中に戻っていくのを見送っている咲夜の足元に近づいて、装甲の縁にしがみ付くように張り付いた美鈴は、大きな声で彼女に呼びかけていた。
「さ、咲夜さぁーんっ」
突然現れた美鈴に対し、別段驚くこともなく、咲夜はそちらの方を振り向きながら応えた。
「門番の仕事をサボらない・・・どうしたの」
「あ・・・いえ、別にどうってわけじゃ・・・」
「ん・・・」
咲夜は、美鈴に対しては別段興味もない様子で、またしても、グランチャーの胎内へと戻っていく。
「・・・？」
何をしに戻っていったのだろう。
まだ何か中に置いてあるものがあるのか？
そんなことを考えた美鈴はすぐに、戦慄と共にそれが何なのかを知った。

咲夜が、人間らしき者の腕を右肩で抱えて、穴から出てきた。
咲夜が重々しい足取りで一歩を踏み出すたびに、咲夜に抱えられながら首が大きくうなだれたその人間らしき者（男だ）の身体が、ぶらぶらと力なく揺れていた。

その者が来ている着物には、石灰をなすりつけたような白い埃がついている。
それだけではない。
赤黒い染みがいたるところでできており、元々の着物の柄のようになっていた。
もっとも、最早ほとんどが赤黒くなっており、柄というより生地の色とすら言えそうだった。
これは、血だ。
着物についている染みの量から察するに、人間なら生きているかいないかの瀬戸際に陥るほどの・・・

美鈴は心臓が跳ね上がる音を聞き、眼を見開いた。
そうして、男の腕を抱えたままゆっくりと装甲から降り、そのまま何事もなかったかのように館の中へと入ろうとする咲夜の後ろに追いすがりつつ、美鈴は恐る恐る聞いた。
「さ・・・咲夜さん・・・・・・それって・・・人間ですよね」
咲夜は、一瞬だけぴたりと立ち止りつつ、すぐにまた歩を進め、メイド達が開けっぱなしにしておいた（そうさせておいたのだろう）戸をくぐり、館の中に入りながら、ちらりとだけ美鈴の方に顔を向け、静かに応えた。
「えぇ、そうよ・・・・・・ついてくるなら、戸を閉めてくれると嬉しんだけど」
「あ・・・は、はい・・・」
とりあえず、言われたとおり咲夜の後を追い館に入りつつ、玄関の戸は閉めておく美鈴。

咲夜は男を抱えたまま辺りをきょろきょろと見回して、何かを考えているようだった。
だがそれもすぐに終わり、彼女は何かを決めたように、呟く。
「そういや、もうお昼時だし・・・なら・・・早速お嬢様の今日の

昼食にでもなってもらおうかしら・・・」
そうして、再び歩を進めていく。
向かうところは、何人かのメイド達が日々の食事を作っている厨房の方だ。
美鈴は、咲夜の呟いた言葉が一瞬何なのか理解できず、その場で立ち尽くしていたが、しばらくして、その意味を理解できた。
そうしてますます戦慄し、身体を悪寒が駆け巡っていく。
慌てて咲夜の後を追った美鈴は、ゆっくりと歩く咲夜の前に歩み出て、その眼を見ながら問うた。
「今日の昼食って言いましたよね・・・何がですか・・・・・・その人間がですかっ？」
「そうよ・・・鬱陶しい、離れなさい」
「・・・・・・っ」
咲夜の低い声、そして、こちらを睨みつける鋭い眼光に思わず身体が反応して、美鈴は厨房に向かって真っ直ぐに進む咲夜の横へと身体を逸らしてしまった。
咲夜は、美鈴が横に逃げた後もしばらく、彼女を睨みつけていたが、じき、「フ・・・」と鼻息を鳴らしてその眼を逸らし、真っ直ぐに前を向いた。

美鈴は、咲夜のこの異質な雰囲気に当てられ、足が震えだしそうな気分になっていたが、それでもなお、彼女のすぐ横をついて歩き、捲し立てるように聞き続けた。
すでに二人は、厨房へと続く細い廊下の中に差し掛かっていた。
「ちょっと・・・ちょっと待ってくださいよぉぉっ」
「・・・・・・っ」
「その人間は一体何者なんです。どうしてそんなことになってるんですかっ」
「・・・今朝も、買い出しの帰りにブレンパワードを発見したんで、撃破した、人間の里からそれほど遠くない場所だったわ・・・だか

らかもしれないわね。撃破したブレンパワードの爆発と共に、この男が投げ出されたので、回収しておいた」
「回収って・・・・・死んでしまってるんですか・・・」
「いえ、まだ生きてはいる」
「だ・・・だったら、昼食にするとかなんとか言わず、助ければいいじゃないですかぁ！」
「それは無理でしょう。回収したその時には、出血多量で、着物も今のように真っ赤になっていた。そりゃ、止血はしようとした。でもさすがに無理だったわ・・・出血は多少は収まったけど、止まってはいない、失った血の量も多すぎる。もう数分もすれば、死ぬでしょう」
「・・・・・・っ」
小さく開いた唇を震えさせ、何か言いたくても言えない美鈴。
それでも、どうにか気を取り直して、絞り出すように言う。
「さ、咲夜さん・・・あ、貴方が・・・あんたが殺したんですね・・・・・どうして・・・っ」
「仕方がなかった。ブレンパワードを爆破させずに殺めるほどの腕前は、さすがにグランチャーにも私にもない。となれば、この男もまきこむしかなかった」
「そういうこと聞いてんじゃないんですよぉぉ！あんた、人が乗ってるの知ってたんでしょっ、それを知ってて、なんで遠慮なくそんなことができたんですかっ？」
美鈴の、互いの地位や立場を無視した辛辣な口調の問いに、咲夜はあくまでも落ち着いた声で返す。
「それは自業自得よ。ブレンパワードに乗って、私の乗るグランチャーと遭遇したことがこの者の落ち度・・・」
その声を聞いた美鈴の頭の中で、何かが切れる音がした。
「あんたねぇ！おかしいよっ。おかしいですよっ！」
叫びながら、右腕を男の肩を抱えている咲夜の、空いている左手の

方を掴みかかろうとする美鈴。
その手にはすでに、咲夜の腕の骨を砕き、引きちぎらんばかりの力が込められようとしている。
それだけの怒りが美鈴の中で爆発していた。

だが、咲夜の腕を掴み、万力のごとく締め上げるはずの美鈴の手はただ宙を掴み、固く握りしめられるギリッ、という音を体内で響かせるだけだった。

同時に、美鈴の眉間に、銀色に透き通った刃が突きつけられていた。
光を反射して、ギラリと煌めく反射光が、美鈴の眼をついた。
美鈴が咲夜の腕に掴みかかろうとするその時には、彼女はすでに時間を停止させ、懐からナイフを取り出し、それを美鈴に突きつけていた。

脳内で爆発した怒りも一瞬で収まり、それに代わって電撃のごとく恐怖が駆け巡る。
その代わり、早鐘のごとく鼓動する心臓の音が、はっきりと聞こえていた。
「・・・・・・っ」
ごくりと息を呑んだ美鈴に対し、咲夜は、はっきりと殺意のこもった声で言った。
「邪魔をするなら帰りなさい・・・・・・貴方の方は、夕食(ディナー)として出してやる。お嬢様方がお喜びになる様子を、胃袋の中で見てる？」
「・・・・・・・・ぅ・・・」
「それが嫌なら、門番の仕事に戻りなさい」
その声と共に、僅かに傾けられたナイフの刃が、もう一度怪しい光を煌めかせる。
全身の筋肉がわなわなと震え、恐怖に慄(おのの)いているのを感じながらも、美鈴は確信した。

今の咲夜は、何かがおかしい。
それが分かっている以上、美鈴はここで食い下がることがどうしてもできなかった。
彼女は、捲し立て、畳みかけるように叫ぶ。
「咲夜さん！あんた、そういう人じゃなかったでしょ！お嬢様のためにも、そりゃ人間を食料にしなくちゃいけませんよっ・・・でも、普段はどうしようもない悪人とか、生きている気力のない人達を殺していたじゃないですか、一瞬で楽に、痛くないようにさ！これはそうじゃないでしょ！その人間が、何か悪いことしましたかっ？しかもそんな、血を抜いて、苦しみながら死なせるような真似・・・・・咲夜さんだって人間でしょうよ！そういう殺され方されて、嬉しいですかっ？えぇ！？あんた、一体どうし・・・」

言いかけたその時だった。
美鈴は、自分の左肩辺りに鋭い熱気のようなものが奔るのを感じた。
同時に、続けざまに時間を止めたらしい咲夜が、彼女の胸を左腕で押し、美鈴を突き飛ばした。
「うぅ・・・っ！！」
大きくよろめきながら、廊下の壁に背中からぶつかり、そのまま崩れるように座りこむ美鈴。
そこでようやく、肩に奔った熱さの正体を知った彼女は、苦悶した。
眉間に突きつけられていたナイフの刃が、左肩に深々と突き刺さっていたのである。
肩から出ているのは、最早柄しかなかった。
このナイフが先程まで突きつけられたものと同じものなら、中指よりも長いほどの刃渡りの刃が、１ｃｍと残さず肉に喰い込んでいた。
身体をこわばらせ、肩から飛び出たナイフの柄に震える右手で触れながら、呻く。
「ホ・・・ホント、刺したよこの人・・・っ」

「眉間に直接突き刺さなかっただけ、良心的でしょう？」
説き伏せるように言いながら、咲夜はすでにもう一本のナイフを手に取り、手首をスナップさせながら、その刃をクイクイと美鈴の方に向けていた。
そうして、続けて低く呟く。
「今度は殺す・・・門番の仕事に戻らないにしても、そこで大人しくしていることね・・・」

さすがに、生命の危機を感じてまで、すがりつくことはできない。
細めた眼で咲夜の方を見つめながら、美鈴はただ一言、諦めたように呟いた。
「わ・・・分かり、ました・・・よ・・・っ」
それを聞いた咲夜は、「ふふんっ」と笑みを浮かべた。
次いでちらりと、彼女の肩に抱えられてうなだれる男の方を見ると、左手のナイフをしまって。それに代わり、手のひらで男の首筋に触れる。
しばらくして手を離した後、咲夜は呟きながら、再び歩を進めた。
「脈拍がない。死んだか・・・・・・よかったわ。さすがに、自分がミンチよりひどい状態になっていく様子は、見せられないものね・・・」

呟きながら、歩いていく咲夜の背中を眼で追うしかない美鈴。
しばらくすると、その背中も、廊下の先にある大きな扉を開けその奥に入っていくと、見えなくなった。
美鈴は、俯き気味になって、力なく投げ出された自分の足を一瞥した後、左肩から飛び出ているナイフの柄に眼を向けた。
そうして、添えるように触れていた右手に力を込め、その柄を握る。
続けて、１０ｃｍ近く突き刺さり、肩甲骨も突き破って向こう側に

飛び出ようとしていたその刃を、勢いよく引き抜いた。
今度は、鋭い電撃のような痛みが肩から全身へと広がり、美鈴は思わず呻いた。
「痛いぃ・・・〜っ」

引き抜いたナイフをすぐ乱雑に廊下の上に放り投げ、次いで美鈴は、スリットの入ったスカートの一部を破いて、その一端を歯で噛んで抑えながら、右手で自分の左肩に数度巻き付けた。
次いで、強くしばって肩からの出血を止める。
後でちゃんと消毒した後で包帯を巻いておくとして、紅魔館の廊下を血で汚すわけにもいかず、応急処置的なことをしておく必要はあった。
苦悶するように固く歯を喰いしばった美鈴の顔に浮かぶのは、肩から奔る鈍痛だけではない。
喰いしばった歯の間から、「ふぅー・・・ふぅ・・・」と息を吐き捨てながら、美鈴は、きつくしばった左肩から痛みが麻痺していくのを感じつつ、なおも歯を食いしばったまま、小さく呻いた。
「・・・なんで、こんなことになった・・・っ？」

出血もどうにか止まったことを確認した美鈴は、ゆっくりと立ち上がり、ふらつく足取りで来た道を帰り、紅魔館の玄関から外に出ていく。
どうすることもできないのなら、咲夜の言った通り、門番の仕事にでも戻るしかない。

戸を開け、外に出ると同時に美鈴にその姿を見せたグランチャー。
彼女は、もしかしたらこのグランチャーが、咲夜の性格を少しずつ歪めているのではないかと思ってしまった。

咲夜の心が凶悪なものになり始めたのも、この者と出逢ってからだ。
だが美鈴は、グランチャーが悪いという風に思えなかった。

満身創痍で自分達の前に現れ、生命が助かる方法があってなお誇りのためにそれを拒み、それでもなお生命を救ってくれた咲夜に対し感謝していたこのグランチャーが、咲夜のことを変えてしまうなど、信じられなかった。

しかしその一方で、信じてしまいそうでもあった。

今日のレミリアの昼食は、とろけそうにジューシーなハンバーグだった。人肉の。
咲夜から一切の事情を聞いていない彼女は、それを美味しそうに頬張っていた・・・そうだ。

実際その場に美鈴は居合わせていなかったが、もしこの状況に彼女がいることができたのなら、レミリアに、彼女の食した人間が、決して悪人でもなければ、生きることが嫌になってもいない、ごく普通の人間であると伝えていたかもしれない。
さすがのレミリアでも、そういうことを聞けば、恐れと共に罪悪感を感じないわけがないはずだ。
いくら吸血鬼と言っても、人を殺すのなら、誇り高く殺さねばならない。
実際、彼女が罪悪感を抱いている様子を見た者は、彼女と長い付き合いをしている者の中には、確かにいた。
美鈴だってそのひとりだ。

そういう意味でも、今この場でおかしいのは、咲夜だった。
レミリアは咲夜がグランチャーに乗りブレンと戦いその結果誰かが死ぬようになることは、止むを得ないこととして許可していたが、実は美鈴にはそれすらも理解はできなかった。
もちろん、他者の生命を奪わねばグランチャーが死ぬからこそ、そうしていることは理解できるが・・・
レミリア達は、自分達が実際に手を下していないから、実感が少ないだけだ。
しかし咲夜の方は、生命を奪い取る瞬間を眼の前で見ながら、それを楽しんでいるように思えた。
実際彼女がグランチャーと共に戦う様を見ていない美鈴だが、頭で考えれば、その様子が容易に想像できてしまうのだ。

後で厨房にいたメイドに聞いた話では、彼女は、今しがた死ぬ瞬間をその眼で見た人間を差し出しながら、にこやかな顔で、調理しろなどと言ったそうだ。
今回だけではない。
すでに彼女は、もういくつかの妖精や妖怪を殺めている。
その者達だって、決して悪しき者ではなかったはずだ。

実を言うと、妖怪である美鈴は、咲夜以上に長くこの紅魔館には居座っていた。
そのため、実際は咲夜に対する先輩でもあった。紅魔館にいる時間にしても、生きてきた歳月にしてもだ。
それでも美鈴は、メイドの長として日々働く彼女の事は尊敬していたし、なにより、彼女の凛とした態度は好きだった。
だから、遥か年下で、人間から見れば未だ幼女な咲夜に対して、敬うような態度だって取れる。

だが今はもう・・・

※

河童の印刷術は、さすがなものだ。
一日あれば、人間の里の全世帯はおろか、幻想郷において何かが住んでいるであろうありとあらゆる場所にばら撒いて、ようやく足りるほどの大量の新聞が一気に発行された。
いや、実際そうするつもりで天狗の上層部から発行を命じられているのだろう。
オルファンの出現は間違いなくひとつの異変であるし、博麗の巫女が行動するよりも速く天狗達で行動を起こすことができたというのは、今までにない貴重なことだ。
このまま天狗の力で異変を解決にまで導くことができれば、後世まで伝えられる功績になるだろうし、今回の行動が、次に何らかの異変が生じた時の行動の目安にもなる。
そしてもし、ビープレートを発見しオルファンの目的である銀河旅行を無事実現させられたとしたら、彼女ら天狗が、オルファンに連れて行ってもらい共にに宇宙へと進出することだって不可能ではないだろうか・・・
幻想郷の空を抜けたその先のことなど、興味があるなどというレベルではなかった。

そういう考えもあってか、今回は大々的に事を起こすつもりのようだ。
そのための準備も整えられているらしく。

近々、オルファンに向かう河童や天狗の増員も計画されているという。
むしろ、今まで実質的に動いていたのが文とはたてだけであり、今になってようやく天狗を総動員する準備を進めるのは、遅いほどだと天魔は称していた。
つまり、文々。新聞は、これから始める天狗による、妖怪による異変解決の魁ということだ。
そういうことを思うと、文の気分も高揚してくるものだ。

それはまぁそれとして、文は早速、陽がまだ上り始めている最中という時分から、各地に新聞を届けるために飛び立った。
ついでに、オルファンが吐き出したオーガニックプレートの行方も一緒に探してみることにする。
新聞を配達する中で、辺りを見回し、プレートを探す。
が、オルファンから放出されて間もなく、未だその辺を飛びまわっているのか、三十近く吐き出されたプレートの内の、五個ぐらいしか見つけることができなかった。
それらも、空の上をふよふよ飛んでいたり、どことも言えないような草原のど真ん中で一休みしていたりと、まだどこにも落ちついていないようである。
プレートから生み出される（このことを《リバイバル》と呼ぶことにした。新聞にも表記してある）ブレンも、まだ確認できていない。

その代わり、幻想郷の上空を飛びまわっていた文は、幻想郷の（人間から見た）危険地帯の筆頭に挙げられる紅魔館の上空に差し掛かった時に、それを見つけた。
文は思わず、
「なにあれっ」と声を上げる。

「ブレンと形が違う・・・そっか、あれが魔理沙や妹紅が言ってたグランチャーね」
ブレンパワードと対を成す者、グランチャーだ。
紅魔館の深紅に彩られた眼に悪い建物のすぐ傍に、同じく真っ赤な色のグランチャーが佇んでいる。

「そりゃ、グランチャーも各地でリバイバルしているだろうとは思っていたけど・・・ブレンより早く見つけちゃうなんて・・・」
文は、このまま紅魔館への取材を敢行しようかとも考えたが、それはやめることにした。
ブレンパワードのことを書いてある新聞を配っている文が行ってしまえば、逆に質問攻めをされるかもしれないし、もしかしたらそれ以上の過酷なことをされる危険も無きにしも非ずだ。
なんせ、グランチャーにとってブレンパワードは眼の仇。文がそんなブレンに関わっており、その記事を書いていると知られれば、坊主憎けりゃ袈裟まで憎い、だ。
今のところは大人しく、新聞を配り終えることだけを考えよう。
もちろんそれは、この紅魔館も例外なくだ。

文は、加速をかけ、一気に不気味な館の方へと急降下しつつ、大声で、
「号外でぇーーーーーすっ！」と叫びながら、適当な窓から、ガラスを割りつつ強引に新聞を放り投げる。
マッハいくらの加速と共に投下された新聞紙が、窓ガラスを突き破り向こう側に吹っ飛んでいく。
それと一緒に床を貫通して館が崩壊しない辺り、紅魔館の建築技術はしっかりしているなぁ、と感心しておいた。
実際やってることはテロ行為に近いわけだが、新聞は無事配っているのだから問題ない。配ってしまえばこちらのものなのだ。
新聞が無事投げつけられたことを確認した文は、すぐさま猛スピー

ドで館から離脱し、引き続き各地に新聞を配りにいくことにした。

今回は、ノルマだとか、そんなものはない。
強いてあるとすれば、幻想郷の全てに新聞を配ることだ。
さすがにいつものように、あっという間に配達が終わるということはなさそうである。
上り始めて間もない朝日が、空の真ん中で燦々と輝きを放つまでには終わるだろうが・・・

せっかくなので文は、新聞の配達を終え、そのことを天魔に報告した後で（やはり、やることの規模が大きいためか、こういうことにも報告が必要だ）、改めて各地を周り、再度オーガニックプレートと、アンチボディの捜索をゆっくり行おうかと考えていた。

※

人肉ハンバーグがレミリアを喜ばせた、その翌日のことだ。

「号外でぇーーーーぇぇ・・・・・・・」という聞きなれた（わけでもない）大声と、それ以上に強力な音の壁が破れる音と共に、強力な風に煽られた紅魔館の梁がミシミシと揺れた。
そうして、何事か、と周囲の様子を確認しにいったメイドの内の一匹が、ある一室に、粉々に砕けたガラスと共に一刷の新聞があるのを発見した。

その新聞はすぐさま、レミリアの手元に届けられた。
どうせ渡しても読まないだろうということは分かり切っていたが、館の主人である彼女に真っ先に渡しておかないと、後が怖い。

レミリアの方も、どうせ少し流し読みしてすぐにパチュリーに押しつけるだろうと自分自身で考えていたが、今回はそうではなかった。
自分の部屋の中、無駄にキングサイズのベッドの上にぼふんと腰かけながら、新聞の第一面に書いてある見出しに眼を向け、掲載されてある写真を見たレミリアは、思わず驚嘆した。
「これ・・・っ」

『幻想郷に謎の巨大生物出現する！』

そうしていくつかの写真には、巨大な三日月のような姿をしている鉱物の塊のような物体と・・・そして、グランチャーと似ているが、同じではない何者かの姿があった。

レミリアはすぐさま、館の中にある図書館へと向かった。

パチュリーは、夜が明けて間もないころから起きて、今日もまた、グランチャーの生態を知る手掛かりとなる書物を探すことにした。
が、そんな矢先での、轟音と揺れであった。

同じく朝早くから図書館の掃除をしてくれていたこあ共々、
「な、なに・・・っ？」

「ひゃぁ、こあいぃ・・・」
などとうろたえていたが、音も、紅魔館が軋むほどの揺れも、一瞬で収まってしまった。

「・・・・・・？なにかしら・・・天狗の声も聞こえたし、新聞の配達とかかもしれないけど」
「なんか・・・急いでたみたいですよね・・・」
とにかく、一瞬の嵐のような事態は過ぎ去ったようだし、もう他に何かが起こるような気配はない。

気を取り直して、書物の捜索を始めることにしたパチュリーだったが、それからまた何分かした時、レミリアが図書館の中へと入ってきた。
そうして彼女の興奮した様子の声が、広大な図書館の中に響き渡る。

「パチェ、みなよこの新聞！」
「・・・？」
やはり新聞だったか、と思いつつ、レミリアの様子がいつもと違っていたため、高所にある本棚を脚立を上って調べようとしていたパチュリーは、すぐにそこから降りて、ひとつの机の前にある椅子に腰かけるレミリアの方へと歩み寄っていった。
そうして、机のすぐ傍にまで夜と、その上に大きく広げられた新聞の記事に、立ったまま眼を向ける。

そうしてパチュリーもまた、眼を見張って驚いた。
「これ、グランチャー・・・じゃ、ないわね・・・・・・なにこれ？」
「・・・・・・？」
こあも、何事かと、パチュリーの隣に立って記事を眺める。
レミリアが、応えた。

「これが、咲夜がやっつけてるっていう、ブレンパワードよ」
「これが・・・」
「それに、グランチャーについての説明もされてる・・・ここ」
「・・・本当・・・写真はないけど・・・」
記事には、ブレンパワードとグランチャーが同じアンチボディであることが記されていた。
そしてもうひとつ・・・

パチュリーが、記事の中にある写真のひとつを指差しながら、言った。
「これがオルファンとかいうヤツね・・・咲夜のグランチャーがやっつけようとしている」
「ん・・・えぇ、なに？『ブレンパワードはオルファンから生み出された抗体であり、グランチャーもまた同様オルファンの抗体であることが考えられる。が、そう仮定したとして、同じ抗体であるブレンパワードとグランチャーが互いに争っているのかという原因は分からない。推測ではあるが、グランチャーはブレンパワードとはまた別のオルファンから生み出された抗体であり、母胎であるオルファンとはぐれてこの幻想郷に神隠しにあった可能性もある』・・・ねぇ」
「ブレンパワードとグランチャーは敵同士・・・それは、ブレンパワードの方でも同じであるようね・・・」
「ちょっと、パチェ、ここも見てよ」
「えぇ？・・・『ブレンパワードには、人間か、あるいは妖怪の持つ深層心理としての優しさや思いやりの心を呼び起こす性質があるらしく、簡潔に説明すれば、ブレンに乗った者は優しい性格になる。その一方で、グランチャーに乗り込んだ経験のある藤原　妹紅氏は、グランチャーには逆に、他者に対する攻撃性や、憎しみなどを呼び起こす性質があると語っている。つまり、グランチャーは人を狂暴にさせる、と考えられる』・・・」

記事を朗読したパチュリーに続いてレミリアが、
「失礼な話ねぇ・・・まるでグランチャーが悪者みたいな書き方じゃない」
と言う。

だが、そんなレミリアの言葉を聞きつつ、パチュリーは、新聞をじっと見つめ、しばらく何かを考え込んでいた。
こあが、「パチュリー様?」と呼びかけると、そこでようやく彼女は、静かに口を開いた。
「いや・・・その通りなんじゃない?・・・これ」
「んえぇ?」
「グランチャーと出逢ってから、咲夜の様子が何か変だとは思わない?」
「・・・・・確かに、ちょっとだけ眼がギラギラしているような気がしていたわね・・・・・それが、グランチャーの性質だというの?」
「そう・・・グランチャーが、咲夜の心に何らかの影響を及ぼしているのね」
「だからグランチャーは狂暴だって?そんなグランチャーに乗った、咲夜も狂暴だって?」
「いえ、そうではなくてね・・・そこんとこ、この記事は根本的なところで説明ができていないのよ。グランチャーが人の、えぇー・・・攻撃性や憎しみだとか言うものを呼び起こすとは言うけど、時にはそういう意思を放出することも大切だし、それが生きる力であることも、間違いはないでしょう・・・ただ狂暴であるというだけで括ることはできないはず」
「フランみたいに?」
「・・・妹様は、もっと純粋でおぞましい何かだと思うけどね・・・」
「でもまぁ、言う通りね。敵をやっつけようとすることがなんでも

狂暴でいけないことだなんて言ってちゃ、今頃人間も妖怪も、この世にゃいないものねぇ・・・」

「ん・・・この記事だってまぁ、そういうことを伝えようとはしてたんだろうけど、事実だけを並べてしまってるせいでねぇ・・・・・・それにこの記事、何か・・・」

「なに？」

「何か違和感があるの」

「違和感ねぇ・・・どんな？」

「・・・大事な部分が抜けているような・・・」

「・・・大事な部分ねぇ・・・そうやって言われない限りは、そんな風には見えないけどねぇ」

パチュリーの言う違和感というものが、レミリアには分からなかった。

が、彼女の言葉を聞いてからもう一度記事に眼を通すと、確かに、何か違和感があるように思えた。

それが何なのかは分からないし、パチュリーだって分かっていないようだったが。

考えることはやめたレミリアが、次いで口を開く。

「・・・・・・それはそうと、どうする？この記事、咲夜にも・・・」

「見せておいた方がいいでしょう・・・」

パチュリーは、すぐ傍にいるこあに呼びかけた。

「呼んできてちょうだい」

こあはすぐに、「はいっ。分かりました」と返事して、図書館を後にした。

それからしばらくすると、咲夜を連れて、こあは戻ってきた。

開口一番、「お話は聞かせて頂きました」と言い、すぐに机の傍まで歩み寄り、立ったまま記事に眼を向ける咲夜。

その僅かに細められた眼には、ゆっくりと、しかし沸々と何か熱いものが宿っていくように、レミリアには見えた。

二分ほどじっと記事を眺め続けた咲夜は、徐に口を開き、こう語る。

「パチュリー様は、この記事に何か違和感があるとおっしゃっていましたよね」

「・・・えぇ」

「それが分かりましたよ」

「えぇ？」

びっくりした様子で聞き返すレミリアの声に、咲夜は、じっと記事を見つめたまま、笑みを浮かべた。

とはいえ、眼は一切笑っておらず、口元だけをきゅっと引きつった、薄気味の悪い笑みだった。

そんな笑みを浮かべながら、咲夜は続ける。

「オルファンのことです」

「オルファンがどうかしたの？」とパチュリーが聞き返す。

「・・・オルファンには、何らかの目的があるはず。そうしてこの記事を書いた天狗は、その目的を知っている・・・・・・私のグランチャーは、オルファンを危険な存在、撃破するべき対象だと認識していました」

「・・・それで」

「オルファンの目的が何なのかは別として、そのために、エネルギーが必要であることは間違いないはず・・・・・・そしてグランチャーも、ブレンパワードも、他の生命体が持つエネルギー・・・オーガニックエナジーというそうですね。それを吸収することで生き

ている・・・となれば、そのブレンパワードの母胎であるオルファンだって、やることは同じはずです・・・・・これほどの巨体が、私達幻想郷の生物から、その生きる力を吸い取ろうというのです」
咲夜の言葉を、記事を見つめながらじっと聞き、深く考え込んでいたパチュリーは、咲夜が結論を言うよりも速く、彼女が伝えようとしていることに気がついた。

そうして、眼を見開いてはっ、とした。
同時に、僅かに髪の毛が逆立った様を見れば、その驚愕の度合いだって慮(おもんぱか)ることができる。
パチュリーの静かな声が、その場で小さく響いた。
「な・・・なんでこの天狗・・・いや、地底にいる連中は、こんな危険なヤツを野放しにしているの・・・っ」

「・・・・・・？」
レミリアはまだ、パチュリーが戦慄する理由が分からなかったが、彼女の語った危険という言葉を頭に入れてもう一度考えると、すぐに結論に至ることはできた。
彼女もまた、脳裏で固まったその応えに、驚愕した。
そうしてパチュリーの言葉に、こう応える。
「まったくよ・・・もしこれが本当だとすると、オルファンの近くにいるこいつらが真っ先に死ぬんだぞ・・・？」

さすがに恐怖を隠しきれない様子のふたりに対し、咲夜が、固い決意の宿った眼で言った。
「本当なのですよ・・・・・・お二方。行ってまいります・・・」
「行くって、何が・・・・・・いや・・・そうか・・・」
咲夜の言葉の意味が理解できず聞き返そうとしたレミリアだったが、その次の瞬間には、彼女のやらんとすることが何なのか察することができた。

が、それを承知で咲夜は、あえて自分の胸の内の考えをレミリア達に対し吐露した。

「グランチャーの使命は、ビープレートの発見と共に、オルファンの破壊であります・・・それはきっと、あの者が世界を滅ぼすことを食い止めるためのものなのでしょう・・・グランチャーは、私と共に生きることで、その使命感に魂を燃やしています」

すでに咲夜の意図を知ったレミリアは、咲夜の語る魂という表現を聞き、面白そうに笑った。

「魂を燃やすって、暑苦しい表現だねぇ・・・でも、いんじゃないそれ？」

「えぇ・・・私はこれから、グランチャーと共に、オルファンに対し宣戦布告します」

改めて咲夜のやろうとしていることを知ったところで、パチュリーが落ちついた様子で言う。

「ちょっと待って、今からオルファンを撃破しにいけば、ブレンパワードとの戦いになる・・・この記事を読めば、どうやらブレンは三体以上はいるみたいよ。勝機はあるの？」

その問いに対する咲夜の応えは、ある意味では彼女らしく、同時に彼女らしからぬものだった。

「勝てる勝てないというのは度外視します・・・完全かつ瀟洒な私とグランチャーならば、負けはしないでしょうがね・・・・・・戦うことそのものに、意義を見出します」

それを聞いたパチュリーは、小さく苦笑いして、呟く。

「あれね。止めても無駄っていう」

「それです」

「・・・じゃぁもういいや。好きなようにしなさい」

それを聞いた咲夜が、不敵に笑む。
それを見たレミリアが、声高らかに、咲夜に命じた。
「なら往け、咲夜！グランチャーの使命を果たすために、生命を懸けよ。オルファンを見事打ち負かして、完全かつ瀟洒であることを私に知らしめてみなさい」
「必ずや・・・っ！」

レミリアの前で跪いて見せた咲夜は、それからすぐに立ち上がると、踵を返し、図書館を後にしていった。
開けた戸から外へと出て、その戸が固く閉ざされるまで彼女の背中を追っていたレミリアは、机の上で頬づえをついて、愉快そうに呟いた。

「思い出されるわねぇ・・・あいつと初めて会った時も、あいつはああいう眼をしていた・・・・・・獣のような・・・さながら狂った果実のような・・・」
それを聞いたパチュリーも、うっすらと笑みを浮かべながら、ようやく傍にあった椅子に腰かけつつ、応える。
「そうねぇ、思い出してきたわ・・・」

そんな時だった。
咲夜と入れ替わるように、美鈴が戸を強引に開け放ち、ずかずかと図書館の中に入ってきた。
開けた戸を閉ざしてさえいない。
その表情は、焦燥しているように強張っていた。
左肩に巻かれている包帯は、服の裏に隠れて見ることはできない。

「・・・・・・？」

「？」
「・・・」
何事だ？と考える三人を余所にずんずんと乱暴な足取りで机の前で立ち止った美鈴は、その上に広げられている新聞を見て、
「こ、これか・・・っ」と乾いた声をあげ、それを乱暴に手に取り、まじまじと見つめた。

レミリアの、
「ちょっとぉ～・・・？」という呼ぶ声に構わず、じっと記事に眼を向けていた美鈴は、しばらくすると、広げた新聞をもう一度折りたたむと、それを机の上に放り投げた。
その眼の中の焦燥の色は、ますます強くなっていく。
そうして、彼女の低く呻く声が聞こえた。
「・・・死んでもいいっていうのか・・・咲夜さん・・・っ」

その声の次の瞬間には、美鈴はくるりと反転しながら駆けだし、図書館から飛び出していった。
開け放った戸は相変わらず閉めてもいかない。

何がなんだか分からないまま、去っていく美鈴の背を眼で追うしかなかったレミリア達。
彼女の気だるそうな声が、空気をだらしなく揺らした。
「わけわからんわ」
パチュリーが続く。
「何をしにきたのかしら・・・・・・まぁ、とにかくこあ、ドア閉めてきて」
「はーい」

※

オルファンを撃破すべく、紅魔館から外に出て、グランチャーの傍に歩み寄る咲夜。
すでにグランチャーの方も、胎内へ続く装甲を開いて、彼女を招き入れる用意をしてある。
そのまま装甲の上へと乗り上げようとした咲夜だったが、突如その右腕が、何者かに掴まれた。
「・・・っ！」
咲夜にはすでに、こちらを掴んできた腕が誰のものなのかという見当はついていた。
勢いよく後ろを振り向けば、案の定そこには、険しい表情の美鈴がいた。
固い眼つきで、じっと咲夜の眼を見つめてきている。
咲夜はそれに、にやりと笑みを浮かべながら、唸るように言った。
「改めて、死に来たのね・・・」

その声を聞いた美鈴は、咲夜の殺気に威圧され
「うぅ・・・っ」と呻きながら、息を呑み、次いで、真っ直ぐに向けられていた視線を逸らした。

「ふん・・・」
嘲るように鼻を鳴らした咲夜は、ついで、さっさと手を離せと言おうとしたが、それよりも早く、美鈴は元の固い目線を取り戻していた。
今度は咲夜が息を呑む番だった。

そうして、美鈴が、その表情に相応しい硬い口調で、静かに言ってくる。

「咲夜さん・・・さっき図書館で、天狗の新聞を読みましたよ・・・・まさか・・・まさかとは思ってたけど・・・」

「・・・そう、か・・・」

「やっぱりそのグランチャーが悪かったんですね・・・！」

「・・・・・・っ」

美鈴は、咲夜の右腕を掴んでいた腕を離す。

が、それに続いて、今度は両手で咲夜の両肩を強く掴んだ。

そうして、彼女の身体を揺さぶりながら、捲し立てる。

「咲夜さん！そのグランチャーは危険です、乗っちゃいけませんよ・・・」

その声に、咲夜は応える。

「貴方には言っていなかったけど・・・あの新聞に書いてるオルファンは、幻想郷の生命力を吸い尽くし、滅亡させる恐れがある。それを食い止めるために、私とグランチャーは戦うというのよ・・・・貴方は、幻想郷が滅びる方がいいと？」

その言葉に、美鈴もまた驚愕し、言葉を失った。

が、彼女が言おうとしている根本的な問題はそこではなかった。

沈黙も一瞬だ。

すぐに気を取り直した彼女が、続けて言う。

「そういうことじゃないんですよぉぉ・・・それを止めるために戦うって言うなら、それはもう止めませんよ・・・ただ、今回は危険すぎます・・・オルファンのすぐ近くには、三体のブレンがいます・・・三体一ですよ！さすがの咲夜さんだってやられちゃいますって！」

「ふ・・・ふっふふ・・・・・・パチュリー様からも同じことを言

われたわ・・・が、しかし、あの方は、今の私を止めるだけ無駄だという事を察して、私を送り届けてくれた。それ以上に、私が決して死なないことを分かっているから・・・」

「・・・わ・・・私はそんなことは認めませんよ！・・・・・・・・咲夜さん、分かってください！グランチャーは、貴方を戦うための道具にしているんですっ。貴方の中の生命力を吸い取って、利用してるんですよ！そんな中で戦えば、例え勝ったとしても、貴方がどうなるか・・・っ」

「美鈴・・・貴方、私と共にグランチャーをすぐ傍で見てきたでしょう・・・グランチャーの誇りを重んじる性格に好意を抱き、助けようと申し出たのはどこの誰だったの？」

「わ・・・私ですよ・・・・・・・そりゃ、私だって、グランチャーのことは好きでしたよ・・・・・・・でも、今となっちゃもう、こいつを認めることができない！」

「・・・貴様・・・っ」

「咲夜さん、グランチャーの事は忘れましょう・・・・・・・こいつはもう、跡形もなく壊してしまうんです・・・紅魔館の妖怪の力は強力です。フランお嬢様のお力があれば、それだけでもこのアンチボディを破壊することはできます・・・・・・オルファンだって、幻想郷の妖怪の力を総動員すれば、破壊できます！そうですよっ！グランチャーの力だって必要ないはず・・・グランチャーだって、一体残らずやっちゃえばいいんですよっ！」

「美鈴・・・」

「え・・・・・・っ」

静かに咲夜の口をついてでた声。

そこには、何か憐れむような、冷たい感情が篭っていた。

直後、首筋の辺りが凍りつくような感覚に見舞われた美鈴は、咄嗟にその場から後ろに飛びのいた。

ちょうどその瞬間だった。
咲夜の振り抜いたナイフの刃の銀色に煌めく輝きが、美鈴の首筋を僅かに掠めた。
もう後１ｃｍ近ければ、頸動脈が掻き切られていた。
頭の中が真っ白になり、飛びのいた勢いのまま地面に着地し、そのままよろよろとよろめきながら、ついには地面に尻餅をついた美鈴。
全身を震わせる彼女の眼には、瞳を真っ赤に染め上げ、燃え上がらんばかりの怒りを見せつけながら、こちらにナイフを突きつける咲夜の姿があった。

ついで彼女の突き刺すような叫びが、美鈴の鼓膜を震わせる。
「私とグランチャーの間の絆が分からないから、そんなことが言える！私は、グランチャーが私の精神を歪めていることぐらい、当に承知だったっ！・・・貴方っ！もう私の前にその顔を見せるな！」
「・・・ぅ・・・ぅ・・・っ」

その叫びの次の瞬間には、咲夜の表情は少し落ちついたものになり、その声も多少は静かなものになる。
しかし、美鈴に対する憤りと、殺意にも似た感情は、収まる気配もなかった。
「・・・・・・いや、私の気持ちが落ち着くまで・・・それまでで構わない。この先絶対に、私の前に姿を見せないで・・・・・・次に貴方の顔を見れば、その瞬間には、千本のナイフを突き刺してやるわ・・・」
「・・・・・・さ・・・咲夜・・・」

咲夜は最早何も言わず、握りしめたナイフを懐にしまうと、そのまま踵を返し、美鈴に背中を向けたまま改めて装甲の上に乗り、グランチャーの胎内へと入っていった。

続けて、すぐさま装甲を閉ざしたグランチャーは、その肉体を、風すら起こすことなくゆっくりと浮き上がらせた。
そうして、直立した姿勢のまま、オルファンが存在するという地底の方角へと向けて、ゆっくりと動き出した。

その様子も、美鈴には最早、じっと見守ることしかできない。
咲夜のナイフに抉られて間もない左肩の傷が痛み、美鈴は、「く・・・っ」と呻きながら、その傷を右手で押さえた。
そうするころには、咲夜を乗せたグランチャーの姿は、空にかかる薄い霧に包まれて、見えなくなった。

尻餅をついた姿勢のまま、放心したように空を眺めていた美鈴は、そのままゆっくりと上体を倒して、地面の上に、大の字になっていた。

そうして次の瞬間、彼女は、溜まる涙を隠すように眼をきつく閉じ、振り絞るような声で、呻いた。
「グランチャー・・・あんた、なんでこんなことしちゃうんだよぉぉ・・・っ！」

グランチャーに対する好意は、まだ完全には消えていない。
だが逆に言えば、そのほとんどはもう、無かったもののように消え去ってしまっていた。
まだほんの僅かにある、彼の者を認めようとする心も、もう自分自身で感じることができなかった。

※

思っていたよりかは早く、新聞の配達は終わった。
しかし驚くべき・・・というか、望んではいたことなのだが、妖怪の寺である命蓮寺に新聞を届けた時、ちょうど一枚のプレートがその境内に落ちついたのが見えた。
どうやら、ここをリバイバルの場所として決めたようである。
文も当然びっくりしたが、それ以上に驚いていたのが、命蓮寺に住まう（修行している？）妖怪達だ。
プレートのこともブレンのことも当然知らない彼女らには、新聞をよく読んで、プレートからアンチボディがリバイバルした際には、思うように行動してくれるようにと伝えておいた。
また、機会があれば、地底にも来てほしいとも伝えた。

プレートは、ただ命蓮寺に落ちついたというだけで、リバイバルする様子はまだなかった。
もちろん、このプレートがブレンではなくグランチャーのプレートである可能性もある。

また、命蓮寺の妖怪達は、まだブレンというものがどういうものなのか分からないので、まずはしっかりと付き合って見極めてみてから、いろいろ考えさせてもらうと言っていた。

お寺のお坊さん達に限って悪いことをするはずがないだろうしと、ひとまずは好きなようにやらせて、任せることにしておいた。

そういうことを経たうえで、天魔への報告も終えた文は、続けて、命蓮寺のようなことがないかどうか、周辺を再度捜索してみた。が、まだ他のプレートはどれもどこかに落ちついたりはしていないように見えた。
動向すらも把握できないプレートもまだ十何個とある。

とにかく、命蓮寺のお坊さん達が、ブレンにせよグランチャーにせよ、アンチボディの面倒を見てくれるらしいということが分かっただけでも、収穫はあった。
今後は、またこまめにあそこにも取材をしにいくべきだろう。

そうして、ようやく地底へと戻るため空を滑空していた文だったが、突然彼女の眼に、その姿が見えた。

紅魔館の上空を通過するときに見た真っ赤な色のグランチャーが、直立不動の姿勢で飛んでいたのである。
すでに紅魔館からは大分離れた位置だった。
明らかに、何らかの目的があって移動しているように見える。
遠方で停止しつつ、迷いなくまっすぐに進むグランチャーの進路を計算してみた文。
その先にあるものは・・・

「あやぁ～・・・こりゃ大変・・・っ」
彼女は思わず、声を漏らした。
グランチャーが向かっているのは、ほぼ間違いなく、オルファンだった。
地底とかつての地獄がある方向になど、一体他に何の用があるというのか・・・

間違いなくこのグランチャーは、オルファンを目当てで進んでいた。
そうなれば、頭の中で思い描ける事態はただひとつだった。

文は、向こうに気づかれないよう、回り込むような軌道を取りつつ（仮に見つかっても振り切れるだろうが）、最大速度で地底へと向かった。

第九話　その2

さとり達は、中庭にでてブレンの姿を眺めながら、一度ブレンと共に、地上へと散歩に出てみようかと考えていた。
最近ブレンは、ずっと中庭で座り込んでいるばかりで、身体を動かしていないように思える。
オルファンの調査のためにと、地上に出ることは何度かあったか、それにもひと段落ついた今、この先ブレンが外に出ていくような用事はない。
長い暇が出来てしまうかもしれなかった。
ブレンの生態が人間や妖怪と同じだとは思えないが、さすがに運動不足で健康に悪そうだとも思える。
たまには、思うように身体を動かせてやったら、きっとブレンだって喜んでくれるはずだろう。
そんなことのために、ブレンはともかく地底の妖怪であるさとりが地上に出るのは気が引けるが、地上に出なくとも、旧都の上空を飛びまわるだけでも案外楽しいかもしれない。

そうと決まれば、早速実践してみよう。
それで実際にブレンが楽しく思ってくれるのなら、またこまめにブレンと一緒に地獄の空に繰り出すのもいいだろう。
勿論、こいし達も一緒につれていく。

ブレンが開いた装甲の上に乗り、こいし達に対して、

「ほら、乗って」と呼びかけたさとりは、次の瞬間、猛スピードで中庭に降り立った文の姿を見た。
どうやら、新聞の配達も終えたらしいが、その表情は眼に見えて慌てていた。
こちらの方を向いた文は、意外そうにびっくりして、こう言ってくる。

「さ、さっすがさとりさん！私が伝える前に行動を起こすとは、ニュータイプのお力ですね」
「はい？」
（いろんな意味で）何を言っているのか分からない様子のさとりの傍に近づきつつ、文は、
「冗談言ってる場合じゃないや・・・」と自嘲しつつ、こう伝えてきた。
「すぐにブレンを連れて外に出て下さい・・・おぉっと、こいしちゃん達は連れていっちゃ駄目ですっ」
「どうしたんですか？」
「グランチャーがオルファンに接近してるんです。十中八九、何か起きますよ」
「えぇっ？」
「魔理沙と輝夜様にもすぐに伝えにいきますから、とにかく早く出て下さいね・・・多分、戦闘になります。向こうは一体だけだから、問題はないと思いますけど・・・・・・二人は屋敷の中ですね？」
「は・・・はい。それぞれに割り振られた部屋の中にいると思います」
「分かりました・・・んじゃっ！」
口早に伝えるだけ伝えると、文はすぐさま、まだ屋敷の中にいる魔理沙と輝夜に事態を報告するべく、地霊殿に屋敷の中へと入っていった。

あまりに突然のことだったが、事情はちゃんと理解できている。
ブレンの差し出す手のひらに乗ろうとしていたのだが、それもできない事態になったため、後ずさりしつつ、こいしが不安そうな声で言う。
長い暇などは来なかった。
ブレンが再び外に出ていく用事が、すぐに出来てしまったわけだ。
しかもそれが・・・

「グランチャーが来るの？」
「ん・・・グランチャーがブレンの敵だとは決めつけたくないけど・・・襲われてしまえば、仕方がないわ・・・」
お燐が続く。
「行くんですねぇ？気をつけてください・・・」
お空も、心配そうに、
「さとり様ぁ～・・・貴方が死んじゃったら、私達は泣いて過ごしてくしかないんですからね？」と言う。

それを聞いたさとりは、険しかった表情を少しだけ緩めて、小さく頷きながら応えた。
「大丈夫・・・魔理沙さんや輝夜様もついてる・・・・・ブレンにも、マリサブレンとカグヤブレンがついてる」

そうして、ブレンの胎内へと入る。
装甲が閉ざされ、ブレンが、ぶるぶると鳴き声を発した後に、こいし達に見守られながらゆっくりと中庭から飛び立った。

軽い気持ちで地上には行けないと考えていた矢先だったが、結局再び青空の下へと出ていくこととなった。
だがそれは、散歩のためでも、ブレンとの交流を深めるためでもない。
グランチャーという、ブレンと相反する者を、（まだ決まってはいないが）迎え撃つためなのだ。
さとりとサトリブレンはまだ、グランチャーと戦ったことは一度もなかった。
だからとは言わないが、彼女には、ブレンと同じアンチボディであるはずのグランチャーが、ブレンを襲うということがいまいち信じられない。
だが、魔理沙と輝夜は、間違いなくグランチャーはブレンの敵だと言っていたし、グランチャーに乗っていた妹紅は、その当時のことを、改めて考えればやはりいい状態ではなかったと、グランチャーのことを認めた上で語っていた。
グランチャーとブレンが戦うことは、ある種の天命と呼べるものなのかもしれない。

そうである以上、地上へと抜け、遠くに佇むオルファンの姿を見たさとりは、ブレンの同種である存在を倒す覚悟を、たとえ嫌でも決めなければならないことを実感した。

グランチャーはもしかすると、オルファンを壊そうとするかもしれない。
それを防ぐため、オルファンの近くに陣取ることにし、その方へと動いていくサトリブレンに遅れて、マリサブレンとカグヤブレンも地上へと出てきた。
魔理沙も輝夜も、すでにグランチャーの接近については知らされている。
二体のブレンがくるよりも早く、文が、地上で調査を続けている河

童と勇儀に対し避難するように呼び掛けに向かっている姿もさとりには見えていた。
河童のトレードマークらしい緑色の帽子が、はるか眼下でぞろぞろと動いているのが見える。

オルファンの前方、女性の形をした彫刻のようなものを背後に負うような形で宙に留まったサトリブレン。
そのすぐ傍に、マリサブレンとカグヤブレンも静止した。
オーガニックエナジーによる通信で、魔理沙が呼びかけてくる。

（連携して迎え撃とうぜ）
「は・・・はい」
さとりは、いよいよもって近づいてきた戦いの時への不安を隠しきれない声で応えた。
まだグランチャーが敵であり、戦わねばならないと確定しているわけではないが・・・頭の中では、すでに戦闘が不可避なものであるという考えが凝り固まってしまっていた。
さとり自身は、決して戦いたくなどないのに、状況がそう思う事を余儀なくさせているようだった。

そしてまた、この状況においてさとりの持つ能力は、より敏感に研ぎ澄まされていた。
少なくともさとりは、そうであることを自覚できていた。
オーガニックエナジーに乗って伝わる魔理沙の精神に、しこりのような何かがあるのを感じた。
その何かが何なのかは、考えるまでもなく魔理沙の方から教えてくれた。

（文は、ここに接近しているグランチャーを、最初紅魔館で発見したと言っていた・・・）

「紅魔館？」
聞き返すさとりに続いて、輝夜が言う。
（あぁ、そういう場所もあったわね）
（あぁ・・・実を言うと、あたしの知り合いも多いんだ。そこにはな・・・・・多分件のグランチャーにも、あたしの知ってる誰かが乗っている・・・）
全てを語らずとも、魔理沙の言おうとしていることは分かった。
さとりは、緊張しながらも微笑を浮かべて、応えた。
「大丈夫です。グランチャーに誰が乗っているとしても、その方を殺めるつもりはありません」
（もしものときは別だけどねぇ）
さとりに続いた輝夜の現実的な発言も、仕方がないものではある。
魔理沙は二人の言葉に、ただ、「ん」とだけ応えた。

そして、その瞬間だった。
さとりの脳の奥の方で、ちくっと刺す鈍い痛みのようなものが感じられた。
同時に、ねっとりと絡みついてくるような感覚でもある。
咄嗟に前方に眼を向けたさとりは、まだ昼にもなっていない青空の中に、豆粒のように小さく映る、深紅の影を見た。
「・・・・・っ」
同時に、腹の底から湧き出てくるような具合の悪さを感じて、息を呑んだ。そうすることで、こみ上げてくるものも一緒に呑み下そうとした。
間違いない、あれはグランチャー・・・

（来たな・・・）
魔理沙が呟く。
続けざまに、輝夜が大声で言った。
（ホントに一体だけだわ・・・どうする？先手必勝といっちゃおうかっ？）

「は・・・はいっ！」
さとりは、咄嗟に応えた。
オルファンへの危険を減らすためにも、可能な限り向こうをオルファンに接近させないことが先決だった。

さとりの返事を聞いた魔理沙と輝夜は、すでに覚悟を決めているようだった。
少なくとも、決めていると自分自身では思えているようだった。
すぐさま加速をかけ、段々と近づいてくる紅い影へと向かっていく二体のブレン。
さとりは、未だ覚悟も完全に決めることはできず、胃液と共に吐き出してしまいそうな不安も止まないままに、その後を追うことにした。
サトリブレンが、遅れて二体を追随する。

そんな中だった。
さとりは、未だ視界の中で、ようやく四肢があることが分かる程度に小さく映っている紅い影から、その身体の何倍も大きな殺気の炎のようなものが発せられているのを見た。
その炎の熱気が自分の身体にまで伝わるのを感じたさとりは、咄嗟に叫んだ。
「き・・・来ますよっ！」
返ってきたのは、魔理沙、続いて輝夜の、訝しむような声だった。
（来る・・・っ？）

（うそぉ・・・？）

何が来ると言えば攻撃が来る、というのは言わなくても分かったらしいが、まだ武器を持っているかも分からない、そもそもグランチャーであることがようやく間違いないこととして認識できたような相手が、これほど遠く離れたこちらに攻撃を放つとは、二人には思えなかった。

が、さとりの焦燥した叫びに感化され、マリサブレンとカグヤブレンが、ひとまずその場から離れる。

サトリブレンも、当然退避していた。

遥か遠くで、何か小さな淡い光が揺らめいたように見えた。

その次の瞬間には、その光はばっと広がって、さとり達の視界をその強い輝きでほとんど真っ白に染め上げた。

光が空気を押しのけるその風圧さえも感じることができそうな勢いで迫った光・・・チャクラの光が、ちょうど前の一瞬ブレンがいた場所を通過し、そのまま遠方へと流れていく。

「あぁっ！？」

驚嘆するさとりは、思わずブレンを急停止させ、背後へと振り返らせていた。

あの光、後方にいるオルファンにまで伸びるのではないか？

その不安も見事的中し、光は、真っ直ぐにオルファン目掛けて飛んでいった。

だが、すでにブレン達の傍を掠めた時には、光の威力はある程度減衰していたらしく（オーガニックエナジーは空気抵抗により減衰するのか？あるいは単純に、収束していたチャクラが拡散したか・・・）オルファンの身体の一部に直撃しつつも、その金色の肌に傷一つつけることが叶わなかった。

どうやらオルファンもアンチボディと同様、チャクラによる薄い膜を展開しているらしい。
ブレンやグランチャーが展開するチャクラシールドよりかは弱く、さとりでさえ頑張れば破ることができそうなほどのものだったが、拡散したチャクラフラッシュを受け流すことはできるようだ。

だが、チャクラの光と熱と共に飛来した言いようのない殺気は、一切殺されることもなければ、オルファンのチャクラシールドによって流されることもなかった。
そうしてこれは、まだグランチャーとは友好的に付き合えるかもしれないと考えていたさとりの中の楽観的な考えを、完膚なきまでに打ち砕くこととなった。

※

すでに、グランチャーの胎内にいる咲夜には、遠くでも、小さいながらブレンの姿も見えていたし、金色に輝くオルファンの姿などは、すでに眼を凝らさずともはっきりと視認することができた。
同時に、グランチャーの中に湧き上がった煮えたぎるような熱を、咲夜は自分の中のオーガニックエナジーと相乗させ、強烈な一撃としてソードエクステンションから放った。
アンチボディの、上か下の半身ならそのまま飲み込めそうなほど巨大な光が、オルファン目掛けて真っ直ぐに飛ぶ。
しかし、その直線上に位置していたブレンは光を難なく回避し、オルファンにも、命中はしたが損害は与えられていないらしかた。
それも仕方がないか、まだこちらと向こうの距離は、何百mと、下

手すれば１ｋｍ以上は離れているようだった。
そんな位置では敵の姿でさえはっきりとは見えない。一応、見えるには見えるのだが・・・
打ち放たれたチャクラ光も、拡散して減衰してしまうのだろう。
それが分かった以上、咲夜もグランチャーも、効果のない、無駄な攻撃を放つようなことはしなかった。
敵は向こうからこちらに接近している。
無理に先制は仕掛けず、接近したところで確実に撃破すればいい。
実際に、一斉にこちらを襲ってくるであろう三体の敵を目の当たりにして尚、恐れよりも自信の方が上回っていた咲夜は、スリットウェハーにもたれかかり、そこから伝播する熱に身を委ねながら、にやりと笑みを浮かべた。
グランチャーもまた、その意志は不敵であった。

※

「・・・・・・」
何であれオルファンが無事であったことにほっとひと息つく間もなく、さとりの耳に、魔理沙の声が聞こえる。
（オルファンが無事みたいなら、ぼーっとしてんなよっ）
そうして、サトリブレンの静止に驚き、釣られて止まっていたマリサブレンとカグヤブレンが、再度前進を始める。
サトリブレンも、慌ててその後を追っていった。

今の一撃は、威力としてはブレンの傍を掠めた時は、ブレンバーから放たれるチャクラ光と同じほどの威力もあった。

だが、精神的に作用してくるダメージはそれ以上であると言えた。
その外見以上に、カグヤブレンが怯えてしまっていることが、輝夜の困ったような大声から伝わってきた。
（あぁ～、大丈夫だって、心配ないってさ。ほら、もう攻撃は来てないし、今のところは大丈夫よ！・・・はぁ～あ、私のブレンって臆病だからヤだわぁ・・・）

それに、魔理沙の声が続く。
カグヤブレンが臆病者であるとして、マリサブレンの方はその場への適応力が高く、捨てろと言われれば、死ぬことへの恐怖すらも捨てられる冷静さがあるようだった。
もちろん魔理沙は、そんなブレンに、死ぬことを恐れるな、などとは命じていない。

（怖がってんなら、あたしのブレンが出来る限り助けてやるさ・・・出来る限りだけどな）
かくいう魔理沙は、己のブレンに対し、その冷静さを仲間を助けることに使えと命じていた。
そしてそれを実行してくれるのが、マリサブレンであるはずだ。

そのことを、自身の能力で感じつつ、一方で、さとりは頭の中でこう呟いた。
――なら、私のブレンは一体・・・？ブレン・・・貴方はこの状況で、どうやって戦うの・・・？――

そのさとりの心の声はブレンに聞こえた。
だがブレンは、はっきりと応えてくれない。
ただ、『戦うのは嫌だ』。そう応えるだけだった。
サトリブレンは、誰にだって優しくしたいと思っていたから。敵であるグランチャーにだって。

そう語るブレンのことを批難することもできず、さとりはただ、スリットウェハーにもたれかかって、じっとその声に耳を傾けていた。
戦わなければならない状況で戦うことを拒もうとするのは、正しい心構えではないだろう。
だがだからといって、はっきりと間違っていると言えるような者には、彼女はなりたくなかった。

そんなことを考えている中、魔理沙が言う。
（あたしのブレンが、敵に突っ込んで引き付ける。で、輝夜とさとりはそれを援護してくれ。チャンスがあれば、敵をやっつけるんだぜ。いいな？）
輝夜の、（しょうがない、分かったわ。いい所は私が頂いとくから）という返事からやや遅れて、考えることに屈託することをやめたさとりも、慌てて、
「は・・・はいっ」と応える。

事態は待ってくれない。
紅い色のグランチャー、みるみる内にその姿を大きくしていく。
ブレンとはっきりと区別をつける基準となるその特異な形の頭部もはっきりと眼に見えるようになった。
そして、そこにあると思われる眼にあたるであろう部分から、鋭い眼光が真っ直ぐに飛来し、下腹部のあたりを突き刺してくるような感覚に、またさとりは気分が悪くなった。
思わず、振り絞るように呻く。
「・・・げっそりする・・・っ！」

その微かな声と同時だった。

互いのアンチボディは、それぞれの武装の有効射程に入る。
同時に、マリサブレンがブレンバーの銃口を突きつけ、チャクラフラッシュを一射したのが、戦闘開始の合図となった。

グランチャーがチャクラ光を回避するところを確認することなく、マリサブレンは続けざまに、左から回り込むようにして敵機へと接近を図る。グランチャーの注意がマリサブレンへと向いた。
すかさずその場に残ったカグヤブレンが、マリサブレンを援護するべくブレンバーを連射する。
マリサブレンに対し、ソードエクステンションを放ち迎撃しようとしたグランチャーだが、続けざまに飛来したチャクラ光にそれもできず、回避することを余儀なくされる。
輝夜の、彼女らしい不遜な声が、オーガニックエナジーに乗って聞こえてくる。
（なぁんだ、さっすが私のブレン！ビビってもやることはやれるのねっ）

その声を聞きつつ、さとりも慌てて、ブレンに攻撃するよう命じる。
しかしその瞬間にはもう、マリサブレンがグランチャーへと肉迫していたため、すぐに止めさせた。今攻撃すれば、マリサブレンを巻き込んでしまう。

側面から不意打ち気味に一撃を加えようとしていたが、さすがに、こちらに注意が向いていればそれも無理か。
横なぎに振り払われるブレンバーの刃を、グランチャーのソードエクステンションが受け止める。

チャクラ光のぶつかり合いによるスパークが発する中で、二体のアンチボディが鍔迫り合いをするような形となった。

そうして、魔理沙の言っていたチャンスとは、これのことだ。
ブレンバーを受け止めるために、グランチャーの背中がガラ空きになっている。
そこを狙い撃てば、撃破はともかくとして、かなりのダメージを与えられるはずだ。
さとりは、首筋の辺りがじわりと湿ってくるのを感じながらも、ブレンに命じる。
真っ直ぐに突きつけられたブレンバーの銃口が、グランチャーの背中にぴたりと合う。
当然、マリサブレンを巻き込まないよう、僅かに射軸をずらしてはいるが、それでもこのまま命中すれば、動きを鈍くするだけの打撃にはなりえる。
元々、グランチャーを完全に破壊するつもりはない。そうすれば、中に乗っているであろう何者かが爆発に巻き込まれて、死んでしまうかもしれないからだ。
あくまでも、動かなくなるぐらいがちょうどいい。
何とか、人を殺める嫌悪感を味わうことなく、戦いを終えられそうだ。
そう安心するさとりと共に、ブレンがチャクラ光を放つ。

が、さとりは、根本的な部分で考えが甘かった。
こうも容易く、戦いが終わるわけがなかったのだ。

気がついた時には、グランチャーの左腕から鋭いチャクラの刃が放たれ、それがマリサブレンの肩を掠めていた。

どうやらマリサブレンは、この攻撃を察知して直前に身を引いたらしく、大きなダメージを受けることはなかったようだ。
が、これでグランチャーは晴れて自由の身となった。

魔理沙としては、致命的なミスだった。
以前のグランチャーとの戦いで、左腕から放たれるチャクラの刃のことは分かっていたはずだ。
だというのに、ブレンバーにより相手の動きを封じることに終始して、左腕をフリーにしてしまっていた。
彼女の、
（しまったぜーっ！）という叫びが聞こえる。

そしてもうその瞬間には、グランチャーの姿はさとりの視界から、それだけでなく魔理沙や輝夜の視界からも消え去っていた。
次いで、サトリブレンの放ったチャクラ光が、何もいなくなった空を掠めてを通過していくのが見えた。

グランチャーは、決して消えたのではない。
素早く下方へと流れた彼の者が、すかさず反転し、下からすくい上げるようにマリサブレンに接近していた。
すでにその手に握られているソードエクステンションは、今まさに振り上げんと構えられている。
（うわっ！）
驚嘆しつつ、魔理沙はブレンを咄嗟に身構えさせる。
今度は向こうが放ってくる斬撃を、こちらで受け止めるのだ。
そして、状況としては前と変わらない。鍔迫り合いにより二体のアンチボディの動きは止まるはず。
ならば、今度はそうなった瞬間に、ピンポイントにチャクラ光を叩き込むべく、カグヤブレンとサトリブレンはブレンバーを構え、すぐにでも発射できるようにした。

そして、深紅の機体が、疾風が吹きつけるがごとくマリサブレンに肉迫する。
瞬間、ブレンは、ブレンバーの銃身を前方に構え、固く身構えた。
だが、グランチャーの構えたソードエクステンションが、振り抜かれることはない。
グランチャーはただ、マリサブレンと衝突するその瞬間軌道を急変させ、逆に上方へと流れていった。

（・・・あれ？）
魔理沙が、呆気に取られたように漏らした、その次の瞬間だった。
戸惑うような彼女の表情に、焦燥の色が上塗りされる。
（・・・しまっ・・・！）
敵の戦略に気がついた魔理沙が、ブレンにチャクラシールドを展開させる。
同時に、上方から放たれた鋭いチャクラの光が、ブレンの頭部へと直撃した。
チャクラシールドにより受け止められた光が、放射状に拡散していく。
しかし、拡散しきれない熱が、ブレンの装甲をわずかに溶解させた。

ブレンの頭上へと流れたグランチャーは、すぐさまソードエクステンションを構えなおし、チャクラ光を放っていた。
斬撃を放とうとしていた構えは単なるはったり・・・というよりかは、ブラフで、本命はこの一撃・・・いや、続けざまに放たれるチャクラ光の連撃だった。

（うそだろぉーっ！？）
（こいつめっ！）

魔理沙の叫びに、輝夜も続く。
マリサブレンの上空からまた軌道を変え、ブレンの周囲を変則的に動き回りつつチャクラ光を放つグランチャーを撃ち貫くべく、ブレンバーを連射する。
が、時には直線的に、時にはS字を描くように目まぐるしく動きを変えるグランチャーを捉えることができない。
そして、そのような動きをするグランチャーから続けざまにチャクラ光を浴びせられるマリサブレン。
どうにかこちらも動き回ってそれを回避しようとするし、こちらを取り囲むような動きをするグランチャーを振り切ろうともする。
しかし、向こうはこちらの動きを読んでいるかのように、冷静に追いすがってくる。
放たれるチャクラ光も狙いが的確であり、十何発と放たれた内、回避できている数よりも命中している数の方が多かった。

いやらしくブレンに命中し、チャクラシールドを展開するためのオーガニックエナジーを削ぎ落していくチャクラの光。
このままでは、シールドの強度が減り、攻撃を防ぐことができなくなる。そうなれば、待っているのは、元魔法使いであるどこぞの僧侶よりも一足早く、涅槃へと至る道だけだ。
（・・・ど、どっちかっ、助けろぉーーーっ！）
これぱかりは自分達だけで対処しきれず、振り絞るように救援を求めた魔理沙。

その声に応えたのは、さとりだ。
「今いきます！」

戦いの空気に、そして、予想以上に強力なグランチャーの力に圧倒され、ずっと恐怖したままだったさとりと、彼女のブレン。
それは、彼の者の消極的な攻撃にもはっきりと眼に見える形で現れ

ていた。
しかし、マリサブレンが危険となった今の局面になって、何故だか恐怖はどこかへと吹き飛んでいた。

このままでは、魔理沙とブレンが死んでしまう。
そんな認識が脳内を疾走したその瞬間には、『なら助けなければ』とう考えが稲妻のごとく全身を巡って、恐怖を吹き飛ばすかわりに、強烈な行動力をさとりに宿していた。
サトリブレンが動き出したのは、魔理沙の叫びが聞こえるよりも早くだった。

サトリブレンの俄然素早くなった行動に驚きつつ、オーガニックエナジーに乗せて輝夜が叫んだ。
（ばっきゃっぷ（backup）するよぉー！）
カグヤブレンが、マリサブレンを援護するサトリブレンをさらに援護すべく、目まぐるしく動くグランチャーの牽制のために、向こうが動こうとする軌道を予想して、それが正解であるかは気にせずとにかくブレンバーを撃ちまくった。
さすがに、やたらめったらに乱射されれば、グランチャーの方も、まぐれあたりを恐れて、大胆な動きはできなくなる。
結果的にそれが、変則的だった敵の動きを、ある程度予測できるほどに単純化させることには成功した。

これならば、魔理沙も何とか敵の猛攻から抜け出せそうだ。
だが、すでにサトリブレンは、ブレンバーを構えて、グランチャーに肉迫している。
その勢いに任せて、そのまま突っ込ませた方がいい、今度はこちらがさとりを援護する番だ。

（よぉし、いけぇ！）

魔理沙の叫びに、さとりが呼応する。
「いきまぁーすっ！」

ブレンが、ブレンバーの刃を勢いよく横なぎに振り抜く。
だが、チャクラ光を纏った鋭い刃は、グランチャーを捉えることはない。
その身体を掠めることもなく、何者をも存在しなくなった宙を掠め、光が空気を払う、ぶおんという音を響かせるだけだった。

「え・・・っ？」
唖然とするさとりだが、その次の瞬間、脳内での戸惑いの全てが、恐怖へと変貌した。
股の下から頭の先まで、太い杭で打ちこまれ、貫かれるような、今まで感じたことも無い感覚に、さとりは自らの身体が固まってしまいそうになった。

が、それではいけない。
何とか、ブレンを後ろへと下がらせようとした、その瞬間だった。

さとりの眼の前に、巨大な薄い、オーロラのような光が柱となって出現していた。
ブレンの下方に回り込んだグランチャーが放ったチャクラ光が、すぐ眼の前を通過していたのである。
その光は、間近で見れば、透き通った清流に流れる生命の営みのごとく美しいものには見えた。
が、例えそう見えたとしても、さとりにとってはそれが自分達を地獄へと誘う送り火のように見えたし、実際それは間違いではなかった。

もしブレンの後退が少しでも遅れていれば、この光はブレンを直撃し、チャクラシールドすら展開してないその身が、一撃で葬り去られていたことだろう。

チャクラ光はすぐに通過し、見えなくなった。
だがさとりの網膜には、薄い緑色とも、青色ともつかない光が、ずっと色濃く焼き付いている。
そうして、それに上塗りするように、続けざまにサトリブレンの眼の前へと躍り出たグランチャーの真っ赤な色と、彼の者が突きつけるソードエクステンションの銃口が瞳を通り過ぎる。
すでにそこからは、今まさにチャクラ光が撃ちだされんと、その淡い光を漲らせていた。
そこから放たれる鋭いチャクラの矢に貫かれれば、妖怪であろうと、死ぬことは免れない。
ブレンもまた、チャクラシールドの展開は今からでは間に合わなかったし、恐怖におののいた身体では、まず満足に動くことさえできなかった。
最早、迫り来る死を受け入れるだけ。
せっかく恐怖を振り払い勇気を得たというのに、それも最早、消え去りかけていた。

（こいつ、戦いなれてるっ！？）
という魔理沙の驚嘆が聞こえたような気がするが、それ以後は、音と呼べそうなものは何も聞こえなくなってしまった。
空気の流れるような音も。
自分の心臓の鼓動の音さえも。

妖怪として生まれてきた以上、死を実感するようなことは滅多にな

いだろうと考えていたさとりだったが、その滅多なことが、今起こってしまっていた。
さとりはこの時初めて、人間が死ぬ時に見るという、走馬灯というものを体感することができた。
今まさに放たれたチャクラ光が、スローモーションとなってゆっくりと膨れ上がり、徐々に真っ直ぐな直線のような形を成すのを見つめながら、恐怖で動けなくなったさとりは思った。

死にたくない。
同時に、殺したくないとも。

――こ・・・こんな簡単に、死んでしまうものなの？・・・・・・・こいしも、お燐も、お空も、私に死んで欲しくないって言ってたのに。私も、大丈夫だからって・・・・・・・でも、なんにも大丈夫なんかじゃなかった・・・このままじゃホントに、みんなが泣いて暮らしていくことになるかもしれない・・・・・・・それって・・・――

ブレンもまた、さとりと共にこの、一秒が十秒にも一分にもなる時間を共有していた。
そして、死にたくないという心もまた・・・

――そうよ・・・ブレンだって死にたくない。私を死なせたくない・・・・・・それは、私だって同じよ・・・せっかく友達になれたブレンを、哀しませながら殺したくなんか・・・・・・・だったら・・・それなら・・・！――

今まさに、チャクラの光は眼の前を優しい恐怖で照らしている。

この恐怖が身体を包み込んだ時、さとりはブレンと共に死ぬのだ。
だが、さとりとブレンは、この期に及んで諦めなかった。
生きようとしていた。

――まだ、何かできることがあるはず・・・っ。私とブレンの力を合わせれば、この状況だって、切り抜けられる・・・・・・私達だけじゃない・・・オルファンさん！貴方がブレンの母なる存在だというのなら、お願い、私達を守って・・・私達が、生きているだけの・・・力を授けるのっ！・・・・・・・見返りが欲しいというのなら、貴方の望みを、叶えてあげるから・・・・・・・――

「だからっ！」

※

黒いブレンパワードは、中々に戦える。
薄黄色のブレンも、消極的だが弱くはなさそうだ。
その一方で、薄い紫色のブレン。こいつは・・・

咲夜は、戦闘を初めてから間もなく、一番先に撃破するとしたらこいつだな、と、サトリブレンを見て考えた。
とはいえ、眼に見えて標的にするような真似はしない。
あれしきの敵なら、片手間でも十分倒せると踏んだ。
だからこそ、真っ先にこちらに接近戦を挑んできたマリサブレンの相手をしつつ、隙を見て一気に仕留めることにした。

そして、こちらの動きを食い止めるために、向こうからのこのこと接近してきたのを見れば、咲夜のような者でも、舌舐めずりという三流じみたこともやってしまうのだった。

「止めるっ、グランチャー！」

直線的に接近を図り、見え透いた斬撃を繰り出す薄紫のブレンパワードの下方へと回りこみ、ソードエクステンションを叩き込む。運よく敵はそれを回避したようだったが、紙一重のところでかわせたことが逆に恐怖を植え付けていることが、咲夜とグランチャーには直観的に分かった。

現に、こちらがあえて敵の正面に姿を現すような真似をしても、大きな反応を示してこない。

委縮していることがはっきりと分かるのなら、その隙をつかない咲夜ではなかった。

動きの止まった敵機の急所、女性でいう子宮があるような位置に、ソードエクステンションを放つ。

後は、チャクラの光に貫かれたブレンパワードが、煙の雲となって膨れ上がるのを待つだけだ。

仮に回避できたとしても、そこからさらに攻撃を続けて、撃破する算段はできている。

そのためにも、敵の動きを見ることはやめない。

だが、次の瞬間その眼に見えた光景は、咲夜にとってはまったく予想だにしていないものであったし、そもそも何が起こったのか理解することすら困難なものだった。

チャクラ光が直撃するその瞬間、ブレンパワードが姿を消した。

素早い動きで回避したというものでもない。完全にその姿を消滅さ

せた。
直前まで、敵には相変わらず動く気配はなかった。
ただ、姿を消すその瞬間、ぶぉんという、何が振動するような音だけは聞こえたが・・・

とにかく、完全に姿を消すことなどはありえない。
認めたくはないが、敵は瞬間移動と呼べる機動で、どこかへと離脱したのだ。
ならば、どこかに敵の姿があるかもしれない。

一瞬だけ驚愕し、そこからすぐ冷静さを取り戻すことができた咲夜は、確かにさすがなものだった。
しかし、その一瞬の驚愕と、グランチャーに周囲を見回す動きをさせたその隙は、彼女にとっては絶大と表現してもいいものだった。

咲夜は、自分の視界から姿を消したブレンパワードがどこにいるのかを、背後から放たれるチャクラ光と共に分かった。
真後ろやや下方。完全な死角から放たれたチャクラ光であるが、グランチャーはどうにかそれを紙一重のところで回避する。
穏やかながらも鋭さも感じさせる光が、グランチャーの左足を掠める。

この攻撃を放ったのは、間違いなく、薄紫の敵、サトリブレンだった。
どうやらやはり、向こうは瞬間的にこちらの真後ろへと移動していたらしい。
頭の中では、そう冷静に判断することができた。
しかし同時に咲夜は、微かではあるが、誰であろうと明らかに眼で

見ることのできる焦りを露わにしていた。
瞬間移動をしたのはいいとして、どうやってそれをやったのかが分からなかったからだ。

連続して放たれるチャクラ光を回避しつつ、後ろを振り返るグランチャーと共に、視界の横の方に見えてきたブレンパワードの方へと身を乗り出すようにしながら、咲夜は叫んだ。
「何をしたのっ？ブレンパワードのクセして、私とグランチャーを出し抜くつもりかっ！」

※

チャクラ光がその身を包み込む一瞬、さとりは、何か強い力か、あるいは大雨の中の濁流のようなものに乗って、どこかへと流されていくような感覚に見舞われた。
それは流れるというよりかは、飲み込まれて、巻き込まれるといった方がいいのかもしれない。
魂ごと身体が持っていかれるような．．．

その感覚は一瞬だった。
そして、その一瞬が過ぎた後は、何故か深紅のグランチャーの背中が、視界の中に映っていた。
この状況に最も混乱したのは、間違いなくさとりであったろうが、その一方でブレンは、自分が何をやったのかを、理解していた．．．というよりかは、思い出していた。

隙だらけの敵機に向けてブレンバーを発射する中で、ブレンはさとりに、自分達が何をやったのかを伝えた。

オルファンの周囲には、眼で見ることはできないが、オーガニックエナジーが密集している帯のようなものがいくつか出ている。それを《バイタルグロウブ》というらしい。

そのバイタルグロウブは、帯とも言えるし、オーガニックエナジーの運河とも呼べるものだった。

そして、バイタルグロウブの及ぶ範囲内にアンチボディがいれば、その場のオーガニックエナジーの流れに乗って、瞬時に移動することができるという。

それが、《バイタルジャンプ》であった。

グランチャーが、チャクラ光を回避しつつこちらに振り返るのをその眼に映しつつ、さとりは呟いた。

「それを、私達がやったの？・・・・・・・いえ・・・オルファンがそうさせてくれたのね・・・」

そして、ブレンは言う。

オルファンから発せられるバイタルグロウブの数は、決して少なくはない。

この戦場においても、いくつかのオーガニックエナジーの流れができていた。

それに、例えば、バイタルグロウブに乗って跳躍したのなら、この場はそのバイタルグロウブの延長線上に位置しているだろう。

となれば、もう一度バイタルジャンプをすることが可能だ。

決して怯むことなく、臆することもなく、ソードエクステンションを構えながらこちらに再接近を図るグランチャー。
さとりの心から、膨れ上がっていた恐怖が再び消えていくのが、彼女自身はっきりと感じられた。
新たに授けられた（最初からあるものに気づいた）ことで、余裕ができたということもあるかもしれない。
肉迫したグランチャーが、力強くソードエクステンションを振り下ろそうとしたその瞬間、さとりは再び、自分達を包みこんでいるオーガニック的な流れに身を委ねることにした。

次の瞬間、さとりは再び、グランチャーの背中を、今度はやや上方から身降ろすような形で見ていた。
同時に、ブレンもまた戦う意思を強固にする。
ブレンバーを構え、すでに振れば刃が触れられそうなほどに接近していた敵にさらに近づき、至近距離にまで詰め寄る。
そうして、勢いよくチャクラを纏った刃を振り下ろした。
しかし向こうも、まさかとは思っていたのだろう。ブレンが背後に回り込んでいるとすぐさま判断して、グランチャーに素早い横回転をさせながら、ソードエクステンションを横なぎに振り抜かせていた。
二本のチャクラ光に包まれた刃が衝突し、電気のそれとはまた違う印象のスパークの光と、ソニックブームを生じさせる。

そんな中で、オーロラのように柔らかく、しかし実際は異様なまでに激しく苛烈なるそのスパークの光に照らされながら、さとりは、オーガニックエナジーに意思を乗せて、グランチャーに乗っているであろう何者かに呼びかけていた。
それもまた、バイタルジャンプという、ある種の離れ業を会得した（？）ことによる余裕が成せることでもあったし、さとりはただ純粋に、このグランチャーの乗っている者と話をしたかった。

そしてあわよくば・・・

余裕が出来たことで、さとりは、自分の中から消え去った甘い考えを、再び心の中に抱いていた。

第九話　その3

サトリブレンのバイタルジャンプに驚いたのは、魔理沙と輝夜も同じだった。
自分の援護に駆けつけてくれたサトリブレンが、そのままあっさりと敵に撃破されようとしていたその次の瞬間、その姿は魔理沙の視界から消え失せ、まったく別の場所へと移動していた。
遠目から見ても、ブレンが移動するその軌跡を見ることはできなかった。
奇跡でも起きたのだろうかという魔理沙の短絡的な考えを、彼女のブレンは否定した。
マリサブレンは未だバイタルジャンプの業を思い出してはいないようだったが、サトリブレンの行動が、決して奇跡などではなく、アンチボディの性質を応用したものであることだけははっきりと分かっているようだった。

それはつまり、同じアンチボディであるマリサブレンにだってできることであるし、もしかしたら、あのグランチャーにでもできることかもしれない、ということだ。
それが分かれば、魔理沙はすぐに本来の調子を取り戻すことができる。

彼女はさとりに対し、
「何かよく分からないが、いくぜっ！」と呼びかけながら、サトリブレンを援護すべく動いた。
輝夜もまた、それに続くようだ。

それと同時に、さとりがグランチャーに対し呼びかける声が、オーガニックエナジーを通して聞こえてきた。
サトリブレンとグランチャーが鍔迫り合いをする中で、彼女の声が響く。

（グランチャーに乗っている方！聞こえていますかっ？）
「・・・・・・っ」
魔理沙は、この期に及んで相手に話をしようとするさとりに戸惑いながらも、この呼びかけに対し応える者が、おそらく自分の知っている者であることを思い出した、息を呑んだ。
が、そんなことには構わない。

マリサブレンは問答無用に、サトリブレンとの鍔迫り合いで隙を見せているグランチャーを攻撃するべく、ブレンバーを構える。
そうして、深紅のアンチボディの側面から、真っ向唐竹割りに振り下ろした。
が、グランチャーが寸前のところでサトリブレンから身を引き、後退することでこれを回避することは分かっている。
魔理沙の目的は、とにもかくにも、一旦さとりと合流することにあった。

ブレンの性質の応用と聞いて、魔理沙の中には、あるひとつの戦法が浮かんでいた。
それに、サトリブレンの協力が必要だったのである。

だが、それを実行するよりも前に、こちらから距離を取るグランチャーの胎内からオーガニックエナジーに乗って響くその声が、魔理

沙の耳朶を打った。
（聞こえているわっ）

その声はやはり、魔理沙にはよく知っていた声であった。
今度はさとりに続いて、魔理沙が呼びかける番だ。
「あんた、咲夜だなっ？」
（・・・そうか、それには魔理沙が・・・・・・貴方らしい色合いのアンチボディに乗っているわね・・・）
その返答と共に魔理沙に向けられたのは、グランチャーが突きつけるソードエクステンションの銃口だった。
「うぅ・・・？」
呻き声を上げながらも、とにかくその場から退避し、グランチャーの放つチャクラ光を回避させる魔理沙。
やむを得ず、すぐ傍のサトリブレンと共に、応射のブレンバーを放ちつつ、魔理沙はさらに呼びかける。

「おぉい！あたしでも、容赦なくやっちゃうのかっ？殺せちゃうのかよ！」
一応なりには知り合い同士である魔理沙の声に対する咲夜の返事は、落ちついたものではあったが、同時に荒んでもいた、唸りのような声だった。
（ブレンパワードに乗っている以上、それも止むを得ない。しかし、グランチャーの使命はあくまでもブレンを撃破すること・・・・・・死にたくないのなら、動きを止めなさい。そうすれば、ブレンだけを殺めるように攻撃して、貴方の生命は助けてあげるから）
「・・・へっ・・・使命だって？どうかしちゃったようだなぁ、咲夜、あんた」
それに続く咲夜の声は、少しだけ語気が強くなっていた。
（どうかしているのは貴方達の方でしょう！オルファンの目的を知っていながら、それを黙認するようなことを・・・っ！）

その言葉に、魔理沙の心臓がどくんと跳ね上がった。
のみならず、さとりも輝夜も驚愕していた。

馬鹿な。
文の新聞には、オルファンの銀河旅行については一切記述していないはずだ。
もしかしたら、記事を読んだ上で、咲夜は考えることでオルファンの目的について気づいたのかもしれない。

・・・だとすれば、彼女の中の結論は大きく間違っている可能性もある。
それに賭け、魔理沙はあくまでもシラを切って、
「オルファンの目的？そんなものあるのかよ・・・だったら教えて欲しいもんだな」と言い返した。
それに対し、咲夜が返してきた鋭い声は、不必要なほどに素早く鼓動する魔理沙の心臓を、落ちつかせるようなものではなかった。
（目的については知らない・・・しかし、オルファンはそのために幻想郷のオーガニックエナジーを全て吸い尽くそうとしている！）
「・・・・・・っ！」

そのものずばりではないか。
銀河旅行という目的自体については分かっていないようだったが、幻想郷のオーガニックエナジーが吸収されることについては、何ひとつ間違いなどはなかった。
咲夜の推測は、完璧であったということなのか・・・

こうなれば、さらにシラを切り続けて、解答を渋るしか道はないだろう。
そう考えた矢先、輝夜が間抜けにも、
（なんでそこまで分かってんのぉーっ？）という素っ頓狂な声上げ

た。
それを聞いた魔理沙は、大慌てになって、輝夜に対し罵声を浴びせていた。
「おい！バ、？（バカ）っ！」
（あ・・・）
輝夜のこの声は、咲夜の考えが正解であることを示すものであったし、同時に、こちらが事実を隠蔽していることも示していた。

次の瞬間返ってきたのは、明らかな怒りを含んだ咲夜の叫び声であった。
（人々に対し事実を隠して・・・貴方達は、幻想郷を滅ぼすつもりなのっ！？）

※

まさか、あの霧雨　魔理沙がその片棒を担いでいるとは信じたくはなかった。
だが、向こうから図星だと白状してきた以上、オルファンが幻想郷を滅ぼそうとしていることはほぼ間違いないことであった。
咲夜は、そう確信するしかなかった。

そして、それほど重大なことを新聞に載せていないということは、明らかな情報操作であるだろう。
つまり、地底にいる者達、この魔理沙を含め、ブレンパワードを匿っている連中は、オルファンと共に幻想郷を滅ぼすつもりでいるということだ。

そうなれば咲夜は、自分と、そしてグランチャーのやろうとしていることが、絶対的に正しいことであることを、実感することができた。

何を考えているのかは知らないし、そして、何を考えていようと、幻想郷を滅ぼそうという者に容赦はしない。
咲夜の中に、ふつふつと殺意の熱が沸き立ってきた。

こちらに対し、さらに呼びかけようとしてくる魔理沙の声。
（咲夜、違うぜ！話はまだある！）
それに対し咲夜は、荒んだ声でこう応えるしかなかった。
「トチ狂って、全てを滅ぼそうとする者の言う事など、聞かないっ！」
（咲夜、おいっ！）
「やってやる・・・っ！」

咲夜の口から吐き捨てられたその言葉は、彼女とグランチャーの初めての戦闘の時、ブレンに乗る妖精達に向けた言葉であった。
そうして、妖精達や、あるいは魔理沙達が使うような『やる』という表現よりも、ずっと重く、恐ろしい意味合いを含んでいる言葉だった。
妖精に対しそれを実行した時の、冷ややかでありながら、地獄の熱のようでもある心を再来させた咲夜は、二体のブレンを瞬時に滅ぼしたその力を、今一度グランチャーに発揮させることとなった。

咲夜の中のオーガニックエナジーが、グランチャーの中の殺意と同調し、膨れ上がっていく。
しかしその一方で、グランチャーの動きはぴたりと静止してしまっていた。

その隙を逃すまいとしたのだろう。
薄紫色のブレンパワードがこちらに迫ってくる。
その動きを制止しようとする魔理沙の声が響いた。
（さとり、待てって！）
だが、ブレンパワードに乗る者・・・さとりと呼ばれた者は、その声を聞く以上に、接近と同時に振り下ろされるブレンバーの刃と共に、こちらに呼びかける声に意識を向けているようだった。

（咲夜さんとおっしゃる方！）
斬撃を受け止めるソードエクステンションとの衝突音と共に、高い声が咲夜の鼓膜を震わせる。
咲夜はそれに、
「聞かないと言ったでしょう！」と叫び返した。
それに構わず、さとりの声は続ける。
（オルファンは、必ずしも幻想郷の生命力を吸い尽くすわけではありません・・・ビープレートというものがあります！）
「なに・・・っ？」
これにはさすがに、咲夜も反応せざるを得なくなった。
グランチャーもまた、ビープレートの存在は知っている。
というより、彼の者のもう一つの目的が、このビープレートの入手なのである。
それを、ブレンパワードに乗る、さとりというらしい者も知っている。

咲夜は応えた。
「それが、幻想郷を救うものになるとっ？オルファンの目的を果たした上で・・・」
（そうですっ）

「都合のいい解釈をするんじゃない！ビープレートが何であるのか、分かりもしないのに！」
（分かりますよ！ビープレートは恐らく、無限のオーガニックエナジーを生み出すものです、それがあれば、オルファンの目的のために必要なオーガニックエナジーを全て補うことができるのです！）
「それを都合のいい解釈だと言っているのよっ！そんな確証があるの！？」
（あ・・・ありませんよ・・・ありませんけどっ！）
「なら何故っ！」
（せめて、やれることをやってあげなくっちゃ、オルファンが可哀想でしょうっ！？）
「センチメンタルなことをっ！」
（私達だって、最悪の場合は、オルファンを殺める覚悟はできています！）
「最悪の場合になってからでは、遅すぎるということが分からないのか・・・っ！！」

さとりの声に続いて、今度はまた別の声が聞こえてきた。
今度は、咲夜にとっては、魔理沙よりかは馴染みがないが、聞いたことはある声だった。
確か、迷いの竹林の輝夜とかいう・・・
（さとりぃ！今いくわよぉーっ！）

敵の斬撃を受け止めているグランチャーを、背後から攻撃するつもりらしい。
咲夜は、いっそ哀れなまでに、単調な敵の行動に嫌気がさした。
何度同じ攻撃を仕掛けてくるのか。
しかも、通用しなかった攻撃を、である。

咲夜は敵が、慢性的に戦闘経験が不足していることを察していた。
それに比べれば、すでに五体に達するほどのブレンを撃破してきた咲夜は、戦闘の技量において向こうを上回っていることはゆるぎない事実であるようだったし、それを自分の中の絶対的な自信にしている彼女も、間違ってはいなかった。

グランチャーは、いい加減辟易するかのように、緩やかに自身の身体を逸らす。
しかしそれは、後ろにではなく、横にだった。
ソードエクステンションの刃を傾け、押しあてられるブレンバーをそのまま刃の上を滑らせるようにして払いのける。
力強く押し込む勢いのまま、虚しく空を裂いたチャクラの刃と共に、サトリブレンの右腕が振り抜かれた。

素早く左にそれたグランチャーが、刃に背中を掠められながらも、自由になったソードエクステンションを、ブレンの頭部に突きつけた。
同時に、肉迫するカグヤブレンに対しては、左腕から打ちだされるチャクラの刃、ブレードヒルトを向ける。
ほとんど同時に、ソードエクステンションとブレードヒルトは放たれた。

そして、咲夜のオーガニックエナジーを吸収することで、自身の中の怒りを力に変えたグランチャーが放つ一撃は、誰の予想も超える、咲夜自身でさえ思いもよらない威力を発揮していた。

※

咄嗟に身体をもたげ、ソードエクステンションの射線から逃れようとするサトリブレン。
バイタルジャンプにより瞬時に退避しようとしても、すでにバイタルグロウブからは離れてしまっている。
後もう少しだけ後ろに逃げれば、オーガニックエナジーの流れに乗って跳躍できるのだが・・・もう間に合わない。
チャクラシールドを展開することで、可能な限り攻撃をやり過ごそうとする。
だが、それと同時に放たれたチャクラの光は、最早光とか矢とか束とかいう以上に、ある種の渦のようであった。
そしてブレンは、そこから逃れることができなかった。

瞬時にグランチャーから離れようとすることで、何とか直撃だけは避けることができたが、右半身がほとんどソードエクステンションの生む光の洪水の中に飲み込まれてしまっていた。
チャクラシールドであっても打ち消しきれない熱が、ブレンの身体を溶解させていく。
そしてさとりの身体にもまた、鋭い熱が浴びせられ彼女の神経を苛んだ。

「あぁぁ・・・っ!!?」

彼女は、またしてもすぐ眼の前にまで迫った死の実感に戦慄し、か細い叫び声をあげる。
しかしそんな中でも、冷静さを捨てることなく、チャクラの光に巻き込まれながらも、バイタルグロウブへと入り、その場から逃れる。
だが、冷静が残る代わりに、一度、いや二度恐怖を払拭した勇気が、狂暴な流れに乗って持っていかれようとしていた。

カグヤブレンに対し打ち放たれたブレードヒルトの光は、刃を通り越して、薄く広い膜を形成していた。
例えば、巨大な扇子を広げて、投扇興という遊びのように前に投げ出したような、そんな感じだった。
突如迫ってきた薄く広がる光の膜。
横に逃げることなどが不可能であれば、最早上下に逃げる他なかった。
が、カグヤブレンが回避行動を取ろうとしたその時には、すでにブレードヒルトの刃はブレンの腹部を真っ二つに両断しようとしているところだった。

――ま・・・間に合わぁぁあーーっ!?――
脳内でそんな絶叫が響きながらも、輝夜はとにかくブレンに攻撃をかわすよう、一心不乱に命じた。
出来る限り瞬発力を最大まで発揮して、上昇するブレン。
その加速度は輝夜にも、ブレン自身にも驚くべきものではあった。
しかし、迫り来るチャクラの刃を回避したと思った瞬間、ブレンの左足のつま先に、鋭い熱のような感覚が、一瞬だけ通過する。
チャクラの刃が、装甲を切断したのだ。

「ひ・・・ひえぁ～～～っ!?」
別にブレンと痛覚が繋がっているわけでもないし、ましてやブレン自身は、それほど苦痛を感じていないようだが、輝夜はまるで自分のことのような悲鳴を発した。その割には間抜けな声だったが。
切断されたのは、本当につま先の先であった、ブレンの再生能

力があれば、どうにかなりそうな程度の負傷である。
これなら、ブレンでも我慢できるのは当然のことだった。

上昇する勢いのまま一気に距離を取り、背中を見せてグランチャーから充分離れてから、改めて振り返りその姿を見るブレンと輝夜。
それでようやく、このグランチャーの戦闘力が、胎内に宿る者のオーガニックエナジーを吸収することで高められていることに気がついた。
つまり・・・

「なにあいつ・・・さっきまで一杯一杯だったのに、もっと強くなったっての？・・・どうかしてるってぇ・・・」

バイタルジャンプにより、ソードエクステンションの猛威から逃れたサトリブレン。
すでに、こちらを飲み込もうとしたチャクラの流れは遥か彼方に通過し、拡散して消滅していたようだ。

収束されたオーガニックエナジーがもたらす莫大な熱量を受けたブレンの左半身は、大分焼け爛れてしまって、その特徴的な頭部も、僅かに形がゆがんでしまっていた。
装甲の奥にあるスリットウェハーへのダメージは少ない。
まだどうにか再生することは可能だろうが、間違いなく多大な時間を有するはずだった。
人間だって、酷い火傷でも完治させることは不可能ではない。しかしそれには、気の遠くなるほどの歳月と苦労を要するものだ。

何より、ブレンは己の肉体を苛むダメージに、オーガニックエナジーを安定させることさえ困難な状態になっていた。
つまり、苦しんでいたのだ。

そのことがブレンの意思として読め取れてしまうから、さとりもその苦しみを共有してしまい、スリットウェハーに包まれたまま身を縮こませ、膝を抱えて震えていた。
「ひ・・・ひぃっ・・・・・・はぁぁ・・・・・・」
ブレンがどれほど痛いのかということが、はっきりと分かる。
それこそ、輝夜以上に自分のこととして。
血管の一本一本が煮えくりかえって、マグマのような血潮を、心臓へ、脳へと送っていくような気分だ。
唇を震わせ、きつく閉じた眼から涙を流しながら、さとりはただ、乾いた息を吐き捨てるばかりだった。
「殺意が・・・炎となって・・・私の心を・・・・・・焼く・・・っ！」

少しだけ遠くに見えるようになった深紅のグランチャーは、必要以上の動きを取ろうとはしなかった。
自身の中に漲る膨大なオーガニックエナジーを温存しているのか？
こちらをじっと睨みつけ、宙に漂っている。
さとりには、その静かに留まっている姿から、うっすらともやもやした霧のような、あるいは燃え上がる炎のようなものが放出され、得体のしれない何かを作りだそうとしているのが見えた。
あれと同じものが、少し前にも見えた。
グランチャーの、あるいはそれに乗る、咲夜という名の者が放つ殺気のオーラだ。
それが、さとりに対して不気味な幻視を見せつけていた。

向こうが、力を温存し確実な一撃でこちらを葬るべく、無駄な攻撃をしてこないことだけは救いだった。
もしこのまま敵が、獣のごとくサトリブレンを狙えば、もうさとりはこの世にはいない者になっていただろう。

ブレンと共に強く抱くことができていた戦う覚悟も、最早完全に萎えてしまっていた。

サトリブレンと共に、起死回生の策を実行しようとしていた魔理沙だったが、あの状態を見れば、さとりをこれ以上戦わせることはできないことは明確だった。
やむを得ず、比較的ダメージの少ないカグヤブレンをこちらに呼び寄せた。
「輝夜っ！こっちにきてくれっ！」

（分かった！）と返事を寄越して、ブレンを移動させる輝夜。
その隙をつき、グランチャーがソードエクステンションを一射した。
エメラルドのように美しく輝く光の柱が、その見た目とは裏腹に、地獄の炎となってカグヤブレンに迫るが、さすがにある程度距離を離して、動きを注視していれば、巨大な光の渦であろうとも回避することはできた。
勿論、チャクラシールドを展開しなければ装甲を溶解させられていたほどの熱が、伝播してくるが・・・

マリサブレンの方は、装甲が爛れたまま満足に動くことができそうにないサトリブレンを庇うように、そちらの方へと移動していく。

魔理沙と輝夜は、丁度サトリブレンの前で合流した。
同時に魔理沙が、サトリブレンの胎内のさとりへと呼びかける。
グランチャーはまだ積極的に動いてはいないようだが、油断はできない。
いつ攻撃を再開するか分からなかった。

「さとり、聞こえるかっ、聞こえてるか?大丈夫か!?」
大声で呼びかける魔理沙に、二、三秒してから、弱々しい返事が返ってきた。
(私は・・・大丈夫です・・・・・・で、でも、ブレンが・・・ブレンが・・・っ!)
「生きてはいるんだろうっ?」
(・・・はぃ・・・)
「なら、すぐに逃げるんだ、地底までな・・・もう戦うのは無理だぜ」
(・・・・・・・・・・・・・・)

さとりはしばらく黙りこんでいた。
だが、ゆっくりと踵を返し、よろよろと不安定な動きで地底へと向かっていくブレンを見れば、彼女の返事は聞かずとも分かった。
サトリブレンが後退するのを確認した魔理沙は、グランチャーの動きに注意しつつ、輝夜に呼びかけていた。
「いいか?ありゃ闇雲に戦っても勝てない・・・あたしに策がある」
(策?)
「というより、戦い方だな」

そう言った瞬間だった。
今まで静止を続けていたグランチャーが、突然猛烈な加速をかけながら、こちらに接近を図ってきた。

あくまでもその動きは注視していたため、魔理沙は続きを言うよりも早く、
「来るぜっ！」と叫んだ。

その時には既に、グランチャーはマリサブレンに対し眼と鼻の先ほどの至近にまで接近し、ソードエクステンションの刃を振り上げていた。
予想外・・・という言葉にも収まらない。アンチボディがこれほどの速度を発揮するとは、まさしく露ほどにも思わなかった。
天狗がようやく勝てるぐらいの素早さではないか。
搭乗者・・・即ち咲夜のオーガニックエナジーを吸収することで、速度まで上昇させたというのか。

咄嗟にブレンバーを構えていて助かった。
続けざまに振る降ろされる刃を、なんとか受け止めることができたのだから。
何度目かの、チャクラの刃同士の衝突。
だが、向こうのソードエクステンションは、銃身に宿るチャクラ光の鋭さも、刃を押してくる力もマリサブレンを大きく上回っていた。
このままでは押し負けるか、ブレンバーが切断されるかもしれない。

同時に、すぐ傍にいたカグヤブレンは、魔理沙を助けるべく至近距離からグランチャー目掛けて、ブレンバーを一射した。
どうせ命中はしないだろうが、これで一旦離れてくれればそれでいい。
だが、撃ち放たれたチャクラの光を眼の前に受けるグランチャーの次なる行動は、二人にとって予想していないものだった。
いや・・・予想はしていたが・・・

突如二体のブレンの眼の前から、グランチャーの姿が消えた。

標的を失ったブレンバーの刃が、虚しく空を切る。
この動きは・・・

「う・・・っ！」

まさかと思い、急ぎブレンと共に背後を振り返る魔理沙。
そのまさかは、見事に的中していた。

グランチャーはいつの間にかマリサブレンから遥か遠いところにいた。
そしてそのすぐ傍には、満身創痍のサトリブレン。
戦場から離れようとしていたサトリブレンを、追撃するつもりだ。
グランチャーは、サトリブレンがやったのと同じように、どうやったのかは知らないが瞬間移動したのだ。
そして今彼の者は、自らの眼前で驚愕するサトリブレン目掛けて、ブレードヒルトを振り下ろさんとしていた。
高々と掲げられた左腕からは、グランチャーの身の丈の二倍はありそうな長大なチャクラの刃が、オーガニックエナジーが不安定であるためか、燻ぶる炎のごとくゆらゆらと揺らめいていた。
薄く収束しているためか、ソードエクステンションのオーロラのような光とは違い、より色濃く、禍々しいまでの輝きを放っている。
揺らめきからは弱々しさにも似たものを感じるが、光自体の大きさと強烈な輝きを見れば、実際にその光が脆弱なものであることなどはありえなかった。
あんなもので切り裂かれれば、チャクラシールドを展開していようが何をしていようが、一撃で葬り去られる。

敵が、弱ったブレンを生かしておくのか？
それを考えておかなければならなかったのだ。
サトリブレンを、単独で逃がすべきではなかった。
遅れてそのことを痛感した魔理沙。

グランチャーとこちらの距離は遠い、今からサトリブレンを助けにいこうにも、間に合わない。
グランチャーがしたのと同じように、瞬間移動でもかけて一気に距離を詰められればいいのだが、マリサブレンもカグヤブレンも、その術はまだ会得できていないようだった。

万事休すとでもいうのか？
「よ・・・よせっ！」
最早そうする以外何もできることがないから、叫ぶしかない魔理沙。
だが、その叫びを、グランチャーが聞きいれる理由などなかった。
光の刃を高々と掲げ、それを一気に振り下ろすグランチャー。
揺らめいていた光が、俄然鞭のように鋭くしなり、サトリブレンを叩きつけようとする。

「・・・・・・っ！」
ブレンとさとりの死の瞬間に、息を呑む魔理沙。
だが・・・

これ以上戦うのは無理だと、逃げた矢先にこちらに追いついてきたグランチャー。
彼の者が掲げるブレードヒルトの光を目の当たりにしたさとりは、この数分の間に自分は、この世に遍く絶望の内の半分ぐらいを、一気に味わったのだろうな。ということを、不思議と冷静になった心で考えていた。

だがその冷静は、いよいよもって避けられそうにない死を目前にしての、空虚な冷たさであった。
同時に、空っぽになりそうな心の中で、ただ一つ、自分もブレンも、こんなところで死んで、生きてきたことに価値があったのだろうか。という哀しみが、ほんのりと熱く、しこりのように残っていた。
が、それも、後は消え去るだけ・・・
哀しみを感じることすら、できなくなる。

見開いた眼から光が消えたさとりは、次いでその眼をきつく閉ざすと、歯を食いしばり、せめて自分の身体が焼けていく痛みだけは和らいでほしいと願った。
そうして、グランチャーの振り下ろしたブレードヒルトが、一瞬だけ三日月のごとく大きく彎曲し、続けて撃ちだされる弾丸のごとき勢いでしなりながら、ブレンを切り裂こうとした。

濡れた手拭いで石の壁を思いっきりはたいたような、鋭い音が響き渡る。
だがそれは、チャクラの刃がブレンに命中し、その身体を両断する音などではなかった。
さとりは、覚悟も決められていなかった自分が、まだ死んでいないことに驚いた。
痛みもない。ソードエクステンションにより装甲が焼け爛れたブレンの苦しみは未だに心に伝わっているが、さとり当人のその細い身体には、何ひとつ傷はついていなかった。
そうして、きつく閉ざした眼を・・・光が再び戻った眼を見開き、前を見る。

そこには、ブレードヒルトを、両手を広げて受け止める一体のブレンパワードの姿があった。
強力なチャクラシールドを展開しているらしく、大の字になったブレンの前方には、例えば、オーロラを川の中に溶かしてその水流の中に飛び込んでみた時は、そう見えるかもしれないと思えるような、光の流れができていた。しかしそれは、川ではなく、ほんの薄い膜の上での流れである。
それが、ブレードヒルトの刃を食い止め、チャクラ光同士がぶつかり合う、振動音とも呼べそうなスパークの音を響かせていた。

「え・・・っ」

さとりは言葉を失い、見開いた眼でただじっと、眼の前に見えるブレンの背中を見つめていた。
間違いなくそのシルエットはブレンパワードのようだが、所々のディテールが違うような気がする。
それに、身体もほんの少し大きいようだ。
チャクラ光のスパークに照らされ、はっきりとは分からないが、サトリブレンの薄い紫色をかなり濃くしたような体色をしている。つまり、紫色だ。

そうしてさとりは、そのブレンの背中から、見えているはずがないのに、何者かがこちらを見ているような気がした。
胸の内を冷水が流れていくような、得体の知れない気分になり、自分の持つ第三の眼により心を見透かされる者も、こういう気分を味わっているのか？
などと、場違いなことを考えてしまった。
こちらを・・・さとりの心をじっと見るその視線は、さとりがこれまで何度か会った事のある者のものだった。
確証などはないが、何故だかはっきりと確信できる。

ブレンに乗ってからというもの、さとりは何だか自分がこいしに似てきたような気がした。
無意識的なものを、信じられるようになっていた。
「・・・だ、誰っ？」
そう呼びかけても返ってくる声はない。
なによりさとりにははっきりと、自分を見ているその者が誰なのか、見当がついていた。
こちらをじっと見るその眼が、視線と一緒に、己が誰なのか語りかけてきているような気がしたからだ。
彼女は、見開いた眼を少しずつ細めながら、呟いた。
「また、来て下さったんですか・・・？」

※

あまりにも突然だった。
グランチャーが左腕を振り下ろし、咲夜がブレンの撃破を確信した次の瞬間、一体のブレンが眼の前に現れチャクラシールドを展開し、ブレードヒルトを受け止めた。
咲夜のオーガニックエナジーを吸収することで規格外の威力を得たはずのチャクラの刃が、完全に防がれ、受け流されている。
光の刃と薄いチャクラの膜が接触する中で、咲夜は思わず、
「何者っ！？」と叫んでいた。
紫色のブレンは応える素振りもみせない。
しかし咲夜は、このブレンの胎内には何者かがおり、その者がこち

らを嘲笑っているのが見えた。
実際に嘲笑っていたのかは分からない。

ブレードヒルトは、チャクラの刃を形成するというよりかは、オーガニックエナジーを放出し続けることで、刃のように見せるものだった。
そのため、刃を形作っている間は、継続的にオーガニックエナジーを放出する。
通用しない攻撃を続けて、無駄に体力を消耗するわけにもいかない。
あくまでも力は温存する。こちらはまだ、敵を一体も倒せていないのだから。
グランチャーは止むを得ず、ブレードヒルトの放出をやめると、一旦身を引いた。
が、グランチャーの身体が後ろへと流れていった、その時だった。

間髪入れずとはこういうことか？そうでもないか？
紫色のブレンパワードは、瞬時に左肘に引っ掛けていたブレンバーを取り出すと、それをグランチャーに突きつけ、一射してきた。
ブレンバーを構える動きと、それを撃ち出す一連の動きは、見え透いたものであり、咲夜に回避できないわけがなかった。
彼女は冷静に、グランチャーを素早く右に飛びのかせ、迫り来る光を回避する。
続けざま、反撃とばかりに、ソードエクステンションを撃ち放った。
いかなるアンチボディであれ、無事では済まないはずの（現にサトリブレンは大きなダメージを受けた）強大な光が、紫色のブレンへと迫る。
だがブレンは、一切怯むことなく、その光を受け止めていた。
引き続き展開されていたチャクラシールドが、光を拡散させようとする。

「・・・っ」
できるわけがない。
鼻息を鳴らして相手をあざ笑おうとしていた咲夜だったが、それができなかった。
そして、彼女の考えとは裏腹に、アンチボディを一体丸々飲み込めそうなほどの巨大な光は、先程のブレードヒルト同様、何ひとつ通用していないように見えた。
撃ちだされた光の全てが、放射状に広がって、残さず拡散していく。

いや・・・それだけではない。
紫のブレンの隣にはサトリブレンも存在し、ソードエクステンションの光は彼の者も巻き込んでいるはずだった。
だが、紫のブレンが展開するチャクラシールドの防御範囲は、サトリブレンの方にも及んでいるらしく、チャクラの光は、そちらも避けて受け流されていた。
受け流されるチャクラの光は、球形というよりは、洋梨のような形だった。

さすがに咲夜も、これには息を呑んだし、この、正体もどこから来たのかも不可思議な敵に対する恐れも抱きそうになった。
だがそれが、咲夜の中にある闘争心を撃ち消すほどにはならない。
むしろ咲夜は、誇り高いグランチャーと己を手玉に取ろうとしているこの敵に対し、より一層強固な敵対心を抱きつつあった。
チャクラシールドに守られ、こちらを見て、嘲り笑う（ように見える）ブレンに対し、咲夜は叫んだ。
「馬鹿にしているのか!?貴様、許さない・・・っ!」

いかなる攻撃も受け流す無敵の壁など、あるものか。
一発二発の攻撃を完全に受け流すのならそれも上等。
ならば、十発でも、百発でも攻撃すればいい。

続けざまにオーガニック的な衝撃を加えていけば、いずれは敵も体力を消耗し、メッキが剥がれて怯え出すはずだ。
それを見て、一種のカタルシスを感じながら、改めて叩き潰してやる。
こちらの強さと、誇りを見せつける。そのためにも、最早温存などとは言っていられなかった。
咲夜は、オーガニックエナジーを出し惜しみすることをやめ、徹底的にこの紫色のブレンにチャクラの力を叩き込むことにした。

その一方で、標的が変わったことを確認したサトリブレンが、ゆっくりと離れていく。
さとりは、咲夜の意識が、『彼女』のブレンに向いていることを自らの能力で読み取り、この隙に逃げることにした。
実際、彼女が読み取った通り、咲夜はすでにサトリブレンのことは眼中になく、離れていくその姿にも気づいてさえいなかった。

※

いきなり紫色のブレンパワードが現れたのも驚きだが、そのブレンが、グランチャーの振り抜いた巨大な刃を無傷で受け止めて、続くソードエクステンションの光も完全に無効化したのには、さらに驚いた。
あんなことは、マリサブレンにも、カグヤブレンにもできない。
そもそもあのブレンは何者だ?

オルファンがオーガニックプレートを放出した以上、魔理沙達以外にもブレンパワードと出逢っているものがいるだろうが、その内の一人が助けにきたというのか？
だが、こんな人里離れた、誰も寄り付かないようなところで、戦闘が起こっていることに気づいて？
あの強力なチャクラシールドのこともある。
紫色のブレンに乗る者の正体を知ろうというのは、当然の欲求だった。
魔理沙は、あの紫色のブレンに対して、オーガニックエナジーに乗せて呼びかけていた。

「おぉい！誰か乗ってるのか？誰なんだあんたっ？」

返事はない。
誰も乗っていないのか？
いや、無人のブレンは著しく弱体化しているはずだ。オーガニックエナジーが慢性的に足りないのだから。
魔理沙が以前戦った白いグランチャーとて、そうだった。
あれほど強力なチャクラシールドを展開できるわけがない。絶対に誰かが乗っているはずだ。
ただ、返事をしてこないだけだろう。

とにかく、あのブレンが何者であるのかを考えるのも重要かもしれないが、それより前に、やるべきことがあった。
誰が何故こちらを助けてくれているのかは後で知るとして、あのブレンが敵の注意を惹きつけていることで、魔理沙としては大いに助かっていた。
輝夜の方も、いつまでもびっくりしてはいられないと、呼びかけて

きた。
（チャンスじゃないこれ？やろうよ！）
それを聞いた魔理沙は、向こうには見えていないのに、一度大きく頷いてから、先程言いかけた戦い方を改めて説明した。

「さっきの続きだ・・・簡単なことだぜ、あたしとあんたのブレンが、タイミングを合わせて、同時にブレンバーを撃つ」
（それだけ？）
「タイミングを合わせるのが大事だぜ。出来る限りオーガニックエナジーを集中させるんだ・・・そうすれば、互いのオーガニックエナジーが相乗して、チャクラフラッシュの威力が何倍にも高まるはずっ」
（・・・やってみようかっ）
「んっ！」
実際にやっていないので確かな方法であるのかは分からないが、やってみる価値は大いにありそうだ。

マリサブレンとサトリブレンが、改めてグランチャーの方へと接近を図る。
だが、無理に近距離にまで近づく必要はない。
ブレンバーの有効射程ギリギリまで近づけば、それで十分であるはずだ。
紫のブレンを意固地にになって攻撃しているグランチャーに、気づかれてもいけない。

少しずつ接近する中で、グランチャーは、時にソードエクステンションを撃ち、あるいは刃を叩きつけ、紫色のブレンが展開するチャクラシールドを撃ち消そうとする。
さすがに、ブレンのチャクラシールドも無敵というわけではないらしい。

少しずつ、その効果は弱まっているようだった。
このまま行けば、グランチャーの攻撃を受け止めることができなくなり、撃破されてしまう。
だが、そうはさせない。
マリサブレンとカグヤブレンの二体は、グランチャーに対し、ブレンバーが通用するほどの距離にまで接近した。

「ひっつけ！ブレンバーの照準を合わせるぜっ」
魔理沙の呼びかけに、輝夜が応える。
（分かった！）
マリサブレンが、右手に持っていたブレンバーを左手に持ち替える。
続けて、二体のブレンは、背中合わせにぴったりと寄り添い、真っ直ぐに突きつけられた銀色の銃身もまた、ひとつに重ねられた。
グランチャーに狙いを定めようと、その銃身がかくかくと揺れ、その度にブレンバー同士がぶつかりごつんという鈍い音が響く。
輝夜が、
（魔理沙、狙わないと駄目でしょっ？）と叫ぶのには、
「狙わなくていい、合わせるだけで！」と返す。

チャンスは今しかない。
紫のブレンを巻き込まないよう、グランチャーを標的にしてもかなり遠いところに銃口を向けている。
もしかしたら、充分にダメージを与えられないかもしれない。
が、巻き込んであのブレンを殺してしまうわけにもいかない。グランチャーだってそうだ。

――――いい具合にいってくれよ・・・っ――――
脳内で吐き捨てながら、魔理沙は、自分達が放つ一撃の威力をさらに上げるため、自身のオーガニックエナジーをブレンへと注ぎこんでいた。

第九話　その４

何度目か振り抜かれたソードエクステンションが、チャクラシールドに衝突する。
相変わらず、チャクラ光を纏った刃が敵に通用することはなかったが、向こうのオーガニックエナジーを確実に消耗させているのは確かだった。
もちろん、グランチャーも多くの生命力を消費している。
だが、失われる分は咲夜の生命で補うつもりだった。
例え動けなくなろうと、生命さえ無事なら、それでいい。
そうなってまで戦い抜くことが、グランチャーの誇りであるし、彼の者に乗り込み戦う者の矜持（きょうじ）というものだった。
何より、グランチャーと咲夜には、ブレンパワードを打ち倒し、オルファンを破壊することで幻想郷を守るという使命もある。
その使命を全力で果たそうとする誇り高きグランチャーが、ブレンパワードごときに負けるはずはないと、彼女は考えていた。

いい加減見飽きるようなチャクラ光のスパークに顔を照らされる中で、咲夜は叫ぶ。
「生意気な・・・っ、ブレンパワード！このグランチャーには比ぶべくもない、機能不全のアンチボディのくせしてっ！」

後数発だ。それでこのブレンだって、丸裸にさせられるはず。
自身の中の殺意をさらに高めたグランチャーが、放出するオーガニックエナジーをより一層強める。
何が何でも敵を仕留めるべく、ソードエクステンションを握る右手

が、再度振り上げられた。

しかし咲夜は、考えるべきだった。
何故この紫のブレンは、まったく攻勢に出ず、あえて防御に徹しているのか。
そう、まるで咲夜を意固地なまでに怒らせ、引き付けるかのように。
それは、このまま攻撃を受け入れることに徹していても、勝機がある故にだ。

瞬間咲夜は、脳の奥のほうで、小さな声が響いたように感じた。

――3・・・2・・・1・・・チャクラエクステンション！――
――シュートっ！――

その声と同時だった。
紫のブレンが、またしても眼の前から姿を消した。

同時に、咲夜の中で、彼女の思惟が錯綜する。

何かマズイ、すぐに退避しなければ。
おそらくあのブレンはバイタルジャンプで跳躍したのだろう。こちらがサトリブレンに対して瞬時に接近したのと同じように。

なら、こちらもすぐに同じところを通ってバイタルジャンプすれば、逃げられるはず。

だが、そう思っているその時には、グランチャーは、何か異様なまでに強大な力に押しやられ、その場から吹き飛ばされていた。
紫のブレンが乗ったバイタルグロウブが、一気に離れていく。
これはチャクラ光の・・・余波だ。
今まさに迫ろうとしている攻撃の余波だけで、グランチャーは高速で迫る壁に突き飛ばされたかのごとく前へと押し出された。
そうしてこの次の瞬間には、これだけの余波を発するだけの威力を持つチャクラの波が、こちらを包み込むのだ。

マリサブレンとカグヤブレンが撃ち放ったブレンバーのオーガニックエナジーが相乗し、規格外の威力を発揮していた。
チャクラエクステンション。アンチボディ同士が協力して行う戦法だ。

このままではやられる。
まずはチャクラシールドを展開して、可能な限りダメージを減少しつつ、一気に下方へと逃れる。
そうするしかない。

「うわっ！くあぁぁ・・・っ」
悲鳴とも呻き声ともつかない声を振り絞りながら、咲夜は、全ての

神経をグランチャーの回避行動に集中させた。
チャクラシールドを展開する以外のオーガニックエナジーをほぼ全てを推進力に変え、グランチャーが上方へと飛び上がる。

次の瞬間だった。
咲夜は、自分の精神が遥か彼方に持っていかれるような、吐き気を催すほどの気持ち悪さに見舞われた。
実際そんなことはないはずなのに、胃の中に存在するありとあらゆるものが渦を巻くように動いて、食道へと逆流していくようだった。
撃ち放たれたチャクラエクステンションが、グランチャーの下方を通過していくのが見える。
もっとも、網膜に焼きつくのは、光。ただそれだけだが。
最早オーロラだとかそういう表現はできず、真っ白な光となったチャクラ光が、つま先を掠めていく。

何とか直撃は免れることができた。
チャクラシールドを展開すれば、ダメージも抑えることができるだろう。
実際、莫大な輝きを放つ光を眼の前にしているグランチャーにも、決して大きなダメージはないようだった。

だが、まさしく濁流となって足元を流れるオーガニックエナジーの猛威は、単純な威力だけではなかった。
流れに巻き込まれるように、グランチャーの中のオーガニックエナジーまでも不安定になり、身体から霧散していく。
それは、咲夜にしても同じだった。
実際、彼女が感じた通り、咲夜の精神に近しいものは、この流れに持っていかれ、遥か彼方へと消え去っていたのである。

空気が焼ける音が鼓膜を揺らし、目が眩むほどの光に苦悶する中で、彼女は息を吐き捨てた。

「ち・・・力が、抜けていく？・・・・・・・くぁぁっ・・・・このままでは・・・・っ！」

このままではの後に続くことは言えなかった。

そして、このままではという表現はもう、今既に、という表現に代わってしまっている。

強力なチャクラの流れも、数秒すれば遥か彼方に流れ、拡散していく。

撃ちだされた場所が何もない硫黄泉の荒野ならば、流れ弾となってどこかに着弾して、どこぞの誰かに迷惑がかかるということもないだろう。

一方で、流れと共に持っていかれてしまったグランチャーの生命力は、戻ってはこなかった。

先程の光などなかったように静けさ、同時に重苦しい緊張感を取り戻した戦場の中で、咲夜は、ただ敵の攻撃を必死になってかわしたというだけではない疲労感を味わっていた。

先程の攻撃を放ってきたと思われる二体のブレンパワードが、またしてもこちらを倒せなかったことに驚愕しつつ、諦めずに攻撃を続行しようと、接近を図っている。

あの紫のブレンも、再びどこかから姿を現し、その姿を中空に漂わせていた。

「ふぅ・・・・・ふ・・・っ」
フルマラソン休みなく走った後だとか（そもそも咲夜はフルマラソンなどした経験はないし、仮にしたとしても、疲れるようなことはない）、そういう風な形容のし方もできないほどの疲労に、手足の震えすらも生じはじめた咲夜。
グランチャーも同様、動くことはできても、これでは戦うことはできない。
まさか、たったの一撃でここまで追い詰められるとは思わなかった。
だが、このまま戦えば負ける以上、こうなれば逃げるしかないという発想は、すぐに出てきた。
そしてそれに、悔しさを感じるような咲夜ではない。
先程は、あまりに急な事態で混乱していたようだが、追い詰められることで、逆に落ちつくことができた。
最早止むを得まい。
逃げるときには、大人しく逃げる。
自分達の矜持に逆らうような行動ではあるが、このまま叩きのめされ、再び敗北の痛みと恥辱を味わうつもりは、グランチャーにはなかった。
いや、こうなれば既に敗北と言われても仕方がないだろうが、負けるにしても、後で改めて勝利できる負け方というものがある。
後になってオルファンを破壊することができればそれでいいのだ。
その可能性があるのなら、戦術的撤退という選択もできる。
幸い、バイタルジャンプは可能だ。
グランチャーはすぐさますぐ傍にあった、オルファンの発するバイ

タルグロウブの内のひとつに乗ると、戦場から姿を消した。
バイタルジャンプは、瞬間移動だけでなく、バイタルグロウブが続く範囲までの長距離移動も可能とする。
咲夜は、追いすがる機会すら与えず、この場から退散した。

※

予想はできていたが、またしても姿を消した深紅のグランチャー。
どこかから不意打ちを加えるつもりかと、輝夜が、
（消えたっ！どこ・・・っ？）と、ブレンに周囲をぐるぐると見回せながら、敵の姿を探す。

だがそれに魔理沙が、言い返してきた。
「・・・どうやら、遠くの方まで逃げていったらしい。あいつ、オーガニックエナジーを失ってるようだった」
（逃げたの？・・・ってことは・・・）
「戦いは終わったぜ。あたし達が勝ったらしい」
（・・・・・・）
勝ったという表現だが、それに対して輝夜は喜んだりはしなかった。
魔理沙も同様だ。

確かに、オルファンを守り切り、敵を撤退させることに成功した以上、勝利ではあるだろう。
だが、とても勝ったという実感を持つことができなかった。

あのブレン・・・何を考えているのかも分からない様子で宙に浮く

あの紫色のブレンが現れなければ、こちらの完敗だったろう。
今頃みんな仲良くあの世にいって、オルファンも破壊されていたはずだ。
なにより、サトリブレンが、そうそうすぐには再生できないほどの傷をつけられてしまった。

勝てたのは単に運が良かっただけだ。
魔理沙は、両手を頭の後ろに回して、スリットウェハーにもたれかかりながら、大きなため息をひとつ吐いた。

しかし、たった一対のグランチャーに手篭めにされそうになっていた自分達をふがいなく思うより前に、自分達を助けてくれたあの紫色のブレンに対し感謝する方が先だった。
魔理沙は次いで、オーガニックエナジーに乗せ、もう一度あのブレンに対して呼びかけた。

「聞こえるか？誰か乗ってるんだろう？助けてくれたことには、感謝してるぜ・・・ホントだぜ？・・・・・・・あんたが何者か、教えて欲しいんだ・・・・・・それに、多分また、グランチャーがオルファンを襲いにくるかもしれない。その時のために、あたし達に協力してほしいんだ・・・」

やはり、返事はなかった。

何者なんだ？と、胸中で呟きつつ、魔理沙は繰り返し呼びかける。
「返事くらいはしてほしい。あんたもブレンに乗っているなら、オルファンのことを守ろうとしてくれるはずだ・・・残念だけど、あたし達だけで、上手く戦っていく自身がなくなってきた・・・これからも、助けてほ・・・」
全て言うよりも先に、紫色のブレンはバイタルグロウブに乗ってど

こかへと去っていった。
こちらの呼ぶ声は、聞こえてすらいないといった感じの態度だった。

「お、おい・・・」

返事も寄越さないまま姿を消したブレンには、さすがに魔理沙も、
感謝の気持ちを忘れて不愉快さを感じずにはいられない。

「なんなんだ・・・あいつ」

とにかく、戦いは終わった。オルファンも無事だ。
先んじて撤退していったサトリブレンのことが心配になってきた魔理沙達は、ひとまず、一度地底へと戻ることにした。

※

一度のバイタルジャンプによって、妖怪の山が眼に見える程のところにまで撤退できたのはいい。
が、敵の攻撃で体力を消耗したことによる疲労感と気持ちの悪さは、未だ続いていた。
咲夜の方は少しずつはましになってきてはいるが、グランチャーの方はそうもいかないようだった。
咲夜は、時間が経てば失ったオーガニックエナジーも取り戻され、体力も回復してくるだろうが、オーガニックエナジーを自ら生み出すことのできないグランチャーは、咲夜の生命力を吸い取らねば、

失った力は戻ってこない。
が、その咲夜も満身創痍である今の状況では、下手にオーガニックエナジーを吸い取ると、彼女が死んでしまう恐れだってある。
グランチャーにとっては、咲夜は安定したオーガニックエナジーを供給する源泉であり、同時に、戦友でもあった。
そういう咲夜に対し、生命を奪うような仕打ちはできなかった。

その一方で咲夜は、まんまと敵にしてやられ、オルファンを破壊することはおろか、ブレンパワードの一体すら撃破できなかった自分達自身に苛立っていた。
が、前述した通り、敗北を一度受け止めれば、冷静になることはできた。
腹立たしさを抑えるだけの落ち着きも、彼女にはあった。
なので、グランチャーの胎内で喚き散らすようなことはさすがにない。

しかし、スリットウェハーを、まるで喘息の発作を起こした者の背中を撫でるような手つきで（実際そういう光景を見る機会は咲夜には多かった）擦りながら吐き捨てた声は、重く険しいものだった。
「ブレンパワード風情にしてやられてしまった……これればかりは、向こうにだって強力なアンチボディがいることは、認めなければいけないようね……」
しかし、敗北したことにいつまでも憤りを感じているわけにもいかない。
撃ち砕かれた（というほどではないが）プライドのことを考える以上に、オルファンの撃破という目的もあった。
いくら向こうにも戦力があるからといって、このまま手をこまねいてオルファンが幻想郷のオーガニックエナジーを吸い尽くしていくのを見ているわけにもいかない。
いずれ必ず、あの金色の山を粉々に打ち砕くべく再戦しなければな

らない。
だが、今回と同じように戦ったのでは、今日の二の舞になるのは火を見るより、いや、太陽の光を見るよりも明らかだ。
何か策を講じねばなるまい・・・

グランチャーの胎内で、疲労により未だにぼやける意識の中で思案を巡らせる咲夜。
とはいえ、実を言えば、策とは言えないまでも、考えられることは、今回の戦い以前にも既にあった。

ブレンパワードが複数存在するのならば、グランチャーだってそうだろう。
実際、元々は竹林に住んでいるはずの藤原　妹紅も、グランチャーに乗り、ブレンに敗北したという。
そのグランチャーと、咲夜にグランチャー。
たったの二体が、幻想郷にいるグランチャーの全てではないだろう。
各地にいるグランチャーを集めて戦力を整えれば、ブレンパワードの群れにも打ち勝つことができるのではないか？
今回戦ったあの紫のブレンだって、他の二体からの不意打ちさえなければ勝てていた。
向こうの頭数とこちらの頭数がぴったり揃えば、それだけでこちらが圧勝するはずである。

「・・・・・・となれば・・・」
スリットウェハーから熱が失われ、不気味なほどの涼しさに包まれている胎内で、咲夜は呟く。
これからやるべきことが見つかった。

すでに妖怪の山が遠くに見えているのならば、紅魔館だって近い。
館に戻ってからは、まず自分自身のオーガニックエナジーを充分取

り戻してから、それをグランチャーに与え、彼の者の力を健常に戻してやろう。

そう考えていた咲夜だったが、ふと、グランチャーの進行方向の前方に、ダ二かノミの一匹ほどの小さい影があるのが見えた。咲夜自身、よく見えたと思う。

だが、その小さすぎる影は、少しずつこちらに近づいている。だからこそ気づくこともできた。

ダ二ほどだったのか、段々と、飴玉の一粒ほどの大きさになっていく。

それでようやく、その影が人間か妖怪、あるいは妖精か何かであることが分かった。

そしてそれは、こちらに向かって、大きく手を振っていたのである。

「・・・・・・？」

何事かと思いつつ、咲夜はひとまずグランチャーをその場で静止させ、その影を待つことにした。

影は段々と大きくなり、もう影とは呼べないほどの、はっきりとした姿を見せていた。

しばらくして、人差し指ほどの大きさになってから、それが誰なのか、咲夜にもはっきりと認識することができた。

あまり面識はないが、一応は知っている者だった。

東風谷　早苗だ。

妖怪の山が近いなら、その山頂の神社の巫女をしている彼女と会うこともあり得るだろうが、彼女は何故、友好的にこちらに手を振りながら、笑顔で近づいているのか？

それは今は分からないが、時期に分かるだろう。

ひとまず待つ身になっている咲夜とグランチャーにさらに近づいてくる早苗は、とうとう、胎内を覆う装甲の眼の前にまで飛んできた。

同時に、しばらく彼女は眼の前の装甲板をじーっと見つめる。
スリットウェハー越しに、早苗の視線が咲夜に浴びせられる。
胎内に映し出される光景は、ブレンの目線と同じ高さから見えるものにもできたし、装甲板越しに見た・・・要するに、装甲を開けて穴から見た時の光景にもできた。そうして今は、後者を映している。
だから咲夜は、すぐ近くで、早苗の顔を見ることができてしまっていた。

そして早苗は、どうやら自分の覗いている装甲の奥に、何かがあることを知っているようだ。
もしかしたら、人が乗り込んでいることまで確信しているのかもしれない。
実際その通りだった。

しばらくじーっと装甲を見つめていた早苗は、徐に右手で軽く拳を作ると、手の甲で眼の前の深紅に彩られた金属質な皮膚を、コンコンと叩いた。
同時に、その向こうにいる何者か・・・咲夜に呼びかけてくる。
「突然の無礼をお許しくださーい。私、東風谷　早苗と申します。ここを開けて下さいませんかー？」

やはりだ。彼女は、装甲の奥に誰かがいることを知っている。
しかし、よく考えてみれば、それも当然だ。
天狗の配達した新聞には、アンチボディのことは書いてあったし、胎内に入ることで共生することができるというのも記述してあった。
おそらく新聞はかなり広い範囲に配られていただろうし、新聞を読める者なら、アンチボディのことはすでに分かっているのも当然のことだろう。

が、咲夜は、眼の前の早苗はそういうこととは何か別のような気が

してならなかった。
まぁ、それが何なのか分からないのだから、考えることはすまい。
それよりも、こちらに装甲を開けるよう催促する彼女に応じる方が先だ。

咲夜は早苗に対し、
「分かったわ・・・今開けるから、離れて」と、グランチャーの残り少ないオーガニックエナジーに乗せて、外にいる早苗に呼びかけた。
それを聞いて、すぐにその場から彼女が離れるのを確認し、咲夜は、グランチャーに装甲をあけさせた。
そうして、スリットウェハーの穴から外に身を乗り出し、装甲の上に立つ。

早苗が一体何を考えているのかは分からない。
もしかしたら、何かあくどいことを考えているのかもしれないが、その魂胆が見えた時には、すぐさま時間を停止させて、咲夜にとっては羨ましいほど豊満な胸の奥にある心の臓にナイフを突き刺せばすむことだ。
主人にとってはまさに身体に毒な眩しい陽光に眼を細めつつも、周囲を見回そうとする咲夜だったが、そうするよりも先に、彼女の正面に早苗の姿が躍り出た。
同時に、こちらの姿を見た彼女が、両手を合わせてキラキラ輝きそうな顔をして言ってきた。
「あぁっ。貴方は紅魔館の十六夜　咲夜さんですねっ？お会いするのは初めてでしたか？」
それに咲夜は、未だに疲労感も残っていることもあり、小さな声で応えた。
「会ったような気はするけど・・・あまり印象には残っていないですね」

「あらっ、そぉですか～・・・」
「一体どうしたの？」

とにかく、何故早苗がグランチャーの前に近づいてきたのかを知りたく、前置きもなしに早速問うてみた咲夜。
それに対し、早苗はまずはこう語った。
「オルファンというのは、勿論咲夜さんもご存知ですよね」
「えぇ・・・」
「ですが、あの者が何をしようとしているのかは、ご存知ないのではないでしょうか？」
「・・・・・・なるほど」

思わず咲夜は頷いていた。
この言葉だけを聞けば、すでに大体の答えは見えてきた。
おそらく早苗は、こちらと同じなのだろう。
咲夜はすぐさま、逆に問いかけてきた早苗の声に、応えた。
「いえ、知っているわ・・・何をするのか自体は知らないけど。そのために、幻想郷のオーガニックエナジーを吸い尽くそうとしていることは」
「そうなんですかぁ！なら話は早いっ」
「えぇ、話は早いわね。説明も必要ない・・・・・・貴方はそれを、食い止めようとしているのですね」
咲夜の声を聞いた早苗は、突然右手を目線の高さでぐっと握りしめて、上腕を左手で抑え、何でこんなことをするのかよく分からないポーズをとって、応えた。
「その通りですっ！さっすが紅魔館のメイド長をされているだけのことはありますねぇ、尊敬しちゃうっ♪」
「そういうのはいい・・・・・・オルファンを食い止める。つまり破壊するのは、グランチャーの目的でもある。それが分かるから、私のグランチャーに協力を呼びかけようと・・・」

「そういうことです」

ちょうど今しがた、他者の協力が必要であると考えていたところだ。
そういう意味ではこれは、天からのお告げか何かだろうかと思えた。
が、やはりいくらこの早苗が、こちらと同じくオルファンの暴挙を止めようとしており、そのために協力を呼びかけているとしても、二つ返事ですぐに了承するわけにもいかない。
試しに咲夜は、早苗に対していろいろと質問してみた。

「それで貴方は、自らのグランチャーが持っていらっしゃるのかしら？」
「いえ、今は持っていませんが、いずれ必ず、私自身のグランチャーと出逢って見せましょうっ」
「・・・ブレンパワードのこと、貴方はどう思う？」
「悪い子達ではないと思います。っていうか私は少し前まで、地底にいる方達と一緒に、ブレンの面倒を見ていましたから」
それには咲夜も少しびっくりして、
「へぇ～・・・っ」と声を上げていた。
早苗が、続いて言う。
「なんで、情がわいてないわけじゃありません・・・でも、オルファンを止めて幻想郷を守るためには、ブレンをやっつける覚悟はできていますっ・・・・・・というより・・・」
「というより？」
「気に入らないとすれば、ブレンに乗っている地底の妖怪達です！・・・あの妖怪達は、オルファンが幻想郷を滅ぼすかもしれないことを分かっていながら、オルファンと友好的に接しようとしています・・・オルファンの目的は、宇宙に飛び立つことなんですが。なんでも、ビープレートを発見すれば、幻想郷を滅ぼさずに、その目的を

達することができるそうなんです・・・だから、ビープレートを見つけさえすればそれでいいと・・・・・・でも、それは楽観的な考えだと思うんです。インテリジェンスのある者なら、ああいう甘い考えはしないと・・・」

それを聞いた咲夜の脳裏に、戦いの最中、こちらに語りかけてきた地底の妖怪、さとりの声が再び響いた。

センチメンタルで、感情に支配されている楽観的で非現実的な考え・・・

そうして、それが気に入らないという早苗。

咲夜は、それ以上早苗の言葉を聞きはしなかった。

「委細承知しましたわ、東風谷　早苗お嬢さん・・・私としては、貴方のその意思には心より賛同させて頂きます・・・・・・ですが、私が貴方に協力するためには、主人の許可を頂かねばなりません故、どうか、紅魔館にまでご同行願えませんか？」

それに早苗は、

「勿論ですともーっ！」と応える。

そうして咲夜は、主人に対していつもしているような丁寧な所作で、ゆっくりと一礼した。

早苗の中での考えは、咲夜に非常に似通っていた。

少なくとも咲夜本人としてはそう感じた。

だからこそ、ブレンと一度関わったことはあり、好意を抱いた上で殺める覚悟を決めたという言葉も、心から理解はできないながらも、納得することはできた。

彼女に協力する価値は、大いにありそうだ。

勿論、これだけで完全に信用することはまだできない。

本心では何を考えているのかは分からない。
だが、何を考えていようが、前述の通り、その目論見を看過した時点で瞬時に彼女の息の根を止めて、綺麗な身体を血塗れににさせてやればいいだけの話だ。

――そうはならないように、祈らせては貰うけどね・・・――

胸中で呟きながら咲夜は、早苗をグランチャーの手のひらに乗せ、彼女のことをレミリアに説明すべく、共に紅魔館へと戻ることにした。

※

しばらく時間が立つと、ブレンを苛んでいた地獄の苦しみも、少しずつ収まってきているようだった。
とはいえ未だに、真夏の昼間に鉄板の上に立っているような熱さは感じている。
少し前はそれが、全裸でその鉄板の上に寝転んでいるような気分だったので、それに比べれば随分と楽なものではあったが。

地底に向かう風穴がすぐ傍まで見えてきたところで、傷ついたブレンの胎内にいるさとりは、眼を見張った。
風穴の入口近くには、こいし達や、勇儀、文達やにとり、妹紅達もだし、どうやら戦いが始まったことを聞いてきたらしく、ヤマメ達までもが姿を見せていた。
どうやら、さとり達のことが心配で、ずっと戦闘を遠くから見守っ

ていたらしい。
そうして、そんな彼女達は、グランチャーの攻撃により大火傷を負ったブレンの姿を見て、驚愕し、息を呑んでいるようだった。
実際さとりには、ブレンの姿を見た皆が、戦慄している様子がはっきりと分かった。

そうしてそれを感じると、急に胸の内側から言いようのない感覚が湧き出てくるように思えた。
彼女らは、ブレンのことがずっと心配だったし、傷ついた彼の者を見て、哀しんでいた。
そうしてさとりは、自分がついていながら、ブレンを守ってやることができなかったと、そう感じていた。
結局、何もできなかった。
ただ怖がって、眼の前にまで迫ってきた死から逃れることもできず、流されるように敵に虐められただけ・・・

ブレンを傷つけたことも、そして、今こちらを見つめている者達を哀しませたのも、全ては自分のせいだと考えていた。

自分さえもう少ししっかりとしていれば、こういうことにはならなかった。
全ては、自分のふがいなさが招いたこと。
ブレンの痛みも、皆の哀しみと戸惑いと不安も、全てその原罪は自分にある。

さとりは臆病者だった。一度自分を認められなくなると、延々とその気持ちを引きずるような者だった。

だが、そんな自分のことはどうでもいい。

今改めて、実感できた。

戦いの中で・・・したくもなかった戦いの中で傷つき、今も苦しんでいる。

こんなことになってしまったことを、辛く思っている。

その心が、骨身に染みいるように伝わってくる。

いずれ一緒に、散歩にでも出かけようかと考えていた、地上。

そこに降り注ぐ陽光は、今の傷ついたブレンには、痛いほどのものだった。

胸の内から湧き出てきたものは、涙だ。

グランチャーの攻撃を受け、ブレンがダメージを受けてからずっと、スリットウェハーに包まれ、膝を抱えてうずくまったままだったさとりは、額を膝の頭に擦りつけ俯いた。

そうして、啜り泣く声が、胎内で小さく、弱々しく響く。

「・・・ごめん・・・ごめん・・・・・・・・ごめん・・・」

ただそれだけを繰り返し、さとりの細い身体が、身の焼ける苦しみと、身の凍りつく苦しみを同時に受け、震えた。

ただひとつ幸福だったのが、そんな彼女を、ブレンは苦痛の中にあっても、優しく慰めてくれることだった。

ブレンは、さとりが何も悪くないということを、彼女自身が分かるように、教えてやっていた。

魔理沙達も、こちらに向かっているようだ。
ただ一つ確かに言えることは、戦いは終わったということ。
もう、怖い思いをすることはない。
痛みは今も感じているが、これ以上痛い思いもしなくて済む。死ぬこともない。
もしかしたらその内また、グランチャーがオルファンを破壊しにやってくるかもしれない。

だけど、その時までは、静かに休んでいられる。皆と一緒に。

啜り泣く声に混じって、さとりは、ブレンの優しさに応えた。
「・・・・・・帰ろう・・・地霊殿に・・・」

※

幻想郷に生きていれば、一日一日は、何事もなく平穏に過ぎていくものだ。そうしてそれが、長らく続いていくものだ。
今日やっている行いが、昨日やったこととそっくりそのまま同じであるという日が、何日も続くことだってある。
だが残念なことに、それが一カ月も一年も続いてくれることはなかった。

幻想郷の一角にあるとも、あるいは果てにあるとも言われている博

麗神社で、素敵に暢気に巫女をやっている博麗　霊夢は、早朝から突如として配達された（というよりかは、強引に投げ捨てられていた）天狗の号外に、鬱陶しく思いながらも眼を向けた。

そうしてそこに書かれている記事を、神社の裏にある縁側　（と、言っていいのだろうか？）にてひとしきり読み終えた彼女の脳裏には、『異』と『変』の二文字が浮かび上がった。
その二文字は、これから霊夢が、彼女自身の役目を果たさなければならないことを意味していた。
異変ならば、その解決は人間の・・・巫女である霊夢のやるべきことなのである。
そうやって彼女は、これまで幾度となく起こっていた異変を解決してきた。
不本意ながら、やらねばならない故。

だが今回の霊夢は、新聞を読み終え、異変の内容をあらかた知ったその後であっても、行動を起こそうとしなかった。
昼になり、やがて陽が沈み始め夕方になるころでも、霊夢は座敷の中でぐうたらに過ごしていた。

何故かというと、異変を解決しようとしている者がすでにいるからである。
どうやら、地底にいる妖怪や、この新聞を書いた天狗、射命丸とあとどこぞの誰かが、自分達なりに異変を解決しようとしているようだ。
霊夢が異変を解決するのは、他にそうしてくれる者が誰もいないから、仕方なく幻想郷の代表として赴くだけのことであり、異変を誰かが解決してくれるのなら、彼女がわざわざ出ていく必要はないし、そのことで批難を受けたりするいわれも、なかった。

とはいえ、地底の妖怪や天狗だけで異変を満足に解決できるかは分からない。
まぁ、もしいざという時になったら、こちらだって然るべき行動は取る。
それに、異変の解決とかそういうこと以前に、一度地底に赴いてみるのも悪くないかと考えていた。
記事に書かれていた、オルファンとかアンチボディとかいうのが気になる。
それに、地底にはどうやら魔理沙もいるようだ。
ちょくちょく神社に顔を見せてくる彼女だが、最近どうも会った印象がないと思ったら、こんなところにいたとは・・・
恐らくこの異変は、すぐには解決せず、しばらく長引きそうである。
となれば、魔理沙もしばらくは地底に居つくようだ。
つまり、これからさらにしばらくの間、魔理沙が神社に来ることはない。

それはそれで寂しいような気がするようなしないような感じであったりなかったりするので、ならいっそこちらから顔を見せに行こうと考えていたのだ。

まぁ、とにかく、何をするにしても、今日のところはもう日も暮れていく。
地底に赴くにしても、気変わりして異変の解決を速やかに行うにしても、明日か、もっと後だ。

縁側に座って、赤く染まっていた空が段々と闇に包まれて、暗い色に染まっていく様子を眺めながら、霊夢は、大きく背伸びをし、これまた大きな欠伸してから、呟いた。

「オルファンに、アンチボディ・・・ブレンパワードねぇ・・・・・はぁ～あ・・・この異変も、やっぱ私が解決しなくちゃいけないのかしら？・・・めんどっちいけどなぁ～・・・」

それからもう一度、「うぅぅ～んっ」と声を出しながら、腕を上にぴんと伸ばして背伸びをした霊夢は、背後からほんのりと冷気が漂ってくるのを感じた。

秋風が運んでくる涼しさとか、冬の寒波とは違う、気味の悪い冷たい空気である。

その冷気に、身体が少しだけ身震いすると同時に、続けざまに霊夢は、静かにこちらに語りかけてくる声を聞いた。

「怠惰の極みねぇ・・・嘆かわしい」

「あ・・・あんたっ？」

慌てて、腕を伸ばしたまま腰を捻って後ろを振り返った霊夢は、瞬間、何かに頭を軽く叩かれた。

「いてっ」

傘だ。傘で叩かれた。

霊夢の視界に映る姿は、彼女自身、すでにその声を聞いた時から見当はついていたが、紫だった。

宵の闇が広がっていくと同時に、等しく薄暗くなっていく座敷の中で、紫が、右手に持つ折りたたまれた傘をこちらの頭の上に乗せている。

魔理沙と同様、神社によく遊びに来る者があと何人かいたが、そのひとつがこの紫だった。

どこからともなく現れては、今のように、ちょっかいを出して冷やかしてくる。

そう言えば、彼女も最近はあまり姿を見なかったことを思い出しながらも、ようやく伸ばしていた腕を降ろして、頭の上に乗った傘を右手で振り払いつつ、鉄面皮を浮かべた霊夢は、彼女に言った。

「何の用？・・・あたしは明日、もしかしたら大事な用のために出かけるかもしれない（はっきりとは言わない）んだから、早く寝たいわけよ・・・・・・だから要するに、あんたなんかと遊んでいる暇は・・・」

霊夢が言い終えるよりも前に、紫は、

「いいからいいから」と言い返してきて、傘を持たない左手の人差し指で、前の方を指さしてツンツンつつくような動きをさせていた。あっちを・・・縁側の外の方を見ろというのか？

何のつもりかは知らないが、霊夢はとにかく言われたとおりにし、もう一度前方へと・・・空がすっかり群青に染まり、星の輝きが見え始めている方へと眼を向けた。

彼女は思わず、眼を見開いた。

つい先程まで、何もいなかったはずの神社の敷地内に、その者がいたからだ。

そして、間違えるわけはない。

今朝方、天狗の配ってきた新聞に載ってある写真で見ていた。

それと、まったく同じ姿をしている。

そう・・・あれは・・・

霊夢は、戸惑った様子で、驚嘆を漏らしていた。

「ブ・・・ブレンパワードじゃない・・・っ」

第十話『グラン・チルドレン』　その1

「・・・なんでこんなとこに・・・？」
気がついた時には縁側の傍に現れ、そしてそのまま静かに佇んでいるブレンパワードの姿を見て、霊夢はそう呟いた。
実際は、紫に対し問いかけようかと思っていたのだが、口から出たのは、人に問いかけるような大きさの声ではなかった。
しかしながら、紫はそういう声も聞き逃すことはなかった。

「私が連れてきたのよ」
と応えるその声に霊夢は驚いて、彼女の方を振り返りつつ、
「連れてきたってっ・・・・・・もしかしてこいつ、あんたの・・・」
と問う。
そういえば、ブレンの身体を染めている紫色は、同じ名を持つ紫と決して無関係ではないようにも思える。
そこまでくると、単なる思い違いだとは思うが・・・

紫は霊夢の問いに、「その通りよ」と応える。

当人がそう応えている以上、あれが紫のブレンパワードであることは間違いないとして、それは別にいい。

天狗の新聞にも、ブレンパワードは他の生物、人間や妖怪と共生するというから、誰にだってブレンと出会い、胎内に入ることで共生する機会はある。
紫のようなろくでもない者と共生する、もの好きなブレンだって世の中にはいるだろう。
別に紫がブレンパワードに乗っていることは、別に何もおかしなことではないと納得する。
ただ、霊夢にはもうひとつ聞きたいことがあった。

「それはそうとして・・・なんでそのブレンパワードを私の神社に連れてきたのよ・・・何か用があるの？」
続けてそう問いかける霊夢に、紫はこう返した。
「霊夢・・・貴方は先程のような堕落した心を戒め、いち早く地底へと向かいなさい」

「・・・はぁ？」
霊夢は思わず頓狂な声を出していた。
質問と答えがかみ合っていない。
紫は、どうも異変解決には熱心で（幻想郷を維持していくためだろう）、普段怠けている霊夢をこうやって注意することもあれば、時には修行をつけたりすることもあった。
この発言も、そのような行為のひとつなのだろう。
だが、ブレンパワードの話をしている最中に間に割り込んでまで言われるようなことではない。
むすっとした霊夢は、低い声でさらにこう言い返す。
「今言う事じゃないでしょそれ。なんなのあんた」
それを聞いた紫だが、一切悪びれるような様子はない。
何かおかしなことでも言ったろうか？という表情で、
「ん～？」と、小さな子供の質問を聞く母親のような顔をして聞いてくる。

優しいお母さんの顔なわけだから、別に嫌味ったらしさなどは何も感じないのが普通なのだが、今回の霊夢にとっては自分が馬鹿にされているように思えるのも、仕方がない。
とまぁ、こんな具合に、彼女が悪びれるところなどこの一生で見ることはないだろう。
それに、霊夢はともかく紫としては、実際自分の発言は、決してブレンパワードとは無縁ではなかった。
彼女はそのことを、続く発言により、いい加減感情が爆発してしまいそうな霊夢に伝える。

「・・・このブレンと共にね」
「・・・へぇ？」
顔をほおづきのごとく紅くして、膨れた顔をぷるぷるさせていた霊夢だったが、顔面に充満していた空気が、風船がしぼむかのように一瞬にして抜けていった。
怒り心頭といった表情が、途端に戸惑いの色に代わる。
紫はそんな様子を気にすることなく、続ける。
「貴方に、このブレンを譲るわ。仲良くしてね」

「・・・・・・」
霊夢は、紫のこの突飛な発言に、しばらくぼけーっとした顔で黙りこんでいたが、思いなおしたように急に顔を左右にブンブン振ると、訳が分からないといった感じで眼を丸く見開いて、言い返していた。
「いきなり何よぉ？急にブレンを譲るとか・・・こいつ、あんたのなんでしょ？なら、あんたがそのまま乗ってればいいじゃないっ」
「まぁ、いろいろ理由があってね」
「理由って一体・・・っ」
さらに問いただそうとする霊夢だったが、それは途中でやめた。
こうやって答えを渋るような発言をする時の紫に対しては、何を聞いたところで満足のいく解答が来るとは思えない。

謎を謎のままにして、こちらで考えることを無理やりさせるのがこの妖怪だ。

霊夢は、もういっそいろいろ聞きだすのは諦めて、紫の言う通りにすることにした。

今、こちらを見ながら佇立しているあのブレンパワード。
神社の縁側の向こうで、青々と茂っている木々（神社の境内に生える木は、いろいろと有難い御神木様なわけだが、さて、この博麗神社の周りに生えている木には、それだけの神々しさとご利益があるやら・・・）を背に、紫色の巨人が、いっそ凛々しいほどに真っ直ぐにこちらを見ている。
どこに眼がついているのかは分からないが、どこかにはついているだろう眼で、じっと。
こうやって実際に見てみると、中々圧倒されるような気分だ。
新聞の写真で見るのとはまた違う。
大きさもそうだし、なんというか、肌で感じる雰囲気が、とても不思議なものだった。
冷たいような、温かいような・・・いろいろなものが相反しているような感覚がある。よく分からないが。
ただ、優しい雰囲気だな、とははっきり思えた。

あいつが自分のものになるのか・・・
そう思うと、どうも妙な気分がするが・・・くれるものは迷惑以外なら何でも貰っておくのが霊夢だ。
「・・・分かった・・・もう理由は聞かないから、有難くあいつはあたしのものにさせてもらうわ。で、あのブレンと一緒に地底にいけって言うのね？」
「えぇ」
「異変を解決するために？」

「そう思ってもいいわ。好きなように」
「・・・・・・」
またしてもはっきりとしたことを言わない紫。
だが、彼女がこういう発言をするときは、大抵彼女の本心は、『異変を必ず解決しろ』ということなのだ。
解決の方法を、自分自身で考えろ、ということだ。

まぁ、必要とあればすぐに解決には向かうつもりだった。
もう少しぐらい神社でのんびりしていたかったが、明日の朝から、早速出発することにするか。

が、その前に、霊夢にはまだ聞きたいことがあったし、やりたいこともあったので、今の内にそれを紫に対して聞くことにした。満足のいく応えが来るかは分からないが。

「でも、ホントにいいの？これじゃあのブレン、あんたに捨てられたみたいになってるじゃない」
「問題はないわ。ブレンにはすでに事情は話しているし、向こうも了承してくれている、気にしてないわ。新しく貴方のことを受け入れる準備だって出来ている」
それを聞いて霊夢は、「ふぅ～ん」と鼻息を鳴らしてから、続けた。
「なら、実際受け入れてもらおうじゃない」
「乗り込むのね」
「えぇ」

縁側から地面に足をつけ立ち上がった霊夢は、早々にブレンの方へと歩み寄っていく。
ブレンの方もそれを見て、彼女を胎内に招き入れるべく、装甲を開いていた。
いきなり眼の前で装甲が開くのを見れば、初めてそれを見たものは

びっくりするのが普通なんだろうが、このブレンが自分のものになるのだと納得できた霊夢は、随分涼しい顔で、何事もなくブレンの足元へと近づく。

そのまますたすたと歩く霊夢の後を、紫も追った。

装甲を開いた状態のまま直立していたブレンは、霊夢が胎内へ入れるようにと、ゆっくりと膝を折り曲げてその場にしゃがんで、座りこもうとする。

が、そうするよりも前に、まだブレンのすぐ足元にも達していないという時に、地面を右足で強く蹴った霊夢の身体が、重力に逆らうかのようにふわりと浮きあがり、そのまま開かれた装甲の上へと乗った。

実際、彼女は重力に逆らっていた。

妖怪同様、霊夢も空を飛ぶことができる。そういう程度の能力を持っていた。

彼女は一切の重力を無視し、水中を泳ぐ烏賊（いか）とか蛸（たこ）とか海月（くらげ）のように（よくない例えだが）、水をかくような動きすらなく空を泳いだ。

唯一重力の存在を感じられるのが、風にたなびきながら下を向き、決して上にめくれ上がったりしないスカートやら大きな袖やらの存在だけだった。

しゃがむ前に身体に乗りあげられたので、ブレンは少し驚きつつ、元の直立した姿勢へと戻った。

装甲の上に乗った霊夢はそのまま、スリットウェハーが形成する大きな穴に身を潜らせ、胎内へと入る。

紫もその後に続き、霊夢同様・・・あるいは彼女より優雅に、緩やかな風に煽られ傘が舞うように宙を浮遊して、装甲の上に乗る。

穴を潜って、その中の様子を眺める霊夢。

そのまま身体を全部潜り込ませて中に入り、金属質でありながら、いくつもの薄い板が積層している構造をしているからか、弾力、つまり柔らかさを感じ、さらに、人肌に似た温かさも感じさせる壁面にもたれかかった彼女は、ひと思いにこのブレンのことを気に入りそうになっていた。
それだけ、気持ちがいい空間だったのだ。
温かいものでぺたぺた触られているような気分だった。
しかしそこには、いやらしさとか乱雑さは一切感じない。

「んーんん～・・・いぃ～じゃないっ。素敵な気分だわ」
そんな声を上げつつ、続けて霊夢は、スリットウェハーの向こう側にその意思を感じるブレンに対して、こう語りかけていた。
「しっかし、あんたも可哀想にねぇ、紫なんて妖怪に会っちゃったせいで、捨てられちゃうんだから・・・・・えぇ？別に嫌じゃない？紫はいい奴だから、って・・・あっはは。いい奴だなんて言われるなんて、あいつ、猫かぶってたのかしら」
どうやら紫に好意を抱いているらしいブレンの返事に続いて、冷やかすような言葉を発する霊夢に、穴から身を乗り出してこちらの様子を見ている紫が返してくる。
「失敬な」

「そんだけの妖怪なんだと自覚しなさいよ・・・・・・まぁ、それでもあんたが紫のことをいい奴だっていうなら、それでいいや・・・でさ、私の方はどうなの？私の方は、気に入りそう？」
そう聞いた声への、ブレンの返事を聞いた霊夢は、笑顔を浮かべながら言った。
「ふふ、気に入りそうにないって応えてたら、今すぐここから出てたところよ・・・・・まぁ、なんかよく分からないけど、これからは私があんたと一緒にいるから。いつまでの仲かは分からないけど、仲良くしましょうよ」

こういうブレンと一緒に異変を解決するというなら、案外楽しそうだ。
そんなことを考えつつ霊夢は、明日の朝からブレンと共に地底へと発っていくことを、今から心待ちにすることができた。

※

咲夜から、次会えば殺すと言われてしまっている以上、美鈴は、紅魔館にグランチャーが戻ってきてもそれを追うようなことはできなかった。
しかし、遠目から眺めるグランチャーの左手のひらの上に、何か人影があるのが見えていた。
最初のころは、見間違いかと思えるほど小さな影だったが、段々と近くに寄ってくるころには、はっきりとその姿は認識できていた。
そうして、グランチャーが美鈴の頭上を通り過ぎ、背中に隠れてグランチャーの左手が見えなくなるちょうどその瞬間に、その姿はもっとも大きく眼に映った。
咲夜ではない。
もっと別の・・・紅魔館に住まう誰でもないように見えた。
他が指の間に隠れていたため、頭のてっぺんあたりしか見ることはできなかったが、緑色の髪の毛をしているようだった。

そんなものを見てしまったから、美鈴は、どうにかしてその影が何者なのか。ということだけは知りたいと思った。
あわよくば、その何者かを、何故咲夜とグランチャーは連れてきた

のかも分かれば・・・

グランチャーの帰還は、後何時間かすれば陽も落ちる、という時分でのことだった。
美鈴はその時にはとりあえず門の前で待ち、しばらくして、本当に陽が落ちてしまってから、じっとその場で仁王立ちして眼を凝らせるという、ある意味では修行（苦行？）になる仕事をやめて、館の中へと入っていく。
そうして、咲夜とばったり会い、その瞬間あの世に旅立つのではないかとびくびくしながらも、迷いない足取りである場所を目指し、寄り道することなく進んでいく。

まず最初に行くべき場所は、レミリアの部屋だ。
咲夜が何者かを連れて館に戻ってきたとして、多分主人のレミリアに対し紹介するなり、事情を説明するなりするはずだ。
となれば、美鈴の知りたいことを手っ取り早く知る方法が、レミリアに聞いてみることだった。
紅魔館の主人であり、悪魔と称される者の部屋にずかずかと押し入り一方的に質問することは、正直、館の妖精メイドなら恐ろしくてできたものではないが、咲夜に凄まれ、殺すとまで言われた美鈴は、なんだかんだといって恐怖心が麻痺してしまっていた。
実際レミリアは人間達が口々に語る黒い噂とは違い、我儘でこそあれ、根本的な性格は淑女的（？）だ。
多少無礼なことをしても、血の何dl（デシリットル）かを流すだけで済むだろう・・・やはり、淑女的ではなさそうだ。
が、死ななければ、もうどうなってもいい。
咲夜のナイフに肩を抉られた時に比べれば、精神的な苦痛に関してはずっと軽いだろう。ただお仕置きをうけるだけなのだから、むし

ろ粛然とした態度で受けたいところだ。
レミリアから話を聞いて事情が分かればそれでよし、そうでなければ、他にパチュリーの部屋とか、方々何か分かりそうなところへ行けばいい。

夜が来てからこそ、紅魔館は賑やかになる。
せわしなく動く数人のメイドとすれ違いながら、美鈴はやがてレミリアの部屋の前に来た。
紅魔館の内装は、外から見える禍々しい様相に比べれば、割と普通の洋館といった感じだった。
煉瓦を積み上げて、セメントやら石膏やらでも塗りたくったのだろう。（その割には館の強度は相当なものだった）
長々と続く廊下の壁は、意外にも灰色がかった白い色をしていた。
そんな中で、廊下に敷かれている、どれほどに長さなのかも分からない真っ赤な絨毯が、焼きつくように印象に残る。
それと、部屋へと続くドア。
これもまた、怖いほどに赤い色をしていた。

そうして、そんなドアをいきなり開け放つようなことはせず、二度ノックしてから、ドア越しに中へと呼びかけた。
「・・・美鈴です。突然の無礼はご容赦願います。ひとつお聞きしたいことがございますが、入らせていただいてよいでしょうか？」

少しだけ間を置いてから、
「いいわよ」という返事が返ってきたので、それから美鈴は、ドアを開けて部屋の中へと入った。

レミリアの部屋というのは、何というか・・・可愛らしかった。

真っ白で、こう・・・フリフリしていた。
美鈴には上手く表現できないが、とにかく小奇麗で可愛らしい部屋だ。
普段の掃除も、（レミリア本人がやっているわけがないのは明白だが）行き届いていて、隅々まで探しても、埃のひとつも見つけられるかどうか分からない。
そして、そういう部屋の中、無駄にキングサイズのベッドの上に腰を降ろして座りこんでいるレミリア。
彼女が、全てではないにしても、極彩色に染まる紅魔館の中で、何でこういう不釣り合いなほどの純白に彩られた部屋に住んでいるかというと、わざわざ紅くする必要がないから、だそうだ。
彼女の獲物となった者の返り血で、真っ赤な色に染まるから。
元から紅い色をしているより、真っ白な中を染みいるように深紅の色が侵食していく方が、恐ろしいからだそうだ。
そういうことを脳裏で思い出す美鈴は、やっぱり怖いなぁ、などと考えながらも、ベッドの上で、
「質問があるって、何？」と聞いてくるレミリアに対し、まずは開けたドアを閉めてから、聞いた。ドアも真っ白だ。

「先程、お嬢様の下に、誰か来ませんでしたか？紅魔館に元々住んでいない、来訪者が・・・」
「あぁ～、いたいた。そいつのことを話せばいいの？」
「あ、はい。そうです」

美鈴の返事を聞いたレミリアは、
「めんどくさいんだけど・・・まぁ、いいでしょう」と、渋りながらも、彼女の下にやってきたという者について、説明を始めた。

咲夜が連れてきたその者は、東風谷　早苗と名乗っていた。
妖怪の山の山頂の神社で巫女（風祝と言っていたか？）をしているという。要するに、人間だ。
彼女が紅魔館に訪れたのは、なんでも、オルファンの目的を食い止め、幻想郷のオーガニックエナジーが吸い尽くされるのを防ぐため、咲夜と互いに協力関係を結ぶことにし、そのことをレミリアに許可してもらうためだそうだ。
何でも、すでに早苗と、彼女の神社に祭られている神は、オルファンを食い止めるための計画を進めているらしく、そのひとつが、各地のグランチャーを集結させることだった。
咲夜のグランチャーも、その戦力のひとつに組み込むようだ。
そのためレミリアに、まずは咲夜がこちらに協力することを許可してもらい、その上でもう一つ、咲夜をグランチャーと共に早苗側で預かることになるかもしれず、紅魔館から一時離れてもらうことになるかもしれないから、そのことについても許可してほしいとも言っていた。
どうしても館から離すことができないのならそれでもいいので、せめて協力は受け入れてほしいということだった。

それを聞いてレミリアは、咲夜を早苗達に預けることに関してはきっぱりと断った。
咲夜はこの館のメイド長だ。
一日二日はともかく、長い間いなくなってしまえば、調子が狂う。
レミリアだけでない、館全体がだ。
なので、早苗達が必要とするときはどうぞ好きなように使ってくれていいが、常にそちら側に置いておくことはできない、ということにしておいた。
駄目なら駄目でいいと言っていたのは早苗達だ。
彼女は、それだけで十分だと、人の良さそうな笑顔を見せて喜んでいた。

レミリアが、
「ああいうヤツの血は美味しいんだ」
と、不気味な笑みを浮かべながら話をするような、そういう笑顔だったようだ。

そうして、協力することが決まったのなら、近い内にまた呼びだすことがあるかもしれないから、その時はすぐに来てもらうので。今はとにかく、ゆっくり英気を養っておいてください。と伝え、早苗は、見送りも受けずに帰っていった。

レミリアが彼女について見て知ったのは、これだけだ。
で、多分これが、早苗という者について大まかに知っておくべきことの全てだろう。と、美鈴には思えた。

ひとしきり話を聞いた美鈴は、レミリアに対し謝辞を含めてこう言った。
「ありがとうございます・・・知りたいことは大体分かりました。ご用があったのはこれだけですので・・・これで、失礼させていただきます。わざわざ、無用な時間をお使い頂いて、申し訳ございません」
そうして、「では、これで失礼させて頂きます」と、もう一度伝えてから、早々に部屋を出ていこうと踵を返した美鈴だったが、その前に、レミリアの方から急に問うてきたので、そちらの方を振り返り、彼女の言葉に耳を傾けた。
「なんでこんなこと聞いてきたの?」

そういえば、何故だろう。
美鈴は、グランチャーがその早苗という人間を連れているのを見て、

とにかく彼女が何者か知ろうと考えたのだ。
それが何故なのかは、実を言うと分からなかった。
美鈴は、気恥ずかしそう笑ってに頭を掻きながら、応えた。
「いえね。グランチャーが誰か連れて戻ってきたものだから、つい興味が湧いてしまって・・・」
「ふぅん。そ、帰っていいわよ」
どうでも良さそうに言い返されてしまったので、「ははっ・・・失礼します」と苦笑いしつつ、改めて美鈴は、レミリアから離れていくと、ドアを開け廊下の方へと出ていき、そのドアを再び閉めた。
確かに、これが血で真っ赤に染まれば恐ろしいだろうな、と思える純白の部屋から、元の、深紅に彩られた絨毯が目立つ。別世界のような廊下に出る。

そうして、ドアを閉め、振り返り、廊下に敷かれている長々とした血の色に染まる絨毯を眼に入れた時、美鈴はまるで閃光が駆け抜けるかのように、何故グランチャーの手のひらに乗る早苗の姿が気になったのかという、本当の理由に気づいた。
何故、その当時に分からなかったのか・・・
美鈴は、随分遅れた今になって、自分の気持ちを思い知った。

不安だったのだ。
何か、あの小さな影が、咲夜を・・・少しずつ荒んでいっている咲夜を、どうしようもないところにまで連れて行ってしまうような気がして。
だから無意識のうちに、あれが何者だったのか知ろうとした。
そして実際、あの影は・・・早苗という人間は、咲夜を遠くに連れていこうとしていた。
それに関しては、レミリアが拒否したため、咲夜が紅魔館からいなくなるようなことにはならなかった。
だが、美鈴が、咲夜をいなくなってしまうと感じていたのは、ただ

この館からいなくなるだけ、ということではなかった。

彼女の心だ。それが、どこかにいなくなってしまうような、そんな感覚だ。

それについては、まだ解決などしてはいなかった。

早苗という協力者を得、そしてまだまだグランチャーは増えていくだろう。

そういうことを考えれば、今回のように、三対一という危険な状況に彼女が飛び出していくことはなくなるだろうと思えた。

そうなれば、グランチャーが戦うことについては、もう黙って見ているしかない。

同じ目的を持ち、共にオルファンと戦うアンチボディがいるのなら、死ぬような危険は大分少なくなる。

そうなれば、幻想郷を守るために戦う彼女を批難することなど、到底できなくなっていた。

それでも、このまま咲夜がグランチャーに乗って戦うことを放っていたら、何か、取り返しのつかないことになるかもしれない。

彼女がどこか、取り返しのつかないところにまで言ってしまいそうだ。

このままでは・・・

レミリアの部屋のドアの前で、じっと動かず、立ち尽くしたまま、紅い絨毯を見つめる美鈴。

彼女は、彼女にしか消えないような小さな声で、呟いていた。

「・・・どうすればいいんだ・・・」

その時だった。
俯いた咲夜の視界を、滑らかな透き通るような白い肌の脚が、絨毯を踏みしめて横切っていくのが見えた。

咄嗟に顔を上げた時、美鈴は戦慄した。

咲夜だ。
次に会えばこちらを殺すと宣言していた咲夜が、すぐ眼の前を通り過ぎようとしていた。
彼女の銀色の髪が、彼女が美鈴に対して突き立てたナイフと同じ髪の色が、網膜に、漕がすほどに焼きついてくる。
心臓が止まるというのがどういう感覚なのか、美鈴は思い知ったような気がした。
だが、その一方で、全身を虫が這うように駆け巡っていく恐怖心に身ぶるいする中で、それと同じほどの、戸惑いもあった。

咲夜がこちらを殺すと言った声には、偽りはないように思えた。
それほど迫り来る口調だった。
だから、実際に美鈴が咲夜と会えば、死を逃れることはできないだろう、と考えていた。
それゆえに美鈴は、長らく館の中に戻ることもできず、門番の仕事に集中せざるを得なかったのだし、いざレミリアから話を聞くために館の中に入ってからも、びくびくした態度を取っていた。

要するに、美鈴はもうこの瞬間には、無数のナイフを全身に突き刺されて、絶命しているのが普通なのである。

しかし、真っ直ぐに歩きながら、すぐ眼の前を通り過ぎていった咲夜。その、前を真っ直ぐ見つめる、光の入らぬ暗い眼。

それは、美鈴の方を見向きもしていなかった。

「・・・・・・っ」

息を呑む美鈴の眼前を何事もないように通り過ぎ、そのまま背中を見せ、遠くに去っていく咲夜。

「・・・」

引きつった顔が、みるみる内に呆然とした、戸惑うような表情に代わっていく中で、やがて見えなくなる後ろ姿を眼で追う美鈴。

確かに、彼女は咲夜と会った。こちらの姿は、彼女に見えていたはずだ。

それでも咲夜は、こちらを殺すようなことはしなかった。

あの時の言葉は、単なる嘘だったのか？

あるいは・・・咲夜はそもそも、会ったと認識すらしていない？

考えを巡らせていた美鈴は、声を上げることすらなく、はっとした。

ある結論に到達したから。

まさしくその通りではないか。

咲夜は、こちらのことなど見向きもしていなかった。

眼に入っているだけで、認識すらしていなかったのだ。

無視しているとか、そういうものでもない。

まったく意識を向けていなかった。

今の咲夜にとっては、美鈴など、路傍の石に過ぎない・・・そういうことだった。例え眼の前にいようと。

だからつまり、咲夜に一切関わりさえしなければ、例え彼女の前に姿を見せようと、殺されることもないのだ。

いないと思っている者を殺そうとすることなどは、ない。

その認識は、少なくとも普通に生活している内には安全だという安心感をもたらすよりも、残酷な認識を美鈴に対してもたらしていた。

「・・・さ・・・咲夜さん」

いないものとして見られるなど・・・ある意味では、殺されるより酷なことだった。

美鈴は、未だにレミリアの部屋のドアの前で立ち尽くしたまま、手足を別の生物のごとくわなわなと震えさせた。

前はこんなことはなかった。

すれ違えば、声のひとつぐらいは必ずかけてくれたし、門番の仕事をサボるなと叱りつけてきたし、仕事があるなら何か手伝うと言えば、喜んで受け入れてくれたし、感謝だってしてくれた。時にはこちらを玩具か、あるいは娯楽のための実験台のように扱うこともあったが、そういうのも気にならなかった。

とにかく彼女は、凛々しくて、優しかった。何より強かったし、愛嬌だってあった。好きだと思えるような人間だった。

彼女のような人間がいれば、他の人間だって好きになってしまって、妖怪としては甘いほどの性格になってしまうのも、おかしなことではなかった。

そんな彼女にとって今はもう、自分はただの石ころでしかないわけか・・・

そんな認識と同時に、脳裏で突然浮かびあがってきた、深紅の巨人の姿。

瞬間美鈴は、震えていた両手を固く、血が出そうなほどに握りしめていた。
実際平時の彼女がこんなことをすれば、自分でやったことながら、「痛いっ」と悲鳴を上げながら手を開き直してしまうほどに強く。
美鈴の心では、咲夜のことを哀しむ以上に、憎しみの炎が、煌々と心の奥底で燃えあがり始めていた。
咲夜に対する憎しみではない。
彼女を、あのようにしてしまったグランチャーに対する憎しみだ。
グランチャーと出逢ってさえいなければ、咲夜はああはならなかった。
その証明となるものは、天狗の配達した新聞の記事だ。
グランチャーは人を狂暴にするという記述。

美鈴は、その場で突っ立っているのをやめ、館の中にある自分の部屋へと戻っていった（美鈴にだって、館の中で寝るだけの部屋はちゃんとあるのである）。
堅苦しい歩調で前へと出される足が、廊下に敷かれている血の色の絨毯を、突き破りそうなまでに強く踏みしめていく。
そうして一歩一歩足を踏み出していく美鈴は、腹の底から何かが湧きだしてきているのを感じて、それを、
「ふぅ・・・ふぅぅ・・・」と、歯を食いしばったまま吐き出される荒い息と共に吐き捨てていた。

それは、殺意だ。

咲夜の心が荒んでいくのを食い止める方法が、ひとつだけある。
だがそれは、咲夜が美鈴に対してやったことよりも、さらに残酷で、

恐ろしい行為であった。
こちらを殺すと言ってのけた咲夜以上の、獣（けだもの）のような、悪魔のような所業であった。
それこそ、主人であるレミリアをして悪魔と言わせることができるほどの。
例え実際はそうでなくとも、美鈴は、憎しみに駆られた自分を、自分自身の良心で罵倒するかのように、悪魔に仕立て上げたくなった。

要するに、元凶であるグランチャーを殺してしまえば、それで済むことなのだ。
グランチャーが人を狂暴にするなたば、そのグランチャーさえいなくなれば、荒んだ性格は元に戻っていくはずだ。

自らの部屋のドアを力強く開け、同時に部屋に入ってからまた力強く閉めた美鈴。
木造のドアが強引に閉ざされ、バンッ、という大きな音が鼓膜を揺らすが、今の美鈴にはその音が、耳を塞いで聞く遥か遠くで風船が割れる音を聞く程度にしか認識できなかった。
彼女は、ドアを入ってすぐの玄関のような場所に靴を揃えもせずに脱ぎ捨てる。紅魔館の様相にその意匠があると思われる欧州では、別段部屋の中で靴を脱ぐ風習はないが、さすがにベッドルームと一緒になっている個室に土足で入ることはできなかった。
そうして、そのまま隅に置かれているこぢんまりとしているベッドの方に歩み寄り、その上に飛び込むようにうつ伏せになって寝た。
そうして枕を両腕で抱きしめ・・・いや、力強く締め上げながら、顔を押しつけ埋もれさせた。

「ふぅぅ・・・ふぅーー・・・っ！」

先程まで吐き捨てられていたものがより激しくなった、獲物を見つけた獣の息のような声を発する美鈴。
枕に押しつけた口から吐き出された息が、布に熱を帯びさせる。そうしてその熱が、すぐに消えていく。
枕を締め付ける両腕が、恐怖などではなく、あまりに力を強く込め過ぎているが故に、微かに痙攣するかのように震える。

そんな中で、考える。

グランチャーを殺めるにしても、美鈴の力では返り討ちに合う危険があるし、それこそ咲夜に抹殺されてしまうだろう。
だが、わざわざ美鈴が事を済ませる必要はなかった。
グランチャーを殺してくれる者なら、他にいるではないか。
彼の者の敵である、ブレンパワード。
彼らがグランチャーを撃破してくれれば、戦いの中での死である。
美鈴が恨まれる理由など毛頭なければ、咲夜だって諦めて、未練を断ち切り元の彼女に戻ってくれるはず。
そうとも、地底には少なくとも三体のブレンがいるという。
そしてどうやら、グランチャーはオルファンの破壊には失敗したようだ。
即ち、決してその三体は、グランチャーよりも格下ではないということだ。
となれば、改めてその三体を纏めて、不意打ち的に嗾(けしか)ければ、グランチャーを殺すこともできるかもしれない。
いや、恐らくできるだろう。

美鈴は、自分の中のこの考えを、愚かしく浅ましく、この世の屑のような考えだと批判して、すぐに忘れようともしていた。
しかし、そうすることすら分からなくなるほどの、グランチャーに対する怨嵯（えんさ）の念は強かった。
むしろ、語りかけてくる良心の声は、踏みしめることで、悪しき考えをより強調するための土台でしかないのかもしれない。
すでに美鈴は、自分自身、彼女の中の考えを実行することを、止められないでいた。
全ては、咲夜を元の彼女に戻してやるためだ。

そのためには、一度は好意を抱いたはずのグランチャーを、親の仇・・・いや、親の顔などはとうに忘れたから（そもそも居たのかも分からない）、主人の・・・それこそ、咲夜の仇と言った方がいいかもしれない。それほどにも憎むことができるのだ。
そのことを、罪だと思う気持ちはある。
だが、罪を感じても罰を受ける必要がない。そういう方法を思いついてしまえば、世の中というのは、何でもできてしまうものなのだ。

※

夜も更けてきた。
主人が吸血鬼であり、夜の妖怪である以上、紅魔館はまだ寝てはいない。
咲夜は再び、グランチャーの下へと来て、その胎内へと入っていた。
時間が経てば、多少疲れもなくなってきた。オーガニックエナジー

が戻ってきたのだ。
憔悴していた身体が、いつも通り動くようになってきている。
なら、そろそろいい加減に、グランチャーにもその生命の力を分け与えねばなるまい。
少量ながらも、外部から与えられるオーガニックエナジーがあれば、後はそれをより強めることで、自力で蘇ることができるのがグランチャーだ。

実際、健常に戻ったと言える咲夜がただ乗り込むだけでも、グランチャーはオーガニックエナジーを順調に取り戻し、回復しているようだった。
咲夜は、今一度自分が乗り込むことで、少しずつ、しかし確実に再生しているグランチャーのことを感じながら、こう語りかけていた。

「これから、少しずつ貴方の仲間は増えていく・・・だけど、貴方が他のグランチャーのことなど気にせず、ひとりで戦おうとしていることは、正しい」
咲夜は、スリットウェハーの中で座り込みながら、右手でその、無数の溝が奔っていながらも滑らかだと思える表面を撫でながら、続けて言う。
「貴方達グランチャーには、個々の向上心がある。自分ひとりを、より高めようとする心が・・・グランチャーという種全体よりも、まず自分に誇りを持ち、その誇りに見合うだけの一生を全うしようとする心がね・・・その末にあるものが、ビープレートであると・・・そうねぇ。仲間だろうがなんだろうが、何がこようと、貴方は貴方の誇りをかけて、貴方自身の戦いをすればいい。それが、グランチャーにとっては種全体の進歩に繋がる・・・かもしれないから」

グランチャーを撫でていた右手で、今度は懐から一本のナイフを取

り出し、それを眼前に掲げ、ギラギラと光を発する銀色の刃を眺めながら、咲夜は最後に、言った。

「しかし、共に戦う者がいることは、頼もしくないわけがないわね・・・・・・グランチャー、次こそは、あの連中は叩きのめす。そうして、オルファンも破壊する・・・そしてその先にあるものを手にしましょう・・・・・・貴方がこうやって生き永らえていることが、本当に素晴らしいことであるってことを、一緒に確かめましょう・・・」

研ぎ澄まされたナイフの刃が、見つめる咲夜の片目を映し出す。その眼は、紅魔館の頂点であり夜の頂点である主人の眼と、このグランチャーの身体の色と・・・即ち、人間から吹きだす血潮と同じ色をしていた。

※

グランチャーの襲撃をどうにか切り抜けたその翌日。朝早く。

さとりはこのような時分から、ブレンの胎内へと入り、自らのオーガニックエナジーをブレンに対し分け与えていた。

そういう約束だったからだ。

さとりが困った時にブレンがその生命を分けてくれる代わりに、さとりもまた、ブレンが困った時は、自らの生命を分け与える。

そうして今は、そうすることでブレンの火傷が少しでも早く治るのなら。そうでなくとも、少しでもブレンの気分が安らぐのなら、彼

女は迷いなくそうしていた。
ブレンの火傷は、確かに少しずつだが修復されているようだった。
昨日の今日で、どれほどマシになったのかというのはよく分からない。
が、火傷の傷が少しずつ消えようとしているのは確かなことのようだし、これなら後十日ぐらいあれば、元の調子を取り戻すこともできるだろう。
たった十日で完治するような火傷など・・・あるにはあるだろうが、ブレンの場合、傷の修復が早いのだろう。
昨日、地霊殿の中庭に帰ってきた時は、地獄の苦しみを感じていたのだが、今はそれも大分落ち着いているらしかった。
確かにまだ、ソードエクステンションによる莫大な熱の余韻は感じるが、それも、少し強めにヒリヒリする程度のものだそうだ。
それぐらいなら平気だと語るブレンの気持ちが落ち着いていれば、さとりの心だって、落ちつく。

スリットウェハーにあぐらをかいて座り込みながら、さとりはブレンに語りかけていた。
「ちょっとずつよくなってるわね・・・大丈夫?・・・そう、大丈夫なのね・・・・・・え?」
彼女は、ブレンが返してくる言葉を聞いて、思わず聞き返してしまった。
「・・・今度は、ちゃんと戦わないといけないって・・・・・・もう次戦うことを考えているの?・・・今は何も考えないで、大人しく休んでいればいいわ・・・いずれまた、グランチャーと戦わないといけないことも、分かってるんだけどね」

早くもブレンは、今日の戦いの恐怖を忘れて（忘れようとして）、次なる戦いへの覚悟を決めようとしていた。
それは別に、グランチャーが憎いとか、戦うことが本能として肉体

に宿っているからとか、そういうことではない。
次にグランチャーがこちらに襲いかかってきた時、サトリブレンが戦いの恐怖におびえて動けなかったのでは、危険に晒されるのは魔理沙とマリサブレン、それと、輝夜とカグヤブレンだ。
彼女らと、彼の者達を守るためにも、サトリブレンもまた戦う気概を持って、共に戦いぬかなければならない。
ブレンとグランチャーが、運命的に決められている敵同士であり、戦うことが避けられない以上。
そうしなければならない以上・・・

サトリブレンのこの覚悟は、とても勇ましい覚悟であった、そうして、哀しい覚悟でもあった。
さとりは、他の者のためならば、これほどの勇気を持てる（例えうわべだけのものであろうと）ブレンのことが、やはり好きだった。
なら、そんなブレンの足をひっぱるわけにもいかない・・・
覚悟を決めるべきは、さとりもまた同じなのか・・・

さとりは、あぐらをかいたまま、スリットウェハーの上面を何の気なしに見上げながら、呟いた。
「貴方が頑張るって言うなら・・・私も頑張る・・・・・・なんてことない。私達地底の妖怪の本来持っていた恐怖の力を、グランチャーに対し見せつけてやればいいだけのこと・・・それだけのことなら・・・」
その言葉は勿論、自分に対し言い聞かせるものであったし、古来より人間に恐れられた地底の妖怪のことも、単なるこじつけだった。

覚悟を決めるとは言ったが、戦うことは、怖い。
昨日、ブレンの身を苛んだ地獄の熱。
それを、主観的に感じることができたとはいえ、単に気持ちだけの問題として知ったさとりでさえ、身動きが取れなくなるほどの苦し

みを受けた。
身悶えすることさえできなかった。
あまりにも熱すぎて、逆に凍えていくような感じだった。
沸騰しながら膨張した血液が全身の血管を突き破って、全身の隅々まで残らず染みわたっていくような、そんな感覚だった。
それを思い出すと、また身体が震えだしそうになる。
今だって、まだその余韻自体は微かながらも残っているのだ。
グランチャーと再び戦った時、あれと同じほどの、あるいはそれ以上の痛みが襲い来るかもしれない。
そう思えば、覚悟を決めようにも、決められないのも仕方がなかった。

せめて、戦いの最中に現れた、あの紫のブレン。
あのような、グランチャーに大いに勝る力を持った仲間が、後少しでいいから増えてくれれば・・・
さとりは、あの紫のブレンに乗っているであろうある者に対し、相変わらず顔を上に向けたまま、聞こえてなどいないだろうことを承知で、こう語りかけていた。
「八雲　紫さん・・・・・・貴方は私達に、自分達自身でオルファンと向き合うことを望んでいます・・・でも、どんどん状況は辛いものになっていく・・・どうか、また助けては下さいませんか？誰かに頼り切ることはよくないかもしれませんが・・・そうしないと、身が張り裂けそうなのです・・・」

こんなところでこんなことを言っても、聞こえているわけがないだろう。
それでもさとりには、あの不思議な雰囲気を持つ紫なら、この声だって、どこかで聞き入れてくれているのではないか、という気分が、微かにしていた。

と、そんな時だった。
ふと前の方に眼を向けると、ブレンの装甲越しに、こいしとお燐達が中庭に出てきているのが見えた。
さとりは呆気に取られた。
彼女らが、これほど朝早くから起きていることはほとんどない。
早朝とは書いたが、今は、地上においてはまだ陽が昇り始めてもいない時間。
寅の正刻・・・朝の四時になっているかいないかという時期だ。
さとりだって、ブレンのことが気になってついそういう時間に早起きしてしまったというだけで、普段は今時分にはさすがに起きていない。こいし達も勿論、すやすや眠っている最中だ。

どうしてこんなに早く起きているのだろうかと思わず考えるが、そういう必要はなかった。
考えなくとも、分かる話だった。
彼女らもまた、ブレンのことが心配だったのだろう。
オルファンの目的を知り、皆がブレンに対してやむを得ない疑念を持っていた時、さとりと共に説得を試みていたのが彼女達だ。
そういう彼女達なら、ブレンが傷つき苦しんでいるのに、心配にならない理由がない。
さとりは、いくらブレンの胎内に入っているからといって、自分だけを特別扱いするわけにはいかないな、と心を戒めた。
特別なのはさとりだけではない。
こいし達だって、もしかしたら、ブレンに対し貴重な生命の価値を与えているかもしれない。

第十話　その2

さとりは、ブレンに装甲を開けさせ、穴を出て中庭に降り立って、近づいてくるこいし達を待った。
彼女が先んじてここにいることに驚いた様子で、こいしが、
「お姉様～っ」と声を上げる。
さとりはそれに、
「おはようこいし。お燐とお空も・・・早起きなのねぇ」と応えた。
それを聞いたお燐が、さとりには既に分かっていることを言う。
「ブレンが心配で、寝れなかったんですよぉ」
それと一緒に、お空が口をあんぐりと開けて大きなあくびをした。

「ふふ・・・」
その様子を見て、微笑むさとりに、お燐が続けて聞いた。
「ブレンは、大丈夫なんですかぁ？」
「うん・・・傷は少しずつマシになってるようだし、痛みも引いてきてるわ」
それを聞いたこいしが、両手を合わせて喜んだ。
「あぁ～、それはよかったなぁ～っ」

それと一緒に、こいし達の方を見ているブレンが、ぶるぶると鳴き声を発した。
こいし達が来てくれたことを、喜んでいるようだった。
その喜びは、ブレンの中にある後僅かな痛みも、すっかり忘れさせてくれる。
さとりはふと、あることを思いついていた。

そうしてそれを、まずはブレンに対し呼びかけて、そして聞いていた。
「ねぇブレン・・・こいし達も、貴方の中にいさせてあげてもいい？」
それを聞いたこいし達が、三人仲良く、
「えぇ？」と声をあげた。

ブレンからの返事を聞いたさとりは、笑顔で、三人の方に振り返り、言った。
「さっき言った通りよ・・・みんなも、ブレンの身体の中に入ってみたいでしょう?今までずっと入ったことなかったから」
勿論、さとりの言っていたことは聞こえていたし意味はよく分かっていた。
が、その上でこいしが心配そうな、というか申し訳なさそうな顔をして応える。
「いいの～？」
自分達が乗り込むことで、ブレンの調子が悪くなったりしないだろうか、ということを気にしての言葉だった。
こいしの心は読めないのだが、そういう気遣いをしているのだろうと考えることはできた。
いや、こいしだからこそ、何も考えてないのかもしれないが・・・

とりあえず、さとりはそれに返す。
「ブレンはいいといってくれてるから、大丈夫よ・・・あの子の胎内は広いし、みんなで入っても窮屈じゃないから・・・や、ちょっとだけ窮屈かもしれないけど・・・・・・貴方達さえよければ、一緒に入りましょう。とても気持ちのいいところなのよ」
何であれ、ブレンの許しさえあればそれで十分だった。

こいし達は、また三人そろって顔をぱっと輝かせて、言った。
「じゃぁ入る～っ」
「ブレンの身体ん中でどんな感じなのか、知ってみたかったんですよぅ～」
「さとり様も一緒に入りましょうよ～」

「うん、勿論ね・・・なら、早速入りましょう。この装甲に乗って、穴を潜ってね、ひとりひとり順番に」
お空の声にこう応え、さとりは自分から先んじて、ブレンの胎内へと戻っていった。

スリットウェハーの穴を潜り、ちょうど先程まで座り込んでいた場所に、同じように座り直し、球形を帯びている壁面に背中を預ける。
弾性のある壁面は、もたれかかれば包み込むように背中にフィットしてくれた。
勿論、球形を帯びているので、本当に背中が全部ぴったりとくっつくわけではないが。

さとりに続いて、こいしが穴を潜って身を乗り出してきた。
空間を覆うスリットウェハーの形成する不可思議な模様を見回して、
「うわぁ～～、ははっ」と、感嘆と笑い声が混じったような声をあげ、その中へと足を踏み入れると、さとりの隣に座りこんで、さとり同様、ブレンの胎内の柔らかい感触に身体を預けた。
「柔らか～い・・・気持ちいいね」と、また感嘆をあげる。

それに続いて、お燐も中に入って、さとりの隣に座りこむ。

そうして次は、お空が入ってくる番だったのだが・・・

「うにゅーっ！」

穴の向こう側から、飛び込むように、両手を前に突き出してお空が入ってきた。
満面の笑みを浮かべ、さながらロケットのごとく突っ込んできたお空の頭が、さとりの腹のあたりにぶつかり、ぴんと伸ばされた両手は、スリットウェハーを、ぶにっ、とへこませた。
お空の顔が勢いよく、強かに腹にめり込んだものだから、これにはさすがに、
「うぐぅっ」と、呻き声をあげる。
さとりにぶつかったままうつ伏せに、飛んだ矢が地面に落ちるかのごとく倒れたお空。

お燐が慌てて、「バッカだねぇ、乱暴なんだよぅ～！」と大声を上げるが、お空はそんなことは聞いてもいない様子で、
「ふふふふ～」と笑いながら、膝から曲げられた両足を、バタバタと揺らしていた。
それと一緒に、飛び込んできた勢いのままさとりの腰に回され抱きついてきた両腕も、小さく揺さぶられていた。
が、しばらくすると、その腕を離し、お空は、さとりの膝のあたりに頭を乗せたまま身体をぐるりと回して、今度は仰向けの姿勢になった。
そうして、さとりに膝枕され、ブレンの胎内の温かさに包まれ、気持ちよさそうに、
「んにゅぅ～・・・」と声を上げていた。
「羨ましいやっちゃな・・・さとり様ぁ、痛かったでしょ、お仕置きしましょうよ、お仕置き」とお燐。

そんな声に、また、「ふ・・・ふふ・・・後でね、後で」と、頬笑みを浮かべるさとり。
そういう中で四人はやがて、ブレンの発する温もりに包まれて、しばらくの間、スリットウェハーの壁面を、じっと眺めていた。

皆一様に、穏やかな眼で、金属質でありながら生物的でもあるこの奇妙な胎内の向こうにあるような気がする、ブレンの心を見つめていた。

そう、心だ。

さとりには今分かった。

どうやらブレンは、胎内にあまりに多くの生物を一度に入れ過ぎると、オーガニックエナジーの吸収が難しくなり、効率が悪くなるらしい。

そういう意味で、こいし達がこの場にいることは、確かに、ブレンの調子を悪くするものではあった。

そのことが分かり、申し訳なく思い、やはりこいし達をすぐ降ろそうかとも考えたが、ブレンはそうしなくていいと言っていた。むしろ、そんなことはしないでくれ、と。

ブレンは、自身のオーガニックエナジーの乱れなどは、何ひとつ苦にはしていなかった。

ブレンには、意思がある。心があるし、気持ちだってある。

さとりと、彼女にとっての家族である者達をみんな一緒に包みこんでいるブレンの心の安らぎは、不安定になり始めているオーガニックエナジーのことなど全て忘れさせるだけのものだった。

そうしてさとりは、自身の生命の根本的な基準であるオーガニックエナジーを無視してでも、こいし達も一緒に、等しく包み込んでくれているブレンの心に感謝した。

それと同時に、確信した。

ブレンがただ、オルファンに命じられてオーガニックエナジーを吸収するだけの、器のような生物なら、こうやって心を持ったりはし

なかった。
ブレンは、その一体一体が、自分だけの魂を持った、無二の生物だ。
かけがえのない友人だ。
そしてもし、そんなブレンが、自分達の目的であるビープレートの発見のために生きて、全ての行動、ありとあらゆる性質がそこに帰結するとするのなら。
心を持つことが、ビープレートを生み出しうる要因なのだと。

さとりには、ずっと感じられていたことだ。
この安らぎこそが、ビープレートだと呼べるかもしれない、ということは。
今回はただ、そのことが、地上に出た時に差し込んできた刺すような陽光よりもはっきりと認識できたという、それだけのことだった。

そんな中、急にあることが脳裏をよぎって、さとりはこいしに対し問うていた。
「ねぇ、こいし・・・あなたは、オルファンのことどう思う？」
「えぇ？」
さとり自身、急に話が変わってしまっていたので、こいしが不思議そうな声を出すのも当然だろうと思った。
が、その上で、何故だか無性に聞きたいことがあったから、そのことをひと思いに聞いてみることにしたのだ。
「オルファンは決して悪い者ではないはずだけど。それでも、もしかしたらあの方が、幻想郷を滅ぼしてしまうかもしれない・・・そうなったとき、私達が、オルファンをやっつけてしまわないといけないの・・・こいしには、オルファンを殺すようなこと、できる？」
こいしはすぐに応えた。
「・・・可哀想だよ」

「・・・できないかしら」
「・・・分かんない」
「・・・・・・」

覚悟という言葉を使った。
さとりもブレンも、次に戦う時、グランチャーに恐れを捨てて戦う覚悟を持つと。
しかしそれ以上に、強く持つべき覚悟があった。
いざという時・・・そうしなければ、幻想郷が滅びるという時に、オルファンを殺める覚悟である。
さとりは、その覚悟を持つことが、オルファンを信じてビープレートを求める自分達がやるべきことだと考えていた。
だが実際、そんな覚悟ができているのか？
ブレンが傷ついただけでも、我が身の事のように苦しいのに、オルファンを・・・あれほど大きく、不思議な雰囲気を醸し出して、こちらに語りかけてきた者。ビープレートを探してくれるように願っていた者を・・・

さとりの考えるこの覚悟というのは、別の言い方をすれば責任感でもあった。
そうしなければならないという責任。
そしてそれは、彼女達だけが持つべきものではない。
オルファンもまた、彼女達に多くを任せて、ブレンパワードを妖怪達に託した以上、自らの生命を失うことを覚悟し、その責任を持たなければいけない。
そうできなければ、結局それはただオルファンを甘やかし、甘えさせているだけのことに過ぎなくなる。
そうなれば、ビープレートが見つからなかった時、結局オルファンは幻想郷のオーガニックエナジーを吸い尽くして、銀河に旅立ってしまうだろう。

お互いが、責任を持って、覚悟を決めなければ・・・

結局、どういうことなのか？

そもそも何故急に、こんなことを考えてしまったのだろうか・・・

さとりは、こいしに対して質問するほどにこの思考に屈託していたのだが、自分が何故こういうことを考えるのか、考えたところでどうなるのかは、何も分からなかった。
頭の中が変になったのかと疑いそうにもなったが、さすがにそんなことはないだろうという自覚はあった。

そうして、何故？どうなるのか？ということに考えを巡らせると、途端に頭が真っ白になっていき、何も思いつかなくなる。

そもそも、今こういう時に、こんなことを考えるべきではなかったのだろう。
オルファンを殺めるとか、そんなことは、その者の子供であると言えるブレンパワードと共にいる中で考えるべきことではなかった。
優しくこちらを包んでいるブレンに対し、『お前の母を殺すことを考えている』と言っているようなものなのだ。

そんなことを考えるのはよくない。
オルファンのことは、いずれ結論を導いておくべきではあるが、それは今でなくてもいいはずだ。

中空をぼーっと見つめて黙りこんでいたさとりに、こいしが不思議そうに、
「どうしたの？」と聞いてくる。
それにさとりは、苦笑いしながら、
「何でもない。変なこと聞いてごめんなさいね」と応えた。
こいしはそれを聞いてうっすらと笑いながら、
「変なお姉ちゃんだね・・・ねぇ、お燐？変な姉ちゃんだね」と、反対側でさとりを挟んでいるお燐の方に聞いていた。
その声を聞いてさとりは、自分の右半身に、自分のペットの身体の重さがかかっていることを思い出した。

が、こいしの声に返事はなかった。
「・・・？」
二人が揃って、お燐の方に眼を向け、その顔を覗ってみると、返事がない理由はすぐに分かった。
お燐は、さとりの方にもたれかかって、深く眼を閉じ、静かな寝息を立てていた。
彼女の頭が、こくりとさとりの方に傾いて、右肩の上に乗っていた。
「・・・寝てるんだ・・・」
こいしが呟く。
そうしてそれに続いてさとりも呟いた。
「お空も・・・」

それを聞いて、さとりに膝枕されているお空にも眼を向けるこいし。
彼女もまた、お燐と同様、気持ちよさそうに眠りについていた。
そういえばお燐は、ブレンが心配で眠れなかったと言っていた。
寝不足だったのに無理して起きていたのか。
それが、ブレンの胎内にいるのがあまりに気持ちいいものだから、

つい眠りに入ってしまったようだ。

ほとんど無音に近い空間の中で、静かな寝息が心地よく鼓膜を揺らす中で、自分の身体にかかるお燐とお空の身体の感触を確かめながら、交互に二人の顔を眺めたさとりも、何だか段々と眠くなってきた。

寝不足だというのなら、さとりだってそうだし、こいしだってそうだった。

ブレンが心配で起きてしまったのだが、当のブレンは、いつもと変わらない穏やかさで、逆にさとり達に対し気を配ってくれていた。

オーガニックエナジーだって、安定していない。そうなれば、火傷の修復だって多少遅れてしまうというのに、それでも、気分がいいからと、自分の身体の中で、子守唄でも歌ってくれていたわけだ。

ブレンは、居たいのならば、四人そろってずっとここにいればいいと言っていた。

「こいし」

ふとさとりは、妹の方に呼びかけていたが、返事はない。

こいしの方も、いつの間にやらすっかり寝に入ってしまっていたようだ。

さっきまで起きていたはずなのに、あっという間に夢の中か。本当に寝不足だったようだ。

段々と眠気が強くなってきた。睡魔が、身体を襲ってくる。

さとりも、皆と一緒に眠ることにした。

このまま陽が昇るまでの間、しばらくここにいよう。

ゆっくりと、溶けるように瞼を閉じたさとりだったが、そのまま心の奥を夢の世界にまで誘う前に、閉ざした眼をもう一度だけ薄く開いて、眠りの中に入っていくその一瞬のまどろみの中にある声で、ブレンに対し呼びかけていた。

「ブレン・・・貴方には、いつも・・・励まされて、助けられてばっ・・・かりいる・・・・・・いつか、私も・・・貴方のことを・・・助けてあげないといけないのに、ねぇ・・・・・・いつか、そうするから・・・待っててね・・・・・・待って・・・いて・・・」

それだけを言い終えると、さとりは改めて眼を深く閉じた。
そうして、彼女は、深い意識の海の底へと落ち込んでいき。何かを言う事も、考えることもなくなった。
何も言わなくてよかったから。考える必要もなかったから。

※

先日、戦闘の終了を確認し、サトリブレンの傷ついた姿を見た文は、すぐさま妖怪の山へと急行した。
事態が、予想以上に窮するものであることを思い知ったからだ。
オルファンの目的を果たすべく、ビープレートを探すにしても、グランチャーがオルファンを攻撃し、それを防ぐためにブレンパワードで戦わなければならない。
今回は文がその接近を察知することができて事前に対応できたが、そうでなければ、無防備の状態のオルファンに攻撃が加えられていただろう。
グランチャーの動きを察するために、幻想郷の各地を偵察する必要が出てきた。
とはいえ、天狗はすでに部隊の編成を進めている。
そこには、グランチャーの動きを察知するために偵察隊もある。

それを、いち早く任務に就けておくだけでいいのだ。

天狗の要塞へと帰還し、すぐさま天魔に対し報告する。
中間管理職である大天狗の仲介は必要ない。
極秘任務が公の任務に代わりつつあるというだけで、文とはたては未だに、天狗の長直々の命で動く天狗だった。なんともいい身分だ。
異変が全て解決した後は、方々に言いふらして自慢して回りたいものだ。

さて、それはともかくとして、報告と共に、偵察部隊の即急な派遣を要請する。
それはすぐさま了承され、全体としての部隊の編成はまだ終わっていないが、偵察隊だけは、すでに部隊に組み込まれている分だけの天狗を、急ごしらえの先発隊として送り出すことになった。
とはいえ、その急ごしらえにも、まだ多少の時間は要する。
今日のところはとにかく文だけは帰して、翌早朝には、どうにか派遣するそうだ。
もしかしたら、部隊ではなく、たった一人の天狗だけしか、派遣することができないかもしれないという。
しかし文は、そのたった一人の名前を聞くことで、逆に安心することができた。
それだけの能力を持った天狗だったからだ。

ということで、文はひとまず地霊殿へと帰還することになった。

そうして、翌朝、卯の正刻、午前六時頃・・・今にいたる。

これぐらいの時間になると、文とはたては勿論のこと、にとりも起きていたようだ。
多分他にも何人か起きている者はいるだろうが、中庭にまで出てきているのは、彼女らぐらいのものだった。

いや、もう一人いる。
勇儀だ。
本来ならば彼女は、河童達を連れ、地表の調査のために出かけているはずである。
が、彼女の話ではなんでも・・・

「河童達なんだがなぁ・・・昨日の戦闘と、サトリブレンの様子を・・・ほら、あれだよ。あれを見て、大分ビビってしまってるようなんだ。またグランチャーがやってこないかと言って、調査をしようとしないのさ」
途中でサトリブレンの方を顎でくいっ、と示しながら、かく言う勇儀。
それににとりが、仕方ないといった具合に応える。
「うん・・・ブレンがあんなになるような攻撃なら、河童なんかが受ければ、骨まで溶けちゃいますよ」
「鬼である私だって、生きてはいまい・・・今回ばかりは、修正してやることもできないねぇ」

それに、文が続く。
「昨日言った天狗の偵察隊が来てくれれば、グランチャーが来たとしても昨日ほど急なことにはならないだろうし、河童も安心して調査ができると思うんですけどねぇ・・・もうすぐ来るはずですけど・・・」
それを聞いたはたてが、同じ天狗としてはどうもあり得ないことを聞く。

「そんな偵察隊のひとつやふたつぐらいで、どうにかなるものじゃないでしょ」
それに文が、そうでもないといった感じで、両腕を組んで、じとーっとはたての方を見ながら、返した。
「あの、犬走　椛だからね」

「・・・？」
勇儀は、その名前を聞いても、何で文があいう態度なのか分からなかった。それも当然だろう。
だが、その天狗と面識のあるはたてなどは、なるほどそういうことかと納得もできているようだった。
にとりの方などは、合点がいった様子で、
「あぁーあの方ならそりゃ安心だっ」と笑顔で言っていた。

勇儀が改めて、
「どういうヤツなのさ？」と質問すると、文が応える。
「千里先まで見渡す程度の能力があるんですよ・・・所謂千里眼ってヤツですね」

それを聞いて、ようやく勇儀も納得できた。
彼女らしく、大口を開けて、声もそれ相応に無駄に張り上げ、笑い声混じりにいった。
「あぁ～！はっはっは！なるほどなぁ、それで頼りにならなきゃアホだねぇっ」
「そうですよぉ・・・まぁ、私個人としては、ちょっと仕事人間的な気質もある真面目ちゃんって感じなんですけどね・・・」
そんな文の言葉に、はたてが冷やかすように言う。
「そりゃ、自由奔放でやりたい放題なあんたとはウマが合わないのも当然だわぁーっ」
それに文も、嘲るような口調で言い返す。

「ひきこもりのあんたに言われたかないわぁーっ。あんたなんてウマが合わない以前に、意識すらされてないんじゃないのぉ～？」

「そうやって自然と喧嘩するなぁーっ！はっ倒すぞぉっ！？」

喧嘩は好きだが、うじうじとした口喧嘩は殴りたくなるほど嫌いな勇儀の怒声を聞けば、相変わらず喧嘩腰になってきた二人もぴしっと気をつけして、

「はいっ」

「はいっ」と元気よく返事する。

そうして、腰に手を当て胸を張った勇儀は固い口調で、部下を叱りつける上司のごとく言った。

「そいつがこれから来るっていうなら、出迎えてやった方がいいんじゃないか、えぇっ？そうだろうっ」

その声を聞いてすぐさま二人は、びっ、と敬礼して、

「了解しましたぁーっ！」

「射命丸　文、並び、姫海棠　はたて！命令を遂行してまいりまぁーす！」

と応答しながら、そろそろこちらに到着するであろう椛を出迎えに、中庭から飛びたっていった。

それを眺めつつ、勇儀も、

「おぉーう！行ってこいよぉー！」見送りの言葉を発する。

それを眺めていたにとりは、面白そうににたにた笑いながら、言った。

「さっすが鬼様ですなぁ・・・貴方様が妖怪の山に戻ってきたら、どうなることやら・・・」

「ん？戻ってやろうかい？」

眼を丸くして振り返った勇儀の言葉に、にとりは慌てて両手を勇儀の方に広げ、首をぶんぶん左右に振りながら応えた。

「じょじょじょ・・・冗談ですってぇ～・・・あっははは・・・は、は」

と、そんな中、突然、中庭の隅で鎮座していたサトリブレンの股間部の装甲が開いた。
装甲が開く、がこん、とか、がしゅん、とかいう独特な音が響いたので、視界に入っていなくてもすぐに分かった。
何事だ?と二人同時にサトリブレンの方を見るにとりと勇儀。
そんな二人が見ている中で、装甲が開いた先に空いた大きな穴から、のっそりとさとりが出てきた。
そうして、一旦装甲の上に降りてから、中庭の上に降り立った彼女に続いて、こいし、お燐、お空と順々に降りてきた。
ブレンの中ですっかり熟睡していた彼女らが、改めて起床したのだ。
ほんの二時間足らずのことだったが、本当に気持ち良く眠れたようだった。

彼女達が朝早くからブレンと共にいることを知らなければ、唐突で不可思議な光景である。
実際にとりも勇儀も、さとり達が次々にブレンの胎内から出てくるのを見て、次いで互いに眼を合わせてから、きょとんとした顔で言い合っていたのだから。
「地霊殿の妖怪がみんな仲良く・・・」
「なにやってたんでしょうねぇ?」

とにかく二人は、ブレンの胎内から出て地面に降り立ったさとり達がこちらの姿に気づいていたようなので、とりあえず手を振って、元気よく挨拶することにした。
「さとり、おはよぉー!」

「今日もいい天気だぁー！地底に天気なんてないけどなぁ～っ！はっはっは！」

さとり達も、にっこり笑って、挨拶を返してきてくれた。

※

計画を実行段階に移したその日の内に協力者を得ることができたのは、早苗達にとっては非常に大きかった。

確か地底のブレンは三体・・・咲夜の言っていた新手のブレンを入れると四体だ。

こちらとしては、後二体ほどグランチャーの頭数がそろえば、オルファンの破壊は可能であると思われる。

となれば早苗としては、後見つけ出すべき協力者は一人でよかったわけだ。

残りのもう一体の枠には、自身のブレンが入るのだから。

咲夜の協力を得て神社へと戻ってきたその翌日。彼女は早速行動を起こすことにした。

とはいえ、まずやるべきことは神社の境内の掃除である。

山の山頂という、本当に何もない処では、枯れて舞い落ちた葉の一枚すら見当たらない。

なのでせいぜい、砂埃をかき集めてくるぐらいのことしかやらないわけだが。

それでも、やらないといけないことはやるし、それが自分のやるべきことなら、一生懸命に取り組むのが早苗だ。
だからこそ、はっきり言っておかしな性格をしている彼女でも、妖怪退治をするから怖がられこそすれ、露骨に嫌われるようなことはなかった。
むしろ、どこぞの神社でぐうたらな生活をしている博麗誰やらさんよりも、ずっと好感は持てるわけだ。

そうして、そんな早苗は、神社の石畳を竹箒で掃きながら、境内に覆いかぶさるように薄く散漫している砂埃をかき集めつつ、考えていた。

さて、グランチャーを見つけ出すとはいうが、実はどう見つければいいのかは分からない。
アンチボディは薄い円盤状のオーガニックプレートから誕生するらしいから、そのプレートを探せばいいだろう。
だが、どうやらグランチャーとブレンパワードのプレートはどちらも同じような見た目をしていて、見分ける方法は今のところないようだ。
となれば、もしオーガニックプレートを見つけたとしても、そこから生まれてくるのがブレンである恐れもあるのだ。
ブレンなら、ただ乗らなければそれで済む話だが、そうやっていちいちプレートを見つけて、そこからリバイバルするアンチボディを眼で見て確認したのでは、恐ろしく非効率的だ。

もっと上手な方法を考えよう。
例えば、天狗を利用したりするのはどうだ？
今日も一匹の天狗が、旧地獄の方へと飛んでいくのが見えた。

異変のために派遣されたのだと考えられる。
山の天狗達は恐らく、地底にいる者達に、一応協力する姿勢を取っているのだろう。
もちろんあの天狗が、幻想郷を滅ぼす恐れもあるオルファンを容認してことはないだろうが。
となれば、オルファンの目的を、安全に（これが重要だ）成就させるべく、各地に散ったオーガニックプレート、即ちブレンの動向も調べることだろう。
となれば、プレートからリバイバルするアンチボディの姿も確認されるはずだ。
プレートを探しているのなら、間違いなくグランチャーのリバイバルに立ちあう機会もあるはずだ。
ならば、そのグランチャーのリバイバルが発生したという情報をどうにかして入手して、その場所へ向かえばいい。
天狗のネットワークは非常に優秀なものだから、よほど末端の下っ端天狗はともかくとして、大体の天狗には、全体としての情報が行き渡っているだろうから、そこら辺から適当な天狗を捕まえて情報を吐き出させる。
そうすれば、おそらくグランチャーの情報も得られるだろう。大天狗あたりなら、より確実だ。
そんな乱暴なことをしなくとも、どうにかして交渉し、天狗の中に協力者を見つけ、情報を流出（リーク）させてもらってもいい。
それなら後々、いざ地底の連中と事を起こした際に、こちらが有利になるような手回しが出来るようになるかもしれない。
もしやるとすれば、後者だろう。

が、しかし、ひとつ大きな問題があって、そもそもどうやって天狗と交渉すればいいのか、早苗には思いつかなかった。
杜撰な手を打ってしまえば、当然協力など得られるわけがないだろうし、最悪危険因子扱いされて拘束、監禁されるかもしれない。

そんなことになれば、この守矢神社に祭られている二つの神にこそ迷惑がかかる。

さて、どうしたものか？

やはり、一つ一つプレートを探して、実際に眼で見て探すしかないのか？

石畳の上を、箒で掃きながら、ちょこちょこ歩きまわっていた早苗は、自分のやっている仕事がなんだったのかも忘れてしまうほどに、深く考えを巡らせた。

それではいけない、とひとまず考えるのは掃除を終えた後からにしなければと心を改めようとした。

が、そんな中でだ。

早苗は、根本的なところで、自分自身何ができるのかを忘れてしまっていた。

それをふと、大きな岩で閉ざされていた川の水流が、その岩を取り除くことで再び流れ始めるかのように、ある種カタルシスじみた感覚と共に早苗の脳裏で思い出させていた。

そう、大事なことを今思い出した。

自分はそもそも、こうやって考える必要などなかった。

俯き気味になってはっとした早苗は、その顔を振り上げるように上へと、手を伸ばせば掴めそうなほどに雲が近くなった空へと向けた。

そうして、大声で言う。

「そうですよっ！」

そうして、それと共に雲間から見える真っ青な空の色を眼に入れた早苗は、さらに驚愕することになる。

彼女がこの考えに辿り着いたのはついさっき、今の今でのことだ。だが、彼女の前で発生した事態は、あまりにも即急なものであった。彼女はまだ、それが起こることを望んですらいない。いや、ある意味ではずっと、昨日からずっと望んでいたのだが。

早苗はただじっと、雲間から抜け出して、真っ白な、あるいは時々灰色な綿のような水蒸気の塊の下を浮遊する、その姿を見た。

そう、グランチャーと会いたいと思ったその翌日に、実際にグランチャーと会うこと。

しかも、それを現実に出来る方法を思いついたその瞬間に、その方法を実行してもいないのに眼の前でそれが起きること。

そんなことは、奇跡としか言いようがないだろう。

早苗は、奇跡を呼び起こす程度の能力がある。

しかしそれも、瞬時に作用するものではない。

どれほどの奇跡を操ることが出来るかも彼女自身分からない。

だから、今この時に、奇跡の力をもってグランチャーを呼び寄せようと考えても、そうそうすぐには実現することはない。

そう。

早苗の視界に小さく、しかし、太陽の日差しで影を作りながらも、その影の中で鮮やかなプリズムを映しだしている円盤の存在は、本

当に、単なる偶然でしかなかったわけだ。
決して、早苗が起こした奇跡などではなかった。

だからこそだ。
早苗にはこれが、奇跡を超えた奇跡であり、自分の運命なのではないかというセンチメンタリズムな感情を抱かせるものであるのだと思えた。

「あ・・・あれは・・・あれはきっとっ」
早苗は、持っていた竹箒を両手で握りしめ、段々とこちらに向かって降りてきているように見えるプレートをキラキラした眼で見つめながら、そう呟いていた。
ついさっき掃除に真面目に取り組もうと心に命じていたのだが、こうなってしまえばそんな意識は何処吹く風。すっかり消え去ってしまっていた。
そうして、またしてもはっ、とした彼女は、突然円盤から眼を逸らすと、石畳の向こうにある社に向かって大声で叫んでいた。

「神奈子様ーっ！諏訪子様ーっ！」
この事態を、すぐさま、守矢神社に二柱に伝えなければならなかった。

早苗の声に応えるかのように、社のすぐ前で、ビシャーンという無駄に神々しい音を放ち、いくつもの光を地面から湧き出るように飛散させ、無駄に神々しく神奈子と諏訪子が出現した。

「我を呼ぶのは――――・・・早苗だった」
「どうしたの？」

突然早苗に呼ばれたものだから、二人とも戸惑っているようだった。
が、何も言わず、興奮した様子でとにかく空の方を指さす早苗に従い、その指差す方向に眼を向けた二人は、早苗がこちらを大声で呼んだ理由がよく分かった。
眼を見開いて神奈子が、続いて、同じく眼を見開いて諏訪子が驚嘆を上げる。
「あれ・・・オーガニックプレートという奴っ？」
「グランチャーのっ？あっちから来てくれたんだ！」
諏訪子の言葉には、早苗はあくまで冷静になろうとしつつも、なり切れていない口調で応えた。
「いえ・・・まだ、グランチャーと決まったわけではありません。ブレンパワードにリバイバルするかも」
が、その言葉は口先だけのものだった。
すでに彼女の心の内では、あのプレートから何がリバイバルしてくるのか、ということなどは、決まり切ったものになっていた。
ゆらゆら宙を舞い、僅かに回転しながら降りてくるプレートの姿は、まるで神の世界の向こうから、現人神である早苗を正真正銘の神にするべく出迎えに来ている天使のようにさえ思えた。
それほどの心持ちの中にいる早苗の下に、ゆっくりとプレートは降りてくる。
やがてそれは、早苗の眼線と同じぐらいの高さになり、ついには、彼女のすぐ眼の前で、石畳の上に、薄い毛布でもかけるようにふわりと降り立った。
「・・・・・・っ」
最早声を上げることもなく、感激したような笑みを浮かべた早苗が、

そのまま眼の前にあるプレートの前にしゃがみこんで、その滑らかな表面に触れてみようとした。
が、神奈子がそれを制止して、早苗の両肩を抱きかかえるように持つと、胸元にぐいと引きよせて、そのまま彼女の身体ごと後ろへと下がっていった。
「あんっ・・・神奈子様？」
突然何をするのだろうと、戸惑った様子で聞く早苗に、神奈子もまた、嬉しそうににこにこ笑いながら、彼女の耳元で応えた。
「まずは、リバイバルさせないとねぇ・・・リバイバルの光は強くって、近くにいちゃぁいけんなんでしょ？」
「あっ・・・はい、そうですねぇ」

そう、早苗は実際に体験したことはないが（そして今から体験することになるのだろうが）、アンチボディがリバイバルする際の光は、大分強いものらしい。

もしかしたらプレートは、アンチボディが肉体を形成しリバイバルするのに必要な分。そうして、誰かを胎内に宿すまでの間しばらくは動けるだけのオーガニックエナジーが・・・膨大な量貯蔵されているのかもしれない。
だから、多くのプレートを生み出し、外へと放出する際、オルファンは間欠泉の熱や硫黄を遠慮なしに吸収し、即席のオーガニックエナジーを作っていたのか。
そうしてリバイバルの際。プレートはその大量のオーガニックエナジーを一気に放出して、無から有を生み出し、アンチボディを形作る。
放出される光は、その時のエネルギーの内の一部が、アンチボディを形成することなく損失される際に、別のエネルギーに変換されたものではないだろうか？
外の世の中にだってよくある話。ジュール熱のようなものか。

そんな冷静な考えと一緒に、なら早くその光を見せて欲しいと、早苗の方が距離を取ったため（社に置いてある賽銭箱の傍にまで下がっていた）少しだけ遠くの方に見えるようになったプレートに、心の中で催促もしていた。
そうして、三人が息を呑んで見守る中、早苗が胸中で発した。

――――さぁ、早く・・・早く来てください！――――

その叫びに呼応したのか、石畳に降りてからは沈黙を続けていたプレートが、突如高速で回転運動を始めた。
同時に、その回転により、陽光を浴びてひとつには留まらない無数の光を煌めかせていた表面が、それらの光を全て混ぜ合わせた不思議な色合いを映し出し、そしてその向こうから、雪の一粒ほどの光の粒子を、無数に放出しはじめた。
何百、もしかしたら何千という光が一斉に放たれ、プレートの回転と合わせて、大きな光の渦を生み出す。
そしてその光の渦の中に、小さなタイルの一枚ほどの板が形成され、それが次々に継ぎ合わさっていく。

「く・・・くるぞぉ・・・」
先程からずっと早苗の肩を持っていたままだった神奈子が、呟く。

「・・・・・・っ」
早苗は、高まり過ぎた期待がいっそ緊張すらもたらし、固くなった喉元（喉が固くなったらどうなるのかなど知らないが、とにかく固くなったように思えた）を、ごくりとならして、生唾を飲み下した。

だが、すでに早苗は、まだグランチャーであるかも分かっていない、生まれてもいないアンチボディを、好きになり始めていた。

まるで、その答えを出すの待っていたかのように、奇跡を起こすことに気づいた早苗の前にその姿を現し、そして今、まるで早苗の心に応えるかのようにリバイバルしようとしているこのアンチボディ・・・いや、グランチャー。

早く会いたい。まだリバイバルは終わらないのだろうか。と思った。そうしてグランチャーの方も、早くこちらに会いたがっているように見えた。

そう、まさしく運命共同体となって、ブレンパワードとオルファンを打ち倒し、ビープレートを、無限の生命力を得る。

この時早苗は、オルファンのオーガニックエナジーを利用しようとか、そういう彼女達の野望のことを忘れて、ただ純粋に、グランチャーと生命を共有したいと考えた。

第十話　その3

光の中で、少しずつ、しかし確実に、アンチボディはその肉体を形成していた。
やがて、ほとんどそのシルエットが形作られるころには、それがグランチャーであることは、その特徴的な頭部を見ることで確定した。

やがて、完全にリバイバルが終了し、強い光も、プレートの回転も、失われる円盤そのもののプリズムの光と共に止まると、早苗は無我夢中で、生気を失ったプレートの上に佇立する、グランチャーの下へと駆け寄っていった。

「きたぞー、グランチャーだわ！」
「これは、さすがにすっごいよぉ！」
神奈子と諏訪子の声が響き渡る。

リバイバルしたグランチャーは、真っ白な肉体をしていて、また、肩や二の腕、脛のあたりの装甲に、青色のラインが描かれていた。
プレートの上にはもう一つ、グランチャーが持つべき武器、ソードエクステンションも置いてある。

それを眼で見て確かめながら、先程まで自分がいた、プレートのすぐ眼の前、見上げればグランチャーの全身を隈なく眺められる位置にまでひと息に駆け寄ってきた早苗は、両腕を大きく広げ、全身を声にして、彼の者に対し呼びかけていた。

「グランチャーっ！私は東風谷　早苗です！これから貴方の友達に

なる、東風谷　早苗ですよぉ～！」
満面の笑みで、口を大きく開けて言う早苗の背中に追いつきながら、神奈子と諏訪子も続く。
「そうだぁ、乗せてやってくれー！」
「早苗をよろしく頼むよぉ～！」

それを聞いてか聞かずか・・・いや、おそらく聞いたのだろう。
グランチャーは、その場でゆっくりと、片膝をついた姿勢になってしゃがみこんだ。
そうして早苗の前で、胎内へと続く装甲を開け放つ。
それを見た彼女は、最早これ以上感激することもできないような様子で、
「うわぁ・・・ははっ！」
と、感嘆と笑い声を続けざまに発した。

そうして、早苗は飛び跳ねるように地面を蹴って装甲の上に乗ると、そこからスリットウェハーの穴をくぐり、胎内へと入る。
さとりや魔理沙が、自分のブレンに乗り込むときに同じことをしているのを見てきた。
それを、今度は自分がやるというつもりではいたのだが、それがこうも早いとは思わなかった。
そうしてさとり達は、自分達が乗り込むアンチボディの胎内を、とても心地よい空間だと称していた。

彼女らの言う心地よい空間へとその身を入れ、実際に、その硬質な見た目とは裏腹に柔らかい感触を持つ壁面に触れる。
これが鉱物の塊であると考えて（実際そうでないのは分かっているが）、早苗の知る限りこれほどの弾力を持つものなど見たことも聞

いたこともなかった。
まさしく常識破りな感覚が、早苗の脳内に、電流を懸け巡らせ、熱い液体を流し込み、固い金具で叩きつけられたような感覚を、一斉に送りこんでくる。

今回は、幻想郷が滅びるほどの危険を前に、暢気なことを言っているから気に喰わなかった地底の連中の言うことも、納得できた。
アンチボディの胎内は、人の心を真っ直ぐ、前向きにしてくれる。
どういう形であれ、条規を使って直線を描いたほどに、ぴったりと真っ直ぐに。
後は、ブレンであるか、グランチャーであるかで、その真っ直ぐな心の在り方が変わるわけだ。
ブレンならば、他者を思いやる優しさを、グランチャーならば、自分だけを信じる、他者に対しての攻撃性を。
今、実感として分かった。
アンチボディは、胎内に乗り込んでいる者の意思・・・いくつもの煩悩や葛藤により、ぐねぐねと曲がりくねっている意思を、真っ直ぐにして、自分の意思と重ねるのだ。
そうして、二本の線、二つの意思を、ひとつにする。

早苗はグランチャーの胎内で、まるで何かに打たれたかのようにがくりと顔を俯ける。
が、それからすぐに、ゆっくりと元の角度に上げる。
その顔は、不敵ににやりと笑んでいた。
が、ただ笑みを浮かべたというだけで、別段先程とそれほど顔つきが豹変したというわけでもなかった。
だが、それもそのはずだ。

早苗は、非常に嬉しかった。それ故に、身震いするほどの快感さえも感じていた。
今しがた乗り込んだこの瞬間から、早苗とグランチャーの意思は、ぴたりと重なり合っていた・・・ように思えたからだ。
彎曲した意思を真っ直ぐに正す必要もなかった。
すでに早苗は、グランチャーと同じ目的を持ち、そのことに全てを捧げる気概だったのである。
そう。ブレンを討ち果たし、オルファンを破壊する。
そうしてその上で、ビープレートを手にする。

早苗は、グランチャーが早くも自分の手足となり、また、自分が、グランチャーの手足となっている、異様なまでの一体感に、戸惑う事もなく興奮していた。
グランチャーの持つ力が、身体に流れ込み、満腔を満たすような気分だ。
同時に、早苗の中の力、精気とも呼べるものが、激流となって流れ出し、グランチャーに染み込んでいくのが分かる。
実際に体感できるわけがないが、男性が精通する時の気分というのは、こういうものなのだろうか？
そう思えるような感覚に、早苗はきつく眼を閉じ、歯を喰いしばった口元をだらしなく引きつらせて、頬を紅くして、肩をブルブルと震わせた。
そうして、
「んん～っ・・・ふぅ、ぅうんっ」
と、何やら得体のしれない声を発する。

彼女はそれを恥ずかしがってか、逆にむしろ恥ずかしげもなく身体全体でこの快感を表現しているのか、きつく閉ざされていた眼を開き、右拳を左手のひらで、胸の前で二度、パンッパンッ、と受け止めた。

そうして、口を大きく開き、大声で言った。

「今、私と貴方の心は、ひとつとなりました！グランチャー！そして、私と貴方がいれば、どんな奴にだって負けない！よぉ～～しっ！」

このまま、勢いに任せて、オルファンの方まで飛んで行きそうにさえなった。

いや、実際、無意識のうちに早苗とグランチャーは、この快感（カタルシス）をそのままに、敵に真っ向からぶつかってやろうと、当初の計画も無視し、オルファンを急襲しようと守矢神社から飛び上がろうとしていた。

が、それを制止し、本能的な肉体の動きに全てを支配されそうになっていた早苗の意識を呼び戻すものがあった。

神奈子が、大声で呼ぶ声が聞こえていたのだ。

「おぉ～い！早苗っ、聞こえないのー？」

グランチャーが開けた装甲をまだ閉ざしていなかったため、張り上げている神奈子の声が、しっかりと早苗の耳に届いていた。

それでも、神奈子は先程からずっと早苗を呼んでいたらしく、早苗の方はそれに反応することができていなかったようだが。

いつまでも返事をしない早苗を怒っているようでもあったし、それ以上に、何か大きな事態が発生して、驚いている様子でもあった。

はっ、として、慌ててスリットウェハーの穴から身を乗り出し、外にいる神奈子達の方を向き、応える。

「す、すみませーん、返事が遅れて！何かあったんですかっ？」

装甲を閉じていないので、壁面はモニターとしての役割を持っておらず、胎内から外の景色は見えなかった。
だから早苗は、神奈子が、（諏訪子もだ）驚いている理由が分からなかった。

しかし、眼を丸くして、どこかをびっと指差しながら、応える諏訪子のその言葉を聞けば、早苗だって、彼女ら以上に驚愕するものだった。
「・・・グランチャーが・・・ほら、もう一体っ！」

「えぇっ？」
すでにその言葉だけでも、青天の霹靂という程だったのだが、さらに、諏訪子の指差した方に眼を向け、何が起こっているのかを実際で眼で見て確かめた時は、それ以上に、自分自身さすがに驚きすぎではないかと自嘲できるほど、驚いてしまった。

「うっそぉぉぉーーーっ！？」
早苗の叫びが、守矢神社の境内にこだまする。
が、早苗も、神奈子も諏訪子も、当然の驚愕をしていたに過ぎない。

早苗のグランチャーに続いて、またしても新たなグランチャーが、宙を飛び、境内へと続く鳥居の上を通り過ぎて、そこからすぐの数段だけの階段も過ぎた所の、石畳の上へと降り立っていたからだ。
青色・・・というよりも、ほんの僅かに緑がかった青色・・・藍色と呼ぶべき色に、黄色のラインの入ったグランチャーだ。
ソードエクステンションもしっかりと握り、まさしくここが目的地であり、今、目的に到着したのだと、その凛々しい姿を静かに佇立させ、早苗のグランチャーの方へとその眼・・・にあたる部分を向

けている。

まさか？

息を呑み、その藍色のグランチャーの姿を眺めていた早苗と神奈子達は、三人揃って同じことを考えてしまっていた。さすがは仲良し・・・というわけではないが。

そして、その回答をもたらすより先に、整然とした沈黙を保っていたグランチャーが動きを見せた。

股間部の装甲が、鉄の枠組みが外れるような音を立て、開いた。

がくんと倒れた装甲が、それ以上先に行かないというところで痙攣するように微動して、約９０。傾いたところで止まった。

それが何を意味しているのか、分からないさとり達ではない。

まさかのまさかなようだ。

装甲が開くことで露わになった、グランチャーの胎内へと続く穴の奥から、ひとつの人影・・・にしては、何か大きすぎるような気もする影が出てきて、装甲の上に立ったかと思うと、そのままそこから、グランチャーを座らせないまま飛び降り、石段の上へとすたっと飛び降りた。

本当に、すたっ、という音が耳に聞こえるような思えるほど、華麗な着地だった。

足がもつれるようなこともないし、そもそも、地面に手をついてすらいない。

着地と同時に足を曲げることで、落下の衝撃を受け流したのだ。

使ってすらいない手は、無駄に長い着物の袖がぴったりと合わさっていて、その奥に隠れていた。

そうして遅れて早苗は、確かに一人であるはずの人影が、異様に大

きく見えたその理由も分かった。
この者・・・彼女?には、九本ほどの大きな尻尾が生えていたのだ。
その一本一本が、諏訪子の全身ぐらい大きそうな尻尾である。
それがばっと周りに向かって広がっているから、その尻尾の影があって、大きく見えていたのだ。
そして、尻尾は狐のそれ。眼の前・・・とは少し言えないほどの前方に降り立った彼女は、妖怪・・・化け狐だ。
よくよく見てみると、頭に被さっている帽子が、耳の形になっている。

彼女は、着地と同時に折り曲げた足を伸ばして、すくっと立ち上がる。
立って初めて気づいたが、随分と背が高い。
早苗よりもはるかに高いし、神奈子にだって、背伸びすれば勝てそうなほどだ。
まぁ、そんなことは今は関係なかろうが。

あれが、グランチャーと共に守矢神社にやってきた誰かさんか。
そうしてその目的は・・・

驚愕に包まれる中で、その驚愕以外にも何か感情があるような気がしたが、それが何なのか分からない。
分からないままに早苗は、
「ほぉぉ〜っほほ?」
と、傍から見れば吹き出しそうになるほどへんてこで、間抜けな声をあげた。
文などがこの場にいれば、大笑いしながら記念に一枚写真を撮っていきそうなほどである。
だが、今この場に文はいないし、早苗を笑うようなものもいなかった。

近くにいた神奈子も諏訪子も、含み笑いすら漏らすことはない。
結局早苗のこの妙ちくりんな声は、そのまま空気中を流れて、消え去っていくだけだった。

神奈子達は、そもそも早苗の声が聞こえていなかった。
神奈子は、眼の前に降り立ち、合わさった袖を顔の高さまで上げゆっくり一礼した狐の妖怪の方も見て、驚くのも止め、右手を顎にあて、その右腕の肘に左手のひらを添え何やら考え事をしていた。
諏訪子は、腕組みした状態で仁王立ちして（見た目のせいか、傍からすれば威厳も糞もあったものではないが、早苗だけに関しては、後光が眼をさすほどの神々しさを感じた）、神奈子同様、何かを考えているようだった。

そうして、何を考えていたかと言えば、二人とも、同じことだった。
あの狐の妖怪。最近会った誰かに似ている。
見た目は全然違うのだろうか、雰囲気が誰かにそっくりなのだ。
はたて・・・ではない。

彼女以外に、最近になって会ったと言えば、最早一名しか思い浮かぶ人物・・・いや、妖怪はいなかった。

そんなことを考えている内に、妖怪はすたすたとこちらの方に歩み寄ってきて、とうとう神奈子と諏訪子に、話をすれば声が聞こえるというほどに位置にまで近づいた。
早苗は慌てて、穴を飛び出て外へと抜け、そのままふわふわと宙を舞いつつ、神奈子の隣に降り立った。

狐の妖怪が口を開くのは、それから刹那ほどの後だった。

「突然のご訪問は、失礼。お初にお目にかかる。貴方達は、この神社におはす神、八坂　神奈子様と、洩矢　諏訪子様だな？それに、風祝の、東風谷　早苗．．．．．．私は、八雲　藍という。よろしく」

こちらを敬っているのかそうでないのかよく分からない口調の彼女．．．藍。

その言葉を聞いた神奈子と諏訪子は、自分達の中での考えががっちりと音をたてて固まり、確信となるのを感じた。

早苗もまた、彼女の語るその名に、思い当たる節があった。

そうして思わず早苗は、藍に対して聞いていた。

「八雲？八雲っていうと確か．．．」

続く声を待たずして、藍は、眼を狐よろしく線のように細めて、にこにこ笑って応えた。

「私は、八雲　紫様の式だ」

「一式神《Ａｒｔｉｆｉｃｉａｌ　Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅ》．．．？」

「違うよ。そこまで高等ではない。精々賞賛しても、式神ぐらい(computer)だ」

自らをそう規定する藍。

それは、それでいいとしよう。

ものすごくいい加減に考えてしまえば、式神も妖怪も似たようなものだ。

続いて神奈子が、参拝客に対してするような神様口調で聞く。

「今日ここに来たのは、どういう御用ですかな？」

それに、藍は笑ったまま応える。

「わざわざ答を言わなくったって、貴方達には大体分かっているんじゃないか？私には、そのことが推測できてる」

この藍、言っていることはなにやら淡々としていて、それこそ機械じみているのだが、こんな台詞を、抑揚をつけて感情豊かに言うものだから、妙な気分になってくる。

三人はますます、この妖怪・・・ではなく、式神が何者なのか得体のしれない、地に足がつかない感覚になってきた。

そして、藍の言うことも、確かにその通りであった。

三人には、藍がグランチャーと共にこの場にいる理由が、ある程度見当づいていた。

早苗が両手を胸の前でぐっと握って、身を乗り出すようにわずかに前のめりになって、興奮した様子で藍に対して言った。

「私達の仲間になってくださるんですねっ？」

それに藍は、ようやく細めていた眼を開いて、

「そうだ」と応えた。

それに、さらに諏訪子が問う。

「それも、あんたのご主人様の、八雲　紫が命じたことなの？」

「その通り」

その返事を聞いて、早苗は単純に仲間が増えたと喜んでいたようだったが、神奈子は、顎にやって手を離さず、諏訪子は、腕を組んだままだった。

八雲　紫の式神であるという、この藍。

主人同様、何を考えているのか分からない者だ。

式神とは、ただ主人から組み込まれた命令（プログラム）を実行するだけの存在だ。

全ての思考はそのために行われる。

だとしても、要するにその命令が、今の藍の精神そのものであると

も言っていい。
命令を実行することを最大の目的としているというだけで、藍も言うなれば、普通の感情を持った妖怪と同じだ。
そうして彼女は、主人の命に従い動いているとして、あの八雲　紫の意思の代弁者でもあるということだ。
あの、不気味な妖怪の代弁者。

こちらの計画に協力してくれる仲間になってくれるというのなら、それでもいい。

・・・いや、これについても、何か変だ。
そもそもなんで藍は・・・いや、彼女の主人である紫は、こちらに協力しようという気になった？
あたかも、こちらの計画を知っているようではないか。実際のところ、彼女が知るはずなどないのに。
それとも、ただ単純にこちらがグランチャーを持っているから、協同してオルファンを破壊しようと？
いや、そもそも早苗のグランチャーは今の今になってようやくリバイバルしたのだ。
それまでの間、守矢神社にはアンチボディなどいなかった。
そんなことでは、協力のしようなどないはずだ。

となればやはり、こちらの計画のことを知っていたのだろうと考えられる。
しかし、何故？

ようやく、顎に当てていた右手を降ろし、代わりにそれを藍の方に差し出した神奈子。

続けて、こう言う。
「協力を申し出たこと、感謝する。友好の証に、握手でもしよう。ほら、神様のおててに触れられるのだ、御利益ありますよ」
それを聞いて、
「あっはは」と笑いながら、藍も、同じく右手を差し出して、神奈子の手を握り返した。

が、その時だった。
藍は、少しだけびっくりした様子で眼を丸くし、握られている自らの手に眼を向けていた。
神奈子の握りしめてくる手の力が、やけに強かったからだ。
まるで、握手をするその手を、離さないつもりであるように。

「・・・・・・」
だが、この辺りはさすが式神というのか、藍には、何故自分の手がこう、痛いほどに強く握りしめられているのかという理由が、すぐに分かった。
同時に、眼の前に見えた神奈子の、笑顔を浮かべながらもその奥に一物(いちもつ)を含んだ顔も、予想できたものだった。
もちろん彼女の、問いかけてくるような声も。

「ただひとつ、そなたに聞いておきたいことがある」
「なんだ？」
「我々の計画のことは、知っていますか？」

その問いに、事の成り行きを見守りつつ、何やら神奈子も諏訪子も、協力者を得た割には素直に喜んでいないな、などと暢気なことを考えていた早苗が、言いかけてくる。
「初対面の妖怪なのに、知っているわけがないじゃないですか」
その声に後押しされたように、改めて藍も、笑顔で首をかしげながが

ら応える。
「計画とは何のことだ?よかったら、教えてくれないか?」
それを聞いた神奈子が、にやりと笑みを浮かべたまま、
「ふっふっふっふ・・・」と含み笑いを漏らす。
そこには、友好の意よりも、腹の中に抱えている一物の方が大きく顕われていた。
そういえば諏訪子の方は、未だ組んだ両腕を解きもせず、相変わらず藍の方をじーっと見つめている。

神奈子は確信した。確証はないが、確信した。
こいつは嘘をついている。
こちらの計画のことも、そのためにグランチャーを集めようとしていることも、全て承知で、藍はここにきた。
藍の返事は、平素な様子の落ちついた声だったが、その落ちついた声が、逆に明白な怪しさを漂わせていた。
あまりにも落ち着きすぎている。
計画なんて言葉を聞けば、多少は訝しげな顔を浮かべるのが普通だ。
式神なら尚更、頭の中で計画という言葉の意味を思考して、返事が遅れるかもしれないのだ。
だというのに、実際はこれだ。
落ち着き過ぎているからこそ、藍は、その怪しさをより一層増長していた。

神奈子は不敵な笑みを浮かべ、藍の右手をぐっ、と握ったまま、言った。
「よぉーしっ。そなたに対しては、全て・・・何もかも全て隈なく話そう。が、その上で、もうふたつほど、言っておきたいことがある」
「?」

「ひとつは、我が全てを話すということは、我々とそなたの間で、互いの腹の内を隠すようなことをしないという誓約の意味合いがある。よいか。我々は、他の者達に対してはともかく、そなたに対しては全てを話す。その代わり、そなたも、何ひとつ隠し事などはするなよ・・・・・・それと、いくらざっくばらんな関係になるからといって、もしさらに我々に対する協力者が増えたとしても、今回話したことを口外するなよ?・・・それで、もうひとつのことだ」

「ひとつ目のことについては、約束する・・・で、もうひとつは?」

「もしこの制約を聞き入れず、自らの腹の内を隠匿し続けたり、あるいは今日話したことを誰かに口走ったりすれば・・・バチが当たるからな・・・」

「うん。分かっている」

「・・・念のために、例えばどういうバチかというのを話せば・・・まずは、そなたから、その尻尾を一本ずつ引きちぎって、その後に油揚げにして食ってやる・・・その上で、お前の主人は、辱めて地獄を見せながら殺す・・・よろしいかな?」

そこまで言われて、ほんの僅かながら、笑顔だった藍の表情が固くなるのが見えた。

主人想いなのだろうか?主人を殺すと言ってのけたその一瞬だけ、笑顔が消えたように見えた。

それは、これから嘘はつけないな、という風に考えたからか、それとも、今すでに嘘をついているからか・・・

後者であることは、少なくとも神奈子と諏訪子の胸中に関しては明らかだった。

とはいえ、藍が早速誓約を破ったからといって、本当に先程言ったようなことを実行するわけではない。

神奈子は、そこまで非情な神ではない。むしろ本来は、とても心優しい神様であるのだ。

例え藍が、嘘をついて何をしようが、生命を奪ったりまではしないし、主人である紫だって同じだ。
ただ、たっぷりと辱めるぐらいのことはするかもしれない。
要するに、殺しはしないが、相応の罰は受けてもらうということだ。

が、それをやるのも今ではない。
神奈子も諏訪子も、まだ向こうが本当に何らかの事実を秘匿しているという確証は得ていないからだ。
それに今しがたの言葉は、単に、隠し事があるなら今話せ、そして、こちらは藍が何かを隠していることを知っている、ということを暗に示す揺さぶりだったわけだ。
効果があるのかは知らないが、この言葉は、少なくとも聞こえはしたはずだ。

よろしいか、と聞いた神奈子の言葉に、藍は、
「委細承知した」
と応えた。
それを聞いた神奈子の顔から、不穏な色は消え去った。
改めて、友好の意に満ちた表情が、藍の眼の前に見えていた。
諏訪子の方も、にこにこ笑って、組んだ腕を解いていた。

藍は、神奈子の質問に対する自分の解答が、露骨に怪しいものであることは分かっていたが、それでも、神奈子達のこの露骨さに比べれば、随分とマシだろうと考えていた。

固く握りしめてきていた神奈子の右手の力も緩くなったので、ようやく藍は右手を離した。
それと共に、早苗がこちらに歩み寄ってきて、肩やら背中やらに手

を置いてぽんぽんと叩きながら、言ってきた。
先程まで、何やら事が起きそうな感じで不安そうにしていたのだが、実際何も起こっていないのを見て、すっかり安心したようだった。

「よろしくお願いします～藍さーん！私の名前、よくご存知でしたねっ」
「そりゃ、幻想郷の数少ない神社のひとつの風祝なわけだから、知ってるよ」
「なら一緒に、この神社を信仰してくださいます？守矢神社は、人間も妖怪も、式神の信仰もみんな受け入れますからっ」
「・・・考えてはおく」
「あぁ、そうそう・・・藍さんは、あのグランチャーでもう何度か戦ったことはあるのですか？」
「いや、私の方も昨日会ったばかりだから、まだ戦ったことはない」
「あぁ～そうですかぁ！じゃあ、初心者同士なんですね、これから私のグランチャーはどんどん強くなっていくんですから、遅れないでくださいねっ」
「ふふふ・・・頑張る」

次々にいろいろなことを言ってくる早苗にいちいち返事しつつ、その合間を縫って、藍は、早苗のことを少し離れて笑顔で見守っている神奈子の方を向き、言った。
「それで、八坂様。先程のことなんだが・・・ちゃんと全て余すことなく話して頂くから・・・誓約という表現を使ったのは貴方の方なんだからな」

突然そんなことを言われた神奈子は、呆気に取られた様子で眼を丸くしたが、次いで、誓約のことをあえて無視している藍のことを知っている故に、『よくもほざきやがる』と言った表情で、眉根をぴくぴくさせながら苦笑いしつつ、

「分かってる。分かっておるっ・・・ちゃんと話します」と応えた。
が、実を言うと藍は、わざわざ神奈子から話してもらう必要などなかった。
確かに彼女は、嘘をついていたわけだ。
藍はすでに、神奈子達の計画のことは全て知っていた。
主人である紫から教えられていたからだ。
彼女は、アンチボディのことを教えたその時から、守矢神社に眼をつけ、そして、神奈子達の計画のことを、こっそりと盗み聞きしていたのだ。
その上で彼女は藍に、守矢神社にグランチャーと共に向かうように命じていた。

※

時は遡り、日付が昨日から今日に移り変わった頃のことだ。
藍は突然、幻想郷のどこにあるのかも分からない八雲の屋敷の庭先にて紫に呼び出されていた。
同時に彼女は、庭に降り立った一枚のプレートと、そこからリバイバルするグランチャーの姿を見た。
そうして紫は、神奈子達のことを説明した上で、藍に命じた。
「貴方はこれから、このグランチャーと共に守矢神社に赴き、そこにいる者達に協力しなさい・・・そうしてあくまでも、彼女らの命

じることではなく、グランチャーの命じることを、私の命と思って遂行なさい。また、決してグランチャーの力に感化されることなく、あくまでも冷静さを失わず、時にはグランチャーを説き伏せるようなことをなさい」

主人の命とあらば、それを遂行するのが式神だ。
そうして、その遂行だけに全ての意思を向けることで、主人に匹敵するほどの力を発揮するものだ。
藍は、紫の命に、すぐさま、
「分かりました」と返事する。
が、その上で、ひとつ分からないことがあったので、質問をしていた。
四則演算の分からない電卓が使いものにならないように、藍も、ただ考えるだけの存在ではなく、考えるために必要な知識を求めることもあった。

「でも、どうして守矢神社の者たちに？彼女らは、オルファンを利用して、あの方の銀河旅行を止めようとしているのですよ？」
その質問は、オルファンのために暗躍し、『そのもの』の目的を果たそうとしているように見える紫を知っているものならば、当然の疑問であるだろう。
それを聞いた紫は、微笑を浮かべて応えた。
「その野心は実現させない。往くのは貴方だけではない、私のブレンを霊夢に託して、彼女には地底の方へと向かって貰っている」
「そうなんですか」
そのことは今ようやく説明されたため、知らなかった。
紫が、自身のブレンパワードと、もう一体のアンチボディ、バロンズゥを擁していることは知っていた。
その内のブレンパワードを、霊夢に託したという。

霊夢か。
博麗の巫女として異変を解決する役目を負い、それ相応の実力を持っている。
藍だって一昔前には、本調子ではないながらも勝負して、こっぴどく負けた経験がある。
そして、紫は彼女のことをよく気にかけている。
自分のブレンを託すのも、理解できないことではない。
が、今そのことを伝えられても、藍自身の疑問の解決にはなってくれなかった。

結局、自分の質問には応えてくれないのだろうか？
コンピューターが、プログラムを実行するための知識を．．．言うなればソフト面での機能を持たなければ、それは重大な欠陥であり、コンピューターとして使いものにならないゴミであるということを意味する。
藍は、自分がそういうことになるのが非常に不安だった。
だからこそ、この不安を解消するために、なにより、紫からの命を実行するために、知るべきことを知っておこうと考えていたのだ。
だがそれを、紫が教えてくれることはない。

このままでは、何もできない。
紫は、後でこの疑問をどうにかしてくれるのか？
それとも、このまま何も分からないまま、不安なままで往けというのか？
不安は益々大きくなっていき、藍は、リバイバルして間もないグランチャーの姿を見つめながら、身体を微かに震えさせた。

それを隣で見た紫は、ふるふると震える藍の頭の上に被さっている帽子を脱がすと、露わになった黄金色の髪を何度も繰り返し撫でた。
そうして、言った。

「かわいいわねぇ・・・でも無様ね」
「・・・・・・」
「貴方の疑問を解消する・・・簡単な話よ。グランチャーと共に戦うのなら、守矢神社の者達と結託していた方が、都合がいいからというだけ・・・そして、あの者達の野心は、実現させない。先程言ったように、オルファンの下には霊夢を向かわせている。オルファンの支配なんてことは、させない」

そこまで聞いた藍は、今度は自分で考えて見た。
いくら守矢神社の者達の野心を止めるためとはいえ、わざわざオルファンの側に、ブレンと共に霊夢を向かわせるのか。
紫は、グランチャーとブレンパワードの両者を戦わせるつもりだ。
それは間違いないだろう。
だが彼女は、その内のどちらを勝たせようとしているのだ?
それこそ、オルファンを守矢神社から守るためなら、藍がそちらへ赴く理由など、ないではないか。

いや・・・違うかもしれない。
もしかしたら紫は、どちらも勝たせるつもりはないのではないか?
オルファンは守る、その上で、ブレン達がグランチャーに完全に勝利しないようにする。
藍は、自分の脳裏で固まった考えを、紫に伝える。
「それは・・・ブレンパワードとグランチャー・・・双方の均衡を保つためですか?どちらも勝たないよう、負けないように・・・」
「まぁね」
紫の返事は味気ないものだったが、その分、藍の言っていることが間違いではないことを示していた。
そして、紫は続いて、彼女の方を見る藍の眼を見返し、その奥底にまで、粘液がまとわりつくかのような視線を向けながら、こう言ってくる。

「もうひとつ考えてみましょう・・・何故ブレンパワードとグランチャーは戦っているのか」
「・・・？」

そんなことは、藍には分かるはずもなかった。
せいぜい、
「本能だから・・・ＤＮＡに（あるのかは分からないけど）そう刻み込まれているから・・・母なるオルファンが、そう命じているから・・・・・・アンチボディとは、私と同じだから・・・ですか？」
としか応えられなかった。
紫はそれに、
「まぁ、全部正解ではあるわ。全部ね・・・でも、もうひとつ分かっておいて欲しいことがある」
「・・・それは？」
「・・・自分で考えなさい」
「えぇぇ・・・」
ここまで話を引っ張っておいて、最後の最後にそれはないだろう。
さすがの藍も主人である紫に辟易しそうになる。
が、こんなのはいつものことだ。今更うんざりすることでもない。
そうして紫は、なんとも言えない表情をする藍に対して、続けて言った。
「このことは、貴方が私の命を遂行することに関しては、不要なものだからね。わざわざ私が教えることはない」

まぁ、確かにその通りだ。
グランチャーとブレンが何故戦うのか、ということは、とにかくグランチャーと共に戦えと命じられた藍にとっては、知っても知らなくてもいいことだった。
ただ、現状を知るために、よからぬことを企てている守矢神社に加担する理由は知りたかったが、では、その後に何をすればいいのか

ということは考えない。そういう将来的なことや、本質的なことは。機械のいい点は、行動するのに、ただ知識と命令があればいいということである。

人間的な論理とか、生物的な倫理とか、道徳的な道理とか、そういうものは一切なく、命じられれば人は殺せるし、命じられれば自ら死ぬこともできる。

ロボット三原則というものもある。式神はロボットとは違うのだろうが。

そうして藍は、自分を操りながらも、決してそのような、生物の摂理から外れた命令を寄越さない紫、

あくまでも自らで考える機会を与え、その上で、冷徹に命令（プログラミング）する彼女のことが、好きだったし、尊敬していた。

だからこそ藍は、紫の命とあらば何であろうと実行できた。

そう考える藍に対し、紫はさらにこう言う。

「そして、貴方はさっき、アンチボディと貴方が同じであると言った。そうして私はそれを正解だと言った・・・そのことの意味と一緒にね。考えなさい・・・・・・グランチャーと共に生きて、ブレンと戦う中で」

「分かりましたっ」

藍は、紫から命じられたいくつもの命を、全て心（メモリー）の中に刻み込んで、その全てを実行するべく、元気よく返事した。

※

式神としてやっていっている上で便利だと思うのが、こういう長ったらしい回想ですら、一瞬で済ませることができることだ。
心の中で、ある種データ化され、単なる記号の連なりとして認識・・・保存されている情報を、読み込むだけでいい。
いや、読み込む必要もない。
ただ、保存されているということを確かめることができれば、それでよかった。
確かめるその一瞬さえあれば、藍は、当時の紫の言葉を、それを聞いた時の自分の心境さえも、全て思い出すことができた。
そう、自分の心境でさえも・・・
それが、藍が決定的な部分で本物のコンピューターとは何かが違うことを顕わしていた。

そうして、紫からの言葉を思い出す中でも、神奈子達のことを忘れることもない。
藍は、こちらに対し揺さぶりを懸けたり、あるいは仲間が増えたと喜んだり、笑顔を見せたり、険しい顔を見せたり、脅しをかけてきたりする彼女らのことを、面白い連中だと考えた。
こういう連中と、腹の探り合いをしながら仲良くやっていくのは、楽しそうだな、と。
もちろん、楽しむ以上に、やるべきことがある。
グランチャーとして戦い、同時に、ブレンとグランチャーの戦いの、均衡を保つ。
そうすることが、今は正しいことであるはずだ。

そうして、そんなことを考えながら、藍は、べたべたとこちらの身

体を触ったり、尻尾に抱きついたりしてくる早苗のことは無視しつつ、神奈子へと聞いていた。
「それで、私を戦力に加えて、貴方達はこれからどうするんだ？早速オルファンをやっつけにいくのか？」
それを聞いて、神奈子も諏訪子も、尻尾に抱きついていた早苗も、みんなそろって、
「あっ」と声をあげた。
そういえば、藍の協力を得て、これからどうするのかを考えていなかった。
この前協力を得てきた咲夜に、今しがたリバイバルした早苗のグランチャー、それに、藍が加われば、これでこちらの戦力は三体だ。ちょうど、これだけいれば地底の戦力を負かして、オルファンを打ち倒せると考えていた頭数が揃った。
なら、藍の言う通り、早速オルファンを破壊しにいくべきなのか？そう考えた次の瞬間、神奈子はぼんやりと、考えていた。
生まれたばかりのグランチャーを戦わせても、大丈夫なのだろうか？
次いで、その言葉が聞こえたかのように、藍の身体からようやく離れた早苗が、藍にも、神奈子達にも聞こえるような声で応える。
相変わらず、ぐっとガッツポーズして、身体全体を声にしているような様子が、滑稽ながらも可愛らしかった。
「いえっ。まだ時期尚早のように思えます」
「時期尚早？」
聞き返す神奈子に、諏訪子が続く。
「でも、頭数三つ揃えば勝てるって考えてたところでしょ？」
「はい。でも、何事にも確実性が大事ですよね」
早苗の声に、藍が頷く。

「その通りだ。貴方の考えていることが分かった」
早苗の胸の内を理解しているような台詞を吐く彼女に対し、神奈子がむすっとして、言い返す。
「なにをぅ、私だって分かっておるっ」
「なら、言ってもらおうか」

かくいう藍だが、実際神奈子は早苗の言わんとしていることが分かっていた。
だから、その言葉を待っていたと言わんばかりに、むすっとしていた顔をころりと変え、得意面になり、えへんと胸を張ってから、言った。
「早苗と、そして藍、そなたのグランチャーは、まだ練度が低い。実戦経験が不足している・・・そして、今幻想郷の各地には、オルファンが生み出した、ブレンパワードとなるオーガニックプレートが散らばっている。いつリバイバルするかも分からない。そして、リバイバルしてしまえば、オルファン側に回って、我らの敵になる恐れが大いにある・・・その一方で、まだ我々の仲間になり得るグランチャーもどこかにいるはず・・・つまり・・・・・・諏訪子、結論の方は言わせてあげるわ」

いきなりバトンタッチされた諏訪子だったが、まるでそれを想定していたように、慌てることもなく、神奈子が言おうとしていたことに続きを語る。
「あたし達がまずやるべきことは、各地を回って、他のグランチャーを探してもっと戦力を増やしつつ、これから敵になる恐れのあるブレンパワードをどんどん撃破していくことってわけ・・・そういうことだよねぇ、早苗？」
「その通りでーすっ」
早苗の元気な返事に次いで、神奈子が言葉を継ぎ足す。
「それに、この山の天狗はどちらかと言えばオルファン寄りです。

我々がグランチャーを擁していれば、眼をつけられるかもしれない・・・私達が行動していくための、アジトも探しておいた方がいいかもしれぬ」

とにかく、ある程度グランチャーの戦力が整ったところで、早苗達が次にやるべきことが決まった。

なら、これから早速それを実行し、オルファン制圧のための土台を固めていくことになるのか・・・

神奈子がそんなことを考えていた矢先、突然早苗が、オーガニックプレートが出現した時から、神社の石畳の上に置き忘れられていた箒を急いで手にとって、それを一心不乱に振り回しながら、石畳を掃き始めた。

あまりに突然のことなので、藍がぽかんとした顔を浮かべる。

そんな中でも、早苗は残像が見えるほど速さで箒を掃いて、石畳の上を掃除している。

そうして、神社の境内をちょろちょろと動き回る様は、なんというか・・・すばしっこい虫のようでさえあった。

「・・・何をやってるのーっ？」

と大声で聞く藍に、早苗は、せわしなく身体を動かしたまま、応えた。

「そうと決まれば、早速行動を起こすべきです！でも、神社の掃除がまだ終わってなかったから、急いでいるんですっ・・・これが終わったら、すぐに行きますからね、いいですねっ？・・・あぁ～そうそう、咲夜さんにもこのことをお伝えしなくっちゃぁ～！」

口早に捲し立てながら、石畳の上を、箒で素早すぎるほど素早く掃

きながら動き回る早苗。

その声を聞いて藍は、思わず吹き出した。

そうして、こういう愉快な連中には、オルファンの支配など、できるわけがないな。

と、そんな見くびるような考えを抱いた。

が、それがある種の油断であり、侮蔑であり、軽率な考えであることは、藍自身分かっている。

この場に紫がいれば、傘で頭を叩いて、知ったの声を投げかけてくるところだろう。

守矢神社の二神とそれを祀る巫女は、決して油断のならない相手だ。

第十話　その４

起きてしまったため、そのまま中庭へと降りて、その場にいた勇儀とにとりに挨拶をしたさとり達。
彼女らの話では、妖怪の山から、グランチャーの動きを偵察するための天狗が来るらしく、今しがた文達が出迎えにいっている最中だったそうだ。

さすがは天狗の足（？）の速さというか。
そんなことを話ている最中に、当の文とはたてが、中庭へと戻ってきた。
そうして、あれが勇儀達の言っていた天狗なのだろう。
彼女らはもうひとつ、人影を連れてきていた。
文達と共に中庭に降り立ったその者に眼を向けるさとり達。
彼女らはそろって、首をかしげた。

そうしてこいしが、
「あれが天狗・・・？」と呟く声が聞こえる。

文とはたてに挟まれるように中庭に降りたその物の頭には、他の二人の天狗がしているのと同様、小さな烏帽子（えぼし）が被さっていたのだが、その両脇には、犬のような耳が生えていた。
妖怪でありながら妖怪に詳しくないというのはよくないのだろうか、実をいうとさとりはともかくとしてこいし達には（さとりだって多少は）、天狗と言えば『烏（からす）』だろうという認識ができてしまっていた。

そのため、烏などとは似ても似つかない陸上の獣である犬の耳を見て、これが天狗だと言われても、いまいち実感が湧かなかった。
が、なんてことはない。
天狗という言葉の通り、天の狗も天狗なわけだ。
イメージが先行しているというだけで、さとりはちゃんと、天狗も烏天狗だけではないということぐらいは分かっている。

天狗に対し、天狗ではないと考えるなどという、アンデンティティを否定するような無礼極まりないことはせず、降り立った天狗の方に歩み寄りながら、恭しく挨拶しようとした。
が、それよりも早く、眼の前の天狗は、びしっと姿勢を正して、口早に言ってきた。

「お初にお眼にかかります。地霊殿の主、古明地　さとり様。お会いでき、光悦至極で御座います。私は、妖怪の山より参りました、白狼天狗の犬走　椛と申す者です。この度は、我らが長である天魔様よりの命の下に、貴方様に助力すべく、馳せ参じた次第で御座います。天狗の名に恥じぬよう、この命を賭して励む覚悟で御座います故、どうぞお好きなように、この力、お使い下さいますよう、今後とも、どうかよろしくお願い申し上げます。」
それだけ言ってから、天狗は深々と、４５。ほど腰を折り曲げて一礼した。
最敬礼という奴か。なんでも、日の本の国で最も高貴な人物である天皇には、この倍は深く腰を折り曲げるそうだが。

「・・・・・・」
さとりは、瞼をぱちくりと、開いたり閉じたりして、その場で立ち尽くしてた。
戸惑っているというか、なんというか、眼の前のこの天狗が何を言っているのか、一瞬分からなくなるものだった。

いや、彼女・・・椛がやったことが何なのかは分かるのだが、さとりは生まれてこの方、あれほど長々とした挨拶を聞いたことがなかった。
そもそもあれは、本当に挨拶の類だったのか？
詩か何かを読んだだけだったりはしないのだろうか？
そんな考えすら頭の中で芽生えてくる中で、ぽかんとした顔を浮かべていたさとりの耳に、勇儀の大きな声が聞こえてきた。

「真面目なやっちゃなぁ～っ！」

それを聞いて、ようやくさとりも我に帰ることができた。
そうして改めて、椛のあまりにも恭しい挨拶を脳裏で反芻すると、逆にこちらの方が彼女に対して気を使うような感じになってしまって、眉の端が下がってしまう。
眼に見えて困った表情であたふたとするさとりは、慌てた様子で、眼の前の椛に対して言っていた。
「あ・・・あのぉ・・・そんな畏まった態度を取らなくても、普通にしてくださったんでよろしいですから・・・」
それに対し椛は、きりっとして応える。
「いいえっ、そうはいきません」
「いえ、あのっ・・・なんだか逆に気遅れしてしまいますから、お願いですからっ」
逆にやめてくれ、と口外に頼んださとりの言葉を聞き、椛は固い表情を僅かに和らげ、しかし今度は戸惑った表情に変えながら、聞いてきた。
「・・・そ、そうで御座いますか？」
「・・・だから、そういう、『御座いますか』とかいう表現は使わないで結構ですから」
「・・・そうでありますk・・・」
「もういいです・・・」

「・・・いえ!ごめん、ごめんなさい、気をつけますっ」
「・・・い、いえいえっ、こちらもいろいろ妙なこといって、すみません」

何と言おうか・・・なんとも生真面目な妖怪だ。
幻想郷の妖怪とは、ほとんど自分勝手で他人を馬鹿にしてばかりだと思っていたのだが、さすがに天狗となると、こういう社交性のある者が多い。
この椛の場合、なにか一周回って社交性が失われているような気もしたが・・・
まぁなんにせよ、彼女がどういう者なのかということは、なんとなく分かった。

もっとも、椛の方も、さとりと全く同じことを考えているのがさとり自身分かってしまい、いやはや何とも、思わず笑ってしまいそうな雰囲気を作り出してしまっていた。

彼女の傍らに立っていた文が、
――ほら、これだよ・・・――
と、胸中で呟きながら、苦笑いしつつ、後頭部をぽりぽりと掻いていた。

と、それは余所に、こいし達と、勇儀達も椛の方へ近寄っていく。
こいしが、
「初めましてー、古明地　こいしです」と挨拶すると、それに椛も返す。
「おぉ、これはこれは、さとりさm・・・さんの、妹様ですか。犬走　椛と申します。よろしくお願いします」
これまたさすが天狗というか、なんだかんだいって、さとりの言う事をしっかり実践して、四百字詰めの原稿用紙が半分埋まりそうな

ほどの長々とした挨拶はしなかった。
まぁ、敬いの言葉を連ねることは、実際何も悪くない。
行き過ぎると逆に失敬ではあるのだろうが。
それはともかくとして、そういうことに不慣れでつい戸惑ってしまったさとりにも問題があったのだろう。
むしろ改善するべきは、こいしに続いて、
「わんこかいっ？よし、さとり様のペットになる権利をあげるよぅ！」
「ありがたく思いなさいっ」
などと、失礼極まりないことを口走るお燐とお空の方だった。

「めぇーでしょっ！」
すぐさま大声を出しながら、二人の額を続けざまに、ベシィーンベシィーンと平手打ちするさとり。

それを傍から見つつ、椛の傍にまで近寄ったにとりは、感激した様子で、
「お会いたかったですよぉ～っ」と声を上げながら、彼女の身体に抱きついた。

実を言うと、この場で一番椛との親交が深いのはにとりだった。
日々の仕事を終えて休暇を得、時間を持て余した彼女と、暇つぶしに大将棋、あるいは中将棋をして遊んだりしていたからだ。
大将棋というのは、簡単に言えば恐ろしく大規模な将棋であり、鎌倉時代に普及したものと、平安時代式のもの、あるいは、天竺大将棋とか、摩訶大大将棋とか、いろいろと種類があるようである。
二人は基本的に鎌倉時代に普及した方を好んで打っていた。１５×１５マス、２９種類合計１３０枚の駒を使う。

中将棋というのは、鎌倉式大将棋が僅かに小規模になったもので、２１種類の駒を使う。
時間がかかり過ぎる大将棋に比べれば、ある程度短時間で決着がつくので、気楽に済ませたい時はそちらを差す。
まぁ、中将棋を気楽に差すなどと言える者は、世の中広しと言えど、彼女らぐらいだろう。

最初は単なる暇つぶしで、椛からの申し出を天狗相手で在る故にびくびくしながら受ける形で勝負したわけだが、あっさり負けたことにより、何だか無性に悔しくなって、そこからどんどんのめり込んでいき、今では勝って負けてを繰り返すぐらいになっていた。
そうしている内に、単なる暇つぶしの相手をという枠も通り越して、二人は交流を深めていた。
椛は、単に子供相手に手加減して、それこそ暇つぶしのつもりで遊ぶ大人のような心境であったのに、真剣に勝負に取り組み、めきめきと盤上のノウハウを得ていくにとりに、敬意と好意を持ち始めていた。
このひとつのことに集中できるのが、天狗にはない、河童の、職人気質故の長所なのだろう、とも考えられた。
ひとつの社会体制の中に落ちつくと、他のコミュニティーと関わる機会がなくなってくる。
天狗として生きるあまり、天狗以外の妖怪との接点が少なくなっていた椛としては、天狗以外の妖怪について考えることができ、それ以上に、個人として好きになれたのが、にとりだった。

そのためか、先程までは、さとりに対し石のように固い態度をとっていた椛も、抱きついてくるにとりの身体を受け止めつつ、気が楽そうな、柔らかい口調で応えていた。

ただ、敬語だけは崩れていないのが面白かったが。
「私もですよ」
「椛さん、あれ、今すぐやりましょうよ。持ってきたんでしょ？盤と駒」
わくわくして聞いてくるにとりだったが、椛はそれに対しては、申し訳なさそうでもあり、彼女を批難するようでもある顔つきになって、応えた。
「あのねぇ、私が来たのは任務のためなんですっ。今回ばかりは、持ってくるわけにはいきませんでしたよ」
「えぇ～・・・」

盤と駒というと、何をするつもりなのかはすぐに察することができたが、生憎椛は仕事に遊び道具を持ってくるわけにはいかなかった。二人にとっては、最早遊びを超えたものだったわけだが、社会的にはそうではない。
日々の警戒任務の最中に将棋など差せば、八時間は頭を下げ続け、場合によっては降格減俸、下手すれば左遷だ。まぁさすがに全ての業務が妖怪の山に密集している天狗に、左遷はなかろうが。
ましてや、遠方に派遣される中で、そういう遊び道具などを持っていっても、同僚から白い眼で見られてしまうだろう。
残念がるにとりのことは可哀想だが、天狗に生まれてしまえば、対面も気にしなくてはならないのだ。
自由気ままに空を飛びまわり、勝手気ままに記事を書いて、売れればスター。そんな烏天狗とも違う。
その内の一人である文のことは、決して嫌いではなかったのだが・・・

「ごめんごめん」
しょぼしょぼするにとりの背中をぽんぽんと軽く叩く椛に、今度は勇儀が言いかけてくる。

「つくづく真面目なやっちゃなぁ～」
椛は、はっ、として、にとりの身体を少しだけ離して、勇儀に対しては特別恭しく挨拶した。
なんせ、あちらは鬼である。
「これは、古く、未だ幻想郷の無き世において、その名を知らしめた鬼である星熊　勇儀様・・・今もその御力に一切の衰えはなく、お慕い申し上げるばかりでございます。私めのような天狗が、貴方方の住まう地底に足を踏み入れる御無礼は、お許し頂き、その上でどうか、温かくお迎え頂きますよう・・・」
「そういうのはいい。将棋を差すそうじゃないか」
「え？・・・えぇ、そうで御座います。大将棋であります」
「家に盤も駒もある。それを貸す、喜ぶんだね」

勇儀の言葉に、椛は少しの間だけ、きょとんと眼を丸くしていた。
そうして、その表情のまま、すぐ傍にいたにとりに語りかける。
「・・・ですって」

にとりもまた、少しの間だけ固まっていたが、その次には、大喜びで声を上げ、勇儀に対し感謝の言葉を表していた。
「本当ですかぁっ？ありがとうございます～！さすが鬼様、さっすが星熊　勇儀様ですよぉ～！」

「あ・・・あの・・・」
勇儀が大将棋の盤と駒を快く貸すと言っていたことは嬉しい。
が、椛はそもそも、天魔から命じられた任務を全力で果たすべく、そういう暇つぶしの遊びとかはしないつもりで、にとりを残念がらせることを承知で来た。
なので、勇儀のこの申し出は、喜ばしくとも、素直に喜ぶことはできなかった。
そうした気持ちを込めて、戸惑う視線を彼女に向ける椛に、にとり

の喜ぶ声が聞こえる中で、勇儀は応えた。
「ふふん？・・・私が表舞台にいたころは、天狗はサボタージュをすることも上手かった・・・それが優れた天狗のステータスだった・・・あんたはどうかねぇ？」

そんなことを言われてしまえば、最早何も言えない。
椛は、いっそ開き直って、応えた。
「上手ですよ。私も・・・彼女と・・・にとりと友達になっていることが、その証拠です」

それを聞いた勇儀は、心底愉快そうに大口を開けて笑いだすと、にとりの身体を右手で抱き寄せ、もう一方で椛の身体は左手の方で抱き寄せて、そうして二人を小脇に抱えるようにしてから、その背中をバンバンと叩き、笑い声と共に言った。
「はーっはっはっは！あんたら好きだよ！」
男勝りな背の高さの勇儀だったので、それほど高くもない背丈の二人の背中を叩くために、その場で片膝をついてしゃがみこんでいた。

あまりに勢いよく背中が叩かれるものなので、痛いほどだった。
なんせ、大声で笑っているため、鬼本来の力がちゃんと加減できていなかった。
にとりが、背中を叩かれるたびに、
「うんっ・・・うぐっ」と呻き声を上げていたので、勇儀は十発ほど叩いたところで、はっとして、
「おっと、すまなんだ」と軽く謝罪してから（並の妖怪なら許さないような軽い口調でも、許されてしまうのが、鬼の特権だ）、背中を叩いていた両手のひらをそれぞれ、右手はにとりの、左手は椛の肩に乗せた。
その様子を、さとり達がぼーっと見ている。
文は、痒いわけでもないのに、まだ後頭部をぽりぽり掻いていた。

そうして、勇儀は改まって、椛の顔を覗き見るようにしながら、こう聞いた。

「そういやあんた、千里眼を持ってるそうじゃないか」

それに椛は、謙遜しつつも肯定するように応える。

「千里眼だなんて、恰好のよい表現はできませんけど、そういう程度の能力は持っています。だからこそ、妖怪の山では哨戒任務を任されているのです」

「なるほどなぁ・・・なぁ、どれぐらいのもんなのか、ちょいと見せてくれないかい？」

勇儀の言葉に、椛は、戸惑うような表情を浮かべつつ、応える。

「・・・その場その場で精度は違います・・・それに、目的も無い状況で能力を使えと言われると・・・」

「じゃぁ、この地底に近づいて来てるものがいないか探しとくれよ」

「・・・分かりました・・・何も来ていなかった時は、何も見ることはできません・・・ですので、期待にお応えすることはできないかもしれませんが・・・」

「そういうのはいいって言っただろう？ほら、早く」

「はい・・・」

催促されたため、椛は勇儀に肩を持たれたまま、僅かに顔を俯き気味にして、どことも言えない中空を見つめた。

いや、見つめてすらいない。

勇儀は、下の方から見上げるようにして覗った椛の眼が、ぼんやりと見開かれるだけで、光は失せ、瞳孔は開き、どことも言えない場所に焦点が向いているのを見た。

まるで死人の眼だ。この眼で何が見えるというのだ？

簡単なこと。実際何も見ていないのだ。

椛は、遥か彼方の情景を、両の眼とは別の第三の眼・・・さとりの

持っているそれと同じような表現だが、まったく違う眼を向けて、見ている。
力なく半開きにされた瞼は、重力に従って物が落ちるかのようにゆっくりと落ちていき、いつの間にやら、何も見ていない椛の両の眼は、薄い彼女の瞼に閉ざされてしまった。
勇儀だけではない、さとり達も、何がどうなるのかは分からないが、椛のこの姿を固唾を呑んで見守っていた。
彼女と交流の深いにとりや、同じ天狗である文は、何か見つかるかな?ぐらいの軽い気持ちで、同じく彼女を見守る。

が、勇儀が、椛の眼が閉ざされたと認識した、次の瞬間だった。
椛の静かな声が、広い中庭の空気を揺らし、微かに響いた。
「あ・・・います」

それを聞いたにとりが、
「いるって?なにかいるんですか?」と聞く。
「はい・・・います・・・・・・これって、アンチボディじゃないでしょうか?こちらに向かってきているようです」

「えっ?」
さとりが思わず声を上げた。
次いで、はたてが続く。
「なにぃ、またグランチャーっ?」

が、二人のびっくりしたような声に対し、椛は落ち着きはらって、こう応えた。
「グランチャーではありません・・・これは多分、ブレンパワードですね」

いずれにせよ、びっくりすることに代わりはなかった。
グランチャーが近づいているというのならそれなりの、ブレンが近づいているというのならそれなりの驚愕を、さとりは感じていた。
「ブレンがっ？」
さとりだけではない。
他の者達にしても、ブレンが地底に向かっているということで、それぞれ一様に驚いている様子だ。
ここに向かっているのがグランチャーではなくブレンだとしても、驚くべきことではあった。

この場にいる者達が息を呑む様子を気にも留めず、椛は、己の千里眼より見える光景を言葉として伝えて続けようとしていた。
が、突然、彼女の方も何かに驚いたらしく、俯いた顔をぴくりとだけ揺らし、呟いた。
「消えたっ・・・あ、いや、別のところにいる・・・瞬間的に移動したのか・・・」

「瞬間移動したって・・・？」
椛の言葉をおうむ返しするにとりに、さとりが返す。
「バイタルジャンプでしょうね。オルファンに近いところまで来ているのなら、可能であるはず」

そんな言葉を耳を通して脳の底の方に落とし込みつつ、椛は尚も千里眼にて、接近してくるブレンを見続ける。
「これはすごい・・・どんどん近付いてくる・・・もう地底に通じる穴がすぐそこです」

そこまで言ったところで、勇儀が、未だ彼女に対し肩を寄せる形になっていた椛の肩を軽くポンポンと叩き、応えた。
「ん。もういいだろ。あんたの能力はよーく分かった」

「もういいとは・・・もう、能力を使わなくても構わないのでありますか？」
「そういうことさね」
「・・・了解しました」

勇儀の言葉に返事した椛が、今まで薄く閉ざされていた瞼をぱっと開く。
その大きな眼に光は戻り、瞳孔も引き締められ、どこに向いているかも分からなかった瞳の焦点は、はっきりと勇儀の顔に向いていた。
それと同時に、勇儀はにかっと笑ってから、椛とにとりの肩を持っていた手を離して、その手で二人のお尻をぽんぽん叩いてから、すくっ、と立ち上がった。
さすがに、椛達から見ると、眼の前で勇儀が立ち上がれば、さながら巨人（巨神？）の目覚めのごとくだ。

と、そんな勇儀に続いて、慌てた様子のさとりが椛に歩み寄り、確認するように聞いてくる。
「椛さん。確かにブレンが、こちらに来ているのですね？」
「はい。それは確かに見ました。もうじきに、この地底にまで入ってくるでしょう」
「・・・ここに来るかもしれない。いいえ・・・来ますね」

さとりは、戸惑っているとまではいかないが、あまり穏やかではない表情を浮かべ、中庭から、地霊殿の屋敷の屋根を見るように顔を上に向け、眼を細めた。

こいし達は、単純に椛の、ブレンが来るという言葉を直接的に間に受けて、またブレンが増えると喜んでいるようだった。
さとりだって、ブレンが来るというのなら、それを歓迎しないわけはない。

ただ、どうもこの最近、何も起こらない日というものがなく、毎日が慌ただしく、忙しかった。
オルファンの異変が発生してまだ間もなく、その対処のためにいろいろと試行錯誤しているから、忙しいのは今だけのことだろうか？
だが、オルファンの目的を、『そのもの』と、さとり達の双方が納得いくように実現させ、異変を解決するためには、一定の安息などは得られそうにないような気がする。
この先ずっと、皆が慌ただしいままで、ブレンだって、いつもいつもあんな風に傷ついて、死ぬかもしれない危険に晒されるのかと思うと、さすがに気が滅入る。
だからだろうか、また新しいブレンがやってくるというこの動きも、素直に喜ぶことができなかった。
この新しい出逢いが、また新たな危機が巻き起こることへの前兆であるようで。

そんなことを考え、とにかくこの場で、やってくるブレンのことを待とうか、今から出迎えにいっても遅いだろう、と、この場に立っていようとしていたさとりに、今までいなかったはずの魔理沙の声が、遠くの方から聞こえた。
「おはようだぜ、さとりと・・・あといろいろ」
屋敷の戸を開け、中庭にまで入ってきたようだ。
さとり達が声のした方に眼を向けると、屋敷に続く戸を開けて、その奥から出てくる彼女の姿が見えた。
魔理沙だけではない。
彼女に続いて、他にも大勢、続けざまに姿を現す。
無気力人間（人間？）である輝夜も含めて、今地霊殿に住まわせてもらっている者の全てが出てきていた。
ぞろぞろと順々に、開け放った戸を潜って中庭に出てくる。

彼女らは、傷ついたサトリブレンを含めて、ブレンの様子を見に来たのだということは、さとりには分かった。
中庭にでて、そのままさとり達の入る方に歩み寄りつつ、サトリブレンの方に眼を向けた魔理沙は、火傷は眼に見えるほどよくはなっていないが、痛みは引いて来ているらしいブレンの姿に、ひとまずは安心していた。

――悪くはなってないようだな。よかったぜ――

そう胸中で呟く声が、さとりには聞こえた。

続いて、改めてさとり達のいる方へ眼を向けた魔理沙が、『おや？』という顔を浮かべた。
何か、今までここにいなかった者の姿が見えたからだ。
他の者達もそれに気付いて同じく違和感を感じる。
そんな一同を代表し、妹紅が不遜な態度で、その者．．．楜の方を向いて、ぶっきらぼうに言った。
「見たことないヤツだな。あんた、今までいなかったろう、何者だ」

それがある意味で彼女らしいのだが、今の妹紅は、初対面の妖怪に対しては少し淡泊で失礼すぎる態度だった。
しかし、楜の方はそのことを特別気にもせず、慌てた様子で、一同の方に向かって自己紹介していた。

「お初にお眼にかかります。私、白狼天狗の楜と申します。貴方方に協力するために赴いたのですが、文さんからお話を聞いていませんでしたか？」
それに、人だかりになっている中から、永琳が魔理沙のすぐ後ろで、彼女のそれより２０ｃｍぐらい高いところに頭を出して、応えた。
「事態が窮するものだから、急いで天狗の派遣を要請しにいくとは

聞いてましたよ・・・それが貴方ですか？他の天狗は？」
「そうです・・・他の天狗は、まだ部隊の編成に時間がかかるようで、遅れます。私ひとりが、先遣隊として派遣されたのです」
椛の応えを聞いた魔理沙が、事態を納得した上で、冗談めいた不敵な笑みを浮かべて、言い返す。
「あんたひとりぃ？天狗達は事の重大さが分かってないんだなぁ。あんたみたいなわんこ一匹寄越すだけなんて、失礼だとは思わないかぁ？あんたひとり増えたところで、なんにもならないぜ」

その声に対し、椛の傍で聞いたにとりが、さすがに怒った様子で両手を左右に広げ、それをブンブン振りながら大声で言う。
「し、失礼なのはあんたの方だぁー！椛さんを馬鹿にするなよ～っ！」
そうすると突然、彼女の背中が、勇儀の右手に盛大に叩かれた。
続けて勇儀の、
「その通りだぁー！この天狗は、私の威厳に変えて、馬鹿にはさせないよぉっ」という、にとりの二倍ほどの大声が響いた。
友人の名誉を守ろうというにとりの声につくづく感動し、それを後押しするかのように、実際に彼女の背中を押した勇儀であるが、勢いに任せていたせいでまたしても力加減を間違え、軽く叩くだけのつもりが、スバァーンッ、と、１６０ｋｍ／ｈ超えの剛速球をキャッチャーミットで受け止めたような乾いた音が鳴り響くほどに、余計な力がこもってしまっていた。
背中を叩かれたにとりは、あまりの勢いに身体を少しだけ浮き上がらせるほどに身体を海老反りにして、
「んあぅっ！痛ぁい・・・っ」と悲鳴を上げた。

そのまま、浮き上がった足を再度地面につけると、今度は逆にお婆ちゃんのごとく前かがみになって、叩かれた背中を後ろで擦るにとりに、勇儀は慌てて、

「おぉっと、またしてもすまなんだ」と謝る。

「とほほほ・・・」

どうやら、鬼に気に入られてしまったらしいが、そのことは悪いことではないにしても、いいことではないんだなぁ。

そんなことを痛感するにとりを余所に、とりあえず勇儀は、椛の尊厳を守るべく、厳しい口調で魔理沙に言い返していた。

「いいかぁよく聞け、黒んぼの霧雨　魔理沙」

「な、なんだぜ。後、あたしはただ服が黒いだけだ、色黒じゃないぞぉ」

「んなこたぁどぉーでもいいんだよぉ。いいかぁ？この天狗にはなぁ、千里の先を見通す程度の能力がある。こいつ一人いりゃぁ、十匹二十匹の天狗に匹敵する偵察能力を発揮できるわけだ。千里先だぞぉ？あんたなんか、一生かけても見えないような距離まで見えるんだ・・・分かったかっ？黒ずくめ」

そこまで言われたところで、魔理沙は、鬼の迫力にたじろぎながらも、

「わ・・・分かったぜ。んなこと、分かってたんだよぅ・・・」と、ごにょごにょした声で応えた。

それに続いて、妹紅の隣にいた慧音が、なるほどと言った様子で言った。

「それほどなら、頼りにできますよ。たった一人で派遣されるだけのことはあるのですね」

「そういうことだ、さっすが先生だ、話が分かるっ・・・でな、この椛は、能力を使い、さっそくこの地底にブレンが来ているということを察知した」

藪から棒にこのようなことを言われれば、やはり、魔理沙達だって驚くのは当然のことだった。

椛のことなど、すっかり頭の中から吹き飛びそうになる。

「おいおい、先にそれを言ってほしかったぜ！」と魔理沙が驚嘆し、それに輝夜が、
「どういうブレンなのさ、色は？」と続く。

そんな中でだ。
魔理沙達と、彼女らに対し椛のことを紹介する勇儀の方を交互にちらちらと見やっていたさとりは、ふともう一度、地霊殿の屋敷の天井を覗い見るように、上を見上げた。

それと同時に、彼女の眼に、ひとつの巨大な影が映る。
屋根を跳び越え、中庭の上空に姿を表す巨人の影を。
間違いない。
今しがたその話を聞いていて、見間違えるわけがなかった。
この影はブレンパワード。椛が言っていたブレンだ。

さとりは眼を見開いて、驚嘆の声を上げる。
「あぁ・・・っ？」
それは、突如ブレンが、地霊殿の屋根を跳び越え、肌で感じることができる程度の小さな風を巻き上げながら、姿を表したことへの驚嘆ではない。
網膜に焼きついてくる、ブレンの身体を染め上げているその色を見たからだ。

「あれは・・・っ！」

鮮やかな紫色だ。
さとりはその生々しいまでの、紫陽花の花の色がより濃くなったよ

うな色に、見覚えがあった。
いや、見覚えがあるなどというものでもない。
忘れるわけがないだろう。
この色をしたブレンが、以前こちらを襲来した深紅のグランチャーを撃退し、さとり達を救ってくれたのだ。

見紛う事はない。
このブレンは、その時と同じ者だろう。

さとりの驚嘆と、吹きつけてきた緩やかな風により、遅れてブレンの出現に気づいた魔理沙達も、中庭の上空を見上げ、その姿を眼に入れた。
さとりと同じように、魔理沙の驚嘆が響く。
「来たのかよぉ、って、あいつはーっ？」

その場に立ち尽くし、見上げるばかりのさとりの視界の中で、ほとんど横向きになっていた紫のブレンが、その姿勢を地面に対して垂直に立つようなものに正していき、そのままゆっくりと中庭に降下してくる。

さとりにはもう一つ、分かっていることがあった。
あのブレンを駆り、こちらを助けてくれたのは、あの八雲　紫である。
なら、今しがた中庭に降り立とうとしているあのブレンにも、紫は乗っているのだろう。
もういちど、眼の前にその姿を表してくれるわけだ。
さとりは紫に対し、とにかく何か言いたいことがあった。
具体的に何を言いたいのかは分からないが、とにかく、何でもいいから話をしてみたかった。
そうしてあわよくば、彼女の中の考えを、もう少しでいいから知り

たいと。

さとりが、そして魔理沙達が見守る中で、ブレンはゆっくりと降下していき、やがて地面の上に、その両足をつけた。
そのまま股間部の装甲が開き、スライドしたスリットウェハーが大きな穴を作る。
その奥から、ひとつの人影が抜け出てきて、装甲の上に立つ。
遠くからその様子を見守るさとりと魔理沙達だが、その影は、装甲に隠れてはっきりと視認することができない。
もっともさとりには、それが誰だかはっきりと分かっているので、無理してでも見ようとは考えていなかった。
が、次いで彼女は、自分の中の考えが確固たるものであったが故に、多大な戸惑いの中に落とし込まれることになる。
装甲の上に乗ったその影が、ブレンをしゃがませることもせず、その場から飛び降り、地面へと落下していく。
そして激突の瞬間、突如その身体は、つま先が地面につこうとするその瞬間の状態で急にふわりと落下を止めた。

その瞬間にはもう、さとりには、その者の姿は明確に見えていた。
だからこそ彼女は、この上ないほどの戸惑いを感じ、思わず息を呑んでいた。
そうして、その者がそのまま、舞い散る桜の花のように、巣に帰る鳥のように、地面に緩やかにつま先をつけると、それでようやく、彼女の足の底と地面は触れ合い、着地した。
それと共にさとりも遅れてようやく、
「あれ・・・？」と、声を出した。

その一方で、さとり以外の者のほとんどは、自分達の前に降り立っ

たその姿に驚いているようだった。
まったくもって、最近は驚くことばかりだ。さとりにしても、誰にしても
眼を丸くした魔理沙がその者の方を指さし、どもりながら言う。
「お、お前・・・ようやく来たのかよぉ」

そうして魔理沙がその名を呼ぶよりも早く、こいしとお燐達が揃って叫んだ。
「博麗の巫女ーっ！」
「霊夢ー！」
こいし達がその肩書き（？）を言い、魔理沙がその名を呼ぶ。
まったくの偶然だろうが、さながら演劇の一幕のように息がぴったりな台詞回しを聞いて、その名を呼ばれた当人、博麗　霊夢は、そのたっぷりとした髪の毛を右手で掻き上げて、それをわしゃわしゃと揉みながら、なんともいえない気だるそうな顔をしていた。

幻想郷で異変が起きる、となると、すぐにその名が浮かぶのがこの霊夢だ。
彼女は、妖怪退治と異変の解決を生業にしている。
そのため、このオルファンの異変が発生した当初からも、ゆくゆくは彼女も動き出すのだろうと考えていた。
そうしてようやく、ブレンを連れて、彼女はやってきたのだ。

もちろん、彼女さえいれば、異変は解決したも同然というのが、常識のない幻想郷の唯一の常識とも言えることであり、彼女のことを歓迎しない者はいなかった。
退治されるかもしれないという恐れは別として・・・

改まって、
「なんだぁ、ようやく来たのかよぉ～！」と、先程言った台詞をも

う一度繰り返しながら、両手を広げた魔理沙が、霊夢の方へと駆け寄っていく、それに、他の者達も続く。

が、それに率先して霊夢の方へと駆け寄っていくのが、さとりだった。

彼女は、あの紫のブレンに乗っているのは紫だとばかり考えていたのだが、実際は違っていた。

これは一体どういうことだろうか・・・

やはり自分は、こいしのように無意識的な勘というものは鈍いということなのか？

そんなことを考えつつ、はっきり言って虚弱な身体で、息を上がらせながら霊夢の傍まで駆け寄ったさとりは、そのまま息切れして（常人ならどうにもならない距離を、軽くランニングしただけなのだが・・・）喘ぎ喘ぎな声で、開口一番、眼の前にまで近づいた霊夢の顔を見ながら問うた。

「あの・・・貴方。八雲　紫さんでは御座いませんよね・・・？」

「見りゃ分かるでしょ。私は彼の有名な博麗　霊夢よ、知らないのぉ～？」

馬鹿にするような口調で言ってくる霊夢だが、同時に心の中では、――紫がどうしたって？――とも呟いていた。

さとりは、その心の声の方に応える。

「紫さんには、この異変が起きてから私達をいろいろと助けてくださいました・・・この前、その紫色のブレンが、グランチャーとの戦いで私達を救ってくれたんです。それに乗っているのが、紫さんのはずなんです・・・実際見たわけじゃ、ないんですけど・・・」

最後の最後で頼りなさげになるさとりの声を聞いて霊夢も、なるほど、と納得した表情を浮かべつつ、彼女の中の疑問を解決する言葉

を発した。
ブレンの方を親指で指差しながら、言う。
改めて近くで見てみると、やはりこのブレン、所々のディテールがさとり達のブレンと少し違う。身体も僅かに大きい。
そのことがはっきりと分かる。
「こいつは確かに、紫のブレンだったわ。でもなんか、急にあいつが私に譲ってくれたのよ」
「譲った？」
「ん。それで、あんた達に協力するために地底にいけだって・・・私は一応その通りにして、ここに来たのよ」
「・・・そう・・・ですか」
さとりは、ぼんやりとした曖昧な返事を寄越しつつ、霊夢の顔を見て、ブレンの顔を見上げるということを数度繰り返した。

「・・・？」
変な妖怪だ。
そんなことを考える霊夢に、今度は魔理沙が歩み寄ってきて、彼女の左肩に右肘を乗せて、調子のいい声で言ってくる。
「久しぶりじゃないか。そろそろ来ると思ってたぜ」
それに霊夢も、冷やかすような声で言う。彼女らはいつもこの調子だ。
「えぇ、来させてもらったわ」
「にしてもよぉ、霊夢さ、お前。この前ブレンであたし達を助けてくれたよな？で、こっちが呼びかけてやった時、返事も寄越さず帰っていっただろ。こいつはその時のブレンだよなぁ・・・なんだったんだぁあれは？」
「あぁ、それね。誤解無いように言っとくけど、あの時は私じゃなくて、多分紫が乗ってたのよ」
「紫がぁ？・・・そういやお前、あいつとも仲良かったけど、またなんでだ？」

魔理沙の不思議そうな声を聞いたさとりは、はっとして、魔理沙と話をする霊夢の横顔を見つめた。
なるほど、そういうことか。

魔理沙の問いに、さとりに対してしたのと同じ説明をもう一度する気になれず、めんどくさそうに
「さあねぇ・・・」と応える霊夢に、さとりは再び詰め寄る。
そして彼女の、肩からではなく肘のあたりで始まりそこから手首側に近づくにつれて大きく広くなっていく奇妙な袖の間から伸びる細い上腕を掴み、それをゆさゆさと揺さぶりながら、問いかけた。
「あのっ。紫さんは、貴方にブレンを譲った時、何か言っていませんでしたか？」

突然のことにびっくりし、そしてうんざりした霊夢が、鬱陶しそうな声で応える。
「なにぃ？あんた、なんか妙に紫のこと気にしてるわねぇ」
「あの方の考えていることを、知りたいんですっ」
「あいつのことを知りたい？・・・なにかしらあいつ・・・ブレンだけじゃなくて、妖怪までたらし込むようになったの？・・・ロリコンにでもなったのかしら」
「そういうんじゃないんですっ・・・あの方は、オルファンの何か重要なことを知っています。オルファンさんのことを、よく理解しているはずなんです」
「オルファン？」
「私達も、オルファンさんのことをもっとよく知りたい・・・そのためには、紫さんの中の考えを、少しでいいから知っておきたいんですっ」

「・・・なるほどでねぇ・・・よく分からないけど・・・・・・で、

あいつが私に何か言ってなかったか、だって？・・・生憎ねぇ、そんな参考になるようなことなんて・・・」

さとりの眼前でこう言いながら、顔をふるふると横に振る霊夢は、それと同時に、ブレンを譲った当時紫が言っていた言葉を、可能な限り、当時の情景と紫の口調も含めて細かく思い出していた。

そうしてそれが、さとりにも伝わる。

当時の、何かを伝えるようで、何も伝えようとしていない紫の言葉は、さとり達に対してそうしてきたのと同じものであり、ある意味紫という妖怪の特徴と言っても過言ではない調子だった。

曖昧に、含みを持たせた言い方だけをして、周りの者を煙に巻くのが、紫という妖怪の個性なのだろうか。

だとしたら、なんとも傍迷惑な妖怪ではある。

そんなことを考えていたさとりは、眼の前にある霊夢の顔が露骨にいやそうにしていて、さとりが掴んでいる彼女の腕が、ぐいぐいと鬱陶しそうに動いていることに気づいて、はっとした。

「あっ、すみません・・・」

慌てて謝罪しながら、手を離すさとり。

ようやく両腕が自由になった霊夢は、そのまま両手を腰にあて、呆れた様子で言う。

「幻想郷の大所帯の主人っていうのは、どいつもこいつもロクなのがいない。天然で狂暴（サディスティック）で、我儘で在りもしないカリスマを見せびらかそうとして、不気味の大喰らいで、偉そうぶってるニートで、おまけに挙動不審の臆病者ときてる！」

霊夢のこの発言の最後の部分は、紛れもなくさとりに対してのものだ。

この辛辣な声に対して、挙動不審とまで言われてさすがに落ち込んでくるさとりだったが、その背中を急に、魔理沙がぽんぽんと叩いてくる。

なにごとだろう、と戸惑うさとりに視線を余所に彼女が、霊夢に対して説き伏せるように言う。
「ちょっとばかしい言い過ぎだったぜ。さとりだって、今までよく頑張ってくれてたんだ」
それを聞いた霊夢が、相変わらず辟易した様子ながらも、
「・・・ふぅん、そう」と返す。
魔理沙もそれに、
「そうさ」と返しつつ、さとりの顔を見ながら、「なぁ?」と聞いてくる。
さとりはそれに頷き、
「私なりには、頑張ってきました・・・」と続く。
そうして魔理沙は最後ににかっ、と笑みを浮かべながら霊夢の方を向いて、
「ほらな?」と、彼女に対し、さとりの気持ちを考えさせるように言った。

魔理沙は、どこまでもお人よしだ。
そんなことを考えつつ、彼女の言葉を聞き入れた霊夢は、仕方がないと言った表情で眼を閉じ、吐き捨てるように言った。
「分、か、っ、た!・・・悪いこと言って、ごめんなさいね。これからよろしく、さとりと・・・あとその他諸々」
「・・・はい。よろしくお願いします」
霊夢の言葉に、気弱そうな笑顔で応えるさとり。

霊夢といえば、この前のお空が調子にのった異変では、さとりは彼女を地霊殿にて丁重にもてなすつもりが、いつの間にやら弾幕勝負になりこっぴどく負けていた。
そのこともあり、しかも今のような、乱暴な彼女の態度を見れば、

さすがにいい印象を持つことができなかった。
しかしながら、もしかすると、異変を解決するために長く付き合っていけば、彼女の本当の人となりの良さを知ることができるかもしれない。

少し前に考えていたことではないか。
このオルファンの異変を通し、きっといろいろな人妖に出逢うだろう。
そうして、そんな人妖と上手く付き合っていくことで、異変は解決に向かうはずだと。

霊夢の妖怪ハンター（？）兼異変解決人（？）としての実力は、身に染みて分かっている。
なんせ、暴走するお空の力を前にして、臆することなく平然と勝利し、無事異変も解決してしまったのだから。
実際の様子はさとりは見ていないし、実を言うと、お空が異変の元凶であることも、大分後になって分かったことである。
とにかく、それだけ霊夢は強い。

そうして、この前のグランチャーとの戦いで、強大な力を見せてくれた紫色のブレンパワード。
サトリブレンをあれほど傷つけたグランチャーの強力な一撃を、完全に受け切っていた。
搭乗者・・・当時ならば紫のオーガニックエナジーを利用していたこともあるだろうが、このブレンには、きっと戦いに対するセンスがある。

そんな霊夢と、そんなグランチャーの力が合わさるというのだ。
さとりには考えもつかないほどに、頼りになってくれるはずだ。

第十一話『はぐれ者の進撃』　その1

巳の正刻、午前十時頃。
紅魔館の主人レミリアにとっては、活動的ではなくなる時間帯だ。
早苗達に対しては協力するが、咲夜は紅魔館からは基本的に離れない。
そう伝え、向こうの了承も得たばかりでのことだった。
その翌日から早速、早苗は紅魔館へと再び訪れていた。
自分のと、そしてもう一人誰かのもの、二体のグランチャーを連れて。

玄関先で彼女らを出迎えることにした咲夜は、初めて見るグランチャーだが、その内の一体に早苗が乗っているということはすぐに分かった。
協力を要請すべく、以前早苗を紅魔館に連れていっていた時、早苗は早く自らのグランチャーが欲しいと言っていたが、それが実現したのだろう。
もう一体の方は、誰のグランチャーなのか（もしかしたら無人であるかも）分からない。

紅魔館の正面玄関の前に降り立った二体のグランチャー。
それが両方ともその場でしゃがみ込み、股間部の装甲が開くと、白と青のグランチャーの奥からは、案の定早苗が、藍色のグランチャーからは、あまり見覚えのない狐らしき妖怪が姿を現した。
そうして、地面に降り立つなり、早速咲夜の方へと歩み寄ってくる。

「お早い再会ですわね。今日は何用です？」
と、聞く咲夜に、早苗が大きな声で言う。
「ご覧の通り、私もグランチャーを得ることができました。それではありませんっ。この、八雲　藍さんも、私達に協力してくれるそうです」
「よろしく」
早苗に続いて、藍が挨拶し、一礼する。

「こちらこそ、よろしくお願い申し上げます」
藍に応じるように深々と一礼する咲夜は、下げた頭を上げると同時に、改めて聞いた。
「それで、ご用の赴きは？グランチャーの数が揃ったので、早速オルファンを襲撃に向かうのですか？」
その問いに、早苗が応える。
「そうしたいところなのですが、私達のグランチャーは生憎経験不足です。このままぶっつけ本番でオルファンを襲うよりも、まずはある程度練習がてらに実戦というものを経験しておくべきだと思うんです」
藍が続く。
「つまり、まずは幻想郷の各地にいると思しきブレンパワードを虱潰しに撃破していく。これからブレンの数は少しずつ増えていくだろう。それが地底へと向かってしまうと後々厄介になるから、今の内に潰せるものは潰しておく、というわけだ。オルファン襲撃の練習も兼ねてね」

咲夜は、小さく頷いてから、続いた。
「それに、私もお連れしようと・・・」
早苗が、右手を開いて僅かに持ち上げて、手を差し出すようにして言ってくる。
「ブレンの三・・・いえ、四体を相手にして、やられずに済んだ咲夜さんの実力は凄いです。ですので貴方には、私達の援護をしてほしいんです。もしもの時に備えて」
「今から行くのですね？」
「もちろんっ！」
咲夜は、早苗の元気のある返事を聞いて、ほんの一瞬だけ黙りこんでから、こう応えた。
「ふむ・・・まずは、お嬢様に報告だけさせてください。用があればすぐ赴くとは言いましたが、断りなく出ていったのでは、後でお叱りを受けますので」
それを聞いた早苗は、笑顔になって、咲夜の申し出を了承した。
「えぇ、どうぞ。私だって、断りなく神社を出ていけば、神奈子様と諏訪子様が不安になられて、嫌ですからっ」
微笑を浮かべて、踵を返して背中を向けつつ顔だけ振り向けて頷く咲夜。
頷くのと一緒に、瞬きすることで、『失礼します』と挨拶した彼女は、そのまま戸を開け、館の中へと入っていく。
早苗達はひとまず、その場で彼女が戻ってくるのを待った。
待っている時間は退屈だったので、早苗は、藍と適当に話をすることにした。

これから仲間として協力するなら、お互いのことをよく知り、信頼を深めていくべきだろう、ということを、論理的にも、感情的にも考えられるのが、早苗だった。

「藍さんは、式神なんですよね。式神は、とっても賢いと聞きました」

「賢い・・・らしい。主観的には分からないけどね。コンピューターは自分自身は判断できない。性能として自分を規定することはできるけど、それもあくまで客観的なものだ。自分自身の能力を、あくまでも数値化しているだけ。自分はこう出来るという主張ではないんだ」

「・・・そういう謙遜の仕方ができるというのが、賢いことの証明なんでしょうねぇ」

「まぁ、実際のところ、私にだって感情はある。友達のためなら、生命だっておしくないんだ」

「友達がいらっしゃるんですか」

「あぁ、いる。いるよ・・・貴方は私のことをホントにただの機械か何かとでも思っていたか？」

「・・・まっさかぁ・・・じゃぁ逆に、貴方は私がそういうこと考えるような薄情な人間だと思いますか？」

「・・・面白いねぇ貴方」

「いえいえ・・・貴方のそういう顔を見れば、貴方が機械だとか、ただの回路だなんて、思えるわけありませんからね・・・自分で見えないでしょ、自分の顔って」

早苗の言葉を聞いた藍は、しばらくの間ぼーっと口を半開きにして早苗の顔を見つめ、その後、自分のほっぺたを両手でぶにっと押さえて、

「そぉだね。鏡がないとな」と応えた。

それを見て、面白そうに笑う早苗だったが、藍はここで話題を変えて、こんなことを言ってきた。

「そうそう。私だって、三途の川を早く渡り終えるための計算式なんてものを考えたこともあるけど、実は分からないことはたくさんある」

「そうなんですか？」

「例えば、なんで早苗が早苗なのか、とかね。私は私なのか」

「・・・そんなの、分かってどうするんですぅ？」

「いや、だからそういう・・・世の中の真理なんてものは、私にはどうしても分からなくて、考え出すと不安（エラー）になってしまうんだ・・・世の中はどうして生まれたんだろうと考えると、神様が生み出したんだという人もいるが、じゃぁその神様はどこで生み出されたんだろうということになってしまう。生み出した者や場が他にいるとして、じゃあそれはまたどうして・・・？なんてことになれば・・・」

「思考が行き着く、大きな壁ですね」

「うん・・・今の、古臭い式神の頭じゃ（コンピューター）、分からないことを考えることなんてできない・・・何でも外の世の中じゃ、とてつもなく膨大な演算を・・・それこそ、確率論の領域にまで踏み込んだ膨大な並列処理を行うコンピューターができていると聞いたが」

「量子コンピューターですね？外の世界でも、まだ実用化されてないそうですけどね」

「そうなんだ・・・そういうものがあれば、その中の真理だって、論理的に解明できるのだろうか・・・もしかしたら、外の人間が意図的に幻想郷に入ることがあるかも・・・」

「・・・それはないですよぉ～。そんなことになってしまえば、幻想郷は破綻してしまいます」

「そりゃそうだね・・・で、とにかく私が言いたかったのは、私にだって、分からないことはたくさんあるし、分からないことを考えることは、あんまり好きじゃないってことだ・・・でも、分からなくても考えなくてはいけないことも、できてしまった」

「それって？」

「グランチャーとブレンパワードのこと。オルファンのことだ・・・

どうして、グランチャーとブレンパワードは互いに戦うんだ？」
「・・・・・なん・・・で、でしょうねぇ～・・・？」
藍の言葉を真摯な態度で聞いていた早苗は、長々とした前置きの末にようやく藍が言った話の本筋を聞き、首をかしげながら考えた。
が、そんなことは到底分かるはずもない。
それこそ、藍が言っていたように、好ましい気分にはならない、『そういう風にできてるから』という結論に逃げたくなるような、思考の堂々巡りになってしまいそうだった。
もちろん、早苗と同じような気分を味わっているのだろう藍が、向こう側で待たせているグランチャーの方を眺めつつ、呟く。
「私の主人である紫様が、これを考えろと言った」
それを聞いた早苗が、向こう側を見つめる藍の横顔を向き、こう言った。

「分からないことは分からない！今はこうしときましょうっ。それよりも私、その紫さんのことをお聞きしたいです。どういう方なんですか？」
「・・・実を言うと、私にだって分からない」
「分からないんですかぁ～、自分のご主人様なんですよぉ？」
「いやぁ・・・紫様のことは、ホントに誰も分からないと思う・・・何を考えてるのか、どうしても理解できないんだ」
「・・・ふぅ～ん」
彼女に使役される者として、そう思うことはよくないことなのだとは分かっているが・・・
口外にそう付け足す藍に対し、早苗は、
『そういうこともあるか』というぐらいの気持ちで、鼻息を鳴らして相槌を打った。

そうこうしている内に、十分は経っていないだろうという時間の後、咲夜は戻ってくる。

戸を開けて姿を現すと、開口一番言ってきた。

「お嬢様からの許可が出ました。では、行きましょう。お待たせして申し訳ございません」

それに早苗が、

「いえ～、全然待ってませんよぉ～」と応えた。

そうして、咲夜がそのままそそくさと、早苗と藍のグランチャーの隣にひっそりと佇んでいる深紅のグランチャーの方へと歩み寄っていく。

早苗達もその後についていき、それぞれのグランチャーの傍に向かう。

そうして、三人そろって歩いている中で、急に咲夜が、背中を早苗達に向けたまま、こう聞いてきた。

「貴方方は、これから共に戦うことになるグランチャーのことを、どう認識していますか？」

それは、咲夜と彼女のグランチャーの、他の個体に対する仲間意識の低さ故の質問だった。

あくまでも自己ひとりだけを信じ、他者はあくまでもその場その場での状況として捉えることがグランチャーの性質であると考えていた咲夜は、それを確かめるためにも、この質問をしていた。

グランチャーの性質がそうであり、それを搭乗者に伝播させるものなら、早苗達だって、仲間、と呼べるであろう関係の者に対する認識は、咲夜と同じはずである。

そんな真意を知る由もない早苗は、なんで急にこんなことを聞いてきたんだろう？と、不思議に思いながらも、咲夜の問いに対して応

えた。
「・・・互いに生命を預け合う運命共同体！・・・っていうとキレイ過ぎですけど、お互いに高め合う間柄、でしょうかねぇ」
藍が続く。
「戦力としての仲間・・・それぞれが無事で勝利する確率を上げるという意味では、確かにかけがえのないものだと思う。合理的な考え方だけどね」

それを聞いた咲夜は、ただ淡泊に、
「そうですか」とだけ応えた。

予想とは少し違う解答だった。
グランチャーの性質を仮定していた咲夜にとっては、仲間を大切で、尊重するべきものであると言っているような二人の応えは、はっきりいって間違いであるようにさえ思えた。
もしかしたら、咲夜の中の考えこそ間違いであるかもしれないということもあるのだが、その可能性を咲夜は考えない。

グランチャーも個々で性格が違うのか？
仲間を大切にするグランチャーだっているのか。
あるいは、ただ早苗達が、グランチャーとの交流が浅くまだ完全にグランチャーの性質が浸透していないからか？

そんなことを考えている内に、すでに咲夜達それぞれのグランチャーが、大分近くにまで来ていた。
それぞれのグランチャーに乗り込むべく、その場で一旦別れることになる。
バラバラに離れ、各々のブレンの足元に向かおうとする中で、咲夜

は二人に言った。
「お互い、幸運を」
口ではかく言うが、別段、幸運を祈るつもりなどなかったが、その声に、早苗と藍は威勢よく応じる。
「練習で幸運を祈られましたってねぇ」
「落ち着いて、テキパキと励むさ」

それに咲夜もまた、
「ふん」と、笑んでいるような、嘲るような、なんとみえない鼻息を鳴らし、そのまま足早に深紅のグランチャーへと向かっていく。
二人も、それぞれのグランチャーの足元へと近づいていき、開いている装甲の上に飛び乗ると、そのまま胎内へと入っていった。

早苗が、スリットウェハーの壁面のもたれかかりつつ、グランチャーの装甲を閉じさせる。
そうして、正面にグランチャーの見る光景と同じものが映し出されるのを眼で確認する中で、オーガニック的な通信に乗って、藍の声が聞こえてきた。
（それで、まずはどこにブレンパワードを探しにいく？）
「そうですねぇ～・・・」

そういえば、ブレンを探して虱潰しに撃破するにしても、どこでそうするのかを決めていなかった。
事前に決めておけばよかったなぁと思いつつ、思考を巡らせる早苗に、少し遅れてグランチャーに乗り込んだ咲夜の声が聞こえた。

（魔法の森あたりに向かいましょう・・・そこから向こうへと抜け、無縁塚のあたりまで）

「無縁塚？・・・まさか、縁のない仏様がブレンに乗るなんてぇ～」
冗談のように笑う早苗に、藍が真面目に返した。
（魂だけになろうと、オーガニックエナジーはあるかもしれない。ブレンを動かすことはできるかもしれない。それを確かめる意味も込めて、一応行ってみようじゃないか）
「そうでしょうかねぇ～・・・まぁ、そうかもしれませんね」
納得しているような、していないような声の早苗に、咲夜が続ける。
（命蓮寺とか、冥界とかにも言ってみましょう。命蓮寺は人も妖怪も一定数集まる場所だし、ブレンパワードがいる可能性は高い。魂だけでも動かせるというのなら、冥界はある意味でオーガニックエナジーの宝庫でしょう。そこにもいる可能性はある・・・それに）
続く声は、藍が代弁した。
人間が多い場所というのなら、一番肝心なところがある。
（人間の里にも行こうか）
その声に、咲夜は続く。
（私も、すでに以前から里の周辺で何体かブレンパワードを見つけて、撃破しています・・・また新しい個体ができているかもしれませんね）
そんなやりとりを聞きつつ、早苗がぼんやりと呟いた。
「・・・里の人達に、迷惑がかからないようにしないと・・・ブレンだって悪い子達じゃないなら、安全な場所で戦ってくれるのかなぁ・・・」

とにかくこれで、大体行くべき場所は決まった。
迷いの竹林とか、人が寄り付きそうにないところはいかないでおく。
そんなところであえてリバイバルするようなアンチボディはいないだろうし（実際はいたわけだが、その稀有な例である藤原　妹紅や蓬莱山　輝夜は、今は地底にいるそうだ）、もしいたとしても、放

っておけば死に絶える。
もしグランチャーであっても、誰もいないところで生まれるような間抜けなら、招き入れるだけ無駄だという冷めた意識が咲夜にはあった。
ある程度人妖があつまり、アンチボディがいる可能性のある所だけを巡っていく。
魔法の森も、妖怪や妖精が多いので、やはり行ってみるべきだろう。
魔理沙の乗る黒いブレンパワードもそこでリバイバルしたそうだ。
後は、妖怪の山の周辺も探してみたいところなのだが、山の天狗に眼をつけられる可能性もある。
紅魔館にいるグランチャーに対し、何も行動を起こしていないのを見ると、例え眼をつけていてもなにもできない（反撃で殺されることを恐れているのだろう）ということもあるのだろうが、早苗に関してはまた別だ。
彼女がグランチャー持ち、しかも、オルファンに不利になるような動きをしているとあっては、報復により守矢神社が打ち壊されたりする恐れだってある。
そんなことをすれば、早苗はともかくとして、神奈子と諏訪子がただでは済まない。
短絡的な行動はしない天狗に限ってそんなことはしないだろうが、せめて神奈子と諏訪子を含めて、匿うことのできる場所を発見するまでは、なるべくなら目立ちたくはなかった。
隠れ家、という呼び方は情けないので、アジトとでも言おう。
それを見つけ、博麗神社と同じように分社を設ければ、それから先は、早苗が何かをしでかし神社が打ち壊されようが、神奈子と諏訪子が信仰を失うようなことはないだろう。
そもそも、神社が壊れたくらいで神は死なないが、まぁ念のためだ。
とにかく、そういうこともあって、本来なら今は、ブレンを虱潰しにしていく行動も控えるべきかもしれない。
しかし、オルファンの目的を食い止めるためには、行動の早さは必

須だ。

ブレンの捜索と撃破は、なるべく目立たないように遂行する。
同時に、こちらが潜伏するべきアジトも探しておこう。
残存するグランチャーも探しておく。

「とにかく、行きましょっ！」
やるべきことは決まったことだし、早苗は強く意気込んで、グランチャーを宙へと浮き上がらせた。
咲夜と藍のグランチャーもそれに続いて、大地から足を離し、浮き上がっていく。

何にせよ最終的にやるべきことは、ブレンに打ち勝ち、オルファンの目論見を挫き、食い止めることだ。
全ての行動はそのことに関わってくる。
もし悪い事態になってしまっても、最悪一気に強行策に打って出て、地底を襲撃すればいい。

彼女らは、それに先達て、少しでも状況を有利にするために、幻想郷の各地のブレンパワードを撃破して後顧の憂いを断ち、グランチャーをさらに増やすことで戦力を増強させ、それを行うためのアジトも見つけるべく、行動を開始した。

※

ある程度椛の自己紹介も終わり、彼女は早速、偵察の任務を果たす

べく地上へと出て、オルファンの金色に輝く身体の上、三日月のごとく反り上がったの両端のうちのひとつへと立った。
妖怪の山に比べればまだ背は低いが、それでも異様な大きさを持つオルファンの身体の、もっとも高く反り上がっている部分に立てば、幻想郷の全てが見渡せてしまえるようだ。
いや、実際、これから見渡さなければならない。
正直言って、勇儀などは椛の能力を課題に評価して、彼女ひとりで何でもできると考えているようだが、千里眼とはいっても、遠くは見えるが広い範囲は見えない。
あくまでも、眼で見える範囲だけで、そこから直線距離で相当遠くまで見ることができるというだけだった。
ある程度の狭い範囲を次々に見回して、全体としての広い範囲をフォローしなければならない。
電磁波を発振しながらぐるぐると回転するレーダーと同じようなものだ。
パルス波の反射により物体を探知することはできるが、全体を探知しようとすると、広域に電磁波を照射するために、円運動を描くようにしなければならない。
そうすると、その一周の円運動の間、レーダーの監視能力が空白となる時間が生じてしまう。
丸い表示板に、緑色の線が入って、それがぐるりと一周するあの動きだ。
椛はこれからそれと同じ円の動きをすることで、周囲の偵察を行う。
そうして、前述したように、一回の円運動の間に起こる動きは、把握することができない。
物体の動きを常に把握するためには、継続的に電磁波を照射しその反射を受けなければいけないが、右を見たまま左を見ることなど、さらには前を見たまま後ろを見ることなど、不可能である。
別の場所を見て、また元の場所に視線を戻すその僅かな間に、例えば敵が瞬間的にオルファンに接近していたとすると、その動きが分

からないのだ。
次にレーダーが書き換えられる時には、その間数秒の動きが吹っ飛んで（キングクリムゾン？）、まるで物体が瞬間移動したように表示されるわけだ。

妖怪の山から、後続の偵察隊が来るまでの間は、それでどうにかやっていかなければならない。
なんであろうと、任務は全力で果たす。
天狗はこの異変を自分達で解決すべく、久しぶりに気合いを入れている。
なによりここには、にとりだっていれば、鬼もいる。多くの妖怪がいる。
彼女らに迷惑はかけられない。
文やはたてにだって、白狼天狗のいい所は見せねばならないのだ。
後続が来るまで休みはなし、寝ない食べない遊ばない、だ。

そんな固い決意の下、椛は深く眼を閉じ、自分に備わった第三の眼、千里先を見通す眼に意識を傾け、遥か彼方に見える光景を脳裏に映し出していた。

※

先のグランチャーの襲撃後、不安がって、地上の調査をやってこなかった河童達だが、椛が来てくれた以上、急な襲撃はないだろうと考えて、調査を再開することになった。
実際のところ、いくら千里眼と言おうと、椛の能力にも穴があるこ

とは、当人である椛と同じく河童達には分かっていたのだが、勇儀はそれを承知で（椛を褒め称えてはいたが、実際は彼女も完璧でないことなど承知だった）、「あんたらはあんたらのやることをやっとけ」と、無理やり背中を押し、皆を連れ出していた。
鬼にこう言われては、逆らうことはできない。
それに、椛が来てくれて、一応は状況が改善されたというのに、いつまでも臆病にびくびくしていては、恰好が悪いではないかと癪に障る気分もあった。この前だって、サトリブレンは傷ついてしまったが、地底には何も起こらなかったのだ。
堂々としていれば、それでいいのだ。

河童達は、自棄になったというわけではなく、自らの意思をしっかりと持って、再び調査に励むこととなった。

ちなみに今回の調査には、永琳も同行してくるそうだ。

彼女は以前、さとり達が採取してくれたオルファン周辺の植物を調べてみたが、どうやらこの植物、オーガニックエナジーに反応する特殊な花の、若葉であるらしかった。
まだ若い葉の状態なので何とも言えないが、オルファンが自ら生み出した、おそらく幻想郷にはかつてない植物であろうと思われる。
この花が最初に発見された時から、それなりに時間も経過した。
採取したこの花は、栄養源になるであろうオルファンから離れてしまったので、生長が少し遅いように感じるが、オルファンに近い場所なら、すでに花も咲いているだろうし、多数群生しているだろうとも考えられる。
採取した分の花は、永琳がひとりで、自身のオーガニックエナジーを与えながら、今後の研究のためにものんびり育てていくとする。

その上で、一度実際にこの植物が花をつけているところを見てみようと思い、河童の調査に同行することにした。

抜け穴を出て、地上にでる永琳と勇儀、そして河童達。
地底からの熱がなくなり、ただ所々に大きな池が点在するばかりの荒野になってしまった地上へと出た永琳は、早速何かの違和感を感じた。
それは、永琳以上に、幾度となく地上へと出て調査を続けてきた勇儀と河童達の方が、強いようだった。

ぞろぞろと集まって、地上へと足を踏み出していた河童達の中からこんな声が聞こえる。
「なんか、ちょっとだけ暖かくなってるような．．．」

その通りだった。
オルファンに熱が吸収されることにより、秋の中頃ほどの気温（地熱による暖かさになれてしまっていた地底の妖怪にとっては寒いほどだ）になっていた地上が、ほんの少しだけ温暖になっているような気がした。
さっそくこれを、『気がした』という観念的なものではなく、確かな数値として判断するべく、河童の内の一匹が人ごみ（河童ごみ？）から躍り出て、背中に担いでいた巨大なリュックサックから、電気の技師が使うデジタルマルチメーターのような道具を取り出してきた。
それを高々と掲げた河童が見せつけるように大きな声で言う。
「じゃじゃぁ～ん！《地熱計測器》ーっ！この探査用の針を地面に突き刺すだけで、地表から、地下１０００ｍまでの深さまで幅広く温度を測ることができるのでＲっ！．．．こいつを使って、早速調

査してみまーす。ずっと深いところまで測りたいんで、ちょっと時間がかかります。その間、他のところも調査を続けて下さいよ～」
その声に、他の河童が、同じ道具を取り出しながら、
「私はもう少しオルファンに近いところを調べてみよう」
と言い、そそくさとどこかへと駆けだしていく。
それに、さらに数匹の河童が続いていった。

指示など待ってはいない。勝手気ままにいくだけだ。
まぁ、実際調査するべきことを調査してくれているらしいので文句は言わないが、やはり河童とはこういう、気持ち（フィーリング）に従って働く連中なのか、などと、永琳は胸中でひとりごちた。
それでも働いている分、輝夜よりかはずっとマシなのが哀しいことだが。
それに、あくまでも地熱の調査については必要な分の河童しか向かっておらず、残りの河童は相変わらず、永琳についてくるようだった。
この辺りも、さすが頼りになる。

永琳は、傍らに立つ勇儀に、
「もっとオルファンに近いところに向かいます。そう伝えてください」と呼びかける。
それに頷いた勇儀は、残りの河童達に、大声で指示した。
「よぉし、いくぞぉーっ、ついてこい」
河童達も、それに大声で、
「了解でーす！」と応答した。
さすがというなら、この勇儀もだろう。

そうして、遠くに見えるオルファンの巨体へと向けて、歩いていく。

途中、元は硫黄泉だったのが、すっかり綺麗なお池に変わってしまっていた、ここいる者達全員で水浴びできてしまいそうな大きな池に差しかかった。
永琳はここで、河童の一匹に、この池の水の成分と水分について調べて、これまでの調査結果と比較するように伝えておいた。

地上へ出てすぐに感じた僅かながらの暖かさは、おそらくオルファンが地熱を吸収することをやめ、地底本来の熱が戻ってきているからであろう。
となれば、硫黄も僅かながらに戻ってきている可能性も大いにある。

どうやらオルファンは、地底のエネルギーでオーガニックエナジーを代用する必要がなくなったようだ。
となれば、周囲に生えている植物で、充分補うことができることになったのか？
あるいは、オーガニックプレートを生み出す分に使っていたオーガニックエナジーが必要なくなったため、余裕ができたか。
なんにせよ、状況に少しずつ変化で生じてきたのは確かなようだ。
池の調査も数匹の河童に任せると、その場に残るのは、永琳と勇儀と、後はもう十匹にも足りない河童だけだった。
この残りで、オルファン周辺の状況を調べていこう。
彼女らは、再び歩を進める。

地上に出てすぐは、気温がほんの少し高いように思えたが、オルファンに近づくにつれ、段々とその気温も下がっていき、数日前と変わらない状態に戻ってしまっていた。
オルファンの周囲はまだ、地熱も硫黄も戻っていないようだ。

彼の者が吸収を続けているのだろう。
抜け穴近くはともかく、自身の周辺は、あくまでも自身と、自身が生み出した植物が住みやすいように操作しているのか・・・

そんな中で、ある程度オルファンの姿が近いところまで見えるころ、一匹の河童が、
「うわぁ～・・・」、と声を発した。

地面に根を張る大木のごとく佇むオルファン。
だとして、オルファンの張っている根が、地表にまで盛り上がっているように見えたのだ。
地面に食い込むように鎮座するオルファンから、黄色い色が染みだして、ひび割れのごとく地表を覆っているように見えた。
まさしく、オルファンの張る金色の根である。
しかしそれは、本当のひび割れや、例えば、コンクリートを突き破りながら伸びる根のように、どこか痛々しさを感じさせるものではない。
根のようには見えるが、同時に何か、そういう形をしている毛布のようなものが地面に優しく覆いかぶさっているようにも見えた。
実際それは、オルファンの根ではない。
オルファンを中心として広がっているその黄色は、オルファンの身体を染める黄金とは違っていた。
光り輝いたりはしていない。ただ自然に、黄色い色を見せてくるだけだ。

最初の河童に続いて、また別の河童が言う。
「花だ・・・植物が花をつけてるんだよぉ～っ」
それを聞いて、永琳は、やっぱり、と脳裏で呟いた。

予想していた通りだ、自分が育てることに決めたあの花が今、咲い

ているのだ。
河童達としては、少し前までこの辺りは、青々とした草のようなものがまばらに見えるだけだったので、自分達が調査をサボっている間にここまで光景が様変わりするとは思わなかった。
永琳達は思わず駆け足になり、オルファンの下へと近づこうとする。
段々と、視界いっぱいに映るほどに大きくなっていくオルファンの姿を見つめるのは一瞬だけにして、永琳はとにかく、その足元（？）、接地している面から、前述通り根のように広がる黄色い花々にだけ眼を向けていた。

やがて、秋の静かな、あるいは春の穏やかな空気を感じさせる中で、その花畑の傍にまで来た。
遠目で見ているよりもずっと広い。
オルファンの接地面から、見える範囲でも三か所ほど大きな花畑（張り巡らされる根の起点とも言えそうだ）があったが、その一つ一つが、６０、７０？ほどの広さがあるようだ。
オルファン自体が規格外の大きさをしているので、相変わらず光景の縮尺が分からなくなる。
が、今更そんなことを気にしてはいられない。

永琳は、自分達の眼前で、微風に煽られて微かに揺れる、黄色い絨毯のごとき無数の花々をじっと見た。
花弁にかかる僅かな陰影が、風に揺れることで様変わりし、模様のようなグラデーションを描いている。
それはまるで、黄色に染め上げられた海のようでもある。
そう、幻想郷ではもう見ることができない海は、朝焼けに照らされると、今のこの花畑のように、ひとどころに留まらない青色の饗宴を見せつけてくれる。
その時の美しい生命の母胎は、もう永琳だって見ることはできないが。

この場に生えている植物、この黄色い花は、金蘭とか、蒲公英（たんぽぽ）のように見える。この二つは実際はほとんど違うものだが、とにかく、そういう黄色い花の数々を連想させるようだ。

が、実際はそのどれとも違う。

この植物は、オーガニックエナジーに反応する、オルファンが生み出した独自の植物だ。

おそらく、幻想郷はもちろん、外の世界、月の世界においても、有史上存在を確認することはできなかったろうと思われる。

また、その黄色い花以外にも、それとは別の植物や、まだ幹が小さな広葉樹らしきものも生えていた。実をいうと永琳はさほど植物には詳しくないため、何の花だとか何の木だとかは分からないが。

ただ、これらの植物は、オルファンが周囲の環境を整えたこと、また、彼の者の老廃物が肥料となることで、自然と発生した植物だろう。

遠方から飛ばされた種子が、芽を出し、生長したか。

一面に咲き誇る黄色い花に眼を奪われそうになるが、何週間か前のここに、ペンペン草のひとつも生えなかったことを考えると、凄まじいと思えるほどに繁殖が早かった。

草花はともかく、まだ小さいながらも木まで生えるとは・・・

すっかりこの周囲は、かつてここが灼熱の間欠泉地帯であることを想像もできない状態になっていた。

そんな中で永琳は、さらに花畑の前にまで歩み寄っていき、彼女の脛ぐらいの高さをしている花の群れの前で、しゃがみこんだ。

そうして、何故だかは分からないが、導かれるように、右手のひらで、一番近くにあった花の花弁へと触れた。

冷たい、と思った。

が、その次には暖かいと思った。
相反する感覚だ。
胸中の中で、不可思議な感情が満たされそうになった永琳は、その次の瞬間、思わずはっとして、花弁に触れていた手を離した。
突然、眼の前の花弁が、穏やかな光を発し始めたからだ。
眼の前で電球が灯ったように鮮やかに、しかし、柔らかい光で。
ひとつの花で発生した光が連鎖的な反応を起こし、周囲にある十本ほどの他の花にも光を灯させる。
水面の一点から波紋が広がるように、次々に黄色い光が灯っていく。
永琳の眼の前に、黄色い鮮やかな光の群れが現れていた。

「・・・・・・」
ただ黙するだけだった永琳の後ろの方から、河童達がびっくりする声が聞こえてくる。
「光ったーっ？」
「すっごぉい！」

その声を聞き流しつつ、永琳は咄嗟に離してしまった手を、もう一度眼の前の花弁へと触れさせた。

光る花か・・・
人工的に加工（プリザーブドフラワー）した花なら光るそうだが、天然の植物ではあったろうか？
ただ、植物が光を発することはあり得ないというわけではない。
例えば光を発する生物の代表格とも呼べる蛍（こういうことをどこぞの妖怪に言ってやると、喜んでくれることだろう）が光るのは、ルシフェリンという物質があるからだ。
ルシフェラーゼという酵素と、ＡＴＰ（アデノシン三リン酸）が反応することで蛍は発光する。
ＡＴＰは、真核生物の生命維持には必須の物質で、人間の身体にだ

って存在する。
植物だって、光合成によりそれを産生する。
妖怪の身体にだって、おそらく存在するのではなかろうか？
ＡＴＰは、生体で発生する様々な現象の源にもなる重要な物質である。
人体のクエン酸回路などもそうだし、筋肉の収縮にもＡＴＰは関わっている。
つまり、くだけた言い方をすれば、ＡＴＰが無ければ人間は生きていけないのだ。
筋肉の塊である心臓も動かなくなるから。
要するに、それほど重要なものであるし、様々な使われ方をしているのがＡＴＰだ。
もしかしたら案外、妖怪が弾幕を撃ち出す際には、多数のＡＴＰが反応を起こしているのかも・・・？

それは余談として、植物も動物も、やっていることの根幹は、実はそっくりだ。
となれば、植物もルシフェリンのような発光物質があれば、光ることはできるだろう。
実際世の中に光る花があって、それがこの永琳の考えとまったく別の原理によるものであるなら、月の賢者も形無しということにはなってしまうが・・・
それはともかくとして、植物の細胞的な構成は、蛍のような昆虫を初めとする動物に比べれば単純だ、となれば、産生されるＡＴＰもそれほど多くはなく、はっきりと光っていると分かるほどの光源を発生させるエネルギーはないと思われる。
が、それを補うエネルギーがあればいいだろう。
それが、オーガニックエナジーなのだと思われる。
この花は、オーガニックエナジーに反応することで、光るのだ。
朝方でもはっきりと分かるが、何時間直視していようと何も起こら

ない程度の、穏やかな光を発する。
永琳が触れることで、多数のオーガニックエナジーが吸収され、それが周囲の花にも伝播したから、他の花も光ったのだろう。
ここまで来ると、さすがにどういう原理でそうなったのかは分からなくなるが。

永琳は、花弁を撫でるように触れていたのだが、それを止めると、その場で立ち上がり、そして、改めてオルファンの、花の光よりも強く、雄弁に語りかけてくるような黄金の身体を見据えた。

そうして、考える。

――この花はオルファンが生み出した。でも、そのことが一体何を意味しているのだろう・・・オルファンが、自らのオーガニックエナジーを用いてこの花を生み出したとして・・・この綺麗に光る花を生み出したとして、どうしてこの花はこんなに綺麗に光るのかしら・・・オルファンはただ、オーガニックエナジーの源とするためにこの花を生み出しただけだろうに・・・銀河に飛び立つ時には、この花も含め、あらゆる生命を滅ぼすだけだろうに、どうしてこんな鮮やかな光を・・・この意味は一体?・・・・・・彼の者は、この花を通して、私達に何かを伝えようとでもしているのかしら・・・?――

先程も考えたことだが、状況は、この異変が発生した当初から比べれば、大きく変わりつつある。
だがその変化は、表面上で分かること以上に、もっと深いところ、より大きな規模で起こっているのかもしれない。

そんな結論に思考が帰着しそうになった、その時だった。
大声で、永琳達を呼ぶ声が聞こえる。
はるか頭上、オルファンの頂上の方からだ。

「みなさぁーん！」
椛だ。
慌てた様子で上空から急降下してきた椛が、永琳の背後、彼女に続いて花畑に近づこうとしていた勇儀と河童達の前に降り立つ。

何事だ？と、河童達が眼を丸くし、永琳もすぐに後ろを振り返る中で、椛は焦燥した様子で、しかし確実に言いたいことを伝えようと、はっきりとした声で言う。
「魔法の森を偵察していたところ、そこで、三体のグランチャーが二体のブレンを襲っているのが見えましたっ。戦闘が始まっているのです、魔法の森でです！」

「えぇーっ！？」
「なぁんだってぇぇっ！」
みんな揃って驚嘆する河童達に続いて、勇儀の叫び声も聞こえる。
それに隠れるようにひっそりと、永琳も息を呑んでいた。
椛は、すでに再上昇をかけようと、つま先を地面から浮きあがらせている中で続けた。
「見る限り、ブレンの方が劣勢でした。あの様子では、負けてしまいます。戦闘が終わった後は、オルファンを襲撃に来る可能性も大いにあります・・・対応を決めるために、地霊殿にいる方達にも報告してきます・・・皆さんは、ひとまず地底にまで避難してくださいっ・・・それでは」
伝えることだけを伝えて、椛はまさしく眼にも留らぬ速さで、地底の方へと飛び立っていった。

一瞬で遠くに去り、見えなくなるその姿をほんの数秒だけ見送った永琳は、そのまま落ちついた足取りで、花畑から離れて、河童達の下へ戻ろうとする。

椛は、対応を決めると言っていた。
対応というのは、つまり、こういうことだろう。
グランチャーは、魔法の森にてブレンを撃破した後、オルファンを襲ってくる可能性がある。
地底のブレンは、森のブレンを助けるべく向かうべきか、あるいは、オルファンを守るために、この付近に陣取るべきか。
魔法の森での戦闘はすでに始まっているようだし、ブレンが劣勢に立たされているという。
今から救援に向かっても、すでに戦闘は終了し、ブレンは撃破された後であるだろう。
間に合わない救援のために遠方に赴くべきだろうか？
もし戦闘中に致命的なダメージを受け（前回のサトリブレンのように）撤退するにしても、地底から遠く離れた場所で、どこへ逃げるというのだろうか。
まだ、オルファンの付近で戦ったほうが、いざというときの逃げ場はある。
となれば、魔法の森の救援にはいかず、あくまでもオルファンの防衛に専念した方が・・・

いや、そうはしないだろう。
さとりは優しい。ブレンも優しい性格をしている。
魔理沙のブレンは、彼女の話では、自己よりも他者を優先する性格だそうだ。
椛の報告を聞いた彼女らとそのブレンは、何を思うだろうか？

仲間が襲われ、やられそうだというのに、助けにいかないわけがないだろう。
理にかなった考えとか、そういうものはない。
それに、理にかなった考えというなら、オルファンがオーガニックプレートを生み出しブレンを発生させたのなら、それは何かに必要な行動であるはずだ。
そう、銀河旅行という目的のために・・・あるいはもっと重要な、オーガニックプレートのために。
戦闘によりブレンを亡くしてしまうことで、その何かができなくなるかもしれないという危惧を考えれば、助けに行く方がいいだろうとも思えた。
実際助けられるかは別として。

河童達のあまり悲鳴には聞こえない悲鳴が響く。
「わぁ～ん！やっぱり来たんじゃないかぁ！逃げましょう勇儀様ぁー！」
「おうともさ！みんな地底に戻るぞぉー！まだ実際に敵が向かって来てるわけじゃない、時間はたっぷりあるんだから、落ちついてなぁっ。他の場所で調査してる河童も呼び戻すんだよ！」
勇儀の声に導かれ、河童達は、地底に避難すべくぞろぞろと移動を開始した。
永琳もその後を追うように地底に向けて歩き始めようとするが、それを踏みとどまり、もう一度だけオルファンの方へと振り返って、ほんの僅かな間その金色の身体を眼に焼きつけ、そうして再び前を向いてからようやく歩き始めた。

そうして、考える。脳裏で呟く。

――救援に行こうとも、行かずとも、どの道椛が見た二体のブレンは撃破される・・・・・・オルファン。貴方が生み出した花の光の意味は、かならず見つけてみせましょう。そうすれば、これから散りゆく二体のブレン・・・意味も解さず戦うしかなかった彼の者達の魂だって、報われることでしょうからね――

第十一話　その2

椛が任務についてから、さとり達は各々、ブレンの傍にいてやったり、やることがあるからと屋敷の中にいたり、旧都へと遊びに出掛けたりしていた。
そんな中でだ、ブレンの傷を少しでも早く癒やそうと、今度はこいし達は外にいさせた上でサトリブレンの胎内にいたさとりは、任務に就いた矢先であるはずなのに、椛が再び中庭に降り立ったのを見て、不思議に思った。
外でブレンを見守っていたこいし達も、椛の姿に気づいたらしく、ぐるりと後ろを振り返っていた。
彼女の表情は、いち早く何かをしなければといった具合に、焦燥しているようである。
何か忘れ物でもしたのか？やり残したことが？

さとりはすぐ、焦燥する椛の心の内を読み取ってみることにした。
その次の瞬間には、彼女の表情には、不可思議による戸惑いではなく、驚愕が張り付くことになる。
椛が何のためにこの場に戻ってきたのかを知ったさとりの脳裏に、ブレンが味わったあの灼熱の炎が、その苦痛が蘇ってきた。
彼女は、誰にも聞こえないような微かな声で、呟いていた。
「・・・そん、な・・・」

共生関係であるはずの輝夜といえば、ちょっとブレンの胎内に入って短い話をした後は、すぐ屋敷の中に戻り、自分にあてられた部屋の中で惰眠を貪る有様だった。
それでも、カグヤブレンは彼女との間に確かな絆を感じているというのだから、おかしな話だ。

そういうことが気になったというわけではないが、妹紅と慧音は、輝夜に代わってカグヤブレンの足元で装甲にもたれかかり、彼の者と話をすることにしていた。
そうする一番の理由は、妹紅のグランチャーを倒した相手のことを、何故だか、よく知ってみたいと考えた彼女自身の気持ちによるものだ。
友の仇というわだかまりを、取り払いたくもあったからかもしれない。
そうしてもう一つ、理由があった。
自身の中にある気持ちを、伝えようと考えていた。

妹紅は、ブレンの左のつま先の辺り、股の内側の装甲にもたれかかっていた。
慧音もその右隣にいた。
そうして妹紅は、見上げたところでブレンの顔など見えないのだから、ぼんやりと前を向いたままで、呟くように言った。
それでも、隣にいる慧音にも、ブレンにもこの声は聞こえる。

「ブレン・・・あんたは、私のグランチャーをやったんだ。でも私は、そのことであんたを憎むようなことはしたくないと思っている・・・本当にそうなのかは分からないけど・・・・・・あんた達ブレンパワードの近くにいると、段々と気持ちも落ち着いてくるよ。やっぱりあんた達は、いい奴等なんだ・・・あんた達に、幸福を感じ

る気持ちがあるのなら、幸福になって欲しいと思う」
穏やかな表情と口調でそう言った妹紅は、次いで急に、哀しそうに眼を閉じ、しかし口調は変わらず、いや、もっと穏やかなものにして、続けて言う。
「でも・・・あんた達と付き合って、認めていくうちに、それと同じくらい・・・グランチャーへの気持ちも強くなっていくんだ・・・・・このことは、慧音と、私のグランチャーを倒したあんたにしか言わないでおく。私達だけの秘密にしておこう・・・私は今でも、もう一度グランチャーに乗ってみたいと考えてるんだ・・・・・・・もう一度、あいつと一緒になって・・・それで・・・・・・・」
それから先は言わなかった。
ただ、閉じた眼をうっすらを開けて、それをもう一度閉じるだけだった。

慧音はすでに、妹紅のこの告白は聞いていた。
妹紅の中でのグランチャーに対する気持ち・・・未練と言っていいだろう。それは日に日に強くなっていた。
そうして彼女はそれを慧音に伝えた時、『私はどうしたらいいんだろう』と問うてきた。
慧音は、何も応えられなかった。今だって何も応えられない。
ブレンと間近で接することでその性質を理解した慧音もまた、以前感じていたグランチャーに対する不快感は忘れていた。
グランチャーだってひとつの生物。ひとつの心を持った無二の生命。尊重したいと思う。

だが、妹紅がもう一度彼の者に乗れば、あの時の荒んだ妹紅が帰ってくるかもしれない。
彼女の心の奥底に隠された哀しい性(さが)が。
そうなったとき、妹紅はどれほど辛い思いをするのか・・・
いや、そういうのは言い訳かもしれない。一番辛いのは慧音だ。

もう一度妹紅がああなるのを、黙って見ていることができるか？妹紅が変わっていくのを。
それを考えると、もう一度グランチャーに乗りたいという妹紅に対し、そうしよう、と応えることはできなかった。
そして、絶対に乗るなと伝えることもできなかった。
そんなことを言うのは、ひとつの生命であるグランチャーへのこの上ない侮蔑であるし、彼の者を今も信じている妹紅に対する、鬼、畜生以下の仕打ちであるからだ。

どうしたらいい、と聞きたいのは、慧音も同じだった。

沈黙が流れる中で、それを破り、妹紅は乾いた息を吐き捨てるように苦笑いして、言った。
「相変わらず、私は辛気臭いなぁ・・・輝夜みたいに、恥知らずで神経の図太いやつになりたいよ」
そんなことを言う妹紅の横顔を、慧音は見た。
その時だった。
整った妹紅の顔の向こう側、カグヤブレンから見て正面のところで、椛が降り立つのが見えた。
今しがた、偵察のために外に出ていったところではないか。
任務はもう終わったのか？
それとも、他に何かをするのだろうか・・・
どうやら、そうらしい。
降り立った椛の表情は慌てていて、今すぐ何かを仕出かそうとしているようだった。

慧音は、隣にいる妹紅の方をぽんぽんと叩いて、
「ん？」と顔を向けてくる彼女に対し、椛のいる方を指さしながら、

「あそこ・・・椛さんが戻ってきている」と伝えた。
慧音が指差した方を向いた妹紅が、
「本当だ、どうしたんだ?」と呟いた、その瞬間だった。

椛は、永琳達に伝えたのと同じように、己の千里眼で見ることができた光景を、もう一度いろいろと聞かれないように、全て包み隠さず、しかしなるべく簡潔になるよう、聞き逃さないように大声ではっきりと、中庭の全域に聞こえるように叫んだ。

「みなさぁーん!聞いてください!魔法の森で今、ブレンとグランチャーが戦闘をしていますっ。ブレンは二体、グランチャーは三体です。ブレンの方が大分苦戦しているようです。救援にいくべきかもしれませんが、間に合わない確率が高いですっ。みなさんは一度、ここに集まってください、これからやるべきことを考えます、いいですねっ?私はこれから、他の方達にもこのことを報告してきます。これからやるべきことをまずは考えますから、みなさんはこの場に一旦集まってください!」
それだけ言うと椛は、大急ぎで駆けだし、屋敷に通じる戸の方へと向かっていく。
さすが、狼の方の天狗だけあって、地上を走るのも早い。

実はずっとマリサブレンの胎内にいた魔理沙が、オーガニック的なスピーカーで、
(おぉいちょっと待て!考えてる時間はあるのかよぉっ?)と呼びかけるころには、すでに椛は戸を開け放って、それを閉めもせず、屋敷の奥へと入っていた。

傍らの慧音が、不安そうな声で言った。
「・・・また、戦いか・・・」
それを聞く妹紅の脳裏では、ある光景が想起され、映し出されていた。
彼女と出会えてよかったと言ってくれたあのグランチャーが、死んでいくその瞬間の光景が・・・視界を埋め尽くし、脳にまで焼きつこうとする鮮やかで美しい光が、鮮明に、寸分も違わず。
彼女は慧音の声に、
「・・・戦いだ・・・・・・戦い」と、微かな声で返した。
マリサブレンの装甲が開き、その奥から、戸惑いを隠しきれない様子の魔理沙が出てくる。
いつもはいい加減なヤツに見えるが、実際はどこまでも真面目で勤勉で実直であることを示す凛々しい眼つきで、装甲の上から、中庭にいる他のブレン達の姿を見回す。
椛は、まず対応を考えろと言ったが、そうしている内に、ブレンがやられてしまう。
魔理沙は、すぐにでも魔法の森へと向かうつもりだった。
当然、他のブレン達も連れていく。
が、残念なことに、ブレンに乗り込むべきものが、ここにいないのだ。
さとりはいる。が、輝夜は相変わらず動かないし、霊夢も、割り当

てられた部屋の中でぐうたらしていることだろう。

いや、そうでもないか？

魔理沙は、突然ぬっ、と眼の前に現れた彼女の顔に、身震いするほどにびっくりした。

思わず、「うわぉっ」と頓狂な声を上げる。

視界にめいっぱい大きく映った霊夢の表情が、変わる。

眼は鳥のようにつり上がり、口が大きくぱくぱくと開かれた。

そうして、そんな口の動きと一緒に聞こえてくる彼女の声が、間近から鼓膜を揺らす。

「話は聞いたわ、いつまでそこで突っ立ってんの？ひとまず集まれって話だったでしょ」

どうやら、椛からの報告を聞いて、お得意の零時間移動（テレポート）で中庭に直行したのだろう。

が、そんなことはどうでもいいと、魔理沙は、叫べば唾液が顔にかかりそうなほどに近づいていた霊夢から僅かに距離を置いてから、落ちついてはいるのだが、興奮は隠し切れていない声で、こう言った。

「その必要はないっ。霊夢、さっさとあたし達で出て行って、ブレンを助けようぜ！」

それに、霊夢が返す。

「今から言ったって、間に合わないわよ。遠くまで飛んでいって疲れちゃえば、私達だって二の舞よ」

「間に合わせる方法ならある。さとりから聞かされたあれだっ」

「バイタルジャンプね。でも、魔法の森にはバイタルグロウブが伸びていない・・・無理よ。地道に飛んでいって向かうしかない。で、それじゃ間に合わない。いくだけ無駄なんじゃぁねぇ～・・・」

仕方がないな、といった具合に、深く眼を閉じ、ため息をつきなが

ら顔を左右に振る霊夢。
が、魔理沙はそれに対し、にやりと笑みを浮かべる。
その瞳の奥には、彼女らしい、人間が・・・一生の時間を僅かしか持たない人間だけが持つ、今をよりよく生きようという意思を込めた光が見えていた。
今この瞬間だって、もっとよりよく生きるんだ。
そのためには・・・

彼女は言う。
「いいかぁ、お前はいっつも楽しよう楽しようとしてるがなぁ、あたしはそうじゃないぜ。あたしはいつも、あたしが思った通りの行動を、いち早くするっ。ブレンを助けようと思ったのなら、助ける行動をする。例え無理だと分かっていてもな・・・悪いが、付き合ってもらうぜぇ?グランチャーに囲まれてあたしが死ぬとして、それを助けないお前じゃないだろ?」
顎を上げ、口角をにっと釣りあげ、右目と左目の開き方が違う顔で冗談っぽく言う魔理沙だったが、彼女を言っていることは、霊夢にとっては真理だった。
彼女らは、そういう関係でいたわけだ。

霊夢は、面倒くさそうな鉄面皮を浮かべ、こう言い返す。
「でも、そもそもまだ輝夜が来てないじゃない。あいつはおいていくわけ?どうせ待つんでしょ?なら結局、遅れは生じちゃうわけね」
その声に、今まで自信ありげにつり上がっていた眉を急に下げた魔理沙が、
「まぁ、そうだけど・・・」と続いた。

それを見た霊夢が、急に面白そうに、肩を揺らせて笑った。
「ふ・・・あっはっはっはっはっ」
「な、なんだよぅ」

彼女は続けて、魔理沙の肩をぽんぽんと叩いて、言う。
「分かった分かった。私も付き合う。輝夜が来たら、すぐに向かいましょう」
そうして、笑顔を徐々に消して、代わりにまた鉄面皮になりながら、今度はサトリブレンの方を向きつつ続ける。
「ただ、さとりは連れていかないほうがいいでしょ・・・あの傷じゃ戦えないわね」
それは、魔理沙も思っていたことだったので、
「そうだな」と頷く。

サトリブレンの、グランチャーによりつけられた火傷は、まだ少ししか治っていない。
こんな状態で戦ったのでは、足手まといというものではない。
それに、傷以上に、精神的な問題もあった。
今のさとりとブレンに、戦いへの恐怖がないなどとは言えないことは、魔理沙達にだって分かっていた。
仮にブレンの状態が万全だったとしても、さとりと彼の者を戦いに向かわせることはできるだろうか・・・

魔理沙は、眼の前の霊夢に、
「とりあえずお前は、自分のブレンの中にいてくれ。すぐに出られるようにな」と伝える。
霊夢もそれに、
「分かったわ」と応じて、再度零時間移動をし、この場から去った。
同時に、魔理沙は再びブレンの胎内へと戻り、スリットウェハーに背中を預けて座り込んだ。
続いて、サトリブレンに向けて、オーガニック的通信を寄越す。
そうして、こう伝えた。

「さとり。あたし達は、椛の言う事は無視して、すぐに出る。あの

天狗には悪いけどな、時間がないんだ」
（・・・そうですか・・・）
聞こえてくるさとりの返事は、魔理沙が彼女自身の胸中で考えていたことが間違いではなかったことを示す、臆病な声音をしていた。

やはり彼女とブレンを戦場に連れていくことはできない。
それを再確認した魔理沙は、続けてさとりに言った。
「輝夜が来たら、すぐに出る。あんたはここにいるんだ」
その声に、さとりは特別驚いたりすることはなかった。
魔理沙がこう語るだけの理由が、さとりには実感できていたからだ。
（それは・・・私のブレンの怪我を考えてのことですか？）
「それもある・・・けど、ブレンが本調子になっていたって、戦う気持ちがないんじゃな・・・」

人の心を読み取ることのできるさとりだが、自分の心を読まれるのは苦手だった。
だからこそ彼女は、自身の能力のことを、つまり自分自身のことを、認めることができないでいた。
魔理沙に気持ちを見透かされ、さとりは何も言い返すことができなくなった。
その後、マリサブレンが作ったオーガニックエナジーの道を、思惟が通過することはない。
長い沈黙がその場を圧迫した。
魔理沙はこの沈黙が、さとりの中での納得と諦めを意味していると判断させてもらうことにした。
黙りこんでいるさとりに対して、言い聞かせる。

「分かったってことにしておくぜ、あんたはここにいてくれ・・・心配することはない。今回は最初っから霊夢のブレンも一緒だし、あたし達だって、戦いの中で新しい戦法を生み出していた。強くは

なってるはずなんだ」
（・・・・・・）
さとりは未だ、沈黙を続けるばかりだ。
魔理沙は、険しい顔で口をつぐんで、その口を少し開き、ただ、
「それじゃあな」と伝えると、ブレンのオーガニックエナジーを向けるのをやめ、通信を切断した。
そうして、輝夜が来るのを待つ。

さすがに、こういう事態になっても尚、部屋の中で寝ているわけにもいかないだろう。
しばらくすると、大慌てで、椛が開けっぱなしだった戸をくぐって中庭に出てくる輝夜の姿が見えた。
魔理沙は、今度はブレンのオーガニックエナジーを輝夜へと向け、外にも聞こえるオーガニック的なスピーカーを用いて呼びかけた。
「輝夜か。さっき話は聞いたな？あたし達は、すぐに魔法の森に向かうことにする。付き合え！」
それを聞き、普段運動などロクにしていないことを証明するよたよたとした走り方でカグヤブレンの方へと駆け寄りつつ、声だけは何とか張り上げ、輝夜は喘ぎ喘ぎな声で言い返してきた。
「こ・・・こっちも、その、つもり、だったわぁー！」
それを聞き、魔理沙は軽く頷いた。
後は、さっさと地底を出て、可能な限り早く魔法の森に向かうだけだ。

自分なりの全力疾走でカグヤブレンの足元にまで近づいた輝夜は、そこで妹紅と慧音が、まるで待っていたかのようにこちらに眼を向けて佇んでいるのに気がついた。
実際は別に待ってなどいなかったわけだが、とにかくそう見えた輝夜は、走るのをやめ、彼女らの眼の前で折り曲げた膝に両手をつき、少し前のめりになった姿勢になって、背中を上下させ息を上がらせながら、顔だけ前に向けてこう問うた。
「な・・・なにぃあんたら?ここで何してたの。もしかして、私の邪魔するつもり?」
それに、妹紅が応える。
「いや。話をしてただけだ。ブレンと」
慧音が続く。
「輝夜様は魔理沙達と一緒に、魔法の森へ向かうのですね・・・お気をつけて、私達は一旦この場から離れます」

「話って、何を?」
輝夜の声には返事せず、代わりに妹紅が、
「ブレンの身体を労るんだぞ」とだけ呟く。
そうして、輝夜が来た以上自分達は邪魔であると、足早にブレンの足元から離れて、輝夜の脇を通り過ぎ、中庭の中央あたり、椛が集まってくれと呼びかけていた場所へと歩いていく。

そんな中で、妹紅はふと、サトリブレンの方へ眼を向けた。
こいし達はまだブレンから離れようとしておらず、装甲を開けて彼女らの前に降り立ったさとりが、不安がる皆を落ちつかせているようだった。ブレンから離れるようとも言っているのかもしれない。
しかし、こいし達はそれを固く拒んでいた。いやいやと、首を振るのが見える。
これでは、ブレンは迂闊に飛び上がることもできないだろう。

が、それでいいのだろう。
サトリブレンが戦いに赴くべきでないことは、妹紅にも分かっていた。
あのまま、こいし達が邪魔をして・・・いや、邪魔ではない。ああやって心配することで、ブレンとさとりの生命を助けてやってくれればいい。
出撃できなければ、出撃しなくて済むのだから。
あるいはもうすでに、魔理沙か霊夢あたりが、出撃するなと伝えている後かもしれない。
さとりが何か言っているのは、魔理沙のブレン達を心配するのを宥めているのか。
首を振るこいしは、不安を打ち消すことができていないからそうするのか・・・
彼女達を慰めるさとりの眼は、遠目から見ても、まず自分が一番慰めてもらいたそうな、そういう寂しさを湛えていた。

妹紅達が離れたことで、カグヤブレンは、輝夜を胎内に招くべくその場にしゃがみこむ。
その様子を見た魔理沙が、オーガニック的なスピーカーで呼びかける。
（先にいくぜ、ついてこいよ。魔法の森ぐらい、行き方は分かるな？）
それと共に、マリサブレン、それを追うようにして霊夢のブレン・・・《ハクレイブレン》とでも言おうか？その両者が、地面からふわりと宙に浮きあがり、そのまま燕のように高度を上げると、地霊殿の屋根の上で加速をかけ、地上へと向けて動き出した。
やや遅れて、輝夜を胎内へ入れたカグヤブレンも、同じようにして飛び立ち、先行した二体のブレンを追って加速する。

瞬く間に、三体のブレンが中庭から姿を消した。
その様子を眼で追いつつ、ブレンの姿何も見えなくなると、妹紅は、今度は慧音と一緒に、もう一度サトリブレンの方を見た。
これで完全に、彼の者は出遅れてしまった。
そうして、さとりを地面に降ろすために座り込んだ状態のまま、何も言わずただじっと動かないでいるブレン。
グランチャーと関わり、同時にブレンとの交流も深めていた妹紅には、なんとなくブレンの表情というものを覗い知ることができた・・・ような気がした。
胸中で呟く。

――安心していやがるな・・・でも、口惜(くや)しそうでもある――
そうして、同じような表情を、さとりもしていた。
もう、ブレンの姿も見えなくなった中庭の上空を、細めた眼で見つめていた。
その眼にもまた、これで本当に、こちらが戦う必要はないのだという認識に安堵していることと、結局、覚悟も何も決められていないことを悔やむ気持ちとが混在していた。
妹紅には、そこまで覗い知ることはできなかったが。

しばらくすると、あらかた全ての者に報告を終えたらしい椛が、多少は落ちついた様子で、走ったりせず、自分が開け放っておいた戸をくぐり、中庭へと戻ってきていた。
だが、戸の向こうから一歩を踏み出し、外の光景を眼に入れた彼女の落ちついていた顔に、またしても驚愕の色と、それ以上の辟易の色が浮かび上がる。

待っていろと言っていたはずなのに、魔理沙達が、ブレン共々姿を消していたからだ。
この場に残っているのは、サトリブレンだけ。
椛は結局また駆け足になって、もう十歩ほど踏み出して、吐き捨てた。
「ブレンはどこに・・・もしかしてっ」
そうして、走ることはすぐにやめながらも、早歩きで、唯一椛がここに集まっていろと言っていた場所で待っていた妹紅と慧音の方に歩み寄り、聞いた。
「魔理沙さん達は?ブレンはどこにっ?」
それに、妹紅が落ちついた声で応える。
「ちょっと前に出てったよ。魔法の森に行くためにね」

それを聞いた椛は、結局自分の脳裏を過ぎった可能性が正しかったことを実感しつつ、身体をこわばらせ、顔を俯き気味にし、握りしめた両の拳をわなわなと震えさせた。
そうして、憤りを込めた声で、唸るように言う。まさしく、狼の唸り声とでも言おうか。

「ま・・・ったくっ・・・状況をどんどん悪くしているだけだっていうのが分からないのか・・・これで最悪の結果になったら、誰が責任を取るっていうんだ・・・・・・オルファンに取らせるわけにもいかないのにっ」

次の瞬間椛は、まさしく閃光のような速さでその場から飛び上がり、中庭から屋敷の屋根を跳び越え、魔理沙達を追うように、地上へと向けて去っていった。
音の壁が突き破られることで発せられる耳障りな高音がすぐ近くで鳴り響き、妹紅と慧音は、突如飛び立った椛に驚くこともできず、咄嗟に耳を塞いだ。

さらにその次の瞬間には、もう椛の姿は見る影もない。

慧音は、

――――天狗って、どこまで速く動くことができるんだ・・・そもそもあんな速さで動けば、身体がバラバラに吹っ飛ぶんじゃないか？

――――

などと、あまりに場違いなことを考えてしまっていた。

さらにそれからしばらくすると、椛から状況を聞いたにとりが中庭に出てくる。

しかし、ブレンも、こちらを呼んだ椛の姿も見えないことを不思議がる彼女に対し、妹紅達は、もうブレンも椛も去った後で何もすることがないため、仕方なく、詳しい状況の推移を説明してやることにした。

※

すぐさま抜け穴から地上へと出たマリサブレンをはじめとする三体、遅れていたカグヤブレンもすでに合流している。

旧都の上空を飛んでいた時は、安全を考えてそれほどスピードは上げていなかったが、地上に出てからは話は違う。

最大速度を出して、魔法の森に向かうつもりだった。

加速の前に、オルファンが放出しているという、バイタルグロウブ

を確認する魔理沙。
霊夢が言う通り、バイタルグロウブは、妖怪の山の方には多く、かつ長く張り巡らされているが、それ以外の方には、ほとんど張り巡らされていない。
特に、山と反対方向、いろいろな意味で誰も寄り付かないような場所がある方向には、一本も伸びていない。
魔法の森の方へ伸びるバイタルグロウブもない。
直線距離だけでも縮めようと、近場に跳躍できるような帯からジャンプしようと考えても、その近場に伸びている帯すらない。
どうやら本当に、ブレン本体による加速で向かうしかないようだった。

なら、いろいろと考えるのはこれでもうやめだ、急がねばならない。

魔理沙は、他の二人に、
「いくぜ！」と呼びかけつつ、ブレンを、森へと向けて加速させた。
天狗にだって負けないほどの加速を発揮した三体のブレンが、疾風のごとく、いや、疾風すらも切り裂くように、真っ直ぐに突き進む。
これだけの速さがあれば、五分も、いや、三分しない内に森にはつくはずだ。
大丈夫、間に合う。

ブレンの胎内で、加速により生じる重圧を全身で感じ、その圧迫感に歯を食いしばる中で、魔理沙は、とにかく自分達の行動が無駄では済まないことを祈った。

その時だった。
彼女の鼓膜を、大きな声が揺らす。
「おぉおーーーい！貴方ーーーっ！」
霊夢や輝夜の声ではない。

装甲の外から響いてくる声だ。

スリットウェハーに映る光景を、ブレンの目線でなく、装甲越しに見えるものに変えた魔理沙は、途端にばっと広くなったように見える映像の中で、声のした方向へと眼を向ける。

そうして、ブレンに追いすがるように飛び、向こうから見えているわけがないのに、こちらに目線を合わせてくる椛の姿を見た。

思わず魔理沙は驚嘆する。

「はやっ、もう嗅ぎつけてきやがった！さすが、嗅覚もすごいぜっ」

こちらを止めるつもりで飛んできたのだろう。

が、ここまで来て今更止まるつもりはない。

もしこのままがみがみと何か言われるようなら、最悪少し痛い目を見せてでも、振り払うしかないか・・・

このまま戦場にまで連れだせば、生命の危険だって生じるからだ。

戦う覚悟と共に、椛をも傷つける覚悟も決めた魔理沙であったが、彼女の決意とは裏腹に、すでに椛には彼女らを止めるつもりはなかった。

止まってくれるならそれが最善なのだろうが、どうせ止めても無駄だということは分かっている。

なら、とにかく状況をよりよく運ぶために、やるべきことをやるしかない。

魔理沙達を止められないと分かった今、椛がやるべきことは・・・

彼女は、マリサブレンの脇腹にぴたりと張り付いて機動する中で、装甲に噛みつきそうなほどに顔を寄せ、風が吹きつける音に負けないほどの大声で叫んでいた。

「この際です、もう止めません！先程飛びながら千里眼で見てみましたが、戦闘はまだ続いていますし、ブレンは二体とも無事です。

しかし、窮地に立たされています。これなら、間に合うかもしれませんが、間に合わない確率の方が依然大きいです！いいですかっ？負けないこと、やられないことを最優先に！危ないと感じたら、すぐに全員で逃げてください！無理して敵をやっつけようとして何もできなければ、それこそ犬死になんですから、いいですねっ？分かりましたねっ！？・・・このまま戦場まで突っ込むのは危険ですから、これで失礼します！」

「お、おいっ？」

椛がその場を離れ、一気に後方へと流されようとした時、魔理沙は思わずこれが彼女の望んでいたことであるにも関わらず、椛を呼び戻そうと声を出してしまった。

彼女の声など聞こえていないように、椛の姿は一気に後ろの方へと遠ざかっていく。

獣のような顔をして叫んでくるのは予想通りだったが、椛の言葉は、彼女がこちらを止めようとするだろうとばかり考えていた魔理沙にとっては予想外のものだった。

危険を避けるため、伝えることだけを伝えて大人しく下がっていったのも、やはり意外であった。

ブレンを助けようとする意思をくみ取ってくれたのか？

いや、単に、止めるだけ無駄ということを分かっていただけなのだろう。魔理沙もすぐに、椛の考えに至ることはできた。

が、その上で彼女は、森のブレンを助けることができる可能性が残っていることを伝えてくれた。

そのことには、感謝しておくべきだろう。

どうせ後で、こっぴどくお叱りを受けることにはなるんだろうが・・・

そうこうしている内に、後三分ほどで到着するだろうと言っていた内の、半分ほどが過ぎてしまっていた。
もう間もなくだろう。
椛が、ブレンを無事だと言っていた時から一分するかしないかの間に、決着がつくとは考えにくい。
間に合うはずだろう。間に合わせてみせる。
最悪一体は無理でも、残り一体ぐらいは・・・

魔理沙は、グランチャーと接敵するまでの残り僅かな間に、椛が伝えてくれたことを、霊夢と輝夜にも伝達していた。

「さっき椛が来た！戦闘はまだ続いてるそうだ。ブレンも無事っ、間に合うかもしれない・・・」

そんなことを言っている内に、広大に広がり、そして流れていた荒野、あるいは草原の先、地平線の向こうから、鬱蒼と茂る木々が姿を現した。
一本見えれば、そこからは、まるで大地が緑色の菌か何かに侵食されるかのように、あるいは、緑色の液体が満ち満ちたバケツを横に倒し、液体が床に広がっていくかのように、森が一面へと広がっていく。
気がついた時には、もう足元は緑色一色になって、荒い毛並みの絨毯のようになっていた。
魔法の森に到着したのだ。やはり、三分などというものではなかった。

そうして、加速の重力に耐えながら前方を見た魔理沙の眼に、それは映り込む。
遠方に微かに見える、豆粒のようないくつかの影。
ブレンの頭上、はるか高く、森の木々からすれば、１ｋｍほども離

れていそうな場所だ。
三つ・・・いや、五つある。

違う。
今、その内のひとつが、豆が弾けてポップコーンにでもなるように、ポンと白い塊になって膨らんだ。
あの影はアンチボディ、そして、膨らんだ白い塊は、爆発の煙。

魔理沙が脳内で呻くよりも早く、輝夜の声が聞こえてくる。
（間に合った！でもやられたぁ！）
「いけぇーーーっ！！」
このままでは、残りのひとつの影も、同じようにされてしまう。
魔理沙は雄たけびを上げ、加速の勢いをそのままに、ブレンを残る三つの影、グランチャー目掛けて突っ込ませようとした。
その時だった。
ブルブルと、仲間の死に感化されたように嘶（いなな）くマリサブレンのすぐ傍に、ハクレイブレンが躍り出た。
そうして、すぐさま戦闘を始められるよう、ブレンバーを即時射撃の態勢に構えていたマリサブレンの下方へと回り込み、胸を突き合わせるようにする。
地面に背中を向けながら、ハクレイブレンもまたブレンバーを構えた。
二体のブレンが構えたブレンバーの銃身が触れ合い、カンッ、という乾いた音を響かせる。
真っ直ぐに突きつけられた銃口は、同じ場所を向いていた。

突然のハクレイブレンの行動に驚き、魔理沙は、
――――これは・・・っ！――――と胸中で叫んだ。

それに応えるかのように、霊夢の声が響く。

（新しい戦法を生み出したって言ってたわね・・・いくわよ！）
「あ・・・あぁ！」
（狙いはあの紅いヤツ、咲夜が乗ってるっていうグランチャー！）
「分かってる！タイミングはこっちに合わせてくれ！」

咄嗟のことであったが、二人はまるで示し合わせたように心を決め、互いの意識を同じことに向けた。
まるで機械のように動作の揃った二体のブレンが、ブレンバーの照準を定め直す。
霊夢と魔理沙の意識が、ブレンの動きに反映されているからこそだ。

ブレンを一体撃破し、続けざまにもう一体を撃破しようと、牽制のチャクラ光を放つ深紅のグランチャー。
その動きは、余裕を持つゆえか、緩慢である。ほとんど動いていない。
マリサブレン達の加速は、まだ続いている。みるみるうちに近づいてくる敵の姿。
単なる点のようだった影から、四肢が生えてくる。

魔理沙と霊夢のオーガニックエナジーが、混ざり合い、高まり合い、そして一点に収束される。
「3・・・2・・・1・・・チャクラエクステンション！」
（いけよやぁーっ！）

第十一話　その3

（さ・・・三体二だって、ブレンがいれば。こんなヤツら・・・・・・や、やっつけてやるっ！・・・わっ？・・・――）

断末魔の声・・・にもならない声と共に、背後から早苗のグランチャーの放つ斬撃に腹部を真っ二つにされたブレンパワードが、白い爆煙の雲へと姿を転じる。

誰かも、妖怪であるかも妖精であるかも分からない者（人間ではないだろう）の魂も、それと一緒に、弾けて吹っ飛んでいったろう。

もう一体のブレンパワードに乗っていた妖怪、朱鷺子は、張りつめて、今にも切れそうだった糸のようなもの。

突然襲われたとしても、同じ境遇であるもう一体のブレンパワードと一緒に戦えば、なんとかなるだろうという、その場しのぎの勇気だけで保たれていたものが、ぶつりと音を立てて千切れるのを感じながら、このブレンと出逢った当時のことを走馬灯のごとく思い出していた。

今日も、森のはずれにある雑貨屋（？）の香霖堂に行って、そこの店主の顔を見ながら、本でも読もうかと森の中を歩いていたら、生い茂る木々の間に、ひっそり・・・としているつもりでも、まざまざと見せつけるようにはっきりと大きな円盤が隠れているのが見えた。

そうすると、円盤は突然朱鷺子の前に飛んできて、回転しながら光を発し、そこからブレンパワードが姿を現した。

単なる一妖怪であり、妖怪らしい言い方をすれば神出鬼没である彼女は、文の新聞を読んでいない。

なので、初めて見るブレンの姿に、興味をそそられつつも恐れを抱いていたが、実際彼の者と触れ合ってみると、なにも恐ろしい存在ではないことが分かった。
香霖堂へ行くのは、今日のところはやめにした。
まずはこのブレンと仲良くなって、それから、新しい友達ができたと行って、あの人・・・霖之助に紹介してやるのだ。
そうして、ブレンと一緒に、ブレンの身体の中で、香霖堂の本を読むのだ。

そうやって、ブレンと心を通わせた次の日だった。
ブレンと共に、改めて香霖堂に行こうとした、その矢先だ。
ブレンと似ている姿をしている巨人、即ちグランチャーが現れ、彼の者達に追われるもう一体のブレンが助けを求めてきた。
友達の友達を守るために立ち上がり、そして、今にいたる。

自分が助けようと思った友達の友達は、今はもう石灰の粉末のようになって、宙に漂うだけ、そして、その友達の友達の、その友達も、姿が見えない。
一緒に煙になって消えたのか？
どこに？
煙になったって・・・じゃぁ、あの白い煙の中に、一緒に溶け込んでいる？
身体が、粉になって・・・

「・・・あ？・・・ぁぅ・・・」
こんな気持ちは初めてだった。
この前、何だかよく分からない人間に虐められた時だって、こんな気分にはならなかった。

身体が、まるで二つに裂けてしまいそうな気分だ。
いや『しまいそう』、じゃない、きっとこれから、そうなってしまうのだ。
粉になっていって死んでいった誰かさんのように、お腹を二つにされて、パンッと弾けて死んでしまう。
ブレンも、自分も。

スリットウェハーに押しつけるように背中をつけながら、朱鷺子は身体を震わせた。
すがりつくように溝の入った柔らかい壁面にあてられていた右手のひらもまた、五本の指をそれぞれ別の生物のように震わせていた。
朱鷺子の震えに合わせて、スリットウェハーも揺れる。
ブレンの身体も、一緒に震える。
恐怖を共有するかのようだ。

眼の前でソードエクステンションを突きつけてきた深紅のグランチャーが、決して眩くなく、激しくもなく、しかし、確かな熱と殺意を孕んだ光を撃ち放つ。
それが、ブレンの胸に直撃する。
しかし、チャクラシールドを展開していたらしく、放たれた光は、拡散しきれない熱で装甲を僅かにやきつつも、ブレンに致命傷を与えることはなかった。

だが、朱鷺子の震えはより大きくなる。
彼女の心は紛れもなく、このオーロラのような光に貫かれ、苛まれていた。
「・・・ぁ・・・ひぅ・・・っ」
悲鳴もでない、喉に何かがつっかえて、声を押しとどめているようだった。
そうしてそのつっかえている何かが、下の方へ落ち込んでいくので

は、なく、激流に逆らう鮭の川上りのように、どんどん上の方へと上って来ようとしている。
喉が押し広げられるように息苦しくなる。
この押し広げる力が・・・恐怖が、後少し強くなった時、朱鷺子は死ぬのだ。

※

（ふっふふ～ん、こいつ、怯えていますねぇ）
早苗の、調子に乗った声が聞こえてくる。
それに藍が、
（油断はしてはいけない）と、落ちついた返事をするが、彼女もそれを実践できているかどうか・・・

一体のブレンを撃破した咲夜達のグランチャーは、恐怖に呑まれ、ほとんど動けなくなった残る一体のブレンの周囲を、嘲り笑うようにゆらゆらと旋回していた。
咲夜のグランチャーは、敵が妙な行動を起こさないよう、一発は直撃させつつも、後は命中しないようソードエクステンションで牽制を放ち、ブレンを掠めるようにチャクラ光を通過させる。
流れ弾が森の木々に浴びせられるが、どうやら空中で拡散している間に威力を失っているらしい。
戦場の高度も、森よりもそれなりに高いので、こうなることは分かっていた。
ブレンの放つ攻撃は、あくまでもオーガニックエナジー、生命が生きるためにエネルギーだ。

それを収束させ、熱量を持たせているだけにすぎない。
拡散してしまえば、ソードエクステンションの光も、生物には大きな影響を及ぼすことはない。

早苗と藍のグランチャーは、自分達の華々しい初勝利に酔いしれるように、残るブレンを嘗めまわすように、嬲るように威圧している。
ブレンをいい子だと言っていた早苗も、どこへやらだ。
彼女もそろそろ、グランチャーの性質に影響を受け始めたのだろう。
今の彼女に、少し前の自分自身を見せてやりたいところだ。
まぁ、彼女のことだし、何も感じないだろうが。

その様子を見て咲夜は、いっそ憤りに似たものを感じ、
――やはり、こういう連中と協力などはしたくないわね――
などと胸中でひとりごちた。
ブレンに同情するのではない。
誇りを感じない早苗達のグランチャーに、幻滅しているだけだ。

そうして彼女は、その呟きと共に胸の内を過ぎった嫌な予感に、眉をひそめた。
いい加減、終わらせておいた方がよさそうだ。

咲夜は、勝利に酔いしれる二人に、落ちついた声で、
「止めを刺す。貴方達のどちらかがやりなさい」と伝える。
同時に、グランチャーのオーガニックエナジーを高め、さらに高密度で収束されたソードエクステンションを、ブレンの右脚目掛けて放つ。

吸いこまれるように伸び、チャクラシールドを破り装甲に突き刺さったチャクラ光が、その内側にあるスリットウェハーを弾けさせ、膝の裏あたりから爆発を生じさせる。

肉体が弾ける勢いのまま、大きな金槌で打ち付けられたようにがたりと揺れるブレン。
すでにその右脚は、身体と繋がってはおらず、ゆっくりと回転しながら、一面の緑の中へと落ちている最中だった。

オーガニックエナジーに乗って、このブレンに乗っているであろう者の悲鳴が聞こえる。
喉につっかえていたものが、嘔吐するように吐き出された、悲痛な声だ。
（あっ！・・・いやだ！助けてっ！霖之助さん、死にたくない、助けてぇっ！）
その声を聞く中でも、咲夜はただ冷ややかな視線を、右脚を吹き飛ばされて尚、なんとか体勢を整えようとするブレンに向けていた。
すでに彼の者より、戦う気力は失せている。
後は、この一撃を合図とした早苗、あるいは藍が、止めを刺すだけ。
この悲鳴を発した妖怪も、遠い忘却の彼方へ吹っ飛んで、正真正銘の幻想になってしまうわけだ。
それは残酷で、かつ悲惨なる認識であるはずなのに、咲夜はそのことを考えると、思わず口角を釣りあげずにはいられない。

早苗達のことを笑うこともできないな・・・
前回の雪辱を晴らし、ブレンを打ち倒すことができた。
そしてその優越感は、ひとしお・・・並み大抵のものではなかった。
この調子で、早苗達が形はどうあれグランチャーによる戦いに慣れ、戦闘のノウハウというものを積んでいけば、こちらの戦力はさらに強力になる。
オルファンを殺めるのも、もう遠い話ではなさそうだ。

そんなことを脳裏で考えながら、眼前のブレン、そしてその宿主である妖怪の生命が滅びゆく様を眺めることにした咲夜。

だが、その時だった。
ブレンの死をこの眼で見ようと身構えていた脳細胞に、鈍く、ちくりと刺すような感覚があった。
その感覚は一瞬のことであり、咲夜が思わず、
「ぅ・・・」と呻きながら右手でこめかみの辺りを押さえるころには、痛みを伴ったそれは、すでに消えていた。
その代わり、じわじわと、微熱が頭の中を広がっているように、何か得体のしれない感覚が、新たに襲い来る。
湿った空気が顔にまとわりついて来て、肌を粟立たせようとする。

咲夜はこの感覚を、何故だか懐かしいものと感じた。
ほんの何日か前に、感じた気分であると。
だが、頭に広がった熱のようなものが、首筋を下り、胸のあたりまで広がっているその不快感は、いい感覚でないのは確かだ。
そうその感覚は、確かに以前感じた。
その時のことは・・・

脳裏に、あの甘ったるい、地霊殿の主の声が思い出された。
自分達が幻想郷を滅ぼすかもしれないのに、感情論に走っているあの声。
「・・・っ！」
咲夜は、こめかみを押さえることを止め、離された右手のひらを、背後のスリットウェハーにあてる。
柔らかい泥土（でいど）の中に手が埋もれていくような独特な感触が皮膚から伝わる中で、彼女は歯を食いしばり、グランチャーに、いち早くここから退避するように命じた。
この不快感の理由が、分かったような気がしたからだ。

いや、確かに分かった。
左方、斜め下から迫る、その眩い光を見れば、考える必要さえなかった。

グランチャーが、オーガニックエナジーを推進力とし、さらに高度を上げ、最大速度で上方へと逃れようとする。
放出されるオーガニックエナジーの余韻が、一瞬輪のような、ビードロというガラス細工を思わせるいろいろな色が混じり合った不思議な光を形作り、それは、その次の瞬間には消えてなくなっていた。

一瞬（０．２秒ほどだ）で７０ｍほどの距離を上昇したグランチャー。
音速を超えるほどの速度である。
戦闘中にこれほどの機動力を発揮すれば、さすがに自分自身の動きに自分でついていけないほどだろう。
だが、これほどの速度で逃げていなければ無事では済まないということを、咲夜は予想していた。

そうしてその予想は、的中することになる。
上昇を懸けたグランチャーの足元を、巨大な白い光が斜め上に奔り、天へと向かって通過する。
そう。確かに咲夜の抱いた不快感は、ちょうど数日前に感じたものと同じものであったわけだ。
そうして、下方から身体を突き飛ばそうとする、オーガニックエナジーの衝撃波も。
魔理沙がチャクラエクステンションと叫んでいた、その一撃だ。

足の裏から、何十ｍという高さから水面に飛び込んだような、ある

いは、下から巨大な壁に叩きつけられたような（やはり、まったく同じだ）衝撃に、

「うぐっ！」と苦悶した咲夜が、グランチャーの機体と共に、さらに上空へと突き飛ばされていく。

音速に達する加速に上乗せされ、このまま空を突き抜け、もう一度あの月の世界にまで旅立ってしまうのではないかとさえ思えるほどの加速がかけられるが、咄嗟に、空の青さを背に受けるかのように、通過していくチャクラ光を正面に見えるように体勢を整え、進行方向にオーガニックエナジーによる逆噴射をかけることで停止しようとする。

チャクラエクステンションから逃れるためにかけていた加速と同じものを、今度は地面に突っ込むつもりでかける。

「んうぅぅ・・・っ！？」

チャクラ光の余波に吹き飛ばされた時の数倍に感じる圧迫感が、咲夜の身を襲う。

音速の加速によるGと、それに逆らうためのGによる板ばさみ。サンドイッチだ。

彼女は思わず、眼をつむり、砕けそうなほどに歯を食いしばって苦悶した。

胃や肺が潰れそうなほどの重量を感じる。・・・そう、空気が重かった。

妖怪などが我がもの顔で飛んでいるその大気が、鋼鉄の塊のごとく咲夜に、『横から』のしかかってきた。

彼女の背中が、スリットウェハーの柔らかい表面へと、ずぶずぶと沈んでいく。

その間に、突然の膨大な光に驚愕した早苗の、

（うわっ？・・・なにこれぇーーーっ！）という驚嘆がオーガニックエナジーに乗って胎内に響くが、それも聞こえているようで、聞こえていないようだった。

ある程度距離を取ることはできたので、オーガニックエナジーが光に巻き込まれて吸い取られるようなことがないのが、幸運であった。

チャクラ光に吹き飛ばされることでさらに生じた加速も押し殺さなければならなかったので、グランチャーが完全に静止できたのは、二秒ほど後でのことだった。

その間にも、深紅の機体は空へと向けて進んでいたので、身体を苛む重さが無くなったのを確認した咲夜が眼を開けるころには、煌々と輝く白い光は、大分遠いところに見えていた。

もう、１００m以上は離れているのではないか？

それでもその光は、一切和らぐことを知らず、まるで眼の前にあるかのように咲夜の網膜を焼こうとした。

差すような、痛みを感じるほどの白光に、眼を細めて、喰いしばった歯をそのままにするしかない咲夜。

そうして今度は、先程の早苗の声に（聞こえたかは分からないが）続いて、藍が、さすがに戦慄した様子で叫ぶ。

（咲夜！これは．．．っ）

その声を聞いて咲夜は、そう言えば、まだ藍にも早苗にも、このチャクラエクステンションというらしい一撃について説明していなかったことを思い出した。

だが、今から説明しようにも、その暇はないだろう。

この一撃が、今しがたこちらを襲ったということは．．．即ち。

強力な光でも、永遠に輝き続けるわけではない。

太陽ですら、それこそ天文学的な時間が経てば、その光を失う。

咲夜の眼の前を通過する、ソードエクステンションに比べればあま

りに、あまりにも狂暴なこの光も、やがて段々と細い、線のような弱い光へと転じていき、遥か彼方、それこそ空の向こうにまで、拡散しながら去っていく。

その様子を見送ることもせず、グランチャーはその視線を、光が打ち出されたその根元、不快感を放出していたその源のある方向へと向けた。

同時に、スリットウェハーに映し出された光景を、咲夜は、睨みつけるような鋭利な眼光で見つめる。

が、その鋭く、かっ、と見開かれた眼（まなこ）が、俄然、ナイフの刃のごとく細められる。

殺意に満ち、紅く染まった瞳には、グランチャーの眼前に躍り出る紫色の影が、鏡に映るかのように反射していた。

真っ赤な血の色にすらも飲み込まれない、より一層暗黒に近い紫の色が、咲夜の眼に突き刺さる。

忘れもしない。

この敵は・・・！

眼の前に現れたその姿は、あの時見せたものと、何も変わっていないようだった。

咲夜は、表情を、いや、全身の筋肉を強張らせながら、叫んだ。

「貴様はぁっ！」

そうして、紫色のブレンパワードが縦に振りおろしてきたブレンバーの斬撃を、ソードエクステンションを横なぎに振り払うことで受け止めた。

※

魔理沙達が地霊殿を発ってから、何分かが経過していた。
すでに戦闘は始まっているのだろうか？
グランチャーに襲われているというブレンは無事なのか。
戦う気持ちが萎え、魔理沙達についていくこともできなかったさとりは、こいし達と共にサトリブレンの傍にいてやる中で、こう祈る以外のことができなかった。
魔理沙達も、ブレンも、見知らぬ何者かも、皆無事に済んでくれることを。
だが、そのために自分とサトリブレンが手助けをしてやることができないということは、虚しいことだった。
これでは、何のためにサトリブレンが生まれてきたのかも分からない。
何のために、さとりが彼の者と共に生きているのかも分からないではないか。

さとりの表情は、眼に見えて沈んでいた。
ブレンの左足の踵の内側にもたれかかって、ただ宙空を眺めてぼーっとしているだけだ。
こいし達は、マリサブレンの無事を心配し、今もブレンの足元で、大丈夫なんだろうか？と口々に言い合っていた。
勿論、生気を失ったような表情をするさとりのことも心配だった。
だが、かける言葉が見つからなければ、声をかけることもできないのは、仕方がないことだ。

さとりは、ただ何も考えず、ブレンの踵にもたれかかっていた。
だが、ふと、こんなことをしているぐらいなら、彼の者の胎内に入

って、火傷を治す手伝いをしてやった方がいい、と思いついた。

地上から避難していた永琳達も、ようやく屋敷の中庭にまで戻ってきていた。

グランチャーの襲撃のことを想定して、今日のところは調査はやめておくことにしていた。

抜け穴へと戻っている中で見えた、遠くへと飛び去っていくブレンの姿に驚き、中庭に来て、サトリブレンを除いて全てのブレンがいなくなっている光景を見て、もう一度驚くこととなった。

すでに中庭にいたにとりと、何事か話をしているようだ。

そんなことは気にせず、しゃがみんだブレンが開けておいた装甲の上に乗り、こいし達の心配そうな眼差しを受けながら、胎内へと入るさとり。

彼女の姿が穴の奥に見えなくなると、その穴をも覆い隠すように、装甲も固く閉ざされた。

胎内へ入るなり、崩れるように尻餅をついて座り込み、スリットウェハーに背中を預ける。

暖かい熱を持った柔らかい感触が背中を伝って全身を包み込む。

さとりにとって今一番救いとなるのが、ブレンのこの優しさであった。

だが、さとりには、今この瞬間においては、この感覚に素直に身を委ね、何も考えずにまどろみの中に誘われることはできなかった。

さとりは、どうしても考えてしまう。

ブレンのこの火傷も、いずれは元通りに治るだろう。

しかし、やがてそうなったとしても、自分はもう、皆を助けるために戦うことができないだろう。
ブレンを傷つけたくもないし、ブレンが傷つくことで、その苦痛を自分が感じることも嫌だった。
ましてや、ブレンが死ぬようなこと、そして、自分もその死に巻き込まれた時のことを考えると、身震いすら起こる。
身体が焼かれ、蒸発し、どこともいえないところに飛んで行って・・・そうして、そんなことを感じて、認識することさえもできなくなる。
そのことは、恐怖だった。
その恐怖に打ち勝つことができない自分を自覚したさとりは、そんな自分の弱さを正当化する理由を求め、考えた。
だが、思いつかない。

スリットウェハーの壁に囲まれる中で、力なく、眠るように座り込んださとりの独り言は、単なる現実逃避の域を脱することができなかった。
しかもそれが、より一層自己嫌悪の念も強くしていく。
現実から眼を背けようとする自分を、愚かしく感じるのだ。

「・・・大体・・・どうしてブレンとグランチャーは戦わなければならないの・・・そんなこと、誰が決めたというの。オルファンさんが?それとも・・・ブレン自身が?・・・・」

ブレンは、分からないと言った。
自分達が何故戦うのか。
そうして、戦った先に、何があるのか。

「・・・そうよ・・・戦う理由も分からないのに・・・戦わなければ死ぬわけでもないのに、戦う必要なんて・・・ないのよ・・・・・

・そうでしょう？みんなで仲良く生きていけるのなら、それが一番いい。戦うことなんて・・・」

ブレンは、さとりの言葉に同意していた。
確かに、戦うことは怖い。
何も気にせず、他のアンチボディと生きていけるのなら、それが一番幸せなことだと思っていた。
だが、そんな中でブレンは、このさとりの言葉も、決して正しいものではないことも知っていた。

「分かってるよ・・・みんなと仲良く生きていくためにも、みんなを守らないといけない。みんな死んでしまえば、一緒に生きていく人もいなくなる・・・」
理由も何もないけれど、戦わなければならない以上、みんなの生命は脅かされる。
幸せに生きたいのなら、それを守るために、戦わなければならない。

さとりは、力なく伸ばされていた足を引き寄せ、背中を丸め、両膝を抱えて座り込み、弱々しい声で呟いた。
「分かってるけど・・・だって怖いもの・・・ブレンも感じたでしょう？私なんかより、ずっと強く・・・身体が焼けていく感覚を・・・もうあんな気分は、味わいたくないでしょう？戦わなければいけないなんて、そんなことない・・・戦うだけが・・・戦うだけが貴方達の全てじゃ・・・」

最後の言葉を吐き捨てた時、さとりの中で、何かが芽生えたような気がした。

戦うことが、全てじゃない。

その言葉が、心の奥の方に、とても小さな、見ることも、触ることも、感じることもできないほどに小さな何かを・・・

さとりは、俯き、膝にの間に隠れて見えなかった顔を上げ、僅かながらに涙が溜まった眼を薄く見開き、前を見た。

そうして、自分の言った言葉を、もう一度、確かめるように声に出す。

「戦うことだけが、ブレンの全てじゃない・・・アンチボディの、全てじゃない」

そうして、その言葉が意味することを、脳裏でまた呟く。

――・・・やれることは、戦うことだけじゃない――

戦う気持ちは萎えた。

だが、ブレンを、オルファンを、ひいてはグランチャーでさえ、認め、愛していきたいという気持ちは、さとりの中から消えてはいなかった。

そうして、さとりは、もう一度だけ自分と、そしてブレン心を確かめようと、顔を上げたまま、薄く開いた眼をもう一度深く閉じる。

その時だった。

彼女の心の中で、いくつもの琴線を揺らして不可思議な音色を鳴らすかのように、声が響いた。

それは、彼女の能力によって聞くことのできる心の声でも、語りかけてくるブレンの声でもない。

さとりに自らの声でもない。
彼女の魂に直接語りかけてくるような・・・とても聞き覚えのある声だった。
確かな好意と共に認識される、穏やかでありながらどこか不気味であり、不安になるようで心安らぐ声だ。

――――オルファンは、貴方のような臆病者も嫌いではない・・・あの娘が待っている――――

さとりは、はっと眼を見開いた。
そうして、自分の右肩が、ポンポンと叩かれるのを感じる。
咄嗟に顔を右へと向けた彼女は、思わず息を呑んだ。

自分のすぐ隣に、八雲　紫が座り込んでいたからだ。
こちらに身を寄せ、笑みを浮かべながら、右手でもう一度ぽんぽんと肩を叩いてくる。
その姿にさとりが気づいたことを確認すると、彼女の視界の中で、ふっ、と微笑を浮かべた彼女は、さとりの方に寄せていた身体を離すと、気楽そうにスリットウェハーに背中を預けて、座り込んだ。
長いスカートが、いくつもの溝が入った金属板の上に覆いかぶさっている。

まるで初めからそこにいたかのように、さとりの眼の前に姿を現した紫。
そうして、彼女がその姿を現す時はいつも、何かがある。彼女が、何かを伝えてくれる。

さとりは弾けるように、今度は逆にこちらから紫の方へ身を乗り出すようにして、抱えられていた膝を床面につけ、伸ばした左腕を、スカートの奥に隠れている紫の太股に触れるようにし、右手を背中

から回して右肩にしがみ付き、顔を彼女の横顔が視界いっぱいに広がるほどに近づけた。
そうして思わず、彼女は何の意味もなく、その名を呼んでいた。
「ゆ・・・紫さん！」
彼女の頬と自分の頬がくっつきそうなほどになっているさとりの顔は、興奮した様子でほんのりと赤くなり、熱気を孕んだ呼気が、喘ぎ喘ぎに口から吐き出されていた。
この興奮にも、理由はある。
紫は、今のさとりの苦悩を吹き飛ばし、やるべきことを教えてくれるかもしれない。
そうでなくとも、戦いへの恐怖を拭い去り、覚悟を与えてくれるかもしれない。
だからだ。
さとりは、自分のこの空虚な気持ちを消し去ってくれるという希望を持って、紫の身体にすがりついていたのである。

だが、彼女は知らない。
紫が何のために、この場に現れたのか。

紫は、熱気を孕む潤んだ眼でこちらを見つめるさとりに、頬笑みを浮かべながら向き直す。
唇同士が触れ合うのではないかと思われるほど間近に迫ってしまえば、もう、さとりが紫の顔で覗うことができるのは、じっとりと染みつくような視線を向けるその眼だけになっていた。

「はぁ・・・はぁ・・・・・」
何でもいいから、何か、何か助けになるようなことを言ってほしい。
そんな期待を込め、身体中を熱が駆け巡る。

さとりは、荒くなった自分の呼吸の音を、まるですぐ耳元で吹きかけられているかのようにはっきりと聞いた。

その時、妖しい光を湛える紫の眼が、より一層妖艶に笑んだような気がした。

同時に、紫は何故だか、彼女にすがりついていたさとりの両手をすり抜けて、どこかへと吸い込まれるように、離れていこうとしていた。

確かにはっきりと彼女の右肩を掴んでいたのに、太股を這わせるように手で触れていたのに、まるで水の流れに手をつけたかのように、彼女はするするとさとりの身体から離れていく。

まるで手品のように抱きつくさとりからすり抜けたのも奇妙だが、それ以上に、この狭いスリットウェハーの胎内で、どこへ離れるというのか？

その答えは簡単だった。

紫は、自分の背後に境界の裂け目をつくり、そこに自分の身体を入れていた。

先程まで柔らかく暖かい壁にもたれかかっていたはずの背中が、吸い込まれるようにスキマの中へと流れていく。

やがて、彼女の身体の後ろ半分が、まるで真黒な液体に浸かるかのように、スキマの中に入り、見えなくなる。

そのままずぶずぶと、仰向けになって底なし沼に呑まれるように、ゆっくりと紫の全身が、さとりの前から姿を消そうとする。

だがさとりは、それに驚愕するよりも前に、もう一度紫に、今度は飛びつくようにしてしがみ付いた。

両腕を腰に回して、離れないようにがっちりと、力を込めて抱きしめる。

すると、紫の背中の方に回ることで、彼女の身体と一緒にスキマの中へと入りこんだ両手に、何か得体のしれない、寒さとも熱さとも、湿っているとも、乾いているとも、どろどろしているとも、固いとも、纏わりつくとも、流れていくとも分からない、あまりに得体のしれない感覚に見舞われた。

ありとあらゆる感覚が曖昧でありながら、ただひとつはっきりと感じることができるのは、気持ち悪さだった。

この世のありとあらゆる悪意を塗り込んだ手で触られたような感覚に、思わずさとりは、紫の腹に顔を埋めながら、きつく眼を閉じ、

「ひぃ・・・っ」と、悲鳴を上げた。

だがそれでもさとりは、スキマの中に突っ込んだ手を離したりしない。

さとりにとって、紫のこの行動はあまりに意外なものだった。

まだ何も、一言もしゃべっていないではないか。ただ、姿を現しただけだ。

だというのに、何事もなかったようにすぐに姿を消すなどと・・・

これでは、何の理由があってこの場に現れたのか分からない。

これでは、気持ちの整理も、覚悟もつけられない。恐怖心に打ち勝つこともできなければ、これから何をすればいいのかも分からない。

このままだと、あまりに救いがない。

さとりは何としても、紫から、何か一言でも言葉を投げかけてもらおうと思った。

心を決めることができるだけの、大切な一言を・・・

だからこそ、一度しがみ付いたこの腕は、何が何でも離さないつもりだった。

それがどれほどみっともなく、恥知らずなことだろうと、今はもう、そうしなければどこにも進めないから。

ほっそりとしているのに柔らかい紫の腹に顔をうずめていたさとりは、その顔を精一杯上に上げながら、叫ぶように呼びかけた。
「これじゃぁ、あんまりじゃないですかっ！紫さん、貴方・・・どうして貴方は今になって私に・・・」

最悪、紫が何も言う気がなくこの場に現れたとしても、せめて、それがどうしてなのかを知りたかった。

だが、さとりがしがみ付いてもなお、そのまま彼女ごとスキマの中へと潜り込もうとする紫。
彼女はただ、背中に回ったさとりの腕の感触を確かめながら、こう呟くだけだった。
「貴方の望みは、もう叶っている・・・貴方の行くべき道は、すでに見えているはずでしょう？」

その声に、さとりは首を上げ、上目づかいに紫の顔を覗った。
顔が持ちあがるのと一緒に、何故だか口もあんぐりと広げられる。
その顔を、俯いて見返した紫。
その身体はすでに、半分以上スキマの中へと入りこんでいる。
あともう少しすれば、彼女は、中に何があるのかも分からないこの漆黒・・・とも形容し切れないほどに奇怪なる空間へとその身を浸からせる。

そうして紫は、笑みを浮かべたままさらに口を開き、皮肉っぽい口調で言った。
「貴方は、少し前の自分の言葉すら、思い出せないのかしら？そんなことでは、自分のペットを笑うことなんてできないわねぇ」

「・・・っ」

さとりの肩がぴくりと震えた。
彼女の胸中で芽生えたもの。
それを喚起した言葉。
それが今、紫の声によって、思い出されたからだ。

戦うことが、ブレンの全てではない。

その言葉を、紫は思い出せといっているのか？
それが、何かに繋がると。

第十一話　その４

見開かれたさとりの眼に、小さな輝きが宿る。
それは、瞳に光があたり、それが反射することによる光ではない。
さとりの中にある生命力、いうなればオーガニックエナジーが、呼び起こされ艶やかに躍動することにより生まれた、魂の灯（ともしび）だ。
確かに今、さとりの心に小さな火が灯った。
あんぐりと開いた口を微かに動かし、さとりは、囁くような声で言う。
「答えは、とうに見つかっていたと・・・」
紫の身体にしがみ付いていた腕の力が、俄かに弱くなった。

突然の動きだった。
その時を待っていたかのように、またしても紫の身体がさとりの腕からすり抜けて、どぼんと水に浸かるかのように、スキマの中へと隠れてしまう。
紫の動きは決して乱暴なものではないはずなのに、するするという音を立て、ぐっ、と折り曲げられていたさとりの腕が、不思議なほど緩やかに真っ直ぐに伸ばされていく。
全てを自らの色に塗りつぶす漆黒の色に沈み、紫の白い肌や金色の神、直垂（ひたたれ）のような（違うかもしれないが）独特な形をした紫色の着物が、突然眼の前から姿を消す。
残っているのは、漆黒の池からぬっ、と伸びている、スカートの裾と、そこから覗く細い足だった。
そしてその足も、まるで引きずられるように、続いてスキマの中へ

と入り、これまでがただの幻だったかのように見えなくなる。

「あ・・・っ」

さとりは思わず声をあげ、スキマに沈んだ紫の身体を引きずりだそうと、もう一度彼女の身体にしがみ付くべく、眼の前の漆黒の奥へと、さらに腕を突っ込んだ。

だが、二の腕までしか浸かっていなかった腕が一気に上腕まで潜り込むと、より一層、スキマの内部に満ち満ちている気持ち悪さは助長された。

全身を・・・肌の表面ではない。ちょうど皮膚と、その奥にある真皮という、肉と形容していい部分の間を虫がはいずり回るような感覚に見舞われ、さとりは思わず、悲鳴を上げた。

「あっ・・・あぁぁぁぁーっ！」

そして、これ以上身体を突っ込んでいくと、冗談でなく本当に精神がどうにかなってしまいそうだった。

これぱかりはどうしようもなく、スキマに突っ込んだ腕を引き抜くように、身を後ろへと引くさとり。

床面についていた膝をもう一度上げ、足を曲げる。そうして、靴の踵をスリットウェハーの溝に引っ掛けて、思いっきり伸ばす。

そうすれば、別に何かに押さえつけられているわけでもなかったさとりの両腕は、意外なほどにあっさりと空間から引き抜かれた。

それと同時に、両腕を通して全身に隈なく巡っていた虫唾もある程度は収まる。まだ多少・・・いや、かなり残ってもいたが。

異様な感覚の余韻で身体中に鳥肌がたっているさとりは、身震いをひとつ起こして、次いで冷や汗をかきながら両手のひらを眼前に広げ、眺めた。

特別何かが起こっているわけではない、何か液体とか、そういう異物がこべりついているようなこともないし、スキマから出た今では、痛くもかゆくも、熱くも冷たくもない。

まったく異常はないようだ。

しばらくすると、まだ皮膚の内側で蠢いていた虫もすっかりいなくなり、全身にたっていた鳥肌も引いてきた。荒くなっていた呼吸も落ち着いてくる。

できるなら、先程のことはこのままさっぱり忘れて。思い出したくもなかった。

思い出せば、また無数の鳥肌がたち、薄皮が痒くなるだろう。

とにかく、両手が無事である以上、スキマの中の異様な感触は早く忘れることにしつつ、さとりは次いで、広げた手のひらの向こう側、未だ空間の中にあり続けている空間の裂け目に眼を向けた。

いつもなら、紫が消えると同時に一緒に閉ざされ、消滅するはずなのだが・・・

いや、もしかしたら・・・

さとりは、両腕を引っ張りだすために、スキマから少し離れてしまった身体を、もう一度その漆黒の面へと近づけた。

ぽっかりと開いている（この表現ですら適切か分からない）漆黒の空間は、どうあってもその内部を覗き見ることはできそうにない。

いや、うっすらと、何か眼のようなものを見ることもできるが、それも、まるで表面に張り付けられたもののような空虚さを感じる。

単なる模様、ホログラムのようだ。

この奥に去っていたってあろう、紫の姿を見ることも、当然できない。

だが、まだ消える気配を見せないスキマを見ていると、また、彼女がここから顔を出しそうな気がした。

結局のところ、さとりの希望は無事紡がれた。
紫の言葉によって、さとりの中にひとつの心の動きができていた。
彼女のおかげで、さとりは自分のやるべきことに気づく、そのきっかけを得た。
しかしそれは、紫にばかり頼って、自らで考えることを放棄していることを示しているようで、さとりは自分自身を情けなく思う。
だが紫は、さとり自身の中で、でに答えは見えている、とも言っていた。
さとりの中にある意思は、紛れもなく彼女自身が思考し、得たものである、ということを教えてくれているのかもしれない。
だからこそ、これは決して、他人に頼った結果ではないのだと。
さとりは久しぶりに、自分が楽観的な考えを持つことができたような気がした。

そして彼女には、もう紫に対して聞きたいことはなかった。
今まで彼女に対し聞こうと考えていた問いの数々も、すべて心の奥にしまい込むことにした。
これ以上何かを聞くことは、それこそ厚かましい、他者に依存する行為であると思えたからだ。
他者から答えを得ず、自分なりで考えて、行動する。
これからは、そうしなければならない。
紫もきっと、その事を望んでいるはずだ。
そのことを、少し前にも思っていたではないか。

それが、ブレンが決して戦うだけの存在でないことを信じるさとりが、一番最初に導きだした、自分なりの考えであった。
紫の真意が別にあろうとも、そんなことは関係なく、自分自身の気持ちに従って考えたこと。

一方で、聞きたいことはなくとも、言いたいことはたくさんあった。

紫に対し、まず言わなければいけないこと・・・
それは、感謝の言葉だ。

さとりは、真黒な、深海の中に穿たれた底なしの洞穴のようにその先を覗い知ることができないスキマの入口に、手をかざし、近づける。
またしてもあの異質な感覚を受けるのは嫌だったので、決して表面に触れたりせず、寸前のところで止めながら、彼女は、聞いているのかも分からないが、紫に対し、伝えた。
「もう、貴方のご助言は、求めません・・・これからは、私なりにやってみます・・・私は、ブレンとオルファン・・・そしてグランチャー。みんなの幸せを求めてみます。そのためにもまず、オルファンと心を通わせます。必ず・・・・・・紫さん、ありがとうございます」
返事はこない。
だが、スキマが閉ざされていくことも、まだない。
さとりには、例え返事がなくとも、自分の声が紫に聞こえているような気がした。
だからこそ、続けて、笑顔を浮かべながら、もう一つ言っておきたいことを言う。
「ですけど、これからもまた、顔を見せてください・・・今度はもっと、いろいろな話をしましょう・・・私は、貴方のことを好きになれそうです・・・」

「あら。私は貴方のこと嫌いよ・・・能力が不気味だからね」
突然だった。
左耳のすぐ傍から静かな声が響き鼓膜を揺らして、そよ風のような息が耳朶にかかった。
耳元で、誰かに囁かれたのだ。
その『誰か』が誰なのかは、考えるまでもなく分かった。

「んぅ・・・・・えっ！？」
生温い息が耳元にかかる感触に、びくんと身震いしつつ、慌てて後ろを振り返ったさとりの眼には、新たに出現したもうひとつのスキマ、そしてそこから、上半身を胸ぐらいまで出している紫の姿が見えた。
びっくりした様子のさとりの表情を、また彼女と接吻のひとつでもしそうなほど近くで眺めていた紫が、
「あはは！」と、子供のような笑い声を出して、すっと身を引き、スキマの中へと隠れる。

その様子を、呆然とした様子で眺めるさとり。
やはり、もう一度顔を出してくれたようだが、わざわざあんな風に脅かすことはないだろう。
それに・・・『嫌い』？
さとりは、紫の言ったその言葉が、その小さな胸の内に潜り込んで、心臓の中にしこりとなって埋め込まれる気分を感じた。

「嫌いって・・・」
微かに呟いたさとりの声に、今度も、後ろから返す声が響く。
「えぇ、嫌いよ」
「あ・・・っ！」
慌ててまた後ろを振り返ると、というか、後ろを向いていた顔を前に向け直すと、最初に裂けていたスキマから、上半身の一部分だけを、まるで右脇から腹部にかけて斜め下に切断されたようにして出しながら、スキマの縁に左肘をひっかけてもたれかかっている紫の姿が見えた。

神出鬼没というか、荒唐無稽というか、そんな紫の行動と、彼女の語る言葉に、戸惑いを隠しきれず、押し黙り、その場で固まってし

まうさとり。
さとりは、その能力故に嫌われ者である自分のことを理解はしている。
だがそれでも、彼女がこの世で一番嫌いな言葉は、他人が口に出す『嫌い』という言葉であった。
それを今、紫が口にしている。

「どうしてなんです？・・・能力だからですか？・・・そう生まれてしまったから・・・」
眼に見えて辛い表情をして、そう呟くさとりに対し、紫は、彼女の心をただ一言で傷つけたことに、一切悪びれる様子はなかった。
謝罪することも、慰めの言葉を語ることもない。
ただそれらの代わりに、こんな言葉をさとりに返すだけだ。
「でもその代わり、好きだという人もたくさんいるでしょ？」

「・・・え？」
急な言葉だった。
だがその急な言葉でも、さとりに胸にすんなりと、乾いた砂に染み込む水のように入っていった。
頭の内側に、いくつかの顔が浮かび上がってくる。
こいしや、ペット達、ヤマメ達地底の妖怪だ。
魔理沙や輝夜、妹紅達、にとりや文達の顔は、すぐには浮かばなかった。
『そうだったらいいな』という言葉が、彼女らの顔と一緒に、少し遅れて浮かんでくる。

さとりの表情から、辛い色は消えていた。
その代わりが戸惑うような顔だったのだが、先程の沈んだ表情に比べれば、ずっと穏やかな表情だ。
事実、穏やかなのは表情だけではなかった。

ぼんやりとした顔で紫を見つめるその眼を見つめ返して、彼女は言う。

「そういう人達のことも、考えればいいのかもね・・・世の中、本当にひとりぼっちになるということは、死ぬということなのだから」

「紫さん・・・私はあなたのこと、好きです」

「そ。後で幻滅しても知らないわよ？」

「しません」

しっかりとした口調で応えたさとりの声を聞いた紫は、身体を僅かに前へと乗り出して右の肘もスキマの縁につける。

そうして、指を組み合わせて、その上に顎を乗せ、言った。

「ふふ・・・・・どうでもいいかもしれないけどね・・・世の中上手くやっていくためには、嘘を見抜ける能力が要るの・・・貴方にはあるかしら？」

「嘘を・・・？」

さとりは、急に紫がこんなことを聞いてくるので、より一層戸惑い、きょとんとした表情を浮かべた。

が、次いで脳裏で、彼女が先程耳元で囁いた言葉が、反趨される。

それこそが、この紫の発言の理由であり、意味であった。

彼女が言いたいことが、分からないさとりではない。

彼女の表情が、ぱっと輝いた。

「紫さん・・・大好きです・・・」

その柔らかい笑顔と、心の底から安らいでいる声に、紫は眼を細め、にこっ、と同じく柔らかい笑みを浮かべる。

その眼がもう一度うっすらと開かれると、最後に彼女は、こう語っ

た。

「世の中、価値もなく生み出されたものなどは、ない・・・また会いましょう」

「はい」

さとりも、もう呼びとめるようなことも、みっともなくすがりつくような真似もしなかった。

今度こそ、彼女の下を去るべくスキマの中へと沈んでいく紫の姿を、ただじっと見送った。

再び彼女の身体が、漆黒の池に沈み見えなくなると、改めて空間に出現していた二つの裂け目も、ジッパーが閉まるように閉ざされ、消滅する。

やがて、初めから何も存在していなかったかのように、その形跡すら残さず去っていった紫を追うこともせず、さとりは、スリットウェハーにあぐらをかいて座り込み、やや猫背気味になりながら、もう一度両手を眼の前で広げてみた。

痙攣するように、ほんの僅かに十本の指先が揺れる。

それらの全てにまで染みわたるように、広げた両手が、ほとんど赤色に近いほどに濃い桃色に彩られていた。

熱く流れる血潮を現すように。

さとりは口をつぐみ、今までの気弱そうな彼女の顔からはあまり想像することができないような、凛々しい眼つきで、その赤く染まる生命の色を見つめながら、広げた両手を、ぎゅっと力強く握りしめた。

そうして、眼の前にできた、石のように固く・・・心の内の決意を示すように固く作られらた拳の向こうに、スリットウェハーから見える外の景色を見た。
そこには、こいし達もいたし、オルファンの異変と共にやってきたいくつもの人妖の内の、一部分もいた。
一緒に、例え今しばらくの間であろうとも、幸福に生きていたいと思える者達だ。
彼女らを守るためにも、戦わなければいけない。
それに、戦う以外にも、やれることはある。
今は戦うことが怖くても、それなら、他にやれることをやればいい。
ブレンとオルファンを信じたことへの責任は、必ず取る。

さとりは、澄み切った眼で前を見据えるのを止めて、固く閉ざされていた装甲を開け放った。
同時に、装甲が取り払われたその先へと繋がる大きな穴が、周囲のスリットウェハーを取り払うことで穿たれる。
さとりはそちらの方へと這い出して、穴を潜り、外へと出た。
ほんの少し前にずっとあたっていたはずの空気が、えもいえぬ涼しさと、心地よさを運んでいた。

そうして、開かれた装甲の上へと立つ。
急に姉がブレンの身体から出てきたため、不思議そうに思ったこいしが、人の心を読めないなりに気を使って呼びかけてきた。

「お姉様ー、どうしたの？」
その声に、ほんの少しだけ人が変わったようになっているさとりが、装甲の上に精悍に佇みながら、顔を俯けて下の方にいるこいしの方を向き、応えた。
「・・・行ってくるわ」

行ってくるとは、どういうことだろうか。
説明不足のさとりの声に、こいしの傍にいたお燐とお空が続けて聞いてくる。
「行くってー？」
「行くってなんですぅ？」
そんなことを聞いてすぐ、お燐が、さとりが『行く』と言ったのがどういう意味なのか、分かったような気がして、途端にびっくりとっした表情を浮かべた。
そうして、慌てた様子でこう言ってくる。
「もしかして、グランチャーと戦いにっ？駄目ですよぅ～！もう遅いですって、死んじゃいますよぉー！」
お燐の声でようやく、さとりの言おうとしていることが理解できた（つもりになった）こいしとお空も、同じように大慌てになって、続けた。
「えぇー！駄目駄目、無茶だよぉ」
「今グランチャーと戦ったら危ないぐらい、お鳥頭（ばか）の私にだって分かりまぁーす！」

さとりのことを心配しての発言だということは、さとり当人にもよく分かっていた。
だが、さとりはこいし達の言葉を、ほとんど聞き入れてはいなかった、なんせ、そもそもさとりがグランチャーと戦おうとしていること事態が、間違っているわけなのだから。

さとりは、こちらを見上げるこいしとお燐とお空の顔をそれぞれ見やって、笑みを浮かべながら、応えた。
「違うわよ。オルファンの下へと行こうと思っているの」

さとりの口からついてでた言葉に、三人が一様に呆気に取られたように眼を点にさせた。

地上から避難し、中庭へと戻ってきた永琳は、すでに中庭にいたにとりをすぐ傍にまで呼び寄せて、話をしていた。
地上の環境が、少しずつ本来の状態に戻っていること、その調査を河童達にやってもらったので、結果を纏めておいて欲しいこと、そうして最後に、近い内にまた、オルファンの内部を詳しく調査したいと考えていることだ。
あの、最深部にある黒いモニター。
あれを用いて、再び彼の者との対話を図る。

永琳はこれまで、自分の中に危機感というものが少し足りないということを、今回の事態で実感したような気がした。
ブレンとグランチャーは、本能的に戦う、相手を滅ぼすつもりで。
だがその先には、おそらく何かが・・・ビープレートがあるのだろうと思える。
彼の者達は、自分の目的がそうすることで達成できると信じて、戦っているのだ。
だが、結局それは、永琳の推測であるし、その推測が当たっていたとしても、ブレンとグランチャーの戦いの先に、彼の者達の幸福があるとも限らない。
もし、どれほど戦ってもビープレートが見つからないのでは、彼の者達の戦いは一体いつ帰結するというのか？
どちらか一方の種が、残らず死滅するまでか？
そうして、ブレン、あるいはグランチャーが一体残らず滅びたとしても、それでも尚ビープレートが見つからなかった時、オルファンは今度は、幻想郷の生命体を犠牲にして、銀河旅行へと旅立つ。

そのことは、幻想郷にとっての危機であった。
そして、永琳にとっても、それ以上に重大な危機であった。

このままでは、ブレンとグランチャーの、絶滅をかけた戦争に発展してしまう。
戦争だ。
理不尽な死が蔓延する、そんな事態が引き起こされてしまう。
誰かが誰かを殺めること。それが、当然のことになる。

永琳の脳裏には、輝夜と共に地上に赴くために殺めた、いくつもの同胞達の顔が浮かび上がるようだった。
事切れる瞬間のその表情が。
その時からだった。
彼女が、生命の失われることの虚しさと、容易に生命を奪う事の傲慢さが恐ろしいものであるということを、そして自分自身、その傲慢さを以って、いくつものに生命を手に懸けたということを。
そうして永琳の肉体は、地上とは関係なしに穢れ、自ら、罪を背負うことになった。
逃れられるのか分からない罪を。

そうして今、ブレンとグランチャー、彼らアンチボディが、同じ虚しさと傲慢さを以って、同じ罪を背負おうとしている。
しかも今度は、幻想郷の生命の全てをその犠牲とするかもしれない・・・

それだけはさせられなかった。
それを食い止めることが、はっきりとした悪意を以って仲間を殺め、その血に染まった手で成さねばならぬことだと、永琳は思った。
そのためには、戦いの先にある目的を、戦う以外の方法で、いち早く達成しなければならない。
ビープレートを発見し、戦う必要など何もないということを、教え

てやらねばならないのだ。
だが、そのためには永琳達は、あまりにも何も知らなすぎた。
オルファンのこと、彼の者が生み出したブレンパワードのこと。
それらをいち早く知らずして、何がビープレートか・・・

かような考えの下、今や賢者ですらなくなったこの身を尽くし、この異変を解決に導く決意を固めていた永琳だったが、にとりと、オルファンの調査をいつごろ行おうかということについて話し合うと考えていた矢先、サトリブレンのいる方が俄かに慌ただしくなっていることに気づいた。
ブレンの装甲が開き、そこからさとりが姿を現している。
装甲の上に立った彼女が何事か言うと、その傍に集まっていたこいし達がびっくりして、身ぶり手振りをつけて、さとり同様何か言っているのが見えた。

永琳とにとりは、河童達には邪魔だからと解散を命じてどこへなりと追いやってから、自分達はサトリブレンの方へと歩み寄っていった。
傍で永琳とにとりの話を聞いていた妹紅と慧音も、一緒についてくる。

サトリブレンに近づいている内に、さとりはまた何事か言い、あたふたとしていたこいし達は段々と大人しくなっていた。
そうして、依然さとりを見上げているこいし達の傍にまできた永琳は、装甲の上に立つ（少し前に見た時よりも、堂々とした態度をしているように見える）さとりに対し、呼びかけた。
「どうなさったんです？」
それにさとりは、すぐさま応えた。
「オルファンさんの下に赴くんです」

「・・・え？」

それを聞いて、永琳は言葉を失った。

その驚愕は、さとりの言葉そのものに対するものというより、まるでさとりが、永琳の心の内を読み取り、その意思をくみ取るように言ったのだと思えたことに対するものだった。

ちょうど先程も、永琳は確かな決意と共に、オルファンの調査を行うことを決心した。

まるでそれに、示し合わせたようではないか。

自分の内にあった決心と、さとりの語る言葉が、歯車となってがっちりと組み合わさり、そのままごうごうと音を立てて回りだす時を静かに待っているような、そんな感覚を永琳は抱いた。

何も言わなくなった永琳に代わって、妹紅が、突然何を言うのだろうといった表情でさとりに問うた。

「どうしていきなりそうなるんだ？別に、わざわざ今からオルファンを調べにいく必要なんて、ないだろう」

妹紅の言う事ももっともだ。

実際さとりも、彼女に対し、

「それはそうです」

と応えていたが、その上で、彼女は言葉を続けた。

「でも、どうしても今、あの方と話をしなくてはいけないように思えたんです・・・今すぐにでも、あの方の心の内を知っておかなければと・・・」

その言葉が、永琳の胸の内を、再びちくりと刺した。

つくづく、同じだったのだ、彼女と自分の考えていることが。

永琳は、ブレンとグランチャーの生命の尊厳を守るため、そうしてさとりは、ただ純粋なる好意のために、異変を解決すること、そのためにまず、オルファンを理解することを目指した。

さとりの真っ直ぐな目線が、一瞬だけこちらと重なった時、永琳は、

自分の行動を抑える術を失った。

彼女は突如として、さとりの立つ装甲の傍にまで歩み寄ると、地面を蹴って飛び上がり、一面が取り払われている箱に近い形をしている装甲の縁に右脚をつけると、そのまま飛び降りるように、箱の内側にいるさとりの隣へと立った。

装甲の上は少し狭く、さとりの隣に立つのなら、ぴったりと寄り添うようにしなければならなかった。

「永琳さん？」

いきなりすぐ真横で身体を密着させてきたものだからさすがに戸惑った様子のさとりに対して、永琳は、笑顔でこう言った。

「よろしければ、私も連れて行ってくださらないかしら？」

突然装甲に上り、さとりの傍に立つのも驚きだが、急にこんなことを言うのにも驚いた。

訳が分からに様子だったにとりだったが、数秒おいて、装甲の上のさとりと永琳の両方に聞こえるような声で言った。

「いきなりなんです？だったら、あたしも連れて行ってよ～っ」

オルファンについていち早く知っておこうという考えは、にとりにもある。

それに丁度永琳も、先程オルファンの調査を行おうと言っていたところだ。

多分永琳は、さとりの発言がそのいい機会だと考えて、同行を頼んだのだろう、と考えることもできた。

なら、それに付き合うのが自分の使命だとにとりは考えていた。

なんせ永琳と共に、異変解決を手伝うべくこの地にやってきたのだから。

使命感とかそういうものは別にどうでもおいのだが、あの博識なる

永琳と同じ立場にいられることは、光栄だった。
にとりは、自分と異なる専門知識を持つ者を、蔑むよりも尊敬することができる河童だった。
そうした上でのこの発言だったのだが、それに対する永琳の返事は、にとりとしては意外なものだった。

彼女は、装甲に立ったまま右手のひらを広げ、それをにとりの方に向けながら、言う。
「申し訳ないけれど、今回は連れていけない」
その声に、にとりの脳裏にある感情が浮かんで、彼女はそれを、そのまま言葉にして永琳に伝えた。
「なんでですかぁ～っ？もうわけわかりませんって・・・」
それに永琳は、申し訳なさそうな表情を浮かべつつ、はっきりとした口調で応えた。
「今回のことは、調査だとかそういうものとは何も関係ない・・・・ただ、感情に従っているだけの行動なのよ。衝動的なね」
「・・・・・・？」
にとりには分かっている。
こういうことを言う時の永琳の考えというのは、理解できるものではないということを。
つまり、分からないということが分かった。
ただ、戸惑いの表情を浮かべるばかりで、これ以上何も言えなくなる。

そんなにとり同様、こいし達は勿論として、妹紅達も、永琳がさとりと共にオルファンに向かおうとしていることはともかくとして、今しがたにとりに対して語った言葉の意味を理解できなかった。
感情に従う・・・衝動的とは？
皆一様に、永琳とさとりの姿を不思議そうに眺めるばかりだ。
そんな彼女らのことを気にせず、永琳は同じく、不思議そうな顔を

してこちらを見つめるさとりの眼を見返し、その眼に対して語りかけるように、言った。

「連れていってはくれないのかしら？・・・　私の心の内を読んでみなさい」

その声に導かれるように、自らの能力を用いて永琳の考えを読み取るさとり。

彼女の脳裏に永琳の意思が流れ込み、まるでさとり自身の心であるように、はっきりとしたディテールを持って刻み込まれる。

永琳もまたさとり同様、オルファンの心を理解しようとしている。

その根本にある理由はさとりとは少しだけ違っていたが、それでも、敬意を抱ける理由だった。

ブレンとグランチャーの生命を尊重するからこそ、ビープレートを見つけ、異変を解決しようとする。

それは実際、さとりには、自分の中の意思よりもずっと高尚で気高いものなのだと思えた。

さとりは、自分とオルファンの二人きりで、他に誰もその場に入れずに語り合おうかと思っていた。

そうしなければ、オルファンは心を開くことなく、何も教えてくれないような気がしたからだ。

あくまでも、ひとりとひとりで、何も間に挟まず心を通わさなければ・・・

だからさとりは、なるべくなら永琳も連れて行きたくはなかったが、彼女の中にある意思を知れば、彼女の望みを拒むことはできなかった。

オルファンもきっと、彼女を邪魔だとか思ったりすることはないだろう、とも思えた。

彼女は、誠実な眼差しを送ってくる永琳の眼を見返し軽く頷いてから、応えた。

「・・・分かりました。一緒に行きましょう」

その声と共に、ブレンが招き入れるかのように、しゃがんだ姿勢のまま左手を装甲の傍にまで寄せてくる。

緩やかに開かれた手のひらがゆっくりと近づいて来て、眼の前にまで来たところで止まるのを見ていた永琳は、ただ一言、

「感謝します」とだけ呟いて、装甲から手のひらの上へと、颯爽と金属質な装甲の縁を跳び越えながら乗り移る。

その様子を、ちらりとだけ一瞥したさとりは、もう一度足元のこいし達と、にとり、妹紅達のいる方に眼を向け、言った。

「済みません。今回は、私と永琳さんだけでいかせて頂きます。皆さんは、ここで待っていてください。もし魔理沙さん達が無事に戻ってきたのなら、私達が出ていったことも、お伝えしてください」

「わ・・・分かった」

依然、今眼の前で何が起こっているのかもはっきりと分からない様子の慧音が、戸惑いながらも頷き、応える。

妹紅とにとりも、同じように頷く。

それに続いて、こいしが、不安そうな声で呼びかけてきた。

彼女には、突如オルファンの下に赴くといったさとりの真意は分からない。

しかし、彼女の眼を見ていると、無意識の内に察することはできた。

今、自分の姉は、一生懸命になって頑張っているのだと。

「お姉ちゃん・・・んや、お姉様・・・大丈夫？グランチャーが、オルファンを襲ってくるかもしれないんだよ・・・？」

それは結果として、先達てグランチャーに対抗しにいった魔理沙達がやられたことを意味するのだが、こいしは魔理沙達の死を危惧する以上に、オルファン共々さとりとブレンが死んでしまうことを考

えた。
そうして、よく分からない、身体が冷たくなるような感覚を受けていたのだ。
それが恐れであり、不安の心であるということは、心を閉じてしまった今でも、なんとなく分かる。

こいしの声に、さとりは笑顔で返事した。
「そんなことにはならないわ。魔理沙達はよくやってくれてるはず・・・私はそれを信じてる・・・あの人達が戦う代わりに、私も頑張るの」
そうしてそれからしばらくして、さとりは、こいし達に軽く手を振り、
「それじゃ、行ってくるから」とだけ行って、踵を返す。

こいしはその姿に対し、何も考えずただ無心に、大声で、
「いってらっしゃぁーい！」と呼びかけた。
お燐とお空も、それに続いて、
「いってらっしゃーい！」と叫ぶように言って、穴を潜ってその奥へと消えていくさとりの背中を見送った。

不安はなかった。
というより、久しぶりに姉らしく、地霊殿の主らしい頼もしさを感じるさとりの顔を眺めると、確かにあったはずの不安が、気づいた時には消えてなくなっていた。
それに、さとりの言う通り、魔理沙達も、そして、他のブレン達も、きっとよくやってくれているだろう。
オルファンのことも、さとりとサトリブレンのことも、きっと守ってくれるはずだ。

後ろ向きに、お尻の方から胎内へと入りつつ、穴の縁に両手をあててその場で止まったさとり。
そうして彼女は、最後にこうとだけ言った。

「突然ことで戸惑っているかもしれませんが・・・私は、オルファンを助けて、異変を解決に導きたいのです・・・そのために、これから行くのです。この気持ちは・・・きっと皆さんも同じなんだと思います」

そうして、縁から手を離したさとりが、吸い込まれるように胎内に入ると共に、先程まで彼女が立っていた装甲は再び閉ざされ、それから数秒しない内に、ブレンは内に秘める感情を現すようにぶるぶると鳴いてから、地面から浮きあがりゆっくりと高度をあげると、屋敷の屋根を越えて飛び去っていった。

※

二本のチャクラの刃が衝突し、オーロラの光が干渉し合うことによる、ブゥンブゥンという、虫の羽音のようで、そうではない独特な音と共に、スパークが発生する。
咲夜としてはいい加減身飽きたような光景であるが、紫のブレン・・・ハクレイブレンに乗る霊夢としては、初めて眼にするオーガニックエナジーの乱舞・・・死の実感を孕んで輝くスペクタクルであった。
だが、ブレンの胎内でその光景を瞳に焼きつける霊夢は、この死の輝きにあてられ、恐怖することも、覚悟という言葉を強く意識する

ようなこともなかった。
そしてそれは、ハクレイブレンも同じだ。

戦いに赴くにおいて、彼女らの心にある感情。
それは単に、死なないよう、そして、仲間を殺さないようにせいぜい頑張ろう、程度のものであった。
ブレンはもう少し固く引き締まるような気持ちを持っているかもしれないが、霊夢にしてはそうだった。
単に、喧嘩で負けないように、友達を困らせないようにする、という、軽い認識でしかない。
特別気合いを入れているというわけでもなかった。
だが、そういう認識をもって戦うことこそ、霊夢の強さの秘訣であった。
理由もなければ、戦いを娯楽ともしない。ただ、自分の感性に任せて、戦う『だけ』のことをする。
それができるのが霊夢であった。

霊夢は、自分の顔を照らすスパークの光を見て、リラックスした様子で呟いていた。
「へぇ～・・・美しいじゃない」

続けて、ソードエクステンションの刃の向こうから、まるで血に染まったかのような姿をし、顔にある黄色く光る数条の溝をぎらりと、暗闇に光る獣の眼のごとく光らせ、火焔のような熱を孕んだ敵意と殺意をこちらに向けてくるグランチャーの姿を見て、彼女はへっ、と、気だるそうな笑みを漏らした。
「めんどくさそうな相手ね・・・いいでしょう。行くわよ」
そう呟きつつ、ちらりとだけ後ろの方を見る。
今、スリットウェハーに映っているのはブレン視点での映像で、後方は死角となって見えなかった。

が、それを承知で霊夢は、視線を、残る二体のグランチャーへと向かったマリサブレンとカグヤブレンへ向けていた。
そうして、オーガニックエナジーに思念を載せるようなこともせず、あくまでも自分だけにしか聞こえないような声で、もう一度呟いた。

「あんたらもね・・・こいつはあたしがやっとくから」

第十二話『嵐の幕開け』　その1

突如飛来した巨大な光。そして、それが拡散し、消滅したかと思った次の瞬間、咲夜のグランチャーへと襲いかかった一体のブレンパワード。

早苗は、何がどうなっているのか理解できず、混乱の中で、喚くことしかできなくなっていた。

「えっ？これ、どういう・・・どうしたんですかぁー！？」

問いかける声は、誰に対してのものかさえ分からない。

いや、咲夜に向けてのものであるのだろうが、あまりに混乱して、何でこんなことを問うたのかも分からない。

そして、咲夜からの返事はない。

彼女の声の代わりに早苗の下に帰ってきたのは、眼前に躍り出る黒い影・・・ブレンパワードの姿だった。

その特徴的な黒色の姿と共に、その胎内にいる宿主にも見当がつく。

「あ・・・っ！」

あまりに突然だ。

下方からせり上がるように接近し、グランチャーの至近距離にまで肉迫していたブレンは、すでにブレンバーを横なぎに振り払おうと構えている。

それに対し、瞬間的に対応できたことは、まさしく早苗お得意の奇跡でしかなかった。

勢いよく振り払われた光を纏う刃に、ソードエクステンションをぶ

つけることで受け止める。
ぶつけるというよりかは、単に、迫り来る刃の軌道上に置いただけかもしれない。
ブゥンという、オーガニックエナジーの干渉する音と、淡い光の激流が発生する。
それが、早苗の身体を風のように煽り、眼を見開き、口を真一文字に噤んだ顔を照らした。
「んんうぅぅーーっ！」
一瞬で血の気が失せ、血管の中が空っぽになってしまうようだ。
その空っぽになった血管の中に冷水を流し込まれたような悪寒が、新たな血流となって全身を駆け巡っていく。

だが、このまま混乱と恐怖に呑まれる早苗ではなかった。
敵が現れたのだ。そうして、また戦いが始まった。
そうである以上、やるべきことはひとつに決まっている。
早苗は、チャクラ光の刃によるスパークに照らされる中で、叫んだ。
「そういう不意打ちみたいな真似するブレンと霧雨　魔理沙さんなら、容赦しませんからねっ。いきますよぉ！」
その声は、チャクラ光を隔てて間接的に接触する二本の刃を伝い、振動が物体を伝わるかのように、オーガニックエナジーによる音波となって、ブレンにまで伝達されていった。
早苗の声が、この黒いブレンの宿主・・・魔理沙にまで聞こえた、ということである。
そしてそれは、愛する神を守るため、守矢神社の野心を秘匿しようとしていた早苗にとっては、迂闊なことであった。

驚愕しながらも、あくまで冷静である魔理沙と共に、これ以上鍔迫り合いをしていても無駄だと判断したマリサブレンは、ブレンバーの刃を離しつつ、瞬時にグランチャーから距離を取った。
押し出す力を抑えるものがなくなって、グランチャーが勢いのまま

にソードエクステンションを振り抜き、右腕が下向きにぴんっと伸びきる。
その隙をついて、遠距離からブレンバーを連射するマリサブレン。
「うむ・・・っ！」
早苗は既に意気を決め、表情を強張らせつつ、グランチャーに回避行動を取らせた。
チャクラシールドにより、ダメージを抑えることもできるのは承知だ。
数発の命中は覚悟する。

一発のチャクラ光を回避し、淡い光が左足の裏を掠めると、狙い定めたように伸びたもう一発の光が、右肩に命中する。
だがそれは、チャクラシールドによって押しのけられ、拡散し、威力を失う。
すかさずもう一射、胸部目掛けて飛んできた一撃は、急ぎ下方に逃れ回避する。
それを先読みして放たれたもう一発が、またしても、左足の辺りを掠める。

早苗はこの敵・・・魔理沙の乗るブレンパワードが、先程止めを刺したブレンや、その仲間（かはわからないが）であるもう一体のブレンのような、貧弱な敵ではないことをここで実感することができた。
同時に、魔理沙だけは、甘ったれの集まりである地底の者達の中でも、強かな者であることを。
しかし一方では、ようやくアンチボディの戦いの雰囲気に慣れてきた自分自身も、決して負けてはいないだろうという認識がある。
今、藍のグランチャーにもブレンが攻撃を仕掛けようとしているのが、横目で見えた。
確か地底の連中のブレンは、早苗が確認していなかった（そして今

確認した）紫のを入れると全部で四体だったはずだ。
が、その内の一体は、咲夜のグランチャーがかなりの痛手を与えているため、今回の戦場には出ていない可能性がある。
となれば、今は三体三なわけか・・・
止めを刺し損ねたブレンについては、頭数に入ってもいなかった。

放たれるチャクラ光の数々を回避し、時には受け止めつつ、一瞬で考えた早苗。
だが、そんな彼女の思考をかき消すように、鼓膜にオーガニックエナジーに乗って声が響き、その薄い粘膜を揺らした。
（あんた・・・早苗なのかっ？）

魔理沙の声だ。
こちらの名を呼ぶ声に、早苗は驚き、何故？と考えた。
そうしてすぐに、先程の鍔迫り合いでの叫びが、オーガニックエナジーに乗って伝わったという事を理解する。
その認識は、彼女に自分の迂闊さを感じさせることとなった。
だが、今はそういうことはどうでもいい。
このことで魔理沙は、早苗に何らかの野心があること、その野心の根幹が、神奈子達にあることを知ったかもしれないが、それがどうした。
この場でブレン共々魔理沙を潰してしまえば、結果的に何も知られていないことになる。
あの神々の野望も、秘匿しきることができるだろう。
つまり要約すれば、ここで魔理沙はやっておけ、ということだ。

早苗はこの場の精神の昂りに任せ、ブレンバーを連射するブレンパワードに対し反撃するべく、グランチャーにソードエクステンションを構えさせる中で、魔理沙に対し叫び返した。
「そうです、私は東風谷　早苗ですっ！貴方達の敵となりました！」

（なんでだよっ？）
「この世界を守るためです！」

マリサブレンとグランチャー、二体が同時に放ったチャクラ光は、まったく同じ射線を通過し、まるで運命づけられた間柄のように、引き付け合う電子の＋と－のように、真っ正面から激突した。
二つに重なったチャクラ光は、ほんの一瞬だけ、真っ白に輝く光の塊のようになり、その場を鋭く照らす。
しかしその光の眩さに眼を閉じる間もなく、光は、今度は弾けて崩壊する銀河のごとく四方へと拡散し、無数のチャクラ光の放射となって、互いのアンチボディへと返っていった。
勢いよく衝突するエネルギーの反作用と、他のエネルギーにより押し出される逆方向への作用が相乗し、互いの放ったチャクラ光が、四方へと反射されたのだ。
その光の飛来する速度は異様なまでに速く。勢いは鋭い。
まるで針の塊のように、一瞬で無数の光が伸び、その内の一本が、グランチャーの脇腹を掠める。
また一本は、マリサブレンの頭部の左側の装甲を、僅かに削り取っていく。
チャクラシールドを展開していても、意味がなかった。
オーガニックエナジーを容易く突き破り、真っ直ぐな針のまま、すぐ傍を抜けていく。
鎧の隙間を的確に突き刺す刺突剣のようだ。
もしこの光の針が急所に突きたてられていれば、ただでは済まなかった。

「ふわぁぁ・・・っ！」
（うぅっ？）

早苗と魔理沙は、互いのチャクラ光が生み出したこの異様な光景、海洋生物のハリセンボンのもつ針の一本一本が異様に長くなったような光景に、等しく喘ぎ、そして呻いた。

※

「く・・・っ？」

二体のアンチボディが放ったチャクラ光により発生したこの無数の光の針の群れは、咲夜の眼にも見えていた。

――――何事なのっ？――――

一瞬、まるで閃光が煌めくように広がったその針の塊だったが、その一瞬を過ぎてしまうと、灯された光が消えるかのように、遠方へと拡散していき、見えなくなる。

一体何が起こったのかと、咲夜の意識は、発生した光に捕らわれそうになった。

が、そんな暇はないということは、咲夜自身よく分かっている。

この一瞬の隙を逃さず、突撃してくるハクレイブレンの姿を見れば、嫌でも分かる。

「おのれ・・・っ！」

咲夜自身、決して戦場で余所見をしていたつもりはなかった。

ただ一瞬、ちらりとだけ光の拡散を見ていただけで、そこからはずっと、正面に注意を向けていたはずだ。

だが敵は、そのチラリと見る一瞬、そして、正面を向いて尚、意識が散漫しているその僅かな時間を突き、爆発的な加速をかけて接近

を図っていた。
すでに紫色のブレンは、かなり近距離にまで接近していた。
スリットウェハー越しに、迫り来る敵の全体像が、咲夜の網膜を突き破らんほどに刺さる。
もう瞬きの一回をしている間にも、こちらと激突してしまいそうな勢いだ。
そしてこ度の敵の攻撃は、斬撃ではない、突きだ。
ブレンバーを射撃時と同じように構えているのだが、腕は肘を後方へと引くようにして折り曲げられている。
そこから、鋭く銃身で突きを放つためだろう。
受け止めなければならない。
だが・・・できるか？
弾丸のような速さで放たれる刺突を、受け止めることが・・・

咲夜は、胸中で叫ぶ。
――――時間よ、止まれっ！――――

だが、実際に時間は止めない。
咲夜は、時間が止まっているかのような迅速な動きを、グランチャーに要求した。そのことを意味する言葉だった。
そうして、それに応えるのが、彼女のグランチャーである。

ハクレイブレンがグランチャーに対し肉迫し、折り曲げられていた右腕が一気に伸ばされる。
それと共に、グランチャーの頭部目掛けて迫り来るブレンバーの銃口、ぽっかりと空いた虚空。
それが、グランチャーのその、眼にあたる部分を抉り、スリットウェハーから映る光景を通して、咲夜に、身の眼が抉られる瞬間というものを見せつけようとした、その時だった。

グランチャーが払うように振り抜いたソードエクステンションが、その刃を、ブレンから見て右斜め下の方向へと受け流していく。
突きたてられる刃は、寸前のところでグランチャーの頭部を離れ、左脇を微かに抉り取るだけに留まった。
そして、加速による勢いをそのままに、腕だけを払われたハクレイブレンが、グランチャーと強かに衝突する。
肩と肩はぶつかり合い、ブレンバーを振り下ろすために、身体に対して内向きに曲げられ、胸の前にかざされるような形となったグランチャーの右腕が、ブレンの胸を叩く。
激突の衝撃と共に、一瞬だけがくんと揺れた二体のアンチボディの頭部が、眼の前にある敵の顔を、互いに睨みあった。
両者の眼光が、オレンジに近い黄色に、ぎらりと光る。

衝突による衝撃は凄まじいものであった。
今までは、スリットウェハーに両手でしがみ付いたり、下方の溝に足を引っ掛けて踏ん張ることで、どうにか耐えていたのだが、今回ばかりは、咲夜は勢いのままに身体を前へと投げ出されてしまう。
「うぁ・・・っ！」
魂だけが後ろの方に持っていかれ、身体だけが前に吹っ飛んでいってしまう。
そんな感覚を受けて、頭の中が真っ白に初期化（フォーマット）されるようになる。
一瞬だけ瞳孔が散大し何も見えなくなった咲夜は、次の瞬間、柔らかいが、確かな弾力を持ち圧迫感を生じさせるスリットウェハーの壁面へと、胸を叩きつけられていた。
胎内の出入り口である穴へと続くほんの僅かな通路に、頭だけが投げ出され、首が勢いよく曲がり、右の頬が、溝のある壁面へと押しつけられる。
咲夜は、倒れ込むような姿勢で、胎内の前面へと張り付けにされてしまっていた。

一瞬だけ苦悶の表情を浮かべる咲夜だったが、すぐさま両手をついてその場で立ち上がると、もう一度後方の壁面へと背中を預け、両腕を左右にばっと広げスリットウェハーを掴む、そうして、やや前方に投げ出すようにして伸ばした足、靴のヒールを、溝の中へと食い込ませた。
足だけ前の方に伸ばした大の字のような体勢になり、咲夜は、先程の事を無かったかのように立て直す。

だが、敵に出し抜かれたことによる憤りからは、立て直すことはできなかった。

咲夜は、眼を細めきつく吊りあげ、獣のような眼光を煌めかせながら、唸った。
「生意気な・・・っ！」

※

その一方で霊夢は、ブレンに乗ってからというもの、自分の周囲に無重力の空間を生み出し、胎内の中心部に身体を浮かせるようにしていた。
そのため、先程の激突の衝撃においても、周囲の壁面が揺れ動くばかりで、彼女の身体には大きな影響はなかった。
体勢を立て直すような必要もなく、このまますぐにでも、反撃に移れるほどだ。
しかしながら、さすがにブレンの方はそうもいかないだろう。
全力疾走している時に他人とぶつかれば、霊夢だって吹っ飛ばされ

て尻餅をついてしまうし、頭だってくらくらしてしまうだろう。
それは、ブレンだって同じだ。

激突による衝撃と反作用で、互いの後方へと勢いよく流される二体のアンチボディ。
身体を仰け反らせ、首をもたげ、視線を真っ青な空へと投げ出すブレン。その肉体を形作るスリットウェハーの軋む音が聞こえてくるようだ。
一秒か二秒の間、ブレンはこの衝撃と痛み、全身を駆け巡る電撃のような感覚に逆らうことができず、動けなくなる。全身の、筋肉にあたる部分が、麻痺してしまっているのだ。
霊夢にも、自分の周囲にあるスリットウェハーが、まるできゅっと収縮したように見えた。

だが、その二秒が過ぎれば、ブレンはすぐさま悲鳴を上げていたスリットウェハーをさらに張りつめながら、体勢を立て直して、中空にぴたりと留まる。
咲夜のグランチャーも、同じようにぴたりと静止する。
実力からして、この二体のアンチボディ。そして、戦いに臨む二人の宿主の実力は、拮抗してた。
互いに力量の差はない、と、霊夢としては思えた。
だがその一方で、その拮抗し、競り合っている互いのパワーバランスを打つ崩す決定的な余韻・・・霊夢と咲夜の間に大きな違いがあることも、霊夢には分かっていた。
それは・・・落ち着きだ。

今の霊夢には、この先何があろうと、自分が敗北すること、ましてや死ぬことなどあり得ないという意識があった。
その意識こそが、実際この状況において、グランチャーの焦燥を誘発し、戦いを優位に傾けている要因であったのだ。

遠くに見える敵・・・とブレンが考える者の身体が張りつめ、緊張していることが、手に取るように分かる。

霊夢は、スリットウェハーの空間の中で浮遊したまま、腕と足を組んで、調子のいい笑みを浮かべながら、ブレン共々暢気な気分で呟いた。

「さて。いい加減勝ち目ないことも分かってきたんじゃない？分からないなら、理由も作ってあげるからさ、帰っちまいなさい」

※

霊夢が感じる通り、咲夜は、紫のブレンが予想以上の実力を持っていることに驚愕し、そして焦っていた。

実際この場での攻防はまだ僅かであったが、それだけでも（以前の戦いのことを考えればなおさら）この敵が抜け目ないものであるように思えたのだ。

強力なチャクラシールドを展開できるほどの能力と、こちらの油断と隙を的確についてくる抜け目なさ・・・

激突の衝撃から互いに吹き飛ばされ、ほぼ同時に体勢を立て直した状態で動かなくなり、睨みあう二体のアンチボディ。

咲夜とグランチャーは、下手な動きをすれば一気につけこまれるように思い、敵の動きを警戒して動けなくなった。

実際ハクレイブレンと霊夢の方は、次なるグランチャーの動きに即座に対応するべく注意を向けている。

そのため、咲夜の考えと、迂闊に行動しないという選択は、間違ったものではなかった。

しかしながら、いつまでもこうやって睨みあうわけにもいくまい。

咲夜は、グランチャーと共に前方の敵に鋭い視線を送りながら、低い声で唸る。

「どこまでも癪に障るが、認めるしかない・・・このままでは、私は勝つことができない・・・負けずとも、よくて相討ち・・・」

グランチャーというのは、自身に誇りを持ち、それゆえに自意識過剰とも言えるほどに、自己を尊重する。

だがそれは、単に自分を甘やかし、自分を陥れようとするもの全てを否定し、眼を向けること、対処することをやめるという、軟弱な考えではない。それは悪い意味での自意識だ。

自己の障害となるものでも、それが強大であれば、認めもする、畏敬の念も抱く。

その上で、自分自身が出来得る限り最も有効な行動が取れるように考えるか、あるいは、その大きな障害を乗り越えられるよう、実力を高める。

それこそが、本当の意味での自意識である。

それを、グランチャーと咲夜は分かっていた。

勝ち目がないのなら、それを大人しく受け入れることも、誇りを尊重する上では、大事だ。

どこまでも、癪に障るが・・・

全身が緊張し、神経が研ぎ澄まされているからか？
敵の動きを警戒する中で、グランチャーは、戦場を錯綜するオーガニックエナジーの流れにまで敏感に反応していた。
オーガニックエナジーの微弱な波、そしてそれに乗って飛来する思念が装甲を伝わり胎内にまで入り、咲夜の耳にも、音としての共鳴を送り込む。
それ故に、遠方でそれぞれ個別に戦っている他のアンチボディの宿主の声が、脳内を反響するかのように聞こえてきた。

（コンピューターには、慣れとか経験なんてない・・・これは単純に、私が実力不足なのかっ？押すも引くもできてない・・・！）
これは藍の声だ。敵の攻勢が思っていた以上に激しいので、珍しく焦っているようだった。

（互角だぁー！いえ、私の方が下・・・なわけないでしょっ、私ゃ蓬莱山　輝夜なんだぞぉーぅ！）
これは、向こうから名乗っているが、迷いの竹林の屋敷に住まう輝夜だろう。
藍の相手をしているらしい輝夜の、悪いの意味で自意識過剰気味な独り言が、向こうの戦闘においても、互いの実力が拮抗していることを示す。

もう一方では、早苗と魔理沙の言い争う声も聞こえてきた。

（早苗、あんた、最初っからこのつもりだったのかっ？何を考えているんだぜ！）
（幻想郷を守るんです！そのために、まずはグランチャーでブレン

をやっつけるんです！）

（・・・ブレンのことをいい子だって思ってたんじゃないのかっ？あたしのブレンに頬ずりまでしておいて、そういうのかよっ、無情極まりないぜ！）

（お好きなように仰りなさい！なんであれ、オルファンの抗体であるというなら、ブレンだって危険な存在なのです！・・・貴方こそ、以前マスタースパークでブレンを殺めようとした自分をお忘れですかっ？）

（忘れちゃいないぜっ。ブレンが本当に世の中の害になるっていうなら、今度こそ、私の力で殺める覚悟だってできてる！・・・それでどうした？なんていうんだっ？がんばり屋さんの東風谷　早苗はさっ。あたしに、一緒にオルファンを壊すために戦えって、誘い込むのか？）

（今の私は、故あらば妖怪の真似事だってします！やられちゃえっていうんですよぉーっ！）

これでは埒があかない。

口論もそうだが、戦闘においても、やはり向こうも互いの実力が互角であり、双方とも攻めあぐねている様子が伝わってくるようだ。

他のグランチャーも、咲夜同様、このまま勝つことは難しそうに感じる。

戦い続ければ、どこかで相手が消耗し付け入る隙も出てくるかもしれないが、それはこちらも同じこと。

戦闘が続けば続くほど、神経はすり減らされ、一瞬の油断が敗北を招くリスクが大きくなる。

もしかしたら敵を撃破できるかもできない。

だが、それと同じ確率で、こちらがやられるという危険を冒す必要

はあるのか？
この先まだ、オルファンだって撃破しなければならない。
その前に戦力を消耗するようなことになれば、待っているのは最悪の結果だ。
咲夜の脳裏に浮かび上がった現時点での最良の選択は、この場からの撤退だった。
とにかく全速力で逃げ出すことが先決だ。

こちらの本来の目的は、地底のブレンと事を起こすことでなく、まだ生まれて間もない各地のブレンパワードを虱潰しにすることであるはずだ。
そうして、魔法の森にて発見されたブレンを、手始めに攻撃していた。
その内の一体は、すでに撃破している。
大元の目的は、充分でないとは言え、達成できたのではないか？
なら、今この場からいち早く撤退したとしても、決して敗北ではないのでは・・・

そんな思考と共に、咲夜の脳裏に、あるものの存在が過ぎった。
眼前に佇む紫のブレンに眼光を浴びせながら、向こうからの眼光も一身に浴びていた咲夜は、戦場を錯綜する意思の中に、あるものを探した。

そしてそれは、すぐに見つかった。

なんであれ、勇ましく引き締まった思念の中の数々に隠れて、怯えきっている弱々しい意思が。

（・・・な、なんでこんなことに・・・・・・何が起こってるの？・・・霖之助さん・・・）

「ふ・・・ふふ・・・ふ、ふ」

きつく、真一文字に噤まれていた咲夜の口角が俄かにきゅっとつり上がり、彼女は、肩を揺らして笑みを浮かべた。

これで、彼女の中の意思は決まった。

いち早く、この場から撤退する。

だがその前に、やれることはまだあった。

どの道、撤退するチャンスを得るためには、敵の注意をどこかに引き付ける必要がある。

咲夜は、焦燥と共に、動きある停滞、そして倦怠に包まれていた戦場の空気を破るかのように、オーガニックエナジーを通して、戦っている最中の早苗と藍に呼びかけた。

「二人とも、止むを得ない、一旦撤退するわよ！隙を見てこの場から逃げる！」

その声に、すぐに藍からの返事がくる。

敵の攻勢を受け止めつつ、何とか応えているような、呻き声だった。

（撤退っ？できるのか・・・？）

同様に、辛くも声を出しているといった具合に早苗の返事も続いた。

（無理ですよぉ～！逃げるような隙なんて見つかりませーん！）

それに、咲夜は、引き締まった表情で、応えた。

「私が作る。いいわね？例え敵が隙を見せても、その隙を突こうなんて考えないで、すぐに逃げるの。未練たらしく立ち止ったヤツは置いていくから、勝手に潰されてなさいっ・・・・・・バラバラに

逃げて構わない。後で、紅魔館で合流しましょう。あそこは守矢神社以上に安全でしょう」

咲夜の言葉は有無を言わさぬ口調であり、嫌悪感を示す恐れもある辛辣なものであった。
だがそれが逆に、彼女の発言に説得力を生む結果にもなった。
実際のこの場にいる三体のグランチャーの宿主の中で一番実力があり、場数を踏んで経験も豊富であるのは、咲夜であるはずだ。
その咲夜の選択であるなら、早苗達は、素直に従うことにした。

（分かったっ）
という藍の返事に続き、早苗も訝しげではありながらも、焦燥した声で返事する。
（できるというなら、やってみてください！）

それを聞いた咲夜は、もう一度口角を釣り上げ、今度は嘲笑うように不敵に笑んだ。
「えぇ、完全かつ瀟洒に・・・」

問題ない。
これで戦いには負けるが、勝負には勝てるはずだ。

※

早苗の駆るグランチャーが、ソードエクステンションを放つ。
魔理沙はあくまでも冷静にその攻撃を見切り、ブレンに回避行動を

取らせていた。
身体をぐんと上昇させながら、まるで下方から風にあてられたように大の字になってふわりと飛び上がるマリサブレン。
その腹のあたりを、淡い光の矢が通り過ぎていく。
そうしてすかさず、大の字に広げた四肢の内のひとつ、右手に握るブレンバーの銃口を早苗のグランチャーの方へと向け、反撃のチャクラ光を一射する。
しかしグランチャーの方も、大きく右へと逸れながら、それを回避する。
ずっとその繰り返しだった。
お互い攻撃を放ち、それを回避することの繰り返しだ。
魔理沙が接近を図ろうとすると、向こうは距離を取りつつソードエクステンションを連射し、そうはさせまいとする。
撃破されることを恐れているのか？強力な斬撃を放つ機会を即座に殺してくる。
何度かそんなことを繰り返している内に、いつのまにか、少しずつ戦場から遠ざかっていたらしい。
戦闘を続けている輝夜のブレンと、その相手である藍色のグランチャー、そして睨みあうハクレイブレンと深紅のグランチャーが、大分遠くに見えるようになってしまった。
まるでこちらが流動する状況から取り残されたような、疎外感さえ芽生えてくるようだ。
もっとも、どれほど離れているかはっきり確認しようとすれば、敵の攻撃をかわしきることができなくなる。
ブレンに、ちらりとだけ後ろを振り返らせ、見させるだけだった。
だが、それだけでも魔理沙は、
「もうみんながただの点に見えるぜぇ・・・えへへっ」と、乾いた苦笑いを浮かべられるだけ、状況の判断はできた。
他の者達はともかく、こちらと早苗の戦いは膠着状態に入っている。

このままでは、延々決着がつきそうにない。
輝夜か霊夢、どちらかが戦いを終えて援護にきてくれれば、それで一気に押し崩せるが・・・
逆に、敵方からの援軍が来てしまうと、一巻の終わりだ。
しかし、輝夜も霊夢の方も、同じように押しの一手を決めることができず、攻めあぐねている様子だった。
もうしばらくは、この状態が続くというのか？

そんな中、魔理沙はふと、早苗のグランチャーの動きが消極的になったように感じた。

「・・・なんだ、変な雰囲気だ・・・」
思わず呟く。あまりに突然の感覚に、地に足が突かないような奇怪な気分になる。
実際、敵からの攻撃が弱まっている気配はない。
断続的に放たれるソードエクステンションの光が、確実にこちらを撃破しようと飛来してくる、予断を許さない状況には依然変わりがなかった。
だが、そんな中においても、魔理沙にはどこか、敵が戦意を失いつつあるのを感じられた。
だからどうだというわけではない。このままあっさりやられてくれるのなら、それはそれでいい。こう感じた理由はこの際感じない。
だが、こちらに対してやられてくれ、即ち死ねと言ってきた早苗が、そう簡単に諦めてくれるとも思えない。

「・・・なにかする気なのか・・・」
そんなことを考えつつ、グランチャーの攻撃と攻撃の合間にある僅かな隙をついて、もう一度ブレンに背後を振り向かせる。

何かがありそうな気がしたからだ。
しかし、依然遠くに見える戦いに、大きな動きはないように見えた。
いや、違う。
魔理沙は、何故こんな簡単なことを見落とすのかと、自分を叱りつけたくなった。
戦場で飛び交う二体のアンチボディ、そして、睨みあうもう二体のアンチボディ。
その中に混じって、もう一体、別のアンチボディがいたからだ。
その姿を凝視することはできない。
早苗の動きにも対応しなければならないからだ。
ブレンが後ろに向けていた眼を前に向け直すと、グランチャーは案の定何か行動を起こそうとしていたらしく、再び注意を向けたブレンに対し身を強張らせた。
その隙をつきブレンバーを一射するが、咄嗟のところで回避されてしまう。
反撃のソードエクステンションを同じく回避させつつ魔理沙は、もう一度ブレンに背後を振りかえらせようとした。
確かに見えていたが、念のためにもう一度確認するためだ。
あのアンチボディ、確かにブレンだった。
おそらく、先程までグレンチャーに襲われていたブレンと同じものだろう。
魔理沙達が助けに駆けつけたというのに、まだ逃げたりもせず戦場に残り続けていた。
魔理沙は、その迂闊さに憤慨する以上に、『逃げろ』と伝えること

完全に忘れていた自分を情けなく思った。
しかし、生命の危機に瀕している中で助けがくれば、まず逃げることを考えるのが普通だろう、何故そうしないのか・・・
他のブレンを助けようとしているのかもしれないが、一目見ただけでも、あのブレンはまったく動かず、救援するような気配すら無いことは察することができた。
ただ怯えて動けないだけか・・・

辟易する気分だったが、とにかく、このままではまずいかもしれない。
場合によっては、早苗を振り切って接近し、この場から離れるように呼びかけた方がいいかもしれない。
さすがにこの位置・・・グランチャーに接近を図るうちに遠くまで流れてしまったこの位置では、オーガニック的な通信もできない。

そんなことを、繰り返し飛来し、すぐ傍を掠めていくチャクラ光を見つめながら、光速回転するパンク寸前の脳みそでひと息に思考する。
そうしてから、二十何発目か、あるいは三十発目以上かのチャクラ光を回避したその一瞬の間に、もう一度ブレンに背後を振り替えさせることで、改めて件のブレンの様子を見る魔理沙。

彼女は思わず戦慄する。

今しがた、思考をそちらに向けていたブレンパワードに、刃のように鋭利なチャクラ光が突き刺さっていたからである。
胸や腹ではない。
丁度、ブレンバーを握る右腕が・・・正しくは、それが繋がってい

る右肩の付け根が、薄く透き通るような光に貫かれていた。
魔理沙は一瞬、頭の中がペンキに塗りたくられたように真っ白になった。

「な・・・なに・・・っ？」
自分の口をついてでた微かな声も、聞こえることはなかった。

次の瞬間、光に貫かれたブレンの右肩で爆発が起こり、その勢いで、右腕が、地面から野菜を引き抜くようにずるっ、と胴体から離れた。
それからは、宙へと投げられたブーメランだ。
引き抜かれた腕は返ってこないブーメランとなって、くるくる回転しながら、どこかへと飛んでいく。

先程までそこにくっついていたはずの右腕が吹き飛ばされ、ブレンの身体が大きく仰け反る。
魔理沙には、ブレンの悲鳴も、埋め声も聞こえなかった。
だが、すでに片足はなく、続けて右腕まで失ったブレンの姿を見て、その痛みを察することができないわけがなかった。

そして魔理沙は、腹から突き出てきたような叫びを放つ。
「なんで逃げなかったっ・・・なんてこったこれは！」
それからはもう、早苗のことも頭の中から吹き飛んだ。
ブレンの下へ向かうべく、マリサブレンを最大速度で飛行させる。

それは、早苗に対して背中を見せる行為であったが、魔理沙にはそんなことはどうでもよかった。

彼女にとって幸運だったのは、早苗がこの隙を突いて攻撃したりせず、咲夜から命じられた通り、マリサブレンが飛んでいった方向と

は逆の方向へと離脱していったことだ。
もっとも、あそこでブレンを攻撃していても、チャクラシールドがある以上、即座に撃破することはできない。
チャンスであるのは間違いなかったが、それを直接勝利に繋げることはできなかったろう。
むしろ、離脱する機会を失い、それこそ、そのまま延々と戦闘を続けていたことになる。
そういう意味では、魔理沙以上に、早苗もまた幸運であったわけだ。

そして、戦場からの離脱を図ったのは、早苗だけではない。

第十二話　その2

輝夜にとっても、あまりに突然の事態だった。
ブレンの肉体が爆発したことを示す大きな破裂音が聞こえ、思わずそちらの方にブレンを身体ごと向けさせてしまった。
そうして、魔理沙以上に近い位置から、肩を抉られよろめくブレンの姿を見た輝夜は、一瞬その身が固まって動けなくなった。
脳裏で錯綜する言葉は魔理沙が叫んだのと同じものであったが、彼女よりも遥かに辛辣な、罵声に近いものであった。

――うっそぉ!?逃げてないのっ?なんでさ!こ、これじゃ、危険を冒してまで助けにきた私達が馬鹿みたいじゃないっ・・・何考えてんのよぉ!――

そうして、輝夜はある意味では魔理沙以上に落ちついてはいたようだ。
すぐさま、こんなところで動きを止めているわけにはいかないと思いなおした。
こちらにだって敵はいるのだ、あのブレンの二の舞になるような真似だけはできない。
咄嗟に、回避できない攻撃を想定してチャクラシールドのエネルギーを上げつつ、敵のグランチャーへと向き直すカグヤブレン。
しかし、輝夜の視界に敵の姿が映ることはなかった。
見えるのは、遥か遠くへと消えていく、豆粒のような小さな影だけだ。
あれが、先程までこちらにその猛威を振るっていた、敵か？

輝夜は唖然として、ただ呟いた。
「え・・・・・・・・・逃げた・・・？」
影はみるみる内に小さくなる、やがて、空にかかる薄くて低い雲の中に隠れ、見えなくなった。
「・・・・・・」
敵のいなくなった眼前を、見開いた眼で、ただぼーっと見つめる輝夜。
その時、ふと彼女の耳に、今度は、金属が勢いよくねじ切れるような、まさしく金切り声と言ったような高音が響いた。
その音の原因が何なのかは、音のした方向へと（先程の爆発音と同じ位置だ）ブレンを振り向ければ、分かることだった。
輝夜の網膜に、その一瞬の動きが、スローモーションのごとくゆっくりと展開され、焼きついた。
ソードエクステンションを振り下ろした体勢のまま、先程のブレンの下方へと流れていっているグランチャー。
振り下ろされたチャクラの刃は、その勢いによる斬撃の軌道上に光の余韻を残し、鋭い切っ先には、まるで返り血のように、点々とした火花が灯っていた。
大きく仰け反った姿勢のブレンの股間部からは、胎内を保護していた装甲が抉り取られていた。
そのブレンの傍らには、紫色のハクレイブレンが、ブレンバーを縦に振り下ろした体勢になっている。
どうやら、ブレンを攻撃しようとするグランチャーの動きを食い止めようとしていたようだ。

本来ならば、身体全体を縦に真っ二つにされるはずだったブレンは、この行動のおかげで、ただ股間部の装甲を抉られつだけに留まった。さすがに、右腕を吹き飛ばした一撃を防ぐことはできなかったようだが。

そして、ブレンの肉体が両断されるのを防いだところで、それがどうしたのだ、ということでもある。

すでに右脚と右腕が吹きとんでしまっているというのに・・・

一瞬が、十秒にも百秒にも感じられた、その後だった。

ブレンを切り裂いた深紅のグランチャーは、その勢いのままに、魔法の森に頭から突っ込むように垂直に流れた後、俄然カクン、とほぼ９０。に近い角度で急激に加速の向きを変え、そのままこの場から離脱しようとした。

一気に離れていくグランチャーを逃すまいと、追いすがろうとするハクレイブレンだが、この時のために取っておいたとばかりに、グランチャーは加速の慣性にのったまま一瞬だけブレンの方に向き、限界まで威力を高めたソードエクステンションを一射した。

チャクラエクステンションにこそ匹敵することはないが、通常のパワーで放つブレンバーの数倍はある威力の一撃だ、並のチャクラシールドならば容易に突き破る。

しかしこの一撃も、霊夢とハクレイブレンにとっては、決して脅威的なものではない。

回避することも充分可能だった。

だがそれも、今この場においてはできなかった。

霊夢の、

「ひどいじゃないちょっとっ！」という、喚き声が響く。

これぱかりは、さすがの彼女も焦った。

ハクレイブレンのすぐ傍に、もう一体、助けるべきブレン・・・朱鷺子のブレンがいたからだ。

このまま霊夢だけが逃げれば、朱鷺子のブレンがソードエクステンションに巻き込まれる。

股間の装甲が抉り取られた今、チャクラ光の直撃を受ければ、百歩譲ってブレンが無事だったとしても、ほとんど野ざらしに近い状態になっている宿主が無事で済むわけがない。

よくて丸焼き、悪ければ蒸発してトマトソースだ。

そんなことは、さすがに妖怪退治が役目である霊夢でも容認することはできなかった。

ブレンは正直言って・・・最早助からないだろう。

例えこれからまったくダメージを受けなくとも、今まで受けたダメージの深刻さを考えれば、そう結論付けるしかなかった。

人間が、右腕右足が切断されそのままの状態で放置されて、生きていけるわけなどない。

だが、この一撃を防げば、妖怪だけならば、何とか助けられるはず。

霊夢は、とにかく、ブレンに対して己の意識を通わせ、生命力を送り込んだ。

『強固なる結界を張れ』という思念と共に。

「させるわけないわよねぇ、ブレンっ、やるわよ！」

彼女の叫びと共に、朱鷺子のブレンの前に躍り出たハクレイブレンが、迫り来るチャクラ光に向けて、両手を突き出した。

ばっ、と広げられた左右の五指、そして手のひらから、収束されたチャクラが薄い膜膜・・・広範囲に渡るチャクラシールドとなって展開される。

薄く広がるオーロラの光。
そしてそれに迫る、チャクラエクステンションと同じような真っ白な鋭い光。
そのふたつが衝突し、ハクレイブレンと、その背後に浮遊する朱鷺子のブレンの二体を包み込むような格子状の光の群れが、チャクラシールドに沿うようにして広がった。
ソードエクステンションの光が引き裂かれ、四方へと拡散している。
二体のブレンを避けるようにして進む数条の光はそのまま後方へと流れ、空気中に溶け込むように消滅していく。
両手を突き出し、叩きつけてくるチャクラ光を受け止めるハクレイブレンは、海を裂いて渡ったモーセとまではいかずとも、あえて水流に逆らうような勇ましさを見せていた。

やはり、問題はない。
以前もこれに匹敵する一撃を、同じくさとりのブレンを守りながら防ぎきったブレンの能力と、霊夢の冷静な判断力があれば、例えこの突然の攻撃であっても、充分対応することは可能だった。
そう易々と、やらせるものか。

次いでハクレイブレンは、前へと突き出していた両腕を、勢いよく左右に広げた。
それはまるで、閉ざされていた扉を開け放つような動きであった。
実際、開け放っていたのかもしれない。
迫り来る狂暴な光の壁をこじ開けて、安全な領域へと至るべく。

ばっ、と広げられた腕の動きに呼応するように、チャクラシールドもその形状を変える。
巨大な扇のようになって、浴びせられるチャクラ光を一気にすくい取り、振りはらい、かき消していく。

激しい光・・・太陽がすぐ傍にまで上り来るような光がハクレイブレンの眼前に輝き、左右に伸ばされた腕を沿うようにして、二方向に引き裂かれたオーガニックエナジーの奔流が、濡れた手拭いで壁を叩いたような鋭い音と共に、稲妻のように唸り煌めきながら、流れていく。

やがてその雷光のごとき奔流も、左右へと広げられた勢いのまま遠方へと流れ、霧のように薄まりながら消えていくチャクラシールド諸共、その余韻を残すこともなく消え失せた。

激しく光が灯ったのはほんの一瞬のことであった。

霊夢が思わず眼を閉じるよりも早く、陽光よりも眩しい光は、無数の稲妻となって散らばり、その稲妻も、見えたと思ったその瞬間にはすでに消えていた。

今まで、何ひとつとして起こっていないような、不気味なまでの静寂がその場を通過する中で、霊夢は、自分達が敵の攻撃を撃ち消したのは、人が呼吸して生きていくように至極当然のものであると考えつつも、それ以上にまず、この攻撃を放ってきたあの深紅のグランチャーに注意を向けることにした。

「逃がさないわよ！」

と叫びながら、その敵を追撃せんとする。

しかし、霊夢が叫んだその瞬間には、グランチャーはすでにハクレイブレンから大分遠くにまで離れた後であった。

チャクラ光を受け止めている間に、一気に距離を取ったのだろう。

先程は、まだはっきりとその姿を確認できるほどの位置にいたはずの深紅の機体が、今はもう、四肢の形すらもはっきりと視認できず、まるで虫の一匹のようにしか見えないところにいる。

かなりの速度を発揮しているらしく、尚も距離は離れ、その虫のような影もさらに小さくなっていく。

ハクレイブレンもその気になれば、グランチャーと同じほどの加速

をかけることもできるだろうが、あまりに速度を上げ過ぎると、さすがに霊夢の身体が危険になるほどの重力がかかってしまう。
いくら周囲を無重力にできるといっても、Gは生じるものだ。
そのことを懸念すれば、無闇やたらに加速することはできない。
そして、安全な範囲での加速を今からかけたところで、追いつくことは難しいだろう。

このまま、逃がすしかないか・・・

いや、違う。
霊夢の視界に、最早ノミほどに小さくなった紅い影を追う、もうひとつの黒い影が映り込んだ。
どうやら、ハクレイブレンがチャクラシールドを展開している間に、その脇をすり抜けて、逃げるグランチャーを追撃していたらしい。
その速度は速く、何がなんでも敵に追いすがろうと、紅い点のような影に対し、黒い染みのようになってかなりの近距離にまで接近していた。
ハクレイブレンが霊夢を心配して発揮しなかった速度をこれ見よがしに見せつけ、遠ざかっていく。
あれはブレンパワードだ。
一瞬で遠くまで離れていったためはっきりと姿は見えなかったが、あれは間違いない。
あの黒い色は・・・

霊夢は思わず、大声を発して、その名を呼んでいた。
「魔理沙ーっ？」

※

空気が身体に圧し掛かってくる感覚が、これほど苦しいものだとは思わなかった。
音速の数倍。とうとう、あの文にも追いつくことができるのではないかと思えるほどの速度を発揮したブレンの胎内。スリットウェハーの押しつけられる魔理沙の身体を、未だかつてない感覚が襲っていた。

これだけの加速をかけてでもグランチャーを追えと言ったのは、その魔理沙当人だ。耐えるしかない。
全身の骨という骨が軋み、親指ぐらい太さの木の枝を力を込めて曲げ、折れるぎりぎりのところで聞こえてくるミシミシという音が、身体の内側、いたるところから響いてくる。
あるいは、圧迫され、滞る血流をどうにか動かそうと心臓が早鐘のごとく打たれ、強引に流されていく血流が血管を脈打たせる音も、こめかみのあたりから聞こえていた。
ここでもし、真っ直ぐに、空を流れる流星のごとく進むブレンの軌道を少しでも変えれば、限界のところでかろうじて流れている血流は一気に止まり、一瞬の下に魔理沙は意識を失うだろう。
また、身体の内側から鳴り響く細胞の悲鳴と、それに隠れるような耳鳴り以外には、音と呼べるものは聞こえなかった。
音の速さを置き去りにしているのだから、音が聞こえなくなるのも当然のことではある。
だが、空を切り裂いて進んでいるのにその音が聞こえないというのは、不気味だった。

不気味というのなら、ブレンの視界を流れていく景色もそうだ。
遠くの方に小高い山が見えたかと思うと、次の瞬間には、もうそれがすぐ真横に見えている。
しかも、少し前には山だと視認できたはずのものが、最早物体であるのかも分からないような無数の色の線のまとまりとなって、瞬く間に通り過ぎ、後ろへ流れていく。
そして魔理沙は、そのような光景をそもそも見ることさえできなかった。
このままでは、眼もどうにかなってしまいそうだった。
ぺしゃんこに押しつぶされ、あふれ出る鮮血を涙のように流しながら、魔理沙の視覚を奪い去る。
その瞬間が、すぐ傍に待ちかまえているような気がした。

四方から、ありとあらゆる暴力がじりじりと詰め寄ってきて、一斉にこの身を破壊しつくす瞬間を待っている。
そんな気分だった。
いっそ滑稽だと感じ、悲鳴を上げようにも、まるで頭と顎を大きな手で押さえつけられているように動かず、真一文字に噤まれていた口元を引きつらせて、苦笑いしてしまう。

そんな中においても魔理沙は、眼球が重力という車輪によって轢死する恐怖に思わず眼を閉じたくなりながらも、それを堪え、どうにかうっすらと開けられた瞼の間から必死に視線を凝らして、前を見る。
前を進んでいる深紅の影、グランチャーを睨みつけるために。
あれには確かに、咲夜が乗っていたはずだ。
どうにか食らいつこうと、必死に加速したおかげで、大分近いところにまで接近している。
速度も今はマリサブレンの方が僅かに上だ、このままの状態を維持できれば、いずれは完全に追いつくこともできる。

そしてあの深紅のアンチボディが、戦意を失っていたあのブレンを攻撃したのだ。
ブレンは完全に戦う意識を失っていた。
だというのに、何故咲夜はあえて彼の者を攻撃したのだ？
魔理沙は、いかなる理由があれ、咲夜のやった行いに対し、嘔吐され胃液と共にあふれ出んばかりの憤りを感じていた。
その憤りと、事態を食い止められなかった自分達の情けなさを吐露するように、彼女は胸中で言った。
――あんたが・・・あんたがやったんだな・・・一体どうしてっ？あのブレンには、もう戦う意思がないことは、咲夜にだって分かっていたはずだ。だったら、攻撃するならあたし達のブレンでもよかったじゃないか！あのブレンは、訳も分からないまま巻き込まれて、自分がどうしてそうなったのかも分からないまま、身体をバラバラにされて苦しんでいるんだぞっ？そのことを考えられないのか！・・・あんたは・・・・・・・・・・いや、違う・・・そんなこと言っちゃえば、あたしだって・・・――
「ふぅ・・・く・・・っ！」
途中で魔理沙は気がついた。
この自分の叫びも結局、自分自身のことを棚に上げた、怒りに任せての感情論でしかないことを。
そうして思わず彼女は、自分のことを情けなく思い、喰いしばった歯をより一層、砕けんばかりに強く噛みしめた。
ブレンの気持ちを考えろと言った。ブレンを殺めることに罪悪感はないのか、と。
だがそれこそ、今まさに、恨みと憤りを以って、明確な殺意をグラ

ンチャーに向けている魔理沙にだって言えることなのだ。
ブレンを傷つけられた恨みを晴らすため、何が何でも敵に追いすがろうとするこの意思が、殺意でないわけがない。
ならば魔理沙には、ブレンを殺めようとしたグランチャーが避難できるのか・・・
オルファンを守るためにグランチャーと戦うことを決めたが、なら、その戦いの中でグランチャーを殺めることに、罪の意識はあるか？

そんな認識が、魔理沙の脳裏に、ブレンと初めて戦った時のこと、自分達が殺めた、グランチャーの姿を浮かび上がらせた。
真っ白なグランチャーの肉体を、今回のブレンと同じように切り刻み・・・

あの時は、向こうから襲いかかってきたのだから仕方ないとは思う。
それに、ブレンがグランチャーを敵だと考えるのなら、倒すしかない。
しかしあのグランチャーの胎内には、宿主がいなかった。
きっとあの者は、生まれたばかりであったのだ。
何も分からずに、寂しかっただろうに。
それでも、敵であるから止むを得ず倒すことは、間違いではないのかもしれない。そうでなければ、やられていたのはブレンの方だった。
なら・・・あのブレンのことだって、止むを得ないことと、正当化されるのではないか？

「く・・・・・うぅぅ・・・っ」
何故かは知らないが、眼がしらに何か熱い物がこみ上げてくる。
頭の中を、そうして胸の中をぐるぐると回る感情の渦が漏れ出して、眼元から流れ出ようとしているのか・・・

魔理沙は、いっそ悔しかった。
自分の意思でさえ、冷めた認識に邪魔をされ。感情を突き通そうにもそれができず。
両極端になることができない。
いっそオルファンを悪者にしてやっつけようとしても、ブレンのことを考えるとそれもまたできない。
そのくせ、ブレンの敵を無心にやっつけることもできない。

いつの間にか、胸中での声は、叫びとなった。

――なんなんだっ？あたしはなんでこんなこと考えてるんだよ！こんな思考の堂々巡りをして、何が楽しんだ！これじゃ・・・これじゃ、馬鹿みたいだ！ブレンを助けてやることもできず、その仇を取ろうと思えば、こんなことを考えるし・・・まるで、あたしのやってることに、意味なんてないみたいじゃないか！・・・みんな・・・みんな空回りしてるじゃないかぁっ！――

その瞬間だった。

魔理沙の視界、きつく絞られた瞼によって狭窄された世の中の姿が、真っ白に染まった。
ほとんど閉ざされた薄皮を突きぬけて網膜に焼きついてくるその白い光が、チャクラ光であることが分かったのは、走馬灯・・・スローモーションによりゆっくりと、視界と共に脳裏が白熱化していくその中でのことだった。
マリサブレンが追撃していることに気がついた敵が、すぐさま背中を向けたまま、ソードエクステンションの銃口だけをこちらに向け、オーガニックエナジーを高圧縮させた一撃を放ってきたのである。

ある程度距離が詰まっていることが、逆にマリサブレンにとっては脅威だった。

迫り来るソードエクステンションの猛威は、すでに、眼と鼻の先にまで来ている。

完全に回避することは不可能だ。

となれば、むざむざ直撃を受けるしかない。

だが、この光の強さだ、身体のすぐ傍で炎が燃え上がっているような熱さが、肌をじりじりと焼くのが分かる。

まだ当たってすらいないのにだ。

このまま直撃を受けて、生きていられるのか？

あのサトリブレンのように身体が焼け爛れて・・・いや、もしかすると、身体の奥の奥まで焼き尽くされて、死んでしまうのではないか？

こちらも一緒に、血液を沸騰させられながら、中世の魔女狩りさながら火に炙られて、真っ赤な炎が世界を染めていく光景を眼に、文字通り焼きつけながら、悲鳴を上げて。

これが恐怖でなくて、なんだというのか・・・

魔理沙は、認識が拡散し忘れ去られ幻想になるように、バラバラに散らばりそうになっている意識を懸命に繋げ合わせながら、胸中で叫んだ。

――嫌だ！死にたくないぜっ・・・ブレン、助けてくれ！・・・助けてっ！――

魔理沙のブレンは、自分以上に、他者のことを信じて生きていける者だった。

彼の者は、魔理沙のこの悲痛な叫びを聞き入れ、彼女の願いを叶えるためだけに、今この一瞬の生命を、全て燃やしつく覚悟を決めた。

信じられないほどの瞬発力を発揮し、今まさに頭部を飲み込もうとしていた光の奔流の下へつま先から滑りこむように、ブレンは仰向きに身体を倒した。
同時に、その肉体を地面に向けて飛びのかせ、眼前を通過していく光から遠ざかろうとしつつ、両腕をその光に向けて突きだす。
チャクラシールドを展開するためだ。
得てして、それがブレンが本能的に身につけていた、暴力を防ぐための構えなのだろうか？
ハクレイブレンがソードエクステンションを受けた時と、同じ格好をしていた。
早苗ではないが、まさしく奇跡的に、直撃を受ける寸前に下方へと回避し、通過するチャクラ光の下へと潜り込んだマリサブレン。
しかしまだ、全てを飲み込むようなチャクラエクステンション級の一撃が発生させる猛威は襲い来る。
竜巻に飲み込まれるかのような圧力。マグマに間近に顔を近づけたような熱気が、容赦なくマリサブレンを襲う。
ブレンは、全てのオーガニックエナジーを使い果たすつもりで展開したチャクラシールドにより、それを受け止めようとする。

「き・・・来たああぁぁぁぁっ！」
自らが発する悲鳴と共に魔理沙は、チャクラシールドで抑えきれず胎内にまで伝播し熱気に、身体を包み込まれた。
しかし、ブレンの必死の働きもあって、あくまでのその熱は摂氏７０か、８０℃にまで抑えられていた。
乾式のサウナ風呂よりも少しだけ低いぐらいの温度だ。
しかし魔理沙にはそれが、自分を磔にして足元から燃え上がってくる業火に思えた。

しかし魔理沙には、この業火と、それに焼かれる恐怖から逃れる術はあった。
先程実感していたことだ。
強烈な加速をかける中で急激に方向転換すれば、そのことで血流が滞り、酸素の供給を受けられなくなった脳の機能が麻痺する。
魔理沙の脳裏に、肌に当たる熱波に取って代わるように、ぴしりと、電撃のような感覚が駆け巡った。
「はぅっ！・・・あ・・・ぅぅ・・・」
その痛みを認識するまでもなく魔理沙は、まるでその電撃に神経を焼ききられたかのように強張っていた顔の力が抜け、力なく、眠るような表情になった。
力を失ったのは、顔だけではない。
今まで、恐怖に対し本能的に身構えていた全ての筋肉が一瞬で弛緩し、スリットウェハーにしがみ付いていた両の手が、するりと離される。
内臓を構成する平滑筋までも弛緩しているのか？
縮こまっていた胃袋もゆるりと広がり、逆流する胃液を抑えることができなくなった。
喉元に、一気に何かがこみ上げてくる。

「ぅ・・・ごほ・・・っ」
魔理沙は、弛緩した筋肉をほんの一瞬だけ再び強張らせ、せき込むように黄色く濁った液体を吐き捨てた。
それから先はもう、同じように筋肉が再び躍動することはない。
薄らいでいく意識と共に、思い出したように再び弛緩するだけだった。

こうなった人間を形容する言葉には、糸の切れた人形というものがどこまでも相応しい。

魔理沙の身体は、彼女のその透き通った肌と相まって、まさしく糸の切れた人形そのもののように、四肢を力なく垂らしながら、ふわりとスリットウェハーの空間の中に浮き上がる。
重力の下であるはずなのに、今一瞬だけこの場は、無重力に近い状態になっていた。

ブレンの展開するチャクラシールドは、ソードエクステンションが及ぼす熱量を防ぐことはどうにかできていた。
装甲が炙られるようなこともない。
しかしもうひとつ、チャクラ光が発生させる激しい気流だけは、防ぎきることができなかった。
ソードエクステンションは、空を裂き、その空を外へ外へと押しのけることで、振り下ろされるハンマーのごとく強烈な衝撃を発生させていた。
この一撃は最早光を収束させた熱量の塊ではなく、物理的な破壊力までも備えていた。
チャクラシールドを強固な壁として展開することにより、それが逆に押しのけられ吹きつけてくる風の受け皿となり、ブレンの身体を遥か遠くへと押し流そうとしていく。
しかしそれは、むしろブレンにとっては助かった。
押しのけられるようにして光から離れて、そのまま安全圏まで逃れることができる。

限界まで膨らんだ風船が叩き割られたような破裂音と共に、風圧によりチャクラシールドは弾かれ、ブレンの身体がきりもみしながら地面目掛けて落ちていく。
チャクラシールドに全てのオーガニックエナジーを集めていたブレンは、すでにそこから体勢を立て直すだけのオーガニックエナジー

がなく、重力に従って自由落下に身を任せるしかなかった。
先程までの加速の慣性も相まって、四肢を広げてくるくると回転しながら、真下ではなく斜めに向かって落ちていた。
魔理沙も昏倒してしまっている。
彼女が、踏ん張るように声をかけてくれることももうない。

自分達を襲ったチャクラ光は、その猛威を見せつけるかのように、遥か彼方にまでその棒状の光を飛ばしていく。
しかしながら、段々とそれが、空に吸い取られるように小さく消えていくのも見えた。
このままやがて拡散し、無かったようになるだろう。
深紅のグランチャーはこの一撃の間に、一気にブレンから離れてしまったようだ。
すでにブレンの視界には、敵の姿はまったく映っていなかった。
もっとも、きりもみする身体と一緒にぐるぐる回転する視界では、敵は愚か何も見ることはできないが・・・
もし敵がこのままブレンにトドメを刺そうとすれば、力を失った今では耐えることができなかっただろう。
敵が大人しく撤退に専念してくれたことで、ブレンは助かった。

そういう意味では咲夜の選択は、間違いではなかったろうが、迂闊でもあった。

最早落下を食い止めることも、受け身を取ることもできなくなったマリサブレンは、ただ、胎内にいる魔理沙に何も起こらないことだけを祈って、木が生えているのか、柔らかい土が広がっているのか、あるいは岩が埋まっているのかも判別できない地面にただ身を委ね、叩きつけられた。

ゴゥン、という重苦しい金属音が、薄い雲がかかった昼の空に、虚しく響き渡った。

※

「ん・・・ぅ・・・」

気が付けば、視界が真っ暗だ。

頭もぼやける。生温い水につけられて、脳みそがふやけてしまっているようだった。

遅れて魔理沙は、自分の視界が真っ暗なのは、眼を閉じているからだということが分かった。

てっきり、とうとう眼が潰れて、失明してしまったのかと・・・

そんなことを考えた途端、彼女の脳裏に、今しがたまで自分を襲っていた加速によるGの苦しみと、敵が放ったチャクラ光の猛威が思い出された。

そうだ、それは一体どうなったのだ?

あの時の感覚が、今もなお身体を苛んでいるかのようにはっきりと思い出される。

いや、もしかして実際そうなのではないか?

あるいはまさか、自分は死んでしまっていて、ここはあの世の世界なのか?三途の川の渡し船の上で眠っているのか?

それともう、輪廻転生の理を超え、涅槃寂静に至ったか?

途端に、恐怖が再び身体の奥から湧き出てきた魔理沙は、それを振り払うように、閉ざされていた眼をかっ、と見開き、腹の底から息を吐き捨てた。

「はぁぁ・・・っ！」

視界には、スリットウェハーが見せるいくつもの溝が奔る壁面が見えた。

それだけでも魔理沙は、自分が生きていることを確信した。少なくとも、ここが死者の世界でないことが。

死んでいて闇魔様に裁判を受けているのなら、こんなところにいはしない。

その認識と同時に、吐き捨てた息と一緒に何かがこみ上げ、思わず「ごほっ・・・ごほ」と、むせかえってしまった。

だがそれもまた、苦しみを受けながらもまだ生きていることの、この上ない証明となる。

弛緩していた筋肉が、目覚めるように引き締まっていく。

平滑筋はすでにその機能を取り戻しているらしく、腸（はらわた）がゆるゆるになるような気持ち悪さはなかった。

急に全身の筋肉が沸き立つように収縮し、魔理沙は思わず、

「んわぁぅっ」と妙な声を出しながら、一回だけ大きく痙攣した。

どくんと、血液が全身を巡り巡っていく音が、まるで鼓膜をハンマーか何かで直接叩いたかのようにはっきりと聞こえた。

それが、自分の身体に生命の源を流し込まれたかのような感覚を与える。

どくんどくんと、心臓が拍動する音が聞こえるような気分になりながら、周囲をきょろきょろと見回した魔理沙は、自分がブレンの胎内の下面に仰向けになって倒れていることが分かった。

しかも頭の上の方には、外へと通じる穴がある。

魔理沙は、一体どうしてそうなったのかは分からないが、ブレンから見て前側に頭を向けて寝そべっていた。
球形、というより平面に近いなだらかな傾斜をしている下面の真ん中あたりに頭があって、下の方に目線を向けると、多分先程まで背中を預けていた場所にだらんと両足が投げ出され、靴のかかとが溝の引っ掛けられていた。
これでは寝そべるというよりかは、壁にお尻をあてて、床を背もたれにして座っているようだ。

魔理沙には分からなかったが、ブレンが落下したその場所は、幸運にも小さな林になっていた。
ちょうど木の枝と枝が密集している場所に飛び込むようにして突っ込んだ。
生い茂る木々がブレンの肉体を受け止めて大きくしなり、上手い具合に落下の衝撃を分散させてくれていた。
とはいえ、ブレンほど巨大な肉体を持てば、落下による衝撃も並み大抵のものではない、人身事故で起こる不幸中の幸いといった具合に、まったく無傷で済むというわけではなかった。
当然ブレンを受け止めていた木の枝はほとんど全て折れ、ブレン共々地面に対し強かに叩きつけられることにはなった。
人間が同じ衝撃を受けて地面と衝突すれば、細胞が砕けてバラバラになりながら、ふやけた真っ赤な土のような物体の山がその場にできあがることだったろう。
あるいは、バラバラに吹き飛んで、榴散弾となって飛び散るか・・・
しかしブレンは、急所であるスリットウェハーを保護する装甲と、身体の大きさに見合う頑丈さ、そしてスリットウェハーの持つ収縮力と弾性のおかげで、何とかそれだけの衝撃に耐えることができた。
林の木々が、都合よくしなってブレンを身体を運び、尻餅をつくよ

うに地面に降ろしてくれたことも助かったのかもしれない。
胎内にいる魔理沙も、スリットウェハーがクッションとなって保護してくれていた。

第十二話　その3

まだぼんやりとしている意識を落ち着かせるため、眼を深く閉じ大きく深呼吸してから、魔理沙はようやく、だらしない姿勢で寝そべっている身体を起こそうとした。
だが、ちょうどその時、マリサブレンが彼女が目覚めたことに気がついた。
そうして、その身を案じていろいろと呼びかけてくる。
魔理沙は、起き上がるよりも前に、彼女らしい笑顔を見せて、
「あぁ、大丈夫だ．．．どうして大丈夫なのか分からないけどな．．．」と応えた。

そうして、安堵しているブレンのことを感じながら、改めて身体を起き上がらせようと考える。

だが、できなかった。
「．．．．．．？」
確かに元通りに動くようになっているはずの筋肉が、またしても事切れたように反応せず、ぴくりとも動いてくれなくなった。
金縛りにあったかのように、魔理沙の身体は、強張ることも、緩まることもできなかった。
自分では力を込め、余計なほどに強く躍動するように命じているのに、実際はそうしてくれない。
そうして魔理沙は、ぼんやりと前を、正しくは上を見つめる眼に、

涙が溜まっていることに気づいた。

そうして、分かった。

あぁ。

思い出されたのは、痛みとか、恐怖だけじゃない。

心の中を錯綜した、自分に対する無情な気持ちもだ。

何ひとつ・・・ブレンを守ることも、敵に一矢報いることもできなかった自分への嫌悪感だ。

情けない・・・こんな格好になって、気を失っていた。

しかもその前には、死を恐怖して、心の中で喚いたりもした。

あの時倒した白いグランチャーだって、きっと同じことを考えていたんだぞ？

それに気付いた時、魔理沙は上向きになった眼にたっぷりと溜まってから、こめかみを伝って流れていく大粒の雫を止めることができなくなった。

春先の水面のごとく、美しいまでに滲んだ眼を隠すように、ようやく動いた右手で三角帽子（実際は三角帽子ではないのだが、便宜上そう呼んでおく）の長い縁（へり）をつまんで、それを眼元にまで引き寄せた。

そのまま帽子が頭からすり抜け、真黒で広い縁が魔理沙の眼を隠し、見えないようにする。

しかし、固く噤んだ口元がひくひくと震えるのを見れば、彼女が泣いていることが分からないわけがなかった。

誰も彼女の姿を見る者、見れる者がいないのなら、本当は隠す必要だってなかった。

魔理沙の、柔らかくも微かに震えている哀しい声が、ブレンの胎内

に反響する。

「ホントに、情けない・・・あたしのやってることはみんな中途半端だ・・・・・これじゃ、咲夜に口ごたえする権利だってありゃしない・・・・」

ひと息にそう言ってから、一度鼻を啜って続ける。

「・・・ブレン、あんた達のために頑張るには、あたしはまだ・・・力不足なのかもしれない・・・・・・悔しい・・・」

それだけ言うと、魔理沙はもう、何も言わなくなった。
ただ、帽子の縁で眼を隠したまま、小さな肩を震わせ、嗚咽を漏らすばかりだった。
小刻みに、静かに吐き出される息の音が、狭い空間に木霊する。
その哀しい響きも含めて、ブレンはただ、魔理沙の心と身体をその魂で包み込むだけだった。
オーガニックエナジーが作り出す揺り籠の中で、眠らせるように。

仰向けになっていた魔理沙の身体が、ゆっくりと横向きになる。
それと一緒に、スリットウェハーにもたれるように伸ばされていた両足も一緒に傾き、振り子のようにだらりと降ろされた。
彼女は降ろされた足を曲げて膝を胸の傍にまで寄せ、その場で身体を丸めた。
それと一緒に、眼元に被さっていた帽子がずり落ちそうになるが、両手で縁の両端を押さえると、今度は顔全体が隠れるようにして、押しつけた。

先程までは、帽子の縁から覗いて嗚咽と共に温かい空気を吸い込むように開かれていた口も、一緒に帽子の影に隠れて見えなくなる。

彼女の啜り泣く声が、布の中にくぐもって小さくなった。
小さく丸まることで、先程よりもずっと小さくなった気がする魔理沙の身体が、彼女が鼻を啜るのに合わせて、微かに震える。

その姿を見る者は、この場には一人としていない。
彼女の身体を包み込むブレンでさえ、それをまじまじと見つめるようなことはしなかった。
心配するようなことも、慰めるようなことも止めることにした。
分かっていたからだ。
今の魔理沙には、慰めてやるような必要はないということを。
彼女と深くかかわることで、ブレンは、彼女の心の奥底にあるこの上ないほどの向上心を知っていた。
グランチャーに対する憎さもそうだし、助けるべきはずのブレンをむざむざ傷つけてしまったこともそうだが、それ以上に、そういう事態を招いた自身への自己嫌悪のために涙まで流す魔理沙が、決してそのことで暗いところにまで落ち込んでいくような者ではないことを。
この涙は、自分の中での気持ちの整理をつけるための、儀式のようなものであるのだろう。

そのことを証明してくれるのは、すぐ後のことだった。
肩を震わせ泣いていた魔理沙だったが、その嗚咽は段々と小さく、少なくなっていく。
やがてはすんすんと鼻を啜る音しか聞こえなくなり、やがてその間隔も短くなっていき、ついには聞こえなくなった。
身体の震えも、いつの間にか7止まった。
そうして彼女は急に・・・いや、ブレンにとっては予想できていたのだが、横向きになっていた身体をもう一度ごろんと仰向けにしてから、勢いよく上体を起こした。
むくりと起き上がるのと一緒に、顔にかぶせていた帽子を離すと、

「んあぁふ．．．」と鼻の詰まった時独特の妙な声と共に大きな息を吐いて、縁を持っていた両手で今度は三角帽子のクラウンと呼ばれる、丁度頭に被さる部分の中頃の当たりを持つと、そこを鼻に押し当てた。
そうして、思いっきり、ちーん、と音を鳴らしながら鼻をかんで、また帽子を顔から離す。
そうしてもう一度、
「んあぁ．．．」と、鼻のつまった声を出した。先程よりかは、まだちゃんとしている声だ。多少は鼻も通っているようだ。

そうして魔理沙は、持っていた帽子を横向きにクルリと１８０。回転させて、今度は涙に濡れた眼元を拭うようにしてまた顔に押し当てると、強引にごしごしと顔を拭いた。
再びそれを顔から離すと、ついさっきまで自分の頭に被さっていて、今しがたちり紙代わりに酷使した三角帽子を眺めて、ほんのりと笑みを浮かべながら言った。
「後で洗わないとな．．．ネバネバしてるぜ．．．」

その声を聞いて、ようやくだ。
ブレンが魔理沙に対し、大丈夫か？と聞いてきた。
それこそが、ブレンが魔理沙のことをよく理解してくれていることをどこまでも遠まわしだが、示していた。
そうして、魔理沙自身もそのことが分かることで、自分とブレンの間に結ばれているものが、決してキレやすく、脆いものではないということを確認できた。
余計な二言は不要だった。

魔理沙はそのまま帽子をすぐ横に置くと、体育座りのような形で曲

げられていた足を伸ばし身体全体を起き上がらせ、背中の方にあったスリットウェハーの穴にちゃんと正面を向くようくるりと振りかえる。
そして、さっきまで靴の踵が押し付けられていた場所に背中を預けて、そのまますると腰をおろしていき、ぽふんとお尻を床につけて座り込んだ。
それから足をまげてあぐらをかくような姿勢になって、ようやく彼女は応えた。

「フーーーー・・・スッとしたぜ」
かれこれ五分ほど泣いてばかりいたが、そのおかげでもう、心の内は今この世に生まれたかのように澄み切っていた。
ブレンを助けられなかったことはそれ、咲夜に出し抜かれたこともそれ、それを引き起こした自分のふがいなさもそれだけのこととして割り切り、すぐに頭の隅の方へと追いやった。
魔理沙はそうやって、気持ちを切り替えることのできる者だったわけだ。
それは人間だからである故だ。
妖怪ほど寿命が長くなければ、ひとつのことにくよくよしている時間だって少なくなる。
すぐに割り切らないと、価値のある時をどんどん失ってしまうからだ。
落ち込んでいる間に、もっとやられることがあると考えればそもそも哀しみなどではないとさえ考えられるようにならなければいけない。
そうして彼女は、生きている内に自然とそれを実行できるようになっていた。
自分がみっともなく身を縮こませて泣いていたことも、もう笑い話

にできるほどの心境になった魔理沙は、ブレンの眼を通して胎内に映る光景に眼を向けた。
胎内から通してみた光景を映せば、大分広い範囲が映されるのだが、ブレン視点の方が、身体が大きい分スケールアップしているのか、かなり遠い範囲まで見ることができた。
そういう意味では、あえてブレンに見回せた方がいい時もある。
林の木々が上手い具合に働いてくれたおかげで、座り込むような姿勢で着地しそのままでいたブレンが、首を左右に回して周囲を見る。
近くには何もないらしい。
ところどころ、ブレンのすぐ傍にある林と似たようなものがいくつかあり、地面には青々とした芝生が生い茂っている。
広大な草原といったところか。
この狭い幻想郷においても存在する、何かある場所と何かある場所の境目にある、なんにもない場所だ。
衣服の編み目のような場所。
緩やかな風が吹き抜けても、背の高い芝生は、煽られて揺れ動いたりも、葉を擦らせて心地よい音を発したりもしない。

と、斜め右の方、遠方に、薄いぼんやりとした靄にかかりながらも大きな影が見えた。
高く盛り上がるような影。遠目から見ても、その大きさに圧倒されるような大きさだ。
高さなら、オルファンにだって勝っている。
あれは、妖怪の山の山影だ。
戦場であった魔法の森と山は、決して近くはない。
むしろ遠いほどの距離だ。
そのことを考えると、グランチャーを追っている内に大分遠くまで来てしまったらしいと察することができる。
まぁ、マッハいくつの速度を出せば、それも仕方ないか・・・

魔理沙は、こちらの身を案じてくれるブレンの身のことも、感謝の気持ちと共にしっかりと確認した。
というか、ブレンの調子が悪いと、困るからというのもある。
ソードエクステンションを防ぐためにオーガニックエナジーを消費していた彼の者だが、魔理沙と共にこの場で休んでいる内に、多少は力を取り戻していたらしい。
戦闘はさすがにできるわけがないが、空を飛び移動するのは問題ないことが分かった。
落下による衝撃を受けた身体は、人間でいう打撲のような状態になっているところもいくつかあるようで心配にはなったが、死にはしないし、完治する負傷であるらしいので、この際気にしないことにした。
立ち上がらせたいと考えたが、足のスリットウェハーも本調子ではないようなので、無駄な負担をかけないように気をつけさせよう。
魔理沙は、上手い具合に、立ち上がる動作と宙に浮き上がる動作をほとんど同時に行わせることにしてみた。
腰に風船をつけながら立ち上がるようなイメージをし、それをブレンに実行させてみる。
曲げられていた両足がゆっくりと伸ばされていく。
だがそれは、浮き上がる風船に括られて地面にたらされていた糸が、一緒に上がっていってぴんっと張りつめるのと同じようなことだった。
ほとんど足に力は込められていない。これは、座り込んだまま浮きあがろうとするその動きによるものだった。

ブレンの身体がゆっくりと起き上がり宙に浮くと同時に、足も真っ直ぐに伸ばされ、直立する姿勢になった。
一度宙に浮いてしまえば、足なんて飾りです。
無茶な動きさえしなければ、このまま身体に負担をかけることもなく、飛行できるだろう。

一応は、生命をつなげた大恩があるらしい林の木々をチラリと一瞥しつつ、それよりも遥かに高いところにまで上昇していくブレン。
可哀想だが、何本かの枝が折れて、地面に落ちてしまっている。
だからといって、償いに何かしてやるというわけではないのだが・・・

魔理沙は、飛び上がるブレンの胎盤を右手で撫でながら、嬉しそうに言う。
「さすが、あたしのブレン！あたしはこの通り駄目な人間だが、あんたと友達でいることだけは誰にだって自慢できるぜっ」
心の底から友好の意を込めて語ったその言葉に続いて、魔理沙は、すっかり置いてきてしまった、あるいは爪弾きにされてしまった、魔法の森のブレン達のことに意識を向けた。
グランチャーが撤退したのを考えると、戦闘は間違いなく終わったはずだ。
しかし、件のブレン。誰が乗っているかも分からないあのブレンは、相当なダメージを受けている。
生きていけるかどうか、分からなかった。
気を取り直したとはいえ、やはり心配せずにはいられない魔理沙は、マリサブレンに対し、
「霊夢とあのブレン達が心配だ・・・鞭打つようだけど、少し急いでくれないか？出来る限りでいい。頑張ってくれ」
と呼びかける。
他者のためならどこまでも身を尽くすことができるマリサブレンにとっては、信頼する魔理沙のその言葉こそが原動力であるとも言えた。

魔理沙の希望をかなえてやるためにも、ブレンは決して速いとは言えないまでも、万全の状態で出す時と出来る限り近い速度を発揮して、魔法の森へと戻るべく動き出した。

※

咲夜の駆るグランチャーが、最初の頃戦っていたブレンの生き残りに一撃を加えたことが、合図であった。
全てのブレンの注意がそちらに向いたことを確認した早苗は、眼の前にいた黒いブレンから離れるよう、全力で後退する。

それからしばらくの間、留まることなく真っ直ぐに飛び魔法の森から離れ続けるが、一度敵を振り切ってからは背後から追いかけてくるような気配もなかった。
試しに、もう何分かほど飛び続けたところで、一度その場でグランチャーを制止させ背後を振り返りつつ、数十秒ほど待ってみたが、敵の姿は見えてすらこない。
そして、戦場であった魔法の森も、すっかり見えなくなっていた。
仮に今からこちらを追撃しようとしても、敵がまだ魔法の森にいると考えれば、ピンポイントにこの場所に辿り着き早苗に追いつくのは難しいだろうと、彼女自身は思う。

振り切った、ということでいいのではないだろうか？

胎内で、グランチャーの見る視界を眺めていた早苗は安心した様子でため息をつき、肩を撫でおろしてから、呟いた。

「やっぱり、咲夜さんは正しい・・・ちゃんと私達を逃がしてくれた・・・・・それに」
気の抜けた表情をしていたのをだらしないと思い、きりっと引き締めて、それから眼を閉じ不敵な笑みを浮かべて、続ける。
「撤退と一緒に、敵の撃破も行っていた・・・あれだけのダメージを与えれば、さすがに無事では済まないでしょう。例え生命が繋がっても、失った片腕片足はどうするか・・・義手を作ろうとしたって、幻想郷の技術で、アンチボディが満足に戦っていくほどのものができるかどうか・・・ふっふっふっふ・・・」
腕を組んで、肩を揺らして笑う。

『こーやって・・・腕を組んで・・・眼をとじる笑いは勝利の笑いよ』
と、軍神である神奈子が言っていたのが思い出される。
なんでもこの発言も、結局はどこぞの誰かの受け売りらしいが。
生死は度外視して、これで敵のブレンの戦力としての価値は、無くなったも同然だ。

突然のブレンの襲来と、撤退という結果に、敗北という印象を受けて腑に落ちない気分でいたが、落ち着いてみると、なんてことはなかった。
こちらには一切の被害はなく、戦果として二機のブレンを撃破、あるいは再起不能にまで追い込んだ。
これで一体、何が敗北だというのか？
むしろ、ブレンの数を減らすという当初の目的は無事達成されたのだから、大勝利と言ってもいいではないか。

が、そうやって素直に笑えない事態が発生したのも確かだった。
早苗は、綻んでいた口元をぐっ、と噤み、眉を吊り上げて言う。

「しかし、あの魔理沙さんに私の事がバレてしまった・・・あぁ、なんということでしょう・・・このままでは、神奈子様と諏訪子様が危ない。まだアジトとなる場所は見つかってないけど、もう守矢神社には祀って差し上げることができないわ・・・」

早苗が意図的にグランチャー乗りブレンの敵となったとあれば、天狗達が黙っていないように思う。

すぐさま、言うなれば早苗の保護者である神奈子と諏訪子を拘束し、いろいろと処罰してしまうかもしれない。

神に対しなんて罰あたりな、とは思うが、神を人質にするような行為をされると、早苗はもう何もできなくなる。

そう考えると、恐ろしいほどに効果的な報復ではあったし、もしかしたら、天狗達もそれを実行する恐れがある。

そうさせないためにも、この事実が魔理沙の口から伝わるよりも早く、あの二神を匿わなければならない。匿うという表現は失礼千万かもしれないが。

そうして、ひとまず落ちつける場所を見つけ出し、そこに分社を設けなければならない。

自分達グランチャーのアジトともなる場所だから、すでに分社がある博麗神社は狭すぎて駄目だ。

適度に広い上に、あわよくば天狗達の眼から隠れることができるような場所がいい。

この幻想郷のどこかに、そういう都合のいい場所があればいいのだが・・・

どこか・・・か。

ここで早苗は、もうひとつ考えるべきことがあるのに気がついた。

そもそも、必死になって逃げてきた結果今しがたグランチャーが漂っているここは、どこの上空なのだろうか？

グランチャーに周囲を見回せる。
妖怪の山がどこかに見えないか探してみたが、一周ぐるりと回るように見渡しても、空の向こう側にかかった薄い靄の影に隠れているのか、見えることはなかった。
となれば、どうやら妖怪の山とは離れるような方向に進んでいたらしい。
妖怪の山の方向に逃げたのなら、どこかに山の稜線が見えていてもおかしくないはずだ。
これから、山の麓の湖の一角にある紅魔館にいかねばならない。
咲夜はそこで合流しようと言っていたが、これでは大分遅れてしまいそうだ・・・

そうして早苗の脳裏に、続けざまにあることが浮かび上がってくる。
もしかしたら自分は、妖怪の山に対して正反対の方向に逃げてきたのではないか?という考えだ。
となると・・・
早苗は、腕を組むのは止めて、代わりに両手で背面のスリットウェハーに触りながら、呟く。
「もしかして私、ブレンと戦う以上に危ないことをしているのかもしれない・・・」

幻想郷に来て間もないころ、神奈子が言っていたのを思い出す。
妖怪の山の反対方向に小高い山・・・というよりも高地があって、そこに無数の鈴蘭が咲いている場所と、同じく無数の向日葵(ひまわり)が咲いている畑があるらしい。
鈴蘭畑はともかくとして、太陽の畑と呼ばれているその向日葵の群れの中には、できるだけ近づかない方がいいということだった。
なんでも、して神奈子や諏訪子ですら、負けはせずとも楽には勝て

ないと言わしめる強力な妖怪がいるというのだ。
その名も、風見　幽香という。
余程の用がない限り、ひょんなことで迷い込んだりした時は、すぐに離れておけ、とも言っていた。
取って喰われても知らない、という話だった。

早苗は、自分で強い妖怪だと自負したり、大多数の人間に恐れられているような妖怪に対しては、決して恐怖を抱いたりはしない。
むしろ、一体何がそんなに怖いのかという侮蔑の念と共に、その妖怪を退治しようと考えるほどだった。
しかし、あの神奈子と諏訪子が恐れるほどの妖怪とあっては話は別だ。

ごくりと生唾を飲み下してから、
「・・・何だか、嫌な予感がする」と呟いた早苗。
何にせよ、ここがどこなのかは確認しないといけない。
グランチャーは現在かなり高空を飛行しており、地表の様子がよく分からなかった。
背の低い雲が視界を遮ったりしているからだ。
おそらく、海抜１０００ｍぐらいの高さにいるのではなかろうか。
高度を海抜で考えるのかは分からないし、そもそも幻想郷には海がないわけだが・・・

とにかく、ここがどこであるのかを確認するためには、この眼下にうっすらとかかる雲を突き抜けて、ある程度下まで降りていかねばならない。
早苗は、グランチャーを直立させたまま、足から突っ込むようにして高度を下げていった。

段々と、眼下に広がっていた薄い雲が間近に近づいてくる。
四桁だった高度が途端に三桁になり、そこから９００・・・８００と徐々に下がっていく。
その間にも、ついさっきまで視界の下の方に見えてきた、雲というよりほとんど霧である水蒸気の塊がせり上がってすぐ眼の前に見え、やがて頭上へと上がっていく。
まるで、地面に対してこの身が吸い込まれているような気分になる。
あるいは、大地が宇宙の深淵に吸い込まれているのに、その動きに自分だけ取り残されているのか・・・

そうしている内に、高度ももう４００か、３００ｍぐらいになった。
これでもう、薄い雲であろうとほとんど視覚を邪魔することはない。
そこでようやく早苗は、眼下に見える大地の姿を大まかに確かめることができるようになった。

そうして彼女は、自分の中にあった嫌な予感が見事に的中したことを感じた。
思わず、
「うわぁぁ・・・」と、声を漏らす。

丘と言えるような、なだらかな傾斜を持つ高地。
所々、ほとんど傾斜がなくなっている部分もあるその大地は、概ね鮮やかな黄緑色に染まり、一面を眼によさそうな色で彩られていた。
ピクニックにでも来れば楽しそうな場所だが、その一面緑色の一角に、まるでそこから光の三原色でいう青を取り払ったような黄色が、染みのように、あるいは擦り傷にできるかさぶたのように広がっていた。
これは、向日葵の色だ。
一面の緑に対してはよく映える輝かしい色の輝く花が、まさしく無数に咲き誇っている様子が、高空からでも感じ取れる。

遠目に見える一面の黄色の中には、見えないように小さいが、茶色い色も混ざっていた。
その範囲は相当に広い。
早苗にとって分かりやすい表現を使えば、それこそ東京ドーム一個分といった感じだ。（ちなみにその東京ドーム一個分というのは、面積でいうと４６，７５５?だそうだ）
これが花畑というのなら、いやはや羨ましいほどの広さだ。名勝である神苑を入れたとしても、あの平安神宮よりも広いのではないか？
こんな広い敷地に神社を建立して、あの守矢の二神を祀り奉りたいものだ。
神社が広大であることは、威厳の証明であり、信仰の証明となるだろう。
だとしては妖怪としては、畏敬と恐怖の証明だろうか？

と、そんなことはどうでもいい。
早苗は不幸にも、神奈子が行くなと言っていたあの太陽の畑の上空に来ていたのだ。
「これはまずい・・・」
小さく吐き捨てた早苗。
一体どんな恐ろしい事態が起こるのかは分からないが、このままこの場に留まっていては危険だ。
この場所に住まうという妖怪には、まだこちらの姿は見えていないかもしれない。
すぐさまここから離れれば、見つからずに済むだろう。
風見　幽香の恐ろしさなら、早苗だって勉強してよく知っている。
幻想郷最強にして最凶の妖怪の、五本の指・・・いや、トップ３には入るであろう力だ。
どうせすぐにでも咲夜達と合流するために紅魔館に向かおうとしていたところだ。
このままさっさと行ってしまおう。

なにはともあれ、ここが太陽の畑であるということが分かったのだから、この辺りの大体の地理も頭の中で浮かんでくる。
妖怪の山へ行く道も分かった。

「グランチャー、行きましょう」
と呼びかけ、彼の者に移動を開始するように命じる。
そうして、白と青の巨人がゆっくりと動きだそうとした、その時だった。

「・・・んっ!?」
早苗は、首筋の辺りに妙な悪寒が奔るのを感じて身を強張らせ、咄嗟にグランチャーにチャクラシールドを展開させた。
その悪寒も、秋と冬の境目に感じる寒さが激しくなるその瞬間のようなものではない。
氷の塊を押しつけられたような、鋭い冷気だ。
それを感じ、チャクラシールドを展開したのと同時に、グランチャーの背中を、何かがぶつかるような強かな衝撃が襲う。
彼の者が海老のように仰け反るのと一緒に、胎内が俄かに揺れ、早苗はその勢いに投げ出されないように踏ん張りながら、悲鳴を上げた。
「ひゃぁ〜〜っ!なにぃ!?」

すぐさま体勢を立て直したグランチャーに、背後を振り向かせる。
そうして、衝撃が飛来してきた方向へと向いた彼の者と早苗は、背中を叩きつけたその衝撃の正体を知った。
こちらに向かって真っ直ぐに伸びてくるチャクラ光だ。

早苗は、それに息を呑む以上に、いっそ戸惑いさえ浮かべた。

――弱すぎる・・・これはっ――
脳裏でそう呟く。
突然の攻撃に驚くと共に、本能的にその攻撃を分析しその上で、脳裏で結論づけた。
そんなことができるほどに、頭が冷えて落ち着いていた。
あえて迫り来るチャクラ光を回避することなく、引き続き展開していたチャクラシールドで受け止める。
薄いオーガニックエナジーの膜にチャクラ光が浴びせられるが、その熱量と衝撃は完全に打ち消され、グランチャーには一切ダメージが入ることはなかった。
激突、そして拡散することによりチャクラ光が発する眩い光もすぐに消え去り、早苗は改めて前方に眼を向けた。
先程の攻撃を放ってきたと思われる、白い色のブレンパワードが見えた。
魔法の森で遭遇した中に、同じ色をしたブレンがいたが、そいつは確かに撃破され、粉々に爆散していくところを見た。
そして、先程チャクラシールドによって受け止めたブレンバーらしい光。
その威力は、先の戦闘で魔理沙の駆るブレンが放って来たものに比べれば、かなり弱かった。
咲夜のグランチャーが放つ高密度に収束されたチャクラ光からすれば、比べることさえできないほどだ。
これなら、チャクラシールドであっても、オーガニックエナジーをほとんど消費することなく受け切れる。
今、早苗の眼前にいるこのブレン・・・ほとんど雑魚と言ってしまっていいほどの力しかない。
魔法の森のブレンとは完全に別物、それよりもさらに弱いと思えた。
早苗は、その理由のひとつが脳裏に浮かび上がってきて、呟いてい

た。
「生まれたばかりで、誰も乗っていないんだ」
胎内に他の生物を宿していないブレンは、活動に必要なオーガニックエナジーを得ることができない。
そういう状態でもし戦えば、戦闘力が落ちるのも当然のことだった。
このブレンは、どうやらここの近辺でリバイバルして、グランチャーの接近を感じて思わず襲いかかってきたようだ。
リバイバルした以上、この場にいる誰かを、胎内に入れようとしていたのか？
しかし、太陽の畑の周辺は、あの神奈子達が恐れるぐらいなのだから、人っ子一人も寄りついてこないのが普通だった。
そんな場所で、本当に共生できるだけの者がいるのか？
まさか、風見　幽香を招き入れるわけでもあるまい。

突然の攻撃には驚いたし、急ぎ咲夜と合流しなければならないというこの局面で、またしても新手のブレンと遭遇してしまったことにも焦燥したが、早苗は、生まれたばかりでまだ戦う力さえ持ってはいないこのブレンを見て、『いける』と思った。
そうして、勝てる見込みもないのに、勝負を挑んできたこの敵を、嘲笑いたくもなった。

にっ、と笑みを浮かべ、早苗は言う。
「魔理沙さんや、あの紫のブレンがいない以上、撤退はこれで成功した。となれば、新手が出てきても、逃げる必要はないっ・・・・・・可哀想だけど、餌食になってもらいますっ！」
宿主のいないブレンを相手にして逃げ出すなど、さすがにあまりにみっともなさすぎる。
これしきの相手なら、一撃の下に葬りさることもできるだろう。

早苗に合流するまでの駄賃、あるいは、彼女らに対するお土産代りに、撃破していってやる。
少し前に感じていたはずのブレンに対する好意は、すでに失われて久しい。

ソードエクステンションを振りかざし、回避行動すら取らず隙ばかりを．．．というか、隙しか見せていないように見える白いブレンへ接近を図るグランチャー。

第十二話　その４

が、その時だった。
突如早苗の眼下がぼんやりと明るくなったような気がした。
思わず視線を下に向けようとする早苗だったが、そうするよりも早く、今度は視界の真ん中に縫いつけられていたブレンの身体が、股ぐらを突き破るように伸びたチャクラ光に貫かれていた。

「んえぇっ？」
早苗も思わず頓狂な声を上げ、咄嗟にグランチャーを急停止させる。

真っ直ぐな光は、見えたと思った瞬間にはそのまま天へと向かって飛んでいき、すぐに雲の向こうにまで薄まりながら消えていき、見えなくなっていた。
光に貫かれたブレンは、その勢いに乗るように、ほんの少しだけカクンと身体を上昇させた。
石のように固まり動かなくなった身体、その肩の付け根、股間節、首筋から小さな爆発が生じ、破砕されたスリットウェハーが、石灰を砕いたような白い煙となって勢いよく噴きだされる。
それを合図にするかのように、今度はブレンの身体全体を膨れ上がらせるような白い爆発が生じて、停止していたグランチャーの眼前に、絵具で塗りたくった油彩の風景画のような、濃い白色の雲を作り出した。
爆発というよりかは、パァン、という、音がよく響くホールの中で思いっきり手拍子を打ったような大きな音が、早苗の鼓膜を揺らす。

今度ばかりは、戦慄するばかりだった。
一瞬の下に、敵であるはずのブレンが止められていた。
グランチャーの胎内の中、眼を見開き、息を呑む早苗。
ごくりと、生唾が飲み下される音がよく聞こえた。
そうして彼女は、ある程度膨れがあったところでその大きさのまま宙に滞空している白い雲を見つめていた目線を、少しずつ下の方に向けていった。
ブレンを貫いた光は、下方から放たれていたのだ。
その正体を確かめるためには、下を見るしかない。

しかし、何か無性に嫌な予感がした。
何故かは分からないが、脳裏に風見　幽香の名が何度も錯綜する。

まさか・・・と、早苗は脳裏を過るこの名をかき消そうとした。
幽香がブレンを撃破したというのか？
いくら強力な妖怪といえど、一撃でブレンを葬るなど、不可能だ。
アンチボディに対抗できるのは、今のところはアンチボディのみなのだから。

もしかしたら、こちらも危ないかもしれない。
早苗は身を強張らせ、念のためにグランチャーにチャクラシールドを出来る限り高密度で展開させつつ、何か起こった時にはすぐさま対応できるようにした。
そうして意を決して、思いっきり目線を下へと振り向けて、ブレンを一撃で殺して見せた者が何者なのか、確かめようとした。
が、またしてもそうするより早く、まだ地面に対して下に１５。ぐらいしか下がっていなかった早苗の視界に、突如大きな影が躍り出てきた。

「うひゃぁぁ〜〜〜っ！」
思わず腰を抜かして、スリットウェハーに背中を押しつけそのままずるずると滑るように座り込んだ早苗。
両足が俄かにがたがた震えだす中、見開いた眼で、眼前に躍り出たその影を直視する。

その影は、グランチャーであった。
爆発したブレンが作る白い雲と早苗のグランチャーの間に挟まれるようにして、肥沃した土のように茶色い色をした肉体に所々黄色いラインを走らせる巨人が、ソードエクステンションを右手に握り、静かに佇んでいた。

それを見るだけでも、早苗は驚くことを止めて、足の震えも止めることができた。
おそらく、彼の者がブレンを撃破したのだろう。
そうしてグランチャーなら、同じ種族であるこちらを攻撃することはないはずなのだ。
気を取り直し、腰が抜けて座り込んでしまった身体をゆっくりと起き上がらせる。
そうして改めて、しかと眼前に佇むグランチャーの姿を見てみた。

オレンジに近い黄色に光る眼でじっとこちらを見つめる茶色いグランチャーは、咲夜の駆る深紅のグランチャーも持っている、力ある者にしか出せないような独特の威厳と、威圧感というものを醸し出していた・・・ように見えた。
どうやったのか細かいことは分からないが（おそらく、ソードエクステンションを撃ち放っただけのことだろう）、ブレンを一撃で倒すだけのことはあるな、と思えた。
とにかく、いきり立って襲いかかってこないところ見ると、敵意が

ないことは確かなようだった。
そうして恐らく、すでに何者かが胎内に乗っているのだろう。

しかし、その何者かから一向に呼びかけが来ることはなく、早苗は、いつまでもこうやって見つめ合っているわけにもいかないだろうと、こちらから呼びかけてみることにした。
しかし、オーガニックエナジーの波を向こうに流して、
「あの・・・」と口を開いた、その瞬間だった。

今回はなんだか、やることなすこと全て途中で遮られてしまっている。
沈黙を続けていた茶色のグランチャーの股間部を覆っていた装甲がゆっくりと動いたのを見て、早苗はまだ呼びかける声を出している最中なのに、
「そちらはいった・・・あっ」
と声をあげた。

やはり、誰かがいる。
そしてその誰かは、今外に出てこようとしているのか・・・

眼を凝らし、ゆっくりと倒れるように開いた装甲へと、そしてその向こう側に見える穴へと眼を凝らす早苗。
重なり合うスリットウェハーが互いにずれることでできた穴の向こう側は少し薄暗く、決して広くはないその穴を遠くから覗いただけでは、中の様子を知ることはできそうになかった。
それでも早苗は、あの茶色のグランチャーの胎内に誰がいるのかを知りたくてつい眼を凝らして、見えもしない中の様子を確かめようとした。

しかし、その必要はなかった。

早苗がわざわざ胎内の様子を覗うまでもなく、その者は、穴から身を潜らせて外に出るのだから。
穴の向こうから微かに見え、そのまま外に出ると共に日の光に照らされた、緑色のやや癖のついた髪の毛を視界に入れて、早苗は息を呑んだ。
またしてもというか、嫌な予感が的中してしまった。
なるほど、脳裏を何度も過ぎっていたその名は、そういう意味だったわけか。
緑色と言うのなら、早苗の髪だって似たような色をしているが、今回はその髪の色がある種恐怖の象徴とも言える存在となっていた。

幽香のことを説明する中で神奈子は、彼女の外見上の特徴もいろいろと教えてくれた。
何でも、紅い格子柄のスカートと上着を着て、髪の毛はやや濃い緑色をしているという。

その言葉を今一度脳裏で思い出し、穴から出てきたと同時にふわりと装甲の上に跳び移ったその姿が、その神奈子の説明とそっくりそのままであることを見た早苗は、ますますその顔を緊張に強張らせた。

そのものずばりではないか・・・
彼女は、風見　幽香。
神奈子達ですらてこずると言わしめた妖怪である。ならば早苗など、それこそ奇跡が起きても勝つことはできないだろう。
そういう相手が、グランチャーに乗って、眼の前に現れたのだ。

風に煽られ、くるぶし辺りにまで届くような長いスカートの裾と、スカートと同じ柄で肩口から袖のない上着と、緑色の髪をなびかせながら装甲の上に立つ幽香。

ばたばたとはたためく衣服とは裏腹に、すくっ、と佇んでいる彼女の身体は微動だにしない。
非常に端正な佇まいで、彫刻のような姿を見せてつけてくる。
ただ、その眼だ。
その眼だけは、彼女が本当に彫刻であることなどあり得ない存在感と生々しさを持って、彼女のものであるらしいグランチャーの視線共々、早苗の身体を、突き刺すように鋭く見据えていた。

こちらのグランチャーの装甲は開いていない。
しかし、幽香は、確かにこちらの姿を見ている。
そして・・・
その眼に怪しい光が一瞬だけ煌めき、彼女は、口角を釣り上げて笑みを浮かべた。
不気味な笑みだ。
ほんの少しだけ俯けた顔に暗い影が落ち、彼女の鋭い眼光と引きつった唇だけが、暗黒の中でギラリと輝くように見えた。
氷水につけた日本刀の刃が光を反射して輝くように、美しくも不気味に。いや、それ以上に。

その笑顔が友好な態度を現すものなのか、あるいは、獲物を前にした獣が牙を剥くようなものなのかは、今の早苗には分からなかった。
ただ、幽香のこの、いかなる研ぎ澄まされた剣よりも鋭く突き刺してくるような視線に身体が固まり、動けなくなったまま、ごくりと、もう一度音を立てて生唾を飲み下すことしかできなかった。

※

大分時間がかかってしまった。
魔法の森から離れたところにまで飛んでしまっていた魔理沙とブレンは、ゆっくりと進んでいたこともあって、十五分ぐらいかかってようやく森へと戻ってくることができた。
先程まで戦っていた場所がどこなのかは分からないが、周囲を見渡してもアンチボディの姿はなく、戦闘はもう起こっていないことが確認できる。

いや、いた。
生い茂る木々にくっついている無数の青々とした葉の上に、薄黄色のブレンの姿が見えた。カグヤブレンだ。
向こうもこちらに気づいたらしく、オーガニック的な通信を寄越してくる。
魔理沙は、ブレンを輝夜の方へとゆっくり進ませながら、それを聞いた。

（ようやく来たわね。待ってたんだから）
それに、魔理沙も返事する。
「ブレンが少し怪我したからな」
（へぇ～、大丈夫なの？）
「すぐ治る傷だぜ。サトリブレンに比べれば軽いもんだ。ただ、無理はさせられなくて、ゆっくり来るしかなかったんだよ」
（だから、遅れたことを許して欲しいって？・・・しょうがないわねぇ～、特別に許してやるわ）
「・・・・・まぁ、別に許しはいらんとして・・・戦闘は終わったのか？」
（見ての通り、敵はすっかりいなくなったわ）

話をしている内に、マリサブレンはカグヤブレンのすぐ傍にまできた。
そこで魔理沙は、一番肝心なことがあったため、それを聞くことにした。
「おい。この森にいたブレンはどうなった？」
それに輝夜は、なんごとなきといった感じの平素な口調の割には、重い事実を伝えてくる。
（あぁあれね、多分もう無理でしょ）
「・・・そうか・・・」
まぁ、予想は出来ていたことだ。
あれだけのダメージを受けてしまっては、生命の存続も危ぶまれる。
無事で済まないことも、仕方がないことではあった。
「死んでしまったのか？」
（まだ生きてるけどねぇ、どんどん弱ってるの。オーガニックエナジーが安定してないんだと思うって、霊夢が言ってた。胎内のスリットウェハーも少しずつ色を失っていて、熱もなくなってきてるよ）
「・・・・・」
永琳が仮定していたアンチボディの性質を思い出す。
アンチボディは、リバイバルしてから誰も乗せることができなかったり、あるいは何らかの原因で死ぬ時、肉体の組織が崩れて石のようになってしまうそうだ。
輝夜が言っていることは、その始まりとでもいうのか。
黙りこむ魔理沙に対して、輝夜が続ける。
（今ちょうど、下で横にして寝かせてんの。霊夢達もいるわよ。いきましょ）
「あぁ・・・」

彼女の声に返事をするが、魔理沙は何故だか急に、こんな風な言葉を輝夜に返していた。

「あんたは落ち着いてんだなぁ・・・　傍から見たらなんか、薄情者みたいに思えるぜ」

ブレンの死が避けられないものであることを知っていながら、非常に落ち着きはらっている輝夜の口調がどうも気になってしまい、つい聞いてしまった。

しかしその声に対する輝夜の答えには、魔理沙にとっては、少し胸を締め付けるものがあった。

（んなこと言ったら、あんただって冷血人間って思われるぐらい落ち着いてる風に見えるけどねぇ・・・・・・ま、今回ばかりは逃げなかったブレンの自業自得だし、どうしようもないものはどうしようもないでしょ）

一瞬の沈黙がその場を過る。

「・・・・・そ、そうだな・・・そうだ・・・・・・悪いことを言った、済まなかったぜ」

輝夜の声にどうしてもすぐに応えられず、しばらく黙りこんでしまった魔理沙は少し遅れて、落ち着きを取り戻そうと相槌を打つのと一緒に、行き過ぎた自分の言葉を謝罪した。

輝夜はそれに、

（しょぉ～がない。今回も特別大サービスで許してしんぜよう・・・私の寛大な心に感謝しなさい、崇め奉りなさい）

と返した。

「へっ・・・さすがですよぉ、蓬莱山　輝夜様ぁ～・・・」

冷血か・・・こちらはただ、現実を受け止めているだけだけだ。

それで冷血と言われるのは、さすがに嫌なものだ。

なるほど、なら、同じように薄情者と言われた輝夜も、そりゃ、嫌なんだろうな。

とりあえず輝夜と共に、木々の間から覗く日の当たる広場のようなところへと降り立っていく。

ブレンの五、六体が集まっても充分ぐらいのスペースがおあつらえ向きにあったので、そこに一旦、ブレンを降ろしたそうだ。

上空にまで来ることでその場の様子を眼にした魔理沙は、一瞬だけ、心臓がどくんと跳ね上がる音を聞いた。

この一帯だけあまり木が生えておらず陽がよく当たるからか、背の低い植物が所々に生い茂っている広場の中心部に、横たわる右腕と右脚のないブレンの姿があった。

チャクラ光によって溶かされるようにして千切れ飛んだその断面、右の太股のあたりと、僅かに残っている肩の装甲が、膨大な熱量を受けていたことを物語るように焦げたような黒っぽい色に変色し、でこぼこと奇妙な形に歪んでいた。

そこ以外も、チャクラ光の熱波の余韻を受けたのだろうか、僅かながらに焼け爛れている部分もあった。

痛ましいという表現を、現実味を帯びて感じさせる、そんな姿だ。

しかし魔理沙の心がその姿に反応し、心臓の鼓動を速く大きくしたのは、ほんの一瞬でのことであった。

こうなることはすでに分かっていたのだ。だからこそ、その申し訳ない気持ちで、先程飽きるほどに涙も流した。

だからだろうか、それほど大きな感傷を受けることもなければ、息

を呑むようなことも、痛ましさに涙を流すようなことも、今となってはなかった。
ただ、怖いほどに落ち着いた心があるだけだ。
はるか古に滅びた生物が、今になって掘り起こされ化石となって出てきたような、そんな、どこか遠くにあるものを見つめる達観したような気持ちがあった。

横たわるブレンから少し離れたところに立つハクレイブレンの姿も、その装甲の上で膝をついてしゃがみこみ、装甲の縁に両肘を引っ掛け、傷ついたブレンの姿を見つめている霊夢の様子も、ただぼんやりと見えるばかりだ。

あの傷ついたブレンの宿主だろうか。
寝かされているブレンの横で立ち尽くしている小さな人影を見ても、やはり、特別な感傷を受けられなかった。
それはそれで、とても哀しいことなんだな。
そう考える心も、魔理沙自身、他人事のように思えていた。

ただ、立ち尽くすその影の姿をはっきりと見て確かめた時、何ひとつ揺れ動くことのなかった魔理沙の心にもほんの僅かながらに動きが生じた。
遠目に見ているせいで、震えていることも分からないその者の姿に、見覚えがあったからだ。

いつごろだったか・・・　とにかく一昔前、魔法の森の外れにある香霖堂に遊びにいった時、急に妖怪が殴りこんできたので（なんでも、読書に勤しんでいたところを霊夢にこっぴどく退治され、その仕返しにきたとかなんとか）魔理沙が後腐れないようにしっかりと痛め

つけておいた。
その妖怪だった。

後々になって、香霖堂の店主である霖之助から、同じ妖怪が近頃よく店に来て、本を読んで帰っていくという話を聞いた。
店の中にずっと居座るわけだが、いつもやりたい放題の霊夢や魔理沙に比べて随分と大人しくしているし、店の用事がある時などは、邪魔なんで出ていけというと、一瞬ものすごく落ち込んだ表情をするが、すぐに出ていってくれて礼儀もいいので、今度会ってももう退治はしなくていいと言っていた。
その妖怪の名前も知ったそうで。朱鷺子と言っていた。
いつぞや鍋にして喰ってやろうかと捕まえてきた、朱鷺（ときこ）の名を持つ妖怪だ。

そいつだったのか、あのブレンに乗っていたのは・・・
そして、自らのブレンのボロボロになった姿を見て、立ち尽くしているのは。

名前も知らなければ、姿も初めてみるような妖怪ならばこのままなにも感じなかったのだろうが、はっきりと記憶の中に残っている者・・・

前述の騒動の後、またいつぞや香霖堂を訪れた時に、売り物とは違う（らしい）椅子に腰かけながら行儀よく黙々と読書に勤しんでいたあの妖怪なのだと思うと、すっかり忘れ去られていた哀切の情が、ようやく思い出されたきた。
あの時、彼女・・・朱鷺子が読んでいたのは、川端　康成　著《抒情詩》だったか・・・いや、《伊豆の踊子》だったか？
どちらにせよ、妖怪が読むには綺麗過ぎる話だ。理解できるとは思

えなかった。
いや、あるいは《禽獣》だったか？
それなら、鳥類である朱鷺の名を持つ妖怪らしい。結局理解できる話ではないだろうけど。

とにかく、その朱鷺子が哀しんでいると思うと、何故だか途端に、無反応であったはずの魔理沙の心に、可哀想だな、という意識が芽生えてきた。
それもまた、知り合いならば哀しんで、見ず知らずの者なら見向きもしないという、下卑た心がそうさせるのかという、憤りに似た自己嫌悪も湧き出てくる。
だが、そんなことはもう関係ない。
可哀想だと思うことすらいけないことだというのなら、虚弱なる人間などもう、生きていくことさえできないではないか。
それに、ブレンの胎内で飽きるまで泣いたおかげで、そのまま感情に呑まれて沈んでいくようなことにもならなかった。
ただ落ち着いた心で、哀しみを哀しみとして受け入れているだけだ。

カグヤブレンと共に、マリサブレンも広場の中へと降り立つ。
そうしてブレンをその場に座らせると、続けて装甲を開かせ、魔理沙は穴から出るとすぐに地面へと降り立った。
マリサブレンが降りるのに気付いた霊夢も、特に理由はないが、装甲の上で立ち上がりふわりと身体を浮き上がらせながら、魔理沙の傍へと降り立った。
そうして、その肩にぽんっと手をやり、気だるそうに言う。

「よっ、遅かったじゃない」
「あ・・・あぁ」

彼女の声には曖昧に返事しつつ、魔理沙は、前方でただじっと立ち尽くして動かない朱鷺子の背中を見た。
身体は震え一つ起こしていない。
ただ、力なく伸ばされた両腕、その延長である両手で同じくゆるりと開かれた指だけは、小刻みに痙攣している。
ぴくんぴくんと、まるで指がしゃっくりを上げているようだ。
泣きつかれた子供がそうするように、しゃっくりを．．．

「．．．．．．」

なにか、かけてやる言葉はないか？
少しぐらいは慰めてやるような声をかけてやった方がいいだろう。
そう考え、ゆっくりと、静かに佇むその背中に歩み寄ろうとする魔理沙。
だが、その踏み出されたその足は、ただ一歩しか進むことができなかった。

――かける言葉があるって？．．．．．．何があるって言うんだ？――

何もない。何もないじゃないか。

そんな言葉が脳裏を過ぎって、右足が強く大地を踏みしめたその後、魔理沙は続く一歩を踏み出すことができなくなった。
大地を一度踏みしめた後、その足が再び上がることはなかった。
ようやく地面から靴底が浮いたかと思えば、むしろ、後ろへと流れていき、まるで映像を巻き戻すかのように後戻りして、ちょうどさっき踏んでいたところと同じところに落ち着いてしまうだけだった。
傍らでその様子を見守っていた霊夢は、置いたままの手でもう一度肩をぽんぽんと叩き、振り返っていた魔理沙の前で、相変わらず気だるそうに首を左右に二回ほど振った。

そうして、呟くように言う。
「だめだめ、やめといた方がいいって～・・・」
その口調は、ある意味霊夢らしい無関心そうなものだったが、魔理沙には、彼女なりに優しさを見せているのだろうと感じられた。
今のあの妖怪には、何を言っても無駄であると言いたいのか。
それが分かるからこそ魔理沙も、霊夢の顔から目線を外し、もう一度朱鷺子の背中を見ながら小さく応える。
「・・・そうだなぁ・・・・・・今回ばかりはなぁ・・・」
そうして、それから何も言わずただじっと朱鷺子に向けた目線を外さず、彼女と同じような格好になって、その場でじっと立ち尽くした。
霊夢は魔理沙の肩から手を降ろすと、その手で代わりに頭をぽりぽり掻いて、大きなため息を吐き捨てつつ再びハクレイブレンの装甲の上へと戻っていった。
魔理沙は、ふわりと飛び上がり離れていくその姿すら、追おうとはしなかった。
ブレンを失った朱鷺子の心境を察することはできる。
魔理沙だって、ブレンを失えば、耐えきれないほどに哀しくなるだろう。
やはり、いくらなんでも仕方がないと思って放っておくようなことは、したくなかった。
できれば、一言ぐらいなら慰めの言葉ぐらいかけてやってもいいのではないか、と思う。
そうして、後ずさりしてしまったこの足をもう一度踏み出して、今度こそ朱鷺子の下へ歩いていきたかった。

ほんの２０ｍかそこらじゃないか。

しかし、魔理沙は、自分がブレンを失ったとして、どんな言葉をかけられれば気が休まるかと考えても、何ひとつ分からなかった。
実際は、朱鷺子の気持ちを察するというのも、単なる自分自身についたはったりでしかないのだろう。
その立場に立っていないから、まずブレンを失う気持ちが分からないのだ。
あまつさえ、一時はブレンを殺す決意も決めておきながら、それが実行できない魔理沙には。

気にするな、なんて気楽な言葉すら、かける勇気を持てないのだ。

こんなところに立ち止まって、朱鷺子の背中を眺めていたってどうにかなるものではなかった。
やはり、諦めて、放っておくしかないか・・・
朱鷺子本人がどうこうするのに、任せるしか。
一度、自分の中の気持ちを感情論と言って、否定してしまった魔理沙の冷静な心では、気持ちに任せて行動することはできなかった。

険しい顔で俯いて眼を閉じ、小さくため息をついた魔理沙は、踵を返して朱鷺子に背を向け、マリサブレンの胎内に戻ろうとした。

とにかく、これで戦いは終わった。こちらの完敗だ。
これから死にいくブレンを、地底に連れていくこともできない。
そもそもどうやって連れていけばいい。
もうあのブレンは、自らの力では飛ぶこともできないだろう。
ずた袋みたいに担いで持っていくのか？
そんなことをすれば、ボロボロのブレンはそれだけで息絶えるだろう。どんなに慎重に運び出したとしてもだ。

それなら、自然の流れに任せて、この場でゆっくり生命を終わらせてやったほうがいいのではないか？
それが一日先か、あるいは二日、あるいはもっと先のことかは分からないが。
今まさに死んでいくブレンを地霊殿に連れていったところで、対処の仕方が分からない以上ただの迷惑だろうし、単に他のみんなまで哀しくなるだけだ。

後であのブレンをどうするか他の二人にも聞くとして、多分、聞いたところで霊夢や輝夜も同じ意見だろう。
魔理沙に比べれば、さすがに考え方がクレバーそうな二人なら、なおさらだ。

ひとまず今は、一度地底にまで戻った方がいいだろう。

ゆっくりと歩を進め、マリサブレンへの足元まで近づいた魔理沙は、そのまま装甲の上に上ろうと胸の高さにまで上がっている金属の縁に手をかけた。

ちょうどその時だった。
鬱蒼としげる木々に囲まれた広場に、小さく声が響く。
密生する木々の間を反響する中で、もうどこから発せられるかも分からないようになり、わんわんと響くエコーとなった声だった。

「こんなことになるなら・・・興味本位で出てくるんじゃなかった・・・・・誰かいないかーっ？」

はっきりと聞こえる。この広場からではない。
生い茂る木々の向こうから響いていることだけは分かる声だったし、魔理沙にはこの声に、大分聞き覚えがあった。
男の声だ。
この辺鄙な魔法の森で響く男の声と言ったら、見当づくのはひとつだった。

地面を蹴ってそのまま装甲をよじ登ろうとしていたところ、寸前のところで留まった魔理沙は、きょろきょろと周囲を見回しながら、その名を呟いた。
「香霖の声だ・・・どうしたんだ？」
声の主は、魔法の森の店、香霖堂の店主、森近　霖之助だった。

しばらく辺りを見回すと、もう一度、何度も森の中を反響しまるで頭上から聞こえるように、その声が響いた。
「アンチボディ・・・ブレンパワードかグランチャーなんだろう？聞こえているんなら、何か反応してみせてくれっ」
それを聞いて魔理沙は驚き、顔をはっ、とさせた。
何故か、ブレンパワードの名を呼んできている。
もしかして、香霖・・・霖之助は、先の戦闘をどこかで見ていたのか？
それで、（確か、さっき聞こえた声でも言っていたが）興味本位で探しにきたのだろうか・・・

とにかく、魔理沙にとっては朱鷺子などよりもずっとよく知った人物である。
そんな彼がブレンを探しているということは要するに、ブレンに乗る魔理沙達を探していると同義と言ってよかった。
魔理沙は、呼びかけてくる霖之助の声に、大声で応えた。
この広場には反響するような木もないから、ぼんやりとでも声のし

た方向は分かると思う。

「香霖、ここだぜ！大きな広場があるだろ？ここだっ」

すぐさま、

「魔理沙か？」という声が返ってくる。

その声にまた返すように、

「ここだぜ、声のする方が分からないか？」

と呼びかける。

その声に対しての返事はなかった。

生い茂る木々の葉がざわめく音や、森に住んでいるらしい野鳥の泣き声が響くばかりだったが、それからしばらくすると、それらの音に混じって、何やら足音らしいものも聞こえてきた。

湿った土を踏みしめる小さな音だが、何故だかはっきりと聞こえた。

大分近くから聞こえているからだ。

足音は、広場の端の方に座りこむマリサブレンの背中側、左斜め後ろ辺りから聞こえた。

魔理沙がすぐにそちらの方を向くと、人が二、三人くぐれそうな間隔で立ちならんでいる二本の木の間から覗く景色。薄暗い中に所々鮮やかな緑色をしていて、そこに細い光がいくつか差し込んでいる、独特の光景の中、こちらに向かってくる霖之助の姿が見えた。

あちらも、木々の向こうから覗く魔理沙の姿に気づいたようで、地面に所々生えているやや背の高い草花を踏みしめ、小走りに駆けてきながら、

「おっ」と声を上げた。

小走りしていたのがただの早歩きになり、やがて早歩きでもないただの歩みに代わり、そのままゆっくりと木々の間をくぐって魔理沙の前に出てきた霖之助。

が、広場に出てすぐそこに広がっている光景を見た彼は、久しぶりに会った魔理沙の顔をよく眺める以上に、まず眼を見開いて驚いた。

「これは・・・っ」

微かな声で、単に息が吐き出されるような調子で呟いた霖之助の驚愕も、おかしなことではなかった。

魔理沙のすぐ傍には、天狗が配ってきた新聞に載ってあったブレンパワードが、その写真で見る以上の巨体を見せている。

しかもブレンはこの一体だけではなく、他にもまだ三体ほどいた。

そしてその内の一体は、まるで眠るように横たわっている。

他のブレンの身体の状態に比べて、表面が大分傷んでいるようで、どうやら戦闘により傷ついたらしいと察することができた。

入道のような巨体を持つそのブレンの姿もそうだが、ブレンの発する独特の気というものにも、圧倒されるような気分だった。

そもそもこれは何だ?まるで銅像だ。

しかしながら、天狗の新聞には、アンチボディは生物であると書かれていた。

確かにその通りで、どこか生物的な印象を受ける。

しかし、完全に生物であるとも、言えないような気がした。

伊達に蒐集家として、いくつもの嗜好品を集めてきた霖之助ではない。

彼は、大体『物』の持つ雰囲気というものを感じることができる。

彼の持つ能力がそうさせているということもあるかもしれない。

物体であるのなら物体、生物であるのなら生物、その境目を自分なりにははっきりと判断することができるのだ。あくまで自分なりにだが。

まぁ石ころが生きていないことが分かるという程度である、それぐらいの判断力は、人間の里の誰にだって備わっているだろう。

しかし霖之助は、物体にも付喪神として魂は宿ることを知っている

し、そのことも多少なりとは見分けられるつもりでいた。これも、あくまで、『つもり』だが。

そんな彼の眼利きをもってしても、このブレンが・・・アンチボディが何なのかということは、分からなかった。

鉱物の塊なのか、生物なのか、あるいはそれこそ付喪神のように、物体に精神が宿った結果誕生したものなのか、またあるいは、単なる妖怪の一種か・・・

人としてというより、蒐集家としての混乱と興味を沸き立たせる中で、霖之助には、このブレンに対するある印象があった。

何もかもはっきりとしないブレンへの認識の中で、それだけは手に触れられそうなほどはっきりとした感触として確かめることができた。

器だ。

ある液体が、溢れださんばかりに満たされている器・・・

第十二話　その5

そんな思考に没入する霖之助にもお構いなしといった様子で、魔理沙は彼女の傍で棒立ちになっている彼の肩．．．は、彼の背が高いせいで上手く叩けないので、代わりに背中を叩いて呼びかけた。
「なぁ、ブレンを追っていたよな？どうしたんだぜ？」
それを聞いて、思い出したように我に帰った霖之助は、落ち着きを取り戻しつつ改めて魔理沙の顔を見返しながら、自分がこの場にきた事情を話した。

いつも通り香霖堂の店内でひきこもっていた霖之助だったのだが、何の気なしに窓から空を覗いた時、その空が白く染まるのを見た。
チャクラエクステンションの光だろう。
森のはずれにあり、周囲に木もそれほど群生していない香霖堂にいたため、見ることができた。
空気が焼けるような音も聞こえたが、光は大分地上から離れたところで輝いていたらしく、真っ白な焼きつくような煌めきははっきり見えても、聞こえる音は不釣り合いなほどに小さかった。
もう少し森の奥の方にいると、気づかなかったかもしれない。
多分、実際森の妖精の多くは、その光に気付かなかっただろう。
だが、幸運にもそれを目の当たりにした霖之助としては、その光の強さだけを見れば確かに、未だかつて見たこともない強烈な閃光だったのは確かだと思える。
いかなる妖怪だって、あれほどの光を出すことはできない。

まるで、龍がこの幻想郷に現れたようだと思い、彼はさすがに慌てて店から出て、森から離れるように駆けだした。
それは別に、森から逃げるためではない。
閃光の正体を知るべく、空を見上げるためだった。
そうして、森の上空が大体眼に見えるような平地から実際に、薄い雲のかかった空を見上げた霖之助。
そこで見えたのは龍ではなく、見えないほどに小さい点が宙を飛びまわり、いくつもの光線を放ったり、あるいはちかちかとする光を纏ったりしているところだった。
龍などとは口が裂けても呼べない姿に呆気にとられる霖之助だったが、それでも、飛び回るその小さな影には眼が釘付けになった。
先程の光を放ったのは、おそらくあの塵のような影なのだろうから。
どうやらいくつか存在するその影は、それぞれ戦っているらしかった。
しばらくすると、その戦場に一筋の鋭い光が奔り、同時にいくつかあった影の内のひとつが急に高度を下げ、森の木々を押しのけ霖之助の頭上を通り過ぎながら、妖怪の山の方へ向かって飛び去っていった。
さらにそれを追うように、もうひとつの影が同じく頭上を通り過ぎる。
その時ようやく、一瞬だけその姿を眼に入れることができ、そのまますぐに遠ざかっていくその影を眼で追うことで、霖之助はそれが、先日天狗が配ってきた新聞に載ってあったアンチボディであることが分かった。同じようなシルエットを二度も見たのだから、例え高速で通り過ぎていったとしても、見間違いはない。
途端に、霖之助は、アンチボディに対して多大な興味を持ち始めた。
新聞を読んだ時から、鉱物と生物の中間にあるような性質を持つというアンチボディを不思議に思っていたのだ。
しばらくすると、妖怪の山に去っていった二体とは別に森の上空で残っていたいくつかの影も、ゆっくりと森の中へと降りていった。

影が減っているのを考えると、どうやらいくつかの影も、先の二体と同様、どこかに去っていったらしい。
このまま森に降りていく影を追おうかと考えたのだが、どうやら激しい戦闘をしていたらしいことを考えて、思い留まった。
もし近づいた時にまた同じように戦いを始めれば、こちらが巻き込まれるかもしれないからだ。
仕方なく店の中に戻り、渋々何事もなかったように過ごすことにしたのだが、二十分ほど経って、やはりアンチボディに対する好奇心が捨てきれず、危険を承知で森の中へと探しにきたそうだ。

そうして、今に至る。

その話を聞き魔理沙は、
「なるほどな」と、淡泊すぎる感想を漏らした。
理由はいかにも香霖らしいが、インドア派な彼の割には随分とアグレッシブなことをしている。
霖之助は続けて、こうも言った。
「新聞で読んで、ブレンに魔理沙が乗っているということは知っていた。君の声を聞いたんで、ようやくたどり着けたな」
「そりゃ、よかったな」
「あぁ・・・よかったのは、よかったが・・・・・・」

魔理沙の声に返事をする中で、霖之助は何かに気づいたらしく、声を濁らせた。
そうして、ある方向を指さして、聞いた。
「なぁ、あの妖怪は、朱鷺子じゃないか・・・どうしたんだ?」
その声を聞き、彼が指差す方向に朱鷺子がいるのを見た魔理沙は、
「あぁ、それか・・・」と、霖之助に対しても、今の朱鷺子の状況

を話すことにした。

「あそこに横たわっているブレンな・・・あれが、朱鷺子のなんだよ」

「あぁ、そうか・・・・・・しかしあれは・・・」

「ん。こっちはブレンから見て左側だ。だからよく見えないと思うけどな、あいつ、右手右足がなくなってるんだ」

「う・・・っ？」

その説明には、霖之助も息を呑んだ。

そうして、恐る恐る聞いてくる。

「なるほどなぁ・・・つまりあのブレンは、死に瀕していると・・・」

「そういうことだな」

そこまで聞いて霖之助は、遠くに見える朱鷺子の背中から、哀切と寂寞の念を感じる理由が分かった。

そうして、店の窓ガラスを突き破って飛んできた天狗の新聞の記事の内容の一部を思い出し、うわ言のように呟く。

「・・・・・ブレンパワードは、人の優しさや、思いやりの心を喚起する性質だったな・・・」

「そうだぜ・・・人間だって妖怪だって、優しくなるんだ。どんな極悪非道で自分勝手なヤツだろうと、他人を思いやれるようなできるんだよ・・・・・おかげであたしも、他人に気を使って肩身が狭い思いをするようになっちまった」

「朱鷺子の事が可哀想でか・・・ははは、それは君らしくないな。病気にでもなったみたいだ」

「悪かったな」

今の魔理沙には、普段の彼女とどこか違う雰囲気を受けていたのだが、その理由を知り、小さく笑った霖之助。

だが、その表情はすぐに真剣なもの・・・というか、真っ直ぐな眼つきで何かを考えるようなものとなっていた。
冷やかすような霖之助の笑い声にむすっ、として、次いで、引き締まった彼の顔を不思議そうに見つめる魔理沙に、彼は言った。
その眼は、ただじっと朱鷺子の方を向いている。
「なぁ、あのブレン。どうにか救うことはできないか？」

魔理沙も考えていたことだ。
しかしその答えは、彼女の霖之助に対する返事と同じものである。
「無理だなぁ・・・そりゃ、どうにかしてやりたいけど・・・どうすればいいのか分からない・・・ブレンは身体が壊れて、生命力（オーガニックエナジー）が安定してないんだ、生きる力が失われつつある・・・これじゃぁもうな。どこかに連れて行こうとしても、ちょっと動かしただけで、一気に弱ってしまってそのまま死んでしまいそうだし。ここにいさせて、ゆっくり死ぬのを待つしかない・・・・・・胎内に入ってやることで、ほんの少しだけでもオーガニックエナジーが安定して、生命を伸ばすことはできるかもしれないけど・・・」
「そうか・・・あいつは今、苦しんでいるか？」
「・・・いや。どうやら痛みとかそういうのまで麻痺しちゃってるみたいだ。せいぜいびりびり痺れる程度で、寝てるような気分なんだろう。それだけは救いって感じだなぁ・・・その代わり、すごく疲れてると思うけどな」

「そうか・・・なぁ、それならせめて、ブレンが呼び覚ましてくれるという思いやりの心でな、朱鷺子だけでも慰めてやらないか？」
それもまた、魔理沙も考えていたことだ。
しかし彼女は、そんなことは無理だと考えていた。
「あたしだってそうしたいけど・・・どうやって慰めればいいのか分からないぜ。香霖には分かってるのか？」
そう聞かれた霖之助は、真っ直ぐ固まっていた眼差しを途端に気弱

そうに伏せて、応えた。
「分からないさ・・・残念ながら僕は、物の気持ちしか分からない。妖怪の気持ちは、分からん」
そうやって一度口を濁らせる。
しかし、頼りなさげに伏せられた眼は、もう一度彼の中にある気持ちを確かめるように、少しずつその強い眼差しを取り戻した。
今度はその眼で魔理沙の顔を見据えながら、続ける。
「しかしなぁ、僕にだって、人間の血は流れている・・・・・・僕の店によく来てくれるあの娘が哀しんでいるのに、放っておくことは、さすがにできない・・・僕の店にだって、情の温かさぐらい置いておきたいんだ」
「なら。どうするんだ？」
そう聞く魔理沙に、霖之助は苦笑交じりに口元をほころばせ、険しかった眼を和らげて瞼を閉じ、返す。

「思うようにやってみるさ。あくまでも自己満足の範囲で・・・あの娘がどう感じるかは、その場の流れに任せる・・・とにかく、行動には起こしてみたい」

その声を聞きながら、ぼーっとした顔で霖之助の顔を眺めていた魔理沙は、途端に彼以上の苦笑いを浮かべ、馬鹿にするような低い声で言った。
「自己満足で他人様を慰めるって、おいおい・・・」
「笑うなよ・・・ご覧の通り僕は人づきあいは苦手だ、面倒だからな・・・だけど、店の常連さんには優しくしてやりたいんだよ。せっかちなんだ」
「・・・分かってるよ。いいねぇそのせっかちさ・・・あたしの眼も覚めた気分だ」
「眼が覚めるって・・・？」

霖之助の、優男っぽいが芯が通っているようにも聞こえる声を聞いて、魔理沙の中にあった、よく言えば冷静で落ち着いた、悪く言えば冷徹な考えが、春先の氷の如く溶けていった。
やはり、このまま朱鷺子っを放っておくことはできそうにない。
例え彼女の心の張り付いたものを払拭することはできなくとも、むしろ火に油を注ぐようにより一層哀しみを大きくする結果になったとしても、何もしないことは嫌だった。
結局この考えは、朱鷺子を置いてけぼりにする罪悪感から逃れるだけの自己防衛であったのかもしれないが、それがどうした。
人間っていうのは、心に決めてしまったことは、客観的に見て愚かなことであっても貫きとおしてしまう生命体なのだ。
霖之助は、完全な人間というわけではなかったが。

それに、魔理沙ひとりではどうにもならなかったことでも、霖之助と二人でやればどうにかなるかもしれない。
せいぜい、やれることはやって、言えることを言ってやろうじゃないか。

「なら、行こうぜ。センチになってる妖怪を、慰めにさぁ」
そう言いながら、頷く霖之助と共にようやく、朱鷺子の下へ歩み寄るための一歩を再び踏み出した魔理沙。
が、その歩みは、またしてもその一歩を踏み出したところで止まってしまった。
急に、霊夢が傍に降りてきたからだ。
彼女は遅れて、霖之助が来たことに気づいたのだろう。
前に歩こうとする魔理沙の前方を遮るように降り立った彼女は、進もうとしているのに邪魔をされたことで、眼を細めてむっ、とする魔理沙の方には見向きもせず、霖之助の方を向いて聞いた。

「霖之助さん。いつからここに？」

それに、霖之助も応える。
「幾分か前さ・・・いろいろ理由があってね。アンチボディというのを見に来た」
「へぇ～・・・で、今何しようとしてたんです？」
「あの妖怪、朱鷺子と言うんだ。霊夢も知ってるだろう？彼女を、少しぐらい慰めてやらないとな、と思ったのさ」
「えぇ？」
霖之助の声に眼を丸くした霊夢は、ついでその眼をきゅ、細めて、じとーっとした視線を魔理沙の方に移した。
魔理沙が、霖之助にそうするように誘ったのだと思ったからだ。
こちらが無駄だと言ったのに、よくもまぁぬけぬけと。
呆れるような霊夢に見つめられながらも、魔理沙は、笑顔を見せて応えるだけだ。
「さっきの台詞な、ありゃ二言だ。男に二言がないように、私にも二言はない・・・私は、一度決めたことは（例外はあるけど）最後まで貫き通すタイプなんだよ・・・お前が無駄だと言っても、もう止まらん・・・今の私は、妖怪だろうがなんだろうが、辛そうにしているヤツには優しくしたいのさ」
いつもの調子のいい顔をしているが、その奥底に固い意思を持っているらしい魔理沙をしばらく見つめていた霊夢は、また大きなため息をひとつ吐き捨てた。
そうして、両手を腰にあてて、言う。
霊夢だって魔理沙と同じように、一言ぐらいはあの妖怪に声をかけてもいいか、ぐらいには考えていた。
が、しかし・・・
「私は残念ながら、あの妖怪のことをよく知らない。だから、あんたらと一緒にいくこともできない・・・ブレンの中で待たせてもらうわよ」
それはつまり、魔理沙達で好きなようにしろ、ということだった。

霊夢はそのまま重力に逆らって、ふわりとつま先を浮かせつつ、続ける。

「終わったら魔理沙、あんたもブレンに戻って連絡しなさい。そしたらすぐ地底に帰るから。あのブレンはもう放っておくのよ・・・まさか、一緒に連れていくとは言わないわよね？」

「そこまではしなさいさ。しょうがないもんな」

「なら、待ってるから・・・地底の妖怪達だって心配してるってことも、考えときなさいよ。早く戻らないといけないんだから」

「分かってるぜ」

そうして、またしてもふわりと浮きあがった霊夢は、何のために魔理沙の前に来たのか分からないほどにあっさり、ハクレイブレンの下へと戻っていった。

やはりその様子を眼で追うこともせず、視界から霊夢が消えた魔理沙と霖之助の二人は、そのままただじっと、朱鷺子の背中を見つめながら、改めて一歩を踏み出した。

少し前の魔理沙には、踏み出せなかった一歩だ。

朱鷺子の身体は相変わらず、石膏の塊と思えるほどに動かなかった。ただ、両手の微かな痙攣もまた続いている。

魔理沙が、森の上空で初めに見た時と、何も変わっていない。

彼女には、もしここで自分達が行動しなければ、延々このままではないのか？とすら思えた。

そんな朱鷺子に向かって、一歩、また一歩と足を踏み出していた魔理沙と霖之助は、やがてその小さな背中が眼の前に見えるほどにまで近づいた。

が、その途端、二人は奇妙な緊張に身体を射すくめられて、背筋がぴんと張り詰めるのを感じた。

これからやるべきことは、たかだか声をかけて、いくつかの言葉を語るだけのことじゃないか。

なら、身体を動かす必要はない。
理由はどうあれ、金縛りだろうがなんだろうがなってしまえばいい。
やるべきことは、口を動かすことだけだ。
しかし、魔理沙達は、その口を動かすことですら、出来なかった。
真一文字に紡がれた口が開こうにも開かず、固く閉ざされたままになる。

かける声と、語るだけの言葉が思いつかなくなったからだ。
ただ話をするだけのことに、身体が強張ってしまっていた。
それは、霖之助にとってはただ人付き合いが少ないことから来る、そのような者特有の緊張でしかなかったが、魔理沙のは、自分にとっても大きなものと感じる傷ついたブレンと対面する哀しみに、いざ実際に眼を向けることへの緊張だった。

恥ずかしい話だ。こんなことでは、幻想郷の住人失格だ。
まだ声もかけていないのにこんなことになって、情けないではないか。
そんな感情だけが先行してしまい、霖之助は、まだ彼女に対し何といってやるかも決まっていないのに、半ば自棄になって口を開き、朱鷺子に対し呼びかけてしまった。
「君．．．朱鷺子だろう？．．．話はここにいる魔理沙から聞いた」

今まで固まっていた朱鷺子の身体が、ぴくりと震えた。
そうして、その次の瞬間には、くるりと振りかえり上目づかいに見てくる彼女のその眼が、吸い込まれるように霖之助の視界に入ってきた。
その眼には涙はなく、一目見るだけでは、ひどく哀しんでいるようには見えないものだった。

ただ、それと一緒に、決して大きな喜びの中にいるわけでもないとも分かる眼だった。
驚きと共にぱちりと見開かれたその眼の中の色彩は淡く、消え入りそうだ。
しかしそれが、透き通る清流の水面のような綺麗な印象を与え、霖之助は思わず息を呑んだ。

よく店を訪れてくる朱鷺子への印象は、その小さな見た目と相まってとても子供ぽかった。
黙々と読書に明け暮れているその姿も、絵本に夢中になる子供そのものだった。
そのくせ読んでいる本は、若い、あるいはある程度の年の男女の艶めかしい感情を描いた物語が多い。
いかんせん物にしか恋をできないような男である霖之助には、到底理解できないような話だかりだ。
勿論、童話や寓話的なものだってよく読んではいたが・・・
そうして、本を読み終えて、笑顔で「ありがとう」と言ってくる顔も、子供のようだった。

だが、今は違った。
くるりと見返り、こちらを見つめるその姿は、子供そのものの・・・
いや、霖之助としては、薄いガラス細工のように繊細ながら、焼き物に使われる信楽の土のような柔らかさをもって、あらゆるものを受け入れるようなものだと感じた。
また、天井にかかるランタンの光のような、淡くもどこか優しさと寂しさも感じさせ、そうして・・・そう、例えば、水の満ちた金魚蜂のような、そんな印象も受けた。
ガラスのビー玉やらなにやらをそこに敷き詰めて、作り物の海草がその中に差し込まれて、手を入れれば冷たい感覚と一緒にしっとり濡れるのだ。

あるいは、この印象の全てを総括するのなら、液体の入ったグラスだ。
今にも割れそうで、中に満ち満ちた淡い色に輝くような不思議な液体が漏れ出し、床に広がっていくその一瞬の静寂を見せつける透明のグラスだ。
だが霖之助には、いくら物でそんな印象を受け取ったところで、それが一体どんな感情を意味しているのかが分からなかった。

そして、見つめてくるその眼の印象の鋭さは、まるで引き絞られる弓と、そこから放たれようとしている銀色に光る矢だ。
矢じりだけでなく、筈と呼ばれる部分や、羽根に至るまで、全てが銀色に輝いている。
そしてその矢は痛みを与えるためのものではなくて、とにかく・・・なんというか・・・

頭の中が混乱してしまいそうになった霖之助は、これではいけないと、一瞬だけきつく眼を閉じて気持ちを落ちつけた。
そうしてその閉じた眼を開き、普段の彼と変わらない口調で言う。
「・・・大丈夫か?・・・私には君が今どういう気持ちなのかは、よく分からないが・・・」
続けて言葉を連ねようとしたが、その時だった。

突然、朱鷺子の身体全体がこちらに振りかえり、そう思った瞬間には、何か重い物が腹にぼふんと当たってくる感覚と共に、朱鷺子の顔が霖之助の腹に押しつけられていた。
霖之助の靴と飛び込むように寄り添ってきた朱鷺子の靴のつま先がぴったりと当たって、彼女の身体が霖之助と密着した。
「えっ?」

驚く霖之助の背中に朱鷺子の両手が回されて、彼女は抱きつくような姿勢になった。
腹というか、腹と腰の間あたりが微かに締められるような感覚を確かめるまでもなく、あまりに突然の事態にびっくりしすぎて、彼は思わず朱鷺子の身体を振り払って後ろに下がろうとしてしまうほどだった。
だが、そんなことができるわけもなく、なんとか堪える。
しかし、霖之助としては、訳が分からなくなった。
ただ、ぴったりと抱きついてきた朱鷺子の頭のてっぺんを見下ろしながら固まった顔で、
「え・・・お・・・・・・なんだ?」と、呟くばかりだった。
思わず魔理沙の方を振り向き、彼女の顔色を覗う。

しかし不思議なことに彼女は、振り向いてきた霖之助の顔を見ると、面白そうに柔らかい笑みを浮かべ、肩を揺らしながら、
「あっははは、はは」と、笑い声を上げた。

魔理沙には、今分かった。

なるほど、慰めることには、言葉が不要な時もある。
悔しさに涙を流した彼女を、マリサブレンがただ何も言わずに包みこんでいた。
それと同じなのだ。
ただその場に誰かがいて、それを確かめることができれば・・・
そんな空気を肌で感じることができれば。
それだけで、案外心は軽くなるものなのだ。
それが、自ら心を許せるものなら、なおさら。

魔理沙に分かったことは二つある。ひとつは上述のこと。
そうしてもうひとつは、朱鷺子が何度も何度も香霖堂を訪れているという、その理由だった。

そりゃ、笑いたくもなる。
――――やはりあたしは、力不足だったわけだぜ――――

しかし、第三者である魔理沙にすら朱鷺子の気持ちが分かるというのに、霖之助の方はと言えば、朱鷺子の身体の感触の意味さえ分からない様子で、落ち着きながらもあたふたしていることが、いっそ滑稽だった。
霖之助は、突然の事態にも驚きこそすれ、喚いたりはせずある程度一定の落ち着きは維持できる者である。
なので、今の彼も、慌ててこそいるが、傍から見ればまだ落ち着いているように見えた。
が、彼と長らく友好を深めていた魔理沙から見れば、今の霖之助はまさに混乱のるつぼであると察することができる。

こんなヤツに・・・朱鷺子はもったいないことをしているな。
こういう時にどうすればいいのかすら分からないようなヤツだというのに。

そんなことを考える魔理沙は、このままでは、霖之助が朱鷺子の気持ちを何もかも無駄にして、慰める以前の問題になりそうだと察した。
なので、せめて霖之助が朱鷺子の行動に戸惑うことなく素直に受け入れられるよう、肝心なことだけは、しっかり教えてやることにした。
その後は、もう自分など不要だ。
すぐさまこの場を去ることに決めていた。

慌てた様子で、
「・・・その・・・なんだ・・・朱鷺子、君は・・・」と、口を濁している霖之助に対し、静かな声で呼びかける。

「香霖・・・嗜好品ってのはさ、ただそこにあるだけでも意味があるものだろ?・・・あたしはな、生き物も物も・・・その場に存在するというのなら、同じものだと思うんだ」
「なに?・・・それは、つまり・・・」
「今言ってることが分からないような香霖じゃ、あたしの友達にはしてやれないな・・・・・・それに朱鷺子の・・・いや、言わないでおくか、へへっへへ」
意地悪そうな笑みを浮かべた魔理沙の顔を、訝しげに見つめる霖之助。
だが、彼女の言いたいことというのが、彼には段々と分かってきた。物を使って表現されると、案外すんなり分かってしまうのが、霖之助自身恥ずかしく思うが。

「そうか・・・」
今の自分は、朱鷺子にとってのそれだと。
誰かの思い入れが強く入った嗜好品は、その思い入れが強く顕われ強い存在感を放ち、場の空気すら変えてしまう。
その思い入れの強い当人にとってはなおさら、その変わりゆく場の空気こそが自分の自己同一性の一種とすら考えられる時もあるだろう。
そして霖之助にとってもまた、魔理沙が言うように生物も物体も同じだと考えていた。
ただそれは、人を物扱いしているということではない。
物を愛する霖之助にとって、人間だって物と同じ。決して御しがたい存在ではないという肯定の意識でもあった。

彼は人付き合いは苦手だし、できることならばやりたくない。だが決して嫌いではないのだ。
誰かに対しそうやって、価値のある嗜好品と同じように、価値のあるものと思われるのは、むしろ好ましいことだ。

それにしても・・・

霖之助はようやく、朱鷺子がぴたりと寄り添ってきたことに驚いて強張り固まっていた腕を動かすと、両手を朱鷺子の肩の上へと乗せた。
そうして、そのまま横に立っていた魔理沙の方に振りむき、言う。
「なるほどな・・・今回ばかりは、君に感謝するよ。君のおかげで、今とりあえず、僕がどうするべきなのか分かった」
それを聞いた魔理沙は、それはよかった、といった表情を浮かべ、応えた。
「ん。しばらくそうさせてれば、気分だって晴れるだろうぜ」

が、こうは言ったが、霖之助にはまだ分からないことがあった。
先程、魔理沙が最後の方に言った言葉だ。
彼女は霖之助が朱鷺子の何かだと言っていたが、何のかは言ってくれなかった、ただ、面白そうに笑うだけだ。
一体何を笑うことがあるというのか。
それが分からない霖之助は、魔理沙の方に向けた顔をもう一度朱鷺子の頭のてっぺんに向けて、呟いた。
「しかし、この僕なんぞじゃ、力不足ではないのだろうか・・・彼女にだってもっと、友達とかはいなかったのか？」

その言葉に、魔理沙の中の辟易は頂点に達した。

具体的にどういうことかは言わないが、彼女は、霖之助がこのままではいけないなと考えた。
しかし、ならば彼女にこの男の精神を矯正する方法があるのか？と聞かれれば、思いつかない。
もっと直接的に最も重要なことを伝えればいいのだろうが、そんなのはただのお節介、情愛をただの作業にしてしまうような非情な行いだ。
朱鷺子と霖之助の関係は、二人が自分達でどうにかしていった方がいい。

――――やれやれ・・・男っ気のほとんどないあたしがどうしてこういうことを考えられてしまう・・・・・・そんでもって何で、当の香霖は何も分からないんだ――――
とにかく、もう自分がこの場にいても、邪魔になるだけだ。
諦めたように大きなため息を吐いた魔理沙は、朱鷺子を見つめる霖之助の横顔に向かって、こう言った。

「香霖、あたし達はそろそろ、この場を去るぜ。戻る場所があるからな・・・朱鷺子のことは、あんたに任せる」
その声を聞き、もう一度魔理沙の顔を見た霖之助が、
「帰るのか？・・・魔理沙は朱鷺子に何か言う事はないか？」と聞いてくる。
「もうないぜ。さっき言ったことは忘れてないな？とにかく、こいつの好きなようにやらせてやってくれ」
「ブレンパワードはどうする」
「それは、朱鷺子に任せる・・・多分もう助からないだろう。ただ、胎内に入ってやれば、少しは気も楽になるし、生命も永らえる。痛みや苦しみはないだろうから、少しでも長い間一緒にいてやれば、ブレンも気が楽だろう・・・香霖の方からそう言っておいてくれ」
「・・・分かった」

「・・・・・それで・・・」

魔理沙は続けて何か言おうとしたが、その言葉がどうしても発せられず、小さく口を開いた状態で眼を伏せ、なんとも言えない表情になった。

これから話すことを実行できる自信がなかったからだ。

少なくとも魔理沙自身には、次なる発言に責任を持つことができるとは思えなかった。

それでも、言っておいた方がいいだろう。

そう思い、意を決して開きっぱなしだった口を動かして、声を連ねる。

「あたし達の方でも、ブレンの傷を治す方法を考えてみる。それができれば、またここに来るかもしれない」

「そうか・・・まぁ、まだ考えている段階なんだろう？期待はしないでおくさ」

こう言う時の霖之助の固い考えは、逆に助かった。

聞こえていないのか、あるいはそんなことが無理だと分かっているのか、彼に抱きつく朱鷺子がほとんど反応を示さないことも、救いだった。

魔理沙は、小さな鼻息を鳴らして、続ける。

「朱鷺子にどうしても何かやりたいことがあるっていうなら、地底に来させてやってくれ。あたし達も歓迎するし、協力もする。ただ、ブレンはなるべく動かさない方がいい。そのまま死んでしまうかもしれないからな・・・じゃあな」

伝えるべきことは大体伝え終えたので、魔理沙はそのままクルリと踵を返して歩いてきた足取りをたどるようにマリサブレンの方へと戻っていく。

霖之助の目線が背中を追っているようだったが、もう振り返ること

はしないでおいた。
ただ、背中を向けたまま、
「あたしじゃなくて、朱鷺子を見ろよ。あたしが慰めて欲しいように見えるのか？それなら、慰み者にでもなってやるけどな」
そんな冷やかしのような台詞の後、魔理沙は背中越しでも霖之助の視線が逸れたことが分かった。

そのままマリサブレンの傍まで歩み寄り、装甲に上って胎内へと入り、スリットウェハーにもたれかかる。
装甲が閉じ、壁面に外の映像・・・ブレンの目線から見た映像が映る。
そこからようやく、魔理沙はもう一度霖之助と朱鷺子の姿を見ることができた。
まるでひとつの生物であるように、二人の身体が寄り添っている。
遠目から見れば、恋人同士にだって見えるものだ。実際、そうなってくれるのもいいことなのだが・・・
なんだかんだいって、彼だって心優しいいい奴だ。
店の商品のことになるとどことなくがめつくなるが、薄情ではない。
魔理沙は、朱鷺子のことを霖之助に任せたことは、正しいことだったと分かり、小さく笑みを浮かべた。

何にせよ、今はこれでいいんだろう。
しばらくすれば、朱鷺子も落ち着いてくれるはずだ。
彼女のブレンだって、楽にその生命を終えるだろう。

魔理沙は今一度二人の姿を見るのをやめると、それからはもう見ないようにした。
例え傍から見るようなことでも、二人の邪魔はできない。

ブレンに顔をあげ、広場から見える青空を見上げさせる。

まだ昼間の、眼に痛いほどに青々とした空だ。

第十二話　その6

魔理沙はようやく、ずっと待っていたであろう霊夢と輝夜に、オーガニック的な通信を寄越した。
「終わったぜ。いこう」
すぐに霊夢からの返事がくる。
（ん。そんじゃ）
やや遅れて、輝夜も返事を寄越す。
（・・・ふがっ・・・んぁ。ぁぁ・・・終わったのね。なら、帰りましょう）
輝夜の方は、どう聞いても寝ぼけている。というかそれ以前に、今の今までちょうど寝ていたのではないだろうか、と思わせる声だった。
いやはや、暢気というかなんというか・・・
今まで真面目に悩んで、感傷的になっていた自分が馬鹿なようだ。
と魔理沙に思わせた。

ハクレイブレンとカグヤブレンが先んじてゆっくりと地面から浮きあがり、森から上空へと出ようとする。
先からずっと言っていることだが、地底に帰るためだ。
朱鷺子のブレンは置いていく。
全て朱鷺子自身に任せることにした。
もっとも今はもう、死にゆくだけなのだろうが・・・

二体のブレンを追うように、マリサブレンもまた宙に浮き上がる中で、魔理沙はふと、あることを思い出した。

そうだ。

生命を失うというのなら、それは朱鷺子のブレンだけではなかった。魔理沙達が魔法の森に到着したその時、それとは別のブレンが撃破されていた。

それにだって、誰かが乗っていたのだろう。

朱鷺子と同じように、ブレンの死を悲しむことができるかもしれない何者かが。

そんなことを考えると、魔理沙はごくごく自然な気持ちで、胎内で両手のひらをぴたりと合わせるとそのまま悼むように深く眼を閉じた。

ブレンに対しての哀悼の意を表するためだ。

ブレンに乗っていた者のことは、この際考えない。

嫌なことになったな、ぐらいの同情の言葉は思い浮かべるが。

妖精ならば、その内生きかえるだろうし、妖怪なら、例えブレンの爆発に巻き込まれても死にはしないだろう。

こういうところが、顔をしった朱鷺子と違い、何も知らない相手にはクレバーになれてしまう人間の悪いところだった。

冥福を祈るのなら、ブレンだけだった。

――朱鷺子のブレンばっかり心配している場合じゃなかったんだな・・・もう一体、死んでしまったブレンはいるんだ・・・・・・

冥福を、お祈り申し上げるぜ――

そうしてしばらく、両手を合わせて眼を閉じ、じっとしていた魔理沙。

しかしその眼が、突然はっ、と見開かれた。

哀悼の念に混じって、ふとあることが、脳裏に浮かんだからだ。
まるで癌細胞が身体にできるように、気が付いたら突然、心の奥底で沸き立っていた。

散っていったブレンの魂は、一体どこにいくのだろう。
冥界にいって、輪廻転生を待つ身になるのか？
あるいは地獄に落ちる？
もしかしたら、悟りの境地にいたり、涅槃に至ったか？

・・・分からない。
しかし魔理沙の脳裏には、いつぞや彼女がブレンに対して感じた、『場』という表現が思い出されていた。
『場』・・・ある一定の空間の中で繰り返される、サイクルのような活動の規則・・・

「・・・・・・」
どうでもいい。今はそんなこと。
魔理沙は、手を合わせたまま見開かれていた眼をもう一度閉じ、再び、散っていったブレン、そうして、これから散りゆくブレンの魂が楽でいられることを祈った。

森の木々の上へと抜け、地底へと向かい動き始めたブレン達を差す日の光は、熱いほどに暖かかった。

※

魔理沙達、そしてブレン達が去り、広場に残される形になった霖之助と朱鷺子、そして、傷を負ったブレン。
霖之助は、抱きついてくる朱鷺子の肩に手を乗せたまま動かなかった。朱鷺子を引き離すわけにもいかず、動こうにも動けないからだ。とにかく今はただ、朱鷺子の気が落ち着くまでは、こうしているしかない。
そう考えていると、ずっと腹にうずくまるようにして黙りこんでいた朱鷺子の、とても微かな・・・ただでさえ小さいのに、霖之助に顔を押しつけながらいうものだから、余計にくぐもって小さくなった声が聞こえてきた。

「・・・・・・ありがとう」
「え?・・・あぁ、いや。こんなこと・・・」

読み終えた本を返してくるときと同じような台詞だった。
しかし、その印象はその時とはまるで違う。

今回のありがとうという言葉は、今こうやって一緒にいることへの感謝の気持ちなんだろうと、霖之助は考えた。
確かにそれが間違いではないのだが、それよりも深い意味合いがあることは、やはり彼には分からなかった。
そうして、これまでずっと彼に助けを求めていたのに、全てが終わった今になってようやく現れたことへの哀しみを押しつけようとしない、その優しさもだ。

ただ霖之助は、彼なりの誠実さを込めて、
「本を貸してやる以外にも、これぐらいのことなら、いくらだってしてやるさ。減るもんじゃないしね」
と続けた。どこか一言多い台詞だ。
だがこの一言は、言った霖之助本人が考えるよりも遥かに、朱鷺子

にとっては救いとなっていた。

身体に抱きついてくる彼女の腕の力が少しだけ強くなった気がした。

「ぅ・・・」

思わず呻き声のようなものが漏れ出そうになるが、そこを堪える。

実際、別に苦しいとかそういうわけではなかった。

ただ、一瞬だけ強くなった朱鷺子の身体の感傷を受けると、何か言いようのない、霖之助としても初めて味わうような感覚が芽生えてきて、それで思わず呻きそうになったのだ。

これは一体何だろうか？

身体の芯の方から、何やら熱のようなものがこみ上げてくる。

全ての意識が、朱鷺子の方へと吸い込まれるようになる。

同時に、朱鷺子の存在が心の奥の奥にまで染み込んでくるようでもあった。

――彼女は一体、どうしてこんなことをしているんだ？彼女にとっての僕とは、一体何者なんだ？・・・ただの、本を貸してくれる店の店主ぐらいのものじゃないのか・・・僕にだってこの娘はただ、よく本を読みに来る、妖怪の割に行儀のいい奴、程度のものなんじゃ・・・――

この期に及んで、そんなことを考える霖之助。

だが彼には、こうやって朱鷺子の傍にいてやっている中で感じる気持ちは、ただそれだけではないように思えた。

いつも店に訪れてくる彼女の笑顔と、そして今回見せた、深く吸い込まれるような眼に感じるものは、ただの妖怪に対するものでは・・・

そのことに、ようやく気づくことができた。

しかし、それが何であるのかは、霖之助にはやはり分からなかった。
だが彼は、決して長くはない朱鷺子との関係をもう一度頭に思い浮かべ、そうして、思った。
というか、実感した。
本を読むことを楽しんで、本からいろいろなことを受け取ろうとしている彼女に対し、何も感じていないわけがないのだと。
物を・・・例えば物語を好きでいる彼女に対する、敬意というか、認める心。
そうして、そんないろいろな物語を純粋に受けいることを、なんだか可愛らしいな、とも思っていたのだ。

――・・・違うな・・・・・・・・僕もそろそろ、彼女との関係を、それよりも一歩深く踏み込んだところへと進むことを、受け入れないといけない・・・いい加減友人が魔理沙と霊夢だけというのも、あれだしな・・・――

そう脳裏でひとりごち、じっと朱鷺子の頭を見ていた霖之助。
しかしながら、やはり彼には、その一歩を進んだ先にどういうことが待っているのか想像できない（精々、中のいい友達、という認識に留まっていた）辺り、魔理沙からすれば最早彼は人間でも妖怪でもなく、単なるタンパク質の塊なのではないかと思えるほどだった。
しかし、そんな彼が朱鷺子に対しこう考えることは、大きな進展であることには間違いがなかった。

いつまで朱鷺子は抱きついてくるのだろう、いつになれば離れるんだ？
そう考えながらも、もうしばらくの間は、このままでもいいか。とも思えた。
霖之助は、伏せられていた目線を上げ、横たわる朱鷺子のブレンパ

ワードを見た。
そうして、考える。
――この娘と仲良くなりたいのなら、このブレンのことだって、もっとよく知らねばなるまい・・・そうして、短い間だろうが、僕もこいつによくしてやらないとな・・・――

※

未の半刻ごろ。ようやく、上る朝日が天高くに上る時間帯だ。
守矢神社にて早苗の帰りを待っていた神奈子達だったのだが、その時は予想以上に早く訪れてしまった。
まだ昼まっ盛りという時分に、早苗の駆るグランチャーが、神社の境内へと降り立ってきたのである。
幻想郷各地のブレンを虱潰しにすると言っていたものだから、もう少し遅くまで帰ってこないと思っていたので、この早すぎる帰還は予想外だった。

慌ててグランチャーを出迎えに、石畳の上へと降臨する二つの神。
その眼前で、神社の小さな本堂に身体の左側を向けるように、鳥居をくぐって石段を上ってからすぐの石段の上へと降り立ったグランチャーが、ゆっくりと膝をついてしゃがみこみ股間の装甲を開く。
それからすぐ、胎内から出た早苗が開いた装甲の上に乗る。
が、そこから石畳の上に降りてくることはなかった。

装甲の上に乗ったまま神奈子達の方だけを向き、無礼にも見下ろすような形となった早苗だが、彼女自身その無礼は承知らしく、大声で、

「申し訳ございません。無礼を承知で、この場でお話させていただきます。緊急の事態なのです」

と言ってきた。

緊急の事態。

その言葉を言うだけの焦燥も、早苗の顔には見受けられた。

何事だ?と眉をひそめる神奈子と諏訪子に対し、早苗は続けた。

「私がグランチャーに乗っていることが、魔理沙さんに気づかれてしまったのですっ。もしかしたら、私達の野望も勘づかれてしまっているかもしれません・・・このままでは、お二人が危ないのです！いち早く、この神社を離れた方がよろしいですっ」

ひと息にそう言うと、神奈子達から見て横を向いていたブレンが、左手をこちらに差し出してくる。

それと共に早苗が、

「早い内にここを去ります。さぁ、これにお乗りください！」と続ける。

早苗の説明は急ぎ気味だったが、大体のことは分かった。

彼女の言う通り、グランチャーに乗ってここを去るべきだろう。

もし、事態を察した天狗達が報復を考えるとするのなら。

が、早苗の言葉にさっさと従うよりも前に、神奈子は、

「ばれたって、どうして?」と、早苗に向かって聞き返した。

それに早苗は、もう一度大きな声で応える。

「正直にお話しますが、つい私が白状してしまったんです、ごめんなさいっ・・・だけど、このまま神奈子様と諏訪子様に危険が及ぶ

ようなことだけは、絶対の避けたいのです。天狗達の行動力は凄まじいです。しかも今回は本気の様子です、何をしてくるか分かりません・・・守矢神社から一度離れるのはお辛いでしょうけど、どうか私と一緒に逃げてくださいっ。後でどんなお叱りでも、与えて下さって結構ですから！」

質問に対し、早苗が正直に応えてくれたのなら、お叱りなんじ与えるつもりになどならなかった。
神奈子はにっ、と笑い、応える。
「なるほどねぇ・・・よく正直に話した。早苗、えらいっ！」
「えっ？・・・あ、お褒め頂いて、ありがとうございます・・・・・・えへ、えへへへ～」

とりあえず、事情は飲み込んだ神奈子と諏訪子は、互いに、
「想定していたことが、思ってたより早く起こったということね」
「神社には後で戻ってくるからいいとして、さ、いこう」
と言い合いながら、グランチャーの手のひらへと乗る。

二人がしっかりと手のひらの上に乗ったのを確認した早苗は、その左手を装甲の傍に寄せると、右手の方もすぐ傍に持ってきて、両手のひらを、二人が落ちないようすくい上げるような形にした。

そうして、右手の親指にもたれかかるようにして座り込んだ神奈子が、装甲の上の早苗に呼びかける。
「よし、いいわよ。ブレンを上げなさい」
「はいっ」
はきはきと返事した早苗だったが、今度はそれに、左手のひらの上でカエルのような座り方をしている諏訪子が聞いてくる。
「でも、これからどこにいくのさ」

それを聞いた早苗は、途端に話しずらそうな、困った表情を浮かべた。
それでも、口を開いて声を連ね、諏訪子の質問に返事する。
「・・・神奈子様と諏訪子様にお住まい頂くために、分社を設ける場所を見つけることができたのです・・・大分安全だと思える場所です。妖怪の山からも遠いので、天狗達が襲撃するにしても、遅れるような場所です。それに、そもそも襲撃することもないと思われます・・・後が怖いですから」

「？・・・喜ばしいことねぇそれは」
こちらの野心がばれたかもしれない状況においては、これから落ちつくべき場所が見つかったというのは、神奈子の言葉通り非常に喜ばしいことであるはずだ。
しかも、早苗の言葉によれば、相当に安全な場所らしい。
しかしその割には、早苗の口調は浮かない様子だ。
またしても一体どうしたんだろうと思い、不思議そうな表情を浮かべる二人に、早苗は続けて説明した。
「ですけどそこは・・・その・・・神奈子様が行くなと注意して下さった場所で・・・」

そこまで聞けば、二人でも早苗の口調が浮かない理由が分かった。
すぐに、早苗の言っている場所がどこなのか、思い浮かんだ。
妖怪の山の反対側・・・そして、神奈子が行くなと注意するほど危険な場所といえば、ただひとつだった。
「えっ？」
「いぃっ」
続けざまに、顔を強張らせて、珍妙な声を出す二人。

なるほど、そりゃ、早苗も困った顔をするわけだ。
それに、妖怪の山からも確かにかなり離れているし、安全と言えば

安全だ。そこには、近づいてくる人も妖怪もほとんどいない。
だが・・・だからと言って、そこを隠れ家にする神奈子達が安全であると言えるのか？

とにかく、早苗の言おうとしていることが分かった神奈子は、結論を早く言わせるためにも、こちらからこう問うことにした。
「もしかしてそこって、太陽の畑では・・・・・・早苗ェ・・・貴方なんてところに・・・」
脱力したように呟く神奈子の声に、早苗は泣きそうな顔で、大声を上げながら返事した。
「はぁい、そうですぅっ！風見　幽香さんがグランチャーに乗っていて、それで駄目もとで頼んでみたら、了承されてしまって、もう断ることもできなくなったんですぅ、ごめんなさぁ～い！でもぉ、あの人が、『花に迷惑かけなければ、何もしない』って言ったから、それで、いいかなぁ？と思ってぇ・・・」
「あぁ～・・・分かった、分かったわ、早苗はよくやった・・・私達はなんにも怒ってないわ」
泣きそうになる早苗を神奈子が宥める。
本当は、幽香がグランチャーに乗っていることに驚きたい気分だったのだが、それ以上に、早苗を慰めてやるのが先決だった。
続いて諏訪子も、
「アジトになりそうなところが見つかっただけでも、よかったよぉ・・・それに、あの風見　幽香が本当に何もしないってんなら、確かにあそこはいい隠れ場所になるよ・・・なんせ、幽香の名前だけでも、強力なバリケードになっちゃってるからね」と続いた。

それを聞いた早苗は、涙目ながらも笑顔になって、わざわざ危険な場所をアジトにせざるを得ない状況を作った自分を批難しない二人

の優しさに感激しながら、応えた。
「そうですか?・・・そうですねぇ」
神奈子がそれに続く。
「そうとも・・・それに、実際幽香が獅子身中の虫になったとしても、私と諏訪子の二神がかりなら、負けはしない・・・早苗、貴方が境内に降りられないほど急ぎの用事なんでしょう?いろいろ時間を費やして、済まなかったねぇ・・・さ、行くがよろし」
「謝って頂くなんて、そんなぁ・・・・・・分かりました・・・グランチャー、行きましょう、新しい貴方の友達が待っています」

守矢神社の三人を乗せたグランチャーが、境内を離れ、空へと飛んでいく。
行くべき場所は、幽香のいる太陽の畑だ。
早苗達以外にも、すでに事情を知っている藍と彼女のグランチャーも向かっている。
咲夜とそのグランチャーだけが、紅魔館に残ることになっていた。
一気に大所帯で向こうにいくわけだが、幽香は本当に何もしないのか・・・
それに、太陽の畑がこちらの本拠地になると、紅魔館も大分遠くなる。
行動を起こす際、咲夜に対しどう連絡すればいいのかも、考えなければいけない。

※

またしても、見たこともないグランチャーが紅魔館にやってきて、

咲夜をグランチャーと共に連れていってしまった。
そうしてそれから何刻か後、咲夜は戻ってくる。
彼女を乗せたグランチャーが通り過ぎていくのを門前にて見上げていた美鈴の中にある、グランチャーに対する憤りは、すでに限界を超える寸前にまで到達していた。

――グランチャー・・・お前は、貴様はっ。また咲夜さんに生命を奪わせるようなことをさせたのか・・・？今度は誰だ・・・人か、妖怪か、妖精かっ？その誰かは、殺されるべき悪者だったのか？・・・・・・応えろグランチャーっ！――

遠くから思念だけを飛ばしたところで、返事がくるわけがない。
それは美鈴だって承知だった。
彼女は何も、返ってこない解答により一層憤りを強くしたかったわけではない。むしろそれを望んでいた。
彼女の中にある漆黒の殺意を、より確かなものとするために。

――応えないのなら・・・――

すでに彼女の中に、グランチャーを殺めるための考えは出来あがっていた。
頭上を通り過ぎ、門の向こう側へと去っていくまで、じっとグランチャーの身体を睨みつけていた美鈴。
彼女は自らの目線で、そしてこれから成す悪魔の所業で、グランチャーを突き刺し、貶めて、殺す気でいた。
それは、最早咲夜を救うためとか、そういうものではない。
グランチャーへの恨みを発散するためだけだった。

グランチャーが去っていき、その姿が高々とした正門の煉瓦の向こうに隠れて、見えなくなる。

再び門の向こうに見える館に背を向けて仁王立ちになった美鈴は、懐から、パチュリーに借りてきた一刷りの新聞。オルファンとアンチボディについて記載されている記事を取り出して、それを眼前にかざして両手で広げ、紙面にじっと眼を向けた。

『地底』。

オルファンから生み出されたブレンパワードが集まるというその地の名前が、彼女の網膜に強く焼き付いていた。

※

八雲の屋敷。

その遥か上に広がる空は、朝なのか、それと夜なのかも分からない奇怪な色彩に彩られ、そこにかかる雲をも、どこか毒々しい色をして漂っていた。

それがこの屋敷を、幻想郷の中にありながらこの世在らざるどこかに存在するかのようにも思わせていた。

屋敷の一角にある中庭は広い。

友人の住まう屋敷、白玉楼と似た枯山水であるが、その景観には風情はあまりない。

なんせ、綺麗な模様の描かれた砂の上には、一体のアンチボディが佇んでいるのだから。

屋敷の縁側から地面に足を付き、彼の者がいる下へと歩み寄りながら、見事に山水の流るる様を現していた砂を踏みしめながら庭に足を踏み入れたこの屋敷の主人・・・であるのかも確証することので

きない紫は、静かに、しかし強く生命の躍動を感じさせながら前を真っ直ぐに見つめて佇むそのアンチボディ、バロンズゥの顔を見上げながら、ふと考えた。
そうして、何の気なしに差した日傘で頭を隠すようにしながら、その影で不気味な笑みを浮かべる。
ついさっき、自分のことを『大好き』とまで言ったさとりのことを思い出して。
嘲笑うかのように、あるいは親愛の色を浮かべながら。

そうして、彼女の呟く声が、風も吹いていないように思える中庭の中で、静かに響いた。
その声を聞くのは、彼女の駆るバロンズゥのみである。

「ふふ・・・・・嘘を見抜く力を身につけなさい・・・貴方はきっと、私がついた一番の嘘が分かっていない・・・・・・もう、貴方と会うことなどはないでしょうね。もし機会があるとしても、その再会は、アンチボディが作るビットの壁を隔てた対面・・・そうして、明確な敵意を込めた、戦いの中での・・・・・・ふ、ふっふっふ」
肩を揺らして笑う彼女と共に、彼女の差した日傘も微かに揺れた。
それを見るバロンズゥの眼・・・オレンジ色に光る溝にも、妖しい光が揺れる。

「・・・私の心の内を知った時、貴方はまだ、その好意を忘れないことができるかしら?・・・・・・楽しみねぇ。もし、忘れないでいてくれたのなら。その時は・・・・・・」

第十三話『サイド・バイ・サイド』　その1

永琳と共に、再びオルファンへと赴くさとりとブレン。
傷ついた彼の者と共に、さとりはもう一度太陽の光を見ることとなった。

抜け穴の殺風景なごつごつとした壁。
僅かな光に当てられ、薄暗い中により一層漆黒の陰影を浮き上がらせる土と岩の塊のような壁が、少しずつ明るく、土本来の色へと戻っていき、真黒に染まっていた暗い影もなくなっていく。
そしてそれを過ぎれば、あの突き刺すような真っ白の光が待っている。
直視すれば、本当に眼が焼けるほどの太陽光。
しかも今は真昼だ。
陽にあたる機会の少ないさとりには厳しいほどの、痛みのない光線を撃ち放ってきていた。
すでに何度かこの光には眼を向けているため、感慨こそ薄くなっていたが、光の鋭さにはいつまでたっても慣れる気配はなかった。

「・・・ぅ」
ブレンの胎内にて、あまりの眩しさに見上げるその視線に差し込む光に向けて左手をかざして、鋭い輝きを遮るさとり。
それでもなお、頭上に・・・はるか頭上に輝く太陽をこの眼で見ようと思うのだが、光を手で遮れば、即ち太陽も一緒に隠れてしまう。

光を眩しく思っている以上、その源である太陽を直視することは、どうあってもできないのか・・・

地上に住まう妖怪ならば、真昼の太陽にも眼を向けることができるのだろうか？

多分、無理だと思う。

きっと妖怪が太陽を恐れているのは、見ることすらできないというその不気味さがある故だ。

人間だって、暢気に太陽を見て、ひなたぼっこだとか考えるべきではないのではなく、もう少し考えるべきではないだろうか。

もしかしたら神々しいこの太陽の光が、知らぬ間に、じりじりと身を焼いているかもしれないということを・・・

「・・・・・」

ただ、その割には、さとりの心は頭で考えるよりかは、太陽の光を不気味だとは思わなかった。

それは何故かは分からない。

そして眼で見れない以上、太陽に眼を向けることはもうやめる。

頭上で輝く光の塊を見上げるのはやめ、上げた顔と目線を一緒に降ろしたさとりは、ブレンの装甲を開かせ、胎内からその上へと出た。

そうして装甲の上でしゃがみ込み、金属質でスリットウェハーよりかは遥かに硬質ながらも、感触でなく雰囲気として感じられる柔らかさと温かさを持つその縁に両手を添える。

そうして広げられたブレンの右手を、装甲とぴたりとくっつように傍へと寄せてきた。

そうしてさとりは、その右手のひらの上に座り親指のところに肘をかけてもたれかかっている永琳に声をかける。

「八意さん」

それなりの高空を、人間が生身で走るよりかは遥かに速く飛行する

ブレンに乗っていれば、風が強く身体に吹き付けてくる。
そんな中にあっても聞こえたさとりの声に、永琳は親指にもたれかかっていた背中を起こして、装甲の上でしゃがむさとりの方に身を寄せてきて、応えた。
「どうしたの？」

「これから、もう一度オルファンさんと話をすることになります・・・ですけど、あの方はもう一度私の声に応えてくれるでしょうか・・・何だか不安になってきました」
感性と、その場の気持ちに従って行動を起こしたが、そのことにオルファンが応えてくれるかどうか分からない。
そのことに遅れて気がついたのだ。
こちらがオルファンの下に赴き、呼びかけたところで、何の返事も返ってこないかもしれない。
その恐れを感じるさとりに対し、永琳は返す。
「そうなることも大いにあり得るけど・・・まぁ、大事なのは行動することよ。これからも、オルファンと対話する機会は来る。今回は無理でも、繰り返し呼びかけていけば、あの者も何かを教えてくれるでしょう」
「・・・そうですね」

そうしている内に、ブレンはオルファンに大分近づいてきた。
さとりの眼に、オルファンが根を張りそれが地面に広がっているように見える黄、一色の何かが見えた。
オルファンの周囲の地面に、何か黄色い物が覆いかぶさるようにしている。
最初は遠くに見えていたので何がなんだか分からなかったが、さらにオルファンへと近づき、その三日月が落ちてきたような巨大な金

色の肉体のすぐ傍にまで来て、装甲越しに眼下を見下ろすことで、さとりにもそれが何なのかはっきりと分かった。
黄色い花の、花畑だ。
オルファンを中心に広がる花が、さながら根が張り巡らされるような模様を描いている。
風に吹かれて揺れる無数の花が、黄色く染まる大地に様々な陰影を映し出し、ひとつに留まらない色彩のグラデーションを見せつけてくる。

「あれは・・・花ですね？」
彼女の声に、永琳が応える。
「えぇ・・・今朝の調査で発見したの。河童達が調査をできなかった間に、あっという間に繁殖していたらしいわね・・・多分これからも、この花畑は広がっていくでしょう」
「オルファンが発生させたものなんですね」
「えぇ」
「綺麗ですねぇ・・・」
「ん・・・しかもあの花は、オーガニックエナジーに反応して、光を発する・・・言わば、ブレンと同じようなことができる花なのよ」
その永琳の説明に驚いたさとりは、眼下の広大な花畑に眼が釘付けになったまま、
「へぇ・・・」と感嘆を漏らす。
ぼーっと装甲から身を乗り出していたさとりが、下手するとそのまま落ちそうだったので、彼女の肩のあたりに手を添えて支えながら、永琳は続けて言った。
「危ないですよ・・・で、あの花もすでに一本採っているから、こちらで研究を進めておくわ。この前貴方が採取してきた植物よ。あれがこの花だったの・・・・・・まぁ、研究しても、特別何かが解明できるとは思えないけどね」
落ちないよう、装甲の縁から身を乗り出していたのを押し戻される

さとり。
「あ、どうも・・・オーガニックエナジーに反応する、オルファンが生み出した花ですか・・・・・・まるで、私達に対する贈り物みたいじゃありませんか」

さとりの言葉に、永琳ははっ、とした表情を浮かべた。
彼女はただ何の気なしに言っただけだろうか、永琳にとってはそれが大きな意味を持っているように聞こえた。
何故オルファンが、あの黄色く、光を発する花を生み出したのかという理由を考えていた永琳にとっては、さとりの言葉は、彼女なりの解答として受け取れるものだった。

贈り物か・・・
あまり現実味がないが、そういう考え方もある。

彼女の肩にあてていた手を離し考え込むように僅かに俯いた永琳に、さとりが不思議そうに聞く。
「どうなさったんです？」

「・・・いえ、つい私なりに、あの花の意味を考えてね・・・・・・でもまぁ、今はそういうのはいいでしょう。さて、ブレンをここから中に入らせましょう。この前の最深部に向かうわ」
すでにブレンは、オルファンの最深部へと向かう最短のルートに繋がっている大きな溝の傍にまで来ていた。
後はここに入って、スリットウェハーの道を通り最深部に向かうだけだ。

永琳の催促に頷いたさとりは、装甲の上からブレンの顔を見上げ、彼の者に対し語りかけた。
「まだ傷も完全に癒えてないのに、手伝わせてしまってごめんなさ

い・・・いってくれる？」
ブレンはそれに、ぶるぶると鳴いて返事する。
永琳にはそれが、さとりの頼みなら何でも聞くと言っているような気がしたし、実際さとりにはそう聞こえていた。
彼女の、
「ありがとう、ブレン」という声と共に、ブレンは溝をくぐり、大規模なスリットウェハーが一面に広がるオルファンの体内へと入っていった。

そうして、純金の塊のようにも見える外観とは裏腹に、『そのもの』の体内・・・スリットウェハーに奔るいくつもの溝が時折蛇のようにうねるかなり生物的な空間をいくつか通り過ぎ、同じようにいくつかある細い道を通っていたブレン。

あまり変わり映えもせず、まるで人の胃袋の内側のような（実際は似ても似つかないが）広い空間を抜け、その次は血管の内側のような通路を抜け、というのを何度か繰り返し、いい加減飽きてきそうになった時、ブレンは前に進むその動きを止めた。
これ以上先に進めないということだ。
この先の道が大分狭くなっている。つまり、この奥が最深部ということだ。
何も言わずとも、ブレンはその場で足場の上に降りしゃがみこむ、そうして、永琳の乗せた右手の甲をぴったりとスリットウェハーの地面へと付けた。

そのまま永琳は手のひらから足場へと降り、それにさとりも続いて、

装甲から飛び降りる。
そうして隣り合って立った二人は、前方へ・・・スリットウェハーが真っ直ぐに伸び、そこから何十mか先で、奥の様子を見えなくしている暗い影が落ちているのに眼を向けた。
しかし、この先に何があるのか、さとり達は知っている。
これからゆっくりと歩を進めて、その何か・・・オルファンの最深部であり、『そのもの』と語り合うことができる場所へと向かう。

先んじて歩を進めた永琳の背中を追うように一歩を踏み出そうとしたさとりだが、その時、胸の内である感情が湧き出てきて、彼女は歩きだすよりも前に、突然大きな声を上げていた。
その声は紛れもなく、この先にいる・・・いや、すでにもうこの場にいて、ずっと彼女達を包みこんでいるオルファンへと向けた声だった。
「あの、オルファンさん!ご覧の通り、私のブレンは、グランチャーとの戦いで深く傷つきました。ですが、決して死んではいませんっ」

「・・・さとりさん?」
突然スリットウェハーの中を反響しエコーとなったさとりの声に驚き、立ち止って背後にいる彼女の方へと振り返る永琳。
尚も、さとりは続けた。
「一時は、戦うことへの恐怖から逃げだしそうにもなりましたが、今それも、乗り越えられるところにまで来ました・・・私達は、まだ諦めてはいません。私のブレンは、私に対し、とても優しくしてくれました・・・私もそんなブレンへの恩返しがしたい・・・・・・続きは、また後でお話します」

そうやって、オルファンに向けた言葉を言い終えたさとりは、次いで、不思議そうにこちらを見つめる永琳に対し言った。

「お待たせしました・・・」
「あぁ、いえ・・・待ってなどいないわ」

あまりに急の事に戸惑いながらもとりあえず返事をして前を向きなおし、改めて歩を進めた永琳の後に、さとりが続く。

永琳は少しだけ遅れて、さとりのこの場違いに思える大声の理由と、それがおそらく、この場において大きな意味を持っているのだろうということを考えた。
ブレンに対し、それを生み出したオルファンに対し恩返しをしようという気持ちは、オルファンにとっても受け入れられるものかもしれない。
単にオルファンのことを調べようとして対話を望むよりも、こうやって、素直な気持ちを以って心を交わせば、きっと何かをもたらす結果になるだろう。
実際以前、永琳がオルファンと対話する装置を動かそうとしても、何の反応もなかったのに対し、さとりが来た時は、彼女はそもそも装置に振れずに『そのもの』との対話を果たした。
これだけ素直な心を持てるさとりには、オルファンだって心を向けてくれるということか。

そう脳裏で考えを巡らせた永琳は、背後から彼女の
「そうだといいですね」という相槌を打つような声が聞こえてきたのにまた、はっとした。
永琳の思考を読み取ったのだろう。
歩みは止めずとも、驚いた永琳だったが、その表情はやがて愉快そうな笑顔に代わって、彼女は声を上げて笑ってしまった。
「あっははは・・・いや、一度貴方への好意を抱けば、その能力もさほど不気味には思えなくなるわねぇ」
「そう言って頂けると、助かります」

薄暗く狭いスリットウェハーの通路の中でも、空気が和やかになるのを感じる。
そのまましばらく、梅雨明けの土のような感触を持った足場を踏みしめながら進んだ二人の歩みは、やがて、最深部へと続く階段へと差し掛かっていた。

※

妖怪の山から、相当遠くにある太陽の畑に向かうのには、結構な時間がかかってしまった。
半刻くらいはかかってしまったのではなかろうか？
とはいえ、まだ空は明るく、太陽も沈む気配を見せず、むしろ益々強く輝いているように見えた。

花畑に向かう途中、早苗のグランチャーの前方で、ゆっくりと飛行する藍色の影が見えた。
一度紅魔館で合流してから、早苗から事情を聞かされていた藍は、先んじて花畑に向かっていた。
彼女と、今合流できたということだ。

二体のブレンがぴたりと並び、神奈子達を落とさないようにしっかりと注意してからグランチャーの胎内に入っていた早苗は、スリットウェハーから見た視点で映されているモニターの中、右脇に見える藍色のグランチャーに眼を向けつつ、オーガニック的な通信で彼の者に対し呼びかけていた。

「藍さん、一緒にいきましょう」
それに、返事がくる。
（うん。待っていた）

そうして、高度４００ｍほどの高空を、眼下の様子を見下ろしながら飛行するグランチャー。
空を飛ぶぐらいのことは奇跡ですらない早苗にとっては、今更遥か高みから大地を見下ろす気分というのは、飽き飽きしたものであった。
しかしながら、普通の人間にとっては、雲の上のように高いところを飛ぶ気分というのはいっそ恐ろしいほどに爽快なのだろう。
一面に広がる緑色で、あるいは土の色をして、ところどころある湖に溜まった水が陽光を反射して輝く。
そういう光景が次々に、雲と一緒に流れていく様子は、早苗だって、飽き飽きしていながらも嫌いなどではなかった。

が、そういう光景に見とれる以上に、注意もしておかねばならない。
どこかでブレンパワードとばったり遭遇するかもしれない。
魔理沙達のブレンでなければ早苗にだって勝てる自信はあったが、不意打ちをされては困る。
花畑に向かう途中で見つけた時には、逆にこちらが先制攻撃をするようなつもりでいなければ・・・

が、そんな早苗達の道中は何事もなく、無事であった。
ブレンはおろか、そこら辺を飛ぶ妖怪や妖精の一匹にも会う事なく（わざわざ用もなく４００ｍ近い高さで飛ぶような者などいないだろし、特別なことではなかったが）、彼女らは無事に、花畑がある丘陵地帯へと到達することができた。

地面が盛り上がってくるため、分からないほどにほんの少しずつであるが、進むにつれて地面が近くなるようにも感じる。

ここまでくれば、花畑まではすぐだ。
同じ花畑でも、無数の鈴蘭が咲き誇っている鈴蘭畑を超えてさらにしばらく進めば、早苗達の視界に、俄かに色濃い黄色の大地が広がってくる。
まるで地面そのものが黄色く染まっているようだが、そうではない。
黄色だけでなく、所々に焦茶色っぽい色や、緑色の色彩も見える。
これは花だ。しかも向日葵の。
花の中では少し大きく、背も高い部類に入るさながら太陽を思わせる姿をした花が、大地を埋め尽くして黄色く染め上げている。
ついに早苗達は、目的地である太陽の畑へと到着した。
そしてここに、早苗が出逢った茶色にグランチャーと、それを駆る幽香が待っている。
胎内で、生唾をごくりと飲み下した早苗だったがここまで来て足踏みしている暇はなかった。

「着きました、ここです」と、藍に対し伝え、そのまま彼女の返事は聞かずにグランチャーを降下させていく。
藍も、返事をすることなく、ただ早苗の後を追ってグランチャーを降下させる。

黄色いペンキをぶちまけたように黄色く染まっていた大地が近づいてくると、決してその黄色が、塗りたくったようなものではなく、むしろ上から被せたようなものであるということが分かってくる。
そうして、そんな広大な黄色の絨毯の一角に、屋敷・・・というよりかは、小屋と言ってもよさそうな小さな建物があった。
あそこが幽香の住処なのだろう。
この界隈に住み着いている幽香が落ち着く、家のようだ。

そうしてその建物の隣には、静かに佇む茶色いグランチャー。

早苗達は、そちらへと向かって降下していく、
さらに地面に近づいてくると、周囲に咲き誇る向日葵の細かい姿が見えるようになった。
一本一本が、そののっぺりとした花弁・・・というか、無数の種ができている茶色い顔のようなものを、皆揃ってある一点に向けている。

早苗達の方・・・いや、早苗達のその向こう側で輝いている、太陽だった。
さすが、日に向くと書く花なだけある。
にしても、一本も例外なく、きれいに揃って太陽も方を向くとは・・・
太陽とほとんど延長線上にいるグランチャー、そしてその胎内にいる自分へと結果的に向日葵の視線が向いていることもあって、早苗としては、さながら整然と並んだ軍隊のような向日葵の姿を、不気味に思わないわけにはいかなくなる。

それでも、ひとまず早苗達を乗せたグランチャー、そして藍のグランチャーは、向日葵の群れの中にある空き地にぽつんと佇む屋敷の前に降り立った。
そうしてそのまま巨大な身体をしゃがませ、まずは手にひらに乗る神奈子達を降ろしてから、装甲を開き外に出る早苗。
そのまま地面へと飛び降りると同時に、その眼には、小屋の戸を開けその奥から出てくる人影が見えた。

幽香だ。
屋敷から出て、白昼の下に早苗達の前に現れた幽香は、息を呑む早苗達の前で、彼女らの先入観とは裏腹に、人のよさそうな笑みを浮

かべ、親切そうに挨拶してきた。
「ようこそ、お越しくださいましたね。お待ちしていました・・・おもてなしの用意もできています。どうぞ中にお入りください」

「・・・・・・」
早苗はただ、ぼーっと、その声を聞いているばかりだった。

遅れて、藍が地面に降り立つが、それにも気がつかない。
なんともはや、予想外な気分だ。
神奈子が、極悪非道の妖怪のように話をしていたものだから、一体どれほどの恐ろしい者だと思ったが、別にそれほどではないのではないか？
最初、魔法の森から撤退していた早苗が会った時も、やはりそこまで恐ろしさは感じなかったが、どこか淡々とした態度だったため、警戒はしていた。
それに対して今度の幽香の態度からは、そんな淡々とした様子さえ感じられなかった。
むしろ、人がよさそうな笑顔であるし、中々これで美人さんではないか。
ただ、にっこり笑った顔に、何かうす暗い影が落ちるように見えたのも確かだったが・・・

以前会った時もそうだったが、そこまで危険な妖怪だとは思えない。
認めたくはないが、神奈子達が大袈裟に言い過ぎていたのか？
今のところは別に、何にも怖くは・・・

どういうことだろうかと、隣に立っていた神奈子と諏訪子の方へ振り向き、顔色を覗ってみた。
これまた意外だ。早苗は思わず眼を眼を丸くするほどびっくりした。
幽香の親切そうな笑顔とは裏腹に、二神の顔は相当にバツが悪そう

で、眼を瞠めて幽香を見据え、彼女をどこまでも警戒しているようでもあった。
この二神こそ絶対的な真理であると考える早苗は、二人の訝しげに幽香を見る顔を見て、やはり、彼女に対しては気をつけておこうと考えた。
もしかしたらあの人のよさそうな笑顔は、単なる上っ面だけのものではなかろうか。
そう考えると、綺麗な顔立ちにも、どこか作り物めいた印象が受けられる。

そうすると、また幽香の声が聞こえてきた。

「遠慮せずに、いらしてください。喉も渇きましたでしょう？何か、飲み物もお出ししましょう。私は用意してきますから・・・戸をくぐってすぐ右に行けば客間です。失礼ながら、お先にお待ちいただけますかしら？」
そう言って、そそくさと戸をくぐって、屋敷の中へと戻っていく。

「・・・・・・」
神奈子達と同じ顔つきになって、じとーっとした眼でその様子を見送る早苗。
あの者の言う通りにしはしたくないが、幽香がこうやって招き入れている以上、そして、彼女の協力の下この場をアジトにする以上、こちらも誘いを突っぱねて屋敷に入らないわけにはいかない。
彼女は、静かに
「・・・確かにあの妖怪のいう通り、私は今、無性に喉が渇いている。それを見るだけで分かったなんて・・・とんでもない妖怪だわ・・・っ」
と呻いた。

「いや、それは関係ないだろ」
という諏訪子の声を聞きながら、早苗達も揃って幽香を追い、屋敷の中へと入っていった。
そうして、戸をくぐってすぐ右に行くと（東欧風の屋敷だ。靴を脱ぐ必要はなかった）、確かに客間があった。
木組みの椅子に、大きなテーブルがある。
そしてまぁ・・・いろいろとこう・・・早苗には細かいことは分からないが、ごくごく普通の家の中といった感じだ。ただ、小奇麗ではあった。
しかしながら、噂に名高い妖怪の住む場所としては、何とも趣が和やかすぎる。
開けられた大きな窓から、薄いレースのカーテンをなびかせながら風と一緒に日差しが入ってきて、七、八畳ほどの（西洋風の建物でこんな形容をするのはなんだが）狭くはないが広くはない空間が照らされる。
神奈子達が警戒している以上、早苗も気を和らげるつもりはなかったが、益々、拍子抜けするほどに不思議な気分になる。

まぁとにかく、幽香にここで待っていろと言われたんで、机の前に並んでいる椅子に、適当に座っていく。
幽香は、ここに入れと以外何も言っていなかったが、要するにそれは、好きなように待っていればいいということであろう。

早苗は、とりあえず近くにあった椅子に腰かけて、何だかよく分からないが綺麗な模様が描かれている布が敷かれた机に頬杖をつき、幽香が来るのを待った。

二分もしない内に彼女は客間へと入ってくる。

相変わらずにこやかな顔をしている。
両手で大きな盆のような物を持っており、その上には、いくつかのガラスのコップやら陶磁器のカップやらが置いてある。
あれに飲み物を入れてきてくれたんだろう。
そそくさと、椅子に座る早苗達に周囲を回りながら、コースターだったか？それを敷いてから、盆の上にあるものをその上においていく。
その様子を眺めながら、早苗は一瞬、とうとう幽香に対する警戒心が抜けそうになってしまった。

いやはや、案外ドＳ（親切）な人ではないか。
二神を疑うわけではないのだが、本当に、人間達は愚か妖怪でさえ恐れおののくような凶悪妖怪なのだろうか、彼女は？

そんなことを考えながら、幽香が椅子に座る全員分の飲み物を配り終わったらしいので、自分の前にあるガラスのコップに眼を向けた早苗。
そこに満ち満ちている液体を見た時、彼女の眼が点になった。
思わず、声になっていないような声が口から漏れ出てくる。

「お・・・おれんぢ・・・じゅ～・・・す？」
その声に続くように、神奈子達も順々に、戸惑った声を出す。

「私は・・・珈琲だ・・・昼間っからこんなものを？」と、神奈子。
「私も珈琲だ・・・えー、珈琲というのは、眠気防止と疲労解消の効果があるらしく、朝の眠気覚ましとか、晩にも呑む人が多い。成分のひとつであるカフェインには軽い依存症があるらしくて、毎日飲んでいる人は止められなくなる・・・実はお茶にも含まれてるから、お茶だって似たようなものだけどね。珈琲というのは、地獄のように黒く、死のように濃く、恋のように甘くなければならない、

という諺もある・・・・・・で、それを今出すのか？」と、藍。
「私は・・・・・・ミ・・・ミルクて・・・餓鬼扱いしてこのぉ・・・っ」と、眉をぴくぴくさせながら諏訪子。

一同の反応を見て、誰も座ってない適当な椅子（なんと早苗の隣だ）に腰かけた幽香は、不思議そうな顔をして、言う。
「ご不満ですか？でしたら、別のものを今からご用しますけど・・・」

それを聞いた神奈子と藍は、続けざまに、
「いや、我は別に、珈琲が嫌いなのではない。是非頂きます」
「私は、もう何だっていい」
と応える。

しかし、早苗と諏訪子は憤りをあらわにして、すぐさま幽香の声に応えた。
「あ・・・あのぉっ・・・オレンジジュースってなんですかっ？私をお子様みたいな扱い方して・・・っ」と、早苗。
それに諏訪子も、
「あたしだってそうだぁー！見た目小さいからって馬鹿にして・・・私はこれでもねぇ、熟女なんだから！」と続く。
そうして最後に早苗が、幽香の親切そうな態度を逆手に取るように、意地の悪そうな口調で、
「どうぞ入れてきてください。私と諏訪子様のために、紅茶をっ・・・ちょうど昼頃のいい時間帯です。『アフタヌーン』の後に続くものと言えば、それは『ティー』だと相場が決まっているのです。貴方はその辺がなぁぁぁんにも分かっちゃいませんっ」

「そう・・・」
紅茶という単語を聞いて、眼に見えて眼の色が変わった幽香だった

が、早苗はそれを気にせず声高らかに続けた。

「私、洒落たお茶を楽しんでみたいと思っていたのです。私の分の紅茶には、小さな花弁でも浮かべておいてください。そうしてそれがくるくる回るのを眺めながら優雅な・・・」

その時だった。

突然椅子から立ち上がった幽香が、話の途中だった早苗に襟首を掴んで、無理やり引き寄せた。

「ひとときをぉ・・・んおえぇっ!?」

形容しがたい声を上げながら、無理やり椅子から立ち上がらされ、その拍子で倒れた椅子がガタンと音を立てるのを聞きながら、早苗はわけも分からないままに襟首を引き寄せられ、幽香の顔を眼の前へと見ていた。

第十三話　その2

その眼は、世の中こんな眼つきをできる生物がいるのか、というような恐ろしい何かへと変貌していた。
実際は、幽香の端正な顔つきの中にあるきりっ、とした眼は、どれほどきつく細められようとむしろ美人に拍車がかかるほどである。
早苗の前にいる怪物・・・その眼は、幽香の放つ威圧感が見せているものだった。
視界いっぱいに広がったその眼から放たれる眼光が、眼窩を突き破り脳に刺さったような感覚を受けた早苗は、神経を通り雷撃となって全身を駆け巡ってきた恐怖に、顔を面白いほどに引きつらせて、
「ひぃえぇぇぇぇぇ・・・っ」
と悲鳴を上げた。
そんな早苗を睨みつけながら幽香は、何と恐ろしいことに、楽しそうに笑みを含んだ声で引く言ってきた。

「ふ・・・ふふ・・・こちらがせっかく親切にもてなしていたのに調子にのって、言うに事欠いて紅茶なんぞ淹れて来いと言ったのはともかく・・・さっきのふざけた言動は許さない・・・貴方、見上げた度胸をお持ちのようね・・・」
「へぇ・・・へぇぇっ！？」

何が何なのかまったくもって訳が分からないが、とにかくまずい。
このままでは喰い殺される。

先程の親切そうだという印象はどこへやら。

喰われるという言葉が脳裏を何度も駆け巡る中で、何とか早苗はそうならないように済むために、いの一番にこの憤怒の形相の幽香に謝罪せねばならないと考えた。
が、しかし、どうやって？
そもそも幽香はどうして、突然こんな豹変したのだ？

そのことを、混乱する脳みそを高速回転させながら必死に考えた早苗は、あるふたつの結論に達した。
ひとつは、単に先程の早苗の態度があまりに偉そうぶっていたこと。
そうしてもうひとつは・・・

「ぉひっ」
さらに強く襟首を引っ張られ、幽香の額が早苗のおでことぶつかった。
幽香の、引きつった唇から漏れる微かながらも荒い息が、顔に噴きかかってくる。
どうやら本気で怒っているらしく、吐き捨てられる呼気からは、落ち着きを感じられない。
「ふぅ・・・ふ・・・」
その息は、何とも甘酸っぱい花の香りを運んでくるが、今の早苗にとってこの息は、餌を見つけた獣の息であった。

頭の中で何かがぶつりと音を立てて切れるのを感じた早苗は、無心になって、しかし、先程至った結論は忘れずに、喚くように声を上げた。
「うわぁぁーーんごめんなさぁーい！私が悪かったですぅ～っ！幽香さんを怒らせてごめんなさぁーい！もう紅茶は要りませんからぁ、おれんぢじゅーす飲みますから許してさぁ～いっ！」

何も反応のない幽香に、捲し立てるように早苗は言い続ける。

「今分かりましたからぁ～・・・幽香さんは花と植物を愛しているんですよねっ？あの向日葵畑を見れば分かりますっ・・・あ、あれほどのぉ・・・向日葵を育てているんですから、きっともんのすごく愛情を持っているんでしょねぇ～・・・で・・・ですから、私が調子に乗って怒ったんです。と・・・当然のことですぅ・・・本当は紅茶だって、お嫌いないんでしょぉ？」

「・・・・・・」

「あ・・・あはは・・・なんてったってお茶は、葉っぱを摘んで淹れてますから、植物をこよなく愛する幽香さんにとってはいまいち認められないんですよねぇ～・・・紅茶に至っては、さらにその葉っぱを腐らせてるんですからぁ・・・そ、そんでもって、珈琲とかは豆から淹れるものだし、ワインとかジュースは果実から作るしってことで、身は食べるためにあるんだから、それでいいってことなんですよねぇ？・・・あ、はは・・・わ、私にも今分かりましたから。もう、調子に乗ったこと言いませんから・・・はは・・・」

「・・・・・・」

「・・・あ、で、でも・・・ここにある家具一式は木製だし、気を伐採して作ってるから、それを置いてるってことは・・・あれ？実際それほど植物は好きじゃない？・・・じゃぁ、何か他に理由があるのか、な・・・なん・・・て・・・ことは、ないですよねぇ・・・・・・」

「・・・・・・」

「ゆ、許してくださぁぁーーーい！」

襟首を掴まれたまま、声を張り上げて嘆願する早苗。

すると、襟と一緒に首が締め付けられていたことによる息苦しさが突然消え、早苗に比べて少し背の高い幽香に持ち上げられるように締められ、つま先がようやく床につくぐらいになっていた足も、これまで彼女を吊り上げていたものがなくなったように、ドスンと踵まで床を踏みしめる感触を取り戻した。

幽香が、早苗の襟を掴んでいる手を離したのだ。

彼女から解放された早苗が、

「ぅ・・・」と呻きながら、フラフラによろめき倒れそうになりながらも、そこを堪える。

尚も早苗のすぐ眼の前に見える幽香の顔からは、怪物のように見える威圧感はなくなり、彼女本来の表情を覗うことができるようになった。

とはいえ、そこに浮かんでいる笑みから親切さは消えており、ただの得体のしれない冷笑へと変わっている。

掴み上げられた襟首を直しつつごくりと唾を呑み下して、涙目になりながら幽香を見る早苗。

その眼の前で、幽香は笑みを浮かべたまま、机の上に置いてあった黄色っぽい液体が満ちているコップに眼を向けて、右手でそれを取りながら静かに言った。

「分かってくれればいいのよ・・・私も悪いことをしたわ。オレンジジュースでもいいと言ってくれてよかった。さぁどうぞ、今ので喉も渇いたでしょう。召し上がってちょうだい」

「・・・・・・？」

許してくれたのか？

幽香の笑みは、相変わらず本心では怒ってそうだったが、もし彼女が怒りに任せて暴れるような野蛮な妖怪なら、もうすでに早苗は喰い殺されているはず。そうでなくとも、もっとはっきり、掴み上げる以上の暴力を振るわれているはずだ。

そうしてこない以上、幽香はもうこちらを許していると考えられるのではないだろうか。

許していなくとも、穏便にことを済ませようと・・・

それに、向こうから、こちらも済まなかったと言っているのだから。

相手を許していなければ、こんな台詞を吐けるわけがない。

突然豹変され襟首を掴まれたのには驚いたが、案外この幽香、話せば分かる人なのでは？

そう考え、早苗はひとまず安堵し、胸をなでおろすような気分になった。

と、もう一度こちらを向いた幽香が、右手に持ったコップを早苗の口元に近づけてきた。

飲めと催促しているのか？

別にこんなことをしなくても、飲みますと言った以上飲むのだが・・・

「あの・・・別に幽香さんがわざわざコップを持たなくてもいいんですよ？」

早苗が困った様子でそう言った、次の瞬間だった。

早苗は完全に、この幽香がどういう妖怪であるのかを理解した気がした。

彼女に対して安堵することなど、片時もあってはならないと・・・

「いいから」という幽香の声が聞こえたかと思うと、早苗は突然後頭部を何かに強く押さえつけられた。

そうして、口に無理やりコップを押しつけられ、強引に顔を上に向けられると、よく冷えた酸味の聞いた液体が、喉の奥にまで無理やり流れ込んでくる。

「んおぅっ！？・・・んぶっ！」

喉の奥の方がツンと痛くなり、頭の中が真っ白になる。

彼女はしばらくの間、自分の身に何が起きているのか分からなくなった。

ただ、後頭部に力をこめ、何かが頭を引くことも左右に振ることもできないよう押さえつけられていることと、強引に口に流し込まれているのがオレンジジュースであることと、自分にぬっ、と顔を寄せてくる幽香の顔が、不気味に笑んでいることで、早苗は自分がどうなっているのか理解できた。

しかも幽香は丁寧にも、コップを持つのは中指と薬指と小指だけにして、残っている人差し指と親指で、思いっきり鼻をつまんでいる。

そうしながら、コップを力強く早苗の口に押しつけていた。

そんなことをされれば、鼻で息ができなくなるのはさすがに並の常識なら通用しない幻想郷であっても、当たり前のことだった。

そういう中で、口の中に無理やり水を流し込まれればどうなるか。

そんなことは、馬鹿な妖精にだって理解できる。

コップ一杯の水でも、大海原の荒波に揉まれる気分が体験できるはずだ。

息をしようにも、流し込まれるオレンジジュースに気道へと通じる蓋のようなものである喉頭蓋が閉じて出来ない。

俄かに胸が苦しくなるのを感じた早苗は、見開いた眼の瞳孔が収縮し三白眼になりながら、金切り声のようにも聞こえる呻き声を上げた。

何が何だか分からないまま混乱した頭だが、脳に流れ込んでくる息苦しさに、身体が本能的に反応している。

「んんぅっ！ん〝んーーーーーっ！！」

必死に身体を揺らして、両手でコップを持ち押しつけてくる幽香の右手の手首を掴んで引き剥がそうとする。

しかし、どんなに身体を揺らしても、それと一緒に幽香も揺れるだけだ。
両手にどれほど力を込めても、鉄筋コンクリートの梁のごとくがっしりと組みついてくる腕の力はまったく緩まらず、びくともしない。
鬼にはさすがに負けるだろうが、それでも、並の妖怪ですら到底及ばない力で押さえつけてくる幽香の腕を、たかだか人間の早苗が振りほどくことなど、５ｔの岩を持ち上げるほどの無謀だった。
結局、早苗がどれだけ暴れようとその動きは虚しくも何の効果をあげることなく、コップの口を噛むようにしている早苗の口に尚も酸っぱい液体が流れ込み、喉の奥を通り過ぎていく。
大きく息を吸い込んでから素潜りするならともかく、不意打ちのように、しかも先程の緊張がまだ解けてもおらず、軽い胸の動悸が起こっている中でこんなことをされれば、たった数百ｃｃの液体で、地獄が見える。
しかも、今になってようやく気づいたが、幽香の持ってきたコップは大分大きい。
最早コップというよりかは、ジョッキと言えそうだ。
幻想郷においては早苗にしか分からない表現だが、マクドナルドのドリンクのカップのＬサイズよりもさらにちょっとだけ大きいぐらいだ。
それほどの容器が一杯になるほどのジュースを、息もできないままゆっくりと流し込まれているのである。
いい子（依々子ではありません）は絶対に真似しないように。

窒息寸前の苦しみに、せっかく床についた足がびくびくと痙攣を起こす。
何とか必死に、流し込まれる液体を胃の底に落とし込む。
しかし、息苦しさが限界に達した時、早苗の喉の奥で塞がっていた喉頭蓋が、無理を承知で強引に開かれ、呼吸しようと気道への道が開かれる。

本来人体でそういうことが起こるのは稀というか、喉頭蓋が軟骨でできており筋肉でない以上ほとんどあり得ないのだが、早苗のお得意の奇跡が、本能的にこの動きを呼び覚ましたのか、あるいは、逆に肺が息を強引に吐いたせいで、気道からの呼気が蓋を押し開けたのか。

またあるいは、何らかの理由でジュースが喉を逆流して、喉頭蓋を下からすくい上げるように開いたのか。

なんにしろ、普通に生活している上では１００％起こらない事態が発生した。

そして、喉頭蓋が開いたことで、これまで食道だけに流れていたオレンジジュースがこれ見よがしに気道にも流れ込む。

さて、高齢者には誤嚥性肺炎というものが多いが、それは加齢と共に痛んだ喉頭蓋が満足に機能しなくなり、飲食物が気道へと間違って入ってしまい、そのまま肺につまってしまうことが原因のひとつである。

そうなると、高齢であることもありそのまま死に直結する非常に危険な状態になるため、注意する必要がある。

それともう一つ、肺水腫というものもある。

肺の中にある肺胞という、酸素と二酸化炭素を入れ替える肝心な部分に（あるいは気管支に）水が溜まる病がある。

その理由は、左心不全や肝硬変による血中のタンパク質濃度の低下による浸透圧（血液中の水分を血管内に留める圧だ）の低下などによって、肺胞の外部にある毛細血管から水分が染みだしてくるのが原因であり、病のない健常な人ならば、薬物や重度の外傷がなければ起こることはほとんどない。

しかし、もし気道を通って、肺胞自体に直接大量の水が流れれば、それもまた肺水腫となるだろう。

肺胞は、内部が完全な空洞になっているからこそ機能する。そこに水が少しでも溜まれば、途端にその機能に障害が起こり、呼吸不全

となる。重度な場合は、やはり生命に危険が及ぶ。
ましてや、ひと口飲むぐらいの量の飲料がそのまま肺に到達すれば・・・

早苗は幸運だった。
気道へと流し込まれたジュースがそのまま気管支にまで到達し、肺の奥にまで流れ込むよりも早く、彼女の体内に再び奇跡は起きた。
ロクな奇跡ではないが。

「ん〝うっ！！？」
見開かれ、黒目が点のようになっていた早苗は、とうとうその黒目もぐりんと上を向き白目になった。
それと同時に横隔膜と肋間筋。呼吸に関わる筋肉が異様な働きを見せ、瞬時に弛緩。
肺を包み込む胸膜内に一気に強烈な陰圧がかかり、肺が、さながらボーリングの玉がパチンコ玉にまで縮まるかのような凄まじい収縮を見せた。
肺の中にある全ての空気が絞りだされ、気道を流れる液体を一滴も残さず口腔にまで押し戻した。
そうしてそれが、人類史上最大規模の壮絶な嘔吐となって、早苗の口から吐き出される。
なんとも汚ない響きであるが、実際は気道に流れたジュースをそのまま吐き出しただけなので、何も汚ないことはなかった。
それに、吐き出される量だって、ほとんどが胃にまで到達している以上、別にホラー映画の血反吐を吐くシーンほどの量ではない。

が、例え少量でも、大砲のような勢いで吐き出されれば、コップを押しつけていた幽香の腕もさすがに弾き飛ばす。
凄まじい勢いで飛び散った黄色い液体が、驚愕する幽香の顔や衣服に、強かな衝撃と共に振りかかった。

「う・・・っ」

さすがにうろたえた幽香は、右手だけでなく、早苗の頭を押さえていた左手も離し、後ずさりしてしまった。

解放された早苗は、そのまま崩れるようにその場で膝をついて突っ伏し、激しくせき込んだ。

瞼の裏側に回り込んだ黒目も戻ってくる。

「ごほっ・・・ごっほっ・・・ひぃ、ひぃ・・・ひぐっ！ごっほごほっ・・・」

きつく細められた眼からは、後にも先にもおそらく一生の内で一番多いだろうと思えるほどに大量の涙が流れでてきて、吐き出した余韻を残すように、大きく開かれた口から滴る液体と一緒に、床へと点々と落ちていた。

肺から押し出されたオレンジジュースは、鼻からも流れ出ている。

鼻の奥が、チクチク刺されるように痛かった。

まさか、鼻の中は耳にも繋がっているというが、耳の奥にまで流れていったのだろうか、頭も痛くなっていた。

実際はそんなことはないようで、頭痛だけは少しずつ引いてきていたが。

そうして、せき込むと同時にびくびくと震える早苗の丸まった背中に、自分が早苗をこうしたのだということを承知の幽香が机にコップを置いてから申し訳なさそうに再度歩み寄ってしゃがみこむと、猫のように丸まっているその背中を擦るという、最早狂気としか言いようのない光景が広がった。

そうして、幽香の気の毒そうな声が小さく居間に響く。

「あぁ、どうしてしまったの、そんなに苦しそうにして・・・お口に合いませんでしたかっ？」

それと同時に、最早黙っていられなくなった神奈子と諏訪子が、怒りを爆発させた。
実際のところ今の今まで、幽香の突然の凶行に驚愕しすぎて身体が固まり動けず、今になってようやく、椅子を蹴飛ばしながら立ち上がることができた。
あまりに遅すぎる。

「き・・・きぃさまはなぁにやっとるかあぁぁぁぁあっ！？」
「早苗になんてことすんのっ！」
諏訪子の声は、確かに相当怒っていると分かる険しい声だったが、神奈子の方は、あまりにも怒り過ぎて抑揚が付き過ぎたよく分からない絶叫になってしまっており、この期に及んでまたしても滑稽だった。
そして幽香は、彼女らの怒りの声も一切聞き入れていない様子で、突っ伏したいた早苗の脇を抱えるようにするとそのまま立ち上がり、早苗の身体も、軽々と持ち上げられる。

「うぅっ？・・・ごほっ・・・ごっほ・・・」
せき込みながら、またしても突然の事態に混乱する早苗に、幽香はまた静かに語りかける。
「これじゃ味わうこともできなかったでしょう。向こうの部屋に、まだ瓶で置いてあるから、そっちにいってゆっくり飲みましょう」
そうして、力なく幽香に抱えられた早苗は、そのままだらりと地についた足をずるずると引きずられながら、彼女に客間の外へと運ばれるように連れていかれた。
「え・・・ぅ・・・ごほっ・・・」

そうして幽香が、右腕で早苗の脇を抱えるようにし残る左手でドアを開け、そこをくぐって外に出ていく。

何の狼藉かは知らないが、そんな行動を黙認するわけがない神奈子と諏訪子は、
「待たんかぁーっ！」
「承知しないぞぉ！」
と叫びながら、客間の外に出た幽香を追おうとする。

が、立ち上がる拍子で倒れた椅子をさらに蹴飛ばしながら駆けだし、幽香がくぐっていった入口にまで近づいた時だった。
二神の視界には、客間を抜けてどこかへと向かおうとする幽香の背中と、彼女に小動物のように抱えられる早苗のお尻が見えていたのだが、それが突然見えなくなった。
代わりに神奈子達の視界を埋め尽くした、驚くほどに巨大な、花のような光り輝く物体があったからだ。
それが、出入口を塞ぐようにして神奈子達の前に出現し、くるくると回転している。

それが実際の花ではないことは、神奈子達にもすぐに分かった。
勢いのまま出入口をくぐって客間から出ようとする神奈子だったが、突然この花のようなものが出現したのを見て、咄嗟にその場で立ち止まる。

そうして神奈子が、
「なんだぁこれはっ？」と叫んだ。
それに諏訪子が、イライラした様子で返した。
「弾幕だよぉ！あんっの妖怪っ・・・やっぱりやる気だったんだ！」

諏訪子の言う通り、彼女らの眼の前に出現したのは弾幕だった。
花のような形をした、妖怪の力の塊である。
形こそ花だが、そこからは眩いほどの光が放たれている。
それが、神奈子達をここから通すまいと立ちふさがっていた。

このまま客間から外に飛び出せば、この弾幕に正面からぶつかるところだった。

「・・・・・・」

しかしこの弾幕、その場でくるくる回る以外には、動く気配がない。

弾幕というのは相手にぶつけてこそなのだが、この回転するだけで微動だにしない弾幕は、一体どういう意味合いのものなのか・・・

まぁ、激しい弾幕の中にこのような邪魔な障害物を置けば、結構相手は困るものなのだろう。

それ以上に、客間から出ようとするこちらを足止めするためには、動かない弾幕の方が都合がいいということか。

神奈子は試しに、眼前で回転している、一見すれば無害そうな大きな花弁に触れてみようと右手をかざした。

だが、本当に無害であるわけがないということは分かっているので、寸前のところで堪える。

そうして伸ばされた右手をぐ、と手元に引き戻しながら、

「おのれぇ幽香め・・・っ！」と苦々しく呻き、数歩後ずさりする。

この弾幕、どうやら相当な量の妖気を密集させているらしく、この花・・・というより、花弁の一枚一枚が、スペルカード一枚分に匹敵するほどの弾幕を詰め込んだ高密度の壁となっていた。

これほどのものなら、少しでも触れれば一撃で再起不能になるかもしれない。

幽香はこれでこちらを足止めして、早苗をどこかに連れていくつもりなのか。

そうして、一体彼女に何をする気だ。

「そうはさせんぞ・・・っ」

神奈子は、険しく細めた眼で、眼前の光り輝く花を睨みつけた。

この花がこちらの動きを封じようというつもりだとしても、弾幕な

ら弾幕で打ち消すことも不可能ではない。
スペルカードに対しさらに強力なスペルカードを叩き込めば、互いの弾幕は相殺される。
こちらを足止めするこの花のような光も一種の弾幕であるなら、打ち消せないわけはないのだ。

ぐっ、と身構えた神奈子と共に、諏訪子が言う。
「面白いじゃない。私達二人、いや、三人にいっぺんに喧嘩を売ったんなら、みんな纏めて買ってやるんだから」
神奈子も続く。
「守矢神社の二神の力を思い知らせてやる・・・・・・早苗、一体どんな酷いことをされるのだろうか・・・そうなる前に、助け出してやるっ」

そうして二人は懐から、自らの放つ弾幕を封じ込めた霊符、スペルカードを取り出した。

※

紅魔館のこあは、パチュリーからあることを頼まれて館の外へと出ていた。
彼女が美鈴に貸した天狗の新聞を、返してもらって来てほしいということだった。
そうして、すぐに返すといって借りていったのに半刻を過ぎても返してこない美鈴を、こあの方で注意しておいて欲しいとも言われた。

その言葉に従い、美鈴から新聞を返してもらって、パチュリーが怒っていたことを伝えるために、彼女の下へと向かっていた。
館の正面扉を開けて広大な庭へと出たこあは、その庭を見渡しつつ、まっすぐに敷地を隔てる門の方へと歩いていく。
確か美鈴は門番であるが、一方で庭師も兼ねていたから、もしかしたら庭のどこかにいるかもしれないと思ったのだが、こあに見える範囲では、美鈴はいないようだ。
全て隈なく見渡せば半刻のまた半分ぐらいの時間がかかってしまいそうな庭を探すのはとりあえず後にして、まずは美鈴がいつも仁王立ちしている門へと向かう。
庭にいないなら、そこには間違いなくいるはずだ。

そうして、開け放たれた状態の門の向こう側が見えるところにまできたこあは、そこから見える光景に戸惑った表情を浮かべた。

ここにも美鈴はいない。
いつもこのぐらいの時間にここにくれば、門の向こうに威風堂々と立つ美鈴の姿が見えるはずなのだが・・・今は何も見えない。

ということは、やはり庭のどこかで仕事にでも勤しんでいるのか？
とりあえず、もっと詳しく門の周りを探してみよう、もしかしたら館の敷地の外で、何かしているかもしれない。
そう思ったこあはふと、門のすぐ眼の前に、何やら小さい紙の束のようなものがあるのを見つけた。
今日の勢いの弱い風に煽られるようなこともなく、ただぽつんと置かれている灰色の塊。

「あれってもしかして・・・」
こあは、小走りで門の方へと駆け寄っていき、その先に捨てられるように置かれていたその灰色の紙の束の前にしゃがみこんで、それ

を手に取った。
そうして、驚いたように呟く。
「あぁー、やっぱりっ・・・天狗の新聞だわ」

一度新聞を広げてみて、そこに書かれている記事がオルファンとアンチボディのものであることを確認する。
これが、美鈴がパチュリーから借り、パチュリーが返してもらうように催促してきたもので間違いない。
大事な目的はこれで達成できたようだが、その代わり、こあの頭は俄かに混乱しだした。
広げた新聞を畳んで立ち上がったこあは、改めて敷地の外の森林をきょろきょろと見回す。
が、妖精の一匹さえ見えることはなかった。
そして美鈴の姿も、当然のように見えない。
周囲はほとんど無風に近く、木々がざわめく音も小さい。

「美鈴さんはどこに・・・」
こあはさすがに薄気味悪い気分になり、弱々しい口調で呟いた。
どうして美鈴が持っていたはずの新聞だけが門の前に置かれており、当の美鈴本人がいないのか・・・

「・・・・・・」
とにかく、少なくとも門の周囲には美鈴はいない。
もう一度庭を詳しく探してみて、それでも見つからなければ、諦めてパチュリーのところに帰るしかないか。と考えた。
門の周りにも、庭にもいないとなると、後は館の中か、あるいは館から大分遠いところにいるということになる。
館の一部屋一部屋を丁寧に探していくわけにもいかないし、館から離れた範囲まで細かく探そうとすると、気が遠くなるほどの手間がかかる。

新聞自体は既にこあの手にあるし、『美鈴さんを注意できませんでした』、と、パチュリーには正直に報告しよう。
庭だけは、一度探してみるが。

そう考え、こあは再び門をくぐり、敷地の中へと入っていった。
美鈴がいれば、開けっぱなしでも心配なかった門は、やむを得ず閉めておく。

そして、庭の中をじっくり時間をかけ隅々まで探しても、はやり美鈴の姿は見つからなかった。
彼女を探している内に時間はすぎ、結局もう半刻が費やされることとなる。

仕方なく図書館へと戻ってきたこあから事情を聞いたパチュリーもまた、突然姿を消した美鈴のことを不思議には思った。
おそらく、こあが考えるように館からどこかに出ていったのだろう。
門番としては職務の放棄である。

が、彼女曰くこうだ。
丸い机の前に、椅子もないのに座るような姿勢になっているパチュリーが、傍らに立つこあの方を見ずに、彼女から渡された新聞を机の上に置きながら言う。
「何を考えてるのかは分からないけど・・・まぁ、あいつが何をしようと、私達の迷惑にはならないでしょ。放っておけばいいのよ」
「・・・そうなんでしょうけど・・・律儀に新聞だけは門の前に置

かれていて・・・何だか不思議だったんです」
「返すつもりでいたんじゃない？・・・できれば、直接こっちに返しにきてくれればよかったんだけど・・・」
「そうなんですよ・・・どうしてわざわざ、なんにも言わずに門の前においてあったんでしょうか・・・余程急ぎの用事があって、返しにくる余裕がなかったんでしょうか・・・」
「さぁねぇ・・・」
「・・・何か、変なことに巻き込まれていなければいいんですが・・・」
「その時はその時よ、危ないことになったらこっちに戻ってきて、助けを求めてもくるでしょ・・・・・・それよりもこあ、今回新聞を返してもらって来たのには理由があるのよ」
「え？」

突然話題を切り替えられ戸惑うこあの前で、パチュリーは、美鈴の下から返ってきた新聞を机の上で広げて見せた。
そうして、その広げられた中に書かれている記事、ブレンパワードに関する細かい特徴を書いている部分を指差した。
「ここ見てみなさい」
というパチュリーの言う通りにし、ひとまず美鈴のことは心の隅の方に追いやることにして、新聞に顔を寄せて記事の内容を見るこあ。

そこには、『ブレンパワードがオルファンに生み出された抗体であり、オルファンよりオーガニックプレートの状態で発生して、そこから外部に出てブレンにリバイバルする』という旨の説明がされてあった。

「これがどうしました？」
と、パチュリーの方に顔を向けながら聞いてくるこあ。
パチュリーはそれに、記事から眼を離さずに応えた。

「だとしたら、グランチャーはどうなるんだろうと考えたのよ」
「グランチャーが？」
今度は、何故グランチャーの名前が出てくるのだろうと考えたが、こあはその理由にすぐさま気づいて、「あっ」、と声をあげた。
そうして、言う。
「グランチャーは一体どこから生み出されたんでしょうか？・・・ブレンと同じようにオルファンから生み出されたのか。パチュリー様はそれが気になっているのですね？」
「ん・・・今までこういうことを疑問に思わなかったのが不思議でならないけど、グランチャーとブレンパワードは同じアンチボディよ。プレートからリバイバルするところも、他の生物のオーガニックエナジーを吸収するところもみんな同じなの。だとすれば、この二つの生き物は、同じような場所から生み出されたと考えられる。・・・けど、それじゃぁ、その同じ場所がオルファンだと考えると、なんでオルファンか生まれたアンチボディ同士で、争っているのかっていう疑問も出てくる」
「・・・人の身体でだって、小さな菌と免疫とかいうものが戦う時もありますし・・・」
「確かにそういうこともあるけど、グランとブレンパワードの場合は、まったく同じ種類の生物だからね。人体にある菌と細胞の関係でもない・・・白血球が白血球を食べるようなものなのよ」
「・・・それは変ですねぇ」
「で、私は考えたの」
「どういうことをですか？」
いつの間にやら美鈴のことはすっかり忘れて、ワクワクした様子でパチュリーの話に耳を傾けるこあ。
そんな彼女にパチュリーは、特に得意面になることもなく、普段と変わらない低血圧そうな声で、続く言葉を発した。

「グランとブレンパワードは、確かに同じオルファンから生み出された・・・でも、そのオルファン自体が、ふたつ存在するとしたら・・・？」

第十三話　その3

「おっと・・・っ」

念のために部屋の隅へと逃げていた藍だったが、神奈子達から見て後ろの方に逃げていたことが逆に危険を招く結果となっていた。

すぐ眼の前を、無数の光の群れが通り過ぎていく。弾幕の光だ。

広くもせまくの客間の角に背中を押しつけるようにして、身動きすることができなくなってしまっていた。

後数歩でも前に出たら、猛烈な勢いで通過していく弾幕の群れに巻き込まれてしまうだろう。

神奈子達の後ろ側にいるはずの藍の方に、何故弾幕が飛んでくるのかという理由は、簡単なものだった。

神奈子達が打ち出す無数の弾幕が、幽香の作りだした花形の弾幕目掛けて飛来する。

狙い澄ますのはその一点のみ。

二神の周囲から発生した弾幕は、パラボラを反射して焦点に集まっていく電磁波のように、光る花弁目掛けて飛ぶ。

その花を埋め尽くし、見えなくなるほどに撃ち込まれた弾幕だが、それらのほとんどは、異様な強度を持つ幽香の弾幕に逆に跳ね返され、神奈子達の身体をすり抜けながら時に真っ直ぐに部屋の端から端へと駆け廻り、時に壁や天井を反射しながら客間の中にある家具を悉く破壊していく。

木材が砕け、部屋の中にある棚に張ってあるガラスが砕け四方に散

るシャラシャラという音も、ある意味では心地よいほどに大きく響いた。
が、それ以上に耳につくのが、弾幕が跳ね返され部屋の中を飛び交う、空気が帯電するかのような独特の音だった。
その音が激しく鳴り響く中で、跳ね返された弾幕は部屋の隅で身構える藍の眼の前を通過しながら、神奈子達から見て背面にある屋敷の壁を粉々に破壊し、煉瓦に石膏を塗ったらしい壁の破片を外へと撒き散らしたところで、ようやく消滅していた。

で、それが最初のころの話であった。

神奈子達がありったけの弾幕を撃ち込み、それを幽香の放った、というか置いておいた弾幕が跳ね返す。
そんなことが、もう五分ほどは繰り返されていた。
神奈子達が絶えず撃ち込む弾幕が、花弁の弾幕を中心に眼が眩むほどの光を発生させ、そうしてその光が爆発するように拡散し、弾が跳ね返されている。
跳ね返された弾幕は、最初のころの一撃であっさりと粉砕された客間の壁の向こう側に吸い込まれるように飛んでいき、やがて、さらにその先にある向日葵の群れに到達することもなく消滅する。

そしてそんなことを幾度か繰り返し、もう五枚目かに達するスペルカードを撃ち終えた神奈子達だが、幽香の展開した花弁の弾幕は、まだ消えていなかった。
しかし、いずれは必ず消え入るはずである。
現に、神奈子達が繰り返し弾幕を放ちぶつけることで、花弁の中にある妖気は確実に減殺されており、一枚一枚から発せられる光は眼に見えて弱くなりはじめていた。

あと一発ほど撃ち込めば、このまま消せるかもしれない。
しかしながら、ここまで持ってくる間に客間の中の家具は原形をとどめないほどに砕かれ、壁の一部は最初からなかったように綺麗に消し飛んでいた。
天井にかけられていた照明器具がぽろりと取れて、先程までは机があったはずだが今はもうバラバラに砕けた木片しかない床へと落下し、ガラスが砕けているため大した音も鳴らさずに落ちた。
後ろの壁以外にも、流れ弾を反射させた左右の壁や天井にも大きな亀裂がいくつか奔っており、無数の砂のような破片が、上の方からパラパラと音を立てて落ちてきていた。
そのくせ、幽香の弾幕がある側の壁は、弾幕が都合よく結界を作っているのか、傷一つついていなかった。

しかし、時間はかかったし手間も取ったが、これで終わりだ。
さすがに短時間の間に弾幕を撃ち過ぎて少し疲れたらしく、額から汗を流しながらも、神奈子が不敵な笑みを浮かべた。

「よぉし・・・待っていろ幽香ぁ・・・そなたには、今まで撃ち込んできたヤツの倍を喰らわせてやるからなぁ・・・・・・神祭『エクスパンデッド・オンバシラ』、一点集中型だっ！」
声高らかに叫ぶと同時に、彼女の右手から巨大な一本の御柱が伸びていた。
それをさながらやり投げのように逆手に持ち、柱の端が花弁の方を向くように構える。
そうして神奈子の右手の手首が、小刻みにくいっくいと曲げられ、それと一緒に腕も微かに上げながら柱を離し、バウンドするように浮かせる。
浮いた柱が右手に戻ってくると、位置が僅かに花弁の方へとずれて

いた。そうするように浮かせたのだ。
そのまま同じことを数度繰り返し、持ち手の位置が柱の端に近くなるよう、また、花弁の弾幕の方に向く柱の方が長くなるように位置を調節する。
そうして、右手が柱のほとんど端に来たところでスナップを利かせることをやめた右手が、俄然力強く柱を掴み、手のひらでは収まりきらないほどの太さの柱に指を喰い込むほどに押しつけることで、無理やり握りしめる。
「守矢神社はお寺じゃないが・・・除夜の鐘の最初の一発を鳴らすように、景気よく突いてやるっ！」
そんな声と同時に神奈子は、右手と、そこに握られている御柱を大きく後ろに引いた。

「そぉらっ！」
次いで威勢のいい掛け声と共に、弓に引かれる矢のようにぎりぎりまで後ろに引かれた右腕が、引かれた矢が打ち出されるかのように強く前へと突き出された。
小指が前側になるように向けられた神奈子の手が、ぐんと前へ躍り出る。
それと共に、神奈子の身長よりもさらに長い御柱の先端が、幽香の展開する花弁の弾幕へと激突した。

ガツンという強かな音とほぼ同時に、轟音が・・・天地がひっくり返り湖から空に向かって流れ落ちた水が、また天地がひっくりかえることで湖へと戻っていくということが起こった時、きっとそういう音が聞こえるんだろうなと思えるような、水しぶきが恐ろしく大きくなったような音が響いて、眼の前にあった光る花弁が粉々になって砕け散る。
それと同時に、突き立てられた御柱はそのまま砕け散る弾幕の破片を押しのけながら、ドアが開けっぱなしだった客間の出入り口を突

き破って、そのまま向こう側へと６０ｃｍほど突き出た。
それから三秒ほど経って、さながら本物の木材で作られたような威圧感を放つ太い御柱が、それが神奈子の中にある神の力で生み出されたことを示すように光の粒子の群れとなってから拡散して、消滅していった。

幽香の展開した弾幕と共に、己のスペルカードが消滅したことも確認した神奈子と諏訪子が、急ぎ出入り口をくぐって外に出る。
「早苗、今いくぞぉ！」
「そして覚悟してなよぉ、向日葵お化けめっ！」
怒り心頭といった具合に叫ぶ二神の後を追い、部屋の隅に避難していた藍も、錯乱した木材を踏みしめながら客間から出た。

三人は、早苗と、彼女を連れ去った幽香を探した。
客間から出てすぐ、広くもせまくもない平素な廊下を挟んで正面に見える客間とは別の戸が眼に入った。
幽香が早苗をどこに連れていったのか分からない以上、全ての部屋を虱潰しに探すつもりだった。
まずは、この戸の向こうから探す。

こんな近い部屋にいるのならこれ幸いだ。早苗の身を危険に晒すわけにはいかない。
すぐさま戸の前に歩み寄った神奈子は、戸のノブをねじ切れるほどに強く回して、次いで突き破らんほどに腕を前に出してその戸を開けた。
そこから続けざまに、戸を開けた当人である神奈子を先頭にして、彼女らが一斉に部屋の中へとなだれ込んだ。

そうして、三人の前に見えた光景は・・・

広々とした、これまた西洋の一般的な家庭といった印象を受ける居間の中、少し背の低めな机の前にある大きなソファに腰かけて右手でガラスのコップを持ち口につけ、そこに満たされている黄色い液体をごくごく音をたてて飲んでいる早苗の姿だった。

「・・・・・・」

神奈子達は、もしかして自分達は幽香に幻覚を見せられているのだろうかと考えながら、眼を点にして固まった。

早苗は一体何をしているのだ。

硬直している神奈子達に気づかない・・・というか、神奈子が開け放った戸が壁にぶつかって大きな音をたてたのにも気づかない早苗は、先程まで自分が窒息の苦しみにいたのを忘れたかのように、その元凶の液体をご機嫌な様子で眼を閉じてぐびぐび飲んでいた。

先程の大きなコップに比べれば、スプレーの蓋ほどの（実際はごく普通の大きさの）ガラス製のコップに満たされている黄色い液体を、顔をぐいっ、と上に向きながら一気に飲み干す。

そうして、コップを口から離してまた正面を向きながら、口を大きく開けて、

「はぁ～～っ」と勢いよく息を吐き捨てた。

机の上には大きなガラス製の一升瓶が置かれていて、そこに何やらいろいろ書いてあるラベルが貼られてあった。

『ゆうかりんランド　特製オレンジジュース　果汁１００％』

そして饅頭のような輪郭をして、何かよく分からないが言いような

ない鬱陶しさを醸し出す表情をしている幽香の生首から吹きだしが出て、『おいしいの？ばかなの？』と書いてある。

「んん～～っ」

机の上にコップを置いて、左手にかかっている長い袖で口元を拭った早苗は、そこでようやく、自分のいる部屋の中に呆然と神奈子達が立っていることに気がついた。

何で彼女らがここにいるのかも分からない早苗は、すっかりいつもの調子を取り戻した表情でそちらを向き、

「神奈子様と諏訪子様と・・・あと藍さんもいらしたんですか～？」

と言ってくる。

最早何が何だか分からなくなった神奈子は、さすがにあたふたしながら早苗の方に歩み寄り、たどたどしい声で言った。

「さ、早苗・・・貴方、一体どうしたの？」

「どうしたって。オレンジジュースを飲んでたんですよ・・・いやね？そりゃ、餓鬼の飲み物だって馬鹿にしてました。でも感動したぁ・・・これめちゃくちゃ美味しいんですよ」

「いや・・・美味しいって・・・」

美味しいかはともかくとして、そのオレンジジュースで死にかけていたことを、早苗は忘れてしまったのだろうか？

それとも、先程神奈子達の眼に見えた光景がやっぱりただの幻覚で、実際は何も起こっていなかったのか？

いや、そんなはずはない。

あの時の早苗が苦しそうに悶える様子は、確かに現実のものとして脳裏に刻まれている。

きっと早苗だって、神奈子達が想像する以上の苦しみを確かに味わっていたはずなのだ。
だとして今の早苗は、そんなことすら忘れたような顔をしている。

死ぬ寸前まで苦しんだというのにけろりとしている早苗のエキセントリックさに戸惑うしかなく、二分ほどそのまま呆然としていた神奈子達だったが、そうしている内に、ちょうど彼女らが入ってきた入口の向こうから、またしても誰かが居間の中へと入ってきた。

他でもない、幽香だ。
早苗にジュースを吹きかけられたため、どういう原理で出るのかも分からないシャワーを浴びて身体を洗い、服も着替えて戻ってきた。
そういえば早苗の方は、自分が吐いたジュースは自分にはかかっておらず、服もそれほど濡れていないようだった。
ほんの少しだけ胸の当たりが濡れていたが、ちょっと汗ばんだぐらいのものだ。

それはともかくとして、何事もなかったような顔で居間へと入ってきた幽香は、何故か中にいる神奈子達に少しだけ驚いた。
そうして神奈子の方はすかさず幽香の襟首を、彼女が先程早苗にしたのと同じように掴んだ。

「ん・・・？」
微かな声を出す幽香に対し、額と額をくっつけて顔を寄せ、鋭い眼光を間近で浴びせる神奈子。
そうして彼女が、唸るような声で吐き捨てる。
「貴様ぁ～っ！早苗に何をしたぁ～～・・・っ」
それに、すぐさま落ち着いた様子の幽香は、掴みかかった神奈子の手を払おうともせず応えた。
「何って、せっかく私が栽培した蜜柑で一から作った特製のジュー

スを早苗さんが吐き出してしまったから、今度こそよく味わってもらおうと思って、今度はむせないようゆっくりと飲んで頂いたのよ。いや～、そしたら彼女、すごく喜んでくれたみたいで、ごくごく飲んでくれたのよ・・・ほら、見なさいあの瓶、もう三分の一ぐらいまで減ってる。あれ全部早苗さんが飲んだのよ～。あんなに喜んでもらえるなら、私も作った甲斐があったわっ、近い内に人間の里に売りに出そうかしら」

「・・・・・・」

眉をぴくぴくと痙攣させながら何とも言えない顔になって幽香を掴んだまま、顔だけを早苗の方に振りむけた神奈子。

突然幽香が掴み上げられたことに驚いている様子の早苗は息を呑んだまま、右手で机の上にあった一升瓶を掴み、まるで神奈子に対し示すようにちゃぷちゃぷ音を鳴らして揺らした。

「・・・えぇ？」

最早どういうことなのか分からない。

神様としての威厳が台無しだ。

自分が突然別世界に来てしまい。それを今知ってしまった時のような顔をした神奈子はもう一度幽香の方を向き、妙な声で言った。

「き・・・貴様は・・・どうみてもさっき早苗を虐めていた。無理やり蜜柑汁を呑ませて窒息させていた・・・・・・や・・・やっぱり許せぇーん！」

もういっそ早苗のことは忘れて、幽香に対し怒りを向けることに集中することにした神奈子だったが、衝き動かされたような彼女の叫びに続いて、後ろから当の早苗の困った様子の声が聞こえてきた。

「どうしたんですかぁ、神奈子様っ？なんでそんな乱暴なことを・・・」

「いや、ちょっ」
貴方を虐めた相手を懲らしめてやろうとしてるんだけど、と脳裏でぼやいて、また早苗の方を振り返る。
すると今度はまた、すぐ傍にいる幽香の声が耳元で聞こえてきた。
「あれはただのスキンシップよ・・・確かに少しばかりやりすぎた感じもあるけど、早苗さんはそんなことは当に許してくれていますよ？」
図々しくも何を言っているのか、あんなことがスキンシップであるはずがない。
が、神奈子は思わず、幽香を締め上げたままで再度早苗の方に振りかえり、聞いていた。
「早苗っ、こいつの言っていることは嘘よね？あんなことされて・・・」
こうやって聞けば、早苗だって幽香のことを許せないと言ってくれるはずだ。
そうすれば、神奈子は何の気遅れもなく幽香と事を起こせるのである。
しかし、この問いに対する早苗の返事は、まさにエキセントリックといったものであった。
彼女は、右手に持ったままの瓶を傾け、その口をコップの内側へと向けた。
瓶から流れ出てきた黄色い液体がコップの中へと満たされていき、それが透明の容器に三分の一ほどになったところで、早苗は瓶の口をまた上に向けた。
そうして、机の上に置くと、右手が代わりにコップを持ち、その口を自分の口へと付けて、今度はコップの方をくいっ、と傾けた。

そうして、流れてきたオレンジュースを嘗めるように少しだけ飲んで、
「はぁ～～～っ」と息を漏らしながら、コップの方も机の上に置いた。
それからようやく、ご機嫌な顔をして応える。
「・・・確かに、最初のころはなんであんなことをしたのかと怒りましたけど、ちゃんとさっき謝ってくれましたし・・・あんまり根に持つのは現人神としてよくないのではと思います・・・ホントに、もう気にしてません」
「・・・・・・・・・・」
そうまで言わしめるのが、幽香特製のオレンジジュースの味なのか？
どうも早苗は、あれがあまりに美味しすぎるから、幽香を許してしまったように思えて仕方がない。
というか、実際そうなのではないか？
口を小さく開け、言葉を失う神奈子。
幽香を掴んでいた両手も、知らず知らずのうちに離してしまっていた。
固まる神奈子に対して、幽香がさらに畳みかけるように言う。
「とまぁそういうことなんで、貴方達も、私に対して怨念がえしをするような真似はしないようにしてくださるかしら？・・・さぁ、さっきそちらがめちゃくちゃにした客間の様子は見させて頂いたわ。貴方達の分の飲み物ももう一度入れてくるから、ここで飲みましょう」
そんな言葉が鼓膜から脳に入ってくると共に、停止していた神奈子の思考がゆっくりと、溶けかけている氷が押しつぶされて変形するように動き出した。
こちらの怒りと早苗の態度のずれに混乱した神奈子は、この際、先に考えたようにお人よしすぎる早苗のことは頭から追いやって、自

分自身の怒りだけを幽香に向けることにした。
何にせよ、彼女が一度謝ったところで、ものすごく美味いらしい蜜柑汁（後で飲んでみよう）を振舞ったところで、彼女がやった行為は外道の仕打ちだ、許すまじ暴力だ。
早苗がどう思っていようと、幽香とこれから協力関係になれば、またその内彼女の手により酷い目にあわされるはずである。
そうしないためにも、ここで幽香を懲らしめておく必要があった。
いや、例え今でなくとも・・・

早苗を見るのをやめ、片方の眼は細めもう片方は大きく見開くという妙な眼つきになった神奈子が、二歩ほど幽香から後ずさりする。
その一方で、右手は固く握りしめられ、その拳はまっすぐに彼女の方を向いていた。
曲げられた肘が大きく後ろへと引かれる。
その動きは誰から見ても、今すぐ幽香に対し殴りかかろうとしていると思わせるものだった。

「許さんぞぉ～・・・風見・・・」
唸り声を上げながら、今まさに、後ろへと引かれた拳を幽香の顔面目掛けて繰り出し右フックを浴びせようとする神奈子だったが、その姿を眼の前で見る幽香は、何ひとつ怖気づくような様子を見せなかった。
むしろ、どうぞ殴って来いと言いたそうな顔でこちらを見てきている。

そんな顔を見せられれば、後ろから早苗の呼ぶ声が聞こえても、神奈子は拳を振り抜くことができなかった。
「幽香ぁーっ！」
そんな叫びと共に、風神だけに疾風のごとき速さで振り抜かれた拳が、幽香の左頬目掛けて飛んだ。

が、それが強かな音を撃ちならしてそのまま頬を打ち付け、幽香の身体を仰け反らせることはなかった。
拳が当たる前から、幽香の身体が後ろへと引いていたからだ。
拳は、身を引いた幽香の顎の先を虚しく掠めるだけに終わる。
そうして、渾身の力で拳を振り抜いた勢いもあって、そのまま一緒に捻られていた神奈子の身体が拳の動きに巻き込まれ、その場でぐるぐると回転を始めてしまう。
振り抜いた拳がぐん、と頭上高くへと掲げられ、コマのように勢いよく回転する神奈子。
「あらあらあらあらあらあら・・・」
珍妙な声を、まるで壊れたシンセサイザーのように繰り返す神奈子の様子を見て、幽香は声を上げて笑った。

「あっはははははっ、どうなさったのかしら？」

が、その時だった。
愉快そうに笑っていた幽香の襟首が、再び勢いよく掴み上げられていた。
回転する勢いのまま、神奈子が突きあげられた右腕をもう一度幽香の襟首目掛けて突きだしていたのである。
「ぅあっ」
高速で回転する神奈子の勢いに持っていかれ身体が大きくよろけるが、床に足を踏ん張ってそれを堪える幽香。
だがそのおかげで、神奈子の回転もぴたりと止まった。

「うぅぅん・・・っ」
十回転ほどしたところでようやく静止することができた神奈子は、眼をぐるぐる回しながらも、残っている左腕でも幽香の襟首を掴み上げ、先程とまったく同じように体勢になった。
そうすると、回っていた眼も段々と先程の鋭さを取り戻し・・・い

や、先程よりも一層眼光を鋭くしながら、睨みつけてくる。

「・・・・・？」

さすがに息を呑む・・・というか、伊達に神様ではないということを主張するように、動じていないような表情を浮かべている神奈子に戸惑うような幽香に対し守矢の神は、彼女にしか聞こえないような小さな声で言った。

「いいか・・・そなたが何を考えて早苗が何を思おうと、今度先のようなことをすれば、神の力を見せつけて、そなたの魂を永遠に封じてるやるからな・・・そのあたり、肝に銘じておくがよい」

「・・・・・分かった・・・分かってるわ」

苦笑しながら呟くように発せられた幽香の返事に続いて、また背後から早苗の声がする。

「あのぅ・・・」

不安そうな調子の声を聞いた神奈子は、掴み上げた幽香の襟首を離すと、くるりと彼女の方へと振り返り、先程の顔が嘘のような笑顔をぱっと浮かべ、応えていた。

「大丈夫大丈夫っ、私も事情がよーく分かったわ。私達の方も、幽香のことは許してあげましょう・・・ねぇ諏訪子？」

突然返す刀で聞かれた諏訪子だったが、こちらもまた、神奈子と幽香のやりとりを傍観する中で、神奈子がけろりと態度を改めて理由も分かっていた。

そのため、示し合わせたかのように神奈子のこの言葉にも、同じく笑顔で続いた。

「んっ、早苗が何も気にしてないなら、あたし達がとやかくいうことじゃないね」

そう言いつつ、チラリとだけ横に立っている神奈子の方を見て、脳裏で呟いた。

――あんたの神様としての体面も保てたわけだしね・・・――

神奈子は、幽香に対し釘を刺しておいた。
今度早苗に対し何らかの暴力的な仕打ちをすれば、彼女がどう考えようと問答無用で潰すと。
つまり、あえてこちらから喧嘩を売ってやったのだ。
後は幽香がそれに応えれば、問答無用で返り討ちにしてやればいい。
彼女がいなくなれば、この太陽の畑だって神奈子達で好きなようにアジトにでもなんでもできるというものだ。
そう考えて、ひとまず今回だけは多めに見てやることにした。
そして、もし幽香が何もしなければ、それはそれで、彼女にはこちらのいい協力者になってもらうだけだ。
だが、少なくとも次はないと思ってもらおう。

神奈子と諏訪子の返事を聞いた早苗は、暢気というか、世の中の現実を知らないような輝く笑顔を見せ、よろこんでいた。
「ありがとうございます～っ。そりゃ、さっきは大変なことをされてしまいましたけど、幽香さんだって本当は根はやさしい人なんです。さっきはただ、私があまりにも無礼なことをして、怒らせてしまっただけなんですから、悪いのはむしろ私なんです・・・そうですよね、幽香さん。本当にごめんなさい」

神奈子達に応えつつ、幽香に対して先程の無礼を詫びるような早苗の声。
それに対し幽香はにこやかな笑顔を浮かべて、返事した。
「ん、分かっているならよろしい。でも、私もさすがに乱暴をし過ぎたわ。次からはあんなことはもうしないから、仲良くしましょうね。早苗さん？」

神奈子達としては、恥知らずとはかくありきといった感じだ。

そして、幽香のこのにこやかな笑顔と優しい口調も、どこかそれだけで済まない不気味さがあるように思えた。
笑顔は、本当の顔を隠す厚い面の皮に感じられ、口からでる言葉は優しくも、なんというか、玩具の人形に語りかけるような、人を物扱いしているような印象があった。

決めつけることは勿論できない。
しかし、この幽香の姿を傍から眺めていた神奈子と諏訪子は、これからも、幽香に対する警戒は強めていこうと心に決めた。
一応は、これから共に幻想郷を守っていく仲間にはなるんだろうが、親しき仲にも礼儀ありだ。
仲間であるからこそ、疑う必要はあった。

※

魔理沙達に対し状況を伝えた後、椛はすぐさまオルファンの付近へと戻ってきていた。
万が一オルファンに接近してくる敵があった場合、それをすぐさま察知するためだ。
再びオルファンの頂上（？）へと立ち、魔法の森での戦闘を確認した時と同様千里眼により周囲を偵察していた中で、また地底の方から何かが出てくるのが見えた。
サトリブレンである。
先の戦闘でダメージを受け、まだ戦闘ができる状態ではないはずのブレンが、地上へと出てきていた。

何事だろうか？
もし魔理沙達の援護に向かうというのなら、今度こそ本気で止めようと考える椛だったが、ブレンの行動は彼女の予想とは違っていた。
真っ直ぐに、オルファンの方へと近づいていたのである。
千里眼により見えるブレンの影は段々と大きくなっていき、やがてオルファンのすぐ眼の前へと到達していた。
そうして、椛の姿にも気づかないまましばらく周囲を浮遊していると、そのまま『そのもの』の体内へと入っていってしまった。

止めようか。あるいは、何をしようとしているのか事情だけでも聞こうと考えたが、椛はあえてそうしないでおくことにした。
オルファンに入っていった以上戦うつもりではないのは確かだったし、地底の者達の目的がオルファンの防衛である以上、その最大の目標であるオルファンの内部というのは、戦闘においてはかなり安全なところだ。戦闘に参加するべきでないサトリブレンがいるべき場所としては、別に悪くはない。
そういうこともあって、今はとりあえず放っておくことにした。
一体何のためにわざわざオルファンに入っていったのかは分からなかったが、その理由も、余裕が出来た時に聞くことにしよう。
千里眼によりサトリブレンを見た時に、永琳の姿も一緒に見えた。
博識な人間（？）だと妖怪の山でも定評のある彼女が一緒にいるなら、間違ったことにはならないだろう。

それよりも今は、魔法の森の戦闘のこともあり、予断を許さない状況である。
不測の事態にすぐさま対応するためにまず椛がやるべきことは、偵察であった。
そのために椛はここに派遣されたのだ。その役目を、まずは全力で遂行せねばなるまい。
今は．．．というか、後続の天狗部隊が到着するまでの間は、四六

時中不休で任務を続けなければならない。
今日は、あるいは明日も、眠れない日になる。
さとりの行動をそう評するわけではないが、余計なことに気を取られるべきではないのだ。

サトリブレンの動きを追うことはやめ、オルファン周辺の警戒へと意識を戻した椛であったが、しばらくすると再び、彼女の千里眼に見覚えのある姿が映った。

マリサブレンを初めとする、地底のブレンパワードである。
それが、魔法の森のある方角から、ゆっくりと地底に近づいていた。
同方向の延長線上にさらに眼を凝らしグランチャーの姿も探すが、そちらは見えない。
さらに魔法の森の周囲も、時間が惜しいため大雑把に探すが、その大雑把な範囲の内ではやはり見つからなかった。
どうやら魔理沙達は、無事に戦闘を切り抜けたようだ。
グランチャーは撃破されたか、あるいはどこかに撤退したようだ。
しかしながら、彼女らよりも前にグランチャーと戦闘していた二体のブレンパワードの姿も見えなかった。
生き残ったのならあちらで保護していると思うのだが、椛の眼に見えるブレンの数は三体である。

どうやら、撃破されてしまったようだ。
椛が魔理沙を追っていた時はまだ無事だったのだが、間に合わなかったか・・・
椛としては大いに予想していたことだ。

それ見たことかと言ってやりたい気分ではあったが、さすがにそういうことを考えるわけにはいかない。
ブレンの救援に失敗したことへの魔理沙達の無念は一入(ひとしお)だろう。

少なくとも椛が彼女らの立場でいるなら、あまりの無念に歯軋りして、遠吠えしながら悔しがったかもしれない。
そこまではさすがに言い過ぎかもしれないが、それだけの感情は抱いているのだろうと考えれば、彼女には魔理沙達を頭ごなしに批難することはできなかった。
とはいえ、勿論考えなしの行動を取った事は注意するつもりだ。

しかしそれも、当分先のことになるだろう。
他の天狗が来るまでの間は、誰かを叱りつけている時間だって作ってはいられない。
その間に、敵がオルファンへと近づくかもしれないからだ。
全ては、後続が来てから。
それまでの間は、文句のひとつも言うことなく、日が昇り、そして落ち、また昇ってくるまでの間ずっと、鋭く神経を研ぎ澄ませ千里を見渡す眼を凝らし続けなければならない。

だが椛には、そのこと自体に不満などはなかった。
彼女はただ黙々と、一言もしゃべらず、ため息すら吐かず、任務を遂行するために千里眼を用いて周囲の偵察を続けた。

それからさらにまたしばらくしてのことだ。
彼女の眼が、再びオルファンに接近するものがあるのを見つけたのは。
しかしそれは、ブレンでもグランチャーでもなかった。
たったひとつの小さな人影・・・大地を駆け抜ける、一匹の妖怪だった。

第十三話　その４

薄暗がりの中、長々とした（ように感じる）階段を足早に上っていく。
もう五分ほど、何一つ言葉を発することなく足を動かし続けたさとり達の視界は、やがて少しずつ明るくなっていき、その先にある光景を二人に見せつけてくる。

さとりとしては、どこか懐かしくも思える場所・・・オルファンの最深部だ。

階段が終わると同時に、そこから続けて伸びる紺色のスリットウェハーが積み重なって、広大な足場を作っている。
上には、さとり達が階段を上り出てきた方からもスリットウェハーがせりだして天井を成していた。
さとり達の背後は、広大な壁となっている。
その一方で、足場の方は少し先にいくとガードレールのような形に湾曲して途切れており、そこから先に踏み出すことができないようになっていた。

どこまで続いているのかも分からない、真っ直ぐに下へと続く空洞が広がっていた。

その空洞の先には、オルファンの外面を覆っているのと同じものと思える金色の壁があり、その壁の一部はまるで窓のように曇りひとつなく透けていた。
その向こうには、真昼の陽光に照らされて鮮やかな緑に染まる大地。それと、大地にのし掛かろうとしているような清涼な青の中に、綿のような雲を浮かべる空。
そして、大地と空の間にある一本の線・・・
その先が、幻想郷でも外の世界でもない、もっと別の新しいどこかへと繋がっているように思わせる地平線が見えた。

足を踏み出し、紺の足場を踏みしめながらこの空間にその身を晒して、壁面に埋め込まれているような透明の窓からちらりとそんな光景を見るさとり。

彼女は次いで、先に最深部へと入っていた永琳と共に、ある一点へ・・・オルファンと対話する装置であると思われる立方形の物体へと目を向けた。
それと共に、さとりの傍らにいた永琳が言う。
「私はこの辺りを勝手に調べさせてもらうわ・・・貴方達の邪魔にならないようにね・・・貴方の好きなようにしてください」
それにさとりも、
「はい」と頷いた。

そうして永琳は踵を返すと、立方体のある方とは逆に離れるように歩いて、足場の端へと向かっていた。
その背中を眼で追うのは少しの間にして、さとりは今一度、金色というより黄銅のような色で輝く立方体の方へと歩み寄っていった。

そうして、その目の前・・・黄色く輝く立方の一面が見えるところまで近づいたさとりは、やはり、単なる鉱物にしか見えないという

のにその向こうに生命があると感じさせる、傷ひとつない表面を右手で触れてみた。
それは別に、オルファンの意識を呼び起こそうとしての行動ではない。
ただ純粋に、オルファンの醸し出すこの不思議な感覚をもっと間近で触れてみたいと思っただけだ。

ぴたりとくっついた手のひらからは、ほんのりと温かさが伝わってきた。
この温かさこそが、アンチボディの、そしてオルファンの心を伝えてくれる。

そして、手のひらを伝わり身体の奥にまで染み渡ってくるその温かさは、さとりのことを覚えてくれていた。
微かに語りかけてくるオルファンの意思が、そう言っていた・・・
ような気がした。

このオルファンなら、きっとこちらの呼ぶ声にも応えてくれるはず。
さとりは、伝わってくる温かい熱を確かめながら、特にどこかを見るというわけではなく、ただぼんやりと宙を見つめながら静かに語り始めた。

「私のブレンの姿は見ましたか?・・・死ぬことこそ無いにせよ。
あの焼けた肌を見れば、痛ましく感じると思います・・・あの火傷を負ってすぐのブレンは、本当に痛み、苦しんでいたのです・・・
それでも彼らには、果たさなければならないと信じる目的がありま

す。それがビープレートであり、オルファン・・・貴方が銀河へと旅立っていくことなのです・・・それを叶えるために、生きることを諦めないブレンの姿が、私の胸を打ちます。そうしなければならない定めを感じさせて・・・」

そこまで言ってから、息継ぎをするように黙り、脳裏にブレンの姿を思い浮かべる。

初めて彼の者と出会った時のことを。

あれからまだ間もないが、さとりはもう、ブレンのためなら自分の生命の持つ暇(いとま)ぐらい、いくらでも使い果たしていいと考えていた。

そんなことを思いながら、言葉を続ける。

その声は、地底の妖怪としての誇りを込めた、静かで強かなものだった。

「実際にそうできるなんて言えない・・・だけど、今この時の気持ちを信じて、はっきり言いたいことがあります・・・・・・オルファン。私達が、必ず貴方を銀河の向こうへと・・・貴方が望む場所へと連れていきます・・・だから私達のために、その心を開き、もう一度声を聞かせてください。私は貴方に、聞きたいことがあるのです」

それが、さとりがオルファンに今伝えられることだった。

他に伝えたいことはあったが、それをはっきりと言葉にすることができなかった。

自分の中にある心を、とにかく聞こえるような声として発することで出てきたのが、こんな言葉だった。

そうしてさとりは次いで、オルファンに対して聞こうと考えていた問いを投げ掛けることにした。

オルファンが心開くことなく、応えなければそれでもいい。『そのもの』を批難することなどはしない。

これはただの、こちらからの一方的な質問なのだから。

さとりはそう考えながら、再度口を開いた。

「貴方とブレン達は・・・どうしてグランチャーと戦うのですか？・・・貴方とグランチャーは、一体いつ出会ったのです？・・・どうして、あんなにそっくりな者同士・・・目の敵にしながら・・・」

その時だった。

さとりの脳裏、心の奥の奥へと、彼女自身の中にある琴の糸を揺らしながら伝わってくるものがあった。

懐かしさと共に、魂をいるべき場所へとつれていってくれるさざ波のような声だ。

それが、静かに聞こえた。

オルファンの声が。

さとりの言葉に応えてくれたのだ。

その感慨に包まれる中で、彼女はオルファンが心に向けて直接響かせてくるその言葉を聞いた。

――憎いんじゃない・・・敵だから、戦ってるんじゃない・・・

――

確かに、そう聞こえた。

さとりは、

「え・・・」

と漏れ出た声と共に、ほんのかすかに身体を震わせた。

オルファンの発した言葉の意味が、簡単には理解できなかった。

それなのに、心の中に響いてきた言葉は深々と刻み付けられ、さざ波は、幾度となく寄せては返ってきた。

脳裏を、『そのもの』が語った言葉が何重にも反響する。

そしてさとりはその先に、深く寂しく、そして穏やかな、海の底を見たような気がした。

見たこともないはずの海を・・・真っ暗な闇が埋め尽くされているのに、ところどころに小さく光の粒が見える、不思議な海を。

いや、違う。

なんでこんな勘違いをしたのだろうか。

さとりの心に見えたのは、海ではなく夜空だ。

どうして、夜空に浮かぶ星の姿が、フラッシュバックとなって見えた?

その疑問への応えは、すぐに分かることになる。

「・・・貴方達のやってきたことは・・・戦いじゃなかった?・・・・・・それは・・・」

戸惑いと共に、微かな声をオルファンに向けたさとり。

しかしそれに対する『そのもの』の返事は、言葉ではなかった。

突如さとりの視界が、真っ白に染め上げられる。
白色電球の湖の中に飛び込んだようなあまりに目映い光が、鋭く焼き付いてきた。
世界中のありとあらゆるものが光を発し、ちっぽけな彼女を包み込む。
一体どこから発せられた光か、などということは、分かるはずもない。
それほどの眩さに、さとりは反射的に瞼を閉じて、左手を眼前にかざした。
しかし、オルファンと対話するための装置である立方体の上面からは手を離さない。
前例もあるため、別にこの四角い物体に何もしなくてもオルファンとの対話はできるというのは知っている。
それでもさとりは、手を離すようなことはしなかった。

それ以上に、まずはこの光だ。
「オルファンさん・・・っ」
きつく眼を閉じながら、小さくその名を呼ぶさとり。
この光は、多分オルファンが見せつけているものだ。
だとして、一体どうして？

先程の『そのもの』の言葉と共に、深く閉じた瞼を通りぬけて眼に焼きついてくる光に脳が反応する中で、さとりはただそう考えた。
オルファンは、何かを伝えようとしているのか？
一体何を？
さとりが聞きたいと言ったことの、答えを？

――――・・・それを、見せてくれるというのですか、オルファンさん・・・オルファン、貴方は・・・っ――――

瞳に焼きつく光が、少しずつ弱くなっていく。
やがて、真っ白なカンバスとなっていた瞼の裏側が、黒い絵の具に浸されて暗くなっていく。
それがつまり、さとりの眼の前で（そうなのかも正しくは分からない）輝いた光が消えたということを意味するということは、彼女にも分かることだった。

結局、光の正体は何だったのか・・・
光がなくなった今。閉じた瞼を開けば、そこには何が見える？
先程と変わらない、のっぺりとした黄色い面が見えるのか。
それとも、オルファンが見せてくれる、さとりの問いへの答えか・・・
それも、今分かることだ。

強く力を込められていた瞼の力が弱められ、苦悶するようにきつく閉ざされていたさとりの眼は、眠りの中にいるような穏やかさになっていた。
そうしてその眠りもやがて覚め、閉じた瞼がゆっくりと開かれる。
漆黒の空間の中に一筋の光の線が現れて、それが、眼の前の暗黒をこじ開けるように、広がっていく。

そうして、その先に見えたものは・・・

「・・・・・・・・」

さとりは、言葉を失った。
だがそれと同時に、光に包まれる直前、オルファンの言葉と一緒に脳裏をよぎった、夜空の景色の意味だけは分かった気がした。

さとりは、無数の黄色い花に囲まれていた。
黄色と緑色に染まった池の中に、くるぶしの辺りまで浸かるように佇んでいるさとりの頭上に広がるのは、無限に広がる黒い闇と、そこに点々と輝く赤と黄色の、そして時に青色の光の群れであった。
色とりどりなその星光の輝きに埋め尽くされれば、吸い込まれるような闇だって、何も恐怖を感じさせなかった。
むしろ、この闇こそが、全ての光を遍く包みこんで、優しく見守っているような気さえした。
無限の広がり、今なお止むことのない、世界の誕生の様子・・・宇宙の姿だ。
それは、先の一瞬さとりの脳裏にフラッシュバックしたものと、同じ光景だった。
この光景をさとりの心が先に感じ取り、鮮やかにその情景を思い浮かべていたのだ。
どうしてそういうことになったのかは、分からないし考えない。

しばらく人形のように固まっていたが、俄然衝き動かされたように周囲の花畑をきょろきょろと見回し、次いで頭上に広がる果ての見えない夜空を見上げる。
そんなことを数度繰り返すさとり。

一体これはどういうことなのだろうか・・・
この黄色い花の群れはなんだ？
それに、何故夜空の下にいるのか。
先程までオルファンの体内にいた。頭上を見上げても、見えるのはスリットウェハーに奔る青い溝ばかりだったのに・・・
何より、今はまだ昼だというのに・・・

そうしてもう一つ不思議なのが、さとりの頭上にあるのは夜空であるはずなのに、さとりの周囲は一切暗くないように見えたことだ。
まるで昼下がりの丘の上のように、周囲に咲き誇る黄色い花々は、色鮮やかにその姿を瞳の向こうに入れてくる。
何百mも先だって、はっきりと見渡せるような気がした。
黄色い花と、その下にある豊かな緑色がどこまでも広がり、漆黒の中に無数の光をちりばめた空の色との間にある地平線へと吸い込まれて見えなくなるまで、延々と続いていた。
そうしてそれに、薄暗い影が降りることもない。

どこまでも不思議だ。
何が起こったのか、よく分からない。
しかしさとりは、この不思議さがとても優しいものに思えた。
だから、不快感も、戸惑いも感じはしなかった。
ただそこにあるものとして、素直に受け入れることができた。

最初のころは動悸が起こるほどに混乱した心も、段々と落ち着いていく。
一気に熱せられたように思える胸の内にも、徐々に涼しい空気が入り込んでくる。

そして多分この景色は、オルファンが見せたものであるようだ。
一体どうやって見せているのか・・・幻覚か、あるいは、どうやってかは知らないがさとりを実際にこの不思議な空間に連れ込んだのか。それは分からないが。
数度、花畑と夜空を見渡したさとりは、視界を正面へと向けると一度大きな深呼吸をした。
口と鼻の両方からめいっぱい空気を吸い込むと、周りに咲いてある花の香りか、形容できないが、何だか気分のいい匂いがした。
空気も澄んでいる。

気道を通って全身に染みわたっていったように思えるその澄んだ空気が、身体の中にあった緊張を全て取り払って、呼気と一緒に吐き捨てられる。
深呼吸をすることですっかり気分も冷静になったさとりは、もう一度、終わりなく広がる黄色い花畑を見た。

そうしてその場にしゃがみこみ、すぐ近くにあった一輪の花をすぐそばで眺める。
周囲にある花は、全て同じものだった。

「・・・この花・・・永琳さんが言ってた光る花なんじゃ・・・・・・オルファンさんが連れてきてくれたこの場所に、あの方の咲かせた花がある・・・」
導かれるように、すぐ足元に咲いている小さな花弁へと手を伸ばす。
そうすると、今まさに触れようとする直前で、ぼんやりとした黄色い光、提灯の中で灯る明かりのような光を発した。

「あぁ・・・？」
思わず、伸ばした手を胸元にまで引き戻してしまう。
しかし、さとりに反応するように発せられた光は、何も彼女に対する警戒心を示したものでも、彼女を攻撃しようとしているためのものでもない。

あくまでも生理的な反応・・・そういう性質を持つから、光っただけのことだ。
そのことを感じたさとりは、引き寄せた右手をもう一度花の方へと伸ばし、今度こそその花弁を、包み込むようにして触れた。
花は大分小さく、手のひらでそのまま包み込めてしまいそうだった。
実際、指で撫でるように触れながら、軽く花を包み込むさとりの右手。

そこからは、ブレンが、そしてオルファンが伝えてくる温かさと同じ熱を感じた。
この花は、光るだけでない。
そのぼんやりとした光に見合うだけの温かさを持つ花だった。

そのことがさとりに対して、この場所に咲き誇っている光る花・・・オルファンの外側にもいくつだって咲いているこの花が、ブレンと同じオルファンの子孫であるという実感をもたらす。

「・・・・・・」
しばらくの間何も言わず、花を右手で撫で続けていたさとりは、その手を離して徐に立ち上がると、再び頭上に広がる夜空に眼を向けた。

どこまでも広く・・・しかもそれが、横向きの広がりだけでなく、さとりが見るその奥側にまで、まさしく延々でなく永遠続いている深い闇。
さとりはこれにも、何か違和感があるような気がした。

「この空、夜空のようで夜空じゃない・・・これではまるで・・・」

永らく地底に住んでいたさとりには、夜空のことはあまり分からない。
それでも、ブレンと初めて出会ったあの日に見た空の色は、今も瞳の中に焼き付いて消えない。

今この眼に見える空は、あの日の夜空に比べて、あまりにも澄みわたっているように見えた。
輝く星々は、あまりに強くそしてあまりに多く、全てを包括する偉

大な闇をも突き破ってしまいそうな荒々しさを見せていた。
星が本来持つ、炎の色を見せつけるように。

地上で夜空を見上げた時のように、幾重にも張り巡らされた大気の幕が存在しないからだ。
何にも透過されていない宇宙そのものの姿が、網膜に映っている。
そしてそれは、ちっぽけな妖怪にとっては、恐ろしさすら感じさせるものだった。

何より今さとりの眼に、大気の層にフィルタリングされていない宇宙が見えるということは、即ち・・・

例え一度素直な気持ちで受け入れられたとしても、少しでも頭で考えてしまうと、途端に今立っているこの場所が、違和感に包まれた奇妙な空間であるように思えてくる。

「・・・ここはどこなの・・・オルファンさん。貴方はどこに・・・」

今までずっと感じていたが、より一層大きくなってきた疑問を、声として発するさとり。
続けて彼女は、自分をこの場所へと連れてきたであろうオルファンの名を呼んだ。

きっと『そのもの』は、こちらに何かを見せてくれるはず。
その何かとは、一体？

不安と共に、大きな期待と、そしてオルファンを信じる心を混ぜ合

わせて、ただじっと夜空を見上げていたさとり。

そして、彼女の視界の中で繰り広げられることとなるその光景は、彼女にとってはまったく想像もできなかったものだった。

突然背後で、大きな音が鳴り響く。

固く重い金属が互いにぶつかり合うような音、あるいは、いくつもの山を連ねた山脈が這うように動き空気を震わせる音だ。

そうしてそういう音の中に、微かにシャリシャリという、綺麗な宝石の結晶がこぼれるように落ちていくような音も響いていた。

とにかく、何がぶつかりあうその音は、かなりの大音量であった。

腹の底を薄い板で軽く叩かれたような衝撃さえ感じるほどに。

「なにが・・・っ？」

驚愕して、すぐさま背後に振りかえるさとり。

そうして彼女の眼は、見えてきたその光景により一層その驚愕を大きくして、はっ、と見開かれた。

「オルファンが・・・・・・ふたつっ？」

遥か向こうの夜空、というか、宇宙の只中で、互いにぶつかり合い身と身を寄せるふたつの物体があった。

何百・・・もしかしたら、何ｋｍと離れているかもしれないのに、その大きさをはっきりと見せつけるその姿は、さとりにとっては、ある意味で待ち望んでいたほどのものであった。

ただ、それがふたつある。

そのことへの驚きは、それを体感するさとり自身でさえ、計り知れないほどに莫大なものであった。

オルファンだ。
しかも、二体のオルファンが、互いにその身体をぶつけ合っているのである。
遠目からでもはっきりとそのディテールを示す二体のオルファン。
その一方は、さとり達がこれまで見てきたのと同じものであるように見えるが、もう一方のオルファンは、少しだけ形が違う。初めて見るものだ。

そんなことはどうだっていい。
一体これは何なのだろうか。
あのもう一体のオルファンは何者なのだ？
そうして何故、互いにその身体をぶつけ合っている。
あれは一体、どういうことなんだ？
・・・戦っているとでもいうのか？

そして、互いに衝突し、その身体を軋ませる二体のオルファンからはそれぞれ、雪の結晶のような小さな光の粒が、漏れ出るように身体から放出されていた。
それが、ただの光ではないようにさとりには見えた。
何かの物体が光を反射させることで、キラキラとした輝きを見せているのだ。
あれも、一体何なんだろうか。
激突した衝撃で吐き出されているようだが、どんな物体なのか・・・

まさか？

「もしかしてこれは・・・オルファンさんの過去の思い出・・・？」
ぼんやりと呟いたさとりは、今度は急に、オルファンが生み出した光る花の群れの上で立っていたはずの身体が、何かに押しのけられ

るようにふわりと浮き上がるのを感じた。

「あっ！」

押しのけられた次は、吸い込まれる番だ。
ブラックホールのような、抵抗することもできずないほどの強大な力に、飲み込まれていくような感覚。
身体に異様なまでの力がかかり、全身の血液の流れをせき止めようとする。
背中から圧し掛かってくる重さと、胸が何か粘液のようなものに無理やり沈められていくような感覚を受けて、さとりは思わず、
「ぁ、うぅぅーん・・・っ」と呻きながら、きつく眼を閉じ苦悶する表情を浮かべた。

だが、身体に圧し掛かる重みと、それにより全身の血液がせき止められる感覚は、この一瞬の間だけのものであった。
何かにぐんっ、と押し出され、そしてまた何かに引っ張られた、と感じたその次の瞬間には、さとりの身体は、心地よいほどの浮遊感に包み込まれていた。
重みはおろか、何の感覚すら感じない全身の神経はただ、さとり自身の発する熱を彼女に伝えてくる。
しかしそれも、地に足がつかない奇妙な体感であるのには変わりなく、さとりは、きつく閉ざされた眼を戸惑いと共に今一度開いた。

その時だ。

「はぁ・・・っ！」

胸が潰れるほどに拍動し、ドクン、と大きな音を鳴らせるのが、はっきりと聞こえたような気がした。

先程まで遥か遠くに見えていたはずの二体のオルファンの姿が、いつの間にかすぐ眼の前・・・実際はまだ三百mほどは離れているのだろうが、その巨大さと相まって頭から突っ込んでしまうのではないかと思えるほど眼の前に感じられるほどのところにまで見えていた。

どうやら、自分が立っていた花畑から衝突するオルファンの傍にまで、何らかの力で一気に引き寄せられてしまったらしい。
さとりには見えないが、彼女が立っていた大地は、まるで初めからなかったかのように消えてなくなっていた。
黄色く光る花の姿も、最早見る影もなかった。

彼女は、正真正面、上も下も、左右もない、真空の宇宙空間へと漂っていたのである。
しかしながら、さとりにはもうそういうことを考えることもできないが、ここが宇宙空間であるとして、何故だか彼女はごく普通に呼吸をすることができていた。
宇宙の只中であるなら、空気などあるわけないのに・・・

激突した二つの金色の塊は、今度はその反発を受けてか、轟音を鳴らしながらゆっくりと互いに離されていく。
その圧倒的な迫力は、威圧感さえも生み出して、さとりの心に対し、叩きつけるかのように迫った。

「・・・・・・っ」

声を上げることも、息をすることすらもできないほどになって、その場で固まり動けなくなるさとり。
そんな彼女の前で二体のオルファンは、その身体中を奔る溝の奥から、無数の何かを吐きだしていた。
いたるところから吐き出されたその何かは、オルファンを中心に四方八方へと飛ばされていき、無限の宇宙へと流され、その暗闇の中へと吸い込まれようとしている。
そしてその中の一団が、宙に漂うさとりの身体へと迫っていた。

このままではぶつかる。

「あぅ・・・っ！」
思わず、手足を折りたたんで身構え、身体を縮こませるさとり。
地に足が付かなければ、身構えることさえできない。
今のさとりは、鮫のいる海原に投げ出された野兎の一匹だ。
その身体目掛けて、ひとつの薄い円盤のような物体が迫り来る。

・・・円盤？

さとりの身体に、彼女の身体の何倍も大きな円盤の、ちょうどその薄い円弧にあたる部分がぶつかった。

チクリと刺すような、微かな電流。
これは死んだ、と思える認識が脳裏を駆け巡っていく。

しかし、そんなさとりの諦観とは裏腹に、彼女の小さな身体を真っ二つに両断するはずだった円盤は意外、というか不可解にも、そのまま身体をすり抜けて、後ろの方へと流れていくだけだった。

ぶつかった衝撃が伝わってくるようなこともない。
まるで、単なる幻が身体を通り過ぎていったようだ。

何の痛みも・・・というか、感触らしい感触も感じることがなかったさとりは、赤ん坊のように身体を丸めるのと一緒にまたきつく閉じてしまった眼を、うっすらと開く。
と、僅かに開いた視界の中では、先の円盤に続かんとばかりに、さらにいくつもの円盤がさとりの方へと飛来し、そのすぐ傍を掠めるように通り過ぎていた。

「ひっ・・・うぅ・・・っ」

縮めた身体をびくりと震わせ、また眼を閉じそうになったさとりだが、それを何とか堪え、恐る恐る開いた眼を凝らし、飛来する円盤の姿をはっきりと確認した。
そうして、ひとつの円盤が彼方から飛来し、すぐ眼の前に迫り、そして脇を通り過ぎて遥か後方へと流れていくのを、眼で追う。

そうしてその円盤の姿をはっきりと眼の当たりにしたさとりは、恐怖に緊張した身体を途端に弛緩させながら、思わず呟いた。

「あれ、オーガニックプレートだわ・・・・・・くっ？」

呟くのと同時に、また一枚の円盤が身体にぶつかる。
今度はくるくると回転する平面が、叩きつけるように衝突してきたが、またしてもそのままさとりの身体をすり抜けて、何事もなく回転を続けながら後ろに流れていく。
一度ならともかく、二度同じようなことがあれば、いい加減確信できる。
どうやらさとりが見ているこの光景は、オルファンが見せている幻視で間違いないらしい。

実際に起こっている現象とは違うようだ。
肌で触れることもできなければ、例え真っ正面からぶつかっても、何も起こりはしない。

そして、実物ではなく、単に眼で見えるだけの映像として迫り来るこの無数の円盤は、オーガニックプレートで間違いなかった。
いくつもの細長い三角形が連なり、プリズムにより常に変化する光を艶めかしいほどに煌めかせるその姿は、まさしくプレートそのものだ。
アンチボディを生み出す、台座となるもの。
それが、二体のオルファンが衝突した勢いに巻き込まれ、宇宙の闇へと投げ出されている。

さとりには、何かが分かってきたような気がしてきた。

激突の反作用により、軋みながら悲鳴のような乾いた音を発して、互いに離れていく二体のオルファン。
自らが吐き出し、なすすべなく宙に流れていくオーガニックプレート同様、彼の者達もまた、流れていく自らの勢いに逆行することができずにいた。
それと一緒に、さとりの視界からも、少しずつ少しずつ遠のいていく。

そんな中でさとりは、みるみる内に距離が開いていく二体のオルファンの内のひとつ、幻想郷に現れた方のオルファンへと眼を凝らした。

もう一方のオルファンから吐き出された、いくつかのキラキラと輝

くプレートの光。
このまま、流されるままに宇宙の深淵に飲み込まれようとしていたところを、最後の抵抗を見せたプレートの群れの一部は、懸命にその身を動かして流れていく金色の巨体へと近づいていく。
そうしてその表面に張り付くようにすることで、オルファンの動きに乗せられることで、宇宙を遊泳することからなんとか逃れていた。

そう、おそらくあのオーガニックプレートの群れは・・・

さとりは、無限の暗黒から懸命に逃れようとするその、虹のように光る円盤の姿を見て、確信することができた。
どこにも足がつかず、水の上を漂うように、緊張が解けてもう一度伸ばされた手足をゆらゆらと揺らす中、彼女は言った。

「あのもう一体のオルファンが、グランチャーの母となる存在。ブレンの母であるオルファンとは異なる。また別の・・・・・・そして、宇宙に投げ出されないように、必死にオルファンに・・・貴方にしがみ付いたあのオーガニックプレートこそ、十六夜　咲夜さんが乗っているような、あのグランチャー達だったのですね・・・」

第十三話　その5

絶対的に確かとは言えない。
だがさとりには、これが間違いない事実であると思えた。

グランチャーとは、今幻想郷にいるのとは別のオルファンが生み出した抗体であり、このオルファン同士の激突に巻き込まれ、辛くもこちらのオルファンに張り付いて難を逃れた結果、幻想郷へと迷い込んできた。

「グランチャー達の母となるオルファンは、彼らから遠いところへと離れていってしまった。グランチャーはそれを寂しく思って・・・」

母なる存在と共に生きているブレンに嫉妬したのか？
だからブレンを敵として、戦おうとする。
ブレンも、戦わなければ生きてはいけないから戦う。

だが、オルファンは言っていた。
グランチャーが憎いのではない。
そしてこれは、戦いではない。
つまり、グランチャーは決して敵ではないと・・・
だというのなら・・・

さとりは、みるみる内に遠ざかっていき、深い宇宙の深淵へと沈み溶けるように消えていくオルファンの姿。消え入りそうで、決して消えることのないその光を見る。

これは、少し前の、幻想郷に現れる前のオルファンの記憶の映像だ。おそらくこの後、何体かのグランチャーと共に宇宙を漂い続けたオルファンは、その認識が曖昧になっていきこの宇宙から忘れ去られた存在になろうとしたとき、幻想郷にやってきたのだろう。

衝突により、オルファンの中のオーガニックエナジーが一気に失われたのかもしれない。

だとすれば、『そのもの』は、自分が生きているのか死んでいるのかも分からない状態であったとも考えられる。

となれば、なおさら幻想郷には入りやすくはなるだろう。

が、しかしこの、まさしく天文学的に広大な宇宙の中において、これほどのものが幻想郷に迷い込むというのは不思議だった。

いくら幻想郷といえど、宇宙の果ての果てにいる者を招き入れることは、難しいだろう。

もしかしてこの二体のオルファンは、幻想郷から見た外の世界・・・地球にかなり近いところにいたのかもしれない。

それはともかくとしてだ。

轟音も止み、自分の心臓の鼓動の音だけが聞こえる不気味なほどの静寂に包まれるようになった中で、さとりは呟く。

「・・・そもそも、どうしてあの二体のオルファンは互いの身体をぶつけ合ったの?・・・宇宙は広い。同じ姿をした何かが眼の前に見えたとして、あんな吸い込まれる風にぶつかり合うはずないのに・・・」

二体のオルファンは、意図的に互いの身体を衝突させたのだ。

さとりにはそれが、やはり戦っているように見えた。

己の肉体をぶつけることで、相手を砕こうと。

だけども、オルファンはそれを戦いではないという。

「なら一体・・・貴方はどうして、自分と同じ姿をしたものと・・・」

疑問を口にしても、遥か遠くに消えようとしているオルファンが・・・その中に宿る意思が、応えてくれることはない。

さとりはただじっと、その金色の輝きを、宇宙の暗闇に圧迫され押しつぶされるように小さくしていく『そのもの』を見つめ続けた。

溶け込みそうに、漆黒の、そして真空の、生物の営みを拒む空間に沈んで行きながら、実際は決して消えることない・・・小さくなりながらも鮮やかに輝き続けている光を。

だがその光は、過酷な状況に抗おうとする力強さと共に、救いを求めるような弱々しさも感じさせた。

さとりには、何かが分かった気がした。

あのオルファンは・・・そして、『そのもの』と出逢ったもうひとりのオルファンは、まずどこで生まれ、そして、どこで生きてきた？

もしかすると、この宇宙の果てのどこかで訳も分からないまま生み出されて、そうして今の今まで、ずっと孤独な旅を続けていたのかもしれない。

広大な宇宙の中、他者と呼べる存在に気づくこともできず、ずっと孤独に。

いや、何かには出逢えたかもしれない。

だけどそれはきっと、自分達とはまったく違う生命の営みをする、まったく別の種族だ。

互いを認識し合うことも、理解し合うことも出来なかったのだろう。
そういう選択が、その時のオルファンには思いつかなかったのか。

そんな中で初めて出逢った、自分と同じ・・・ほとんど同じ存在。
それと出逢った時、オルファンは彼の者と心を通わし、理解し合うとしたのではないか。

ただ、オルファンはその方法が分からなかったのだ。
他者を理解するという機会すら得ることのできなかったオルファンは、自分が何をすればいいのか分からなかった。
そうして、理解しようとする一方でも、本能的に感じる他者への・・・まったく自分とそっくりな他者への警戒心というか、不安というものがあったのではないか？

妖怪だって、同じ妖怪を嫌う。
人間だって人間を嫌うし、あまつさえ殺意を抱くこともある。
幻想郷に六十年に一度、ありとあらゆる種類の花が季節を問わず開花するという異変（名物と言ってもいいか）が起こることがあるが、その理由のひとつだって、いがみ合った人間が殺し合った結果である。

オルファンだって生きている。
長らく孤独な旅を続けている中で、初めて出逢った自分と瓜二つの、生き映しのような何者かに、心を衝き動かされる気分だったのだろう。
だがそれ以上に、大きな不安と恐れもあったはずだ。
本能的に感じる、理屈ではない感情が。

そうして、その感情を振り払って互いの理解を深めようとしても、その方法が分からないオルファンは、眼の前にある感情に従う以外

の道を見つけることができなかった。
それは、もうひとりのオルファンも同じだった。
そうして二体のオルファンは、不安と恐怖をかき消すように互いにぶつかり合い、戦いとしか思えない行為を繰り広げた。
その末に、その戦いは幻想郷にまで及ぶこととなったのだ。
戦いの結果として生み出された、他者を排するために生み出された抗体（アンチボディ）を使って・・・

とうとう、宇宙の深淵に輝く無数の星々とほとんど変わらない姿になったオルファンの光を見つめる中で、さとりは言いようもなく哀しく、虚しくなってきた。

他人の気持ちが分かりすぎるのも楽しくはないが、まったく分からないのも、とても辛いことなのだと知った。
この宇宙の遍く全てを、何かたったひとつの存在が生み出したとして、どうしてその何かは、バランスを取らなければいけないような生き方を強いるのか。
両極端では、生きていけないような・・・

一度不安に押しつぶされ戦いを初めてしまえば、それを終わらせ、和解することは難しいだろう。
幻想郷の妖怪同士の喧嘩程度なら、その場ですっかり仲直りできるかもしれないが、人間と妖怪の確執は？と聞かれれば、そんな簡単に済む話でもない。
それと同じだ。
妖怪の喧嘩は半分遊びだ。
ただ、このオルファン同士の戦いは、その奥に不安と恐怖が根ざしている。そしてそこから来る他者の嫌悪感が。

そのことが原因で起こる確執は、深い。

さとりには、恐怖と嫌悪という感情の、その異様な粘り気と、気持ち悪いほどの熱さを知っているからだ。

ブレンとグランチャーの戦いは、最早避けられないところまで来ていたのかもしれない。

それでもだ。

オルファンは、泥沼に浸かるように戦いを初めても尚、諦めてはいなかった。

自分が出逢った、自分と同じ姿の誰か。

その心を深く理解し、そして自分の心もまた理解させることを。

そのために、ブレンに戦う以外の目的を授けたのだ。

ブレンがもし戦うためだけの存在なら、他の生物を胎内に乗せる必要はなかったのではないか？

もちろん、例え戦うことだけが目的だとしても、そんなことはないだろう。

オーガニックエナジーを得るために、そして他の生物の・・・特に妖怪や人間の持つ知性を戦いに利用するために胎内に宿している、という考え方もある。

妖怪、そして人間が持つ反射神経と判断力と感性は、力となる。

しかし、力を行使することそのものだけは自分達にしかできないようにした。

妖怪も人間も結局のところ、力の使い方を知らない無知でエゴイスティックな生物だからだ。

だけど、それならそれで、モルモットのように閉じ込めて戦うこと

だけを強制すればいい。
ブレンもグランチャーも、決してそうはしない。
形はどうあれ、彼の者達は、胎内に宿る者の意思を呼び起こし、それを汲み取ろうとしている。
その一方で、自分達の中にある他のアンチボディへの敵対心、あるいは不安と恐怖の延長であるものを感化させようとしている。
それこそが、他者を理解し、そして理解してもらう（無理やりにでも理解させる）行為そのものではないのか？

オルファンは、そしてその子孫であるアンチボディは、自分達同じ種族同士を理解するために、まず、自分達と異なる種族から、コミュニケーションのための情報を得ようとしているのではないか。
そのことが、有効な手段のひとつだと気づいた。
そうすることで、少しでも今のこの逼塞した戦いの中から抜けだそうと。

そうして、失ったオーガニックエナジーを再び取り戻し銀河へと再び旅立つのは、はぐれてしまったもうひとりのオルファンと再び出逢うためではないのか？
あるいは、さとりを初め、幻想郷の者達にそうしたように、他の生物と交流することでより確かなコミュニケーションの力を得ようと。
一度無に近いほどに失われた力を取り戻すには、ただオーガニックエナジーを大量に吸収するだけではいけない。
量という測りに収まらない、概念としての『オーガニックエナジーそのもの』と呼べるほどのものが必要なのだろう。
そのための無限の力、ビープレートか。
それを探すことも、ブレンにさせていた。

これらはあくまでも、全て憶測の範囲でしかない。
オルファンは決して詳しいことを語ってはくれず、断片的な情報しかもたらしてはくれなかったし、さとりの考えも、その断片的な情報から出来得る限り自分だけで考えた結論だったのだから信憑性には乏しい。
それでもさとりは、信じた。
今自分の中に固まった考えと、これから固まるであろう、自分の中の意思を。

さとりには感じられた。
オルファンの心を。
一度は妹同様、閉ざすことも考えた自分の第三の眼の存在に、今ほど感謝したことはなかった。
オルファンがまだ、分かり合うことを諦めていないことを感じられたからだ。

哀しみと空虚と、粘りのある不安の中に、確かに希望はあった。

さとりは、遥か遠くで、最早ただの光の一粒となってしまったオルファンの方に向けて右手を伸ばした。
オルファンの放つ小さな光に手を伸ばせば、触れられそうだったからだ。
そうして、『そのもの』が出逢ったもうひとりのオルファンが流れていった方へとちらりとだけ顔を振り向けるが、向こうもすでにどこか遠くへと流れていき見えなくなったので、仕方なくすぐに前を向き直した。

そして、宇宙に輝く幾千の星々の中で最も鮮やかに輝いているように見えるその光に向かって、大きな声で呼びかけた。

「オルファンさん！貴方達に今できることが戦うことしかないのなら、私もそれを手伝います・・・だけどいつか、戦う以外にもやれることがあるということを、知って欲しいのですっ・・・・・・私はそのためにここに来たのですから・・・っ」

返事はない。

さとりの眼に見える光はもうずっと遠くで輝いていて、彼女は、まだ自分達とオルファンの間に、大きな隔たりがあるのを実感していた。

だが、これでもまだ、大きく互いの距離を縮めて歩み寄ったと言えるのだろう。

今この時、オルファンは自分の心の内にある思い出を見せてくれたのだから。

それはきっと、『そのもの』がこちらを、少しだけでも認めてきれたという証かもしれないのだ。

さとりは、次いでまた大きな声で、

この宇宙の中、こだまとなってどこまでも響き渡るような声で、言った。

「今日はありがとーっ！また、お会いしましょうねーーー！」

その時だった。

さとりの視界が、この空間に来る直前と同じように、眩い光に染め上げられた。

網膜に真っ白な光が焼きついて、さとりの頭の中にまで白光させてくる。

しかも今度は勢いよく風が吹きつけ、吹き飛ばされるような感覚までも襲ってきた。

いや、実際さとりは、何か得体のしれない力に突き飛ばされ、仰け反りながら真空の海の中を流されていた。

そのような感覚があったのだ。

「あぁっ!?・・・ぅ、うぅ・・・っ」

眩しさに眼を閉じ、叩きつけてくる風圧に抵抗もできず、成すがままにされるさとり。

自分の身体が飛ばされているのは分かるが、一体どこに向かって飛ばされているかなど、分かりはしない。

視覚を通じて世界は真っ白に染められており、周りで何が起こっているのかさえ見えてはこない。

そうして、風はおろか空気もないはずの真空の只中で、何故だか風のようなものに吹き飛ばされるさとりは、段々とその意識までも暴風に煽られ流れていき、白熱する光に包みこまれて溶けていくように失なわれていった。

※

幽香の屋敷の居間にて、二つ突き合わさって置いてある大きなソファにそれぞれ腰かけながら、彼女が再び入れてきた飲み物に口をつ

けていた神奈子達。
神奈子と諏訪子と藍が並んでひとつに座り、もうひとつには早苗と幽香がまたしても隣り合って座っていた。
が、すでに早苗にはびくびくする様子はなかった。
ミルクの代わりに諏訪子に出されたのは、麦茶だった。

まぁ、食用として重宝されるものと考えると、大麦は確かにこういう材料になってナンボのものだ。
が、しかし、ミルクの代わりに麦茶とは、結局こちらを幼児扱いしているのではないかと思いつつも、コップに満たされている褐色の液体を口につけた諏訪子は、一回ぐびっ、と音を鳴らして飲み込むと、コップを口から離して、いっそ驚いた様子の興奮した声を上げた。

「っはぁ～！ほんのり苦い、けど、くどくないっ！鼻の中を香りが充満するぅっ、超うめぇ！」

その声を聞いて、向きあうような形で座っていた幽香が笑顔で応える。

「その材料の大麦も、私が栽培しました。しっかり豊穣の神の加護を受けながら栽培し、収穫した後も自分で搗精して、焙煎もして、そうして自分で煮出したわ。最近はティーバックで気軽に作れるけど、そんなことはしていない」
「あんたは農家か」

神奈子と藍も、諏訪子に続くように珈琲を飲んだ。
もしかしたら毒を盛られているかもしれなかったが、そうする理由が分からないし、早苗と諏訪子の身体に別段以上がなさそうなので、気にせず口をつけた。

珈琲なんてあまり飲んだことがないが、なるほど、早苗が自分がされたことも忘れて幽香ににこにこするのも、諏訪子が興奮するのも分かるような味わい深さではあった。
正直神奈子には具体的にどう美味しいのかは言えなかったし、美味いと口には出さなかったが。

とりあえずこの一杯で、一応は幽香のことを眼に見えて警戒することは止めておくか、と考えを改めた神奈子は、ひとまず自分達がここに来た本題というものを、幽香に対して切り出すことにした。

「それよりも幽香・・・私達をここにおいておくというそうだが・・・」
神奈子の声に、幽香が応える。
「えぇ、そうよ・・・事前にいっておくけど、私の家に住まわせてもいいけど、空き部屋は精々二つしかないから、貴方達全員でいるつもりなら、おしめきひしめきしながら部屋にいるか、誰かが外で寝るしかないから」
それにまた、神奈子の方も返す。
「この畑の適当なところに分社を設ける。私と諏訪子は普段そこに居させてもらうとしよう。用がない限りは、暇つぶし以外では外には出ぬ。その空いてる二部屋には、早苗と藍にいてもらう」
「ふぅん、分社ねぇ・・・」
「そなたの大事そうな向日葵の迷惑にならないようなところに設ける。やることが全て済んで守矢神社に戻れるようになれば、きれいさっぱり撤去もする・・・まさか、駄目だとは言うまいな」
「いや、別にいいけど・・・でも、祠を建てるぐらい自分達でやりなさいよ、私は関与しませんから」
「それぐらいのがちょうどよい」
神というのは実際のところ概念だから、ちょっと小さな祠でも建てれば、その中に落ち着くことができる。

姿を消すも現すも、そのような信仰の出入り口とも呼べるものがあれば、自由自在なのだ。
逆に分社がなければ、不安定な状態でその場に居続けるため、安心しきることができなかった。
だからこそ、分社の設置についても幽香からの許可（神が妖怪に許可を得るとは癪だが、住まわせてもらう立場なのだから仕方ない）を得ることができたのは、よかった。

ひとまずこれで、天狗からの詮索を逃れることはできるようだ。
安堵する神奈子だったが、その隣に諏訪子を挟んで座る藍の方は、どうも何か納得のいかないような様子だった。

ひと口珈琲を啜った彼女は徐に口を開くと、神奈子に続くように幽香に問うていた。

「あの、貴方。ここを八坂様達の隠れ家にするのはいいかもしれないけど、ここって、隠れるにはちょっと向いてないんではないか？」
その声に、幽香と早苗が続けざまに、
「ん？」
「どうしてです？」
と返す。

「妖怪の山からここまでは大分離れているから、天狗の動きを遅れさせられるというのは分かるけど、それでも偵察自体はかならず及ぶはず・・・そうしたら、ここには上空からの眼を掻い潜ることができるような障害物だってないし、グランチャーは野ざらしの状態にしておくしかない。必ず見つかってしまうし、結局八坂様達がいることも分かってしまう・・・実際のところ、隠れ家にも何にもなってないんじゃないか？」

その声を聞いた幽香は、顎を引きながら、「ふっ」と笑みを漏らし、次いでソファに背中を預けて深くもたれかかりながら、引いた顎を今度は上げて、面白そうに笑った。
「あはははは、単純な話よ」
「？」
「ここに者々が集(たか)ってることがバレたところで、天狗共じゃ行動は起こせない・・・・・何故って？私がいるからよ。私を相手にして事を起こすだけの根性は、今の天狗にはない」

得意満面、自尊心が人の姿を成したような顔つきで言う幽香。
こんな台詞、そこら辺にいる草の根のような妖怪が言えば単なる苦笑の対象でしかないが、幽香が言った場合は、また別の意味での苦笑を呼び起こすものだった。

神奈子が、不器用そうに口を引きつらせながら珈琲をひと口ちびちびと飲んだ。

幽香を怒らせれば、一体どうなるのだろうか・・・
想像もできない。
幽香は多くの者から恐れられているが、実際のところその実力が発揮される様を見たというものは少ない。
しかしそのことが逆に、幽香の不気味な噂に説得力を持たせていた。
幽香と弾幕勝負をしたこともあるし、勝ったこともあるという者もいるにはいるが、そういう者達のほとんどは、訳も分からないままとにかくあたふたしていると、気が付いたら勝ってた、というのがほとんどで、勝利の実感を感じているものは、余程の能天気な？でなければいなかった。
幽香が本調子を出していたのかさえ定かではない。むしろ、ただ遊んでいただけとも考えられた。
というか、実際そうだろう。

幽香にとっては、弾幕は勝負にもならないのかもしれない。
神奈子達だって、居間が見る影もなくなるほどに破壊されてもなお消滅させられなかったあの花弁状の弾幕を思えば、そのことが確証として感じられる気がした。
戦いを遊びにできる者が、強くないわけがないのだ。

なるほど、幽香に対して表立ってことを起こすことは、一時の事態の解決のためならまだしも、もっと長い目で見ると愚かなことなのだろう。
下手に眼をつけられ、遊びに来たと称して暴れられたら・・・

舌の上を転がる、ほどよく熱い液体が、さっき飲んだ時よりも苦くなったように感じ、自身の顔も苦くした神奈子の方は見ていない様子で、幽香は続けた。

「それに、隠れ家になる場所はここだけではないわ・・・」
「へぇ〜、そうなんですか？」横にいる早苗が聞き返す。
「えぇ、今いる実体の世界と、夢幻の世界の境界に、夢幻館というのがある・・・そこは、私の屋敷なのよ」

思い出した。
確かそういう話があることも神奈子達は知っていたし、早苗も聞いていた。藍もやはり知っている。
夢幻の世界もそうだが、そこと幻想郷の境界にある館の存在もだ。
ただ、夢幻の世界への行き方を知る者は多くない。
実は博麗神社の裏山の湖から行けたりするのだが、そこにも番人がいて、そう簡単には入れてくれない。
いつぞやの異変により、人間ですら容易に行き来することができるようになった冥界とは違うのだ。

幽香が続ける。
「もしもという場合には、そこに匿うこともできる。夢幻館なら中も広いしねぇ～」

「へぇ、なるほどなぁ、一応色々考えているんだ」と、藍。
「そりゃぁね。でも貴方達、グランチャーで事を起こすつもりでしょう、夢幻世界にいれば、ここよりももっと行動し辛くなるからね。館をアジトにするのは、本当にもしもの時にしましょう・・・・・・それにねぇ～・・・」
途中で口を濁して、バツが悪そうな顔をする幽香。
「なんです？」
と聞く早苗に、彼女は応えた。

「この畑に住み始めてからというもの、あっちとは随分疎遠になってるから、急に帰ると言っても私のことを受け入れてくれるかどうか・・・・・・この前ちょっとは向こうのみんなも元気にしてるか確かめないと、と思って電話した時だって、私がどんなに呼びかけても、『もしもぉ～ひ・・・エリーィィ～～っ？』、『エリーだろぉ～？』、『おぉ～いみんなぁぁ～エリーがぱらしらぱっｗｋｈｆけｊ、だよほぉ～～っ』とか訳の分からない人違いをする有様だし・・・」
「麻薬なんて吸ってお前ぇ、なぁにが気持ちいいんだ・・・あぁっ！？」
「早苗、そういう誰も分からないようなネタはやめなさい」
「はい、分かりました神奈子様・・・って幽香さんそれ、大丈夫なんですか？」
「さっきのは冗談よ・・・まぁ、大丈夫でしょう。内の人らはみんな気さくでいい人よ。私みたいにねっ」

「・・・・・・」

「・・・・・・」
誰もが閉口する。

まぁとにかく、どうやら幽香は、神奈子達が思っている以上にいろいろと考えた上で協力をしてきているようだった。
もちろん、この親切な善意にも何か裏がありそうだったため、全面的に信用こそしないが、味方である内は頼りになりそうだ。
彼女がいてくれれば、こちらのオルファンによるオーガニックエナジーの吸収の阻止もしやすいだろうし、あの黄金の山をこちらで支配することで、そう難しいものではなくなるだろう。

そうとまで考えられるようにしてくれたのは、他でもない幽香当人だ。
いくら警戒するとはいえ、彼女の行いに対して何ひとつ感謝の意を表さないことは、さすがに神としての倫理に反することであった。

神奈子は、右手で持ったままだった珈琲のカップを机に置くと、改まった態度で膝の上に握った手を置いて、そうして幽香に対し言った。
「本当に、助かります。感謝させて頂こう・・・これから、共に戦っていくことになる。よろしくお願いする」
諏訪子も続いて、
「ん、以下同文」と言う。

それに幽香は、やはりどこか不気味さを感じさせるにこやかな笑みを浮かべながら応えた。
「こちらこそ、よろしくお願い申し上げますわ」
それに続いて、隣に座る早苗がパチパチと手を叩いていた。

※

戦いを終え魔法の森から戻ってきた魔理沙達は、そのまま地底への抜け穴を通って、地霊殿へと帰還することにした。
かなり過酷な戦いだった故か、それぞれのブレンも多少なりに疲れているように感じられた。
まだ地上の空は明るく、高々と昇る陽の光は後少しすれば西の空へと傾き始めるか、という時分だったのだが、今日のところはもう大人しくゆっくりと過ごすことにする。
もっとも、そうできたらの話ではあるが。

旧都の上空を通り過ぎ、地霊殿への中庭へと戻ってきたブレン達。
しかし、上空から中庭の様子を見た魔理沙達は、そこにある違和感にすぐに気づくことができた。
胎内にて、魔理沙が呟く。
「あれ・・・サトリブレンがいないじゃないか・・・どこにいったんだ？」

魔法の森には連れていかず、この場に残していたはずのさとりのブレンの姿が、忽然と消えていた。
これはどういうことだろうか・・・
まさか、我慢できなくなってこちらを追って魔法の森へと向かった

のか？
しかし魔理沙達は、ここに戻る道すがらにブレンの姿を見たというわけでもない。
さとりが魔法の森へと魔理沙を追っているのなら、ばったり出くわすはずだが・・・

何にせよ、この場でサトリブレンがいなくなったという事実だけを知ったところで、それ以上のことが分かるわけがない。
どこかへと行ったことは確かだろうが、どこにいったかなどわかるはずもない。
ひとまず、こちらのブレンを中庭へと降ろし、休ませることにした。
戦闘により、大なり小なり乱れてしまったオーガニックエナジーを安定させる。
それには、わざわざ魔理沙達が胎内にいてやる必要もなかった。
ブレンがブレンで疲れたのなら、宿主だって宿主なりに疲れている。
今回ばかりはさすがに少しブレンから離れて、早く屋敷の中の部屋で横になっておきたいものだ。
その前にサトリブレンの動向を、屋敷にいる誰かが知っているかもしれないから、聞いておくか。

そう思いつつ魔理沙は、ブレンを中庭へと降下させていった。
地に足がつくと同時に、ブレンはその場でしゃがみ込み、装甲を開く。
そうして、穴をくぐって胎内から出、装甲を足場にしつつ地面に降りる魔理沙。
輝夜も霊夢もほんと同時に、同じようにして各々のブレンから降りていた。

「よぉ～し、お疲れっ、今日はもう何もないといいなぁ」
ブレンの顔を見上げ、右のつま先をぽんぽんと軽く手で叩きながら

言って、次いでその手を離して周囲を見渡す。

そうすると、屋敷に続く戸が開いて、遅れてブレン達が戻ってきたのに気づいたにとりが向こうから出てきた。

これ幸いだ。

彼女なら、サトリブレンがいなくなった理由を知っているだろうか。

第十三話　その6

小走りですぐ傍にまで駆け寄ってきたにとりに、魔理沙は開口一番に言った。

「いきなりで済まないんだが・・・サトリブレンはどこに行ったんだぜ？」

かくいう魔理沙の予想通り、にとりは事情を知っているらしくその声にすぐさま応えてくれた。

「あぁ、あいつらなら、オルファンの中に行ったよ」

「オルファンに？」

「うん。魔理沙達と一緒に戦えず手伝いができなくて、さとりなりに辛かったんだろうねぇ。オルファンと話をすると言って、こっちの話もロクに聞かずに出ていったよ」

「・・・そうかぁ」

さとりはオルファンに。

魔理沙達がどうにかしてグランチャーを撃退した以上、オルファンの体内にいれば危険はないだろう。

もちろん、ほとんど打撃を受けない状態で、いち早く撤退したあのグランチャー達だ。

余力もまだ残っているだろうし、改めてオルファンへの接近を図ってくるかもしれない。

多分椛はそれを警戒して、今もオルファンの上で偵察を続けているはずだ。

制止を聞かずに出撃した魔理沙達への説教が始まらないのは、そういうことがあるからだろう。
もしグランチャーからの再襲撃があったらその時で、さとりと彼女のブレンにはオルファンの体内で大人しくしていてもらおう。
もし敵が来ないのならば、それでよし。
あわよくば、オルファンと対話をしに行ったというさとりが、何か大きなものを得てくれれば・・・

そう考える魔理沙に対し、今度はにとりの方からこう聞いてきた。
「ねぇ。魔法の森のブレンはどうなったんだ？無事なの？ここにはいないみたいだけど・・・」
魔理沙はこの問いに、顔を僅かに暗くして応じる。
「駄目だった。ふたりいたんだが、どっちもやられてしまったぜ」
「なんだ、それじゃあ出ていった意味がないじゃないかぁ」
「そう言わないでくれよ。あたし達だって頑張ったんだ」
「えっへへへ・・・わぁーってるよ。残念だったねぇ」
「そうだなぁ・・・あたしらのブレンに何もないことだけは、よかったけど・・・」

そう言いながら、改めてマリサブレンの顔を見上げる魔理沙。

すると、隣でにとりが
「ん？」
と不思議そうな声を出したのが聞こえた。
ブレンの顔をほとんど見ず、すぐに彼女の方を向きなおす。
すると、こちらに見られているのにも気づかず、にとりはただじっとどこかに視線を合わせていた。

魔理沙も、その視線が向いている方へと向く。

「・・・あいつ・・・？」

そうして彼女の口から漏れ出た声は、にとり同様不思議そうなものだったが、魔理沙の方には幾分かの驚きの色があった。

屋敷の戸を開けて文が中庭へと出てきたのだが、彼女がもうひとり、人影を連れていたからだ。

そうして魔理沙はその人影が何者なのか知っていたし、あの紅魔館の咲夜がグランチャーに乗っている以上、この場に来ることはないだろうと考えていたからだ。

文が連れてきたその人影は、紅　美鈴だった。

彼女と共に中庭に踏みいってきた文が、めんどくさそうに、大声でいう。

「私ゃここの使用人じゃないんですけどねぇ・・・皆さーんっ、ブレンの宿主に、客人ですよー」

それを聞いた魔理沙とにとり・・・だけでなく、霊夢と輝夜も、引っ張られるように文と、その隣の美鈴の方へと駆けていった。

彼女らが揃って文の前に立ち並ぶと、魔理沙がまず彼女と美鈴の両方に対して問うた。

「客人って？何か用があるのか」

その声から二秒と待たずして、美鈴の固い決意・・・というよりかは、鋭い刃のような禍々しさを感じさせる声が、魔理沙の耳の内側

で鳴動した。

「突然のことに戸惑うとは思いますが、まずはっきりとお頼みします・・・どうか貴方達とブレンパワードの手で、我等が紅魔館に居座るグランチャーを撃破して頂きたいのです」

「・・・なんだっ、て・・・？」

魔理沙は思わず、聞こえないほどの・・・そもそも魔理沙自身、それが自らの発声であると認識できないほどの微かな声を漏らしていた。

※

深い暗闇の中、幾重にも連鎖し重なる反響となった声が聞こえてきた。

薄暗い洞窟の遥か向こうから聞こえてくるような、微かな響きだ。

「さとりさん・・・大丈夫？何かあったの・・・っ？」

さとりは暗闇の中聞こえてくるその声が永琳のものであると、遅れて気づいた。

そして、先程と同じだ。

自分の眼の前に暗闇が広がっているのは、さとりが深く瞼を閉ざし

ているからに相違なかった。

遥か彼方で燐光を放つオルファンを眺めていた中、突如突き飛ばされるような力を受けたさとりは、そのまま昏睡してしまっていたらしい。

風に揉まれるように流されたその先がどこに通じていたのかは、こちらに呼び掛ける永琳の声を聞けばなんとなく分かった。

閉ざされた瞼をゆっくり開いていくと・・・やはり先程と同じだ。

暗闇の中に一筋の光が疾走し、それが太く膨張して闇を押し広げていく。

違うところは、その向こうに見えたのが、オルファンの成すスリットウェハーによる青い天井と、こちらの顔を伺う永琳の顔だったということだ。

やはり、ここはオルファンの最深部だ。

背中には、スリットウェハーの柔らかい感触があった。

もう、あまりにも明澄であった宇宙と星の輝きはその余韻すら残してはいない。

さとりの視界の中に映る永琳は、さとりの目覚めに安堵した様子だ。

そうして、こう呼び掛けてくる。

「突然脳梗塞にでもなったように倒れたものだから、驚いたわ・・・大丈夫？外見では身体に異変はないみたいだけど、神経がどうにかなっているかもしれない。さとりさん自身では、何か変になったとは感じませんか？」

「・・・・・はぁ・・・」

「自分の身体のことなんで、よく分かると思うんだけど・・・」

「・・・多分、何もなっていないと思います」

「そう・・・一応念のため、地霊殿に戻ったら簡単な検査だけはしときましょう」

永琳の言葉に、「はい」と返事しつつ、さとりは徐に上体を起こして、立ち上がろうとしていた。
永琳に対して言った通り、別段身体に異常が生じてはいない。
しかし、少しの間気を失い、身体の力が弛緩してしまったのか、地面に手をついて足を踏ん張りそのまま勢いよくすくっ、と立ち上がるが、急に足がふらついて前のめりに倒れそうになった。

が、すぐに永琳が抱き抱えるように支えてくれたので、そのまま地面に強かに顔をぶつけることはなかった。

「大丈夫?手を貸しましょう」
と耳元で聞こえる彼女の声には、
「ありがとうございます・・・一時のことですから、ひとりで大丈夫です」
と応える。
「そう?」
「はい。本当に・・・」

さとりの言葉は、遠慮や謙遜ではない。実際、先の一瞬だけ足から力が抜けただけで、もうふらつくようなことはないはずだった。
実際、永琳が抱き抱えた腕を離しても、さとりは確かにしっかりと地に足をついていた。

それを見て、さとりに対して心配は無用と感じた永琳は、次いでこう聞いてきた。

「オルファンとはどうでした?話はできた?」
「はい・・・オルファンは私に、自分の記憶の一端を見せてくださいました・・・この幻想郷にくるよりも前の・・・」

「それは・・・」
永琳もこの言葉には、さすがに少し驚いたようだ。
幻想郷にくる以前ということは、逆説的にオルファンがどういう理由で幻想郷に入ったのかということも分かるはずである。
が、別に青天の霹靂というほどに驚愕していたわけでもないのですぐに落ち着いて、また聞いてくる。

「対話は終わったようね。もう一度コンタクトするのは無理そう？」
「はい。今日のところは、話は終わりです。それでも大事なことは教えていただきました」
「なら、地底に戻りましょうか。魔法の森に行った者達も、そろそろ戻っているんじゃないかしら」
「そうですね。戻りましょう」

オルファンとの対話が終わった以上、さとり達は地底へと戻ることにした。
この最深部に入ってきた入り口からきた道を戻り、ブレンの下へいく。

ぽっかりと空いたスリットウェハーの穴へと近づき、先に穴をくぐり階段を降りていった永琳の背中を眼で追随しつつ自分も続けて穴をくぐろうとしたさとりは、その前に後ろを振り返り、オルファンの魂が宿っているといっても過言ではない最深部の様相を眼に入れ、そうして言った。

「いずれまた、お会いすることがあると思います・・・その時には、貴方の記憶をお見せするだけでなく、どうぞ私の記憶にも、その手

で触れてみてください・・・ご遠慮なさることは、ありませんから。貴方が望むのなら・・・」

そうしてもう一度前を向き、改めて穴をくぐり、永琳の後を追っていった。

階段を降りる途中、さとりはオルファンの記憶の一端を垣間見ることで得た新しい事実を、推測も交えて永琳に伝えた。

オルファンは少なくとも二体いて、その内の一体は幻想郷（こちら）のオルファンそのものだ。

そうしてこちらのオルファンは、もう一体のオルファンとも出逢っている。

そしてグランチャーというのは、そのもう一体のオルファンが生み出した抗体である。

オルファンは、幻想郷にくる以前から銀河を旅していたそうで、その当時は、銀河旅行をするだけの莫大なオーガニックエナジーが体内あったと考えられる。

そんな中で、自分とほとんど同じ姿のもう一体のオルファンと遭遇し、漠然とした不安に駆られ、戦いを始めた。

戦いの中で、オルファンの中にあったオーガニックエナジーは急速に失われ、自力で宇宙を航行することができなくなった。

結果オルファンは、もう一体のオルファンを巻き込みながら、慣性に任せて宇宙を遊泳し、さ迷うことになる。

生きているのか死んでいるのかも分からない状況に陥った末に、幻想郷へと迷い込んできたようだ。

その間、訳あってオルファンの肉体に張り付いてきたいくつかのグランチャーも、プレートの形となって共に幻想郷へと至ることにな

った。
と、考えられる。

詳しくは分からないが、幻想郷にきた後から、プレートはアンチボディとしてリバイバルしたのかもしれない。これもまた憶測だが。
それは、一度戦闘を始めた以上敵である、別種のアンチボディを撃破するためであり、胎内に他の生物・・・特に人間や妖怪を宿すのは、ひとつの理由としてその思考を戦いに利用するためだ。

が、アンチボディの目的と、胎内に他者を宿す理由は、また別にあった。
それは、ビープレートを得ることと、人間と妖怪の心を知りその原理を吸収することだ。
ビープレートは、おそらく（これも実際は憶測なのだが）無限大のオーガニックエナジーを生み出すことができるものだ。
再び銀河旅行を始めるために、これを必要としていたのだ。
あるいは、以前から銀河旅行をしている中でも探していたかもしれない。
アンチボディの性質を鑑（かんが）みるに、オルファンもおそらく、オーガニックエナジーを自己で生成するのは難しいだろう。
銀河を旅するなかで見つけた、自然豊かな・・・あるいは、地上の熱と硫黄を吸収したように仮のオーガニックエナジーを作れる材料のある星から、力を吸収して補いながら旅を続けていたとも考えられる。
生物がいるのなら、それらからも力を吸い取る。
もしかしたら、その生物に対しても、アンチボディのような形でエネルギーを吸収するための器があったのかもしれない。
さとり達幻想郷の住人としては人型の巨人となったように、その星の生物に合わせて形態を変えて。
そうやってプレートの状態から柔軟に生態系を変化させられるのが、

オルファンの抗体かもしれないのだ。

それはそれとして、オルファンには本来莫大な量のオーガニックエナジーが貯蓄されていたようだから、吸収するエネルギーの量も多くはないはず。

だから、星の生物を絶滅させるようなことにもならない。

もしかしたら、オーガニックエナジーの吸収もかなり離れた場所からでき、生物と接触する必要もなかったかもしれない。

しかし今回は、戦闘の中で全てのオーガニックエナジーを失い、その上で幻想郷にきた。

銀河旅行を続けるためには、失ったエネルギーを全て取り戻さなければならない。

だからこそ、幻想郷の全ての生物を滅ぼすか、ビープレートを見つけ出すしかないということなのだろう。

そして、アンチボディが胎内に生物を宿すもうひとつの理由は、人間と妖怪の持つ思考力を自分達のものとして取り入れるためであり、そのために必要な情報を採取するためだ。

その理由は、一度戦い、そして離ればなれになったもう一体のオルファンといずれ再び出逢った時、今度は戦うことなく対話に励むためだと思える。

そのために、グランチャーと戦う中においてもブレンは、宿主との交流を止めない。

一度確執を生んでしまった以上、そう簡単にグランチャーと和解することはできないし、戦いを止めることも無理だ。

それでも最後の最後には、互いに理解し合う時が来るのを待っている。

さとりはそう信じた。

永琳としてはある程度なら考えが及んでいたところもあるが、それでもさとりの説明は、驚くべきものであった。
魔理沙達が聞けば、腰を抜かすかもしれない。

なんせ、オルファンがもう一体いるというのだから。
この幻想郷ではないが・・・

生物である以上、オルファンにだって同種がいることは大いにあり得る。
しかしいざ、あの金色に輝く山岳のごときオルファンがひとつの種族として確立しているという事実を実感すれば、さすがに永琳も圧倒されるような気分だった。
しかしそれが逆に、今回の異変でオルファンが成そうとしていること、この幻想郷で成すべきことの、確信に近づくことができたと感じさせた。
結局はまだ多分に憶測を孕んでいるとはいえ、オルファンのために、こちらが何をすべきなのかも・・・

今回のことで、異変の解決が、大なり小なり近づいた。
永琳は、そう導いてくれた当人であると言えるさとりに対して、素直に感謝の意を表した。

「よく、オルファンの心を開き、その言葉を聞いてくれました・・・さすがはさとりさんね」

さとりの能力、そして、忌み嫌われている彼女の身の上を踏まえて敬意を抱く永琳に対して、さとりは相変わらず謙遜した。

「永琳さんにお褒めいただくほどのことでは・・・」
「ふ・・・」

含み笑いをする永琳だったが、その一方で彼女には別に考えていることがあった。
その思考は、もちろんさとりにも知れている。

今回分かったことにより、ブレンとグランチャーが互いに戦う理由も仮定できた。
そして、両者の戦いを止めることは、少なくとも現状では望めない。
互いの不安に端を発するこの戦いは、今は不可避のものである。

もちろん、止める方法はある。
これもあくまでもしかしたらの話であるが、ブレンとグランチャーの中にある不安をどうにかして取り払い、理解できると確信させることで、戦いは終わるのではないか？
しかしそれ即ち、両者の不安が消えない限り、戦いは続くということだ。
アンチボディが争い、生命を失う現状は。

そしてその事実がまた、さとりに対して覚悟を強いる。

話をしている内に、いつの間にか階段は全て降りていた。
そこからは、あと少しだけ歩けばサトリブレンの姿が見えてくる。

母なるオルファンの体内で落ち着いていたからだろうか。
火傷の痕が、目に見えるか見えないかぐらいに微かだが、なくなっていた。

完治には十日以上はかかりそうだと思っていたが、これならあともう二、三日で、充分動けるだけになりそうだ。
とはいえ傷は多少残るし、すぐ戦うことに気が引けるが・・・

一定の明度があるオルファンの体内においても、薄暗い影が落ち先が見えなかった通路の先から、ようやく姿を現したブレンへと、その足下にまで歩み寄ったさとりは、彼の者の爪先の装甲を撫でながら呼び掛けた。

「用事は終わったわ・・・貴方はまだここにいたい？」

その声に、ブレンは小さくぶるぶると鳴いて応えた。

オルファンの体内は気持ちがいい。
だがまだ、ずっとここに居続けることはできない。
それに、居心地がいいというのなら、さとりと一緒にいることの方がそう言えた。

それを聞いて笑みを浮かべたさとりは、その場から数歩後ずさりしてブレンが鎮座するのを待ち、彼の者がしゃがみこむと同時に下ろされた装甲に飛びのって、そのまま胎内へと入っていった。
続けて、ブレンは右手のひらを足場に置いて、地霊殿から出た時と同じように永琳をその上へと乗せた。
そうしてスリットウェハーに背中を預けたさとりは、ブレンが永琳の身体を落とさないように両手を合わせてすくうような形にするまで待った。
それが済めば、後はここから飛び立ち、地霊殿へと戻るだけだ。

魔理沙達には、きっと心配をかけてしまっているだろう。
まずは、勝手な行動を謝罪するべきか・・・（そんなことをいえば、魔理沙達の行動だって勝手だが）
そうしてその後、彼女たちにも、さとりが今回オルファンから教えられたことを伝えるのだ。

それと共に、皆でグランチャーと戦う覚悟・・・戦った先に、彼らに対して何かをもたらす覚悟を決めなければならない。
このアンチボディ同士の、いや、オルファン同士の戦いの中において、さとり達人妖が持つ意味は、畏怖するほどに大きかった。

しかし、魔理沙達のことを考えるのはこの一時だけのことであった。
次いでさとりの思考は、ブレンに対するものへと屈託する。

もしかしたら、自分が彼の者・・・ブレンパワードの歩む未来を決定することになるかもしれないのだ。
もしそうだというのならば・・・自分が望むことで、ブレンがその通りの未来を歩むというのなら・・・さとりはただ、彼の者が生き、グランチャーという、根元は同じだが、だからこそ全く違う枝分かれをしているアンチボディと仲良くなってくれること、そしてビープレートを手にし、再びオルファンに乗せられ銀河旅行をすることを望む。

だがそのためには、ブレンが、そしてグランチャー、オルファンが持つ不安を取り払う必要がある。
そしてそのためには、さとり達が、ブレンを導いていくための意志を高めなければならないのだ。

戦う意志と、戦いの中においても何かを見つけ出す意志を。

さとりは、スリットウェハーの柔らかい感触に身を委ねつつその場に座り込み、そして首を少し上の方にもたげて、ぼんやりと宙を見つめた。

ブレンがゆっくりと身体を浮き上がらせ躍動し始める中、彼女の静かな声が、温かさと安寧に満ちた空間の中に、小さく響いた。

「・・・グランチャーと戦う。しかも、その先にある銀河の果てへと、彼らをみんな連れていってあげる・・・・・・そんなことが私達・・・いえ・・・私なんかに、できるのかな・・・」

その答えは、この身を包み込むブレンの温もりと、オルファンから感じる寂漠の念・・・

そして、そんなオルファンに対して、手をさしのべてみたいと思う自分自身の心が、教えてくれるような気がした。

そうして今のさとりには、分かっていなかった。

この幻想郷にて起こるアンチボディの戦い・・・その奥底にあるものが、彼らの不安だけではないということを。

この戦いは最早、ありとあらゆる意味において、彼らだけのものではなくなっていた・・・

第十四話『砕け散る誇り』　その１

突然地霊殿に訪れた美鈴が、同じくあまりに突然言い放ってきた言葉。
魔理沙はそれに、すぐさま明確な反応を示すことができないでいた。
驚愕に強張った表情のまま、しばらくの間黙り込んでいるしかなかった。

魔理沙と共に美鈴の言葉を聞いた霊夢と輝夜も、訳がわからないといった具合に互いの顔をちらりと見合わせていた。
文の方は、ここに連れてくる間に話を聞かされたのか、特別戸惑っている様子はない。

魔理沙はしばらくしてようやく言葉を発することができた訳だが、その言葉というのが、このようなものだった。

「あんたらのいる、紅魔館のグランチャーを倒せって・・・あんた、グランチャーに対して思い入れとかはないのか？」

美鈴はそれに、固い口調で応える。
「そんなことはどうでもいいでしょうっ・・・貴方達の駆るブレンパワードは、グランチャーと戦うために生きているんでしょうが」
「・・・・・・」

どういう理由かは分からないが、この美鈴はグランチャーに対してかなりの怨みを抱いているらしい。
険しい口調と、鋭利に細められた眼がそれを示していた。

美鈴がこちらに対して言ってきた言葉は分かる。

グランチャーを撃破することは、確かにブレンだって望んでいることだし、そのためだけに生きているとは考えたくないしそう言われるのは癪だが、グランチャーと戦うことも、確かにブレンの目的のひとつであるのには違いないと思う。

別に、この美鈴の希望を聞き入れ紅魔館のグランチャーを撃破することには、構いはしない。
しかし美鈴のこのただならぬ雰囲気と、そして今の現状を慮ると、魔理沙の脳裏にもやもやとした猜疑心のようなものが湧き出てくる。
猜疑心は違うかもしれないが、そういうのとよく似た、居心地の悪い感覚だ。

それを代弁するかのように、霊夢が美鈴に対して言った。

「あんたが何を考えて何を言おうとねぇ、そりゃ、私達だってあの・・・えー・・・咲夜のグランチャーでしょ？あのグランチャーとは(けり)をつけておくべきだとは思ってるわ・・・ただねぇ、今すぐという訳にはいかないわよ」

その声に引き寄せられるように、魔理沙が続いた。
「そうだな。あたし達は、今しがたその咲夜のグランチャーと事を起こしてきたところなんだ・・・草臥(くたび)れて体力も使い果たしたけど、撃破することはできなかった。そう簡単にやっつけられないから、あたし達だってあいつらには手を焼いてたんだ」

美鈴はただ黙って、まるでこちらまで目の敵にしているような目付きで睨んでくる。
普段は気さくな妖怪であるはずの美鈴だが、今回ばかりは近づく者全てに吠えて飛びかかる狂った番犬を思わせた。

一体何故これほどの顔ができてしまうのか疑問に感じつつも、魔理沙はさらに続ける。

「向こうもかなり戦力を整えてきている・・・そいつら全部と真っ正面から総当たりでぶつかったって、勝てる見込みは五分五分だ。せめて、咲夜のグランチャーと他のやつをすっぱり切り離して、集中攻撃できる状況にしなくちゃいけないんだぜ」
自分のこの発言も、グランチャー側すれば非情な発想だな、などとうっすらと感じる魔理沙だったが、そんな感情はすぐさま、嵐に揉まれるように掻き消された。

「そんなことは分かってるんですよぉぉっ！」

またしてもあまりに突然の、爆発するような美鈴の叫び。
不意打ち気味に耳朶をうち叩いたその声に魔理沙も霊夢も、皆一様に、びくっと身震いするほどに驚いた。

肩に力が入り口を真一文字につぐみ、喉を鳴らして生唾を嚥下（えんげ）した魔理沙に対し美鈴は、怒鳴ることこそないが、低い唸りのような声で言ってきた。

「あんた達は知らないんでしょうがねぇ。咲夜さんのグランチャーとそれ以外の奴らは、別々のところにいるんです。紅魔館には咲夜さんの駆るグランチャーだけしかいません。他はもっと離れた場所

に潜伏しているはずなんです・・・奇襲を仕掛ければ、両者を切り離した状態で戦うことだって、可能なはずです」

それは初耳だった。

咲夜と他の者達が別々の場所に潜伏しているのなら、確かに咲夜だけを相手にして戦うことはできるかもしれない。

が・・・

魔理沙はまた美鈴に対し言い返した。

「確かに奇襲は成功するかもしれないが、咲夜に逃げられたら、結局仲間と合流される。そうなれば、やっぱり勝つのは難しい・・・そのどこか別のところにいるっていうグランチャーをどうにかして釘付けにして、咲夜の方も逃げる間もなく撃破しないといけないぜ」

「分かってるといってるでしょっ・・・その方法だって考えてます」

かくいう美鈴であるが、その後彼女の中にあるという方法を実際に口にしない辺り、この発言はただの出任せであると分かった。

グランチャーは・・・その中でも特に強力な咲夜の駆る個体は、今の内に倒しておかないと後々大変になりそうだ。

逆に言えば、彼女のグランチャーを今の内にどうにかできれば、こちらの置かれる状況も改善できるかもしれない。

単純に戦局的な眼で考えればだ。

だからこそ、美鈴がこれほど荒々しい顔になるのに理由があるのなら、それを汲み取って彼女の申し出を受け入れたいところでもあった。

しかし、正面からあの者達と戦えばこちらが逆にやられてしまうと

いう懸念がある以上、魔理沙達としては、二つ返事で美鈴に賛同する訳にはいかなかった。
それに、今はもう天高く昇った日が西の空へと傾きかけている時分だ。
今から事を起こしたのでは遅すぎるし、何よりブレン達の体力のことを考えなければならない。

やむを得ず魔理沙は、今のところはこう応えることにした。

「残念だけど、今日のところはどうにもできないぜ・・・咲夜のグランチャーだけを相手にする方法も思い付かない間は、どうしても戦う気にならないんだ」
「臆病なっ・・・そんなんじゃいつまで経っても戦えないじゃないのさ」
「まぁ、そういうなよ・・・あたし達だって、いずれはグランチャーを何とかしなくちゃいけないことぐらい分かってる。それでも悪いんだが、今日だけは一旦帰って欲しいんだぜ・・・あんた、館でやらないといけない仕事があるんだろ?それをほっぽり出してここに来たんだ。早く帰ったらどうなんだ?向こう奴らも心配してるはずだぜ」

別に美鈴が鬱陶しいという訳でなく、今のところやれることがないため彼女にここにいてもらう意味もまたなく、だからこそひとまずお引き取り願おうと考えた。
そういう意味合いの魔理沙の言葉であったが、これを聞いてもなお、美鈴の眼にて輝く光彩の奥底に宿る黒々とした感情が、和らぐことはなかった。

「そうはいかない・・・多分私にはもう、館に戻る権利などないのかもしれない」

「・・・はぁ？」
美鈴の固い声に、魔理沙は思わず頓狂な声と共に疑問符を脳裏で浮かべてしまった。
ただでさえ何か得体の知れない雰囲気を醸し出す美鈴がさらにこんなことを言ってしまうと、混乱で脳味噌が頭蓋の中でぐるぐる回るような感覚さえ受けてしまう。

「どういうことだ？」

そう疑問を口にした魔理沙だったが、その次の瞬間、脳裏にふと、また別の疑問が浮かび上がってきた。

そもそも美鈴は何故ここまで怒りを露にしてグランチャーの撃破を頼んでくるのだろう。
紅魔館に住む者は皆、同じようにグランチャーに敵意を示しているのか？

いや、そうではないだろう。
もしそうなら、そもそも咲夜がグランチャーに乗ってこちらと戦いはしないはずだ。

まさか？

魔理沙は、頭の中でも導き出された結論を、すぐさま美鈴に向けて伝えた。

「そういえば美鈴・・・紅魔館のみんなはあんたと同じように、グランチャーをやっちゃおうって考えてるのか？」
つまり、グランチャーを倒そうなどと考えているのは、美鈴だけで

はないのか？ということだ。

彼女は、眼の鋭さはそのままながら、この時だけは気弱そうな表情を浮かべ、少し俯き気味になり首を横に数度振った。

そうして、嫌々するように首を振るのを止めてもなお俯き気味のまま、苦々しく吐き捨てる。

「だからですよ・・・」

そうして、気を取り直すように、眼の鋭さは少し和らげつつも先程のような険しい顔つきで正面を向き直し、続けて言う。

「お嬢様やパチュリー様などは、グランチャーのことを嫌ってはいません・・・むしろ好いているほどです。グランチャーの性格は非常に誇りを重んずるものであるようで、その心は私にだって認められるんです・・・いい性格なんですよ」

「だったら・・・」

魔理沙は、ますます美鈴がグランチャーを撃破しようとするのが理解できなかった。

グランチャーを敵とするブレンに乗り、実際に彼の者達と戦っている立場にある魔理沙としてはおかしなことであるが・・・

とはいえ魔理沙だって、グランチャーのことはあくまでもひとつの生物として認めようとする気持ちはある。

ブレンだって、きっと同じだろう。

ただ本能的に、ＤＮＡとも言うべき領域にグランチャーを敵として認識するよう何かが刻みつけられているから、それに従い止むを得ず戦うだけだ。

いうなれば、動物的な感覚・・・さらに言えば、運命的なものに従って。

だから、グランチャーの存在にもそれに関わる者達の存在にも、本能的な恐怖や嫌悪感は感じつつも、それら全てを真っ向から否定す

る気持ちはない。

例えば、妹紅とかもそうだ。

魔理沙達がブレンに対しそう感じているのと同じように、グランチャーに関わっている者達はその者なりに彼の者を信頼しているのだろう。

彼女は以前グランチャーのブレンに対する敵対心に感化されていたが、その理由事態ははっきりしておらず、身体の奥底から湧き出るような、本能的で概念的な敵対心だった。

さて、だとして何故美鈴は、自分達の館に居座っているグランチャーに対し、こうも明確に嫌悪感を現すのか・・・

そういえば、慧音があることを言っていたのを、魔理沙は思い出した。

彼女が、妹紅のグランチャーと出逢って間もないころの話だ。

彼女は、一時はグランチャーに対し多大な警戒心を持っていた。

今はそれも薄まってきているが。

そもそもその警戒心の源は、グランチャーが妹紅の中にある感情を呼び起こし、私怨の戦いに駆り立てたからだ。それをブレンとの戦いに利用するために。

だから、妹紅が眼に見えて豹変していくのを見るに耐えられず、その状況を呼び起こしたグランチャーに対し怨みを抱いた。

その当時の彼女の気持ちは、もしかしたら今の美鈴の腹の底と同じようなものではないのか？

もし、グランチャーが妹紅の感情を利用せず、あくまでも本能に従い実直に・・・戦うことにこういう表現をするのはどうかと思うが、とにかく実直に戦えば、二人は今以上にグランチャーの事を認めていたのではないだろうか・・・

もしかしたら・・・
魔理沙は、美鈴の心が発するこの険しい感情の原因に見当がついたように感じた。

それを余所に、美鈴は言葉を続ける。

「だけど・・・あんた達と協力している天狗が、新聞を発行していたでしょ・・・あれに書いていた通りに、グランチャーは人妖の心を変える性質を持っていた。それで、グランチャーに乗り込んだ咲夜さんが、少しずつ変わっていったんです・・・どこがどう変わっているのかはっきりは言えないけど、私には分かる。咲夜さんは変わってしまった」

今度は霊夢が、魔理沙に代わって言う。
「なるほどねぇ・・・で、その咲夜を元に戻すために、グランチャーをやれって？」
「そうです・・・咲夜さんの変化は、さっきも言った通り、はっきりしたものじゃありません。少なくとも、表向きは何も変わっていないように見えます。ただ、それでもお嬢様方があの人の変化に気づかないわけがありません・・・それでも、問題視をしていないんです。気づかないほどにささやかな変化だし、迷惑がかかっていないから大丈夫だと思っているんでしょう・・・ですけど私には・・・」

今度は石ころ帽子を被ったように会話に加わっていなかった輝夜が、狙い澄ましたように返した。
「このままだと、大変なことになると考えたわけね」

そう言いながら、輝夜はあることを想起していた。
魔理沙や霊夢。輝夜以上に蚊帳の外状態であった文も、皆一様に、彼女と似たようなことを思い出していた。

輝夜が、カグヤブレンと共に妹紅のグランチャーと戦った日のこと。
魔理沙達は、輝夜と妹紅からその時の様子を聞かされたことを。

妹紅のオーガニックエナジーを一気に吸収したグランチャーは、体内に蓄積できるエネルギーの容量が超えたことにより、突然変異的にスリットウェハーの膨張を起こした。
そして妹紅は、胎内からせり出してきた金属質の柱のような物体に身体を押しつぶされた。
心臓が潰されたというのだから、人間なら即死の事態である。

輝夜は、ブレンの攻撃により股間周りの装甲が砕け露わになったグランチャーの胎内から僅かに顔を見せる妹紅の、その弱々しい姿を、未だによく思い出すことができた。

大変なことというのは、つまりそういうことだ。
咲夜があれと同じようなことになるかもしれない、ということを言っているのだろう。
美鈴の方は、妹紅の時の例など知るよしもないから、あくまで漠然とした感覚だろうが、魔理沙達にとってはその漠然とした感覚が、明確なビジョンとして現実味を帯びて認識できる気分だった。

つまり美鈴が根本的に言いたいこと。
それは、霊夢が次に語るような事だった。
「その大変なことになる前に、咲夜を助けなきゃいけないってことね？」

「そういうことなら、グランチャーを粉々に爆発させちゃ駄目だな。咲夜も死んでしまう・・・爆発せず、極力形を保った状態で生命だけ奪うのか・・・咲夜が乗っていない時を狙って、一撃でやっちゃうか？」
魔理沙の声に、美鈴は軽く頷く。
それを見て魔理沙は、いっそ呆れたように息を吐き捨てながら、続けた。
「つまり、手加減をして勝てってことじゃないか。あるいは見つかって警戒されるよりも前に殺すんですか？・・・そんなの益々難しいぜ・・・尚の事しっかりと作戦を練らなきゃ、とてもじゃないが動けないぜ・・・・・それになぁ、美鈴、あんた・・・」

「・・・なに？」
「あんたはあたし達に、グランチャーをリンチして、しかも半殺しにしろといってるようなものだ。あるいは不意打ちして、敵がいることにも気付かないで犬死にさせろ、だぜ？・・・それでも、そうしなきゃ勝てない以上それも仕方ないけど・・・紅魔館の連中は、そのグランチャーのこと好きだそうじゃないか。さっきも似たようなこと聞いたけどな、あんた、死んでいくグランチャーや、館のみんなに申し訳ないとは思ってるか？」

魔理沙だって、オルファンの望みを叶えてやるために、容赦ない行いをする覚悟はできているつもりだったが、それでも、それなりの情というものは感じてしまうだろう。
グランチャーを殺めることへの罪悪感だって感じるはずだ。

現に彼女は今日、その罪悪感と冷酷さの間で悩み、涙まで流したのだ。
それほどの思いを、美鈴は持っているのか？
そういう感情を込めた言葉だった。

そして、それに対し美鈴は、眉根を一度だけぴくりと痙攣させると、またしても俯き気味になった。
うっすらと影が落ちる中から覗く、より一層険しく細められた眼の奥には、彼女にもまた彼女なりの覚悟があるのが見受けられたような気がした。
そして、微かに震える口で吐き出されたその言葉からも。

「・・・私のやってることは、館の皆様に対する、反逆行為とも言える、と思う・・・このことが知られれば、私だってこの先生かしてもらえるかどうか・・・それでも私はあのグランチャーを止めて、咲夜さんを元のあの人に戻してあげたい・・・そのためにはあんたら・・・いや、貴方方のお力が必要なのです。どうか、お願いですから・・・」

そう言いながら、佇立したままだった美鈴の身体が徐に動きだし、彼女はその場でしゃがみこもうとした。
その後一体何をするのか魔理沙には見当がついたため、膝を折り曲げる美鈴をすぐさま抱きかかえるようにして、無理にでも引き起こす。

「まぁまぁ・・・何もそこまでやることはないぜ」

「・・・・・・」

美鈴はこういう気になると、そう簡単にこちらの言うことを聞かなくなるような気質があるのだろうか。

魔理沙の声を聞き、しゃがみこもうとした身体を力無くその腕に預けた美鈴の顔に、納得の色はなかった。

聞こえないかもしれないほどに微かな声で、彼女が吐き捨てるのが聞こえる。

「わ・・・私は悪魔だ・・・」

「・・・・・・」

美鈴は頑固者の上、どこか考えすぎる・・・過剰な言い方をすれば破滅型の性格をしているらしいということは、魔理沙も知っていた。

引き起こして、直立する姿勢に戻した美鈴の身体から手を離した魔理沙は、次いで半分は苦笑いが混じったような笑顔を浮かべて、言った。

「まぁ、そこまでされたんじゃ、仕方ない・・・紅魔館に帰れないなら、しばらく地霊殿の方にいればいい。館の連中からおしおきを受けるってんなら、いっそここに住んじゃえばどうだ？」

地霊殿の主人であるさとりがこの場にいないというのにこういうことを言うのは少し非常識であるかもしれないが、魔理沙はもちろん、この場にいるほとんどの者は、こういうことに気が回るほど所謂(いわゆる)人間がよくできた者ではなかった。

ただ、美鈴の方はちゃんとその辺りのことも考えているらしく、心境も落ち着いてきたのか、険しい表情をようやく見えないようにして、応えた。

「だったら、まずこの屋敷の主人に挨拶をして、許可を頂かないと・・・」

が、それには文が、けたけた笑いながら返す。
「あやややや。今さら許可なんて。ここは、押し掛ければそのまま勝手に住まわせてくれるような、家なき子の掃き口みたいな場所なんですよぉ。何にも言わずに、我が物顔でいればそれでいいんですって～」

さとりが聞けばさすがに本気で怒りそうな発言であるが、残念なことに、やはりこの場にいるほとんどの者が文と同じことを考えていた。

が、当然と言うべきか、この発言も、美鈴は『はいそうですか』と聞き入れることはできなかった。
彼女は、他者への謙遜には殊更頑固で、ある意味では奴隷根性があるとも言えた。

彼女は、ようやく彼女らしさが戻ってきたと思える、怨嵯とはまた別の堅苦しい口調で応えた。
「そうはいきませんっ。すぐに主人の方と・・・え～、古明地　さとりさんでしたっけ?その方と話はつけてきます」

が、それに今度は霊夢が気だるそうに返す。
「いや、そもそも今さとりは外に出てった後なのよ。話をつけるったって無理でしょ」
「ならっ、帰ってくるまでお待ちします」

かく言いつつ、美鈴はその場で腕組みし、仁王立ちになった。
どうやらこの場でさとりの帰りを待つつもりらしい。
そりゃ、多分彼女ももうしばらくすれば帰ってくるかもしれないが、わざわざここで待つことはないだろう。

しかしまぁ、逆にここで待っていてはいけないという訳でもない。別に迷惑ということもないし、この際好きにさせてやるか・・・

とりあえず魔理沙は、美鈴のことはこのまま放っておくとして、こうとだけ伝えておいた。

「もっかい言うけど、あたし達だってグランチャーとは決着をつけるつもりだ。どうにか方法を考えておくから、いずれあんたの望みも叶えてやるぜ・・・・・・けど、あたし達に頼りっきりにはなるなよ。あんたもあんたなりに考えるんだぜ？」

「分かってます」

美鈴の返事を聞いた魔理沙は、もうひとつ重要な問題があるのを思い出していた。

思い出すというか、頭の中にはずっとあったのだが、美鈴の話を聞かなければならないので表立って出てこなかっただけだ。

実際は、美鈴が何やらどうのこうの言っていること以上に（こんなことを言うと美鈴に失礼だが）、いち早く対処しておく問題だったのだ。

魔理沙は、美鈴のことはとりあえず無視することにして、改まった態度で文に対して語りかけていた。

「それより射命丸。話すのが大分遅くなったが、ちょっと大変な事態になったんだぜ」

藪から棒と言った感じの魔理沙の声に、何事だといった様子で、

「はい？」

と聞き返す文。
その一方で霊夢と輝夜は、魔理沙のこの突然の言葉にも別に驚いたり戸惑ったりはしていないようだった。
それもそのはずで、二人には魔理沙の言うちょっと大変な事態というのが何なのか、大体分かっていたからだ。
ただ一人魔法の森で発生した事態のことを知らない文に対し、魔理沙は言った。

「魔法の森での戦いのことなんだがな。グランチャーは三体いたんだが、その内のひとつに乗っていたのが、早苗だったんだぜ」

「・・・んえぇっ!?」
「なんだよそれーっ?」

さすがの文も、これには目に見えてびっくりした。
本当の意味で完全にいない扱いになりつつあったにとりも、思い出したように大声で驚いていた。

数日前忽然と地底から姿を消し、守矢神社へと戻っていた早苗。
余りに突飛な行動に、何か裏がありそうだとは疑っていたが、まさかグランチャーに乗っていたとは・・・

もしかしたら早苗は初めから、グランチャーに乗るつもりで地底から離れていったのか？
そもそも彼女が地底に来てブレンと関わっていたこと自体も、何か裏・・・野心があるのかもしれない。
予想していたことが、現実のものとなったわけか。
なんせよ、この事態を楽観視して、早苗がグランチャーに乗ったんなら、まぁそれでもいいや、などと結論付けられるわけがない。

早苗には、ひいては彼女の裏にいる者達が、何も考えていないわけがないのだ。
そしてその何らかの考えが、こちらに対して何の不利益も与えない、ということもまたあり得ないだろう。

文は、驚愕しつつも肩をすくめて、言った。
「そんなことがあるなら、早く言って下さいよぉ～」
「言おうと思ってたんだけど、あんたが美鈴を連れてくるからな」
「・・・まぁとにかく、早苗さんがグランチャーに乗っているというのなら、その真意ぐらいは問いただないといけませんね・・・すぐにでも守矢神社に向かってみましょう」
「いや、その前に、いろいろ言いたいこともあるしな・・・美鈴のことも含めてな。だから、一度みんなで集まって話し合ってみた方がよさそうだ・・・それから神社に行って話をつけてきてくれ」
「分かりました」

魔理沙と文の会話に、霊夢が割って入る。
「そんじゃ、みんなを集めてきましょうか・・・そんで、あいつはどうする？さとりもまだ戻ってないけど」
そういいながら、親指で美鈴の方をくいっくいっ、と指す。
魔理沙はすぐに応えた。
「美鈴はもうほっとこう。ずっとそこで待たせときゃいいんだ」

「そうさせて頂きます」
どうやら今までの話が全て聞こえていたらしく、美鈴の返事が聞こえてきた。
魔理沙は苦笑いしつつ、
「な？・・・さとりが戻ってきた時は、また一からあいつにも説明すればいい」
と吐き捨てた。

「なるほどねぇ・・・んじゃ、いきましょうか」

霊夢の声を最後に会話は終わり、魔理沙達はこぞって地霊殿の屋敷に繋がるドアの方へと歩いていった。

彼女らにほったらかしにされ、ただその場で仁王立ちしていた美鈴はぴくりと動かないまま、去っていく魔理沙達の背中に眼だけを向けて見送った。

彼女の眼に見える者達は、その全てが本来地霊殿にいるわけがない妖怪であるはずだ。
それが今、この地底の・・・故なければ誰も寄りつかないような屋敷に、当然のようにいる。
それは何故か？

魔理沙達が、戸を開けてその向こう側へと入り見えなくなったため、美鈴はただじっと、外出中であるというさとりが戻ってくるのをこの場で待つために、目線を正面に向け直しつつ、その理由をふと考えた。

が、その答えは簡単だった。
偶然にもブレンに乗り込んだ者達が、結束してこの場に集まっているのだ。
ただそれだけのこと。
そして、それだけだからこそ意味のあること。

美鈴は、去っていく魔理沙達の様子から、確かな繋がりの強さがあるように感じた。

表向きは、なんてことない、のんびりとした様子だったが・・・その奥底から、微かに熱を帯びたものを感じた。ような気がする。

絆・・・とまでは言えないかもしれないが、それによく似た何かを。

同じ境遇にあって、同じ目的のために助け合うだけの信頼関係とでも呼べるものを。

咲夜達・・・グランチャーを駆る者には、それがあるか？

・・・ない、とは言い切れないだろう。

だが、魔理沙達から感じられたような、信頼する、という意味合いでの繋がりは、やはりないように思えた。

実際のところ美鈴は、早苗の姿も、藍の姿も身近では見ていないし、ましてや幽香がグランチャーに乗っていることなどは実は知らない。

だから、実際彼女らが共にグランチャーを駆る仲間をどう思っているかなど知らない。

しかしそれがなおさら、グランチャーに乗る者達の間の、絆の弱さを思わせるのだ。

勿論そこには、美鈴の個人的なグランチャーへの恨みとか不信感も影響していた。

そうして、咲夜をそのグランチャーの絆からどうにかして抜けださせようとする意思も。

結局今の美鈴の思考のほとんどは、グランチャーに対する敵意と、咲夜を彼の者から解放しようという結論へと結びついてしまっていた。

彼女がやろうとしていることが、本当に咲夜を解放することに繋がるのかも、分かっていないのに。

まして、この行動の結果紅魔館に住む者達全ての不満を招き、最悪自らが抹殺されることを分かっていて、その上で覚悟を決めているというのに、

美鈴には、不満を感じるということが即ち、咲夜にとってグランチャーと別れることが決して幸福ではないということに結び付くのだという簡単なことさえ、理解できていなかった。

第十四話　その2

オルファンとの対話を終え、さとりと永琳を乗せたブレンは、皆の待つ地霊殿へ戻るために地底へと降下していた。
抜け穴をくぐる直前、空に燦々と輝く太陽が、西の地の果てを目指してゆっくりと進みつつあるのが見えた。
日暮れを感じさせる動き・・・空が紅く染まるその兆しである。

さて、こうやって地上と地底を行き来している中で、何度もブレンは旧都の上空を通っていたわけだが、最初のころは地底の妖怪達も、ブレンの姿に多少は驚くなり好奇な眼を向けるなりしていたのだが、最近はそれほどでもなくなっていた。
ただその代わりに、頭上を通り過ぎているブレンの姿に指を差したり、手を振ったりする妖怪の姿が、何度かさとりの眼にも見えた。
上空を飛んでいるわけだから、大分目下に小さく見えるだけだが。

そうして、旧都の建物の合間から指差してきたり、あるいは好意と共に手を振ってきたりするそういった妖怪達の中に、ヤマメやパルスィもいた。

抜け穴を出て旧都に入る前、相変わらず近くの不整地（？）でキス

メと一緒にいたヤマメが、こちらに手を振ってくるのは、殊更よく見えた。
キスメは、いつものように桶の中にすっぽり身体を入れていたのだが、手を振る代わりに桶ごとぴょんぴょん飛び跳ねながら笑顔を見せていた。
旧都に入ってからも、パルスィが、相変わらず彼女らしい何かが無性に残念そうな顔を浮かべて、手を振る、というより、軽く上げて存在を示すようにしていた。
それからまた少しすると、勇儀が今度は逆に腕は愚か上半身諸共勢いよくブンブンと振り回していたので、思わず笑いそうになった。

彼女らは、皆このオルファンの異変にかなり初期のころから関わっている。
勇儀などは、今も河童の調査隊の教官のような役割も負っていた。
が、ヤマメ達も魔理沙や文のように地霊殿に居候させ・・・いうなれば閉じ込めておくわけにはいかなかった。
なんせ彼女らは、外の住人と違い、この地底にだって住む場所があるし、わざわざ地霊殿に居させてもらう理由など何もないからだ。
それに、ヤマメ達がブレンと関わるのはあくまでも彼女らなりの自由だ。
いうなれば彼女らが、早苗のようにすっかりブレンと疎遠になってしまいにはグランチャーに乗り込むようなことになったって、それは批難できないものだった。それもまた自由だからだ。
なのでさとりはあくまでも、遊びにくる感覚で地霊殿にやってくるヤマメ達を、等しく気楽にもてなしているだけだった。

そういえば最近・・・といっても本当にここ最近の二、三日のことだが、彼女らはあまり地霊殿に来ていない。
ちょうどその、ほんの二、三日の間に、状況は大分大きく、激しく動き始めていた。

戦いに身を投じざるを得なくなったブレンの境遇を知れば、彼女達はどう思うか。

そんなことを考えている内に、眼下に見える建物の数が段々と疎らになっていき、賑やかだった旧都の街のその果てへと、ブレンは至っていた。

それからもうしばらくすれば、地霊殿が見えてくる。
真っ直ぐにその、主人であるさとりでも少し不気味だなと思える外観の屋敷の上へと、ブレンを移動させ、屋根を跳び越えさせる。
そうしてサトリブレンは、すでに帰還していたマリサブレン達が待つ中庭の上空へと到達した。

「やっぱり、もう戻ってきていたのね」
三体のブレンが、何事もなかったかのように、いつもの様子で中庭の中で佇立しているのが見える。
ブレンがここにいて、魔理沙達が帰ってきていないわけがなかった。
すぐにでも、オルファンの過去を垣間見ることで得た（憶測込みの）事実を、伝えておかないといけない。

ゆっくりとブレンを地面へ向けて降下させようとするさとりだったが、その直前何かに気づいて、ブレンの動きを一旦止めさせた。
中庭の真ん中にぽつんと、ふたつの人影があったからだ。

「誰かしら。あれ・・・」

ふたつの内のひとつは、見知った姿ではない。初めて見る者だ。
どうやら妖怪であるらしい。

腕組みをして仁王立ちし、顔を上げて真っ直ぐにこちらを見つめながら、口を小さく開けてぽかんとしている。
それでも、眼つきだけはどこか鋭かったのが、おかしいほどに薄気味悪かった。

その妖怪の隣にはお空もいた。
もうひとつの人影というのが、他でもないこのお空だった。
こちらに向かって笑顔を見せて、両腕を大きく振っている。
すぐ隣にいる妖怪に対しては、特別警戒している様子ではなかった。

「何か用があって来たのかしら・・・主人である私がいないから、ここで待っていた・・・・・・それなら、申し訳ないことをしたけど・・・」

さとりの考えは、正解だった。
実際眼下に見える妖怪は、用があってここに来たのだし、そのために・・・ではないが、さとりのことをこの中庭でずっと待っていた。
もっとも、一体何の用があるかなどは、さとりにはどうあっても分からないが。

お空は、皆を集めて話し合いをすることになった魔理沙達から、『どうせ聞いても無駄だし、さとりが戻ってきた時に連れてきてくれ』といった具合に頼まれていたので、ここにいた。

何にせよ、この妖怪がこの地霊殿にいることは間違いなく確かなことだし、あの者が一体誰で、何でここにいるのかも、実際に話をすれば分かることだった。
逆に言えば、話をしなければ、そんなもの永遠に分からないままだ。

さっさと対面してしまおう。

ただ・・・

「ブレン・・・あの妖怪が何だか怖いって?・・・・・・確かに、ちょっとだけ怖いかもしれない」

さとりと共に、眼下に立つ妖怪の姿を見ていたブレンは、何か得体のしれないものを感じて、無意識的に恐れを抱いていた。

さとりもまた、何十mか下、どうにか詳しい恰好が分かる程度に微かに見えているその妖怪から、言いようのない感情を読み取っていた。

さとりの持つ能力が、僅かながらの熱気さえも感じるほどの、その異質な感情を察知していた。

まだ大分遠くにいるためか、はっきりとはその感情のディテールを知ることはできないが、思わず眼を細め、本能的にあの妖怪に対して近づくことを避けようとしてしまうほどの、言いようのない恐怖というか、不安があった。

それでもやはり、実際彼女に面と向き合って、話をするべきだろう。

そもそもまず、中庭に降りなければ、どうにもなるまい。

あの妖怪はどうやら、さとりのことを待っていたのは確かなようなのだから。

スリットウェハー越しに、ブレンの手のひらに乗る永琳がちらりとこちらを覗い、装甲越しに視線を送ってくるのが見えた。

彼女も、あの妖怪の姿に気づいたようだ。

さとりは改めて、ブレンを中庭へと降下させていく。

ゆっくりと、お空と件の妖怪から少し離れたところへと降下し、地面に足をつけると共に膝を屈曲させ、いつものようにしゃがみこむブレン。

そうして同じくいつものように、まずは永琳を手のひらから降ろしてから、開いた装甲を足場にしつつ中庭に降り立つさとり。

そうして彼女は今一度、ブレンから見て前方、少し離れたところに立っている妖怪の方へと眼を向けた。

それと共に、彼女の心の内にある異様なる感情の正体を探ろうとした。

これぐらい近くにいれば、さとりには表層的な意識なら何でも知ることができる。

深層的な・・・ジョハリの窓でいう『盲点(blind)』や『未知(dark)』の領域や、心理的な刺激(ストローク)を求める深層意識・・・即ち、心理的ゲームを行おうとする心の奥底の原理も、場合によっては覗い知ることができる。

だから、この妖怪が発する煮えたぎるような熱を孕んだ感情の正体だって、分かるはずだ。

が、どうやらさとりが現れたことで、一時だけその感情が心の隅に追いやられているのか、いつの間にやら妖怪の発する異質な感情の気はその勢いを弱め、なりを潜めていた。

――ようやく来た。このちっこいのが古明地　さとりさんか――

などという言葉が、さとりが本来聞こうとするものとは別に聞こえてきた。

しかしながら、このなんてことのない言葉のその奥には、やはり何か得体のしれないものが含まれていた。

とりあえずさとりは、かくいう言葉を彼女に（故意なく）投げかける妖怪の方へとゆっくりと歩み寄っていきながら、静かな声で言った。

「ちっこくて申し訳ありませんね・・・貴方の考えて下さる通り、私が、古明地　さとりです」

「・・・んぉっ？」

眼前の妖怪が、びっくりして眼を丸くし、奇妙な声をあげた。
まぁ、それもそうだろう。
自分の考えていたことがまるで全て読まれているかのような言葉を投げかけられたのだから。

――――何事だ？――――

と訝しむ心の声を聞いて、さとりはこの妖怪が地上の妖怪であることが分かった。
そして、今の今ぐらいになって地底にやってきた妖怪であるということも。
地底の妖怪の多くは、さとりの能力のことは知っているからだ。

にしてもこの妖怪、さとりのことをちっこいというだけあって、中々に背丈が高かった。
歩み寄り、互いに伸ばせば手が触れそうな位置にまで近づくと、なおさらよく分かる。

さとりよりも頭ひとつ、あるいはふたつ抜き出ている。
なまじな男よりも高そうな勇儀と、似たような背の高さだ。
魔理沙とかにちっこいと言われれば、彼女の中にあるトラウマの二、三個を呼び起こそうとも考えるが、この妖怪では、あぁいう風に思われるのも仕方がないか、とさえ思えた。
しかもその背丈に似合って、すらっ、としているように見えるはずの身体からは、何か、その見た目に反してがっしりとしている印象を受けた。
この妖怪は・・・なんだか強そうだ。

それはともかくとして、なによりまず、いつまでも『この妖怪』などという風に呼称することはできまいと考えた。
さとりは続く言葉で、眼の前の妖怪に対してこう聞いた。

「あの、貴方、お名前は？」
「おっ、これは失礼しました。私、紅魔館で門番をさせて頂いている、紅　美鈴と申します」

「紅魔館・・・」

さとりは、美鈴の発したその名に、門番と名乗った彼女の言葉から感じた奇妙な悲壮感も忘れてしまった。
紅魔館と言えば、魔理沙が言っていた。
サトリブレンに傷を負わせた深紅のグランチャーを駆る十六夜　咲夜が、その館にいると。
その館と同じ名を、この妖怪・・・美鈴が語った。

それだけでもさとりは、彼女がここにいる理由が、穏やかなものではないということを察した。
が、次いでさとりは、眼の前の美鈴がまた別のことを脳裏で呟いて

いるのを聞いた。

――――さっきのは一体・・・――――

自分の考えていることが、明らかに読まれていたことへの疑問だろう。

紅魔館という単語に対する戸惑いと一種の猜疑心に屈託しそうになるところを、我に帰ったさとりは、すぐに美鈴の疑問に対して解答しようとした。

が、それよりも早く、美鈴の隣にいたお空が代わりに、偉そうぶった口調で説明を始めた。

「驚いちゃぁ駄目ですわよ～？このさとり様は何と、他人の考えていることが分かるのっ」

ほとんどのことは知ったその傍から忘れるお空なのだが、なぜだかこういう、自分の主人や友達に関係することだけはよく覚えていたりする。

いやはや、何とも可愛らしい性格と言おうか、有難迷惑と言おうか。

そして、美鈴に対して呼びかける声の調子は、大分明るかった。

美鈴をすっかりいい人だと思っている口調だ。

さとりに知る由はないが、魔理沙達からさとりが戻ってきた時に報せるように頼まれ（そのこともすっかり忘れてしまっているが）、美鈴と共にさとりの帰りを待っていたお空は、暇なので美鈴といろ

いろ話をしていた。
その間ずっと美鈴は、親身になって話を聞いていたし、

「この前ゆで卵四十個食べてお腹破裂しそうになったのよ～。お産してる女の人みたいにひぃひぃ言ってたんですわ～・・・・・・・あれ?五十個だったけ?二十個だったような・・・そもそもゆで卵を食べてたんだっけ?・・・・・・・あれ?これいつの話だっけ?・・・・・私、何の話をしていたの?」とか、

「お燐は死体集めを止めてくれれば大好きなのになぁ～・・・この前だってねぇ、え～・・・・・・男の人だったっけ、女の人だったけ・・・えぇ～っとねぇ、とにかく若い人の死体を・・・あぁいや、お年寄りだったかな?・・・・んえぇっと、とにかく死体をねぇ、持ってきてたのよ・・・・・・・あれ?これっていつの話だっけ?」

などと、正直いって心底どうでもいい・・・というか、お空本人がおぼろげにも内容を思い出せない以上話としてすら成立していない単なるお?自慢にも、愛想良く相槌を打っていた。
めんどくさがったり、馬鹿にしたりもせず、とにかく素直な気持ちで人の話を聞ける性格の良さだって、美鈴には確かにあった。
もっとも、頭に血が昇ればその真逆になることも大いにあるが。

とまぁ、そんなこともありすっかり知り合い同士になったお空の声を聞いた美鈴は、眼に見えて驚愕していた。
その驚き様は並のものではない。
息を呑む「は・・・っ」という声と共に、ぴくりと微かに肩が痙攣し、眼は一瞬だけ大きく見開かれた。
痙攣したのは肩だけではない。
両手の指先もたった一回だけ、まるで心臓が拍動するかのようにぴくんと震えた。

それは、いくらなんでも少し驚きすぎだろうと思えるほどの、不自然なまでの驚愕であった。

だがさとりには、その理由は分かった。

ほんの阿摩羅（あまら）の一瞬だけだが、彼女からずっと感じていた、熱を持ったあの異様な感情の正体が分かったからだ。

そして美鈴は、さとりが人の心を読むということに気づいた上で、その感情に気づかれないよう、必死に心を改めていた。

だからこその驚愕だったのだろう。

驚愕というよりかは、焦燥と呼ぶべきか。

そして、いくらさとりに対し気づかれないようにその感情を払拭しようとしても、ほんの一瞬でもさとりにその声が聞こえれば、それまでだった。

美鈴の中にあった感情。

それは、グランチャーに対する嫌悪と、殺意であった。

敵意ではなく、殺意だ。

明確に、殺そうと考える意識。

美鈴はそれを想起すると共に、身が焼かれんばかりの熱さを感じていたし、その熱が、さながら火矢のごとく、さとりの心をも刺し貫いて、その一瞬の業火でもって焦がそうとした。

もっとも、本当にただ一瞬のことであったが。

だが、さとりはその一瞬であっても、ブレンが受けたあの深紅のグランチャーが放ったチャクラ光の痛みを思い出すほどに、迫り来る美鈴の感情に感化され、悲鳴さえもあげそうになった。

何故彼女は、こんな感情を？

そう考えつつ、さとりはとりあえず、落ちつこうとする美鈴に対し、意地悪く揺さぶりをかけるようなことはせず、当たり障りのないことを言うように心がけた。
このまま下手に彼女の秘めたる感情を呼び起こそうとしても、お互いにとっては何ひとつ生産的な結果にはならないだろうから。

それに、今更聞かずとも、美鈴が一瞬だけ見せたその憤怒の感情を考えれば、彼女がここに何をしにきたかは大体察することができたからだ。

「・・・あまり悪くは思わないでください。私自身、能力をある程度なら意識して制御することぐらいはできますから、いつも貴方の心の内を見ているというわけではありません・・・ですので、無理なことを頼んでいることは分かりますけど、あまり私のせいで気を悪くしないでください」
実際さとりの言っていることは嘘ではなく、彼女は、ある程度ならば自分の能力を制御し、他者の思考を意図的に見ないようにすることも可能だった。
しかしながら、相手の思考や感情があまりに固く強いものであるときは、さすがに吸い込まれるように勝手に頭の中に入り込んでしまうが。
そして実際今この時からさとりは、美鈴の思考を無闇に読み取らないように能力を制御していた。

「・・・はぁ・・・分かりました」

さとりの言葉を聞いて戸惑いながらも、申し訳ないという思いもあって、別段口ごたえすることもなく素直に受け入れる辺り、この美鈴も、実際は人がよすぎる類の妖怪なのだなと分かる。
しかしそんな妖怪が、地獄の業火もかくありといった程の怒りを発

するのだから、奇妙なものだ。

「ありがとうございます・・・貴方がここにきた理由は、もう魔理沙さん達にお話して下さってるのでしょう？」

「えぇ、そうです」

「なら、あの人達に後で聞いておきます」

そこまで言ってさとりはふと、そういえば何故お空がこの中庭にいるのだろう、という疑問が胸中に湧いてでてきて、続けざまにその当人に対して問うていた。

「そういえば、お空はどうしてここに？」

それを聞いたお空は途端にきょとんとした表情を浮かべて、応えるというよりかは、呟いた。

「あれぇ～、そういやどうして私ここに？」

ある意味予想通りの解答に、軽いため息を吐いたさとりだったが、すっかり自分の役目を忘れてしまったお空に対し、事情を知っている美鈴が親切に説明してやった。

「ほら、さとりさんが戻ってきた時に、魔理沙達のところに連れていくんでしょ。今話し合いしてる最中なんだから」

「あぁ～」

その言葉を聞いてようやく思い出した様子のお空と共に、さとりも美鈴の言葉をそのまま聞くことで、事情を察することができた。

が、しかし。

「話し合い？」

さとりは、美鈴の説明の中にあった言葉をそのまま聞き返していた。

話し合いとはどういうことか、と聞くさとりの声に、美鈴は応えた。
「今後やるべきことを考えてるんですよ・・・私が来たおかげでね」
要するに、美鈴がこの地底にやってきた目的。
それを成就させるために、地霊殿にいる者達で考えを巡らせているということか。
さとりの中の考えが正しければ、美鈴の考えるその目的というのは、さとり達にとっても、いずれはやっておかなければならないことだろう。
美鈴が来たことをきっかけとして、この際一気にそれを敢行してみる、ということだろうか。
そしてそれには、さとりがオルファンの記憶の一部に触れることでその存在が不可欠であることが実感された、『覚悟』というものも必要であった。
そう、思い返してみるに、先程一瞬だけこの身を焼かんばかりに伝わってきた美鈴の感情の熱の中にも、その覚悟を思わせる何かがあったような気がした。
と、美鈴に続いて、すっかり事情を思い出したお空が言ってくる。
「確か、さとり様が帰ってきたらすぐに連れてくるように頼まれてたんです。一緒に話し合いをしようって・・・ほら、早くいきましょうっ」
言いながら、急にさとりの腕を掴んでひっぱり、屋敷の中へ向かうように催促する。

さとりはそれに、
「ちょっと待って」
と返しながら、その言葉を聞こうとせず無理やりずるずると引っ張るお空にされるがまま、中庭から屋敷に繋がる戸の方へと引きずられながらも、美鈴の方へと顔を向ける。
美鈴から見れば、お空に引きずられたおかげで、さとりの顔以外はほとんど全て向かって奥の方を向いていた。
背中を見せるようになったさとりが、引っ張られながらも上体を捻ってどうにかこちらを向こうとしている。

そこでようやく、彼女なりには一生懸命役割を果たそうと無心にさとりを引っ張っていたお空も、少し待たなければならないことに気づいて、慌てて手を離した。

それと共に、さとりは改めて身体全体を美鈴の方に向け、言った。

「美鈴さんは一緒にいらっしゃいます？貴方が来たからみんなが話し合いをしているなら、貴方自身だってその話し合いに参加しないと」

それを聞いた美鈴は、腕を組み、同じく身体全体をこちらに向けて仁王立ちしたまま、まるで石のように固まりぴくりとも動かず、しばらく何も言わなくなった。
しかしそれは、驚愕とか困惑による硬直ではない。
鉄面皮に引き締まった顔つきは、美鈴が深く思案していることを如実に現しているようにさとりには見えた。

十秒ほどして、美鈴は徐に口を開き、応えた。

「確かにそうかもしれませんが、今は遠慮しときます・・・後もう

少しの間、ここでひとりにさせてもらいたいんです」
「ひとりに？」
「はい・・・私が話し合いに加わったって、大した役には立たないでしょうし・・・何か用がある時は、呼んで下さればいいですから」
何故ひとりになりたいのか、という理由は、さとりは知ろうとしなかった。
能力を使って、無闇に心を覗かない、と誓ったからである。

「・・・そう、ですか」
「はい・・・あぁー、それと、大事な話を忘れていました。私を、しばらくの間この屋敷に置いて頂きたいんですけど、構いませんか？」
「それは、勿論大丈夫です。ただ・・・もういろんな方々がここ住みついていて、部屋の数もそろそろ足りなくなってきています・・・それでも、一応ちゃんとお部屋は用意しておきますけど。満足いかなくてもどうか我慢してください。元々、あまり綺麗ではない屋敷ですから」
「そんな、充分綺麗で、美しい屋敷じゃないですか・・・問題ありませんよ。最悪この中庭で野宿しますから」
「そ・・・それはさすがに」
「いぃ～んですよぉ。紅魔館にいた時は、門の前で一日中過ごすことが当たり前だったんですから」
「・・・地霊殿は紅魔館とは違います・・・向こうでの貴方の立場もあるんでしょうが、ここでは貴方は客人ですから・・・必ず、お部屋だけはちゃんとご用意させて頂きます」

こういうことになると堅苦しくなるのは、さとりも同じだった。
とにかく実直に美鈴を客人としてもてなすというさとりの言葉に、美鈴は嬉しそうに笑いながら応えた。

「いやぁ～はは。ありがとうございます。んじゃ、お言葉に甘えさせてもらいますよ」
「えぇ、そうして下さい・・・私は魔理沙さん達のところに行きますんで、これで失礼します。貴方はしばらくの間、ここでお待ちになられてください・・・よろしいですか？」
「はい・・・すみません、あとひとつ、こちらからお聞きしたことがあります」
「え？」

美鈴の突然の言葉。
だが、それに対するさとりの不意の疑問などは、この次の瞬間に来るものに比べれば、無いに等しい瑣末（さまつ）なことだった。

前述した、能力を制御してもなお頭の中に入ってくる感情の波が、さとりの心に伝わっていた。
美鈴の発する怒りの念である。

またしてもだ。
先程ほんの一瞬だけ感じることができたその、怒りがもたらす感覚がより一層長く、はっきりとさとりの心を疾走した。
血液の一滴に至るまで沸騰し、体中から蒸気となって発散されるような、そういう異様な感覚が身体を包み込む。
そしてそれでもなお、沸騰してもなおその温度を上昇させていた血液はやがてあらゆるものを溶かす、血にあらざる色に赤熱したマグ

マとなって身体を吹きだして、噴火した火山から流れ出るようにある一点へと向かって注がれていく。
そう錯覚してしまうほどの怒りだった。

そしてその怒りの矛先・・・流れ出るマグマが行き着く果てにあるのは、咲夜が乗るグランチャーであった。

さとりの考えていた通りだった。
美鈴の中にある怒りと共に、彼女が地底にきた理由。
そして、そのためにさとり達に何をさせようとしているのかも、全て知ることができた。

美鈴は、紅魔館にいるグランチャーを撃破するつもりだった。
そしてその奥底にある大元の理由も、今回ばかりは、知ろうとせずとも知ってしまうのだ。

美鈴は咲夜に対して好意を抱いている。
が、その咲夜が、グランチャーによってどこかおぞましい領域へと連れ去られようとしていると、彼女は考えていた。
そうしてそのために、咲夜の心は少しずつ変貌しつつあると。
だからこそ、彼女はグランチャーをどこまでも憎み、殺意を抱いていた。
そしてその殺意を実際にグランチャーに対し突きつけるためにも、さとり達とブレンを利用することにしていた。

美鈴のこの感情を自分のことのように深く理解できるかはともかくとして、さとりは、美鈴のグランチャーに対する殺意が、正真正銘の本物であることを実感した。

しかもそんな中にあってさえ、美鈴もまた、グランチャーに対して好意を抱いていたのだ。
しかし、このまま咲夜が取り返しのつかない領域にまで落とし込まれるよりも前に、何とかしてグランチャーを殺す。
でなければ、本当に取り返しのつかないことになるかもしれないのだ。
だからこそ、そうなる前に・・・

今の彼女は、ただそのことだけを考える葦(あし)であった。
そして同時に、自分が抱いている以上の好意を、咲夜もグランチャーに対して抱いていることも分かっていたし、そんな咲夜をグランチャーから切り離せば、彼女がどう思うかも知っていた。
その上で、美鈴がこのようなことを考えていたことが紅魔館の皆に知られれば、自分自身がどんな仕打ちを受けるのかも、よく分かっていた。
グランチャーが死んで得をする者など、精々ブレンパワード達と、それを駆るさとり達ぐらいしかいないわけだ。

その上で、美鈴はグランチャーの死を望んでいたのだ。

愛する者を救うために、その者が哀しむ行いをする。
しかもそれが、自分が好意を抱く存在を殺すことだという。
そしてその結果、自分が外道の誹りを、愛する者から受け、最悪生命を散らすことになる。
相反する二つの事実、そしてその末に待っている責め苦が、美鈴の精神を良心の呵責と憎しみで板挟みにし、苛んでいた。
実際美鈴はその心を、この地獄の業火のような熱で焼かれている最中であった。

さとりはこの大いに、そして無数に矛盾を孕んでいる美鈴のこの噴

火のごとき感情に対し、驚くよりも、恐れるよりも、同情したり侮蔑するよりも、ただ、こう思った。

――よくこんな、ありとあらゆる気持ちを、たったひとつの意思として持つことができるわね……しかも、これほど頑なに……――

そして、一度落ち着いてしまえば、肉体的な錯覚さえももたらす美鈴の怒りに触れても、特別感化させることもなかった。

ブレンがチャクラ光を受けた時のように、はっきりとした痛みを伴ったものであれば、その痛みがフィードバックして我が身のことのように感じられてしまうが、今回はあくまでも、外へ外へと放出する怒りの感情だった。

そこには別に苦痛などはない。

怒りが向けられている存在に……即ちグランチャーに対しても、さとりは美鈴と同じだけの怒りを抱くことはできなかった。

だからこそ、美鈴にとっては自分の身すら焼くほどの感情のマグマも、あくまで客観的に見ることができていた。

が、だからといって、いつも通りの平常とした態度でいることもできなかった。

美鈴の、異様な光を湛えた眼に見つめられ、そして見つめ返しながら、さとりは身動きが取れなくなった。

それは美鈴も同じようで、二人はその場に立ち尽くしたまま、仲良く固まってしまっていた。

「……？」

さとりの後ろでお空が不思議そうな顔をする中、美鈴が固く閉ざされていた口を開いて、問うてきた。

「さとりさん・・・貴方はグランチャーのこと。どう思ってるんです？」

第十四話　その3

「私が？・・・グランチャーを？」

さとりは、思わずぼんやりとした口調で聞き返してしまっていた。
しかしながらそれは、別に美鈴の質問の意味が分かっていなかったからでも、何故こんな質問をするのか分からないからということでもなかった。

要するに、美鈴の問いを確かに聞き入れたということを確認するための声だった。

だから、実際聞き返したところで返事がこなくても問題はなかったわけだが、律儀な美鈴は、さとりのこの問いにもしっかりと応えていた。
というより、彼女の中から放出されるただならぬ怒りの気が応えてくれていた。

「私の心が見えるでしょう・・・さとりさんはグランチャーのこと、どう思っているんですか？」

愛憎・・・という呼び方はできないかもしれないが、好意と共に殺意を抱く美鈴の意思は、確かにさとりには、不本意ながら手に取るように知れてしまっていた。
その上で美鈴は、さとりに対し彼女自身のグランチャーに対する認識を教えて欲しいとも考えていた。

さとりと共に中庭に降り立った永琳は、二人の様子を傍観するべく、美鈴の隣の、少しだけ離れたところに立っていた。
そうして、さとりのように美鈴の心の内の炎を知ることができない彼女は、この質問を不思議がって、美鈴の身体はぼんやりと見つめていた。

自分が、グランチャーに対してどう思っているか？

さとりは、その答えを導き出すために、少しばかり過去の記憶を想起し、自らの意識をその追想の奥底へと踏み入れていった。

魔理沙が地底にやってきた時に聞かされた、白いアンチボディのこと。
そうしてそれから後に、妹紅と慧音が来ることで、彼女達から教えられたグランチャーの存在。
それと、彼の者達を敵と規定するブレン達。
オルファンを急襲し、地獄の業火を吐き出して嵐のように去っていった深紅の・・・咲夜のグランチャー。
そこから感じた恐怖。
そして今日この日、グランチャー達は魔法の森でブレンを襲い、魔理沙達はそれを食い止めるために出ていった。
そしてその間、さとりはオルファンの心にある記憶に触れることで、ブレンの母であるオルファンと同じように、グランチャーの母である存在の姿を見た。
グランチャーは、その母からはぐれた迷い子であることを知った。

それを思い出した上で、考える。
グランチャーが自分にとっての何なのか？

そういうことを頭で考えようとすると、何故だか余計に言葉が思いつかなくなる。
今、さとり達に対するグランチャーの立場というのが、それほどに複雑怪奇なものだったからだ。
だからさとりは、いっそ考えることはやめ、今この場の自分の気持ちに任せて、ただそれを口にしてみることにした。
それも間違いなく、彼女の意思であるのは間違いないのだから。

「寂しそうだな・・・と」

「寂しそうって・・・」
美鈴が、意外で、かつ不可思議そうな声を漏らす。
さとりの傍らにいたお空も、丸い眼をさとりの方に向けてぼけーっ、としていたが、次いでその目線を上の方に向けて考えるような態度を見せていた。実際考えることが出来ているのかはとにかくとして。
そして、ぽかんと開いた口から漏れた、
「あぁー・・・」
という声が、どういう意味合いで吐き出された声だったのかは、お空当人しか知ることはできない。
しかもその当人ですら、すぐに忘れてしまうのだから。

そして、さとりが垣間見たオルファンの過去を既に聞かされている

永琳には、さとりの言う寂しそうだという言葉は、理解できていた。
実際そこまでの思い入れをグランチャーに持てているかと聞かれればまた別だが。

ここでさとりは、自分がまだ永琳以外の誰にもオルファンの過去のことを伝えていないことを思い出していた。
それを伝えるために、地底へと戻ってきたのではないか。
今、美鈴の頼みであるグランチャーの撃破のための方法を考えている魔理沙達が、さとりと同じようにそれを知れば、どう思うのだろうか。
グランチャーに対して同情し、撃破することをやめるのか？
美鈴だって、グランチャーへの恨みを忘れるのだろうか。
そうして、戦いをやめようとするのか？

いや、そうでもないだろう。
ブレンとグランチャーの戦いは、すでに不可避なところにまで来ている。
こちら側が何を考えようと、ブレンとグランチャーは戦うだろう。
オルファンが幻想郷に訪れる前から始まっている戦いを、幻想郷の住人に・・・いうなれば、オルファンにとっては赤の他人に、止めることができるわけがない。

この戦いは、本能に従う動物的な・・・言うなれば弱肉強食的な戦いだ。
腹が減っている肉食動物にはどんなに頼みこんでも喰われるしかないように、本能的な不安と恐れと嫌悪に従って戦うアンチボディ達を止めることは難しい。
もちろん、できなくはないし、可能性はある。

だが、その可能性だけに眼を向けていては、大きな過ちを犯すことになるというのはさとりには分かっていた。
重要なのは戦うことだけじゃない。
オルファンのためにビープレートを見つけ出し、『そのもの』を銀河旅行に送り出してやらねばならない。
そうでなければ、幻想郷が滅亡する危機が起こる。
そのことは忘れてはいけない。

しかしながらその上で、自分達が戦う存在がどんな者で、どんなことを考えているのか、ぐらいのことは・・・せめてブレンに乗る自分達人妖だけは、知っておかなければならないのではないか？
そう考えていた。
戦いの中に、確かな知性と、心をもたなければ、ビープレートだって見つけることはできないのではないか？

だからこそ、魔理沙達に対しては必ず伝える。
美鈴にも、後でちゃんと、知っていることは全て伝えておこう。

寂しそうだ、というさとりの言葉を聞き、それを頭の中で噛みしめる美鈴だったが、今の彼女は、どれほどの好意的な表現や認識も、全てグランチャーへの殺意へと帰結してしまっていた。
さとりの言葉を理解し、納得しようとしても、それが出来ない美鈴は、口を噤み眼を閉じて俯きながら、吐き捨てるしかなかった。

「私には分かりません・・・」

そうして、気を取り直したように閉じた眼を薄く開いて、うなだれた顔をもう一度上げると、続けて言った。

「質問に答えて下さって、ありがとうございます・・・・・・私はここで待って、改めて自分の気持ちを確かめさせていただきます・・・余計なお時間を頂戴してしまい、申し訳ありません。どうぞ、行って下さって構いません・・・皆さんは客間にいるそうですよ」

話は終わったという美鈴の声に、さとりは、特に表情も変えず軽く頷くと、傍にいたお空の方を向いて、

「待たせてしまったわね。さぁ、行きましょう」

と言った。

お空もそれに、

「はーい」と返事する。

そうして、踵を返して美鈴に背を向けて、お空と共に改めて屋敷の方へと歩いていくさとり。

永琳が、早歩きでその後を追いかけつつ、言っていた。

「私もご一緒しますよ」

美鈴は、その様を、立ち尽くしたままじっと見つめていたが、何秒かそうしていた後、そっぽを向くように身体全体を横に向けて、もうさとり達は見ないようにした。

それからすぐに、彼女達は屋敷に続く戸を開けて、中へと入っていった。

この場に残ったのは、美鈴と、ブレン達だけだ。

先程さとりが言っていたことだが、自分からこの地霊殿にいる者達に対し、不躾にも個人的な恨みのために動くことを要求した以上、自分自身もまた全身全霊協力しなければならないと思う。

つまり、今しがた行われているという話し合いに参加するべきなのだ。
それに、グランチャーを確実に葬りさるための方法・・・つまり奇襲のための策は、実はすでに美鈴の頭の中で大まかにだが出来あがっていた。
それも早く伝えておかなければならないはずである。

だが美鈴は、今この時だけは、誰の顔も見ず、自分の意思と向きあう機会が欲しかった。
自分の脳裏に浮かんでいるその方法というのが、彼女の行いをより一層悪魔の所業に近しいものにするように思えて、彼女の良心はますます、発作的に反応を示していた。
しかもその方法は、美鈴が咲夜達から憎まれ、死をもっての償いを受けることになる恐れも高めるものであった。
そういう意味では、恐怖もあったのだ。

だから今一度、自分の中の憎しみと、死を恐れぬ覚悟を確かめて、良心の呵責と恐れを忘れなければならなかった。

美鈴は一人、腕を組み両足をしかと地面につけ、ただじっとその場で立っていた。
固く口を噤み、細めた眼でどことも言えない中空を見つめ続ける。

彼女にとって助けとなったのが、この場にいる数少ない他者が、グランチャーの敵であるブレンパワードであるということだった。
グランチャーの敵が、今この場にいる。
そのことは、美鈴が自分の怒りと矛盾した心境を正当化するのに、絶大な効果をもたらしていた。

自分の心だけで考えてもどうにもならないと思った美鈴は、虚空を差していた目線を、さとりが乗っていた薄紫色のブレンの方へと向けた。
その身体は、所々で火傷のように爛れていて、痛ましく思えた。
そうしてそれが、グランチャーとの戦いにより付けられた傷であるということは、美鈴はすぐに察することができた。

美鈴はまだ、ブレンパワードのことをよく知らない。
だからこそ、単に彼の者達をグランチャーの敵としか考えられない彼女は、固い口調でこう語りかけていた。

「その火傷、痛いでしょう・・・その恨みを晴らしたいとは思わないの？」

ブレンは何も応えなかった。

「あんたらブレンパワードは、グランチャーと戦うために生きている・・・だったら、その役目を果たせばどうなの・・・あんたらの本能に従って、敵を潰せば・・・っ」

言葉を連ねることで、自分の怒りを再燃させようとした美鈴だったが、その言葉の連鎖が長く続くことはなかった。
美鈴は、自分のやっていることが、自分の個人的な感情をブレンに押しつけているだけにすぎないことに気がついたのだ。

そしてそれは逆に、他者に押しつけなければ、自分の中の感情にも対応することができない自分自身の姿を美鈴に見せつける形となっていた。

途端に、恥ずかしさ、みっともなさ、情けなさがあふれ出んばかりに湧き上がって、美鈴は気が付くと、組んだ両腕を解いて力なくだらりと下に垂らしていた。
次いで、猫背気味に背中を曲げて下を向くと、その丸くなった背中をカクカクと揺らしながら、乾いた笑い声を発していた。

「は・・・っはっははははは・・・ふっふふ」

そうして、全身の力が抜けて崩れるように、蜘蛛の糸がぷっつりと切れて地獄の池へと落ちていくかのように、ドスンと尻餅をついて座り込んだ彼女は、そのままあぐらをかいて、折り曲げられた膝小僧に手をつき、動かなくなった。

美鈴には、自分を正当化する方法がもうひとつあった。
それは、自分自身を外道と、死ぬ以外に道がない畜生と考えることであった。
自分が外道なら、自分の考えつくことだって外道になるのは当然のことであるし、自分に死ぬ以外の道がなければ、死ぬのもまた当たり前のことだった。

美鈴は、自分をどこまでも卑下にし落とし込むことによって、自分の行いを、仕方のないものとして考えようとした。

そしてそれは、無理に相反する感情を汲み取って正当化したりするよりも、ずっと簡単なことであるのに気付いた。
自分は屑であるわけなのだから、屑が屑のような考え方をしたところでそれは自然の摂理だ。
虫けら以下の生命ならば、潰れて殺されようが何にもならない。

だったらその代わりに、屑で虫けら以下なりに、好きにやらせてもらおうじゃないか・・・

虫けらなりに、信じることを・・・愛する者のためにやろうと信じたことを・・・

これまでのことがまるで、みんな馬鹿みたいだった。

美鈴からは、道徳と感情のせめぎ合いも、死への恐怖も、一切なくなっていた。

彼女は再び、沸々と煮える怒りの熱を取り戻し、俯いた顔に落ちる影の奥から覗くその眼には、黒々とした炎が燃え盛っていた。

「見てろよグランチャー・・・・・・っ」

吐き出された彼女の唸り声は、そのあまりに微かな声の大きさに反して、おぞましいほどにはっきりと、この中庭の中を反響した。

※

さとりが中庭に戻り屋敷に入っていったころには、すでに話し合いは大分進んだ後であった。

無駄に大きな屋敷の客間に皆が一同に会し、美鈴が頼んできたグランチャーの撃破について考えを巡らせていた。

さて、グランチャーを相手に正攻法で戦ったのでは、勝機は少ない。
しかも美鈴が倒せという相手は、こちらを何度か苦しませてきたあの深紅のグランチャーであった。
あれを確実に撃破しなければならないというのだから、慎重になるのも仕方がないことだった。
早苗が乗っていたグランチャーとか、あるいは別のもう一体なら、別にここまで慎重にならずとも、一対一でもどうにかなりそうだとは考えられたが・・・
咲夜が相手だと話は別で、彼女のグランチャーと今のところ互角に戦えるのは、ハクレイブレンぐらいのものだった。
ましてやそこに、早苗達のグランチャーが加われば、戦いが膠着状態に入るのは必至だ。

幸い美鈴の話では、咲夜と他の連中は別々のところに潜伏しているらしく、上手くいけば互いを分断することもできそうだった。

あとは、その咲夜以外の連中が一体どこにいるのかを知っておかなければならない。
早苗がグランチャーに乗っているなら、守矢神社を探せばよさそうだったが、そんな単純な話ではないだろう。

とにかく、まずは文とはたてに、守矢神社にいって状況を確かめてもらい、もし神社にグランチャーがいない場合には続けて幻想郷の各地を偵察して早苗達を探してもらうことにした。

後もうひとつは、咲夜と他の連中を、どうやって美味い具合に分断させるか、
そして、いかに咲夜のグランチャーを紅魔館から離れられないように釘づけにするかだった。

いくら離れた場所にいるからといって、合流しようと思えばいつでもできるだろうし、そうさせないために、グランチャーを足止めしておく必要もあった。
咲夜の方は勿論として、早苗達も、何らかの理由で紅魔館に様子を見に来るかもしれない。
そうなれば結局、彼女らが戦いに参加することになってしまい、状況が泥沼化する。
そうしないためにも、早苗達の動きも牽制しておく必要があった。

そしてそれを実行する役には、妹紅が名乗りを上げた。
彼女は、以前グランチャーに乗っていた。
そのことは文の発行した新聞にも載っているはずだし、早苗達にも知られているはずである。
となれば、彼女が向こうに協力する姿勢があると偽ってあちらの潜伏している場所に顔を出せば、多少なりとも眼を引きつけることができるかもしれない。

早苗達とも事を起こすつもりはない。
そうである以上、牽制すると言っても、ただ紅魔館へと向かうような動きさえ取らなければいいのだ。
それは、ただ単に話をするだけでも叶うことである。
となれば、引きつけ役は誰にでもできるが、グランチャーに乗っていた妹紅ならば、さらにやりやすいと思われる。
グランチャーを失って地霊殿に半ば軟禁されていたところを逃れてきた、とか適当な嘘八百を並べ立てれば、向こうもそれなりに信用してくれるだろう。
そういう嘘を並べ立てる役を、ということで、慧音も妹紅と同行することにした。

その慧音は、あることが気がかりになっていた。

こんなことを自ら提案した妹紅の心の内である。
彼女はグランチャーに乗っていた。だからこそ早苗達にとってのトロイの木馬のような存在になれるのだろう、と皆は考えていた。
だがそれは逆に言えば、妹紅は間違いなく、今もグランチャーとの関わりをもっているということである。
こちらがやろうとしていることは、グランチャーの撃破だ。
しかも、権謀術数・・・とまではいかずとも、ずる賢く策を巡らして、不意打ちをするつもりでいる。
それがブレンを戦いに生き残らせるためであり、オルファンを守ることに繋がるとはいえ、どうしても慧音は罪悪感を感じずにはいられなかった。

妹紅との繋がりを通して、グランチャーの生命の価値についても考え、それを認めようとした慧音では、そうやって冷静に、グランチャーを殺すための考えを思いつくことができるとは思えなかった。
実際、妹紅があのような提案をすることは、正直いって信じられなかった。

彼女は、グランチャーのことをもう忘れてしまったのか？
一瞬だけそう疑いそうにもなった。
もちろん、そんな考えはすぐに打ち消し、そんなはずはないだろうと自分自身に言い聞かせたが・・・

しかしながら妹紅は、すっかりグランチャーの敵となっている魔理沙達に、全面的に協力する様子である。
まぁもちろん、グランチャーの敵であるということはブレンの味方でありオルファンの味方ということだ。
妹紅も慧音も、別に魔理沙達に不信を抱いているわけではない。

慧音は思わず、話し合いの最中であるのも構わずに、妹紅に真意を問いただそうとしたが、そうしたところで、彼女の提案を皆も賛成し、彼女が早苗達の引きつけ役になると決定して覆すこともできない以上、今のところは堪えておくことにした。
この話し合いが終わってから聞こうと考えた。

おそらく・・・いや、きっと、妹紅はグランチャーへの想いを忘れてはいないはずだ。

とりあえず、早苗達に対してどうするか決まった以上、後は彼女らがどこにいるか分かれば、行動を起こせる。
咲夜のグランチャー以外にはあと二体いるから、もしそれぞれ別の場所に潜伏している場合には、妹紅と慧音で手分けして向かうことにした。

となれば後は、紅魔館の方をどうするかだった。
早苗達の方を妹紅と慧音がどうにかしてくれるのなら、こちらのブレンで深紅のグランチャーを一斉に攻撃すれば、勝機はある。
しかし、向こうに逃げられて仲間と合流されないようにもしなくてはいけない。

そのために一番有効な手段は、そもそも戦いになる前から撃破してしまうことだった。
咲夜がグランチャーに乗り込むよりも早く、一撃で敵を倒す。
だが、一体何をすればそんなことができるのか?
奇襲するにしても、ブレンは結構な巨体だ。紅魔館に近づいている間に、かならず勘づかれてしまうだろう。
そうなれば、例えどれだけあちらに近づいていたとしても、時間を

止めることができる咲夜なら、瞬時にグランチャーに乗り込むことができる。
数度の戦いを経て、彼女がグランチャーでの戦い方を心得ているらしいことは魔理沙達はよく知っていた。
おそらく、グランチャーに乗り込んだらそこからすぐにその場から離脱して、早苗達のところへ向かうだろうと予想できる。
そうなれば結局、何もかも無駄になってしまうだけだ。

妹紅や慧音と同じく、誰かが咲夜をどこかに釘付けにして、奇襲に気づかないように、気づいたとしてもグランチャーに乗り込むのが間に合わないようにしなければならない。
だが、そういうことができる者がいるのだろうか。

考えてみるとすぐに、ひとりだけいることに気がついた。
美鈴だ。
紅魔館の住人である美鈴なら、咲夜をどこかに呼びだすなりして、引きつけることができるかもしれない。
こちらにグランチャーを撃破するように頼みこんできた以上、彼女にだって働いてもらわなければなるまい。
魔理沙の方が、何故か話し合いに参加せずこの場にいない美鈴に対し、一度頼んでみることにした。

となれば、これでひとまずこちらの取るべき策は決まった。
正直漠然と思いついただけで、ところどころ穴も空いているような印象だ。
ただ、これからいろいろと細かいところを考えていけば、確実な策にもなるかもしれない。
そうならずとも、後は気合いでどうにかすれば、何とかなるだろう。

結局のところ、最終的にはこのような楽観的な考え方に落ち着いてしまうのが、彼女達であった。
もっとも、いつもはそれがいい方向へと傾いてくれるわけだが、今回はどうなるか・・・

ひとまず、今日の内に、文が守矢神社へと赴き早苗と話をつける。
あるいはそもそも彼女がいるのかどうかを確かめる。
で、魔理沙が美鈴に対して、咲夜をだまし討ちしてくれるように頼む。もし断られたら、また別の方法を考えなければならなくなるが。
もし彼女が了承してくれれば、また明日細かいことを考えよう。
さとりと一緒に出ていった永琳が戻ってくれれば、計画の細かい穴埋めぐらいはしてくれるはずだ。

守矢神社に早苗達がいない場合は、文とはたてに山に交渉してもらい、天狗に幻想郷の各地を偵察させ、彼女らの居場所を見つけてもらう。
そうでなくとも、文とはたてが二人がかりで飛べば、その内グランチャーの潜伏場所は見つかるだろう。
そうすれば後は、今日考え、そして明日考える行動を、実行に移すだけだ。

とりあえず、今決めておくべきことが決まったため、話し合いは終わり、各々適当な場所へ解散することになった。

が、そんな時だった。

今の今まで、話し合いにほとんど参加していないかったこいしが、机の隅っこ椅子に座りながら、手を顔の高さにまで上げて、言った。

「ねぇ～・・・ホントに、紅魔館のグランチャーを、やっつけちゃうの？」

その声に、ほとんど話し合いの進行役になっていた魔理沙が応えた。

「そりゃぁな。やるしかない状況になったからなぁ」

それを聞くこいしの表情は、どう見ても機嫌がよさそうな顔ではなかった。

なんと言おうか、納得できていない顔、と言った感じである。

彼女の隣で座っているお燐も、似たような顔をしていた。

何で二人がそういう顔をしているのか、まったく分からない魔理沙ではなかった。

しかしながらそれを踏まえて、彼女は続けて言った。

「あんたらの気持ちも分かる・・・あたし達は大分卑怯なことをやろうとしているからな・・・だけど、グランチャーはいずれどうにかしないといけないんだぜ。この前だって、咲夜のグランチャーがオルファンを襲ったし、その次は魔法の森のブレンが襲われた・・・きっとこれからも、あいつらはブレンとオルファンを困らせてくるだろう・・・きっと大勢のブレンが死んでしまう。もしかしたら、オルファンだってやられちゃうかもしれないんだ・・・そうならないためにも、卑怯な手を使ってでも、やっつけとかないといけないんだぜ」

こいし達の方も、魔理沙の言うことはよく分かった。

グランチャーは間違いなく、ブレンとオルファンを困らせるし、殺そうとしている。
ブレンのことを信頼しているのなら、グランチャーを倒さなければならないことも分かる。

それでもこいしは、
「でも～・・・」
と渋るような声を出していた。
だからといって、やることがさすがに乱暴すぎると考えていたのだ。

心を棄てたはずの彼女の方が、道徳的なことを弁えているというのは、情けないことだと思いつつも、魔理沙は・・・彼女以外の者も、すでに心を決めた後だった。
いや、こいしの場合、ブレンに対して感じている好意を、同じアンチボディであるグランチャーにも感じているからこそだったのかもしれない。
彼女にとっては、敵も味方もなく、ブレンもグランチャーも同じ存在であるのだろう。

だからこそ、彼女達には申し訳ないが、こいしの言葉は今のところ無意味に等しいものであり、魔理沙達は一切聞き入れないことにした。
しかし、彼女達の言う事に聞く耳をもたないなら、せめて彼女らをなだめるようなことはしなければならないと思い、魔理沙は言った。

「あたし達だって、グランチャーには申し訳ないと思う・・・やらなきゃいけないからとは言っても、さすがに非道だ・・・・・・いろんなことが何もかも終わったら、グランチャーに対しても償いをするさ。咲夜にだって、いくらでも謝る・・・それで許してくれるかは、分からないけどな」

この言葉は、その場しのぎの言い訳などではなかった。
実際魔理沙は、これから殺めようと考えているグランチャーに対し、そうしてそれに乗り込む者に対し、いつか謝罪しなければならないと考えていた。
戦わなければブレンが死ぬからこそ、冷酷な考えも持てる。
しかし、そんな中で、やはり人の情は失いたくなかった。
こちらがブレンに対して感じているのと同じことを、咲夜達も感じているというのなら。

そしてこの魔理沙の言葉に、こいしもようやく納得できたように、
「うん・・・」
と声を漏らした。

もっとも、本当に納得できているのかは分からなかったが。

そして、もう他に何か言う者もなく、各々が改めて客間から出ようとした、その時だった。

案内する場所を忘れてしまい、案内役にも何にもなっていなかったお空を連れて、さとりと永琳が客間に入ってきた。
ちょうど、話し合いも終わって、席を立つ者が出てきた時だった。

外の廊下より繋がる戸を開けて、徐に入ってくるさとりに対し、大きな机を囲むよう並んでいる椅子のひとつに座っていた魔理沙が声をかけた。
「おぉ、さとり。事情は知ってるか？あんたをほったらかしにして勝手に話をつけてて悪かったな」と

さとりはそれに、
「いえ・・・」
と、淡泊な返事を寄越すだけだった。

そうして続けざまに、彼女が入ってきたことで動きが止まったいくつもの人妖達の姿を見渡しながら、こう続けた。

「皆さん・・・私達は、もう一度オルファンの体内に入り対話を試みることで、あることを知りました。今からそのことをお話します」

あることを？
こっちもこっちで話さないことがいくらでもあるのだが・・・

そんなことを考える人妖達に対し、さとりは、かねてより皆に伝えようとしていたことを、余さず全て説明した。

グランチャーにも、母となるオルファンが存在していること。
そして、ブレンのオルファンともう一体オルファンは、この幻想郷にくる以前に互いに出逢っていて、戦いを続けていたこと。
やがてその戦いの結果、二体のオルファンはオーガニックエナジーを失い宇宙を漂流していたこと。
もう一体のオルファンからはぐれたオーガニックプレートが、ブレンのオルファンに張り付き、難を逃れていたこと。
そうしてそれが、妹紅や、あるいは咲夜達が出逢ったグランチャーであるということ。
この幻想郷に現れたオルファンとアンチボディは、戦いの末にこの地に迷い込んできたことだ。

さとりの予想していた通りだった。

彼女の語る言葉を驚愕と共に受け入れることがなかった者は、この場にはひとりとしていなかった。

第十四話　その４

しかし、これもまた予想した通りというべきか。
さとりがオルファンの記憶の一端を伝えたとしても、それで何かが変わるというわけではなかった。

結局、オルファンが幻想郷に来るより以前何をしていたのか知っても、この幻想郷で、ブレンとグランチャーは今も戦っている。
互いの目的のために。しかも、幻想郷の存続を左右するような危険性を孕んで。
そうである以上、紅魔館のグランチャーを撃破する決定に変わりはなかった。

とはいえ、さとりの言葉が重大な意味を持っているのも確かだった。
ブレンとグランチャーは同じアンチボディであるのに、全く対極にいるような性質を持っている。
陰陽とかプラスマイナスほどにはっきりと反発し合っている。
その理由は、それぞれ別のオルファンから生み出されたためなのか・・・？

魔理沙は永琳ほど人の身体には詳しくない。
しかし、人体に備わる免疫機構というものは、非自己、即ち自分の身体に元々備わっていないものが侵入すると、例えそれが必要なものであっても攻撃しようとする、ということは知っている。
例えば、何らかの理由で他者から臓器を移植されたとして（なんとも末恐ろしい話だが）、その臓器ですら、免疫機構の攻撃対象にな

る。
自分自身が持つものと全く同じ、まして、臓器不全の者にとっては、言い方は悪いかもしれないが、遥かに良質なものであっても、感情とか理性を抜きにして生理的、生物学的に攻撃を始めてしまう。

さとりは、ブレンとグランチャー、さらにいえば二体のオルファンが戦うのは、不安や恐れのためだというが、魔理沙にはそれが、前述のような生理的なものからくる感情であると考えた。
オルファンが互いの存在を自己にあらざるものとして認識し、攻撃した。
ブレンとグランチャーもそうだろう。
似ているが同じではない、まして自分達自身でもない存在を、敵として認識している。

今思い出したが、そもそもアンチボディとは、オルファンが生み出した抗体であるからという理由で名付けられたものだ。
抗体というのは、前述した免疫機構の一端を担っているものである。
確か永琳が、それとこれとは別で、完全に同一のものではないと言っていたが、逆に全くの無関係という訳でもないはずだ。
抗体（アンチボディ）という名を冠されている以上、前述のような行動を彼の者達もとっているのかもしれないのだ。
自分達と限りなく似通った存在でさえ、本能的に敵と判断するということを。

ブレンは情に厚く優しいが、その一方では自分達の目的に対するストイックさも感じられた。
グランチャーと戦う時、彼の者達がまるで戦うためのマシンにでもなったかのような錯覚を覚える時がある。
それもまた、自分達がオルファンから生み出された抗体であるからなのだろうか・・・

何にせよ、ここまで来て戦いは止まらない。
さとりは、オルファンの中にある不安を取り除けば戦いは終わるだろうと考えていたが、もし彼の者達の不安が本能的なものであるなら、それを取り除くというのだから、相当に難しいだろう。

人体が免疫力を全く失えば、ただの風邪でも重度な肺炎などに繋がり生命の危機を起こすこともある。
なので、やむを得えず臓器移植した場合に免疫抑制剤を服用したりするのを除き（この辺りなると魔理沙には到底実感できない領域だ）、免疫というのは基本的に不可抗力だ。
免疫があるからこそ多くの生物は生きている。

となれば、オルファンの持つその免疫的な性質も、無くすことはできないのではないか？
彼の者達を完全に免疫機構と結び付けて考えているため、間違っている部分もあるかもしれないが、魔理沙は、決してこの考えが支離滅裂なものではないと考えていた。

そして、免疫力を失った人が少しずつ衰弱していくように、オルファン・・・そして、ブレンとグランチャーが持つ不安を打ち消すことは、本当にいい結果に繋がるとは言い切れなかった。

しかし、いざこのように、オルファンとアンチボディの謎にまつわる事実を知ってしまうと、グランチャーを倒そうとする心にほんの僅かばかりの揺らぎを感じてしまうことを、否定することはできなかった。

しかしながら、繰り返すが、グランチャーと戦わねばならないのは不可避の事実である。
さとりが知ったオルファンの過去はそれだけのこととして、割りきるしかなかった。

さとりはまた、機会があればさらにオルファンに対して心を伝え、理解を深めようと考えていた。
それはそれとして、今はとにかく戦うしかないというのは、そんなさとりにも分かっていた。

結局一同は、さとりの説明が終わり、しばらく近くにいる者と何か言い合ってどよめきを発していたのだが、いつの間にやら、今度こそ客間を後にして各々どこかへと去っていった。

次々とその場から人影がなくなっていき、やがて客間には魔理沙とさとり、それとこいしに、さとりのペットの二匹が残るだけになっていた。

魔理沙はさとりに話し合いの中で決まったことを伝えるつもりだったし、さとりもまた魔理沙からそれを聞くつもりだった。

早速魔理沙は、椅子に座っているのはもうやめて、廊下に繋がる戸の傍に立っていたさとりの方へと歩み寄った。
すでに彼女の周りには、こいし達が集まっていた。

彼女達は何でここに残っているのだろう?

彼女達は、さとりが伝えたオルファンの過去を聞いて、こちらとは別のことを感じたのだろうか。

そんなことを考えるが、魔理沙には結局何も分からなかった。

「よし、さとり。今度はこっちがあんたに説明する番だな」

そう切り出して、魔理沙はさとりに、話し合いで決まったことを大まかに伝えた。

決まっていること自体がまだ大まかなものだったので、細かく伝えようがなかった。

紅魔館のグランチャーを騙し討ち同然の方法で撃破することは、グランチャーを倒すためである以上、さとりも非情と思えるが仕方ないと考えているようだった。

しかし、そのために、美鈴には咲夜を騙す役をしてもらうことには、さすがに罪悪感を隠しきれないようだった。

さとりは、暗い表情を浮かべ、話の途中であるのも構わず、魔理沙に言う。

「さすがにそれは、美鈴さんに申し訳ないのではないでしょうか・・・」

その声に、お燐が続く。

「そうだよぅ～」

しかし魔理沙は、ぴしゃりと返した。

「申し訳ないとは言うけどなぁ、あいつはそもそも自分達の館にいるグランチャーを倒せと言ってきてるんだ。それだけのことをしているんなら、咲夜ひとり騙すぐらいのこと、あいつだってやれるだろうぜ」

「確かに・・・そうでしょうが・・・」

「とにかく、これから美鈴にこの事を伝えてくるぜ・・・そういやさとり、ここに戻ってきたんなら、あいつとも会ったんだよな？今どこにいる？」

「まだ中庭にいると思います。考えることがあるらしいって」

さとりから美鈴の居場所を聞いた魔理沙は、すぐに彼女の下へ行くことにした。

「じゃあな、ちょっと中庭まで行ってくるぜ」

と呼びかけた魔理沙の声に対するさとりの返事は、ある意味では予想できたものだった。

「私もご一緒させていただいてよいでしょうか？・・・美鈴さんには、さっきお話したオルファンの過去のことをまだ教えていないんです」

それに、こいし達も続く。

「私もー」

「となりゃ、当然あたいも」

「私もー・・・・・私も何をするの？」

こういうことを聞くのは大いに予想できたことだし、別にさとり達を連れていっても迷惑にはならないだろうから、魔理沙は快く・・・

はないが、こう応じた。

「よし、分かったぜ・・・でも、美鈴が何を決めたって、文句を言っちゃ駄目だぜ？・・・こっちの言うことを聞こうが聞くまいがな」

「それは勿論、分かっています」

そう返しつつ、さとりはこれから美鈴に咲夜を騙すように頼んだとして、彼女がどんな返事をしてくるのか、大体分かっていた。

客間に来るより前、自身の能力で感じ取った彼女の感情。

その燃え盛る業火のような怨念の中に、微かに、しかし強く感じる、覚悟と呼べそうなものがあった。

必要とあらば、いかなることでもやってのけるような、そんな意志をだ。

※

話し合いが終わり、屋敷の中に割り振られたそれぞれの部屋に戻っていたのは、妹紅と慧音も同じだった。

ただ、二人の部屋はそれぞれ別にある。

だが今は、慧音が妹紅の部屋にお邪魔して、一緒にいた。

部屋の中は、彼女らが二人一緒に寝ても（なんとか）大丈夫そうな大きさのベッドもあり、決して広いとは言えないが、狭くもなかっ

た。
小さな机と椅子とかもある。
一生ここで過ごせというならともかく、一時身を寄せるだけなら、問題ないと思える内装だった。

他の者達にも同じような部屋が用意されているのだろう。
改めて考えるとこの地霊殿、まともな住人がさとりとこいしだけであり、あとはお燐とお空も一応住人として数えられるとして、彼女らだけが住むにしては余りに広すぎるような気がした。

まあ、だからといってその理由を詮索するような気はない。
何であれ、地霊殿がこうもだだっ広いおかげで、地底にやって来た人妖をおいておくこともできるのだ。
要するに、都合がいいわけだ。
もうこの際だから、それを理由にしても構わないではないか。

それ以上に慧音には、聞きたいことがあった。
そのためにも、妹紅の後についていき、彼女の部屋へと訪れていたのだ。

そして、さとりが伝えた、オルファンが幻想郷にやってくる以前の出来事・・・ふたつのオルファンの戦いの事実は、彼女ら二人にとっては殊更大きな意味を持っていた。
グランチャーの母なるもうひとりのオルファンと、グランチャーがその母とはぐれた迷い子とほとんど同然であるということは、少なくとも慧音にとっては、グランチャーへの想いを揺るがせるものであった。
あの、狂暴なれど自分の役目に実直であろうとしたあのグランチャーへの想いを、改めさせるほどに。

そして妹紅もまた、心を振り子のように揺らしているのか？

それが分からなかった。

妹紅は、グランチャーを打ち倒そうとしている魔理沙達に全面的に賛同しているように見えていた。

もし本当にそうであるなら、その理由が知りたかった。

部屋に戻ってくるなり、徐にベッドの上にボフンと腰を降ろして座り込んだ妹紅が、そのまま両手のひらもベッドの上に置いて、背中側に体重をかけながら言った。

「グランチャーは、自分達のいるべき場所から離れてしまって、寂しかったんだな．．．それできっと、この幻想郷にきて、オルフェンと一緒に居られてるブレン達を羨ましく思ってるのかもしれない．．．私のグランチャーは、何も辛そうなところは見せなかったけど．．．でも、きっと．．．自分達の居場所に戻りたいんだろうね」

この言葉を聞いて、はっきり分かった。

妹紅はやはり、グランチャーに対する想いを捨ててなどいない。

でなければ、このような言葉を語ることなど、できるはずがないのだ。

妹紅は、まだグランチャーのことを忘れていない。

むしろその情愛にも似た感情をより一層強めているように、慧音には思えた。

だからこそ、彼女がグランチャーを殺そうとする魔理沙達を黙って見ている理由が分からなくなる。

慧音は意気を決めて、妹紅に対しこの疑問をぶつけてみた。

彼女が徐に口を開く。

「なあ妹紅・・・そうまで言える君が、魔理沙達のやろうとしていることに、何も言わないでいる・・・どうしてなんですか？」

まさしく藪から棒、予想外だった質問に、妹紅はベッドに座ったまま呆気にとられた。

が、慧音の言った言葉の意味が分からないというわけではなかった。

びっくりした様子で丸くなった眼を先程と同じ開き具合に戻して、しばらく黙り込んだ妹紅だったが、何故だか急にうっすらと笑みを浮かべて、それから、慧音の疑問に対して応えて見せた。

「魔理沙達には、文句はない・・・あいつらはあいつらで、ブレンのことを信じている。だからグランチャーをやろうっていうなら、多少卑怯な真似をするのも、仕方ないと思う」

「割りきってるの？」

「グランチャーが可哀想だとは思う・・・けど、グランチャーだって、ブレンを容赦なくやろうと考えてる。私によく回るだけの脳みそがあれば、輝夜のブレンを徹底的に虐め抜く方法だって、考えてたかもしれないんだ・・・だから今回ばかりは、私がとやかく言うことはできないよ」

「でもそれなら、わざわざグランチャーをやってしまうための策略に加担することはないんじゃ・・・」

「それなんだけどな・・・私は別に、魔理沙達の策の片棒を担ぐつもりはないんだよ」
「え・・・？」

今回ばかりはさすがに、妹紅の言っていることの意味が理解できなかった。
片棒を担ぐつもりはないとは・・・
担ぐつもりだからこそ魔理沙達に協力するのではないだろうか？

慧音は時々、妹紅のことが分からなくなることがある。
彼女の心の底の方にある気持ちや考えまでは、どうしても考えることができない。
まあ、それが人間の限界であり、人間そのものでもあるのだ。悔やむようなことではない。

しかしながら、今だけは、慧音はどうしても妹紅の考えを理解したいと望んだ。

そうしてもう一度聞き返す必要はなく、妹紅の方から、自分の語った言葉の意味を伝えてくれた。

「私はただ、他のグランチャーに乗っている奴らの顔を見てみたいだけなんだ・・・いや、グランチャーをどう思ってるのか知りたい」
「・・・・・・」
「あの早苗というのも、今はグランチャーに乗ってるそうじゃないか・・・あんまり面識はなかったけど、人の良さそうな人間だった。あいつはグランチャーとどう付き合ってるんだろうな・・・それに他にもあとふたり、グランチャーとその宿主がいる。そいつらのことも、知ってみたいじゃない？」

「・・・・・それだけ・・・それほどのことのために？」

「そうだ。いくら早苗達を引き付けておけといっても、紅魔館の戦闘がすぐに終わったんじゃ、動きを止めておく意味なんてない・・・誰かが、戦闘が始まるより前に教えてやらない限りはな」

「・・・っ？」

「だからまあ・・・ひとまず私は、グランチャーをやるとかそういうのは関係なしに、私以外にグランチャーに乗っている奴らの気持ちを知ってみたいんだよ」

「・・・思えば君も私も。グランチャーの姿は、あの者ひとりしか見てなかった・・・他のグランチャーは、ほとんど見る機会もなかったものな」

「そうだよ」

「・・・しかし妹紅。それは・・・」

慧音はあることが、何だかとても恐ろしく思えた。

恐ろしいというか、その危うさが何かを起こしてしまいそうで、不安になった。

先程妹紅が言った。

誰かが、紅魔館で戦闘が起こることを伝えない限り、早苗達を引き付ける意味はない、と。

だが逆に言えば、事前にこちらの策略を教えておけば、彼女らはすぐにでも行動を起こし、グランチャーが生き残る確率は大きく高まる。

そして妹紅はやはり、どこまでもグランチャーへの想いを忘れていない。

いっそますますその想いを強くし、竹林にいたとき以上にグランチ

ャーを深いところまで理解しようとしているように、慧音には見えた。
そして、もし機会があるなら、妹紅は再びグランチャーの宿主になり、この地底から離れようと考えているのかもしれない。
しかしその一方で彼女は、地底に来たことで、ブレンのことも少しずつ理解しはじめていた。
一度は、輝夜同様に莫大な殺意を向けていたブレンパワードだったが、今では、グランチャーに対するものと同じだけの好意を感じていた。
グランチャーの宿主に戻ることで、再びブレンと戦うことができるか、と聞かれれば、妹紅はきっと、どう応えればいいのか分からないだろう。
しかし彼女は確かに、もう一度グランチャーの心に触れてみようと考えているはずだ。
そのふたつの感情のせめぎあいが、今胸中で起こっているのだと思う。

もちろん、これらの考えは全て、あくまでも推測である。
しかし慧音は、ただひとつの質問をすれば、この考えが正しいかどうか知ることができた。

「・・・妹紅。君は、もう一度グランチャーに乗ってみたいと思いますか？」

「・・・分からない」

妹紅のこの答えを聞けば、確信することができた。

妹紅の心は、グランチャーとブレンに対する想い、
それと、この地底でさとりや魔理沙達と共にいるという、自分自身

の立場のために揺れていた。
だからこそ、どちらかはっきりと応えることができなかった。
そして慧音が、危うく、不安だと思ったのは、その心の天秤のことであった。

もう一度、妹紅が言っていたことを考える。
誰かが紅魔館で戦闘が起こることを伝えない限り、早苗達を引き付ける意味はないと。
しかし逆に言えば、そのことを伝えれば、彼女らはすぐにでも行動を起こし、グランチャーが生き残る確率は大きく高まるだろう、と。

もしかしたら妹紅は、実際に早苗達に対して、こちらの策略を教えてしまうのではないだろうか。
今はそのつもりはないだろうが、何らかの理由で、妹紅が早苗達の仲間になろうという『ふり』を、ふりでなくすることだって十分あり得る。
そうして、本当に彼女らの仲間になれば、トロイの木馬の中に潜んでいた兵士が、敵方につくなどということになるわけだ。

別に、グランチャーの側に戻ることに対して何か言うわけでない。
しかし今回については、妹紅が再びグランチャーを信じることが、即ち、彼女を信用している魔理沙達のことを裏切ることを意味しているのだ。

それは、間違いなくいけないことだと思った。

妹紅の言葉を聞き、それから何も言うことができなくなり、黙り込

んだままじっと立ち尽くし彼女の顔を見つめていた慧音。

そして、同じように彼女の方を見返していた妹紅は、またしても突然、少しだけ肩を揺らしながら、乾いた笑い声を発した。

「ふ・・・ふっふ」

「・・・・・・・」

あまりに戸惑い反応することさえできない慧音に対し、彼女は静かに言葉を続けた。

「何だか私、さとりの真似事ができるようになったみたいだ・・・慧音の考えていることなら、よく分かる」

「・・・・・・・」

「心配しなくていい。グランチャーのことがあるからって、魔理沙達を裏切るような私なら、自分自身で軽蔑するさ・・・あんただって、きっと離れていく。それこそ厭だ」

そう語りながら笑みを浮かべる妹紅の顔には、どことなく頼もしささえ感じられる凛々しい色があった。

この顔ができる妹紅なら、きっと信じて大丈夫だ、と思えるだけの。

妹紅も分かっているのだろう。

魔理沙達は紅魔館のグランチャーを撃破するつもりでいるが、粉々に爆発させて、宿主である咲夜まで殺すようなつもりはない。

美鈴がそう望んでいるからだ。

決して咲夜を死なせてしまうような戦いはしないし、そもそも彼女がグランチャーに乗り込む前に決着をつけるつもりだった。

だが、逆に咲夜達、即ちグランチャーは、ブレンに対して遠慮はしないだろう。
宿主がうまく彼の者達の闘争心を抑えてくれれば、向こうもこちらと同様、宿主ごと殺すような戦いはしない。
だが、そうしてくれるかどうかなど、はっきりと言い切れるわけがなかった。
どちらかと言えば、望み薄な方だった。
グランチャーに乗り、彼の者のブレンに対する敵意に感化された妹紅は、むしろ進んで輝夜をも殺めようとしたのだから。
そういう意思を呼び起こすのが、グランチャーの性質のひとつであった。

咲夜、そして早苗達はどうだ？
もし妹紅が下手に彼女らを焚き付け、こちらと向こうの全戦力がぶつかりあった時、最悪の場合どうなるのか？

慧音には分かっていた。
妹紅だって分かっているはず。
一応は互いに見知った間柄である魔理沙や霊夢が、その身を砕かれて死ぬところなど、見たくはない。
少なくとも慧音にとっては、（彼の者には悪いが）グランチャーが一体死ぬことよりもだ。

大丈夫だ。信じよう。
なんせあの妹紅なのだから。
魔理沙達からの信用を無碍にするようなことだけはしないはずだ。

慧音の脳裏に沸き立つ考えは、確かに間違いではないし、可能性も０ではないだろう。
だが、あくまでもそれだけだ。

ただの考えすぎ、無くはないが、在るはずもないことだ。
0でなくとも、0．1はほとんど0と同じではないか。
気にしなくていいだろう。

何より、妹紅を疑うようなことを考えるのは、彼女に対して申し訳ないではないか。
慧音は胸中で自らにそう呼び掛けた。

しかし．．．

「心配ないさ．．．」

そう言いながらも妹紅は、顔を横に向け、慧音から視線を逸らすようにした。同時に、慧音の視線から逃れるようにした。
それと共に、慧音の感じた妹紅の持つ頼もしさのようなものは突然、初めから無かったかのように消え失せ、その代わり、彼女の横顔がなす物憂(ものう)げな表情からは、慧音が感じているのと同じような不安の色が見えた。

そう、不安だ。
大きな不安を抱いているのは妹紅も同じだった。
彼女自身、彼女がこれからやるかもしれない行いを、恐れていたのだ。

何かが．．．胸の奥底から何かが湧き出てくるような、動悸とはまた違う息苦しさを感じて、慧音は思わず口を開いていた。

「さとりさんの真似事っていうなら、私にだってできている．．．

妹紅、君は・・・っ」

「・・・・・・」

慧音はその先は何も言わなかったし、妹紅はそもそも言葉を発して返事することさえしなかった。

何にせよ、彼女はすでに、自分のやるべきことを決めている。口だけでもああ言っている以上、その意思を曲げるつもりもないのだろう。

妹紅がグランチャーを駆る者達と対面するために行動を起こすことは、もう決まり切っていたことになっていた。

後もう何日かすれば・・・早ければ明日にも、彼女と慧音は行動を開始することになるだろう。

しかしそれがこの先どういう結果をもたらすか。

それは、深い闇の中に隠され、見やることはできなかった。

妹紅の中にある、忘れられないグランチャーへの想いが、どういう形を成していくのかも。

地霊殿の質素な部屋の中に、あまりにも静寂で、澄み渡っていて、そして重苦しい空気が流れる。

慧音は妹紅といる中で、このような雰囲気の中に入り込むようなことも何度かあった。

妹紅は、彼女自身の境遇もあって、時折荒んだ心を見せるときもある。
そういう時二人は、決して和やかと言う事ができない空気に包みこまれながら、しばらく辛い時間を過ごしていくことになるのだ。
しかしながら、何度かそういう空気に触れる中で、妹紅の心の理解を深めている内に、多少の重苦しい空気などは気にならなくなった。
互いが信頼し合っていることが分かれば、負の気象が周囲に蔓延しようとも、ふたりの心を苛むことはできない。

しかし、今回は特別だった。

慧音は、妹紅の持つ優しさというか、一種の人侠にも似た（似ていないかもしれないが）情の厚さ。そして、永い孤独の中にあった彼女にとって、彼女のことを理解できる者の存在がどこまでも大きな価値をもっていること．．．グランチャーもまたその存在になれているのかもしれないことが分かるから、
だからこそ、そのために、糸のように狭い足場の上で不安定に揺れ動き、いつ落ちていくかも分からないような今の妹紅の心境を、いたたまれなく思った。

※

美鈴がいるという中庭へと向かう魔理沙とさとり、そしてこいし達三人。
途中さとりは、屋敷の中で美鈴を居させてやることができそうな部屋を探し、ちょうどおあつらえ向きのものがあるのを見つけていた。

次に会う時には、彼女に用意した部屋を教えておくと伝えていたのだ、その約束は守っておかないといけない。

そんなことを経て、一同は中庭へと続く戸を開け、その向こう・・・余分だと思えるほどだだっ広い中庭へと出ていった。
地の底というわりには中々に柔らかい土を踏みしめながら数歩進んださとり達は、静かに佇んでいるブレン達からやや距離を置くように、庭の中心にあぐらをかいて座り込んでいる妹紅の姿を見た。

あぐらをかいている割にはどこか堅苦しい印象を受ける彼女は、少し俯き気味になって深く眼を閉じ、ぴくりとも動いていなかった。
まるで色の塗られた石膏の像か何かのように、生きているという印象が見受けられないほど、じっとその身を固めていた。

その姿を見て、お空が言う。
「なにあれ？寝てる・・・」

それにさとりが、こう返す。
「違うわ。あれ、瞑想しているのよ、きっと」

「めいそう～？」
こいしが不思議そうに聞き返してきた。

それにはただ、
「うん」
と、どういう意味合いで発せられたのかも分からないような声を返し、さとりは、中庭の真ん中で静かに佇む、時間から置き去りにされたように動くことを放棄している美鈴の姿を見つめた。

そうすると、彼女が決して石膏の塊でも、生きていないわけでも、時間から置き去りにさられているわけでもないということがよく分かる。

彼女の身体から何か言い様のない、うっすらとした霧・・・燐光を放つ霧のようなものが放出されている・・・ように見える。
それは、彼女が生み出す、『気』の光であった。

美鈴の中にある生きる気。妖怪としての気。
いうなれば、オルファンやアンチボディが求め、そしてさとりにも備わっている、オーガニックエナジー。
それを練り上げて視覚化させたような・・・そんな気だ。

その一方で、さとりは美鈴から心・・・感情を感じることができなくなっていた。
しかしそれは、かつてこいしがそうしたように、本当に心を閉ざしたというわけではない。

あれは、精進が至る最も深い領域・・・心を以って心を打ち消す技だ。
己の中の煩悩を打ち消し、身体の奥底に眠る生命の気を練り上げ、高めるための修行とも呼べるもの。
さとりにはそういうことはよく分からないが、美鈴がやっていることが、そのような類のものであるという確信があった。

彼女は、自らの精神を統一し、その生命の力を高めているのだ。
しかも、驚くほどに強かに、直向きに。全くの無心の境地に至るほど、実直に。
先程さとりに見せたマグマのような怒りもまた、微塵にも感じなく

なっていた。

だがさとりは、じっと動かず深く眼を閉じ、即身仏にでもなったような印象を受ける美鈴から、言いようのない悲壮感を感じた。

確か、先程も同じ感覚を受けた。

その時はあくまでもぼんやりとした概念的な印象でしかなかったが、今回は、未だおぼろげではありながらも、手で触れられそうな・・・心に当たる確かな感触があった。

空虚な到達点へと至るための道を力強く突き進むような、そんな感覚が。

さとりは何故だか、脳裏でこう呟いていた。

――・・・ああやって、これから自分がいくべき場所へ想いを馳せているのかしら・・・――

第十四話　その5

「なんだぁ。あんなことのためにここに残ってたのか」

そんなことを言いながら再び歩を進め、微動だにしない美鈴の方へと歩み寄っていく魔理沙。
さとりやこいし達もその後に続いた。

と、美鈴の身体があともう2～3mというところにまで近づいた時、深く閉ざされていた彼の両の眼が、突然開かれた。

あまりに急に眼が開いたものだから、その様はさながら石膏像に生命が吹き込まれるごとくだ。

びっくりして、思わず
「んおぉっ」
と珍妙な声を上げる魔理沙に対し、彼女とさとり達の姿に気づいた（気づいたからこそ眼を開いた？）美鈴は、開口一番に言った。

「これは、魔理沙に、さとりさん．．．それにお空も．．．そっちのお二人は？」

その声に、すぐにさとりが応える。
「こちらの猫はお燐と言います。お空と同様、私のペットです。で、もうひとりはこいしと言います、私の妹です」

「おぉーっ、お空の友達に、さとりさんの妹様ですか」
美鈴は、無駄に大きな声を上げると、あぐらをかいていた両の足をほどくと、右足の裏で地面を踏みしめ膝を上に向けて、立ち上がる直前といった姿勢になった。

実際美鈴はそこから、折り曲げた状態で地についていた右足を勢いよく伸ばして、まるで飛び上がるように身体全体を跳ねあげて、その勢いのまま、太股から浮き上がった左足も地面につけ、立ち上がった。

身体を跳ねあげた勢いが余って、まるで両足で『ケンケン』するように、二度ほど小さくジャンプするのが、単に立ち上がるだけなのに、大袈裟だな、という印象をさとりに与えた。

ともかくとして、ありすぎるほどに勢いをつけて立ち上がった美鈴はそのまま、さとりのすぐそばに隣り合っていたこいしとお燐に向かって、
「紅　美鈴です。よろしくお願いします」
と言ってから、恭しく一礼した。

礼をされたふたりは、しばらくぼーっと、垂れた頭がまたゆっくり上がっていくのを眺めていたが、やがてこいしが、美鈴のこの挨拶に、
「よろしくお願いしまーす」
と応えながら、丁寧にお辞儀した。

お燐の方は、頭を下げるようなことすらせず、右手を顔の高さでひらひらさせながら、
「よろしくねぇ～」
と続いた。

さて、こんなやり取りもこれまでにして、魔理沙はすぐに本題を切り出すことにした。

「挨拶と自己紹介も終わったことだし、ちょっとあんたに頼みたいことがあるんだが」

この声を聞き、魔理沙の方に眼を向けた美鈴に、彼女は続けて言った。

「こっちでいろいろ話し合って、あんたの望みをどうやって叶えてやるのか決めたんだぜ．．．まぁ、まずはそれを伝えるぜ」

そうして彼女は、美鈴に話し合いで決まったことを伝えて、その上で、グランチャーを確実に倒すため、咲夜をどこかに引き付けてくれるように頼んだ。

引き受けてくれるかは分からない。

最悪拒否されたら、美鈴のことを小馬鹿にして焚き付けることで無理矢理聞き入れさせるか、あるいはすっぱり諦めて別の方法を考えるしかないか。

そんな魔理沙の考え、そして、美鈴は何と応えるのか心待ちにしているさとり達の気持ちとは裏腹に、美鈴の返事は、いっそ戸惑うほどに早く、落ち着いたものだった。

「分かりました。私にできることなら、何だってしましょう」

これには、先程さとりに対して、美鈴は必ず賛同すると言い張っていた魔理沙でさえも、呆気にとられた。

何故だか慌てたような態度になり、あたふたしながら彼女が言い返す。

「ま、まぁ待てって。もうちょっとぐらい考えたり、悩んだりしていいんだぜ？」

が、美鈴はその声に対しても、やはり落ち着いた様子で応える。

「いいですよもう。咲夜さんの駆るグランチャーを殺めようとしていて、咲夜さん本人には何もできないなんてのは情けないですからね・・・心は決まっています」

「あ・・・あぁ～そうかい」

魔理沙が考えていた通りではあった。

美鈴は自分のやろうとしていることにしっかりと責任を持った上で、いかなる行動でもとるつもりでいた。

そのことが改めてよく分かったので、魔理沙はひとまず混乱するのはやめて、落ち着くことができた。

にしても、やはり美鈴の返事はあまりに早すぎたように感じる。

二つ返事というものですらなく、まるで最初からこちらが頼みにくることを知っていて、その上でどう返事するのかをあらかじめ決めていたかのようだ。

いくら理屈で考えを巡らせることができているといっても、さすがにほんの少しぐらいは苦悩することだってあるだろう。

何一つ迷いなく返事できるというのは、何だか不思議だった。

しかしなんであれ、これで美鈴がこちらに協力してくれるようになったのは確かだった。
いろいろと懸念していたことは全て杞憂に終わったらしく、そのことについてはよかった。

と、すでにその意識を、グランチャーを撃破することだけに向けている様子の美鈴が、続けて聞いてくる。

「それで、私は具体的に何をすればいいんですか？」

「え？・・・あぁ、そういうことまでは、まだ決められてないんだぜ。また明日ゆっくり考えとくさ」

正直にそう語る魔理沙。

今になって急に、彼女は強い眠気に苛まれていた。
眠気というよりかは、疲労感だろうか。
地底にいると時間の感覚がおかしくなりそうだが、おそらく今は夜になり始めたころだろうと思う。
人間というのは、夜になれば眠る生き物なのだ。
とはいえ、まだ夜になっても間もない時分だろう。
こういう時間では、子供だって眠りはしない。

しかしながら、今日の魔理沙はとことん疲れていた。
朝から、椛が魔法の森での戦闘を察知し、こちらがその戦闘に介入し、必死の思いで戦った。
そうしてその成果も出すことができず、穏やかな失意の中で地霊殿

に戻ってきた矢先に美鈴が現れ、彼女の発言より、紅魔館のグランチャーを倒すための話し合いが始まった。

それが全て今日の出来事なのである。
さすがに草臥れてしまっていた。

だから、という訳でもないが、細かいことはまた明日考えることにして、今日のところはもう休みたかったのだ。

だから美鈴に対しても、まだ何も決まっていないから説明のしようがないと適当に伝えて、話を終わらせようとした。

しかし、そんな魔理沙の考えを余所に、美鈴は真っ直ぐな眼差しで魔理沙の方を見ながら、話を切り上げることなく言った。

「私に考えがあるんです。一度聞いていただけますか？いろいろ説明しないといけないこともあるし・・・」

かくいう美鈴には少々悪いが、先程から俄然、力が抜け落ちんばかりの疲労感に包まれていた魔理沙は、反射的にこう言うことで、彼女の発言を流した。

「そういうことも明日聞くことにしよう・・・もう夜だぜ。こっからは『ＯＦＦ』の時間だ」
「オフってあんた・・・」
「分かってるって、今回だけは勘弁してくれぇ。疲れたんだぜ」
「・・・はぁ、分かりました」
美鈴も、今日魔理沙達がグランチャーと戦ったことを聞いているので、彼女らが疲れているということも充分、分かっていた。

一応はこちらの言葉に応じた彼女に対し、魔理沙は最後に、
「そういうわけなんで、また明日話を聞くぜ・・・・・ま、あんたもこれで、地霊殿の居候の仲間入りだ、仲良くしような」
とだけ言うと、踵を返してそそくさと歩きだし、屋敷の方へと向かっていった。
そうして、中に繋がる戸の直前まで近寄ると、そのままその戸を開け放って、向こう側へと入っていく。開けられた戸が閉められると同時に、その場に残っていたさとり達の視界中で小さくなっていった彼女の姿も、見えなくなった。

去っていく魔理沙の背中を眼で追っていたさとりだが、それも屋敷の中へと入っていき見えなくなったため、次いで美鈴の方へと眼を向け直す。
彼女にはいろいろと言っておかなければならないことがあったのだが、何故かさとりは脳裏に浮かぶいくつかの言葉の中から、最初にこんなものを抜きだしていた。

「・・・大丈夫なんですか？」
気が付いたら言っていた言葉である。
もちろんこれは、美鈴が咲夜を騙すような役を進んで引き受けていることに後ろめたさを感じてのものだ。
しかし、これにはさとり自身、どうしてこんなことを聞いたのだろうと戸惑うような気分だった。
一瞬だけ、自分がどういう考えでこんなことを聞いたのかさえ、分からないほどだった。
だがそれに対して、美鈴の返事は驚くほどにすぐだった。
主語の欠けているさとりの問いの意味を、はっきりと分かっているらしかった。

「大丈夫ですよ。心配はご無用です」

「・・・・・・」
さとりは、続く言葉をしばらくの間言うことができなかった。
彼女についてきたこいしやお空達も、ぼーっと美鈴の顔を見つめているばかりだ。

美鈴の言葉に対して返す言葉が見つからない以上、さとりは、自分から質問した側なのだが、もうこの質問のことはすっかり忘れて、他に彼女に対して言うべきことに意識を向けることにした。

気を取り直して、口を開く。
「あの、それと・・・先程お約束していた通り、貴方の部屋をご用意できたんで、これから案内します」
それから続いて、こいし達に対し、
「貴方達はもういいから、部屋に戻っていて・・・それか、ブレン達とここにいる？」
と伝えた。

美鈴の方は、
「お願いします」
と返事し、こいしは、
「好きなようにしてるよ」
と応えた。

それを聞いて、こいし達に眼を向けたまま小さく頷いたさとりは、再度美鈴の方を向いて、
「それじゃぁ、行きましょう。一緒にいらしてください」
と呼びかけ、先に去っていった魔理沙を追うように、屋敷に入るべく歩き始めた。
美鈴もその背中を追い、歩を進める。

さとりは、静かに中庭を離れ、数十秒前に魔理沙が開け放った戸の前に歩み寄ると、彼女と同じように開けた。
そうして先に美鈴を中に招き入れてから、それに続いて、戸を閉めながら中に入っていく。
二人は、ブレン達か佇むこの空間から姿を消した。

さて、今となってはブレン以外にこの場に残っているのは、こいしと、さとりのペットの二匹だけだった。

姉の姿が、閉ざされた戸の向こうに消えて見えなくなった後も、しばらくその帳(とばり)を突き抜けて視線を送っていたこいしだったが、思い直したようにその視線を外すと、中庭の中に佇む彼の者．．．さとりを宿し、同時に彼女に宿る関係である、薄紫色のブレンへと振り向いていた。

そして、にこやかな笑みを浮かべて、両手を大きく、抱きつくように左右に広げると、ゆっくりと彼の者の方に歩み寄りながら、言った。

「ブレーン！ちょっとの間一緒にいようよ」

その声を聞き、ブレンがぶるぶると小さく鳴いた。
さとりや魔理沙はその、言葉として聞くことのできない声を介して、心に直接響くブレンの意思を聞いている。
しかし残念ながら、こいしにはその声は聞こえなかった。
心を一度閉ざしても、永い間そのまま生きていけばある程度、知識に近い形で感情というものは持てるようになる。
常識的に、こういう時にはこういう気持ちになって、こういうこと

を言うものだということが、感覚でなく、いうなれば方法論として身につくわけだ。
おかげでこいしはそれと一緒に、幻想郷の住人には欠如しがちな、多少なりの常識というものを持ち合わせることにもなっていた。
まぁ、初対面の人には不躾な態度を取らないとか、そういう基本的なことだけだが・・・

しかし、そのようなことはできても、結局のところ、閉じた眼では人の心を知ることはできないのだ。
感情の仕組みが分かっても、それはあくまでも表層的なことばかりで、奥底にある本当の心を知ることはできない。

だから、彼女がいかにブレンに呼びかけようとも、それに対する返事が、こいしには分からないのだ。
憶測だけで考えるか、あるいは、彼女と違い一応はブレンの声が聞こえるらしいお燐達に間を取り持ってもらうしかなかった。
しかしこいしは、後者はしなかった。
面倒くさいということもあるし、自ら望んで心を閉ざした以上、人の心を知ろうと望むことはいけないことであると考えていたのだ。
そういうのが、けじめをつけるということだと知っているからだ。
辛いと思う気持ちは、概念としては分かるが、感情としては持ち合わせていないから、正直いって気に病むこともなかった。

そういう意味では、彼女とブレンの間で交わされているように見えるその会話は、実はそのほとんどがこいしの一方的な妄想が含まれているものであるかもしれないのだ。

ブレンの足元にまで歩み寄ったところで、立ち止り、広げた両腕も

降ろしたこいしが口を開き、穏やかな口調で言葉を連ねる。
「火傷の傷はどう？まだ痛いの？・・・うん、大丈夫みたいね。もうちょっとで治りそうだね・・・・・お姉ちゃんは今日ねぇ、いろいろ考えることがあって、疲れたみたいなの、美鈴さんをお部屋に連れて行ってあげないといけないしね、だから今は一緒にいてあげられないけど、いいよね？もしかしたら、後で来てくれるかもしれないけど・・・今日はもう、来なくても構わないって思ってあげてよね・・・・・ん～、偉いねぇブレンは」

お燐達は、そんなさとりとブレンを交互に見やっていた。
お燐もまた、こいしには他人の心の声が聞こえないことは承知であったが、こいしに申し訳がないと、そのことを強く意識しないように心がけている内にいつの間にやら、霧が失せるようにそのことを忘れてしまっていた。
お空はそもそも、知ったその場から忘れてしまっている。
だからこいしが口々に語る声も、しっかりとしたブレンとの会話として成立していると思いこんでいた。

と、そんな中だった。
こいし達は、こちらに呼びかけてくるふたつの大きな声を聞き、咄嗟にその声の方向へと振り返っていた。

「こいしちゃんにお燐に・・・八咫烏をその身に宿す（クセに威厳も糞もない）お空さんじゃないですか～？」
「ブレンとお話～？」
文とはたてだ。
ふたりはこいし達から見て上の方、中庭の上空でその特徴的な黒い翼を羽ばたかせながら浮遊して、今まさにどこかへと飛び立とうと

していた。

何事か言っているはたての言葉には応えず、こいしは逆に、やや遠くにいるふたりにも聞こえるように大声で、こんな言葉を投げかけていた。

「どこいくのー？」

それに、文が応えた。

「早苗さんがグランチャーに乗ってたって話でしょ？だから今から守矢神社にいって、話を聞いてくるんです。今はもう夜なんだから、普通はいるはずです」

逆に、普通でなければ・・・

口外にこう付け足すのが、こいしには感情ではなく、おそらくそうだろうという推測として分かった。

まあとりあえず、天狗であるふたりなら、妖怪の山にある神社にぐらいすぐにいけるだろうし、聞くことを聞いたら・・・というより確かめることを確かめたら、同じようにすぐ帰ってもこれるだろう」

こいしは高々と腕を上げて、それを大きく振りながら、それと心持ち同じくらいに大きな声で文達に呼びかけた。

「気をつけてーっ」

お燐が続いて、

「晩ご飯までには帰ってくるんだよぅ～」

と言う。

「そもそも用意してないくせによく言うよ・・・んじゃぁ、行って

きまーす！」
と文が返し、その瞬間にはふたりはもう、ご自慢の加速力を発揮して、こいし達の視界から姿を消していた。

ごっ、と空気が唸りをあげるような音が一瞬だけ聞こえ、強い風が、中庭の上にいるこいし達の眼にも吹きつけてくる。
天狗が本気で空を飛べば、旧都の街などめちゃくちゃになりそうだが、あの二人ならそうならないように速度を加減して飛んでくれるだろう。
文とはたてが現れ、そしてすぐに去ることで、また中庭にはこいし達しかいなくなった。

ふたりが去っていった後で、もぬけの殻のような感じになっていた中庭の上空（空なのか？）をしばらくぼーっと眺めていたお燐とお空は、次いで互いに顔を付き合わせて、
「天狗って、働き者なんだねぇ～」
「烏（からす）仲間として、私も見習わなくっちゃね～」
などと言い合っていた。

そんなやりとりを端から聞きながらこいしはふと、文が語っていた早苗の名前を脳裏で反芻し、彼女のことを思い出してみた。
オルファンの異変からはそれほど付き合いはなかったが、それより以前、こっそりと地底から外に出ていたころは何度か会っていたし、話もした。
少し理解し難いことを言う以外は、とてもいい人そうに思えた。
ただ、彼女の考えは時々常識を超越して別の次元に到達する時もある。
良いように言えば、直観に従って行動しているということなのかもしれないが、そういうのはこいしは苦手だった。
常識に囚われない者を常識だけに従って相手をすることは、やはり

難しかった。
時々彼女の考えていることが、分からなくなるのだ。
まぁ、そんなことは、感情として人の心を読めない以上何度かあるが、早苗の場合はそれが特にひどかった。

とはいえ、早苗は間違いなく悪い人ではないだろうし、こいしも、決して彼女が嫌いというわけではなかった。
そもそも、そういう感情などは持ち合わせていないのだから。

そして、どうしてそんなことをしたのかは到底分からないが、早苗が地底から離れて、グランチャーに乗ることになったことも、良くないことではあるのだろうが、逆にそこまで悪いことではないように感じた。
これだけは、考えを巡らせて得たものではなく、なんとなく・・・
無意識の内に思い付いたことだった。

こいしは、続けてこちらにも、
「こいし様、どうしたんですぅ？」
と声をかけてくるお燐にはこういう形で応えた。

「ねぇ、また私達みんなで、ブレンの身体ん中に入れてもらおうよ」

「へぇ？」
いきなりどうしたんだろう、と言った感じの声を発するお燐だった、それに対して、ブレンは素直だった。こいしがこう言ってからすぐ、静かに佇立していた身体を屈ませながら、股間の装甲を開いていた。
その場にしゃがみこみ、開いた装甲の向こうに、スリットウェハーの胎内を覗かせるブレンの姿を見て、こいしは笑顔でお燐達の方を

向き、
「ね？ブレンだっていいって言ってるし」
と続ける。

「ブレンがいいってんにゃら、いってみようかな～」
「うにゅ」

お燐とお空も、しゃがみこんだブレンの姿を見て、彼の者が嫌がっておらず、むしろ進んで胎内に入るように招き入れているようだったので、それに甘んじてこいしと共に入ることに決めた。

三人は、ひとどころに集まって、順番にブレンが開けた装甲の上に上り、そのまま胎内へと入っていった。

先頭として入ったこいしは、スリットウェハーがいくつもの溝を作り出す空間の中へと入ると同時に、ブレンが発する温かさに包まれた。
この前感じた時とまったく同じ、身体が気持ちがいいと反応する感覚だ。

「あっははっ」
無意識の内にころころとした笑い声を発しながら、そのまま穴の縁から、飛び込むようにして頭から奥の壁面に突っ込んだ。
勢いよく飛び込んでも、スリットウェハーがその衝撃を包み込んで減殺し、正面から突っ込んだこいしの顔は、弾力を持った柔らかい壁の中に沈み込むように埋まった。

と、こんな勢いで頭から突っ込まれれば、普通の人間や妖怪は痛が

るだろう。
姉であるさとりなど、呻き声のひとつでもあげて昏睡するのではないか？まぁ、さすがにそれが言い過ぎだろうが・・・
ブレンの場合は、なんせ胎内の壁に突っ込んだのだ。
自分の胃袋の中で誰かが暴れ回って、痛くないわけがない。

さすがに乱暴なことをし過ぎたと気を改めた彼女は、すぐに埋まった顔を離すと、慌てた様子でスリットウェハーを両手で擦りながら、申し訳なさそうに言った。
「あぁ～、ごめんよぉ、痛かった？」

が、ブレンは特別何も言わなかった。
気にしていない様子だ。
ブレンの言葉が聞こえないこいしだが、どうやら痛くはなかったらしいということは分かった。
あるいは、本当は痛いのにやせ我慢をしているのか？
しかし、泣き声のひとつもあげないので、少なくともこちらのことを怒っていないようだった。
こういうときにブレンが本当はどういう風に考えているか分からないのだから、こいしは自分の身の上を不憫であり、不便に思う。
まぁ、しかし、身体で感じる雰囲気としては、ブレンはこちらのことを許している。
というか、そもそも怒ってもいないかもしれなかった。
だったら、無駄にくよくよしている方が逆に申し訳がないだろう。

「大丈夫みたいだねぇ、よかったよかった・・・ホントにごめんね」
もう一度謝りつつ、気を取り直してくるりと身体の向きを変えると、背中から壁面にもたれかかった。

それに続いて、お燐とお空も胎内に入ってくる。

やがて三人は仲良く寄り添いながら、ブレンの胎内で、彼の者が作る温和な空気とスリットウェハーの柔らかさに身を預けていた。
壁面に背中からもたれかかり、ぼんやりと宙を見つめながら、一様にまどろんでいた。

それは、少し前に、さとりを含めて四人で胎内に入った時とほとんど同じであった。
ただひとつ違うのは、そのさとりが今はいないということぐらいだった。
あとは、この前は火傷の痛みで辛そうにしていたブレンも、多少は回復して、落ち着いてるらしいことぐらいだ。

そして、さとりがいないということは、思った以上に強く意識することができた。
こいしにはできなかったが。

お燐が、そのまま眠ってしまいそうな声で言った。

「んにゃあぁぁ～・・・さとり様も一緒にいればねぇ～・・・」

それにお空が
「ホントにねぇ～・・・」
と続く。

こいしもそれに、賛同しそうになった。
この場にさとりもいれば、殊更心和み、安らげることだろう。
むしろ、このままさとりがブレンと一緒にいてやらないのでは、ブ

レンが寂しく思うのではないだろうか。

そんなこいしの中の考えは、無意識の内に、何故だか否定されていた。

否定というか、もっと別の考えが芽生えてきたのだ。

こいしは、気がついた時にはこんなことを言っていた。

「ん・・・これでいいよ。今はこれでいいんだよ」

その声は、表層的な意識よりも奥にある、こいしにも捨てられなかった・・・捨てずにいられたもの・・・身体の奥底に眠る、性欲が反応した言葉だった。

この場合の性欲というのは、もっと概念的な、喜びや充実感そのものを求める、意識を超越した力のことだ。

言うなれば今のこいしは、ハルトマンならぬ、『フロイトの妖怪少女』であった。

もっとも、ただそれだけに呼び起こされた言葉でないのも確かだったが。

こいし達がブレンのことをよく思っている気持ちは、さとりにも決して負けてはいないだろう。

しかし、それでもさとりと自分達とでは、何かが違う。

こいし達はブレンのことを、あくまでもただひとつの生命として、仲良くしようと思っている。

さとりはそれ以上に、ブレンパワードを、ひいてはグランチャー、そして彼の者達の母であるオルファンのことをより深く理解して、その全てを取り巻く状況をよくしようと頑張っている。

ひとりきりで、というわけではない。魔理沙達と一緒に協力してい

る。

だがそれでも、そもそもどういう生き物なのかもはっきり分からないアンチボディとオルファン。それら全てをよりよく導いていかなければならないのだから、大変なんだろうし、疲れもするんだろう。

「今はねぇ、お姉ちゃんの思うように、ゆっくりしてもらえばいいんだよ」

こいしは、続けてこう言った。

「・・・そうだにゃ～」

というお燐の返事を聞きながら、こいしはまた、こうとも考えた。

姉を助けてやるためにも、いい加減、こちらも頑張らないといけない。

この奇妙な異変のもっと奥のところまで踏み込むことで、姉や、姉に協力する者達と同じ立場に立ちたい。

こいしは、さとりやお燐、お空のことを考える時に感じる仄かに熱い感覚が、きっと巷(ちまた)に溢れるようにある、愛というものなんだろうな、と思った。

そしてそれは、心を捨てたこいしにもまだ残っていた、彼女自身の、数少ない感情であったのだ。

愛する者達のために、何かできることをする。

そうすれば、きっととても気持ちいいんだ、と思う。

そうして最後にこいしは、ブレンの胎内に満ちる温かさが睡夢を運んできそうな感覚の中で、最後に、お燐とお空のふたりにこう呼び掛けた。

「私達で、お姉ちゃんを助けようねぇ・・・ブレンも勇気づけてあげよう・・・ブレンも、それでいいよね？」

静かに響いたその声に最初に返事をしたのは、ブレンだった。
ぶるぶると鳴いたその、声に聞こえない声がなんと言っていたのかこいしには分からなかったが、優しいブレンなら、きっとこう応えてくれるだろうという考えならあった。

ブレンはきっと・・・

次いでお燐が、
「もちろんですよぅ・・・ねぇお空？」
と、返事をしつつお空に呼びかける。

が、彼女の返事は、とんとこなかった。
不思議に思って少しだけ身体を前に乗り出し、こいしを挟んで隣にいるお空の顔を伺うお燐。

そうして、彼女が反応を示さない理由がよく分かって、思わず声をあげて笑ってしまった。
「にゃっははは・・・また寝てるよぅ」

お空は、自分がお空と呼ばれているからかは分からないが、くうくう息をたてて気持ち良さそうに寝ていた。
今はまだ夜も早く、寝るような時間ではない（そもそも妖怪はその気になれば不眠不休など苦にならないのだ）が、ブレンの胎内が余

程居心地がいいのだろう。

現にこいしとお燐も、このままお空の後を追って、眠ってしまいそうだったのだから。

ふたりは面白そうに顔を見合わせて笑いあっていたのだが、一度その笑い声を止めて、スリットウェハーにもたれかかると、お燐もそこからすぐに目を閉じて寝息をたて始めた。

こいしは久しぶりに、起きていた人（？）が眠るその瞬間を見た。

「・・・・・・」

せっかく気持ち良さそうに寝ているのだ。

邪魔してはいけない。

こいしは、自分もまたスリットウェハーに深くもたれかかり、身体に染み渡っていくまどろみの中に、一時心（ひととき）を預けることにした。

「おやすみお空、おやすみお燐・・・ブレンもね、みんな・・・おやすみ・・・・・・」

そんな声が、春先に吹き付ける風のように柔らかい空気に包まれた空間を漂った後、声を発する者はもうひとりとしていなくなっていた。

第十四話　その6

陽の光というのは、朝になってからしばらくしないと空の一番高いところにまで昇ってはくれない。
しかし月の光は、夜になったと思ったその時には、もう地平線からは離れ、空の頂（いただき）に近いところにまで来ているものだ。
月は、陽が沈み始めると共にもうその顔を出しているのだが、陽の光の中にあっては、その姿は溶けいるように微かにしか見ることはできない。
だから、昇っていることに気づかないのだ。
それだけ、太陽の光というのが強いものなのだろう。

さて、夜になってまだ間もないという時分、そんな高々と昇った月の光には見向きもせず、文とはたては、自分達天狗の要塞がある妖怪の山へと急行していた。
これからいろいろとやるべきことがあるのだが、天狗のすばしっこさがあれば、そうそう時間はかからない。
さっさと済ませて、日が変わる前には地底に戻りたいところだ。

二人は、高度を上げつつ、真っ直ぐに妖怪の山へと向かって飛んでいた。

空が近い、そしてそれ以上に雲が近い。
うっすらとした白い煙のようなものが、頭上ではなく、足元に広が

っている。
もっとも、月の光だけが照らす仄暗い空の上では、はっきりと見ることができない。
まぁとにかく、人間にもつい最近（？）ようやく見れるようになったこの光景であるが、天狗達にとっては別段奇異なものでもなんでもなかった。

直接山の頂上にある守矢神社へと赴くために、高度をそこに合わせていたのだ。
地底の抜け穴から飛び出して、ちらりとだけ、月光にその美しさが栄えるオルファンの姿を一瞥しつつ飛んだ二人の視界には、三分と待たずして妖怪の山の無骨な稜線が見えてきた。
これでものんびり進んできた方だ。

確かあの山は大昔には、今はもう幻想郷にはない、日が出ずる国を代表する霊峰である富士の山と背比べをして負けた（いや、勝ったのだがいろいろ紆余曲折があったのだったか？）というみっともない山としてすっかり幻想郷に落ち着いていた。
が、みっともないといえば、その姿の方かもしれなかった。
富士の山のその美しい稜線に比べると・・・・・・いやはや。

と、そんなことを考えている間にも、もう二人は守矢神社のすぐ上空に到達し、そのまま通過してしまいそうになっていた。

「おぉっとぉ～っ」
文が急ブレーキをかけ、音の速さを超えていた彼女が、まるで突然そこに出現したかのようにぴたりと静止した。
いや、実際突然そこに現れたのだ。
０コンマ何秒前かはそこにいなかったのに、その次の瞬間にはいた。
それを突然と言わずして何と言うのか。

が、そんな文も、ほんの少しだけ減速するタイミングがずれたらしく、守矢神社の、周りの殺風景に比べると何とも不釣り合いな印象をもたらす紅い鳥居（まぁ、人が寄りつかないようなところにひっそりと建っている神社はそう少ないはないのだが、さすがに守矢の杜は人が寄りつかないの程度がひどすぎた）が、少しだけ遠くの方に見えた。

文よりも先んじて減速していたらしく、ぴったりその鳥居の上で浮遊していたはたてが、得意満面で言ってくる。

「あっはは～、みっともないったらないねぇ～、チキンレースなら負けてるよあんたぁ」

それに文は、はたてのいる場所に近づきつつ、言い返す。

「私はじっくりと考え事をしていたから遅れたの。貴方はねぇ、アメーバみたく何も考えずにいたからぴったり止まれたの？お分かり？頭の出来がよければ、その分行動はどうしても遅れちゃうのよ・・・何が言いたいのか、頭の悪い貴方のために説明するとねぇ。私は貴方よりもずっとインテリだったわけよ。で、貴方は下半身に従って生きてる、ア、ホ、ってわけよ」

が、それにはたてが同じく言い返す。

「あのねぇ、今は無駄な口論やってる場合じゃないでしょうが、やることあんだろぉ・・・そんなことも分からないのに自分をインテリって言うなんて・・・テレビの見過ぎ、漫画の読み過ぎだよ」

「そうやって自分が先にふっかけてきたことを棚に上げて、楽しい？楽しいんだ。趣味悪いねぇ、はたてさんは」

と、そこまで言ったところで、ふたりは気を取り直して言い争いはピタリと止め、自分達の仕事に戻ることにした。

鳥居の上から、社屋に続く石畳の上へと降り立つ。
鳥居をくぐらず上を跳び越えて境内に入れば、それは参拝と言えるのだろうか？などと、ぼんやりと考えてしまった。
まぁ。もしそうならそうで構わない。
今回は参拝ではなく、もっと別のことでここにきたのだから。

まどろっこしいことはなしだ。
文は石畳の上で、海老反りになるほど胸を張って大きく息を吸い込むと、次いで折り曲げたバネが弾むように逆に前のめりになって、吸い込んだ息を盛大に吐き出しながら、弾けるような声で叫んだ。

「お邪魔しまぁぁぁーーす！ご用があってきましたぁぁーーーっ！」

天の彼方まで届き、山の妖怪達がびっくりして眼を覚ますのではないかと思えるような声だった。
まぁ、ここからすぐ下にいる妖怪のほとんどは天狗であり、睡眠を必要としない妖怪の性質を活かして、人間社会では労協が黙っていないような不眠不休の生活の中、夜勤に勤しんでいる者も多かった。
なので、眼を覚ますとかそういう問題でもない。
まぁしかし、こちらの大声がもし聞こえたのなら、不審に思って何匹かの天狗がこっちにくるかもしれない。
が、それもそれで好都合だった。
文達は、然ることをやった後、天狗の上層部にいろいろと報告をするつもりだったからだ。
もし適当な天狗がくるのなら、そいつをメッセンジャにして早々に地底に帰るものもいい。
・・・まぁ、偉い人への報告に代理を寄越すなんてことが常識的に

できるわけがないので、考えるだけで実行はしないが。

とまぁ、いろいろ考える以前に、何よりまずこの神社に本来ならばいるはずの者達を呼び出すための文の大声だったが、それに対する反応がくることは、一切なかった。

文が、丸くなった背筋をまっすぐに伸ばししばらく待ってみるが、誰かが姿を見せるようなことも、声が返ってくるようなこともない。三十秒ほど待ちぼうけしても何も起こらない。そういう気配もない。

次いではたてが、指先を揃えて広げた右手を口の横にあてて、文よりは（比較的）小さな声でこう叫んだ。

「おぉーい！くっそババァの神奈子に、負け犬諏訪子！常識外れのイカレポンチ、早苗ー！みんなでてこぉ～い！」

が、やはり返事はなかった。

平時の守矢神社でこんなことを叫べば、憤慨した二柱の神と一人の人間に袋叩きにされて、汚らしい血の池で蜘蛛の糸が垂らされるのを待つ生活が始まるはずだったのだが、そんなことにもならなかった。

憤慨した三人が出てくるのは愚か、相変わらず微塵の反応も示さず、神社は不気味なほどの静けさを保ち、文とはたての大声を虚しく夜風の中に溶け込ませるばかりだった。

もう十秒ほど待って、文とはたては互いに顔を突き合わせて、無言で見つめあった。

次いで、その目線を外して、再び正面に見えるみすぼらしい神社の本堂に向けると、そちらに向かってゆっくりと歩み寄っていた。

同時に、文が言う。

「ちょいと、失礼しますよぉ～、今出てこなかった貴方達が悪いんですからねー」

そうして二人は、神社の境内の中、ありとあらゆるところを、住宅対象進入窃盗としてしょっぴかれるのを覚悟で根掘り葉掘り探し回った。

が、やはり早苗達の姿はまったく見つからない。
これで決まりだ。
正直いって想定できていたことだ。
早苗達は、二柱を含めて皆この神社を離れてどこかにいる。
そしてそこが、グランチャーと共に潜伏している、隠れ家であるのだ。

本堂を含めて、ひとしきり境内を探り終えた文とはたては、再び石畳の上で互いの顔を見合った。

さて、こうなれば、次にやることはもう事前に決めている。
天狗の上層部にまずこのことを報告し、早苗達と共にグランチャーが潜伏している場所を捜索するための部隊を編成するように要請するのだ。
それは別に、かねてより地底に派遣する予定の偵察部隊から抜き取ったのでも構わない。

なので、そのことについては何もいわず、代わりに文がこう言った。

「帰る道すがら、紅魔館も偵察しておきましょうか。あの紅　美鈴の言ってたことが本当かどうかも、確かめとかないと」

それにはたてが、

「そうだねぇ・・・まぁまずは、お偉方に報告よ」
と応えつつ、文の左横に回り込みつつ右手を彼女の右肩に置き、そのままぽんぽんと叩いた。

それに文が、嫌そうな顔をして（実際は別に嫌でもなんでもない）、吐き捨てる。
「気易く触らないでよ、気色が悪い」
それに、はたても言い返す。
「腹に溜まってる一物（いちもつ）に関しては、汚泥と糞尿を混ぜ合わせてもそれにすら劣るような汚らわしさのあんたに触れてあげてんだよ。むしろ感謝してほしいねぇ～」
「・・・はいはい。感謝はしないし、もう勝手にしてなよ・・・」

そうしてふたりは寄り添ったまま、天狗のアジトへと向かうべく山を降りていくために、石段から浮き上がり、くぐらずに跳び越えた鳥居を再び同じように跳び越えながら、守矢神社を後にした。

※

魔法の森での戦闘を終え紅魔館へと帰還した咲夜は、ひとまず第一にレミリアやパチュリーに今回の戦いを報告した。
レミリアからは、押しが弱くて逃げてきたとは情けないとのお叱りを受け、パチュリーからは、彼女がブレンとグランチャーの両者で、もしかしたら母となるオルファンが違うのかもしれないと考えていることを聞かされた。
なるほど、興味深い話ではある。

しかしながら咲夜は、アンチボディの生態やそこに隠された真実よりも、今グランチャーと共に何をするかを優先的に考えていたため、パチュリーの話は、ひとまず態度だけは真剣に聞きつつも、それが終わると同時に、聞かされたことはすぐに心の隅の方に置いておくことにした。

そんなことをしたり、一緒に撤退してきたついでに屋敷の中をうろうろしていた藍の様子を見たりしている中で、太陽が空高く上り、レミリアにとってはいけすかない時間がやってきた頃に、早苗もやや遅れて紅魔館へと撤退してきた。

それと共に、太陽の畑にいる幽香から協力を得たという話を聞いた。なのでこれから、守矢神社の神と藍を連れて、太陽の畑を今後の隠れ家にするべく交渉に向かうそうだ。
咲夜としては依然この紅魔館に残るつもりだったので、どうぞ好きにやってくれと、早苗達には同行せず、今日のところは館にいることにした。

そうして、出発する早苗達を見送りつつ、そのままやんごとなく一日を過ごすことにした。

その内早苗達が交渉を終えて結果を知らせにくるだろうとも考えていたが、そんなことはなかった。

しばらくしても、早苗達は来ない。
話し合いが長引いているのか、それともそもそも、日が変わってから報せにきてくれるのか。
いずれにせよ、日が沈み夜となった今では、もう早苗達が来ること

はないだろうな、と思えた。

そうして咲夜は、ふと気が向いたため、グランチャーの胎内にて、今のひと時を過ごすことにした。

スリットウェハーを通して見える夜空。
そこには無数の光の粒が浮遊し、それらに包みこまれるようにひときわ大きな光・・・うっすらと赤みがかった月の光が見えていた。
満月には程遠い、半分以上に暗い影が落ちているその光も、決して貧相なものなどではなかった。
柔らかい感触を持つスリットウェハーにもたれかかって・・・というか、ほとんど床に寝そべるような姿勢でその光の饗宴を眺める中で咲夜は、戦いの中にあらざるグランチャーの胎内というのが、熱く鋭いのではなく、温かく柔らかい熱で満たされていることを、改めて実感していた。

そうして、天狗が発行した新聞の記事に、間違いがあることを知った。
グランチャーだって、心穏やかな時だってある。
他者を・・・たったひとりの他者を思いやる心だってあるのだ。

そのことを示すような感覚に身を委ねる中で、咲夜は、あくまでも現実的に考えていた。

ブレンパワードの軍勢も、少しずつ力をつけている。
特にあの紫のブレンパワードは強力であるが、それに匹敵するほどに、二体のブレンが協働して放つあのチャクラの光も強力であった。
グランチャーには、その唯我独尊的な性質もあって到底放つことの

できない攻撃だ。
今のところ、こちらと向こうは頭数では互角だ。
幽香のグランチャーが加わわっても、今回の戦闘には参加しなかったさとりのブレンを合わせるとやはり同じ数だ。

全体的に見た個々の戦闘力はグランチャーの方が上である。
だが、ブレンパワードの側にも、強力な戦術的アドバンテージがあるように思えた。
実際のところ、お互いの総合的な戦力は互角、かなり狭い範囲で拮抗しているようだった。
ここで何らかのきっかけがあれば、その拮抗も崩され、どちらかの戦力が瞬く間に崩されることになるだろう。
それが、こちら側になるかもしれないのだ。

なんせよ、新たにこちらの戦力になった幽香のグランチャーに期待するとしようか。
早苗が、相当に強くて頼りになりそうだと言っていた。
試しに、
「私の駆るグランチャーよりも？」と聞いてみると、
「もしかしたら・・・」
と応えていた。
なんだか癪に障る気分ではあるが、まぁ、素直に信じさせてもらうとしよう。

そんなことを考えていると、何だか急に身体が疲れてくるように感じた。
今回の戦いでは、中々に神経をすり減らし、体力を使った。
そのツケが今になって回ってきたのか。

ほんの一瞬だけだが、今までややこしく考えを巡らせていた頭が真っ白になり、そのまま昏睡さえしてしまいそうになる咲夜だったが、そこを堪えて、すぐさま我に帰った。

それからすぐだった。
急にグランチャーが、咲夜に言ってきた。
グランチャーにしてはどこまでも珍しい、謝罪の言葉を。

そして咲夜には、何故グランチャーが今になって謝罪の言葉を投げかけてくるのか、分からなかった。
自分が謝られるようなことをした覚えはないし、グランチャーが謝るようなことをした覚えもないからだ。

だからこそ、咲夜はほとんど無意識に、グランチャーの言葉に対してこう返していた。
「済まなかったって・・・何が？」

それに、グランチャーは返す。
しかしそれを聞いた咲夜は、いっそ滑稽な気分にまでなって、思わず笑みを漏らしながら応えた。
「ふっふふ・・・ブレンとの戦いに巻き込んだことが？・・・それこそ、今更な話でしょうに」

そのために謝罪するなど、詮なきことだ。
そんな風に考える咲夜であったのだが、それに対して、グランチャーの中の咲夜に対する気持ちは、まだ和らぐ様子を見せなかった。
彼の者は続けて語りかけてくる。

「戦いの中で死ぬようなことがあれば・・・私も道連れになる？・・・・・」

確かに、そうではある。
致命傷を受けたアンチボディは、スリットウェハーをさながら爆竹のように（巨大になった爆竹はそれこそ人を殺せる）弾けさせながら死に絶える。
それに巻き込まれれば、妖精や人間は勿論、妖怪だって無事に済むかどうか。
咲夜も勿論、生きてはいられないだろう。
グランチャーはそうなることを恐れているのか？
自分が死ぬこと以上に、そのことを．．．

確信できた。
やはりグランチャーは、ただ戦うだけの、狂暴なだけの怪物などではなかった。
誰かとの絆を重んじ、その身を案ずることができる生物だったのだ。
そしてこの者は、その中のひとり。
この世に存在する、唯一無二の咲夜だけのグランチャーである。
そして、こうやって、こちらの身に降りかかるであろう危険を恐れ、それを申し訳なく思うグランチャーの心の奥底にある本当の気持ちというのが、咲夜にはぼんやりと分かった。

生命の危険を超え、互いが運命共同体になれることを、グランチャーは望んでいる。

咲夜は、しばらくぼーっと宙を眺め、次いでうっすらと開かれた眼を深く閉じ口元を綻(ほころ)ばせると、静かな口調で言った。

「簡単な話ねぇ．．．負けないように戦えばいい．．．もし負ける

ような時、死ぬことを恐れるというのなら、その時は私の方で勝手に逃げさせてもらうわ。貴方が気に病むようなことではない」

その声は、スリットウェハーが作り出す空間の中で小さく反響し、グランチャーの全身に内側から染み込んでいくように思えた。

咲夜は、寝そべっていた身体を起き上がらせてその場にあぐらをかくように座ると、閉ざした眼を開きつつ、続けて言った。

「貴方が本当に死に絶えるその時までは、私は貴方の運命にどこまでも従いましょう・・・それでも不安だというのなら、今すぐここから去り、もう入ってくるようなことはしない。貴方には見向きもしない」

最後の一言は少し厳しいかもしれないが、しかし、咲夜の正直な心境を述べた言葉ではあった。
同時に、そんなことがあり得ないということが分かっているからこそ言えた言葉でもあった。

この身を包むスリットウェハーの壁が、俄かに熱を持つ。
それは、今になれば懐かしい、咲夜が初めてこのグランチャーに乗った時に感じた熱さによく似ていた。
グランチャーの魂が歓喜し、うち震えることによって生まれる、生命の熱だ。

何故グランチャーが急に、あのようなことを言ったのかは分からない。
ブレンパワードも力をつけていると感じ、生命の危険を感じたからだろうか？

何にせよ、彼の者の恐れは、ふたりの間にある強固な繋がりを前にしては、刃と呼べるほどの鋭さを持ち合わせてはいなかった。
銀のように輝く絆の前では、不安や恐れの剣が振り下ろされたところで、傷一つつくことなく、むしろ剣の方を粉々に打ち砕くだけだ。

「ふ・・・ふ」

どうしてあんなことを聞いたのかはともかくとして、誇りと使命のために直向きでありながら、罪悪感もまた感じるグランチャーのことをますます面白く思い、そしてますます好きになった咲夜は、起こした上体を再び倒して、さっきと同じように仰向けに寝そべろうとした。

が、その時だった。
座り込んだまま、ぼんやりとスリットウェハーの向こう側に映る光景を見ていた咲夜は、館の正面玄関の戸が開いて、その中からひとつの影が出てくるのに気づいた。
ゆっくりと戸を開き、そして同じようにゆっくりと外に出ながら、ゆっくりと開いた戸を閉じたその影は、こあだ。

今はもう夜である（夜としてはまだ幾分か早い時期ではあったが）。
紅魔館の者達にとってはこれからが楽しめる時間なのであるが、それでも、わざわざ館の外にまで出てくるような者は少ない。というか、ほとんどいない。
なので、こうやって誰かが館の戸を開けて出てくることは、随分と珍しかった。
もっとも、咲夜がグランチャーと出逢ってからは、彼女がよく夜中でもグランチャーに会いに出てくることが多かったので、今更珍し

いことでもないのだろうが。

館からゆっくりと出てきたこあが、二階からせり出して雨よけ代わりになっているバルコニーの下を通り、グランチャーの前に歩み出てくる。

そうして、こちらの方をちらりと見やりながらも、すぐにその視線を逸らしてどこかへと向けて歩き始めた。

どうやら、庭先を抜けて正門へと向かうつもりのようだ。

どことなくおどおどとした様子を見せながらも、迷いなくすたすたと歩を進めるこあの姿が、すぐ眼の前を通り過ぎたと思うと、そのまま段々と遠くなっていく。

そのまま、この館らしく極彩色の花々が植えられているいくつもの花壇の合間を縫うようにして奔る道を通り、色とりどりの花に隠れて見えなくなった。

「・・・・・・？」

何事だろうか？と思う咲夜。

明らかにこあは、何かやりたいことがあって館から出てきた。

あまり、誰かが何かをしようとすることに干渉するのはよくないのだろうが、残念ながら、咲夜もご多分に漏れず自分自身の興味の方を優先してしまう気質だ。

こあが一体何をしようとしているのか、気になった。

「・・・ちょっと失礼するわね」

と、グランチャーに伝えつつ、装甲を開かせる。

そうしてすぐ、咲夜を乗せてからずっと座り込んだままのグランチャーから降りて地面に立ち、去っていったこあを追うように早足に

進み始めた咲夜。

赤と黄色、そして赤朱鷺色に染まる花の間を抜けながら、正直言って咲夜としても広すぎるだろうと思える紅魔館の庭園を進みながら、いくつも別れている道の中、真っ直ぐに正門へと抜ける道を選んで進む。

そうしているとすぐに、花壇の合間を進むこあの背中が見えてきた。
咲夜はすぐさま、彼女に対し呼びかけた。

「こあ・・・小悪魔、どうしたの？」

突然呼びかけられたものだから、髪の毛が逆立つほどにびくりと身を震わせ立ち止まり、五秒ほど固まってしまったこあ。
とりあえずこちらの声は聞こえたらしいので、そのままこあのすぐ傍へと歩み寄っていく咲夜。
五秒を過ぎてようやく、こあの方も恐る恐るといった様子でゆっくりとこちらに振り返り、咲夜の姿を眼に入れ、安心した様子で返事してきた。

「あぁ～、さ、咲夜さんですかぁ」

幽霊にでも呼びとめられたと勘違いしていたのだろうか。
幽霊よりも恐ろしい者が主人である館に住まうには間抜けな話ではあるが。

身体全体をこちらに向けてきたこあの眼の前にまで近づいたところで、咲夜は前置き無しにこう聞いた。

「急に館から出てきて、どうしたの？」

「え?・・・あぁ、あのぅ・・・美鈴さんを探しにいこうと思っていたんです」

どもりながらもこう応えたこあの声を聞き、咲夜の脳裏にはふと、一番最後に見た記憶のある美鈴の顔を思い浮かんだ。

レミリアの部屋の前で、戦慄した表情で立ち尽くしていた。
こちらを恐れていたようだ。それもそのはずだが。
その表情の奥で何を考えていたのか?
それは分からない。

・・・その美鈴を、こあが探そうと言っている?
一体何故だろうか・・・

咲夜は続けて問うた。

「美鈴が?・・・どうかしたの?」

それにこあは、なにやらとても不安そうな表情を浮かべながら応えた。

「はい・・・昼頃のことなんですけど、美鈴さんが館から突然姿を消したんです。いろんなところを探したんですけど、どこにもいなくて・・・パチュリー様に相談したら、とりあえず待ってたらその内帰ってくると言われたんで、ずっと待ってたんです・・・でも、夜になってもまだ帰ってなくて・・・それで・・・」
「もう一度探してみようと、正門に?」
「はい・・・」
「・・・・・何かあったのかしら」

「・・・きっとそうです・・・あぁ・・・もしもう一度探してもいなかったら、どうしましょう・・・」
「・・・・・・まさか・・・」

その原因を知りつつ、こあの不安そうな声を聞く中で咲夜には、美鈴が忽然と姿を消したというその原因に、自分が関わっているのではないかという考えが芽生えた。
そうして思わず口をついてでた声を、こあが不思議がって、
「どうしました？」
と問いかけてくる。

それにはひとまず、
「何でもない」と返しつつ、こう続けた。
「なら、とにかく行ってみましょう。まずはあいつを探してから、いろいろ考える」
そんな言葉を発する中で、自分の中の考えが、恐らく杞憂であるのだろうと考えることにした。

が、どうしても、胸中にうっすらと靄がかかる様に、紅い霧がかかる様に湧き出てきた不安は、消せそうになかった。

「・・・はい」
というこあの返事が、小さく聞こえてくる。

大まかな事情は聞いたので、咲夜はこあと共にまずは正門に赴き、共に美鈴を探すことにした。
月明かりにもその色彩を損なうことがない花々の群れを抜け庭園を出ると、そこにはもう館の内と外の境目である正門が見えるような

場所であった。

門番である美鈴がいなくなった以上、普段なら閉ざされることがない門は厳重に閉ざされ、外から来るありとあらゆるものを拒んでいた。

が、こんなうすっぺらい門の一枚よりも、美鈴ひとりがいる方が頑丈であることは、咲夜だって、レミリアとかだって認めてはいることなのだ。

ゆっくりと、固く閉じた門の傍にまで歩み寄る。

まずは、モダン建築とでも言うのか否か、と言った感じの紅魔館の門としては、似合うような似合わないような木製の扉にかけられている、太い閂（かんぬき）（西洋建築を現す表現ではないのだろうが）を外す。

閂というよりかは、それだけでも門の両脇を固める柱と言ってもよさそうな角材を抜き取ると、それを適当に、この閂が髪の毛一本ほどの大きさの門柱（誇張しすぎている表現であるが）の脇にかけて置いたおいた。

そうして、ふたりから見て手前側に開く扉を、こあと手分けして片方ずつ開く。

それぞれの扉の真ん中あたりにある（横の距離感での話である）取っ手を掴んで思いっきり引くと、グランチャーの身体がの三分の一くらいの大きさはありそうな巨大な門に似合う大きさの扉が、何やら重苦しい音を鳴らしながら、ゆっくりと開いていった。

そうして完全に開ききったところで、咲夜とこあは再び寄り添いながら、開け放たれた門の向こう側に眼を向けた。

そこに見えるのは、乾いた土とその向こうにある、館の前に茂る森

の木々ばかりだ。
こあが望む姿が、見えることはない。
閑散として光景が、その眼に映るばかりだ。

咲夜がふと彼女の横顔を覗ってみると、今すぐにでも泣きだしそうな顔をしていたので、慌ててなだめる。
小さいようで、小さくないようで、やっぱり小さいかもしれない背中をぽんぽん叩きながら、呼びかける。

「何で泣く・・・門番がいつもいつも門の正面にいるとは限らないでしょう・・・美鈴はもう戻っている。どこか別のところで、侵入者がこないかどうか眼を凝らしているんでしょう」

その声を聞き、こあは涙を流すのは堪えて、小さく頷きつつ、
「・・・そうですね」
と応えた。

しかしながら、
「外に出てみましょう」
と言いつつ、こあと共に門を抜け、館の敷地から外に足を踏み出した咲夜は、先程ああ言ったとして、本当に美鈴がどこか別の場所にいるのかと聞かれれば、はっきり、いる、とは応えられなかった。
むしろ、その正反対の応えしかすることができないだろう。

もし美鈴がこちらに戻ってきて門番の仕事をしているのなら、そもそもあの貧相な扉が閉ざされているわけがなかったのだから。

第十四話　その7

だから、ある意味では予想通りではあったのだ。

門から外に出て辺りを探してみたとしても、美鈴の姿が見当たらないことは。

眼に見える範囲を出来る限り探してみても、彼女が見えてくることはない。

が、まだこんなものでは、探したとは言えないだろう。

咲夜は、最早やるだけ無駄だと分かっているとしても、こあの自己満足のためにも、門から出たところで呆然と立ち尽くしていた彼女に、こう言った。

「もっと遠くの範囲まで探してみましょう。多少手間取るでしょうが、いるかもしれない」

「・・・は・・・はい」

そうしてふたりは、門の周囲だけではなく、さらにそこから離れた森の方にまで赴き、美鈴を探すことにした。

とはいえ、魔法の森などとは比ぶべくもない紅魔館の森も、その全てを探すとすれば相当な時間を要するにだろう。

真面目に探していては、夜が明けるのは間違いない。

咲夜にかかれば時間など問題にもならないのだが、労力まではそう

易々とは消すことができない。
時間がかからずとも、相当草臥れることだろう。

それに、こあはどうする。
おいてけぼりにはしたくないし、こちらからこうやって言わずとも、彼女はきっと一緒に美鈴を探そうとするだろう。
こちらで勝手に探すから大人しくしていろと伝えて、その通りにしてくれるとは思わなかった。

やむを得ず、時間は停止させず、ごくごく凡庸に、山狩りじみた捜索をしていくしかないか。
しかしそうなると、さすがに森全体を探し回るのは無理だ。

・・・いや、こあにはこあで勝手に探させて、こちらもこちらで好きにやるのもいいか。
と、考えを巡らせる。

徐に歩を進め、森の中へと足を踏み入れる直前、咲夜はこあに伝えた。
「二手に別れて探しましょう。・・・・・三時間、いえ、四時間探していなかったら、未練がましくてもまたここに戻ってくるのよ」

こあもそれに、
「分かりました、必ず戻ります」
と返事し、ふたりはそれぞれ手分けして、森の中を探っていくことになった。

これで、時間を操作しても大丈夫だ。
こあを差し置いて、四時間という制限など関係なく森の全域を探る

こともできるだろう。

もっとも、実際に森の全てを探り回って、それで美鈴が見つかるとは思えなかった。

そもそも、美鈴がどこかに姿を消してそれが戻ってきたのなら、こんな辛気臭い森の奥にいるわけがないのだ。

探せば、確かに見つかるかもしれない。

しかしせいぜい、サボタージュのためにそこら辺の茂みに隠れていた、とかだろう。

見つかるなら、咲夜が森に足を踏み入れてからすぐ、こあの大声が聞こえてくるはずだった。

が、そんなものは聞こえてこないし、咲夜が時間を操作しつつ森の中を、草根を掻き分けて進んでも、美鈴の姿が見えてくることはやはりなかった。

鬱蒼と茂る草木は、最早ある種の壁・・・緑や茶色に彩られた壁面だ。

そんな中を縫うようにして、時折スカートの裾が破れる音が聞こえ、辟易しつつも、森の中を進み、視界を覆う木々の影をひとつひとつ取り払っていく。

が、そうする度に咲夜は、この先に、こあが望むような結果がないという確信へと近付いていた。

四時間と言わず、二時間あれば、（この二時間でこあが探せるだろ

うと考えた範囲を除けば）大体、森の全体を探ることはできた。
そしてやはり、美鈴の姿はどこにもなかった。

結局、服を汚し、破いて、足にも何個かごく小さな切り傷を作ってまで密林（とまではいかない）を右往左往したのは、ただの徒労だった。
思った通り、予想以上に広い森を動き回るのには中々骨が折れ、疲労困憊と言わずとも、身体の調子はあまりいい塩梅ではなかった。

「・・・やれやれ」

木々の合間から僅かに差し込む月明かりに照らされながらひとつため息を漏らした咲夜は、ふと、そもそも何故美鈴が紅魔館からいなくなっていたのかを考えた。

そうなるとやはり、こちらが彼女に対しあまりに手厳しいことを言い過ぎたからなのだろうか、という考えが芽生えてくる。

グランチャーへの不信感を見せていた美鈴に対して、咲夜が当時抱いた感情は相当に強い憤りであった。
だからこそ、今度美鈴が余計なことをしでかしたら、実際に殺してしまうだろうと心の底から考えながら、あのようなことを言ったのだ。
だからこそ、美鈴が恐れるのも無理はないのだろう。
恐れるだけのことをしているのだから。

しかし、時が経つにつれ、そんな咲夜の心境も少しずつ落ち着いてきた。
それと共に、美鈴への憤りも薄らいでいった。
さすがに当時は、少し言い過ぎたかもしれない、と。

そうしてこの夜、グランチャーの謝罪の言葉を聞くことで、分かった。
美鈴はグランチャーを恨んだり嫌悪しているのではなく、ただこちらのことを心配していたのではないだろうか。
アンチボディ同士の戦いの中で、生命を散らすことを・・・

そう考えると、咲夜の中にあった美鈴への怒りもますます薄まり、見えなくなっていく。

しかし少なくとも、以前の咲夜の発言は、美鈴にとって大きなショックになったのだろう。
そのことで、この紅魔館から逃げるように去っていったのでは？

いや・・・さすがにそれはないだろう。
咲夜はそう信じたかった。

美鈴もそこまで軟弱ではないはずだ。
現に、咲夜があのような酷い仕打ちをしても、彼女はしばらく紅魔館に居続けていた。
というか、魔法の森での戦闘から帰還した時には、確かまだ門の前にいたはずなのである。
今の今になって、忽然と姿を消すものなのか？

こちらを恐れて逃げ出すというのなら、もっと早くそうしているはずだ。

おそらく、もっと別の理由があるのだろう。

その理由がなんなのか分からなければ意味がないが、少なくとも、こちらがその理由の一端を握っていることはない。

言い聞かせるように自分自身にそう呼び掛け、咲夜はとにかく、一旦こあと合流する場所に決めている正門の前へと戻ることにした。約束の時まではまだ有り余るほどに時間があったが、一度森の中をあらかた探り終えると、もう一度じっくり捜索してみようか、という気にはならなかった。

どこをどうやって探そうが、美鈴がいないということに関しては間違いないと確信していたからだ。

急ぐ必要はない。

今から正門に戻ったとして、こあは美鈴の捜索を続けるだろうし、いち早く戻ったところで、暇をもて余すだけだろう。

あるいは、一休みしたらもう一度森に入って、彼女を呼び戻してくるか？

彼女が納得して戻ってくれるのなら、だが。

時間操作はせず、ゆっくりと慎重に、これ以上生傷を増やさないように森を進んでいく。

おかげで、まっすぐに紅魔館に戻るだけなのに十分余りはかかってしまった。

しかし、森を抜け、ようやくその物々しい巨大な煉瓦造りの門が見えるところにまで戻ってきた咲夜は、実際にかかった時間よりも遥かに、もたもたした足取りで戻っていたのではないかと錯覚した。

なんせ、普通に戻ってきたのなら本来見えないはずの姿が、開け放たれた正門の前に見えていたからだ。

いや、門の前というより、門の両脇の柱の内の一本に、力なくもたれかかっていた。

こあだ。

四時間したら戻ってこいと言っている以上、まだ森の中にいるはずのこあが、何故か咲夜よりも先に戻っている。

しかし、そのことを奇怪に思うようなことはなかった。

咲夜には概ね、彼女がここにいる理由が見当づいていた。

森の中を掻き分けて美鈴を探すことが予想以上に過酷で、早々に諦めて帰ってきたのだろう。

それでも彼女なりには精一杯努力したということは、咲夜以上にボロボロになっている服を見れば分かる。

森の中でつまずいてこけたりしたのだろうか、スカートの裾とかだけでなく、胸の辺りまで土がついていたり、破れたりしているのを見れば、こあのことを批難するような気にはならない。

門の柱にもたれかかって顔を俯けていたこあだったが、咲夜がいることに気付き、はっとして、その顔を上げ目線をそちらに向けた。

すると突然彼女は、眼を池の水面のように潤わせて、その眼をきつく閉じたかと思うと、代わりに口を大きく開けて、声をあげて泣きはじめた。

号泣という奴だ。

咲夜は、あまりに急なことにびっくりしつつ、慌ててこあのいるところに駆け寄ると、わんわんと大声で泣く彼女の肩に手をおいて、身体を軽く揺さぶりながら呼びかけた。

「どうして泣くの。みっともないでしょう」

その声を聞いたこあは、泣き声は止める代わりに、嗚咽混じりにこう応えた。

「ご・・・ごめんなさぁ～い！」

「ごめんって・・・謝るのならそもそも泣かなければ・・・」

「違うんです・・・これじゃ、なんだか・・・あんまりにも美鈴さんが可哀想じゃないですかぁぁ～！」

「う・・・っ？」

こあのこの声が、不可視にして不可解な力となって、銀色のナイフの刃のごとく咲夜の心に突き刺さった。

ような気がした。

こあの語る『可哀想』という表現に、迫りくるような恐ろしさ・・・というより、鋭い糾弾の対象となったような焦燥を感じた。

可哀想とは、一体どういうことか？

咲夜はそれを知ることを恐れた。

知らずとも、なんとなく、心の奥底では分かってしまっているから。

しかし、こあと共に美鈴を探した以上、一度は聞いておかなければならないのだ。

目に見えて動揺している咲夜の顔を見ることなく、再び声をあげて泣きはじめたこあに、彼女はまずはこう呼び掛けた。

「まぁ、まずは落ち着きましょう・・・貴方が泣いたってねぇ、どうにかなるものではないし・・・」

その声を聞いても、こあはしばらく号泣するのを止めなかった。
が、それでも少しずつ泣き叫ぶ声の大きさは小さくなっていた。
一分と少しすれば、ほとんど泣き声も止み、小刻みにしゃっくりをするだけになった。

こちらの言う通りに落ち着き、話をする用意もできたらしいこあに、咲夜は改めて、恐る恐る聞いた。

「美鈴が可哀想って、どういうこと？」

それにこあは、静かな声で応える。

「最近の美鈴さんは・・・なんだか、すごく何かに怯えているというか、びくびくしていたんです・・・気もたっていて、もう何日も、いつもの美鈴さんじゃなかったんです・・・・・・それで、あんなまま紅魔館から出ることになって、ずっと戻ってくることができないなんて・・・ね？・・・可哀想ですよ・・・」

「・・・・・・」

咲夜としては、まさしく胸が締め付けられるような心境だった。

美鈴をそういう風にしたのは自分かもしれないということもあるし、そのことで、こちらが思うより遥かに美鈴が辛い思いをしているらしいと分かったからだ。

そうして、続くこあの言葉も、一本の銀のナイフが突き刺さった胸の内に、追い討ちのごとくさらに何本かの刃を突き立てるようなものだった。

「でも・・・どうして美鈴さんがあんなに辛そうにしているのかが、分からないんです・・・私達が美鈴さんの助けになってあげられないのも、なおさら可哀想じゃないですか・・・」

「・・・・・・っ」

「咲夜さんは、何かご存知ないですか？美鈴さんの助けになってあげられませんか？」

「・・・・・・っ」

「・・・どうかしました？」

思わず唖然とした顔で固まってしまっていた。

ここまでくると、咲夜は最早、美鈴が紅魔館から出ていった理由が自分にあるという疑念を払拭する術を持ち合わせていなかった。

しかし、なんとか冷静さを取り戻し、強張った表情を緩め、彼女は、未だ涙も枯れてはいない潤んだ眼で不思議そうな顔をしているこあに、応えた。

「・・・・・私には、なんとも・・・」

その声に続いた、

「そうですか・・・」

というこあの返事を聞いた咲夜の心には、言い様のない罪悪感のようなものがあった。

それは、こあを騙すようなことを言ったから、ということでもあるし、そもそも美鈴に対する気持ちからくるものでもあった。

そうして同時に、紅魔館における美鈴の存在する価値というものを改めて実感することが出来たような気分でもあった。

ふといなくなっただけでも、こあのような者がこうやって心配してくれているのだから。
レミリアやパチュリーはどうだろうか・・・
こあ程ではないにしても、いなくなったことを気にしてはいるのではないだろうか？
いなくなった、と認識できるということは、美鈴は細かいことはどうあれ、この紅魔館の立派な住人であるということなのだ。

あの時、美鈴に対し殺すとまで言ってのけたあの時の咲夜の心境は紛れもなく彼女自身のものであるし、あのような台詞を吐いたことを悔やみもしなければ、自分を卑下にもしない。
が、許すということも、大事ではないだろうか。

「あの・・・咲夜さんは、もう森の全体を探り終えたんですよね？」
と、こあが聞いてきたので、それには、
「えぇ、時間を操作しながら」と応える。

その上で、それでも美鈴はいなかったと口外に付け足す。

こあはそれを聞き、同時に口外の言葉も聞き入れ、美鈴がどこにもいなかったことを納得しようとするが、だとしたら今彼女はどこにいるのかという不安に見舞われ、しょんぼりとしてまたしても顔を俯けてしまっていた。
そんな彼女に、咲夜は言った。

「・・・その内戻ってくるでしょう・・・美鈴の居場所はどこだと思っている？」

それを聞き、こあはもう一度顔を上げ、咲夜の眼を見た。
そうして、ぼんやりとした声でこう返す。

「ここです・・・紅魔館ですよ・・・」

「なら、いずれ戻ってくるはず。自分のたったひとつの居場所を棄てられるほど、美鈴も不遜な妖怪ではないでしょう・・・」

それは、美鈴に戻ってきて欲しいという単なる願望も半分混じっていたが、そのもう半分は、間違いなくそうであるという確信から来る言葉だった。

美鈴は、必ず館に戻ってくるだろう。

例え咲夜ひとりを恐れていようと、美鈴にはこの館の主人への忠誠心があれば、門番という役目にかける情熱と直向きさがある。

それもみんなかなぐり捨てて、永遠にここを去るはずがないのだ。

そんな考えを込めて、こあを励ますつもりで言った言葉は、咲夜が思う以上に大きな意味をもって、彼女を勇気づけてはいた。

「そう・・・そうですね」

と呟きながら頷くこあの、影が取り払われたような顔を見返しつつ、咲夜はほんのちらりとだけ彼女から視線を逸らし、館から遠ざかっていく方向に向ける。

そうして、空に輝く無数の星々を一瞥しながら、その一瞬の内に考えを巡らせていた。

――彼女には、確かに少し悪いことをした。グランチャーと共に戦うことで私が生命を落としたとしたら、美鈴だけでない・・・館の皆が、グランチャーを恨むでしょうね・・・・・・美鈴はただそれが、少し早すぎたというだけのこと。私を心配しているからこそ、

私を死の淵に誘うかもしれないグランチャーのことを恐れていた・・・・・それだけは、認めてやらなくてはならない・・・――――

そのためにグランチャーを眼の仇にするというのは、やはりいい気分にはならないが、それも全てこちらの身を案じてのことだというのなら、怒りまでは覚えまい。

美鈴だってあの時・・・傷ついたグランチャーと出逢った時、こちらと共に、グランチャーの生命を繋げることを望んでいたのだから。彼女だって、グランチャーのことを心の底から憎んでいるわけではないはずだ。

――――・・・なら次会った時は、一言ぐらい謝っておかないければね・・・・・・もっとも、その機会ができなければ・・・・・・・美鈴。どこにいるのかは知らないけど、もう私に会うことを恐れる必要はないんだから、早く戻ってきなさい――――

そんな言葉に思考が帰結した時、傍にいたこあが、一旦館に戻ろうと言ってきたので、咲夜もそれに頷いて、ふたりは門をを再び閉ざし、来た道を戻って館へと帰っていった。

まちぼうけにさせているグランチャーの下にも、早い内に戻らなければ・・・大分遅くなってしまった。

咲夜は、美鈴を許容する考えに次いで、ぼんやりとそんなことも考えていた。

※

翌日。
サトリブレンの胎内ですっかり熟睡していたこいし達は、三人揃って起床（？）した。
ブレンの胎内で寝ると、オーガニックエナジーに包まれているためか、すこぶる調子がよくなる。
アンチボディの胎内で過ごす健康法というのを紹介すれば、あっという間に広まるのではないかと思えるほどだが、まぁ、そんなことはすまい。
手前勝手でブレンを健康器具の延長みたいに使えるわけがない。

三人同時に、スリットウェハーに囲まれながら起き上がり、三人同時にあくびをしながら背伸びする。
さして広くもない空間の中で揃って両腕を上にぴんと伸ばすものだから、少し窮屈だった。

まぁ、それはそれとして、今は何時だろうか。
地底にいると時間の感覚がおかしくなるのは、残念なことにそこに住む妖怪でも似たようなものだった。
まぁ、今が朝であることぐらいは分かる。

それに、大分早い時間でもあるようだ。
地上では、ようやく日が昇り始めたという時分ではなかろうか。
だらしない者（輝夜とか輝夜とか輝夜とか）ならそのまま二度寝してしまいそうだったが、ブレンの胎内で熟睡したおかげで、もう眠気などは微塵もなかった。

そのため三人は一度中庭に出て、外の空気にでも当たろうかと考え

た。
もっとも、ほとんど閉鎖空間と変わらない地の底の空気であるが。

「おはよう～、ブレン」
と言いながら、早速装甲を開けさせるこいし。
胎内を保護する装甲が開くと同時に、スリットウェハーがスライドして、眼の前に大きな穴がぽっかりと開く。
その穴を順々にくぐって装甲の上へと出て、そのまましゃがみこんだブレンの身体から降りて、中庭へと足をつける。

こいしが最初に降りて、その場で続けてお燐とお空が降りてくるのも待つ。
そうして全員何事もなく中庭に降りられたところで、またしても三人揃ってブレンの姿を見上げて、網膜に映しだした。

この間の戦いでグランチャーにつけられた火傷は、さらによくなっているようだ。
見た目では、昨晩見た時とほんのわずかしか変わっていないようにも見えるが、一日の半分にも満たない時間での変化としては、大きなものだ。
傷も、焼け爛れているというよりかは、ちょっとひどめの擦り傷ぐらいのものになっていた。
後もうしばらくすれば、すっかり完治するだろう。

こいしは笑顔でブレンに対し、呼びかけていた。
「大分よくなってきたねぇ、よかったよかった～」

と、その次の瞬間だ。
こいしはふと、その場で振り返り、無意識的に中庭の上空へと眼を向けていた。
お燐とお空も、それにつられて、遅れて中庭の上を見上げる。

と、屋敷の屋根の影から、ぬっ、とひとつの大きな歪な形の影が抜け出てきた。

いや、それはひとつの影ではない。
いくつかの影がひと塊になっているものであった。
別々の影が重なりあっているから、形も歪に見えただけだ。

そして、その影が何であるのかは、こいし達にはすぐに分かった。
お空がその影の方を指さしながら、声をあげる。
「天狗さん達だ～っ」
・・・残念ながら名前は覚えていなかった。天狗だと分かっているだけでも奇跡的である。

彼女の声に、お燐が、
「ホントだぁ・・・天狗ってさすが、早起きなんだねぇ～」
と続く。

さらにそれにこいしが、不思議そうな顔と表情で、
「なにやってるんだろう?」
と続けた。

妖怪の山の天狗である文とはたてが、同じく山から最近やってきた天狗の椛を、二人がかりで支えるようにして飛んでいた。

当の椛はというと、末成り(うらな)のように真っ青な顔をして、二人に支えられてぐったりとうなだれていた。
下から見えるうっすらと開けられた眼は、有毒ガスの中毒で死んだ人間のように真っ白になっていた。
だらしなく開かれた口元にも、生気はなかった。
小動物じみた整った小顔も、これでは台無しだ。

そういえば、彼女は地底に来てからというものずっと、グランチャーの動きをみるために偵察を続けていたという話だった。
もしかして今の今までずっと、一睡もしなければ水の一杯も飲まずに任務を続けていたのだろうか。
だというのなら・・・そりゃ、あんな顔にもなるだろう。

椛の身体を支えながら、文とはたてが中庭へと降りてくる。
彼女らの着地点の近くまで駆け寄りつつ、降りてくるのを待ち受けることにしたこいし達の耳に、椛のこんな声が聞こえてきた。

明らかに、正常な意識の状態で発せられていないと分かる声だ。

「あ・・・あぁ～ぁぁ・・・お、大きな河が・・・向こう岸に、にとりが待っている・・・」

その声に、文が返す。
「はいはい渡っちゃ駄目ですからねぇ、そのにとりさんは違う人ですからね～・・・その河の人は今サボタージュしてるんで渡れませんからねぇ～」

そんなことを言いながら、椛と共に中庭に降り立った文達に、こいしが早速呼び掛ける。

「お勤め、ご苦労様でございます」
「ご苦労様です」
「古明地　こいしでございます・・・地元の皆様、おくつろぎのところ大変っ、申し訳ございません」
「だからそういう分からないようなネタは止めろと・・・・・・それはそうと、お早いですねぇ、まだ太陽が頭しか出してませんよ？」
「そっちは何やってたんです？」

「あぁ、ご覧の通り、椛さんをオルファンの偵察から引き戻して来たんです・・・ようやっと山からの人員が来てくれたんでね」

文の言葉に、こいしが返した。
「人員？」
「この前言ってた天狗のことですよ」

まずは一言そう応えつつ、それから文は、詳しい説明を続けた。

守矢神社に早苗達がいないことを確認し、天狗の上層部に幻想郷の各地を偵察するように要請したのだが、その頃にはすでに、かねてより編成していた地底へ派遣する部隊も出来上がりつつあった。
そのため、守矢神社の者達の捜索と一緒に、部隊も送らせるつもりでいた。
ただ、あともう少しだけ、微調整的な事前の準備やら、事務的な処理が必要で、派遣できるのは翌日の夜明け前ぐらいになるという。

代わりに、部隊はかなりの大規模になるらしく、天狗が妖怪の山の外部に送る要員としてはいまだかつてない数だという。
今回の異変に対し、天狗が本気を出していることが分かるようだ。

派遣される部隊以外にも、山の方でも異変への対策本部を設けているのだから、なおさらだ。
それほどの部隊が一斉にやってくるとなると、文とはたてをはじめ多くの人妖を匿っている地霊殿では、さすがに全員を収容することができない。

そこで文達は先んじて、地底の都市である旧都に、派遣される天狗全てを収容できる場所を用意するよう、向こうの妖怪と・・・特に地底にいるという鬼（勇儀だ）と交渉するように命じられた。
ちなみに、文達は派遣させる部隊とはまた別に、今まで通りアクティブに地底の妖怪と協力するように、という話だった。

ということで、やることもやって地底へと戻った文達は、夜中の内に勇儀と交渉して、天狗を滞在させるスペースを用意してくれるように頼んだ。
と、すぐさま勇儀は、宴会やら何やらする時に使う大きな建物があるので、そこぐらいならいくらでも使ってくれていい、と応えた。
いやはや、話が分かる者が相手なら仕事も捗るものだ。

文とはたては、勇儀の言う宴会場を実際に見てみて、天狗の百人ぐらいなら（これは言い過ぎかもしれないが）楽に収まりそうなのを確認し、ここを部隊の駐屯地と決め、来る天狗達を待つことにした。

そうして、つい先程部隊は到着したそうだ。
その規模は、文達の予想を超え、確かに大規模と言われるだけの大所帯であった。

実働的な要員である白狼天狗三人に、山への報告の役目や機動力を要するに任を負うのであろう鴉天狗一人の計四人を一個小隊として、それが三小隊。

さらにそれぞれの部隊には、各隊との連絡や上層部への報告をまとめる事務的な担当として鼻高天狗も一人ずつおり、合計した天狗の数は十五にも達した。
これだけの天狗が連隊をつくり、妖怪としては自主的に寄り付きたくない地底にやってくるというのだから、これが特例的な状況でないことははっきりしていた。

派遣された天狗達も、正直な話、地底に派遣されるのには気がのらなかった。
が、いうなればこの部隊は、オルファンの異変を解決するべく、柔軟に状況に対応できるように結成された『特務部隊』ともいえ、その格好いい響きは嫌いではなかった。
もしかしたら、半分は特務部隊の肩書きのために地底に来ているという天狗も少なくはないのかもしれない。

まあ、そんな特務部隊を差し置き、さらに抜きん出て、好き勝手にさとり達を手伝えと命じられた文とはたては、特務を通り越した『ワンマンアーミー』とでも言えようか・・・実際は『放し飼い』と言った方がよさそうだが。

それはとにかくとして、今後、この天狗の編隊は、三隊でローテーションを組み、代わる代わる各地の偵察を行い、グランチャーの動きを察知するそうだ。
今回は早苗達の居場所も探すということで、いきなり特例的にはなるが、ふたつの部隊が共同で事にあたる。

ということで、これまで黙々と哨戒任務を続けていた椛は、晴れてようやくひと休みできるようになったというわけだ。
で、文とはたてがオルファンの下まで迎えに行ってみると、案の定、千里眼の能力を使い付けて疲労困憊の彼女がいた、というわけだ。

「哀しいけど、真面目過ぎるとこうやって馬鹿を見るのが世の中なのよねぇ」
というのは、文の談だ。

第十四話　その8

「ひとまず。椛さんを彼女の部屋まで連れていきますよ」
そう言って、文とはたては椛の身体を支えて半ば引きずるようにしながら中庭を進み、やがて、地霊殿の屋敷の中へと入っていった。

それからしばらくして、ようやく昇り来る太陽の光が眩しさを強めてくる頃のことだ。

山より派遣され任務にあたっていた天狗の部隊が、早苗達のグランチャーを発見した。

※

部隊は、グランチャーを発見すべく眼が届く範囲は全て隈なく探さんとばかりに、冥界など、幻想郷とはまた別の異世界にまで、可能ならば眼を向けていた。
が、そこまでする必要はどうやらなかったようである。
妖怪の山から忽然と姿を消した早苗達がいるのは、この幻想郷の中ではあった。

山から大分離れた場所にある、太陽の畑だ。
そこで、三体のグランチャーがいるのが発見された。
一体は、早苗が乗っているものと同じ白と青いのラインのグランチャーで、もう一体は、早苗同様魔法の森での戦闘で接敵した藍色のグランチャーだ。
もう一体はまだ誰も見たことがない、土のような色の個体だった。

太陽の畑と言えば、幻想郷最強の妖怪との誉れも高い風見　幽香がいる場所である。
もしかしたらその茶色のグランチャーというのは、幽香の乗っている個体ではないだろうか。

・・・なるほど、グランチャーに乗ることで天狗から言及がくるのを恐れて早苗達が神社から逃げだしたとして、その後の潜伏場所としては、この畑はうってつけの場所である。
潜伏と言っても、天狗が本気を出せば、どこに隠れようがいずれは発見できる。
となれば、いっそ隠れずに堂々としていればいいということか。
もっともそんなことをすれば、早苗達の大好きな信仰とやらが離れていくことを、彼女らは知っているのだろうか。
それとも、一時は信仰を失う覚悟で、何か目論見でもあるというのか？

それはそれとして、太陽の畑には、天狗と言えども迂闊に踏み入ることはできなかった。
幽香に対し、どう事情を説明すればいいのか分からないからだ。
下手に馬鹿正直に、グランチャーに乗る早苗達を連れ戻そうとか、二柱の神の責任を追及しようとか、そういうことを言えば、それだけで息の根を止められそうだし、最悪妖怪の山に眼をつけられ大き

な損失を被ることになるかもしれない。
それに、幽香もまたグランチャーに乗っている恐れが出てきたのだ。もしグランチャー諸共暴れられれば、両手両足で数えられない数の妖怪が一気に死滅する惨事になるかもしれない。

無事早苗達の居場所は判明し、後は細かいことを調節した後、昨日話し合って決めたことを実行に移すだけだ。
が、ここにきて、再び頭を悩ませることになったようだ。

昨日話し合いをした客間に、魔理沙と永琳、妹紅と慧音、美鈴、それと、さとりを含めたブレンパワードの宿主達が一同に会していた。
魔理沙から、細かいことを考えてくれ、と半ば状況を丸投げ同然に責任を転嫁された永琳だったが、それでも、昨日の一晩は寝ずにいろいろと考えを巡らせていた。
が、その考えも、今朝の天狗からの報告で振り出しに戻ったようだ。

今回は大きな机は邪魔になるだけだったので、部屋の隅で、椅子だけを円を描くように並べて、一同に向かい合うように座る中で、永琳はまず最初に、妹紅と慧音に対して言った。

「貴方達にとっては、厳しいことになったようねぇ・・・早苗さん達の動きを引きつけるために、幽香まで相手をすることになった・・・天狗達でも尻込みするような妖怪を、貴方達で何とかできるとは思えない。どうする?諦めることも肝心だと思うけど」

彼女らが早苗達の引きつけ役になるのは止めて、別の方法を考えようという永琳の言葉だったが、それに対して、慧音はともかくとし

て、妹紅の反応は落ち着いたものだった。

「まぁ、いいさ。やってみるよ」

「やってみるって・・・」

平素な様子で応える妹紅の声には、さすがに呆気に取られるというか・・・危機感があるのだろうか、と疑いたくなるようなものだった。

そりゃ、妹紅ならば、こちらの策を見破ったり、それ以前に些細なことで憤慨した幽香になぶり殺しにされても不死なのだから大丈夫だろうが、そうなれば、咲夜が駆る深紅のグランチャーに集中攻撃を仕掛けるという目論見まで瓦解する危険だってあるのだ。

策に気づくと共に、早苗達が咲夜の救援に駆けつけるかもしれないのだから。

それにそもそも、大きな問題がひとつあるのに、永琳は気がついていた。

彼女はその問題を、妹紅に対し投げかける。

「そもそも、貴方達が太陽の畑にいって、グランチャーに乗る彼女らと話をするにしても、そもそもどうしてあの畑にグランチャーがいるのが分かったのか、という話でもある・・・」

「あ」

「・・・そうだわねぇ」

魔理沙と輝夜が素っ頓狂な声をあげた。

この二人には、何も分かっていなかったのか。

まぁ、声に出さないというだけで、他にもこのことに気づいていないものは多そうだったが。

しかしながら、少なくとも妹紅と慧音の方は、永琳の指摘にも気づいているようだった。
そのことを感じ取りつつ、永琳は続ける。

「・・・貴方達二人は、あくまでも今、この地底にいて、さとりさんや私達に協力する側にいる・・・で、天狗達も同じく、ブレンパワードに協力する立場にある・・・・・・貴方達が太陽の畑にいるグランチャーについて知ったとして、その理由として考えられるのは、天狗の偵察により発見されそれが伝わったということでしょう。幽香は大分頭の聡いでしょうから、そこまでは気づくはず・・・となれば・・・」

永琳が皆まで言う前に、妹紅がその声を遮ってこう応えた。

「分かってるよ・・・天狗からの報告を聞いてる以上、私達はブレンの側にいるんだ・・・それだけでも、疑いをもたれる理由にはある」
それに、さすがに不安そうになりながら慧音が続く。
「疑いをもたれたら、そこで終わり、ということも考えられるんですよね・・・」

二人の言葉に頷いて、永琳は改めて言葉を続ける。

「下手に行動を起こして、状況をより一層悪くしてはいけない。もっと確実な方法を考えるか、あるいは完全に泳がせてしまうか・・・」

前者にしろ後者にしろ、妹紅達がこのまま考えなしに行動を起こすよりかはマシだろう。

そう考えながら、永琳はふと、何故だか分からないが、さとりの方にちらりと眼を向けてしまった。

その次の瞬間、彼女の胸の内に言いようのない感覚が鋭く突き刺さり、表情こそ変えないものの、永琳は驚愕した。
さとりの表情が、戦慄したように固まっていたからだ。

一体何故こんな表情をするのか？
今までの話に、驚くようなことや、恐怖するようなことは何もなかった。
だとして何故さとりは、眼を見開き、小さく開いた唇を微かに震わせながら．．．そう、じっと妹紅の方を見ているのだ？

そんな思考が脳裏を過るのと同時に、永琳は、さとりの持つ能力のことを思いだした。

彼女は、妹紅の心の内を読み取り、それに戦慄しているのか？
いや、戦慄というよりかは、あまりにも大きな戸惑いを受けて、表情が強張っていると言った方がいいかもしれない。
どちらなのかは永琳には分からないが。
とにかく、そうなるほどの意思を、妹紅が持っていると？

そう考えながら、さとりに向けた眼を再び妹紅の方に向け、訝しげな視線を送った永琳の網膜に、椅子から俄かに腰を上げ、その場で立ち上がった妹紅の姿が映った。

突然すくっ、と立ち上がった彼女は、続けざまに静かながらも強い口調で、永琳に対して呼びかけてきた。

「自信がある」

その声と急な行動に、この場にいる者ほとんどが驚いていた。
例外なく、さすがにびっくりするような気分だった永琳は、こちらに対し投げかけられた妹紅のこの言葉に、ますます訝しげな目つきになりながら、おうむ返しをした。

「自信がある・・・とは？」

さすがにそれだけでは理解しがたい妹紅の言葉の意味を問いただそうとする永琳の声に、彼女は尚も静かに、しかし燃える炎のように煌々とたぎるような声で応えた。

「確かに私と慧音は、あんたらと同じで、ブレンパワードと一緒にいる者だ。だから、確かにブレンパワードに協力して、グランチャーの敵になっているとも言える・・・だけどな、それもこれもみんな、ただの演技だとしたら？」

「う・・・っ？」
「・・・っ？」

永琳は、その言葉を聞いてようやく、妹紅の持つ真意の一端に触れたような気がした。
そして、俄然ある種の恐怖にも似た感覚に息を呑む彼女は、彼女以上に大きな恐れを抱く慧音の表情を覗うことができなかった。
彼女はすでに、妹紅の中にある危うい心境には触れていたのだ。

「・・・・・い、妹紅・・・」

その一方で、ふたりを差し置いて、もっとも強く妹紅の心の内の炎に強く触れることができたのは、輝夜かもしれなかった。
永き時の中で、彼女と生命のやり取りを繰り返し、今回の異変と共に、互いの戦いにアンチボディをも巻き込んだ輝夜は、直観的に妹

紅の考えを知ったのだ。

そんな中、魔理沙や霊夢は、何も見当がついていない様子で、何事だ？といった表情を浮かべていた。

美鈴は・・・形容できないような、言いようのない表情を浮かべてじっとしていた。

そうして、妹紅は続けて言う。

「地底で大人しくしていたのも、グランチャーを失ったことで、ブレン達に抵抗する方法がなかったから・・・そうして、天狗達の報告を聞くことで、他のグランチャーの居場所を知り、もう一度、グランチャーに乗るために協力するため・・・だとしたら」

続けられる言葉が、彼女の中の考えをますますはっきりと永琳達に教えていた。

これは、危険だ。

この台詞は、半分は口から出まかせの嘘かもしれないが、もう半分は、心の奥底からの真実であるかもしれなかった。

妹紅は今、演技と本気の間の、不安定な状態で揺れ動いている。

ブレンのためにグランチャーに協力する演技を見せるか、あるいは本気でグランチャーに協力し、再びブレンの敵となるか。

その相反する意思が、半々ずつ心の中にあったのだ。

いや、もしかしたら、本気の割合の方が強いかもしれない。

相変わらずそのことに気づいていない様子の魔理沙が、こんな質問をする。

「えー・・・演技っていうのは、つまりそういうことで・・・あんたは、本当はまだグランチャーに乗るつもりで、そのために早苗達のところにいく・・・っていう演技をするつもりなんだな？」
その言葉は、ある意味では正解であるのだが、何もかもが正しいとは言えなかった。

妹紅がすぐに応える。
「・・・そう・・・演技、かもしれない。でも、演技ではないかもしれない」
「はぁ？」

訳が分からない、といった様子の魔理沙と霊夢は差し置き、永琳がはっきりとした口調で言った。
このまま妹紅を早苗達と幽香の下に向かわせてはいけない。
その理由がもうひとつできた。

「妹紅。ますます貴方を太陽の畑に向かわせることができなくなった・・・対策はまた後で考えるから、貴方と慧音はここで大人しく・・・」

全て言い切る前だった。
またしても、永琳の言葉を遮る声が、ふたつあった。

「永琳！」
「ま、待ってください！」

その声は、ふたつともほとんど同時に発せられた。
のみならず、椅子が傾くガタンという音も、ほとんど同時にふたつ響いていた。
揃って椅子から立ち上がったこのふたつの声の主は、輝夜と慧音だ

った。

またしてもあまりに突然の声に、永琳は再び驚くことになった。
魔理沙と霊夢に至っては、何もかも理解できない以上、もうどうでもよくなって、肩をすくめて現実逃避を始めようとしていた。

が、一番驚いているのは、当の輝夜と慧音のふたりであった。
というのも、互いがまったく同時に立ち上がり、まったく同じように、永琳に言い返していたからだ。
呆気に取られ、ぽかんとした表情を浮かべ、互いの顔を見合った二人。
そうして、五秒か、あるいは十秒ほど見つめあった後、どうやら互いに考えていることが同じことであるらしいと察した。

そうして、慧音が徐に口を動かして、輝夜に言う。
「・・・どうぞ、輝夜様・・・」

そう言いながら彼女が椅子に座り直したので、輝夜は
「え?・・・え?」
と少しの間戸惑いつつも、すぐに承った様子でかしこまって、座ったまま戸惑いの表情を浮かべる永琳に顔を向けて、言った。

「永琳・・・妹紅をいかせましょう」

正直、大声を出して立ち上がってまでこちらの言葉を遮った以上、永琳には輝夜がこのようなことを言ってくるのだろうという予想はできていた。
が、予想はできても理解はできなかった。
輝夜のこの言葉の意味が分からない永琳は、反射的に、一応は上司とも呼べそうな立場にある輝夜に対し言い返してしまっていた。

「何故です?・・・そうはいかないでしょう」

が、それに対して、次いで椅子に座り直した慧音が続く。

「私からも、お願いします」

「ぅ・・・?」

ふたりは、妹紅のやろうとしていることが・・・彼女の中の危うさが分かっていないのか?

それとも、分かった上でこんなことを言うのか?

妹紅は要するに、演技で早苗達を騙すが、実はそれは心の中では演技ではない、と言っているのだ。

そんな心境の妹紅が何をしようと、それが成功するとは思えなかった。

さすがの賢者にも、ふたりのこの態度の理由が見当もつかない。

今の永琳には、根本的にあることができていなかったからだ。

妹紅の意思を尊重する、という簡単なことが。

輝夜が続ける。

「今の妹紅は本気よ・・・これなら、早苗にしてもそうだし、幽香とかいう、恐ろしい妖怪も信じさせることもできると思う・・・うまく引きつけてくれるはずよ」

「・・・そりゃ、引きつけることは上手くいくかもしれませんが、逆に引きずりこまれてしまえば、私達だって危ういかもしれないのですよ?」

「・・・妹紅をいかせないっていうなら、いい加減私も、月の世界に帰りたくなってしまうけど?」

「う・・・っ！？」

永琳にとって、輝夜のこの台詞は、いかなるものにも勝る脅し文句であった。
今の輝夜が故郷である月の世界に戻れば、その先に何が待っているのかが分かるからだ。

本気で言っているとは思えない。
だが、こんなことを言われてもなお喰い下がるということは、永琳には無理な話だった。

「・・・そこまでおっしゃるなら・・・」

結局のところ永琳にとっては、アンチボディとの戦いで誰彼（だれかれ）が死ぬのと、輝夜が月世界に帰ることを、天秤に載せて測ることなどはできなかった。
輝夜の脅しに屈した永琳が、仕方なくこう応える。
脅しとは言うが、もしこの脅しが現実のものになった時、苦しむことになるのは輝夜当人であった。
だから永琳は、心折れるしかなかったのだ。

そして、不安定な心境のまま妹紅を送り出すことを了承した彼女に、今度は慧音が、僭越ながらといった感じで、余所余所しく言ってきた。

「永琳さんが悩むのも当然のことだと思います・・・それを承知で妹紅をいかせるように頼んでおいて、不躾だとは思うのですが・・・私も一緒にいかせて頂いてもいいでしょうか？」

「え？」

「慧音．．．」

この言葉には、永琳だけでなく、妹紅も驚いたようだ。
妹紅にとっては、太陽の畑はある意味では死地であり、自分が不死でなければ、いこうなどとは考えないような場所だ。
風見　幽香の恐ろしさというのは、実感こそないが、分からないわけではない。
そういうところにまで、さすがに慧音がついてくることはないだろうと思っていたのだ。
それに、早苗達も全員まとめてそこにいるというのなら、いくのは妹紅だけでいい。

．．．と、こんな考え方は、間違いであったようだ。
妹紅は、慧音がどういう人間なのか思い出しながら、先程のように言ってのけた彼女の顔を見やった。
そうしてしばらくぼんやりと、こちらを見返してくる眼と視線を合わせると、小さく含み笑いを浮かべた。
そうして、妹紅の方からも永琳に呼びかける。

「私の方からも、頼むよ．．．慧音と一緒にいかせてほしい」

永琳の感じる危機感というのは、慧音が言った通りに、妹紅本人だって分かってはいる。
その上でこんなことを頼んでしまえば、さすがの彼女も怒るのではないかと思ったのだが、意外にも永琳は、すぐに落ち着きを取り戻しているようだった。
妹紅を送らざるを得ない状況になった以上、気持ちをそちらに切り替えることにしていたようだ。
このあたりは、さすがというべきかなんというべきか。
妹紅の言葉にも、彼女は静かに返す。

「えぇ・・・それは構わないわ。彼女がいてくれれば、助けになることもあるでしょう」
「・・・ありがとうございます」

慧音の感謝の言葉に対し、永琳はすかさずこう語って釘を差しておいた。
「ただ、貴方には幽香がどういう妖怪なのか分かっているでしょう・・・まぁ、そういうこともよく考えて・・・」
「・・・分かっています。私だって、人間の意地悪い性根を持ち合わせています。苦しんで死ぬのは厭ですからね」

と、その声に次いで、置いてけぼりにされそうになっていた霊夢が急に、バツが悪そうな声で誰に聞くともなくこう聞いてきた。
「なんか、芳(かんば)しい雰囲気ねぇ～・・・何の話よ。大丈夫なの？」
それにも、永琳がすぐさま返す。
「八割方こちらの話よ・・・今終わった、何の問題もないわ」

「そうは聞こえなかったけどなぁ～」
とは魔理沙の声だ。

確かに、何の問題もないというのは正直嘘だったが、他にやりようがないのだ。
永琳は、これ以上この話を長引かせないよう、話題・・・というか、議題を変えることにした。

「それよりも次は、紅魔館の事よ・・・妹紅達が何をしようと、紅魔館にいる咲夜さんをどうにかできなければ、何の意味もないんだから」
要するに、こちらの方がずっと重要な問題であるということだ。

この言葉に、霊夢や魔理沙も、すぐにそちらへと思考を向け直したようだ。
それを雰囲気として感じ取りつつ、永琳は続けた。
「・・・美鈴さんが、何かいい方法があると言ってたけど、一体何かしら」

昨晩、魔理沙がそのことをほのめかされ、疲れていることもあってめんどくさがり詳しくは聞かなかったことだ。
それを改めて今、聞きだそうとする。

すると美鈴は徐に、右手に持った封筒らしきものを、永琳達に対して見せびらかすように差し出した。

「ん？」
魔理沙が、その封筒の方にぐっ、と顔を寄せる。

「手紙、が入ってるんですか？」
とさとりが小さな声で言う。

それに続いて霊夢が、拍子抜けしたというか・・・だからどうした、といった声をあげる。
「これがなんだって～？」

正直言うと、永琳にもこの封筒が何なのか意味が分からないため、彼女も正直にこう尋ねる。
「・・・こんなものを見せられただけでは分かりません・・・これで何をするって？」

その質問を言い終えるか終えないか、というぐらいのタイミングで、

美鈴が応えた。

「ここには、私が咲夜さんに向けて書き綴った手紙が入ってるんです・・・この手紙を通して、あの人に館から出て私に会いに来てくれるように頼むんです」

「そんな簡単なことなのかぁ？」

と、魔理沙が冷やかすような声を言う。

「簡単なことじゃない・・・これは、私なりに考えた一番上手くいく方法です・・・絶対に上手くいきます。先程の妹紅さんの台詞じゃないですけど、自信があるんです」

「・・・・・・」

永琳はひとまず黙して、美鈴の言葉に耳を傾けた。

彼女が何をどう考えたのかは分からないが、紅魔館に住まうものを動かし、引きつけるのなら、同じ紅魔館に住む者の方がやりやすいのは確かだろう。

となれば、方法はどうあれ、ひとまず美鈴のやりたいようにやらせてやる方がいいだろう。

しかし、手紙一枚でどうにかするというのは、確かに何だか呆気にとられるような気分ではあった。

あるいは、それほどに大きな意味のある手紙であるのだろうか？

永琳は、純粋な好奇心と、より確実に事を運ぶためにも、美鈴に対しこう呼びかけた。

「ちょっと、読ませて頂いていいかしら」

が、それに対し、美鈴はきっぱりとこう返した。

「いえ、駄目です。お見せできません」

「・・・・・・」

眉をひそめて、『何故』と口外で聞く永琳に、美鈴は続けて言った。

「この手紙には私の・・・そう、魂を込めています。ですから、絶対だと言えるのです・・・悪いとは思いますけど。どうか、眼を通さないでください」

それをまた魔理沙が、

「魂って・・・大袈裟だな～。あっはっは」

と、笑い声混じりに冷やかした。

これには美鈴も癪に障ったようで、突然椅子から立ち上がると、身を強張らせて、険しい声で吐き捨てた。

「あ・・・あのですねぇ！笑いごとじゃ・・・！」

が、すぐに永琳が同じように立ち上がって、美鈴の両肩に手を置いて宥める。

「まぁまぁ・・・これで分かりましたよ。確かに、絶対ではありそうですね」

美鈴がこれほど怒るぐらいのものなら、相当重く、大きい意味がこの手紙にはありそうだ。

それこそ、永琳の方でも『大袈裟だな』と思った、『魂』という表現も、案外本当なのかもしれないと思う。

魔理沙の方も、突然の美鈴の憤慨にびっくりしつつ、どうやらこちらが思っている以上に手紙が重要なものらしいと納得して、冷や汗を流しながら苦笑し、

「あは、はは・・・笑ったりして悪かったぜ・・・・・・な、なぁ永琳。これは、美鈴に任せてやったらいいんじゃないかぁ～？」
と、謝罪しつつ永琳に対して申し出た。

魔理沙に言われるまでもなく、永琳としては、美鈴に咲夜のことを任せることにしていた。
彼女の肩に置いた手を離すと同時に、言う。
「ん・・・それほど思い入れがあるものなら、貴方に全て任せてよさそうですね」

「・・・はいっ」
すぐ傍にまで寄った美鈴の堅苦しく強張った顔が、こくんと頷いた。

これで、改めて大まかな作戦の内容は決まったわけだ。

「となればいよいよ・・・」
という魔理沙の声と共に、その場の空気が、鋭く引き締まったような気がした・・・ようなしなかったような。

彼女の声に、霊夢が続く。
「とうとう、咲夜のグランチャーをやっちゃう時も近づいてきたわけね」

さらに、永琳も続けて言った。
「細かいことは、すでに頭の中で決まっています・・・後で、射命丸記者あたりに頼んで、天狗の部隊を集めてもらいましょう・・・
そこで、詳しい作戦の内容を伝えます・・・・・・それと、後ひとつだけ聞いておきたいことがあるんだけど・・・妹紅に慧音に、あ

と美鈴さん」

「なんだよ」

「応えられることでしたら、なんでもお応えします」

妹紅と美鈴の応答を聞きつつ、永琳は続けた。

「貴方達の動きの早さを知っておきたいんです・・・妹紅達が、どれぐらい早く太陽の畑に着くのか、美鈴さんが紅魔館に着くのか」

その問いに、慧音が応えた。

「・・・一瞬・・・」

「・・・？」

さすがの永琳も、呆気にとられて眼を丸くした。

一瞬・・・一瞬で太陽の畑まで辿り着けるというのか？

一瞬を一秒と踏んだとしても、一秒ではこの地霊殿から出ることさえできない。

慧音が、まさかこれほど頭のおかしい発言をする人間だとは思わなかった。

が、改めて彼女の持つ能力のことを頭に入れて考えてみると、なるほど、彼女の言っていることもあながち突拍子もない発言ではなかった。

慧音が、改めて説明する。

「まぁ、さすがに一瞬ではないかもしれないですけど、私の能力を使えば、私が歩いて太陽の畑に向かったという歴史をなかったことにして、そこに辿り着いた結果だけを残すことができます。初めからそこにいたように、歴史を改竄するんです・・・こういう時には以外に、この能力も便利なんですよ・・・・・ただ、これはあく

までも私一人での問題です」
つまり、妹紅の方は歴史をすっ飛ばして太陽の畑に辿り着くことはできないのだが、彼女の方は彼女の方で問題はなかった。

妹紅も続いて言う。
「生憎私はもう、ほとんど人間じゃなくなってしまった・・・おかげで、空ぐらいは飛べるようになってる・・・天狗ほどとはいかないまでも・・・半刻ぐらいあれば、幽香のいるところまでいけるだろう」

つまり、慧音に関しては一瞬に近い短時間。
妹紅は半刻（一時間）が、自分達の目的に向かうのに要する時間ということか。

「なるほどねぇ・・・美鈴さんは？」
と、聞いてきた永琳の声に、美鈴も応えた。

「彼女と同じぐらいです・・・半刻あれば戻れそうです」

両方から応えを聞き、互いに同じくらいの時間で目的地に到着できそうであることを確認した永琳は、かしこまったように言った。
これでようやく、知りたいことはほとんど知り終えた。
「ん・・・これで、何もかも決まったわ。さっき言ったように、天狗の部隊も集めて作戦の内容を伝えます・・・そしてその実行は・・・」

と、言いかけた時だった。

「あの・・・」

今まで話し合いにほとんど参加していなかったさとりが、急に小さく声をこちらに呼びかけてきた。
そのまま聞き逃して無視してしまいそうな調子の声だったのだが、はっきりと聞きとることができた永琳は、自分の頭の中で決まった作戦実行の時刻を言う前に、このさとりの声に対して返事した。

「どうしました」

「いえ・・・私のブレンのことなんです」
続く声を聞いた永琳は、さとりの言いたいことが何なのかすぐに察して、にこやかに笑みを浮かべると、全てを聞く前にこう返した。

「心配いらないわ。サトリブレンの状態はまだ万全ではありません。今回の戦いにも加えたりはしないから、安心して」

しかし、それに対するさとりの返事は、永琳が考えていたのとは大きく違うものであった。

「・・・いえ、そうではなくて・・・・・・私のブレンも、今回は戦いに連れていってほしいのです」

第十四話　その9

永琳は、なんだか、自分が賢者でもなんでもないのではないかという錯覚すら覚えそうになった。
それほどまでに、この短い間に彼女は驚き、呆気にとられることが多すぎたからだ。
このさとりの言葉もやはり、その意味はまったくと言っていいほど分からなかった。

戸惑った様子で、
「どういうこと？」
と聞く彼女に、さとりは応えた。

「・・・戦いに加える、というか・・・そうじゃなくて、ただ戦場に向かうだけで、戦いを遠くから眺めていたいんです・・・ブレンがまだ完全に治っていないのは分かってますから、戦わせることはしたくないですけど・・・でも、ブレンとグランチャーの戦いを、正面で見てみたいんです・・・・・・何故かは分かりません」

一体何故、と聞きそうになったが、そうする前にさとりの方から分からない、と言ったため、永琳には聞くことができなかった。

グランチャーを確実に撃破するのなら、頭数は多い方がいい、という考えもあったが、当のさとりには、戦いに参加する気はないという。ブレンの身を案じているようだ。
だったらなおさら、戦場には出ずに地底で大人しくしていればいい

のではと思うのだが、さとりの中ではまた別の考えがあるのだろうか・・・今しがた分からないと言った、表には出てこない意思が。

しかし、未だ前回の戦闘での負傷も治りきっていないサトリブレンを送り出せば、今度こそやられてしまうのではないかという不安もあった。

しかしながら、さとりがこう言うのであれば、その意思は尊重したいと思う気持ちもある。

永琳としては、このオルファンの異変の最も深いところまで踏み込んで、解決へと導いていくのが、さとりなのではないかと考えていたからだ。

しばらく悩んだ末に、彼女はさとりの申し出に対してこう回答した。

「・・・大分離れたところで、巻き込まれないようにしてくれるのなら、いいでしょう・・・・・・でも、もし魔理沙達が危なくなった時には、無理を通してでも掩護してもらいます」

「もちろんです・・・ありがとうございます」

さとりは笑顔を見せて、こう応えた。

そんなさとりに対し永琳は、もう一度だけ、彼女の中の真意を問いただそうとも考えたのだが、恐らく返ってくる言葉は先程と同じ、『分からない』の一言だろう。

さとりは、他人の意思は手に取るように分かりながら、自分の中の意識には得てして気づかない妖怪だった。

まぁ、世の中の生きとし生ける者は皆、完璧に自分のことを分かるわけがないし、当然の話ではある。

とにかく、さとりの申し出に続いて何かを言うような者は誰もいなかった。

なので、永琳は改めて、頭の中で決まっていた作戦の決行の時刻を、皆に伝えた。

「それじゃぁ改めて、これから天狗達も集めて、作戦の内容を伝えます。三十分後ぐらいに、中庭に集合しましょう・・・作戦の決行は、未の半刻（１３時）にします」

そうして一同は解散し、部屋の隅に並べてあった椅子を丁寧に机の下に戻してから、客間から各々出ていった。

※

三十分後、先程の面々に、旧都にある臨時の駐屯地で待機していた天狗の部隊と、早苗達の居場所を発見し、任務を終えて帰ってきた部隊を含めた人妖が、中庭に一同に会していた。

ローテーション通りに偵察任務を行っていた天狗達には悪いが、交替はせずに引き続き偵察任務を続けてもらうよう、文とはたてと椛を遣わせて伝えさせておいた。

そうして永琳は、一同を軍隊よろしく整列させておいてから、作戦の内容を伝えた。

妹紅と慧音、それと美鈴は、手はず通りにそれぞれの目的地へと向かい、それぞれの標的を引きつけておく。
ブレン達は、妖怪の山へと向かって進み、麓にある湖の中にその身を隠す。
かねてからの調査で、ブレンは水中でも問題なく活動できるということが分かっていた。
ちなみにブレン達の方には、天狗を一人つけておく。

そうして妹紅と美鈴の方にも二人ずつ天狗（一個小隊分だ）を同行させ（遠方から視察させるだけだが）、妹紅達が無事早苗達と接触できた時、そして、咲夜が紅魔館から出て、美鈴と接触した時に、二人いるうちの一人を湖に向かわせ、待機している天狗にその旨を報告させる。
報告を受けた天狗は、水中にいるブレン達に分かるようにサインを出させる。
そうして、ブレン達は水中から出つつ、可能な限り素早く紅魔館に接近し、咲夜がいなくなっている隙をついて、グランチャーを攻撃する。

残っている天狗は、早苗とは別に、どこかでグランチャーが行動を起こしているかどうか探らせることにする。
湖に報告に向かったのとは別の残った天狗も、引き続き早苗達と咲夜の動きを注視して、何かあった場合には至急報告させる。

未の半刻から作戦が始まるとして、その半刻後には妹紅達も美鈴達も、それぞれの目的地には到着する。
それからは、長くても三十分すれば、それぞれ標的と接触することができるだろう。

天狗の機動力を考えればそれからブレン達に報告が及ぶまではもう五分とかからず、ブレン達が湖から出てグランチャーを攻撃し、何事もなく無事に撃破できるとすれば、短ければ一刻（二時間）かからずに作戦は終わる。
まさしく電撃作戦という奴だ。
ただ、その分各々の素早い行動が必要とされる。

永琳は、各自、可能な限り迅速かつ確実に自分の役目を果たすようにと、最後に伝えておいた。

それが、牛の半刻（十一時）ごろ。
作戦の実行まで、後一刻ほどのことだった。

各々一端解散して、時間が来た時に再び中庭・・・ではなく、抜け穴を出て地上で集合することとなった。
十五前後の人妖が一同に会していたのが俄かにバラバラと散らばっていく中で、魔理沙は、あることが気になって、さとりの方へと歩み寄っていた。

気になる・・・というのも、先程永琳が気にしていたことと、ほとんど同じようなものだった。
さとりが何故急に、ブレンと共に戦場に同行しようなどと言ったのか、魔理沙にも当然分からなかったからだ。
永琳がそのことを聞いた時、さとりが分からないと応えたのが魔理沙にも聞こえていたのだが、残念ながら彼女は一度そんなことを聞いただけで、納得できるような性質ではなかった。

「なぁ、さとり」

人だかりが散らばっていく中で、唐突に魔理沙に呼ばれたさとりが、少し驚きながら、彼女の方へと振り向いた。
それと共に、彼女は前置きもなくこう言った。

「あのさぁ、ブレンを戦場に連れていって、危なくないか？」
いきなりの問いであったが、さとりにはすぐに、魔理沙の言おうとしていることが分かった。

気弱そうな顔を浮かべつつ、彼女はこう応える。
「危険だから、戦いには参加したくないと言ったんです・・・無責任で我儘かもしれませんけど」

「・・・どうしてなんだぜ？危険なら、そもそもいかなきゃいいだけじゃないか」
「そうですけど・・・なんて言うのか・・・」

分からないものを分かるように・・・あるいは、すでに心の中にはあるのだが、それを表現する言葉が見つからず、考えあぐねているように、しばらく口をもごもごさせながら、さとりは、ふと思い出していた。

昨日、魔理沙達が戦っている中で、オルファンの記憶に触れたさとりは、その後地底に戻る中で考えていた。
ブレンもグランチャーも同じアンチボディだが、今は敵同士でしかない。

いや・・・敵というか、戦わなければならない相手、と言おうか。
なら、互いの意思を尊重するためにも、今は、戦うべきではないのだろうか、と。
それが、両者の誇り、というか・・・生きる価値を繋げていくことになるのではないかと。

そうしてその時、ブレンもまた言っていたのだ。

自分達は何も、戦うためだけに生まれたわけではない、ということは分かる。
それでも、戦うこともまた、自分達の役目だ。
だから、自分の敵とは、正面から、恐れずに向かい合いたい。

その言葉を思い出したから、さとりは永琳に対してああ言ったのだ。
その事。その時の自分の気持ちを思い出し、さとりは、ふとこう漏らした。

「私だって、いつまでも怖がってはいられないんです」

「・・・・・・？」
これがさとりが、ああ言った理由なのか？
だとして、いまいちよくわからない回答に、魔理沙は困った様子で眼を狐のように細めて、むすっとした顔で、帽子の間に指を入れて頭をぽりぽり掻いた。

まぁ、よく分からないが、とにかくさとりが何か考えている上でブレンと共に戦場へ赴くらしいことは分かった。
何ともまぁ、やはり納得しきることはできなかった。
だが、これ以上聞いても無駄だと思い、ひとまず

「ま、無理するなよ、死んじゃあ駄目だぜ」
と応えた。

そんなことを話している間に、中庭にはもう、ほとんど誰もいなくなっていた。

さとりが、こう聞いてくる。
「これから、どうします？」

「作戦とやらが始まるまで、もう二時間くらいだ。それまで、ブレンの中でのんびりしているぜ・・・あたしのブレンは、一度グランチャーをやってる。その時の感覚を思いだしてみて、勇気づけてやるさ・・・さとりもそうしろよ。あんな風にな」
言いながら、魔理沙は親指で、自分のブレンに乗り込んでいく輝夜の方を指差した。
魔理沙には見えなかったが、霊夢もまた、同じようにブレンの胎内へと入っているようだった。
さすがの輝夜も、今はさすがに部屋の中でぐうたらしている気にはなれないようだ。

魔理沙の指が示す方に眼を向けつつ、さとりは、
「はい」
と応えた。

それに次いで、魔理沙が踵を返して背中を見せ、黒い色のブレンの方を向きつつ、言う。
「それじゃ失礼するぜ。さっき永琳が言ってたけど、あたし達が危なくなった時は、頼むぜ」

それに、さとりがもう一度

「はい」
と返事する頃には、魔理沙はすでにすたすたと歩き始めていた。

その背中をしばらくの間眼で追いつつ、続いてさとりは、自分のブレンの方へとその眼を向けなおした。
昨晩は、こいし達がその胎内で揃って眠っていたらしい。
本来なら、オーガニックエナジーが不安定になり、彼の者も調子が悪くなるだろうと思えたのだが、実際はその逆だった。
ブレンはむしろ調子がよくなり、この間の戦いの傷も、もう今日か明日で完治してしまうのではないかと思えるほどになっていた。
本来ならば、オーガニックエナジーが乱れて、こんなことにはならないはずなのに・・・

昨日は何かが違っていたのか？
だとして、その違いとは何だったのだろうか。
それがはっきりと分かれば、何かが確実に変わるような気がした。
何かとははっきりと言えない・・・分かってはいるはずなのに、ぼんやりとしか特定できない何かが。

さとりは、魔理沙に言われた通り（言われなくてもそうするつもりだった）、ブレンの胎内へと乗り込み、しばらくの間、彼の者とのんびりと過ごすことにした。

もっとも、この先のことを考えると、のんびりとはしていられそうになかったが・・・

スリットウェハーの壁面にもたれかかって座りつつ、さとりは、空間の中によく知った臭いが漂っているのに気がついた。

その空気を深く吸い込んで、彼女は申し訳なさそうに呟いた。
こいし達の香りだ。

「昨日は、一緒にいてあげられなくてごめんなさいね・・・・・・
それに、貴方をグランチャーとの戦場に連れていくことにしたわ。
戦わせるようなことはしないけど・・・まだ傷も癒えてなくて怖いかもしれない。貴方が嫌だというなら、今からでも断りを入れて、無かったことにしてくるけど・・・」

それにブレンは、両方とも構わないし、気にしていないと応えた。
戦場に赴くことも、大丈夫だし、怖くないと。

さとりのよくないところは、この期に及んでこんな風に応えられてしまうと、逆に無駄な気を使い自信を喪失しはじめることだった。
不安そうな彼女の声が、胎内に響く。
「本当に?・・・私のことは気にしなくていいから・・・貴方が嫌がることをするのは、私だって辛い・・・」
そう呟くさとりに、またブレンは返す。

昨日言ったことを忘れたのか?と。

それを聞いたさとりは、はっ、とした。
そうして、心の内に湧き出てきたもやもやとしたものが振り払われ、一番奥深くの部分では、やはり自分とブレンは繋がっていることを確かめることができた。

「・・・えぇ、そうね。大丈夫よ、忘れてなんて・・・」
さとりは笑顔で、こう呟いた。

が、その表情は、急に険しく・・・というか、彼女にしては凛々し

い顔になった。
ブレンとの繋がりを確かめると同時に、今自分達は、これから始まる本当の意味での異変に、片足は愚か全身から突っ込む覚悟を決めなければいけないことを、より一層強く実感したからだ。
そうしてその覚悟を、今ようやく、決めることができたように思えたからだ。
戦う覚悟と、戦った先に何かを得る覚悟だ。

さとりは、真っ直ぐな眼で、どことも言えないどこか・・・しかしその向こうに確実にある何かを見つめ、言った。

「今は今で、変えることはできない。過去も変わらない。でも、未来はそうではない・・・・・忌み嫌われた地下に逃れた私達がまだ廃れていないように。まだ希望を捨てていないように・・・ブレン、貴方達とグランチャーだって、分かり合うことができるはず・・・それを信じる！」

二時間後。
予定通り、さとり達はブレンと共に地底の外へと出た。
天狗の部隊もすでに同じように穴を出て、待機していたらしい。
各々が、自分達の役割を果たし、咲夜が駆るグランチャーを撃破するべく、動き始めた。

今回のことで、良かれ悪かれ、何かが動き出しそうだという予感を抱きながら。

※

水面下で進みつつある状況に対して、太陽の畑は穏やかなものだった。

真昼の眩しい日差しが差し込む中、無数に咲き誇る向日葵を眼下に眺めながら、早苗のグランチャーが空を飛びまわっていた。
当然、その胎内には早苗が乗っている。

スリットウェハーに身を委ねる中で、彼女は、グランチャーがこの無数の花に興奮していると感じた。
それは何故だろう。グランチャーは花が好きなのだろうか。
花には何か、特別な力があるのか？
確かに、人の生命が散った時、その魂が花となって再びこの世に舞い戻ることはある。
そんな風に、花の中に宿っている魂を、グランチャーは感じ取っているのか？

何にせよ、今グランチャーはとても機嫌がいい。
そしてその機嫌の良さは、胎内にいる早苗にも伝わり、感化させていた。
戦い以外で初めて感じたグランチャーの性格のようなものを知れて、彼女も嬉しかったのだ。

「あっははは～！ふぅーー！」

彼女の笑い声が胎内に響き、グランチャーが花畑の上空を縦横無尽に、時にとんぼ返りのような動きもしながら飛び回る。

グランチャーは戦うために生きる者だ。
だが、戦うことだけに生きているのではない。
こうやって、綺麗な景色を見たり、好きなものの近くにいて喜ぶことができるのが、その証拠だった。

早苗は、満面の笑みを浮かべながら、続けて大声で言った。

「どーですかぁ！幻想郷はいいところでしょお～っ。何もかもみんな終わって、ビープレートを見つけることができたら、しばらく・・・いいえ、ずっとここにいてもいいんですよ～！ねっ！」

そんな声が、胎内を反響し、グランチャーの身体に染みいるようにこだました。

その時だった。

勢いよく飛び回っていたグランチャーが、突然何かを察知したらしくその動きをぴたりと止め、地面に対し垂直になるように静止した。

「んわっ！」

あまりに急にブレーキをかけたものだから、胎内にいる早苗の上体が前の方に投げ出され、そのままくるりと回転するように、頭が床面へと強かに打ち付けられた。

スリットウェハーの弾力もあって痛みこそ感じないが、血の気が失せるような気分だ。
この前の戦いの時からずっと思っていたが、ブレンの胎内は身体を固定できるようなものがないので、スリットウェハーの溝にしがみ付いて身体を固定するしかなかった。

それは中々に不便だ。
どうにか、上手い具合に身体を固定する方法はないものか。
それこそ、コックピットのようなものを増設するとか・・・

と、それはともかくだ。
そもそもグランチャーはどうして急に動きを止めたのだろうか。

倒れた上体を起こしつつ、
「どうしたのっ？」
と呼びかける早苗。

グランチャーはそれに応えるように、静止した状態から、ゆっくりと身体を別の方向へと向けた。
それと共に、早苗の視界も同じ方向を向く。

そうしてそこに映ったものが、グランチャーが静止した理由を彼女に教えてくれた。

「・・・なにあれ？」

炎だ。
遠い空の向こうから、線香花火のような小さな炎が、ゆらゆらと煌めいていた。
それはどうやら、段々とこちらに近づいているらしく、少しずつその光を大きくしていた。
閃光花火というよりも、少し小さいぐらいの火種へと変わり、それも少しすれば、巨大な炎の塊へと転じていた。
近づいてくることで、少しずつそのスケールというものが判然としはじめてきた。
グランチャーの身体にも匹敵するような、巨大な炎だ。

しかもそれは、どことなく鳥の姿を象っているようにも見えた。
火の鳥・・・不死鳥とでも言うのか？

そうして、その不死鳥の形の炎がはっきりと見えるようになった時、早苗には、炎の中心に人影があるのが見えた。
眩い炎の影に隠れはっきりと見えなかったが、確かに人だ・・・少なくとも、姿は人だ。
「ひ、人が炎に焼かれて！・・・るわけじゃないみたいだけど・・・・・なんなのかしら？」

尚も炎は近づき、先程まで遥か遠くに見えていたその赤々とした輝きも、ほとんど眼の前ぐらいに近づいてきた。
そこでようやく、炎の中心に見えるその人影の姿も大まかに見えてきた。

それは、早苗にも見覚えがある姿だった。
灰のように真っ白であるはずの髪を炎に照らしオレンジ色に染める、その長い髪以外はまるで男のような格好をしている少女・・・

「あれって・・・妹紅さんっ？」

グランチャーに乗る以前、地底でその姿を見ていた藤原　妹紅だ。
彼女が、何故だか唐突に早苗達の前に姿を現していたのだ。

グランチャーの眼の前にまで接近したところで加速するのを止め、煌々たる炎の勢いはそのままに、その場で静止した妹紅。
彼女の眼が、向かい合ったグランチャーの姿を見つめる。
そしてその視線は、装甲越し、そしてスリットウェハー越しに、早苗にも突き刺さっていた。

「これは一体・・・？」

その視線の言いようのない鋭さと状況の不可解さに、早苗は思わずこう漏らし、そして息を呑んだ。

が、早苗を委縮させるような視線を不意に外した妹紅は、彼女達の方には別段興味もなさそうな様子で、炎の勢いを弱めると、ゆっくり眼下の花畑の方へと降りていった。

その様子を、あっけらかんとした表情で眺める早苗だったが、慌てて我に帰りつつ、感じた。

妹紅は、こちらに・・・グランチャーに用がある。

「ちょ、ちょっと～っ」

胎内にて慌てた様子の声を上げながら、早苗はグランチャーも妹紅を追うように、花畑へと降下させていった。

それからしばらく先のことだ。

妹紅がここに来たのは、早苗達からグランチャーに関する話を聞きたいからだということを知ったのは。

しかも彼女だけではない。

不死鳥を思わせる雄々しい炎を弱め、やがて消しながら、幽香の屋敷の前に降り立った妹紅に続くように、慧音も現れた。

彼女もまた、妹紅同様地底にいた人間である。

グランチャーと共に地上に降り立った早苗だけでなく、何事か、と屋敷から出てきた幽香と藍に向かって、妹紅と慧音は、事情を説明した。

というか、藪から棒にこんなことを言ってきた。

「私のこと知ってるか？」

その言葉に、幽香と藍が、揃って不思議そうな顔をする。

何を知っているって？

生憎ふたりは、眼の前にいる得体のしれない人間（らしい者）のことなど、何も知らなかった。

一体どういうつもりでこんな質問をしてきたのだ？

そんな感情をありありと見せる表情を浮かべるふたりに、早苗が説明する。

「ほら、天狗の新聞にもあったじゃないですか。この人が藤原　妹紅さんですよ。グランチャーに乗ってたっていう・・・こっちは、上白沢　慧音さん」

それを聞いて、ふたりもようやく彼女が何者であるか分かったようだ。

「あぁ～」

「彼女が・・・」

と、合点がいった様子で呟く。

それに続いて、早苗がさらに説明する。

「彼女のグランチャーはブレンとの戦いで敗れてやられてしまった

らしく、残った彼女が、地底でブレン側について協力していたんです。慧音さんも似たようなものですね、グランチャーには乗ってなかったけど」

そこまで聞いて、幽香が口を開いた。

「で・・・そんな奴がどうして急にこんな場所に？」

当然の質問ではあった。

妹紅はそれに、かねてから考えていた応えを返した。

「早苗が言ったように、私達はついさっきまで地底にいた・・・それでな、向こうでは実は、あんたらがここにいるってことがもうバレてしまってるんだよ」

それを聞いた早苗が、驚嘆した。

「えぇーっ？」

が、幽香と藍の方は、別段驚いているわけでもないようだった。

ブレン側についているらしい天狗達が本気を出せば、ここの事などすぐにでも知られることは分かっていた。

大事なのはそういうことではない。

聞きたいことはもっと別にあるのだ。

幽香が、続けて聞いた。

「そんなのはいいから・・・何故貴方がこんなところに来たの」

この質問も、妹紅としては予想していたことというか、待ち受けたさえいたようなものだった。

これにも妹紅は、かねてより決められていた応えを述べる。

「話をしたかったんだよ」
「話？」
「ん・・・身の上話になるんだけど、訳を言うよ。聞いてほしい」
そう前置きしてから、妹紅は話を始めようとした。
が、そんな時だった。
唐突に幽香が、彼女の言葉を遮り、こう呼びかけてきた。
「つまるような話なら、屋敷の中でしない？ずっと立ち話してたんじゃ足が痛くなるわ・・・ほら、どうぞ上がってください・・・一部屋吹き飛んでるけど、私の自慢の屋敷です・・・」
言い終えつつ、開け放たれていた屋敷のドアの横に立ち、入る様に促す幽香。
また、彼女は催促つつ、続けてこうとも言った。
「あぁ、そうそう。自己紹介が遅れました。私がこの花畑を管理している、風見　幽香です。お見知りおきを・・・」
そこでようやく妹紅達は、彼女が噂に名高い幽香であることを知った。
彼女の自己紹介に続いて、その隣にいた藍も名乗り出る。
「それじゃ私も・・・八雲　藍という。会えてうれしいよ？」
「いや、聞かれても・・・」
とりあえず、妹紅も慧音も、戸惑いながらも幽香の催促に応じることにした。
「じゃぁ、入らせてもらう」

「お邪魔させていただきます」

「邪魔でも何でもないから、ほらお早く」

さっさとしろと言わんばかりに、手をくいっくいとして、入るように手招きする幽香。

親切なのか身勝手なのか分からない。

これが、最強の妖怪と呼ばれる風見　幽香か・・・

正直妹紅は、まだ初対面ながらも、彼女のことがそれほど恐ろしい妖怪には見えなかった。

もっとも、まだ会ってから十分と経っていないので、何とも言えない・・・

多分、あとちょっとぐらいすれば、この認識も改めることになるんだろう。

とにかく、彼女らと話をするために、屋敷の中へと入ろうと、足を踏み出すふたり。

が、その時だった。

またしても幽香が、

「あぁーそうそう」

と声をあげた。

あまりに急だったので驚いて立ち止ってしまった妹紅達を余所に、幽香は屋敷の傍らに立っていた茶色のグランチャー方を向くと、そちらに向かって大きな声で呼びかけていた。

「グランチャー！さっきの早苗達は、楽しそうだったわねぇ～。私達はしばらく屋敷にいるから、貴方も付き合ってあげてなさい」

その声を聞いたグランチャーが、ぶるぶると鳴き声を発した。
幽香の言葉に応じているようだ。
その様子を眺めていた早苗が、俄然両手を大きく広げると、自分のグランチャーの方へと向き、幽香の声に続くように呼びかけた。

「だってさー！私がいなくても、楽しめるわねーっ？一緒に遊んでなさーい」

その声に、彼女のグランチャーもまた、幽香のものと同じようにぶるぶると鳴いた。

その様子を、傍からぼーっと眺めながら、妹紅は感じ取った。
彼女らも彼女らで、さとり達と同じように、グランチャーのことをよく思っている。
互いにある絆のようなものは、ブレンもグランチャーも、ほとんど変わっていないのか。

そんな言葉を頭の中で呟くと、何故だか知らないが、胸の内がすっきりするような気分になった。

妹紅は思わず、誰にも気づかれないように、
「ふ．．．っ」
と含み笑いをする。
それから続いて
「じゃぁ、邪魔するから」
と幽香に伝えつつ、改めて開けられた戸をくぐって屋敷の中へと入っていった。

が、その瞬間だった。
ついさっきまで脳裏に満たされていた言いようのないさわやかさも綺麗になくなるほどの、異様な悪寒が妹紅を襲っていた。

あまりにも突然のことだった。
原因も何もまったく分からない。
まるで宇宙の彼方から突然、光の速さで落ちてきたかのような、そんな唐突で理不尽な肉体の反応だった。

いや、理由なら分かる。

幽香だ。

戸をくぐり屋敷の中へと入るその一瞬、横目に見えた幽香の眼。
こちらを見つめるその眼の奥から放たれた気が、妹紅の精神を苛み、悪寒を感じさせていたのだ。

不気味・・・あまりに不気味な眼だった。
直視したわけでもないのに、莫大なまでの畏怖を感じさせる眼だ。
ありとあらゆるものを見透かすような・・・
そう、こちらの考えていることを何もかも見通しているような、そんな眼だった。
こちらが一体、何を考えているのか、何もかも全て・・・

いや、そんなはずはない。
疑っているならまだしも、全てを見透かすなど、あり得ない。
それこそ、さとりのような能力を持っていなければできない。
人の心を読むなどという能力が、そんなにたくさんあるわけがなかった。

まだ、こちらの目論見が知られているわけではないはずだ。
だが・・・疑っているのも確かだった。
その疑いの念を視線に乗せて、幽香はこちらを見ていた。
ただそれだけのことだ。
だが、それだけのことが、妹紅には異様なまでのプレッシャーとなって圧し掛かっていた。

考えていた通りだった。
幽香のことを対して恐ろしくないではないか、と評したその考えは、すぐに覆された。

少し前に、永琳が言っていたことが思い出されるようだ。
確かに、幽香は危険な妖怪かもしれない。
この先、確かな気をもたなければ、取り返しのつかないことになる。

妹紅は、そう脳裏で呻きながらも、そうならないために必死に心を落ちつけようとしながら、幽香の住まう屋敷の中へと足を踏み入れていた。

第十四話　その１０

妹紅と慧音の二人は促されるまま、幽香の屋敷に入って左手にすぐの、居間へと入った。
そうして、その中にある大きなソファに座らされると、幽香は少し待っているように言ってどこかへと去っていった。
早苗と藍が、ふたりに向かい合うように別のソファに座る。

それからすぐ、妹紅達とは別に居間に入ってくる者達がいた。
神奈子と諏訪子だ。
遅ればせながら、妹紅達の来訪に気づいた二柱が彼女らを追うように居間へと入ってきたのである。

戸を開けて入ってくるなり、見たこともない顔の人間が二人もいたので（まぁ、だからこそ来たのだが）、不思議そうな顔をして神奈子が聞いてくる。
「誰、この二人は」

それに、早苗が先程と同じように、妹紅達のことを説明した。

その説明に続いて妹紅が、
「どうも・・・」
と挨拶する。
慧音もそれに続いて挨拶すると共に、こう聞いた。

「よろしくお願いします・・・もしかして、貴方方お二人は・・・」

「ん、そうだ。守矢神社に祭られる神である」
「あたしもね」
神奈子と諏訪子の返事を聞いた慧音は、ソファから立ち上がりつつ、恭しく言葉を改め、
「これは・・・拝謁することができ、光栄にございます」
と言い、次いで深々と頭を下げた。
神様には、一応礼儀と信仰心というものを示すべきだったからだ。

その様子を眺めながら、感心した様子の神奈子が、諏訪子共々妹紅達が座っている側のソファに腰かけつつ、こう聞いてきた。

「何故このようなところに来たのです？」

「あぁ、それをこれから。幽香も入れてみんなに話そうと思ってたんだ」

妹紅がそう応えた時だ。
どこかへと去っていった幽香が、ようやく戻ってきた。
その両手は大きな盆のようなものを持っていて、その盆の上には、いくつかのグラスと、大きなガラス製のボトルのようなものが乗ってあった。
飲み物でも持ってきたのか・・・

妹紅が、純粋な興味本位で幽香に聞く。
「その瓶、何が入ってるんだ？」

それに幽香は、
「葡萄酒よ」
と応えた。

「・・・酒じゃないか。昼間からそんなもの飲ませるのか？」
と、訝しげな声を出す妹紅の声を聞きながら、幽香はこの場にいる全員分用意したグラスを順々に机の上に置き、黒々とした色をしたボトルも同じように机に置きつつ、応えた。

「うちのお手製でねぇ、そんなに酔わないお酒なのよ。ほとんどジュースと同じようなもんよ・・・まぁ、それでもお酒ではあるから、飲み過ぎないようにこの一本だけで済ませるけどね・・・どうぞ、一度飲んでみてくださいよ」

そう言いながら、置いたボトルの口の当たりを握ると、親指でコルクと弾くようにして引きぬいた。
こういう瓶のコルクというのは、こんな風に簡単に抜けるものなのか？
確か、栓抜きとかをぐるぐる巻いて、それから引きぬくのではなかったろうか。

そんなことをぼんやりと考えつつ、妹紅の眼には、コルクが抜けたボトルの口を順々に机に置かれているグラスの中に向けて、中に満たされている液体を注ぎこむ幽香の姿が映っていた。
いかにも葡萄酒（ワイン）といった感じの、黒色がかった赤色の液体だ。
それがグラスになみなみと注がれると共に、妹紅の鼻腔に、何ともいえない芳香が漂ってきた。

自分の分を含めて、全員のグラスに葡萄酒を注ぎ終えたところで、幽香も早苗の隣に座り、腰を落ちつけた。

「乾杯とかどうでもいいから、どうぞ好きにお飲みください」
という彼女の言葉に甘えて妹紅は、昼間から酒を飲むのも変だ、と

胸中でぼやきながらも、赤黒い液体の満ち満ちたグラスを手に取ると、その縁を口につけ、芳香を放つ液体を飲み下してみた。

ほとんど舐めるように、ほんの少しだけ口に入れて飲み込んだだけだったが、妹紅はその割にはオーバーな程の反応を見せた。
眼をぐっとつむり、口を真一文字に噤んで、しばらくの間顔を震わせる。
そうして急に、腹の中に溜まった息を全て吐き出すように、大きな息を
「ぷはぁーっ」
と吐いてから、興奮した様子で言った。

「美味いなこれーっ」

妹紅とほとんど同時に口をつけていた慧音も、ある種驚いたような顔を浮かべて、言っていた。

「ワインとかいうんですよね・・・こういうの、あんまり飲んだことがなかったんですけど・・・こんなに美味しいものだなんて知りませんでしたよ」

それを聞いた幽香が、自慢げににやにやと笑みを浮かべながら応える。
「いえいえ、私のだから美味しいのよ。そこら辺間違えないようにね」

早苗達も、同じようにグラスに口をつけて、舌鼓を打っていた。
当の早苗などは、グラスに口をつける度に、
「んん、っふふふふ～・・・」
と、頭が変になったような声を出していた。

そんな中、妹紅がもうひと口頂こうかと思った、その時だった。
今やるべきことが、幽香お手製の葡萄酒を味わうことなどではないということを、幽香当人により思い出されることになった。

「で、ようやくなんだけど・・・貴方の言う身の上話というのを聞かせて欲しいわねぇ」

そう言いながらこちらを見てくる眼に、遥かに薄らいではいるが、先程と同じ得体の知れない雰囲気を感じ取った妹紅は、緩んだ気を一気に引き締めながら、ひとまずワインをもう一口だけ飲んでから、語りはじめた。
場合によっては、自分の語る言葉により、幽香にこちらの魂胆が知られてしまうかもしれない。
そのことを注意しながら話す必要があった。

しかしながら妹紅には、この幽香すら騙しとおせる自信があった。
自分がこれから語る言葉に、嘘がほとんどないからだ。
今自分の中にある曖昧な本心を語るのだから、それは紛れもない真実であると言えた。

「私がグランチャーに乗っていたってことは、もうみんな知ったよな」
「えぇ」
幽香が相槌を打つ。

「それで、私はブレンパワードの戦いでそいつを失った・・・で、実を言うと、私の中には、まだそのグランチャーに対する未練があるんだよ」
「まぁ、そうでしょうねぇ～」

今度は早苗が相槌を打つ。

「でもそれと一緒に、グランチャーのことを恐れてもいるんだ」
その声には、誰も相槌を打たなかった。
その代わり、皆そろって、眉をひそめるだけだった。

「グランチャーに乗った時、私の中にある得体のしれない狂暴な意思が・・・私の本性なんだろうけど、ものすごく恐ろしい意思が呼び起こされていた。私はその意思に衝き動かされて、もう少しで取り返しのつかないことをするところだったんだ・・・だからなんというか、グランチャーのことに未練はあるけど、それと一緒に、怖くもあるんだ」
「・・・ふぅん？」
幽香が、最早相槌とも言えないような小さな息を漏らした。

「だから一度、グランチャーを失った事をひとつのきっかけにして、そいつらの敵であるブレンのことも知ってみようと思ったんだ。だから、一度地底にいって、ブレン達のために頑張ってるっていう連中と一緒にも居たんだ・・・・・そうすると、段々とブレンのことも分かってきた。ブレンと一緒に生きている人達のことを見ていると、あいつらのいい所もいろいろ見えてきたんだよ。正直言うとさ、ブレンはグランチャーよりもずっと優しいし、穏やかで・・・怖くない生き物だったんだ」

そこまで聞いて、早苗がむすっ、とした顔で言い返してきた。
「なんなんですかぁ貴方は・・・そんなことを言うために来たんですかぁ？」

「いや、続きがあるんだよ」
すぐさまそう応えつつ、妹紅は続けた。

「・・・ブレンの良さを知ったのはいいんだけど・・・何故かは知らないんだが、そうするとますますグランチャーに対する思い入れも強くなっていくように感じられたんだ・・・ブレンのことを知るのと一緒に、グランチャーのことをあまり知っていなかったことに気づいてきたんだよ」

「・・・・・・」

幽香の鋭い視線が、突き刺さる様に浴びせられる。

「それでなんだか、もう一度だけ、グランチャーに乗ってみたいっていう気持ちが出てきてね、いてもたってもいられなくなったんだ」

そこまで聞いて今度は、先程の表情が嘘のように、にやりと笑みを浮かべ、早苗が言う。

「あぁ～なるほど。それで、私達に手伝ってもらって、新しい自分のグランチャーを見つけ出そうと・・・」

が、それにも妹紅はすぐさま、

「いや、そういうわけでもない」

と応えた。

早苗が、

「へぇぇ？」

と素っ頓狂な声を上げるのを聞き流しつつ、妹紅は続けた。

「もう一度グランチャーに乗ってみたい。だけど、そうなると、またブレンと戦わないといけなくなる・・・それもそれで、心が痛むんだ・・・なんせ、向こうの連中とも仲良くなってしまったから・・・」

「・・・ふん？」

こちらを見る幽香の眼から、僅かながらに鋭さは消えた。

が、その代わり彼女の眼が、『呆れた』と言っているように、妹紅

には見えた。

「このままずっとブレン達の側にいると、どうにもならないのも分かる・・・でもだからってブレンの敵にもなりたくない・・・だけど、このままどっちつかずのままでいたんじゃ、骨の髄まで腐ってしまうように思うんだ・・・異変から逃げて、両方に眼を向けないようにすることもできない。一度アンチボディ達の心に触れたら、どうにかしてやりたいと思うんだ・・・だから・・・」

長々と話を続けてしまったが、ようやく妹紅は、結論に至るところにまで来た。

何故自分がここに来たのか、その理由を最後に語ろうとする彼女だったが、その声をまたしても、幽香が遮ってしまった。

彼女は、妹紅の言おうとしていることを代弁するような言葉を放った。

もしかして、まさかと思っていたが、さとりと同じ能力を持つものがもう一人いるなんてことが現実に起きているのではないかと思えるほどに、妹紅の言いたいことをそのまま伝えるような言葉だった。

「なるほどねぇ、分かったわ・・・貴方が私達からグランチャーに関わる話を聞いて、私達が何を考えてるか・・・知りたいのならどうぞ。好きなように知るといいわ」

「ぅ・・・？」

「・・・・・・」

妹紅も慧音も、思わず、聞こえないほど微かながらも呻き声を上げてしまった。

ますますあの幽香という妖怪のことが、不気味に思えてしまう。

まぁ、妹紅があそこまで言えば、察しのいい妖怪ならば幽香同様に彼女らの考えが分かることだろう。
彼女が特別だ、というわけではない。
と、思いたいところだが、実際はどうなのか・・・

しかし、妹紅達を見つめてくる幽香の眼からは、異様なまでの威圧感と、刺すような鋭利さはなくなっていた。
それなりに、とはいえ、友好を感じているような眼をしている・・・ように見える。
表向きに見える限りでは、どうやらこちらのことを信用してくれたようだ。

幽香の言葉に、
「そうなんですか？」
と聞き返した早苗に、彼女は
「えぇ、そうよ」
と応える。

それを聞いて、妹紅がここに来た理由がようやくはっきりと分かった早苗は、はっきり言って小馬鹿にしているようにか思えない笑みを浮かべて、こんなことを言った。
実際、彼女は妹紅達のことを小馬鹿にしていたのかもしれない。

「おセンチさんな話ですねぇ～」

「お、おセンチさんて・・・あのなぁっ」
思わず言い返したくなった妹紅に対し、幽香が早苗に乗っかるようにして続く。
「そうねぇ、おセンチさんだわ。グランチャーとブレン、両方の愛情に悩んでどちらを選ぶか決めかねてるなんて、おセンチさん以外

の何でもないでしょ」

「うぅ・・・っ」

確かに、言われると反論ができない。

妹紅の考えは、多分に感傷的で、独りよがりな部分があった。

慧音でさえ、さすがにこればかりは妹紅のことを擁護する言葉が思い浮かばないのだ。

センチメンタル、ということに関しては、認めるしかないだろう。

が、感傷的だろうがセンチメンタルだろうが、今の妹紅はグランチャーとブレン・・・その両者の狭間で立ち止まり、どちらに向かって一歩を踏み出すのか決めかねていたのだ。

そして、このままどちらの方にも踏み出せないのでは、心が閉塞してしまうように思えていた。

だからこそ、グランチャーを倒すための策とかそういうものとは関係なしに、ここに来たのだ。

自分とは別にグランチャーに乗る者達の存在が、何かのきっかけを作ると信じて。

妹紅は、言い返せないのを承知し自分がセンチであることを認めながらも、固い口調でこう言った。

「なんだっていい。情けなくてもいい・・・だったら、情けをもって教えて欲しいんだ。あんた達にとって、グランチャーとはなんなのか・・・できるだけ詳しく・・・腹の奥にあるものまでみんな、吐き出してほしい」

その口調の強さと表現の重さ、そして鬼気迫るような雰囲気と共に、さすがに冗談では済まされないことを感じ、息を呑む早苗。

彼女以外の者達も、（割と）真剣な表情で、妹紅の言葉に耳を傾けていた。
しばしの間、重苦しい空気がこの場を流れる。

しかし、この空気に耐えきれなくなったのか、
あるいは、自分なりに妹紅の望みを叶えようと考えた末のことなのか、
神奈子が急に、困ったような顔を浮かべ、間抜けな声でこう呟いた。
「んなこと言われても。何か話すことなんてあったかねぇ？・・・ねぇ、早苗？」

突然質問を吹っ掛けられた早苗が、びくんと身ぶるいしながら、慌てた。
「え、え？・・・えぇ～・・・あった、か・・・なぁ～」

二人のこんな声が響き渡れば、重苦しい空気も一瞬で消え去ってしまう。

確かに、大層なことなど何もない。
ふたつのアンチボディの間で揺れ動く者の心を動かせるほどのことなど。
そう口外に語るように、幽香が自嘲気味な笑みを浮かべていた。

真剣に語った自分の言葉は一体なんだったのか・・・これでは馬鹿みたいだ。
そう思い、いっそ虚しさすら感じながらも、妹紅は、ひとまずこう返した。

「話すことがないなら、適当な世間話でもして、仲良くなりたいよ・・・それだけでも、結構心も晴れてくるもんだからさ・・・」

実際妹紅は、小難しい話をしなくても、もっと簡単な話をして早苗達の人間性に触れれば、その先にグランチャーの魂も見える気がした。
そのことで、自分の中で踏ん切りをつけることも、できるかもしれないと考えていたのだ。

※

妹紅達が幽香らと共に彼女の屋敷に入ったその頃と同じくして、その一部始終を、遥か高空から眺める者達がいた。

妹紅達の首尾を確かめるために彼女らを追っていた、二人の天狗だ。
河童が開発した小型の望遠鏡を覗き込むその眼には、妹紅達が屋敷に入り、幽香と早苗達もその後を追うように入っていくのが見えた。

念のためしばらく様子を見ていると、早苗達からやや遅れて、神奈子と諏訪子が屋敷の方へと歩み寄って、そのまま中へと入っていくのも見えた。

今朝方の偵察の時、早苗がこの花畑の中で、木材をせっせと組み立てて何かを作っていたようだが、どうやら、この二柱が宿る分社を作っていたらしい。
それも、今朝の間に完成したようだ。実物は見ていないが。
そういうこともあって、守矢神社から早苗共々姿を消した彼女らがここにいるというのも同然の話だったし、予想できたことだった。

それはともかくとして、これで太陽の畑にいる者達は全員幽香の屋敷に入ったと思われる。
妹紅達は、今のところは役割を果たせているようだ。
このまま余計な時間をかけてはいけない。
目的が達成できたなら、後はこちらも迅速な対応を、だ。

覗き込んでいた望遠鏡を目元から離し、互いの顔を見合う二人の天狗。
そのうちの片方が言った。

「それじゃ、報告してくる・・・もしこっから何か起きるようなら、臨機応変、素早く対応してよ。任せるかんね」

それに、もう片方の天狗が応える。

「了解っ、任された」

そうして、先に口を開いた方の天狗が、妖怪の山の麓にある湖の中にブレンと共に待機している魔理沙達に事の経過を報告すべく、飛び去っていった。
残ったもう一人も、こちら側で何か緊急の事態が発生しないかどうか、注意深く幽香達の監視を続けることにした。

※

紅魔館。

ここにいる者達もまた早苗らと同様、水面下で推移している事態に気付くことができないでいた。

代わりに、グランチャーを撃破しようというブレンパワードの行動に、余計に気づかなくなるような事態が起きていたのだから。

今日もまた、主人から命じられる雑用をこなし、その事をレミリアに報告し終え、『なら、どこへなりとぶらぶらほっつき歩いてていいわよ』と言われたので、その言葉通り館の廊下を適当に歩きながら、どこで暇を潰そうかと考えていた咲夜。

そんな中、突然後ろから大声で呼び止められてしまった。

さして広くはない廊下の中に、高く大きな声が反響する。

「咲夜さん！」

その声だけでも誰がこちらを呼んだのか分かるが、声のした方向に振り返ってみると、やはりというべきか、声の主はこあだった。

咲夜が振り返ると共に、汗をかくほどに必死にこちらを探していたらしい彼女が膝に手を当てて、背中を微かに上下させながら、荒い息で続けた。

それと共に咲夜は、何故こあがこれほどに慌てているのか、その理由を知った。

「美鈴さんが・・・美鈴さんが・・・戻ってきました」

さすがにこれには、咲夜も眼を見開いて驚愕し、大声で聞き返してしまった。

「本当っ?今どこに・・・」

が、その声に対する返事は、すぐには来なかった。

こあはただ、膝に置いた手を離して、前のめりになった上体を起こしつつ、何とも言えない複雑な表情を咲夜に見せるだけだった。

「・・・・・・?」

何事だ?と眉をひそめる咲夜に、こあは応える。

「わ、分かりません・・・・・・その・・・突然私の前に来て、それからすぐにまたどこかにいなくなったんです・・・・・・ただ・・・」

「ただ・・・?」

ますます訝しげな表情になる咲夜に対し、こあはあるものを差し出してきた。

一枚の封筒だ。

当然、その中には何か紙が入っているらしかった。

これは一体何だろう、というような顔になってその封筒に眼を向けた咲夜に、こあが言う。

「この手紙を咲夜さんに渡して欲しいって・・・」

「これを・・・？」

「はい・・・その・・・私は美鈴さんに、みんなに顔を見せてあげるように言ったんです。みんな心配してたから、早く顔を見せて安心させてくださいって・・・でも、何も応えないで、ただこれを咲夜さんに渡すように、って・・・そうして、なんにも言わずに去っていったんです」

「そう・・・頂戴していいかしら？」

「あ・・・はい、どうぞ」

こあから封筒を受け取った咲夜は、右手でつまんだその、ほんの僅かに中の紙の容量で膨らんでいる表面を、裏表と交互にひっくり返しながら眺めた。

折り目の部分には、丁寧に蝋を押し付けて印がしてあった。

手紙がまだ誰にも読まれていないことを証明することで、手紙の隠匿性と、自分と相手だけのやり取りであるという信頼感を示すためだ。

中世（幻想郷的に考えても、ひと昔前と言えるような時代だ）に欧州に浸透した慣習であるが、当時はまだ紙がそれなりに貴重だったため、封筒などは使わず、紙を直接折り曲げて、それに印を施していた。

まあ、幻想郷の文通も多くの場合は似たようなものだが。

それはともかくとして、咲夜は封筒に施された印に、同じような隠匿性と、これを送るようにこあに頼んだ者・・・美鈴からの信頼を感じた。

大方、わざわざこちらに会いに来ないのは、この間言ったあの言葉

に威圧されたからだろう。
だから、まず直接会わずに、こうやって手紙を通して自らの思いを伝えようというのか・・・
だとすれば、それだけの気持ちが、この手紙には込められている。

こあが、ほとんど呟くような声で言う。
不安そうな声音だ。

「美鈴さん・・・どうされたんでしょう」

そんなこあに、咲夜は応えてやりたかった。
美鈴は、臆病になっているのだ。
次会えば殺すとまで、こちらに言われたのだから。

だが、さすがにそんなことをおおっぴらに言えるわけがない。
咲夜は、美鈴のみならず、こあに対しても罪悪感を感じながら、極力苦々しい心を現さないように意識しつつ、こう応えるしかなかった。

「心配ない。あいつは大丈夫よ・・・用事がまだ済んでないから、せめて無事なことだけは伝えにきたんでしょう」

「・・・そう・・・ですね」
「この手紙は私が読んでおきましょう・・・ありがとう、持ってきてくれて」
「いえ・・・どういたしまして」

それだけ言い、咲夜は早々に踵を返して歩きだし、こあと別れた。

今すぐにでも、美鈴がこちらに宛てたこの手紙を読まなければいけ

ないと感じたからだ。
レミリアから与えられた暇を埋めるには足らないほどの、やるべきことができた。

足早に廊下を歩き、自分の部屋へと戻ってきた咲夜。

戸を開けて中に入ると同時に彼女は、部屋の中にあった机・・・の下に潜っていた椅子を引き出してその上に腰掛けると、徐に、封筒に貼り付いていた蝋による印をぺりぺりと小さな音を鳴らしながら剥がした。

窓に取り付けられているカーテンはふたつあった。
その内のひとつの厚い布地のカーテン（真夏の陽光でも完全に遮る特性の品だ）は開かれ、もう一枚の薄いレースのカーテンだけがかかっている。
その向こうから、真昼の日差しが通り抜けて、室内を淡く照らしていた。

当然、封筒から、数枚に渡って書かれている美鈴からの手紙を取りだし広げる咲夜の手元も、等しく照らしていた。
彼女は、窓を閉めているから風の音も聞こえず、自らの呼吸の音も聞こえず、ほとんど無音に感じる空間の中で、紙面に書かれている文字の連なりを眼に焼き付け、心に刻み込んだ。

そこには確かに、美鈴の言葉・・・彼女の心の内が記されていた。

『実際にお会いせず、面と向かってお話しない無礼を、どうか許してください。
咲夜さんが、あのグランチャーと出会ってから、もう結構な時間が過ぎたように感じます。
それでも、実際はそんなに長くは経っていないようにも思えます。
一週間ぐらいは経ったでしょうか。
でも、一ヶ月は経っていないでしょう。
そう思うと、私がグランチャーのことを悪く言って、咲夜さんが怒ってしまったのは、ずっと最近のことなんだな、と思えます。

どうしても咲夜さんに面と向かって話ができないのも、その時のことがあったからだということは、どうか分かって頂きたいです。
だけど、決してただそれだけの理由でこの手紙を書いているわけじゃないということも、一緒に知って頂きたいんです』

そこまで読んで咲夜は、長々とした前置きだ、と呆れつつ、その長い文章が、美鈴が当時のことを相当気に病んでいたことを伝えてくるようで、ますます彼女に対して申し訳なく思った。
そうして、いつもぶっきらぼうでがさつな印象を受ける美鈴の書いた手紙に書かれている文字が、非常に整っていて、彼女の意外な達筆さに感心もした。
手紙に書かれている文章は、どこかおかしさを感じさせるものだったが。

そういう諸々の気持ちを込めて、ひとつ小さな鼻息を漏らした咲夜は、それから手紙の続きに眼を通した。

『あの時のことは、今でもよく思い出すことができます。
思えばやっぱり私が悪かったのだと思い、反省しています。
咲夜さんの、そしてグランチャーの気持ちも考えず、あまりに自分勝手なことを言い過ぎてしまいました。

ただ、言い訳になるんですが、どうしてもこの場に書かせて頂きたいことが、いくつかあるんです。

まず、私がグランチャーをあれほど悪く言ったのは、全て咲夜さんのことを思っていたからこそなんです。
こんなことを書けば、余計に怒るかもしれないけど、これが私の本当の気持ちです。
なんというか私には、あのグランチャーが、咲夜さんをどこか遠い場所に連れていくような気がしてならなかったんです。
グランチャーに乗って戦っていれば、本当に、その遠い場所に行ってしまうかもしれなかったんです。
生命を散らすことで。
私はそれがとても怖かったんです。
だから、咲夜さんをグランチャーと共に戦わせたくなくて、ああいうことを言ってしまいました。

だから許して欲しい、というのではありません。
ただ、この私の気持ちも、少しだけでも分かって頂きたいんです。
そんなこと、無理かもしれませんけど。
それでも、私が咲夜さんのことを決して嫌いになんかなってないということは、咲夜さんの方でも分かって頂けていると、信じています。

そしてもうひとつ言いたいのは、私はあんな酷いことを言ってしま

いましたが、グランチャーのことも決して嫌いではないということです。
確かに、あの時はグランチャーのことを恨んだりもしました。
でも、咲夜さんはあの時仰っていました。
共にグランチャーの生命を助けようとした時のことを忘れたのか、と。
その言葉を思い出してみると私は、やはり今でも、グランチャーのことを好意的に思っていることが分かりました。
咲夜さんのおかげで彼が生命を繋げた時、歓喜しました。
その時の気持ちは、確かに今も心の中に残っているのです。

あれから私は、もう一度自分の心に語りかけて、グランチャーに対する気持ちを整理していました。
そしてそれは、今終わったんです。

咲夜さんにはもう、私がどうしてこの手紙を書いたのか、分かっていると思います。
咲夜さんがこの手紙を読んでいる今、私は、妖怪の山の麓にいます。
丁度、館から湖の上を横切るような位置です。
もし咲夜さんが許してくださるなら、もう一度だけ、お会いして頂けないでしょうか。
大分長い距離をご足労頂くことにはなりますけど、どうか、お願いします。

あの時の咲夜さんの言葉は、咲夜さんにとっては大それた言葉ではなかったのでしょう。
それでも私にとってはとても重く、苦しい言葉だったのです。
咲夜さんの口から、私のことを許してくれる言葉を聞かないかぎり、私はずっと、貴方の前に戻ってくることができません。
そんなことは厭なんです。

とても辛いんです。
もう一度、前の私達に戻りたいと願っています。
もし、私が咲夜さんのことを思っているのと同じように、咲夜さんも私のことを思っているのなら、どうかその気持ちを聞かせて欲しいです。
そうして、その時は、

これから先のことは、会って話しましょう。

言い訳がましいことをたくさん書きました。
もしかしたら、咲夜さんのことを余計に怒らせてしまったかもしれません。
でももしかしたら、この手紙を読むことで、貴方が私のことを許してくれるようになったのかもしれません。
そのどちらかということは、今の私には分かりません。

ただ、今この時、私は咲夜さんが私のところに来てくれて、もう一度、前のような日々に戻れることを、信じているのです。

いつまでも、お待ちしております。』

第十四話　その１１

咲夜はただ黙して、しばらくの間じっと、手紙の書かれている紙面を見つめていた。
書かれている一つ一つの言葉や文字ではなく、手紙そのものを見ていたのだ。
そうすることで、この手紙の細かい内容を越えて、美鈴の想いを見ることができそうな気がしたから。

だが、そんなことをする必要はなかったようだ。
手紙に込められた美鈴の想い。
それは、すでに手紙の中に、充分事細かく書かれていたからだ。

咲夜は、まるで美鈴に心の内を全て見透かされたような気分になって、いっそおかしくさえ思えてきた。
いや、むしろその逆で、自分が美鈴の気持ちをよく分かっていたのだろうか？
彼女が望むことを、咲夜はすでに実行していた。
そして彼女は、手紙に書かれている通り、美鈴のことを嫌ってなどいないということを、今実感することができた。
美鈴の、自分を許して欲しいという願いをこの手紙を通して知る前に、咲夜はもう、彼女を許していた。

なら、あともうひとつやるべきこと・・・
それも、この手紙の中に書いてあった。

咲夜は、じっと見つめていた手紙から視線を逸らし前を見ると、そのまま徐に椅子から立ち上がった。
手紙から手を離し、握っていた実感もわかないほどに軽々としたその紙を、机の上に置いた。
そうしてすくっ、とその場に佇立した彼女は、ひと息置くように一瞬だけ身体の動きを止めながら、呟いた。

「・・・いくか・・・」

その声を合図にするかのように、彼女は机に置かれた手紙もそのままに、引きだされた椅子もそのままに歩きだし、部屋から出ていった。
戸が開けられ、そして閉められる音ばかりが乾いた反響をもたらし、部屋の中には、家具と、美鈴が書いた手紙と、そこに込められた彼女の意思。そして、それらを等しく照らすカーテンを透けて差し込む陽光だけとなっていた。

※

妖怪の山の麓。
山の中には当てはまらず、山の外にも当てはまらない、境界とも呼べる場所だ。
言うなれば、人間の領域と、妖怪の領域の狭間だ。
この場所では、得てして妖怪も人間も、それほど見当たらない。
時々、山に迷い込む人間に注意を促す親切な者がいるのだが、今はその姿も見えなかった。

このまま山へと至り、頂上へと至るためになだらかな、そして時に急な勾配が形成されているわけだが、周囲には木々が生い茂り、どれほどの勾配なのかは実際にはよく分からない。
ただ、木々の間から上の方を眺めてみると、首をもたげて上を向かなければその全てを見ることができないような、そそり立つ稜線が姿を見せていた。
が、その一方で、山から離れるような方向、湖の方にはそれほど木は多くなく、それがまた、この場所が丁度山と山でない場所であるという実感を湧かせてくるようであった。
湖を少しだけ上の方から見下ろす形になっているため、この場所がなだらかな上り坂になっていることの実感もまた、与えていた。

海のない幻想郷においては、一番水が多いのはここではないだろうかと思えるほどに広大な湖だ。
これほどの湖は、他に片手で数えられるぐらいしかない。
まぁさすがに、日の本最古（世界的に見ても古いらしい）の湖だそうで、幻想入りとは遠縁そうな琵琶湖とかにはさすがに勝てるわけがないが、もしかしたら、負けてもないかもしれない。
それほどの広さ故か、周囲に住む妖精達の体のいい遊び場にもなったりしていた。
しかしながら、その妖精達も今はおらず、湖は、哀切を感じさせるほどの静けさを保って、その水面に陽光を反射させ、滑らかな光を映し出していた。
風が吹き抜け湖面が揺れる度に、その光もまるで生きているかのように揺れる。
そんな様子が、麓にいる美鈴からもよく見えた。

そして彼女には、今この湖の中に、ブレン達が潜んでいるということも分かっていた。

もっとも、今この場所からでは、ブレン達が隠れている場所は見えない。
その広大さ故に、この湖は端の方になると薄い靄がかかって見えなくなる。
紅魔館のある小島（一応山とは反対側で陸続きになっているから、半島と呼んでいいかもしれない）のあたりとなると、余程眼がよくなければ、到底見ることはできないだろう。
そうしてブレン達は、そこに隠れているのだ。
咲夜がここに来たとして、ブレン達が行動を開始しても、決してそれを見ることはできないはず。
美鈴はそう考えて、ここで彼女と待ち合わせることにしたのだ。

そうして美鈴には、咲夜がここに来るという確信があった。
さすれば、作戦は成功するということだ。
美鈴には分かっていた。
というよりか、信じ、そして願っていた。
咲夜は、あの手紙を読めば、必ず自分の下に会いにきてくれる者だということを。

そしてその確信と信頼は正しく、また、その願いは叶えられた。

山の麓の柔（やわ）い地面の上に仁王立ちして、じっと眼下に見える湖の畔（ほとり）を見つめていた美鈴の眼に、小さな影がひとつ映った。
その影が何者であるのか、美鈴には見間違える道理がなかった。
仮に実際は違う者だとしても、今の美鈴は、人影が見えれば、それを彼女であると認識するしかなかった。
その影は、湖の畔を、湖畔の形に沿うようにしてゆっくりと歩いていた。

「・・・きた・・・」

思わず口をついてでたその声は、思惑が的中したことへの手ごたえに歓喜するようでもあり、これから自らがやる行いへの苦悩を表すようでもあり、あの者に対する同情と愛情ゆえに感じる哀しみと空虚な気持ちから来る声でもあった。
そういう、複雑な声音だった。

畔を歩いていたその影も、こちらに気づいたようだ。
角度にして5。にも満たないようななだらかな斜面をのぼり、こちらに近づいてくる。
そうすると、湖にかかるうっすらとした靄ではっきりと見えなかったその姿も、おぼろげながら判然としてきた。

やはり、咲夜だった。

美鈴が、あの時彼女が言った『殺す』（『千本のナイフを突き刺す』）という表現を思い出し、その時の恐怖もまた思い出しそうになった。
だが、彼女がここに来るということは、もうそのようなことには成りえないということなのだ。

「・・・・・・っ」

美鈴は、息を呑んだ。
咲夜はあの手紙を読み、こちらの言葉を聞き入れてくれた。
だがそのおかげで、これから辛い時間が始まるわけだ。
それもこれも全て、美鈴自身が望み、招き入れたことなのだから、耐え忍ぶしかないというのが現実だったのだが・・・

※

太陽の花畑に向かった天狗達は、あの場所が言うなれば敵の本拠地と呼べるところであり、もし監視の眼が向こうに気づかれた場合事態が急変するために、かなり注意深くなる必要があった。

それに比べると、妖怪の山にいる天狗の方は比較的気が楽ではあった。

太陽の畑が向こうの本拠地なら、この山は天狗の本拠地だ。

周囲の地理は我が身のことのようによく分かっている。

隠れて、対象である咲夜のことを監視することなど訳もなかった。

それに、もしも窮する事態が発生したとしても、すぐさま山の天狗に救援を要請し、強行策に打って出ることもできる。

そういうこともあり、特別気負ったりはせず、しかしながら、任務であるため注意力を散漫にしないように気をつけながら、麓の美鈴と共に咲夜が現れるのを待っていた二人の天狗。

なんでも、太陽の畑の方の首尾は上々で、妹紅達は早苗達を上手く幽香の屋敷の中に釘付けにできているそうだ。

向こうの天狗が、湖の上で待機している天狗にそのことを報告をした後、こちらにも同じ報告をして、また湖へと戻っていた。

さて、一方でこちらは、美鈴が湖に到着してから、さらに咲夜が手紙を受け取り麓に来るまで待たなければならなかったので、もう少しだけ遅れそうだった。

作戦参謀とも呼べる永琳は、一刻あれば作戦は終わるだろうと言っ

ていたが、さすがにそこまで早くは終わらないというわけだ。

と、そんなこんなでしばらく待っていると、湖の畔をゆっくりと歩くひとつの人影が見えてきた。
美鈴同様、天狗達としては、この状況で現れる人影を見て想像できる者は、ひとりしかいなかった。
ふたりして、それぞれが持っていた望遠鏡を覗きこみ、その影を拡大して見てみる。
すると予想通り、十六夜　咲夜そのものであった。

どうやらこちらの首尾も上々、
手紙一枚で上手くいくのだろうかと疑う気分もあったが、全てを美鈴に任せていたことに関しては、あの永琳が正しかったということだ。さすがとでも言っておこうか。
咲夜は、まんまとこちらにおびき出されたというわけだ。

一応念のために、咲夜の動きをもう少し注意深く観察してみる。

彼女は、麓に続くなだらかな勾配をのぼっていき、ついには美鈴のすぐ傍にまで歩み寄っていた。
そうしてふたりして、何事か話を始めた。
ここまでくれば、向こうには手のひらを返して館に戻るような気はないだろうということが確信できる。
後はこのまま、美鈴が上手い具合に、彼女をこの場に引きつけておいてくれるだろう。

となれば、こちらも迅速な対応を、だ。
天狗はその機動性がアイデンティティのひとつなのである。

こちらも、もう一方同様、湖に待機している仲間に報告するべく、

二人いる内の一人が飛び去っていった。

これで状況の第一段階は達成された。
次は、魔理沙達とブレンパワードが働く番だ。
首尾は上々、概ね予定通り。
このままグランチャーを無事撃破して、勝てば官軍、声高らかにマーチでも響かせながら地底に凱旋といこうではないか。

このようなことを考えるあたり、天狗もある意味では、アンチボディという存在に対して淡泊であったのかもしれない。

※

太陽の畑に向かっていた天狗に続いて、美鈴側の天狗からも、準備が整ったという報告がなされた。
その報告を受け、湖で待機していた天狗は、報告に来た二人の天狗と共に、水面下に隠れていた魔理沙達に分かるように、サインを出すことにした。

湖面スレスレのところで浮遊すると、三人の天狗は隣あって、まるで滑る様にその上を飛行した。
そうして、水面に円を描くような周回軌道を三回とる。
その姿はさながら水鳥であり、いつも空の上をびゅんびゅんと飛んでいる慌ただしい印象はまったくない、華麗なものであった。
音もほとんど立たなかった、せいぜい、微かに空気がうねるような音が響くばかりで、水面が飛沫を立てるような音さえ、響くことは

なかった。
そうして、三人の天狗がひとどころに集まって飛行すれば、揺らめく湖面はほんの僅かながらに、しかしはっきりと押しのけられ、小さな波を引き起こす。
そしてそれが・・・

その様子は、湖面に沈み、穏やかな水流の中にその身を隠していたブレンと、その胎内にいる魔理沙達にも見えた。
天狗の機動により、湖面に大きな波紋ができていたのだ。
その波紋は、明らかに天然自然に作られたものではなかった。

湖中に身を隠すにあたって、魔理沙達が天狗と取り決めておいたサインというのが、湖面で三回円を描く、というものだった。
天狗がそれを実行しているということだ。
つまり、準備は整った。

スリットウェハー越しに、陽光が差し込み不可思議な光を揺らめかせる湖面を見ていた魔理沙の眼に映るその波紋は、放射状の、無数の円が次々に生まれるような形と動きをしていた。
そうしてそれがいくつも、まさしく無数に見えていたのだが、その無数の円の発生する源もまた円の形をしていた。
大きな円の円周、一点一点からさらに円形の波が発生していた。
それにより水面には別々の角度から生み出された円形の波紋がぶつかり会うことにより、格子状の模様が描かれていた。
波がぶつかり会うその一点で、白いはっきりとした光の点ができていたり、あるいは逆に、色濃い影を見せたりしていた。

こんなものを見せられて、これが取り決めておいたサインとは違う

と判断できるわけがなかった。
やはり、全ての準備は整ったということだろう。
となれば後は、こちらが動き出すだけか・・・

紅魔館で、何も知らずにいるグランチャーを襲撃し、撃破する。

戦いそのものとは別の冷たい緊張感が、スリットウェハーの中を奔った。
オーガニックエナジーによる波を通して、霊夢の声が聞こえてくる。

（さて、行きましょうか）

それに魔理沙も、
「あ、あぁ・・・」
と、予想外に不安そうな声で返した。
が、彼女自身それほど緊張しているとは（意識的には）思っていなかったし、霊夢や輝夜なども、軽く聞き流していたからか、この不安そうな声音を気にするような者は、魔理沙本人を含めていなかった。
輝夜が、
（ん、そうしましょう）
と、霊夢の声に応え、さとりも
（はい）
と続く。

次いで魔理沙はスリットウェハー越しに、こちらと同じく湖中に隠れ、水の流れを身に受けていたサトリブレンの方を向きつつ、その胎内にいるさとりの方に呼びかけていた。
水中で、湖面から差し込む奇妙な形の光に照らされるサトリブレンの姿は、火傷の負傷をあまり感じさせないものであった。

が、ただ感じさせないだけだ。実際はまだ、完治ではないはず。

「さとり、先に言ったが、無理しちゃあ駄目だぜ・・・どうせ一発向こうにきついのをお見舞いすればそれで終わりなんだろうけどな。もしかしたらってこともある」

その声に、ほんの僅かに間をおいてから、返事が返ってきた。

（気をつけます。今回は魔理沙さん達にみんな任せますから）

「そうしてくれ・・・よぉ～し・・・」

それだけ言うと、魔理沙は意識を戦いの方へと切り替えていた。とはいっても、さとりに言った通り、宿主のいないグランチャーに致命傷を与えるだけでいいのだ。

難しい話ではない。

だというのに、何故だか魔理沙は酷く緊張していた。

何故かは分からない。

ただその一方で彼女には、今回こうやって湖の中にブレンを潜ませることで、ひとつ知ったことがあった。

ブレンはどうやら、水の中にいると非常に落ち着くようなのだ。

戦いに向け、ゆっくりと湖面に向けて上昇するブレン達。

天狗は予定していた回数円を描き終えていたため、すでに湖面の波紋は消えており、向こうはブレンが顔を出すのを待っているようだった。

そんな中で魔理沙は、右手のひらでスリットウェハーを撫でながら、言っていた。

「あんた達は水が好きなんだなぁ～」

そうして、そう言いながら、何故そうなのだろう、と考えを巡らせていた。

水は言うなれば、海だ。海そのもの。
古い昔、地球の全てはマグマだった、それがやがて海となった。
得てして世界は初めに、海から始まったのだ。
最初に世界で生まれたのは火であり、次に水が生まれた。
だから海は、こちらが思っているよりもずっと偉大な、生命の源なのだろう。
この世にある全ての水は、元は全て海から出来ている。
大袈裟な表現かもしれないが、あながち、間違っていることでもないのではないか？
海は全ての母であって、誰も忘れることができないものだ。
だから、幻想郷にやってくることもない。
忘れられるわけがないからだ。
ならば海はきっと、数え切れないほどに多くの生命の力・・・オーガニックエナジーで満ち溢れているのだろう。
だから海というものは、アンチボディ・・・そして、おそらくオルファンにとっても、偉大で、温かいところなのだろう、と思える。
だから、その感覚を残す水の冷たさを感じるだけでも、喜ばしいことなのかもしれない。

「ブレン達だって生命なら、自分達の故郷の事は好きなのか・・・・いや？」

だが、オルファンは長い間ずっと宇宙を彷徨っていたではないか。
宇宙の只中に海などない。
水すらないだろう。

だとしたら、ブレン達は海など知らないのではないか？
あるいはもしかしたら、オルファン達が生まれた遠い故郷には、豊かな海が広がっていたのか？
『そのもの』達はその地から旅立ち、宇宙を旅していた・・・
もしくは、宇宙を旅する中で、豊かな水をもつ惑星（ほし）に辿り着いた時に知ったのか。
あるいは単に、今になって初めて浸かった水の感覚が気にいったという、単純なことか？

はっきりとしたことはさすがに分からない。

とにかくひとつ言えることは、例えオルファンやアンチボディが海を愛していても、この幻想郷に海はないということなのだ。

「・・・あんた達も、難儀なところに来ちゃったよなぁ・・・また宇宙を旅するようになったら、今度はいいところに行けるようにな・・・」

そんなことを呟く。

だが、ブレン達がそれを実行する前には、やらなければならないことがたくさんあるのだ。
これからやろうとしていることも、そのひとつだった。
魔理沙は、僅かに顔を強張らせながら、続けて言う。

「その前に、まずはグランチャーをやっちゃわないといけないな・・・・覚悟を決めるんだ。やられることの覚悟もそうだし、やってしまうことの覚悟もな・・・あんた達に関しては、死んだらそこでお終いになっちゃうんだからな・・・お互い、どちらかの生命がお終いになる・・・」

その声に返すブレンの言葉は、魔理沙にとってはあまりに意外で、そして不可解で、それでいてどこか、確かな感触を胸の内に残す鋭さを持ったものだった。
ブレンがこんなことを、教えてくれと言わずとも語りかけてくるのは、初めてだったような気がした。

スリットウェハーの中、段々と近づいてくる水面を眺めていた魔理沙は、その眼を少しだけ見開き、驚いたような、あるいは戸惑うような表情を浮かべて、ブレンの語る言葉をうわ言のようなおうむ返ししていた。

「・・・それは違うって?・・・・・・死ぬことは、生命が終わることじゃない?・・・・・・生命はまだ・・・永遠に続くことができる・・・・・・」

輪廻転生の話でもしているのか?
いや、違う。
この言葉は、ブレン達の持つ生命のあり方そのものを伝える言葉だ。

初め魔理沙はブレンが何を言って、そして何故それを言うのかよく分からなかったし、多分考えたところでその真意を知ることはできそうになかった。
だから、とにかくただ、ブレンの語るこの言葉を素直に受け止めることにした。

ブレンにとっての死は、生命の終わりではない・・・死を過ぎてなお、生命は続いていく・・・

だが、その素直な認識がまた、いくつもの疑問を生む。

それは、アンチボディ皆同じなのか？
これから死んでいくかもしれない、あのグランチャーもまた？
続いた生命は、それからどうなるのだ？

「・・・・・・・・・」

これからもうすぐ戦いが始まるという場面であるというのに、魔理沙はブレンの語った言葉が放つ不可思議な感覚に包みこまれ、言いようのない気分を感じていた。
だがその不可思議な感覚が、戦いへの緊張を、まるでなかったことのように解(ほぐ)しているのもまた、確かだった。

今のところは・・・

三人の天狗が見守る中、四体のブレンパワードが、ほとんど同時に水面下からその顔を覗かせ、装甲の間から水を滴らせ飛沫を立てながら、ゆっくりとその全身を湖面から上げていった。

「・・・・・・いくぞーっ！」

それから間もなく、今は考える以上に行動すべきだと、心を改めた魔理沙の掛け声と共に、ブレンの群れがオーガニックエナジーの余韻をその場に漂わせながら加速し、紅魔館へと突き進んでいった。

このまま上手くいけば、あと五分とかからず戦いは終わる。
例え大なり小なり長引こうとも、ここまでくれば、グランチャーが敗北することは明白だった。

そうなる状況を招いたのが自分達なのだと知っていれば、魔理沙達は、自己嫌悪という言葉の意味が少しだけ分かったような気分になるのだ。

※

妹紅達が太陽の畑に到着してから、半刻すぎるか過ぎないか、という時期だ。
最初のころは、敵の懐に入り込むも同然ということで大いに恐れていたわけなのだが、それに反して幽香の屋敷の中の雰囲気は和やかなものだった。

せっかくこういう形で会えたのだから、ということで、いろいろと互いの話をしたりもしていた。

居間の中で、先程と同じように座りながら、幽香がこんなことを言ってくる。

「そういや思い出した。妹紅さんは、迷いの竹林の中に住んでいるという話でしたよねぇ・・・あんな辺鄙で貧相で殺風景で、なんにもないところによく住んでるわねぇ」
「え?・・・あ、あぁ、いや・・・あれで結構気に入ってるてな」
「でも、やることなくて暇でしょ」

「まぁ、確かに嫌になるほど暇ではあった・・・けど、やることを見つけようと思えば、見つけることはできたからね。迷い込んでくる人間を案内したりとか。一昔前は、妖怪退治の真似事をしていたこともある・・・まぁ、私なんぞお呼びじゃなかったようだし、飽きたから止めたけどな」

「妖怪退治っ・・・へぇ～、気をつけないと、私も退治されちゃうかもねぇ～」

「悪いことをしたらな・・・まぁ、妖怪が人間をあんまり喰わなくなったように、人間も無闇矢鱈に妖怪退治をしちゃいけなんだろう。他人に迷惑かけてない妖怪まで退治するのはよくない・・・モラルという奴だな。昔はそうでもなかったみたいだけど、今はそうでしょう？」

「もしかして・・・私に言ってるんですか？」

と、早苗が冷や汗をかきながらにこやかな顔で言ってくる。

「いや・・・人間ならみんなだよ」

「ふぅ～ん・・・飽きたねぇ・・・じゃぁ今は何してるの？」

と、幽香が聞いてくる。

「さっき言ったみたいに、竹林に入ってくる人の案内をしたり・・・まぁ、いろいろのんびりと過ごしてるよ」

「へぇ・・・それじゃぁ、私もその内に貴方に会いにいってみようかしら」

「え？」

「ふふ・・・」

小さく聞こえてきた幽香の声に、妹紅は思わず声を出してしまった。唐突・・・というほどではないが、急な言葉だったということもあ

るし、その時の幽香の声が、とても穏やかながら、どこか怪しい雰囲気を感じさせていたからだ。
戸惑うような妹紅の声に続いて、小さく含み笑いをした時のその顔も、傍から見ればとても人がよさそうなものだったのだが、妹紅はどうしてもそれを素直に受け止めることができず、なにか裏がありそうに感じてしまう。

そして実際、そのことは、今のところ決して間違いではないのだろうという意識もあった。

そう感じつつ妹紅は、どこか幽香が本気でこちらに会いに迷いの竹林にまでやってくるような気もしていたので、念のために、
「一応今は、地底の地霊殿って屋敷にいるんだ・・・どうしても会いたいっていうなら、そっちに来てくれればいい」
と伝えておいた。

そして、そろそろいい加減、自分がここに来た本当の理由というのを思い出していた。
それを果たせないのでは、魔理沙達の作戦がどうとか以前に、ここに来た意味がなくなる。

彼女は思い切って、話の端を折って、こう切り出した。

「それはそうと・・・なぁ、あんた達。私がどうしてここに来たのか、分かってるよな？」
その声に、幽香達は、そりゃ当然、というような顔をした。

「グランチャーのことね」
と応えた彼女に、早苗が続く。
「どうぞ、聞くことがあればなんでも聞いてください」

そう言われたため、妹紅は遠慮なく、聞きたいことを聞いてみることにした。
彼女の様子を、慧音は黙して静かに見守っている。

「あんた達って、グランチャーのことをどう感じてるんだ?・・・あんた達にとってのグランチャーって、何?」

その声に、早苗が「ふーむ」と鼻息を鳴らしながら、右手を顎にあてて首をかしげ、考え出した。
が、その一方で、特別考える様子もなく、藍がこう応えた。

「私にとっては、グランチャーと言っても、特別思い入れがあるってわけではない。私がグランチャーに乗っているのは、そうするべきと決められているからだ・・・何故とは言わないけど」

「・・・・・・」

訝しげな妹紅の視線を知ってか知らずか、藍はこう言った上で続けた。

「でも、なんだかとても面白い生き物に思える・・・生き物と呼べるかどうかも分からない、どっちつかずな感じとかね」

その言葉に続いて、考えがまとまったのか、早苗が口を開いた。
が、その言葉は、考えたわりには少しおざなりといった感じのものだった。

「よく分かりませんけど・・・いい子達ですよぉ、真面目だし・・・ねぇ幽香さん」

ほとんど応えになっていない応えに続いて、突然吹っ掛けられてしまった幽香だったが、彼女は実に落ち着いた様子だった。

そうして、早苗の呼びかけに応えるように彼女は口を開き、こう語

った。
「・・・こうやっていろいろ話を聞くより、実際にグランチャーを見てみればいいんじゃない？・・・結局、自分の心持ちを決めるのは貴方なわけなんだし」
「え？」
またしても妹紅は、幽香のこの言葉に、微かな声を漏らすだけだった。
今度は本当に唐突で不可解な発言に、妹紅と慧音がそろって固まる中で、幽香は続ける。
「話も大分長くなったし、一度外に出て、グラン達の様子を見てみましょう・・・仲良くやっているかしらねぇ」
言いながら彼女は、徐にソファから立ち上がっていた。
同時に、座り込んだままだった妹紅達の方を見下ろしながら、続ける。
見下す視線が様になっていた。
「一緒に行きましょう。私達なんかの言葉よりも、グランの声をその身で聞いた方が、いいかもしれないわよ」
その言葉を聞いて、ようやく幽香がどういう気なのかを知った妹紅と慧音は、ふたりして互いの顔を見合わせしばらく固まっていると、意を決したように軽く頷き合って、改めて幽香の方に向き直した。
そうして、妹紅が応える。
「そうだな、行こう・・・あんた達のグランチャーの声を、聞いてみたい」

第十四話　その１２

太陽の畑の上空で妹紅達の様子を監視し続けていた天狗は今、予断を許さない状況に見舞われていた。
屋敷の前で佇立していた白色のグランチャーが突然高度を上げ、花畑の上空で飛びまわり始めたからだ。
妹紅達がくる以前にもどうやら花畑の周囲を飛んでいたらしく、彼女らがきたことで中断されていたようだが、その続きと言わんばかりに、再び優々と空を舞っていた。

彼の者に見つからないよう遠方に逃れたが、向こうの動きは非常に不規則的だ。
花畑から出るような気はないようだが、いつ変なところに移動してこちらを見つけるかも分からない。
もしそうなれば、幽香達にそのことを伝えるかもしれない。
アンチボディに言葉はないが、心で意思の疎通はできる。
それ以前に、もしかしたらこちらを敵と判断して襲ってくるかもしれない。
そのような余計な事態に発展するのを避けるためには、妹紅達を置いて逃げるしかないかもしれない。

もしやこれは、幽香達の策略なのか？
彼女らはもしや、こちらの魂胆を知っているのか・・・

そんなことはないと考えたいところだったが、万が一そうだとすれば、魔理沙達には急いで貰わなければならない。

さて、そんな天狗の緊張など知らず、妹紅達は、グランチャーと対面するべく幽香らと共に一度屋敷の外に出てみることにした。

屋敷の戸を開けて真昼の陽光の中に出てみると、一番最初に見えたのが、花畑の上を飛び回る白いグランチャーの姿だった。
両手を広げ、全身で風を浴びるように飛んでいる。
時にくるくると身体を回転させる様子は、飛んでいるというよりも、風に煽られてきりもみしているだけのようにも見えた。
随分と楽しそうなものだ。

屋敷の入り口の前にたむろしているのもよくないので、少し前に出て、後から出てくる早苗達の邪魔にならないようにしつつ、妹紅達は、グランチャーのその姿をぼんやりと見つめていた。

が、その一方で、妹紅達に次いで屋敷から出てきた幽香は、妹紅達とは全く違う方向に眼を向けていた。
自らが駆る、土の色のグランチャーの方だ。

花畑の上を飛ぶ早苗のグランチャーに対して、我関せずといった様子で屋敷の傍に座っているその姿を眺め、幽香は呆れたような笑みを浮かべて、言った。

「やれやれ、付き合ってやれって言ったのに・・・グランチャーって協調性はあまりないのよね・・・ねぇ妹紅さん」

またしても唐突に聞かれたので、妹紅はいい加減飽きられそうだが、微かに身ぶるいしてその声に反応しつつ、後ろにいる幽香の方へと

振り返った。
そんな中で、彼女と共に外に出た早苗は、自らのグランチャーに向かって手を振っていた。

「えっ・・・あ・・・そうみたいだなぁ」

そんな妹紅の返事を聞いた幽香は、何故だかふと、柔らかくも不思議な笑みを浮かべながら、振り返っている妹紅に向かって歩みよってきた。

「・・・・・・っ？」

何事だろうか。
幽香への不信感もあって、彼女は思わず、顔だけ振り向いていたのを、踵を返し身体全体を幽香に向け直していた。
それはある意味、危険に対して身構えるような動きにも見えそうなものであり、こちらの思惑を示してしまうかもしれないと、妹紅自身思えるようなものだった。
しかしながら、幽香は妹紅のこの動きなどは全く気に留めていない様子だった。
彼女はすでに、別のことに意識を向けていたのだ。

身が強張るのを堪え、極力平常な状態を装う妹紅に対して尚も歩み寄り、とうとう彼女のすぐ目の前・・・妹紅よりも一回り背が高い彼女の顎先が、額にくっつきそうになるほど近くまで寄ってきた。
さすがにこれほど近寄られたら、誰だって変には思う。

「・・・ぅ・・・っ？」

つくづく、何事だ、一体何のつもりだと、冷や汗を書きそうになりながら、上目遣いに目の前の幽香の顔を見る妹紅。
彼女から数歩離れたところで、慧音が不安そうな目線を彼女に送っていた。
早苗達も、急にどうしたんだろう、と、不思議そうな顔で妹紅達の方を見ていた。

妹紅の視線に返すように、幽香もまた彼女の顔を見下してくる。
その眼は、こちらに対し外に出ようと呼び掛けてきた時と同様に、他人を見下すことに慣れているような眼だった。

だが、そんな眼を見せるのも一瞬だけだった。
次いで幽香は、首を僅かに下げ、にこやかな笑顔を見せながらこう言った。

「どうかしら・・・私のグランチャーに触れてみない？」

「ふ・・・触れる？」

今気づいたが、なんだかんだ言って幽香は美人だった。
彼女の笑顔を見れば、女心にドキリとしてしまうほどだ。
そんな幽香の綺麗な笑顔に、彼女から感じる不気味さや妖艶さが合わさり、妹紅は自分の身体が底なしのぬかるみに浸かって沈んでいくような、あるいは、重力のない空間でなすすべもなく浮き上がるような感覚に見舞われ、言いようのない混乱の中でどうしようもなくなり、無意識の内に幽香から後ずさりして離れてしまった。

何より、もはや想定することすら許さないような不可解な発言にも、足元をすくわれるような気分になる。

戸惑いを通り越して混乱し、いっそ錯乱する一歩手前にまでなりそうになっていることを隠しきれない妹紅の表情を伺い、幽香は笑顔を見せたまま、

「ふっ」

と小さな息を漏らす。

そうして妹紅を見つめる視線を逸らすと、身体全体を、もう一度屋敷の傍に鎮座するグランチャーに向けた。

次いで大きな声で、彼の者に対し呼び掛けていた。

「グランチャー！友達と一緒に遊ぶのが嫌なら、私とこの女の子を乗せて、一緒に遊びましょう」

その声に、沈黙を保っていたグランチャーがぶるぶると鳴きながら立ち上がると、爪先が触れないギリギリのところまで浮き上がり、ゆっくりと幽香の下へと近づいてきた。

本当に触れるか触れないかのギリギリのところであり、傍から見れば、まるで滑らかな氷の上を立ったまま滑っているようでもあった。

その様子を見ていた早苗が、驚きながらも興奮した様子で言う。

「あれ？幽香さーん、乗るんですかーっ？」

「えぇ、妹紅も一緒に」

「妹紅さんもー？」

幽香の声を聞いた妹紅は、俄に慌てだし、幽香に対しこう呼び掛けていた。

「私が、あんたのグランチャーに・・・？一体どうして・・・」

それに、グランチャーの方を見ていた幽香は、再び妹紅の方を見返しながら、逆にどうしてと聞くのがどうしてなのか、という不思議そうな顔をして応えた。

「だってさっき、グランチャーの心を感じてみた方がいいと言ったじゃない・・・それなら、実際にその身体に触れるのが、よりよいでしょう？」

「そ、そういうのは分かるけど・・・あんまり急すぎる・・・」

言いながら妹紅は、幽香のすぐ傍まで近づき、僅かに浮いていた爪先を今一度地面につけ降り立つと共に、宿主がアンチボディに乗り込む時の例に従ってその場にしゃがみこむグランチャーが、チラリとだけこちらに眼を向けるのを見た。

まさか、いきなりグランチャーに乗せてもらうことになるとは思わなかった。

兼ねてから望んでいたようで、また望んでいなかったようでもあることが、実にあっさりと実現することになりそうだった。

とはいえ、胎内にまで入れてもらえるわけではないだろう。

せいぜい手のひらの上に、言葉通り乗るだけになりそうだ。

それに、幽香の駆るグランチャーに乗るというだけで、妹紅が本当の意味で求める彼女だけのグランチャー、というわけではない。

それでも、グランチャーの身に間近で触れ、その心を感じることになるというのは確かだ。

しかし妹紅は、紛いなりにも自分が望むことが一応実現するというのに、そのことを恐れていた。

まだ心を決められず、しかも魔理沙達の作戦に加担しているという

立場にある今、グランチャーに触れれば、彼の者がどのような反応を示すのか分からなかったからだ。

だからこそ彼女は、焦ってしまっていた。
そして、妹紅が幽香のすぐ近くにいる以上、彼女の傍に近づいたグランチャーもまたすぐ近くだった。
今下手にこの場から逃げたりすれば、それこそ変な疑いをかけられる。

いわゆる、進退極まった状態になったということか・・・

しゃがみこんだグランチャーの装甲が開き幽香がその上に乗ると、彼の者は次いで開いた右手をこちらへと差し出し、上に乗るように催促してきた。
装甲の上に乗る幽香も、そのままこちらに眼を向け、視線で同じように催促してくる。

魔理沙達がどうとか以前に、ここで幽香達の催促を拒めば、彼女に何をされるか知れたものではない。
こうなれば覚悟を決めて、乗ってみるしかないか。
何、こうなることを、まったく望んでいなかったわけではないのだ。

「・・・よぉし・・・グランチャー、私のことが気に入らなくても、暴れたりするなよ？」

そう語る声から不安の色を隠せないまま、妹紅はゆっくりとグランチャーの方へと歩み寄り、差し出された右手のひらの上に右足を乗り上げた。

そのまま、スリットウェハーのなす独特の感触を足の裏から感じな

がら、乗り上げた右足を踏ん張って身体全体を持ち上げつつ、左足も乗り上げた。
そうして、そこから数歩だけ前に進み、手のひらの真ん中辺りに立った。

その時だ。

妹紅の心の中にある認識が入り込み、それが彼女の中にあった、疑惑に凝り固まった意識解し、を改めてさせた。

理由は分からない。
・・・いや、分かる。
グランチャーの声が聞こえたような気がしたからだ。
ただ、とにかく身が軽くなるような感覚を受けた彼女は、無意識の内に呟いていた。

「あぁ・・・そうだったのか・・・」
そうして、続く言葉は心の内で続けた。

――――私が考えすぎだった・・・――――

彼女は、こちらの思惑が知られるとか、そんなことを考える必要はなかった。
むしろそのように考えてグランチャーを疑うことは、失礼なことだったのだろう、という事を悟ることができた。

グランチャーは疑うような意思を持たず、ただ、宿主である幽香の命に従い、こちらに協力してくれているのだ。

あくまで互いはまだ初対面だ。

だから、妹紅もグランチャーも、互いが好きなのか嫌いなのかも分からず、なんとも言えなかった。
だが、幽香の命に従い、快くこちらの助けになろうとすることが、悪いことだと言えるわけがなかった。

妹紅は続けて、自分と、そしてグランチャーにしか聞こえないような微かな声で呟いていた。
つい、心の内を正直に口に出してしまった。

「済まなかったなぁ幽香のグランチャー・・・いや、何がって聞かれたら、言えないんだけど・・・」

と、そんな声に続いて、装甲の上にいた幽香がこのように呼びかけてきた。

「・・・貴方のこと、嫌いじゃないみたいよ。こいつ」

そんな声と共に、胸の内に凝り固まっていたものがますます解れて、柔らかくなっていくのを感じながら、妹紅は返した。

「嫌い・・・嫌いじゃなかった?・・・ホントかよ・・・」

「どうかしら、一度グランチャーと共に空を飛んで、そこで風にあたってみない?」

先程までの妹紅なら、畏怖と疑念をもって、戸惑いと焦燥と共に聞こえていたであろうこの声も、今はすんなりと受け入れられていた。

「・・・そうだなぁ・・・ちょっと行ってみようか・・・もう今飛んでるグランチャーもいることだしな」

「あれ、早苗のグランチャーなのよ、彼女みたいに清らかな身体をしてるでしょう」
「それは分からないな・・・じゃあ、幽香さん、頼む」
「ん・・・」

妹紅の声に鼻息で返事しつつ、幽香は後ろで口を開けていた大きな穴をくぐり、グランチャーの胎内へと入っていった。
その後も、装甲は開いたままにしていた。

妹紅は次いで、グランチャーの手のひらの上に立ったまま、慧音の方に振り向いて、言った。

「そういうことなんだ、あんたはここで待っててくれ」

その言葉に続くように、幽香と妹紅を乗せたグランチャーはゆっくりとその身を空へと向けて浮き上がらせていった。
ゆっくりと言っても、人間の数倍の巨体を持つグランチャーである。
その浮き上がる速さは、妹紅からすれば充分すぎるほどに速く感じられた。

上の方から吹き付けてくる風の音に掻き消され、途端にその姿が小さくなっていく慧音が何か応えたらしいが、その声もはっきりとは聞こえなかった。

激しいとまでは言わないが、穏やかではない風に数秒吹き付けられれば、もうグランチャーの高度は５０ｍに達しようとしていた。
慧音も、早苗達の姿も、すっかり手のひらに乗りそうな感じになっていた。
その一方で、花畑の上を飛んでいた白い・・・早苗のグランチャーは大分近くにまで見えるようになった。

急に近寄ってきたこちらが気になるようで、飛び回る動きを止め、じっと視線を送っていた。
どの辺に眼があるのか分からないが。

幽香のグランチャーの手のひらでその視線の一端を浴びる妹紅は、仲間を見つめるグランチャーの眼が、ブレンが仲間を見つめるものと少しだけ違うことを、ぼんやりとだが感じていた。

次いで特に訳もなく、自分の乗る土色のグランチャーの顔を伺うように、首をもたげて上を見た。
彼の者もまた、早苗のグランチャーの方をじっと見返している。
妹紅はその眼から放たれる何か・・・どこにあるのかも分からない眼が放つグランチャーの意思を微かに感じ、そして思い出した。
彼女が出会ったグランチャーも似たようなものだった。

グランチャーというのは、とてもクールな性格をしていたのだ。

※

紅魔館が近づいてくる。

オーガニックエナジーを勢いよく放出しながら空を切り進むブレン達と、その胎内に宿る魔理沙達の眼には、すでに紅魔館の内と外を隔てる大きな塀が見え、さらにその向こうに格式高き威厳を放つ極彩色の館も見えていた。

そして、その館の傍に佇む深紅の姿も。

スリットウェハーの中に満ちる空気が、緊張で張りつめ熱を持つのを感じながら、さとりは脳裏で呟いていた。

――始まる・・・始まって、そして終わるんだわ・・・あのグランチャーの生命・・・――

※

美鈴からの呼び出しに咲夜が応え、ふたりは、妖怪の山の麓にて対面することになった。

周りに生い茂る木々がざわめく音は微かで、意識さえ向けなければ聞こえなくなるほどのものだった。

そんな音が響くともなく響く中で、美鈴はまず最初に、こう言った。

「ありがとうございます・・・来てくださって」

「いえ・・・」

それに適当な返事をしつつ、咲夜はほんの何秒かだけ黙り込むと、彼女が美鈴を殺すと言った時ほどではないが、鋭い目付きになり、こう聞いた。

「美鈴・・・貴方は、グランチャーのことを否定した自分を悔いたという・・・あの者に対する自分の気持ちをもう一度見つめ直すこ

とで・・・・・・それは本当なの？」

疑うようなこの言葉だったが、美鈴は決して驚いたり焦ったりするようなことはなかった。

この問いがもし、『何か企んでいるんじゃないか？』というものだったら、その時には慌てていたかもしれない。

しかし、グランチャーのことを考える気持ちが真実かと聞かれれば、美鈴は間違いなく、真実だと応えることができた。

その上で、咲夜の乗るグランチャーを殺すという、ある意味で矛盾した考えを隠しながら。

美鈴は、咲夜の問いに対して、はっきりと応えた。

「そうです。本当です」

「しばらく紅魔館から離れていたのは、その気持ちを確かめるためだと？・・・こあがとても心配していたわ。この話が終わって館に戻ったのなら、お嬢様方には勿論、彼女にも心配させたことを謝るのよ」

この問いには、さすがに少し緊張してしまう。

グランチャーを殺すために地底に向かっていたなどと、言えるわけがないからだ。

だが、美鈴の緊張は、咲夜の続く言葉で、僅かながらに和らいだ。

こあがこちらのことを心配してくれていたということを知ったからだ。

自分がいなくなって心配してくれる者がいるということは、美鈴には嬉しかった。

もっとも、そうやって心配してくれる者達の信頼や優しさに、仇を返すことになるのだが・・・

「はい・・・咲夜さんにも、本当に、迷惑をかけてしまいました・・・申し訳ございません」

そう言って深々と頭を下げつつ、その頭を再びゆっくりと上げると、美鈴は静かに語り始めた。

自らの中にある、グランチャーへの思いをだ。

「その・・・分かったんです・・・・・・グランチャーも結局は、ひとつの生き物なんです。彼が何をしようと、それはグランチャーが自分なりに考えたことで・・・だから、それが何だろうと私には、グランチャーを悪く言う権利はないんだと思います。自分なりに生きていることを、悪く思う権利なんて・・・」

そう言いながらも、美鈴はこの発言もまた大いに矛盾していることに気づいていた。

グランチャーを悪く言う権利はない、否定することはできない。

だとして、殺そうとする行為は許されるのか？

そんなことを問うまでもなく、当然これは、許されるものではないだろう。

だとすれば今の美鈴は、グランチャーを否定する権利がない、などと言う権利すらないのではないか？

ひとしきり言い終えた美鈴は、自分自身よく感じている矛盾と、それを実行していることへの無情さに、これ以上何か言うこともできず、俯いて黙り込んでしまった。

隠し事をしている以上、後ろめたさを見せてはいけないのだろうが、

今はどうしようもなかった。
後ろ向きになる気持ちをつい顔に出してしまっていた。
その様子を、咲夜がじっと見ている。
「・・・・・・っ」
このままではよくない。
そう思いつつ美鈴は、上目遣いにこちらに浴びせられる咲夜の目線を伺った。
だがその眼には、こちらを疑うような色はなかった。
むしろ、こちらに対する深い同情と罪悪、そしてそれを謝罪するような意思が、細められた眼の奥底に見えた。
その意思の温かさに、美鈴は逆に驚くと同時に、思い知った。
咲夜はこちらのことは何一つ疑ってなどいない。
むしろ、こちらのことを一切許して、自分にこそ非があるのだと悔やんでいるようだった。
そのことに、間違いはないように思えた。
それが今ようやく、分かったのだ。
そしてそれは、美鈴の中にある後ろめたさを一層強めていた。
それに、彼女と咲夜にはもうひとつ分かっていないことがあった。
グランチャーの性質はブレンとはほとんど逆だ。
他者のことを考え、思いやる心を伝えるのがブレンだとすれば、グランチャーはその逆だと言って過言ではない。
少なくともグランチャーの中には、共生する宿主はまた別として、

他者を思いやるという気性は希薄であった。

だとして、そんなグランチャーに乗る咲夜が、美鈴の気持ちを考え、紛いなりに自らの非を認めるということが、何を意味しているのか・・・

まっすぐに美鈴の顔を見つめる咲夜が、口を開く。

「美鈴・・・私からまず、謝るべきなのかもしれない・・・貴方が私のことを思ってしてくれた行為を、無碍にするようなことをして・・・」

「え・・・？・・・あっ、いや・・・」

「思えば、世の中って色々あって、好意を持つ相手にだって素直に好きだと言えないこともあるし、相手のことを思う気持ちが、逆に相手を傷つけることもある・・・貴方がやったのは、そういうことでしょう」

「・・・・・・」

「完璧かつ瀟洒であるためには・・・いや、紅魔館という世界の中で、私が私であるためには・・・行為の奥にある本当の気持ちを分かるようにならなければいけない。貴方のような者の・・・・・・貴方はいつだって、私達のことを考えていた」

上目遣いに咲夜を見つめていた美鈴の眼がゆっくりと見開かれていた。

のみならず、彼女の身体は強張り、俄に震えはじめていた。

そんな中、咲夜は続ける。

「美鈴・・・私は謝るのと一緒に、貴方に感謝するわ・・・ありがとう・・・私は貴方がいることを、もっと幸福に思うべきだった」

その言葉は、美鈴にとっては何よりも優しく、喜ばしく、しかし今は、それ以上に痛ましかった。

身体の震えはますます激しくなる。

それだけでなく、彼女は俯けた顔を上げると、眼をきつく閉じ、嗚咽しながら涙を流し始めた。

「ぅ・・・ぅうぅぅ・・・ううぅぅぅ」

これから自分がやろうとしていることの恐ろしさが、改めてよく分かったからだ。

今までも、覚悟はできていたつもりでいた。

だが、そんな覚悟ではまったく足らないほどの恐れと哀しみが、そこにはあった。

咲夜はこちらを許し、美鈴の抱く彼女への好意を認めると言ってくれた。

だが、彼女への仕打ちはこれで終わりではないのだ。

こちらを許してくれ・・・それ以上に、その奥底にある好意に感謝までしてくれた咲夜。

彼女が信じるグランチャーを、これから殺すことになるのだ。

いくら好意を認めてくれるからといって、そのためにグランチャーを殺していいわけがない。

今の今。
グランチャーとブレンの戦闘がまさに始まろうという時になって、
美鈴は思い知った。

グランチャーを、殺すべきではなかったのだ。
本当の本当に咲夜を・・・こちらの好意を認めてくれる咲夜を想う
のなら、彼女の信じる者は殺めてはいけない。

美鈴は今すぐにでも、全ての真実を打ち明けてしまいたいと思った。
いや、それ以上に、すぐにでも紅魔館に戻り、ブレン達を止め、グ
ランチャーと戦うことをやめさせたいとさえ思った。

しかし、もう間に合わないだろう。
こちらはすでに咲夜を館から離している。
妹紅達の方も、順調に事を運んでいるだろう。
となれば、すでにブレン達は行動を起こし、紅魔館に近づいている
はずだ。
もしかしたら、もう戦闘が始まり、グランチャーは倒されているか
もしれない。
全ての事実を打ち明けようと、グランチャーの生命が散ることは、
もう止められそうになかった。

となれば、美鈴は最早、諦観と自暴自棄の念によりこのままどこま
でも嘘をつき通し、咲夜を騙し、完全にグランチャーを葬り去るこ
とに決めるしかなかった。
その覚悟を決めなければならなかった。

元々できていた覚悟ではないか。
グランチャーを殺すためなら、いかなる外道の域にも踏み入ってや
ると。

その覚悟をより強めるだけだ。

しかしそれは、咲夜とグランチャーへの強い罪悪に念に、自分の身の可愛さが負けたというわけではない。
美鈴は全てに決着がつき、グランチャーが死んだことを確認すれば、後腐れなく舌を噛み切って自ら死ぬつもりだった。
それで死ねないなら自ら心臓を抉りだし、それでも駄目なら、頭を自ら叩き割ってやるつもりだった。
咲夜の良心を裏切り、彼女が信じ、美鈴もまた信じていたグランチャーを裏切ってもなお、生きていく気にはなれなかったのだ。
彼女には、罪悪感と、こちらを信じてくれている者達が、真実を知り、怒りを顕わにすることへの恐怖に耐える自信がなかった。

だからその代わりに、自ら生命を断つその時までは、一度心に決めたことを最後までやり遂げなければならない。
それがどれほどのことであろうと、そうすることが、けじめをつけるということなのだから。

嗚咽を続け、閉ざした瞼から涙が流れ、それが美鈴の頬を伝う。

そんな様子を眺めて、突然のことに驚いた様子の咲夜は、戸惑った表情を浮かべ、呟くように
「・・・美鈴、ど・・・どうしたの？」
と問うことしかできなかった。

その問いを聞いた美鈴は、歯を食いしばりながら閉ざされた眼をうっすらと開けると、一歩一歩ゆっくり、確かめるように歩を進め、咲夜に歩み寄っていた。

そうして彼女のすぐ傍にまで寄ると、力なく垂れ下がっていた両腕を徐に上げると、開かれた両手を、ほとんど叩くようにして彼女の両肩に置いた。

咲夜と比べてもわずかに背が高い美鈴の、涙の溜まった眼が固く細められ、彼女は、腹の底から湧き立つように強く、しかし語気は静かに、吐き捨てていた。

「咲夜さん・・・っ！」

※

美鈴の来訪を咲夜に伝え、彼女とも別れたこあ。
それからしばらくして彼女は、咲夜もまた忽然と紅魔館から姿を消したのに気がついた。
美鈴の居場所が分かって、探しにいったのだろうか？
恐らくそうなのだろうと分かっていながらも、何故だか漠然とした不安を感じていた彼女は、特別何の気なしに、館から外に出て、そこからすぐのところで鎮座していたグランチャーの前へと歩み寄っていた。

いつ見ても、グランチャーの姿は大きい。
座りこんでいても、威圧感さえ感じるほどだ。
こあは彼の者の股間の前あたりにいたため、前に投げ出されるよう

にしていた彼の者の両足が、左右を大きく遮っていた。
その足も、こんなものに踏み潰されればひとたまりもないだろう、と思えるほどに大きい。

しかしながら、座り込んでいる分頭は近くなっており、見上げることで、グランチャーの顔（なのかよく分からないが）はよく見えた。
未だかつて見たことのないような姿をしている生物であり、身体の形もどうにも奇妙なものであるグランチャーの顔をぼんやりと見上げる中で、こあは考えた。

思い返してみれば、美鈴の様子がなんだかおかしくなってきたのは、このグランチャーがやってきてからではなかったか？
もしかしたら美鈴が館からいなくなったのも、グランチャーが関わっているのではないだろうか。

しかし、そんな考えが芽生えてすぐ、こあは、こんなことを考えるのはいけないことなのだと自らに言い聞かせ、胸中に湧き出てきた考えをすぐに打ち消すことにした。
美鈴が何らかの形で変わったというのなら、それはきっとグランチャーに変えられたのではなく、美鈴自らがそう変わった、というだけのことなのだ。

そう思うことにした。

「・・・グランチャー。貴方は何を考えてるんでしょうか・・・貴方は、咲夜さんも美鈴さんも、みんな好きなんですよね？・・・・・・戻ってきてほしいですね・・・」

そんな声が小さく響いた、その時だった。

第十四話　その１３

ブレンが突然、ぶるぶると声をあげて鳴き始めた。
こあは、残念ながらグランチャーの意思というものをそこまではっきりと感じることはできない。
しかしこの声が平然としたものではないということに関しては、分かることができた。
何かが起こっている。
それに、グランチャーが反応しているのだ。

彼の者の顔　（と思われる部分）がある一点を向き、ぴくりとも動かなくなった。
こあもそれに続くように、グランチャーが向いているのと同じ方向を向く。
そうするとすぐに、グランチャーが反応するその原因を知ることができた。

遥か遠方．．．妖怪の山の方向から、何かが近づいてくる。
四つほどの小さな．．．いや、その実大きな影。
見えたその瞬間には、小指の先を真正面から見た時のような小ささだったのだが、秒刻みでその影は大きさを増していた。
こちらに近づいてきているのだ。
最初に見えた時からもう十秒もすれば、その影の具体的な姿形も分かるほどに、近くになっていた。

その姿を眼に焼きつけたこあが、思わず叫ぶ。

「ブレンパワードっ？どうしてここに・・・っ」

グランチャーが敵と考えるアンチボディ。
昨日かおとついも戦っていた相手だ。
それが今、今度は向こうからこの紅魔館にやってこようとしているのだ。

何のために？
と考えれば、答ははすぐに導きだされていた。

戦うためだ。
戦って、グランチャーを倒すためだ。

戦慄しながら、こあは慌てて、ほとんど独りよがりにこんなことを言った。

「む、迎え撃たないと・・・でも・・・っ」

グランチャーに乗るべき咲夜が、どこかへと去ってしまっていたのだ。
彼女さえいてくれたら、彼女がグランチャーに乗り込み戦うことで、ブレンパワードの四体や五体ぐらい返り討ちにできるだろう。
そうでなくとも、太陽の畑にいるという早苗達のところまで逃げれば、彼女らと協働して戦うこともできる。
だが、咲夜がいなければ、そのどれもすることができないのだ。

なら・・・ならどうすればいい？

混乱する頭の中でそんな言葉が幾度となく疾走し、錯綜し、混乱す

るこあの背後で、グランチャーがまたぶるぶると嘶(いなな)いた。

その言葉もまた、こあにもよく分かるものだった。

グランチャーも、今咲夜が紅魔館にいないことは知っていた。
何故と聞くまでもなく、美鈴に会いに妖怪の山へと赴く彼女が、グランチャーに対しても、しばらく出掛けると伝えていたからだ。
だからこそ、グランチャーも今は、最早咲夜と共に戦うということには期待できないということも分かっていた。
となれば、やれることはひとつだったのだ。

咲夜がいないまま、接近してくるブレンパワードを迎え撃つ。
そのためにも彼の者は、今すぐにでもこの場から飛び立ち、臨戦態勢に移ろうとしていた。
だからこあにも、すぐにここから離れるようにと言っていたのだ。

その言葉がはっきりと聞こえたこあは、大慌てで身体を再びグランチャーの方に向けると、両手を大きく広げて自分の存在を示すようにしてから、大声でこう返した。

「ひとりじゃ危ないですよぉ！逃げましょう！早苗さん達のいるところまで・・・逃げることならグランチャーでも大丈夫なはずです！」

が、グランチャーはその声に、無理だ、と応えた。
胎内に宿主がいない状態では、オーガニックエナジーは安定せず、飛行する能力も万全にはならない。
逃げようとしても、太陽の畑に辿り着く前に追いつかれてしまう。

それに続けて、こあが聞くよりも前にグランチャーは、こあや、別

の誰かを咲夜の代わりに胎内に宿すようなこともしないと言っていた。
咲夜以外の者を胎内に乗せても、余程相性が良くない限り、慣れ親しんだ咲夜のオーガニックエナジーと比べれば、安定した能力を発揮することは望めない。
やはり、逃げるにしても早苗達の下に間に合わせるほどにはならないだろうし、戦闘においても、単なる付け焼刃にしかならないのだ。
なによりグランチャーは、咲夜以外に誰かを胎内に乗せることを本能的に嫌っていた。
それは、咲夜と自分だけという、狭い関係を尊重するからこそ、他人との幅広い関係を蔑ろにしているとも考えられる意識だった。

とにかく、今のグランチャーには最早、咲夜がいずれ戻って来てくれるということを信じて、ひとりでブレン達と戦い、耐えるという選択肢しかなかった。

怯えてばかりで、離れろという言葉を実践できず、その場で震えているばかりのこあは、もういっそ無視することにした。
グランチャーは、オーガニックエナジーを周囲に纏い、その力を推力として、腰からゆっくりと地面から浮き上がらせていった。
それと共に、投げ出されていた脚も、腿の当たりから爪先へと順に浮き上がっていく。

上昇しようとするグランチャーの動きが、周囲の気流をうねらせ強かな風をその場に巻き起こす。

その風に当てられ、長い髪とスカートの裾をなびかせながら、こあは咄嗟に右手を顔の前にかざして身構えた。

「わ・・・っ」

呻き声を出しながらも、風が眼に当たらないようにかざし、広げられた指の間から、浮き上がっていくグランチャーの姿を見る。
吹きつける風が僅かに弱くなると、すでにグランチャーはこあの眼の前からはいなくなっていた。
首をもたげて上を見上げることで、ようやく彼の者の股の下が見えるようになっていた。

「グ・・・グランチャーっ！」

足がすくんでしまって上手く動かないようで、その場から一歩も足を踏み出すことができなくなってしまっていたこあには、今まさに迫り来る敵に（向こうもすでに、後十数秒かすればこちらと接触するほど近くにまで接近している）向かって飛び立とうとしているグランチャーに向かって、叫ぶことしかできなかった。

しかしその声が彼の者に届いたのか届いていないのか・・・それは分からなかった。

こあの叫びに続いてグランチャーは、オーガニックエナジーが空を切る独特の音と共に、淡い緑色の光の余韻をその場に残して、ブレンパワードの群れへと向かって飛び去っていった。

「あぁっ！」

そこでようやく、こあは身動きが取れるようになっていた。
咄嗟にブレンが飛び去っていった方向へと身体を向ける。

しかし、急に動かなくなったものが動けるようになって、身体が混乱していたのだろうか。

くるりと身体を振り向けると、そのまま足がもつれて、彼女は千鳥足になってよたよたと数歩後ずさると、そのまま尻餅をついてその場に倒れ込んでしまった。

そしてそれと共に、彼女の眼には・・・

※

ブレン達はすでに、紅魔館の広大な敷地の中・・・その上空へと入り込んでいた。
それとほとんど同時だった。

館の傍で鎮座していたグランチャーが徐に上昇を開始すると、こちらに向かって接近を仕掛けてきたのである。

一気に近づいてくるその深紅の影を胎内で目の当たりにしながら、魔理沙が叫んだ。

「向こうから来たっ?よぉし、それなら・・・!」

それに、霊夢が返す。

(やるのね?)
「あぁ、私がやる・・・早い内にやってしまって、地底に戻ろう」

一気に距離を詰めようとしてくるグランチャーを迎え撃ち、一撃で

葬りさるべく、マリサブレンが右手に持っていたブレンバーを構えると同時に、加速を止めた。
他のブレンも同様、この場で加速を止め、静止していた。
次いで黒いブレンは、ほとんどこちらと同じ高度にまで上昇し接近していたグランチャーに対し、下から見上げるような位置取りになるように僅かに高度を下げる。
発射されたチャクラ光の流れ弾が紅魔館に当たらないようにするためだ。

ブレンバーを構えつつ、身体を僅かに後ろ向きに傾けながら、地面に背中が向くようにしつつ高度を下げるマリサブレン。
その眼には、こちらに接近を図るグランチャーと、その身体を照らす、眩しい真昼の陽光が見えた。
同時に、ブレンバーの射線状にグランチャー以外の何者も存在しないことを確認した魔理沙は、鋭い声と共にブレンに命じた。

「撃つぞ・・・撃てっ！」

その声とほとんど同時に、ブレンバーから収束されたオーガニックエナジーがチャクラ光となって放たれ、その淡くも激しい光が、グランチャー、ひいてはその向こうにある空の彼方目掛けて真っ直ぐに伸びた。
稲妻が靡(なび)くような速さでチャクラ光は迫り、その光に深紅のアンチボディが貫かれる様が、魔理沙の網膜に映る。

・・・はずだった。
が、現実に見せつけられる光景は、魔理沙が考えていたものとは、まるで違うものだった。

命中するその直前、グランチャーは、鋭い機動で身体を横へと逸らし、チャクラ光を回避していた。
間一髪のところで直撃はせず、脇腹を掠めるだけに留まった光は、せいぜい彼の者の装甲の表面を微かに炙る程度のことしかできなかった。

魔理沙は思わず胎内で、
「なんだぁっ？」
と、驚嘆する声を上げていた。

チャクラシールドを展開して、受け流そうとするなら分かる。
しかし、優々と回避されるとは思わなかった。
宿主のいないアンチボディは、その力も反応の速度も大きく損なわれるはずである。
こちらが攻撃するのが見えるとして、それを回避することは難しいはずだ。

あのグランチャーに、咲夜が乗っていないのは間違いない。
美鈴がうまい具合に引きつけていると、天狗から報告があったではないか。
なら、あのグランチャーには誰も乗っていないはずだ。

もしかしたら、咲夜以外の誰かが、ひょんなことで乗っているかもしれない、ということはあるかもしれないが・・・

そんな思考が脳裏で錯綜する中で、魔理沙の網膜には、光に貫かれるグランチャーに代わって、そのグランチャーが尚もこちらに接近し、肉迫してくる光景が映っていた。
攻撃のお返しと言わんばかりに、接近戦を仕掛けるつもりか？

「こいつっ？」
呻く魔理沙に、再び霊夢が呼びかけてくる。

（私とブレンがやる！）

それと同時に、マリサブレンの前に、ハクレイブレンが躍り出た。
すでにその右手に持たれているブレンバーは、接近戦用に銃身にオーガニックエナジーを纏っていた。

ブレンの斜め上方から、さながら大気圏から突入してきた隕石のごとく迫ったグランチャーが、振りあげたソードエクステンションを勢いよく叩きつけてくる。
ハクレイブレンが構えたブレンバーが、その斬撃を受け止めた。
オーガニックエナジー同士が衝突し、空気が震える音が鳴り響く。

そんな中、ハクレイブレンの胎内にてスパークの光に顔を照らされながら、霊夢もまた呻いた。

「このグランチャー・・・ホントに誰も乗ってないの・・・っ？」

押しつけられてくるソードエクステンションと、それが纏うオーガニックエナジーの刃には、力があった。
宿主である咲夜を乗せている時に戦った時と、それほど大差がないように思えるほどの力が。
だからこそ、本当に無人であると信じられなくなり、思わずこんなことを呻いてしまったのだ。

だが同時に、互いの刃が衝突することで生じるオーガニックエナジーの奔流を伝って、霊夢は、眼前のグランチャーの中に宿る生命の

力のようなものを感じていた。
オーガニックエナジーの流れのようなものだ。

「・・・・・・っ？」

そこには、グランチャーただひとつの生命しか感じられなかった。
非常に曖昧な感覚であったし、何故そう感じられたのかも分からなかったのだが、少なくともその流れの中に、グランチャー以外の意思を感じ取ることができなかったのだ。
なんというか、こちらに向けられる敵意のようなものが、あまりにもひとまとまりになり過ぎていた。
ちくちくと肌に感じられる痛みのようなものが、ひどく単調だったのだ。

「・・・ホントに誰も乗っていない・・・らしいわねっ」

確証はないが、霊夢はそう確信した。
となれば、考えられることはまだいくつかあった。

それと共に、ハクレイブレンの背後にいたマリサブレンが、グランチャーに追い打ちをかけるべく背後から躍り出て、深紅の個体の右側面へと回りこんでいた。
それと同時に、ソードエクステンションをぶつけることで無防備になっているその脇腹に、ブレンバーを突きたてようとする。

「生きたいというのは分かる・・・が、それはこっちだって同じだ・・・可哀想だが、やられる前にやらせてもらうぜっ！」

そんな叫びと共に、真っ直ぐに引かれたブレンの右腕が勢いよく前に突き出されようとした、その時だった。

ハクレイブレンと鍔迫り合いをしていたグランチャーは、俄然その身を勢いよく引いた。
流れるように、深紅の影が、霊夢と魔理沙の視界から逸れていく。
それと同時に、身体を右に捻りつつ左腕を構えると、それを横なぎに振り払った。
装甲の溝から、薄いチャクラの刃・・・ブレードヒルトが伸び、マリサブレンとハクレイブレンを一挙に切断しようと襲い来る。

「うわっ？」
魔理沙の呻き声。

マリサブレンは咄嗟にブレンバーを突き立てる動きを中断させつつ機体の高度を急降下させ、ハクレイブレンは、身構えていたブレンバーでそのままチャクラの刃を受け止める。
黒いブレンの特徴的な耳を、黄色い刃が掠め、ブレンバーに鋭い刃がぶつかり、大きな水の塊が音の速さを越えて金属の壁にぶつかったような、そんな耳障りな音と共にオーガニックエナジーを弾けさせ、その勢いでハクレイブレンの身体が僅かに吹き飛ばされた。

（速いっ！・・・くっ）
驚嘆に次いで、呻く霊夢。

ブレードヒルトを振り抜いた勢いのまま、ブレン達から距離を取ろうとするグランチャー。
しかしそれに対し、今度はカグヤブレンが仕掛けた。

「どんぴしゃだぁー！」

そんな輝夜の叫びと共に、ブレンが放ったチャクラ光がグランチャーに迫る。
向こうの注意が向いていない位置からの不意打ちだ。
正面からの攻撃はまだしも、これはさすがに避けられまい。
今度こそ、グランチャーに大打撃を加えられると確信する輝夜。

確かに、この攻撃を避けられまいという予想は見事に的中した。
しかしながら、やはりその後の結果も、輝夜が予想していたものとは大きくかけ離れるものであった。

撃ち放たれたチャクラ光が、グランチャーの頭部に直撃する。
しかしその光は、そのままグランチャーを貫くことは愚か、彼の者が展開したチャクラシールドに阻まれ、装甲の表面を炙ることさえできなかった。
薄い光の膜の表面を放射状に拡散した光が、そのまま空中で霧散して消えていく。

これには輝夜も、
「んえぇっ？」
と素っ頓狂な声をあげるしかなかった。

これでは本当に、咲夜が乗っていた時と何も変わっていないではないか。
こちらの攻撃を優々と避け、例え命中してもチャクラシールドで防がれる。
こちとら、咲夜さえいなければグランチャーを容易く撃破できると考えたから、ここまで策を弄したというのに・・・

カグヤブレンからの攻撃をもやり過ごしたグランチャーはそのまま、

紅魔館にいる者達を巻き込むまいとしているのか、少しずつ高度を上げながら、こちらと一定の距離を置こうと、遅すぎず、速くもない速度で後退もかけていた。

「させないぜ！」

魔理沙は咄嗟に、ブレンにブレンバーを連射させ、グランチャーを攻撃する。
他の二体のブレンもそれに続いて、チャクラ光を撃ち放った。

しかし、無数に迫り来るチャクラ光の群れも、グランチャーは最低限の動きで紙一重に回避しながら、時に回避できない攻撃はチャクラシールドで受け止めつつ、ほとんど無傷でやりすごしていた。

輝夜の呆れたような、あるいは焦ったような声が、オーガニック的な通信から聞こえてくる。

（ちょっとぉ、話が違うって・・・このままもたついてたら、早苗達のところまで逃げられるわよ?どうすんのよーっ）

しかしそれに霊夢が、ブレンには引き続きブレンバーでの攻撃を続けさせつつ、落ち着いた様子で応えた。
「いえ、大丈夫よ」

今度は魔理沙が、
（どうしてだぜ。こっちの攻撃が通用しないんじゃ、逃げられても仕方ないんだぜ?）
と聞いてくる。

「でも、向こうは実際そうしてないでしょ・・・あいつ、自分の中

にあるオーガニックエナジーを一気に使ってるのよ」

そう応えた霊夢の声に、輝夜の
（へぇ？）という間抜けな声が返ってきた。
それと共に、魔理沙の方は何かが理解できたらしく、
（・・・そうか）
と呟いてから、こう続けた。

（今のグランチャーは、咲夜から与えられたオーガニックエナジーの余韻で戦っているんだ・・・それを使い果たすつもりで・・・）

それを聞いて、輝夜の方もようやく理解できた。
（あぁ～）

そんな声に続いて、霊夢が応える。
「そういうことなのよ」

アンチボディは、自らオーガニックエナジーを生み出すことはできない。
しかし、胎内に宿る生物から与えられるオーガニックエナジーを何倍にも、もしかしたら何十倍にも増幅させることができる。
つまり場合によっては、相当な量の生命力を蓄えておくこともできるのだ。
そうやって、大量に蓄えておいたオーガニックエナジーを放出することで、グランチャーはこちらに対抗してきている。
そして、咲夜とこのグランチャーの愛称は、霊夢達が考えるよりもずっとよかったようだ。
咲夜が与えたオーガニックエナジーは、グランチャーの中で、規格外のパワーとして残されていた。
それこそ、彼女が乗っている時と同等の力を発揮できるほどに。

それがこの、無人にしては不可解なほどのグランチャーの能力の理由だったのだ。

しかし、タネが分かってしまえば、その終わりも見えてくる。
アンチボディは、元々の生命力を大きく高めることができるが、その高められた生命力をさらに高める、などということは無理だった。
与えられるオーガニックエナジーがなければ、結局アンチボディの力は有限なのである。
それは結局、このグランチャーだって例外ではないはずだ。
今は、大量の生命力を発揮してその強力な力を見せつけているが、これほどの力を放出し続ければ、せっかく残されていたオーガニックエナジーも一気に失われ、やがて底を尽きる。
どうやらグランチャーは、それを覚悟してこちらと戦っているようだった。

おそらく、この事態に気づいた咲夜が戻って来てくれるまでの間、何としても耐え抜くつもりなのだろう。
咲夜さえ来てくれれば、反撃の機会はできるのだから。
そうして、早苗達の下に逃げようとすれば、向こうに辿り着く前にオーガニックエナジーがなくなる。
だからこそ、逃げることもできないでいたのだ。
また、一秒でも長く持ちこたえるべく、攻撃も、最初のソードエクステンションからは、ほとんど仕掛けず、防戦に徹していた。

となれば霊夢達は、咲夜が戻ってくるまでに、グランチャーにオーガニックエナジーを全て使い果たさせ、撃破しなければならない。

「このまま攻撃し続ければ、いける、やるわよっ！」
そう呼びかけ、魔理沙と輝夜からの、
（分かった！）

（いったるんだから！）
という返事を聞き、ブレン達が俄然攻撃の勢いを強める中で、霊夢は眼を細めて眼前のグランチャーを見据えながら、こう呟いていた。

「こういう場面でこんな賭けができるんだから、グランチャーって凄い・・・」

それは純粋に、ブレンよりも遥かに戦闘に適応しているグランチャーへの畏敬の言葉であった。

それと共に、美鈴が咲夜を引きつけてくれている以上、グランチャーの下に彼女が戻ってくることは当分ないだろうということも分かっていた。
だからこそ、彼の者の敗北がこの時点で決まっていることも分かる。
そのことで、あの深紅のグランチャーに同情するような心もあったのだ。
決まり切った運命に抗おうとするその姿は、滑稽でもなんでもない。
むしろ、どこまでも勇ましく、雄々しいものなのだから。

※

尻餅をついたまま呆然とし、またしても動けなくなったこあの眼には、ブレンパワードの群れに突撃し、大立ち回りを繰り広げるグランチャーの姿が見えた。
敵の攻撃を回避し、あるいはチャクラシールドとかいうものだったか？それにより受け流すことで、ほとんど打撃を被っていないよう

にも見えた。

しかし、四体いる内の三体のブレンパワード（残る一体は何故か眼に見えて動きが悪かった）に連続でチャクラ光を放たれ、それを一方的に防ぎ続けるしかないグランチャーの様子を見れば、間違いなく苦戦しているということが分かった。

それに、咲夜がいない状態でいつまで戦い続けることができるのか、見当もつかなかった。

「・・・ど、どうすれば・・・」

慌てふためきながらも、こあは、どうにか気を取り直して、その場から立ち上がった。

とにかく、まずはこの事態を館の主人であるレミリア達に伝えなければ・・・

それからどうするか考えよう。

もしもの時には、紅魔館にいる者達全員でグランチャーを助けることもできるかもしれない。

もっとも、それまでにグランチャーがやられてしまえば、どうしようもなかったが・・・

とにかく、何をするにしても、まずは皆に知らせなくては。

先程の攻防で、オーガニックエナジーが衝突する大きな音が数度鳴り響いたが、それも館から大分離れた敷地の、しかもある程度上空だった。

こあのいるところでは、あまりはっきりとはその音は聞こえなかった。

館の中にいたのでは、何か音がしたのは聞こえるだろうが、それがアンチボディの戦闘の音だとは気づかないかもしれない。

すでにレミリア達が異変が起きていることに気がついてくれればい

いのだが、望み薄だろう。

こあは、立ち上がると同時に、遠くの空の上で戦っているグランチャーの姿を数秒だけ見つめると、踵を返して、館の中に通じるドアへと駆け寄っていった。

しかし、二階からせり出したバルコニーの下に潜ろうとするその直前に、こあはもう一度だけ後ろを振り返り目線を上げ、グランチャーの様子を覗った。

その時だ。

ブレンパワードの群れが、何発目かも分からないチャクラ光を発射すると同時だった。

ひとかたまりになっていた三体のブレンが、一斉にそれぞれ別の方向に散らばりながら、グランチャーへの接近を図っていた。

紫のブレンは正面から、黒と黄色のブレンはそれぞれ左右からグランチャーへと迫りつつ、さらにチャクラ光を連射し、接近する。

グランチャーも距離を詰められないよう後退を仕掛けるが、狙い澄まされたチャクラ光が数発直撃し、激しい光が彼の者の肉体を包みこんだ。

先程まで、無傷でそれらの光を受け流していたチャクラシールドも、幾度となく敵の攻撃を浴びて、弱体化していたらしい。

打ち消しきれない衝撃にあてられ、グランチャーの身体が、まるで巨大な鉱物の塊にぶつかったように大きく怯んだ。

その隙を逃さず、正面から迫る紫のブレンが、右手に握る銃身を高々と振りかざす。

そしてそれを、動きが止まったグランチャーに肉迫すると同時に、鋭く振り下ろした。

その時の、斬撃が生み出す緑色の淡い光の軌跡は、遠くにいるこあの眼にもはっきりと見えた。
そしてその斬撃により、グランチャーの身体から何かが斬り飛ばされるのも・・・

あれは・・・左腕か？
さすがにどちらの腕なのか、そもそも腕なのか足なのかも、大分遠いためすぐに判然とはしなかった。
しかし確かなことは、敵の攻撃を受けて、グランチャーの身体の一部が斬り飛ばされたということなのだ。

眼を見開き、全身を電撃のようなものが駆け巡るのを感じたこあは、せっかく踵を返したのに、再び身体全体を、よろめくグランチャーの方に向けてしまっていた。

「あぁ・・・っ？」

そうして、絞り出すような声と共に、グランチャーから切り離された何かが地面へと落下していくのをしばらく黙って見つめていた後、再度グランチャーに・・・敵の斬撃を受けながらも、尚も体勢を立て直し敵から離れようとするグランチャーに眼を向けた。

このままでは、グランチャーがやられてしまう。
今彼の者の生命を助ける方法は、ただひとつだった。

こあは、全身で声を出すように、身体をこわばらせると、その名を叫んだ。

「咲夜さぁーーーん！来てくださぁぁーいっ！」

その叫びが空高く響き渡っていく中で、改めて彼女はグランチャーに再度背中を見せると、焦燥しきった顔で屋敷の戸の前に駆け寄り、乱雑にノブを捻って開け放つと、とにかく自分がいまやれることをやるべく、館の中を駆け巡っていった。

第十四話　その１４

咲夜の肩に手を置き、力強い眼つきで彼女の眼を見据える美鈴が、続けて言う。

その声は、先程まで号泣していたためか、少しだけ涙声になっていた。

「咲夜さん、私は・・・私はねぇ、いつだって咲夜さんのことを一番に考えているんです・・・咲夜さんのためなら、生命だって捨てられるんです・・・それは、今だって・・・っ」

「美鈴・・・」

彼女の声に、ただ呟くようにその名を呼ぶことしかできなかった咲夜。

しかしこの時、彼女の脳裏に、突如何かが響いた。

単なる音か、あるいは何者かの声か。

それは分からない。

とにかくただ、音と呼べそうなものが脳裏で反響していたということだ。

あるいはこの音は、咲夜自らの身体の奥底から湧き出るように鳴り

響いたものかもしれない。
何かに咲夜の身体が反応し、この、音なのか声なのかも分からないものを発していると・・・

そのことに関しては実際どうなのかは分からないが、それとは別に確かなこともある。
今何か、重大なことが起きている。
それを、咲夜自身の感性が感じ取っているということだ。

「美鈴・・・ごめんなさい」

咲夜はこう断りを入れつつ、肩に乗せられていた美鈴の手を逆に握り返しつつ、離した。
続けて、何かを探すように周囲を見回していた。

「・・・さ、咲夜さん？」
あまりに唐突な行動に、美鈴が戸惑う声を発した、その時だった。

キョロキョロと首を左右に捻ったり、あるいはもたげて上を見たりしていた咲夜の頭の動きが、あるところでピタリと止まった。
それと同時に、彼女の眼が鋭く、鋭利な刃物のように細められた。

その細められた眼から伸びる視線の先にあったのは、生い茂る木々と、その枝葉の間から覗く、天狗の姿だった。

咲夜は思い出す。
確か、妖怪の山にいる天狗達は、オルファンの異変やブレンパワードのことを好意的に見ており、協力する姿勢を見せているという話

だった。

あの天狗は、あんな木の間に隠れて、何をしていたのだ？

そう考える以上に咲夜は、胸の内より沸き立つ焼けるような熱い感情に従うことにした。

漆黒に染まった、敵意にだ。

次の瞬間、美鈴の耳に、何かが聞こえた。

「痛あっ！？」

悲鳴だ。

痛みを感じながら、同時に戸惑うような声が、頭上で響いていた。

そうしてそれから何秒かすると、今度は木の葉が掠れるようながさがさという音が聞こえたと思うと、その音が聞こえたすぐ近くの地面に、上から落ちてきたらしい天狗が、乾いた音と共に倒れ込んだ。

その黒い翼には何本かのナイフが突き刺さり、銀色の刃を食い込ませていた。

天狗の翼はそれほど厚くなく、部分によっては刃先が羽根を突き破り飛び出ているところもあった。

天狗は、何が起こったのか、何故自分がこうなっているかも分からずに、ただ地面に這いつくばって呻いているばかりだ。

しかしその一方で、美鈴には何が起こったのか、はっきりと分かっていた。

咲夜の有する能力のことを知っているからだ。

彼女は時間を止め、天狗目掛けてナイフを投げていたのだ。

が、そんなことが分かっても、ある大きな疑問は残っていた。

何故だ？

そもそもどうして咲夜は、急に辺りを見回して、あの天狗を見つけたのだ？

そして何故、ああも容易く、ナイフを投げつけたのか？

少し姿が見えたというだけで、何をしていたのか分かるはずもないのに・・・

あるいは実は、天狗が何をしているのか分かっていた・・・？

もしそうなら、これからどのような事態になるのか、

美鈴には予想できてしまった。

その身体から静かに殺意を放つ咲夜は、地面に這いつくばり震えている天狗へと、徐に歩みよっていた。

「ぅ・・・？」

そのまま、呻く天狗の背中の上に片膝を食い込ませ、乗る。

「うぅ・・・痛たたた・・・痛いぃっ」

それだけでも、のしかかった膝が食い込んで圧迫され結構な痛みであったが、まだこれで終わりなどではなかった。

咲夜はそのまま、膝で押さえられている天狗の右手の手首を自身の右手で掴み、それと共に、残る左手は天狗の右手の付け根、肩の辺りへと当てた。

そうして続けざまに、握った右手を万力のような力で引きつつ、肩を押さえる左手にも力を込めた。
そんなことをすれば一体どうなるか、美鈴にも天狗にも、分からないわけがなかった。

「ひぃっ!?痛い痛い痛い痛い・・・ちょっとっ・・・あいたたた・・・痛いいぃーーーっ!」

天狗の悲鳴が、木々の間に反響する。
美鈴は思わず叫んだ。

「咲夜さん!」

しかしそれに咲夜は、
「貴方はここで見ていればいい!」
と返し、続けて天狗に対しても鋭くこう呼び掛けていた。

「答えろっ!・・・今何が起こっているっ・・・貴方達が何か企んでいるのなら、その腹の内を吐きなさいっ!」
「な・・・何ぃぃ~・・・っ!?」
「さもなくば、まずは間接を外す・・・右の次は左・・・それでも話さないなら、今度は骨も折る」
「う・・・っ?」

顔は見えないが、天狗が息を呑むのが咲夜にははっきりと分かった。

やはり、この天狗は何かを知っている。

となれば・・・

「な・・・何の話よぉ～！私はただ通りがかりに、あんまり見ない人間がここにいたから、ちょっと隠し撮りしただけで・・・・・・な、何で腕折られなきゃいけないのよぉ～！」

こんな見え透いた嘘をつかれたところで、信じるわけがなかった。

「・・・っ！」

咲夜の瞳の奥に宿っていた殺意の光が、その強さを増す。

それと比例するように、天狗の腕を引く強さもまた・・・

骨と骨の接合部が軋み、コツコツと、今まさに繋がっていたものが離れようとしながら、そこを堪えてもう一度枠に収まるような音が身体の内から鳴り響くのが、天狗には聞こえた。

肩の間接は、窪みに玉がはまるような、簡単な接合をしている。

力さえあれば、外すことは容易かった。

身体の内から響く音以上に大きな悲鳴が、その場に響く。

「ひぃっうあぁぁっ！？」

よもや、本気で間接を外そうとするとは思わなかった。

弾幕勝負により、肉体的な戦いと疎遠になった今、いかな天狗といえど、肩が外れる痛みは耐え難いものだ。

鬼とかなら、それこそ遊び半分で外したりはめたりしてのけるだろうが、インテリ派の天狗には、苦痛以外の何ものでもないのだ。

そして、そんなインテリ派の天狗には、この痛みから逃れるためには、咲夜の言う、こちらの腹の内というものを吐くしかないということも、頭の中が真っ白になるような痛みに苛まれながらも、分かるのだ。

「あぁ～っ！わ、分かったから！話す！話すから！」

喚くように天狗が応える。

しかし咲夜は、こんなことを言うだけでは、両腕に込めた力を弱める気にはならなかった。

自らが望む応えを聞かない限り、むしろより一層その力を強めるばかりだ。

御託は良いからさっさと応えろ。

そう言わんばかり、天狗の腕を引く力を、さらに少しずつ強めていく。

後は、赤子が押すぐらいの力を足せば、それで肩がすっぽ抜けるというタイミングで、天狗の悲鳴が混じったような声が咲夜の鼓膜を揺らした。

「ブレン！ブレンがぁー！紅魔館で戦ってるのよ、グランチャーとっ！離してーーっ！」

「・・・っ！」

咲夜は、両腕に込められた力を途端に緩めた。

天狗が半ばやけくそで懇願してきたからではない。

確かに咲夜にとっては、これだけ聞ければ後はどうでもよかったと

いうこともある。

しかしそれ以上に彼女は、天狗の語った言葉に受けた衝撃のために、意識せずとも腕から力を抜いてしまっていたのだ。

「・・・・・・っ」

戦慄し、言葉を失う咲夜。

そしてそれは、彼女の天狗に対する暴力的な詰問（それは拷問とも言う）を端から眺めていた美鈴も同じだった。

しかし彼女の驚愕と戦慄は、咲夜のものとは大きく違っていた。

今までどうにか押し隠していたものの全てが今、咲夜に知られようとしていることへの恐れからくるものであった。

苦痛から解放されたためであろうか。

先程まで咲夜に肩を外されそうになっていた天狗は、手のひらを返すように怒りを露(あらわ)にして、未だ膝を乗せて押さえつけている彼女に向かって、這いつくばった姿勢のまま捲し立てていた。

「ちょっと・・・っ。な、何なのよぉあんた～！その膝もどけてよっ！」

しかし咲夜は、自分の胸中で沸き立つ錯乱に似た感情を抑え、あるいは受け入れることに必死で、こんな声を聞いている余裕などなかった。

半ば投げやりになった声で、こう返すばかりだ。

「・・・少し黙ってなさい・・・」

その言葉は、自らの立場が改善された（実際は改善などされていないわけだが）ことにより天狗の中にできた不満を増長させることになり、同時に、事実を伝えることにより、逆に咲夜を揺さぶることが出来そうになっていることを教えていた。

となれば、もしかしたら、さらに大きく揺さぶりをかければ彼女も大きな隙を見せ、上手くこの拘束から抜けられるかもしれない。

ひいては、逆に咲夜を捕らえることだって・・・

天狗は考えた。

そうとも、そもそもグランチャーを撃破するためには、もっと手っ取り早い方法があったのではないか。

咲夜をどこかに引き付ける以前に、彼女を捕らえてしまえばよかったのだ。

どこかに引き付けることができるくらいなら、そうするべきだった。

彼女の動きを完全に封じてしまえば、グランチャーに乗ることなど到底できるわけがないのだから。

魔理沙達は、咲夜とも見知った同士で情があったのかもしれないが、残念ながら天狗はこのような人間ひとりになど、特別思い入れがあるわけでもないのだ。

適当に痛め付けて、グランチャーの撃破が確認されるまでの間、大人しくしてもらおう。

そのために咲夜を揺さぶるというのなら、いい方法もあった。

彼女にはまだ、分かっていないことがあったのだ。

美鈴のことだ。
彼女が実際に今何を考えているのか知れば、一体咲夜はどう反応するのか？
状況そのものは過酷であるはずのに、こんなことを考えつけば、何だか逆に楽しくなってきた。
未だ咲夜による拘束から解放されていない天狗は、続けて彼女に対し、こう叫んでいた。
「あ、あのねぇ！あんたは知らないんだろうけど、そこにいる．．．」
全てを言い終える前だった。
天狗は突然、脳が揺さぶられるような感覚と共に、首筋に激しい痛みが走るのを感じた。
しかし、その感覚は一瞬であった。
「うんぅ．．．っ！．．．．．．．」
痛いと感じたその瞬間には、天狗の意識は、奇妙な呻き声と共に虚無の彼方に失せ、昏倒へと導かれていた。
咲夜が、当て身の要領で天狗の首筋を叩いていたのだ。
実をいうとそれには特別理由はなかった。
何らかの形で逃げられないように気絶させるため、などとこじつけることはできたが、もしかしたら、天狗が先程語った事実により驚愕し、その驚愕を受け入れる中で湧き出てきた怒りのようなものを、単にどうにかしてぶつけたかっただけなのかもしれない。
決して難しいことを言われたわけではないのだろうが、咲夜は今よ

うやく、天狗の言っていたことを理解した。
いや、理解したと言うよりかは、理解できていたものを納得することができた、というべきかもしれない。

・・・グランチャーが危険だ。

天狗が気を失い、ぐったりとその場で昏睡するのを確かめた咲夜は、そこでようやく、天狗の背中に食い込ませていた膝を離して、おもむろに立ち上がった。

その横顔が、焦燥と憤怒に駆られ震えているのが、美鈴にははっきりと見えていた。
そして、これからその怒りの矛先となるのが、自分なのだ。

今の彼女は、そんな意識に屈託していた。

なんせ、天狗達・・・ひいてはブレンに協力する魔理沙達の目論見が知れれば、それに美鈴が協力していることも知られているということに直結するからだ。
少なくとも美鈴当人は、そう考えていた。

しかしながら彼女には、根本的にまだ分かっていないことがあった。
頭の中で考えている斯様な現実も、あくまでも美鈴当人による主観的な考えでしかなかった。
実際のところ、咲夜はまだ、美鈴がブレンパワード側についていることを知らないのだ。
その事実を今しがた伝えようとしていた天狗も、気絶させられてしまっていた。

そして、美鈴の・・・少なくとも今の彼女の立場に対して矛盾して

いようとも、彼女自身の心から発せられた言葉に動かされ、咲夜は彼女のことを再び信頼していた。

不幸があるとすれば、そこだったのだ。

立ち上がり、そして美鈴の方に顔を向けた咲夜は、考えた。

きっと天狗達は、こちらがグランチャーから離れるタイミングをずっと見計らっていたのだ。

先程のようにどこかからこそこそと覗き見て、こちらを監視していた。

いつからだろうか。

昨日の今日か？

あるいは、こちらがグランチャーに乗っていることを知ったその時から？

とにかく、グランチャーを攻撃する機会を探すのに際し、美鈴がこちらを山の麓にまで呼んだのは、まさに好都合というものだったのだろう。

このタイミングを逃すまいと、ブレンパワードを送り込んで来たのか・・・

だとすれば、わざわざこんな遠くまで呼び出してきた美鈴もある意味では悪いのだろうが、そう考えるのはお門違いだろう。

彼女はきっと、紅魔館の敷地の中や近くでこんな詰まる話をしても、他の者達に気を使わせるだけだろうと思って、大分離れたところで話をすることにしたのだろう。

確かに咲夜だって、先程までのような会話を館の誰かに聞かれるのは、喜ばしいことだとは思えなかった。

だから要するに、美鈴のことを批難することはできないのだ。

そして何より、今はこんなことを考えている場合ではなかった。

繰り返しになるが、グランチャーが危険だ。

今すぐにでも、館に戻らなければならない。

咲夜は、爪先からじわりと熱が這い上がってきて、染み込むように全身に伝わっていくのを感じた。

筋肉がはりつめ、躍動を始める、その一歩手前の緊張だ。

彼女は美鈴に向かって叫んだ。

はりつめた肉体の強張りの捌け口となるような大きな声で。

「美鈴っ！貴方も館に戻ってなさい！私は先にいくっ！」

その言葉が聞こえたその瞬間には、彼女はその場から．．．美鈴の眼前から姿を消していた。

時間を停止させつつ、紅魔館へと戻っていったのだ。

ブレンと戦っているというグランチャーを助けるために。

刹那に満たない．．．いや、時間という概念にすら当てはまらない速さで去っていった咲夜の、その存在の余韻だけを残す山の麓の地面を呆然と見つめることしかできない美鈴。

彼女は、大地を踏みしめる感覚さえ朧（おぼろ）げになってきた両の脚が、俄に震えだすのを感じていた。

のみならず、胸の内の辺りがじわじわと鈍い苦痛を感じると共に大きく上下し、激しい動悸も起こっていた。

何故身体がこのような反応をするのか？

美鈴には、まるで分からないようでいて、微かながらに分かるようでもあった。

咲夜が魔理沙達のやらんとしている行為に気づいた今、事態は予定していた道筋から確実に逸れていた。

そのことが分かるからこその焦燥が生んだ震えと動悸だったのだろう。

しかし美鈴には、ただそれだけではないような気がしてならなかった。

全ての事実を知った咲夜は、まず真っ先にこちらに抑えようのない怒りをぶつけ、この生命を奪い取るだろう、と考えていた。

しかし実際は、そんなことはなかったのだ。

今まさに、殺される。

そうとばかり思っていた意思が間違いだった。

その認識から来る混乱もまた、理由の一つだったのだろう。

だが、まだそれだけではないようにも思えていた。

何か・・・何かが違う。

その何かが何なのかは分からないが・・・とにかく、何かがおかしいのだ。

事態は確実におかしくなりつつある。そりゃおかしいのは当然だ。

しかし、おかしいなりにも存在するはずの秩序までもが、どこか歪

んでいるように感じられていた。
その歪みが、更なる何かを引き起こしてしまいそうで、美鈴は恐れていたのだ。

咲夜はこちらに、紅魔館へと戻っていろと言った。

しかし美鈴は、その言葉をしばらくの間、実行することができないでいた。

※

咲夜はただひたすら、駆けた。
時間を置き去りにするように・・・いや、実際置き去りにしながら走った。

しかし、いくら時間を止めると言ったとて、程度と限度というものがある。
永遠に時間を止めることなどは到底できなかった。
可能な限り速く来た道を戻り、紅魔館に戻ろうとしていたのだが、それも、一瞬で、というわけにはいかなかった。
何分かの時間は必ずかかってしまうだろう。

天狗からブレンが紅魔館に接近していると聞かされたのは、時間にしてはほんのついさっきであるが、問題はその時すでにグランチャーとの戦闘が始まっていたかどうかだった。

もしそうだというなら・・・時間を止めようがどうしようが、間に合わないかもしれなかった。
咲夜が動き始めたその時にはもう、グランチャーは倒されているのかもしれないのだ。

だが、そんなことは認めたくなかった。
グランチャーと自分との関係・・・決して長いとは言い切れないが、奇妙ながらも反故にはできない関係が、こんな形で、こうもあっさりと終わるとは思いたくなかったのだ。

それに、こちらのことを考えて、もう一度互いの関係を戻そうとした美鈴を、自分に原因があると落ち込ませたくはなかった。

時間を停止させる限界に達し、一時的に時の流れを正常に戻す中で、咲夜は大声で、その名を呼んだ。

そうすることで、彼の者がこちらの下に来てくれそうな気がしたからだ。

いや、間違いなく来てくれる。
漠然と、しかしはっきりとそう感じたからこそ、咲夜は叫んだのだ。

「グランチャー！来いっ！」

そしてその声は、確かに・・・

※

魔理沙達が駆る三体のブレンは、引き続きグランチャーに攻撃を続けていた。

すでに向こうは、マリサブレンが接近戦を仕掛けた結果、左腕を切り飛ばされていた。
その姿は、戦いの中においては、死にいくその瞬間を今まさに見せつけようとしている痛ましいものだったが、それでも未だ、グランチャーの抵抗は強固なものだった。

接近戦を避けるため、可能な限り距離を取ろうとする。
ブレン達は、ならばと、ブレンバーによる遠距離攻撃を仕掛けるが、やはりグランチャーはそれを的確に回避し、あるいはチャクラシールドで受け流していた。

しかし、それにもようやく終わりが見えてきた。
数十発のチャクラ光を受けただでさえオーガニックエナジーが減衰していた中で、左腕が切断されたのだ。
どれほど強靭な肉体を持った人間でも、片腕がなくなれば、痛みとは関係なく、立つことさえ容易にはできなくなる。
重心が大きくずれるからだ。

それと同じだった。
いくらグランチャーの意志が強固なものであろうと、体内に蓄積したオーガニックエナジーを保つことは、最早困難になっていた。

だからこそ、チャクラシールドも眼に見えて弱体化し始めていた。

マリサブレンが放ったチャクラ光がグランチャーに直撃し、チャクラシールドとの干渉により激しいスパークを引き起こす。

しかし、先程まではただ放射状に、玉の上に水をかけた時のように押し退けられるだけで、スパークなどは発生していなかったはずだ。

これは、大きな変化だ。

そして、変化が起きるということは、グランチャーが疲弊していることの・・・即ち、戦いの終わりが見えてきたということの証であるはずだった。

オーガニック的な通信から、輝夜の声が聞こえた。

（弱くなってきた！とうとうやっちゃえそうよ！）

魔理沙はそれに、

「あぁ」

と返しつつ、次いで、輝夜には聞こえないような声で呟いていた。

「とうとう・・・とうとうなのか・・・」

もう間もなく、グランチャーも撃破できる。

『やって』しまえるわけだ。

しかしこの局面において魔理沙は、どこかグランチャーを殺すことに後ろめたさを感じていることを、自分自身で分かっていた。

今と言わず、もしかしたらずっと感じていたのかもしれない。

いや、そうだ。ずっと感じていた。

しかしそれは、とても傲慢で、優位な立場に立てるからこその負い目でしかないのだ、ということもまた、分かっていた。
今まさに殺そうとしている相手に対し、殺したくないと思うことこそ、その相手を蔑ろにする行いではないのか？
戦わないという選択肢を選んでいるならまだしも、戦っている以上、余計な情けを持つよりいっそ楽にやってやる方が、正しい。
それが良心的なのだ。
魔理沙は自分の心にそう言い聞かせながら、呟いた。
「・・・やるぞ・・・っ」
それと同時だった。
こちらの攻撃をやり過ごすべく機動を続けていたグランチャーが、突如その動きを止めた。
何故動きを止めたのか、何が起こったのか、一切分からないが、これはチャンスだろう。
ブレンバーによる遠距離攻撃もそろそろ効果が出始める頃だろうが、銃身にオーガニックエナジーを纏わせての斬撃の方が強力だ。
（止まったカトンボは叩かれるーっ！）
止めを刺すべく、カグヤブレンがブレンバーを振り上げて、グランチャーに接近を図った。
そしてブレンが、微動だにしなくなった深紅のアンチボディに肉薄

し、その首の付け根辺りに目掛けて、オーロラのような光を纏う刃を降り下ろす。

だが、その刃がグランチャーを捉えることはなかった。

深紅の影が、さながら実体のない幽霊や、あるいは霧のようにカグヤブレンの脇をすり抜けていった。

実際は幽霊でもなんでもなく、ブレンバーを回避しつつブレンの後方に流れただけなのだろうが、その動きが、幽霊を思わせるほどに迷いなく、無駄もなかったのだ。

輝夜は思わず声を上げた。

「何も斬れてないって・・・嘘ぉっ？」

カグヤブレンの方も、『まさか』とでも言いたげに、すぐさま背後を振り替える。

こちらの脇をすり抜けていったグランチャーは、そのまま真っ直ぐに加速を続けていた。

カグヤブレンを通りすぎ、今度はマリサブレン達の方に突っ込んでいるようにも見えた。

が、実際は違うようだ。

突き動かされるように、どこかに向かっている・・・ようだった。

しかし、一体どこへ？

まさか、辛抱たまらず早苗達の下へ逃げるのか？

いや、そうでもない。

グランチャーが向かっているのは、どちらかと言えば妖怪の山の方

向・・・早苗達がいる太陽の畑とは、逆方向だ。

グランチャーの機動に迷いはない。
ただひたすらに、目的地であるどこかへと突き進んでいる。
つくづく、何があるのだろうか・・・と、疑問に思わずにはいられない。

なんにせよ、グランチャーのこの行動は、むざむざこちらの懐に飛び込んでくる愚行だ。

真っ直ぐに接近してくるグランチャーの眼をその網膜に映しながら、矛盾した、傲慢なる負い目に駆られていた魔理沙は、思わず呻いた。

「死にに来たのか・・・っ!?」

同時に、マリサブレンが反射的にブレンバーの銃口をグランチャーに突き付け、チャクラ光を撃ち放った。
敵が近づいてきている以上、撃つしかなかった。

淡い光が矢となり伸びる。

しかし、ブレンのこの本能的な攻撃を、グランチャーは見据えていたかのように回避し、マリサブレンへとさらに接近し、肉迫してきた。
何かに駆り立てられたような、異様な気(オーラ)を放つグランチャーの姿が、すぐ眼の前に、ぬっ、と躍り出る。

「うぅっ?」

魔理沙は思わず呻く中で、ブレンに今度はブレンバーをそのまま横

なぎに振り切らせ、グランチャーの肉体を切断しようとした。
しかしその攻撃もまた、グランチャーを捉えることはない。
振り抜かれた斬撃の軌跡は、俄然高度を下げブレンの股下をくぐるような動きを見せたグランチャーの頭を僅かに掠めるだけに留まった。

「なんなんだこいつっ？」

魔理沙もまた、輝夜同様にひたすら呻くしかなかった。
こちらのことなどまるで見ていないように、得体の知れない動きをしているというのに、いざ攻撃すれば、今度は事前に分かっているかのように完璧な回避をする。
このグランチャー、一体どうしてしまったのだ。

そのままマリサブレンの傍をも通り抜けた彼の者は、尚もどこかへと向かって加速を続ける。

が、まだ終わりではない。
グランチャーが、マリサブレンの股の下をくぐり、その背へと躍り出たその瞬間だった。

鋭いチャクラの光が、彼の者の背中から直撃した。
ハクレイブレンが、狙い澄ましたようにブレンバーを放っていたのである。
そしてそれは、見事グランチャーに命中した。
しかし・・・

実際のことを厳密に言い表せば、実はブレンの放ったチャクラ光はグランチャーに直撃していなかった。

彼の者の肉体に浴びせられる直前、強固な薄い膜に遮られ、その周囲を拡散しながら放射状に分裂していくばかりで、その光も熱も、ぎりぎりのところでグランチャーには当たっていなかった。
チャクラシールドにより、オーガニックエナジーが押しのけられている。
先程ようやく弱まっていたはずの生命力の結界が、再びその強固な防御力を取り戻していたのだ。

ハクレイブレンの胎内にて、チャクラ光が防がれ拡散しているのをその眼で確認しつつ、霊夢もまた呻いた。

「ここにきて力を上げた！本気で出し惜しみは無しなんだわ・・・」

この突然のチャクラシールドの強化にも、当然理由はある。
どうやらあのグランチャーは、体内に残留していた後少しばかりのオーガニックエナジーも、全て使い果たすつもりだ。
この一時を切り抜けるためには、この先動かなくなってもいいと覚悟したのか？
このままでは、本当に体内のオーガニックエナジーが全て失われ、ぴくりとも動けなくなる。
最悪、肉体が死滅していくかもしれない。
それも構わないというのか？
咲夜さえ戻ってくれれば、必ず反撃することはできると・・・
それに賭けている・・・？

ハクレイブレンの放ったチャクラ光もまた無傷で切り抜けたグランチャーは、尚も加速し、こちらから離れようとする。
やはりその進行方向は、太陽の畑ではなく、どちらかと言えば妖怪の山寄りだ。

だが、改めて考えてみると、それこそが逆にマズイということが霊夢には分かった。

なんせ山の麓には、グランチャーが待ち望んでいる咲夜がいるのだから。

今ようやく、グランチャーのこの不可解な加速の理由が分かった。

そしてそれは霊夢だけでなく、魔理沙も同じだった。

オーガニック的な通信に乗り、彼女の声が強く響く。

（あいつ、咲夜のことを感じてるんだ！会わせちゃいけないぜ！）

その声に続くように三体のグランチャーは、そうはさせまいと、加速するグランチャーの追撃に移った。

第十四話　その１５

グランチャーはそのまま館の外の森を抜け、湖の上にまで差し掛かっていた。

その加速力には、眼を見張るものがある。

残り少ないオーガニックエナジーを全て使い果たすつもりだからこそ、ブレン達にも容易に追い付くことができないほどのものとなっていた。

そして、ここまでくればもう間違いない。

グランチャーは、妖怪の山の麓にいる咲夜と合流するつもりだ。

何故かは到底分からないが、彼の者は、そこに咲夜がいることを知っている。

この加速なら、湖を渡りきり反対側に抜けるのにも、もう二分とかからないだろう。

今咲夜と合流されれば、あらゆる意味で厄介だ。

そうなる前に撃破するか、せめてさらなる痛手を喰わせてやらなければならない。

「当たるかっ？当たれー！」

輝夜の叫びと共に、カグヤブレンがブレンバーを放つが、こちらに

背を向けているはずのグランチャーは、まるで背中に眼がついているかのように最小限の動きで優々とそれを回避した。

しかしながら、こちらとていつまでもそうやって出し抜かれたままではいられない。

「見えてんだからさぁ、まだよ！」

今度はハクレイブレンが、グランチャーが回避したその位置目掛けてチャクラ光を叩き込む。

示しあわせたようにその光は、カグヤブレンの攻撃を上方に浮き上がりながら回避したグランチャーの股ぐらに直撃した。

向こうが決死の覚悟を決めているなら、こちらも本気を出す。

霊夢の身体に宿るオーガニックエナジーの大部分を汲み入れることで威力を上げたチャクラフラッシュだ。

しかし、グランチャーに直撃したその光であっても、弾けるようなスパークが煌めくだけに留まり、せいぜいその深紅のアンチボディを僅かによろめかせることしか出来なかった。

そのよろめいた隙をついて接近しようとするが、すぐに体勢を立て直され、意味がない。

そう易々とやり過ごせる攻撃だったというつもりはないのだが、これでも無理か・・・

となれば、奥の手を使うしかない。

紅魔館の敷地内では、その威力ゆえに館にも被害が及ぶと考えて使うのを控えていたが、この場所なら遠慮は無用だろう。

陸地はまだそこまで近くない。
こんな湖のど真ん中で遊んでいるような妖精も、多分いないだろう。

霊夢が思案すると同時に、魔理沙もまた同じ考えに至っていた。
オーガニックエナジーの波に乗って、彼女の声が聞こえる。

（チャクラエクステンションだ！ちょっと遅いが、いくぜ！）

「分かったけど、こっちのスピードが落ちる。振り切られるかもしれないわよっ？」
（離れても、当たらなければならぬ、当たればどうということはない、だ。狙い撃つぜ！）
「分かった！引っ付いて！」

ハクレイブレンとマリサブレンが互いに近づき、紫のブレンが背中を上に、黒いブレンが湖面に向けるようにして向き合い、同じ方向を差したブレンバーの銃身が重なり合う。

オーガニックエナジーを集中させる中で、さらに互いにそれを放出するタイミングを合わせなければならない上に、狙いも定める必要があった。
そうなれば、二機の加速力は自然と減衰され、眼に見えて速度が落ちてくる。
カグヤブレンも、そして彼の者達のやや後方から追随するサトリブレンも、二体に合わせて減速する。

動けなくなることを承知で猛然と加速するグランチャーとの距離が、みるみる離れていき、深紅の影が一気に遠ざかっていく。
だが、そうなると知ってあえて速度を落とした分、ハクレイブレンとマリサブレンの二体の狙いは、この上なく正確だった。

両方が持つブレンバーの銃口は、ぴたりとグランチャーを捉えている。
また、二体のブレンはその息までも瞬時に合わせることができていた。
二体分のオーガニックエナジーがそれぞれを高め合い、膨大な量に増幅するのにも、時間はかからなかった。
後はもう、撃ち放つだけだ。

「コンセントレイト！」

「チャクラエクステンショーンっ！」

魔理沙の掛け声に霊夢が続き、重なり合ったブレンバーの銃口から、限界まで高められたオーガニックエナジーの波が放たれた。
最早ブレン達の必勝の法とも呼べるチャクラエクステンション・・・
その白熱する奔流だ。

※

麓を駆け降り、湖の湖畔にまで至った咲夜は、そのまま大地を強く蹴ると、弾丸のごとく飛んだ。
彼女の身体が一気に大地から静かな水面の上へと躍り出て、そのまま空高くへと上っていく。
それはどう贔屓目に見ても、大地を蹴ったその勢いだけによる飛翔ではなかった。
本来ならば例えどれほど強く地面を蹴って飛び上がっても、そのまま放射状の軌跡を描いて落下するだけだが、咲夜は一向に蹴りだし

た勢いを弱めず、ある程度高いところにまで飛び上がると、一瞬だけぴたりと静止し、今度は湖面と水平に飛ぶように軌道を変えながら再び空を裂いて進んだ。
明らかに、空中で加速していたのである。

それは、咲夜が最早通俗的な人間としての枠組みに収まっていないことを意味していた。
あるいは、この幻想郷においては、飛ぼうと思えば誰だって空を飛べることの証明であるのかもしれなかった。

が、今はそんなことはどうでもいい。

彼女は、先程の自分の叫びがグランチャー届き、そして、彼の者がその声に突き動かされ、こちらに向かっていると感じていた。
感じたというよりかは、頑なにそう信じていた。
手遅れになる前に、一秒でも早く、合流しなければ・・・

そんな咲夜の思考は、眼前に見えた異様なまでに眩い光に、一瞬にして掻き消された。

正面から飛来してくるそれは、チャクラ光の光だ。
本来ならば淡い緑色に近いのが本来のチャクラ光なのだが、この光はあまりにも眩すぎた。
遥か遠方から、それが近づいてくるにつれ、視界が段々と白く染まっていき、今にも一切の光景が白く塗りつぶされて見えなくなりそうだったのである。
それほどの光は、並み大抵のオーガニックエナジーでは放てるわけがなかった。

しかしながら、咲夜にとってそれは、決して初めて見る光ではなかった。
だからこそ、それがオーガニックエナジーの纏まりであることも分かったのだ。

確か、ブレンパワードを駆る魔理沙達が、チャクラエクステンションと叫んだ光だ。

二度その猛威でこちらを襲い、一度はグランチャーを負かしてみせたその一撃。

さすがに三度目とあっては、瞬時にそれと判断することはできたし、見紛うこともなかった。

そしてそれが、真っ直ぐに咲夜目掛けて飛来してくる。
生身である彼女にだ。

いくら生命力の塊でしかないチャクラフラッシュと言えど、密集すれば膨大な熱量を発揮するし、物理的な破壊力さえも持つ。
ソードエクステンションのようなものでさえそうだというのに、このレベルのチャクラフラッシュが生身の身体浴びせられれば、黒焦げになって湖に沈んでいく結果になればまだいい方だろう。

「――――っ！！」

元々巷で度胸と呼ばれるようなものは据わっていたし、グランチャーと出会うことでそれがより強固なものとなっていた咲夜だが、さすがにこれは悲鳴のひとつもあげそうなほどに恐怖した。

いや、むしろ恐怖のために逆に声のひとつも発することができないでいた。

だからといって、そのまま恐怖に呑まれて、地獄の業火より熱く迫るチャクラエクステンションに身を焼かれるような彼女ではなかった。

彼女には、自らが持つ能力があったのだ。

チャクラエクステンションが纏うその熱波の一端が咲夜の頬を微かに炙ろうとするその一瞬。

異様なまでの熱気が、壁のように彼女の身体を叩いたその一瞬だ。

彼女の生きる世界そのものが途端に停滞し、一切の動きを止めた。

迫り来る光も、その光に表面を蒸発させられながら、押し広げられる湖も全てだ。

同時に咲夜はできる限りの速さで、チャクラ光の軌道から逃れるように、横へと逸れつつ、湖面に落ちるように飛んでいった。

そうして、どういう原理でそんなことができるかはともかくとして、彼女が水面に着地すると同時に、時間停止が解除された。

ここまで逃げれば、ひとまず死にはしないだろうという位置である。

湖面の上で、まるでガラスの板の上に立っているかのような身軽さで彼女が振り替えると、彼女の視界の遠く、やや上方を、巨大な光の柱が通過した。

その光は、以前彼女が見たチャクラエクステンションの光に比べれ

ば、いくらか小さく、弱い光であるように見えた。
というか、せいぜい出力を上げたソードエクステンション程度の勢いしかない。
真っ白に染まっていたはずの光も、チャクラフラッシュ本来のオーロラのような印象を取り戻していた。
どうやら、相当遠くから放たれた一撃らしく、咲夜のいる位置を通過する時にはその威力の大半を失っていたようだ。
白熱した暴力的な奔流が見えたのは、実際は遥か遠方だったということか。
咲夜の視界を通り過ぎた光はそのまま、湖の向こうの陸地にまで到達するのだが、その時にはもう、生身の人間にも無害なレベルにまで拡散していた。

とはいえ、さすがに回避せずに真正面から受けていれば、無事ではいられなかっただろう。

しかしながら、ひとまずは無事に切り抜けることができた。
咲夜の身には、何も起こってはいない。

だが、彼女にとって今はそれどころではなかった。
ますます、グランチャーが危険だ。

ブレンパワードも何もないところには、チャクラエクステンションを・・・あれほどの一撃を撃たないはずだ。
ましてや、ブレンから見れば余りに小さい咲夜を狙っての攻撃であるはずもない。
だとすればグランチャーがいたからこそ、敵はこの強力なチャクラ光を放ったということは自明の理だ。

つまり今、グランチャーと戦っている・・・

それは間違いなかった。

「間に合わない・・・っ？」

咲夜は、思わず声に出していた。

既にチャクラエクステンションは眼前を通過して完全に拡散し、湖はその本来の静寂を取り戻していた。

だがその静寂さが、更なる何か・・・こちらが望まない何かを呼び寄せてくるように、彼女には思えた。

だが、まだ望みは捨てない。

世の中の全ては、実際に目で見て感じない限りは、現実にはならないのだ。

グランチャーがこのチャクラエクステンションにより倒されたという恐れだって、その様子を実際に見ていない今は、真実ではない。

「・・・いや、まだ！」

意図せず口をついて出た言葉をすぐさま否定し、咲夜は今度は、波立つはずの水面を蹴って飛び上がり、先程と同じように、館のある方向へと加速していった。

そのまま水面を踏み抜いて水の中に沈んでいくはずの咲夜の足は、やはり、ガラスの板を・・・というより、固いゴムの壁にそうするように、波すら立てずにその透明の面を蹴っていた。

まだ、そうそうすぐに館が見えてくるような位置ではないが、決して遠くもないはずだ。

同じ水でありながら、陽光を反射させることでひとどころに留まらない姿を見せる湖面には見向きもせず、彼女は叫んだ。

「グランチャー！間に合わせるっ！」

※

二体のブレンから放たれた莫大なオーガニックエナジーの集束照射、チャクラエクステンションは、歪曲するようなこともなく、一本の光の柱となって真っ直ぐに伸びた。
ブレンに乗る魔理沙達でさえ、その光量により視界を白く染められる。

思わず眼を細めながら、彼女は呻くように言った。

「やったのかっ？」

チャクラ光の照射は数秒間続いたのだが、その数秒が過ぎてしまえば、後は嘘のように光も熱も失せ、静けさが帰ってくる。

再び視界が判然とするようになった魔理沙は、急ぎ前方へと眼を凝らした。
グランチャーを撃破できたか確認するためだ。
チャクラエクステンションの照射を終えたブレンにも、オーガニックエナジーの安定を保つために急制動はかけないように注意しつつ、ゆっくりと加速させていた。
互いに向き合うようになっていたハクレイブレンとも離れさせる。

そんな中で彼女は、チャクラエクステンションが通過した余韻だろうか・・・空気が乾いているように感じられるその先にその姿を見た。

グランチャーだ。

彼の者は、チャクラエクステンションを受けて爆発もしていなければ、溶けて蒸発するようなこともなかった。
攻撃する前の形を、はっきりと残しているようだった。

「なんだよ、意味がなかったっ？」

まさか、あの一撃をも完全に回避したのか？

そう考えながら呟く魔理沙だったが、続く霊夢の声を聞くまでもなく、考えを改めていた。

（いえ、違うわ）

「分かってるぜ。当たりこそしなかったみたいだが、これで向こうのオーガニックエナジーも相当削れたみたいだ」

霊夢の声にまた返事をしつつ、さらに続ける。

「いけるぜ！突っ込もうっ」

（でも、こっちも大分体力を使った・・・すぐには追い付けないわ）

これもやはり、霊夢に言われるまでもなかった。
チャクラエクステンションにより、グランチャーの中のオーガニックエナジーがかなり削られた。

外見こそ変化はないように見えるが、その身体の内側は、最早死に体であるだろう。満身創痍という奴だ。
決着をつけるなら、今しかなかった。
後もう少しで、咲夜と合流されるかもしれない。
そうなるよりも早くケリをつけねば、何の意味もなかった。

しかしブレンの方もまた、チャクラエクステンションのためにかなりの量のオーガニックエナジーを消費していたため、しばらくの間激しい動きがとれそうになかった。
加速もできないだろう。
無理に速度を上げようとすれば、さらに多くの生命力を浪費することになる。
弱ったグランチャーを追撃することは、すぐにはできそうになかった。

が、あくまでもそれは、マリサブレンとハクレイブレンだけの話だ。
彼の者達は動けずとも、まだ別に動ける者はいた。

カグヤブレンだ。

オーガニック的通信から、輝夜の声が響く。

（なら、後は私がー！）
「頼んだぜ！」

魔理沙の返事を聞く前に、カグヤブレンはさらに速度を上げて魔理沙達の傍を通り過ぎ、前方に見えるグランチャーへと向かって進んでいった。
充分過ぎるほどに余力を残しているカグヤブレンなら、今のグランチャーを倒すのは造作もないことだろう。

もうそろそろ、湖の対岸が見えてくる頃合いだ。
山の麓にさえ到達されなければ、咲夜と合流することもないはず。
何とか、無事に戦いも終わりそうだった。

そんな魔理沙の思考は、そもそも根底の部分から間違っていた。

分かり切っていることではあるが、マリサブレン達が速度を落としているのと同様に、あるいはそれ以上に、グランチャーもまた速度を落としていた。
これならばカグヤブレンは、すぐに彼の者に追い付くことができた。
月光の色をしたアンチボディが、前のめりになって進むグランチャーの上方から迫り、その背中を視界に入れる。

スリットウェハーに囲まれる胎内にて、眼前に見えた深紅の背を見るなかで、輝夜は呟いていた。

「やってくれって言ってるようなもんね・・・このひょろひょろした動き」

グランチャーは、こちらの予想以上にチャクラエクステンションの影響を受けているようだった。
その飛行は、前に進んでこそいるが力強さは一切なく、ある意味で夢遊病じみた、何かに操られているかのような印象を与えていた。
自らの意思に・・・という意味では、確かに操られているのかもしれないが・・・

何にせよ、グランチャーとしても決していい気分ではないだろう。
いい加減、楽にしてやる頃合いかもしれない。

そう脳裏で呟いた一瞬、妹紅が駆るグランチャーと戦ったその時のこと・・・グランチャーの身が砕け、その向こうから、虚ろな眼をした妹紅がその長い髪を靡(なび)かせる姿が、ぼんやりと脳裏で浮かび上がってきた。

しかしそれは、本当にぼんやりと・・・心の奥の奥に、篝火(かがりび)のように浮かび上がっただけだ。
ブレンに対し、グランチャーの生命を終わらせるように命じる輝夜の思念を遮るほどのものではなかった。

カグヤブレンが、ブレンバーの銃口をグランチャーに向け、一射する。
一条の光の筋となったオーガニックエナジーの束が、グランチャーの背中を突き刺す。

しかし、彼の者はまだ、持てる余力の全てを発揮してチャクラシールドを展開していた。
最早それは、チャクラ光を防ぐには不足過ぎる程度の力しか持っていなかったが、まだ辛うじてスリットウェハーを貫通されるのを堪えることはできたようだ。
その代わりに、強力な衝撃が彼の者を襲い、その身を、下方へ押し退けながらよろめかせる。

さながら空気が壁となってその身を叩いたかのように、大きく怯むグランチャーの姿は、さすがに痛ましいものだった。
先の攻撃で左腕を失っているのだから、なおさらだ。

ここまできてまだ生きようとする執念は、輝夜にとっては（恐らくは誰にとっても）脅威であったし、迫りくるような哀切を感じさせる。

そこで輝夜はようやく、妹紅と彼女のグランチャーとの戦いを、鮮やかに思い出した。
戦いというよりも、その中で感じた、妹紅の心を、だ。
それもまた、この深紅のグランチャーが放つ何かと、ひどく似ているように思えた。

吐き捨てられる言葉は、思い出された妹紅の中の荒んだ心諸共、そんな認識を忘れ去ろうとしてのものなのか・・・

「無茶するのは、もうやめんのーっ！」

その時だった。
ブレンが何かを感じたらしく、スリットウェハーの中がほんの僅かに熱を帯びる。
それと共に、よろめきながらも尚も前へと進もうとするグランチャーにも、眼には見えない何かが起こっているように感じられた。

「ん・・・っ？」

グランチャーが向かおうとする前方、湖の対岸側に、何かがある。
訝しげな鼻息を漏らしながら、ブレンが示す方向に顔を向け眼を凝らした輝夜は、次いで息を呑んだ。

「うわ・・・っ」

遠方から、小さな人影が近づいてくるのが見える。
大分遠くだったのでまだはっきりとその姿を見ることはできなかったが、おぼろげに見える範囲だけでも、輝夜はその影が咲夜であることが分かった。
こちらに攻撃を受けることを承知で真っ直ぐに進んだグランチャーと同じように、一切の迷いなく真っ直ぐに進み、グランチャーに対し真正面からぶつかるように進んでいたのである。
この期において、そんな事をするような者が他にいるだろうか。

間違いない。
あれは十六夜　咲夜であるし、彼女は、グランチャーと合流するつもりだった。

予想外の事態だ。
咲夜が来るのがあまりにも早すぎる。
このままでは、彼女がグランチャーと合流し、彼の者がその本来の力を取り戻すだろう。
こちらを振り切るだけの機動力も得るだろうし、そうなれば、早苗達の下に逃げられる恐れも大いにある。
そうなる前に、後一撃で、あの深紅のアンチボディに致命傷を与えなければならない。

驚愕しつつも、すぐさま気を改めた輝夜は、その視線を再びグランチャーの背中へと向けた。

それと共に、ブレンも自らの敵に眼を凝らす中で、彼女は叫ぶ。

「いっけぇーっ！」

※

「・・・見えた、グランチャーっ！」

咲夜は、ほとんど反射的に、身体が勝手に反応するように叫んでいた。

高速で流れていく湖のその向こうに、見慣れたというものでもない、深紅の姿が見えた。

その上方には、月光の色のブレンパワードがおり、彼の者に睨みを利かせている。

そして、咲夜の眼に映るグランチャーには、左腕がなかった。

「ぐ・・・っ！」

咲夜は驚愕するより、そして悔やむより、とにかく今は急いだ。

あれほどブレンが近くにいては、すぐにでも攻撃されてしまう。

それに、グランチャーは遠方からでも分かるほどに、眼に見えて衰弱していた。

長らく敵の攻撃を耐えて、オーガニックエナジーを失っていたのだろう。

一秒・・・一瞬でも早く彼の者の下に辿り着かなければ、間に合わなくなる。

咲夜は、可能な限り、出しうる最大の速度を出して、グランチャーへと迫った。
弾丸のような速さで空を裂き飛ぶ彼女の姿は、やはり、人間のそれではなかった。

しかも、時間を停止させ、その時間の中で動けるのだ。
それでも彼女が人間という枠組みの中から外れないでいられるというのが、幻想郷なのである。

時間を停止させたとしても、咲夜自身は時の流れを体感するし、その時の流れの中で動く自分自身も感じていた。
だからこそ、グランチャーの下に辿り着くまでの時間の経過が、苦々しいほどに長く思えた。

後少し、後少しで間に合う。
しかし、その後少しがひどく遠いものに思えて仕方がなかった。

グランチャーとの距離が、後５０ｍかそこらという時に、時間停止は解除される。

咲夜は、もうほとんど眼の前にいるように思えていたグランチャーに向かって手を伸ばしながら、叫んだ。

「グランチャーっ！今行くっ！」

その声に応えるかのように、グランチャーもまたこちらへと手を伸ばす。

咲夜と彼の者の距離はさらに近づいていき、今まさに彼女の身体が、大きく広げられたグランチャーの手のひらに、ぶつかる様に受け止められようとしたその瞬間だった。

カグヤブレンが振り抜いたブレンバーの刃が、グランチャーの右脚・・・膝から下のあたりを捉え、鉄が捻じれて吹き飛ぶ、まさしく金切り声と呼べそうな耳障りな高音が咲夜の鼓膜を揺らした。のみならず、広げられたグランチャーの手のひらに、飛び込み、倒れ込むように張り付いた彼女の身を、強烈な振動が襲っていた。右脚を切断されたグランチャーが、再び大きくよろめいたのである。

咲夜には、グランチャーの右脚がきりもみしながら湖面へと落下していく様子は見ることができなかったが、乱雑に響いた金属音に混じったグランチャーの、普段は聞くことなどない、鉄が軋む音のような悲鳴を聞いて、グランチャーの身体のどこかが切り裂かれたと分からないわけがなかった。

グランチャーが加速する風圧のためだろうか・・・水面に対しほぼ垂直になっている手のひらの上に、風圧に押さえつけられながら、地面にそうするのと同じように突っ伏した姿勢になっていた彼女は、眼を見開き、戦慄する。

「・・・・・・っ」

グランチャーの悲鳴はほんの数秒であり、その数秒を過ぎた今この時にはもう聞こえてはいなかったが、咲夜の脳裏では、いつまでもその悲痛な声が、今まさにグランチャーが発しているもののように

反響していた。

間に合わなかった・・・？

そんな思念が、脳裏で響くグランチャーの苦悶する声と共に錯綜する。

だが、そうではなかった。

まだ、間に合わなかったわけではない。

グランチャーはまだ生きている。

そして、彼の者の敵であるブレンもまた・・・

グランチャーは、悲鳴を発することをやめ、今はもう、自分を傷つけた敵にその恨みを晴らすことだけを考えていたのだ。

それに呼応するかのように、咲夜の身の内側からも、沸々と怨念が煮えたぎり始めていた。

左腕は吹き飛び、そして今またどこかが切り裂かれ、友の身体が痛めつけられた。

それでもまだ、戦えることに変わりにはないのだ。

ここまでされた相手に雪辱を果たすまでは、痛みに苦しむことはできなければ、グランチャーを傷つけてしまったことを悔やむこともできない。

「・・・・・・っ」

眼を細め、きつく歯を食いしばった咲夜は、風圧が重力に逆らいその身を押しつける中で、グランチャーの手のひらの上で力強く立ち上がった。

それと同時に、前へと伸ばされたグランチャーの腕が曲げられ、咲

夜を乗せた手のひらを、股間にある胎内への出入り口へと運んでいた。
すでに装甲は開かれている。
後は咲夜がその中に入り込めば、グランチャーはその息を吹き返すのだ。
振り落とされないように、咲夜は微かに曲げられたグランチャーの親指のスリットウェハーにしがみ付き、近づいてくるグランチャーの身体を眺めていた。
その中で、彼の者も、少しずつ加速を緩め、前のめりに傾いていた身体を再び起こし、湖面と垂直に立つような姿勢になっていく。

そして、手のひらが腰のあたりにつき、そのまま咲夜が開かれた股間部の装甲の上へと飛び乗った。

それと同時だった。

カグヤブレンが、減速を始めたグランチャーの前方へと躍り出て、クルリと方向転換し正面を向くと、右手に握るブレンバーの銃口をこちらに向けていた。
しかし、そのことで否応なしに装甲の上に乗る咲夜の姿が見える。
とうとう彼女がグランチャーと合流してしまったことにうろたえているのが、咲夜当人にもよく分かった。
そして、咲夜が知ることではないが、美鈴からの頼みである以上咲夜を傷つけるような攻撃ができないからこそ、カグヤブレンは、突きつけたブレンバーをそのまま発射できないでいたのだ。

今まさに穴をくぐって胎内に入ろうとしていた咲夜は、その前に、背中を向けたまま頭だけを僅かに振りかえらせ、流し眼に紅く燃え

る眼光をブレンに注ぎこみながら、風の音にかき消されて聞こえなくなるような声で呟いていた。

「なにがブレンは優しい生き物だ・・・私がいなくなった隙をついて、美鈴まで利用し、不意打ちのようにグランチャーを襲う・・・それのどこに・・・どこが優しさだと・・・っ」

穴の縁を掴んでいた手に力が入り、装甲を踏みしめる足が微かに震えるのを感じながら、彼女はその震えを生み出す怒りを一切押さえることもなく、飛び込むように胎内へと入っていった。

そうして、スリットウェハーの柔らかい壁面に手を付くと同時に、身体を素早く捻って１８０。回転し背中を預け、グランチャーの身体に燃える熱と、彼女の身に煮えたぎる熱が互いに共有されるのを感じながら、咲夜は、唸るように叫んだ。
魂そのものから放たれるような憤怒を、自らの敵に示すように。

「やる・・・殺ってみせるっ！」

第十四話　その１６

幽香の駆るグランチャーの手のひらに乗りながら、妹紅は遥か眼下に見える花畑を眺めていた。
早苗のグランチャーは、こちらのことは気にせず、相変わらずその辺をゆらゆらと漂うように飛んでいる。

水でもすくい取るような形になっている手のひらの上、親指に両肘をかけてもたれかかりながら、じっと眼下を見下ろしていた妹紅は、それと一緒に、スリットウェハーの向こうからグランチャーの発する熱も感じていた。
その微かな熱さを感じさせる何かが、妹紅の心の中に何も呼び起こさないわけがないのだ。

微かな風がこの場を吹き抜け、大地に根を張る花々（大部分が向日葵なのだが）が揺れるのを眼にして、妹紅は一度その、まるで大地にできる水面のように揺れる影のグラデーションを生み出す花畑から眼を逸らし、次いでグランチャーの顔を見上げてみた。
静かに空の上に佇み・・・いや、漂っていたグランチャーも、先程の妹紅同様、太陽の畑に眼を向けていた。
そのため、振り向いた妹紅と、視線がぴったり・・・とまではいかないが、概ね同じように、一本の線となって重なりあった。

「・・・・・・」

この時妹紅は、このグランチャーは、花が好きなんだということが

分かった。
花というよりかは、植物そのもの、だろうか？
グランチャー全体・・・もしかしたら、アンチボディ全体が、植物を愛するように生まれてきたのだろうか？
植物もまた生きていて、オーガニックエナジーを持っているから・・・
だとすれば・・・

「あいつだって、あんたと同じだったのか・・・花を愛していた・・・？」

気がついた時、妹紅はこう呟いていた。
彼女の脳裏では、彼女が短い間ながらも共に生きた、あのグランチャーのことが鮮やかに思い出されていた。
彼の者は妹紅の中にある怨念を呼び起こし、彼女を戦いに駆り立てた。
だが、そんなこととは関係なしに、妹紅は彼の者に好意を抱いていたし、向こうも同じだということも分かっていた。

そのことを、彼の者とはまた別の、土の色のグランチャーの身に触れることで思い出すことができた。
そう考えると、確かに幽香の言う通りだったわけだ。
グランチャーの心に触れることが、妹紅の中での決心を固める助けになるだろう、ということは。

グランチャーの親指に肘をついたまま、顔だけ彼の者の方に向けていた妹紅は、そのまま身体全体も同じ方へ向け、親指には今度は背中を預けながら、あぐらをかくような姿勢になった。
そうして、穏やかな笑みを浮かべると、静かでありながら、弱く吹

きつける風には決して消されないような声で、こう呟いた。

「やっぱり、私としては、あんた達グランチャーは嫌いにはなれない・・・だけど・・・」

だが、最後の言葉を発する時、その穏やかな顔に僅かながらの影が落ちていた。

グランチャーは嫌いにはなれないし、むしろ好きだ。
だが、そのためにもう一度グランチャーと共に生きるようになれば、今度はブレン達と戦うことになる。
だからといって、このまま何もしないのは、妹紅には耐えがたいものだった。
あるいはいっそ、グランチャーへの想いを断ち切って、ブレンパワードの側につけばいいのか？

そのいずれかを選ぶ覚悟を、いい加減に決めなければいけないのだ。

すでに妹紅は、自分が魔理沙達の作戦の一端を担っているということを、ほとんど忘れてしまっていた。
自分の中の個人的な苦悩と葛藤に、屈託していたのである。

「ブレンと戦うようなことにはなりたくない。でも・・・どちらか決めないといけない」

すでに幾度となく繰り返していた自問自答を、今一度展開した、その時だった。

――そうだ――

声が聞こえた。
周りのどこかにいる誰かが発した声ではない。
妹紅自身の身体の奥底から発せられ、彼女の身体の奥底を・・・さらに言えば、魂そのものを震わせるような声だった。
だが、妹紅自身の声でもない。
彼女以外の何者かが発した声だ。

そしてその声は、どこか聞き覚えがあるようでもあり、初めて聞くようでもあった。
なにより、声はひとつではなかったのである。
ふたつだ・・・
ふたつの声が重なりあって、さながらひとつのエコーとなって妹紅の心に響いていた。

――もう、決めなければいけない――

「・・・・・・っ？」

一体何事か？
僅かに眼を見開きながら、ぼんやりとこちらを見るグランチャーの顔を見返していた妹紅は、ほとんど思案をしていないというのに、直観的にあるひとつの結論へと到達してしまった。

この声は、幽香とグランチャーのものだ。
その結論に至った理由は分からない。
しかしこの声はきっと、あの二人のものなのだ。

そんな認識が脳裏で凝り固まった時、妹紅は、胸の内がすっ、と冷

たくなっていくのを感じた。
そのまま、流れる血潮と一緒に、冷気がその身の隅々まで行き渡るようだった。

それと同時だった。
固く閉ざされていたグランチャーの股間部の装甲が突如開く。
ちょうど妹紅の乗る手のひらは腰にあてられるようになっていたため、妹紅は自分のすぐ傍に、倒れるように開いた装甲が、空気を抜けるような音を鳴らした後、がこん、という鈍い音を響かせて横倒しになった状態で止まるのを見た。
丁度手のひらの横の辺りに、装甲は落ち着いていた。

「・・・どうした・・・」

何故だか妙な胸騒ぎを感じ、思わず呟いていた妹紅の視界に、次いで、開いた装甲の向こう側、スリットウェハーがスライドして出来た穴をくぐって外に出てくる幽香の姿が見えた。
そのまま、悠然とした佇まいで装甲の上に立った幽香は、しばらく無表情で前の方を眺めていたかと思うと、横の方に見える妹紅に顔を振り向け、何とも言えない表情を見せていた。
好意的なようでいて、侮蔑的であったし、どこか挑発的でもある表情だ。
そしてまたしても彼女は、手のひらの上に座りこむ妹紅を見下すような状態になっていた。

「・・・どうしたんだ?」

今度は、幽香にも聞こえるような声で、同じ疑問を口にする妹紅。

それに対し幽香は、言葉の代わりに行動を返事とした。

彼女はゆっくりと装甲の上から足を踏み出すと、妹紅の乗る手のひらの上へと降り立ったのである。

何のつもりだろうか・・・

さすがに警戒してしまう妹紅に対し、幽香はそのまま数歩進んで彼女のすぐ眼の前に立つと、言いようのない表情はそのままに、不意に横に逸れ隣に立つと、ゆっくりと膝を立てて座り込んで、先程妹紅がそうして居たように、親指を肘かけにして眼下に見える太陽の畑を見下ろしていた。

「・・・お、おい」

つくづく不思議・・・というか、変な妖怪だ。

そんなことを考え、幽香の横顔を見つめながら、恐る恐るこう呼びかける妹紅。

そんな彼女に振りかえるようなこともせず、ようやく幽香はこんな返事を寄越した。

「私がこのグランチャーを好いているのは、この者が、私の花畑で生まれたことを喜ばしいことだと言ったからこそなのよ・・・花に囲まれて生まれて来ることができて良かったって・・・」

「え？」

「花を好きな者に悪い者はいない・・・まして、そんな花畑の中にいる私のことを綺麗だ、なんて言ってくれる者にはね・・・」

「・・・そうか・・・」

妹紅は、幽香が何故唐突にこんなことを言うのか、というのはともかくとして、彼女が今言わんとすることの意味は分かった。
彼女に対して感じた不気味さに似たものが、ほんの僅かながらに和らぐのを感じた妹紅は、彼女が聞いてくれるのかは分からないが、こう応えた。

「あんたも、グランチャーのことは好きなんだな」

その声に、妹紅の杞憂に反してしっかりと彼女の声を聞いていた幽香が、また応えた。

「そりゃ、嫌っている相手には、こんな風に身体を委ねたりはしないでしょう・・・それよりもねぇ、私は・・・」
「・・・？」

私は、なんだというのだろうか。
続く幽香の言葉を待った妹紅は、耳朶を打つその言葉に耳を澄ませた。

「・・・貴方はどうなのか知りたいわねぇ」

妹紅がびくり、と身震いしたのは、幽香のこの言葉だけによるものではない。
あまりにも突然、幽香の顔がこちらにぐっ、と近づいてきたからだ。
いきなり彼女の怪しげな表情が視界いっぱいに広がって、互いの鼻先がくっつきそうになった。

「あ・・・っ？」

突然のことに慌てて、妹紅は思わず幽香から離れようと身体を横に

逸らしてしまった。

その勢いにより、もたれかかっていた背中がスリットウェハーを滑って、彼女はぺたりとその場に横倒しになってしまった。

「うぅっ」

咄嗟に手のひらの上に両肘をついて上体を起き上がらせようとするが、倒れる妹紅と一緒に、幽香もさらにその身体を近づけてきて、彼女の上にのしかかるような姿勢になっていたため、それもできなかった。

せいぜい、ほんの僅かに上体を傾けることしかできなかった。

曲げられた自分の肘に、幽香の手首がひっかかり互いの腕が絡み合う中で・・・また、自分の右足もまた彼女のスカートの奥にある太股に挟みこまれるように絡まっているのも感じる中で、妹紅は、俄かに額から汗を流しながら、呟くように言った。

「なに・・・なにをするんだ・・・」

その声に幽香は、柔らかくも得体の知れない笑みを浮かべ、含み笑いを漏らした。

次いで静かにこう応えるその息は生温く、甘い芳香を漂わせていた。

その香りもまた妹紅にとっては異質なものであり、誘惑的でもありながら破滅的なものにさえ感じられた。

「なにをって、分かってるでしょう」

「うぅ・・・っ」

妹紅は、吐き捨てられる息の熱気と芳香に思わず眼を閉じて、幽香から顔を逸らしてしまった。

が、そのことで、逆に耳の方が彼女の顔の正面を向く形になった。
そして、妹紅は次いで、彼女の妖艶な息が耳元に吹きかかり、彼女の声が間近から鼓膜を揺らせるのを感じた。

「貴方はどうなの、って聞いてるのよ」
「はぁ・・・はっ・・・なんだって？」

訳もなく身体が熱くなり、呼吸までも荒くなる中で、妹紅は乾いた声で再び問うた。
しかし、質問するまでもなく、彼女は、幽香が先程言ったように、彼女が何を聞いているのか、確かに分かっていたのだ。

こちらはどうなのか。
グランチャー達に対して何を思っているのか。
ひいては、これから彼女が何をするのか。
それを聞いているのだ。

だからこそ妹紅は、誰が見ても明らかな程に動揺し、焦燥していた。
繰り返される同じような質問に、幽香が僅かに不満げな表情を浮かべると、妹紅の方も慌てて言葉を続けた。

「いや、分かってる・・・分かってるんだよっ・・・だ、だけど・・・」

しかし、こんな問いは、もうずっと前から自分自身に言い続けていたものだ。
そして、ずっとその答を見つけることができなかった。

今更誰かに問いなおされたところで、応えられるわけがないのだ。
続く妹紅の言葉には、そんな彼女の戸惑いも込められていた。

「・・・どう応えればいいのかが分からない・・・これぱかりは、何も応えられないんだ」

「いや、違う」

幽香の返事に、妹紅はまたしても身ぶるいしてしまった。
ほんの一言の言葉に、今まで感じてきた以上の、何かがある様に思えたからだ。
今まで彼女に抱いていた恐れだとか、妖しさだとか、その中に微かに見える優しさの全てを高めながら、それらと代わるまったく新しい何かを思わせるような、そんな口調だったのだ。

そうして気がついた時、彼女は襟首を掴まれた状態で、立ち上がった幽香に身体を引き挙げられていた。

あまりに唐突なことに、彼女には自分がそうされた経過が一瞬分からなかった。
まるで、映画の場面が数分ほど飛ばされたかのように、事態の辻褄が合わなかった。
さっきまで互いが何をしていたのかさえ、分からなくなりそうだった。

「う・・・っ?」

何が起こったのかまったく分からず、ただ首が締められることで感じる息苦しさに呻く妹紅の襟首を掴んだまま、幽香は低い声でこう言った。

「貴方は分かっている・・・その心は、もう決まっているはずよ」

「だから、な、何を言ってるんだあんた・・・っ」

「そうでなければ、私達の下へ来るわけがなかった・・・グランチャーの姿を、もう一度その眼に見ようなどと、考えるわけが・・・」

「・・・だから、あんた、何を言って・・・」

この問いもまた、無意味だった。

やはり妹紅は、幽香の語る言葉の節々から、彼女の言わんとすることの意味は分かっていた。

しかし今の妹紅には、その言葉を認めるだけの心の余裕はなかったのだ。

グランチャーにもう一度会うために、この太陽の畑に来た時点で、彼女の心が決まっているということを。

「とぼけるのも、いい加減に・・・っ」

幽香の声に、明確な憤りがこもっているのが、妹紅には分かった。

今改めて考えると、不気味で恐ろしい印象を抱く幽香だったが、はっきりと怒りを露わにしたり、こちらにありありと嫌悪感を向けるようなことは今までなかった。

それが今初めて、明確な怒りをこちらに対し向けていた。

そして妹紅にはやはり、この憤りの理由も分かったし、何故だか不思議と、彼女が怒ることにも納得できてしまっていた。

全ては、自分の中にすでにある意識を認めず、結論を出さず、悩むことにしか終始できないこちらの心境を見抜いてのことだと・・・？だというのなら、幽香のこの怒りも、正しい。

だが、例え正しくとも、妹紅には仕方がないことだった。
確かに、自分の中にはグランチャーにもう一度乗ろうという意思がある。
しかしただそれだけなら、こんなまどろっこしい方法などとらず、すぐにでもリバイバルするプレートを探してそこから自分のグランチャーを見つけている。
だが、それができない理由が彼女にはあったのだ。
幽香達には分からないのであろう理由が。

幽香は、俄然襟首を掴んで妹紅の身体を持ち上げたまま、手のひらの上をどこかへと向かって歩き始めた。
それに釣られて、妹紅も半ば引きずられるように、よたよたと力ない足取りで幽香についていくしかなかった。

彼女が向かったのは、他でもない。
グランチャーの胎内である。

「くっ？」

驚く妹紅を余所に、ゆっくりとスリットウェハーの穴をくぐり、彼女の身体も強引に引きずりこんだ幽香は、そのまま勢いよく彼女の背中を壁面へと叩きつけていた。
スリットウェハーの弾力があれば、例え勢いよく叩きつけられたとしても、特別痛みは感じない。

グランチャーがぶるぶると嘶くのが聞こえたが、それも別に、痛みによるものではなかったようだ。

しかし、痛みはともかく、妹紅は突然のこの、幽香による暴力的な好意に当惑していたし、畏怖もしていた。
それと同時に、あの時のグランチャーと同じように、あるいはそれ以上にストイックに、こちらの心の奥底にあるものを呼び起こそうとする幽香にも恐れを抱いていた。
恐れというか、脅威・・・あるいは、自分の歩む道を無理やり決めつけられるように感じることに抵抗するような意識だろうか。

「・・・っ」

柔らかい泥土に包みこまれるような感覚が背中から染みわたる中で、妹紅は再び、こちらに寄ってくる幽香の顔を見た。
彼女の鋭い眼光が網膜の奥に焼きつき、互いの額が触れ合う、こつんという音が、やけに大きく響いた。

幽香は何も言わない。
しかし、こちらの眼の奥の奥まで見据えるその眼が、語っているように聞こえた。

――――自分の心を偽り、前に進むことを拒んで、何が楽しい・・・軟弱者めっ――――

その声は、確かに幽香が・・・幽香の思念が語った言葉であるように聞こえたが、それと共に妹紅は気づいていた。
この言葉は、幽香の言葉でもあり、そっくりそのまま自分の言葉でもあったのだ。
妹紅自身、幽香のこの言葉とまったく同じことを考えていた。

もしかしたら、妹紅の魂が、幽香が語った言葉であるように錯覚させているだけで、声は幽香のものでも、それを発するのは妹紅であるかもしれなかった。
幽香を、自分の心の映し鏡としているだけ・・・

いつまでもどっちつかずの立場で居続け、このままではいけないと感じながら、問題の解決ができないでいる。
それでいいと思っているのか？

そんな意識が、妹紅の心の中を駆け巡る。
しかしそれと共に、妹紅の中にあるもう一つの意識が、沸き立つようなフラストレーションを発揮させていた。
決めなければいけないことを決められない自分に対する自嘲の念に苛まれた心が生み出す、自棄に近い感情の噴火だ。

彼女は、幽香に対して、そして、自分の意思に対して、噛みつくように反論していた。

「分かってるよ・・・分かってるんだよ！誰に言われるまでもなくなっ」

そう叫ぶ勢いのままに、右手のひらを幽香の胸に押し当てると、ぴったりとくっつきそうなほど近くに寄っていた彼女の身体を突き放した。

突然力強くこちらを押し出した妹紅の、予想外の力に、幽香もさすがに驚いた様子で、僅かに眼を見張りながら、
「あぁ・・・っ？」
と戸惑うような声を上げ、よろよろと狭い胎内で数歩後ずさりした。
妹紅の襟首を掴んでいた手も思わず離してしまっていた。

そのまま体勢が崩れそうになるのを、スリットウェハーにしがみ付くことで堪えながら、気を取り直したように鋭い眼つきを取り戻した彼女は、唸るような声を吐き捨てた。

「貴様・・・っ」

しかし妹紅は、その声に物怖じするようなことはなかった。
恐れる以上に、彼女は自らの葛藤を叫ぶように吐露することに、今この時の意識を全て向けていたのである。
その時の妹紅の表情は、まだグランチャーに乗っていた時、輝夜に対し自らの心の内を語った時と、どこか似ていた。

「だけどな、私はあんた達みたいに、どちらかだけを信じるなんてこと、できないんだよ！あんた達は、そりゃ、グランチャーとだけ関わっているから、ブレンパワードに何の思い入れもないだろう・・・だけど私の方は、なまじブレンのことも知ってしまったから、あいつらの敵になることも怖いんだ！あんたにゃこの気持ちは分からないだろうっ？」

だが、妹紅のこの言葉に、幽香は逆に嘲るような笑みを浮かべ、応えていた。

「そりゃ、私には分からない・・・でも、早苗は貴方と似たような立場にいた・・・彼女なら、貴方の気持ちは分かるんじゃないかしら？・・・そして、そんな彼女は今、完全にグランチャーと共生する抗体になっている・・・」

「それは、あいつがどうかしてるからだっ・・・ブレンをあっさり見捨てて、グランチャーに乗るなんて、普通じゃない」

吐き捨てるように応えた妹紅は次いで、幽香の刺すような鋭い声を聞いた。

「普通でなければどうだというっ・・・それでも早苗は直向きだわ。今の貴方に比べれば、ずっとまともに見えるし・・・なにより彼女は、グランチャーへの信頼を実践できている」

「まとも?あいつが?・・・実践できている・・・?」

実践、という表現の持つ不可解な力に、妹紅は戸惑った。

そんな彼女に対し、幽香は続ける。

「貴方はどうかしら・・・グランチャーのことを好きだと口では言って、いざって時に拒絶をする・・・それで本当に彼の者達を信じていると?」

「・・・ま、またそれかっ・・・グランチャーもそうだけど、ブレンパワードだってそうなんだ・・・私には、考える時間が欲しいんだ・・・」

幽香の言葉は、はっきりいってとことんまで的を射ていた。

だが、例え理屈ではそうであっても、感情が受け入れられなかったのである。

決まり切った真理に対し、決まり切った応えをするしかなかった妹紅に次いで幽香が返した言葉は、思いがけないものであったし、心の奥底にある琴線を揺らせる何かがあった。

「だけど、その考えることが根本的に間違っているとしたら?・・・・・・貴方はまず、一番大事なことが分かっていない」

「・・・なに?」

「グランチャーもブレンパワードも、互いに憎しみ合って戦っていると考えているのだろうが、そうじゃない。私には分かる・・・グランチャーもブレンも、戦うこと、そして死ぬことすら、生きることの一部にしているのよ・・・」

「・・・冗談じゃない」

「冗談を言っている覚えはない・・・アンチボディはきっと、戦うことで何かを探している・・・一時の生命と引き換えにしてもいい、全体を統括する何か・・・種としての魂を満たすものを探しているのよ・・・」

「・・・ビープレートのことか」

「さて、どうでしょうかね・・・」

「・・・・・・っ」

妹紅は、ある言葉を聞いた途端に、心の内にあったありとあらゆる感情が全てどこかへと吹き飛んで消えていくのを感じた。

だがそれは、冷静さを取り戻したということにはならない。

困惑や恐れに変わって、ある感情が胸中に満ちてきたからだ。

だからこそ、他の感情が行き場もなく消えていっただけなのである。

一瞬だけ心が冷え切ったと思うと、そこからじわじわと、煮えた湯が湧き出てくるように、熱が染みだしてきていた。

死すら生の一部・・・

それは、その生の一部を享受できなくなった彼女にとっては、この世の最大の真理であるし、全ての事柄が行き着く答であり、彼女にとっては、絶望にすら直結する言葉であった。

ある意味ではこれは、妹紅のブロックワードでもあったのである。

今度は、幽香が襟首をつかみ上げられる番だった。

あまりに意外なほどの力で引っ張られた彼女は、今度は妹紅に思いっきり引き寄せられていた。

もう一度、彼女と額をくっつけた妹紅は、腹の底から発せられたような叫びを幽香に浴びせていた。

「そんなこと・・・そんなことがあってたまるかよぉっ！」

「こいつ・・・っ」

「死が生の一部だってっ？だからブレンと戦って殺すことも構わないっていうのか！？そんなの単なる口実じゃないかっ！」

「離せっ！」

幽香は、掴み上げる腕を無理やり振り払いその勢いのまま妹紅をもう一度スリットウェハーの壁面へと押しつけた。

呻き声を上げ、力なく積層する装甲にもたれかかる妹紅だったが、彼女の眼に燃える怒りの色が収まるような気配は一切なかった。

互いの口から荒い息が吐き出され、その呼吸の音が、幾度となくこの、狭く穏やかな熱に包まれた空間の中に響いていた。

「はぁ・・・はぁ・・・はっ・・・」

刺すような幽香の視線に射られながら、妹紅はしばらく肩を上下させて、喘ぎ喘ぎな息をしていた。

だが、段々とその息の荒さも引いていき、揺れる肩の動きも小さくなっていた。

しかし、それに反比例するように、瞳に燃える赤いものは、逆にみるみる内に大きくなっていく。

スリットウェハーにもたれかかったまま、彼女は尚も叫んだ。
それこそ、何もかもまだ決められていない妹紅が、今確かに抱いている、グランチャーに対する想いのひとつだった。

「だったら、私を遺して死んでいったあいつはどうなるっ！私のグランチャーは死ぬ時に、私といれて良かったって言ってくれた・・・でも、きっと死ぬのは怖かったろうし、寂しかったんだ！」
「・・・・・・」

「あいつが幸せだったなんて・・・あいつの死が生の一部だとか、そんなふざけたこと、考えられるわけがあるかっ！あいつだって本心では、戦わずに済むなら、戦いたくなったはずなんだ！・・・・もし・・・もしあんたの言っていることが真実なら・・・あいつは、あいつの死は一体なんだったんだっ！？あいつは死ぬために私と出会ったっていうのかっ？こんな哀しみだけ遺して・・・っ！」

「・・・・・・っ」

幽香は、さすがに息を呑んだ。
予想していた以上に鬼気迫る妹紅の魂の独白を聞いたからだ。

そして、グランチャーとブレンパワードとの間で葛藤していると言えば聞こえはいいが、所詮どっちつかずでしかない。
そんな妹紅への認識を、改めなければならないとも思った。
そして彼女は決して、このまま永遠にどっちつかずの立場で居続ける気がないのも、確かなことだと思えた。

彼女のグランチャーへの想いは、間違いなく本物だ。

だがその想いは、幽香が彼の者に対して抱くものとは、大きく違っていた。

だからこそ彼女は、妹紅の言い分も理解できつつも、彼女の心の奥底までは分からなかった。

そして、妹紅が心の中でどう思っていようと、実際に行動を起こさなければ、その心も全て無駄になってしまうのだ。

少なくとも、今この時の妹紅は、自分の内にあるグランチャーへの想いを語る資格もないのだ。

グランチャーと共生する抗体にもなれなければ、ブレンパワードの側につくこともできていないのだから。

例え彼女がどれほど苦悩していようと、いずれ決心しなければならないというのは、確かなことなのだ。

だからこそ幽香は、まずは妹紅に対し、

「・・・なるほどねぇ、貴方の気持ちも分からなくはない」

と断りを入れつつ、こう応えるのだ。

「しかし・・・だったら、貴方が自分なりの答を見つけなさいと言うしかない・・・結局のところ、アンチボディやらオルファンやらがどういう生き物なのかってことは、個人の考え方の違いでしかない・・・所詮は生き物なんでしょうからね」

「・・・・・・」

「貴方が私の考えを否定したかったら、まずはそれに変わる貴方なりの考えを見つけなければね・・・・・そして、いずれは自分自身で選択しない限り、貴方は、貴方のグランチャーを裏切ることにもなる・・・それが嫌なら・・・」

「分かってるんだよ、何度も言わせるな」

再び返された妹紅の言葉は、先程のような荒々しさは持っていなかった。

吐き捨てるようなぶっきらぼうな声ではあったが、それが彼女の本来のありようであることを知らない幽香でも、決して妹紅が憤怒しているわけではないということは分かった。

壁面にもたれかかったまま、僅かに俯く彼女の顔にはすでに怒りの色はなく、その代わり、より一層強くなった苦悩の色が張り付いていた。

いずれ必ず、自分の心を決めておかねばならない。

そうしなければ、自分を置いて死んでいったグランチャーをも裏切ることになる。

その幽香の一言は痛かった。

「分かってるんだ・・・いずれ・・・いずれ必ず・・・」

独り言のようにそう呟く彼女の姿を見て、幽香はまた笑んだ。

その心の内では、妹紅のことを『面白いヤツだな』、と評していた。

そうして、そんな意地悪そうな笑みを浮かべながら、

「ふん」

と小さく鼻息を漏らした彼女は、うなだれる妹紅の左肩に右手を置いて、言った。

「なら、こちらも待たせてもらいましょうか・・・歓迎する用意はするし、敵となったなら叩き潰す用意もする・・・楽しみにしている」

その声には、妹紅は応えなかった。
避けるように目線を深く沈めたまま、黙り込んでいるばかりである。

しかし、手のひらから触れる妹紅の肩から力が抜け、彼女の心から荒んだ力が抜けていくのを・・・
いや、もう一度、心の奥底に仕舞われるのを感じることができた。

第十四話　その１７

魔理沙達もまた、咲夜がグランチャーと合流したということは分かっていた。
遠方に見えるグランチャーが醸し出す雰囲気というものが、明らかに変わっていたのである。
得体の知れない寒風のようなものが首筋を掠めて吹き抜けていくような感覚に、魔理沙は思わず呻いた。

「まずいのか・・・っ？」

ブレンのオーガニックエナジーはある程度安定してきたが、まだ完全とは言い切れない。
が、急いだ方がよさそうだった。
カグヤブレンだけにひとりでグランチャーの相手をさせるわけにはいかないように思えた。

「霊夢、無理にでもいくしかないぜ！」

そう呼びかけると、霊夢の返事もすぐに来た。

（分かった・・・きついだろうけど、ブレン、頼んだわよーっ！）

二体のブレンパワードが、咲夜と合流することにより、威圧感さえも発する程の膨大なオーガニックエナジーを取り戻しつつあるグランチャーを食い止めるべく、再び加速を始めた。

そうしてその後ろを、サトリブレンも追う。

魔理沙や霊夢以上にこの状況に焦っていたのは、グランチャーの眼の前にいた輝夜だ。

「こりゃやばいっ！」

咲夜が胎内に入ってから間もなく、グランチャーは眼に見えるほどの力を発揮させつつあった。

実際、胎内で膨張するオーガニックエナジーが、切断された左腕や右脚の断面、スリットウェハーの隙間から漏れだしているように見えていたのだ。

そうしてそれが、新しい左腕、あるいは右脚を形成しているようにさえ思えた。

のたうち回る蛇のようにうねる、不気味な腕だが・・・

輝夜は有無を言わさず、ブレンにチャクラ光を放たせた。

真っ直ぐに伸びた光が、グランチャーを刺す。

グランチャーの方も、あえて回避することなく、空中で静止したままそれを受けた。

回避する必要がなかったのだろう。

深紅の身体を突き刺すはずだったその光は、その周囲に張り巡らされる薄い不可視の膜に押しのけられ、放射状に拡散していくだけだった。

チャクラシールドだ。

先の、まだグランチャーに充分なオーガニックエナジーが存在していた時に張り巡らされていた強力な結界が、再び展開されていた。
熱量も衝撃も、一切グランチャー本体には通用していない。
その身体は、ぴくりと揺れることさえなかった。

「こ・・・ん、のぉーっ！」

半ばヤケクソになった輝夜は、がむしゃらにブレンに攻撃を続行させた。
ブレンバーをさらに連射させる。
続けざまに放たれた数発のチャクラ光が、吸い込まれるように、尚も動きを見せないグランチャーに浴びせられた。

そして、ほとんど何も考えず、あるいは、これだけ撃てば一発ぐらい効いてもいいだろうという思惑の上で放たれたこれらのチャクラ光は、意外な・・・しかし、輝夜が望んだ結果をもたらしていた。

何を無駄なことを。
とでも言いたげに、微動だにせず、数発のチャクラ光をシールドで受け止めていたグランチャー。
しかし、五発か六発目かの光が命中した時、チャクラ光とシールドの衝突により眩いスパークが発生し、透明だった膜が、まるでヒビが入るかのようにほんの一瞬だけ、チャクラ光と同じ緑色の光を映し出した。
あるいはそれが一瞬、ばっ、とオレンジ色に色彩を変えたかと思うと、その光はもう見えなくなった。

その様子に驚いたのは、輝夜以上に、グランチャーの胎内にいる咲

夜であった。

「なに・・・なにっ!?」

スリットウェハー越しに輝いたスパークの光の眩さに思わず眼を閉じたその次の瞬間には、彼女は突き上げてくるような振動に襲われていた。

続けざまに放たれたチャクラ光がさらに命中し、今度はより激しいスパークと共に、鋭い衝撃波をグランチャーに浴びせていたのである。

薄い鉄の皮でできた玉が内側から破裂したような、そんな金属質な騒音が鼓膜を揺らし、グランチャーの身体を吹き飛ばす。

グランチャーと合流した以上、後はブレン共を殲滅すればそれでいい。

怒りと共に、グランチャーに乗るがゆえの高慢さも取り戻していた咲夜にとってこれは、まさしく青天の霹靂と呼べるものだった。

が、身体の中の液という液を前の方に押し込まれるような感覚と共に、大きな驚愕と困惑が脳裏を満たしたその次には、それらの全てを一瞬でなぎ払うほどの冷静も取り戻していた。

慌てるようなことでも、焦るようなことでもない。

これも、充分想定できたことだ。

咲夜がその冷静さを取り戻す中で、輝夜もまた、グランチャーのこの意外な反応に驚きつつ、その一方で歓喜するような声も漏らしていた。

「やった、効いてるっ！？向こうも完璧じゃないってわけねぇっ」

そうして、咲夜同様、輝夜もこの状況をある程度は冷静に分析することができていた。

「片腕片足が吹っ飛んでるんだから、そりゃ、そうなるでしょうね」

どうやらグランチャーは、オーガニックエナジーこそ万全の状態を取り戻しつつも、身体の一部が欠損し、その力を安定させることができないようだ。

まぁ、それもそうだろう。

片手片足が吹きとべば、輝夜だってまともではいられない。

まぁ、四肢は愚か、頭を大根おろしのようにすりつぶされても、また元通りに蘇るようにこの身体は出来ているわけだが、精神衛生上どうか、という話だ。

永琳だって、『痛い』の一言ぐらいは漏らすはずだ。

そしてそれは、グランチャーも同じなのだろう。

苦痛に耐えながらでは、充分な実力を発揮することなどできないのだ。

チャクラシールドにしても、その防御力は凄まじいものがあるが、安定性は確保できていない。

続けざまに何発も攻撃を浴びせれば、一気に弱体化し、突き破れるかもしれなかった。

ブレンバーにオーガニックエナジーを纏わせての接近戦ならば、一撃で破れるかもしれない。

そして、咲夜と合流してもすぐにこの場から逃げ出さないところを見ると、どうやらそもそも逃げだすことができないようだった。

ブレンがどういう原理で推進し加速するのかは実はよく分かってはいないのだが、やはりそうするにしても、オーガニックエナジーの安定は必要なのだろう。
今の状態では、仮に戦闘には耐えることができても、こちらを振り切って撤退するほどの充分な加速ができないのだ。

となれば、チャンスはまだいくらでもある。

それに、グランチャーが苦痛を感じているというのなら、ひと思いに楽にしてやる方がいいだろう。
輝夜は胸中から驚きと恐れを拭い去った。
上手くいけば、カグヤブレン一体でも勝てる。

「よぉーし、それなら・・・！」

向こうにとっても予想外だったらしいダメージに大きくよろめくグランチャーを見据えながら、ブレンがブレンバーを振り上げる。
同時に、その銃身に薄いチャクラの膜が張り付き、刃を形成する。

そのまま真っ直ぐに加速したブレンは、グランチャーに決着の一撃を放つべく、その身体に肉迫していった。

しかし、その深紅の姿が眼前にまで近づいた、その時だった。

輝夜の視界には、真っ直ぐに突きつけられるソードエクステンションの銃口が見えた。
その鋭利な先端部が、まるでそのまま刺さらんとばかりに突きつけられる。
そこから何が起こるのかということは、アンチボディ同士の戦いに身を投じていれば、余程の馬鹿でなければ分かるだろう。

「うわぁーっ！？」

輝夜は咄嗟にブレンに急上昇をかけさせ、その場から退避させた。
その刹那ほど後、上昇したブレンの足元が、眩く、そして激しい光に埋め尽くされていた。

ソードエクステンションが放たれた光なのだろうが、明らかにそれは、普通のチャクラ光のものではなかった。
見た目としては、グランチャーの腕の装甲から放たれるブレードヒルトの光に近かった。
まるで稲光のような、不安定な形の黄色い光が、幾重にも枝分かれしてうねりながら、空の彼方目掛けて通り過ぎていく。
その様は、巨大な光の樹木が斜めに天へと伸びていくようにも見えた。
そしてそれは、明らかに今のグランチャーがまともではないということ認識をもたらし、そのことへの恐怖を輝夜に与えていた。

「・・・・・・んぃーっ！？」

血の気も失せるというのはこういうものか。
素っ頓狂な声を漏らしながら戦慄した輝夜だったが、悪寒を感じながらも、やはり冷静に考えることができていた。

やはり、今のグランチャーの状態は不安定だ。
しかし、不安定でこそあるが、その身に宿るオーガニックエナジーは、むしろ万全の状態よりも強くなっている。
チャクラシールドはそれで逆に破りやすくなったかもしれないが、攻撃面での脅威は、むしろ増しているかもしれなかった。

そしてそう考えると共に、あることも思い出していた。

妹紅が乗っていたあのグランチャーのことである。

彼の者は、妹紅の生命を吸いながら際限なしに力を増大させていき、その結果自滅したように見えた。

それと同じような印象を、このグランチャーからも感じるのだ。

輝夜は、結果がどうなろうとも、戦いの終わりが見えてきたような気がした。

グランチャーが放ったソードエクステンション・・・至近距離から放たれた、いつものチャクラ光とは明らかに一線を画する一撃を、ブレンパワードは寸前のところで回避していた。

グランチャーの上方へと逃れた月光の色の個体は、そのままこちらから距離を取ろうと背中を見せて離れていく。

スリットウェハーの中で、咲夜はその様子をじっと見ていた。

鋭利に細められたその眼、その瞳は、血の色のように真っ赤に染まっている。

積層する装甲を掴む指には、異様なまでの力が込められ、わなわなと震えていた。

それは怒りからくるものでもあったし、予想外の状況にうろたえてしまった自分自身への嫌悪からくるものでもあったし、それ以上に、もっと別の何かによる震えであった。

熱気・・・グランチャーの発する敵意と闘争心から来る熱気に包まれる中で、咲夜は低い声で呟く。

「・・・こちらを見下すようなことは、絶対にさせない・・・この者はグランチャー・・・この十六夜　咲夜の・・・」

言葉を連ねる中で、彼女の身体から、淡く光る波のようなものが滲み出て、胎内に溢れるオーガニックエナジーの空気の中をしばらくゆらゆらと漂うと、そのまま薄らいで消えていった。
それが、幾度となく繰り返される。
波のような光が咲夜の身体から離れたその傍から、また新しい光が彼女の身体から滲み出ようとしていた。
その波は、咲夜の身体の中に宿る彼女の生命力・・・オーガニックエナジーそのものであった。
可視の光となって漂うほどの膨大な力が、彼女の身体から発せられていた。
そして、発せられたその力が、どこにいくのか、その答えは明らかであった。

咲夜の身体と同様、あふれ出るオーガニックエナジーを身体の周囲に纏うグランチャーが、射ぬくような視線をカグヤブレンに向ける中で、彼女は吼えるように叫んだ。

「私のグランチャーだっ！」

その叫びに呼応するかのように、グランチャーがソードエクステンションを振りかざすと、退避するカグヤブレンを追うように加速した。

「こ、こいつぅっ？」

並々ならぬ雰囲気、というものがより一層増すのを感じた輝夜は、そのままブレンにグランチャーとの距離を縮めないよう加速をかけさせていた。
幸いと言おうか、予想通りグランチャーは充分な加速をかけられないでいた。
そのまま引き離すことはできそうにないが、間違いなく追いつかれることはない。

すでに互いの距離はある程度離れている。

これなら、例え向こうが先程の異様な光のソードエクステンションを放っても、何とか回避することはできそうだし、上手くいけばチャクラシールドでも防ぐことができそうだ。

魔理沙達も、もうそろそろチャクラエクステンションによる疲弊から回復して、こちらの援護に来てくれるはず。
ブレンはグランチャーから逃げる中で、徐々に加速する方向を彼女らのブレンの方向へと変えていた。
初めは妖怪の山に向かうような軌道だったのが、少しずつ歪曲していき、時期にUの字を描いて１８０。進路を変えることになるだろう。
そのまま、合流を目指す。

そんな思考を頭の中で展開する中で、ふと背後から追いすがるグランチャーの方へと眼を向けた輝夜は、再び戦慄した。

「嘘・・・ぅ、うぇぇっ！？」

大きくソードエクステンションを振り上げながら、こちらに向かって進んでくるグランチャー。

彼の者が握る銃身から、アンチボディの身の丈の二、三倍はありそうな程の巨大な光が伸びていた。
その刃もまた、安定することができていないのか、間欠泉から吹きだす熱湯のように、伸びると言うよりかは、先端部から吹きあげられていた。

しかし、安定しているとかそういうこと以前に、あんなものは見たことがなかった。
アンチボディの戦いの経験が豊富であるとは言えないが、少なくとも輝夜とカグヤブレンでは、何をどうやろうと、あれほどの光を放出できるわけがなかった。

そもそもあれは何だ？
光の・・・光の剣ではないか。

一体どれほどの量のオーガニックエナジーを放出し、そしてどれだけの戦闘における感性をもっていれば、あんな芸当ができるのだ。

などと、考え込んでいる場合ではなかった。
あんな大きな刃を振り下ろされれば、ましてや切りつけられれば、間違いなく無事では済まない。

「ちょ、ちょっとっ・・・ちょっとぉーっ！」

逃げるブレンパワードが怯えているのが、咲夜にはよく分かった。
彼女自身でさえ、怒りに駆られた自分とグランチャーが、これほど巨大なチャクラの刃・・・さしずめハイパーチャクラ斬りなどという芸当ができることに驚いていたのだから、ブレンの側からすれば

驚愕などというものではないのだろう。
が、咲夜はその事でブレンを嘲り笑う以上に、今はただ、眼の前の敵を倒すことだけを考えていた。

「くうぅぅ・・・っ！」

逃げるブレンの背中を睨みつけながら、彼女はきつく歯を食いしばる。
頬が強張り、噛み合わされた歯の力が少しずつ増し、ミシミシという音が聞こえるような気がする中で、刻一刻とその険しさを増す咲夜の表情に相応するかのように、グランチャーが振りかざすソードエクステンションの刃もさらに長大になり、その光はより鮮烈なるものに変貌していた。

咲夜は、その眼に自らの標的となる敵の姿をしかと捉える中で、唸った。

「そう・・・力と狡猾さは、私とグランチャーの中に確かに備わっている・・・・・・さすれば・・・勝つ！」

今まさに振り下ろさんとされているチャクラの刃から漲る光の強さが、限界にまで達しようとしていた。
それと共に咲夜は、腹の底に溜まっていたものを全て吐き出すように、叫んだ。

「頂くっ！」

そして、グランチャーが渾身の力で、輝く光の剣をブレン目掛けて振り下ろそうとした、その瞬間だった。

突如右斜め前方から二発のチャクラ光が飛来し、その内の一発はグランチャーのすぐ脇を掠めて通り過ぎ、もう一発は、彼の者の胸の辺りに直撃した。

「うっ！？」

依然チャクラシールドは展開していたため、ダメージ自体はほとんど通っていない。

しかし、多少の衝撃がグランチャーの身体を揺らし、僅かに傾けた。

それと同時に振り下ろされたチャクラ斬りの軌跡は、本来の位置からは少しだけ、しかし確実にずれてしまっていた。

その僅かながらのずれが、カグヤブレンにこの斬撃を回避する余地を与えることとなった。

必死に身体を横に・・・二発のチャクラ光が飛来してきた方向に逸らしたブレンのすぐ足元を、煌々と照り輝く高熱の刃が通過し、足の裏の装甲を僅かに焦がした。

そうして、スリットウェハーを透過して吹きつけてきたチャクラの波が、輝夜の身を異様な熱気で包む。

「南無三っ！」

呻きながらも彼女は、何とか敵の攻撃を切り抜けた自分とブレンの力量を自画自賛した気分になった。

多少装甲が焼けたようだが、生きているなら儲けものだ。

が、実際のところ、本当に自分の実力で回避できたわけではないということは分かっていた。

ほんの少しずつ、Uターンするように軌道をずらしつつグランチャーから離れていたことが、功を奏したらしい。
遅ればせながら、魔理沙達がグランチャーを射程内に捉えていた。
これで三対一だ。

グランチャーの攻撃を回避した輝夜達は、そのまま真っ直ぐに、接近するブレン達の方へと向かっていった。
グランチャーが、反撃とばかりにソードエクステンションを放ち、稲光が背後から迫るが、ここまで来てむざむざこのような攻撃に当たる輝夜ではない。

「へ、へっへへっ・・・やられるもんですか！」

上向きの射角で放たれたチャクラ光を、今度は下方向に逸れることで回避する。
巨大な黄色い光の枝が背後を通り過ぎていき、びゅんびゅんという奇妙な音響が、胎内で、そして輝夜の耳の奥で反響した。

が、その光は、見た目以上の威力と範囲を見せていた。

「うぅっ？」

チャクラシールド越しに、微弱な電流に触れたようなビリビリとした感覚が輝夜の全身を伝わり、駆け巡ってきた。
その電撃のようなものに身体が反応しているのか、身体が小さく痙攣し、俄かに熱くなる。
稲光から拡散してきたオーガニックエナジーが、シールドを透過してブレンの身に当たっているのだ。

「おっ？・・・おぉ・・・おぉぉ・・・っ！？」

不安定なオーガニックエナジーが生み出す異質なチャクラ光は、そこから体感する影響までも、異質なものだった。

全身を駆け巡り、スリットウェハーを掴む指の筋肉を痙攣させ、身体が電流に抵抗することにより発する熱さで全身から汗を流しながら、輝夜はとにかく無心でグランチャーを前へと進ませた。

やがてソードエクステンションの光は上空へと流れていき、輝夜とブレンも、チャクラ光が放つ電撃のようなものから解放された。
だが、痙攣していた身体にはまだ幾分かのしびれが残り、1℃か2℃上昇したように感じる体温も、すぐには下がらなかった。

「はぁー・・・な、なんなのさぁあいつ・・・っ」

呻きながら背後を振り返り、再び追いすがってくるグランチャーに眼を向ける輝夜。
それと共に、ようやく彼女とブレンは、魔理沙達との合流を果たした。

互いに急停止しつつ、一斉にグランチャーの方へと向き、迎撃する体勢に移る。
尚も彼の者はこちらに迫っている以上、暢気に長話をしている暇はなく、三人は簡潔に、必要なことだけを言い合った。

（大丈夫かっ？グランチャーはどうなったんだ？）と、魔理沙。

それに輝夜が返事をする。
「こっちは大丈夫・・・グランチャーの方は、強くなったけど、倒

せなくはないって感じね」

（そう）と、霊夢が簡素すぎる返事をする。

が、たったこれだけの会話が済めば、もうグランチャーはこちらの射程に入ろうとしていた。

（なら、どうにかしてやっつけるしかないってことか！）

魔理沙のその声と共に、一斉にブレンバーを構えた三体のブレンが、グランチャーに対して攻撃を開始した。

眼前から迫る数発のチャクラ光。

その密度は、単純に見積もってもブレン一体の時に比べれば三倍のものであり、となれば、咲夜達を襲う脅威も三倍増しと考えてよかった。

飛来する光を一発一発確実に回避しつつ、回避しきれない攻撃はチャクラシールドで受け流しながら、一気に敵陣に突撃する。

その中で咲夜は、自分の息が少しずつ荒くなっているのを、敵を倒すことに全神経を集中させている中でも、うっすらとだが感じていた。

しかし、その原因が、自らのオーガニックエナジーがグランチャーに吸収されているため、だということには気づかない。

というか、そのような可能性を考えてもいないのかもしれなかった。

彼女は自らの意思でグランチャーにオーガニックエナジーを与えていたが、その事がもしかしたら、咲夜の生命を奪うことになるかもしれないという事実を、本能的に認めていなかったのである。

「ふぅ・・・ふぅ・・・」

身体が俄かに熱くなり、胸の奥の辺りがじわりと痛くなってくる。
動悸が起こり、小刻みな荒い呼吸と共に生温い息が喉の奥から吐き出され、腕が何かに締め付けられているようだ。

四肢の半分を失い、オーガニックエナジーの安定性を失ったグランチャーが強力なチャクラシールドを展開し、これまでにない威力の斬撃を放つためには、膨大な量の生命力が必要であった。
それこそ、常人が同じ量を失えば、瞬時に意識朦朧となるほどのオーガニックエナジーが。
そして咲夜はすでに、それに準ずる程の力を一挙に失っていた。
すでに身体は疲弊しきってしまっている。

今の彼女を衝き動かすのは、ブレンに対する怨念と、誇りだけだ。
逆に言えばその怨念と誇りが今の彼女の全てであり、肉体を超越した力を生み出す原動力であった。

こちらを接近させまいとしているのだろうか。
三体のブレンは、チャクラ光を連射しつつ、後退を始めていた。
後ろ向きの加速であり、決して速い動きであるとは言えなかったが、充分な加速を得られない今のグランチャーでは、それでも追いつくことは困難だった。
相対的な速度はほとんど同じ、僅かにこちらが速いが、本当に僅かだ。
至近距離にまで接近できる見込みは少ない。

そして、互いの距離を一定に保つ中で、尚もブレンはこちらを攻撃してくる。

絶え間なく飛来するチャクラ光を回避し、時に受け流す中で、咲夜は言いようのない歯がゆさを堪えることができなかった。
自分とグランチャーが、手玉に取られているように思えたからだ。

「むざむざいいようにされたままで・・・いいわけがない・・・っ」

このままでは埒が明かない。
自分達がこのまま何もできずに負けることだけは、認められなかった。

「もっと・・・もっと力を・・・もっと強く」

咲夜が乾いた息と共に吐き捨て、グランチャーは、ソードエクステンションの銃身を眼前にかざしていた。
咲夜の鋭い眼と、グランチャーの眼が見つめる先が重なり合い、ふたつの殺意が混ざり合い、ひとつの意思を生み出していた。
それと共に、彼女の中にある残り僅かな生命の源も、グランチャーの中に宿る闘争心と混じりあって、ひとつになろうとしていた。

グランチャーから距離を取ろうと、後退しつつブレンバーを連射していた三体のブレン。
後退をかけていたため、今度は紅魔館に戻るような進路を取っていた彼の者達の眼・・・そしてその胎内にいる少女達の眼には、グランチャーがかざしたソードエクステンションの刃から、再び荒々しい光の刃が伸びるのが見えた。

「光の剣・・・何をする気だ・・・？」

魔理沙が呟く。
それに、輝夜が応えた。

（さっきあれにやられそうになったのよ・・・でも、この位置じゃぁどうにもならないでしょ、あれは・・・）

（そういうもんなの？）
と、霊夢が続く。

こちらのグランチャーとの距離は、大分離れている。
向こうがブレンバーの射程にようやく入るぐらいだ。
この距離では、いくら強力な斬撃を繰り出したところで、届くわけがない。
が、咲夜だってそれは承知だろう。
だとすれば、もっと別の、何かをするつもりなのか。

（気をつけた方がよさそうね・・・）

という霊夢の言葉には、頷いておいた。
「そうだな・・・」

それと共に、三体のブレンは、グランチャーの次なる行動を警戒し、後退とブレンバーの連射は続けつつ、身構えていた。

そして・・・

「いけっ！！」

発破をかけるような咲夜の叫びと共に、グランチャーがソードエクステンションの刃を横なぎに振り払う。
銃身が纏っていたオーガニックエナジーがそのまま巨大な光の波となって、ブレン目掛けて飛んだ。
空を震わせ、焼くような低い音が響き渡り、放たれた光波が押しのける風が熱風となりグランチャーの身体に浴びせられる。
それが、咲夜の頬をも掠めるように、彼女には感じられた。

三日月のような形となって飛んだチャクラの刃と共に、また、自分の中にあった生命力の何割かが失われたような気がした。

「冗談じゃないぜっ！」

魔理沙は驚嘆しつつ、ブレンにチャクラシールドを最大限の強さで展開させた。
密集したオーガニックエナジーが、薄い緑色、あるいはオレンジ色の光の膜を展開する。
眼に見えるほど厚く展開されたチャクラシールドなら、到底の攻撃は防げるだろうが・・・
この時の魔理沙にはすでに、これが到底な攻撃などではないということは分かっていた。

すぐ眼の前を黄色い光の刃が通り過ぎ、あらゆるものを焼き尽くすほどに熱波と、叩きつけるような衝撃がブレンを襲った。

「うぅっ！？」

肌が焼けるような熱気がその場に立ちこめたその次は、身体に空気

の塊が叩きつけられ、凄まじい勢いで後ろに引っ張られる感覚に襲われる番だった。

「くぅー・・・っ！」

眼をきつく閉じ、魔理沙は必至にスリットウェハーにしがみ付きながら、襲い来る熱波と衝撃に耐えた。

ブレンもまた悲鳴を上げ、全身のスリットウェハーがギシギシと軋む音を鳴らすのが分かる。

だが、そんな苛烈な一撃も永遠ではない。

ほんの数秒（魔理沙には何十秒にも感じられたが）を過ぎれば、チャクラの刃による熱気は、僅かな余韻を残してほとんど消え去り、衝撃波も過ぎ去っていけば、今度は思いっきり後ろに引っ張られてその力が一気に抜けて、身体が軽くなるように感じられた。

あまりにも軽くなりすぎて、逆にそのまま意識がどこかにいってしまいそうだ。

「う・・・くっは！」

そこを何とかこらえつつ、せき込むように息を吐き捨てた魔理沙は、きつく閉ざした眼を開くと、前方に眼を向けた。

今の一撃のためにグランチャーが立ち止まり、こちらが大分遠くまで吹き飛ばされたからだろうか。

彼の者との距離はさらに広がり、深紅の姿が、大分遠くに見えるようになっていた。

さすがにこちらのブレンバーも届かないほどの位置だ。

だとすれば、向こうだってさすがにこれ以上の攻撃はしてこれない

だろう。
例えしてきたとしても、威力は落ちる。
先程のように翻弄されることはないだろう。
もっとも、今の一撃がもう一度来ると言われれば、怖くないわけがないが・・・

そう考えながら、今度はスリットウェハーの映像を、ブレン視点のものから全天周囲のものに切り替えつつ、そこに映される周囲の様子に眼を配る。

カグヤブレンもまた一緒にグランチャーの放った刃の飛来を受けたのか、ほとんど隣にいた。

しかし、もう一体・・・紫の・・・ハクレイブレンがどこにも見当たらなかった。

「・・・っ？」

まさか、やられてしまったのか？
思わず慌てそうになる魔理沙だったが、すぐさま落ち着きを取り戻す。
霊夢と彼女のブレンが、そう簡単にやられるはずがないというのが分かっていたからだ。
自分達がこうやって敵の攻撃にやられている間にも、何か行動を起こす奴なのだ、霊夢は。

「まさか・・・」

魔理沙がそう呟いた瞬間だった。

遠方に佇んでいたグランチャーを、上空から続けざまに放たれた数発のチャクラ光が襲う。

完全な死角からの攻撃に、連続で直撃を受けた深紅の個体が、大きくよろめいた。

やはり、この間にグランチャーの頭上に回り込んで攻撃していた。

咄嗟にグランチャーの頭上を見上げ、チャクラ光を放った者の姿を目の当たりにした魔理沙だったが、次いで彼女は、眼を見開いて驚くしかなかった。

なんせ彼女の眼に見えたのは、霊夢が駆るハクレイブレンではなかったのだから。

「さ．．．さとりじゃないか！」

第十四話　その１８

身体の奥底から、じわりと熱がこみ上げてくる。

眼下に見えるグランチャーのその傷ついた姿が、逆にあふれ出んばかりの生命の力を出しているように見えた。
確かに彼の者は、今この瞬間、ひとつの生命として輝いていた。
戦いの中で死んでもなお、自らの誇りを守ろうと・・・

それが、グランチャーの・・・少なくとも、今この眼に映る深紅のグランチャーにとっての、生きるということそのものなのだ、と感じた。

その認識は、さとりの心の内にあった不安と葛藤を、全て吹き消していた。

そしてそれは、ブレンも同じだ。
未だ治りきらない・・・しかも、元々はあの深紅の敵によってつけられた火傷の傷も忘れるほどに、真っ直ぐな意思でグランチャーを見つめる彼の者の胎内の中で、さとりもまた、見開いた眼でグランチャーを、そしてその向こう側にいる咲夜を見据えながら、呟き、そして叫んでいた。

「私は以前、覚悟があると言いました・・・それが、オルファンを討ち果たす覚悟だけではないということを・・・今、お見せします・・・・・咲夜さん、私もお相手しましょう！」

さとりの声は、オーガニックエナジーの波を伝って咲夜の耳にも届いていた。

突如飛来した数発のチャクラ光に怯みつつ、すぐさま体勢を立て直し、上を仰ぎ見たグランチャーの眼に、こちらを見下ろす形で、ブレンバーの銃口を突きつける薄紫色のブレンパワードの姿が見えた。

咲夜は、反射的に吼えていた。

「古明地　さとりの声・・・ブレンパワード！機能不全のアンチボディ・・・私達を見下すのかっ！」

二体のアンチボディの間を繋ぐオーガニックエナジーの場のようなものが、咲夜の声もサトリブレンへと届かせていた。
そしてその声に対し、さとりがすぐに言い返す。

（見下すのではありません・・・その逆です。私は貴方と貴方のグランチャーを賞賛します・・・だからこそ、ずっと傍観していることができなくなりました・・・）

「賞賛っ？・・・なに・・・？」

（貴方のグランチャーは、生命を賭して、自分の成すべきことを成そうとしています・・・そして貴方は、そのグランチャーに自分の力の全てを捧げて、助けようとしています・・・それは、私達やブレンパワードにはない直向きさです・・・今それが、何も悪しきも

のではないということを知りました）

「・・・・・・」

咲夜はしばらくの間、さとりが何を言っているのか完全に理解することができず、口を微かに開いて、呆然とこちらを見下ろすブレンパワードを見返すことしかできなかった。
しかし、彼女の言いたいことが理解できると共に、また鋭い声でこう言い返していた。

「悪しき者ではないと分かって、それでどうするつもりなのっ？」

（全力で、お相手します）

さとりのその返事が聞こえた途端、咲夜はその眼を一瞬だけ大きく見開いた。
しかしその眼はすぐにまた細められ、彼女はスリットウェハーの中でほんの僅かに俯き気味になった。
そうして俄かに、装甲の溝にかけていた指を離し、そのまま両腕をだらりと垂れさがらせると、全身を微かに震えさせた。

二秒か三秒かそうしていると、静まり返ったグランチャーの胎内に、静かな笑い声が響き始めた。

「ふ・・・くっく・・・ふ、ふふ・・・ふふふ」

肩がその笑い声に呼応してひくひくと揺れ、それに伴って、四肢の震えも、振動というよりかは痙攣と呼べそうな小刻みな揺れに変わっていた。

そして、サトリブレンの視線を浴びる中で、一切の動きを止めていたグランチャーが、水を得たように再び動き出し、右手に持っていたソードエクステンションを上空に放り投げた。
そのままくるくると宙を舞い、ある程度上がったところで、自由落下に任せてグランチャーの下に戻ってきたその銃身を、器用に右腕の装甲に引っ掛け、取りつけた。
それにより、グランチャーの右手が自由になる。

それと同時に、咲夜は俯いていた顔を上げ、再び鋭い目線をサトリブレンに向け、そして、叫んでいた。

「なら私も、生意気なブレンパワード・・・それに応える！」

その叫びを合図にするかのように、垂れ下がっていた両腕も再び躍動し、ゆっくりと上げられ、力なく広げられた両手が、まるで幽霊がそうするというイメージの再現のように、ぶらぶらと咲夜の眼前に掲げられた。
しかし、その力なく垂れていた両手にも徐々に力がこもっていき、固く引き締まると、手の甲に腱を浮き出しながら、手のひらがブレンの方へと向けられていた。

そして、緩く曲げられていた腕が真っ直ぐに伸ばされ、刺すようにブレンに突きつけられると共に、両手のひらも、まるで花が瞬時に咲くかのようにばっ、と指を開いた。
それはまるで、両手に纏った何かを、ブレン目掛けて打ち出すような動きであった。

いや・・・実際、打ち出していたのだ。

咲夜の叫びが、胎内をこだまする。

「古明地　さとり、死ねよやっ！」

その叫びと共に、グランチャーもまた、ただひとつとなってしまった腕をブレンへと突き出した。

同時に、まるで突き出した両腕が空気の流れを変えたかのように、右腕全体から放出されたオーガニックエナジーが可視の光となり、手のひらの方へと収束していく。

そうしてそれが、指向性を持ったチャクラの波となってブレン目掛けて飛んだ。

コンセントレイト、《チャクラフラッシュ》というものだ。

全てを飲み込む氾濫した河の濁流の如く、緑色や、時に赤と黄色に染まったオーガニックエナジーの奔流がブレンに迫る。

「・・・っ！」

しかしさとりは、この攻撃も恐れなかった。

いや、恐れは確かにあったが、それを振り切って動いた。

ブレンが咄嗟に下方に回避し、迫るチャクラフラッシュから逃れようとする。

同時に、チャクラシールドも全開、かわしきれない熱量と衝撃をどうにか耐えようとする。

ブレンが燕が返るような素早さで下方に滑り下りたその一瞬を過ぎ

ると、彼の者の頭上に、オーロラのような、美しくも不気味でもある光が通過していた。
その美しさに反して、異様なまでの破壊力を持ち、生命力にあふれるからこそ逆に生命を破綻させる恐ろしさを持っていた。
今までグランチャーが放っていたチャクラの光に反して、この光はかなり安定していた。
光の中にこめられた暴力が、ある種計算されたかのように的確にブレンを襲う。

ここにきて咲夜とグランチャーは、さらにその力を上げたのか・・・？

「・・・ブレェーーーンっ！」

チャクラフラッシュの余波からくる熱波と衝撃波を必死に堪え、その名を叫ぶ中で、さとりにはひとつ分かっていることがあった。

この一撃を、生命力に溢れるからこそ、生命を破綻させると称した。
アンチボディでさえもそうだろう。
ならそれは、それほどの生命力を撃ち放ったグランチャーにも言えることではないのか？
行き過ぎたオーガニックエナジーを得たグランチャーがどうなるのか。
そして、それほどのオーガニックエナジーを与えた者がどうなるのか、分からないわけではなかった。

チャクラフラッシュが頭上を通り過ぎ、その猛威から解放されたと同時に、ブレンに応射のブレンバーを撃たせつつ、さとりは脳裏で言った。

――覚悟はある・・・それでも私達は美鈴さんのために、貴方を殺すわけにはいかないんです・・・咲夜さん。貴方は自分で自分の生命を終わらせようとしているんですよっ？――

ブレンパワードが放ったチャクラ光が迫る。
しかし、今の咲夜の感性とグランチャーの戦闘力は、より研ぎ澄まされ、高められているように感じられた。

「見えるっ！」

時間を操作しているわけでもないのに、飛来する光がスローモーションになっているように見えた彼女は、叫びながら、グランチャーに回避を命じた。
彼の者も、周囲がスローモーションになっている中で、自分だけが素早く動けるような感覚を感じていた。
そうなれば、ブレンが連射するブレンバーとて、一撃も当たらずに済む。
優々と、鈍(のろ)い動きで通り過ぎていく光の合間を縫うように回避し、攻撃をやり過ごすグランチャー。

自分達は今、さらなる力を得ている。
これがあれば、一挙に敵を殲滅することもできるはずだ。

引きつった笑みを浮かべて、咲夜は呟いた。

「これならいける・・・グランチャー、一気に仕留めましょう・・・」

が、その声のすぐ後だった。

「うぅ・・・ん・・・っ？」

咲夜の視界が突然、ぐらぐらと揺れ始めた。
別にグランチャーは何もしていないし、咲夜の身体も微動だにしていない。
だというのに、スリットウェハー越しに見えるブレンと、彼の者が撃ち出したチャクラの光の群れが、まるで水面に映る月明かりが揺れるように、歪に歪んでは、元に戻るというのを繰り返していた。

それだけではない。
突然、異様なほどに頭がぼんやりとし始めた。
一瞬、何も考えられずに、そのまま眠ってしまいそうになる。
それを必死に堪えても、今度は、ぴん、と伸ばされた両腕が一瞬だけ大きく痙攣し、再び折れ曲がると、それからはもう真っ直ぐに伸ばすことができなくなっていた。
筋肉が思うように動かなくなっていた
張りつめた両手の指も再び力を失い、眠る赤子の手のように、ゆるりと開かれる。。
両手に生える十本の指は、何事か、とかざされた彼女の眼前で、別の生物のようにわなわなと震えるばかりだった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

一体何が起きた・・・

ただでさえ荒かった呼吸もより一層荒くなる中で、そう頭の中で呟いていた咲夜は、スリットウェハーにもたれかかっていたはずの自

分の身体が、突然前のめりに倒れそうになったので、咄嗟に両腕を広げると、装甲の溝を掴んで倒れる身体を食い止めた。
が、ここにきて両腕が動いたのも、先程まで震えていた指で装甲の溝を掴むことができたのも、奇跡のようなものだった。

糸の切れた人形のように、頭ががくりとうなだれる中で、咲夜は愕然と見開かれた眼で、スリットウェハーの上に立つ自分の足元を眺めながら、うわ言のように呟くしかなかった。

「なにが・・・なに・・・・・・なにが起きた・・・」

そう疑問の声を繰り返す中でも、実は咲夜は自分の身が突如衰弱し始めたその理由は分かっていた。
ただそれを、認めたくなかったのだ。

脳裏に浮かび上がる、『限界』という言葉を、彼女は必死に否定した。

「ま・・・まだ・・・っ！」

気力だけで持ちなおそうと歯を食いしばるが、その瞬間だった。

突然背後から、強烈な衝撃が襲う。

「くぁぁ・・・っ！」

スリットウェハーにしがみ付くことで何とか転倒するのを堪えていた咲夜だったが、とうとう耐えきることができなくなり、身体が前へ投げ出され、床面にうつ伏せの状態で倒れ込んでしまった。

「な！・・・はぁ・・・っ」

さとりの乗るブレンの攻撃は、混乱する中でも全て見ていたし、グランチャーもどうにか回避できていた。
だが、この攻撃は何だ？
背後からの攻撃など、知らない。
魔理沙達に乗るブレンは正面にいたはずだ。

「ふぅ・・・く・・・うぅうっ」

這うようにして、胎内とその出入り口を繋ぐ僅かな段差にしがみ付き、上体を起こした咲夜は、改めて正面にいるはずの魔理沙のブレン達の姿を見た。

が・・・一体居ない。

以前こちらと互角の戦いをしていた濃紫のブレンがどこかに消えていた。

いや・・・
背後からのこの攻撃が、あの紫のブレンによるものなのだ。

「あっ！・・・」

再び背後から鋭い衝撃。
チャクラシールドがほとんど効果を発揮していない。
今度は上半身を後ろへと投げ出された咲夜は、尻餅をつくような形で背中をスリットウェハーに押しつけられた。

「・・・あ・・・あぁ・・・？」

身体からみるみる内に力が抜けていく。

どれほど否定しても、咲夜は、とうとう気力や誇りだけではどうにもならない時がやってきたことを、実感せざるを得なくなっていた。

サトリブレンがグランチャーの前に姿を見せた時は、無茶だと思ったが、彼の者の攻撃に続いてグランチャーを襲う別の光が見えた時、魔理沙は思わず胎内で叫んでいた。

「さとりだけじゃない・・・やっぱりだ！霊夢ーーっ！」

やはりハクレイブレンが、敵の攻撃の隙をついて背後に回り込み、反撃していた。

深紅のグランチャーの向こうに見える紫色の影が、今ほど頼りがいのある者に見えたことはなかった。

そして、グランチャーの方にも異変が生じていた。

動きが眼に見えて悪くなり、チャクラシールドも弱体化しているようだった。

ハクレイブレンの放つチャクラ光を回避することがほとんどできておらず、また、命中するたびに大きくよろめいている。

どうやら、いよいよ持って力が尽きたらしい。

反撃しようにも、その力すらなくなり、戸惑っているグランチャーの姿がよく見えた。

ここまでくれば、さすがに自分達がやっていることに罪悪感さえ感

じるほどだ。

なぶり殺しにするのはよくない。

霊夢の攻撃を、動きを止めるためのものだと思い、早くこちらも加勢して、終わらせた方がいいだろう。

それがグランチャーのためでもあるだろうし、こちらの良心にも、ある程度なら示しがつくというものだ。

「輝夜、いこうぜ！」

（わ・・・分かった！）

呼びかけつつ、輝夜の返事を聞いた魔理沙は、ブレンをグランチャーに向かって加速させていった。

「・・・はぁ・・・はぁ・・・ん、っく・・・っ」

最早立ち上がる体力も尽きたようだ。

グランチャーも、こちらを囲む二体のブレンからの攻撃を回避しようとしているが、どうしても回避運動が緩慢なものになり、上方と背後からの十字砲火を全てをやり過ごすことはできなかった。

何発かのチャクラ光が直撃し、その度に、強い衝撃が胎内を激しく揺らす。

のみならず、スパークが轟音を掻き鳴らし、その光で周囲を眩く照らしていた。

「くあっ！」

咲夜は、体重をかけてスリットウェハーにもたれかかりつつ、精一杯の力でしがみ付いていたため、これ以上身体が吹き飛ばされるようなことはなかった。
だが、大きな振動が発生するたびに、胃の底にあるものが掻きまわされて、喉元にまでこみ上げてきそうになる。

「う・・・うぅ・・・っ」

口を真一文字に紡いで、何とかそのまま嘔吐のひとつも催すのを堪える彼女だったが、グランチャーは今、紛れもなく窮地に立たされていた。
チャクラシールドが弱体化し、敵の攻撃が命中するたびに、衝撃と共に熱量が彼の者の身を襲う。
前方からは、さらに魔理沙達も接近している。
このままでは、四対一だ。

装甲の表面は炙られ、このままでは、その内部にあるスリットウェハーまで損壊してしまう。
それが進めば、待っているのは死、のみなのだ。

咲夜としては、それは認可することはできなかった。

まだこちらは、何もやれてはいないのだ。
まだ眼の前の敵の内の一体も仕留めることができず、グランチャーと共にビープレートを見つけることもできず。
幻想郷を滅ぼしうるオルファンを止めることもできていない。
さらに言えば、これは正直どうでもいいことだが、こちらを慕う早苗達の助けにだってなれず。
このままやられていいはずがなかった。

せめて、後一矢報いる。
死ぬのはその後でよかった。
そのためなら、咲夜は自分の生命すら蔑ろにする覚悟があった。

「まだ・・・まだ死ぬわけにはいかない・・・グランチャーっ！」

咲夜は、疲弊しきった自分の身体に、最期の活を入れた。
足の震えは止まり、スリットウェハーにしがみ付く指がその力を取り戻した。
彼女は、自らの意思だけで、死に体の身体を突き動かし、その場に立ち上がった。
そうして、未だ身体の奥底に眠っていたオーガニックエナジーの残梓をも、全て放出したのである。
グランチャーに最期の力を与えるために。

彼女は、振り絞るような声で、叫んだ。

「戦うのよ、グランチャー！誇りがあるのならば・・・っ！」

しかし咲夜は、あることを忘れてしまっていた。
美鈴がいなくなったあの日、グランチャーが彼女に語った謝罪の言葉を。
彼女をアンチボディの戦いに巻き込んだ事に対する、彼の者が初めてみせた、思いやりの良心を。

最期の最期、グランチャーの生命が終わろうとするその時、ふたりの心は僅かなずれの中で交錯し、完全にひとつとなることができないでいた。

だが、それは仕方がないことだった。
グランチャーだって、今の今まで、自分が咲夜とかわした約束のことなど、忘れてしまっていたからだ。
しかし、戦いの終わり、そして生命の終わりが見えてきた今、彼の者は鮮やかにそれを思い出していた。
そして、その約束を守るために、自らの誇り以上に、咲夜に対する誠実さを選択したのだ。

「・・・・・・・・・・っ！？」

咲夜は困惑した。

十字の射線を描いて飛来するチャクラ光が、相変わらずグランチャーを襲い、途切れ途切れに彼の者の身体に命中していた。
しかし、それを受けるチャクラシールドは以前弱体化したままであり、回避しようとする動作にも、俊敏さはなかった。

自分の身体が蘇るように立てなおしたというのに、それに反してグランチャーがみるみる力を失っていくのを感じて、咲夜は叫んだ。

「グランチャー、私の生命を吸え！・・・何故・・・何故そうしないっ？・・・くっ！」

叫ぶ中でも、チャクラ光はこちらを襲い、鋭い揺れが咲夜の身を襲う。
持ちこたえた気力が萎え、またしても身体が動かなくなりそうになるのを必死に堪えながら、咲夜は続ける。

「私は死なない、まだあの者達に一矢報いるだけの力はあげられる！このままでは、貴方は惨たらしく犬死にするしかないのよっ？」

そう叫んだ一瞬だ。

また背後に直撃。

この一撃は強力だった。

グランチャーの意思を通じて、自分の背中の肉が爆ぜたような感覚に、眼を見開き瞳孔が縮まり、三白眼になる咲夜。

執拗に背部に蓄積されていたダメージが、ついに装甲を吹き飛ばし、スリットウェハーにまで及んだ。

身体を覆っていた装甲が粉砕され、その奥にある積層された金属が成すブレンの肉とも呼べる部分が、剥き出しになってしまっていた。

このまま攻撃を続けられれば、胴体が真っ二つに裂けてしまう。

そうなれば、グランチャーといえど即死だ。

「ぐぅぅぅぅ・・・っ！」

眉間に皺を寄せ、見開かれた眼をきつく細め、砕けんばかりに歯を食いしばった咲夜は、大地が空へ向かって突き上げられようとしているのではないかと思えるほどの衝撃が過ぎ去ると同時に、いっそ眼元に熱いものを溜めながら、吼えた。

「どうしてーーっ！！そうしないっ！・・・私なんてこのまま死んでもいいじゃない！」

だが、咲夜は、自らのこの錯乱に対して、異様なまでに静かなグランチャーの返事を聞き、その言葉を、おうむ返しに呟いていた。

「・・・・・・それは、違う・・・・って・・・・」

「・・・トドメを――――――」

こちらが放ったチャクラ光がグランチャーの急所を捉えたのを確認した霊夢は、そのまま最期の一撃を浴びせようとしたが、そこを一旦堪えた。

咲夜を殺すなという、美鈴の言葉を一瞬忘れそうになってしまっていたが、それを思い出したのだ。

ここでトドメの一撃を加えてしまえば、グランチャーが爆発して、中にいる咲夜まで死なせてしまうだろう。

それを止めようとしたのか、あるいはもっと別の理由で止めようとしたのか、サトリブレンが降下してきて、チャクラシールドを展開しつつこちらの射線を遮る様に前方に躍り出る。

何にせよ、このまま霊夢が攻撃していれば間に合わなかっただろう。

オーガニック的な通信越しに、さとりの声が聞こえる。

（もうやめましょう・・・っ）

「ん、分かってる・・・・・・でも、動きを止めとかないとね」

これ以上の攻撃は咲夜も死なせる危険があるが、まだ向こうは動けるようだ。

動ける以上、油断するわけにはいかない。

完膚なきまでに叩いて動けないようにしておかないと、もし向こうがまた何かしてきた時に、笑い話にもならなくなる。

「・・・残ってる手足もちょん切ってやろうかしら・・・」

容赦なくそう言う霊夢に、さとりが戸惑うような口調で返す。

（やりすぎです・・・もういいんです、多分・・・）

「もういい？・・・多分～っ？」

（いえ、きっと）

遅ればせながら、魔理沙と輝夜のブレンもこちらと合流していた。

そのまま霊夢達と協働してグランチャーを攻撃するつもりだったのだが、突然ブレンが動きを止めたので、慌ててすぐ傍に来た。

「どうしたんだぜ？グランチャーへの攻撃は？」

と聞いてくる魔理沙には、さとりが応える。

（もういいです・・・これ以上攻撃を続けても、無理に苦しませるだけです）

「だけど、楽にしてやった方がいいんじゃないのか？」

（どうやって楽にできるんですか？手足をバラバラにして、あるいは頭まで切り裂いて、それでもまだグランチャーが生きていたら、どうするんですか？それこそ、地獄の苦しみを味わわせることになります）

それには、輝夜が返した。

（でも、まだ何かしてきそうじゃんよぉ）

その言葉には、さとりははっきりとこう返した。

（いえ、もう何もしてきません・・・見て下さい・・・）

「・・・・・・？」

何故さとりがはっきりとこう言ってのけるのか分からないままに、魔理沙達は、サトリブレンが指差す方向に眼を向けた。
そうすることで、さとりが確信する理由も、少しだけ分かった気がした。

「何だ？・・・グランチャー、どこに向かってる？」

思わず魔理沙が、うわ言のように言った。

グランチャーは、こちらに見向きもせず、どこかへ向かってゆっくりと進んでいた。
オーガニックエナジーのほとんどを失ってしまった彼の者の動きは、風に揺られる湖の波間を漂う、どこから来たのかも分からない青々とした落葉の一枚よりも弱々しいものだった。
あんな状態で、まだ何かできる余地があるのか、と聞かれれば、是（そうだ）、と応えることは到底できないだろう。

こんなグランチャーに対してトドメを刺せば、最早悪魔も超えてしまうように思えた。

「・・・・・・～っ」

霊夢は、苦々しい顔をして口を噤んで、黙りこむしかなかった。

もう、このまま放っておいた方がいいのかもしれない。
朱鷺子のブレンと同じような状態だ。

このままいけば、緩やかに眠る様に死ぬことになるだろう。
無理にこれ以上身体を引き裂いて死なせてしまうよりかは、マシなのだろう。
終わらせるよりも、終わる寸前のところで抑えるのが一番よかった・・・ということなのか？

だが何にせよ、グランチャーの生命はともかくとして、戦いは終わったのか・・・

そんな認識に次いで、今度は、グランチャーが一体どこに向かっているのか、という疑問が湧いてでてきた。

僅かに時は遡り、ブレンの攻撃が止んだその時分のことだ。

涙を流しながら、グランチャーを叱咤する咲夜。

「攻撃が止んだ・・・あいつら、私達をやれたと・・・グランチャー！お願いよ！後少し、後少し戦うだけでいいっ！後は何も言わない！」

しかし、彼女の心からの声に反して、グランチャーは、突然ブレン達とはまるで関係のない方向に、ゆらゆらと漂うように動き始めた。
その唐突な行動に、咲夜は思わず、先程までの荒い気持ちの高ぶりも忘れて、呟くような声を漏らすしかなかった。

「・・・グランチャー、なにを・・・？」

彼の者は、何も言わず、ただ真っ直ぐに・・・ふらふらと、微風にすら煽られてよろめきながらも、その眼は真っ直ぐにある一点へと向けて進んでいた。

「・・・・・・」

咲夜は、何故だか急に冷めてきた頭で、ブレンの見つめる先に何があるのかを考えた。
が、思考と呼ぶこともできないほどの一瞬で、結論は出た。
紅魔館だ。

彼の者は、紅魔館へと戻ろうとしていたのだ。

咲夜と共に、魔理沙達も、グランチャーが紅魔館へと向かっていることに気がついた。

（あいつ、また何で・・・）
そう呟く霊夢に、さとりが返す。

（自分のいるべき場所に、帰りたいんじゃないですか?・・・せめて最期の時だけは・・・・・私だって、自分が死ぬと分かれば、地の底に居たい）

（・・・本当の故郷とは別の・・・今いるべき場所に・・・?）
そう呟く輝夜には、どこか自分と重ねられるところがあるのだろうか。

それ以後、何か言う者はなく、ブレン達は、自分達の敵となる者が去っていくその様子を、じっと眺めていた。
その眼を通し、魔理沙もまたずっと、ボロボロになったグランチャーが遠ざかっていくのを見ていた。

「・・・・・・」

しばらくそのままでいたのだが、彼女は徐に、何も言わずに両手を頭の後ろの回すと、スリットウェハーに背中を預けながら、あぐらをかいて座り込んだ。
そうしてグランチャーから視線を外し、お尻を前の方にずらして寝そべるような姿勢になると、何を見るとも無しに、外れた視線をぼんやりと中空に向けた。
グランチャーのことは、もう見ていられなかったからだ。
彼女は、沈黙を破って、呟くような声でこう切り出していた。

「・・・戻ろうか、地底に」

（・・・でも、グランチャーが死ぬところは、見ておいた方が確実だと思うけど・・・）
さすがに現実的なことを言う霊夢には、さとりが返した。

（ならそれは、私が見届けます・・・他にいきたい人はいますか？）

その声に、霊夢が
（私はいい）と返し、輝夜が、
（私も・・・あんまりいい気はしなさそうだしね）と続き、最後に魔理沙が、悩みながらも、どうしても気持ちが後ろ向きになり、こう返事した。

「・・・・・私もいい。なら、さとりに任せた。私達は、もう地底に帰っとくよ・・・でも、一応まだ危険だからな、グランチャーがまだ何かしようとしたら、無理にやっつけようとせずに、すぐにあんたも戻ってくるんだぜ」

（はい）

さとりの返事を聞いて、魔理沙達と彼女のブレン達は、グランチャーの死を確認する役目はさとりに任せ、一旦地底へと戻ることにした。

※

戦闘中はいつまでも抜けだすことがなかった湖も、帰ろうと思うと、あっという間に出ることが出来てしまった。
妖怪の山も、段々と後ろの方に遠ざかっていき、小さくなっていく。
ただ黙して地底へと進むブレンの胎内に寝そべったまま、魔理沙はふと、右手のひらを眼前にかざして、眺めてみた。そうして、思い出した。

ブレンと初めて戦った日、その生命を奪った白いグランチャーのことだ。

彼の者を殺めた時も、多少なりは生命を奪ったことに対する恐ろしさのようなものは感じたが、今回はそれがより一層強かった。

前者の時は、ブレンバーの一振りで粉々に砕け散ったのだが、今回のグランチャーは、こちらの手でバラバラになっていく様子をまざまざと見せつけられたのだ。

本当にこのまま戦っていいのか？
という疑問さえも出てきそうなほどだった。

だが、戦って、倒さなければブレンの方がやられる、ということも分かっていた。
だから戦った、そしてその生命を奪った。

だとすれば、グランチャーが傷つく様子を見て苦悩しながらも、結局戦ってしまうことは、ある意味で一番悪しき精神なのではないか？
先にも考えていたことではないか。
殺そうとする相手に同情するのが、いい事なのか？

「・・・私達は、何もかも中途半端なんじゃないか？・・・やっぱり・・・」

そう呟きながら、しばらくの間、思考の海に没入していた魔理沙は、ふと、こんなことを呟いていた。

「妖怪退治なら、相手を殺すこともあるだろう・・・でも、だからって、何も考えずやってしまうような奴に・・・あたしはなりたくない。そんなの、人間のやることでも、妖怪のやることでもないんだ・・・・・・それなら・・・」

魔理沙は、どうして自分達がグランチャーが傷つく様子を見て心痛めるのか、その根本的な理由を考えた。

そうしてそれが、間違っているものではないということを確かに感じた。

「・・・グランチャーだって同じだ」

グランチャーもひとつの生命。
その生命が消えようとする様を無条件で悼む心の、どこにも悪しきところはない。
いくら敵であろうと、グランチャーの生命そのものは、認めたい。
何も考えずに、彼らを殺せるような者にだけは、絶対になってはいけない。

その上で、戦うための確かな覚悟を決める。

魔理沙は、固く眼を細めると、眼前に掲げた右手のひらを、もう一度頭の後ろへと回した。

今、再びグランチャーを殺めたという確かな感触に熱を帯び、しっとりと汗ばんでいた手のひらを。

その感覚が、自分達の中の何かを、また少しだけ改めたように感じる中で、魔理沙は唐突に、そういえば、美鈴のことをすっかり忘れていたことを思い出した。

しかし、今更探しにいくのも難だ。
彼女は彼女で、また勝手にやっていくことだろう。
一旦こちらを追って地底に戻るならそれでよし、そのまま紅魔館に居続けるなら（居続けられるなら）それもよしだ。
この際だからもう、美鈴のことは放っておくことにした。

もしかしたら、さとりが拾って、なんなりと折り合いをつけてくれるかもしれない。

第十四話　その１９

ブレンパワード達は、もうどこかに去っていくつもりのようだ。
その影は遥か遠くに離れていき、やがて見えなくなろうとしていた。

そんな中で、さとりの乗る薄紫のブレンだけは、こちらの後を距離を置いてついてきていた。
攻撃するようなつもりはないらしい・・・それで、一体何のつもりかは知らないが・・・

それ以上に咲夜は、あるたった一つのことを知りたくて仕方がなかった。

グランチャーが何故、こちらのオーガニックエナジーを吸い取ることをせず、戦いを放棄して紅魔館に戻ろうとしているのか。

哀しいことだが、グランチャーは恐らくもう助からない。
このままゆるゆると死んでいくことになるだろう。
ブレンパワードから逃げたところで、そうなることに変わりはなかった。
なら、逆に派手に生命を散らして敵と戦い続けてもいいのではないか。
誇りを重んずるこのグランチャーなら、きっとそうすると思っていた。
しかし実際は・・・

不思議と気分が落ち着いていた（興奮する体力も尽き果てたということもある）咲夜は、全身の力を抜いて、スリットウェハーに眠るようにもたれかかりながら、座りこんでいた。
そんな中で、これから死にゆくグランチャーのことも、不思議と受け入れられていた。
だからこそ、ぼんやりとした、手をすり抜けるような哀しいが心を満たしていた。

大分紅魔館から離れていたらしい。
グランチャーが進む速さがゆっくりしているというのもあるだろうが、もう十分か二十分は進んでいるが、まだ館は見えて来なかった。
足元には静かに揺れる湖があり、その水面と共に揺れる陽の反射光がある中で、咲夜は静かに語りかけていた。

「このまま逃げてしまったんで、よかったの？・・・貴方のことだから、悔しいでしょう」

グランチャーはそれに、『確かに悔しい』と応えた。

「だったら戦えばよかった・・・どうしてあの時、私なんかに気を使って・・・」

疑問を口にする咲夜に対し、グランチャーはまず、『忘れたのか』と言い返し、それから彼女の問いに応えた。

それは、咲夜に、彼女の中にある記憶を呼び覚まそうとする声だった。

いつか咲夜がグランチャーに語った言葉。
それを今、彼女も思い出すことができた。

「そうか・・・」

咲夜は思わず呟いていた。

だが、次いで彼女は、苦々しく眼を閉じ、口をつぐんで、閉じた唇を微かに震わせていた。

そうして、閉じた眼を微かに開いて、絞り出すように震える唇を動かして呟く。

「・・・貴方は、私を死なせてしまうことを恐れていた・・・そして私は、死にたくなければ勝手に逃げると言った・・・貴方が死にゆくその時までは一緒にいると・・・」

そうしてまた口を閉ざした。

思いもよらなかった。

実を言うと咲夜にとっては、あの時の言葉は、その場の流れで言ったような言葉だったのだ。
あの時の彼女は、そもそもグランチャーが死ぬことなどあり得ないと考えていたから。

だから、いざ本当に死ぬかもしれないという時のことなど、考えていなかった。
そして実際にグランチャーの生命の終わりが近づいた時、グランチャーは咲夜との約束を・・・彼女自身にとっては約束でも何でもなかった約束を果たそうとしたのだ。

死ぬその時までは一緒だということは、逆に言えば、死の瞬間までは一緒にはいない・・・つまり、共に死ぬことはない、ということだ。
グランチャーはそれを実践した。

咲夜は、もう一度泣きそうになっていた。
何の気なしに語った言葉が、グランチャーにとってこちらが考える以上の意味を持っていることが逆に哀しかった。
今まさに彼の者が生命を終えようという時に、互いの心がすれ違っていたことに気づいたのだから。

その一方で、こちらの些細な言葉でも、素直に聞き入れ、それを実行するグランチャーの純粋さと直向きさ・・・何より誠意が嬉しかった。
こちらのことを心から信じていたということなのだから。

しかしそれが、余計にグランチャーの心を裏切ったような気がして、哀しみを助長していた。

そして彼女は、そんな哀しみをさらに深くするだけだと分かっていても、グランチャーに対し呼びかけるのを止められなかった。

「・・・だけど、グランチャー・・・あの時の言葉は、忘れてくれてよかった・・・私は本当は貴方と死ぬことを恐れてなんていなかった・・・」

吐き捨てるように吐露する咲夜。
しかしグランチャーは、彼女以上に彼女の心を見透していた。

彼の者は言う。

それは嘘だ。
自分の心に、もう一度聞けばいい。

そしてこう語るなかで、彼の者にはもうひとつ分かっていることがあった。

咲夜とグランチャーの絆は固い。
それでも彼女の生命はグランチャーだけのものにはならないし、ひいては咲夜ひとりだけのものでさえなかった。

「・・・・・・」

グランチャーの言葉に何も言い返すことができず、咲夜はただ、ぼやける頭で自分の心をもう一度見つめた。
そして、自分の生命が誰のものなのかを考えた。

その答はすぐに出てきた。
当然だ。自分自身の心なのだから。
咲夜は、分からなかったのではなかったし、忘れていたのでもなかった。
分かっていたが、それを受け入れたくなかっただけだったのだ。

思えばこれまでの咲夜は、ずっとそうだった。
戦いの空気に囚われて、大事なことに気づいていながら、それを受け入れることを拒み続けていた。
分かりきっていたことを・・・
そんなことで、本当の本当にグランチャーと意思をひとつにすることは、できないはずだった。

彼の者の直向きさは、全てを受け入れた上で、戦うことだった。
その心と、ずっとずれたままでいたのか・・・

そのことが、今になってようやく分かった。
というか、そのことを実感せざるを得なくなった。

そして、自分の生命が誰のものなのかということも、簡単な話だった。

咲夜の生命は、咲夜自身のものだ。
しかし、グランチャーのものだ。
そしてまた・・・

咲夜は、目頭に込み上げていたものを抑えることができなくなり、大粒の涙を流しながら、震える声で言った。

「済まなかったわ、グランチャー・・・私は、やっぱり・・・死にたくない・・・・・死ぬのが、怖く・・・怖、かった・・・」

そうして、鼻をすすり、大きなため息をひとつついてから、続けた。

「それに、私には、紅魔館の皆がいる・・・私が貴方と生命を共にすれば、貴方は満足かもしれないけど・・・お嬢様も妹様も、パチュリー様も、こあも、メイド達も・・・美鈴も、皆は哀しむ・・・貴方はそれを・・・それが分かって・・・」

咲夜はこのことでも、グランチャーと心がずれていることに気づいた。

グランチャーは・・・少なくともこの深紅のグランチャーに関しては、利己的で、ごく狭い絆を重んじ、それ以外の他者には心を許さないものだと思っていた。
確かに、実際そうなのだろう。
だが、その狭い絆の中には、紅魔館の者達も含まれていたのだ。
グランチャーとしては、それほど面識があるわけでもないはずの者達も。
それは何故か・・・

咲夜が紅魔館のことが好きだったからだ。

だが・・・

咲夜は、流す涙を止める術(すべ)も知らないままに、ひたすら続けた。

「でも・・・貴方が死んだって皆が哀しむ・・・私だって哀しい・・・私を生かすために、貴方が生命を落とすなんて・・・」

時分のこの言葉が的外れなものであることは、咲夜自身よく分かっていた。

グランチャーが死ぬことは、彼の者がブレンパワードの奇襲を受けたその時から半ば決まっていたことだし、咲夜が合流していた時にすでにその身体の半分近くを失っていた時点で、避けられないものとなっていた。
彼女の生命を全て吸い付くしたところで、グランチャーが生き残るわけでもなかった。

それが分かっていながらこう吐き捨てる咲夜の声は、単(ひとえ)に自分とグランチャーの無念を、言葉に表すことで和らげようとしているだけだった。
が、そんなことをするだけ無駄だ。
むしろ、グランチャーのことを責めているような気がして、余計に虚しくなるだけだった。

「・・・分かってる・・・・・・分かっている・・・」

自分にグランチャーを批難する権利などないことを承知だった咲夜は、そもそも自分がグランチャーから離れなければこんなことにはならなかったという無念を噛み締めながらも、もう過ぎたことを悔やむのはやめようと考えた。
考えたところで、やめられるとは思えなかったが・・・

それでもせめて、もっと違うことを考えようと思った。
もう、雪辱を晴らすこともできない。
誇りも砕けて、何処かに消えた。

それでもグランチャーにはまだ、戻るべき場所はあった。

「・・・・・・」

少しだけ、流れる涙が少なくなったように感じた咲夜は、どこを見るともなく前を見て、覇気と共に生気の抜けた穏やかながらも虚ろな眼をして、黙り込んでいた。

そんな中で、グランチャーがふと呟いていた。
彼の者もまた、今はもう、戦いだとか誇りは忘れて、ゆっくりと近づいてくる死を待つだけの身となっていた。

ただ、今は、自分のいるべき場所にいたいのだ。

咲夜も、静かに返していた。

「・・・そう・・・貴方も紅魔館に帰りたいのね・・・」

静けさがその場を包みこみ、グランチャーの胎内に、哀しいことだが、涼やかな空気が満たされていた。

そんな中で咲夜の眼にはようやく、紅魔館の建っている半島の影が見えてきた。

さらにしばらく、時間の流れを忘れて宙を漂い、湖を抜けて陸地の上へと出ると、生い茂る森の木々の向こうに、やっと自分達の行くべき場所が見えてきた。

その極彩色に彩られた姿が、咲夜には何故だかとても懐かしいものに思えた。
ほんの少しの時間しか離れていなかったはずなのに。

もしかしたら、懐かしさと感じているのは、もっと別の気持ちなのかもしれない。

その、身体の芯まで通り抜け、悔恨に固まった心を溶かすような何かに、咲夜は思わず呟いていた。

「・・・私達の紅魔館・・・その色は、貴方の身体だって染めている・・・生命を示す血の色で・・・・・・後少しよ。帰りましょう」

だが、その言葉と共に、グランチャーが湖を抜けてすぐの湖畔の上空を過ぎようとした、その時だった。

ガクン、と、彼の者の身体が大きく揺れた。

「うぅ・・・」

その振動に揺らされ、またしても頭がうなだれて俯いてしまった咲夜は、目を見開き、戸惑う声を漏らした。

「な・・・何・・・っ？」

その声に応えるように、グランチャーは俄に高度を下げ、眼下の地面に降りようとしていた。

風が下から上へと吹き抜けていくような音が、鼓膜を揺らしている。

その音だけでも彼女は、自分の身体が緩やかに落下している実感を持つことができた。

咲夜は思わず大声で呼び掛けようとしたが、オーガニックエナジー

を失った今の状態では、ロクな声は出なかった。

「グランチャーっ・・・どうして高度を・・・」

が、やはりと言うべきか。

咲夜は、質問した側から、グランチャーが何故降下するのか分かった。

そうしたくて降下しているのではなく、勝手に降下してしまっているのだ。

残り少ないオーガニックエナジーもついに尽き果て、自力で前に進むことすらできなくなっていた。

高度を維持することすらできず、そのまま重力に引かれて落ちるしかなかった。

「・・・・・・」

茫然とし、その場で固まる咲夜。

もう進めないのか？

ようやく紅魔館も見えてきたというのに、あの場所に帰ることもできず、

このままグランチャーの生命は終わるというのか？

いや、まだ・・・まだだ。

咲夜は、精一杯力強い口調で、もう一度呼び掛けていた。

「グランチャー、私の生命を吸って・・・・・・全てじゃない。死ななければそれでいいから、私達の館に帰るまでは・・・・・・これは頼みでも命令でもない・・・」

尚も高度を下げていくグランチャーが、とうとうその身を地面につけ、動きを止めようとする。

それでも彼の者は、続く咲夜の言葉に耳を傾けてくれていた。

「新しい約束にする・・・グランチャー。貴方は、紅魔館でその生命を終えよ」

頑なに咲夜の生命を吸いとることを拒んでいたグランチャー。
しかし、咲夜と新しい約束を交わした今、彼の者は、彼女の中に宿る残り少ない生命の力を己のものとし、紅魔館に帰るための最後の一歩を踏み出すための力を得た。
後は、実際にその一歩を踏み出すだけだ。

陸というより、湖と陸の間と呼べそうな湖畔の上で膝をついたグランチャーは、力を振り絞って、再び立ち上がろうとしていた。
水気を持った柔らかい土にめり込んでいたその固い足が、さらにその重みで深く沈み込んでいく。
折れまがっていた膝が、軋む音を鳴らしながらも、弱々しくも確実に伸ばされていた。

だが、彼女自身満身創痍であったため、咲夜が与えたオーガニックエナジーも所詮は雀の涙だった。
あるところまで伸びた膝が、それ以上動いてくれない。
天を目指すように上がっていた頭も、まるで見えない天井に遮られ

ているかのように、その先にまで至ることができなくなっていた。
立ち上がるだけでもやっとだったのだ。
こんなことでは、紅魔館にまで戻ることなど・・・

「・・・・・・っ」

言い様のない歯痒さを噛み締めながら、最早何も言うことができず、息を呑むしかない咲夜。

しかし彼女は突然、スリットウェハーを軋らせて、ほとんど震えているばかりだったグランチャーの上体がぐっ、と持ち上がるのを感じた。

だがそれは、グランチャーの、すなわち咲夜の力によるものではない。
もっと別の力により、グランチャーが持ち上げられていたのだ。

咲夜はその力が何なのか、すぐに分かった。

スリットウェハー越しに、薄紫のブレンパワードが、グランチャーの腰の辺りを支えているのが見えた。

咲夜は反射的に、そうするだけの体力もないというのに、叫んでいた。

「ブレンパワード！何をする、私達に止めを刺しにきたのっ！？」

その声に、オーガニックエナジーの波を伝って、このブレンパワードに乗る者・・・さとりの返事が聞こえてきた。

（・・・違います。紅魔館に帰りたいのでしたら、お手伝いします）
「敵の施しなら、受けない・・・っ」

（今はもう、敵ではないはずです）
「・・・ついさっき、私の相手をすると言ったのを忘れたのか・・・っ？」

（それも、過ぎたことです・・・戦いが終わったなら、もう敵とか、そんなことは考えなくていいじゃないですか・・・）

続くさとりの声を聞いて、咲夜はしばらく黙りこんでしまった。
しかしそれは、彼女の言葉に納得したからではない。

しばしの沈黙をすぐに破って、グランチャーの身体を支えるブレンパワード、そして、その内に宿るさとりに対し、低く唸るような声で言う。

「・・・手伝う・・・？その振りをして、こちらを仕留める気でいることなど、見抜いている・・・」

しかしその声に怯むことも、たじろぐこともせず、さとりは尚も返した。

（私は、どんな状況にも臆せず、貴方のことを信じ、戦い続けたグランチャーに、敬服しているのです・・・そのことを信じてくださらなくても結構です。不意打ちを仕掛ける気なのだと考えてくださっても構いません・・・それでも、私は個人的な感性に任せて貴方を助けるんです・・・やめろと言っても、やめませんからね）

「・・・く・・・っ」

無理矢理振り切ろうにも、当然そんな体力だってグランチャーにはない。

結局、このブレンパワードになすがままにされるしかないということだった。

苦々しい声を吐き出しながら、歯を喰いしばってブレンから顔を逸らす咲夜。

しかしそんな彼女の険しい表情は、不思議と少しずつ和らいでいた。

不服そうな色はそのままに、ブレンに対して向けていた憎しみだけはどこかに消えていた。

戦いだとか、そういうものはもういい。

そんな言葉が、少し前の咲夜なら信じられないほどすんなりと受け入れられていた。

相変わらず眼をきっと細めながらも、もう一度ブレンの方を見た咲夜は、さとりにこう呼び掛けた。

「・・・好きになさい」

（・・・ありがとうございます）

「貴方が勝手にやることなら、感謝することはないでしょう・・・」

ブレンのことを認めたわけではないし、余裕さえあればすぐにでも返す刀で攻撃しようと考えていたが、それもできないので、仕方がなく、という心境だった。

ただ、敵の情けを受けることもやむを得ない、と考えるだけの余裕を持って応えた咲夜。
彼女とさとり、そしてグランチャーとブレンは、力を合わせて紅魔館にまで辿り着くべく、動きだした。

（私のブレンにばかり頼らないでくださいね・・・咲夜さん達も頑張ってください）

という声には、
「貴方が来なければ自力で戻っていた」
と応える。

グランチャーの身体を支えて立ち上がったブレンは、そこから共に宙に飛び上がるべく、足を踏ん張り、オーガニックエナジーを集中させていた。

（いきますよっ）

というさとりに、
「ん」
とだけ応えて、咲夜もまた、グランチャーに残り僅かなオーガニックエナジーを集中させた。

（せい・・・のっ）
「上がれ・・・」

息を合わせて（合わせたつもりだが、実際はそれほど合っていない）、オーガニックエナジーを推力として噴射し、二体のアンチボディ

の身体が、ゆっくりと浮き上がった。

そのまま少しずつ高度を上げていき、やがて、先程グランチャーがいた位置にまで戻ることができた。

視界と共に、地に落ちていた咲夜とグランチャーの心も、ようやくふりだしに戻ってきたのだ。

グランチャーのオーガニックエナジーでは、せいぜいその場に浮き上がって落ちないようにするので精一杯といったところだが、サトリブレンがいればそれで十分だった。

浮き上がって止まっているなら、それを押すだけでも前に進める。

（それじゃぁいきましょう・・・大丈夫ですね？）

「聞く必要はない」

咲夜の返事と共に、サトリブレンはグランチャーを支えたままゆっくりと前身し、紅魔館へと向かった。

戦いの中でまさしく精根尽き果てた状態になっていた咲夜だが、ほんの少しずつ、体力は戻ってきている。

その戻ってくる体力をグランチャーに分け与えていけば、また動けなくなるようなことはなさそうだった。

グランチャーに気をつかっているのか、ブレンが進む速度はそれほど速くはない。

しかし、逆にあまりに速度を出し過ぎるとグランチャーの身が持たないため、咲夜としてはさすがに文句を言うことはできなかった。

しかし、こちらを追い詰め、敗北させ、あまつさえ死の運命に陥れた相手の施しを受けているという醜態は、やはり、忘れようにも忘れきれるものではない。

戦いがどうとかそういうこと以前に、一個人として無性に癪に障る

気分だった。

だからこそ咲夜は、紅魔館に戻る途中、さとりが
（大丈夫ですか？）
と呼びかけてきても、応えるようなことを一切しなかった。

さとりも、グランチャーに乗る咲夜の無念はよく分かるし、敵であった者にこのようなことをされることが恥であると考える気持ちだって、理解できないものではなかった。
だからこそ、咲夜に対して何か言うことは止め、とにかく黙々と、彼女達を紅魔館へ送り届けることにした。

すでに湖畔の上空からでもその館の姿はうっすらと見えていた。
そうなれば、十分ほどの時間で館の近くにまで到達することはできた。

さとりとしては物珍しい（まじまじと見渡すような余裕はなかったが）森林の上空を抜け、その先にある広大な煉瓦造りの塀の、外と内を隔てる大きな門を越え、地霊殿のまだ何倍かの大きさがありそうな、威厳溢れる建造物に眼を向けながら、敷地の中へと入る。

その時、ようやく今まで黙りこんでいた咲夜の声が聞こえてきた。

（正面扉のところまで連れていって・・・あそこに、バルコニーが見えるでしょう）

それに、
「はい」
と返事しつつ、ブレンと共に、グランチャーを言われたところまで連れていく。

紅魔館の、赤々とした（真っ赤というよりかは、暗褐色と呼べそうな、どことなく恐ろしさを放つ感じの色だ）屋根がすぐ眼の前に見えるようになったところで、咲夜は続けて言った。

（もういい。降ろして）

「・・・はい」

さとりは、咲夜に言われた通りに、ブレンをゆっくりと地面に降下させていった。

そんな中でだ。
さとりの眼には、館の玄関から、バルコニーの下をくぐって出てくるいくつかの人影が見えた。

こあとパチュリーと、数人のメイド達だ。

さとりが知ることではないが、こあはブレンとの戦闘を始めたグランチャーを助けるべく、館の中を駆け回っていた。
戦闘のことをレミリアに伝え、グランチャーを助けにいくよう嘆願したのだが、いかんせんその時は真昼だった。
吸血鬼であるレミリアが今無理に外に出れば、逆に彼女の方が危険だ。
なくなくこあは、グランチャーのために珍しく外に出る気になったパチュリーとメイドの精鋭を連れて、湖に向かうことにした。

が、こあが混乱していて動きが悪かったからか、いざ実際に館から出ることができたのは、戦闘が始まってから半刻近く過ぎた後だった。
さとりが彼女の姿を見ている以上、戦いは当の前に終わっていた。
外に出た彼女らの眼には真っ先に、降下してくるブレンパワード・・・そして、その者に支えられたボロボロのグランチャーの姿が映った。

さとりの眼には、眼を見開き、口元に手を当てて絶句するこあ、無表情ながらも、まるで何かに引っ張られるように数歩後ずさりしたパチュリー、
各々に驚愕を表しているメイド達が見えた。
今しがた助けにいこうとしていたグランチャーが、傷つき、敗北している姿をその眼に見てしまったわけなのだから。

「・・・・・・っ」

そんな彼女らの視線が一斉に浴びせられるものだから、さとりは息を呑み、逃れるように眼を閉ざすしかなかった。
しかし、彼女の持つ第三の眼は、望まぬとも、さとりにこあ達の驚愕を朧気(おぼろげ)ながらも伝えていた。

とにかく、グランチャーを抱えたブレンがそのままこあ達の視線を浴びながら地面に降り立ち、それと共に、グランチャーの、一本だけになってしまった足も大地を踏みしめた。

そのまま、ゆっくりと彼の者の身体を下ろして座らせる。

スリットウェハーを通してさとりは、身体を支えるブレンの手のひらに、グランチャーの背中の重みがずしりとかかるのを感じた。

張りつめていた糸が切れるように、グランチャーはほとんどの力を失い、死に体に戻ったのだろう。

このまま手を離せば、上半身が倒れて、背中を地面に打ち付けてしまう。

そうならないよう、彼の者の身体を慎重に地面に寝かしつけてから、ようやくブレンはグランチャーから手を離し、その場に立ち上がることができた。

その間もさとりは、恐れるように眼を閉ざしていたのだが、次いで聞こえてきた咲夜の声で、その眼をゆっくりと開くことになった。

（もういい・・・・・・感謝はする。しかしもう去りなさい）

その言葉に、さとりは恐る恐る応えた。

というより、もごもごとした口で濁る言葉を発した。

「で・・・でも」

（満足でしょうね）

「え・・・？」

（自分達の敵をこうまで完膚なきまでに叩きのめして、その相手に傲慢にも手を貸して・・・優越感も一入（ひとしお）・・・）

「・・・それは違います！」

（分かっている、言い過ぎた・・・しかし、貴方が何を言おうと、貴方達は私のグランチャーを殺めた）

「・・・・・分かっています・・・申し訳ございませんでした・・

・」

（そうやって当たり前のように謝るのが、気に入らない・・・）

「・・・・・・っ」

最早何を言っても意味はなく、何かを言う権利もないことを実感するさとりの眼前で、グランチャーの股間部の装甲がゆっくりと開いた。

そうしてすぐに、その奥から、咲夜がふわりと浮き上がりながら出てきて、グランチャーの左太股の装甲の上に降り立った。

それから何をするかと思えば、咲夜はただ、見た。

スリットウェハーを透過させ、その視線をさとりに差していた。

眼の奥から放たれる光に射抜かれ、さとりは思わずびくりと身震いしていた。

こちらのことを拒絶し、今すぐにでもこの場から去って欲しいと思う。

そんな気持ちを吐露するかのような鋭い眼差しだった。

だがその一方でそんな心境を宿す紅く燃える虹彩の奥には、大なり小なりの好意があるようにも見えた。

実際咲夜の心は、グランチャーをここまで連れてきてくれたことただそれだけに関しては、さとりとブレンに感謝してくれていた。

咲夜の眼は、ただとにかく、己の心に正直であったのだ。

「・・・・・・去ります」

さとりには、この咲夜の視線に対して、こう応えるしかなかった。
霊夢は、グランチャーが死ぬのを確認しろと言った。
が、確認するまでもなく、グランチャーがこのまま死ぬことは明らかだ。
今さら、見届けることもない。
何より、こちらに対して去れと言う咲夜の言葉を無視するのも、申し訳なく思っていたのだ。

傷つき、ついに地に倒れたグランチャーの姿を見やりながら、ブレンは再びゆっくりと上昇していき、やがて咲夜に背中を向けるように踵を返すと、加速をかけ、地底へと戻ることにした。

咲夜の言った言葉・・・

すぐに謝るから、こちらが気に入らないというその言葉は、その響き以上に強くさとりの心に絡み付いていた。

第十四話　その２０

グランチャーの身体の上に佇んでいた咲夜に、こあがようやく振り絞った声で呼び掛けた。

「咲夜さん・・・それ、グランチャーですよね・・・・・・ど・・・どうされたんですか・・・？」

その声を聞き、咲夜はこあ達の方を振り向いた。

皆一様に、戸惑いを隠しきれない様子でじっとこちらを見てくる。

咲夜にはそれが、グランチャーをこのような身体にしてしまったことへの批難と糾弾をするためのものにしか思えなかった。

今は、彼女らに対しても、かける言葉が見つからない。

咲夜は、静かな声でこう返すしかなかった。

「・・・今は少し、離れていなさい・・・事情は後で必ず話すから・・・」

その声を聞き、一番最初に動いたのはパチュリーだった。

グランチャーの傷ついた姿に他の者達同様に驚愕しながらも、ある程度は冷静でいられた彼女は、

「そういうことよ・・・事情は私が聞いとくから、どうしても気になるなら、後で私のところに来ればいい」

と、メイド達とこあに対して呼び掛け、そそくさと館の中に戻ろうとした。

その様子を見たメイド達も、ひとまずパチュリーに従って、戸惑いながらも彼女に続いて館へと戻ることにした。

が、そんな中で当のパチュリーは、未練があるわけでもないが、ふと後ろを振り返ってみた。

メイド達が、グランチャーから踵を返し（数人はチラチラと後ろを振り返りながらも）歩き始めていた中で、こあだけは、じっと身動きを取らないでいた。

「・・・？」

どうかしたのだろうか、と、パチュリーは徐に彼女の方に歩み寄っていく。

そうして、すぐ真後ろにまできたところで、後ろから手を置き、呼び掛けた。

「貴方もよ」

が、こあは一切反応を示さないでいた。

相変わらずその場で立ち尽くしている。

こちらが触れたことにすら気づいていないようすだ。

が、手で触れることでようやく、彼女の身体が微かに震えていることに気づいた。

もしかして・・・

ほんの僅かに身体が震えるこあの前へと歩み出て、その顔を伺ってみたパチュリーの考えは、案の定というべきか、的中していた。

こあは、じっと咲夜の方を見つめたまま、ひたすら大粒の涙を流し続けていた。

瞳の焦点・・・というか、全ての意識の焦点はただひとつ、咲夜だけに向いているようで、それ以外のものはすべて、滲んだ水彩画のように、心の内に留まることすらないようだった。

「・・・」

さて、こんなこあに対し、自分がしてやれることは・・・？

考えたところで何も思いつかないパチュリーにできることはただひとつ・・・何も見なかったことにすることだ。

「・・・気が済めば、貴方も戻るのよ」

ただこうとだけ伝えて、彼女はこあの脇をすり抜けて、改めて館に戻ることにした。

こあに言う言葉がないのは、咲夜も同じだった。

皆にひとまずグランチャーから離れろと呼び掛けた彼女だったが、今のこあにもそんなことを頼むのは無理そうだった。

それに、呼び掛けたところで、泣くのをやめてパチュリー達についていくとも思えなかった。

なら咲夜としても、こあのことはもう放っておくしかなかったのだ。

実を言うと、パチュリー達には離れろと言ったが、別に彼女らがこの場に残っていても、いけないわけではない。

ああ言ったのはただ、皆の視線を浴びるのが辛かったのと、自分の哀しみに対して、いくら心を許している紅魔館の者達でも、近くにいさせたくなかったからだった。

今は、グランチャーと自分のふたりだけで居たいという、ある意味ではエゴイスティックな理由からの言葉だった。

だから、さすがに今のこあには、このエゴを押し付けるわけにはいかなかった。

なにより、彼女がグランチャーのために泣いてくれていることは、決していけないことではなかった。

だから、もう何も言わないことにした。

しかし、彼女の顔を見返していると、ようやく落ち着き始めていた心が、もう一度激しく揺れ動くのを感じて、堪らなかった。

「・・・・・・」

沈んだ顔でこあから目を逸らした咲夜は、彼女の視線から逃れるように、もう一度グランチャーの胎内へと入っていった。

彼の者は仰向けに寝るような姿勢だったため、胎内を包むスリットウェハーも大きく傾いていた。

柔らかい感触を持つ、背もたれとなっていた部分に降りた咲夜は、今度は天井であるはずの場所を背もたれにして、座りこんだ。

そこからはもう、何も言わずただ黙っていた。

これから何をすればいいのか、分からなくなったからだ。
打ち負かされた恨みを晴らす機会はもうないし、グランチャーを慰めようにも、それができないことも当に知れていた。
もう一度こあの前に出たり、レミリアやパチュリーに報告するのも、今はできそうになかった。

今何をするべきなのか。
それが見えなくなっていた。

ただ、できることなら、あるかもしれない。

あえて何もせず、死にゆくグランチャーと、今暫(いましば)しの間だけでも時間を共有する。
それだけは、打ち砕かれたグランチャーの誇りを拾い集めて繋げることも叶わない咲夜ができる、ただひとつのことだった。

「・・・う・・・ぅ・・・」

未だ枯れることのない涙を再び流しながら、咲夜はただとにかく、哀しみもそのままにこの場に居続けることにした。
グランチャーの身体の奥底・・・彼の者の魂に最も近い場所に。

※

妹紅と幽香を乗せたグランチャーが太陽の畑の上空に飛びたってからしばらくして、彼の者は幽香の屋敷の前へと、いい加減飛び回るのにも飽きたらしい早苗のグランチャーと共に戻ってきた。

この間の騒動で、壁の一部が綺麗に吹き飛んでいる屋敷の傍に降り立ち、しゃがみこむグランチャー。
その胎内から出る幽香と共に、妹紅は、出迎えにきた早苗達の前に降りた。

すぐに慧音が歩み寄って、呼び掛けてくる。

「どうでした?グランチャーは・・・心を決めることは、できそうですか?」

「グランチャーの心には触れた・・・いいやつだったよ。ただ、考える時間はまだ欲しい・・・」

そう応えた妹紅に続いて、幽香が、にこやかな顔で言った。

「なら、その考える時間をたっぷり取ってもらうためにも、貴方達には一旦お帰り頂きましょうか」

「・・・・・・」

かくいう幽香の顔を、ちらりと伺う妹紅。

今は人当たりの良さそうな顔をしているが、少し前にはこの幽香が、こちらの襟首を掴み上げ、低く唸るような声を響かせていたことは

忘れない。
その時のことを早苗達にも話せばよかろうと思うのだが、幽香はそうはしなかった。
あの時見せた自分の本性を、早苗達に対しては隠しているからか？
あるいは、彼女なりの考えがあるのか？
もしそうだとして、感心できるような考えでは、恐らくないのだろうが。

そうやって、やはり幽香への猜疑心を抑えることができないでいたが、今の今まで彼女がこちらに向けた言葉の多くは、的を射ている正論であったし、それが心からの発言であれそうでなかれ、妹紅にはそのまま聞き流すことができないものだった。

いくら幽香のことを疑っていようと、そういうことが分からない妹紅ではなかった。

彼女の声に、早苗が少し驚いた様子で返す。

「えーっ？もう帰すんですかぁ？」

それにまた、幽香が返す。

「さっきも言ったけど、大体ねぇ、どっちつかずの心境をどうにかするためだけに私達の下にやってくるっていうのが駄目なのよ．．．グランチャーのことを知りたいというからその通りにはしたけど、自分の身の振り方ぐらい自分で決められなきゃ、アホでしょ」

相変わらず、間違ってはいない台詞だ。
この手厳しい物言いの標的であった妹紅でも、頷く他になかった。

また幽香は、こうとも続ける。

「それに、妹紅と慧音が私達の仲間になったとは決まっていない・・・もしかしたら、結局ブレンパワードの側につくってこともあるでしょう?今いろいろ話をしたら、そのことが逆にブレンパワード側で利用される恐れもある」

それを聞いて、早苗もそりゃそうだ、といった様子で、

「なるほどぉ～・・・こっちの仲間になるって決まるまでの間は、お互い干渉しすぎないようにしないといけないんですね」

と応えた。

藍もそれに続く。

「そういうことだから、こちらとしてもこれ以上何か話せることはないし、当たり障りのない話を続けるよりかは、早々に帰ってもらう方がいいんだな」

そんな声を踏まえた上で、改めて幽香が妹紅達に呼びかけていた。

「そういうことなんで、今日のところはお引き取りいただけます?・・・もう少しここでのんびりしていたいっていうなら、それもいいですけど」

互いに味方同士でない以上、踏みいった話はできないということに納得していた妹紅は、こう返す。

「いや、いい。このまま帰らせてもらうよ」

「そう・・・それじゃぁ、敵となろうと味方となろうと、貴方が答を見つけるのを、楽しみにしているわ」

「分かってる・・・それじゃ。機会があればまた会えるかもな」
「今日は、ありがとうございました」

妹紅と慧音は、あっさりとした挨拶だけをして、幽香達から踵を返して、地底へと戻ることにした。
かれこれ、太陽の畑に到着してから一、二時間ぐらい経ったかもしれない。
作戦開始からはもう三時間近くだ。
大なり小なり予定よりも遅れるとしても、最速で一時間で終わると言われていた作戦なら、どんなに長くても二時間すれば完了しているだろう。
こちらの役割も、もう果たせているはずだ。

これ以上幽香達の傍に残って、ひょんなことであげ足をとられるのも怖いので、早々にこの場から離れることにする。

だが、幽香達に背中を向ける直前、妹紅はふと、屋敷の前に佇む幽香のグランチャーの方に眼を向け、その顔を見つめた。
陽光によく映える、濃い土の色をしたその姿を見て、妹紅は胸中で呟いていた。

――あのグランチャーと一緒に戦うっていうのは、悪くないかもしれない・・・・・それに、あの風見　幽香・・・今は怖いけど、なんだか好きになれそうだ――

そうして改めて、グランチャーとその宿主達に背を向け、慧音と二人で、無数の向日葵に壁のように囲まれた道を歩き始めた。
昼も盛りの中、熱い陽光に照らされた向日葵達は、グランチャーでなくとも好きになれそうなほど、生命の活気に満ちているようだっ

た。
日の光を浴びることで、尚更、その黄色い身体を色濃く見せつけ・・・
ただ、長らく薄暗い竹林の中で過ごしてきた妹紅には、この熱いほどの陽光は、少し酷でもあった。

ゆっくりと歩を進め、見えなくなっていく妹紅と慧音の姿を総出で見送る幽香達。
そんな中で、ふと、早苗が言った。

「にしても、みょうちくりんな方達でした・・・ホントにグランチャーに会って、話を聞くためだけにここにきたんでしょうか・・・それじゃただの馬鹿みたいですよ」

その声を聞いた幽香は、誰にも見えないように、人知れず引きつった笑みを浮かべていた。
その笑みが何を意味しているのかは、誰もその笑顔を見るものがいない以上、彼女にしか分からない。
そしてそんな不気味な笑みもすぐに、微笑程度のものに変わり、その顔を早苗に向けてから、幽香は応えた。

「馬鹿は来るわよ・・・ああいう奴は、世の中には少なからずいるものなのよ」
「馬鹿が来る・・・そういうものなんですかねぇ？」

そう応えてからすぐ、何かを思い出したように、

「あぁー」
と声を出してから、早苗は続けてこう言った。
「このことを、咲夜さんにもお伝えしないと・・・幽香さんとだってまだお会いしていないし」
それを聞いて幽香も、思い出したように、
「そういやそうね」
と返した。
続けて、
「それなら、妹紅さん達を見送りに出たついでに、このまま紅魔館に向かいます？」
と言った早苗には、
「そうしたいけど、先にちょっと屋敷で一休みしてからにしましょう・・・今日は柄にもなく、ちょっと興奮してしまったわ」
と返す。
「興奮？・・・なにかしたんですか？」
「いえねぇ、あの妹紅も、あれで中々面白い奴だったのよ」
「・・・？」
幽香の言葉の意味はよく分からないままに、ひとまず早苗達は、彼女が言うように、屋敷で少し一休みしてから、咲夜に会うために紅魔館に向かうことにした。
※

周囲に咲き誇る向日葵の群れは、ある程度進んだところで、布が断ち切られてぷっつりと途絶えるように、後ろに流れて見えなくなった。
まだ、幽香が面倒を見ているらしい向日葵以外の花の姿も見えたが、太陽の畑からもうそろそろ出ることになりそうなのは確かだった。
そこでようやく、妹紅と慧音の二人は、幽香達のことを気にせず、話ができるようになった。

慧音が言う。

「妹紅が幽香といる間も、早苗さん達からいろいろと話は聞いてました。さっき言ったように、向こうもまだこっちを完全に信頼してませんから、話せる範囲でのことをですけど」
「そうか・・・どんな？」

「グランチャーもやっぱり、ビープレートを求めているようです。ただ、ブレンパワードの場合、オルファンに無限のオーガニックエナジーを与えて銀河旅行をするというつもりですが、自分達のオルファンからはぐれたグランチャーがビープレートを得て、何をするのかは分かりません・・・」
「ふむ」

「それで、早苗さん達はグランチャーにもまた母なるオルファンがいることを知らないようでした。グランチャーが教えていないんだと思います。教える必要が、ないんでしょう・・・多分グランチャーは、ブレン達よりもずっと、戦うことにストイックな生き物だと思います。早苗さん達もそう感じているようでした」
「・・・それは、私にも分かる・・・そうかぁ・・・」

妹紅は、ゆっくりと歩を進めながら、ぼんやりと空の方を見上げて、ため息をつくような声で言った。
そのままたそがれるような顔をしている彼女に、慧音が、
「妹紅？」
と呼びかける。

「・・・あぁ、いや・・・早苗も私と、似たようなことを感じているらしいと思ってな・・・」

その言葉の言わんとすることをすぐに理解できた慧音は、こう返す。

「・・・妹紅もその気になれば、彼女達と同じ立場に立つことはできるでしょう・・・彼女達の仲間となることだって、無理なことではありません」
「そうだな・・・」

後は、実際にそうするかどうかを決めるだけだ。
そのことは当に分かっているし、それを今考えて、答が出ないから悩んでいるのだ。
そのことが分かるから、無理に今妹紅に考えさせることはないと、慧音は話題を変えることにした。

「それより、幽香はどうでした？」

「似たようなことを言われたよ・・・」
「え？」

「ただあいつは、考えるまでもなく、私の心が決まっていると言っていた・・・」

「・・・・・・」

「とことん不気味な奴だった・・・なんだか、ありとあらゆるものを見透かしているように思えて、恐ろしかった・・・もしかしたら、こっちの作戦のことも、みんな見抜いていると思えるぐらい」

「・・・もしそうなら、私達を花畑から出すようなことはしていないでしょう・・・考えすぎですよ」

「・・・うん。ただ、考えすぎてしまうぐらい、不気味な奴だったんだ」

「・・・それは、分かりますね」

「ただな、不気味な奴なんだろうけど、不思議と、嫌いにはなれないんだよな」

「・・・また、どうして」

「あいつの言う事はどれも的を射ているし・・・なんというか、プライドを感じた・・・あいつは自分の言う事になんの疑いも持っていないんだ。自分に自信を持っているんだと思う・・・だから、あいつの顔を見て、眼を見ると、そのまま言いくるめられてしまいそうになる・・・あんな奴に乗ってもらえば、グランチャーもきっと強くなるだろうな・・・・・私も、ああいう眼ができるようになりたいって、少しだけ思った」

「・・・私は面と向かって話をしてないから分からないけど・・・妹紅がそういうなら、そうなんだろう」

「うん・・・あいつと話をしたことは、間違いなく私にためになってる・・・そのことは、感謝しとかないといけないんだよな・・・」

「・・・そう・・・ですか」

慧音は思った。

幽香が妹紅に、彼女の心がすでに決まっていると言ったらしいが、確かにその通りかもしれない。

妹紅の中ですでに考えは纏まり、彼女の心は決まっているようだった。

彼女の苦悩はきっと、自分の進むべき道を選ぶためのものではない。

すでに進むべき道は決まっていて、その道を進む一歩を踏み出すためのものなのだ。

一歩を踏み出すだけ。

そうすれば後は、彼女だって、自分のプライドと信念のために生きていけるようになるはず。

それこそ、彼女の話の中の風見　幽香以上に・・・

だとして、彼女のために慧音がしてやれること。

それは、信念のために歩む妹紅が、孤独にならないようにすることだ。

「妹紅・・・」

慧音が妹紅に対して、呼びかけた時だった。

俄然二人の頭上で、大きな声が響いてきた。

「おぉーい、お二人ー！」

見上げるまでもなく分かることだったが、声のした方を見上げてみ

ると、案の定ふたりの天狗がこちらに向かって手を振っていた。
こちらに妹紅達が気づいたらしいことを確認したふたりの天狗は、
そのまま彼女らの眼前に降り立った。
そうして、ふたりいる内のひとりが言ってくる。

「首尾はどうですぅ？」

それに、妹紅が応える。

「ぼちぼちだったよ・・・どうした？ご機嫌じゃないか」

その声に、喜色満面の様子で、もうひとりの天狗が続けた。

「そりゃ、作戦が完璧に達成されたんですからっ・・・向こうのグランチャーは無事撃墜されたそうです。致命傷を与えて、再起不能！後は死ぬのを待つだけだそうですよ。さすがにブレンの四体に囲まれれば、いかなグランチャーでも形無しだったというわけです」

それを聞いて、慧音が苦々しい顔を浮かべた。
そういうことは、妹紅に言うべきではないからだ。
が、そんな彼女の顔色には、天狗達は気づかない。

妹紅もまた、胸中で湧き出る憤りは、自分でも意外なほど冷静な心で上手く抑えつつ、返した。

「そいつは・・・良かったな」

「えぇ～よかったですよぉ。これから、各々地底に帰還するんです。妹紅さん達も、寄り道せずに戻ってきてください。それを伝えるために待ってたんです」

「そうか。御苦労だったな」

妹紅の返事を聞くと、天狗達は再び宙に飛び上がり、
「それじゃ、伝えましたからね。ご勝手に戻っててくださいよー！」
と言い残すと、ご自慢のスピードで妹紅達の頭上から去っていった。

取り残される形となった二人。
歩いている間に、向日葵は、もちろん、色とりどりに花ももう見えなくなり、周囲には、背の低い草が茂るなだらかな丘陵地帯が広がっていた。
ここまでくればもう、幽香の眼に入ることはあり得ないだろう。
だからこそ、天狗達も降りてきたのか。

そういうことを改めて認識しつつ、慧音が、戸惑うような口調で妹紅に呼びかけた。
天狗達の言葉に、気を病んでいないか心配だったからだ。

「妹紅・・・」

それに、彼女は静かな声で返す。

「連中に言われた通り、戻るとするか・・・多分、魔理沙達も待っている」
「え、あ・・・うん」

意外なほどに落ち着いていた。
グランチャーのことを、紛れもなく今も信じている妹紅なら、飛び立とうとする天狗に怒りをぶつけるようなことだってするかもしれ

ない。
が、そうはしていなかったし、慧音に返事する声も、いつもの彼女とそれほど変わっていなかった。
もしかして、それほど堪えてもいないのだろうか。

そんなことも考えるが、妹紅が何の感傷も受けていないわけではないということは、続く彼女の言葉を聞いて、分かった。

「・・・魔理沙達・・・ブレン達も、死にたくないからグランチャーをやるしかなかった。今やらないと、いずれ自分達がやられるから・・・・・・そんなこと、今更言わなくても、誰だって分かってることだ。グランチャーだって分かってることだ・・・」
「・・・・・・」

「幽香が言っていた・・・グランチャーは戦うために来ている・・・そうして、戦いの中で死ぬようなことになっても、それもまたグランチャーとして生きることの一部なんだって・・・・・・だけど私は・・・」

その先は言わなかった。

「あ・・・っ」

妹紅の身体から俄かに炎が噴き出し、慧音は思わず数歩後ずさりしてしまった。
実際はそれほど激しい炎ではなく、後ずさりする必要はなかったのだが。
彼女には失礼なことかもしれないが、慧音は一瞬、妹紅の身体を包みこんだ炎に、彼女の中にある感情が込められているように思えた。
その、言いようのない感情に気圧されてしまったのだ。

そんな慧音のことは気にせず・・・あるいは、気づいていても、慧音を驚かせてしまった自分にも非があるのだと考えながら、妹紅はそのまま、背中に、あるいは足に煌々たる炎を纏いながら、ゆっくりと天狗達を追うように空に昇っていく。

ある程度高くまで昇ったところで、くるりと振り返り、眼下の慧音を見下ろしながら、大きな声で言ってきた。

「私はもう帰る！地底でまた会おう！」

そうして、そのままもう一度背中を向け、飛び去っていこうとする妹紅に、慧音は大きな声で呼びかけていた。
先程天狗達に邪魔をされて言えなかった言葉を伝えるためにだ。
これからの妹紅の歩みを、出来る限り支えるために。

「妹紅ーっ！」
「・・・？」

「自分の気持ちを裏切るぐらいなら、他人を裏切ることもやむを得ない。人間ってそうやって生きている生き物だし、それは間違っていないはずだ！・・・そして、君のが選んだ道次第では、多くの人が君に失望すると思う・・・それでも私だけは、君のことを見捨てたりはしない！そのことは分かってほしい！」

「・・・・・・」

妹紅は何も応えなかった。

ただ、小さく一度頷くと、改めて、勢いよく炎を吹きだし、さなが

ら火の鳥となって慧音の下を去っていった。

一気に小さくなっていく彼女の姿・・・というより、彼女が吹きだす生命の炎を見つめる中で、慧音は小さく呟いていた。

「・・・もうすぐだ」

今になって彼女は、自分が妹紅の道についていくためには、自分もまた妹紅と同じ決心をしなければならないのだということに気づいた。

地底にいる多くの人妖達から離れ、時に敵となる覚悟を。

だが、慧音は彼女達から離れる以上に、妹紅と離れたくはなかった。

その感情を信じるだけで、慧音は自分でも驚くほどにすんなりと、さとりや魔理沙達の敵となることさえできるように思えてしまったのである。

もしかしたら彼女も、グランチャー側にいる方が似合う人種であるのかもしれなかった。

※

美鈴は結局、三十分近く妖怪の山の麓から動けないでいた。

気絶していた天狗はそのままに、いざ足を踏み出して歩きはじめても、その歩みは牛歩のごとく、ゆっくりとしたものだった。

罪悪感と、得体の知れない不安に包まれたままに、湖畔に沿って半

島にまで渡り、紅魔館に戻ってくるころには、グランチャーとブレンの戦闘が始まってからもう一時間以上が経とうとしていた。

今となってはなんだか懐かしいものにさえ見えた正門をくぐり、普段は自分が面倒を見ているはずの庭を、幽鬼のような足取りで歩む中で、美鈴は、その一歩一歩を踏みしめるごとに、足元からじわりと生温い何かが這い出して、全身を駆け巡る感覚に見舞われていた。

館に戻ってくるまでの間、グランチャーの姿はどこにも見えなかった。

ブレンの姿さえ見つけることはできなかった（どうやら地底に帰っていったのだろう）。

戦いは一体どうなったのだ？

咲夜はグランチャーを助けることができたのか？

あるいは・・・

湖の上にも（見える範囲でだが）、館に続く森にも（こちらも見える範囲でだが）グランチャーの姿はなかった。

となればどうやら、彼の者はこの紅魔館に戻ってきているようだった。

戦闘から戻ってこれるあたり、やられてはいないのだろうか？

しかし、もしかしたら・・・

紅魔館らしく、深紅に彩られた花を中心にいくつもの花が鮮やかに咲き誇っている庭・・・さながら濃緑の草原に血が点々とこびりついているような庭のその先で、グランチャーの戦いの結末を知ることができるのだと思うと、歩み続けるのが恐ろしくさえ感じた。

美鈴はすでに、グランチャーが死ぬことなど望んでいなかった。
まったく真逆の考えの下にいた以前の自分のことを完全に否定し、恨んでさえいた。
そんな中で、グランチャーが実際に死んでしまったとあっては、それこそ自分には生きている資格などないとさえ、彼女は思っていた。

そう考えると、少しずつ屋敷の方へ歩み寄っていくこの足取りが、死への行進であるように思えて、尚更一歩に続く一歩を、遅いものにしていた。

が、それでも前に進んでいる以上、美鈴はいずれ、現実に直面することになるのだ。
嫌が応にも、自分のやった行いが招いた結果を、知らざるを得なくなるのである。

花壇を彩るいくつもの草花の壁を縫って進み、ついに紅魔館の屋敷が眼の前に見えるところまで来た時、美鈴は言葉を失い、心臓が止まる気分をしばし体感することになった。

「・・・・・・・・・っ」

もしかしたら、グランチャーが無事に戦いを終えたかもしれないという希望は空しく崩壊し、現実の認識が螺旋を描く弾丸となって飛来し、彼女の脳髄を貫いた。

美鈴から見える角度では、ちょうど、グランチャーの左腕が失われている様子がよく見えた。
それ以上に、仰向けに倒れ、宙を見つめる彼の者の姿に、すでに生

気はなかった。
具体的にアンチボディの死がどういうものなのか知らない美鈴にでも、これからグランチャーは死ぬのだろうということはよく分かった。
しかもそれは、どうあっても逃れることはできないのだ。
老いさばらえていく人間のように、不可避の死へと、彼の者はゆっくりと向かっていた。

「・・・・・・・・・」

何も言う事ができず、ただ、白昼夢でも見ているかのようなおぼつかない足取りで、よたよたとグランチャーの方へ歩み寄っていくしかなかった美鈴は、次いで、倒れているグランチャーの足の裏の辺りに、こあがいるのが見えた。

彼女がこちらに気づき、哀しみに包まれた顔をこちらに向けるのを見て、愕然とした表情になった美鈴。

彼女はまだ気づいていない。

自分が冒した罪に対する罰が今始まり、
そしてそれは、彼女が想像するよりも遥かに甘く、それでいて遥かに・・・どこまでも過酷なものであることを・・・

第十四話　その２１

大粒の涙を流しながらこちらに駆け寄ってくるこあの姿に、美鈴は思わずその場から逃げ出しそうになった。
が、本当に逃げ出すわけにはいかない。
逃げ出せば、それで何もかもが終わってしまいそうな気がしたからだ。

「・・・・・・・っ」

何であれ、グランチャーがここに戻ってきたのなら、咲夜も一緒に戻っているだろう。
恐らく、美鈴の行為と彼女の腹の内にあったグランチャーへの殺意は、こあに対して伝えられている。

まずは、彼女から批難と罵声、そして侮蔑の視線を受けることになるのか・・・

そんな考えが脳裏を過り、どうしても身構えずにはいられなかった美鈴。
だが、次いで彼女の身が受けた感覚は、荒く激しい声でもなければ、暴力のひとつやふたつでもなかった。

こあは、美鈴に飛び付くように抱きついて、そのまま肩にかじりつくように顔を寄せ、すすり泣きをしていた。

「・・・っ？」

戸惑う美鈴に対して、こあは震える声で言う。

「よかった・・・美鈴さん・・・」

「よ・・・よかった・・・？」

「グランチャーのことじゃありません・・・グランチャーがあんなになってしまって・・・でも、美鈴さんは何事もなく、ここに戻ってきてくれました・・・」

「だから、そ、それで・・・よかったと・・・」

「はい・・・」

こあの身体の感触を感じながら、美鈴は思った。

何かが違う・・・

グランチャーの敗北が大いに哀しみを振り撒いている中で、何かがおかしいと感じた。

自分は何か、決定的な部分を勘違いしているのでは・・・

そう、確か少し前にも、似たような違和感を感じていた。

一体なんなのだろうか・・・

そんな考えが心の内で芽生えてきた。

しかし、そんな中でも美鈴は、こちらの身体にしがみついてすすり泣くこあの身体を抱き返すことはできた。

こあと比べて一回り背の高い美鈴が彼女を抱き締めると、もはや抱

くというより、覆って包み込んでいると言った方が良さそうだった。
そして、そんな美鈴の腕に抱かれながら、こあはこう続けていた。
「・・・咲夜さんにお会いになってください・・・仲直りをしてください」
「・・・咲夜・・・」
彼女の言葉・・・そしてそこに語られた名に、美鈴ははっ、とした。
そうだ。
咲夜と会って、話をしなければならない。
なんせ自分は、彼女の乗るグランチャーを、間接的にとはいえ殺めたのだから。
その罪を贖うためには、真っ先に彼女に会うべきだった。
それに、先程から感じている違和感。
その理由も、咲夜と面と向かって話をすれば、分かるかもしれなかった。
ただ、そういう冷静な考えがある中で、グランチャーを失い失意の底にいるのであろう咲夜に、どうやって顔向けすればいいという惑いと、彼女の怒りと憎悪を一身に受けることへの恐怖心もあった。
それでも美鈴は、こあを抱き締めた腕を離した。
それはつまり、こあの言葉通り、咲夜に会う決心がついていることを示す行動であった。
こあの方も、美鈴に抱きついていた腕を離すと、そのまま一歩後ずさりして彼女から離れた。

それから美鈴は、ほとんど無意識の内にこあの両肩に手を置いて、彼女の瞳の奥をじっと見つめていた。

咲夜には会う。
そして彼女から、犯した罪に対する罰を受けるつもりだ。
だがその前に、このこあにも、こちらを罰して欲しかった。
こちらに罵詈雑言を浴びせ、骨が折れるほどに殴りつけ、肉が削げ落ちるほどに蹴り、果ては殺して欲しかった。

今の美鈴は、そんな破滅的な欲求が全てだった。
と、自分では考えていた。
だから、そんな自分の気持ちの内を吐露して、罰を与えて欲しかった。

が、実際は違った。
彼女は、本当のところはまだ死にたくはなかったのだ。
どうせ死ぬなら、せめて一秒でも長く生きていたいと考えていた。
そして、そんなことを考える自分のことを、自覚もできていた。

「こあ・・・」

彼女の名前を呼び掛けることはできても、その先の言葉を続けることはできなかった。

開きかけた口をつぐみ、美鈴は苦々しく、多大なる自己嫌悪の念を抱きながらこあの肩に置いた手を離し、『私を罰しろ』という言葉の代わりに、こう問うた。

「咲夜さんはどこに・・・？」

「グランチャーの中にいます」
「・・・そうか・・・」

その声に美鈴は、こあの後ろで屋敷の傍に倒れるグランチャーの方を見た。
直視したくない痛ましい姿であったのだが、彼の者をこのような姿にしたのは自分なのだから、このまま眼を逸らす訳にもいかなかった。
そして、これから死にゆくグランチャーの胎内に、咲夜はいるというのだ。

もう一度、ちらりとだけこあの方を見直し、彼女の涙が止まっているのを見た。
美鈴が、グランチャーと咲夜の心を慰めてくれることを信じて、期待しているからだ。
自分も、泣いている場合ではないと思っていた。

美鈴にはそんなことは分からない。
何せ彼女がやろうとしていることは、こあが期待することとは真逆に近い行為だったのだからだ。

改めてグランチャーに眼を向け直し、そのままこあの傍を通りすぎた美鈴は、彼女に背中を向けつつ、真っ直ぐにグランチャーの方へと歩みよっていった。
見送るこあの視線を背後にひしひしと感じる。
美鈴にはそれが、殺意のこもった視線に思え、その内背中が貫かれて腹を貫通するのではないか、とすら思えた。

ここまできたら、もう恐れることも、躊躇(ためら)うこともできない。

覚悟を決めた。
というより、初めから決まっていたはずの覚悟を、もう一度確かめた。

自分は罪を犯したのだ。
ならばその罪は、罰を以ってして贖わなければならない。

自分が傷つけたに等しいグランチャー、そして、残酷にも裏切った咲夜に対して、せめて最後の最期には、自分なりの誠実さを見せたかった。
どんな罰でも甘んじて受けるという、せめてもの誠意を・・・

そのまま美鈴は、横たわるグランチャーのすぐ傍にまできた。

「・・・・・・」

何度繰り返すのか分からないが、グランチャーをこれほど傷ついた、痛ましい身の上にしたのは美鈴である。

そのことを重々承知した上で、美鈴は、グランチャーの姿に涙を流しそうになった。

そうして、これから自分が向かうべき道が、蔑まれながら地獄に落ち、那由多の時を苦しみながら、生きるとなく生きていく道しかないということが、いよいよ目の前に迫る実感として心の内に張り付いた。

グランチャーの身体の上に上り、胎内へと入り咲夜と対面したその

時から、自分の生命は終わるのだ。
そんな考えばかりが頭の中をぐるぐると往復し、さながらエコーのごとく反響していた。

さあ死ぬぞ。
死ぬ時がきた。

そんな、美鈴自身の声となって。

しかし美鈴はここまできて、本能的に死ぬことを恐れ、拒んでいた。強く固められていたの覚悟も、いつの間にやら弱り果て、固体なのか物体なのかも曖昧なほどの柔い意思となってしまっていた。

ここまできて、もう後に引くこともできない。
だが、ここまできて尚美鈴は、グランチャーの身体の上に飛び上がるその脚の躍動を実現させられないでいた。

そして、美鈴には、自分が死なずに済む方法があることも分かっていた。

このまま逃げ出せばいいのだ。
グランチャーからも、こあからも、そして咲夜からも逃げて、どこかに隠れてしまえばいい。

そうすれば、咲夜に顔を合わせることもないし、死ぬこともない。
それこそ、いつぞやに誰かが言ったように、地底にでも行って、さとりに頼み込んで地霊殿に住まわせてもらえばいい。
そうでなくとも、紅魔館を捨てて、行ける場所などいくらでもある。

だが美鈴は、そんなことはしなかった。
紅魔館を捨てて逃げ出すという考えなど、脳裏にちらつくようなことさえなかった。
美鈴は、咲夜と会う事を恐れ、本能的に拒む中で、それ以上に強く、このまま全てのことから逃げて、何もなかったように生きることを拒んでいた。

何があろうとも、美鈴の中にある恐怖など、紅魔館と、そこに生きる者達を愛する心には、比べることすらできない。

いや、それもまた違う。

咲夜だ。
何よりもまず彼女が好きだからこそ、紅魔館そのものも好きになれたのだ。

どれほど恐ろしかろうと、結局、脚に力を込め大地を蹴って飛び上がりグランチャーの身体の上に乗ることになるのが、紅　美鈴だったのだ。

グランチャーの左太股の装甲に乾いた金属音と共に降り立った彼女はそのまま、装甲が開き、胎内へと続く穴が剥き出しになっている股間へと歩み寄り穴の縁に立つと、その奥の様子を覗き見た。

同時に、ぽっかりと空いたその穴の向こうから、身震いするほどの冷たい空気が漂ってきた。
心に吹き付けてくる、生命の終わりを実感させるような空虚なる寒

気だ。

そして、こあの言った通り、咲夜はいた。

だが、積層する金属が無数の溝を作るその空間の隅で膝を抱えて座り込んでいるその姿が咲夜であるということを、美鈴はすぐに分かることができなかった。

それほどまでに、彼女の身体は、いつもより一回りも二回りも小さく見えていた。

あれほど寂しそうに座り込んでいる彼女の姿を、美鈴は今まで一度も見たことがなかった。

落ち着いて気丈でいて、完全であり、瀟洒であった。

そんな咲夜の姿の初めて見るような姿に、いたたまれなくなったのだろうか。

美鈴は、スリットウェハーの奥から吹き抜けてくる哀しい死の実感と、哀しみに暮れる咲夜の前にその身を見せることへの恐怖も全て振り切って、飛び込むように穴の奥へと入っていった。

咲夜が胎内の端の方にいたので、上からのし掛かって押し潰したりしないということも確認している。

スリットウェハーの壁面に足をついた時美鈴は、足元から広がった柔らかい感触に、グランチャーの生命もまだ、すぐに終わるわけではないらしいということが分かった。

とはいえ、いずれ死ぬのは間違いない。

このスリットウェハーの感触も少しずつ硬くなっていき、やがて石の壁に触れるような感覚となった時、グランチャーの生命は終わるのだ。

そんな認識が頭の中で結び付き、美鈴は、振り切った恐怖心にまたしても足を引っ張られそうになった。

が、もうここまできた。

逃げることはできないし、そんなつもりもない。

咲夜が、こちらに気づいた。

揃った膝の上に額を置いて、顔色を隠すように俯いていた彼女が、その暗く沈んだ顔を美鈴の方に向けた。

そうして、僅かに眼を見開いて、しばらく彼女を見つめていると、徐にその場から立ち上がった。

先程まではとても小さなものに見えた彼女も、目の前で立ち上がると、そんなことはまったくなかった。

美鈴の方が、まだ背丈は高かったが。

立ち上がっても尚俯いていたその顔に、深い影を落としている咲夜。

彼女が一体どれほどの軽蔑の言葉を発し、いかなる苦痛をこちらに与えてくるのか、美鈴は恐怖し、また、その罵声と苦痛を望んだ。

だが・・・

美鈴は一瞬、訳が分からなくなった。

零れる涙を、宙に、星よりも鮮やかな宝石のように煌めかせながら、

彼女の綺麗な顔が目の前に迫ると共に視界を横に逸れた。
そうして、美鈴の身体に抱きつき身を寄せて、声もあげずに泣いていた。

こあと同じ・・・いや、こあ以上にきつく、すがり付くようにこちらの身体を抱き締めていた。

「・・・・・・っ？」

これ以上ないほどの戸惑いを感じ、いっそ錯乱してしまいそうになる美鈴。

何かが違う。
という違和感が再び、より一層強くなって感じられた。

そんな中で、咲夜の絞り出すような声が美鈴のすぐ耳元で、くぐもりながらも響き、鼓膜を震わせた。

「済まなかったわ、美鈴・・・貴方を天狗にいいように利用されたまま、グランチャーを・・・守ることが、できなかった・・・」

「・・・・・・」

「貴方だって、グランチャーのことは・・・好いて、いてくれてたのに・・・」

「・・・・・・」

咲夜のこの言葉が、美鈴の知りたかったことを彼女に教えていた。
ずっと心の内で渦巻き、魂の内側にゴツゴツとぶつかっていた違和感の正体を・・・

「・・・あぁ・・・・・・・っ」

美鈴は戦慄した。

全身から力が抜け、体重をかけて抱きついていた咲夜の身体の重みに押されて、そのまま倒れるように尻餅をついて座り込んでしまった。

それでもまだ、咲夜は彼女の身体から離れることなく、まるで彼女を含めてひとつの身体となっているかのように抱きついていた。

ようやく分かった。

咲夜は、美鈴がグランチャーを殺めるように魔理沙達をけしかけた張本人であることを知らないのだ。
改めて考えると、確かに咲夜は、はっきりと美鈴が全ての元凶であるということを聞かされていない。
そのことを喋ろうとした天狗は、寸前のところで彼女に気絶させられた。
咲夜は、ブレンを駆る者達は、彼女がグランチャーから離れるタイミングを見計らい、そこに都合よく美鈴の呼び出しがきたものだから、それを利用してグランチャーを襲撃したのだろうと考えていたようだ。
だから、美鈴はこの件には無関係なのだと・・・

しかし、錯乱する頭で必死に考えると、これもおかしなことだった。
美鈴が咲夜を呼び出したからというが、じゃあそれまでブレンを駆る者達はずっと咲夜の動向を監視していたのか？
どこかでこそこそ隠れながら、この二、三日の間ずっと？

真実を知っている中で可能な限り客観的に考えてみると、やはり、前述のようなことを考えるのは、少し単純過ぎるのでは、と思えた。
いくら窮する事態でも、咲夜ならば、すぐに本当の真実に達することができるはずだ。

そうして思案した美鈴は、すぐに、何故咲夜の中の考えが短絡的なところで終始しているのか分かった。
美鈴が全ての発端であるという結論に至ることを、頑なに阻んでいる力の存在に気づいた。
だからこそ美鈴は戦慄したのだ。

彼女は愕然とした表情を浮かべ、声にならない声をあげながら、抱きついてくる咲夜の身体の温かさに反して、自分の身体が寒さに包まれていくのを感じていた。

咲夜は、美鈴のことを心から信じていた。

だからこそ、本当の意味では美鈴が・・・ブレン達の立場を考えたのなら、ある意味美鈴ただひとりが悪いのだということにも気づかなかった。

実際、美鈴自身が本心から語ったグランチャーへの思いに胸を打たれていた。

もちろん、美鈴を罰しようなどと、ましてや殺そうなどということは考えもしない。
咲夜は、美鈴への信頼を、かつてよりも強いものとして取り戻していた。

彼女が美鈴の本当の悪業に気づいていなければ、当然、こあを始めとする紅魔館の住人達も気づかない。
これから死にゆくグランチャーでさえ、気づいていなかった。
となれば、誰一人、美鈴を罰するものはいないことになる。

彼女の生命は、今この時に関しては、繋がったのだ。

だが、美鈴は今になって、ようやく気づいた。
自分にとっては、このまま生きていくことこそ恐怖だったのだ。
咲夜にも誰にも気づかれないまま、自分だけが、自分の罪を知り生きていく。
そんなことでいいとは思えなかった。

結局何故美鈴が、咲夜達に裁かれ、死ぬ覚悟を決めたかと言うと、愛する彼女達を騙し、裏切ったことへの償いのためだった。

だが、そんな償いの機会さえ失われ、待っていたのは、長らく離れていた紅魔館に帰ってきたことを、その理由を問いただすこともせずに歓迎してくれる優しさだった。
そして、グランチャーの死と同じように、美鈴の無念を（確かに美鈴にとっても、グランチャーの死は無念だった）哀しんでくれる絆の強さだった。

美鈴にはそれもまた辛かった。

自ら絆を断ち切り心を鬼にして、死ぬ覚悟を決めても尚、もう一度繋ぎ合わさって心を引き留めてくれるその優しさが。

自分にはそんな風に優しくされる価値など、何もないというのに・・・

眼を見開き、口元も微かに開いて愕然としていた美鈴は、じわじわと胸の奥から湧き出てきた罪悪感・・・これほど優しい者達に自分がやってしまった行為の重さに苛まれる心が、目元にまでこみ上げ、雫となってこぼれ落ち頬を伝うのを感じた。

それに気づいた後は、もう止まらなかった。

咲夜の身体を抱き返すその腕を震わせながら、美鈴は嗚咽に混じって吐き捨てた。

「違う・・・・・違うんです・・・違うんですよ」

全ての事実を咲夜に伝えて、今度こそ自分の生命を終わらせることを望んだ。

だが、少しだけ戸惑った様子で、美鈴の肩から顔を離し、

「え？」

と微かな声を上げた彼女に、美鈴はその先の言葉を続けることができなかった。

「・・・っ・・・・・・う・・・うぅ・・・うぅぅうぅぅ・・・っ」

結局のところ、彼女はやはり死ぬことを恐れていた。
咲夜のために、何より自分自身の心への償いのために、死ななければならないという想いはある。
だが、そんな中で再び死ぬことへの恐怖を、ほんの僅かながらにでも思い出してしまえば、そのほんの僅かなしこりが心をせき止め、美鈴に死ぬことをさせないでいた。

美鈴はとうとう、自らが救われるというか、報われる、でもなく、とにかくそのような表現とはまた違う何かに至る方法を放棄してしまった。
どうあっても完全に振り切ることができなかった死への恐怖に足を引っ張られ、そのまま諦観の中へと引きずり込まれた。

結局彼女が咲夜に対し返すことができたのは、
「・・・な・・・なんでもありません・・・」
という振り絞るような声と、それに続く言葉だけだった。

「私・・・私のことは、気にしていただかなくて構いませんから・・・グランチャーのことは、哀しいですけど・・・」

「・・・・・・」

その声を聞いた咲夜は、しばらく黙りこんだ後、もう一度美鈴の肩に顔を寄せ、声もあげずに再び泣き始めた。

この、温かく柔らかい彼女の身体の感触から離れることも、怖かったのだ。
美鈴は、耐えきれない罪悪感に苛まれる中でも、咲夜に抱きしめられるこの温かさに、心が慰められていると感じていた。

理性では、それがどれほど恥知らずなことなのか分かっていながらも、彼女は本能的に、そして肉体の反射的に、抱きつく咲夜に、彼女がこちらにそうするのと同じようにすがりついてしまっていた。

咲夜の背中に両腕を回し、無意識的に手のひらでその背を撫でまわして、その感触を確かめていたことに気づいた美鈴は、自分をとことんまで嫌悪しつつも、それでも咲夜に真実を伝えることができなかった。

告白する声はせいぜい、自らの心の内で、乾いた叫びとなって発せられるばかりだった。

心の中で何をどれほど叫んだところで、咲夜に聞こえるわけがないのに。

――紅　美鈴はっ！な、なんて・・・なんて下衆な妖怪なんだ！私がこの人に何をしたか・・・グランチャーに何をしたのか、分かっているのかっ！？

・・・・・・咲夜さん、聞いてくださいよ！私をやっちゃってください！

私はねぇ、ここで死ななきゃいけないって分かってるのに、死ぬことができないような、そんな奴なんですよぉーっ！――

が、どれほど叫んでも、所詮それは心の声であり、美鈴の中だけで繰り広げられる、独りよがりな、いわばマスターベーションにも近いことであった。

咲夜へ向けた叫びに次ぐ、自らを乏しめるための罵声もまた。

――私は死ぬこともできないのか！臆病者で軟弱者で・・・妖精以下の妖怪の屑じゃないか、これじゃ！

このまま、こんな気持ちを抱えたまま、咲夜さんにも顔向けできな

いまま！・・・生きてけるわけないのにっ！――――

だが、どれほど心で叫んでも、その心の奥底と、その心を宿す肉体が、生きること・・・咲夜の傍にいることを望んでいた。
美鈴は。自分を肯定も否定もできない曖昧なところで、地に足をつけることもできない宙ぶらりんな状態になっていた。

「う・・・くっ・・・ぅううぅ・・・っ」

ただひとつ確かなことは、こんな身の上になってしまったことが、いいことであるわけがないということだ。
そして、初めからグランチャーのことを認めて、信じてさえいれば、こんなことにはならなかったということ・・・

「・・・・・・・・っ」

何であろうと美鈴は、咲夜に対しても、誰に対しても、自らの内の感情を伝えることができなかった。
ただそれが、紅　美鈴という小さな身体の中で、幾度となく渦巻き、膨れがっていくばかりだ。

もう今にも破裂し、無数の破片を撒き散らしそうになっているのに、そうすることもできず。
せいぜい美鈴にできることは、自分の内より生み出される、憤りにも、憎しみにも、また愛情にも似た感情・・・ただそれだけを吐き出すことだった。

「・・・うぅ、うわぁあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

ーーーーー・・・・・・・っ！！」

その声は最早泣き声ではなかった。
獣の吠えるがごとき、雄叫びであった。
吐き捨てられる美鈴の中の感情は、それほどに大きいものだった。
感情だけを吐きだしたところで何にもなりはしないという事実がまた、その雄たけびを大きく、そして空虚なものにして、響かせていた。

「あぁっ・・・あああぁぁぁぁぁぁーーー・・・っ！！」

美鈴はただひたすらに泣き叫び続けた。
無心に泣き、心を真っ白にすることで、もしかしたら、今感じている咲夜への罪悪感と自分に対する嫌悪の念を全て忘れられるかもしれなかったからだ。

今の美鈴は、考える能力を持った存在などではなく、生まれたばかりで泣くことしかできない赤子に等しいものになっていた。
だがその泣き声は、産声と言うには余りに激しく強く、そして哀切が込められたものだった。

彼女叫びは、グランチャーの胎内にこだまし、のみならず、紅魔館の全体にまで響き渡った。

「・・・・・・っ」

咲夜は、じっと美鈴の肩に顔を埋めたまま、益々強くなるグランチャーの死の実感に、乾きそうになっていた涙を再び溢れださせ、彼女の肩を濡らしていた。
それと共に、グランチャーの死のために、これほどまでに・・・ある種狂ったように泣き叫んでくれる彼女に、感謝していた。

それがまた、この場を包む哀しみを助長する。
咲夜の考えることと美鈴の考えることは、まったく違っていたのだから。
それこそ、先程の彼女とグランチャーの心よりも、より大きなずれとなって・・・

美鈴の絶叫は、当然グランチャーの傍にいたこあにも聞こえた。

「・・・・・・っ」

そして、天を裂かんばかりに大きいはずなのに、まったく喧しく感じないその叫びが、胸の奥で反響し、彼女の心からも同じ感情を呼び起こしていた。
こあは、今までどうにかせき止められていたものが一気に抑えきれなくなり、再び大粒の涙を流しながら、とうとう声を上げて泣いてしまった。

「・・・う・・・ぁ・・・うわあぁぁーーーん!グランチャー・・・グランチャーがぁぁ・・・!」

グランチャーを咲夜に任せ、ひとまず館の中、図書館の中に戻っていたパチュリーの耳にも、その叫びは勿論聞こえた。
どうして選んだのかも分からない本を読んでいた彼女は、空気を突き破るようなその叫びに、思わず読んでいたその本を机に倒しながら、椅子から立ち上がり、声の聞こえた方へと顔を向けていた。

今まで生きている中で一度も聞いたこともないような異様な声が、美鈴のものであると分かると、驚愕に眼を見開いた顔が少しずつ和らぎ、次いで険しい表情に変わっていった。

どうやら、今までどこかに消えていた美鈴が戻ってきたらしい。
そして、これから死にゆくグランチャーの姿を見て、哀しんでいるのだろう。

「・・・・・・」

パチュリーは、黙り込んで再び椅子に座り直し、机の上に眼を向けた。
が、ページが開かれている状態でその上に置かれていた本に、再び眼を通すことはできなかった。
そういう気になれなかったからだ。

「止めて欲しいわ。そんな獣(けだもの)のような声を出されちゃ・・・こっちだって似たような気持ちになってしまう・・・」

ただ、そう呟くしかなかった。
涙は流さなかったが、代わりに、身体の弱い彼女は、哀しみに抗う力を持たぬまま、石のようにしばらくの間固まっていることしかで

きなくなっていた。

自分の部屋のドアを突き破るように開け放ち、そこから続く廊下に躍り出ると同時に、フランは叫んだ。

「美鈴ーっ！グランチャーがどうしたっていうんだっ！？」

その疑問による答は、他でもない、この美鈴の叫び声が教えていた。

「・・・・・・・・・・っ？」

グランチャーが大変なことになったということは、すぐに分かった。

彼女は、あまりに外に出ない（出してくれないということもある）ため、グランチャーとの面識はそれほどなかった。
せいぜい、二、三度ほど顔を合わせただけである。
だから特別、思い入れもないはずであった。
ましてや彼女にとっては、世の中の生命は軽い。

だとして、今すぐにでも何が起こったのか確かめるために館の外に出ていきたいのに、身体が震えて動けない。
その理由が何故なのか、まったく分からなかった。

紅魔館のバルコニーには、館の主人が真昼でも出ていけるような、

大きな日除けがある。
だからこそレミリアは、ゆっくりとガラス張りの戸を開け、その下には館の正面扉があるその場所へと出てきた。
ここからは、普段からグランチャーの姿がよく見えたからだ。
多くの者は知らないようで、実は割と知っていることだったのだが、彼女は暇があるとここに出てグランチャーの姿を眺めていた。

だが今、バルコニーの手すりから見下ろすことで見えたグランチャーの姿は、いつも見ていた勇ましい姿を忘れてしまいそうになるほどの、傷ついた姿であった。
装甲はところどころ欠けて、そうでなくとも、陥没しているところもある。
まるで歪な岩山だ。
なにより、左腕と右脚がない。
この時ばかりは、彼の者の真っ赤な身体の色が、本当に血の色なのではないかとさえ思えた。

「・・・死んだ・・・いや・・・・・・これから死ぬ」

レミリアは、ただそうとだけ呟いた。
その声には、一切の哀しみというものはないような響きだった。
だが、彼女もまた、パチュリーと同様だった。
まったく身動きが取れなくなり、その場から動けなかった。
美鈴の叫び声と、虚空を見つめるグランチャーの眼が、まるでこの身を宙に張り付けて金縛りにしているようだった。

泣いたり、声を荒げたりすることもできないほどの戸惑いが、彼女を包んでいた。
それは、咲夜やパチュリーが死んだりしたら、こうなるのだろうなと、ふと考えていたのと、まったく同じ状態だった。

グランチャーもまた、この紅魔館の住人として認めていたのだ。
そのことをより一層強く実感することができたのが、彼の者が死の階段を上っている今この時だった。

第十四話　その２２

さすがに二十分もあれば、美鈴の慟哭も止む。
逆に言えば、彼女は二十分もの間、涙を流し、叫び続けていたということだ。
泣くのを止めたのも、叫びすぎて喉が枯れ、咳が出て泣くに泣けなくなったからだった。

そうやって美鈴の声が掠れて荒んだものになり、やがて聞こえなくなる中で、反比例するように咲夜の心は落ち着きつつあった。

赤子のように泣きつかれたのか、ぐったりと肩にもたれかかる美鈴を、先程とは逆に咲夜の方が抱きしめながら、彼女は優しく美鈴の背中を擦っていた。

「はあ．．．はぁ．．．ぅ、ごほ．．．」

流す涙も枯れ果て、代わりに、溶けてしまいそうな疲労感に包まれて、美鈴は咳に混じって喘ぎ喘ぎに息を吐き捨てていた。

「．．．．．．」

咲夜は何も言わず、ただ黙って彼女の背中を擦り続けた。

そんなことがさらに五分ほど続き、美鈴も、ようやく少しくらいは落ち着いてきた。

そういえば、パチュリー達に事情を後で話すと伝えていたのを思い出す。

グランチャーの方も、これから死にゆくなりに落ち着いていたし、まだ一週間か二週間か（もっと短いかもしれないが）は、咲夜が胎内に収まることで、生きていられるようだ。

しかしながら、それでも最早まともに動くことは叶わないだろう。

スリットウェハーの表面が、外の光景を映し出すことができなくなり、色を失って、本来の灰色の金属板に戻っていたからだ。

だからというわけではないが、パチュリーらに約束通り話をしなければならないと思い、グランチャーへの未練も一時だけ断ち切って、咲夜は胎内から外に出ることにした。

「・・・美鈴。ひとまず外に出ましょう。貴方が戻ってきたことも、みんなに伝えないと・・・」

そう伝えると、小さく、

「・・・はい・・・」

という返事が返ってきた。

「立てる？」

「・・・ご心配なく・・・大丈夫です。立てますから・・・」

「分かったわ」

美鈴がそう応えたので、咲夜は彼女の身体を支えたりせず、早々にスリットウェハーを蹴って飛び上がり胎内から出て、先程と同じようにグランチャーの左腿の装甲の上に立った。

が、それと同時に、咲夜は目の前に広がっていた光景に驚嘆した。
少し遅れて彼女の隣に降りたった美鈴もまた、大いに驚いていた。

「グランチャー・・・早苗達のだわ・・・っ」

彼女が驚嘆する通り、咲夜の視界のやや上方に、早苗の駆るグランチャーと、藍のグランチャー・・・それと、初めて眼にする濃褐色のグランチャーがいた。
いつの間にやら、紅魔館にやってきていたようだ。

一体どうしたのか？
何のために来たのか？
それは何も分からなかったし、恐らく大した理由ではないのだろうが、咲夜は思わず無意識的に呟いていた。

「・・・助けに来てくれたにしても、遅すぎる・・・」

※

己のグランチャーの胎内で、早苗は戦慄していた。
足腰に力が入らなくなり、気が付いたら、スリットウェハーにもたれかかり尻餅をつくようにその場に座りこんでしまっていた。

目の前、いや、少し下の方で一体何が起こっているのかも分からず、こう吐き捨てるしかなかった。

網膜には、四肢の一部を失い、力なく地面に横たわる深紅の肉体が焼きついていた。

「さ・・・咲夜さん・・・の、グランチャーでしょ？こ・・・こっ、こ、こ、これ、どうしたんですか・・・？」

その声には、藍が応えた。

「ブレンパワードとの戦闘があったんだ。それに負けたんだろう」

「そぉいうことはねー！分かってるんですよぉっ！どうしてこんな・・・咲夜さんとグランチャーなら、ブレンの二体や三体に囲まれたって、平気なはず・・・・・・そもそも、やられそうになったなら、私達のところに逃げてくればよかったのに！太陽の畑のことは伝えてたはず・・・っ」

グランチャーが戦いに破れたということは分かる。

だが、早苗では及びもつかないほどに強いはずの咲夜と、彼女のグランチャーが破れるというのが、彼女には信じられなかった。

困惑する早苗に、今度は幽香が、不気味なほどに静かな声でいう。

「分からなかったら人に聞く・・・咲夜に直接話を聞きましょう。見なさい、あそこに」

幽香に言われなくとも、早苗には、グランチャーの身体の上に立つふたつの人影が見えた。

ひとつは咲夜だが、もうひとつは誰なのが分からなかった。まぁ、多分紅魔館の住人なのだろう。

そういえば倒れているグランチャーの近くにも、もうひとつ人影が

あった。
それも恐らくは同じだ。

早苗達は、咲夜から直接事の経緯を聞こうと、それぞれのグランチャーを、深紅の個体の前に降下させた。

そうして、いの一番に装甲を開き胎内から飛び出した早苗が、そのまま宙を舞って咲夜の前にまで降りたった。
美鈴も入れて、狭いグランチャーの脚の上に三人が揃って立つことになる。

戸惑う・・・というほどではないが、突然の早苗達の来訪に少し驚いていたのは確からしい咲夜に対して、彼女は口を開くなりこう言った。

「咲夜さん!・・・これ、一体っ・・・どうしたんですかっ?」

驚いているとはいえ、咲夜は、美鈴に哀しみを吸われたかのように落ち着いており、突然の早苗の声にも、彼女が何を聞きたいのか理解できた。
彼女はその問いに、すぐ応えた。

「ブレンパワードと戦い、破れた。その結果よ」

「そ・・・そんなぁ・・・・・・咲夜さんとグランチャーが、やられるわけなんて・・・」

「ん・・・グランチャーの名誉のために言うけど、本来なら勝てる戦いだった・・・全ての非は私にある」

「え・・・?」

「私が少し彼と離れたその隙を狙って、ブレンパワードが奇襲を仕掛けたの・・・オーガニックエナジーが安定していない状態のグランチャーを不意打ちされて・・・急いで彼の下に駆けつけたけど、その時には・・・」

「・・・・・・っ」

早苗は、驚愕の極地といった表情で固まり、動けなくなった。

少し遅れて、幽香と藍も早苗の傍にきた。
さすがにこれ以上グランチャーの脚の上には乗れないので、宙に浮遊している。

「早苗、咲夜はなんて?」

と聞いてくる幽香に、早苗は落ち着いて反応ができなかった。
咲夜の語った言葉が、貫くような衝撃となって脳髄を襲っていたからだ。

ようやく発することができた声も、
「はひっ?は・・・はい!」
と、裏返ったものになっていた。
しかも、返事をできたのはいいが、幽香が何と言ったのかよく聞き取れなかった。

「え・・・えぇっと・・・」

何か質問してきたらしくそれに応えようとするが、そもそもどんな質問だったのかも分からず、どもる早苗の姿を見て、呆れたように苦笑しつつ、彼女がもう一度聞いた。

「咲夜さんからお話を聞いたんでしょう？なんて言ってたの？」

「・・・それは・・・それ、はですね・・・」

質問の内容が分かったら分かったで、まだ応えることができなかった。

確かに、早苗は咲夜から事情を聞いていたはずだし、それがどういうことなのかも理解はできていた。

だというのに、それを幽香達に伝えることができないでいた。

頭が混乱していたからかもしれない。

やるべきことは分かっているのにそれができず、その場に固まってしまっていた早苗に、一周回って逆に好意（好奇？）を込めた笑みを浮かべた幽香が近寄って、彼女の背中を軽くぽんぽんと叩いて、言った。

「分かった。もういい・・・だらしない娘ね・・・」

次いで彼女は、ふわふわと宙に浮いたまま、ちらりと咲夜の方に眼を向けた。

そうして、美鈴と隣り合って立ち、怪訝そうな顔をする彼女に、今度はにやりと不敵な笑みを向けて、言った。

「初めまして・・・ではないなぁ・・・十六夜　咲夜」

「・・・えぇ、風見　幽香さん・・・話には聞いています」

「お手数だけど、私達にも事情を話してくださる？」

そう伝える幽香に、咲夜はすぐにこう返事した。

「えぇ、それは勿論・・・ただ・・・」

「ただ？」

「一旦降りさせていただきます・・・いつまでもグランチャーの身体を足蹴にはしていられない」

「ふむ。そうね」

幽香の返事を聞き、咲夜と美鈴が、グランチャーの腿から飛び降りて地面へと降りたった。

早苗もそれに続き、グランチャーの身体から降り、地面に立った。

それと共に、何故だかふと後ろを振り返った彼女は、すぐ目の前に見えた深紅に染まるグランチャーの装甲に、無性に触れたくなった。

理由は分からない。

触れようか触れまいかと考える以前に身体が先に動き、右腕を伸ばした彼女は、ピンッとまっすぐに伸びた四本の指先の腹が深紅の面を撫で、そこから冷気が伝わってくるのを感じた。

「・・・・・・」

自分のグランチャーの身体を撫でていた時には、感じることなどなかった冷たさだ。

これが、アンチボディが衰弱し、生命を終えようとしている、ということなのだ。

そういう感覚がこれだ。

それが直感的に分かり、思わず息を呑んだ早苗は、視線を感じて今

度は左の方を向いた。

そうして、咲夜と美鈴が不思議そうな顔でこちらを見てきていたので、自分が失礼なことをしていると思い飛び上がるように身震いしながら、伸ばした腕をすぐさま縮めた。
それから、大慌てで言葉を連ねた。

「あっ！あのっ・・・すみません！勝手に触れたりして・・・」

びくびくする早苗に対し、咲夜の表情は穏やかだった。
暗く沈み、無表情にも見えるその表情にも、僅かながらに笑んでいるような雰囲気が見える。
そんな顔色の咲夜は、静かに早苗に言った。

「構いませんわ・・・グランチャーが嫌がらないから、どうぞお好きに・・・」

「・・・・・・」

その言葉を聞いた早苗は、咲夜の口調の空虚なまでの静かさを心の内で噛みしめながら、しばらくぼーっと彼女の顔を眺めていた。
が、それからしばらくして、許可を得たため、気を取り直したようにもう一度グランチャーの装甲に眼を向け、その深紅の身体を指で撫でた。

早苗がビクリとしたのは、もしかしてグランチャーが嫌がっていたのではないかという意識があったからだが、改まってみると、咲夜の言う通り、グランチャーは特別嫌がっているようではなかった。
というよりそもそも、あまり大きな感傷を受けているようにも感じなかった。

あくまでも他人である早苗に触れられたところで嫌ではないが、その代わり、例え彼女が傷ついたグランチャーのことを可哀想だと同情しても、よく戦い抜いたと賞賛しても、それが慰めになるようなこともなかったようだ。

グランチャー・・・特に咲夜のグランチャーは、咲夜と自分自身（あとはもういくつかの者が当てはまるのだろうが）という狭い絆だけを重んじ、それ以外の関係を気にも留めない。

だからこそ、極論を言えば早苗のことなど、どうでも良かったのだ。

しかし彼女は、そのことでグランチャーに幻滅するようなことはしなかった。

ただ、やがて死ぬことが分かっている今でも、そんな、ある意味クールと言えそうな性質を失わないグランチャーのことを、とにかくそういう存在なのだと受け入れるだけだった。

尊敬、とまではいかないが、これがグランチャーなりの生き方なのだと、素直な気持ちで思った。

咲夜が、傍に降り立った幽香達に事の顛末を、美鈴とのいさかいとその解消も含めて詳しく話すのを端で聞きながら、指先から伝わる死の冷たさを確かめ、耳から入る咲夜の言葉を脳裏で反芻し、考えていた。

――グランチャーをこんな風にしたのが、あのブレン達だなんて・・・・しかも、咲夜さんと仲直りしたかった美鈴さんって妖怪のことまで利用して・・・ずっと待ち構えていたんだ・・・――

そんな中だった。

早苗はふと、ある考えが脳裏を通り過ぎるのを感じた。

ブレンパワードを駆る者達は、咲夜が美鈴と出会ったのを好機として、これ見よがしにグランチャーを奇襲した。
ずっとそのタイミングを見計らっていた。
となれば、ブレンパワードの側にいた妹紅と慧音。
彼女らだって、そのことは知っていたはず。
知っている上で、太陽の畑まで来たというのか？

しかし彼女らは、グランチャーを狙っているなどということは一言も話していなかった。

何故言わなかったのだ？

首筋の辺りから頭のてっぺんにかけて、チクリと指すような痛みが駆け巡ったのを感じた早苗は、事情を話し終えた咲夜、そして聞き終えた幽香達の方に、眼を見開き強張った表情を浮かべて歩み寄りながら、うわごとのように言った。

「ちょ、ちょっと・・・ちょっと待ってください・・・妹紅さん・・・彼女達はどうなるんです？」

彼女の声を聞き、皆が振り向いてくる中で、幽香が聞き返してきた。

「どうなるって？」

「お二人とも、地底の者達がグランチャーを狙っていることは知っていたはずです・・・それなのに私達の下に来るなんて・・・それに、襲撃のことも、なんにも言わないで・・・」

それを聞いた幽香が、微かに眉をひそめた。
しかしそれは、早苗の言葉を聞き、同じ疑問を抱いたから、というわけでもない。
冷静さを欠いている早苗には、そうは思えなかったが。

「・・・それは・・・」

幽香が彼女の疑問に応えようとするが、それよりも早く、さすがに式らしい頭の回転の速さで、藍がすぐさま応えた。

「知った上で、あえてこちらに来たんだろう・・・ブレンパワード側につこうかこちら側につこうか、本当に悩んでいたんだ・・・襲撃について話さなかったのは、ブレンパワード達に対する義理か、そうでなければ・・・」

「そうでなければ・・・」

藍が続く言葉を発する前に、僅かに俯いて思考を巡らせた早苗は、ある結論に至った。

そうだ・・・
妹紅達が太陽の畑に来ていなければ、自分達はもう少し早く紅魔館に来て、グランチャー達の戦闘を知り、救援に駆けつけることができた。
もしかして妹紅達は、そうさせないために自分達の下にやってきたのか？
話をすると称して、こちらの動きを封じるために。

そのことが分かった瞬間、早苗は、胸の内から、途端に燃えるような熱が湧き出てくるのを感じた。
それは一瞬のものであり、熱いと感じたその瞬間にはもう半ば消えていたが、人肌に抱きつくようなじんわりとした熱だけは残り続けていた。

こちらの事情は話したが、早苗達の事情は何も聞いていない咲夜達は、何事だろうか?といった表情で彼女らを見ていた。
彼女らが地面に降りてきたので、その傍まで歩み寄ってきたこあも、咲夜と美鈴、そして早苗達を順々にちらちらと見ていた。

グランチャーの死に対して、早苗達が動揺しているのは確かだった。
しかしそれに対して、グランチャーに乗っていた当人である咲夜と、彼の者を間接的に殺めた美鈴は、耐えがたい哀しみを感じながらも、感情の全てを、美鈴の慟哭に乗せて発散させることで、一時だけだろうが、それを受け入れるつもりになっていた。
だから、またしてもと言うべきか、彼女らの落ち着き様と早苗達の動揺も、どこかずれたものになっていた。

眼を見開き、口をぼんやりと開け、何度目か分からないが、固まり動けなくなった早苗。
彼女は、胸の内から湧き出てきた熱が、全身のありとあらゆる細胞に染み込んで、さながら癌のように広がっていく中で、その熱の正体が分かってきた。

怒りだ。

生きるために、というのは分かるが、卑怯にもグランチャーを不意打ちし、大勢で取り囲んで襲いかかったブレンパワード達。
そしてそれ以上に、グランチャーを信じていると言いながら、こちらを騙し、咲夜達を助ける機会を潰した妹紅達に対する怒りだ。
彼女らの言っていた言葉は、全て嘘だったというのか？
いや、もしかしたら、真実であったかもしれない。
今になって脳裏で思い返してみても、妹紅がグランチャーに対しての思いを語った言葉には、真実味があった。
だが、それなら尚更だ。
彼女は、グランチャーのことを信じ、もう一度彼の者達とやっていくつもりでいながら、そのグランチャーを殺める行いに加担していたことになるのだ。

「・・・く・・・っくぅぅぅぅ～～～・・・っ！」

気づいた時には早苗は、歯を食いしばり、両の拳を思いっきり握りしめ、身体を強張らせていた。
そうする身体の反応に相乗するように、胸の内から湧き立ち全身に広がっていく熱もより一層増していき、やがて、彼女の身体の内で燃え盛る真っ赤な炎となりつつあった。
そしてその炎が爆発となって弾けると同時に、彼女は衝き動かされたように、胸の前で右の拳を、広げた左手でパンッ、と受け止め、叫ぶように吐き捨てていた。

「はあぁぁぁぁぁぁぁーーーっ！！」

突然のヒステリックな声に、さすがの幽香や咲夜もびっくりして、皆、眼を点にして驚いた。

そんなことは気にも留めず、早苗は叫びを連ねる。

「誰も彼も・・・どいっつもこいつもがロクでもない者ばっかりっ！ブレンパワードにも幻滅しました！妹紅さんと慧音さんにもです！・・・もうあの人達のことは、絶っ・・・対に許しませえーーんっ！」

最初は驚いたが、蓋を開けてみるとなんてことはない。

いつもの早苗だった。

が、いつもの早苗がこれだけ怒るというのは、相当のことであるのだ。

幽香や藍には分からないことだろうが、今この場に神奈子達がいれば、そのことを実感していたはずだろう。

他人のグランチャーの死。それと、戦いとあればある意味で正常な行いであるともいえるブレン達の策略に対し、こうまで怒ることができるというのは、心が真っ直ぐな証だ。

そう思う中で、点にした眼を下に戻した幽香の表情が、少しずつ別のものに転じ始めていた。

早苗は次いで、きりっ、とした眼つきで咲夜の方を向くと、こう続けた。

「咲夜さん！貴方のグランチャーの仇は、私達が必ずっ！取ってみせます！ブレンパワードを打ち倒して、オルファンも止めるっ！貴方達に酷い事をした妖怪達も、みんな退治してぇー！・・・思い知らせてやりますっ！・・・ねぇ、幽香さ・・・」

次いで幽香の方に振り向いた早苗は、今までの怒りも全て吹き飛ぶほどに驚き、息を呑んだ。

彼女の表情が、あまりに恐ろしかったからだ。

うっすらと笑みを浮かべたその眼元には暗い影が落ちているが、その奥にある眼窩より放たれる鋭い眼光が赤く丸い光となって浮かび上がっていた。

のみならず、彼女は喉を鳴らして、微かに

「く・・・っく・・・っく・・・」

と笑っていた。

叫ぶことも忘れて、慌てて彼女の方に歩み寄った早苗が、呼びかける。

「どうしたんですか、幽香さんっ?私が言うのもなんですけど、そんな顔をして・・・」

それに幽香が、静かなはずなのに、耳元でささやかれているようにはっきりと聞こえる声で応えた。

「いいじゃない、別に怒っても・・・・・・手伝わ。私とグランチャーの力を貸しましょう」

「・・・・・・っ」

そう言いながらこちらを振り向いた幽香の見開かれた眼に射ぬかれた早苗は、自分の心臓が破裂したような錯覚を受けた。

そうして、彼女の中の怒りが、自分の抱いた怒りが及びにならないほどのものであることを知った。

それを知った途端、感じたばかりの恐怖心が消えた。

心臓の破裂も、当然のことだが、単なる錯覚であると分かった。
次いで感じたのは、こんな幽香が駆るグランチャーは、きっと頼りになる、ということだった。
冷や汗をかきながらも、引きつった顔を元に戻した早苗は、幽香の返事にさらにこう応えた。
「わ・・・わ、分かりました。幽香さん・・・頼りにしてます」
「・・・ん」
表情を僅かに和らげ、まだ愛嬌があるような（先程と比較しただけだが）顔で頷いた幽香の顔を見る中で早苗は、彼女への畏敬を感じる中で、何か違和感があるのも感じていた。
なんというか・・・彼女の抱いている怒りは、早苗のものとは根本的なところで大きく違うような気がしていた。
しかしながら、その根本的な違いが何なのかは、早苗には分からない。
それに、幽香に問いただしてみても、満足のいく答えが返ってくるとは思えなかった。
そしてもうひとつ強く感じることは、幽香は、早苗や藍・・・もしかしたら咲夜以上に、抗体という意味合いの名を持つアンチボディの、さらなる抗体になっているかもしれない、ということだった。
※

時は遡る。
未だ、ブレンパワード達が湖の奥深くで機を覗っていた時のことだ。

今や、そこが以前は高温に包まれた硫黄泉地帯であることを忘れさせる様相になっていたオルファンの周囲の花畑に立つ、ひとつの人影があった。

永琳だ。

彼女はある考えの下、再び『そのもの』が咲かせるオーガニックエナジーに反応する花を、ほんの一輪だけ採取しに、この場に訪れていたのだ。

彼女の中でも、少しずつアンチボディというのがどういう存在なのか、どういう性質を持っているのかという仮説が出来つつあった。
その仮説を実証することができれば、『そのもの』達が求めるビープレートなるものへの大きな手掛かりが得られると考えていた。

いつぞや、例の八雲　紫が言っていた言葉が思い出される。

ビープレートとは、どこかにあるものではなく、どこにでもあるもの。
あるいは、どこかから生み出されるもの。

その言葉を鵜呑みにして信じてみれば、まったくの暗中模索だった中に、一筋の光が見えてくる予感がしてきたのだ。

その場にしゃがみこみ、手の伸ばすと同時に淡い光を放つ黄色い花を、地面から抜いて摘み取りつつまた立ち上がった永琳は、高々とそびえるオルファンの威容を見上げて、こう呟いていた。

「個が全であって、全が個であるということを、実践しようとしているのが貴方達なのだと、私は考える。それが正しいかはまた別として・・・・・・まぁ、世の中っていうのは計画、行動、検証あるのみ。じきに、貴方達の願いもかなえられるでしょう・・・もう少しの間お待ちなさい」

そうして彼女はそのままゆっくりと、地底へと戻っていった。

実をいうと、彼女がこの場に花を摘みにきたのは、自分の中にある考えを実証するためでもあったが、もうひとつ理由があった。

この前摘んできた花が、どうにも元気がないようだった。
もしかしたらそれが、一輪だけで寂しかったからなのかもしれない、という考えがあったからだ。

なら、もう一輪摘み取ってくれば、少しぐらいは元気になるだろうと思ったからだ。
さらに言えば、それこそが、永琳が考えている、ビープレートへと繋がる考えのひとつであったのだ。

第十五話『散華のその後』　その1

グランチャーとの戦いが終わり、ブレン達が地底に戻ってきた翌朝。

永琳は、地霊殿にて割り振られていた自室の中、椅子に腰掛けて、机の上に置かれている小さな鉢植え・・・そこに植えられている二輪の花を眺めていた。

その花は・・・

と、前触れもなく部屋の扉が開けられ、その向こうから、聞き慣れた声が響いてきた。

「ちょっと、入りますよ」

すぐに声のした方に振り向くと、にとりが早々に部屋の中に入って、すぐ傍まで歩み寄ってくるのが見えた。

その様子に、永琳がため息混じりにいう。

「ノックぐらいは・・・」

「あ・・・いやぁ、すみません。ちょっと頼みたいことがあって・・・」

謝りながらも、そのまま永琳のすぐ近くにまできたところで立ち止まったにとりに、彼女は顔だけでなく身体全体を向けてから、聞き返した。

「頼みたいこと？」

「んえぇ。ブレンと魔理沙達が戦いやすいように、ブレンの胎内にシートを設えようと思うんです。身体が固定できるようなね」

「へぇ・・・コックピットという奴ね・・・また急にどうして？」

「いえね。前々からそうした方がよさそうだと思ってね・・・昨日の戦いもあるし。

これからグランチャーとの戦いも多くなりそうだから、早いうちにそうした方がいいと思ったんです。

それにあたし達みたいなのは、直接グランチャーと戦う訳じゃないから、せめてあいつらがやりやすいようにいろいろ考えてやらないと・・・」

「なるほどねぇ。ごもっともです・・・でも、どうして私に？」

「コックピットの設計のためにですね、今河童達でブレン達の胎内の寸法を測ってるんです。

それでそのシート・・・コックピットを、木材から骨組みを作って胎内で組み立てようと思ってるんですよ。

ただね。まず、ブレン達がそんなことをするを許してくれるかどうかがまだ分からんのです。

だから永琳さんに、生物的な観点から見て、どんな感じか見てもらいたいんですよ。素材になる木材はもうあるから、それがブレンに合うかどうか」

「・・・そういうのは、ブレンの宿主に頼んだ方が確実だし、いいと思うけど？」

「確かにそうなんでしょうけど、永琳さんがいてくれりゃ、なおのこと確実でしょ？」

どうにも買いかぶりすぎな印象もあるにとりの言葉に、永琳は含み笑いをしつつ、応えた。

「ん・・・まぁ、そうかもしれないわね・・・分かりました、行きましょう」

「はい・・・あ、そぉそう。それとねぇ」

「なに？」

「シートの部品は大分精密に作らないといけないから、一旦河童の里に戻って、向こうの設備を使いたいんです。だから、しばらくの間地底から離れることになるんすけど、構いませんか？」

「ん・・・ここじゃ十分な設備はないものね。私としては一向に構いません。けど、何かあった時のための調査できる人員は要るから、何匹かは置いといて欲しいわ」

「そりゃ、もちろんそうします」

「・・・それなら・・・用意はすぐにできるんでしょう？いきましょうか」

そう言いながら、永琳が徐に椅子から立ち上がった時だ。

にとりが、机の上に置いてある鉢植えを指差して、言った。

「それ、この前採ってきた花ですね？なんか、増えてるような気がするんですけど・・・」

その声に、花の方を向きなおした永琳は笑みを浮かべて、
「あぁ、これはね・・・」
と応えてから、再びにとりの顔を見直して、続けた。

「昨日、もう一輪採ってきたのよ」
「どうしてです？一輪だけで寂しそうだったんですか？」

「あっはは・・・まぁそれもあるけどね。まだあるのよ」
「？」

「そうねぇ・・・いい機会だし、貴方には教えておきましょうか・・・いろいろ分かってきたことがあるの」
「なんです？」

「どうやらオーガニックエナジーというのは、異なる二つのもの同士がうまい具合に協調した時、互いに高めあう性質があるようなの」
「・・・えぇっと・・・チャクラエクステンションのことですね」

「それもあるし・・・この花もよく見て」

永琳に言われた通りに、花瓶に植えてある花を見たにとりは、彼女がこの花から何を見てもらいたいのか、すぐに気づいた。

「そういやぁ、あんたが摘んできてすぐは、ちょっと萎れてた気がするけど、今は大分調子よさそうですね。
・・・そうかぁ・・・これもさっき言ったことと同じなんですね？」
「そう・・・ひとつだけよりも、ふたつが一緒にいれば、オーガニックエナジーが高められて、双方とも色鮮やかになる。
それでもまだ、これだけじゃオーガニックエナジーの量としては少

ない」
「でも、さらに何十、何百と集まれば、それだけのオーガニックエナジーがさらにどんどん高められて、とんでもない量になる、って寸法かぁ～っ。
それこそ、オルファンが生きていけるだけの・・・」
「ん・・・そしてそれは、この花だけに言えることじゃないでしょう」
「チャクラエクステンションを考えれば、ブレンだって同じなんだ・・・魔理沙やさとりちゃん達のオーガニックエナジーを高めたブレンがさらに何十と集まれば・・・」
「そう・・・・・・そして私は、そうすることで、あのビープレートを手に入れることができると考えてるの」
「ブレンが、互いの力を高めあうことで、ですかっ？はぁ～っ
・・・・・・でも、それには・・・」
永琳の言葉に驚きつつ、どこか納得した様子のにとりだったが、同時に、疑問も頭の中で浮かび上がっていた。
永琳にもその疑問は分かっていた。
「ん・・・そうするには、まだブレンの数が少なすぎる・・・ここにいるブレンだけでは、とてもビープレートと呼べるほどの莫大なオーガニックエナジーは得られないでしょう・・・
もしかしたら、今幻想郷にいる全てのブレンを集めても無理かもしれない・・・
ブレンだけじゃなく、グランチャーとも協調しなければ・・・」
そんな永琳の声を聞いたにとりが、眼を点にして言う。

「それこそ無理な話でしょお～っ。ブレンとグランチャーが仲良くするなんて・・・」
「そうなんだけど、それぐらいしないと、やっぱり無限のオーガニックエナジーに通ずるものは得られないのよ・・・
理屈は間違ってないと思うんだけどね・・・」
「そりゃねぇ・・・みんなが仲良くすればそれで万事よしなんてのは、素敵ですけど・・・
理屈はそうでも、世の中理屈だけでできてないから・・・」

「そりゃ、私だって分かってるわ」

異変の発覚からそれなりに日が経った今、永琳はその解決に繋がる可能性をいくつかは思い付いていた。
が、その多くはやはり仮説の域を出ることはなく、可能性が確実性になるような実証を立てようにも、それすら困難な状況だった。

永琳はひとまず、今この時においては考えることを諦めた。
この先自分達が取るべき行動自体は、考えればいくらでも、何通りでも思い付くのだろうが、それを実行できないと分かっていたからだ。

ため息をひとつついた彼女は、軽い笑みを浮かべて言う。

「まぁ、ここで考えることじゃないわね・・・この考えは、一応みんなにも伝えておきましょう。今後、また熟慮を重ねていく」
「そうですね。ゆっくり考えてきましょうよ」
「ん・・・さて、中庭ね？いきましょう」

ふたりは、話し合いを適当に切り上げつつ、ブレンと河童達の様子を見に部屋を出て、中庭へと向かった。

部屋からの去り際に、にとりがこう聞いてきた。

「そういやあの花は、どうするんです？」

突拍子もない質問だったので、永琳は思わず

「え？」

と聞き返しつつ、ぼんやりと考えながら、何の気なしにこう応えた。

「あの花を調べていたら、またいろいろ分かってくることもあるだろうし・・・もうしばらくはここに置いとくわ・・・

それになんだか、あの花、綺麗だから気に入ってるのよ。自分の存在を示すように光る花なんて、愛おしいとは思わない？」

「んん～・・・あたしは、機械屋なんでねぇ・・・・・・・でも、花はともかくとして、ブレンは好きです」

※

太陽の畑の上空には、今日も早苗の駆るグランチャーが飛んでいた。

だがその様子は、昨日、妹紅が来る前とは、明らかに違っていた。

何よりもまず、彼の者に乗り込む早苗の放つ雰囲気が。

花畑に咲き誇る無数の向日葵が成す、黄色と茶色の絨毯の上に、まるで見えない足場に仁王立ちするかのように浮遊していたグランチャー。

その胎内を隔てる装甲を開きっ放しにして、その上に彼の者と同じように仁王立ち、高空を吹き抜ける風に煽られていた早苗は、何か理由があるというわけでもなく、とにかく叫んでいた。

「貴方の憤りは、我が身のこととして分かります、グランチャー・・・
そうですともーっ！」

叫びながら、どこかに向けてびしっ、と真っ直ぐに右の人差し指を向けた。

そこには、どこまでも広がる空と、そこに点在する白い雲があるばかりにしか見えなかったが、実際はそうではない。

早苗が指差す遥か彼方には、地底・・・そして、彼女とグランチャーの敵であるオルファンがいる。

早苗の視線は、確かに『そのもの』へと向けられ、その眼に金色の姿を映し出していた。

彼女はさらに叫ぶ。

「今、私達の心は、ブレンパワードとオルファンさんを食い止めるために、ひとつとなっています！今の私達を止めることは、地底の小生意気な妖怪達には、できやしないことなのです！
やるわよぉー、グランチャーっ！」

早苗は、今すぐにでも地底に向かってブレンパワードと一戦交えてきそうなほどに興奮していたが、そうやって野蛮な突撃を敢行する直前のところで堪えることができていた。

というのも彼女は、ブレンに対する雪辱を晴らす以上に、まだやる

べきことがあると考えていたからだ。
そしてそれが、これから必ず来るブレンとの決着に際して、いい結果をもたらしてくれることが分かっていたからだ。

早苗は、相変わらず大きな声だが比較的落ち着いた様子で、さらに言葉を連ねた。

「ですが、残念なことに、私はまだ、貴方が全力で戦った時、貴方の調子に合わせる自信がないのですっ・・・貴方が激しく動きすぎると、スリットウェハーにしがみつくことができなくなる・・・ですからっ！貴方にも少し我慢をしてもらいます！
心配はいりませんっ。我慢と言っても、戦うことを我慢するんじゃありません。
少し窮屈な思いをするだけです。
それもそれで大変かもしれませんが、貴方のその戦う意志があれば、多少居心地が悪くても、きっと気にならないはずですっ・・・・・・降りましょう」

激励の言葉から続く命を聞き、グランチャーはゆっくりとその場から降下を始め、幽香の屋敷の方へと向かっていった。

さて、朝早くからグランチャーを乗り回して花畑の上空にいた早苗の様子を、他の者達も眺めていた。
神奈子と諏訪子もそうだし、幽香と藍も一緒になって、屋敷の外から、上空に見える白いグランチャーの姿を眺めている。

神奈子達としては、遠くに見えるその姿から、早苗のただならぬオーラというものが感じられるような気分だった。

諏訪子が言う。

「早苗・・・大興奮だなぁ～・・・」

それに神奈子が続く。

「あそこまで怒った早苗は、強いし、恐い・・・ちょっと間抜けなところもあるのが残念極まりないけど・・・」

――誰に似たんだろうねぇ。ホント――

と、そんな二柱に対して、藪から棒に幽香が言った。

「間抜けだろうとなんだろうと、私はあの娘のこと、気に入りましたわ」

「んっ？」

突然の言葉にびっくりしそうになるところを、神としての威厳のためになんとか堪えたつもりだった神奈子だったが、案の定、びっくりしたことも、以前から彼女らの中にある幽香への猜疑心も、全て当人に知られてしまっていた。

後者に関しては、当の昔から知られていたのかもしれない。

幽香は、残念そうな笑みを浮かべつつ言う。

「侵害です。私とて、混沌の淵の中から生まれたわけではない・・・恐れられるのはともかく、何を言ってもびくびくされるのは、さすがに辛い」

「・・・びくびくなんぞ、しておらぬ」

「ふ・・・それに私は、早苗のことは本当に好意的に思っています。最近の幻想郷の、生半可にかしこぶってる人妖共に苛々していた中で、あんなに自分の意思に正直な人間と一緒に会えたことはいい刺激になった。
あの娘と一緒にいると、個人的には楽しい・・・
貴方達も、私が苛つく種類の存在だけど、貴方達じゃなくてあの娘のためになら、私とグランチャーの力、貸してみようと思う。
十六夜　咲夜のグランチャーを仕留めて見せたブレンパワード達に、多少現実というのを見せてやりたいっていう気持ちは、私も持ってるしね」

僅かながらの沈黙がその場を過るが、その静けさは神奈子の言葉がすぐに破った。

「・・・どうも、やっぱりそなたを信用こそすれ、信頼するのは難しいようですね・・・
が・・・早苗のことをいいように言ってくれたらしいことは、認めよう」

神奈子のそんな言葉と共に、彼女と幽香の、疑念や敵対心とはまた違った奇妙な鋭さを持つ視線がぶつかり合う中で、ふたりは、割って入るような諏訪子の声を聞いた。

「そうやってあーだこーだ言い合ってる内に、ほら。当の早苗が戻ってくるよ」

言いながら彼女が指差した方向に眼を向けると、確かに早苗のグランチャーが、こちらに向かって降りてきていた。

遠くで小さく見えていたはずのその影は段々と大きくなりその本来の威容を取り戻しながら、やがて彼女らの目の前へと、小さな屈伸運動をしつつ、重いものが大地にめり込む独特のずっしりした音を響かせて降り立った。

すでに股間部の装甲は開いており、その上に立っていた早苗は、そのまま硬い装甲を軽く蹴って飛び降り自由落下に逆らって、まるで月の上にいるかのようにゆっくりと地面に降りた。

神奈子と諏訪子が、すぐに彼女の方に歩み寄りながら（遅れて幽香と藍も早苗に近づく）、

「早苗ー！」

「早苗～！」

と呼びかけるのに対し、彼女は開口一番にこう言った。

「神奈子様！諏訪子様！あとお二方ーっ！コックピットを作ります！」

「はえぇっ？」

諏訪子の頓狂な声に続き、神奈子も思わず

「こっくぴっと．．．？」

と漏らしながら、その場に立ち止まって、ふとあることを思い出していた。

自分達が幻想郷にくる以前、早苗は熱心にテレビで何かを見ていた。

その時に、コックピットという言葉が聞こえたような気がする。

そうでなくとも、長らく幻想郷の外の世界にいれば、神道とは無縁

の言葉も多少は覚えてしまうものだ。
コックピットというのは確か、飛行機だかに人が乗り込んで操縦するスペースのことを言う。

早苗はそれを、グランチャーに設けようというのか？

しかし・・・

向こうからこちらに歩みよってきた早苗に対し、神奈子は言った。

「コックピットって言えば、機械を動かすためのものでしょ？グランチャーはそんなのなくても充分動くじゃない」

その言葉には、早苗ではなく、後ろから付いてきていた藍の方が応えた。

「そういうんじゃなくて、身体を固定するためのものですよ・・・
そうだろ？」
続けざまに聞かれた早苗は、すぐさま
「そうです」
と応えてから、さらに続けた。

「私達は、グランチャーを駆り戦う準備を何もしていませんでした。考えてみれば、スリットウェハーに必死にしがみついて戦うなんてのは、アホだったんですよ！
グランチャーも、遠慮するつもりはなかったんでしょうが、本能的に私達を傷つけないように動いていたんだと思います。気を遣わせてたんですよ。

ちゃんと胎内で身体を固定できるようにすれば、あの子達だって戦いやすいし、ブレンパワードとの差をつけることだってできますっ」

「ああ～・・・なるほど」

と頷く神奈子に続いて、幽香が続けて言ってきた。

その声音は、少し呆れているようでもあった。

「気づくのが遅すぎる・・・そういうことなら、私のグランチャーはもうそうしてあるわよ」

それを聞いた早苗が驚いた様子で、眼を点にして聞き返した。

「えぇっ？本当ですか！？」

「えぇ、身体を固定するものでしょ？それなら、私のグランチャーに取り付けてるわ・・・木材で作った貧相なものだけどね。

それでも、グランチャーに激しい動きをされても振り払われないだけのものではある」

それを聞いた途端、早苗は今度は顔をぱっ、と輝かせて、尊敬の眼差しを幽香に注ぎながら、言った。

「わぁ～、さっすが幽香さん！見せて頂いていいですかっ？同じもの作ればそれでいいわけですから、かかる時間がずっと短くなりますよ！」

それに幽香も、にこやかな笑みを返しつつ応える。

「胎内に入るのは許さない。けど、外から見るだけならどうぞご自由に・・・

頭の中で浮かんでる範囲でなら、作り方も教えましょう」

それに早苗は、興奮もひとしおと言った様子で、先程と同じように右拳を左手でパンッ、と受け止めてから、声高らかに言った。

「よぉ～し！これならすぐにでもコックピットは出来上がるっ。私達のグランチャーはもっと戦いやすくなるんです！そうなれば、ブレンパワードをみんなやっつけて、オルファンさんの思い通りになんかならなぁいっ！」

この、喧しいほどの高らかな声は軽く聞き流しつつ、幽香は笑顔のまま、彼女の傍らまで歩み寄り、その背中をぽんぽんと叩きながら、言った。

「まぁまぁ、それなら、早速見に行きましょうか」

「はいっ」

元気よく挨拶した早苗だったが、突然片腕をこちらの肩に回し顔をぬっ、と寄せてきた幽香には、またいつぞやのように驚いてしまった。

前触れもなく、頬を寄せながら不気味なほどに不敵な笑みを浮かべる幽香に、軽く身震いする早苗に対し、彼女は静かにこう言った。

「だけど、その勇ましさは、咲夜の復讐のため？」

「え・・・そ・・・そうですっ」

「・・・・・・」

幽香の顔つきが僅かに険しくなった。

早苗にはその理由がまったくもって見当もつかなかったが、それでいて、心の奥の方では、彼女がこういう顔をするのも、なんとなく

理解できるような気もした。
幽香はさらに、静かな声で続ける。
「ん・・・仇打ちだとか、復讐だとかのために戦うのも悪くはないだろうが、まだまだ野蛮ね・・・」
「え？」
聞き返す早苗に、さらに、べったりとくっつくほどに頬を寄せて、幽香は言う。
「力強さは得られるだろうが、大事なものを見失うかもしれない」
「大事なものを・・・？」
肩に腕を回したまま、屋敷の傍に佇立していたグランチャーの方へ歩きだし、半ば早苗を引っ張るようにした幽香に歩調を合わせて歩く中で、早苗は彼女の語った言葉の意味を脳裏で咀嚼してみた。
大事なもの・・・
戦いの根幹に根差すもの・・・
グランチャーが生きる理由を、見失うな、ということなのか？
グランチャーが生きること。
それは、戦うことだ。
グランチャーは戦うために生まれてきた。
彼らは自らをそう規定し、そのことを誇りにしている。
ならば、戦うことに理由を含まず、ただその流れに身を任せればいいと？
理由があるから戦うのでなく、戦うことそのものを理由にすると・・・

そしてグランチャーが戦うのは、単にそのために生まれてきたというわけだけではない。
戦いの先に、何かがあるからだ。
その何かを得るために、人間としての怨念で戦うより、グランチャーの方に合わせた方がいい。
もちろん、その何かを得る以上に、グランチャーはまず自分達の本能に任せて、戦う気概でいた。
それに合わせるべきだ。

早苗は、多分幽香はそう言いたいのだろうと考えた。
咲夜のグランチャーが倒されたことの恨みを晴らすために戦うのもいいが、そのために、本当の目的を失ってはならない。

そして幽香は、それを実践できているのだ。
そう考えると、早苗はますます彼女のことを頼もしい存在だと思えるようになっていた。
だからこそ、自分の脳裏だけで帰結したに過ぎないこの考えを、正しいものであると信じた。

彼女は、突然のことに驚き、不安そうにしていた表情を引き締め、力強く頷きながら、こう応えた。

「分かっていますっ。グランチャーの戦いは、もっともっと純粋なんです。その純粋さに合わせれば、私達は誰にも負けませんよねっ」
「そうだっ」

力強い声に力強く返し、幽香は早苗の頬に寄せた自分の頬を離して、彼女の肩に回していた腕も解いた。
それと同時に、二人は静かに佇む土の色のグランチャーの足元に来

ていた。

自分の肉体と近しい色をした大地の上に両足をしかと踏みしめて悠然と佇むその姿には、確かに、復讐だとか怨念だとか、そんなものからも超越した、力そのものと称するできるような雰囲気を醸し出していた。

早苗自身のグランチャーですら到達していない、抗体としての境地だ。

未熟な自分達では、まだ到底見えてこない領域であると分かるほどの・・・

早苗は、このただならぬ雰囲気に感銘を受けながらも、ほんの一瞬だけ、恐怖さえも感じた。

だがその恐怖も結局は、どことも言えないどこかを見つめながら、その向こう側に、自分達の行き着く先を見つめる彼の者の凛々しさに対する好意と羨望から来るものであった。

※

魔法の森の奥深く、鬱蒼と生い茂る草の根をかき分けて、その影に隠れて頭を出すほどほどな大きさの岩を跳び越え、時につまづきながら、香霖堂の霖之助は進んでいた。

その手には、頭ぐらいの大きさの袋が持たれている。

そこには、ある目的で集められた何冊かの本が入っていた。

彼は、数日前のアンチボディ同士の戦闘により致命傷を受け、森の

一角で死を待つ身となっていたブレンの下へ向かっていた。

というのも、あの戦いから、香霖はブレンパワードに対して興味を抱き、彼の者達に関する謎を解明してみようと考えたのだ。朱鷺子と共に、彼の者の最期を看取ることになった以上、ブレンパワードがそもそもどういうものなのか知る必要があると思った、ということもある。

が、魔法の森の中を歩きまわるならともかく、そこから外にでるのは本能的に気が進まなかったので、地底にいる者達と協力する気にはならず、一人で独自に、勝手気ままに調べさせてもらうことにしていた。

幸い、香霖堂には外の世界から・・・あるいは、どこの世界かも分からないところから流れ着いた本がいくつもある。

量に関しては、紅魔館の中にある図書館に比べることもできないが、本の内容の雑多な具合なら、負けてはいない。

そんな本を、不本意ながら客があまり寄りつかず（これも不本意ながら、常連だった霊夢と魔理沙も地底にこもりっきりであるため最近はほとんどこない）、香霖堂が店舗としての機能を破綻しており暇ばかりがあるのをいいことに、片っぱしから読み進めている中で、いくつか、ブレンパワードやオルファンと共通するところがあるいくつかの情報を得た。

今朝は、その情報を持ってもう一度ブレンと会うことにしたのだ。

「これは痩せるなぁ・・・」

普段しないような運動を（所詮森の中を歩くだけなのだが）して早

速疲れが出はじめ、思わずこんなことをぼやいてしまった頃にようやく、真っ直ぐに、あるいは曲がりくねりながらも総じて空に向かって伸びる木々の幹の間から、白に近いような水色の影が見えてきた。
朱鷺子のブレンだ。

「はぁ・・・」

純粋に疲労感から出るため息をつきながら、ふたつの木の幹の間をすり抜けて、大きな広間へと出る香霖。
早朝の魔法の森は、丑三つ時の不気味な薄暗さを思わせる陰鬱さである（香霖は別にそれが好きでも嫌いでもないのだが）が、この広場に関しては、陽光を遮る枝葉の天井がないため、まるで別世界のように明るくなっていた。
とはいえ、まだまだ朝早くだ。
太陽は充分昇っておらず、暗くないというだけで、お世辞にも明るいとは言えなかった。

とまぁ、そんなことはどうでもいい。
ちらりとだけ空を見上げたが、すぐに視線を降ろした香霖は、そのままゆっくりと、生い茂る草の背丈が低く岩が隠れていないからつまづくこともないし、そもそもつまづくような岩もない地面の上を安心して歩きながら、ブレンの方へと近づいていた。

四肢のほとんどを失ったまま横たわるその姿はやはり痛ましいが、それでもまだ、今のところは落ち着いているように見えた。
もっともその落ち着きも、人形じみたものであったのだが、完全に人形のそれではない。
まだ、ブレンは生きてはいた。
死ぬと岩のように変色してぼろぼろになるというその装甲も、まだ

色鮮やかであるし、彼の者の調子はむしろ良さそうだった。

物にしか（『しか』とは言い切れないが）愛着がない香霖でも、人間のことは知識として分かっている。

今のブレンは、老衰により大往生を迎えようとしている老人と似たようなものなのだろう。

いよいよもって今際の時が近づいてきて、床にてそれを待つのみとなった老人というのは、時たま急に元気になるものだ。

そうして、まだまだ元気だなと思っていた矢先に、風が吹くように弱まり、天寿を全うして、この世から去ってしまうわけだ。

なんでそうなるのかは香霖にははっきりとは分からないが、多分、覚悟を決めて死に臨もうと思えば、逆に死ぬことだけに専念することができるようになって、生命の余裕が生まれるのかもしれない。

死の間際になって、何かが生まれることもあるのだ。

それが、芸術家の作る絵画であったり、文豪の鬼気迫る文章であったりするのだ。

死の直前のエネルギーというのは、そういうものに代わるものなのかもしれない。

人間、たったひとつのことに専念すると、自分でも思わないような力を発揮することがある。

初めて見るような物の使い方だとかを模索して夢中になっている時にそういう経験をしているため、半分は人間でない香霖にもそれは分かっていた。

そしてそれは多分、『死』ということも同じなのだろう。

死も、好意的に受け止めれば、時に心待ちにできるものなのかもしれない。

このブレンの死が、好意的に受け止められるものだとは、彼には思

えなかったが・・・

・・・よく分からなくなってくる。

「そりゃ、僕だって死ぬ時は死ぬだろうし・・・死というものがどういうことか考えることを、放棄しているわけじゃないんだけどな・・・・・・うん・・・」

自分に言い聞かせるように呟きながら、ひとまず、ブレンもそこまで絶望的な状態ではないから安心しよう、と結論づけつつ、彼の者の近くまで歩み寄った香霖は、あることが妙に気になっていた。

「そういえば、股の装甲が閉じている・・・この前は閉じていたか？」

第十五話　その2

横たわるブレンの股間の装甲が、ぴったりと閉ざされている。
だからどうしたというわけではないのだが、香霖はそれがどうにも気になった。

「済まないが、失礼するよ」

そう断りを入れつつ、彼はブレンの身体に上ってみることにした。

「んぬ・・・うおっ、と・・・っ」

残念ながら、文化的な生き方（自称）をしているが故に、空を飛んだりするという高尚な能力など持ち合わせていない彼は、細くなっている腹の辺りのスリットウェハーにしがみつくしかなかった。
そこからひとしきり呻きながら、そこをひと息によじ上ってからブレンの身体の上に乗り上げ、そのまま腰のあたりに移る。

またしても大きなため息をひとつ吐いた香霖は、改めて、閉ざされている装甲へと眼を向けた。

何者か中に入っているのだろうか？

もしかしたら・・・

彼は、ブレンに対して呼びかけた。

「続けて済まないんだが、少しこれを開けてくれ」

それを聞き、ブレンはすぐに装甲を開け放った。

がこん、という、噛み合った金属が外れる音を鳴らして、ブレンの股を覆い隠すような形の装甲が９０。回転し、上を向く。

「うん。済まないな」

ブレンにそう礼を告げてから、香霖は装甲が開いたことで見えてきた大きな穴の縁にゆっくりと近寄り、その奥を覗き見てみた。

「やっぱりだ・・・」

そう呟く香霖の眼には、ブレン・・・ひいてはアンチボディの肉体を形成するスリットウェハーにもたれかかって寝ている、朱鷺子の姿が映った。

一晩中ブレンと共にいて、夜を明かしたのか。

穴の外から見える胎内はやや薄暗く、中の様子はよく分からなかった。

しかしながら、彼女の手に一冊の本が持たれていたのは見えた。

別に不思議なことではない。

朱鷺子に関しては、本と一緒に寝るのがむしろ普通なのだ、とさえ思えた。

「・・・・・・」

香霖はそのまま、寝ている朱鷺子を踏みつけないよう気をつけつつ、胎内に入ってみることにした。

穴の中に身体を落とし、その先にある柔らかい感触を両の足で確かめた彼は、ますますブレンの調子が悪くないことを感じた。

彼の者の胎内が、大分温かかったのだ。

このような中でなら、ぐっすり寝られるだろうな、と思えるほどに。

「・・・・・・あ」

しばらくぼんやりしていたが、ふと上を見上げ、自分が入ってきた穴が遠くの方に見え、外に出る方法を何も考えていなかったことに気づいた香霖。

思わず身体が石のように固まってしまうが、仕方がないから、みっともないが朱鷺子に引っ張って上まで上げてもらえばいいと考え、俯きながら首を左右に振って三度目のため息を吐く。

そうして気を取り直して、すぐ目の前になった朱鷺子の姿に眼を向けた。

が、やはり胎内は大分薄暗く、寝ている朱鷺子の顔はいまいちはっきりと見えなかった。

香霖は、なんでそうするのかも分からないままに、ブレンに頼んだ。

「外の景色を映してくれ・・・光を取り入れるんだ」

その声からしばらく間を置いて、胎内が俄に明るくなってきた。

スリットウェハーに、外の光景が映し出されていたからだ。

昇り始めている太陽が空を照らし、大地を照らすのと同じ明るさが、その場を包みこんだ。

それと共に香霖の眼にも、眠る朱鷺子の顔がよく見えるようになった。

その顔は、意外に思えるほどに穏やかだ。

寝顔だけでそんな判断ができるわけではないのだろうが、香霖はなんというか・・・もう少し焦燥したような顔をして寝ているのだろうと考えていた。

だが実際は、随分と気持ち良さそうに寝ているものだ。

ブレンといい彼女といい、まるでこれから彼の者の死が待っていることを感じさせないようだ。

死を・・・別離を受け入れられているとでもいうのだろうか？

いつぞや、この身に抱きつきながら泣いていたような彼女が・・・？

そうは思えないが・・・

香霖は、つくづく人妖の心は分かりにくいと思った。

なんせ、なんで自分が、吸い寄せられるように朱鷺子の寝顔に顔を寄せているのかも、分からなかったのだから。

「・・・・・・」

いつの間にやら、彼女の顔が視界一杯になるほどに顔を寄せていた香霖は、ただじっと、網膜にその顔を焼き付けていた。

肌が白い。向こう側が透けて見えてしまいそうだ。
それなのに、確かに流れる血潮でほんのり赤くなっていて、その霞んだ白さと活気ある血色が相反しているようでいて、溶け込んでもいた。
今になって気づいたが、彼女と香霖の髪は、色も形もそっくりだった。
これではまるで兄弟・・・下手すれば親子だ。

彼女とはわりと何度も見ているはずなのに、今になってようやくそのことに気づいた滑稽さに思わず吹き出しそうになるのだが、実際は何故だか、含み笑いのひとつさえ起こることはなかった。

閉じた瞼の間から睫毛が伸びている。
微かな寝息が宙を漂って香霖の顔に弱くかかり、鼓膜を揺さぶった。

香霖はこの、すぐ目の前にあるはずの朱鷺子の寝顔が、何故だかひどく遠いところにあるように思えて仕方がなかった。
なんというか、そういう超然としたものに思えたのだ。

だが、遠くといっても、それは距離的な遠くでもないし、おかしな話ではあるが、離れているという意味合いでもなかった。
実際、離れているわけではないのだが。

超然という表現も、語弊であるかもしれない。

なんというか、香霖自身の、決して短くはない人（？）生の中で、始めて感じるものだった。
とても言葉では言い表せられない不思議な感覚だった。
だが、嫌な気分ではない・・・
むしろ、自分が幸福であると思えるような気分にさせるものだった。

それは確かだ。

「・・・・・・」

何故朱鷺子もブレンもこれほど穏やかで、自分はこれほどに奇妙で喜ばしい心の揺らぎを感じているのか？

その理由が分からない香霖は、無意識の内に眠る朱鷺子の頬に右手を伸ばしていた。

ずっと遠くにあるように見えるが、本当はすぐ近く、いとも容易く触れられる場所にいるのだ。

それを確かめれば・・・彼女に触れて確かめれば、何が始まるような気がした。

「・・・・・・」

自分の不可解な行動に気付き、何故かと疑いながらやめることができないまま、伸びた香霖の指先が、彼女の頬に触れようとした、その時だった。

「・・・・・・？」

人形のように静かに眼を閉ざしていた朱鷺子が、生命を吹き込まれたかのようにその眼を開いた。

それと共に、香霖の指先が彼女の頬に触れ、そのままペタリと吸い付くように手のひら全体も触れた。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

開いた瞼の間から覗く朱鷺子の透き通った眼が、香霖の瞳の奥底を見つめ、香霖の眼が同じく、ビードロなどよりずっと鮮やかに見える朱鷺子の虹彩を見つめる。

二人の身体が一切の動きを止め、長い沈黙がその場を支配する。

それを破ったのは、飛び上がるように身震いしながら叫びをあげる朱鷺子だった。

「あっ?・・・あ・・・わあーーーっ!あぁっ!?」

異様なまでの驚きようで、スリットウェハーの壁に突き破らんばかりに背中を押し付けるのを見れば、香霖だってつられて驚いた。

「うわっ!?」

が、二人とも、すぐに落ち着くことはできた。

いや・・・香霖の方は実際何事もなかったように落ち着いていたのだが、朱鷺子の方はまだまだのようでもあった。

余りの驚愕に顔を真っ赤にし、汗を流すものだから、むしろますますひどくなっているような気がした。

これほど驚くのは、少し変だ。

そう思った彼は、荒くなった息を喘がせる朱鷺子に呼びかけた。

「どうしたんだ?少しびっくりしすぎだろう・・・何か、妙なことでもあったのか?」

その声に朱鷺子は、極力落ち着こうと励みながら、まったくそれができていない裏声で応えた。

「だひじょうぶでーしゅっ!」

「・・・本当に大丈夫なんだな?」

「う、うんっ・・・なんでもないよ。私、驚かされるのが苦手なの・・・」

「妖怪なのにか?・・・変な話だなぁ」

朱鷺子は大丈夫だと言ったし、熟れた林檎のようだった顔の赤みも引いてきたが、まだまだ、ほおずき色よりも赤い色がその余韻を残していた。

やはり何かあるのではないかと思わずにはいられないが、彼女自身がああ言っているのだ。

いろいろ妙な詮索をするのは、朱鷺子に申し訳がないだろう。

大丈夫であると聞いた以上、考えるのはやめることにした。

と、そうこうしていると、朱鷺子がこう聞いてきた。

「どうしてここに?」

その問いを聞いて、自分がここにきた理由を思い出した香霖は、応えた。

「あぁ・・・実は個人的に店の書物から、ブレンやオルファン関するような記述を探していたんだよ。
それがいくつか見つかったんで、もう一度ここに来てみたんだ」

「そうなの？」

「あぁ、記述のあった本も持ってきた・・・・・・これだ」

言いながら香霖は立ち上がり、スリットウェハーの中を一歩後ずさりしてまた座り、それから、ブレンにしがみつく前に腰のあたりに括っておいた袋を朱鷺子の前に広げて、その中にあったいくつかの本を見せた。
新しいのか古いのかも分からないが、外の世界を基準にして言えば、決して新しくはなさそうな本だ。
でなければ、幻想郷になどやってこないが。
というか、そもそも外の世界の本であるかどうかも判然とはしなかった。

その本に眼を向けながら、
「これが？」
と聞いてくる朱鷺子に、香霖は言う。

「・・・ブレン達に関係するとは言ったけど、確実にそうだと言い切れるわけじゃない。でも、あっさり無視できないものでもあったんだ。
例えば、海と大地の間にあるという妖精の世界・・・確か名前は、バイストン・ウェルだとか言ったな。その世界では、生物に近い兵器が、聖戦士（オーラバトラー）として戦っている。
そしてその世界においては、オーラ力（ちから）なる、物理的な事象を超越し

たものが存在するらしい・・・オーラバトラーもそれにより飛躍的に力を高めることができると・・・」

それを聞いた朱鷺子は、眼を丸くして驚いた。

「ホントだ・・・ブレンと似てる」

「うん。多分このオーラバトラーとアンチボディは同じものではないようだし、そもそもこの本も向こうの世界で書かれてない、いわゆる眉唾物だから、バイストン・ウェルが本当にあるのかも分からないけど、もしその世界が実在するなら、アンチボディと似たような存在が、まだどこかに存在することになる。
そんな者達のことを調べていけば、どこかでブレン達の謎の解答へと繋がるかもしれないと考えたのさ」

「・・・・・・」

そんな言葉を聞きながら、朱鷺子はゆっくりと、目の前にあった本の内の一冊を手に取り、表紙や背表紙やらをチラチラと眺めていた。

そんな中で、香霖が続ける。

「他にも気になるものがあった」

朱鷺子が、本に向いていた視線を香霖に向けなおす中で、彼は続けた。

「これこそ眉唾な話ではあるんだが、なんでもあまねく世界の中心には、全ての意思の相違としての強大な力が存在して、世の中の均

衡を保っているらしい・・・生きとし生ける者の死を左右し、ありとあらゆる生命を終わらせ、宇宙を一から始めるほどの力があると・・・

まぁ、さすがにここまでくると冗談のようだし、僕は、このこと自体は別に重要なことじゃないと思う。

僕が言いたいのは・・・」

「？」

「そういう風に、いくつもの意思が集まったものの力は、僕も信じているということだ。

意思の持つ力というのは、すごい。それほどに、意思というものは、大きな意味を持つものなんだろう。

生き物のほとんど全てには意思があるし、時には単なる物体でさえ意思を持つことがある。

だからなんというか・・・生きることには、もしかしたら生きるための原理とか構造とか以上に、生きようとする意思が大事なんじゃないかと思うんだ。

まぁ、ふたつが合わさって初めて、まっとうな生命というのができるんだろうが、それでもだ。

そしてそれは多分、ブレンも同じなんだ・・・この者達の肉体は、もしかしたら単なる石の塊かもしれない。もちろん、そうではないことは分かっているが、論理的に、生きていけるというには不十分なところも沢山あるんだ。それでもブレン達は生きている。

それにもやっぱり、意思というものが関わっているんじゃないか？

意思というものがオーガニックエナジーに変わって、ブレンを生かしているんだ、と思う。

だからつまり・・・・・朱鷺子・・・君の意思が伝わって、ブレンも生きようと思ったんだ。

そしてオルファンはそんな、意思の力であるオーガニックエナジー

の総意なんだ・・・と僕は考える」

香霖は柄にもなく、理屈を抜きにした、憶測に終始する神秘的な話を長々としていた。
しかしそれにも、ある理由があった。

朱鷺子もぼんやりと、その理由に気づいているようだった。

「霖之助さん・・・それって・・・」

呟くように聞く彼女に、香霖は、親切心が一周回って逆に無愛想な顔つきになりながら、応えた。

「君を慰めるつもりで・・・逆に傷つけることになるかもしれないが・・・
ブレンの肉体は死んでも、魂は生き続ける。君がこのブレンのことを生きていると信じ続ければ、いつまでも彼は君の傍に居続けるんだろう・・・意思の持つ力によってね。
人間だって死ねば霊になるんだ。アンチボディの霊だって、いてもいいだろう？
そんなブレンの霊が集まって、オルファンだって生きているかもしれないんだ」

「・・・・・・」

「だから、なんだ・・・
これからブレンは死ぬかもしれないが、そのことで落ち込んで、暗いところに沈んでいくのは、よくない」

咄嗟に出てきたものではあるが、決して口から出任せではない香霖

の言葉を聞いた朱鷺子は、しばらく何も言わずに、黙りこんでいた。
ただじっと、両手で本を持ったまま、彼の顔を見つめているばかりだった。
その顔はぼんやりとしていたが、真っ直ぐに香霖の顔に焦点を合わせる瞳を染める色には、一切の揺らぎはなかった。
慰めの言葉のつもりで言ったが、哀しい現実を再認識させるものでもあったその言葉にも、動揺はないようだった。

それは逆に、香霖にとっては不可思議だった。
だが、柔らかく微笑んだ朱鷺子の顔を見て、そして続く彼女の声を聞いて、彼には分かった。

「・・・大丈夫・・・みんな分かってるよ」

「・・・・・・」

香霖はようやく納得できた。

朱鷺子とブレンが、互いの別離に際して、違和感を受けるほどに落ちついているようだと感じたが、実際、そうだったのだ。
ふたりは、これから来ることを受け入れる気持ちを固めていた。
しかしそれは、妥協や諦観という、後ろ向きな気持ちではない。
生命が散ってもなお、絆は離れることはないということを知ったからこその落ちつきだったのだ。

香霖は、朱鷺子のことをどこか誤解していたのかもしれない。

「そ・・・そうか・・・・・・そうか・・・」

彼はそんなことをふと考えながらうわ言のように呟く中で、死にゆくブレンの胎内に入ってすぐに感じた朱鷺子に対する不思議な気持ちを、再び思い出していた。
今、彼女の済んだ瞳を見つめる中で、その気持ちがどういうものなのか、改めてよく分かったような気がする。

朱鷺子とは、友人だとか、顔見知りだとかいう線から一歩踏み出した関係になりたいと思っていた。
だがもしかしたら、その一歩踏み込んだ関係からも、さらにもう一歩奥まで・・・深いところにまで踏み込みたいと、心の奥が望んでいるのかもしれない。
そんな気がした。

しかしその、一歩進んだ先からさらに一歩進んだそこに、何があるのか、
自分が朱鷺子とどんな関係になるべきなのか、
そこまではどうしても分からないのが、香霖であった。

※

随分と久しぶりな気がするが、地霊殿に、ヤマメ達が遊びにきていた。

まだ昼になっていないような時分だ。

彼女らはさとりと共に、ブレンの様子を見に中庭に集まっていた。

一時は大分傷ついて心配していたが、今はすっかりその傷も引いているサトリブレンをちらちらと見ながら、パルスィが言う。

さとりの方から、最近の事情は簡単に聞かされた後のことだ。

「私達が来てない間に、随分妬ましいことになっていたんですね」

「はい」

返事をするさとりに続いて、ヤマメが続いた。

「どうりでねぇ、ブレンも出会ったころは、なんか頼りない感じもしたけど、今は度胸の据わった眼をしてる．．．．．．ような気がしなくもない」

それにさとりも、笑顔で応えた。

「えぇ．．．厳しい状況も多いですけど、一生懸命に頑張ってくれているんです」

その声に続いて、パルスィがある場所を指さしながら、聞いてきた。

「それで、あれは何をやってるの？」

彼女が指差す方を向けば、永琳が何人かの河童と共に、どこから仕

入れてきたのかも分からない（多分妖怪の山かどこかだろう）角材をマリサブレンの胎内に入れているのが見えた。
装甲の上に乗っている魔理沙が、永琳と何事か話している。

それを見ながら、さとりが応えた。

「あぁ、あれはですね。ブレンにコックピットを作ろうっていうんで、そのために胎内の寸法を測ってるんです」

「こっくぴっとぉ～？」
ヤマメが聞いたこともない言葉に、素っ頓狂な声を発した。
さとりが続いて説明する。

「なんといいましょうか・・・ブレンに乗って戦いやすくするための、座、みたいなものです。
私のブレンも同じことをしたんですよ・・・ブレンにとっては異物をつかって何かを作るから、それを嫌がってないかどうか聞いたりしました。別に嫌じゃなかったみたいです。
魔理沙さんも今、同じことをやってるんですよ」

「ふぅ～ん、戦いやすく？・・・戦いやすくする、ねぇ～」
とヤマメ。
それにパルスィが、
「戦いやすくとは・・・まぁ、なんとも妬ましい・・・」
と続く。

さとりもそれに、何故だか申し訳なさそうな表情を浮かべて、軽く頷きながら返事した。
「ん・・・私達も、とうとうはっきりした敵対心を持ってグランチャーを倒してしまったんです・・・

これから戦いは段々と激しくなっていくでしょう。なら、全力で戦えるように準備しておくのが、グランチャー達に対する礼儀なのです」

その声に、遠くの方から響いた、この場にいる誰のものでもない声が応えた。

「戦いに対する礼儀かぁーっ・・・ブレン達も、心掛けはしっかりしてるってことだねぇ」

声のした方に振り向くと、勇儀がこちらの方に向かって歩いてきていた。

「勇儀さん？」
と呼びかけるさとりに、彼女が応えた。

「不思議そうにするなよぉ、あたしがここにいるのは変かい？話は聞いてるだろうが、河童共が里に戻ってやることをやるそうだから、私には暇ができることになったのさ。木材を山から切り出して運び出すんだそうで、ついていって手伝ってやろうと思ったんだが、いかんせん地底からさすがに離れ過ぎて、条約違反だなんだで面倒だってことで、断られた。
これなら地上の妖怪と約束なんぞするんじゃなかったよ」

「・・・そうですか」

「そうさね・・・しかしまぁ、あたしが暇を貰うのと一緒に、ブレンの方は気を引き締めなけりゃならんくなった。これから大変だねぇ」
「はい」

彼女の声にすぐに返事するさとりに、勇儀はにかっと笑って、傍らに歩み寄り、脇に立つようにしながら続けた。

「しかしまぁっ、ブレンもそうだが、あいつらと共に戦ってるあんたも立派だ。あたしが保障する！
あんたも霧雨のも、博麗のも、やたら働かんのはあれだが、あの姫様も、みんなすごい！なっ！」

そう言いながら、さとりの背中を勢いよくぽんっ、と叩く。
ぽんっ、というよりかは、音で表すなら、ズドォーンッ、であるが。

そんな力で叩かれたものだから、虚弱体質な部類に入るさとりは、
「んぐっ！」
と呻いて仰け反った後、しおれる藁のごとくへなへなと地面に突っ伏して、動かなくなった。

勇儀が、大慌てで彼女の傍にしゃがみこみながら言った。

「お・・・おっ!?・・・大丈夫かいっ?なんであたしが背中を叩くと、どいつもこいつも痛がるんだっ?」

――鬼だからだよ――――
――――鬼だからだよ――――
――――鬼だからですよ、勇儀さん・・・――――

ひとまず、うんうん呻くさとりが落ちつくまで、彼女の背中を擦る勇儀。

そのおかげというわけではないが、段々と落ちついてきたさとりは、

「・・・どうも・・・」
と断りを入れつつ、ゆっくりと立ち上がった。
彼女の身体を支えながら一緒に立ち上がりつつ、勇儀が心底申し訳なさそうに言う。
「なんというか・・・すまなんだなぁ～・・・」
「いえ・・・いえ、いいんです・・・励ましてくださって、ありがとうございます」
「そうかぁ、ならいいんだが・・・・・・んむ、それはどういたしましてだ」
と、続いてヤマメが急にこんなことを言ってきた。
「それはそうと・・・その、こっくぴっとぉ、だったかい？そんなもの作るんだったら、人手はいるんだろう？」
さとりが、
「え？」
と声を漏らしつつ、すぐに応える。
「えぇ・・・河童が自分達の里で大方の部品は作るそうですけど、それをブレンの胎内でまた組み立てるそうなんです。だから、少人数でできるものじゃありませんね」
「なら、ちょっとぐらいなら手伝うよ」
「ほ・・・本当ですか？」
戸惑う様子のさとりに、パルスィが続く。
「私達も、最初のころからブレン達とは関わっているもの。何かできることがあるなら、やらないと妬ましいわ」

「あ・・・ありがとうございますっ」

笑みを浮かべて感謝するさとりに、ヤマメもにこにこ笑いながら言った。

「地底の生活は楽だけど退屈でねぇ。それが、ブレンやオルファンが来たおかげで、しばらくの間だけでも楽しくなった。そのことの礼を、少しぐらいはしてやりたいんだよ」

そんな言葉が聞こえた、次の瞬間だった。

「かぁーっはっはっはっはっはっ！！」

勇儀が突然肩を揺らしながら、中庭全体に響き渡るような大きな笑い声を発した。

笑い声という形容ができないほどの大反響に、今まで黙々と作業していた河童達や、永琳と魔理沙が、何事か、と言った様子でこちらを見てきた。

というか、彼女の傍にいたさとり達だってあまりに突然のことに、同じく何事か、と思わずにはいられない。

勇儀は、突然の笑い声の理由も言わず、先程よりかは小さいが、まだまだ耳にわんわん響くほどの大声で、こんなことを言った。

「いやはや、どいつもこいつもいい奴ばっかりじゃないかっ！なぁパル・・・」

言いながら、パルスィの傍らに歩み寄り、彼女の肩に手を置こうと

するが、先程のようなこともあり、すっと手を上げた状態のまま固まり、

「・・・は・・・ははは～・・・あっぶねぇ・・・」

と、苦笑いしながらその手を降ろした。

勇儀の笑い声の理由が分かったさとりは、その音が誰にも聞こえないような小さなため息をひとつついた。

だが、それは別に、疲れたとか呆れたとか、そういう気持ちから出たものではない。

ため息というのは、心底安心したり、心穏やかな時にだって、出てくるものなのだ。

※

咲夜の駆るグランチャーが破れ、傷ついたまま紅魔館へと戻ってきたその翌日だ。

美鈴は結局何事もなかったかのように、再び門番としての仕事を続ける日々を送ることとなっていた。

その心中は決して穏やかではないが、一晩苦しみ呻きながら過ごすことで、なんと言おうか・・・

諦めの極致というか、抜けがらのように生きていこうとする気持ちができていた。

背中に、開け放たれた門を、そしてその先にそびえる極彩色の建物を置きながら仁王立ちし、さながら彫像のごとく微動だにせず眼前

をじっと見つめていた美鈴。
彼女は、今のところは、無心となることができていた。

だが結局のところ、状況は・・・ひいては運命と呼べそうなものは、このまま彼女の諦観を留めて、緩やかな停滞の中に落とし込むことを許しはしなかった。

じきに昼。主人レミリアが大人しくなるという時分だ。
腕を組んで立ち尽くしていた美鈴は、突然後ろから聞こえてきたその声に鼓膜を揺らされ、心を揺さぶられた。

「美鈴」

こちらの名を呼ぶその声は咲夜のものであったし、咄嗟に後ろを振り返って見えたその姿も咲夜その人であった。

そう。
彼女の姿を見れば、美鈴の中でできあがっていた・・・つもりでいた、自分の罪から眼を逸らして抜け殻のように生きていくなどという考えは、容易く瓦解するのだ。

「さ・・・咲夜さん・・・」

俄かに身体から力が抜けていくのを感じながら、声にならないような声で呟いた美鈴に、咲夜は、感情が希薄そうながらも僅かに笑んでいる顔で、こう応えた。

「どうしてここに、と聞きたそうね・・・」

「・・・」

「理由は何もないのよ。ただの冷やかしでね・・・ちゃんと頑張ってるようね。長い間サボってた分、取り返すようにしっかり働くのよ」

「・・・・・・」

何か話かけられているのは分かるし、彼女が何を言っているのかも分かるが、美鈴はどうしてもそれに返事をすることができなかった。彼女に対して振り返ったままの姿勢で動かなくなった美鈴に対して、咲夜は、続けて言った。

「それとね・・・そういえば私はこれまで、貴方に対しこういうことをしっかり伝えるのを忘れていた・・・

美鈴。

私も貴方のこと、好きよ・・・」

「・・・・・・っ」

美鈴は、愕然とした。

第十五話　その3

美鈴の心に響く咲夜のその言葉の優しさは、彼女がグランチャーと出会う以前と同じものだった。
いや、その時以上に、柔らかく、温かい優しさだった。
以前の咲夜は、門番の仕事に勤しんでいる美鈴の元に、冷やかしなどと言って労いにきてくれることはなかった。
もちろん、自分の仕事をするのは当然のことで、何も労うようなことではないという、完全で瀟洒であるが故の意識があったのだろう。
そういうことも踏まえて、咲夜が自分の様子を見に来てくれたというただそれだけのことが、美鈴には堪らなく嬉しかった。

そして、最後に咲夜が言ったその言葉・・・
それは、美鈴にとってはずっと待ち望んでいたものであり、その言葉を聞くだけでも、彼女は生きていることの喜びまでも実感することができたのだ。

・・・そのはずだった。
だが、実際はそうではなかった。

咲夜の語った温かい言葉も、今の美鈴にとっては、いつか聞いたような殺意の言葉と何も変わらない、心を突き刺す刃のような鋭さとなって感じられるばかりだった。

何かが違う。

いつぞや心の内で響いたそんな言葉が、またしても頭の中を反響していた。

そしてその理由は、美鈴には分かっている。

自分の周りがどれほど温かく柔らかく優しく、愛に満ちあふれていようと、自分がそのことを受け入れられる時は、来ない。

そのこともまた・・・

「・・・・・・っ」

口をパクパクと開いて何か言おうとするが、何も言い出せない。

そもそも何を言いたいのかすら分からない美鈴の様子を見た咲夜が、心配そうに聞いてくる。

「どうしたの？」

それを聞いて彼女はようやく、固まっていた身体を動かして、身体全体を咲夜に向けることができた。

そうして、慌てて応える。

「な、なんでも！な・・・なんでもないんです・・・」

なんでもないとは口で言っても、それを語る態度自体が、なんでもないというものなどではなかった。

だがそれに、とやかく余計な詮索をする咲夜ではない。

それ以前に彼女は、美鈴のこの奇妙な態度に・・・真実とは大きく

異なる原因があると考えていたのだ。
その原因の大元にグランチャーがいるというのは、間違いないのだが・・・

そして、咲夜の頭の中で考えられている美鈴の気持ちに対し、今彼女が考えていること・・・彼女がグランチャーに対してしようとしていることは、その哀しみを増長させるものであると考えられた。
咲夜は美鈴が知らない内に、グランチャーとあることを取り決めていたのだ。
それが、咲夜自身とグランチャーが互いに納得して決めたことであっても・・・美鈴はきっと哀しむだろう。
そのことがよく分かっていた。

咲夜は、美鈴のこの態度の理由を詮索しない代わりに、自らの内にある考えを伝えることをしなかった。

ただ、彼女に対し、こうとだけ伝える。

「美鈴・・・今は哀しいでしょうけど。立ち直りなさい・・・この紅魔館の門番である貴方に、それができないわけがないのだから」

「違います」

突然の言葉であった。
美鈴自身、何故言ったのかも分からない返事だった。
彼女の意思とは関係なく、肉体とも関係なく、もっと得体のしれない、その場の空気が持つ名前もない力が無理やり吐き出させたような、そんな言葉だった。

当然ながら、
「違うって？」
と疑問を口にする咲夜だったが、
これも当然ながら、美鈴には何も応えることができなかった。

何が違うのか、ということは分かっている。
今となっては、この発言をしたことそのものはともかく、何故自分がこういうことを言ったのかということの、根本的なところにある理由は分かっていた。
結局のところ、それを話せば、美鈴はあらゆる意味で楽になれるのだろう。
が、今までずっとそう念じ、そう行動しようとしながらもできなかったのが彼女であり、
今もそうであるのが美鈴だった。

「いや・・・あの・・・その・・・なんでも。なんでも、ないんです・・・」

やはり、明らかになんでもないわけがない態度で応える彼女だが、
咲夜はこれ以上何も聞いたりしなかった。
疑っているのか、疑っていないのか、それも確かにすることはできない。
ただ、もし彼女が、美鈴のことを絶対的に信じきっていて、何も疑う余地がないと考えているなら、美鈴にとってはそのことは何より辛いものだった。

咲夜は、数秒だけ黙りこんでから、静かに言う。

「ん・・・そう。それならいいの・・・伝えたいことは大体伝え終えたわ。それじゃあ」

そうして、踵を返して、門から去っていこうとする。
が、くるりと背中を向けたその次に、彼女は顔だけ振り返って、もう一度だけ美鈴の顔を見ながら、こう続けた。

「・・・元気になってね」

「・・・さ・・・咲夜さんの方こそ・・・」

今度の返事もまた、意識しないところから発せられた言葉だったが、今度は、美鈴にとって何の不利益でもない言葉だった。
むしろ、これが無意識的に発せられたものであるのなら、彼女は、この時だけは自分の無意識に感謝した。

「えぇ・・・」

微笑みながらそうとだけ応え、美鈴から視線を離した咲夜は、改めて歩きだして正門から離れると、色とりどりの花が咲き誇る花壇の影に隠れ、やがて見えなくなった。

その後をひたすら眼で追い、見えなくなった後も、その場にひたすら立ち尽くしていた美鈴。

彼女はとにかく、いろいろな感情が胸中に渦巻きながら、それを無理やり殻に包みこんで爆発させないようにしなければならないと考えている自分自身に対し、悔やみ、嘆いて、憤り、侮蔑していた。
それと共に、自らが作り出したその殻の中には、グランチャーの死と、別離を迎えようとしている咲夜に対する、哀しみや、罪悪感、それ以上に、好意が・・・様々な感情が閉じ込められていたのだ。

やがて彼女は、再び紅魔館の外に向き直って門番としての仕事に戻ることもできず、その場で拳を握りしめ、顔を俯け、身を強張らせて微かに震えだした。
その震えは、どうしても止めることができなかった。
そうして、この先ずっとこんな気持ちを感じ続け、こうやってうち震えていなければならないのかと思うと……それがまともな生活になるわけがないと容易に判断することができた。

その瞬間、身体の震えは止まった。
その代わりに彼女は、理由も分からず、自分の右手で、撫でるように首に触れていたのである。
そうやって自分の首を撫でる右手の甲にも、左手が添えられていた。

美鈴はふと考えた。
咲夜も、誰も自分を殺してくれないなら……それなら、いっそ自らで手を下せばいいのだ。
右手を撫でる指の力を強めれば、彼女の喉は締め付けられ、呼吸はできなくなり、やがて死に至る。
そうでなくとも、腕っ節の力なら館の主人であるレミリアにだって負けてはいない彼女の力なら、首にある血管……レミリアがいつもそこから血を吸っている（のかは分からないが）動脈を爪で引き裂くことだってできなくはないだろう。
そうすれば、いずれにせよ死ぬ。

「……」

だが、それが分かっていても、実際に首を絞めることも、動脈を引き裂くこともできないのが美鈴だ。
彼女は結局、自分の身も可愛いのだ。
罪の償いという目的も、生命には替えられないのだ。

「・・・・・・・・っ」

結局、右手を首筋に添えたまま、またしても震えだした彼女は、そこから何も言えなかった。

何を言っても、惨めさの上塗りになると分かっていたから・・・

※

河童と永琳による、ブレンに対する検査（？）も無事終わった。

四体のブレン全て、河童達が使おうとしている木材に対して拒絶反応を示すようなことはなかった。

永琳はかねてより、ブレンは有機的な物質との相性はいいと考えていたのだが、その通りだったようだ。

なんせ、有機的（オーガニック）なのだから。ある意味では当然のことだろう。

また近い内に、河童達は自分達の里に戻って、コックピットの部品を組み立てに出ていくだろう。

勿論輝夜のブレンも検査され、何の問題もなかった。

彼女は、ブレンの様子を見るために呼び出されたのだがそれも済んだので、部屋に戻って寝ることにした。

そんな矢先、中庭に降りた彼女に、突然妹紅が話しかけてきた。

「おい、輝夜・・・聞けよ」

輝夜を相手にする時の妹紅というのは、どうしてもこのようにぶっきらぼうな態度にならざるを得なかった。

そして輝夜の方も、

「なにさ」

と、不遜な態度で応えざるを得なかった。

しかしこれが、ふたりにとっては仲がいいことになるのだ。

輝夜の返事を聞いた妹紅が、こう続ける。

「ブレンの調子はどうだ？」

それに、輝夜が応える。

「いい感じよ・・・私のブレンは、臆病なくせに気分が軽いところがあってねぇ。

さとりや魔理沙のみたいに真面目じゃないんで、気楽にやってるわ。

・・・まぁっ、威風堂々としていると言い直せば、さすが私のブレンパワード、ってことになるんだけどね。ふっふふふふ・・・」

「よく言うよ・・・」

冷やかすように笑いながら、妹紅はすぐ傍に佇んでいたカグヤブレンの姿を見上げ、じっと動かなくなった。

その様子は、いつもの妹紅とはどこか違っていた。

そのことに気づいた輝夜は、いつぞや、怒りの形相で永遠亭に殴り込んできた時の彼女の恐ろしいまでの気迫を、思い出さずにはいられなかった。

彼女は思わず、妹紅に対し、こう呼びかけていた。

「・・・あんたの調子はどうなのさ」

その声を聞いた妹紅は、ちらりとだけ輝夜の方を見返した。
しかしすぐに、またブレンの顔に向きなおし、ひたすらにそれを仰ぎ見ていた。
輝夜の問いに応えもしない。

ただその代わりに、こうとだけ呟いた。

「ブレンもやっぱり、いいやつなんだなぁ・・・」

質問にも応えず、何で急にこんなことを言ったのかは分からないが、輝夜はその言葉に調子のいい笑顔で応えた。

「そりゃっ、当然でしょう」

自分のことでもないのに自慢気に応えるその滑稽さに、ふっ、と含み笑いをする妹紅。
小馬鹿にするようなその態度にむすっ、とし、煽り文句のひとつでもぶつけようとしたのだが、その瞬間、輝夜の網膜に、再び振り返った妹紅の、刺すような視線が焼き付いた。
その目線もやはり、あの日の妹紅が見せた荒んだ炎を思い出させるようであり、輝夜は思わず息を呑んだ。

そんな輝夜を余所に、妹紅が静かに語る。

「話は変わるんだがな、輝夜・・・わたしは今でも、あんたへの怨みを忘れてない。
あんたのことを憎んでいる・・・」

「・・・・・・っ」

「もし・・・もしだ。わたしがもう一度、この憎しみを晴らすために、あんたの生命を狙ったら、どうする？
今まで以上に・・・全てのことに決着をつけるつもりで・・・」

その問いに、僅かに眼を見開いた輝夜は、しばらく険しい顔で黙りこんで、ただ、問いかけてくる妹紅の顔を見返していた。
そして、自分と彼女の間にあるわだかまりが、未だ消えていないことを・・・もしかしたら、この先永遠に消えることはないかもしれないということを再び実感する中で、何故だかその事に、不思議と安堵した。

自分と妹紅との関係に、彼女の持つこの怨念だって含まれているのは、間違いないことなのだ。
そしてそれは、そう簡単に消えるはずのものではないのだ。
それがどんなものであれ、彼女は、輝夜を恨んでいるからこそ、生きているというところもあったのだ。
そうして輝夜にも、妹紅に恨まれているからこそ、彼女と関わっていられるというところもあった。
それがいいことなのか、悪いことかは・・・もっと何か、互いの関係を確かめる術はないのか、というのは別として・・・

輝夜は、険しかった表情を僅かながらに和らげて、応えた。

「それならこっちも、好きなようにやらせてもらうだけよ・・・あんたはあんたの好きなように、思うように勝手にやればいい。人は変わるもんだからね・・・その変化を受け入れようとした以上、何が起こっても、認めなくちゃいけない。言っとくけどねぇ、私だってその辺、覚悟だとか呼ばれるものは、持ってんだから」

相変わらず調子のいい話し方だが、確かに、その言葉の中に見える覚悟を感じさせる輝夜の声を聞いた妹紅は、ほんの僅かに笑みを浮かべ、静かな声で、

「・・・そうか」

と応えた。

その瞳の奥から、恨みの炎は見えなくなった。

まるで、初めからなかったかのように。

今になって、何故こんな話をしなければいけないのか？

それが分からず戸惑う輝夜を余所に、妹紅はふと、どこかに身体と共に目線を向けた。

輝夜もそれにつられて同じ方を向くと、そこには、サトリブレンがいた。

座り込んでいる彼の者の周りに、さとりや地霊殿の住人達を初めとして、地底の妖怪達が集まって、何やらやっていた。

ブラシを持って、ブレンの身体を擦ってやっているようだった。

そうすれば彼の者が喜ぶというのは、輝夜も妹紅も分かっていることだった。

その様子を遠くに眺めて立ち尽くし、動かなくなった妹紅。

彼女の背中を見つめるような位置にいた輝夜は、何故だか無性に、彼女の隣に立って、その横顔を眺めてみたくなった。
なんだか、そうするべきであるように思えたからだ。
その考えに従い、すぐに妹紅の隣に寄り、じっと動かない彼女の横顔を覗った輝夜。

彼女は、言いようのない寂しさを漂わせるその表情を見た。
それと同時に、真っ直ぐにブレンを見つめるその瞳の奥には、再び小さな、篝火(かがりび)のような光が灯っているのも見えた。
だがそれは、先程輝夜が見たような怨念の火ではないようだ。
もっと別の何かを燃料として燃やす、異質な火だった。

輝夜はまたも思わず、彼女にこう問うていた。

「寂しいんでしょ。加わりたいの？あん中に」

それに妹紅は、誰よりもまず自分に言い聞かせるように、微かな声で言った。

「寂しいね・・・あの輪の中に、入りたくないと思ってる自分がいるのが分かるから」
「え？」

輝夜は、その言葉の意味するところがいまいち分からず、聞き返してしまった。
しかし、妹紅はもう一度応えることはない。
ただ、そのままじっと動かず、ブレンの方を見ているばかりだった。

「・・・・・・っ」

輝夜は、何故だか分からないが、無性に不安になって、息を呑んだ。
また、状況が目まぐるしく、時の流れに従い動きだして、何か重大なことが起こりそうに思えた。

※

さとりは、ヤマメ達、そして勇儀を入れた地底の妖怪と、また中庭に遊びにきたこいしとペット達と共に、久しぶりに、ブラシでブレンの身体を洗ってやることにした。
こうやって、皆で揃ってブラシを持っていると、ブレンと出逢って間もない頃のことを思い出すようだった。
あの頃には、今はもうグランチャー側に言ってしまった早苗もいた。

そんなことを脳裏で思い浮かべながら、ブラシを両手で持って、肩の付け根のあたりのスリットウェハーの上に乗り、ブレンの頭を擦ってやっていたさとりは、それと一緒に彼の者にこう呼びかけていた。
今までは、火傷の傷もあってそこまで念入りに身体を洗ってやることができなかったのだが、その傷も治ったということでしっかり力を込めて洗ってやることにしたのだが、まだ完治してそれほど間もないので、心配であったのだ。

「痛くはないわね？大丈夫なのね？」

ブレンはそれに、ぶるぶる泣き声を上げて応えた。

大丈夫のようだ。
むしろ、しばらくそうして貰えなったのだが、ようやく身体をごしごし洗って貰えたので、喜んでいた。
彼の者の声を聞いたさとりは、笑顔を浮かべて応えた。
「そう・・・それはよかった」
下の方からは、パルスィと勇儀の声が聞こえてくる。
「今回も、力を入れ過ぎないでくださいね。妬ましいんですから」
「なにいっとるかー！この前だってちゃんとできてたろおーっ」
「そうでしたね。済みません」
そんな声を聞きながら、さとりもまた、続けてブレンに対して呼びかけていた。
「いろんなことが済んで、ビープレートも手に入れて、オルファンさんと一緒に銀河に戻ったら、どうするの？」
そんなことをブレンに聞いても、分かるわけがなかった。
「はぐれたもうひとりのオルファンさんに、もう一度会いにいくのはどうかしら・・・そうして今度は、仲良くなれるように話し合ってみたら？
今はもう仕方ないけど、貴方達だって、グランチャーとも仲良くなれるかもしれない」
その声を聞いたブレンは、本当にそうなのか不安がった。
彼の者達はなんだかんだと言っても、グランチャーのことを本能的

に恐れていた。
それこそ、異物を攻撃する『抗体』の名の通り、自分達の機能的な行動原理に従って、戦うことしか、今はできなかった。
しかし、それでも、さとりの言葉を素直に受け入れたブレンは、こうとも応えることができたのだ。

さとりがそう言うのなら、できるかもしれない。
グランチャーとだって、絶対に仲良くなれないはずはない、と。

さとりの言葉が、ブレンにとっては可能性となり、希望となっていたのだ。

そのことを、彼の者の声と共に思い知ったさとりは、思わず、ブラシで擦る腕の動きを止めた。
のみならず、柄を握っていた手の力が弱まり、するりとブラシが手元から離れると、肩の装甲の上にからんからんと音を鳴らして落ち、そのまま表面を滑って下の方にまで落ちていった。
それから間もなく、ちょうど真下の辺りにいたヤマメの
「うわぁーーーっ!?びっくりしたぁーっ!」
という悲鳴が響くが、それは聞こえなかった。

自分がブラシを落としたことにも気づかずに、ぼんやりと、すぐ眼の前にまで迫って、ほとんどただの薄紫の壁のように見えていたブレンの横顔を見つめていたさとりは、胸の奥の方からこみ上げてきたほんのりと温かい気分を確かめるように、笑顔を浮かべて、感謝の言葉を言った。

「あぁ・・・ありがとう、ブレン・・・・・・・ありがとう・・・」

忌み嫌われて、誰からも離れて過ごすしかなかった自分でも、誰か

に希望を持たせることもできる。
そのことを、ブレンが教えてくれたからだ。

それからさらにしばらくしてようやく、下の方から響いてきたヤマメの声が聞こえた。

「こらぁー！危ないでしょうが、んもぉーっ！聞いてんのかーい！」

その声をを聞いて何事かと思い、遅れて手元にブラシがないことに気がついたさとりは、大慌てで、肩の装甲からヤマメの傍に降り、頭をぺこぺこ下げながら、ひたすら謝った。

「す、済みません！済みません！・・・ぼんやりしてました！本当にごめんなさい！」

その声に、むすっとした表情のヤマメが、仕方ないといった様子で、さとりが落とし眼の前に落下してきたブラシを片手に持ってずいっ、と差し出しながら、応えた。

「気をつけるんだよっ。危なっかしいから、あんたはもっと低いところにいなさいねっ」

「は・・・はい。許して頂いて、ありがとうございますっ」

差し出されたブラシを両手で受け取りつつ、こう応えてからもう一度だけ深々と頭を下げるさとり。

しかしそれから頭を下げた瞬間、彼女は不思議そうな顔を浮かべて、

眼の前にいるヤマメの遥か後ろの方へと目線を向け、動かなくなった。

「・・・？」

何かあるのか？と思い後ろを振り返り、さとりが見ていたのと同じ方向を向いたヤマメ。

その眼には、中庭に降り立ち、そのままこちらの方に歩み寄ってくる文の姿が見えた。

彼女は早朝から、天狗の偵察隊とは別に、他のブレンの捜索などのために地底の外へと出かけていたのだが、それから戻ってきたのだろう。

しかしその表情は、いつもの彼女の飄々とした態度からは想像できないような、険しいものであった。

こちらの方に歩み寄る中で、くいっ、と顎をあげて生唾を飲み込むような動作を見た時などは、ごくり、という音が聞こえてきそうなほどだった。

オルファンが吸収する地熱の量が少なくなってきたのか、ようやく本来の温かさを取り戻してきたように思える地底の中にあっても、少し変だと思えるほどに、額からは汗も流していた。

そんな彼女の態度を見るだけでも、明らかに、何かが起こっているということが分かった。

やがて、こちらのすぐ傍にまで歩み寄ってきた文に対して、さとりが聞く。

「どうなさったんですか？」

その声に、文は、ただ一言
「これ・・・これを見て下さい」
と言いながら、腰に下げていたバッグから一枚の写真を取り出して、
それをさとりに向かって差し出してきた。

「・・・？」
何事か分からないまま、ひとまずその写真を受け取り、ヤマメと共
にそこに映されているものを見る。

さとりは思わず、眼を見開き、
「うぅ・・・っ」と呻いた。
ヤマメもまた、信じられないような表情で、
「なんだぁこれは・・・っ」
と呟いていた。

文のこの険しい表情の理由も、容易に察することができるものが、
その写真の中に映し出されていた。
ブレンと関わりを持つ者達からすれば、戦慄しないわけにはいかな
いものが。

彼女達が息を呑む中で、文が、ゆっくりと事の顛末を語り始めた。

※

時は、早朝。
太陽が昇ってきて、まだそれほど経っていない時分である。
文は、天狗の偵察隊とは別に、ブレンを捜索するため、はたてと共に幻想郷の各地を飛び回ることにした。

手分けしていろいろなところを見て回ることにし、はたては妖怪の山方面を、文は、もしやと思い、再び魔法の森の辺りを探ってみる。

天狗自慢の速さであっという間に森まで飛び、この前、グランチャーとの戦闘があった辺り（文が知ることではないが）にまで差し掛かった、その時だった。

まさかのまさかであったが、文は、探していたものを早速発見することができた。
一体のアンチボディが、生い茂る木々の絨毯の上を、ゆっくりと飛行していたのである。
その速さは、人間が歩く程度のものでしかなかった（当然、アンチボディのスケールでの話だが）。
その影は、同じものを見慣れていれば、少し遠くであってもすぐに、グランチャーではなくブレンパワードであると分かった。

「あや～・・・さっすが、魔法の森は雰囲気に似合わず賑やかなトコですこと・・・」

などとひとりごちて早速ブレンに近づき、誰か乗り込んでいるなら

その者と話をしようと考える文。
だが、遊泳する彼の者の影が近くに見えてくるにつれ、彼女はあることに気がついた。

「いや・・・あれは・・・」

ブレンの動きがどこかぎこちない。
のみならず、段々と判然と見えてくるその装甲は、まるで錆びた金属のような赤茶けた色をしていた。
サトリブレンとマリサブレンの体色が違うように、元々からそういう色だった、というわけでもなさそうだ。
どうやら、変色してしまったものらしい。
さらに眼の前にまで近づいてみてみると、まさしく錆びた金属そのものと言った具合に、装甲の表面は滑らかさを失い、ところどころ亀裂さえ入っているのも見えた。

文は、永琳が考えていたブレンにとっての死の概念というものを、再び脳裏で思い出していた。

「・・・・・・」

こちらに気づくこともなくどこかに向かって、身動きひとつせずに宙を泳ぎ続けるブレン。
彼の者にさらに、左足の脛の辺りに眼と鼻の先ほどに近づいた文は、右手のひらで装甲の表面に触れてみた。

それと共に、彼女が思わず呻く。

「やっぱりだわ、このブレン・・・っ」

指先から伝わるその感触は、荒く、石塊（いしくれ）のようでいて、ざらざらとした砂の集まりのようであった。
なにより、ブレンの持つ人肌の温かさを、全く感じない。

このブレン。オーガニックエナジーを失い、死につつある。
肉体が石化し始めていたのだ。
リバイバルしたのはいいが、誰も乗り込んでくれるものがいなかったか、あるいは、乗り込んでくれそうな者はいたのに、逃げ出して乗ってくれなかったのか・・・

文は、右手で装甲に触れたまま、愕然としながら吐き捨てた。

「なんてこったぁ・・・ようやく見つかったと思ったら、こんなことになってるなんて。
かわいそうに・・・これじゃさすがに助かりそうにない・・・」

そんな声が、風にかけ消されて響きもしない中で、文はふと、妙に冷えている頭で、ある疑問を感じた。

「・・・にしてもこのブレン・・・どこに向かってるの？」

眼の前にいるブレンは、残念ながら完全に死に体だ。今まさに生命を終えようとしている。
時間にして、もう一刻前後で、完全に動かなくなるだろう。
だというのに彼の者は、明らかにどこかに向かって進んでいるようだった。
文がその身に触れているのに、それにも構わず前進を続ける。
彼女もその速度に合わせて飛行しながら、装甲に触れ続けていた。
もうじきに死ぬというのに、一体どこに向かっているというのだ？

何か目的があるのか？
もう残り間もない生命だというのに、やることがあるというのか？

思い返してみるに、文は、ブレンが実際に死に絶えるその瞬間というのに立ち会ったことがなかった。
さとりや魔理沙達にしてもそうだろう。
同じアンチボディであるグランチャーならまだしも、ブレンの死の瞬間というのは、誰も見たことがないはずだ。そりゃ、そんなもの見たくもなかったが。

しかし、実際にその場面に出くわしてしまった以上、文は、もしかしたらそこから何か汲み取ることのできるものがあるかもしれないと考えた。
そうである以上、この死に体のブレンが向かう先に、自分も同行する。
そうすることが、天狗として、このオルファンの異変に早期から関わった身として、自分が出来ることだったのだから。

「ん・・・力不足かもしれないけど。この私が、貴方の最期を見届けさせてもらいましょう・・・」

第十五話　その４

ブレンはさらにゆっくりと、魔法の森を抜けるように奥へ奥へと進んでいた。

文は、僅かに前傾姿勢を取りながら物言わず進むブレンの右肩の装甲に座りながら、横目で、さながら年数の過ぎた彫像のようになっている彼の者の横顔をちらちらと眺めつつ、ブレンがどこに行き着くのか見守った。

と、何十分かすると、眼下に見えていた木々の青さがなくなり、なだらかな平地に差し掛かった。
何があるというわけでもなく、本当に単なる平地、といった雰囲気の場所だ。
ただ、そんな中に、無数の彼岸花が咲き誇っており、森の木々の青と対比するような赤い絨毯を作りだしていた。
その光景だけが、この場に物々しくも、穏やかさも感じさせる空気を漂わせる。
美しくも不気味な赤色が、言いようのない瘴気・・・ではなく、霊気が醸し出していた。

この場所は確か・・・
文が、その名を呟いた。

「再思の道だ・・・確かこの奥には・・・」

死者が行き着く先は三途の川であり、冥界であったり地獄であったりするのだが、もうひとつ、行き着くところはある。
それが、無縁仏が誰にも悟られることなく眠りにつく無縁塚だ。
まさしく、幻想郷ですら忘れ去られようとしている者達の生命が終わる場所であり、それ故に、外の世界とすら繋がっているとも言われている場所である。
そしてこの再思の道はその、無縁塚に繋がる場所だ。
無数の彼岸花が放つ毒にあてられれば、逆にその苦しさと共に、生きようとする意思が湧いてくる。
そんな場所だ。
それこそ、自殺志願者でなければ、人間が寄りつかないような場所なのだ。

眼下に広がる一面の、血のような赤色を見下ろしながら、文は続けて呟いた。

「まさか・・・ブレンが無縁仏として眠ろうとしてる、なんてことは・・・・・・」

まさか、そんなことはないだろう。
という一言が言えなかった。

まさか。
それこそまさかだが、もしかするとそうかもしれなかったのだ。

それはそれで、哀しいことだ。
ため息をひとつついた文は、どうしても辛気臭くなれない様子で、ブレンに対して呼びかけていた。

「残念ですねぇ・・・もうちょっと早く会えてたら、私だって、貴

方の縁者になってあげたのに・・・今に死ぬような者の縁者には、さすがになれませんよ」

やはり、ブレンは何の返事もなかった。
こちらに語りかけてくるだけの、オーガニックエナジーを持ち合わせていなかったのかもしれない。
こちらの言葉を聞き入れるような余裕さえも・・・

今や彼の者は、自分の向かうところにただ向かうだけの、それこそ、行動するだけの石ころも同然だった。
最早そこに、意思はないのかもしれない。
魂が消え去り、抜けがらのようになった肉体が、そこの宿る本能の残梓に従い、動いているだけ・・・

「・・・・・・」

本能の残梓・・・

またしても本能か。
グランチャーと戦うのも本能。ビープレートを探すのも本能。
そして、自らの死に際ですら、本能が優先される。
それほどまでに・・・
・・・ブレンパワードの中での本能というのは、それほどまでに重要なものなのか？

文は、そう思わずにはいられない。

これでは最早、本能を通り越して、『システム』であった。
そうするように作られたプログラムであった。

そんなことを考える中でも、ブレンは再思の道を真っ直ぐに進み、その奥へと進んでいた。
間違いない。
彼の者は無縁塚を目指している。

もうしばらくすれば、咲き誇っていた彼岸花の数も、その赤々とした色彩も疎らになり、それに代わる様に、遠くの方に大きな桜の木が何本か見え始めてきた。
が、季節が少しずれているためか、開花はしていない。
そういえば、今は夏ごろだったか・・・
桜の木も、こういう時期に見れば、青い葉をざわめかせて、そこいらの木とほとんど同じだ。
それもまた桜の木の風情か・・・

それはとにかくとして、とうとうブレンは、無縁塚に到着しようとしていた。
とはいえ、まだまだ距離的には遠く、人間ならもう何分か歩く必要があるような距離だが、ブレンや天狗にとってはすぐの距離だったのだ。
そしてこれから訪れるその場所は、そこら辺を掘り起こせば、誰の者とも分からない骸が見つかるような、そんな地なのだ。

一体ここで、何をするつもりなのか・・・？

そう考えた矢先、文の網膜に、何かが映り込んだ。

「ん・・・っ？」
と声を漏らしながら、右手のひらを眼の上にかざして、ブレンが進

む先にあるその何かを凝視する。

その何かは、遠目からでは、岩の塊のようにしか見えない。
赤茶けた大きな物体が、咲いてもいない桜の木以外には何もない大地の上に、隣り合うようにいくつも置かれている。

だが、近づいてくるにつれ、その何かが人の形をしているということが分かっている。
そしてまた、その何かが、どうやらアンチボディと同じぐらいの大きさをしているらしいことも・・・

いや、最早それは同じぐらいではなく・・・

やがて、ブレンが無縁塚の上空へと到達し、文の眼に映ったその何かが一体何なのかはっきりとした時、彼女は、震える右手を口元にあて、絶句する以外にやれることが分からなかった。

「こ・・・これ、は・・・っ」

彼女達の眼下にあったそれは、間違いなくアンチボディ・・・ブレンパワードそのものであった。
しかし、五体ほどいるらしいそれらは、皆例外なく死に絶え、最早単なる鉱物と見分けがつかない状態になっていた。
似たような格好で、寄りそい合うように横たわったまま、ひとつとして、微動だにしない。
さらに石化が進み、装甲のいたるところに亀裂が入っているのが、ブレン達の肌に無数の裂け目が入っているようにも見えて、痛々しかった。実際そうだったのだから。

さすがの文も、この光景はショッキングだった。
なんせ、一度に五体ものブレンパワードが死体となって横たわっていたのだ。
人間だって、五体や六体を一度に死体として見れば、何も感じないわけがない。
何よりブレンパワードは、その大きな身体もある。

そしてそれ以上に、その死に絶えた身体が放つ空虚な雰囲気が、怖かった。
ブレンパワードは温かく、誰かと共生さえすれば、生命の力にあふれ活き活きとするものだ。
だが、今ここにいるブレン達からは、そんなものがまったく感じられない。
本当に、これではただの岩の塊と大差がなかったのだ。
生命の余韻すらも、まるで感じさせてくれない。
まるで、ブレンの生命・・・文は勿論、さとり達が触れ合っているブレンパワードに宿る生命が、全て単なる幻でしかないと思えるような、それほどの空虚な穴が、このいくつかのブレンの死体の中で、ぽっかりと口を開けていた。

文は、震える右手で口を覆ったまま、うわ言のような呟いていた。

「ほ・・・ホントだったんだ・・・ブレンの無縁仏・・・だ、誰にも出会えることもなく・・・」

そして、今自分がその肩に乗っているブレンも、こうなってしまうのか・・・そう思うと、ますます恐ろしくなってくる。

だが、そんな文自身、不思議に思えるほど、その恐怖心と虚しさ、

そして、涙を流しそうになるほどの哀しさは、すぐに和らいできた。
ブレンの死に衝撃を受けながらも、まだやるべきことがあるのだと分かっていたから・・・

彼女は、肩の装甲の上に立ち上がると、そのままゆっくりと宙に浮き上がり、ブレンの顔のすぐ傍に寄ると、その赤茶けた装甲を右手で撫でた。
それと共に、言う。

「何でかは分からないけど、貴方達はみんなこの場所で死ぬことにしてるんですね。
みんな揃って、同じ場所で」

そう。
文が、自身の動揺をすぐに忘れることができたのは、ある疑問を感じたからだった。

彼女が、それを口にする。

「単に死ぬだけなら、それこそどこでも死ぬことはできたはず。
なのに貴方は、わざわざ動きもしない身体を無理に動かして、どこかに向かってた。
それがここだったのね」

死に体のブレンがなおも動いていたのは、同じ境遇の中で死んでいった仲間と共にいたかったが故か。
すでに息絶えて久しい他のブレンも、同じ思いだったのだろう。

だが、それが分かると、また新たな疑問がわいて出てきた。

「でも、だからって、どうしてわざわざ無理してまで・・・死んじゃえばそれで終わりでしょうに・・・」

勿論、死ぬときには仲間と共に、というのは分からなくはない。
ただ、文には、ブレンがこうやってひとつの場所に集まって生命を終わらせるのにも、何か理由があるように思えていた。

ひとりきりで死んでいくのは寂しいという気持ちもあったのだろうが、きっとそれだけではないはずだ。

そもそも何故このブレンは、仲間達の死に場所がここだと分かった？
この五体のブレンも、全員が揃ってここを死に場所に選んでいるが、そんなことはいつ決めた？

もしかしたら、これもまたブレンの本能なのかもしれない。
本能的に彼の者達が、自分達の仲間の死に場所を知って、共にその場所で眠ろうとした・・・
ブレンには、どれほど離れていても、互いの意思を理解し合うような性質があるのかもしれなかった。

いや・・・そんなものですらないのかもしれない・・・

もしかしたらブレンは、初めはたったひとつの存在だったのではないだろうか。
たったひとつの大きな力が、その目的を果たすためにいくつにも分裂し、オーガニックプレートとなり、そして肉体を得、ブレンパワードとなった。
全てのブレンが元はひとつのものであるのなら、こうやって、自分達が死にゆく場所も、分かっているのかもしれない。
そうして、ひとつに寄り集まる様にして死ぬのは、元々バラバラに

なった自分達の中の何かを、もう一度ひとつの塊に戻そうとしているのかもしれない。
ではその何か・・・ブレン達の中にある何かは、一体どうなった？
ブレンの肉体としての死と共に、どこかへと消えてしまったのか？
あるいは、ひとつに纏まって、自分達の還るべき処に還っていった・・・

文の脳裏で、あの金色に輝くオルファンの姿が思い浮かんだ。

「貴方達って・・・」

無意識的にそんな言葉が口をついてでた時、仲間達の亡骸を見下ろしていたブレンが俄かに、ゆっくりと動き出した。
金属が軋むような鈍い音を鳴らしながらがくりと身体を揺らし、綿毛が舞い落ちるような速さで、仲間達の下へと降りていく。
当然、自分も彼らの中に入るためだ。

「ブ・・・ブレンっ」

思わず呼びかける文だったが、そうしたところでブレンは止まらないし、彼の者の死も止めることはできない。
彼女の声は間違いなく、ブレンには聞こえてさえいなかった。

「・・・・・・」

最早これまで、あのブレンの生命はこれで終わりだ。
口を噤み、その現実を噛みしめる中でも、文はそのまま哀しみの中に暗く沈み、身動きができなくなるようなことにはならなかった。

腰に下げたバッグから愛用のカメラを取り出すと、そのレンズを、仲間の下に向かうブレン、そして、彼の者を受け入れようとさえしない、ブレンの魂が抜けたただの殻の数々に向け、ひと思いにシャッターを押した。
何度も何度も。

そうすることで、自分がこのブレン達から何かを汲み取って、彼の者達の死が無駄でないことの証を立てられそうな気がしたからだ。

が、そんな中だった。

ゆっくりと降下し、今まさに地面に降り立とうとしていたブレンが、一層激しく、ガタガタとその身体を揺らした。

「う・・・っ」

思わず呻き、眼を見開いて、カメラのシャッターを押す指も止まる文。

そのままブレンは、滑る様に一体の仲間の隣に足をつけると、崩れるように膝をつき、うつ伏せになって倒れ込んだ。
重いものが地面に叩きつけられる大きく鈍い音が、文の鼓膜を揺らした。
だがその音も、生命の終わりというには、どこか軽い音にも聞こえたのだ。
何も入っていない、大きな空洞のある鉄の箱が落ちるような、そんな空しい音に。

その空虚な音響が、文に思い知らせた。
今まさに、あのブレンの生命は終わった。
今この眼に映るのは、ただの抜け殻であり、それこそ、単なる物・・・
ブレンの生命というのは、こうまであっさりと終わってしまうものなのだ。

「・・・はぁ・・・・・・はぁ・・・」

心臓が僅かにその鼓動を早め、息が荒くなる。
身体の奥からじわりと熱がこみ上げて来て、しっとりとした汗が胸の辺りを湿らせる。
それでもなお文は、後もう一度だけ・・・今まさに死んだブレンパワードの姿をカメラに写し撮った。

だが、そうすると、もうこの場にはとてもいられなくなり、彼女はブレンの亡骸に一瞥をくれながら、踵を返して背中を向けると、この場所の存在を地底にいる者達に伝えるべく、ひと思いに飛び去っていった。

ブレン達に何か手向けをしてやりたかったが、何をすればいいのか分からなかった。
多分、ビープレートを見つけてやるのが、そうなのだろう。
逆に言えばそれぐらいしか、自分達妖怪がブレン達に・・・しかも、死んでいったブレン達にしてやれることはないように思えた。

そうして、今に至る。

※

文から渡された写真を持つ手が小刻みに震える中で、彼女の説明を聞き、見開いた眼でその写真を見ていたさとり。

何事か、と、こちらに歩み寄ってきたパルスィと勇儀が、同じくさとりの持っていた写真に眼を向けた。

パルスィは、

「うぅ・・・っ？」

と、呻きながら眼を細める。

彼女とて、人間の生命を奪ったことはあるが、それだって、不本意によるものだったのだ。

勇儀の方はさすがに動じない様子ではあったが、僅かながらに険しい顔つきを見せていた。

それに続いて、さすがに何か起こっているのに気づいたこいし達も、

「どうしたのー？なに見てるの？」

と言いながらこちらに寄ってきた。

それに勇儀が、

「見ない方がいいぞ」

と呼びかける。

が、今は何も知らないこいし達からすれば、そんなことを言われたら尚更見たくなってしまう。

「なになに～？」
「見させてもらうよぅ～」
「ほら、どいてどいて」

一様にそんなことを言いながら、さとりの傍に集まっていたパルスィやヤマメ達の身体を押しのけ、代わりにさとりの持つ写真を見たこいしとお燐達。

そうして、写真に写るものをその眼に入れたこいしは、不思議そうな表情のまま、写真を覗きこんだ姿勢から微動だにせず動かなくなった。
しかし段々と、その眼が見開かれていく。

お燐も、
「ひえぁ～・・・ブ・・・ブレンが・・・っ」
と、驚愕していた。
しかし、他の妖怪に比べて、死というものに幾度も関わっている彼女は、まだそのショックも小さいようだった。

お空に至っては、この写真が何なのかさえ分からない様子で、ただ、
「え・・・？」
と漏らすばかりだった。
あるいは今回は、分からないのではなく、分かりたくないだけなのかもしれなかった。

皆一様に写真に眼を向け、そこに写されているものを見たのを確認した文は、言った。

「魔理沙さんや、八意先生にも見せないといけません・・・どうします？写真は他にもあります。貴方方に渡しておきましょうか？」

その言葉に、返事はなかった。
皆同じように、文の顔を見て、それからもう一度写真に眼を落とし、苦々しくその眼を逸らす、という動きをしていた。

そしてさとりはそういう動きをする者達以上に、沈んだ気持ちを顕著に顕しているように見えた。
深く顔を俯けたまま、身動きを取らなかったからだ。
文の顔を見返しもしなかったし、皆と同じように写真を見ているのかさえ分からなかった。
ただ、どこでもないどこかに眼だけは向けて、その眼で何も見ていないようだった。

相当にショックであるようだ。
まあ、文にもそろそろ分かってきたことだが、さとりはあれで中々、心が頑丈にはできていない。
さすがに、いくつものブレンの亡骸を見てしまえば、仕方がないことなのだろう。
少しメンタルが弱すぎる印象も受けるが。

と、こんなことを考えれば、さとりに知られてしまうかもしれないが、別にそれでもよかった。
事実であるわけだし、さとり自身、このことは分かっているはずだ。
そう考える文であったが、続くさとりの言葉が、その考えを覆した。

今まで黙り込んで俯いていたさとりが、ゆっくりとその顔を上げた。
その表情は、文が想像していたものとは大きく異なっていた。

こちらを見返すその眼は、気弱なりに力強く、ある種の威厳さえ湛えているように見えた。
ブレンの亡骸を写すその写真を見ても、大きなショックは受けていないようだった。
いや、実際は受けているのは間違いないのだが・・・
そのショックを感じさせないほどの何かが、彼女の心の中にはあったのだ。

文は、自分がさとりに対して感じていた彼女に対するイメージは、本当の・・・本来の彼女には、当てはまらないことに気づいた。
今まで気弱そうで、臆病に見えていたさとりだったが、本当のところは、並の妖怪では及ばないほどの強かさも持っていたのかもしれなかった。
しかもその強かさは、ただ相手を陥れるための、力としての強かさではなかった。
柔軟さを併せ持っているように、文には感じられた。
表情を覗って感じただけで、それが全て確かというわけではないのだろうが・・・

そして、まっすぐに見つめてくるその眼から無言の反論が聞こえてくるような気がして、文は思わず口をぐっと噤んで顎を引いて、申し訳なさそうに上目遣いでさとりを見返した。

そんな文に対して、彼女は口を開くなりこう言った。

「行きましょう。この場所に」

その突然の言葉に、文は
「なんですって？」
と聞き返してしまった。

それにさとりが、はっきりとした口調で、もう一度言ってくる。

「このブレン達のところに、行こうっていうんです」

それには、今度はパルスィの方が聞き返してきた。

「どうして急に？それに、私達が行ったところで、気に病むだけだと思うけど．．．」

「気に病むとか、そういうことじゃなくて．．．私達でも、しっかり弔いをしてあげた方がいいと思うんです」

「弔い？」
というヤマメの言葉に、こいしが続いた。

「お墓参りをするってこと？」

墓参りという表現は何か違うかもしれないが、多くのブレン達が眠る写真の場所を墓というのは、そこまで間違っていることではないのかもしれなかった。
彼女の声に、さらにさとりが続く。

「ブレンの死を見て心を痛めることができるのなら、彼らの亡骸の前で、彼らの魂が逝くべき所に逝けるよう祈りを捧げることだって、必要でしょう」

その言葉は、この場にいる妖怪達にとってはよく分かる話だった。
死んでいったブレンのために、その魂の見送りぐらいすれば、彼の者達の魂も報われるというわけか。

そう感じる中で、彼女の言葉を聞く文は考えた。
もしかしたらそうすることで、元々一つであったブレンの力を汲み取り、残ったブレン達がビープレートにいきつくだけのオーガニックエナジーを得られるかもしれない。
力というより、『加護』としての生命のエネルギーを。
彼女は、ますますさとりに対し誤解していたことを実感しながら、彼女こそが、この異変を解決へと導いていくのではないかという期待も感じられた。
そんな気持ちを込め、彼女はさとりの言葉に返事をしようとしたが、それよりも前に、勇儀の大きな声がその場に響いた。

「なるほど、それはそうだ！行くべきだろう、このブレン達の元にな．．．魔理沙達もみんな連れていこうっ」

が、その声に、キスメが不安そうな表情と声音で返した。

「でも、またグランチャーと戦うことになったら、どうする？」

それには、さとりが応える。

「その時はその時です。いずれは彼らとだって、戦うことになるんです」

それにはパルスィが、
「その時はその時、って．．．妬ましい」

と、呆れたように言う。

だが彼女の方だって、さとりに
「でも、今すぐにでも行った方がいいはずです。貴方だって、ブレン達をあのままにさせるのは寂しそうだと思うでしょう？」
と聞かれれば、
「・・・そりゃ、そうよ」
と応えるしかなかった。

パルスィの、渋々ながらも納得しているような返事を聞いたヤマメも、こう言った。
「私もだよ。ブレン達のためなら、もう一度地上に出ていく勇気を出すのも、悪くないねぇ・・・ねぇ、天狗よ。いいでしょう？」

突然聞かれた文は、
「え？」
と聞き返しつつ、彼女の言わんとすることをすぐに理解し、ヤマメの言葉に応えた。

「・・・異変の解決のためなら、地底の妖怪とも協力しろとの天魔様の命はあります・・・
私は、あの場所にいるブレン達のこともどうにかしてやることが、異変の解決になると思っています」
「いいってことだねぇ」
「そういうことです。そうと決まれば、準備は早いほどいい。私の方で、他のみんなにも話をつけてきましょう。
地底のブレンパワード達の大移動になります」

その声にさとりは、
「はいっ」

と返事をした。

文が、魔理沙達を初めとして、地底にいる者達に事情を説明しに向かう。

そんな中で、さとりの心は固く引き締まっていた。

彼女は、いつかオルファンがビープレートを得て銀河に旅立ち、もう一人のオルファンと和解する時がくるのを信じていた。

だがそれには、今この時に、戦いのために、あるいは孤独のために死んでいったアンチボディの魂を蔑にしてはいけないと考えていたのだ。

ブレンも勿論、本当のところはグランチャーだってそうなのだ。

例え生命が終わり、魂だけになろうとも、その魂も共に連れていって初めて、オルファンは幸福でいられるのではないか？

そうしなければ、ビープレートなど得られないのでは・・・

そう考えていたのだ。

そして、戦いの中で、死んでいった・・・自分達が殺めたグランチャーにも、謝らなければいけないのだと感じた。

例えば、紅魔館にいる十六夜　咲夜にも・・・

※

ようやく陽の光も高々と上り、刺すような日差しに僅かばかりの熱が感じられるようになってきた。

そんな中で、紅魔館の門前でひたすら仁王立ちしていた美鈴が落ち着きのない様子を見せていたのは、何もその、暑いと感じない程度の暑さのためなどではなかった。
どうしても、心が落ち着かなかったのだ。
形容もできない、ただぼんやりとした不安が心の内にあり、集中力を乱していた。
こんなことでは、門番の仕事に集中できるわけもなかった。

仁王立ちしたまま、細めた眼で、とにかく睨みつけるように前だけを見ていた彼女は、ふと呟いていた。

「・・・グランチャー・・・っ」

彼女のこの不安は他でもなく、グランチャーに対するものだった。
戦いの中で傷つき、死を待つ身となったグランチャー。
彼の者は今も館の傍で、緩やかに死の階段を上っている最中であるはずだ。
徐々にその肉体は弱っていき、やがて死にいたるのだろう。

だが、それはいつの話だ？
もしかしたら、今日、今この時のことなのかもしれない。
もうすでに今、グランチャーはその生命を終えているのではないか？

そう思うと、美鈴はいてもたってもいられなくなるのだ。
グランチャーが今どうなっているのか、確かめたい。
もしまだ生命を終えておらず、こちらの言葉を聞くだけの余裕が残っているなら、もう一度だけ話をしてみたい。
今までロクにできなかった話をだ。
そうして、せめて死にゆく彼の者にだけは、真実を伝えたい。

「・・・・・・・っ」

咲夜から、しっかり働けと言われた矢先だったが、美鈴は自らの仕事を放り出して、グランチャーの元に向かうことにした。

仕事はしっかりしなければいけない、などということをどれほど心の内で言い続けてみても、それ以上にグランチャーに対する不安の方が優先されていたし、この不安を抱えたまま仕事をしたところで、真面目にできるとも思えなかった。

このままでは、妖精の一匹や二匹が門を素通りしても、気付かないかもしれないのだ。

自分自身でそう思えるほどに、美鈴の心は揺れていた。

「十分・・・いや、五分でいい・・・五分だけ、サボらせて頂きます」

決意を固めた彼女は、誰に言うともなくこう吐き捨ててから、門の向こうに広がる紅魔館の敷地へとくるりと振り返ると、堅苦しい足取りで歩を進めていった。

そのまま真っ直ぐに・・・無数の花壇の間を縫うように進みながらも心持ちは真っ直ぐに、館の近くにまで出る。

色とりどりの花が、陽光に映えてよりその色を濃くし、赤い花は血の色に染まり、黄色い花は自分を照らす太陽よりも強く輝いていた。

そんな中を抜ければやがて、美鈴の眼に、館のバルコニーの近くで横たわるグランチャーの姿が見えてくる。

だが、その姿は・・・

美鈴は思わず、驚嘆した。

「グランチャー！」

それと共に、突き動かされたようにその身を躍動させ、彼の者の元へと駆け寄っていた。

横たわるグランチャーからは、明らかに生きるための力が失われているように見えた。

まだ昨日の間では、何日かは生き永らえそうだったというのに、それが嘘だったかのように衰弱していた。

オーガニックエナジーが失われていたのだ。

グランチャーの調子がいいとか悪いとか、そんな細かいところまで見分けることなど到底できない美鈴であっても、今のグランチャーでは、それこそ本当に今日中に死んでしまうだろうと思えた。

だが、今はまだ、どうやらオーガニックエナジーが足りていない状態でしかないようだ。

また新たに生命力を与えてやれば、多少はマシになる。

そもそも、どうしてこうまでオーガニックエナジーがなくなってしまったのだ？

毎日こまめに、彼の者と一緒にいてやるだけでも、大なり小なりオーガニックエナジーは与えられるはずなのに・・・

もしかして咲夜は、昨日グランチャーをこの場に降ろしてからずっと、彼の者の胎内に入っていないというのか？

「ど・・・どうして・・・っ！？」

美鈴は、いろいろな感情を込めてこう吐き捨てながら、とにかくひたすら、彼の者に向かって駆けた。

第十五話　その5

「は・・・はぁっ」

グランチャーのすぐ傍にまで駆け寄った彼女は、横たわる彼の者の右腕の装甲に手をついて、叫ぶように呼びかけた。

「グランチャー！大丈夫なのっ？一体どうしたの！」

その声に、グランチャーが何事か返事したように聞こえたが、オーガニックエナジーが不安定である故か、ほとんど聞きとることができなかった。

「くぅー・・・っ」

歯を食いしばって呻いた美鈴は、尚も衝き動かされるように左手のひらの上に飛び乗ると、そのまま腕を伝って肩まで上がり、そこからまた胸を下って腰まで降りていった。

彼の者の胎内へと降りるためだ。

グランチャーには失礼なことをしているかもしれないが、彼の者の深紅の装甲を踏みしめながらゆく。

しかしその間も、踏みしめる足からは、グランチャーが本来放つべきである熱というものが、まったく感じられなかった。

このままでは、本当にまずい。

何故こんなことになったのか考える前に、グランチャーを助けるこ

とを考えなければ。

「そりゃ、グランチャーがこうなることを望んだのが私だけど・・・・・あぁ・・・っ！」

苦々しく吐き捨てながら腰まで降り、それと共に、装甲が開放されぽっかりと口を開けている穴の奥から、胎内の様子を覗き見た美鈴は、そのまま、グランチャーが嫌がろうがお構いなしにその奥へと飛び込んだ。

スリットウェハーに着地すると同時に、それの持つ柔らかさが健在であると感じられた。
熱は失われているが、弾力性は残っている。
やはり、グランチャーはまだ死んでいないし、充分に息を吹き返すこともできる。

胎内は非常に暗い。外の光景を映し出していないのだ。
そうするだけのオーガニックエナジーも持ち合わせていないのだろう。

着地すると同時に、美鈴は眼の前のスリットウェハーの壁（本来は床面にあたる部分だ）に、先程と同じように手をつきながら、もう一度グランチャーに対して呼びかけた。

「グランチャー！嫌かもしれないけど、私の生命を吸って！そうすれば、死なずに済むっ」

そして、グランチャーがまたその声に返事をする。

胎内では外よりもオーガニックエナジーが伝播しやすいのか、今度の返事は比較的はっきりと聞こえた。
だがその返事は・・・

美鈴は、愕然とした表情を浮かべながら、吐き捨てた。

「な・・・なんで嫌なのっ？グランチャー、どうしてさ！」

美鈴のオーガニックエナジーを吸えば、今のところは助かるはずだ。
勿論、彼女のオーガニックエナジーは咲夜に比べれば波長が合わないだろう。
グランチャーにとってはいいものではないのかもしれないが、それでも、生命を繋ぎとめるには充分の力を与えられるはずだ。
だというのに、あえてそうせず、自ら生命を無駄にするようなことが、美鈴にはとても理解できなかった。

次いで彼女は、思わず投げかけた問いの言葉に対する、グランチャーの応えを聞いた。

「咲夜さんと決めたことって・・・？・・・
・・・そ、そんな・・・っ」

グランチャーは語る。

彼の者と咲夜は、あることを互いに取り決めていた。

というのも、グランチャーはどうにか戦いを生き残り、紅魔館に還ってくることはできた。
だが、それでもこのままでは確実に生命は失われてしまう。
となれば、むざむざ生き永らえて余計な哀しみを増やすよりかは、

いっそ成る様に任せて、早く死んでしまった方がいいのかもしれなかった。
グランチャーには、すでに未練はなかった。
一度は失うはずだった生命を繋ぎとめて、一時ながらも充実感を持って生きられたことに対する、咲夜への感謝と共に、死を受け入れる覚悟はとうにできていた。
咲夜もその意思を受け止めて、グランチャーに対する未練を断ち切り、この先一切、彼の者にオーガニックエナジーを与えないようにすることにした。

だから、彼女との約束のためにも、例え他人のものであろうと、オーガニックエナジーを得て、死を遠ざけるわけにはいかなかったのだ。
それがグランチャーの・・・ひいては咲夜の考えだった。

「おかしいよぉそれっ！」

突然、美鈴の叫びが胎内に響いた。
彼女は、スリットウェハーに手をついたまま身を強張らせて、腹の底から張り上げるような声を発し、グランチャーに向かって叫んでいた。

「これ以上哀しくないようにに、もう会わないってっ？・・・そんなの余計に哀しいじゃないかぁー！あんたも咲夜さんも、変なこと考えないでよっ！私の生命を吸えばいいじゃない！それで、咲夜さんとだって、もっと一緒にいればいいのに！」

その言葉に、グランチャーは返した。

お前などに、自分と咲夜の気持ちが分かりはしない、と。

そしてそれにまた、美鈴が返した。

「分かりませんよ、そんなもの！あんただって、私の気持ちも分からないくせにさっ！
この際・・・この際だから、全部あんたに話すよっ・・・グランチャー！よく聞きなさい！
あんたをそういうことにしたのは私なんだよぉー！」

その言葉に、グランチャーが驚愕し、全身に張り巡らされたスリットウェハーが緊張に張りつめるのを感じた。
熱を失い、冷気に包まれていた胎内が、より一層凍えるほどに寒くなるのを感じながら、
彼の者がどういうことだと聞いてくる声を聞いた美鈴は、落ち着きを取り戻しながら・・・というより、とうとう真実を吐露してしまったことに対する虚脱感に苛まれながら、語り始めた。
身体が俄かに震えだしたのは、寒くなった胎内の空気にあてられたからでもあるだろうが、それだけではないだろう。

「・・・貴方と出逢ってから、咲夜さんは変わった。それは否定できないでしょう？貴方にはそういう性質があるっていうのは、みんな分かってることなんだから・・・
それで、私は・・・そういう風に変わっていく咲夜さんのことを見ていられなかった。だから、あの人を元に戻すために、貴方を殺してしまえばいいと・・・
そのために、地底にいるブレンパワード達に頼みごともした。
咲夜さんが、しばらく貴方から離れていたこともあったでしょう？
それも、貴方と離れ離れにして、ブレン達が戦いやすくするためだ

った・・・
グランチャー・・・ごめんっ・・・本当に済まなかった・・・！」

今度は、グランチャーは返事をしなかった。
返事のしようもなかったのだろうが、そのことが意味することが、美鈴には分かっていた。

自らが呼びこんだことであるのは重々承知していることだが、彼女は、胸が締め付けられる、という感覚がどういうものなのか、その身をもって味わっていた。
それでも、振り絞るように言葉を続ける。

「だけど私は・・・貴方と咲夜さんの間にある絆のことを、何も考えていなかった。
それに、どんなに代わっても、咲夜さんは本当のところは紅魔館のみんなのことが好きな、何も変わらない咲夜さんだったってことも・・・
私を殺すだなんて酷いことも言ったけど、本当はそんなことするつもりなんてなかった・・・
そんな咲夜さんのことも、貴方のことも分からずに、私はこんなことを貴方にしてしまった。
・・・許してくれないのは分かってるけど、私は、本当に悔やんでいるの。
本当は、貴方には死んでほしくなんかなかった・・・矛盾してるよ！こんな私の言うことなんて、聞きたくないかもしれない、それも分かるよ！
それに、もうどうしようもないのも分かってる・・・だけど・・・・だから、だからさ、せめて・・・！」

身体の震えはより一層強くなる。

スリットウェハーにあてられている指も、がくがくと震えていた。
柔らかい積層構造の上に立つ足腰も段々と力を失い、立っていることすらままならないほどになっていた。
のみならず、唇も震えだし、細められた瞼の間からは、微かに光る雫が流れおちた。

「うぅ・・・っ」

嗚咽の声を漏らしながら、崩れるように膝をつき、スリットウェハーに額をあててもたれかかった彼女は、それでもなお離れなかった右手のひらで、グランチャーの、生命を感じさせてくれない柔らかい子宮の壁を撫でながら、悲痛な声で言った。

「もう少し、咲夜さんと一緒にいてあげなよ・・・・・・このままじゃ・・・あんまり・・・あんまり過ぎる・・・っ」

それだけ言うと、美鈴はひたすらに、肩を小刻みに揺らしながら泣き続けた。
鼻を啜る声と、喘ぎ声のような嗚咽が、胎内に何度も響き渡る。
身体の震えは際限なく大きくなり、時折、震えというよりかは痙攣と言った方がよさそうなものにもなっていた。グランチャーまで伝播してしまいそうなほどに。
眼からこぼれ落ちる大粒の涙は、スリットウェハーの上に滴り落ち、その奥へ、グランチャーの身体の奥へと染み込んでいく。

そんなことが、一分近く続いた時だった。

美鈴は、自分の身体の奥の方から、何か大きなものが抜けていくよ

うな感覚に見舞われた。
決して大事なものではない。だが、とても大きく、重いものだった。
それが抜けたことで、何だか心の中が、よくも悪くもすっきりしたようにさえ思えた。

そうして、身体から抜けると共にどこかへと消えていったそれが一体何なのか、美鈴にはすぐに分かった。

彼女は、俯き、うなだれていた顔を上げ、思わず驚嘆した。
とめどなく溢れていた涙も、一瞬で乾いてしまった。

「グランチャー・・・っ！」

彼の者が、美鈴のオーガニックエナジーを吸収しているのだ。
身体から何かが抜けていく感覚は、尚も続く。
その何かが自身の生命力だと分かった途端、美鈴は段々と疲労感を覚えてきた。
生命力が抜かれているのだから、それも仕方がないことだろう。

だがそれに反するように、グランチャーが段々とその息を吹き返してくるのが分かった。
北方（シベリア）の国の凍土のごとく肌寒かった胎内が、段々と熱を取り戻していき、温かい空気に包まれていく。

美鈴は、前のめりになっていた身体を後ろに引いて、ぺたりと尻餅をついて、あぐらをかいて座り込んだ。
そうして、まるで放心したようにぼーっとした顔で宙を眺めていたかと思うと、乾いていた涙を再び流しながら、深く眼を閉じ、頬に透明の筋を描きながら呟いた。

「・・・私なんかの言葉を聞いてくれて・・・・・・ありがとう・・・っ」

グランチャーは、やはりそれには応えなかった。
なんだかんだと言っても、やはり美鈴のことを軽蔑していたのだろう。
それは最早、仕方がないことだ。
あんなことを言われて尚も平素とした様子でいられる者など、グランチャー以外にも、誰一人としていないはずだ。
それでも、彼の者が美鈴の願いを聞き入れたのは、彼女のことを軽蔑する中で、彼女の中にある想いの中にただひとつだけ、認められることがあったからだ。

それは、咲夜に対する想いだった。
彼女のことを愛していることに関しては、グランチャーも美鈴も、ひとつになれたのだ。

そして彼の者は、美鈴の言葉に確かに動かされた。
哀しみを増やさないために、これ以上互いに会うことは止めようと、咲夜と共に取り決めた。
しかしそれは本当に、お互いの気持ちに折り合いをつけた結果だったのか？
グランチャーは、確かにもう死を恐れていないし、咲夜に対する未練を振り切るだけの潔さも持っていた。
だが、咲夜はどうだったのだ？
彼女も、グランチャーと何もかも同じだったのか？
確かに、彼の者に対する未練を捨てるとは言った。
だが、捨てるということは、元々はあったということなのではないか？
しかも、捨てると意識しなければならないほど、大きく。

思えばグランチャーは、咲夜に無理強いをしてばかりでいたのかもしれない。
自らの思念を伝播させ、戦いに駆りたてた。
それに関しては、やはり美鈴の言う通りだったのだ。
グランチャーが彼女を変えてしまった。
そうして今もまた、自分の個人的な意思に、咲夜を巻き込んでしまっているだけなのではないか？

グランチャーは、残念ながら、ここまで複雑に物事を思考する能力はなかった。
そんなことが脳裏に浮かんできても、結論を導き出すことはできない。
考えるということに関しては、アンチボディは人妖ほどに高度な能力は持ち合わせていなかった。

だから、感じるのだ。
何も考えられなくとも、感じることで、ただひとつだけ分かることがあった。
それは、彼の者は、咲夜との絆を重んじるというには、彼女の本当の気持ちをまだ充分には分かっていないということだった。
それを．．．咲夜の気持ちの全てを知りたい。
知ることができるまでは、死んでも死にきれない。
そんな念が、彼の者の死に体の身体の中で湧き出してきた。

そうして彼の者は、美鈴にあることを頼んだ。
軽蔑し、それができる身体であるなら殺してさえいたかもしれない彼女に対してだ。

もう一度互いが会えるように、咲夜を連れてきてくれ、と。

グランチャーは最早、自分から彼女の方に会うことはできない。
だから、誰かに頼むしかなかった。
そしてこのことを頼めるのは、自分と同じように咲夜のことを想っている美鈴が一番適しているはずだったのだ。

彼の者の頼みを聞いた美鈴は、右腕で眼元を拭ってから、応えた。

「分かった・・・すぐに連れてくる。けどその前に、こんなこと言える立場じゃないことは分かってるけど、こっちからもひとつ頼みたいことがあるんです」

さすがに不快感は隠しきれずとも、美鈴の言葉を聞く用意のあったグランチャーに対し、彼女は続けて言った。

「私が今話したことを、決して咲夜さんには伝えないでいて欲しいんです・・・悪いことをしたとは思うし、この罪は償われないといけないことも分かってるけど・・・どうしても、咲夜さんに嫌われるのだけは嫌なんです・・・
断るというなら、それでも構まわない、仕方がないことだから。でも、できることなら、話さないでいてほしい。
・・・・・・お願いです」

その言葉には、しばらく返事はなかった。

「・・・・・・」

やはり、到底聞き入れられることではなかったか・・・

自らの死に直接かかわっている者からは、何を頼まれようと了承できるものではない。
いずれは咲夜にも、このことは知られてしまうだろう。
今となっては正直いって不本意だが、このまま自らが罰せられるというなら、それもまた美鈴には正しいことだと思えた。
そんなことを考えた瞬間、美鈴は、やや遅れてグランチャーが応える声を聞いた。

美鈴の頼みを承ってくれるというのだ。

「・・・グランチャー・・・」

思わず呟く彼女に、グランチャーは言う。
美鈴のやったことは、やはりそう簡単に許せるものではない。
だが、咲夜に嫌われたくないという想いに関しては、やはり理解できるところもあった。
そうである以上、彼女を貶めるような真似を、したくはなかったのだ。
死を眼の前にしてようやく、グランチャーはその潔さを、他者にさえ向けられるようになっていた。

美鈴は思わず、身体を前に倒し地に突っ伏して、額をスリットウェハーに擦りつけながら、感謝した。

「ありがとうグランチャー!・・・私がこんなこと言えるわけないけど、貴方の無念は、絶対無駄にはしない・・・!」

そうして、下げた頭を上げるのと共に、すくっと立ち上がった彼女は、続いて、
「じゃぁ、行ってきます。すぐにでも連れてきますから、それまで

待っていてください」
とグランチャーに伝えると、そのままスリットウェハーを蹴って飛び上がり、穴を通って胎内から外へと出ていった。

※

咲夜は、館の地下にある倉庫に来ていた。
備蓄されている食糧その他諸々の物資を確認して、必要なものがあれば人間の里にまで買い出しに出かけるためだった。
が、（それほど遠くない）以前に、すでに必要なものは全て揃えており、今のところは、足りなくなっている物は何もなかった。
量的には、どれもこれも当分は充分足りそうだ。
が、それでも咲夜は、紅茶の茶葉ぐらいは、またいずれ無くなるのだろうから今日の内に買いにいこうか、などと考えていた。

何か、今の咲夜には、自分の生命を消費するための時間が、大きく余っているように思えて仕方がなかったからだ。
だから、その余った時間を何かに使わなければ、と考えていた。

その余った時間が何であるのかは、考えるまでもなかった。
グランチャーと出逢ってからこの方、彼の者のために使うことを厭わなかった咲夜の暇（いとま）であった。
それが、彼の者と離れることを決めた途端に綺麗になくなってしまい、彼女の時間の流れの中に、ぽっかりと穴を開けてしまっていたのだ。
それが彼女に、えもいえぬ空虚な感覚をもたらしていた。

だがこんなものは、いずれ必ず感じることになるものだったのだ。
グランチャーの生命が長くない以上、彼の者といた時間の全てはいずれ消え失せる。
それが、少し後か、今すぐであるかの違いでしかなかった。

それに、この空虚な気持ちもまた、永遠などではないはずだ。
そうとも。
グランチャーの敗北を境に、眼に見えて雰囲気の変わったレミリアやパチュリー達だって、やがて何もかも忘れて、いつもの彼女達に戻る。
それと同じように、自分だっていずれグランチャーのことなど、最初からいなかった者のように考えられるようになるのだ。
というより、そうならなければならない。
いつまでも彼の者に対する未練に囚われていては、死んでいくグランチャーに示しがつかない。

咲夜はとにかく、こう考えていた。

だからそのためにも、この空虚な時間の空白は、埋めなければならないのだ。

「・・・・・・」

すぐにでも、人間の里へと出ていこう。
そう考えながら、薄暗く、少しだけ埃っぽい印象を受ける地下倉庫を後にして、階段を上り、館の一階へと出た、その時だった。

いつの間にやら、咲夜の眼の前に、美鈴が静かに佇んでいた。

何故こんなところにいるのか？

と、さすがに驚いた彼女だったが、すぐに戒めるような眼つきになって、眼の前の美鈴に対し言った。

「貴方、ちょっと前まで門番の仕事をまるでやってなかったのよ？館に帰ってきてからぐらいは、真面目に働きなさい」

しかしそれに、美鈴が堅苦しい口調で返す。

「・・・済みません。ただ、どうしても咲夜さんに用があるんです・・・大事な用なんです」

「用？」

「はい・・・グランチャーのことです」

「グランチャー・・・」

咲夜にとっては、忘れようとしている言葉だった。

彼女は、静かな声で美鈴に言い返した。

「悪いけれど、彼のことはもう・・・」

「はい、分かっています・・・グランチャーから話は聞きました」

「グランチャーから・・・？」

「はい」

咲夜は思わず聞き返していた。

そうして、どういう経緯があったのかは知らないが、美鈴に対して

簡単に事情を話してしまったグランチャーを、案外口が軽いのだな、と思ってしまった。
が、彼女は別にグランチャーに対し、他言は無用と伝えたりはしていなかったので、こう考えるのは筋違いでもあった。
それはとにかくとして、咲夜は、続く美鈴の言葉を聞いた。
「聞いてください、咲夜さん・・・グランチャーは、私の生命を吸って、生命を永らえさせました」
この言葉に咲夜は、眼を見張って驚いた。
動揺した様子で、どもりながら美鈴に対して聞き返す。
自然の流れに任せて死ぬべくして死のうと、そのために、他者のオーガニックエナジーでさえ得ようとはしないという約束が、あっさりと破られてしまったということなのだから、動揺するのも無理のないことだった。
「え?・・・どういう・・・な、何故っ?」
「それは、咲夜さんだって分かっているはずです」
「・・・どういうこと・・・?」
「咲夜さんとグランチャーは、互いの気持ちを通わせて、約束をしたと思っていますが、本当はそうじゃない・・・貴方達ふたりの気持ちは、どこかずれてしまっていたんです」
「な・・・なにを言って・・・っ!」
さすがにこの言葉には、咲夜も僅かに語気を荒くした。
だがそれは、自分がグランチャーに感じていた気持ちのずれを、美鈴に指摘されたからである。

いうなれば、彼女の胸中で起こった憤りは、そのまま自身に向けたものであったわけだ。

咲夜の険しい言葉を聞いてもなお、美鈴は、眼を細めながらも言葉を続けた。

「咲夜さん・・・貴方、ホントにグランチャーに対する未練を捨て切れてるんですか？あいつとこのまま顔も会わせずに死ぬのを待つなんて・・・そんなの、哀しすぎると思いませんか？」

「・・・で、でも・・・これは、私とグランチャーで決めたことで・・・」

「そのグランチャーが、生命を繋げているんです・・・咲夜さん。貴方のためになんです」

「え・・・？」

「咲夜さん・・・もう、貴方がグランチャーの方に合わせる必要はなくなったんです・・・今度は、グランチャーが貴方の方に合わせてくれるんです。だから・・・っ」

眼を見開き、呆然と立ち尽くす咲夜。

彼女は、静かに顔を俯けると、力なく開いた指をほんの僅かに震えさせるだけで、ほとんど動かなくなった。

そんな彼女に対し、美鈴が最後にこうとだけ言う。

「・・・グランチャーが呼んでいます・・・それでも、貴方が心の底から、本当にグランチャーのことを忘れられているなら、行く必要はありません。それが貴方の気持ちなら、グランチャーも納得し

ます。あいつだって、そのまま緩やかな死を受け入れるでしょう。
あいつには、それができるのだから・・・
でも、咲夜さんはどうなんですか・・・？
貴方は、どうします。行きますか・・・行きませんか」

「・・・・・・っ」

震えていた手が握りしめられる。
それと同時に、咲夜が歯を食いしばる様子が、俯いて顔が見えないというのに、美鈴には分かった。
が、それに次いで咲夜は、その俯いた顔をきっ、とあげると、美鈴の問いかけに対してこう応えた。

「行く・・・・・行きたい・・・グランチャーのところへ・・・」

美鈴は力強く頷き、そして、言った。

「行きましょうっ」

そうして二人は、グランチャーの下へと向かった。

※

ゆっくりと館から外に出た二人は、やがて、美鈴が先程そこにいたのと同じように、グランチャーの腰のあたりに立って、胎内へと続く穴の傍に立っていた。
グランチャーは、咲夜が来てくれたことによろこんでいたようだった。
約束を守ってくれた美鈴にも、軽蔑しているなりに、感謝してくれていた。
もちろん咲夜には、美鈴のやった行為の真相は伝えない。
そのグランチャーの律儀さは、美鈴にとっては逆に辛くなるほどのものだった。

このまま咲夜が胎内の中に入ってくれれば、彼の者の調子も、見違えるようによくなってくれるだろう。
もっとも、散りゆく生命がどうこうできるわけはなかったが。

美鈴は、隣に立つ咲夜の方に眼を向けながら、呼びかけた。

「咲夜さん・・・それじゃあ、グランチャーと一緒にいてやってください」

だがその瞬間、美鈴は驚愕し、息を呑んだ。
それと共に咲夜の、消え入りそうなほどに小さな返事が聞こえてきた。

「え・・・えぇ・・・そうね」

そう呟く咲夜の横顔は、どこまでも不安そうだった。
眉は下がり、口を噤むその顔は、まるで始めて異性と関わる少女の顔だ。

「・・・・・・っ」

美鈴は、いつもの咲夜が絶対に見せないような・・・というか、自分が始めてみるような顔に驚き、何も言えなくなった。
縮こまっているように見える咲夜の身体は、微かに震えている。
それもまた、自分の眼の前に空いている胎内に続く穴が、奈落へと続いていると思っているかのような印象を美鈴にもたらしていた。

明らかに咲夜は、今という状況に恐れ、不安になっていた。
何故そうなるのか、美鈴には、分かるような気もしたが、実際はほとんど分からなかった。

「さ・・・咲夜さん」

戸惑いながらようやく声を出し、もう一度呼びかけた彼女に、咲夜はうわ言のようにまた返事した。

「わ・・・分かっているから・・・今・・・今行く・・・」

そうは言うが、彼女はいつまでも胎内に入ることができないでいた。
足が震え、まったく動いてくれなかったのだ。
彼女は眼の前にまで来て、グランチャーと再び心を交わらせることができないでいた。

仕方がない。
そんなことを脳裏で呟きつつ、美鈴は咲夜のすぐ傍にまで歩み寄ると、背中から両腕を回して、彼女の身体をしっかりと抱きかかえた。

「あぁ・・・」
と、微かな吐息を漏らす彼女の耳元で、呼びかける。
「私と一緒に行きましょう・・・咲夜さん、大丈夫ですね？それとも、やっぱりグランチャーとは一緒にいられませんか？」
咲夜が、
「・・・ううん」
と声を漏らしながら、回した美鈴の両腕に手を当てながら首を左右に振るのが、背中からでも見えた。
普段の彼女が見せないような仕草に、美鈴は自分の胸中で何か、生温い感覚が沸き立つのを感じた。
が、それは、今は感じるべきではないものであった。
心を乱す粘性が、この感覚にはあった。
やましい心を戒めるように、咲夜とは別の心持ちで首を左右に振った彼女は、気を引き締めると、もう一度彼女に対して呼びかけた。
「それじゃ、行きますよ」
そう言うと共に、美鈴は、咲夜の身体を抱えたまま足から穴に突っ込んで、グランチャーの胎内へと降りていった。

第十五話　その6

「う・・・」

美鈴が先程入った時とは違う。
グランチャーの胎内は、ある程度温かさに包まれていた。
しかし、万全の状態のグランチャーに乗ったことがない美鈴には何とも言えないが、これでもやはり本来の熱は失われているのだろう。

スリットウェハーの上に降り立つと同時に、咲夜の身体から力が抜けるのを感じた。
その身体を抱きかかえる腕に、彼女の体重がかかる。
美鈴は、彼女の身体を倒れないように支えながら、咲夜をその場に座らせた。

それと同時に咲夜は、形容できない表情で、眼の前に見えるスリットウェハーの壁をじっと見つめて、動かなくなった。
美鈴には、その様子を見守ることしかできない。

「・・・それじゃぁ、私は出ていきましょうか?」
と聞くと、こんな返事が帰ってくるだけだった。

「いえ、出ていかなくてもいい・・・ここにいて・・・」

「・・・・・・」

その会話を境に、二人は何も言えなくなった。
息を吹き返したグランチャーの胎内は温かくも、静かだ。
あらゆる一切の音から隔絶されたような空間がその場に広がり、二人を不気味なまでの音の・・・波の停滞の中に落とし込んでいた。
咲夜は、グランチャーと何か話をしなくてはいけないのに、何を話せばいいのか分からなかった。
いや、話さなければいけないことは分かっているのだが、それを話そうとする心が、何かにせき止められていたのだ。

だが、そんな静寂も、いずれは破られることになる。

咲夜を座らせたまま、その背中をじっと見守っていた美鈴は、いつぞやと同じように、どこか小さく見えるようになっていた彼女の背中が、微かに震えだしていることに気づいた。
そしてそれと共に、微かに吐息が漏れるような音が、無音を保っていた胎内にて、微かに響いてきた。

それは、咲夜の啜り泣く声に他ならなかった。
彼女は、再びグランチャーと心を通わせることになった今、涙を流していた。

何故そうなるのか、美鈴にはやはり分からなかったが、それでいて、やはりどこか理解できるような気もしていた。

慌てて咲夜の肩に手を当てた美鈴は、呼びかけた。

「どうしたんですか?咲夜さん、一体・・・」

美鈴のこの行動が、咲夜の中で何かを抑えていたものを破り、彼女の感情の壁を決壊させることになった。

「う・・・うぅ・・・く・・・っ」

彼女は、啜り泣く声を、嗚咽の声として一層大きくし、すがりつくようにその身体を美鈴に寄せてきた。

再び、美鈴は咲夜の身体の感触を感じることになったのだが、その感触は、本当に先程抱きしめていた咲夜と同じものなのか分からなくなるほどに、寂しさに包まれていた。

「・・・さ、咲夜、さ・・・っ」

その名を呟こうとするが、途中でかすれて声にすらならなくなる美鈴に対して、咲夜は、彼女に寄せた身体と共に声を震わせながら、独白した。

「もう一度会ったって、グランチャーが生き返るわけでもない・・・どの道この子が死ぬことに変わりはない・・・それが分かるから、会うのが怖かった・・・

それに・・・やっぱり・・・・・・会えばその分だけ、哀しみばかりが大きくなるだけだったから・・・」

「・・・・・・っ」

美鈴は無意識の内に、すがりつく咲夜の身体を、もう一度両腕で抱きしめていた。

自分にそんなことをする権利があるのか、ということは、もう考えなかった。

なんであろうと、そうしなければならないと感じたから、身体が自

ずと動いていた。
美鈴の両腕に抱きしめられた咲夜の嗚咽の声は、より一層大きくなる。
彼女は、美鈴の胸の額を押し当てながら、大粒の涙を流して、ただ湿った息と共に、吐き捨てた。
「・・・死んでほしくなんて・・・なかった・・・っ！」
「・・・・・・・っ」
その声を聞いた美鈴は、眼を見開き、瞳孔さえも開き、全身の筋肉が張りつめ強張りそうになった。
だが、咲夜の身体を抱きしめる腕の力を強めれば、彼女の身体を締め付けてしまう。
そんな意識が、身体が強張るのを寸前のところで堪えさせていた。
だが、例えそんなことができたところで、美鈴の胸中を奔った驚愕と戦慄と、耐えがたい罪悪の念が消えることはない。
自分の身体にしがみ付き、震えながら泣く咲夜。
彼女をこうしたのは、紛れもなく美鈴であり、彼女の後悔と哀切の声も、いうなれば美鈴が言わせているものであった。
美鈴は、これ以上ないと思えるほどに感じていた彼女に対する罪悪感に、これ以上があるということ・・・限界がないのだということに気づいた。
胸の奥を締め付ける痛々しさは、いつまでも弱まることなどない。
むしろ、日を追うごとに、時が経つごとに強くなり、心を殺していくのだ。
それでも美鈴は、この罪悪感を贖うために生命を散らすこともしな

ければ、自分がその心を傷つけた咲夜の身体を、こうやって抱きしめてもいた。
だが、今の咲夜にとっては、こうしてやることが最適であるのだということも分かっていた。
今、彼女の身体をこうやって抱きしめてやることは、傷ついたグランチャーにもできなかった。
美鈴にしか、できないことだったからだ。
いつもいつも凛々しく、皆の指標となるような咲夜が、美鈴にだけ、こんなか弱い姿を見せていたのだから。

「・・・・・・く・・・っ」

咲夜の哀しみに共感しながらも、自己嫌悪の念に歯を食いしばり、眼をきつく閉じながら、それでも咲夜を抱きしめる腕に余計な力は込めない。
そうして、背中に当たっていた右手のひらを頭に回し、彼女の銀色の髪を撫でながら、美鈴は絞り出すような声で言った。

「・・・死なせたくないでしょう・・・・・・そう・・・そうでしょう・・・
分かります、分かりますよ・・・っ！」

咲夜の嗚咽が、慟哭へと変わった。
彼女の泣き声がすぐ耳元に聞こえ、さらにそれがグランチャーの胎内で反響し、美鈴の心の奥底にまで、エコーとなって響いた。
慟哭の合間に鼻を啜るような音が聞こえるのと同時に、腕の中にある彼女の身体も震える。

今になって分かったが、彼女がグランチャーの胎内に自分から入ることができなかったのは、この哀しみを感じたくなかったからだっ

たのだ。
また、美鈴に対し、みっともない姿を見せたくなかったからなのかもしれない。
そうして、グランチャーとの別れを恐れている自分を、もう一度意識することも・・・

思えば美鈴は、彼女に対しあまりに残酷なことをしすぎたのかもしれなかった。
余計に哀しまないためにグランチャーと離れようとした彼女の考えは、確かに間違いではなかったのだ。
こんなことになるというのなら、確かに、会わないほうがよかったのかもしれない。

だが、だからといってグランチャーと離れ離れになったまま永遠の別離を迎えることの方がもっと哀しいということも、間違いないことだった。

何にせよ確かなことは、この先どうあろうとも、咲夜には耐えがたい哀しみが待っていて、それから逃れることはできないということだった。
彼女の心に、いずれは消えるかもしれないが、いつ消えるかも分からない、深い傷が刻まれるということが・・・

だが、それは『このままでいたら』の話だった。

美鈴は思った。
心の内で叫んだ。

――そんなことは・・・厭だっ！――

震え、泣き叫ぶ咲夜の身体を抱きしめながら、美鈴は鋭い眼で、どことも言えないどこかを見つめていた。
その瞳の中には、グランチャーを殺すことを決意した時と、まったく同じ色が宿っていた。

だが、その色が意味するところは、その時とはまったく別である。
同じところがあるとすればそれは、咲夜に対する愛からくるものである、ということであった。

それともう一つだ。
美鈴自身の中で思い浮かんだある目的。
その目的を果たすためなら、どんなことでもやろうという、強固な意思であった。
無責任であろうと、恥知らずであろうと、矛盾した行為であろうと、今度は自分のひとりよがりな感情だけでなく、咲夜の気持ちも汲み取った上で、
そして、咲夜の慟哭を聞く中で、生きることへの渇望を思い出したグランチャーのために。

罪を償うというのは、ただ死ねばいいということではなかった。
本当の意味での償いというのは、もっと違うものであるということ、美鈴は今、気づいた。

※

文から事情を聞けば、魔理沙と輝夜、霊夢だって、ブレン達の眠る無縁塚に向かいたくなる。
それだけでなく、永琳とにとりも、さとりに同行することに決めていた。
ヤマメ達地底の妖怪は勿論であるし、勇儀もついてくる。

河童達は、さすがにコックピットの部品づくりのために里に帰らなければならないので、そのために地底に残ることになっていた（本来なら、にとりだってこちら側にいるべきなのだ）。

天狗達も、偵察任務があるため、ついてこれない。
が、そんな天狗の中でも自由に行動できる文は、物事をより正確に見るために、遅れて戻ってきたはたてと共に同行することにした。
妹紅と慧音も、当然ながらついてくる。

となれば、地底にやってきた人妖達のほとんど全てが、揃って無縁塚へと向かうことになった。
そうなれば地霊殿が一時空き家になり、訪問客が（いればの話だが）来た時に対応できなくなる。
そのため、椛に留守番をさせることにした。
彼女を共に来させられないのは残念だが、不満そうな顔は一切見せず、留守番を全力でこなすつもりだと（留守番の何に全力を出せばいいのか分からない）言ってくれた。

そうと決まれば、すぐさまブレン達と共に無縁塚へと向かうことにする。

永琳とにとりはマリサブレンに乗せて、妹紅と慧音にはカグヤブレンに乗ってもらう。
ヤマメとキスメとパルスィ、それと勇儀は、サトリブレンに乗る。
こいしとお燐とお空は、さとりと共にブレンの胎内に乗ることにした。
今となっては、彼女達が乗ることにブレンは何も拒否反応を示してはいなかった。
素直に受け入れられているということだ。
さとりと同じぐらいに、こいし達はブレンにとってのよき友人であった。
オーガニックエナジーの波長も今では四人のもの全てが揃っており、乱れはなかった。
むしろ、いつも以上に調子がよさそうだ。
永琳が考えていた、オーガニックエナジーが複数あればそれだけ増幅されるという理論を証明しているところもあるかもしれなかった。

それはそれで、さとりとしては、ヤマメ達まで手のひらに乗せたらさすがにブレンの負担になるような気がしたが、ヤマメ達がブレンを気に入っているし、ブレンの方も特別辛そうではなかったので、この際気にしないことにした。

ハクレイブレンには、文とはたてが乗る。
彼女達なら飛んでついてくればいいのだろうが、ハクレイブレンに誰も乗らないので、楽をさせてもらうことにした。
霊夢は案の定むすっ、としていたが。

ひとまず、あらかた準備も整ったので、出発する。
地霊殿の中庭にて揃って立ち上がったブレン達は、そのままゆっく

りと宙に浮き上がる。
間もなく、魔法の森へ向かい再思の道を通り、無縁塚に至るべく、移動するのだ。

マリサブレンの手のひらの上で、この姿勢が気に入っているのか、いつものように親指にもたれかかって座る永琳に、椛が宙を羽ばたきながら近づいてきた。
出迎えの挨拶でもするつもりだろう。

永琳のもたれかかる親指に両手を置きながら、彼女が呼び掛けてくる。

「それでは、ご無事で。天狗による偵察は続けていますから、何かあった時にはすぐに向かいます。そちらも、いち早く対応できるようにしてくださいね」

永琳は、椛の方を振り返りつつ、応えた。

「分かってます。いち早くね」

それに続いて、にとりの大きな声が聞こえてきた。

「これが終わったら、また遊びましょうよーっ」
「えぇ」

椛の返事から少し間を置いて、魔理沙の声がオーガニックエナジーに乗って聞こえてきた。

（話が済んだなら、行くぜー？）

「そういうことだから、行ってきます」

続く永琳の声に、

「はい・・・お気をつけて」

と応えながら、マリサブレンから離れた。

それと共に、地霊殿の上空にまで上がっていたブレン達が、緩やかに加速を開始した。

向かうのは、無縁塚。ブレンの仲間達が眠る場所だ。

地霊殿を発っていったブレン達は、そのまま旧都の上空を抜け、地上へと出る抜け穴も通り、真昼の陽光差す地上へと出ていった。

長らく地の底にいると、普段なら慣れ親しんだものであるはずの陽の光も、永琳とにとりにとっては眩しいものに思えた。

永琳は特に、普段から薄暗い竹林の中にいたのに、最近はさらに薄暗いところにいたのだ。

あまりの眩しさに、肌が焼けるような錯覚さえ覚えるほどだった。

そんなことは到底ありえないと分かっていながらも、あまりに地底にいるのが長すぎたので、どうしてもそう感じずにはいられなかった。

環境が変わるというのは、そういう恐ろしさを持っているのだ。

朱に交われば朱(あか)くなる、というやつだ。

人間だろうと何だろうと、一度元いた環境から離れ別の環境に移り、

そこに適応してしまうと、元いた環境には戻れなくなるかもしれない。
永琳にとってこれは、二度目の経験でもあり、その恐ろしさと虚しさも分からなくはない経験であった。
今回はそれほどでもないが。

彼女にしてもにとりにしても、こういう太陽の眩しさを感じてしまえば、これ以上地底にいていいのだろうかという意識も、感じないわけではなかった。
が、だからといって、このまま異変の解決も待たずして、逃げるように地底から去っていくわけにもいかないだろう。
地の底とて、そこまで悪くはないところだというのも、折角分かってきたのだから。

永琳としては、本来の医者としての仕事もあったので、それが気がかりでもあるのだが・・・

ふたりは魔理沙のブレンの手のひらに乗りながら、揃って眼下を見下ろし、そろそろ本来の物々しさを取り戻しつつある硫黄泉の様子が後方に流れていくのを見ていた。
その内、河童達の調査も難儀するだろうと考えられたが、オルファンもまだ一定量地熱は吸収しているのだ。
それこそ本来の、間欠泉が吹きだす過酷な環境に戻るかどうかは分からなかった。

そんな硫黄泉の黄色い水も疎らになり、やがて見えなくなると、今度は硫黄よりもより鮮やかな黄色に染まる花々と共に、オルファンの姿が見えてきた。
陽光に映える金色の身体は、いつ見ても圧巻といって相違ないだろう。

「くぁ～・・・っ」

オルファンから反射する陽光の眩しさに、思わず眼を細めて声を漏らしながら、永琳の方に振り向いたにとりが、藪から棒に言った。

「それにしても、ブレンがひとつに集まって生命を終わらせるそうだけど・・・

でもなんたって無縁塚に?揃って死ぬなら、オルファンの中か近くで死んだ方が気が楽でしょうに」

突然の質問だが、それをしかと聞き入れた永琳は、考えを巡らせるのと一緒に、頭の中に浮かんできたことを朗読するように応えた。

「・・・オルファンの場所が、分からなかったのかもしれないわよ。死んでいったブレン達は、生まれてから誰も乗せることができずに、そのまま死んでいった。

生まれたままの状態で死んでいったのよ。ブレンが本能的に知っている母なるオルファンの存在も、思い出すことができなかったのかも。

ああいうのって、人妖が宿主となるのがスイッチとなっている部分もあるようだから」

「つまり・・・赤んぼのまま死んでいったってことですか?」

「そうねぇ、いい例えだわ・・・これは仮説で、本来はあり得ないことでしょうけど、人間が赤ちゃんに生まれて、それから誰にも関わることがなく成長して大人になったとしたら、自分が誰から生まれたのかだって分からないでしょう」

「ん・・・母ちゃんがお腹を痛めて産んだってことも、分かりゃし

ませんね・・・でもそれは、後から教えてもらうことでしょう？
ブレンみたいに、初めから知っているってのとは、違うような気がしますねぇ」
「まぁ、それもそうね・・・でも、自分の生命の根底に関わることが分からないというのは、同じことでしょ？
それにその人は、食事することはできるかしら・・・歩くことは？
自分が人間であるということは、まず分からないでしょうね」

「・・・そうかぁ。常識的なことでも、それを教えてくれるヤツはいるんだ・・・教えてくれるっていうか・・・」
「気づかせてくれる者よ・・・貴方にはそれができる、とね・・・
無縁塚に眠るブレン達には、そんな者がいなかったのよ」

永琳のその声に、機械相手が長いせいで倫理には疎いが、情には厚いにとりは、眼に見えて哀しそうな顔をして、呟くように応えた。

「・・・・・・それもそれで、寂しい話ですねぇ。人間が人間だってことが分からないように、ブレンは自分がブレンだってことが分からなかったんだ・・・
自分の母親のことも。
・・・それに比べて、あたし達と河童といやぁ、生まれる前から親の好き嫌いを決められちゃうんですよ。
こんな父親の子供になりたくないって思えば、自己申告で流産させてもらえるんです。
母ちゃんのお腹の中に薬入れてね」
「・・・あっははは・・・それも、難儀な生き方ねぇ」
「いやぁ、これでこそ河童ですよ」

「で、貴方はどうだったんです？貴方は親が好きだったから産まれてきたわけ？」

河童の身の上話を聞いて、その不気味ながらも滑稽な性質に思わず笑いながらこう問うた永琳に、にとりは、哀しそうな色を残しながらも笑顔を見せて、応えた。

「あたしゃ、親がどうとかじゃなくて、自分の興味で産まれてきたんですよ。世の中どうなってるんだろってねぇ。
そしたらほら、楽しいことがそこかしこですよ。
生まれてきてよかった」

「ふっふふふふ・・・ふふ・・・そうねぇ」

永琳は、河童もこれで中々、面白い妖怪なのだということを知った。

※

にとりでさえ、長く地底にいれば、陽の光が眩しく感じる。ならそれは、最早地底が永遠の住処となりつつある彼の地の妖怪には、尚更のことなのだ。

「眩しいぃーっ」

サトリブレンの手のひらの上で、ヤマメが眼前に手をかざして光を遮りながら、大声で言う。
それにパルスィが応える。

「まったく、妬ましい光ね・・・それに、少し暑い・・・」

さらにそれに、勇儀が続く。

「おてんとさんにしか出せない暑さだねぇ」

その声を聞きながら、さすがに四人で乗ると窮屈な（始めてオルファンの中に入った時に比べればマシだが）ブレンの手のひらの上で、勇儀の声を聞くパルスィ。

彼女は、ちらちらと、頭上に輝く太陽を見ようとしたが、あまりに眩しくてそれもできず、ぼんやりと前の方を見たり、時折視線を下の方に移したりしながら、呟いた。

「私達がこうやって地上に出てるのは、オルファンの異変が始まったからなのよね・・・」

「そうだねぇ」とキスメ。

「なら、この異変が終わったら、また当分の間はここには出られないんでしょうね・・・」

彼女の言葉は要するに、あくまでも地底の妖怪でしかない自分達の身の上を思い出すものであった。

今は、異変の解決のために地上に出ることも許されているが、実際のところは彼女らは地の底にいるしかない存在であったのだ。

未だ地上の妖怪との約定もある身であり、この異変さえ終わってしまえば、またそれなりの生活に後戻りするのは間違いないだろう。

地上に出ることも、当分はなさそうだ。

そう思うと、自分達の頭上に、ある種暴力的なまでに輝いている太

陽も、なにやら恋しく思えてきた。
この光も、いずれまた見れなくなるのかと思えば、それも当たり前のことなのかもしれない。

そんな気分の中で、ヤマメが言った。

「まぁ、地上の妖怪に地底に篭ってろって言われて、大人しくそうしないのが私達だからねぇ・・・陽の光か月明かりが恋しくなりゃ、隠れてでも地上にでて、見させてもらうよ。
硫黄泉が元通りになれば、結局抜け穴の近くには誰も近寄らないんだから・・・・・・ね？」

言葉を連ねると共に、呼びかけられたキスメが、
「ん」
と、桶の中で頷いた。

それを聞いた勇儀が、一応自分の立場もあるということで、釘を刺すようなことを言う。

「そういうのはなぁ、あたしがいるところで言う台詞じゃないぞ」

が、そんなことを言いながらも、勇儀は地底の妖怪が持つこの、抜け眼の無さと強かさ、そして諦めの悪さこそが好きだった。
ヤマメの言葉を批難しながら、その次には、笑ってその発言を認めていたのである。

「だがまぁ、いんじゃないかね？誰にも迷惑かからないんだしさ」

そんな言葉に続いてだった。
パルスィの声が聞こえる。

「森だ・・・大分早いのね。それとも、思ってたよりも時間が経ってたのかしら？」

その声に釣られるように、ブレンの進む先へと視線を移す一同。
そこには、うっすらとかかる靄の向こうに見える、背の低い無数の影が見えた。
いくつもの、同じような背丈の影が隣り合って立ち並ぶと、合わさってまるでひとつの影であるかのように見える。
そしてそのひとまとまりとなった影が、横に長く広がった蛞蝓のようなシルエットを見せていた。
地底にだって木はあるし、前方に見えるそれが、無数の木々の連なりによる影であるということは、地底の妖怪達にも分かっていた。

魔法の森が見えてきたのだ。
見えたのなら、そこに辿り着くのはすぐだ。
そうして、再思の道を通り、無縁塚に到着するのも、そう遠くはないはずだった。

実際、そのシルエットが見えてくると、それからはもう数分もすれば、森の上空・・・無数の木々がつくる緑の絨毯の上へと差し掛かっていた。
尚もブレン達は先へ進む。
向かうは森の向こう側、再思の道だ。

その場所への行き方を知る魔理沙とマリサブレンの先導の下、他のブレンがその後に続く。
ハクレイブレンもまた、黒いアンチボディの背中を、緩やかな速度で飛行しながら追っていた。

そんな中で、その手のひらの上に乗る文は、あることを思い出していた。
というか、魔法の森に差し掛かるということを聞いてから、ずっと考えていた。

確かこの辺りには、先の戦いで敗れ、傷ついているブレンがいるはず。
彼の者とその宿主もブレンパワードでありそれと関わっているのなら、今回のことを教えてやった方がいいだろう。
森の一角の広場にいるそうだから、天狗の足の（？）速さと眼の良さならすぐに見つけられるだろうと考えた彼女は、件のブレンとその宿主にも、事情を説明することにした。

ふたりの乗る左右の手のひらは、ブレンの腰・・・胎内を覆う装甲にぴたりと寄せられていた。
なので、文はその場に座ったまま、すぐ眼の前にある装甲をこんこんとノックして、その奥にいる霊夢に呼びかけていた。

「霊夢さん・・・博麗　霊夢さーんっ」

（なによ）
「この辺りに、この前の戦闘で負けちゃったブレンがいるでしょう？それに乗ってた妖怪の・・・朱鷺子さんでしたっけ?その方にも、事情を説明しておくべきだと思いまして」

（ん・・・それもそうね。勝手にどうぞ）
「はいー、勝手にさせてもらいます～」

霊夢の返事を聞いた文は、早速ブレンの手のひらから飛び立って、朱鷺子のブレンを探すことにした。

と、手のひらから飛び立つ直前、はたてが呼びかけてきた。

「もたもたして、遅れないようにね。まぁ、あんたなら逆に仕方ないんだろうけど・・・」

それに文は、意地の悪い笑みを浮かべて、
「あんたって私を馬鹿にするために天狗そのものまで馬鹿にしてんだから、間抜けよねぇ～・・・天狗の速さなら、多少遅れたってどうってことないわよ。なんなら、先に着いて待たせてもらうから」
と言い返してから、ブレンの手のひらから飛び立ち、魔法の森の只中へと去っていった。

ちょうどそうしようとした瞬間、はたての、
「早く済ませんのよーっ」
という見送りの言葉が聞こえたが、それに返事をしている間にその返事が聞こえないところにまで飛んでしまうだろうから、文はこの際それには何も応えなかった。

第十五話　その7

もう昼も過ぎたということもあり、香霖と朱鷺子は一旦ブレンから離れて、香霖堂で昼食をとってくることにした。
妖怪である朱鷺子が、半分は人間であるから腹が減り過ぎるとさすがに辛い香霖に、わざわざ付き合うこともないはずだったのだが・・・

とにかく、さっさと昼食を済ませたら、すぐにまたブレンの下に戻ることにしていた。
香霖は、今日のところは朱鷺子と共に、ブレンの傍にいてやるつもりだった。
また、香霖堂で見つけたアンチボディとオルファンに関係がありそうな書籍を、もう一度隈なく読み返してみて、何かいい手掛かりを見つけたいところでもあった。

昼食を終え、また何冊かの本を持って、朱鷺子と共にブレンのいるところに戻ることにする。
腰を据えて読むつもりだったので、最初にブレンの下を訪れた時よりも大きな袋に、多くの本を詰め込んでいた

再び、鬱屈とした（それがいいのだが）魔法の森の奥を、草根を分けて進んでいくことになる。
先程の倍ぐらいの数の本を袋に入れて抱えて歩くと、それだけでも、

インドア派の香霖には辛いところがあった。
薄暗い森の中、草をかき分け、時に踏みしめる音が微かに響く中で、それと一緒に、彼のぼやく声も聞こえていた。

「やれやれ・・・数が増えたって所詮は本。大して重くなってないはずなのになぁ。まるで年寄りみたいなことを言うが、体力の衰えを感じてきたよ」

そんな声に、朱鷺子が心配そうな様子で返す。

「大丈夫？あたしが持つよ」
「いや、いい。僕だって、これで男だからな・・・君みたいな娘に荷物を押しつけるなんて・・・」
「でも、重いんでしょ？」

「・・・・・・それは・・・否定はしない」
「なら、あたしが持つよ。気にしないでっ、他人から助けてもらえるのも、いい人の証なんだから」

「そ・・・そうか。分かった、済まないな」

朱鷺子の言い聞かせるような言葉に説き伏せられた香霖は、お言葉に甘え、手に持っていた袋を朱鷺子に預けた。
香霖から受け取った袋を、そのまま肩で担ぐようにした朱鷺子は、不思議そうな顔をして言う。

「・・・軽いじゃない」

その様子を見る香霖は、魂まで抜けるような深いため息をつくしか

なかった。

「はぁ～ぁ・・・　さすが純血の妖怪だよ。ハーフの僕とは違うなぁ・・・」

が、そんな台詞は言い訳でしかない。

確かに、妖怪である朱鷺子はその見た目に反して、人間の大人だって到底太刀打ちできない力は持っている。

が、それを踏まえても、結局のところは血がどうとか、ではなく、腕っ節の、あるいは足腰の力というのは、その者の普段の生活にかかっているのだ。

普段から、どこぞの図書館の誰かのようにほとんど身体を動かさない香霖では、例え彼の中の血が一滴残らず妖怪のものでも、朱鷺子が軽いという荷物を、軽く持つことはできないのだ。

そんな香霖と朱鷺子は、しばらくすると、ブレンの眠る広場へと戻ってくることができた。

木々の間を抜け、暑いほどの日差しが差し込む広場が見えると、それと共に、ブレンがこちらを出迎えてくれた。

いや・・・　それだけではない。

香霖にも朱鷺子にも、ブレンの股間を覆っている装甲の上に座り、足をぶらぶらさせているひとつの人影が見えていた。

言うまでもないことだが、先程はこの場には、ブレンと香霖と、朱鷺子しかいなかったはずだ。

なら、あの人影は一体？

香霖はそれに、どこか見覚えがあった。
あまり何度も会っているわけではないのだが、一度や二度ぐらいなら、面と向かって会ったこともあるし、話をしたこともあった。
と、こちらに気づいたらしいその人影は、徐に装甲の上に立ち上がると、こちらに向かって手を振りながら、大声で呼びかけてきた。

「ようやくきた。こんにちはーー！」

その声も、やはり香霖には聞き覚えがあるものだった。
姿と声の両方を聞き、それを記憶の中にある名と繋ぎ合わせることで、彼はようやく、あの人影が誰であるのか分かった。
こちらも大声でその名を呼び、彼女の呼びかけに応える。

「君ー！天狗の射命丸だなっ？」
「そぉですよーーっ」

「誰？」
と聞いてくる朱鷺子。
そういえば、彼女は文とは面識がないようだったな、と思い出しつつ、香霖は説明した。
とはいえ、香霖だって、文のことは簡単にしか知らない。

「天狗だよ。新聞を発行しているから、烏天狗だな」
「へぇ～・・・」

とりあえず二人は、ブレンの・・・そして文の下へと歩いていった。
文も、装甲から地面に飛び降りつつ、二人を待つ。
そうして、傍まで歩み寄ってきたところで、彼女が口を開いた。

「どうも、香霖堂の森近　霖之助さん。会うのは初めてじゃないですよね？」
「あぁ、そうだな。天狗の射命丸記者。この前の取材のことは、ぼんやりとなら覚えている」

「そりゃあどうも・・・そちらの妖怪とは、初めましてですねぇ・・・私、先程霖之助さんが仰りましたが、妖怪の山の天狗で、射命丸文と申します。どうぞお見知りおきを・・・
名刺代わりに、ささ、こちらの・・・」

香霖に続いて朱鷺子に向かって話しながら、文は腰にさげたカバンから何かを取り出した。
他でもない。

「幻想郷の今を澱(よど)みなくお伝えする、文々。新聞をお渡しします。ささささぁ、どうぞどうぞ、ご遠慮なさらずお取りください」

「・・・あ・・・うん」

にこやかな笑顔と共に、有無を言わさず新聞を差し出してくる文に戸惑いつつ（多分誰でも戸惑うだろう）、ひとまず新聞を受け取った朱鷺子。
文は実は、地底での任務の間に、ちゃっかり新聞を発行していたのだ。
はたてにしてもそうだ。
天狗のすばしっこさがあれば、ちょっとした合間に妖怪の山に立ち寄り新聞を発行することなど、造作もなかった。

「初めまして。あたしは朱鷺子ってんの」
と、朱鷺子が笑顔で言う。

「はいー、よろしくお願いしますねぇ」

と、それに続いて香霖も言う。

「自己紹介も終わったなら、射命丸記者。貴方は何故ここにいるのか、教えて頂きたいな」

それを聞いた文は、笑顔のままではあるが、それなりに顔を引き締めて、応えた。

「えぇ・・・私はですねぇ、地底でブレンパワードに協力している方達に、さらに協力しているんですよ。
朱鷺子さん、此間(こないだ)貴方のブレンを助けようとして、ついに叶えられなかった方達です」

それを聞いた朱鷺子は、驚いた様子の声をあげた。

「魔理沙とか霊夢達のっ？」

「えぇ。それでですね、実は今・・・・・・」

それから文は、現在の事情を説明した。
無縁塚に多くのブレンの亡骸が発見され、その供養のために・・・
というわけでもないが、地底のブレン達が向かっているのだ。

その事を聞いた朱鷺子も香霖も、さすがにある程度の衝撃を受けているようだった。

多くのブレンが眠る、いわば墓場が、魔法の森の隣の隣にあったのだから、それにも驚いているのだろう。

事情を説明し終えた文は、次いでふたりにこう聞いた。

「今しがた、この魔法の森の上空を通過しているところです。どうですか、貴方達も共に来ませんか?貴方達も、ブレンのことは大事に思っているんでしょう?」

言いながら、傍らで横たわるブレンの身体の方を向き、言葉を続ける。

「この子の友達達の亡骸ですよ。冥福を祈りにいきますか?」

が、その言葉を聞いた朱鷺子は、しばらく何も返事を寄越さなかった。

ただ、思いつめたような表情で僅かに顔を俯け、時折、

「あ・・・えっと・・・それは・・・」

と、返事もならないようなうわ言を繰り返しているだけだった。

彼女の戸惑いは、特に大きかったのだろう。

香霖は、人の気持ちを考えるのが苦手なりに、彼女の気持ちを察した。

というかその気持ちの中には、香霖も感じていることが幾分か含まれていたのだ。

多分彼女はまだ、ブレンの亡骸を見る心の準備ができていないのだろう。

それに、ブレンの死という問題を直視する話題になり、時期に死ぬのであろう自分のブレンのことを思いなおし、尚のこと心が揺れて

いたのだ。
そうして、ブレンの友達であるブレン達の亡骸があるというのなら、その供養はした方がいいというのも、分かっていることだった。だから、文の呼びかけに、応えようか応えまいか悩んでいたのだろう。

が、悩むという事は、決まっていないということだ。
決まっていないということは、まだ、文の言葉を聞き入れることはできないということなのだ。

香霖は、ひとまず一度、朱鷺子にこう呼びかけてみることにした。

「心の準備というものはいる。朱鷺子・・・悩んでいるなら、今は断っておいた方がいいんじゃないのか？」

ぴくりと微かな身震いをして、香霖に振り向いた彼女が、聞き返してくる。

「え・・・でも、いいの？」

「いい悪いとかじゃないさ・・・それに、無縁塚なら近場だ。今いけなくても、その内気が向いてからでもいけるだろう」

「・・・そう・・・そうだね。うん・・・」

戸惑いを浮かべた顔のままで、小さく頷く朱鷺子の様子を見た香霖は、改めて文に向かって、朱鷺子に変わってこう返した。

「そういうことなんで、今のところは断っておくよ。後で向かわせてもらう。わざわざ伝えにきてくれて、ありがとう」

それに文は、笑顔を浮かべて応えた。

「あぁー、いえいえっ。そりゃ、心の準備は必要です。でしたら、伝えましたんで、また後で行ってあげてください。ブレン達に置いてかれると駄目なんで、私はこれにて、早々に失礼いたします」

「お苦労だったねぇ、気をつけろよ」

「ありがとう」

ふたりの返事を聞いた文は、

「はいーっ、それじゃ、故あればまたお会いしましょう」

と応えながら、宙に飛び上がり、香霖達と、彼らのブレンから離れ、無縁塚に向かうさとり達の下へと戻っていた。

そんな中で、どんどん離れていくブレンの姿が、中々眼から離れなかった。

傷つき、眠る様に地面に横たわっているその姿に、文は脳裏で呟いていた。

無縁塚にいたブレンの亡骸とも違う。

さとり達と共に、今生きているブレン達とも違う。

あのブレンは、生でも死でもない、曖昧な環境の中にいた。

――あのブレンは、仲間達と一緒に死ぬこともできないほど、弱っているんだ。

そう考えると、尚のこと残念ねぇ・・・――

そして、残念だというのなら、水滴が少しずつ石を穿つようにゆっくりと死んでいき、やがて魂を失った抜け殻となっていくブレンの様子を見ていくことになる、香霖達にしてもそうだった。

※

香霖達に事情を話にいったという文も、どうやら戻ってきたようだ。

その時にはもう、さとり達はブレンと共に魔法の森を抜けて、再思の道の上空へと入っていた。

もうすぐ、ブレン達が眠る場所が見えてくるのか・・・

そう思うとどうしても、不安と形容できるような感覚が皮膚を透けて全身に染み込んでくるように思えて、こいし達と共に胎内に座るさとりは、ここにきて地底に帰ろうかという邪念を抱いてしまった。

まさしく、再思の道という名の通り、彼女の心は再び湧き出てきた考えにより、揺れていた。

が、ここまできて後戻りするわけにもいかない。

なにより、ブレンの・・・アンチボディの死というものにも、しっかりと向き合わなければならないのだ。

そうしなければ自分達は、ブレン達に対する誠実さを失うことになると思えた。

冷たく張りつめた空気の中にその身を浸していく感覚を受けながら、さとりはブレンの胎内で、ひとたび深呼吸をした。

隣に座るこいし達も、何事か考えているような、しかし何も考えていないような表情で、前の方を見つめていた。

そんな中でだ。
さとり達は、ブレンがスリットウェハーに映し出す外の光景の中、遠くの方に、青々とした葉を茂らせる数本の大きな木があるのが見えた。
彼女達には、それが桜であるということはすぐには分からなかった。桃色の花が咲いていなかったのだから、それも仕方がない。
しかし、魔法の森の木々とはまた違う雰囲気を出していたその木に、さとりは思わず、しばらくの間見惚れてしまっていた。
が、その青々とした色が近づいてくる中で、彼女達の意識はまた別のところへと向いた。

その数本の桜の木の下に並んでいた、いくつかの背の低い影。
それは、頭上の桜の葉の、さらに言えば、その向こうに広がる空の活き活きとした青さに反するように、霞んだ色を成していた。
大地の色とも違う。
そのような、生命の瑞々しさを感じさせる色彩が、それにはなかった。
石や岩・・・ですらない。
もっと無機質で、何かが抜けおちてしまったような、そんな色であるとさとりには感じられた。

その感覚を素直に信じることで、さとりにはその物体が何であるのか、すぐに分かることができた。
そうでなくとも、ブレン達が無縁塚に近づいていけば、その影も段々と判然としたものに見えてくるのだから、何も考えずともいずれは分かることだった。

そうして、それが分かると共に、戦慄が彼女の身を襲う。

「あぁ・・・あ、あれなの？」

彼女は思わず呟いていた。

その言葉を聞いたこいし達が、聞き返してくる。

「あれって・・・あれっ？」

「あれがブレンなの？」

「でもあれ、まるで石ころみたいになってますよぉ・・・？」

「そうよ、石ころ・・・いや、そんなものですらない・・・

あれは・・・生命が抜けたブレンの殻・・・」

「あれがっ？」

こいしが驚嘆した。

それと同時だった。

ブレンの胎内が僅かに揺れ、その振動が、さとり達の身体にも伝播してきた。

ブレンが動きを速めたのだ。

永遠の眠りにつく自分の仲間を見つけて気持ちが逸り、いち早く無縁塚へと向かおうとしているのか？

あるいは、根本的に何かが違う、もっと別の衝動に駆られて？

何にせよ、サトリブレンだけでなく、魔理沙と輝夜のブレンも、同じように無縁塚へと向けて緩い加速をかけていた。

唯一ハクレイブレンだけが、これまでの速度を維持し続けていた。

「ブレンが急いでいる・・・不安なわけではないようだけど・・・」

そこまで速くはないが、突然の加速に思わず声を漏らしつつ、さとりは、さらに近づいてくるいくつかのブレンの亡骸をじっと見つめていた。

気がつけばその姿も、最早すぐ足元だった。
低速で、とはいえ、加速をかけたブレンならば、無縁塚に到達するのはすぐだったのだ。
その無縁塚の上空で浮遊するブレンの足元にあるのは、数本の桜の木と、青々と茂る背の低い草の群れ、そしてその上に横たわるブレン達・・・の抜け殻だけであった。

スリットウェハーに映り込むその、変色し、半ば鉱物と化したブレン達に、さとりは何も言う事ができず、ひたすら息を呑んでいた。
だが、不思議と涙は出たりしなかった。
それは、こいし達も同じであるようだ。

ただとにかくこの眼に映る、死という確かな現実と、紛れもなく死を迎えている、確かなブレンの姿を心の中に刻み込むだけだ。

それと共に、この場所でブレン達は死に、そしてその魂はここでひとつになって、どこかに飛んでいった。
そんな哀しみが、ぼんやりと頭の中で意識されるばかりだった。

そのブレンの魂を拾い集めて、オルファンに戻してやりたい・・・
そうすれば、こうやって無残に死んでいった者達も、報われるのではないか。

そんな気持ちもある中で。

マリサブレンの手のひらに乗る永琳とにとりも、同じく、眼下に見えるブレンの亡骸を見下ろしていた。

ブレンの指から顔を覗かせ、そこから草原の青い色の中に、一点の染みのように倒れているブレンの姿を見つめながら、にとりは呟いていた。

「写真では見たけど・・・それよりもひどいなぁ」

それと共に、横にいる永琳の方に振り向きながら、こう聞く。

「永琳さん。あいつらを生き返らせてやるような方法はないんですか？」

「生き返らせる・・・そうねぇ・・・」

永琳は、問うてきたにとりの方をちらりと見返しつつ、すぐに視線を眼下のブレン達に向け直しながら、応えた。

「ブレンを生き返らせる方法なら、なくはないかもしれない・・・でもどの道、彼らには無理でしょうね。

一度死んでしまった生命は、容易には戻らないものよ。彼らは最早、ブレンパワードというよりかは、ただの物になってしまったんですから」

「ただの物か・・・・・・
死ねばただの物だっていうなら、何だか死ぬことが怖くなってきましたよ・・・」

さすがに不安そうな声音で言うにとりの言葉に、永琳は、何故出たのかも分からない笑い声の後に、こう返した。

「あっはは・・・死ぬのが怖いのはそりゃ、誰でも同じでしょう・・・でも、だからって生き続けることも、多くの場合は苦痛であるのよ」

「・・・まぁ、分からない話じゃないですねぇ」

外にいる永琳達の会話は、胎内の魔理沙にも聞こえていた。
彼女らがブレンの身体と密着しているから、オーガニックエナジーが容易に伝播して、声が聞こえるのだろう。

が、そんな会話は軽く聞き流す。
聞こうと意識することもできなかった。
とにかく魔理沙は今、この眼に映るブレンの死という現実と、それに自分が何を感じているのかという認識を、まずは受け入れることから始めていた。

スリットウェハーに囲まれる中（ブレンの胎内は温かい。だが、眼下のブレンから感じる雰囲気は冷たかった）、彼女は呟いた。

「ブレンは、死ぬことが怖くないのか?・・・よく考えてみれば、グランチャーと出逢えば戦って、誰も乗ってくれなきゃこうやって

死んでいくって、あんた達には、死ぬ危険が多すぎる・・・
これじゃまるで、死ぬために生まれてきたんじゃないかって思うんだぜ」

と、次いで魔理沙は、慌てた様子でこの言葉を訂正した。

「いや、変なことを言ったなっ。死ぬために生まれてきたなんて言い方しちゃいけないな。いや、ごめんっ。済まなかったぜ」

が、その言葉を言い終えると共に、魔理沙は、驚愕と共にその表情を固めた。
次いで、自分が声を出しているかも分からないような心持ちで、夢でも見ているかのように呟いていた。
ブレンが、彼女の言葉に応えたからだ。

「え・・・・・怖くない？
怖いけど怖くないって・・・なんだよそれ」

ブレンのその応えの意味が、魔理沙にはよく分からなかった。
死ぬことが怖いか怖くないかぐらい、簡単に応えられることではないか。
だというのにブレンは、そのどちらとも言えない、こんな中途半端な応えを寄越してきた。

結局どっちなのだ？
死ぬのは怖いのか？
それとも、怖くないから生命ぐらい容易に捨てられるのか？

眼下に見える、死に絶えたブレン達。
あんな風になることも、本望だというのか？

しかし、魔理沙がスリットウェハー越しに感じるブレンの心は確かに、変わり果てた仲間の姿に、哀しむ以上に恐怖していた。
それは、死に対する恐怖で間違いなかった。
だが、そんな恐怖と共に、もっと別の感情があるようにも思えた。
それが何なのかは、魔理沙には分からなかったが。

魔理沙同様、ブレンの胎内にてスリットウェハー越しにブレンの亡骸を見る輝夜は、今回ばかりはさすがに、思いの外動じることのなかった自分のことを誉めたたえる気持ちにはなれなかった。

そして彼女は、ブレン達の死以上に、あることに意識が集中していた。

妹紅のことだ。
何故だか分からないが、彼女のことが無償に気になってしまい、ブレンがどうとかの問題ではなくなってしまっていたのだ。
スリットウェハーに映る、ブレンの手のひらの上。
そこでは、妹紅の細い身体が呆然と立ち尽くし、ぴくりとも動かなかった。
いや、ほんの僅かに震えていた。

輝夜は、言いようのない不安に駆られ、誰に聞こえるともなく呟いていた。

「妹紅・・・どうしたんだ?」

妹紅の眼には、桜の木に囲まれ、無縁塚の持つ絶望的な性質とは真逆をいくように生気に溢れ、その哀しみを覆い隠すように肥えた大地の上に横たわるブレン達の姿が、他の誰よりも鮮明に焼きついていた。
そして網膜から脳へと、まさしく電光となって伝わったその光景から感じるものも、妹紅と他の者達とでは大きく異なっていた。

彼女は、無残であり、哀切を感じさせるはずのブレンの亡骸の数々から、紛れもなく、安らぎも感じていたのだ。
受け入れがたい死に直面し、哀しみながらも、最後の最後にそれを受け入れた結果としての、穏やかさが。

それは、妹紅には永遠に感じられない安らぎであったのだ。
だからこそ彼女は、立ち尽くし、そして震えていた。

「・・・・・・あぁ・・・」

乾いた息と共に、声にならない声が吐き出される。

妹紅はまた、いつかの幽香の言葉を、まるで今先程彼女が語ったものであるかのように、鮮明に思い出していた。

グランチャー・・・アンチボディにとっては、死もまた生の一部。

もしかしたら、それが現実であるかもしれないのだ。
その認識は、妹紅にとってはそれこそ哀切であった。

「・・・そんな・・・っ」

自分のグランチャーが、戦いの中で死んだ。
そのことすら、グランチャーの生の一部なのか？

幽香に対し投げ掛けた問いの応えが見えたような気がして、震えていた身体から俄かに力が抜けるのを感じ、彼女はそのまま、崩れるように倒れそうになった。
それと共に、今までこの身体の中にあった熱い何かが頭のてっぺんから抜け出て、どこかに消えていくような気がした。

しかしそれを、慧音が咄嗟に抱きかかえるようにして止める。
抜け落ちそうになるその熱いものも、彼女の身体の感触が繋ぎとめてくれた。

「妹紅！」

彼女の声と共に、オーガニックエナジーを通して輝夜の声も聞こえてきた。

（大丈夫なの、妹紅っ？）

「う・・・っ」

慧音に抱かれ、ゆっくりとその場に座らされながら、妹紅は輝夜と慧音の二人に対して応えた。

「大丈夫・・・大丈夫だ」

それを聞いても尚、慧音は、ブレンの指にもたれかかるようにして座った妹紅の顔に、自分の顔を寄せて、心配そうに見つめていた。

その眼の奥を見返してみると、先程抜けていきそうになっていた熱さとは別のもの・・・しこりのように感じられていたものが吸い取られていくような気がして、気恥ずかしさよりも安らかさを感じられた。
ブレンの亡骸から感じたものとは、別の気持ちをだ。
そんな気持ちに誘う慧音の目線が、僅かに力強くなったように見えた。

それと共に、彼女は言う。

「妹紅・・・君の気持ちも、何となくだけど、分かる」
「え・・・？」

「君は、自分なりに考えて、よりよいと思える行動をすればいい」
「・・・つまり・・・」

「君は今、自分がどうするべきなのか考えていたんじゃないか？」

「いや・・・ちょっと違うけど・・・いや。違わないかもしれない。アンチボディの生き方を考えていた」

「生き方？」
「アンチボディにとっては、生きることがいいのか、死ぬことがいいのか・・・」

「・・・・・・」

慧音は妹紅の言葉にすぐには応えずに、目線をブレン達の亡骸へと向けてから、静かな声で語った。

「それは・・・どちらもじゃないだろうか」
「どっちも？」

「ん・・・死んでから見えてくる世界もあるというのは、多分確かなことなんでしょう。
イデアが発動（オン）することで行ける世界というのは、幻想郷ができる以前からも、海の向こうの世界では信じられていたことです」

「・・・・・・」

死んでから見える世界か・・・

その存在を認めるということは、死ぬことができない妹紅にとっては、それこそ空の向こうに・・・到底行けない場所に眼を向けるような気分であった。
そして、慧音がそれを語るということも、辛かった。
語るということは、僅かばかりでも信じているということなのだから。

しかしその辛さは、身勝手なことだろう。
慧音は死ぬことができる・・・
いや・・・いつか死ななければならない人間だ。
妹紅とは違う。そういう世界の住人だ。
そんな慧音が、死の先にある世界を信じるというのは、何も悪いことではない。（そもそも死者の世界である冥界があることは妹紅にも分かっている）

だから、慧音に対して、失望したりするのは、全くの筋違いなのだ。
それが分かるから妹紅は、この寂しさを自分自身に向けるしかなか

った。

しかし慧音は、妹紅が思うように、現実的な考えもできる人間だったが、
同時に、彼女が想う以上に、妹紅のことも、現実を抜きにしてよく考えていた。

決して、無駄に彼女を哀しませたりしないのが慧音だ。

彼女は続けて、こう言った。

「でも、そういう話を聞くたび、だったら人間も何もかも、最初から生命をもって生まれてこずに、死後の世界で永遠の生きていけばいいと思うんですよね・・・
でも人間って、紛れもなく肉体をもって生まれてくる。
それにもやっぱり、意味があると思うんです。生まれてきてから、何かやるべきことがあると思うんです。
生きているからこそ、成し遂げられる何かが」

「生きているからこそ・・・生きていないと、成し遂げられない何か、か」

「でもそれはきっと、誰にも、永遠に成し遂げられないものなんです。誰にも、それこそ君にも。
だから人は、死ぬのが怖いんです。
だけどもし、その到達点が分かっているものなら、それに達することができなければ、死ぬに死にきれないでしょう。
・・・だから私は、あのブレン達だって、死を受け入れられているなりに、無念だったんだと思う。
まだ、やるべきことがあるというのに」

「それでも、死ぬことそのものは、受け入れられてしまうんだな・・・」

「えぇ・・・自分達が死んでも、他のブレン達が自分の代わりに、成し遂げてくれるだろうと信じて、受け継がせていくんですよ。そういうところは、人間と同じだ」

「そうか・・・仲間がいて、後を継いでくれるから、死ぬことも怖くない・・・」

慧音の言葉を聞きながら、妹紅は呟くように言っていた。
それは慧音にも聞こえてはいたが、ほとんどは、妹紅が自分自身に呼びかけている独り言と同じだった。
彼女は、ブレンの指にもたれかかっていた身体をくるりと回してブレンから見て正面に向き直し、指の腹の辺りに肘を置いて身体を前に乗り出しながら、もう一度、眼下のブレン達を見下ろした。
その瞳の焦点は、無縁塚にて眠るブレン達に合い、微塵とも動かない。
普通なら、その痛ましさと、揺れ動く心のためにすぐにでも逸らしたくなるはずの視線が、微動だにすることさえなく、ぴたりとブレン達の亡骸を差していた。

その姿。
絶望と悲哀と安寧とを織り交ぜたような、どこか超然としたその姿を網膜に焼きつける中で、妹紅はさらに呟いた。

「でもやっぱり、あいつらの望んでいることは、叶えてやりたいな。・・・ブレンもそうだけど、グランチャーも・・・」

その言葉を後押しするように、慧音が続いた。

そう、確かに彼女は、妹紅を後押ししていたのだ。
今この時に関しては、彼女は妹紅の心のほとんどを見通すことができていた。

「妹紅・・・私は、妹紅についていくよ」

その言葉を聞いた妹紅は、振り返り、もう一度彼女の眼を見ながら、引き締まった表情で力強く頷いた。

「ん・・・なんだか、心の中で何かがかみ合った気がする・・・不思議な気分がしてるんだ」

第十五話　その8

ハクレイブレンに乗る霊夢としても、ああいうものを見れば、さすがに心が動かされないわけはなかった。

・・・と、いうわけでもないようだった。

ブレン達の亡骸を見ても、そこまで深刻なショックを受けたわけでもなかった。

ショックであるのは確かだし、確かにブレン達が可哀想ではあるのだが、だからといってこちらが無駄に哀しんだりしても、生き返るわけでもなければ、それこそ、二束三文とかの特にもならないからだ。

先程までブレンの手のひらに乗っていたはずの文とはたては、すでに宙に飛んでブレンから離れて、何事かやっているようだった。

もう一度眼下の光景を写真に撮ったり、いろいろ話をしているのだろう。

それはそれとして気にしないことにして、霊夢は、スリットウェハーに映るブレン達の亡骸を見るのも早々にやめて、手を頭の後ろに回し、そのまま積層装甲の壁にもたれかかって、寝るような姿勢になる。

その動きは、ブレン達の無惨な姿を直視しないように逃げているようでもあった。

そういう意味でも、彼女もショック自体は受けているのだ。

スリットウェハーの上に寝そべった彼女は、ぼんやりと上の方を見

ながら呟いた。

「なんかまた、あんたらのことがよく分かんなくなってきたわねぇ」

元々、ブレンパワードがどういうものなのか分からないままに、故あって彼の者に乗り込むことになった霊夢だったが、実際のところ、ブレンがどういう生き物なのかも、彼女には分かっていなかったのだ。

しかしそれは、さとりや魔理沙を始め、多くの者にとっても同じことだろう。

要は、皆が感じていることを、霊夢も感じているに過ぎなかった。

が、彼女が皆と違うところは、分からないなら分からないなりに、そのまま勝手にやらせてもらおうという心境だった。

ブレンの、ひいてはオルファンの目的が何であれ、要は戦うのは・・・やるのは自分達なのだ。

なら、自分達が思うようにやっていくのが最善だ。

というか、そうする以外に方法がないのだから、とやかく考えずにやってみようというのが、霊夢の考えだったわけだ。

そうやって上手くいけてきたのが霊夢であったし、上手くいくのが、この幻想郷であるのだから。

「ああいうことになりたいなら、早々に死ねばいいだけだし、いやなら気張って戦って、頑張ればいいだけのことだしね・・・そういうことでしょ」

相も変わらぬ口調で呟きながら、ブレンが頷くようにそれに応える声を聞く霊夢。

が、その一方で、やはり彼女も、知れるのなら、ブレンとオルファンの持つもっと根源的な部分を、知ってみたいとも思っていたのだ。

そんな意識を心の隅で感じると、その隣に、紫の顔が浮かんできた。
思い出すに、自分にこのブレンを預けたのが彼女であり、さとり達にブレンとオルファンのことを、ほのめかす程度に教えたのも彼女なのだ。

となれば・・・

「あいつは多分、あんたらのこともよく分かってるんでしょうねぇ・・・
もう一回あいつに会えば、いろいろ教えてもらえるのかしら?」

そんなことを呟くが、その次には、彼女は気だるそうに苦笑いしながら、ぼやいていた。

「いや・・・あいつがなんか教えてくれたことなって、なかったなぁ・・・
会おうと思って会えるような奴じゃないし。それになんか・・・」

紫のことを考える中で、霊夢には、何か、よく分からない不安があった。
どういう不安なのかは、それこそよく分からなかったが、脳裏に浮かぶ紫の顔の周りをもやもやと漂う瘴気のようなその不安は、紛れもなくこの不安が彼女に関わっていることを示していた。

「・・・今会うと、いろいろとややこしくなりそうな気がするのよねぇ」

紫の考えてることは、誰にも分からないし、当然自分にも分からない。
と、自負する霊夢であったが、実際のところは、分からないなりに

幻想郷で紫のことを一番理解できているのは、彼女であるかもしれなかったのだ。

頭の裏側でちらつく紫は、笑顔を浮かべていた。
彼女のアイデンティティのような、胡散臭い笑みをだ。

※

さとり達が、無縁塚にて横たわるブレンの亡骸を見つめていた、そんな中だった。
不意に勇儀が、装甲をこんこんと叩きながら、胎内にいるさとりに呼びかけていた。

それに気付き、
「どうしました？」
と応える彼女に、勇儀は言った。

「ちょっと、下に降りてみてくれないかい。もう少し近くであいつらを見たくなった」
「え？」
「他のみんなもそう頼んでいる」

「・・・そうですか・・・私も、そうしようかと考えていたところです。
こいし達は？」
「いいよ、降りよう」

「ブレン達を近くで見たいですしねぇ」
「いっていいですよぉ」

「・・・降ります」

さとりは、こいし達の返事を聞いた上で、勇儀にこう応えた。
彼女が勇儀に対し、自分もブレンを無縁塚に降ろして、彼の者の仲間達の亡骸をもっと近くで見たいと応えたが、それはその場しのぎの相槌の類ではなかった。
実際彼女は、勇儀が呼びかけてくる直前に、同じようなことを考えていたのだ。
もちろん、外にいる彼女らがその事を考えれば、それを読み取ることもできたが、さとりがブレンを降ろそうと考えたのは、それよりもさらに後だった。

だからどうしたというものではないが、さとりは何だか、今この時に関しては、自分達地底の妖怪の心というものが、ひとつのところに集まっているような気がした。
皆のオーガニックエナジーと共に、心をもブレンが吸い取って、集めているというのか？
そしてその集められた心は、生きることそのものを慈しむ、強い意思だった。

生きることが楽しいから、蔑まれて、地底に逃げることになっても、それを諦めなかった。
生きることをだ。
そんな地底の妖怪達の内にあるエネルギーが、そうさせていることなのかもしれない。

ならば、死んでいったブレン達を悼む心は、ブレンだって持ってい

るのだろう。
さとりが念じるよりも早く、ブレンはその心の声を聞き入れて、ゆっくりと下方へと降下していたのだから。

桜の木に囲まれるように眠っているブレン達の姿が、より近づいてくる。
その様子を見ながらさとりは、ちらりとだけ目線を上げて、周囲にいる他のブレンを見てみた。

彼の者達は・・・すなわち、彼の者達に乗る人妖は、この動きが見えていながら、こちらについてくるようなことはしなかった。
まだ、ブレン達の亡骸に近づく気にはなれないのだろう。
さとりはそのことを批難する気はなかった。

実際、変色し、ひび割れ、乾き、叩けば粉々に砕けそうなブレン達の変わり果てた姿がすぐ近くにまで見えてくると、胸の内が冷たくなってくる。
こういう気分をわざわざ自発的に感じる必要など、なかったのだから。
さとり達だって、確かな意思を持ちながらも、どうしてこんなことをしているのだろうという疑問も、感じてしまっていたのだ。
こんなことをする必要はないのに。
そもそも、こんなところにくる必要だってなかったのに・・・

だが、必要だとか、そういうことではないのだ。
そうしたいと心に決めたからそうしているのだ。
いかに心痛み、彼女らの意思に幾分かの迷いはあろうとも、行動には一切の迷いはなかった。

そのままサトリブレンは、倒れるブレン達の全てが見えるような位置へと降り立ち、静かにその場に佇立した。

空が遠い。

それに反するように、さとり達の眼に、より一層近く、迫り来る何かをもって視界に入るブレン達の亡骸が映り込んでいた。

さとりは何故だか知らないが、勇儀達を乗せる手のひらを少しだけ前に出し、胎内を覆っていた装甲を開いた。
そうして、こいし達を置いて、吸い込まれるように（胎内から吐き出されるように？）外に出ていった。

穴をくぐり装甲の上に立つと同時に、足場を蹴って浮遊しながら、ブレンの肩にまで上った。
金属の質感と人肌の温かさをあわせ持つその装甲の上に降り立つと、彼女はそのまま振り返り、改めて眼下に見えるブレン達の亡骸を見た。
時折、すぐ目の前に見えるサトリブレンの横顔も眺めながら。
さとりが肩の装甲の上に乗ったのは、そのためでもあった。

下の方では、突然さとりが出てきたのにびっくりしつつも、驚くことを早々にやめた勇儀達がいろいろと話をしているのが聞こえた。

「これは・・・見れば見るほど妬ましく・・・」と、パルスィ。

「これからも、こういうブレン達は増えるのかなぁ？」とキスメ。

それにヤマメが応える。
「天狗が新聞で呼び掛けてるんだ。それでもこうなるんなら、仕方

がないのかもしれないねぇ・・・」

と、そんな言葉に続いて、さとりを追ってきたのか、遅れて胎内から出てきたらしいこいし達の声も聞こえてきた。

「お姉ちゃん？・・・あれ、お姉ちゃん？」

さとりを探しているらしい彼女に、パルスィが

「上に行ったわ」

と、応える。

「そっか・・・

・・・あれがブレンなんだよねぇ・・・」

パルスィの言葉に応えつつ、ブレンの亡骸を視界に入れながら呟く彼女の声に続いて、一緒に胎内から出てきていたお燐が言った。

「このブレン達、オルファンのところに連れてってあげれないかにゃぁ」

お空が頷く。

「そうねぇ。連れてけないの？」

それには、勇儀が応えた。

「・・・難しいねぇ。ブレン達が頑張れば、オルファンのとこにまで連れてくことはできるだろうが、時間がかかるだろうからな。

その間にグランチャーに見つかったら大変だし・・・・・今のところは、ここに寝かせておくしかない。

みんな済んだ後でなら、ゆっくり連れていってやることもできるだろうさね」

「そうかぁ・・・」

勇儀のその言葉は、当然さとりにも聞こえていた。
そして彼女の語る、みんな済んだ後という表現は、さとりもよく脳裏で考えていたことだった。
みんな・・・つまり、全てが済んだ後は、オルファン達は銀河へと旅立ち、この幻想郷から去っていく。

その時、今さとりがその存在を身近に感じている彼女のブレンも、一緒に去っていってしまうのだろう。
今になってそのことにふと思い至り、彼女は言いようのない寂しさを覚えていた。
今、この瞬間こうやって触れることで、生きていてくれてよかったと思えるこのブレンが、遠くに去って、いなくなってしまう。
それは、とても大きく、空しい喪失であるということが、分かった。

だがその喪失は、ある意味では喜ばしいとさえ言える、奇跡でもあったのだ。
さとりは、別れることが哀しいと思えるような友達と巡り合えたのだから。
そういう者とは一生・・・妖怪にとっての永い一生の中でも、出逢うことはできないだろうと思っていた。

だが実際は・・・このブレンにしてもそうだが、今ブレンの手のひらに乗っている者達もいる。
昔の彼女では思いもよらなかった関係が、呆気ないほど簡単に、しかし固く結ばれて、今もまだ続いているのだ。
そしてそれは、この先も続き、もしかしたら、また新しく出来あが

るのかもしれないのだ。
魔理沙や霊夢が地底に訪れたことだって（彼女達が友人であるとは言えないが）、新しい出逢いであったのだ。
そして、このブレンとの出逢いもそうだ。

彼の者との別れは辛いが、それでも、そこには未来に向けての希望もあった。

別れというものを体験してみたい。
愛の数が消えることは、新しい愛を高め合うことに繋がる。
そのことを確かめてみたいから。

さとりはそんな、自分自身不可思議ながらも、切実な想いを、胸の内で抱いていたのだ。

そしてその別れには、眼に見え、手で触れられる存在として残るものがあってはいけないのだ。
オルファンはその全てを、ビープレートより漲る無限のオーガニックエナジーと共に持っていかなければならない。
自分の生み出したブレンパワードを、そして、自分達と共に幻想郷に迷い込んできたグランチャー達も。
生も、死も関係ない。皆一緒にだ。
この地に残る者がいるということはすなわち、母なる存在とはぐれてしまうということだ。
そんな哀しいことは、これ以上あってはいけないのだ。

彼らがこの地に残すものは、思い出だけでいい。

だから例え亡骸であろうと、魂の宿らぬ抜け殻であろうと、そこにブレンの生きていた残り香がある以上、このブレン達もオルファン

の下に還してやらなければいけない。
それは、さとりも考えていることだった。

そして今、勇儀の言葉を聞いたさとりは、うわ言のように静かに語りかけていた。
死んでいったブレン達に向けて。

「全てが終わった後・・・オルファンには少しの間待って貰わないと。
貴方達を連れていかなければならないからね・・・ブレン」

その言葉が、微かに吹きつける風に運ばれ、どこともいえないどこかへと消えていくと、さとりはもう何も言わなくなった。
ただ、緩やかな風に煽られながら、自らのブレン・・・新しく出来た友達と共に、陽光の下、悠然と佇むだけだった。

その姿には、地の底の妖怪が持つ・・・彼らだけが持つ力が宿っていた。
蔑まされた者だけが持つことができる力・・・外の世界において、黒い肌の中に眠っていた豊かな力（ブラックパワー）のように、自分達を信じていく力だ。

そしてさとりは、再び感じた。

自分の眼に見えるものは、色と、光と、形や動き、
そして、恐ろしく、身勝手で、正直で、残酷で、寂しく、繊細で、危うく、温かく、柔らかい心の声だけではなかった。

未来と呼べるものも今、彼女の眼には確かに見えていたのである。
これから自分達が見るべき、そして、ブレン達に見せるべき未来が、
確かに・・・

「・・・貴方達も、ここで待っていて・・・・・・いずれまた会いましょう」

さとりの瞳の奥に、遥か昔に失われていた光が蘇っていた。

と、そんな中でだ。
周囲を飛びながら、ブレンの亡骸を写真に映し撮っていた文とはたての二人が、ブレンの肩の上に佇むさとりに気づいて、近づいてきた。

さとりの横で、翼を羽ばたかせ浮遊しながら、はたてが言ってくる。

「どうしたんですかさとりさん？こんなとこで」

「・・・いえ・・・あのブレン達と、私のブレン・・・この子の顔を、交互に見てみたくて」

「ふぅん」

そんなさとりの声を聞いたはたてが、さすがに天狗の肝は据わっているのか、それとも、ようやくブレン達の死に対するショックも和らいできたのか、普段と変わらない様子の笑顔でこう応えてきた。

「貴方のブレンは、いい顔してますからねぇ・・・貴方だってね」
「私が？」
「そおですよ。ちょっと見ないうちに、何だか頼もしそうな顔になって・・・・・・
って、なんかこの台詞、前も誰かが言ってたような・・・」

「記憶力がおかしくなったの？大体ねぇ、ちょっと見ないうちにって、ほとんど毎日顔なら見てるでしょうが。
ボケが始まったか」
すかさず小馬鹿にする文の声に、はたても冷やかすような声で返した。

「あのねぇ、こういう時ぐらい空気を読みなさいよ。コミュニケーションがまともにできんのかあんたは」
「あんた相手には必要ないんですよぉ、そんなもの。まともな方が相手ならちゃんと空気読むわよ。
分かる？あんたはまともじゃないから、まともな付き合い方なんてできないってことよ」

そのままいつもの口喧嘩を始めそうになる二人に、さとりは珍しく厳しい口調で言った。

「あの！」

「あやっ？」
「なにっ？」

「私とブレンの前で、喧嘩をするのはおやめなさいっ」

「・・・・・・」
「・・・・・・」

そんなさとりの批難の声に、しばらく二人は、翼の羽ばたきすら止めて空中で静止した後、思い出したかのように揃って深々と頭を下げてから、謝罪した。

「済みませーんっ」
「お言葉通り、余所でやらせていただきますっ」

そうして、彼女の一言で喧嘩する気もなくなったのか、頭を上げると同時に互いに顔を見合わせて、仲良く言い合っていた。

「ほら、ねぇ、見てよあれ。いい顔でしょ」
「・・・確かにねぇ」

「ふふ・・・っ」

しょんぼりした様子のふたりの顔を見ながら、さとりは珍しく、もう何十年もしたことがないような、不敵な微笑を浮かべることができていた。
もっとも、心境が心境である。
それは不敵というよりかは、いたずらっぽいと言った方がいいような、そんな笑みだった。

その後彼女達は、半刻ほど無縁塚にい続けた。

そうして、ブレン達の亡骸から、見るべきことを見、汲み取るべきものを汲み取って、感じるべきものは感じ、決めることは決めた。
今やるべきことの全てを終えてからようやく、彼女らは地底へと戻ることにした。

空に輝いていた太陽はようやく傾き始め、陽光も苛烈なほどの鋭さを失いつつあった。
それでも、針のように刺してくるその光は、大地に横たわるブレン達の変色した肌に奔る亀裂を、より深くするように思えた。
さとり達はまたひとつ、太陽の持つ残酷さを思い出した気がした。

そして、無縁塚から離れ、青い桜と、抜け殻となったブレン達が遠ざかる中で、彼女達は、何故だか少し疲れていた。
心が大きく揺れ動いていたからだろうか。
一日という価値観の占める量の多くが、あの半刻に密集しているようだった。
なんだかもうすぐにでも、陽が地平線の向こうに落ちて、夜も過ぎ、一日が終わるような気がした。

しかし実際のところ、彼女らの一日はまだ終わりではないのだ。

昨日は、とても長い一日だった。
咲夜のグランチャーと戦い、生命を少しだけ削ったような気がした。
そして今日もまた、それと同じぐらいに長い一日となるのだ。
昨日とはまったく違う想いを感じることになる一日に。

それが分かるのは、地霊殿へと戻ってきた後のことだった。

※

地霊殿の中庭へと戻ってきてブレンを降下させると共に、広大な敷地の中にいろいろな植物が茂るその中庭を見下ろしていた魔理沙は、自分達を出迎える者がいることに気がついた。

スリットウェハーの表面に、地に足をつけてこちらを見ているふたつの影が映っていたからだ。
ひとつは、大きく手を振ってこちらを迎える椛。
そしてもうひとつは・・・

魔理沙はその姿に、思わず驚嘆した。

「美鈴じゃないかっ。どうしたんだ?紅魔館にいられなくなって、案の定泣き寝入りか?」

椛の隣で、仁王立ちのままじっとこちらを見上げてくる美鈴。
その表情は、数日前、咲夜のグランチャーを倒せと言った時のそれと、まるで同じだった。

その表情だけを見れば、魔理沙はまるで、自分がタイムスリップでもしたか、あるいは夢でも見ているような気分になった。
それほどまでに、美鈴の表情が、以前と何も変わらなかったのだ。

一体どうしたのだろうか。

咲夜から罵詈雑言でも浴びせられて、気がたっているのか？
何にせよ、話は聞いておいた方がよさそうだ。

顔見知りの様子がおかしい時の行動の早さに関しては、魔理沙はさとり以上だった。
気持ちの上でのすばしっこさなら、天狗にだって負けてはいないのだ。
そのことは、自らのブレンを殺めようとする行動にも、敵を無理に追撃し、こっぴどくやられる滑稽さにも顕われていた。

ブレンが中庭に降り立つと同時に、彼女は彼の者に、
「永琳達を降ろしといてくれな」
と呼びかける。
それと共に、しゃがみこみ装甲を開くブレンの胎内から出て、すぐさま中庭に飛び降り、美鈴と椛の下へと駆け寄っていった。
その間に、他のブレン達も中庭に降り、各々、自分の身体に乗っていた者達を降ろしている。

二人の傍にまで駆け寄ったところで立ち止った魔理沙は、前置きもなく、いの一番に問うた。

「美鈴、どうした？」

それに椛の方が、よく分からないといった感じの表情で応えようとする。
どうやら彼女はすでに、美鈴がここにいる理由。そして、彼女の表情の険しさの理由を知っているようだ。

そうしてその理由というのは、彼女にとっては不可解なものであるようだった。

「あのですね・・・」

が、続く言葉を発する前に、美鈴の方が、椛の声を遮るように、その静けさの割には強く鼓膜に響く声で言ってきた。

「魔理沙、頼みがあるの」

「頼み？・・・また頼みか・・・」

「絶対に・・・絶対、何がなんでも！・・・聞いてもらわないといけないの」

「・・・・・・」

魔理沙はまた、自分がタイムスリップをしているような気分になった。

この美鈴の堅苦しい声。

細部は違うだろうが、何もかもが数日前と同じであるような気がしたのだ。

あるいは、やはり夢を見ているようだった。

だが、続く彼女の言葉で、タイムスリップという認識は跡形もなく消し飛んだ。

だが、夢を見ているような錯覚の方は、消える気配さえも見せなかった。

「・・・咲夜さんのグランチャーを、蘇らせてほしい・・・っ！」

第十六話『もう一度Ｔｅｎｄｅｒｎｅｓｓ』　その１

「・・・なんて言った？」

魔理沙は、思わず聞き返してしまっていた。
美鈴がなんと言ったのか、ほとんど聞き取れなかったからだ。
そして多分それは、聞き取れなかったというよりかは、聞き取れはしたのだが、理解ができなかったということなのだろう。

ぽかんとした表情を浮かべる彼女に対し、美鈴が、もう一度強い口調で言う。

「咲夜さんのグランチャーを、救ってやってくださいっ！」

「・・・・・・」

やはりそうだった。
魔理沙は、こうやってもう一度聞くまでもなく、美鈴のこの頼みは聞こえていたのだ。
ただ、何故こんなことを言うのかが、まるで理解できなかった。
何もかもが、以前と同じ中で、彼女のこの嘆願だけが、まったく真逆のことを言っていたのだから。
美鈴はついこの間、グランチャーを倒せと言ったばかりではないか。
そして実際魔理沙達はそれを聞き入れて、グランチャーを撃破し、確実な死へと陥れることとなった。
それが今度は、そのグランチャーを蘇らせろというのだ。

頭の中に、もやもやしたものがぐるぐると渦を巻いて、他のあらゆる思考を呑み込み、混乱をもたらしていた。
魔理沙は、聞こえもしたし、理解もできたが、未だ納得することができず、さらに美鈴に聞き返していた。

「ま、待てよ・・・待ってっ。どういうことなんだっ？あんた、グランチャーを倒せって言ってたじゃないか。あたし達はその通りにしたんだぜ。
それで今度は、そいつを蘇らせろって・・・どういうことだよ・・・」

それを聞いた美鈴は、僅かに俯きながら、吐き捨てるように言った。

「理解し難いのは分かります・・・だけど、お願いですっ・・・グランチャーが死に瀕して、分かったんです。
私はやっぱり、あいつには死んでほしくないと・・・咲夜さんだって哀しむから・・・っ」

「・・・・・・」

美鈴のその声は悲痛なものであった。
そうしてようやく魔理沙は、美鈴が何を言いたいのかを理解できて、一瞬何も言えないなった。
だが、次いで彼女が感じたのは、そんな美鈴に対する強い憤りであった。
『無責任』という言葉が脳裏に浮かび上がり、眼前にいる妖怪のことを称した。
魔理沙は、厳しい口調で彼女に言い返す。

「あ、あのさぁ、あんたちょっとおかしいよっ・・・そんなの、変

だと思わないのかっ？あんたの言ってることって要するに、人を殺した奴が、その後で後悔するのと同じじゃないかっ。
一度殺しちゃったら、手遅れだって分かるだろう、無責任だぜ！
紅魔館のみんなに嫌われるのが嫌なんだったら、最初からあんなこと頼まなきゃよかったんだ！
あたしは変なこと言ってないぞっ」

その言葉通り、辛辣な物言いながら間違ったことは言っていない魔理沙の声に、美鈴は俯いたまま、微かに身体を震わせることしかできなかった。

と、後からマリサブレンより降りた永琳とにとり、それと、魔理沙と美鈴の様子が妙であることに気づいた文とはたてが近づいてきた。
さとり達も、こちらの様子は気になっているが、ブレンに乗っている人数が多いため降ろすのに大分手間取っていた。
輝夜達の方は、気になってこそいるが、元来多くのことには無関心である妹紅は、特別興味も湧かず、ゆっくりと中庭に降りている最中であった。
他にやることもないので、一応、慧音と輝夜と共に様子を見に行こうかというつもりだったが。
かくなる輝夜はそもそも、自主的にテキパキ動くような者ではない。

霊夢は何事にも完全に興味がなく、ブレンが中庭に降り立つと共に、騒動が済むまでの間、と、胎内でひと眠りを始めてしまった。
さながら、彼女だけが別の世界の住人のようであるかのような落ち着きようだ。

魔理沙達の方に近づいてきた文が、

「どうしましたー？」
と聞いてきた、その瞬間だった。
俯き、動かなかった美鈴が突然その顔を上げ、大きな声でこう返してきた。
「そうですよっ！無責任ですよ！でもねぇ、それとはまた違うんですよ！」
「・・・っ？」
「なんだなんだぁ？」
「どうしたの」
魔理沙が息を呑むと同時に、駆け寄ってくるにとりと永琳も驚嘆していた。
強張った表情の美鈴が、噛みつくように続けて言ってくる。
「私は・・・私はねぇ。やること為すことみんな、咲夜さんのためなんです。グランチャーを撃破しろと頼んだのも、咲夜さんのためなんです・・・っ」
こういう話になった時には、永琳の理解力の良さが助かった。
彼女はにとり共々魔理沙の隣に立つと、美鈴の吐き捨てるような声に静かに応えた。
「グランチャーには人の心を荒ませる性質がある。で、その十六夜咲夜さんが変わってしまったから、それをどうにかしたかったのね」

「そうです・・・ですが。実際はそんなことをしても、意味はなかった・・・っ
そりゃあ！・・・そりゃ、私の頼みを聞いてくれた貴方方には、感謝してるんです。
別に貴方方を悪く言うようなつもりなんて、ないんですよ・・・
ただね・・・いくらグランチャーのせいで心が変わるといっても、
咲夜さんとあいつの間には、強い絆があったんです」

「絆・・・」
「よく分かる話です」

魔理沙の声に、永琳が続く。
その相槌を聞いてか聞かずか、美鈴は続けて語る。

「その絆は、私だって感じてたんです。グランチャーはいい奴です。
ただ、少し行き過ぎた性質があるだけで・・・
それで私は、その行き過ぎた性質だけに眼がいって、あいつを殺すことしか考えられなくなった。
でも・・・でもね、それが駄目だったんですよ！
グランチャーはただ、自分に誠実に、咲夜さんにだって誠実に生きようとしていただけなんです・・・っ
そのことに気づかずに、貴方達にあんなことを頼んだ結果ねぇ・・・
グランチャーは死を待つことになった。
それで確かに、咲夜さんは穏やかな性格に戻ってくれました。でも、
前と同じではなかったんです。
とても寂しそうな眼をして・・・哀しそうでした・・・
それで私は・・・・・・分かったんですよ！」

「な・・・何を・・・？」

そう聞く魔理沙に対し、美鈴は、振り絞るような叫び声で応えた。

「グランチャーには、死んでほしくないんですよぉぉ！」

その叫びは、ゆっくりと魔理沙達の方に歩み寄っていた妹紅達にも聞こえた。

気だるそうにしていた妹紅の顔が途端に驚愕し、眼が見開かれるのが、その横顔を見る慧音にはよく見えていた。

「な・・・何の話をしてるんだ・・・あいつ・・・っ」

そう吐き捨てながら、妹紅は慌てて声のした方へと・・・紅　美鈴とかいう妖怪の下へと駆けだしていた。

「妹紅っ」

「眼の色変えないのっ、待ちなさい！」

慧音と輝夜も、その後を追う。

美鈴の叫びを聞いた魔理沙は、すぐにはそれに応えることができなかった。

その悲痛な叫びと、迫り来るような彼女の表情のために、簡単に声がでなかったのだ。

だが、だからといって、この叫びに感化されたわけでもない。

依然心の内では、『無責任』という言葉が、より強く反響していた。
だからこそ彼女は、しばらく間を置くことで、再び厳しい言葉を返すことができた。

「それじゃ、ますます無責任だぜ・・・分からないのかっ？」

それに、文とはたても続く。

「確かに、さすがに調子よすぎるんじゃないですか？咲夜さんのグランチャーは、ブレンだってたくさん殺めたんです。私達の知っているのでも、一体は間違いなくねぇ・・・」
「そ。要するに、ブレンとグランチャーの戦いじゃ仕方ないことでしょ・・・多くのブレンを殺めたのに、いざ自分がやられたら生き返るなんてのは、虫がよすぎるってことねぇ。大体。アンチボディを生き返らせる方法なんて、あるわけないでしょ」

その声を傍から聞いていたにとりが、はっとして、隣にいた永琳の袖をくいくい、っとひっぱると、彼女にしか聞こえないような声で言った。

「永琳さん・・・あんた確か、アンチボディを生きかえらせる方法が、なくはないって言ってましたよね」

「・・・」

ひと回り背の低いにとりの方に、見下ろすようにして振り向いた永琳は、しばらく黙りこんだと思うと、不意に困ったような苦笑いを浮かべ、応えた。

「残念だけど、私もそこまで完璧じゃない・・・その場の空気に合わせて、確証のないことを言ってしまうことだってある・・・冗談だったのよ、あれは・・・」

「・・・でも。考えもしないようなことなら、冗談も言えないはずですよ・・・」

「それはそうだけどねぇ・・・」

「・・・機械を直すのは、あたしらの仕事です・・・そんで、生き物を治すのは、あんたの仕事じゃないですか？」

「・・・・・・っ」

にとりのこの声に、永琳ははっ、とした。

そして、彼女の言葉も、もっともだと思った。

確かにその通りだ。

考えもしないことなら、冗談にもできはしない。

あの時ブレンの亡骸を見て心を痛めた時、にとりの問いに、確証がないままに応えてしまった。

だがそれは、確証はないが、可能性ならあるからこそではないのか？

永琳はもう一度、脳裏で考えを巡らせた。

五秒と満たない中での思考である。

アンチボディの、オーガニックエナジーの性質。

プレートから、オーガニックエナジーの波と共に、ほとんど無から生まれるリバイバルの仕方。

異なる二つのオーガニックエナジーが合わさることで、その力が何倍にも高められるという特徴。

一輪だけでは萎れていた花が、もう一輪隣に植えるだけで、見違えるほどに元気になった。
蘇ったのだ。

・・・そう、蘇って・・・

頭の奥の方で、何かががっしりと噛み合うような気がした。

普段は見せないような顔、眼を見開いて驚愕するような彼女の表情に、にとりは何事かと、きょとんとした顔を浮かべていた。
だが次いで、力強く頷いた彼女の姿を見れば、にとりはやはり、目の前の者が尊敬するに足るインテリであることを再確認することができるのだ。

「よぉーし・・・」

珍しく意気を高めるような声を漏らすと共に、永琳は、魔理沙や文達と、美鈴の間に割って入るようにして言い放った。

「方法ならあります」

「えっ？」
「八意先生？」
「なんですと？」

魔理沙と文とはたてが、揃って驚嘆した。
が、それに対して美鈴は、さながら死中に活を見出したかのように、

大声で聞き返していた。

「本当ですかっ！？」

「えぇ・・・ただ、言わせてもらうけど、確信が持てる方法ではない。あくまでも可能性がある・・・やってみる価値はある、という程度の話よ。

ただ、どうせこのままグランチャーが死ぬというのなら、美鈴さん・・・

私は貴方のその願い、聞き入れてみてもいいと考えます」

それを聞いて慌てて言い返したのは、魔理沙だ。

「え、永琳、いいのかよ・・・っ？」

「そりゃ、ブレン達には申し訳がないでしょう・・・射命丸記者の仰った通り、グランチャーは多くのブレンを殺めてきた。そのブレン達のことを考えないのか、と批難されるのも仕方がないと考えます。

だけどねぇ、私も医者（こういうの）になったものだから・・・助けて欲しいと言われた生命を、助けないわけにもいかないのよ・・・」

「・・・っ」

そんなことを言われてしまうと、さすがに魔理沙も言い返せない。

そしてそんな永琳の声に、続く者があった。

妹紅だ。

慌ててこの場にやってきた彼女は、すぐさま永琳の隣に躍り出ると、こう問いかけてきた。

「どういう事情なんだっ？」

永琳は、そう聞いてくる妹紅に対し、美鈴の頼みを大まかに説明した。

その上で彼女は、自分の考えも伝えた。

「私はこれで、医者の端くれをやらせて貰ってるからね。助かる生命なら、助けてあげたいとは思う」

「助ける方法はある・・・ってことだったよな」

という妹紅の返事に、文が続いた。

「そうですよ。その方法ってヤツです。そもそも貴方のいう方法を聞かなきゃ、何とも言えませんよ」

その言葉はもっともだった。

永琳は小さく頷きながら、文の声に応えた。

「ん・・・魔法の森にいる朱鷺子さんのブレンと、グランチャーを出会わせる。そうしてふたつのアンチボディのオーガニックエナジーを複合させて、一体のアンチボディを一から構成する。再リバイバルをするのよ」

「なにそれーっ？」

さすがにはたてが、大声で驚嘆する。
同じく驚いている文が続いて、永琳に呼び掛けてきた。
「それって要するにさぁ・・・二体のアンチボディから一体を生み出すってことでしょうっ？」
「えぇ、その通りよ」
「んな無茶苦茶な・・・」
「無茶苦茶に聞こえるでしょうけど、アンチボディにならできることかもしれないのよ」
「・・・どうして」
妹紅が聞いてくる。
「オーガニックプレートからアンチボディがリバイバルする時、彼らは何もない空間から、オーガニックエナジーを実体化させながら肉体を構成していた。
アンチボディにとっての肉体とは、実体というより、オーガニックエナジーが形を成したものかもしれないのよ」
「だから、オーガニックエナジーさえあれば、一からリバイバルし直すこともできる・・・ってこと？」
と、文が聞いてくる。
「えぇ、そういうことよ」
永琳が応えた。
それにまた、魔理沙が続く。

「ってことは・・・咲夜のグランチャーだけじゃなく、朱鷺子のブレンも助けるってことなのか・・・両方とも一体のアンチボディにして・・・

・・・待てよ。だったらさぁ、その一体のアンチボディってのはどっちになるんだぜ?

ブレンになるのか?グランチャーになるのか?」

その問いは、永琳も想定はしていたが、それでも考えが及んではいないところだった。

考えようがないことだったのだ。

そもそも彼女には、自分の語るこの方法が成功する確信すらないというのに、そこから生まれるアンチボディがどのような者なのかなど、分かるはずもない。

だからこそ彼女には、こう応えるしかなかった。

「それは分からないわ。人間の男女から産まれるのが男の子か女の子か分からないようなものでしょう。

いえ・・・ブレンはそういう雄雌の関係とはまた違っているから、尚更分からないわ」

「分からない分からないって・・・貴方賢いんでしょお?」

と、はたてが戸惑うような、あるいは呆れるような声で返す。

「とにかく、こういう方法があるというのは確かよ。ただ、失敗すれば何が起こるか分からないというところでもある。

両方のアンチボディの肉体がバラバラに崩壊するかもしれないし、それならまだマシな方なのかも・・・」

そんな永琳の言葉の後は、ほとんど誰も声をあげようとはしなかっ

た。
魔理沙は依然、美鈴の頼みを聞こうという考えは持てない。
文とはたてはまだ、比較的彼女の願いを承る気持ちは持っていたが、そのための永琳が語る方法が、確実なのか疑う気持ちもある。
確証がないと本人が語る上に、リスクの方もちらつかされては、賛同できるわけがない。

そもそも魔理沙達にこのようなことを頼んだ当人である美鈴といえば、睨むような眼つきでじっと前の方を見ているばかりだった。
返答を待っているのだろうか？

が、そんな美鈴が満足のいくような返事をするものは、ほとんどいなかった。
しかし、まったくではない。

たったひとりだけいた。
遅れてこの場にやってきていた妹紅だ。

彼女は、一歩前に踏みこんで永琳の隣に出ると同時に、こう口を開いた。

「私も、美鈴の頼みは聞いてやった方がいいと思う」

「え？」

魔理沙の驚嘆と共に、皆が一斉に妹紅の方を振り向いた。
竹林の中で寂しく生きてきたので普段あまり受けることがなかった視線に、僅かに緊張しつつ、彼女は続けて言う。
浴びせられる視線に、不死として蔑まれていた頃を思いだしそうになりながらも、発せられる声に淀みはなかった。

「別に、深い理由とか考えはない。ただ、グランチャーにしてもブレンにしても、助けられる生命なら、助けてやりたい。
アンチボディってさ。生きてる間にやれることがあるんだよ。
それをやらせてやりたいじゃない」

その言葉に、慧音が、自分にしか聞こえない声で呟いた。

「妹紅・・・」

妹紅は、無縁塚にて彼女が語った考えを、そのまま代弁していた。
それはつまり、慧音の言葉は、妹紅にとって自分の考えとして汲み取るほどに、心動かされる言葉であったという証明になるのだ。
それほどの価値が、慧音の言葉にはあったということの・・・

そして、妹紅の言葉に押されるように、傍にいた輝夜も続いた。
それは、すぐ近くにいた慧音にしても妹紅にしても、突然の声だった。

「そうねぇ。グランチャーだからって、助けてって言われて助けられる生命なら、助けてやりたいわよねぇ～」

それに魔理沙が、
「・・・そうは言うがな・・・グランチャーが生き返ったって、またあたし達と戦うだけじゃないのか？」
と、言い返してくる。
そんな彼女に、輝夜はさらに返す。

「だったらそれでいいじゃない？もう一回襲ってきたなら、その時こそ完全にやっちゃえば。

今回は特別ってことで蘇らせてやって、その次はない、ってことでさ。
私だって、やってやられての堂々巡りはする気はないわよ」

続く輝夜の声と、先程の妹紅の言葉を脳裏で反芻する中で、慧音はふと思った。
永遠の生命を得た（得てしまった）ふたりが、これほどにグランチャーの、そしてブレンの生命を尊重し、永らえさせようとしている。
生きることの辛さと恐ろしさを誰よりも理解しているであろうふたりがだ。
自分達にとっては生きることが哀しみであっても、本当のところは、生命が続くということが何よりも貴重であるということが分かっているのだ。
限りがある生命なら、その限りが来る時までは、生きていくべきなのだ、と。
不幸な運命や、暴力に負けることもなく、己の生きる時間の全てを費やしてから死ぬことは、間違いなく幸福なことであるのだ。
死というものを迎えることができなかった彼女達でも、それが分かる・・・

そう思うと、慧音はなんとしても、ふたりの考えを後押しして、魔理沙達にも認めてもらおうと考えた。
敬愛するふたりのことを、少しだけでもいいから助けたいと。
だからこそ彼女は、美鈴の頼みを聞き入れるために、輝夜の言葉に続いた。

「・・・それに、蘇らせるのはグランチャーだけでなく、ブレンもなんでしょう？
永琳にも考えが及ばないようですが、そこから生まれる新たなアンチボディは、グランチャーではなくブレンになるかもしれないんで

す。
そうなれば、私達にだって何の不利益もないでしょう」
その言葉は、確かにその通りだと感じられた。
少なくとも文とはたてにはだ。

「それもまぁ、そうですねぇ・・・グランチャーを生き返らせるなら、そりゃグランチャーになると思っていましたが・・・ブレンが一緒となれば話は別です。
いい具合にブレンにリバイバルしてくれれば、こちらに迎え入れることだってできますね」
「戦力が増えて、グランチャーともやりやすくなる・・・確率が五分か、あるいはもうちょっと低いとしても、グランチャーになる確率とどっこいどっこいぐらいなら、やってみる価値はあるわね」

それは、アンチボディをあくまで戦力として見た現実的な考えではあったが、美鈴の頼みを聞き入れようとするのには変わりなく、美鈴当人としては望ましいことであった。
が、そんな美鈴は、自分が望んでいたことになりつつあるというのに、それが信じられないといった様子で、呆然とした表情を浮かべていた。
自分から頼んでおいて、矛盾していることは否めない。
あるいは、これほどまでに、自分の願いが聞き入れることなどありえないと考えていたのか。

心変わりを始めた文とはたてに、
「あ、あんたらなぁ・・・」
と、嘆息を漏らすように言う魔理沙。
が、そんな魔理沙に対し文は、こう言ってのけた。

「どうしたんです？魔理沙さん、いつものあなたらしくない。グランチャーが蘇ったら大変だとか、小難しく考えてるんですか？そんなの止めて、一度気楽に考えてみることも大事ですよ」

「そうは言うけど・・・」

「貴方が自分のブレンを殺めようとして、それを止めた時のことを思い出してみなさいなぁ」

「ぅ・・・？」

その文の言葉で、魔理沙の脳裏に、あの時の光景が蘇ってきた。グランチャーとの過酷な戦いが度重なりほとんど忘れつつあったことを、思い出してきたのだ。

あの時魔理沙は、ブレンとオルファンの持つ危険性を恐れ、率先して彼らを殺めようとした。

しかし最終的にはそれを堪え、オルファン達を傷つけることなく、幻想郷を滅ぼすようなこともせず、彼らを銀河に還してやるためにビープレートを探すことにした。

今思えば、その事はよかったのだと思える。

ブレンとだって、わだかまりを解消して親しくなれた。

それと同じように、グランチャーを蘇らせるという願いを、聞き入れるというのか？

「・・・それとこれとは話が別だぜ」

「さぁてどうでしょう？ビープレートを探しているのはブレン達だけじゃなくて、グランチャーもなんです。

彼らが生きてるからこそ、何かが得られるってことも、あるかもし

れませんよ？」

「・・・それは、そうかもしれないけど・・・」

言っていることは、分からないわけではない。

しかし魔理沙は、自分の、そして文の考えることが、どこかで根本的に間違っているような気がした。

もっと視点を変えて考えなければ、答えを見つけられない気がする。

例え見つかっても、その答えが誤りであるかもしれない。

だから魔理沙は考えを改めた。

グランチャーのことではなく、グランチャーに乗る咲夜のことでもない。

それよりもまず、ブレンのこと、ブレンと共に生きる自分自身のことを考えた。

自分の気持ちを一度見つめ直して、咲夜もまた、同じことを感じていると、仮定することにした。

結局人間というのは、自分の身は可愛く、自分と親しい間柄だけは強く尊重できるものだ。

なら、そんなエゴイスティックな観念はそのままに、他人も自分も同じなのだと、

そう考えれば、自分が咲夜に対して、どうしてやるべきか分かるような気がした。

実際そうだった。

考え方を少し改めた途端、魔理沙はすんなりと、咲夜の哀しみを察

して、それをどうにかしてやりたいと思えた。
ブレンが死ねば、自分だって哀しいのだから。
それで、グランチャーを今まさに喪おうとしている咲夜が、哀しくないわけがないのだ。

だからこそ、グランチャーの生命を救ってやりたいとも考えられた。

それだけではない。
朱鷺子もだ。

あの時彼女が見せた表情を少しでも和らげてやる方法があるというなら、それを実行したいとも思った。

ブレンとグランチャーの両方が蘇らないことは承知しているし、その上で永琳の言う方法を実行するのが正しいことであるのか、疑う気持ちも持ちながら。

魔理沙は、諦めたように大きな鼻息をひとつ鳴らすと、こう言った。

「・・・射命丸。あたしは、あんたらのようには現実的なことは考えられない。
だから個人的に、グランチャーが好きらしい咲夜のために、美鈴の頼みを聞く」

その声を聞いた文は、彼女らしいにやにやした笑みを浮かべて、返事した。

「いいんじゃないですか？それでも」

魔理沙達が話を決めつつある中でも、美鈴は相変わらず戸惑うような表情を浮かべていた。
無理な頼みをして、断られるつもりだったのだろうが、依頼してきた主がこの有様では、どうにもならない。
彼女の方を向いた魔理沙は、固まっているその身に呼びかけた。

「おい、美鈴」

「・・・は、はいっ？」
「あたしも折れたぜ・・・いや、自分なりに熟慮を重ねた結果だ。あんたの頼みを聞いてやるぜ」
「ほ・・・本当・・・本当ですかっ？」

「あぁ・・・永琳も他の連中も賛成みたいだし、後は・・・」

魔理沙が言い終えるより前に、ようやくこの場に加わったさとりが、声をかけてきた。
こいし達も、ヤマメ達も一緒だ。
後は彼女達がさらに賛同してくれれば、それはつまり、ほとんど地底にいるブレンパワードに関わる者達の総意と同じこととなる。
霊夢の賛同も必要なのだろうが、生憎彼女は今もブレンの胎内にいたし、彼女の場合は賛成も反対もせずその場の流れに付き合うだけだろうから、数には入れないでおく。

「魔理沙さん」
「あぁ、いいところに来たぜ。実は・・・」

さっそく事情を説明しようとする魔理沙だったが、さとりに対してはその必要すらなかった。
なんせ、説明しようとする魔理沙の心が読めるわけなのだから。
彼女は、魔理沙が言い始めるよりも前にこう応えてきた。

「分かっています」
「お、そうか。こういうところでは、さすがさとりってことか・・・」

「お姉様？」

が、さとりには分かっていても、今の今ここに来たこいし達にはさすがに分からない。
他の者達には、心を読むような能力はないのだから。
だから、そんな皆に対しては、さとりの方から改めて事情を細かく説明することにした。
結局のところ話さなければいけない手間はあるわけだったのだが、その手間をわざわざ被ってくれるあたり、さとりもお人よしがすぎる妖怪だった。

彼女の口から事情を聞いたこいし達とヤマメ達は、特別何も言わず、黙り込んでいた。
しかしそれは、考えを巡らせているためではないようだった。
むしろその逆に、考えが決まり切っているから、考えることも、話し合うようなことも必要なかったのだ。
そしてその、皆が一様に持つ心の全てを、さとりは感じ取っていた。

説明を終えた彼女に対し、
「どうだ、あんたは？」
と聞く魔理沙に、さとりは振り向いた。

彼女だけでなく、彼女の周りにいた妖怪達も、魔理沙の方を向く。
その眼は、皆一様に違う形をしていたが、その奥底に宿るものは同じだった。

やはりだ。
彼女達は考えるまでもなく、ひとつの想いの下、寸分違わない意見を持っていた。
そしてそれが何なのかは、魔理沙にも察することができていた。

その上で、言葉に発することでようやくそれが確実なものになるのを知っているからこそ、さとりは口を開いて、こう応えた。

「私達も、グランチャーとブレンを、救ってあげたいと思います」

第十六話　その2

思った通りのさとりの言葉に、魔理沙はこう返した。

「だろうな・・・よし、じゃあこれで決まりってことだな」

と、その声に続いて、ヤマメが声を挟んできた。

「ちょっと待ちなよぉ、あたし達は無視かい？」

「無視も何も、あんたらだってどうせさとりと同じ意見なんだろ？」

「まぁ、そうだけどさ」

ヤマメの声にパルスィが続く。

「私達は、ブレンとグランチャーの戦いは、妬ましいけど正直いってよく分からないわ、だからブレンもグランチャーも、どっちも好意的に見ることにする」

「なるほどなぁ・・・」

ひとまずこれで、こちらの意思は決まった。

となれば、今既に死につつあるグランチャーとブレンを救うためには、一秒も早く行動する必要があった。

永琳が、この場を取りまとめるように言う。

「なら、これからすぐにでもブレン達を連れて出発しましょう。紅魔館にいるグランチャーを魔法の森まで連れていくの」

それに、さとりが

「えぇ」

と応えつつ、こいし達に対して呼びかける。

「今度は一緒に連れていけられないから、ここで待っていてね」

「うんっ」

それを端から聞きつつ輝夜の方も、妹紅と慧音に対しこう言った。

「悪いけど、あんたらは今回はお留守番ね」

が、その声に妹紅はこのような、意固地と呼べてしまいそうな返事を返してきた。

「いや・・・今回も一緒にいくよ」

「はぁ？」

輝夜は思わず、素っ頓狂な声を上げた。

そうして妹紅は、さっき彼女を連れて無縁塚にいったのと今とでは、事情が違うということが分かっているのか、と疑いたくもなった。

咲夜のグランチャーを朱鷺子のブレンと出逢わせるためには、どちらかをもう片方のところに連れていかなければならないのだ。

しかし、どちらもほとんど自力では動くことができないのだから、ブレンで運んでやらなければならない。

だから、悠長に誰かを手のひらに乗せているような余裕はないのだ。
そんなことは妹紅も当に承知であると思っていた輝夜は、それでもこのようなことを言う彼女に、呆れ顔を浮かべながら返した。

「あのねぇ。今度はあんたみたいなのが付いてきたところで邪魔なだけで・・・」
「いいじゃないか。ブレンの身体には乗らない。私だって空は飛べるんだ、勝手に後を追わせてもらうさ・・・駄目だとは言わせないぞ」

「・・・・・・」

妹紅の固い口調に、輝夜はそれ以後何も言い返せず、しばらくの間黙りこんでいた。

彼女だって、呆れながらも、妹紅が胸中で考えていることはなんとなくだが理解できる気がするのだ。
グランチャーのこと、彼の者達の生命のこと。
それは妹紅にとっては、遠くから眺めるのではなく、すぐ目の前で、肌で感じなければいけないことなのだろう。

ようやく口を開いた輝夜は、辟易(へきえき)した様子でこう返した。

「分かったわよ。何なりと勝手にやってなさい・・・まさか、慧音も一緒にくるってんじゃないでしょうね」

釘を刺すような声に、慧音が苦笑いしながら応える。

「あ、いえ、今回は、私はここで待っています・・・朗報を心待ちにしています」

「あ・・・そ」

さとりや輝夜達の様子を見ながら、魔理沙もまた、永琳にこう呼びかけていた。

「あんたは一緒に来てくれた方がよさそうだ。グランチャーとブレンを助ける方法に関しては、言いだしっぺはあんたなんだからな」

「えぇ、そりゃあね。途中で何かもっといい方法が思いついたら、その都度言うわ」

こう返事した永琳は、それ共に、まだ戸惑いながら固まっていた美鈴に対しても呼びかけていた。

「美鈴さん。貴方にも、私達と一緒に来ていただきましょう」

「えっ？」

「なんでだ？」

その言葉には、美鈴は当然として、魔理沙の方も驚いていた。自分がさっき言った台詞をもう一度使うとするならば、美鈴こそまさしく言いだしっぺである。

だが、はっきり言って彼女にはグランチャーのためにしてやれることなど何もない。

だからこそこの地底に泣き寝入りしてきたのだ。

なら、彼女を連れていったところで意味はないし、むしろ邪魔なだけだ。

なら、大人しくここで待っていてもらった方がいいのではないか？

と考えていた。

が、そんな魔理沙に対しては、傍にいたにとりの方から説明した。
彼女の方は、永琳が何故美鈴を連れていこうとしているのか理解できていたようだ。
恐らく、少し前に彼女が言ってくれたことが関係しているのだろう。
思い返してみれば、まだそのことを皆に伝えていなかった気がする。
だから魔理沙は、永琳の言葉がとんと理解できないのだろう。

「永琳さんはねぇ、オーガニックエナジーってのは、いくつも重なれば重なるだけ、どんどん高められるものだと考えてるんだよ。
それは、アンチボディ同士・・・それだけじゃなくて、胎内に乗るヤツの数でも決まるんだ。
さとりちゃんと他のみんなを乗せたサトリブレンの調子も、良さそうだったろ？あんな感じにね。
もちろん、エネルギーの波長があってないと駄目だけどね。逆にオーガニックエナジーは乱れて弱くなる。
でも、波長さえ合ってれば、オーガニックエナジーはひとりがふたりに増えるだけでも、凄く強くなる。
だからつまりねぇ、美鈴を連れていくのも、そういうことじゃないかな。
波長が合うんだよ、きっと」

その声に、永琳が改めて続ける。

「えぇその通り・・・・・・美鈴さん。貴方の心は、咲夜さんと同じものだと感じました。
もし貴方方お二人が、グランチャーを救いたいと強く願っているのなら、二人一緒に胎内に入って、彼の力を出来るかぎり強めていてください。

そうしなければ、移動している間の疲労と生命力の乱れで、グランチャーは死んでしまうかもしれない」

「し・・・死んで・・・っ」

美鈴は、永琳の語るその表現の恐ろしさに身を強張らせながらも、それと共に、彼女の語ったもうひとつの言葉を、脳裏で幾度となく繰り返していた。

自分の心は、咲夜と同じ。

グランチャーを救ってやりたいという考えの下では、ひとつとなれている。

・・・本当にそうなのだろうか。

グランチャーと、そして咲夜のために地底へと転がり込んできた美鈴であったが、グランチャーを蘇らせようとするこの依頼のことは、彼女にはまったく伝えていなかった。

だから咲夜はまだ、今こうやって、地底の者達がグランチャーを助けようと心に決めていることも、分かっていないのだ。

そうしていざ実際に美鈴の眼の前にいる者達が咲夜の下に訪れ、グランチャーを助けると伝えた時、彼女はどうするのだろう。

美鈴は結局、この期に及んでも不安を覚えてしまっていた。

彼女は根本的に、信念を貫くということができない性質なのかもしれない。

というのも、今この時に関しては、彼女の思考の全ては、咲夜のための行為に帰結していた。だがその多くは結局、彼女のためにはならなかったのだ。

むしろ逆に、彼女を哀しませる結果となってしまった。

今回も、そうなるのではないかと思えたのだ。

だが、無心となって地底に向かうその前に咲夜が見せたあの涙を、美鈴は信じていた。
そこから感じたものは間違いなく、美鈴の独りよがりな解釈でも、自分の心を押し隠した咲夜の体面でもなく、彼女の本当の心を美鈴が受け止めたものであるはずだったのだ。
それを信じて行動すれば、今度こそ・・・今度こそ過ちを犯さずに済むはずなのだ。

そう強く念じながら、美鈴は胸中の不安をかき消した。
・・・そして今度こそ、咲夜の心からの笑顔を見るのだ。
寂しさを感じさせる気遣いの笑みなどではなく。本当の、心からの笑みを。

・・・見れるはずだ。

にとりからの説明を聞いた魔理沙が、腕組みをしながら言った。

「ん・・・そういうことなら、あんたにもちょっとぐらいは働いてもらおうかな。なあ、美鈴」

呼び掛けてくる声が、美鈴には聞こえなかった。
余りに深く思慮しすぎて、他のところに意識が向いていなかったのだ。

「・・・・・・」

こちらの声に何一つ反応せず黙り込んでいる姿をみれば、さすがの

魔理沙もむすっとして声を荒げる。

「あのねえ美鈴さーんっ！？」

「え、あっ？は、はい・・・？」

「あんたも一緒に行こうっていうんだよ。来てくれるんだよな？」

「あ、あぁ。それはもちろん・・・ありがとうございます、みなさん」

気を取り直して魔理沙の声に応えつつ、深々と頭を下げる美鈴。

そんな彼女に、続いて永琳が呼び掛ける。

「念のために言うけど、必ずグランチャーが蘇るというわけではないから、失敗しても恨まないでね」

それには、いつもの（というわけではないが）固い顔を浮かべて応える。

「それは、分かっています」

再び魔理沙が言う。

「そういうこったな・・・そういや、朱鷺子にだってちゃんと話をつけないとな。

あいつが嫌だって言ったら、結局生き返らせることなんてできなくなるぜ」

「朱鷺子・・・貴方方の言う魔法の森のブレンパワードの宿主ですね？」

「そうだ。咲夜のグランチャーがやっつけたな・・・あの時は、あたし達も悔しかった」

「す・・・済みません」

「気にするなよ。今はまた別だぜ。ただ、そういう気持ちがあったっていうのは、分かってて欲しいぜ。

それに、朱鷺子が自分のブレンを傷つけた相手と会えば、怒るのも仕方ないだろうぜ？

そういうのを受け入れる気持ちってのは、あんたにしても咲夜にしても、できてるんだよな？」

「・・・・・・それは・・・」

美鈴は、もうひとつ考えの及んでいないところがあることに、今気がついた。

が、それは仕方がないことでもあった。

美鈴の頭の中では、グランチャーを蘇らせるために、ブレンも関わってくるとは思いも寄らなかったからだ。

何も知らないままの咲夜に、突然グランチャーを蘇らせると伝え、自分達が倒したブレンの宿主から憎悪の視線を送られる？

それでいいのだろうか。

美鈴はこの時ばかりは、何をするにしても自分だけで考えて行動してしまう自分を恥じた。

彼女の気持ちを理解できているとはいっても、結局咲夜と相談することをしなかったのだから。

彼女は魔理沙の言葉に何とも応えることができず、ただ俯いて黙り

こんでしまっていた。
それを見た魔理沙が、呆れたように言う。

「まったくさぁ。こっちはもう決めたんだぜ？あんたの方が決まってないんじゃ、どうにもならないじゃないか」

「わ、分かってますよ・・・」

言い返しつつ、美鈴はもう一度考えた。

確かに、咲夜の意見は聞かないままにここまで来てしまった。
しかし今度こそは、彼女だってグランチャーが生き返ることを望んでいるはず。
死んでほしくないと、心の底から言ったのだから。
なら、ブレンの宿主と対面し、鋭い視線を浴びせられるようなことになっても、大丈夫なはずだ。
彼女は、芯の強さに関しては、美鈴などでは到底及ばないのだから。
こういうことを考えることもまた思いこみなのかもしれない、ということも分かってはいるが・・・

なにより、こうやって悩んだり、あるいは戻って話し合いをしている間に、グランチャーはさらに弱っていく。
下手に時間をかければ、蘇ることができないほどに弱り、果ては死んでいくかもしれない。
一度こうやって心に決めた以上、決断と行動は早くなければならないのだ。
いざ咲夜の下にいった時、彼女がグランチャーの復活を拒むのなら、それで終わる話だ。
もちろんそんなことはないと信じているが。

尚も黙りこんでいた美鈴に、永琳がさすがに訝しむような声で聞いてくる。

「もしかして貴方、事前に何も決めていなかったの？」

その声に、美鈴はすぐに顔を上げると、黙るのを止めて口を開いた。

「いえ、そんなことはありません。ちゃんと咲夜さんとも話を決めています。魔理沙の言ってた覚悟だって、決まっています」

彼女は、実に平然と嘘をついた。

しかしそれは、半分は嘘ではないはずなのだと、彼女は信じていた。

とにかく、彼女がこう応えれば、最早この場でいろいろと話し合う必要はなくなった。

さとりが徐にこう言う。

「それでは、早速行きましょうか・・・永琳さん、詳しいやり方とかは、移動している間に説明していただきます」

「えぇ。難しいことじゃないわ」

「さて、いこうかしらねぇー」

永琳の返事に輝夜が続き、彼女達は、咲夜のグランチャーを救うべく各々のブレン達の下へと再び赴き、地底から出ていくことにした。

こいし達にはこの場に残って、こちらの帰りを待っていてもらう。

と、一同が各々のブレンに向かって歩き出す寸前、美鈴が急にこん

なことを言ってきた。

「頼み過ぎだというのは分かっているんですが、後もうひとつだけ、頼みたいことがあります」

「なんだよ？」

と聞いてくる魔理沙に対し、美鈴は眼に見えて沈んだ表情を見せながら応えた。

「その・・・私が貴方方にグランチャーを殺めるように頼んだことは、絶対に咲夜さんには言わないでほしいんです」

「・・・・・・」

魔理沙は咄嗟に、嫌だと応えそうになったが、そこをどうにか堪えた。

他の者達も、さすがにこの頼みを聞き入れるのはどうかと思った。

自分が播いた種でグランチャーが傷つき、そこから出た死の芽を摘み取るようにこちらに頼んでおきながら、その当人が、自分の犯した罪を告白することを放棄している。

いわば、罪の贖いをすることを拒絶しているというのだ。

それこそ、あまりにも無責任だ。

だからこそ、そんな頼みはくそ喰らえと言いたくなるが、それでも魔理沙は、そしてさとり達は、その言葉を実際に言う事はなかった。

今になって、美鈴がまだ紅魔館の者達に事実を明かしていないことが分かったのだが、その気持ちだけに関しては、理解できないこともなかったからだ。

誰だって、愛する者には嫌われたくないだろう。
その気持ちが分かり、そして分かるからこそ、美鈴の言う通りにしてしまうのが、ブレンがもたらした優しさであったわけだ。
それは客観的に見れば、自分達自身、単なる甘さなのだろうと判断できる優しさだった。

だからこそ、魔理沙よりも前にさとりが、美鈴に対してこう応えた。

「・・・分かりました・・・・・・誓って、何もお話ししません」

それを聞いた美鈴は、きつく眼を閉じ、自分の情けなさを恥じるような表情を浮かべ、
「ありがとうございます・・・」
と応えてから、深く頭を下げた。

気を取り直し、改めて各々のブレン達の下へと歩み寄る。

今はもう、未の半刻（午後三時）ぐらいだ。
一日が終わるまでには、やることもすべて終わらせられるだろう。
やることをすべて終わらせて、それでグランチャーとブレンの生命が救われ、新しいアンチボディが生まれるのかは分からない。
そして、もしそうなったとしても、それがいい結果を呼び寄せるかどうかさえ、はっきりとはしていない。

今日この日の半分は、死んでいったブレン達の姿を見、そして残り半分は、まだ死なずに済むアンチボディの生命を繋ぎとめる。
まったく異なるようで、その実ほんの小さなずれがひとつあるだけのこのふたつの事柄を短い間に続けて体験する。

そのことが、因果でないと感じられるわけが、さとり達にはなかった。

※

魔理沙達と美鈴が言い合っている間、霊夢はブレンの胎内でひとり夢の中だった。
どんな夢を見ているのかは言わないが・・・
当然、その話し合いももう終わり、彼女らがブレンに乗り込んでいることも分からない。

「ぐぅ～・・・むにゃむにゃ・・・うわぁー、お賽銭がこぉんなに・・・ぐぅぅ～・・・」

鼻ちょうちんを膨らませながら眠りこけっていた霊夢だったが、そんな中、スリットウェハーの中を突然、大きな声が反響した。
魔理沙の声だ。

（霊夢、起きろよ・・・・・・霊夢っ・・・れーいーむっ！）

「ふがっ！・・・あぁっ？お、お賽銭がっ・・・・・・・・
夢か・・・・・・夢・・・かぁ・・・」

突然響き渡った大声に、鼻ちょうちんを破りながら飛び起きた霊夢は、夢の中ではたんまりとあったはずの賽銭が突然消滅したことに

混乱しつつ、今まで見ていた夢のような光景がまさしく夢そのものだったことに気づき、無念の涙を流した。

が、そんなことはお構いなしに、魔理沙が続けて呼びかけてくる。

（起きたみたいだな。これからもう一度、外に出ていくぜ）

「もう一回？どうしてよ」

（美鈴の奴が来てな。咲夜のグランチャーを生き返らせてくれって頼んできたんだ。
で、あいつがあまりに真剣に言ってくるもんだから、あたし達もそれを聞き入れて、助けにいくことにした）

そう伝えてから、さらに、朱鷺子のブレンのことを初めとして、先程中庭で話していた大体のことも霊夢に説明した。

その説明を受けた霊夢は、気だるそうに大きなため息をひとつついてから、応えた。

「はぁ～あぁ・・・私が寝てる間に、またすごいことを決めてたわねぇ」

（あんたは寝てたからな。で、どうするんだぜ？）

「もうちょい寝てていい？」

（駄目だよ。グランチャーを運んでる最中に、早苗達がまた襲ってくるかもしれない。そうなった時にやられないために、あんたにも来てもらうぜ）

「・・・グランチャーを助けるくせに、グランチャーに襲われることを気にするなんてねぇ～。助けたグランチャーも敵になるかもしれないのよ？

そりゃ、ブレンにもなるかもしれないんだろうけどさ」

（分かってるよ。だけどなぁ、妹紅や永琳が言ってたが、あたしだって、助けられそうな生命なら、なんだろうと助けてみたいのさ。妖怪だって、死にそうだから助けてくれって頼まれたら、さすがに介抱してやるかもしれない）

「私はやっちゃうけどね」

（いや、そりゃあんたは仕事だろうからそうだけどさ。あたしとしては、助けずにそいつがそのまま死んだ、なんてことになれば、夢見が悪くなっちゃうからな）

「ふぅ～ん。まぁ、それもそうね」

（ん、それはそうとしてだな。あんた、来てくれるよな？）

「仕方がない。さっさと終わらせるなら、ついてくわよ」

（晩飯が待ち遠しくなるころには、帰ってこれるさ・・・・・・ん？）

そんなことを話し合っている間に、サトリブレンとカグヤブレンが先んじて中庭から浮き上がり、地上へと向けて移動を始めていた。月明かりの色のブレンの隣では妹紅が、身体から炎を吹き上げながら後に続いている。

それを見た魔理沙は、

「それじゃ、いくか」

と霊夢に呼びかけてから、マリサブレンの手のひらに乗っている永琳と美鈴のふたりにも呼びかけていた。

「いくぜ、いいだしっぺのお二人さん。上手くいかなくてもしょげるなよ」

そうして、マリサブレンとハクレイブレンの二体も、先んじて動き出した二体を追うように、中庭から飛び発っていった。

※

一日は早いと考えてしまうと、本当に早くなってしまうものだ。

少し前には、太陽が頭上で輝いていたはずのに、今ではもうそれも、西の空へと傾きかけていた。

空も段々と、青というよりかは黄色・・・ゆくゆくは赤へと変わりつつある。

紅魔館の、グリニッジ天文台には到底及ばないだろうが荘厳な雰囲気を持つ時計台は、午後の四時から少しだけ過ぎるぐらいのところを指し示していた。

今のところやるべき仕事をひとしきり終えた咲夜は、最早何の迷いもなく、グランチャーの胎内にいた。

限りある、間もなく消える生命。

その短い時間ぐらいは、哀しかろうとも彼の者と共有することにしていたのだ。

正直言って、話すようなことはあまりなく、ほとんど無言の時間ばかりが過ぎてくのだが、その無言の時間こそが貴重であったのだ。

スリットウェハーにもたれかかって座りながら、何もいわず、ただその場にい続けていた咲夜。
そんな中で彼女は、ようやく外の景色も映し出せるようになった壁面から見える庭から、バルコニー下に続く道を歩く人影を見た。
こあだ。
グランチャーが寝ている姿勢であるため、股の間から見るような形になっていたが、彼女の姿はよく見えていた。

彼女が館の外に出て歩いていること自体は何もおかしなことではないのだろうが、今回ばかりはその様子がどこか変だった。
なんというか・・・怒っていたのだ。

大股で歩くその姿からは、ずんずん、と大地を踏みしだく音まで聞こえそうなほどだ。
遠目からでも、私は怒っていますと自己主張しているのがありありと見えていた。

「何事かしら・・・」

グランチャーも聞いているのだからひとりごとではない言葉を発しつつ、こあの姿を眺めていた咲夜。

そんな中でこあは、グランチャーのすぐ前にまで来たところで、これ見よがしに両腕を上に突き出して、全身で声を発するように叫ん

だ。

「いい加減にして欲しいです！んもぅ怒りましたよぉーーっ！」

その声は、館の中のレミリアやパチュリーも驚き、何事かと思うかもしれないほどの大音響だった。

やはり、彼女は怒っていたのだ。

にしても、すごい怒りようだ。

普段のこあならあまり見せないような姿だった。

一体何が起こったのだろうか。

どうしても気になった咲夜は、グランチャーに胎内の装甲を開けさせると、そこから外に出て、彼の者の身体から降りる。

そうしてそのままこあの方に駆け寄りながら、呼びかけていた。

「どうしたの？」

咲夜の声にびっくりしつつ、彼女がグランチャーと一緒にいることは予想できていたためすぐに落ちつきながらこあは、珍しくぷんぷんした顔で応えた。

「美鈴さんが、またいなくなったんですよっ」

「またなの？」

「えぇ、館中のどこを探してもいないんです。もしかしたらと思って不安になって正門を見に行けば、案の定ですよっ。

戻ってきてくれたと思ったのに・・・

折角こっちが心配してるっていうのに、そんなこともお構いなしに、どこへなりと消えちゃって・・・もう知りません！」

そういえば、この前美鈴がいなくなった時も、こあは右往左往としていた。
そのことを思い出す。
一緒に館の外の森の中、美鈴を探したのも、まるで昔のことのようだ。

「まぁまぁ・・・」
とこあをなだめながら、咲夜は追想することもやめて考えた。

美鈴は一体また、どこに消えてしまったのだろう。
何かやることがあるというのか。
この前のことがまだ続いているから、それを終わらせにいったのか？
にしても、それならどうして一度戻ってきて、手紙まで出してこちらと会ったのだろうか。
やることがあるなら、そんなことをする必要もないのに。

それとも、その時はまた、紅魔館にきてやるべきことがあったのか。
しかしそれが、こちらと会うことだと？
正直そんなことは、もう少しぐらい後でもよかったのではないか。
あるいはそれとは別に、何かやるべきことがあった？

他に何か起こっていたことといっても、何もないような気がする。
もちろん、ブレンの襲撃という事態はあったが、美鈴に限ってそれに関わっていることなどないだろう。
なら、彼女は一体なんのために、一度こちらの下に戻ってきた？
そもそも、彼女が仕事を放りだしてやるべき何かとは、一体なんなのだ？

何ひとつ分からないことが、咲夜に漠然とした不安をもたらしていた。
が、そんな確証もない不安を感じていることは不衛生的だ。
彼女はひとまず考えることはやめて、美鈴のことだからまたその内戻ってくるだろうと、脳内で結論づけることにした。

怒りが冷めやらぬ様子のこあも、続けて落ちつかせる。

「まぁ、そんな怒りを私にぶつけたところで、無意味でしょう。そういうのは、美鈴がいざ戻ってきた時に本人に言いなさい」

「あっ、は、はい！済みません・・・」
「私には謝らなくていい」

と、その時だった。
咲夜は再び、漠然とした不安。先程とはまた違う、どこかはっきりとした感触のある不安に、ふと湖のある方向の空へと眼を向けた。

「？」

突然のことにぽかんとしつつ、こあも咲夜に釣られて空を見る。

それと同時だった。
彼女は、何故咲夜が急に空に眼を向けたのかが理解できると共に、その眼に映った光景に悲鳴のような驚嘆を漏らした。

「こあぁぁ・・・っ！？」

その悲鳴に続くように、咲夜もまた、眼を細めて呻いた。

「ブレンパワード・・・っ！」

少しだけ黄色い色を帯びてきた空に溶け込むように、自らのグランチャーをあのような身の上にした四体のブレンパワードが、その姿を見せていた。

第十六話　その3

咲夜のグランチャーを迎えに、紅魔館へと向かっていたブレン達。
それとは別に行動をしていたのが、文とはたてだ。
彼女らは、まだこちらのやろうとしていることを何も知らない朱鷺子達に事情を説明するよう、魔理沙達に頼まれていた。
その後、朱鷺子達からそれなりの返事が来た時は、そのまま魔法の森で待って、グランチャーとブレンの再リバイバルを記録してほしいということだった。

はたてはともかくとして、文にとってはこれで本日二度目の魔法の森の訪問であり、もちろん朱鷺子に会うのも二度目だ。
ほんの一刻かそこらに別れたばかりだというのにもう一度会ってしまうというのは、どうにも気恥ずかしい気分ではあるが、任されたことなのだから、まぁ、やむを得ないことだ。

少し前に来たばかりの場所なので、朱鷺子のブレンの居場所もよく分かる。

すぐに文は、はたてと共にブレンのいる広場へと降り立った。

丁度その時、香霖と朱鷺子の二人が、ブレンの胎内から出て、文達と同じように地面に降りていた。

もうそれなりに日も暮れていたし、一度香霖堂に戻って夕食でも取るつもりだったのだろうか。
とにかく、文としては都合がよかった。

再び眼の前に現れた彼女と、もう一人の天狗の姿に驚く二人の方に歩み寄りながら、文は呼びかけた。

「故あればの故が来ちゃいましたね・・・もうお久しぶりとも言いませんよ」

それに香霖が応える。

「射命丸記者じゃないか・・・またどうしたんだ?それに、そちらのは」

香霖が眼を向けて問いかけた天狗が、文と同じような笑顔を浮かべて応えた。

「姫海棠　はたてと申しますー。お見知りおきを」

「あぁ、よろしく・・・一体どうしたんだ?また何かあるっていうのか?」

続けて聞いてくる香霖に、文が、
「えぇー、そうなんですよっ。また何かあるんです。しかも今度は、貴方方にも直接関係することですよ」
と言ってから、事情を説明する。

ブレンの再リバイバルというのはかなり魅力的な響きではあるのだろう。というか、実際朱鷺子達にとってもそうだったようだ。

とはいえ、ここは清く正しい天狗の文だ。

はっきりとひとつ眼を惹く要素があるために、その裏に隠された事実が見えなくなるようなことでは、正確な情報とは言えないし、そのようなことをする・・・しかも、意図的に行うような者は報道者の風上にも置けないと考えている。

だから文は、二人に対し正確に事実を伝えるためにも、こう伝えることも忘れなかった。

「しかし、グランチャーとブレンの二体から一体を生み出すんです。それは、再リバイバルとは言っても、完全な再生だとか復活ではありません。

成功したとしても、その新たに生まれたアンチボディは、咲夜さんのグランチャーでもなければ、貴方のブレンでもない、もっと別の存在になることでしょう。

もちろん、それはひとつの可能性です。もしかしたら、貴方のブレンがそのままに復活することだってあり得ます。

だから、何が言いたいかというとですね。こちらも、一体全体何がどうなるのか、見当もつかないというのが現状なんですよ」

それに、はたてが続けて説明する。

彼女は、自分の新聞の性質が念写という、はっきり言って自分でも胡散臭く思うものを基盤にできているため、文ほどには事実というものにストイックな姿勢は持っていない。

しかし、事実を正確に伝え、あらゆる可能性を隈なく伝えることが本当の意味で物事を伝えることだと考えている点は、文と同じだった。

そういう、完璧な報道、完璧な新聞というものに、憧れる気持ちは

あるのだ。
まぁ、それができないからこそ、文もはたても開き直って、どんなことであろうと記事にしているわけだが。

「さらにいえば、そもそも私達のやろうとしていることは、成功するかどうかも怪しいんです。だから、悪い予想だっていくらでもできます。
失敗してブレンの身体がバラバラになるならまだいいでしょう。最悪、オーガニックエナジーがおかしくなって、朱鷺子さんの身に危険が及ぶことだってあります。そういうことも、否定はできないはずです。
もちろん、いい結果にも成り得るでしょう。
ですからお二人には、よく考えて頂きたいです。貴方方が嫌だとおっしゃれば、私達は、朱鷺子さんのブレンを巻き込んでまで再リバイバルはしませんから。
分かりましたね？」

はたての声に、香霖と朱鷺子は戸惑いながらも、
「分かった」
「・・・うん・・・」
と返事した。

が、話の内容は充分理解できても、そこから答を考えることがどこまでも困難だった。
朱鷺子は、こちらでどうするか決めろという文達の言葉に何も応えられず、ただ悩みながら黙りこむだけだった。

ブレンが蘇るかもしれないということだけを聞けば、すぐにふたつ返事で了承していたのだろうが、文とはたての説明は、そんな単純な結論から突き放すようなものだった。

なんせ、悪い方の可能性を示唆されれば、どんなに魅力的な話であろうと疑ってかかってしまうものだ。
成功すればそれでよし。というわけでもなく、その後に何があるのかも分からない。
失敗すれば、最悪の結果ブレン共々生命を終える。

可能性という言葉を使われれば、そういうこともあり得ると考えられてしまう。
もちろん、いい可能性というのも信じたいとは思うが、そのために取り返しのつかない結果を招いてしまえば、一体どうなるか・・・
しかし・・・

しかしと言えば、また別の可能性がしかしと首をもたげてくる。
頭の中で思考が堂々巡りを・・・終わらない思案の中での迷走を始めようとしていた朱鷺子は、いっそ目眩さえも起きそうになった。
終わりが見えない道で、遥か遠くに見える光に向かって走っているようで、その果てしない苦悩を感じてしまったからだ。

もちろん自分は、ブレンが生き返れるなら生き返って欲しいと強く願っている。
だがそのためにどうすることもできない事態になってしまうのでは、と思うと、どうしても決意を示す一歩が踏み出せなくなっていた。

しかも、文達の説明はこれで終わりではなかった。
彼女達にはまだひとつだけ、説明しておかなくてはいけないことがあった。
それこそ、朱鷺子にとっては一番重要なことであるはずだった。
そしてそれはすなわち、朱鷺子の苦悩をより一層助長するものであ

ったのだ。
深く悩み、黙り込む朱鷺子に対して、文が言う。
「追い打ちをかけるようなんですがね。まだひとつ言わないといけないことがありまして。
グランチャーと一体化すると言ったでしょ？そのグランチャーというのが、紅魔館の十六夜咲夜さんが駆る個体なんです。
貴方のブレンをこんな風にした張本人である、深紅のグランチャーですよ」
「えっ！？」
「朱鷺子のブレンをやったグランチャー、というのか・・・」
文の言葉に、朱鷺子は大きく身震いするほどに驚愕した。
香霖も、さすがに驚きを隠しきれない。
彼も、朱鷺子から件の深紅のグランチャーのことは聞いていた。
朱鷺子の表情が、みるみる怯えたものに変わっていくのが文達にはよく見えていた。
咲夜のグランチャーに対する恐怖のためだろう。
文達としても、咲夜のグランチャーが強力であることは重々承知していた。
そんなグランチャーがこの場にやってきて、ブレンとひとつになるという。
そんなことを聞けば、朱鷺子の脳裏は、そのことを頑なに拒絶する方向へと傾き始めていた。
しかしその上で、さらにはたてが言う。

「とはいえ、そのグランチャーは生きたいと強く願っているそうです。
今はもう、貴方のブレンをどうにかしようとする気はないでしょう。
貴方の決定次第では、ブレンだけでなく、あのグランチャーも、このまま死を待つだけになります。
ですが、まぁ、あの者のことを怖がるのも、よっく分かりますよ。
ですんで、熟慮を重ねた上で、お好きなようにお応えください」

「そ・・・そんなぁ・・・」

朱鷺子には、ますます分からなくなっていた。
ブレンの生命を繋げたいという気持ちがある。
だが、文達の言う通りにして本当に上手くいくという確証はない。
それに、ブレンと共に再リバイバルする相手は、ブレンを傷つけた当人であるグランチャーなのだ。
あれともう一度会うのは、怖い。

それでも、もしブレンと再びやっていけるのなら・・・
しかし・・・

思考がグルグルと、渦を巻くように回っている。
このまま頭の中が飽和して、どうにかなってしまいそうだった。

「んぅー・・・っ」

起きそうと言わず、本当に目眩が起こってしまった朱鷺子が頭を一度左右に振ると、その身体がふらふらと揺れた。妖怪に生まれてし

まえば、こうやってくよくよと悩むことなどないはずだった。
あるはずのないことを体験してしまったのだ。それに身体が反応してしまうのも仕方がないことなのかもしれなかった。

香霖が彼女の背中に手を置いて、その身体の揺れを受け止めた。

「ぁ・・・っ」

声にならない声を上げる朱鷺子に対し、彼は言った。

「僕としては、グランチャーとブレンが蘇るというのは、間違いないことだと思う」
「え？」

「へぇ～」
「何故です」

驚嘆する朱鷺子と共に、聞いてきた文とはたてに対し、香霖は、腰に提げていた袋から一冊の本を取り出して、それを文に向けて放り投げるように手渡した。
その本を受け止め、表紙に眼を向ける文と、同じく彼女の肩から覗きこむようにして見るはたてに、香霖は続けて言った。

「それは、海と大地の間にある生命始原の地、バイストン・ウェルについての伝承を語る本だ。
その他にも、この世の遍く思念の力の集合体である、『イデ』とかいうものについて語る本もある」

「・・・こんなものがあるなら、先に言ってくださいよぉ」
「っていうかこの本面白そうですね、買います。おいくらです？」

「非売品だ。しばらく僕らがブレンの研究の資料にする。ひとしきり読み終わったら、言い値で売ってあげよう。タダでもいいよ。で、その本に書かれるバイストン・ウェルの世界において、死者は妖精（フェラリオ）として新たな生を受けるそうだ。輪廻転生のようにな。それで、僕はね。意思の持つ力というものを信じてみようと考えている」

「意思の持つ力？」と文。

「あぁ。もうひとつのイデという存在は、その意思の力を選別する。純粋に生きようとする心の前には、絶対的な守護者として在り、それに反して他者の生命を虐げようとする者に対しては、絶対的な破壊者となる。
そして、宇宙から純粋な生への欲求が潰えた時、彼の者はその力を持って宇宙を滅ぼす。自分自身、意思の総意であるイデの力を以ってな。
だけどそれは、ただの滅亡じゃない。新しく生命を始め宇宙を創造するための、いわば生命の掃除であったわけなのさ」

「幻想郷にいなきゃ、信じられないような話ねぇ～・・・」とはたて。

「が、幻想郷にいれば、こういうことも信じられるさ。そして僕はふと感じたんだ。
イデという存在が、揺るがぬ視野を以って観察し、根絶やしにしたその意思の力の強大さというものを。
そして、意思から芽吹いた生命の神秘的な部分をね。
バイストン・ウェルにしたって、イデにしたって、結局最後に生命は生まれ変わる。

生命の価値を、未来に繋いでいくためだろうな。
物はあり続けることでその価値を残すが、生命は死んで、生まれ変わることでその価値を遺すんだろう。
で、だ。君らから、再リバイバルの話を聞いて、考えたんだよ。
グランチャーとブレンがひとつになり生まれ変わるのも、それと同じなんだろう、とね。
意思の力がひとつとなって、新たに転生するというね。
そういうことができるのが意思の力なんだ。僕だって、明らかに生物としての外見を持たないアンチボディを知って、そんな本を読めば、こういう不思議な力を信じたくもなるのさ。
だから、ようやく結論になるんだが、君らのやろうとしていることは恐らく成功する」

長々とした前置きの末に語られた香霖の言葉であったが、それに文は、受け取った本をぺらぺらとめくりながら、こう返事した。

「そもそもこの本、伝記と言うには物語じみてる感じがして、どうにも眉唾な話なんですけど・・・
あ、でも面白そう」

そういうことを言われると、正直香霖にも言い返せない。
彼も、この本に語られている内容が真実であるという確信は持てなかったからだ。
が、あるかどうか疑うということは、即ちあるというのが、この幻想郷の理屈なのだ。
外の世界にとって、妖怪などいるかいなかも分からないような存在だが、それが幻想郷には確かにいる。
となれば、この幻想郷でいるかいないか疑われている存在は、同じようにどこか別の世界では当たり前のようにいるはずなのだ。

そしてそれ以上に香霖は、自分達が、文達の言う再リバイバルを了承するかしないか、それを決める最良の方法があることを知っていた。

彼は、肩に手を置いたままにしていた朱鷺子に対して、もう一度呼びかけていた。

「朱鷺子。ひとりで考えるのは、そりゃ難しいだろう。なら、ブレンと一緒に考えるのはどうだ?」

「ブレンと?」

朱鷺子が、顔を上げながら聞き返してきた。

「そうだ。ブレンが生きて居たいか、そうじゃないかを聞いてくるんだ。そして、それから考えればいい。後は君が、自分がブレンのために死ぬかもしれないということを覚悟するか、しないかの問題になる」

「・・・・・・」

「それに、意思の力というなら、気をつけないといけないこともあるんだ。

仮に、いざグランチャーとブレンの生命をひとつにするとしても、どちらかがもう片方を強く拒めば、そういう意思が悪い方向に働いてよくない結果を招く・・・と、僕は考える」

「え・・・っ?」

「バイストン・ウェルの物語にしてもイデの伝承にしても、頑なに他者を拒み続けた者は不幸だった。誰もが最後は他者を拒み続けたから、皆不幸だった。

仮にブレンが生きたいと願っても、君がその気にならなくては、彼もまた、同じように不幸になるだろうな」

「また本の内容ですかぁ・・・これホントの話なのかなぁ？」

と、文が手に取った本をちらちら眺めながら冷やかしてきた。

それには、こう返しておく。

「口で伝えられたことは信じられないが、そうやって本に書かれていることは、嘘であろうと真になる。

そういう力があるのが本なんだから、僕は好きだ。

どんなことだろうと、書けば歴史になる。書くことから始めれば、僕のような甲斐性無しでも歴史を生み出せるわけだ。

文字や写真にして表すことの脅威的な効果は、君らこそよくご存知だろう？」

「まぁ、そりゃあねぇ・・・ペンは銃もよりも強し、ですよ。

――自分で甲斐性無しって言ってる・・・――」

「そういうことだ」

そうして改めて、香霖は朱鷺子に伝える。

「だから大事なのは、君の心の問題なんだろう。それを考えた上で、一度ブレンの気持ちを聞いてみるといいんじゃないか？

だけど、もし君が、ブレンを傷つけたグランチャーのことを恐れる心がどうしても消せないのなら、諦めることも必要かもしれない。

僕だって、君に何度も辛い目には会ってもらいたくないからね」

「・・・・・」

「しかし、個人的で無責任なことを言わせてもらえば・・・たまには、芯の強い朱鷺子も見てみたい気分でもあるんだ。

読書に勤しむ時の直向きさを、こういう時にも」

「・・・あっ・・・うん・・・・・・」

その声に、朱鷺子は上げた顔を再び俯けて、黙り込んだ。

そうして、もう一度考えた。

ブレンが生きるか死ぬか、それはブレンに決めさせればいい。

後は、自分がブレンと共に死ぬことを覚悟するだけだ。

いや、それも違う。

香霖は言っていた。

意思の力は強く、時にはどんなこともできると。

なら、自分の意思の力で、いくつもある可能性の中から一番いいものを選び取っていくこともできるのではないか？

いや、きっとできるのだ。

死ぬことを恐れてはいけない。

もしブレンが生きたいと願うなら、その願いを聞いて、自分がブレンを助けてやらなければならないのだ。

そして、グランチャーだ。

彼の者への恐怖を忘れて、ただ生きたいと願う気持ちに応えてやれば、きっといい結果になる。

魔法の森の上空で戦っていた時の、熱を孕んだ空気に当たる恐ろしさの中で、それでも考えるのだ。

グランチャーだってブレンと同じで、死ぬことは怖く、死を眼の前にして寂しさを感じているのなら、ブレンを傷つけたことだって、許してやってもいいのではないだろうか。

いや、許すことはさすがにできないが、ただ恨んだり、憎んだりすることはないんじゃないか？

グランチャーに乗っていた誰かだって、今、自分と同じように寂しい思いをしているのなら、その誰か・・・咲夜という者も、ブレンと共に自分が助けてやるぐらいの心を、持っていいのではないか？

みんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。

というわけではないが・・・

朱鷺子は心を決め、もう一度香霖に対して顔を上げた。

その眼を見た彼は、肩に乗せていた手を離す。

それからすぐに彼女は、香霖から一歩離れて宙に浮き上がると、再びブレンの胎内へと入っていった。

まずは、ブレンの気持ちを確かめるためだ。

そうして、自分の気持ちを決めるためにだ。

ひとりその場に残った香霖が、ブレンの身体の中に入り見えなくなった朱鷺子を、眼ではなく心で見守った。

「どうなるんでしょうかねぇ」と冷やかすように聞いてくる文には、「さぁなぁ」と適当に応えておいた。

だが、香霖は外からブレンを見ている中で、微かに感じていた。

ブレンはやはり、もう少し生きて居たいと思っている。

何故生きたいかといえば、その理由は簡単だった。

朱鷺子と、ひいては香霖と共にいたかったからなのだ。

となれば彼は、ブレンが朱鷺子になんと言うのか、ほとんど分かっ

ていた。

十分後。

ブレンの胎内から出てきた朱鷺子は、口を開くなりこう言った。

「ブレンが・・・ブレンが生きたいって・・・お願い、射命丸さん達！ブレンのために頑張ってください！」

その返事を聞いた文とはたてが、ちらりとだけ互いの顔を見合った。

それからすぐに、文が朱鷺子の声に、大声で応えていた。

「頑張るのはねぇ、貴方の方なんですよーっ？」

※

紅魔館に到着したブレン達。

その眼下には、先日倒したばかりの深紅のグランチャーの傷ついた姿があった。

そしてそのすぐ傍には、その宿主の咲夜と、こあの姿もだ。

スリットウェハーに映る二人の姿を眺める魔理沙は、思わず眉をひそめていた。

二人の顔が、憤怒の形相であったからだ。

咲夜にしてもこあにしても、鋭い目つきをしてこちらに向かって何かを叫んでいる。

この位置からでは何を言っているのか聞き取れないが、好意な台詞を言っているとはどうにも考えられなかった。

美鈴は、彼女達にも事情は伝えていると言っていたはずだが、あれはどう見ても事情を知っている態度ではない。
こちらを未だに敵としてみなしている態度だ。
もしかして、こちらがグランチャーにトドメを刺しにきたとでも考えているのではないか。

となると、美鈴が事情を伝えていたということも本当かどうか怪しくなってきた。

魔理沙は咄嗟に装甲を開き胎内から出ると、手のひらの上の美鈴を問いただしていた。

「どうしたんだぜ美鈴。なんで咲夜はあんな怒ってるんだっ？」

それに美鈴は、申し訳なさが一周回って泰然自若とした態度で応えた。

「申し訳ないです。本当は私は、あの人に何も説明してませんでした」

「お、おいおい・・・」

その返事に呆れ顔の魔理沙であったが、正直いってこのことは予想できていないわけではなかった。
が、それはそうとして、今も眼下に見える咲夜の怒りようだ。
こちらに向かって叫ぶようなことはしていないが、鋭く睨んでくるその眼つきには、魔理沙も思わず息を呑む程だった。

「咲夜があれじゃ、グランチャーを連れていくどころじゃないぜ。どうするんだよ」

思わずそう呟くが、それには、再び美鈴が返していた。

「私に任せてください。事情を説明してきます」

「できるのね？・・・説得もよ？」と永琳。

「できる・・・と言いたいです」

「なら、任せるわ」

「はいっ」

潔く返事すると共に、美鈴はブレンの手のひらから、咲夜の下へと跳び降りていった。

※

咲夜にとっては、二度目の衝撃が来る。

突如現れたブレンパワードの内の一体から、美鈴が降りてきたからだ。

咲夜の脳裏では、何故という疑問の声が。一体どれほど過ぎたのか分からないほどに無数に、そして高速で通り過ぎていた。

そんな中で、何か、知ってはいけないことを知ってしまいそうな、

言いようのない不安もあった。

こちらの眼の前にゆっくりと降り立った美鈴に対し、咲夜は、脊髄反射的に問うていた。

「ど、どうしたの美鈴・・・あのブレン達はっ？何故貴方があの者達と・・・っ」

「聞いてください咲夜さん。あの者達が、グランチャーを蘇らせてくれるかもしれないんです」

「えっ？」

「美鈴さん、なんてっ？」

さすがの咲夜も、頭の中が混乱しそうになった。

あまりにもいろいろなことが起こり、いろいろなことを聞かされ過ぎたからだ。

しかもそれらの全てが、一度見ただけ、聞いただけでは、信じることすらできないようなことばかりなのである。

いかに咲夜でも、冷静さを失いそうになっていた。

「美鈴、貴方・・・っ」

最早どういう顔をすればいいのかも分からず、喚くしかなかった咲夜に、美鈴は彼女らしい固い視線を送りながら、はっきりと言った。

「私がここから去ったのは、地底のブレンを駆る者達に、グランチャーを蘇らせる方法がないか聞きにいったからなんです。

そしてあの人達は、そのために動いてくれると言ったんです」

「そんな・・・馬鹿なことが・・・・・・グランチャーに止めを刺

しに来たんでしょうっ？」
「違いますよ。残念ですけど、もう既に死につつあるグランチャーに、止めを刺す必要はないでしょう？」
「・・・グランチャー・・・グランチャーを蘇らせると言ったわね。本当なの？」
その問いを聞いた美鈴は、改めて咲夜に対し、魔理沙達がやろうとしていることを細かく伝えた。
それを聞いた咲夜は、呆然とした表情を浮かべて、こう呟くばかりだった。
「そんなことが・・・できると？」
「それは分かりません。でも、可能性はあるんです」
未だに、戸惑いは隠しきることができず、そもそも美鈴がブレンパワードの手元から降りてきたことだって、まだ現実ではないのだという意識が微かにある咲夜だが、少しずつなら落ちついてきていた。
美鈴の言っていることも、大まかにではあるが理解できた。
納得できるかどうかは、また別として・・・
「魔法の森のブレンパワードとひとつになり、新しく生まれ変わる、と言ったわね・・・」
「はい・・・しかも、貴方とグランチャーがやった者です」
「そんなブレンパワードと、グランチャーが一緒になると・・・討った者と討たれた者がひとつに・・・？」

咲夜のその訝しげな声には、俄には信じられないという理性と、自らが傷つけたブレンに対する幾分かの罪悪感が込められていた。
ブレンは敵である。
しかし、グランチャーが傷つき倒れた今、魔法の森で戦ったあの者の気持ちも、理解できないわけではなかった。
そんな咲夜の声に、美鈴が応える。
「・・・理解しがたい話だと思います。正直、私だって不安はあります」
「ならあの者達がここに来るのを止めればよかった・・・っ」
やはり、未だにブレンに対する敵対心を完全には捨てられていない咲夜が、上空にいるブレン達の方に手を向けながら、呻くように言った。
「いえ、そうはいかないんです。私は・・・その・・・咲夜さんがグランチャーに生きていて欲しいと言ったから・・・そのために方法を探していたんです。
でも、私ひとりで考えたところでその方法が見つかるわけがないし、お嬢様やパチュリー様を馬鹿にするわけではないですけど、ここの方達がどれほど考えても、グランチャーを救ってやることはできないでしょう。
でももしかしたら、同じアンチボディを駆る地底の方達ならと思ったんです。
だから私は、地底に赴きました。そして実際、彼らはグランチャーを救う方法を考えていたんです」
「でもその方法は・・・っ」
「危険なものであるのは承知しています。でも、成功する可能性だ

ってあるんです。
グランチャーが本当に蘇るわけでもなくて、もっと別のアンチボディが生まれるかもしれない可能性もあります。
でも、死にゆくグランチャーの生命を繋いで、遺していくことができるんです。
あいつの魂だけでも、この世に残っていくかもしれないんです。だったら私は、その可能性にどうしても縋(すが)りつきたかった・・・」

「・・・貴方は・・・？」

咲夜は、美鈴が恐らく自分以上にグランチャーに生きて欲しいと・・・そうでなくとも、せめてその死を無価値なものにして欲しくないと思っていることを、再び感じた。
それと共に、自分の中にあるグランチャーへの想いを。

その時だった。

突然頭上から、大きな声が響いてきた。

「十六夜　咲夜さんですねっ？」

その声は当然ながら、美鈴のものでもこあのものでもなかった。
咲夜としては、何度か聞いた覚えのある声だ。
そう・・・薄紫のブレンに乗り、甘ったれた考えをこちらにぶつけてきた、地底の妖怪。

咲夜は、声のした方向を仰ぎ見ながら、その眼に見えたさとりに向かって、視線を送っていた。

鋭利な光の中に僅かな温もりのこもった、何者よりも紅い血潮の通った、人間の成すその眼で。

第十六話　その４

傍らに降りてきたさとりに対し、咲夜は、一度グランチャーに乗ったが故にどうしても消すことができない敵対心をもって、噛みつくように言い放った。

「何をしに・・・・・・・いや、貴方達のやろうとしていることは知った・・・
よくものこのこと来れたものね」

それにさとりは、気負うことなく、咲夜の顔を真っ直ぐに見返しながら、はっきりとした声で応えた。

「私達も、美鈴さんが頼んでこなかったらここには来なかったでしょう。
咲夜さん・・・あの時、貴方のグランチャーと一緒にここまで帰ってきたのと同じように、もう一度貴方達を助けようと思います」
「それを信じろとでも・・・」

「はい・・・信じて頂きたいのです・・・・・・・それと、今言うべきことではないのかもしれませんが、私は貴方に、伝えたいことがあるのです」
「伝えたいこと・・・？」

「はい。ブレンとグランチャーというのは、根本的なところでは同じ、アンチボディです。

そしてこのふたつは、元々はお互いに分かり合って、仲良くなりたいと願っていたのです」

「またそういうことを言う・・・感傷的なのは悪くはないけど、事実を捻じ曲げるわけにはいかないでしょう」

咲夜は冷ややかに言い返した。

実際にグランチャーとブレンパワードは、生命をかけて戦っている。どちらかを滅ぼすためにだ。

それで、本当は仲良くなろうとしていると聞かされても、信じられるわけがなかった。

案の定というべきか、さとりのこのセンチメンタルな発言を、咲夜はいっそ嘲笑したい気分にさえなった。

グランチャーが万全の状態なら、実際そうしていただろう。

しかし彼女は、そうしなかった。嘲笑う顔を浮かべようにも、浮かべられなかった。

咲夜も、グランチャーの死に際して、センチメンタルな気分がどういうものであるのかということを、ある程度なら理解したのだから。

そしてさとりは、咲夜のこの冷ややかな声に、眼の色ひとつ変えず、固い眼差しを返しながら、さらに返してきた。

その声音は、確かにさとりのものであったのだが、咲夜は以前聞いた彼女の声とは何かが違うことに気が付き、その変化に僅かに戸惑った。

「貴方ならもうお気づきかもしれませんが。グランチャーにもオルファンと呼べる存在はいます・・・母なる存在です。

そしてオルファンは、この幻想郷の外、しかも、あの空の遥か彼方を旅していた、宇宙船なのです」

「・・・・・確かにそれは、分からない話ではない」

咲夜も、ブレンパワードにオルファンがいるなら、グランチャーにもいるのだろうということは考えていた。
確か、パチュリーもそう考えていたのではないだろうか。
そして、オルファンが銀河を旅する飛行船であるということも、まったく見当がつかない話でもない。
素材と方法と運さえあれば、この幻想郷から月まではいけるのだ。
外の世界になら、銀河を渡る船だってあるのだろう。
それがオルファンなのであるということも、幻想郷にいれば素直に受け入れられることだった。

が、さとりが何故そんなことを確信を持った顔で言えるのか、咲夜には分からなかった。
嘘をついていると疑うわけではないが、眉をひそめた彼女は、さとりに対してこう問いただす。

「しかし何で、貴方がそんなことを言える?」
「オルファンの意思と、記憶の一端に触れたのです。そこで知りました」

「・・・なに・・・っ?」
「なんだって・・・っ!」

驚く咲夜　（と美鈴）に対し、さとりは、オルファンの記憶に触れることで知った、『その者』の本当の望みを語った。

ビープレートを手に入れ、銀河を渡る旅に戻る。

だがそれは、永い銀河旅行の中で出逢った、自分と同じ姿の誰か・・・始めての出逢いから来る不安によりすれ違い、溝を作ったまま離れ離れになってしまった誰かともう一度出逢うためだ、と。
そのためにオルファンは、ビープレートを探すために人間を利用することにした。

が、それだけではない。

さとりは語る。

「オルファンがブレンパワードと私達を共生させる理由は、きっともうひとつあると思うのです。
人間も妖怪も、力の使い方を知らない驕った存在です。ですがそれは、他の生物にはない知性と感性をもっていることの、証明なのかもしれません。
だから、そんな私達から、もうひとりのオルファンと理解し合えるように、感情や思念というものを学び、吸収しようと考えているのです。
そしてその感情を、どう受け入れていけばいいのか・・・」

「・・・何が言いたい。そんな話、それこそ今することじゃないでしょう」

咲夜は、もったいぶるように話すさとりに対して、不快感というわけではないが、結論を急くような気分になり、こう呼びかけた。
それにさとりが、
「分かっています」
と応えてから、ようやく本題を切りだした。

「・・・だから私達は、ふたりのオルファンが銀河の果てで仲良く

なれるように、いろいろな感情を伝えて、その対処法を教えていかなければならないのです。
ですがそのためには、まだひとつ大事なことを教えられていないのです」
「・・・理解し合うことだと？」
「はい・・・お互いに理解し合おうとしながら、理解するということが何なのか分からないのでは、どうしようもないんです」
「・・・だからその魁として、私のグランチャーと、魔法の森にいる朱鷺子さんのブレンと、仲良くなって生まれ変われと？」
「そうです」

さとりがこう応えた瞬間、彼女の肩が咲夜の両手に掴まれ、鋭い眼つきをした彼女の顔が、眼の前にまで迫っていた。
同時に咲夜は、低く唸るような声で言う。

「そ・・・そんな話が、信じられるわけがっ・・・・・・確かに、朱鷺子さんのブレンパワードには申し訳ないことをしたとは思ってる・・・
だけど、貴方のその甘ったるい考えを、受け入れるわけには・・・っ！」

そう語る彼女の心の内では、グランチャーを打ちのめしたブレン達に対する、消すことの到底できない恨みが込められていた。
そんなブレン達と理解し合う。
それは、グランチャーの誇りを尊重する心をまだ失ってはいない咲夜としては、到底認可できる話などではなかった。

そしてそういう心がある中で、自らが打ちのめしたブレンに対する罪悪感もあったのだ。
別離の哀しさも、今ならよく分かるから。

そんな感情を込めた眼光に、さとりはさすがに少したじろぎつつも、固い眼差しを揺るがせることなく、応えた。

「私達が憎いことは、よく分かります。私達だって、はっきりと貴方のグランチャーを殺めようとする意思をもっていました。だから、言い訳のしようもありません。

ですが、このことは、どうしても信じて欲しいんです・・・私達は、決してグランチャーのことを嫌いではないのです。今は無理かもしれないけど、いずれ仲良くなれるかもしれないと、信じているんです」

「・・・戯言ばかりを言って・・・っ」

さとりの言葉を、唸るような声で頑なに突き放す咲夜だったが、そんな彼女の心も、ほんの僅かに揺らぎつつあった。

こちらを見据えるさとりの瞳の奥に、自分がグランチャーから感じているものに、限りなく似通ったものがあったからだ。

誇りと呼べそうなもの。

なにがなんでも自分の意思を曲げないという、意地のようなものだ。

それは以前の、語る言葉のスケールだけは大きくて、いざこちらが反論すれば何も言い返せない、そんな弱い決意ではなかった。

今のさとりは・・・おそらく魔理沙にしても誰にしても、何かが大きく変わっている。

そしてその何かが、咲夜の心を微かに動かしていた。

彼女は、さとりの言葉を強く拒もうとしながら、無意識的に聞き入れてもいる自分がいることに、ようやく気がついた。

「もし、貴方のグランチャーに取り返しのつかないことが起こったら・・・私が、全て責任を負います。
如何様になぶって下さって構いません。殺してくれたっていいんです。
だから・・・」

その言葉にも、嘘偽りはないように聞こえた。
本当にさとりは、然るべき時には生命を差し出すつもりでいるらしかった。
つまり、はったりでも、夢見がちな妄言でもないということだ。

咲夜は、何故直接関わりのないブレンと、グランチャーのためにそこまで覚悟できるのか分からなかった。

そして確実に彼女はその、感じる限りは偽りのない覚悟の強さに、感化されつつあった。

咲夜は、突然微かな笑みを浮かべて小さく鼻息を鳴らすと、さとりに対して言い返していた。
敵対心や怨みを抱えたままで、もっと別の何かが心の中で芽生えていた。

「アンチボディの生命を繋げようとしている者が、生命を投げ出すようなことを言って、よろしくて?」
「え?・・・・・・それは、よくないとは思います・・・だから、それだけの気概があるという風にお受け取りください」

「貴方達が私のグランチャーの生命を繋げる。
・・・それを信じろというのね?」

それだけ言うと、咲夜は黙り込み、何も言わなくなった。

話に入り込むことができなかった美鈴が、ここでようやく、彼女に心配そうな声をかけることができた。

「咲夜さん・・・」

彼女の声に応えるように、しかし、美鈴に対し呼びかけているわけではなさそうな独り言を、咲夜は呟いていた。

「・・・グランチャーの言葉を聞かなければ・・・・・・いや、その必要も、もうないのかもしれない・・・」

「？」

何よりもまず尊重すべきは、グランチャーの意思だ。

そしてそのグランチャーは、死ぬことを恐れ、生きられるものなら生きていたいと願っていた。

それは、誇り高く、何事にも実直で、強さを絵に描いたようなグランチャーが始めて見せる正直な意思であるようだったし、弱さだった。

その弱い心を助けてやることで始めて、自分と彼の者の絆は、本当のものとなる。

どこか、一番大事なところでずれているような気がしていた、その絆が・・・

ブレンパワードとその宿主に好きにやらせるのは、やはりいい気分ではなかったが、結果さえよければ、連中に対する見方だって少しぐらい変えてもいいのかもしれない。

咲夜はそう考えた。

そうして彼女は、傍らに横たわるグランチャーへと振り向くと、その深紅の装甲に右手のひらを当てた。
そこにはまだ、生命の熱が残っている。
生命の炎というよりかは、最早ただの燻り(くすぶ)と成り果て、いずれは消えていく熱が。
しかし今この瞬間だけは、確かに感じられる熱。

咲夜はそれを手で触れて確かめる中で、その手のひらを伝って、身体を伝って、今しがたさとり達と話し合ったことを・・・そして、それを対する自分の気持ちをグランチャーに示した。
彼女とグランチャーの間でなら、そういうこともできるのだ。
そうして、グランチャーが返してくる思念が咲夜の肌を伝い、血潮を伝い、果ては彼女の心の奥にまで伝わってきた。

彼の者は、死を受け入れているわけでも、生きたいと願っているわけでもなかった。
そのような観念を超越して、ただひとつの意思を彼女に向けていた。

咲夜の好きにすればいい、と。

その思念に咲夜は、驚いているような、あるいはさも当然といったような、喜ばしいような、逆に哀しそうでもある、言いようのない表情を浮かべた。
しかしそれと同時に、グランチャーの言葉を受け入れることで、彼女の中での考えは固まった。

彼女は、グランチャーの装甲から手を離すと、心配そうにこちらを見ていた美鈴の方に振り向き、微笑を浮かべて言った。

「美鈴・・・よくもまぁ、こんなことをやってくれたわね・・・」

「え？・・・あ・・・いえ・・・」

突然このようなことを言われたものだから、訳も分からず戸惑っている美鈴はひとまずそのままにしておいて、咲夜は次いでさとりの方へと振り向き、先程の彼女の言葉に応えた。

「貴方達の言っていることが単なる甘言かもしれないということも含めて・・・私の方からもお頼みしましょう。
グランチャーの生命を、繋げてくださいまし」

その言葉を聞いたさとりは、やはり相変わらず眼の色ひとつ変えることなく、しかし声音は少しだけ嬉しそうに
「ありがとうございますっ」
と返事しながら、深く頭を下げた。
そんなさとりに対し、咲夜は冗談を言うように、しかし冗談には聞こえない言葉を発する。

「もしそれが本当に甘言で、私のグランチャーの生命を愚弄する結果になったのなら。私が地底へと赴き、貴方方を皆殺しにさせていただきます」
「・・・はい」

なんとも物騒な発言ではあるが、仕方がないことだと思えた。
さとりは、実際そうなるかもしれないということを承知した上で、応えた。
というか、これぐらい言われてこそなのかもしれなかった。
さとり達が咲夜とグランチャーにやったことを考えれば、こういう状況は本来彼女には耐えがたいものであるし、いざこちらの言葉を聞きいれたことで最悪の結果になってしまったのでは、怒り狂って本当に地底の妖怪を皆殺しにしてしまってもおかしくない。

そうして、その上でこちらの信じがたい話を信じ、受け入れてくれたことに関しては、本当に感謝していたのだ。

さとりが頭を下げると同時に、咲夜は続けて言った。

「なら、行動は早い方がよろしいでしょう？私は何をすればいい」

「グランチャーの胎内にいて下さればいいです。私達が、魔法の森へと彼を連れていきます。

後は、グランチャーの生命を、慈しんであげて下さい。

それと、あの魔法の森のブレンのことを申し訳なく思う気持ちを、あの者を認める気持ちに変えてください。

そうすれば、どうにかなるはずです．．．

美鈴さんと一緒にね」

「．．．？」

その言葉に咲夜は思わず、隣にいた美鈴の方へとまた振り向いていた。

そういう手筈であることを知っているはずの美鈴も、急にさとりがこう言ったものだから、驚いて、呆気らかんとした表情を浮かべていた。

しかし、咲夜の方は、さとりが何故あんなことを言ったのか、瞬時に理解した。

異なるもの同士で高め合うオーガニックエナジーの性質を知らない上でだ。

美鈴の方も、すでに聞かされている話なのだから、それを思い出せばいいだけのことだった。

再びさとりの方を振り返った咲夜は、応える。

「分かったわ。そうします」

そうして、再び美鈴の方を向き、
「行きましょう」
と呼びかけた。

美鈴はそれに、
「はい」
と返事を寄越して頷く。

それに続いて、完全に話から取り残されていたこあが、ふたりに対して呼びかけてきた。

「あの・・・」
「なに」

「どういうことなのか、私にはいまいちよく分かりません。ただ、大事そうなことだってことは分かるような気がします。それで・・・咲夜さんは、自分の気持ちを信じていてください。・・・お願いします」

「・・・グランチャーからも、同じことを言われた・・・ありがとう」
「は・・・はいっ」

咲夜がこうとだけ返事すると、ふたりは地面から浮きあがり、グランチャーの胎内へと入っていった。
後は、彼の者の生命の行く末を、見守るだけだ。

その様子を眼で追い、彼女らがグランチャーの身体の内側へと入り見えなくなったと同時にこあは、怒っているようでも訝しむようでもあり、そういう感情が混ざり合った、何やら困ったような表情を

浮かべながらさとりの方へと振り向き、言った。

「お二人を、その・・・お願いします。酷いことをしたら、承知しません。私だって、地底で暴れます。お嬢様だって暴れます。覚悟していてくださいっ」

それにさとりは、静かに応えた。

「分かっています・・・あのグランチャーの生命は、咲夜さんおひとりのものではないのですね・・・私達もやることをしなくちゃいけませんから、これで失礼します」

そう断りを入れてから、さとりは自らのブレンの胎内へと戻っていった。

穴をくぐり、スリットウェハーに背中を預けると共に、他のブレンに乗っている者達に伝える。

「美鈴さんが、咲夜さんの心を上手い具合に動かしてくれました。グランチャーを連れていきましょう」

それに、魔理沙が返してくる。

（なんか、あんたが説得してたようにも見えたけどな）

「後押ししただけです」

（まぁそれはそれとして、準備が整ったなら、さっさと行きましょ）

という霊夢の声に、魔理沙が続く。

（そうだなぁ、これでようやく準備が整ったわけだ。後は、実際にやってどうなるかだな）
（今更怖気づくわけにもいかないし、やってみましょう）と輝夜。

（あたしとさとりのブレン、霊夢とあんたのブレンの二体ずつで交代して連れていこう。他のグランチャーが来てないか、注意深く様子を見ないとな・・・）

「なら、魔理沙さん。いきましょう」
（ん・・・）

とりあえず、今はとにかく魔法の森に向かうことが先だ。
グランチャーの状態が芳(かんば)しくないため（朱鷺子のブレンにしてもそうだ）、悠長に時間をかけているわけにもいかない。
行動するなら早くした方がよかった。
サトリブレンとマリサブレンがまず先達てグランチャーの身体を森に搬送すべく、その深紅の身体へと近づいていった。

サトリブレンの中には、自分に致命傷を与えた相手に対する恐怖がないわけではなかったが、その相手がボロボロに傷ついていてまで、その恐怖を強く意識するほど、彼の者も弱くはできていない。
今はただ、眼の前のアンチボディをひとつの生命と考えて、扱っていくつもりでいた。

※

スリットウェハーに映る光景から、二体のブレンが近づいてくるのがよく見えた。
その者達が、グランチャーの身体を抱えて、浮き上がる。
二体がかりでいけば、アンチボディの一体を持ち上げることは、特に苦もないようだった。
また、非常に痛ましい話ではあるが、今のグランチャーは腕一本足一本がなくなっているのである。
余計に軽くなっていたのだから、楽に持ち上げられるのも当然のことだった。

グランチャーの身体に触れられることで咲夜にも感じられるブレンの感触というのは、頭の中で思っていたよりも、不快感を与えなかった。
一度、サトリブレンに抱えられて紅魔館まで戻ってきたことがあるからだろうか。
あるいは、状況が状況だから仕方ないものと開き直っているからだろうか。
とにかく咲夜もグランチャーも、ブレン達による施しを、わりかし素直に受け入れることができていた。

グランチャーの胎内にて美鈴と共に座りながら、咲夜は彼の者に呼びかけていた。

「・・・ここまで来たら、嫌う嫌わないの問題ではないわね。なすがままにされていましょう」

と、それに応えるように、続いて胎内に響く声があった。
それはグランチャーのでも、美鈴の声でもない。
永琳の声だった。

咲夜としても初めて聞くものではない声が、オーガニックエナジーを伝わって聞こえていたのだ。

（聞こえています？聞こえてるなら、返事をしてください）

と呼びかけてくる声に、咲夜は、

「聞こえてる」

と返事を寄越した。

（どうも・・・私、迷いの竹林にいます八意　永琳と申します。咲夜さんはともかく、もう一人の、紅　美鈴さんには、初めましてですね）

「あ、はい」と美鈴。

（貴方に、ブレンパワードと私達を憎む心があるのは、よく分かっています。その上で、ご決断いただけたことに、私の方からも感謝いたします）

「そういうことなら、わざわざ仰らなくても構いません」

（いえ、本題に入る前に、ひとことでも感謝しておきたくてね。それで、魔法の森に向かってる間に、貴方方にも、どうやって再リバイバルを行うかを伝えておこうと思います）

そう前置きしてから、彼女は再リバイバルの方法・・・あくまでも彼女の頭の中で考えているだけの方法を説明した。

とはいえそれが、何の考えもなしに考えたでっち上げの方法などではないことも確かだった。

ちなみに朱鷺子達には、文達が説明するように頼んでいる。

とはいえ、小難しく説明する必要はなく、やること自体は簡単だ。
グランチャーとブレンを鉢合わせ、接触させる。それだけだ。

その中で、咲夜達には別にやるべきことがあった。
それは、グランチャーの中にあるオーガニックエナジーの全てを、物理的な現象に還元せずにブレンに向けることだ。
そうしてそれが、同じようにグランチャーに向けられたブレンのオーガニックエナジーとひとつになることで、膨大な量のエネルギーが発生する。
そうしてそのオーガニックエナジーはおそらく、プレートによるリバイバルの時に似た、光の渦を発生させるだろう。
その渦の中に二体のアンチボディが入れば、それぞれの身体を構成するビットが一度分解され、発生したオーガニックエナジーを纏いながら再びひとつに結合する。
そうして、新しいアンチボディができるだろう。というものだった。

実験をしていない以上、本当にそうなるのかという疑問がでるのは当然だろうが、永琳が彼女なりに熟慮を重ねた上での仮設だ。
それが真実であるかないかと聞かれれば、真実である可能性の方が高い。
美鈴の頼みを聞き入れて、現状分かっていることから導きだしたことなのだ。
今出来うることとしては、最良の方法だった。

オーガニックプレートを探してそのリバイバルに立ち会い、ビットを構築している最中の光の渦にグランチャーを入れても似通った結果になるだろうが、そうそう都合よくプレートが見つかり、リバイバルに立ち会えるとは限らなかった。
となれば、こうするしかない。

後は大事なのは、オーガニックエナジーの性質だ。
異なるふたつの生命力は互いに高め合うが、それはふたつの性質が同じか、限りなく似通っている時だけの話だ。
難しいことがあるとすれば、グランチャーとブレンパワードという、ふたつの異なる種族の持つオーガニックエナジーが、上手く馴染むかどうかだった。

種族の違いの問題は、どうすることもできない。
だから後は、咲夜達がどうにかするだけだった。
彼女達の意思により、グランチャーの中の力を、もっと別のベクトルへと向いたものにしなければいけないのだ。
それは、生きようとする純粋な欲求でもいい。
あるいは、相手の・・・ブレンパワードを理解しようとする心でもいい。それは即ち、相手に合わせるとうことなのだから。

そして、オーガニックエナジーは大きく、強ければそれだけいい。
だから、ふたつの力をぶつける前に、グランチャーの中のオーガニックエナジー自体をより強めることで、再リバイバルが成功する確率は増えるはずだった。
だからこそ今、咲夜と美鈴は二人で胎内にいるのだ。
ふたりがグランチャーを想う心を強く持てば、それだけグランチャーは多くのオーガニックエナジーを得るはずだ。

（そういうことだから、よろしくお願いしますよ）

それだけ聞こえると、もう永琳は何も言ってこなくなった。

途端に静かになったように思える胎内で、咲夜は彼女の言ったことを、頭の中でもう一度噛み締めた。

本当に困難で、だからこそ大切なのは、自分達が気をしっかり持ち、グランチャーを導いてやることだ。
異なる存在・・・敵であるはずのブレンパワードと意思をひとつにできるように、努力することだ。
そしてそのためには、まず自分達自身の気持ちを確かめなければいけない。

どこにも見えない永琳の顔を見ようと宙に眼を向けていた咲夜は、隣に座る美鈴の方へ向きなおして、言った。

「美鈴、聞いたわね」

「・・・はい」

「・・・私は結局のところ、独りでは何もできない」
「・・・どうしたんですか?急に・・・貴方は独りでもなんだって・・・」
「何かできても、その喜びを分かち合える者がいてくれないと、楽しくないわ。
独りでは私は、十六夜　咲夜という、私自身ではいられなくなる。
今この時だって、グランチャーがいて、貴方がいて、私は始めて生きていることを実感できる。
だから、美鈴・・・私がグランチャーを救おうと願うように、貴方も私を助けて・・・」

「・・・・・・」

美鈴は彼女に、すぐには返事ができなかった。
『はい』とか『うん』とか、なんでも返事はできるはずなのに、それができなかった。

美鈴は今、ようやく気がついた。

グランチャーを救うために咲夜と自分、そしてグランチャーの心をひとつにしなければいけない今、それが不可能になるだけの、余りに大きな軋轢があることに。

何であろうと結局、美鈴には、絶対に何とかしなければならない罪というものがあったのだ。

第十六話　その5

グランチャーを、間接的にとはいえ殺めたのは美鈴だ。
その事実からは、いい加減逃れられると思っていたが、実際はそんなわけはなかった。
逃れられると考えること自体が、間違いだったのだ。

この事実がある限り、そしてそれを咲夜に伝えていないという事実がある限り、美鈴は本当の意味で彼女と心をひとつにして、グランチャーを救うことができないのではないかと考えた。
そしてそれがもしかしたら、最後の結果に何か影響を与えるかもしれない。
再リバイバルを失敗させ、グランチャーの生命を永遠に戻らないものにするだけでなく、もっと恐ろしい事態に・・・

グランチャーのためにも、ここで全ての雑念と罪悪感を振り切らなければならない。
そのために全ての事実を、今度こそ咲夜に伝えなければならなかった。

だが美鈴は、やはりここまで来ても、そうすることができなかった。
もし今この場で咲夜に事実を伝えたら、それこそ今この場で殺されても文句は言えない。
どうしても自分の身が可愛い美鈴は、死ぬことを恐れ、ただ口を動かすだけで事足りることができなかった。

しかし、そんな美鈴が胸中で呻く。
それは、何よりもまず自分の身を可愛がってしまう自分自身に対する卑屈な感情への、せめてもの抵抗であった。

――――でもこのままじゃ、グランチャーがどうにかなってしまうかもしれない・・・
私はこのまま、自分のやったことに責任も持てず、グランチャーに対して誠実であることすらできなくなるのか・・・――――

彼女はせめて、死にゆくグランチャーの生命をどうにかして繋ぎとめてやりたかった。
そうすることが、少しでも自分の罪を償うということになるのだろうから。
何よりそれが、咲夜のためにもなるはずなのだ。

そのためにも、グランチャーに対して紛れもなく抱いていた敵意を・・・その敵意がもたらした結果を、咲夜に対して伝えなければいけない。
美鈴は、彼女なりに精一杯の勇気を振り絞って、ある心を決めた。

もしグランチャーが無事再リバイバルすることができれば、その時に、全ての事実を咲夜に伝えようと。

人間も妖怪も、その後に何か待つものがあれば、今やるべきことを精一杯できるはずだ。
将来への目標を立てて、今そのために努力するのだ。

そして、グランチャーの生命が繋がった後でなら、咲夜だって許してくれるかもしれない。
それでやっと美鈴は、自分の罪を出来る限り忘れることができるは

ずだ。
それが、最も良い結果なのだ。
いや、もう許してくれなくてもいい。
咲夜とグランチャーの絆が繋がる様子を見れるだけでも多分、幸福なのだ。
殺されてもこの際構わない。
美鈴はここでようやく、自分の身の可愛さを、例えこの一瞬のことだとしても振り切ることができた。
そしてもし殺されずに済むのなら、以前、ナイフを突き刺された時から、今のような関係に戻ることができたように、少しずつ時間をかけて、もう一度仲良くなっていけばいい。
だからこそ美鈴は、最も良い結果に辿り着くためにも、グランチャーを生かせるよう、精一杯励むことにしたのだ。

彼女はそうしてやっと、語りかけてきた咲夜に応えることができた。

「えぇ・・・咲夜さん。私は、今この時に全ての生命を捧げるつもりで励みます・・・
本当です、嘘じゃありません。それが、私がグランチャーにしてあげられることなんですから」

「・・・貴方まで、あのさとりのように、グランチャーを生かすために自分を殺す覚悟をすると？」
「・・・気持ちの問題です。その・・・咲夜さんが、グランチャーと同じように私に生きていて欲しいと思うのなら、私だって自分の生命を大切にします」

そんな美鈴の言葉を聞いた咲夜は、一瞬だけ固まりながらも、笑みを浮かべて静かな声で応えた。

「そう・・・なら、そうしなさい。貴方も生きていて・・・」
「・・・はい」

その優しい声を聞く中で、美鈴は強く思った。
やはり、こんな咲夜をいつまでも騙すようなことをするわけにはいかない。
美鈴が何をやったのかも分からずに、こうやって愛情をもって接してくれるのを見ると、咲夜が可哀想であったし、美鈴自身、辛くないわけがなかった。
何であろうと、いつか必ず、真実を伝えなければならなかったのだ。

半刻は経っていないだろうか。
長いようで、それほど長くもないように感じる時間を過ぎれば、ブレンと、彼の者達に抱えられたグランチャーの眼に、魔法の森の青々と茂る木々が見えてきた。

もし、アンチボディがあらゆる生物・・・だけでなく、植物などのオーガニックエナジーまで吸収することができるというのなら、美鈴も咲夜も、この魔法の森の木々が、彼の者達の再リバイバルに手助けをしてくれることを祈った。

それからさらにしばらくブレン達とグランチャーは、森の上空を飛行する。
緑色の絨毯の上をすり足で歩くように飛ぶ中で、ふとその絨毯に穴が開き、その向こう側の地面の色を見せる場所があった。
その部分だけ木が生えず、地面が少しくぼんでいるように見えるか

ら、それが尚更、緑の絨毯にできた大きな穴・・・そこから見える床面のように見えた。

そうしてその一角には、今のグランチャーと同じように、四肢のいくつかを失った状態で横たわる、ブレンパワードの姿があったのだ。咲夜達がやったブレンパワードだ。

改めてその姿を遠目から眺める中で、彼女は、予想だにしていなかった罪悪感に戸惑っていた。

以前、実際に彼の者に攻撃を加え、その身を傷つけた時には何も感じていなかったのに、グランチャーが同じように傷ついた途端に、自分のやったことがとんでもないことだったのではないかという意識に苛まれることとなった。

そこには、彼の者に対し申し訳ないと思う気持ちでもあったし、もっと別の感情でもあった。

咲夜は、思わず呟いていた。

「あぁ・・・そうか・・・」

グランチャーもブレンパワードも、やはり同じアンチボディなのだ。ブレンパワードは確かに敵であったかもしれないが、敵である以上にひとつの生命であったのだ。

咲夜は、そのことを考えていなかった。

グランチャーの死に際してようやく心の隅に浮かび、そして今、身に染みる実感として思い知った。

申し訳ないという気持ちがあるのなら、一言でもいいから謝らなければならない。
あのブレンパワードの宿主である、朱鷺子という妖怪に対して・・・

※

朱鷺子と香霖のふたりは、ブレンの胎内にて深紅のグランチャーの到着を待っていた。
外には文達もいる。

しばらく、時の流れが止まったかのような時間が、過ぎることに気づかないように過ぎていく。
ゆっくり本を読むにはこの上ない静けさであったが、さすがに今はそんな気にはなれなかった。

そして、この静けさが永遠のものであるような錯覚を感じ始めた時、静止していた時は動き始めた。
というか、動いていることに気づくことができた。

木々の向こうに広がる遠くの空から、いくつもの影が近づいてきていた。
あの大きさは、アンチボディの影だ。

日が傾き陽射しが弱くなってきた青空の中で、陽光を真っ向から浴

びることもなく、その様々な色彩をこちらに見せつけていた。
その中には、血のように紅い色のアンチボディも見える。

それらの影・・・アンチボディが近づいてくる中で、その紅いアンチボディが、朱鷺子の中にあった恐怖心を呼び覚まそうとしていた。
悪鬼のような形相で、こちらに襲いくるその、記憶の中の威容を・・・

しかしその一方で彼女は、近づくにつれてはっきりと見えてきたそのアンチボディの姿に、深い衝撃を受けてもいた。

こちらと同じだったからだ。
片腕片足を失い、二体のブレンに抱えられるその姿が、彼女の網膜にはっきりと焼き付き、刻み込まれていた。
そこにはもう、敵であり、恐怖の対象であるグランチャーはいなかった。
朱鷺子の心の中では、あのアンチボディを恐れる心以上に、悼む心が現れ始めていた。
グランチャーだけでなく、彼の者と共に生きる誰かに対しても・・・

グランチャーを抱えたブレン達は、さらにこちらに近づいてくる。
やがて彼の者達は、朱鷺子のブレンのすぐ傍にまで来ていた。
最早、眼の前にまで見えるようになったグランチャーからは、何の恐ろしさも感じない。

ブレン達がそのまま朱鷺子達の隣に降り立つと、俄かにそのグランチャーの胎内を覆っていた装甲が開いた。
ブレンが寝るような姿勢になっていても、向こうが立っていたので、

その様子を見ることはできた。

そうして中から出てきたのは、ふたつの人影だった。
どちらも朱鷺子にとっては始めて見る者だ。
一人は人間、一人は妖怪だった。
胎内に繋がる穴をくぐり外に出てくるその姿を見て彼女は、やはりグランチャーにも、自分と変わらない生きた人妖が宿っていることに、今更ながら気づいた。
そしてあのふたりの人妖の内のひとり・・・あるいは両方は、朱鷺子とブレンの間にあるものと同じように、グランチャーとの関わりを持っているのだ。

「なんだ・・・？彼女は確か・・・」
急にグランチャーの胎内から何者かが出てきたことを不思議に思うと同時に、香霖はそのふたりの人妖の内の片方に見覚えがあるのを思い出した。
紅魔館の十六夜　咲夜。何度か香霖堂にも訪れている、割と真っ当な客だ。
グランチャーがブレンと同じように他者を胎内に宿すことは分かっているが、まさか彼女だとは思わなかった。

まあそれはそれとして、彼女は一体何のために外に出たのだろう。

そんなことを考えながら呟く香霖を余所に、朱鷺子は、グランチャーから出てくると共にそのままこちらに向かっているように見えるふたりの姿を見て、突然こう言った。

「あたし達も出てあげようよ」
「出る・・・？外にか？」
「うん」

「・・・そうだなぁ」

なんで朱鷺子まで急にこんなことを言ったのか分からないが、今ブレンの胎内から出たからといって、何かが起こるわけでもないだろうと判断した香霖は、なんであれひとまずは彼女の言う通りにして、外に出ることにした。

朱鷺子が言葉なくブレンに命じると、スリットウェハーに映されていた光景が消え失せ、胎内を包みこむように覆っていた装甲が開き、積層装甲がスライドすることで、眼の前に大きな穴が穿たれた。

「朱鷺子、頼む」

頭上に外へ続く穴が開いたのはいいが、その穴をくぐって自力で出ていくことができない香霖は、以前と同じように朱鷺子に抱えられながら浮き上がり、そのまま外へと出た。

ブレンの胎内から出ると同時に朱鷺子は、そのままブレンの身体の上を通り、地面へと降りていた。

どうやら、グランチャーから出てきたふたり・・・咲夜と、もうひとりの誰か（美鈴）を待っているようだった。

何故わざわざそんなことをするのかは分からないが、香霖は、朱鷺子が彼女なりに考えているのだろうと察した。

アンチボディに乗る者同士、何か感じるところがあったのかもしれない。

自分のブレンと同じように傷ついたグランチャーの姿を見て心が動き、また、グランチャーに乗る者も、同じことを感じている、と信じたのだろう。

そんな朱鷺子に応えるように、ふたりの人妖は、彼女と香霖のすぐ

傍に降り立った。
それと共に、咲夜が、恭しく一礼しながら自己紹介をした。
そこには、ブレンパワードとグランチャーに乗る、いわば敵同士であるが故の亀裂のようなものはほとんどないようだった。
勿論、まったくないわけでもなかったのだが・・・

「初めまして、貴方が朱鷺子さんという妖怪ですね・・・私は、十六夜　咲夜と申します・・・どうぞ、お見知りおきを」

その挨拶の言葉に、朱鷺子は戸惑いながらも返事した。

「あ・・・うん・・・」

それに、香霖が続く。
その言葉は、咲夜だけでなく、その隣に立つ妖怪に対してのものでもあった。

「久しぶりだね・・・そちらの妖怪は」
「紅　美鈴っていいます。貴方は・・・香霖堂とかいう店の店主の・・・」
「森近　霖之助という・・・そちらの咲夜とは懇意にさせて頂いている」
「そうですか・・・」

美鈴と香霖のやり取りを傍から聞いて、それが終わったと見ると、小さく頷くような姿を見せる咲夜。
その様には、彼女がこの場に何かやりたいことがあって来たという裏付けのようなものがあった。

実際彼女には、やるべきことがあったのだ。

グランチャーと共に打ち倒したブレンと、その宿主である朱鷺子に対して。

それは・・・

突然彼女は、朱鷺子に対して深々と頭を下げると、静かに言った。

「貴方とブレンパワードには、本当に申し訳ないことをした・・・」

「・・・え？」

朱鷺子は思わず声を漏らした。

彼女の驚愕を見知りながら、咲夜は続ける。

「互いが敵である以上、相手を殺めることは当然だろけど、貴方の友達に生命に関わる傷を負わせたことそのものには、深く謝罪します・・・

許してくれるわけが、ないだろうけど・・・」

「・・・・・・」

朱鷺子は、何も応えることができなかった。

ただ呆然とした表情を浮かべて、静かに語る咲夜の顔・・・というより、深く下げられた頭を見つめるばかりだった。

香霖も、余りに急な咲夜の謝罪に、どう対応すればいいのか分からないでいた。

もちろんふたりとも、咲夜がこうやって自分達の前に現れて、謝罪でないにしても何か声をかけてくれるだろうとは考えていたし、むしろそうするべきと考えていたのだが。

深々と下げていた頭をようやく上げる咲夜。

固まるふたりの顔を見据えながら、彼女は続ける。

「こんなことでその罪滅ぼしができるわけがないのだろうけど、私達が、貴方達のブレンの生命を繋ぐことができるように努力します。だから貴方達は、ただそのことを、受け入れて欲しいのです。罪を赦して欲しいとまでは言いませんから、どうか、お願い致します」

朱鷺子にとっては、ある意味で意外だった。

グランチャーに乗る者・・・咲夜が、自分が考えていたよりもずっと穏やかな人柄に見えたからだ。

こんな人間が、グランチャーと共にブレンを襲ったということが、信じられなかった。

グランチャーには、人を凶暴にする性質があるらしいというのはすでに知っているが、それにしてもだ。

彼女は、目の前の人間・・・咲夜が、グランチャーによって凶暴になるなどということが信じられなかったし、その姿を想像することもできなかった。

彼女の意思によりブレンが傷つけられたということも、信じたくはなかった。

だが、信じようと信じまいと、事実はあるのだ。

ブレンがグランチャーの、そして咲夜の手によって、死に繋がる傷を負わされたことは。

だからこそその事実と、今この場を漂っている穏やかな空気の差に戸惑っていた。

そうして、そもそも何故、ブレンとグランチャーは戦っているのだろう、という疑問がわいてきた。

朱鷺子が戸惑い、疑っているのは、ただその一点に尽きた。
それ以外の疑問は、もうほとんどなかった。
咲夜の謝罪の言葉だって、全て受け入れていたのだ。

しばらく黙りこんでいた朱鷺子は、徐に口を開いて、咲夜に応えた。

「分かんない・・・けど、あたしも頑張りたい。いろいろ考えたり決めたりするのは、後でいいよ。
今は・・・」

「えぇ。互いのアンチボディの生命を汲み取って、再リバイバルとやらを終えることですね」
「うん・・・」

「そのために、今この時だけでも、私達と心を同じくしてくれるというのでしたら・・・本当に、感謝する言葉を見つかりません」
「あ・・・いや・・・・・・・・
・・・うん。そうするよ」

「ありがとうございます・・・」

落ちつき払った様子の咲夜の言葉に、ただ頷いたり、何とも言えない返事を寄越すばかりの朱鷺子。

咲夜は最後に
「・・・それでは、お互いのアンチボディに戻りましょうか。貴方方も、自分達のやるべきことは聞かされているはずです。それをするとしましょう」
と伝えた。

そうして、
「うん」
という朱鷺子の返事を聞くと共に、踵を返して、二体のブレンに抱えられているグランチャーの下へと戻っていった。
美鈴がその後を追おうとするが、その直前、堅苦しい目線を朱鷺子に向けながら、嘆願するように言っていた。

「・・・貴方方が、咲夜さんに対して何を感じておられるのか、分かる気がします・・・
ですが、この一時だけでいいですから、今だけは、あの人を赦してあげてください」
「・・・え?・・・あの・・・」

「お願いします」

そう吐きすてながら、先程の咲夜と同じように、深く頭を下げる美鈴。
朱鷺子はその態度に・・・何故彼女達がここまで謙って見せるのかが分からずに、戸惑っていた。
だが、こうやって切に頼みこむ姿勢は、疑問だとか躊躇(ちゅうちょ)を忘れて、素直に受け入れたほうがいいのだと思う。
受け入れるべきという義務ではなく、あくまでも個人的な自由の領域の話だ。
ただ、その個人的な自由を行使して人の願いを受け入れるような者

は、いつの時代、いつの話の中でも、清らかに描かれていたのだ。
時にはそういうものに憧れるのも妖怪だった。
ましてや今の朱鷺子・・・ブレンとの関わりをもった今の朱鷺子は、より純粋だった。

「分かったよ。頭上げていいよ」

朱鷺子は短く、ただそうとだけ応えた。
その言葉を聞くと同時に、すっ、と頭を上げた美鈴は、その本来の人となりの良さを示すような笑顔を浮かべると
「ありがとうございます・・・本当に。それじゃあ、私もこれで失礼します」
と応え、それからようやく、咲夜を追ってグランチャーの下へと戻っていった。

その後ろ姿を・・・それと、美鈴に先んじて飛び立ち、すでに穴をくぐってグランチャーの胎内に入ったらしい咲夜の姿を深紅の装甲の向こう側に覗う中で、朱鷺子も香霖も、しばらくの間は黙りこんで立ち尽くしていた。

が、向こうのふたりがグランチャーに戻ったのなら、こちらも早くブレンに戻った方がいい。
こちらの準備も整えておかなければ、再リバイバルは行えないのだ。

「僕達も戻るとするか・・・いよいよ、再リバイバルっていうのが始まるみたいだ。
緊張せず、心持ちを穏やかにしておかないとな」
と呼びかけた香霖の声に、朱鷺子はすぐに返事をしなかった。
咲夜が入り、そして今しがた美鈴も入っていったグランチャーの胎内へと続く、ぽっかりと空いた穴。

そしてそこに、深紅の色の装甲が覆いかぶさり隠すのを眺めながら、何とも言えない表情を浮かべていた彼女は、数秒おいてようやくこの声に応えた。

「うん。そうしよ」

※

個人的に、何か話をつけておきたかったのだろう。

急にグランチャーから出て、朱鷺子達と何事か話をしていた咲夜と美鈴のふたりも、胎内に戻ってきた。

一体何の話をしていたのかは分からないが、状況が状況なのだ、世間話などをしていたわけはないだろう。

話を終えて、朱鷺子達もブレンの胎内に戻ったようだ。

となれば、もう待っている必要はない。

魔法の森に来るまでの間、グランチャーはいうなれば動けない身で無理やり移動させられていたも同然の状態で、かなり疲れているようだった。

咲夜達の与えるオーガニックエナジーが良質だったらしく、後数分で死ぬ、などというほどの深刻な事態にはなっていないが、このまま来た道を戻り紅魔館に帰る、などということはまず無理だ。

仮に再リバイバルが失敗したら、彼の者の死に場所はここになるだろう。

失敗しないように頑張るのは、残念ながら魔理沙ではなく、咲夜と美鈴、朱鷺子と香霖のやることだった。

「それじゃ、いくぜ。準備はいいな、やっていいんだな?」

魔理沙は、グランチャーの胎内にいる咲夜達に呼びかけた。
結局マリサブレンとサトリブレンが、ここまでずっとグランチャーを搬送してきていた。
霊夢と輝夜は、こちらの様子をぼーっと眺めているばかりだった。
輝夜に至っては、ブレンの胎内でまた寝ているのではないだろうか。
同行していた永琳には、カグヤブレンの方に乗ってもらっていたが。

それはともかくとして、こちらの呼びかけに、
(えぇ、やるわ)
という返事が聞こえてきたのを確認した魔理沙は、さとりのブレンと協同して、グランチャーを朱鷺子のブレンの隣に寝かせることにした。
これから死にゆく生命は、何をするにしても慎重に扱って悪いことはない。
グランチャーの身体を、時間をかけて、その身が大地に触れる音すら聞こえないほどにゆっくりと降ろしていた。

やがて、ブレンとグランチャー・・・ほとんど同じような姿で致命傷を受けている二体のアンチボディが、隣あって寝そべることとなった。
互いに敵同士であるはずの二体の間には、そのようなものを超越した、もっと別の何かがあるような気がした。
人間にしても妖怪にしても、他の何にしても、死を眼の前にすれば、それまでのことの全てを忘れてしまえるのかもしれない。
それもそれで、いい事と言えるのかは魔理沙にも誰にも分からなかったが・・・

しかし何にせよ、彼の者達をまだ死なせはしない。
その魂だけでも、ひとつに生まれ変わらせるのだ。

永琳がそうするようにと呼びかけていた通りになったのを確認した魔理沙は改めて、グランチャーとブレンの両方に聞こえるように、オーガニックエナジーを通して呼びかけた。
その間に、ブレンをグランチャーから離しておく。

「よぉし・・・それじゃ、やってみてくれ。聞いた通りにな」

その声には返事はなかったが、魔理沙には、ブレンもグランチャーも手筈通り、自らのオーガニックエナジーを相手に向けているのが分かった。

後は咲夜達、朱鷺子達が何を考えながらこの場に臨み、そのことで何が起きるか、という問題だった。

この先、一体何が起きるのか？
永琳をして、確信ができないと言わしめるのだ、もしかしたら、何も起こらないということも大いにあり得る。

が、ふと芽生えたそんな意識は、一瞬にして吹き飛ばされた。

何も起こらないなどという道はなかった。
変化は、すぐさま起こったのだ。

「・・・ん？」

魔理沙は思わず、外の光景を映し出すスリットウェハーの壁面に張り付いて、食い入るようにその動転を眺めていた。

二体のアンチボディの周囲に、淡い光が漂い始める。
それは間違いなく、ブレンとグランチャーの二体が放出するオーガニックエナジーが相乗して起こる光であるはずだった。

「きたっ」

驚嘆する魔理沙。

二体のアンチボディを包み込むようなその光は、ひとつの光源が放つものではない。
どこからともなく発生し、宙を漂ういくつもの光の粒子が、ひとつの大きな光を成しているのだ。
そしてその光の粒子は、その数を絶えず増加させていた。
のみならず、生み出された光の粒子はただその場を無作為に漂うのではなく、揃って一定の方向へとゆっくり流れているようだった。

そう、渦を描いていた。

これは、間違いなくあの時と同じだった。
魔理沙の前で、オーガニックプレートが見せたリバイバルの光と‥‥

となれば、これから起こる事象が彼女にははっきりと分かった。

「来たぜ、再リバイバルだ！」

彼女は、スリットウェハーにかじりつき、段々と速くなっていく光の渦を見ながら、叫んだ。

※

グランチャーとブレンを併せて包みこむような光の渦は、当然さとりの眼にも見えていた。
彼女にとっても、それは始めて見るものではなかったが、見知ったものでもないことは確かだった。
あの眩い光が、ひとつの生命の誕生・・・というより、すでに存在する魂の、形としての誕生であるという事実も、何か、とりとめなくふわふわと浮いている、蜃気楼のようなものに思えた。
何より、これから始まるのは誕生というよりも、再生なのだ。
アンチボディの・・・しかも、ふたつの異なるアンチボディの。
それは完全なる未知の領域であり、その眼に映る光の渦の持つ意味は、以前オルファンの身体の中で見た時のそれとは異なる。
あの光の中を流れているものは、希望であり、喜びでもあり、恐怖でもあった。
それらの種子となるものであった。

これからあの無数の、七色に輝く光が形を成す。
その形が何なのかは、ほとんど分からなかった。
だが、形を成す。それだけは紛れもなく確かなこととなりつつあった。
そしてそこには、今まで、確かに生を享受してきた二体のアンチボディの、一時の死も待っているのである。

ブレンの胎内にて、ぼんやりと眼下に見える光の渦を眺めていたさとり。
奥の奥までも光であふれさせるその奔流の中で、グランチャーとブ

レンの姿はすでにおぼろげにしか見えなくなっていた。
が、そんな中でだ。

「・・・あ・・・？」

彼女は、ある変化が渦の中で起こっているのに気がついた。

※

グランチャーの胎内にいる咲夜達にとっては、この事態は驚異的であった。
なんせ、アンチボディの誕生と同じ光を、生まれようとするアンチボディと同じ視点で見ることになっているのだ。
何より咲夜達は、アンチボディのリバイバルに立ち会ったことがない。
だから、その光自体も、初めて見るものだったのだから、尚更だ。

スリットウェハー越しに映る、緑色を基調としてあらゆる色彩を現しているような光の饗宴以外には、何も見えないその空間に、美鈴はさすがに叫ぶしかなかった。

「ど・・・どうなるんだぁ・・・っ？」

彼女と同様、状況がいよいよ本格的なものになってきたことに、覚悟以上に大きな驚きと不安を隠しきることができなかった咲夜。

しかしその中で彼女は、心の内に響くその声を聞いていた。

なんだか、永い間ずっと聞き続けていたような、そんな声だ。
本当は、一年も・・・半年も聞いていないはずなのに・・・

「・・・グランチャー・・・」

彼の者は、咲夜に感謝していた。
それは、戦うことへの喜悦でも、そのひと時を咲夜と共有することができたことへの歓喜と万謝でもなかった。
そもそも、彼女に対する感情ではなかった。

自分が生まれてきたことそのものの価値に気づくことができたからこその、最期の喜びであった。

第十六話　その6

事態の変化は、この光の渦だけで終わりではなかった。
突然咲夜達の身体が、前のめりになるように傾き始めていた。

「う・・・」
「なんだぁ？」

金属が軋むような音が、いたるところから鳴り響いている。
それはどうやら、スリットウェハーが発する音であるようだった。
なにより、映し出される外の光景。陽が沈み始め、暗くなりはじめている空が、頭上へと流れていたのだ。
それと共に、身体の重心が少しずつずれていっているのが分かる。
それが意味することは・・・・

「グランチャーが起き上がろうと・・・いや、浮き上がってるんだわ・・・」

咲夜はこの事態をそう理解した。
発生した光の渦・・・リバイバルの渦に反応するかのようにグランチャーの肉体が浮き上がり、地面と垂直になろうとしているようだ。
咲夜達の身体がそのまま壁面にへばりついて上に持ち上げられるわけにもいかず、グランチャーと共に傾く胎内の壁面を器に盛られた水のようにするすると滑る。
その間も、グランチャーはその身体を持ち上げて・・・持ち上げられていた。

やがて、すっかり頭の上へと移り本来のあり方を取り戻した空と、それに変わる様に森の木々が真正面に見えたところで、グランチャーの動きは一旦止まった。

「・・・・・・っ」

「つ・・・次は一体・・・っ？」

咲夜も美鈴も、さすがに混乱しそうになっていた。

が、間違いなく今何かが起こっていることは確かであるし、その何かが、グランチャーとブレンの生命を汲み取って、再リバイバルを成功させるかさせないかの布石となることも理解できていた。

だからこそ咲夜は、戸惑うことを止めて、強く祈ることにした。

今までスリットウェハーに座り込んでいた身体をすくっと立ち上がらせ、以前グランチャーと共に戦った時のように、積層構造に足を踏ん張り、手でしがみ付いた。

足の裏、そして指先から感じるグランチャーの生命の感触は、まだ柔らかく温かかった。

まだ生きている、これはその証拠だ。

ならその生命を、このまま無駄に散らしたくはない。

完全に、今のグランチャーのままに蘇ることはないかもしれないということはもう何度も聞いたし、分かっている。

咲夜自身、きっと、今自分が感じているグランチャーの生命自体は、消えてしまうのだろうということは分かっていた。

今しがた聞こえたあの声はつまり・・・そういうことなのだ。

それでもだ。

彼の者の生きた証を繋いで、彼の者の息子（child）とも呼べる存在が再リバ

イバルによって生まれるその様を、見てみたいと強く思った。
立ち上がった咲夜は深く眼を閉じて、何も言わなくなった。

「咲夜さん？」
という、美鈴の不思議そうな声にも耳を貸さなかった。

ただひたすらに、頭の中で念じた。
その心の声を、グランチャーと、彼の者を包む大いなる不可視の力へと向けて。

――――グランチャー・・・最後に、私の言う事を聞いて・・・その生命を燃やして、新しい生命を創って。その生命に、貴方の魂を宿すのよ・・・
そして、この世のあらゆる可能性を操作する者がいるというなら。
それを神と呼べるのなら・・・
神よ・・・・・・グランとブレン。その両者に、加護があらんことを・・・！――――

その時だった。

事態はさらなる動きを見せる。
突然身体を揺らした微かな震動に、咲夜は祈る言葉も遮られ、閉ざした眼を開けることを余儀なくされた。

※

グランチャーが、そして咲夜達が感じたことは、そのまま朱鷺子と香霖も感じていた。

朱鷺子としてはリバイバルの光自体は初めて見るものではなかった。香霖も彼女から話を聞いてどういうものなのかということは知っていたから、何もかも始めてである咲夜達よりかは混乱も少なかった。しかし、これがリバイバルの光であるということがはっきりと分かるということは、逆に、これから新しいアンチボディが誕生するという確信ももたらしていた。

そして、今朱鷺子達が乗っているブレンと、グランチャー。

その二体が、新たなアンチボディの生命の一部となるのだ。

なら、このブレンはこれから、一体どうなるのだろ。

そんな心の暗雲・・・不安と恐れがあった。

だから朱鷺子も、咲夜と同じように、ひたすら祈ったのだ。

スリットウェハーにもたれかかって座り込み、手を合わせて深く眼を閉じながら、何も言わずに。

そしてその祈りは、咲夜よりもさらに純粋なものであった。

――――あたしもうあんな大きな光の渦だってこわくない。どこまでもどこまでもあたしたち一緒に進んで行こう・・・ブレン、あたしたち一緒に行こうねぇ――――

その時だった。

微かな、しかし確かに身体を揺さぶる震動が胎内で起こる。

「また次の段階か・・・」

この光の渦の中においては一番冷静でいられている香霖が、呟くように言う。

それと共に、また先程と同じようにスリットウェハーを軋ませながら、ブレンの身体が今度は横に向かって回り始めた。

そんなことには構わず、ブレンとの短い間の記憶を思い出し、それを再び噛みしめながら眼を閉じ、ひたすら祈り続けていた朱鷺子。

ブレンもまた、彼女と共に、決して長くはなかった付き合いを懐かしむと共に、この先・・・未来の記憶が作れないことを嘆いていた。

そう・・・これからもう数分ほど後の未来には、今のブレンはいないはずなのだ。

そこにいるのは、何かが違う、まったく別のブレンかもしれないのだ。

それはブレン自身分かっていることだったし、朱鷺子にも、不思議と理解できてしまっていた。

そしてそこには、哀切だとか絶望だとかとは、もっと別の何かがあった。

そんな彼女に対し、状況を伝えるように香霖は言う。

「ブレンが横向きに回っている・・・グランチャーだ・・・グランチャーと向き合った状態で止まった・・・」

さらにそれに続くように、今度は緩やかな前後の揺れを感じられた。

同時に、香霖がさすがに驚いたような声を上げた。

「近づいてくるっ？・・・こっちからも近づいていってるのかっ？」

浮き上がり、そして互いに向き合うような状態になった二体のアンチボディは、今度はそれぞれも相手に向かって、歩くよりもゆっくりとした速さで近づいていた。

というより、彼の者達の周りを漂うオーガニックエナジーがそうさせていた。

たとえ動きが遅くとも、元々眼と鼻の先にいたのだ。

数十秒もすれば、二体のアンチボディは、互いの額がくっつくほどに近づいていた。

実際、装甲の一部がぶつかり合う乾いた金属音が小さく鳴り響いていた。

そんな音に続いて、香霖の

「ブレンとグランチャーが接触した・・・いよいよといった感じだな・・・」

という声が聞こえる。

さらにそれに続いて、胎内を覆っていた装甲が突然開いた。

グランチャーの方も同じく装甲を開いていたらしく、向き合っていた二体の装甲の端の部分がぶつかり合い、ゴツンという音を響かせた。

グランチャーと接触するのはまだしも、さすがにこれは意外だった。

香霖は思わず驚嘆した。

「なんだっ？外に出ろ、とでも？」

それと時を同じくしてだ。
朱鷺子は、ブレンの、本当に最期の言葉を聞いた。
さようなら、という風に聞こえた、別れの言葉だった。
それと一緒に、グランチャーに乗っている者達・・・咲夜達を、受け入れてやってほしいとも言っていた。

別れの言葉と揃えて語られたその言葉。
それがどういうことであるのか、朱鷺子はすぐに理解した。
香霖の言葉を借りれば、いよいよなのだ。

哀しむ以上に、そして、今まで一緒にいたブレンに感謝する以上に、朱鷺子には、やるべきことができた。

深く閉ざしていた眼を開き、衝き動かされるように立ち上がった彼女は、そのままスリットウェハーに空いた穴をくぐり、外に出ようとした。

それを見た香霖が、大声を上げる。

「出るのかっ?外はオーガニックエナジーの洪水だぞ、安全とは言い切れないっ」

「大丈夫!霖之助さんはそこにいてっ」

その言葉の持つ空気は引き締まり、穴の縁に手をかけて振り返りながらそう言い放つ朱鷺子の眼は真っ直ぐだった。

それは、先程香霖が見てみたいと言った眼と同じ、真っ直ぐなものだった。

今、ブレンの外ではオーガニックエナジーが渦巻いている。
二体のブレンの生命力のほとんど全てを捧げることで生じたこの渦は、おそらくブレンバーなどとは比較にならないほどのエネルギーを持っているだろう。
台風の目がまったくの無風であるように、ブレンとグランチャーのすぐ傍なら影響はないだろが、もし何かの拍子で吹き飛ばされたりしたら、最悪死んでもおかしくない。
そういう危険な状況であると香霖は考えていた。

それでも彼は、あのような眼をする朱鷺子の事を止めようとする気を起こすことはできなかった。

「・・・・・・分かった、気をつけてな」

そんな香霖の返事を聞くと同時に、朱鷺子はブレンの胎内から外へと飛び出していった。

※

咲夜には理解できた。

今、グレンチャーの生命は一旦死んだ。
彼女には、彼の者の肉体が光の渦によって溶かされ、分解され始め

ているのが分かった。
実際、咲夜達には見えないが、グランチャーの深紅の肉体を構成するビットが、つま先から少しずつオーガニックエナジーへと還元され、それが光の渦へと合流していた。
やがて、彼の者の肉体全てが、光へと帰するのだろう。

となれば、このままこの場に留まり続けることはできない。
いずれはこの胎内も分解されて、咲夜達の身は宙へと投げ出されてしまう。
そうなれば、渦巻く光の群れに呑まれて、グランチャーと運命を共にすることもあり得る。
そうなるわけにはいかなかった。

咲夜と共に、グランチャーの肉体が分解されていることを察した美鈴が、慌てて立ち上がりながら、呼びかける。

「・・・ここにはもういられませんね・・・向こうのブレンの身体はどうもなってないみたいだし、あっちの胎内に入れてもらいましょう！」

が、その声には、咲夜は返事を寄越さなかった。
ただ、どこを見るともなく宙に眼を向けて、急激に熱を失い始めたスリットウェハーの感触に身を委ね続けていた。

美鈴は、悲痛な声を吐き出して、もう一度彼女に呼びかける。

「さ・・・咲夜さんっ、もうお別れなんです。でも、彼の魂はきっと・・・っ」

そうして、スリットウェハーの溝を掴んでいた彼女の右腕の手首を

掴み、ひっぱろうとする。
その瞬間だった。
美鈴は、咲夜の微かな声を聞いた。
「さようなら・・・私のグランチャー」
「・・・・・・っ」
その声音に乗せられた諦観のような感情と、優しさに息を呑む美鈴に対し、我に帰ったかのように咲夜は言った。
「えぇ、いきましょう」
「あ・・・は、はいっ！」
ふたりは揃って、分解されていくグランチャーの身体から出ようと、穴をくぐって装甲の上へと出た。
そこには、事態を察して先に外に出ていたらしい、朱鷺子が待っていた。
どうやら、ブレンの胎内にくるようにこちらに呼びかけようとしていたらしい。
外は、周りが猛烈な勢いの光の渦となっているため、凄まじい突風でも吹き荒れているのではないかと考えていたが、実際はほとんど風はなかった。
そのことが、少し視線を横に向けただけで見える、この世の終わりというもののいくつかのあり方の、そのひとつであると思えるような、苛烈なる光の奔流との落差を感じさせる。

が、そんなことを気にしている場合ではなかった。
まだ咲夜達はグランチャーの装甲の上にいる。
衝動に駆られて、咲夜が装甲の縁から身を乗り出して下方を見てみると、グランチャーの身体の分解は予想以上に早いらしく、すでに両の太股の辺りまでがなくなってしまっていた。
急がなければならない。

すぐに乗り出した身を退いた咲夜は、美鈴共々、許しも聞かずにブレンの装甲へと乗り移りながら、朱鷺子に聞いた。

「そっちの・・・ブレンの方はどう?」

何がどうなのか、という部分を省いている、質問にならない質問であったが、朱鷺子は咲夜が何を聞いているのかすぐに察し、応えた。

「ブレンの方は大丈夫っ、何も起こってないみたいだよ」
「そう・・・失礼します」

そのまま奥まで進み、朱鷺子も連れてブレンの胎内へと入る中で、咲夜は考えた。

ブレンの身体は無事らしく、グランチャーの身体は光に還っていく。
これが意味することは何か・・・

オーガニックエナジー・・・いうなれば、アンチボディの生命そのものにまで還元されたグランチャーを、肉体を保っているブレンが吸収する・・・?
その可能性は、大分大きいような気がした。
・・・ということは、これから生まれてくる新しいアンチボディと

いうのは、このブレンパワードを元にしているのか？
となれば、段々とその姿・・・グランチャーとしての形を失いつつある彼の者の生命は、ブレンの生命の一部として、取り込まれる？

咲夜は、そんな仮説が、まるで自分の頭で考えた結果ではなく、どこかの誰かが一方的に脳内に注ぎ込んできたものであるように感じながら、哀しむことも、喚くことも怒ることもできない、まどろみのような絶望を感じた。

消えていくのは、グランチャーの生命。
救われるのは、ブレンの方。
グランチャーの生命が救われることは・・・なかった？

それはつまり、グランチャーを愛する咲夜の心が救われないことも意味していた。

咲夜達が胎内に入ると同時に、その場に残っていた香霖が安堵した様子で、
「皆無事だったか・・・よかったよ」
と声をかけてきた。

それには返事を寄越さず、咲夜と美鈴は、朱鷺子と共にブレンの胎内にもたれかかることにした。
アンチボディの胎内は思っていたよりも広く、四人が集まっても、窮屈さは勿論感じるが問題はないようだった。
これだけの人数が胎内にいれば、ブレンの調子もおかしくなるかもしれなかったが、すでに再リバイバルは始まり、大分段階を踏んでいる状態になっていたので、今更中断されることもないようだった。

今更座りこむわけにもいかず、立ったままスリットウェハーの壁面にもたれかかった咲夜。
美鈴と朱鷺子も同じようにし、香霖も、誰もが皆立っているため、自分だけ座っているのも居心地が悪いと思い立ち上がった。
咲夜達が胎内に入ったのを確認したのか、ブレンが開いていた装甲を再び閉ざす。
最初から彼の者達は、ブレンとグランチャー、いずれかの肉体が分解されるのが分かっていたようだ。
もっとも、それも今の今になってのことだろうが。

装甲が閉じると同時に、スリットウェハーがスライドして穴が埋まり、そこに外の光景が再び映し出された。
そこから網膜に焼きついてくるその姿に、咲夜は息を呑むしかなかった。
のみならず、美鈴も朱鷺子も、香霖も、揃って衝撃を受けていた。

グランチャーの身体の分解は尚も進み、すでに腰のあたりまで光に還元されている。
今分かったことだが、消え去っていく最中の身体の断面から、今周囲を渦巻いている光と同じ白いような、あるいは緑色のような粒子が吹きだしていた。
そうしてその光が発生した地点から、グランチャーの肉体が消滅していっている。
分かり切っていることではあるが、あれは、ビットが還元されている光なのだ。

腰まで達していた還元の光の断面は、既に咲夜達のいた胎内も過ぎ去っていたらしく、眼の前にはもうその見る影もなくなっていた。
残っているのは、グランチャーあの頭から、腹までだ。

咲夜達が出てから、まだ五分とも経っていない。
まさかこんなところで、危機一髪、九死一生という言葉が脳裏に浮かぶとは思わなかった。

が、後もう少しで死んでいたかもしれないという恐れなど、今の咲夜にとってはどうでもいいことだった。
彼女の眼の前では、グランチャーが光に還りその生命を終えようとしている。
今彼女が乗っているブレンの生命を助けるために。

光の断面が身体を上っていく速さは、やはり思っているよりもはるかに早い。
先程は腰に見えていたものが、いつの間にやら腹の辺りまで上っていた。
こうなれば、腹から胸、胸から頭と上り、やがて彼の者の身体が完全に消滅するのも、すぐのことなのだろう。
心の準備というものすらさせてくれない、風が過ぎ去るような死だ。

咲夜は思わず泣きそうになったが、決して涙を流しはしなかった。
まだ再リバイバルは完全に終わってはいない。
もしかしたらまた、何かが起こるかもしれないし、それに対処せざるを得ないことになるかもしれないのだ。
そのためにも、冷静さを保っておかなくてはいけなかった。
哀しみを受け入れ、涙を流すのは、全てのことがひと段落ついたその後でいい。
今はとにかく、眼の前の状況に対応することを第一に、冷静さを保ち、確かな視野を持ち続けなければならない。
それが、グランチャーに対する最大の礼儀であるはずなのだから。

ただ、本当にあっという間に、胸まで上った光の断面が、そのまま

グランチャーの顔をなぞる様に消し去っていこうとする中で、じっとこちらを見ていた彼の者の眼。
それを見返す咲夜の眼に、一切の哀しみがないかと聞かれれば、そんなことはあり得なかった。

そして、その眼もやがて光に還り、血の色に染まるアンチボディの姿が完全に消え去ったその後に残る、空虚な隙間を眺めるその眼から、本当に一滴の涙も流れなかったのかも、定かなことではなかった。

が、再リバイバルはまだ終わりではない。
そのことは、間違いないことだった。

「くる・・・くるぞ！」

香霖が叫んでいた。

グランチャーの消滅・・・即ち、彼の者の生命の全てがオーガニックエナジーに還元されたことを合図とするかのように、周囲をぐるぐると回遊していた光の群れが、その軌道を変化させた。
廻(めぐ)る渦の内径が段々と小さくなっていき、その分光の密度をより高くし、強烈な光と化しながらブレンを取り囲もうとしていた。

「呑みこまれる・・・いや、もう呑みこまれてた・・・！」

美鈴が思わず呻いた。

轟々と鳴り響く潮流の音のようなものさえ響かせながら、最早暴力

的とさえ言っていい光が近づいてくるのを見れば、さすがに誰しも恐怖を感じた。
だがそれは、間違ったことではないのだろう。

生きていれば、恐怖を感じることもある。
恐怖というのも、生きていることの証となるはずだ。
そして、生きることそのものには、まだ誰にも分からない神秘・・・
誰にも到達できていない領域がある。
神秘というのは、言いかえれば謎であり、深淵だ。
深淵の奥底を覗きこんだ時に、恐怖を感じるのは間違ったことではない。
そして、その恐怖を乗り越えて眼を凝らし、眼の前の深淵の向こうに何があるのかを知る。
それが、進化と呼ばれるものの一端ではないのだろうか。

そして咲夜は、それをやろうとしていた。
深淵と呼ぶにはあまりに眩しすぎる光の渦の中が迫り来る中で、その奥に何かを見つけようと・・・

そしてそれは、すぐに見えてきた。
眼を凝らす必要もなかったし、そもそも見る必要さえなかった。
彼女にとっては、肌で・・・心で感じ取れるものだった。

光の奔流が成す音にかき消されながら、咲夜は、誰にも聞こえないように呟いていた。

「グランの生命が・・・・・・笑っている・・・」

※

咲夜達の眼の前で起こっている事態の全容は、離れている魔理沙達の方がよく見えていた。
遠目からその全容を把握する中で、彼女は安堵した様子で大きなため息をひとつついてから、ブレンの胎内で呟いていた。

「何もかもリバイバルの光と同じだ・・・ひとまず、再リバイバルは無事に済みそうだぜ」

光の渦が一点に収束していくような様子も、リバイバルの時の光景とほとんど同じだ。
そうしてプレートからのリバイバルから考えれば、もう数分待っていれば、ビットが連結することで肉体を形成し、アンチボディが誕生する。
光の渦が狭くなっていく中で、グランチャーがいたはずの場所に何もいなくなっていたのを見た時にはさすがに不安になったが、一体のアンチボディを構築するために二体のアンチボディの肉体を捧げるというのなら、肉体が消滅することもおかしくはないだろう。
となれば、グランチャーに乗っていた咲夜達はどうなったということも考えてしまうのだが、彼女らのことだから、何とかしていると考えた。
この辺のことは魔理沙にはどうすることもできないことなので、いっそ難しく考えないことにしていた。

リバイバル自体は無事成功しそうなのだ。
問題があるとすれば、その後だった。

渦巻く光の向こうで、一体のアンチボディがその形を成しつつあるのを感じながら、魔理沙はさらに呟いていた。

「あいつがブレンになったならそれでよし・・・グランチャーが出てきたなら、それもそれでよし・・・あるいはもっと別の何かが出てきたのなら・・・
よろしくと挨拶してどうにかなってほしいな」

※

金属同士がぶつかり合うような音が、前後左右、上下を問わず至る所で響いている。
オーガニックエナジーが実体を持ちブレンの身体に張り付いて、戦いにより失われた部分を修復していた。
また、一部のオーガニックエナジーは光のままブレンに吸収され、彼の者の消耗した体力を補っているようだった。

「す・・・すっごぉい・・・」

朱鷺子が思わず感嘆を漏らしていた。
ブレンの身体が修復されていく様子を直接見ているわけではないが、彼の者の調子がみるみるうちに良くなっているのが分かるからこその感嘆だった。
それに、美鈴が続く。

「このブレンの身体が、治っていってるのか？」

それにさらに、香霖が続いた。

「身体を治すというならこの・・・金属が衝突するような音は何だ？頭の方からも聞こえてるんだが、ブレンは頭には特別ダメージを受けてなかったはずだが・・・」

そのことに関しては、誰も答は分からなかった。

とにかく、ブレンの身体の失われた部分が再生しているのは確かなものとして感じられた。

無くなっていたはずの片腕と片足が、適切な表現ではないかもしれないが、また生えてきているのである。

ここまでくれば、もう疑うべきところはほとんどなかった。

ブレンの肉体は再生されている。

それはつまり、再リバイバルが成功したということに他ならないのだ。

それが分かってしまえば香霖は、先程の疑問の声も忘れて、柄にもなく歓喜することを止めることができなかった。

外から見ただけでは大して嬉しそうな様子には見えないのだが、隣に立つ朱鷺子の肩をぽんぽんと叩く時の彼の顔は、普段はあまりに見せないものであった。

「上手くいったようだなぁ、朱鷺子・・・これで・・・」

と、呼びかけた香霖だったが、彼の声に対して、朱鷺子はまだ素直に喜ぶことが出来ていない様子だった。

微かに眼を見開き、怯えているような表情を浮かべている。

再リバイバルは成功するというのに、何故だろうかと考えた香霖だ

ったが、すぐに理由は分かった。
今自分達と共にいるこのブレンは、今までと同じ朱鷺子のブレンのままでいるのだろうか。
あるいは、まったく別のブレンとなっているのか。
そもそも、本当にブレンパワードなのかどうか。
それすらもまだ分かっていないのだ。
朱鷺子にとっては、ある意味でそれが一番大事なのかもしれない。
新たに生まれるこのアンチボディがまったく別のものであった時、自分達はどうやってその者と付き合っていけばいいのだろうか。
勿論、ひとつの生命として、まごころというものをもって共生していくべきなのだろうが・・・

「そうだな・・・まだ本当に終わったわけでは・・・」

彼女の気持ちを察した香霖がそう呟いた、その時だった。

突如この場にいる全ての者達が、ある声を聞いた。

それは、音響として響く声ではない。
ブレン、あるいはグランチャーと付き合っていた彼女達ならば、それがアンチボディ・・・今まさに誕生しようとしている、このアンチボディの声であることがすぐに分かった。

耳ではなく、心に響くその声を聞いた時、朱鷺子の顔は、これ以上ないほどに輝いた。
それが何を意味するのかは、彼女が本当に望むことを今しがた察したばかりの香霖には、当然のことのように分かることだった。

喜色満面といった様子の朱鷺子が、大声で、呼びかけてくる声に応える。

「ブレン・・・あたしのブレンだーっ！」

心に呼びかけてくるそのアンチボディの声は、今まで自分達と共に生きてきたブレンと、何も変わらないものであった。
声だけではない。その心もだ。
語りかけてくる声・・・ブレンは、朱鷺子と香霖のことを、しっかりと覚えてくれていた。
だからこそ、朱鷺子の歓喜も、より一層大きなものとなるのだ。

まるで奇跡のように感じられた。
朱鷺子にとっては、もう二度と会えないものだろうという考えが脳裏を過ぎっていた中での、ブレンとの再会だったのだ。
ブレンも同じく、永遠の別れと感じて言った最期の言葉が、何の意味もないことを喜んでいた。

そして今ようやく、再リバイバルは完了したといってもよかった。
まだ周囲には、段々と薄まってはいるが光の渦が残っているし、ブレンはまだ再生している最中だったが、もう何も起こることはないはずだったし、朱鷺子と香霖にとってはもう終わったも同然だった。
そしてそれは、彼女と彼にとっては、最も良い結果での幕引きだったのである。

香霖はさすがに彼らしい落ちついた態度を崩して、朱鷺子に呼びかけていた。

「やったじゃないか、この上ない結果だ！」
「あぁ、よかった・・・よかったよぉーっ」

そんなふたりの歓声が響いた、その次の瞬間だった。

「さ・・・咲夜さんっ？」

美鈴の慌てたような声が、隣の方から聞こえてきた。
それと共に朱鷺子達は、自分達がこうやって暢気に喜んでいる場合ではないということを思い出した。
ここにいるのは、自分達だけではない。
グランチャーと・・・その姿を消し、オーガニックエナジーの光に還っていったグランチャーと共に生きた、咲夜もいたのだ。
そのグランチャーは、どうなったのだ？

香霖がそう考えた時、ブレンの呼ぶ声が、朱鷺子にではなく、咲夜へと向いた。

そうして彼の者は言う。

覚えているのは、朱鷺子達のことだけではないんだ、と。

その声が心の奥底に響いてきた時、咲夜の嗚咽の混じった声が、光の渦の音も小さくなってきた胎内で、微かに響いた。

「グラン・・・グランチャーの・・・私のグランチャーの、面影がある・・・あの子に温もりの・・・っ
グランチャーは、ここで・・・この子の、中で・・・・・・確かに・

・・・っ」

「・・・・・・・っ」

その言葉を聞いた美鈴は、考えるよりも先に身体が動き、それ以上何も言えずに啜り泣く咲夜の身体を抱きしめていた。

再リバイバルが完了し、オーガニックエナジーの光も完全に消え失せ、新たなるブレンパワードが生まれようとしている今。この場で救われていない者は、ひとりとしていなかった。

誰もが皆、救われていたのだ。

第十六話　その7

二体の・・・いや、今やもう一体となったアンチボディを包みこんでいた光の渦が薄まって、いよいよ消えようとしていた。
疎らとなった光の粒子の向こう側に、ひとつの大きな影が見える。
それがアンチボディであることを確信した魔理沙は、胎内で叫んだ。

「よぉし、やったぜー！」

が、光が完全に消滅し、すなわち再リバイバルが完了した時、そこから現れたそのアンチボディの姿を見れば、思わず驚嘆してしまった。

「なんだ、あれ？」

驚いたのは、魔理沙だけではない。
オーガニックエナジーの波を伝って、輝夜の声も聞こえてきた。

（あれって、ブレンなの？グランチャーなの？）
「分からないぜ。あるいは、どちらでもないのか・・・？」
魔理沙が続けて言う。

彼女達の前に現れたそのアンチボディは、ブレンとも、グランチャーとも呼べない、どちらとも違う外見をしていた。
始めて見るアンチボディだ。

だからといって、まったく見当違いな見た目をしているというわけでもなく、ブレンの面影を感じさせる部分もあれば、グランチャーに見える部分もあった。
そういう意味では、確かにそれらの二体の生命が融合した個体らしかった。
体色に関しては、真っ赤な色をしていて、咲夜のグランチャーに近かった。

一体何者なのだろうか・・・
魔理沙がそう考えていた中、今度は霊夢の声が聞こえてくる。

（どうやらあいつ、ブレンみたいね）
「分かるのか？」
（いや、なんとなくだけど）
「なんとなくって・・・」

霊夢の、勘に頼った発言を訝しむ魔理沙に対して、さらにさとりが続けて言う。

（私も、あの子はブレンだと思いますよ）
「あんたもそう言うか？・・・うぅむ・・・」

こういう時の霊夢の発言というのは、いつも正しい。
霊夢の言う事は大体いつも物事の正解になる。
その上、ブレンパワードとの相性もいいらしいさとりも後押しするのだ。
もしかしたら、本当に彼女らの言う通りで、あのアンチボディはブレンなのかもしれなかった。

そして、それが本当かどうか確かめる方法はあった。

実に簡単な方法だ。

魔理沙達の疑問の答を知っているのは、実際にあのアンチボディの胎内にいる朱鷺子達と、咲夜達であるはずだ。

なら、彼女達から話を聞けば、あのアンチボディの正体など、あっという間に分かるはずだ。

「とりあえず、話を聞いてこよう・・・もしかしたら何かあるかもしれないから、その時はどうにかしてくれよ」

そう周りに伝えてから、魔理沙はブレンを件のアンチボディの下へと降下させていった。

そのまま、深紅のアンチボディの傍にまでブレンが寄ると、その場にじっと佇んでいたアンチボディの肩に手で触れた。

その時に気がついたが、このアンチボディ、身体の大きさがこちらのブレンに比べて僅かにだが小さい。比較的大きな身体をしているハクレイブレンとは逆だ。

二体のアンチボディの残り少ないオーガニックエナジーを合わせて生まれた者だから、小さくなるしかなかった、ということなのだろうか？

まあ、そういうことを考えるのは後にして、ひとまず魔理沙が、アンチボディの内部に呼びかける。

「朱鷺子、咲夜、香霖と・・・後、美鈴。みんな無事か？聞こえてるな？」

その声に、まず返事を寄越したのは香霖だった。

（あぁ、無事だ。全員ちゃんと五体無事でいる。ブレンも完全に蘇

った）

「ブレン？・・・そいつ、ブレンなのか？」

（そうだ。朱鷺子のブレンが、咲夜のグランチャーのオーガニックエナジーと意思をくみ取るようにして、再リバイバルしたんだ。だから、完全にブレンパワードそのものというわけでもなく、こいつの一部はグランチャーでもあるみたいだ）

「そうか・・・」

どうやら、霊夢の言う通りだったらしい。

が、ブレンでもある中で、グランチャーの性質も併せ持っている。そういう意味では確かに、どっちつかずでもあるようだ。

魔理沙は香霖の応答から、そのように考えた。

そうしてその声に、続けて応える。

「いやな、見た目が大分ブレンと変わってるものだから、まるで別物になっちゃったんじゃないかと思ったんだ・・・でもその様子なら、心配はいらなかったみたいだな」

その声には、朱鷺子の方が返してきた。

ブレンが生き返ったことで、すっかりご機嫌な様子だ。

（見た目が違うの？どんな風にっ？）

それには、魔理沙よりも先に咲夜が応えた。

その声は、魔理沙としては信じられないほどに穏やかな口調であった。

勿論それは、本来の咲夜の声の調子ではあったのだが、一度グランチャーに乗って、異様なまでの力を振り撒く彼女を知ってしまい、その声を聞けば、この声の主が本当に咲夜なのか疑いたくもなった。

（魔理沙に聞く必要はないでしょう?私達で、実際に見てみればいい）

そのようなこともあって、彼女の声を聞きながら息を呑んだ魔理沙だったが、ひとまず気を取り直して、続けて言った。

「あ、あぁ・・・そういうことだ。あたし達も一旦降りて、あんたらの様子を見させてもらうぜ」

（ん、分かったっ）

朱鷺子の元気な声が返ってくる。

※

妹紅は、ただじっと見ていた。
死にゆくはずだった二体のアンチボディが、宿主の想いを受けて、ひとつの新たな生命として繋がっていくその瞬間を、その眼で見、その肌、その翼で感じていた。

光が消え入るその瞬間、今まで閉ざされていた籠(かご)のようなものが開き、その奥から何かが溢れでるような気がした。そんな感覚があった。

それは喜びだ。

生命が続くことへの無上の感謝であるはずだった。

妹紅は確信した。
死を受け入れるアンチボディも、確かにいるだろう。
だがそれ以上に、生きることを拒む者などいないはずなのだ。
生命が続くのなら、それに勝ることなどない。

生きること。
それも彼の者達の、立派な価値のひとつであるはずなのだ。

そして・・・
死んでいったあのグランチャー。妹紅の友となるはずだったあの者にも、ああやって生きていて欲しかった。

妹紅にはもう、そのことで流せる涙はなかった。
彼女の中では、あるひとつの決意ができていた。
今まで固めようとして、できなかった意思だ。
その意思を貫き通すためには、あのグランチャーへの未練は、断ち切っておかなくてはならなかったのだ。

思い出まで消してしまう必要は、ないのだけれど・・・

※

朱鷺子達と新たに誕生したアンチボディ（ブレンパワードらしい）の再リバイバルを、遠くから見守っていた魔理沙達一同は、一旦森

の広場に降りて、揃って誕生した深紅のブレンの姿を眺めていた。
グランチャーにしてもブレンにしても、戦いの中で失っていたはずのブレンバー、あるいはソードエクステンションだったが、それらと同じようなものが、アンチボディの肉体そのものと一緒に構築されていた。右腕の装甲にひっかけられている。
見た目はブレンバーに似ているが、銃身が他に比べて短くなっていた。
さながら、銃身を切り詰めたショットガンのようだ。
再リバイバルによって、戦う力も取り戻した、ということなのだろう。

魔理沙にも勿論分かっていることだったが、人は見かけによらないという言葉がある。
そしてそれは、アンチボディに対しては特にそうだと言えるものだった。
例え見た目が特異でも、その心の声を聞けば、そのアンチボディがどういう者なのか、大まかに分かるのだ。

確かに眼前に佇むこの者は、ブレンパワードだ。
ブレンのもつ穏やかな気象というものを、肌で感じられるような気がした。

しかしその一方で、グランチャーの持つ、クールと呼べそうな気質もあるように思えた。
が、そのふたつの性質は、決して相反することもなく、目の前にいるこのブレンのただひとつの個性として成立していた。

「なぁるほどなあ～っ」

魔理沙は思わず、こんな感嘆を漏らしていた。

いやはや、再リバイバル自体は勿論、成功してくれなくては困るのだが、まさかここまでうまい具合にいってくれるとは思わなかった。朱鷺子と咲夜、両者のアンチボディの記憶までも受け継いでいるというのだから、尚更、文句なしだ。

しかし、文句なしの大成功のお陰で、問題が発生してしまったことも確かだった。

魔理沙は畏まった表情を浮かべると、朱鷺子達と咲夜達が集まっているところに歩み寄り、こう呼びかけていた。

「それはそうとして、このブレン、これからどうするんだ？」

「どうするって？」

と聞き返してくる朱鷺子に、魔理沙はさらに言う。

「二体のアンチボディから生まれたのは、こいつ一体だけなんだ・・・こいつの面倒は、どっちが見るんだぜ？」

「あ・・・そういや・・・」

朱鷺子が声を漏らす。

それに続いて、香霖も呟いていた。

「決めておかなくてはいけないんだよな・・・」

再リバイバルが成功したのはいいのだが、後は、このブレンの身の置き場所を考えておかなくてはならなかった。

この辺は、やはり魔理沙達が勝手に決めるわけにはいかず、朱鷺子達が考えた末に結論をつけておかなければならないのだろう。

しかもこのブレンは、朱鷺子のブレンは勿論、グランチャーの魂さえも受け継いでいるという。

となれば、両方とも愛着はあるはずだ。
いろいろ話し合って、折り合いをつけるべきところなのだろう。
もしかしたらそれは、再リバイバル自体よりも長くなってしまうのではないか？
が、そう考えていた矢先、魔理沙にとっては意外な声が聞こえてきた。
咲夜の声だ。
「朱鷺子さん・・・彼は、貴方と居させてあげた方がいいでしょう」
それには朱鷺子は勿論、魔理沙も聞き返していた。
「え？」
「いいのかよ？」
魔理沙としては、咲夜のグランチャーとは一度ならずと戦ってきたが、その力は並み大抵のものではなかった。
そうして、アンチボディの強さというのには、宿主との間の絆の力も関わっているはずなのだ。
即ち、咲夜とグランチャーの間の関係は、魔理沙が想像しているよりかは多分強固なものであるはずだったし、そんなグランチャーの面影を残すブレンに気があるのが、当然のことであるはずだったのだ。だから、そんな咲夜が、語弊があるかもしれないが、グランチャーのことを手放すようなことを言うのが、不思議でたまらなかった。
そんな考えを如実に表すような表情を浮かべる魔理沙と、もっと純粋に、愛する者の生命が繋がることの喜びを共有している咲夜がこ

う言うことが不思議な朱鷺子に対して、咲夜は続けて語った。

「彼はあくまでも、ブレンパワードなのです・・・なら、かつてブレンの宿主となっていた貴方と共にいるべきでしょう？
それに、私のグランチャーは、実際のところはもういない。
結局彼は、私のグランチャーとは違うのだから・・・」

「咲夜さん・・・」

朱鷺子には、咲夜のこの言葉が上っ面だけのものであることが、はっきりと分かっていた。
ブレンが復活する中で、誰よりも心豊かに、涙さえ流した彼女が、こんな台詞を心の底から言えるわけがなかった。
そんなことぐらいは、朱鷺子だって分かるのだ。
このブレンを傍に置いておきたいという気持ちは、もしかしたら咲夜の方が強いのかもしれなかった。

だからといって朱鷺子には、そんな咲夜の気持ちを汲み取って、彼女の申し出を断ることもできなかった。
そうするよりも前に、咲夜がこう続けていたからだ。

「お断りする必要はありませんよ・・・断ったところで、私の方から彼をここに置いていきますから」

それはつまり、断る必要がないというか、断るな、ということだった。

もしかしたら、彼女の方からこちらに気を遣っているのかもしれない。
となれば、ここまできて意固地にも断ってしまったら、逆に咲夜の

恥になってしまうだろう。
朱鷺子はもう何も言い返したりせず、ただこうとだけ応えた。
「・・・分かりました・・・ありがとう」
魔理沙はやはり戸惑ったままだったが、朱鷺子の方が納得できていたようなので、とりあえずこちらからも何も言わないでおくことにした。
と、今度は霊夢がこちらに歩み寄ってきていた。
一緒にさとりもついてきている。
そうして、何を言うかと思えば、彼女は藪から棒にこんな台詞を吐いた。
「つまる話は済んだのね？だったら、こいつの名前を決めておいた方がいいんじゃない？」
それに魔理沙は、頓狂な声を漏らしながら返した。
「名前ぇ？名前って、ブレンパワードでいいじゃないか。
今朱鷺子が乗るって決まったから、トキコブレンとかでさぁ」
それに、霊夢が言い返す。
「こいつは普通のブレンとはちょっと違うんだし、もっと違う名前をつけた方が、見映えもいいんじゃないかしら」
「見映えって・・・」
いつも通りの暢気な態度に呆れ返る魔理沙だったが、新たに誕生し

たこのアンチボディに、ブレンとは別の名前をつけようと考えているのは、実は魔理沙だけではなかった。

さとりが言う。

「でも、あの子はブレンだけじゃなくて、グランチャーでもあるんです。
グランチャーの生命の匂いというものを感じられるような名前を、つけてあげたいじゃないですか」

その声に、咲夜と朱鷺子のふたりが、納得した面持ちで続いた。

「確かに、そうですねぇ」
「ブレンであって、グランチャーでもあるってことが、分かるような名前ってことね」

まぁ、確かにその事自体は魔理沙にもよく分かる話だった。
ただ、あまりにも急に言われたものだから、拍子抜けしてしまっただけなのだ。
呆れるのはやめたが、まだその時の気分が抜けきれない彼女は、めんどくさそうな声で応えた。

「じゃあ、どんな名前にすればいいんだよ・・・ブレンとグランチャーが一緒になったんてんなら・・・
『ブレンチャー』とか？」

「・・・・・・あんた・・・」

安直にも程がある発想の名前に霊夢が絶句する中で、一方の朱鷺子と咲夜の方は、魔理沙の言ったこの名にも、そこまで辟易はしてい

ないようだった。

「ブレンチャーはアホみたいだけど・・・」

「アホとかいうな・・・」

呟きつつ、魔理沙の声を無視しながら、咲夜は深く思案し、黙りこんだ。

ブレンとグランチャーの両者を合わせた名前にするというのなら、逆にそれぐらい安直な方がよかったのかもしれない。

ブレンチャーというのも、響きはあまりにもあんまりだが、的を射ている名前ではあった。

だから、この名前をもっと改めればいいのかもしれない。

「チャ・・・チャ・・・チャ、イ・・・」

考えこむ中で、咲夜は今一度、自分のグランチャーの魂を宿したアンチボディに眼を向け、入れ替わるように、広場の中で佇立していた魔理沙達のブレンも見た。

いずれの者達も、とうとう紅くなり始めた空の色によく映える姿だ。

その時、あることが彼女の気を強く惹いた。

再リバイバルしたアンチボディの背丈が、他のブレンに比べて僅かに小さかったのだ。

その身長の違いはほんの１ｍにも満たないものだったのだが、眼で見るとその僅かな違いが大きな差に見えた。

その差に気づいた時、咲夜はふと思った。

あのアンチボディは、子供なのだ。

そう・・・子供だ。

再リバイバルが成す光の渦の中にいた時のことを思い出す。
その時も、彼女は考えていた。
新たに生まれてくるアンチボディは、グランチャーと、ブレンの息子（child）だと・・・

咲夜は無意識的に、呟いていた。

「ブレンの子供・・・」

そうして、今度は大きな声で、魔理沙達に対して呼びかけていた。

「『ブレンチャイルド』なんてのはどうかしら？」
「ブレン・・・チャイルドぉ？」
と、魔理沙がまたしても素っ頓狂な声を返す。

それに続くように、霊夢が深紅のアンチボディの姿を見上げながら言った。

「ブレンの子供ねぇ・・・まぁ、確かに見た目も子供っぽいけど・・・」

咲夜の言った名前だが、朱鷺子は大分気にいったようだった。

「ブレンチャイルドかぁ・・・いいんじゃないですかぁ？」

このアンチボディの宿主である彼女がこのようなことを言えば、他の者達としては反論のしようも、必要もなかった。

香霖が、場を纏めるように言う。

「なら、こいつはブレンチャイルドで決まりだな・・・いい名前じゃないかなぁ」

「それじゃぁ、改めて仲良くしようねぇ、私と咲夜さんのブレンチャイルドっ！」

そんな朱鷺子の弾けるような声が響くが、それに魔理沙が、冷やかすような声で横やりを入れた。

「でも、ブレンチャイルドじゃぁ、訳して言えば結局ブレンだな・・・・名前つけた意味無かったかもな」

それには、すぐさま、霊夢が言い返した。
それはある意味では、名前をわざわざ考えた行為の意味を完全に無かったものにする台詞であった。

「いーぃのよそういうことはぁ～っ。なんだかんだいってこいつはブレン寄りなんだから、ブレンって呼んでもいいでしょうが。いい名前なんだから」
「そりゃそうだが・・・」

相変わらず自分勝手で気まぐれな霊夢であったが、そういう彼女の言葉も、いい具合に作用してくれる時もある。
彼女のこの暢気な性格は、時として場を和やかにしてくれるものなのだ。

真っ直ぐに深紅のアンチボディ・・・ブレンチャイルドの姿を見上げた彼女は、へらへらと笑いながら、言った。

「ねぇ～、いい名前でしょうねぇ。子供なんて言うと、なんか愛着

も感じてきちゃうじゃない、あっはははははっ」

霊夢のその愉快そうな笑い声に、魔理沙やさとり、咲夜達もつられて笑ってしまっていた。

半分は、霊夢に対する苦笑いもあったのだが、もう半分は、全ての物事がうまくいったことに対する安堵からくる笑いでもあった。

しかし、そんな中で魔理沙は、まだ素直に笑うことができないでいた。

実を言うと、まだ決めるべきことがあったのを思い出したからだ。

そこまで重大な要件ではないのだが、きっちりと話をつけておかなくては、まだ大口を開けて笑うことはできなかった。

そして、彼女だけではない。

もう一人この状況において、素直に笑うことができず、苦し紛れといった様子で顔をひきつらせることしかできていない者がいた。

美鈴だ。

やるべきことがあるというのなら、彼女もそうだった。

彼女には、再リバイバルを無事に成功させるために、自分自身に課したある誓いがあった。

その誓いを、果たさなければならないのだ。

もちろん、自分で自分に決めた誓約など、すぐにでも破棄できるだろう。

今の咲夜は、とても幸せそうだ。

そんな彼女に対し、厳しい現実を突きつけるようなことをしていいものだろうか、という考えもある。

だが、たとえ厳しかろうとなんだろうと、真実は、いずれ教えてやらばければならなかった。

それは最早咲夜のためというよりも、美鈴自身のためにだ。

美鈴は今まで、ずっとそうやって・・・自分の頭だけで考えてきた約束を放り出してきた自分を、いい加減悔いていた。
もう、逃げるわけにはいかないのだ。

話すべきことを話し、伝えるべきことを伝える時はきた。
後は、そのタイミングを見計らうだけだ。

ブレンチャイルドの頭の上を飛びまわりながら、新たに生まれたアンチボディの写真をひとしきり撮り終えた文とはたても降りてきて、輪の中に加わってきた。

「愉悦至極といった感じですねぇ、どうしたんです？」
と聞く文に、魔理沙が応える。

「こいつの名前を決めてたんだよ」
「へぇ～、名前をっ・・・なんて言うんです？」

※

和やかな雰囲気の咲夜達。
その輪の中に、妹紅は入ることができないでいた。

何故かと聞かれれば、彼女の中のある決意がそうさせているからだ。
彼女は、その決意のために、自分があの輪の中に入るべきではない

と考えていたのだ。

距離を置いて咲夜達の方を眺めていた妹紅の傍らには、輝夜と永琳がいた。

改めて考えれば、妹紅と同じ不死の境遇の中にあり、彼女のよき理解者であるはずの者達だ。

彼女らは、様子のおかしい妹紅のことを気遣っていた。

じっと咲夜達の方を眺め、時折ブレンチャイルドの、ブレンともグランチャーとも違うが、両方の面影を残す顔を見ながら立ち尽くしていた妹紅の背中を叩く輝夜。

正直痛がらせるつもりで叩いたとしか思えないような力が込められていて、妹紅は思わず

「う・・・っ」

と呻いた。

いつもならここで喧嘩のひとつでも始めるところなのだが、今の彼女はそんな心境ではなかった。

それに、そもそもすぐ近くに何人も人妖がいる中で、キレるわけにもいかなかった。

そんな事情を知ってか知らずか、スキンシップのつもりだった輝夜が、笑いながら言った。

「羨ましそうにしてるんなら、あん中に入ればいいだけじゃないのさぁ」

輝夜の方に振り返りその顔を見据えながら、彼女の声を聞いた妹紅だったが、暗い表情を浮かべると逃げるように視線を逸らした。

黙りこんで、応えることもない。

「どうしたの？」

さすがに永琳が心配そうに呼びかけてきたところで、ようやく返事をすることができた。

「いや・・・なんでも・・・・・・別に羨ましかったわけじゃない。いいんだよ、あいつらのところにはいなくて・・・」

かなり深刻に考え込んでいるらしい妹紅の様子を見れば、輝夜もさすがに軽口を叩けなくなった。
彼女まで心配そうな顔をして、妹紅に言う。

「なに落ち込んでんのよ・・・大丈夫？」

その言葉と共に、妹紅の身体がぴくりと微かに震えた。
それが何を意味しているのか輝夜には分からなかったが、彼女の眼には、今まで沈痛な顔をしていた妹紅が急に笑顔を浮かべてこちらを向き直すのが見えた。
そうしてその耳には、彼女がこう言う声が聞こえた。

「なんでもないって、何度も言わないと分からないのか？なんでもないんだって」

勿論輝夜には妹紅の浮かべているのが作り笑いであることも、語る言葉がその場しのぎであることも分かっていた。
しかし、作り物だろうとなんだろうと笑顔を浮かべているということは、こちらに、本当になんでもないのだと納得してほしいということなのだ。
輝夜は、自分が気遣いというものができる者だと心得ていたつもりだったし、実際、そこら辺の自分勝手な妖怪に比べればそうだった。
人の気持ちぐらいは分かってやらなければ、威厳というものは出せ

ないのだ。

だから輝夜は、これ以上詮索するような真似はしないことにした。訝しげな表情は消せないながらも、いつも彼女が妹紅にするような、小馬鹿にした態度で言い放つ。

「あっ、そおかいっ。ころころ顔色変えちゃって、気色悪いなぁもう」

永琳の方も空気を読んで、笑顔で言う。

「なんでもないならそれでいいのです」

ふたりの声を聞いた妹紅は、軽く頷くと、続けてこう言った。

「そうだなぁ。遠巻きに見てるのもあれだし、やっぱわたし達も、向こうの仲間に入れてもらおうかな」

「そうしましょ」

そうして妹紅達も、咲夜達の輪の中に入れてもらおうと、歩み寄っていった。

輝夜達は、妹紅のよき理解者であるべきだったし、実際そうであった。

だがそれでも、彼女の中にある心の全てを、読み取ることはできなかった。

輝夜は妹紅が落ち込んでいると言っていたが、彼女は決して落ち込

んでいたわけではないのだ。
ただ、自分の中にある何かが反応してうち震え、そこから火焔のように熱く滾るものが湧き出ているのを、抑えようとしていただけなのだ。
それは、ある意味で歓喜でもあったし、そのものが持つ熱の性質で言えば、怒りとも言えるものでもあった。

※

咲夜達は、ブレンチャイルドを眺めながら、いろいろと話をしていた。

「にしても、身体の色は紅いのね、そこはグランチャー譲りなのねぇ」と霊夢。

それに朱鷺子が返す。

「紅い色もいいよ。生きてる色だからねぇ」
「そりゃ、いいわよ、悪いなんて言ってないわ。ってかあたしも紅いし」
と言う霊夢に、咲夜が続く。

「そう。紅色は、生命が見せる最も鮮やかで、恐ろしい色よ。そして、眼にもはっきり見えるしね。
生命が自己主張している色なのよ」

そんな言葉を聞き流しつつ、はたてが話を変える。

「にっしても、あのブレン、大人しいですねぇ～・・・生まれたてのブレンって、おぎゃあおぎゃあ泣いてるのが普通だそうじゃないですか」

それにはまた朱鷺子が、無駄に誇らしげに応える。

「あたしのブレンは、大人しいからね。あたしが本読んでる時も何も言わないし」

さらに、咲夜が続く。

「そんなブレンに、私のグランチャーの性格が混ざり合ったのなら、大人しくもなりますよ」

それを聞いた文が、へらへらと笑う。

「あややや、よくもいいますねぇ」

それにさとりが同じく笑顔を浮かべながら続く。

「自分達でそんなこと言っても、間抜けなだけですよね」

「・・・・・さとりさん。今さっき馬鹿にしてた私が言うのもなんですけど、貴方ちょっとだけ性格悪くなってません？」

「嫌ですか？」

「・・・いやぁ・・・嫌じゃないけどぉ・・・」

取り留めのない話が、長く続きそうだった。

話を切りだすタイミングを覗っていた魔理沙としては、こんな、正直どうでもいい話が終わるまで待っているわけにもいかなかった。

先程はそれほど重大でもないと考えてはいたが、決めるべきことであるのは間違いないのだ。

彼女はこの際なので、会話の端を折ってでも、最後に残っていたその議題を切りだすことにした。

大声を出して、魔理沙は言う。

「ちょっとぉー！まだひとつだけ決めてないことがあったんだっ」

「なんですぅ？」

文がこう聞いてくる中で、魔理沙はその問いかけてくる声に応えた。

「朱鷺子。あんたがこのブレンに乗るんなら、あたし達のいる地底にまで来てくれないか？」

第十六話　その8

「地底に・・・？」

案の定ではあるが、朱鷺子が聞き返してきた。
それと一緒に、香霖も思い出したように呟く。
「確か、困ったらいつでも地底に来いという話ではあったが・・・」
それに、彼らにそう言った当人である文が、にっこり笑って応える。
「はいぃ♪その通りです」
「・・・ブレンパワードとして再リバイバルしたなら、ブレン達のいる場所にいくのも、そりゃ当然かもしれないが・・・」
「でも・・・」
言いながらも、香霖も朱鷺子も、魔理沙の頼みをすぐには聞き入れない様子だった。
どうしたのだろうか。
何か理由でもあって、答えを渋っているのか？
一体どんな理由が？
そんなことを考えながら、
「どうした？」
と問う魔理沙に応えたのは、香霖でも朱鷺子でもなかった。

咲夜だ。

「魔理沙達には申し訳ないことを言うようだけど、朱鷺子さんに、ひとつ頼みたいことがあります。
また一方的なお願いになってしまいますが・・・」

「なにぃ～？」

今回は間抜けな役回りになってしまっているのか、またまた素っ頓狂な声をあげた魔理沙のことは気にせず、朱鷺子が咲夜の声に応える。
その表情は、咲夜の言わんとしていることをすでに理解していることを暗に示しているようだった。
いや、実際そうだったのだ。

「ん・・・分かってるよ」

そんな返事を聞いた咲夜は、軽く頷きつつも、確認のためにあえて声に出してその頼みというのを伝えた。

「このブレンチャイルドは、ブレンにも、グランチャーにも与(くみ)することがないようにして欲しいの」

「なぁにぃっ？」

魔理沙が、先程と同じ台詞を、抑揚を変えて吐く。今度は驚嘆としてのニュアンスがあった。
それに続いて、落ちついているというか、驚くことをめんどくさがっている様子で、霊夢が続いた。

「なんでさ」

それに、咲夜が応える。

「ブレンチャイルドには、私のグランチャーの魂も宿っている。ブレンチャイルドというこの名は、そういう意味を込めてつけたものなのでしょう？
だから・・・ブレンチャイルドは、確かに今もグランチャーとして生きているはず。
そして、かつて一緒に戦った仲間を相手にするのは、忍びないでしょう。そういうことは、させたくない。
勿論、だからってグランチャーの側に立って、貴方方と戦うのも、ブレンとしての性質に反し、貴方方に対する怨を仇で返すことになります」

この咲夜の言葉は、朱鷺子と香霖もそのまま理解しているようだった。
先程魔理沙の頼みに応えなかったのは、こういうことを考えているからこそだったのだ。
そして今、咲夜の後押しを受けた彼女も、続けて言う。
「そういうことなんだよ。だから、ごめんとは思うけど、貴方達のお手伝いはできないよ」

両者の言葉を受けた魔理沙は、しばらくぽかんと口を開けていたが、途端にバツが悪そうに頭をぽりぽりと掻きはじめていた。
もっともそれは、ふたりの言葉を聞き入れるつもりがないからではない。
彼女は
「・・・まぁ、言わんとしていることは分かる・・・・・・なるほどなぁ～・・・」
と、納得はできている様子で呟いた。

それに、さとりが続いた。
「よく分かるお話です」

文も続く。
「そりゃ、グランチャーがグランチャーと戦うためにブレンを手伝うなんてのは、おかしなことですからねぇ～。さもありなんですよぉ」

こういうことを言うというのは、咲夜のこの頼みと、頼みを聞く前からそれを受け入れていた朱鷺子を批難する意思はないということだった。

彼女達の態度を見た咲夜は、申し訳なさそうな顔を浮かべつつ、応えた。
「貴方方でも許して頂けるのでしたら、本当にありがとうございます。
どちら側にもつかないという、私達の選択を．．．」

その時だった。
この場に、ひとつの叫び声が、一時の風のように吹き付ける音響となって通過する。

「咲夜、あんたは！」

それは、妹紅の叫びであった。
びっくりした魔理沙と霊夢の後ろから、力強い足取りで歩み寄ってきた妹紅が、二人の身体を押しのけながら咲夜の前にまで躍り出てきた。
「お、おいっ？」
「なにすんのよぉ」

突然押しのけられたものだから、さすがにむすっとした表情で妹紅を問いただす二人だったが、彼女はそれを一切無視した。
ただ、咲夜のすぐ眼の前にまで近づくと、彼女の顔をじっと見つめるばかりだった。

彼女は、他の者達同様、突然現れた妹紅に驚いていたし、何故急にこちらに歩み寄ってきて、しかも、睨みつけるような視線を送ってくるのかも分からなかった。
しかし一方で、どこか理解できるような気もしていた。
咲夜は、妹紅がかつてグランチャーに乗って、同じようにグランチャーを失う気分を経験したのだということは知らない。
再リバイバルの件がなかったことを考えると、咲夜よりも酷い気分を体験したことを。

ただ事ではない意思を秘め、瞳の奥底に炎を宿すその視線に射ぬかれ、さすがの咲夜も緊張してしまっていた。
それでも、落ちついた様子で、僅かに背丈の低い妹紅を悠然と見下ろしながら聞いた。

「・・・どうなさったのです？」

それには妹紅は、何も応えなかった。
じっとこちらを見つめてくる彼女の視線を浴びる中で、咲夜は不可解な感覚を受けていた。
妹紅は、こちらを見ているはずなのに、こちらを見ていない。
彼女の放つ視線は、確かにこの身に当たっていたが、留まっていたわけではない。
一条の線となった視線は、ただ当たるだけで身体を反射し、妹紅の眼の奥へと戻っているようだった。

そう・・・彼女は、こちらを見ることで、まるで鏡に映すように自分自身を見ていたのだ。
勿論、咲夜は鏡などではない。
何故こんなことを感じてしまったのか、彼女には分からなかった。

ただ彼女は、この奇妙な感覚の正体を知るより前に、妹紅が申し訳なさそうに視線を逸らすのを見た。
そうして、静かに語る声を聞いた。

「・・・いや・・・どうしたってわけじゃない・・・
あんたはあんたで、そういうことを選んだってことなんだな・・・・
・・それはいい」
「・・・・・・」

突然こんなことを言われて、その発言の意図を察することなど・・・
ましてや、妹紅の中の真意を察することなど、誰にもできることではない。

咲夜の脳裏ではただ、妹紅の語ったある言葉が、やけに大きな反響となって幾度となく廻るばかりだった。

選んだ・・・選ぶ・・・選択・・・
何故妹紅はこんな言葉を使ったのだろう。
彼女もまた、何かを選択しているから？

そんな思考がぐるぐると頭の中で回る中、咲夜ができた返事は、せいぜいこんなものだった。

「・・・はい」

そんな、あまりに簡単すぎる返事を聞いた妹紅は、もう一度ちらりとだけ咲夜の方を見ながら、またすぐにその眼を逸らすと、
「驚かせるようなことをして、済まなかった」
とだけ言い残して、彼女から．．．のみならず、魔理沙達からも、逃げるように離れていった。

「なんでぇあいつ？」
去っていくその背を見やりながら、魔理沙がぼけーっとした顔で呟くのを端で聞きつつ、妹紅と共に咲夜達のところにきていた輝夜と永琳は、もうその背中についていくのはやめることにした。
今、妹紅の気持ちを察することができない自分達に気づいたからだ。
妹紅に対して何をすればいいのか。そもそも本当に何かするべきなのかさえ、分からなかったのだから。
もし今やるべきことがあるというのなら、それは、広場の隅の方へと歩いていく彼女の姿を眼だけで追いかけることだけだった。

輝夜達と同じく、魔理沙も妹紅が去っていく様子を眺めていたが、彼女の考えていることが到底理解できなかったため、早々に見るのはやめることにした。
ひとまず、気をとり直して咲夜と朱鷺子に対して言う。

「まぁ、あんたらの言いたいこともよく分かるし、こっちに協力しないならそれもいいぜ。
それじゃ、あのブレンはここに置いとくんだな？」
「うん」

これでようやく、決めるべきことはあらかた決まったわけだ。

折角新たに誕生したブレンチャイルドがこちら側についてくれないというのは、現実的かつ戦力的な見方をすれば残念なことではあったが、だからといって朱鷺子と咲夜の考えを無視するわけにもいかない。
それに、美鈴の頼みがなければ、再リバイバルだってそもそも行えなかったのだ。
無事再リバイバルが成功しただけでも、万歳三唱してもいいぐらいだ。

そんなことを考えてひとまず納得しつつ、ふと空をチラリと見上げてみると、そこには既に一面の赤色が広がっていた。
それももうじきに紺色の闇に染まってしまいそうだった。
実際、今この瞬間に森の上に飛び出せば、東の空はもう暗くなり始め、幽し月も見えてくるだろう。

思いの外時間がかかってしまった。
やることもやり、決めることも決めたのなら、そろそろ自分達は地底に帰る頃合いだ。

「なら、あたし達の方はこれで帰らせてもらうぜ．．．あんたらは地底にこなくていいが、もしまた危ないことになったら、一目散に逃げてくればいい。
そんときは、どうにかして助けるから」
「分かった」
「頼む」

朱鷺子と香霖の返事を聞いた魔理沙は、次いで咲夜と美鈴に呼びかけていた。
彼女らはここに来る前はグランチャーに乗っていたが、今はもうそのグランチャーもいなかった。

いや、いるにはいるのだが・・・

「あんたらも、紅魔館にまで送ってやるよ・・・えぇーっと、誰のブレンに乗ってもらおうか・・・」

と、すでにふたりがどのブレンに乗るかという算段をする中で言った魔理沙の声に対する美鈴の返事は、予想外のものだった。

「ちょっと、待ってくださいますか？」

「んえ？」

突然何事か、と聞き返す魔理沙に対し、美鈴は続けて言った。

「咲夜さんと、話したいことがあるんです。大事な話で、皆さんには聞いてほしくないことなんです。

少しの間、時間を頂けないでしょうか」

「話・・・？」

その言葉に聞き返していたのは、他ならぬ咲夜だ。

美鈴から話があるということは、今しがた始めて聞いたことだった。

戸惑う彼女は置いておいて、魔理沙の方は別段この美鈴の頼みを突っぱねるつもりはなかった。

いろいろと頼んでばかりいる美鈴のことを呆れるような気持ちはあったが。

「こっちとしては構わないけど・・・なぁ？」

そんな返事と共に、急に同意を求められたさとりが、

「え？・・・えぇ、どうぞお気が済むまで話せばよろしいかと」

と続いた。

それを聞いた美鈴は、次いで咲夜の方を振り返り、言った。

「咲夜さんも、あまりに急だから戸惑っているかもしれませんが、どうか私の声を聞いてください・・・あっちにいきましょう」

それには咲夜当人は、こう返事した。

「・・・分かったわ・・・貴方の言葉なら、何であろうと聞き入れましょう」

その返事を聞く時の美鈴の顔には、何か、普通ではない意思が見えていたような気がした。

それが、咲夜の言葉を訝しむような印象を、彼女自身に与えていた。

何事かも分からないままに、咲夜は歩きだす美鈴の背中についていき、魔理沙達から離れるように、今しがた妹紅が去っていったのとは別の方向、広場の隅へと向かった。

そのまま、何本かの木々の脇をすり抜けて広場そのものから出て、少しだけ森の奥へと分け入っていく。

いくつかの木が視界を遮り、やがて、自分達が先程までいた広場の様子がほとんど覗えなくなっていた。

それはつまり、広場の方からもこちらは見えないということだった。

これで、魔理沙達にもこちらの様子は見えないことを確認した美鈴。

そうして咲夜は、美鈴のいう大事な話というものをする用意ができたらしいことを察し、すぐさま彼女に問いただすことにした。

「美鈴・・・大事な話って？」

その咲夜の言葉に、美鈴は険しい表情を浮かべながら、真っ直ぐに彼女の顔を見据えてきた。
何かを言おうと・・・自分の語る大事な話というものを話そうと、真一文字に噤んだ口元がもごもご動くのだが、何故だかその口が開くことがなかった。

咲夜の知ることではないが、いざこの局面になると、話す勇気が美鈴にはまだ足りなかったのだ。
話すだけなら、それこそ一瞬だろうが、その一瞬を過ぎた先に待つものが何なのかが分からなくて、言いようのない不安と恐れが胸中に充満していた。

だが、美鈴はこの感情に負けて、逃げることはもうやめにしたのだ。
だからこそ、こうやって咲夜をここまで呼び出して、話さなければどうしようもない状況へと、いわば自分を追いこんでいた。
ここまで来て、しかも、大事な話があるといって置いて結局何も話さないなどという選択肢は、当然美鈴にはなかった。
だから彼女にはもう、話すしかなくなっていたのである。
適当なことを言ってその場を切り抜けるなどという考えも、今の彼女には、ありはしなかった。

いつぞや、自分の肩に突き刺さったナイフの痛みを思い出し、指先が微かに震える中で、それでも咲夜の顔を見据える眼を逸らすようなことをしなかった美鈴は、意を決して、震えていた口を開くと、ひと息に言った。

「咲夜さん、よく・・・よく聞いてください」
「・・・・・・」

「魔理沙達が貴方のグランチャーを襲ったのは・・・あれは、私があいつらに頼んだことなんです」

「・・・・・・な、ん・・・今、なんて？」

咲夜には一瞬、美鈴がなんと言ったのか理解できなかった。

だがそれは、理性的に、理知的に考えていた中でのことだった。

要は、頭で考える範囲でだ。

しかしながら、全身の筋肉が強張り、のみならず心臓さえも、本来するべき動きとはまるで違う動作をしているのを我が身のこととして感じるということはつまり、彼女は本能的には、美鈴の語った言葉の意味を瞬時に考え、そして理解したということに他ならなかった。

頭ではなく、身体で考えられることとして。

ぼんやりとしていた表情がみるみるうちにひきつっていき、眼が見開かれる様は、美鈴でなくとも、事の事情を知る者には痛ましく見えるだろう。

微かな震え以外には、一切動くことができていない咲夜に対し、美鈴が続ける。

「私が、グランチャーを殺めるために魔理沙達に頼んだのです。それだけじゃありません。ブレンの襲撃があったその日、私が咲夜さんに手紙を出して、湖の畔（ほとり）にまで呼んだでしょう？

あれも、貴方をグランチャーから離して、宿主のいなくなったグランチャーを確実に撃破するためで・・・

だから・・・その・・・
咲夜さん・・・貴方がグランチャーに乗ることで、何だか人が変わったように感じて、それをどうにかしたくて・・・・・・」

咲夜はまだ固まったままだった。
美鈴の語る言葉を理解していながらも、そのことを受け入れることができず、彼女の心の内は、理屈と感情がぶつかり合い、せめぎあい、だからこそ不動となっていた。
揺れ動くことさえなかった。

そんな咲夜の姿から眼を逸らさないようにしようと心に決めていた美鈴だったが、どうしてもそれはできなかった。

見開いたままこちらを見つめる咲夜の眼。
そこに少しずつ、混乱とは違ったものが見えてきたような気がしたからだ。
それが何なのか、美鈴は直感的に察した。
だからこそ、彼女の眼を見続けることができなかったのだ。

「・・・・・・」

言葉を連ねていた口の動きも止まりそうになるが、そうはいかなかった。
咲夜がどんな眼でこちらを見ていようが、そう見られて仕方がないだけのことを美鈴はしたのだから。
せめて、やらなければならないと心に決めたことは、やり通さなければならない。
やること自体は、いともたやすいことではないか。

だからこそ美鈴は続けた。

叫ぶように言った。

「だ、だからっ！悪いのは全部私で・・・私のせいでグランチャーは死ぬことになってしまったんです！
私が、グランチャーを眼の仇にしなければ、こんなことにはならずに済んだんです！
だから、私のことは、好きなようにしてくれていいんです・・・っ。
殺してくれても構わないんですっ。
いつかみたいに、ナイフを突き刺してくれても・・・！」

それだけ言い終えると、美鈴は俯き、きつく眼を閉じて、呻くだけになっていた。
この先自分が受けるのであろう仕打ちを待つためだ。
彼女のやったことは全て咲夜のためを想ってのことだったし、そのことを弁明することもできたが、そうはしなかった。
理由がなんであれ、事実は変わらないのだ。
美鈴は、グランチャーを殺めようとしたし、それは成功した。
その結果が再リバイバルであったのだが、それがなければ、あのままグランチャーは死んでいたのである。

先には、再リバイバルがあるからこそ許してもらえるかもしれないという希望をもっていた美鈴だったが、今となってはその希望も失っていた。
もう自分に残される道は、このまま咲夜に殺されるなり、軽蔑されたまま紅魔館より居場所を失うことだけだった。
が、もうそれでいいのかもしれなかった。
だからこそ美鈴は、じっと動かず、待ったのだ。

だが、どれだけ待っても、自分の身体に銀色のナイフが突き刺され、鮮血と共に生命を吹きだすようなことはなかった。
実際はほんの一分足らずだろうが、美鈴にとっては五分にも感じられる時間を経ても、自分の身体に痛みが駆け巡るようなことはない。

「・・・・・・っ？」

恐る恐る眼を開き、俯いたまま上目づかいに咲夜の表情を覗った美鈴は、息を呑んだ。
その眼に映る咲夜の表情の、言いようのない雰囲気にだ。
最早形容のしようもない、怒っているのか、哀しんでいるのか、下手すれば喜んでいるかもしれないと思えるような、人間の感じ得るありとあらゆる感情がひとつに結集したかのような表情で、こちらを見据えていた。
美鈴には、何故彼女がこんな顔をするのか、今咲夜が何を考えているのか、まったく分からなかった。

咲夜の心の中では、今この時までの、美鈴といた時の記憶が走馬灯のごとく・・・彼女と始めて出逢った時から、真実を聞かされた今この時までの全ての記憶が、フィルムを高速で回すように脳裏のスクリーンに映し出される。
何故そんなことになるのかは、咲夜自身にさえ分からなかった。
走馬灯・・・時間を超越した人の追憶の存在は知っていた。
しかしそういうものは、自分の生命の終わり際とか、そういう時に見るものではないのか？
まさか、美鈴の言葉を聞いただけで、自分の生命が終わるわけでもなかろうに・・・
終わるとすればそれはもっと別の、何かだ。

いつぞや・・・いつなのか分からないほどに昔見た美鈴の顔が、今まさに眼の前にあるように見え、愕然としている今の美鈴の表情と重なりあった。

ただひとつ、咲夜にぼんやりと感じられたことは、その美鈴との記憶の走馬灯が、咲夜自身が美鈴の言葉をゆっくりと理解する中で沸き立つ、憤りや、欺瞞、憎悪という感情を抑えつけていることだった。

グランチャーを殺めるように仕向けていた。それが美鈴だった。

その認識は、咲夜にとってはこの上ない仇(あだ)であった。

あの美鈴がそれをやったということが、尚更許せなかった。

要するに、今の今こうやって真実を語るまでの間、彼女はずっと自分の行いを隠し、のうのうとこちらの傍にい続けたのだから。

グランチャーの再リバイバルの前に感じた彼女の腕の感触も、今では氷のような冷やかさと痛さと、気味の悪さを感じていた。

だがその一方で、確かに思い出すこともある。

彼女の腕は、氷のように冷たくも、温かかったのだ。

咲夜は、憎しみだけのために美鈴の言う通りにして、彼女に衝動的な仕打ちをするよりも前に、思い出すことにしたのだ。

美鈴がどういう妖怪であったのかを。自分と美鈴の間にあるものが、一体なんであったのかを・・・

きっと、脳裏をよぎるこの記憶は・・・心の眼に見える像と共に聞こえるその声の数々は、そのためのものだったのだ。

耳を澄ませば、はっきりと聞こえてくる・・・

※

「へぇ～っ、貴方が、十六夜　咲夜って人間ね？私は紅　美鈴っていうの、よろしくっ」

「貴方も、レミリアお嬢様に惹かれてついてきたのね。私はこの館の門番をさせてもらっててね。貴方は？
・・・へぇ～、メイドさん？」

「・・・・・あ、あんたなんでそんなにテキパキ動けるのっ？まるで時間でも止めてるみたい・・・え？ホントに止めてる・・・なにそれすごい！貴方、私より全然すごいじゃない！
咲夜、いいや、咲夜さん！私はあなたのこと、一生尊敬しますよぉ～！」

「ホント、咲夜さんはすごいですねぇ～・・・こんなにちっこいのに。
えらいっ！頭なでなでしたげますねっ。
ほ～れよしよし、よしよぉ～し・・・よしよｓ・・・痛っ！ナ、ナイフを刺さないでください！」

「ぐぅ・・・・・ぐぅ～・・・・・・
はっ！

あ、いえっ！これはですね、一種の精神統一で、決して！居眠りじゃないんですよぉ～っほっほっほっほっほ～・・・門番の仕事はちゃんとしてますからねぇ～」

「咲夜さん・・・なんだか、背が高くなりましたね。ちょっと前までは、あんなにちっこかったのに・・・
私は妖怪だから、いつまで経ってもこのまんまなんですよ。
・・・・・・
多分咲夜さんは、私より早く死ぬんでしょうねぇ・・・・・・そうですよね・・・
そうかぁ・・・私より・・・・・・」

「ここはどこなんでしょうねぇ・・・パチュリー様の話じゃ、幻想郷とかいう別世界だそうですけど・・・
にしてもここ、随分と貧相なところですね・・・ロンドンに比べて百年は劣ってますよ」

「この世界にも妖怪がいたなんてねぇ～っ。お嬢様も、ここの妖怪と上手い具合にやっていこうと、英断なされたし・・・
で、その結果がこれなんですか。『スペルカード』って・・・なんなんでしょうねぇ？」

「咲夜さぁ～～んっ、弾幕なんて私無理ですよぅ！え？がんばれ・・・は、はい。咲夜さんに応援されれば、できるような気がします。
よぉし、やるぞっ！」

「さ・・・咲夜さぁーーん！なんか館に、変な二人組がきて・・・あれってもしかして、噂に名高い博麗の・・・・・・・って、咲夜さん大丈夫ですかっ！？あぁ～っ、貴方までやられるなんて・・・きっとお嬢様を止めに来たんだ。大丈夫なのでしょうか・・・え？咲夜さん、またいくんですか？そうですか・・・私はもうすっかりへばってしまって、ご一緒できそうにないです・・・頑張ってください、怪我しないように・・・」

「あっ、咲夜さん、おかえりなさい！寒かったでしょう、大丈夫でしたか？異変はどうでした？あぁ、またあいつが・・・いやはや、働きものですねぇ。まぁ、これでこの冬もじきに終わりってことですね。ほら、寒いでしょ。館の中はあったかいですよ。ほら・・・ぅ・・・ぶぇっくしっ！・・・ぅぅ・・・・・・え？咲夜さん、そのマフラー・・・な、なにをするんですか・・・？・・・・・・・・・ありがとうございます」

「咲夜さーん！今日もいい天気ですねぇ、こういう日は、月も綺麗なんですよっ。咲夜さんと一緒に見れたないいなぁ～・・・・・・なぁんてことは、

あっははは～、言いませんけどねぇ～っ」

「大変ですっ！！た・・・大変なんですよぅ～っ！」

「・・・す、すごい。すごいものが、来て・・・か、壁を・・・壁を吹っ飛ばしたんですっ！」

「どうにかする方法はないんでしょうか・・・」

「咲夜さん！あんた、そういう人じゃなかったでしょ！お嬢様のためにも、そりゃ人間を食料にしなくちゃいけませんよっ・・・でも、普段はどうしようもない悪人とか、生きている気力のない人達を殺していたじゃないですか、一瞬で楽に、痛くないようにさ！これはそうじゃないでしょ！その人間が、何か悪いことしましたかっ？しかもそんな、血を抜いて、苦しみながら死なせるような真似・・・

・・・咲夜さんだって人間でしょうよ！そういう殺され方されて、嬉しいですかっ？えぇ！？あんた、一体どうし・・・」

「咲夜さん、私は・・・私はねぇ、いつだって咲夜さんのことを一番に考えているんです・・・咲夜さんのためなら、生命だって捨てられるんです・・・それは、今だって・・・っ」

「咲夜さん・・・もう、貴方がグランチャーの方に合わせる必要はなくなったんです・・・

今度は、グランチャーが貴方の方に合わせてくれるんです。だから・・・っ」

「えぇ・・・咲夜さん。私は、今この時に全ての生命を捧げるつもりで励みます・・・
本当です、嘘じゃありません。それが、私がグランチャーにしてあげられることなんですから」

「さ・・・咲夜さんっ、もうお別れなんです。でも、彼の魂はきっと・・・っ」

※

第十六話　その9

「そうか・・・」

咲夜は改めて思い知った。

自分と美鈴の間にあるものは、たったひとつの事実、たったひとつの亀裂で崩れてしまうほど、柔いものではなかった。

確かに、彼女が確かな悪意をもってグランチャーを殺めようとしたこと。それは、安易に許していいものではない。

だが、グランチャーの魂がブレンチャイルドとして蘇った今、その罪を罰することも大事なのだろうが、それ以上に、許すという心を持つ必要もあるのではないか？

美鈴の心を理解し、彼女のやろうとしていることを考えることが。

そしてそれは・・・彼女のやろうとしていたことはもう、今まで散々、飽きるほどに言われていたことではないか。

罪を憎むのは当然だろう。

だが、その罪の奥底にあるものまで憎み、蔑んでしまっては、美鈴があまりにも可哀想なのではないか？

そう。

咲夜だって、美鈴のことは好きなのだ。

咲夜の顔から、尋常ならず気色というものが消えた。
見開かれた眼は細められ、表情のない表情がその顔に入りつく。
それと共に彼女は、囁くような声で美鈴に言った。

「・・・構わない・・・貴方のことは、もう許すわ・・・」

「・・・ゆる・・・す？」

美鈴の身体が小さく震え、彼女の微かな声が、魔法の森の木々の幹が作り出す天然の籠の中を反響した。
何を言っているのか理解できない様子の彼女に向けて、咲夜は尚も、小さな声で続ける。

「貴方がそうやって自分を追い詰める必要なんて、ない・・・きっとグランチャーも・・・彼の心を受けたブレンチャイルドも、今なら貴方のことを許してくれる。
美鈴・・・もう、いいのよ」

その声と共に、咲夜は一歩足を踏み出して、美鈴に歩み寄った。
だが、それと同時に、美鈴が逆に一歩足を退いて、後ろに下がる。

「・・・はぁ・・・は・・・はぁ・・・」

彼女の呼吸は俄かに荒くなり、微かに開かれた唇が小刻みに震えていた。
後ろへと下がるその足も、ゆるりと開かれた両手の指先も、時折ひくひくと痙攣していた。

時として人も妖怪も、優しさに恐れをなす時もあるのだ。

それはどのような時か。
自分が、その優しさを受け入れるに値しないと自負している時だ。
美鈴はもう、自分が咲夜から温かみを受けることなど、二度とないと思っていた。
だが、実際はそうではなかったのだ。

あとずさりする美鈴に尚も近づこうと、再び一歩歩み出る咲夜。
それを拒むように、さらに一歩退く美鈴。
そんな中で、咲夜は続けた。

「だけど・・・貴方のやったことは、やはり許すことはできない・・・だから、この一発で、みんな終わりにしましょう」

その言葉を聞く中で美鈴は、咲夜の右手がゆっくりと上がるのを見て、開かれた手のひらに、じわりとした熱があるのを感じた。

もう一歩後ずさりしようとした足の動きが止まった。

美鈴の心の内で氾濫しようとしていたその感情は、恐れではあったが、恐怖ではなかった。
そのようなものよりかは、もっと清らかな気持ちだ。

「・・・あぁ・・・さ・・・咲夜・・・・・・」

消え入りそうな声でその名を呼んだ時、美鈴は、きっ、と険しくなる咲夜の表情に次いで、天地が揺れる様を見た。
それと共に、何かに打たれる感覚が、頬を伝って全身を駆け巡り、

彼女の身体は右へとよろけた。
パァン、という、何かが弾けるような乾いた音が響き渡り、頭の奥底で無数のエコーとなった。

その弾けた何か。
それが何なのか。
彼女は、自分が平手打ちをされたことに気づくよりも早く分かった。

自分と、咲夜の間にあったもの・・・グランチャーに出逢い、そして今に至るまでの間に出来あがり、残り続けていたわだかまりが、弾けて無くなる音だったのだ。

その認識に遅れて、ようやく自分が打たれたことが分かった美鈴は、次いで、冷たい土の感傷が身体に押しあてられるのを感じ、言いようのない脱力に襲われた。

そうしてさらにその次に感じたのは、温かい手のひらの感触だった。
それは他でもなく、自分の頬を叩(はた)いて見せた右手のひらだった。

※

大事な話があるということだったので、それなりに時間がかかりそうだと思っていたのだが、咲夜と美鈴のふたりは、森の向こうにいなくなってから五分もせずに魔理沙達の下へ戻ってきた。

とにかく、さっさと彼女らを紅魔館に送り届けて地底に戻ることを考えていた魔理沙達には、美鈴の頬がほんの僅かに腫れていることには気づかない。

ひとまず、ふたりが戻ってくるなり魔理沙は、ふたりがこの場を去っている間に決めたことを彼女らに伝えた。

「戻ってきたんなら、さっそく帰るとしようぜ。あんたらは、さとりのブレンに乗ってってくれよ」

「さとりさんの？」

と聞き返す咲夜には、さとり当人が応えた。

「えぇ、いつか、あなたのグランチャーと一緒に紅魔館に戻ったようにね」

「・・・分かりました」

「さてと、そんなら・・・」

次いで魔理沙は、妹紅を呼ぼうとした。

癇癪でも起こしたのか様子のおかしかった妹紅だったが、腫れものを扱うようにほったらかしにしていてはいけない。

と、ちょうど咲夜達が戻ってきたタイミングを見計らって、輝夜と永琳が呼びかけにいってくれているようだった。

遠くの方で、ふたりが妹紅に何事か話し、広場にあった大きな岩の上に座り込んでいた彼女がゆっくりと立ち上がるのが見える。

そのまま三人揃って、こちらに戻ってきていた。

さて、となれば後はもう帰るだけだろう。

魔理沙は、朱鷺子と香霖のふたりに別れの挨拶をしておくことにした。

「そんじゃ、そろそろおいとまするぜ。さっきも言ったが、困ったことがあったら、地底に来てくれればいい。そいつはブレンパワード寄りなんだからな、歓迎するぜ」

それに、文とはたてが続く。

「私達がまた、何度か顔を見せますんで、元気にしててくださいよ」

「ついでに今の内に、花果子念報の定期購読をお考えくださいよ～」

「残念でしたねぇ、すでにこの人は私の文々。新聞を購読中なんですよ。わざわざふたつも新聞は必要ないでしょぉ？

ましてや片方が出来の悪いスッカスカの内容じゃあねぇ」

「ん、その通りねぇ、スッカスカの文々。新聞はいらないから、こっちをお読みになりますよねぇ～？」

案の定、喧嘩しかすることのないふたりに、霊夢の怒声が飛ぶ。

「あんたらこういう時にまで喧嘩して！近所迷惑でしょっ！」

「あぁ～へいへい、分かりましたよぅ」

「仙人みたいなこと言わないでよね」

そのようなやりとりはすっかり無視して、朱鷺子と香霖のふたりは、咲夜達に向けて呼びかけていた。

「また会おうね咲夜さん。ブレンチャイルドのことは、私と霖之助さんに任せてね」

「何か野暮用があってうちに来た時は、こいつのことも見てってくれ」

それに、咲夜がにこやかに返事する。

「えぇ、お願いいたします・・・またお会いしましょうね」

と、その時、ようやく朱鷺子が、美鈴の頬の腫れに気づいて、不思

議そうに聞いた。
「あれ?美鈴さんって人。ほっぺたどうしたの?」
それに美鈴は、はっ、とした様子で指摘された頬を手にひらで擦りつつ、困ったような笑みを浮かべて応えた。
「いやぁっはっはは・・・まぁ、いろいろありましてねぇ。この咲夜さんもこれで中々、乱暴な人だから・・・」
その言葉に続いて、咲夜が靴のヒールで美鈴の足を勢いよく踏みつけた。
骨でも砕くほど遠慮なく踏みつけられた痛みに、彼女は踏まれた足を上げながら両手で抑えつつ、残った片足でぴょんぴょん飛び跳ねていた。
「いぃ〜〜〜ってててててて!ほらねぇぇっ?」
「口を慎め中国っ!」
美鈴の、それと咲夜の滑稽な姿を見て、朱鷺子も香霖も声を上げて笑った。
「あっはははははは!」
「いや、仲がよさそうでなによりっ」
そんなこんなで、妹紅達も戻ってきたため、魔理沙達は咲夜と美鈴を連れて森から去っていった。
輝夜と永琳、慧音も朱鷺子達に対して恭しく挨拶を寄越してきたが、妹紅だけは、思いつめたように何も口をきくことはなかった。

それぞれの宿主を乗せ、飛び立っていくブレン達の姿を、手を振って見送る朱鷺子と、佇んだまま見送る香霖。
やがて、ブレン達は暗くなり始めた空の彼方へ去り、木々の影に隠れて見えなくなった。
各々の色に染まる彼の者達がもたらす賑やかさも、見る影もなくなる。
残るのは、ブレンチャイルドだけだ。
ふたつのアンチボディをひとつとした、朱鷺子の・・・彼女だけのものではない存在だ。

見えなくなった以上、魔理沙達を見送るのもやめた朱鷺子は、香霖へと呼びかけていた。

「ちょっとの間、ブレンの中にいよっか」
「そうだなぁ、そうするか」

そうしてふたりは、ブレンチャイルドの胎内へと入ることにした。
物言わず静かに佇んでいたブレンの身体がゆっくりとしゃがみこみ、手を差し出して、ふたりを胎内へと招き入れる。
朱鷺子のブレンの身体は、薄い青色をしていたのだがこのブレンの身体は血のように真っ赤だ。
さすがにそのことへのギャップというものが存在して、改めて手を差し伸べてくるブレンの姿を見る朱鷺子は、どうしても少しだけ戸惑ってしまった。
だがそれは、正しいことなのだろう。
この戸惑いは即ち、ひとつの認識として受け入れられるべきことでもあった。
多分、忘れてはいけないであろう、ひとつの意識を呼び覚ますもの

として。

彼女のブレンであって、彼女のブレンだけではない者の手のひらに乗りつつ、そのまま香霖と共に胎内へと入った朱鷺子は、その中に張り巡らされているスリットウェハーの壁の一面へと背中を預けた。それは、久しぶりに感じることとなった、ブレン本来の温かさ、そのものであった。

だが、それだけではなかった。

香霖が続いて壁面にもたれかかる中で、朱鷺子は満面の笑みで言った。

「あったかいなぁ～・・・咲夜さんのグランチャーもいてくれるからなのね」

それに、香霖が応える。

「そうだなぁ・・・ブレンもグランチャーも結局は同じアンチボディで、何も変わらない・・・そのことが実感できるようだよ」

「そうだねぇ・・・」

そんなことを言い合う中で、何故だか朱鷺子は、自分が望んだもの・・・あるいはそれ以上に心地よい温もりの中にいながら、それを素直に喜ぶことができないでいた。

「・・・・・・」

笑みを浮かべていたはずの顔は、いつの間にやら切なさにあふれた顔に変わっていて、壁面に映る空・・・紺色に染まり、一番星が煌めく時も近い空を見上げていた。

何でこんな顔をしていまうのか。
その理由は、なんとなくだが分かっていた。

心の中ではこのブレンをこちらに譲るといってくれたときの咲夜の表情が、はっきりと浮かび上がってくる。
それと共に朱鷺子は、自分自身の声でこう語る言葉を、咲夜のいいようのない表情の像と共に聞いていたのだ。

――――なんだか、何か違うような気がする・・・――――

※

四体のブレンが、すっかり宵闇の色に染まった空を、その色の溶け込みそうになりながら飛んでいる。
眼下には、月光に照らされほんの微かに本来の色を顕わしながらも、ほとんどは黒か紺色でしかない大地を、見るともなく覗うことができる。

闇夜というのは、大地を見るより、空を見るものだ。
何故かと言えば、無数の星があって、それと共に、太陽よりも遥かに美しく、厳かな月の光があるからに他ならない。

そうやって、ブレンの手のひら・・・弾力を感じる指にもたれかかりながら空を見上げていた咲夜は、すぐ近くで、組み合わされていた金属がずれるような、ガコンという音を聞き、次いで、こちらを呼びかけてくる小さな声を聞いた。

「咲夜さん、ちょっといらしてください」

咲夜は立ち上がりつつ振り返り、その声の主であるさとりの姿を見返しつつ、彼女のいる胎内の装甲の上へと乗り移っていった。
そうして、彼女の傍に歩み寄ると共に、さとりはこんなことを聞いてきた。

「・・・朱鷺子さんにブレンチャイルドを譲ったこと。よかったんですか？」

咲夜は、すぐに応える。
「えぇ、勿論」

だが、それを聞いたさとりの反応は、なんとも言えないものだった。
「そうですか・・・」

その静かな声に咲夜は、さとりの持つ能力を思い出していた。
彼女から質問を受ければ、どんな嘘をつこうと、いかに体面を取り繕おうと、心の奥底にある真実を応えてしまうということに繋がるのだ。

そのことに気づいた咲夜は、自嘲気味な笑みを浮かべつつ、静かに続けた。

「貴方が残念がることじゃないでしょう・・・私が悔やむよりかは、朱鷺子さんが悔やむ方が、感情の揺れが大きいと思いません？」
「それは、そうでしょうけど・・・・・・それと、咲夜さん」
「なんです」
「美鈴さんのことなのですけれど・・・」

さとりがそう呟いた時点で、彼女はすでに、聞こうとしていることの答を伝えられていた。

さとりとしては、ブレンの手のひらに乗ってからずっと、膝を抱えて座り込んで、その膝の上に顎を乗せ、どことも言えないどこかを見つめながらじっとしていた美鈴の姿が気になっていた。
再リバイバルが成功し、グランチャーの生命は繋げられ願いが叶ったといっていいのに、ひどく落ち込んでいるように見えた。
一度心の内を読んでみたのだが、いろいろな感情がいろいろな形で渦巻いていて、さすがにはっきりとは彼女の考えていることが分からなかったのだ。
だからこそ咲夜に対し、美鈴がどうしたのか聞くことにした。
心を読むといっても、読み取るべきものを当人が考えていなければ読むこともできないので、こうやって質問したわけだ。

そうして今、その答は全て分かった。
美鈴としては、部外者に知られたくなかったからこそ離れてやった行いだったのだろうが、無礼にもさとりはその一部始終を知ることとなった。
咲夜と美鈴の間に繋がっている一本の糸の、強く張りつめ、決して切れることのない強さを知りながら。

「大丈夫なんですね？」

そう聞きながら、座り込む美鈴の方に眼を向けるさとり。
それに咲夜は、どこか哀しげな笑みを浮かべながら応えた。
「大丈夫よ．．．．．．できることなら、彼女の心は今は読まない

で頂きたいわ」
それと共に、横目でさとりと同じく美鈴の姿を見つめる。

ふと美鈴が、こちらに視線に築いたのか、ちらりとだけ顔をこちらに向けるが、すぐに真っ直ぐに見返してきた眼を逸らして、またどことも分からないところに眼を向けた。
その姿にもどこか、咲夜と同じ哀しさが、ほんのりと漂っているような気がした。
今の彼女は、決して落ち込んではいなかったのだ。
ただ、戸惑う気持ちと、喜び、自分自身への嫌悪の念とをないまぜにした感覚の海へと、溺れるように沈んでいたのだろう。
その海から浮き上がるために、それらの感情の全てを、自分のものとして受け入れようとしている。

それは、とても静かな闘争であった。
自分自身に対する、美鈴の最期の戦いであったのだ。

その様子を見つめる中でさとりは、思わず息を呑んでいた。
咲夜の言葉が、ちくりと胸を刺していた。
彼女がしないでくれといったことを、さとりは平然とやってしまっていたからだ。

自分の持つ能力の恐ろしさと、それゆえの不便さを再び実感したような気持ちと共に、胸が締め付けられる気分を感じながら、さとりは嘘をついた。
それはこいしの語るような無意識という存在の内に、自分のような能力をもたない者達を侮っているからこそなのではないか。
理性が、こんな考えたくないことを考えてしまって、尚更苦しかった。

先程文とはたてを冷たくあしらっていた時は、ようやく本来の調子が戻ってきたと思ったのだが、こういうことになるとまた臆病になってしまう。

「えぇ、分かりました。決して見はいたしません・・・・・・ただ、私も自分の能力を手足のように制御はできませんから、誓いまではたてられませんけど・・・」

最後の言葉だけが、嘘をついてしまった自分自身に対するささやかな抵抗であった。

第十七話『停滞』　その1

再リバイバルも無事に終わり、ブレン達は地底へと戻ってきた。

そうしてその翌日から早速、河童達がブレンのコックピットの部品をつくるために、河童の里へと戻ることになった。

わざわざそれを、にとりを通してさとり達に報告してくれたので、彼女の方も個人的に、河童達の見送りへと赴いていた。

さとりのような親切心を持つものは他におらず、哀しいかな、彼女しか見送りには来なかったが。

地上へ続く風穴を抜けたところで、彼女らは簡単な挨拶を交わしていた。

別に今生の別れではなくその内戻ってくるのだから、そこまで神妙な雰囲気ではなかったし、そもそも、見送りだって必要なかったかもしれないのだ。

だからこそ、さとり以外は見送りにはこなかった、というところもあった。

人間でも、まとまった休みを貰ったから実家に帰るという者にわざわざ挨拶しにいくようなもの好きはいない。

さとりとにとり、それと地底に残る側の河童が、里に帰る側の河童と向きあう中で、さとりが言った。

「部品の完成はいつごろになるのでしょうか？こちらに戻ってくる

のはいつですか？」

それに、里に戻る側の河童の内の一匹が応えた。

「完成なら、のんびり時間をかけても二日、ここから里までの往復も二日で済むから、四日すれば戻ってこれるでしょ。

そんでもって、持ってきた部品を組み立ててコックピットを作るまでが一日と見積もれば、一週間もせずにみんなすっかりできあがるだろうね」

「そうですか・・・頼りにさせていただきます」

そんなさとりの声に、別の河童が笑いながら返してきた。

「あっはは～っ、期待されんでも仕事はするのが河童ですよぉ」

「・・・じゃあ期待はしません」

「んえぇ、そんぐらいの心持ちで待ってて下さいよ。なんにせよ、満足いくものを持ち帰ってきますから」

「はい」

そんな会話に続いて、最初に応えた河童が、

「それじゃいこっか」

と、他の河童達に呼びかける。

それを合図にして、十数匹の河童は、ぞろぞろと穴から離れ、自分達の里の方へと向かって歩いていった。

時々何匹かの河童が、振り返りながら手を振ったり振らなかったりして、呼びかけてくる。

仲間の河童達に対してだ。

「ちょっとの間のことだけど、元気でねぇー、無理するなよぉっ」

「私達のいない分、調査はあんたらで頑張るんだからねー」

それに、さとりと一緒に並んでいた河童達も、同じように手を振っ

たり振らなかったりしながら返事する。
「おーう！」
「こっちは勝手気ままにやらせてもらうさぁ～」

そうして彼らは、里に向かう河童達の姿を、見えなくなるまで眼で追っていた。
普段のこの界隈・・・地底の熱からくる間欠泉が吹き上がるこの界隈では、蒸気と瘴気により、１０m先でさえおぼろげにしか見えてこないほどだったが、今はオルファンにより地熱が抑えられ、間欠泉もほとんど見えない。
だから、去りゆく河童達の姿も、いつまでも遠くに見えるような気がした。
が、もちろん、本当に永遠見えてくるわけがなく、しばらくすると、何匹もいた河童達の特徴的な格好も、最早ひとつの小さなモヤモヤした塊のようにか見えなくなった。

それからようやくさとりは、その場に残った河童達と共に地底へと戻ることにした。

が、その時だった。
河童達と入れ替わるように、空の彼方から何かがこちらに向かってきた。
空の向こうからといえば、その何かが何なのかは大体見当がつく。
実際、去っていく河童のように小さなモヤモヤにしか見えなかったその何かは、次の瞬間にははっきりとその形が判別できるほどに近づいてきて、さらにその次の瞬間には、もうさとり達の眼の前へと降り立っていたのである。
その素早い動きを見れば、はっきりと分かった。
そして、眼の前に降り立つその姿を見れば、尚更だ。

「天狗様だぁ～」
と、にとりが呟く。

降り立つ時にはすでにさとり達の姿が分かっていた天狗達・・・白狼天狗が三人に、烏天狗が一人の計四人、三つある天狗の偵察隊の内の一隊が、こちらを見返していた。
定期の偵察を終えて戻ってきたのであろう天狗達の内の一人、烏天狗が、思い出したようにさとりの方へと歩み寄ってきながら、言った。

「都合がいいですねぇ。あなたにひとつ報告することがあるんですよ。後で皆さんにも報告させていただきますがね」
「報告？」
「えぇ・・・貴方達は戻ってて下さい」
さとりへの返事に続いて、周りにいた白狼天狗に呼びかける烏天狗。
それを聞いた白狼天狗達の内の一人が
「了解」
と応えて、三人揃って風穴をくぐって地底へと戻っていった。

途中、ぼけーっとした顔で眺めていた河童達に、
「どうも」
とぶっきらぼうに挨拶をする。
天狗の中でも、なんといおうか・・・黙々と仕事をするタイプである白狼天狗は、烏天狗のようにいつもにへらにへらせず、堅苦しい表情をしている。
投げかけてくる挨拶も、何とも味気ないものだった。

河童達も、天狗に対する畏敬を込めて、恐る恐るといった様子で頭をぺこぺこ下げながら、
「どうもぉ」

「こにちわ」
と、口ぐちに返した。

その様子をちらりとだけ見やりつつ、さとりは改めて烏天狗に、
「なんです？」
と聞いた。
それに、烏天狗も改まって報告を始めた。

「いえね、今早苗さんらグランチャーの勢力が、太陽の畑に集まってるって話だったでしょ？
で、そこの連中も何事かやっているようなんですよ。あれは多分、こっちと同じように、グランチャーのコックピットを作ってるんだと思います」
「そうなんですか？」
「えぇ・・・かなりの量の木材を切りだして運び込んでいましたからねぇ。ありゃ、ぶっ壊れた屋敷の修繕、って感じじゃないですよ。今丁度太陽の畑近くの森で木を伐採して、運んでるところを見ましたからね、私らが見ただけで四、五十本の木が運ばれてましたが、多分数はまだ増えますよ」
「そうですか・・・」
「ま、予想はできてたことでしょう？」

そう語る天狗の言葉に、さとりは納得しつつ応えた。
「そりゃ、そうでしょうねぇ・・・私達が考えることなら、向こうだって考えるのも当たり前です」
「その通りですね。向こうもどうやら、本腰を入れてこちらと戦うつもりのようです。コックピットが完成したら、いの一番にこちらに勝負を仕掛けてきますよ」
「・・・それよりも早く、こちらも準備を整えておかないと・・・
と、いうことですね」

「そういうことです。河童達はもう里に向かったんですね？そいつらにも、作業を急ぐように伝えておかないと」
「四日あれば、部品を完成させて戻ってくるそうです」
「三日で完成させるように呼びかけてきます」
「えぇ・・・」
「・・・まぁその前に、鼻高天狗（お偉いさん）に報告してからですけどね。そこから他の天狗にも報告が行き渡って、魔理沙さん達にも伝えられますから、さとりさんはわざわざ今聞いたことを言いふらす必要はないですからね」
「えぇ、分かりました」
「そういうわけなんで、ちょいと失礼っ！」

ひとしきり報告を終えた烏天狗は、そのまま宙にふわりと浮き上がりつつ加速をかけ、勢いよく風穴へと潜り込んで行った。
猛烈な加速による風圧で、さとりや、にとりを初めとする河童達が吹き飛ばされそうになる。

「わ・・・っ」
さとりは思わず、吹きつける風に煽られながら声を漏らしていた。

すぐさま鼻高天狗へと報告し、さらに里に向かった河童達への報告もしなければならないので、急いでいたのだろう。
吹きつける風もほんの一瞬であり、先程までここにいたはずの天狗の姿は、一陣の嵐のごとく消えていた。

天狗達が入っていった風穴の入口・・・ぽっかりと空いた虚空へと眼を向けながら、ほんの五秒ほどぼーっとしていたさとりに、にとりがこう語りかけてきた。

「心安らぐ時はない、ってことかぁ・・・はぁ～あ、やんなっちゃ

うよねぇ～っ」
「・・・えぇ。まったくもって・・・」
「あたしらも帰ろうか」
「はい」

※

向日葵を中心に、いろいろな花が咲き誇る太陽の畑。
そこに運び込まれる無数の木材は、同じ植物であっても、それが伐採されたものであるというだけで、何やらこの場にはひどく不釣り合いなものに見えた。

この木材の出所といえば、近くの丘にあったそれなりに大きな森だ。
ちょうどおあつらえ向きに、いい具合の太さの木が林立してあったのだ。
しかもこれまたおあつらえ向きに、檜（ひのき）の木だ。
建材としては最高の木材である。
実を言うと幽香の屋敷も、彼女がすでに設計しているグランチャーのコックピットも、そこにある檜から作られたものだ。
彼女は実は、日曜大工も大の得意だったのだ。何とも意外な話だ。

さて、そんな檜を、今度は早苗達のグランチャーのコックピットの設計のために伐採し、運びだす。
高速戦闘でも壊れないコックピットを作るために、その構造は中々に複雑で、使用する木材の数も半端なものではなかった。
何十本という檜が必要とされる。

下手すれば百本にも達するかもしれなかった。
その内の何十本かは、実は神奈子達の弾幕により破壊された屋敷の再建に使われるわけだが。

そんなこんなで、すでに数え切れないほどの木材が幽香の屋敷の前に運び出されていたのだが、それでもまだ数は充分ではなかった。
そのため、引き続き伐採と運搬を続けることにする。

最初は鬱蒼と生い茂っていた檜の森も、さすがにその数が減っていき、更地に変わってしまいそうで、早苗としては心配だった。
乱伐の恐ろしさはこれで、中々理解しているつもりだ。
まぁ、多分これより先はもう一本も伐採したりすることはないだろうから、今回だけは勘弁してくるように、森に頼んでおくとしようか・・・
などと考えていた。

伐採と運搬自体は、いとも簡単だった。
なんせ、グランチャーがいるのだから。
彼の者達の力ならば、木の一本や二本、切らずともひっこ抜くことができたし、ソードエクステンションを使えば、ごぼうでも切る様に容易く切断できた。
伐採された木材も、グランチャーならば、六本ぐらいならいっぺんに、優々と運び出すことができる。
そうやって、今ある数十本を、一時間と経たずに運び込んだのだ。
なら、残りの数十本も、あっという間だった。

ちなみに、幽香と彼女のグランチャーは、先に彼女が言った通り、まったく手伝っていなかった。

まぁ、彼女が事前にコックピットを設計してくれているおかげで、作業自体は捗りそうなのだ。
今更批難するものではないし、むしろ感謝するべきだろう。

森の木々をソードエクステンションで切断させ、それをグランチャーに運ばせる。
その様子を彼の者の胎内で眺めながら、太陽の畑に移動する間に移り変わる景色・・・丘の向こうに見える清涼なる大地と空・・・さらにその間を奔る一条の線を見据える。
そうして、横目でチラチラとグランチャーが小脇に抱える材木を見ながら、早苗は呟いていた。

「こうやって、いくつもの木を私達で使わせてもらうことを、感謝しておきましょう。
そういう気持ちを忘れなかったら、この木々の数々で作られたコックピットも、貴方の身体には馴染むはずなんです。
そうですともっ、ご飯を食べるときに、いただきますと言うのと同じです。まずは感謝をっ」

それに応えるように、グランチャーはぶるぶると鳴いた。
花を愛することができるグランチャーならば、植物に宿る生命の存在も感じることができる。
その生命を自らのものとして取り込む・・・そんな意識をもつことができれば、きっとその力が彼の者を助けてくれるだろう。
そのことを感じさせてくれる返事を聞きつつ、早苗は、威勢のいい声で続けた。

「オルファンさんが幻想郷を駄目にするかもしれないなら、それを

どうにかして止める。
私達が、生命の力を受けてこの世界を守るのです！なんだか、ますます使命感ってものを感じてきましたよぉ～・・・燃えてきたぁーっ！」

そうこうしている内に、あらかた予定されている量の木材も運び終えた。
グランチャーの仕事もひと段落し、彼の者達も幽香の屋敷の傍へと戻ることにする。
そうして早苗達も、胎内から降りる。

「ご苦労様でした。貴方達のおかげで、ホントに助かりました」
胎内に続く装甲を開き外に出ながら、そう言ってグランチャーを労いつつ、早苗は、無数の木材が積み上げられていく様子をずっと眺めていた神奈子と諏訪子の下へと降りた。

すぐ近くに降りてきた早苗の姿をちらりと見つつ、神奈子が呟くように言う。

「いやぁ～、こんな量の檜は久しぶりに見たっ。まぁ、神々（わたしたち）の全盛期では、これでもまだ少ないぐらいなんだけどね」
それに諏訪子が、
「けど、なんだか面白くなってきたねぇ」
「これでグランチャーが戦いやすくなるっていうんだから、そりゃ面白いわねぇ」

そんな言葉に続くように、彼女らと共に木材の運搬を見守っていた幽香がこう呼びかけてきた。

「それじゃ、今度はこの木材を切り詰めて、部品を作る番ね・・・ほら、これを」

言いながら幽香は、早苗と、遅れてこちらに近づいてきた藍に、数枚の紙切れを渡してから、続けた。

「そこに、コックピットに使う部品の寸法を記しておいたわ。その通りにすれば、私のグランチャーとまったく同じものができあがる」

「へぇ～、この通りにすればいいんですね・・・よぉーし！」

いよいよ、作業らしい作業ができるようになる。

そう思い、ワクワクした気分になりながら、幽香の手渡してきた紙切れに眼を通した早苗だったが、次の瞬間、そのワクワクも一瞬で消え去り、彼女は絶句した。

「え・・・何これ・・・・・・こんなにたくさん?・・・こんなに、難しいものを・・・？」

幽香の手渡したコックピットの部品の寸法。

そこに描かれているものには、早苗にとっては不可能という言葉を体現するかのような複雑怪奇な印象しかなかった。

グランチャーのコックピットだと言うのだから、勿論それなりに複雑なものになりそうだとは分かっていたが、その複雑の度合いがあまりにも強すぎるし、なにより作り出す部品の量も多すぎた。

運び込んできた木材の量に見合うだけの数だ。

途端に身体から力が抜けて行くのを感じた早苗は、涙目で幽香の方に振り返りながら、言った。

「さ・・・さすがにこれは無理ですよぉ～っ」

しかしそれに幽香はにこやかな笑顔を浮かべて、ぴしゃりと言い放つ。

「私はまったくその通りの部品を作って、組み立てたのよ。私にできて、貴方にできないわけがないでしょうが。

切りたおした木々を無駄にするつもりかしら？」

「う・・・っ」

そう言われると、早苗も言い返せない。

一度やると決めたことなら、例え困難だろうとやり遂げなければいけないものだ。

困り果てた表情のまま固まる彼女に対して、神奈子と諏訪子が呼びかける。

「大丈夫よ。私達が手伝う。力の要る仕事なら、私がいて捗らないわけがなかろう」

「そういうわけだからね、安心しなよ」

「えぇっ？そんな、お二方まで働かせるような真似は・・・」

「働くんじゃなくて、グランチャーのために手を貸すのさ」

「それならいいでしょ？」

「は・・・はいっ、それなら、よろしくお願いします」

どちらかと言えば、戦神として、グランチャーに自ら乗り込んで戦うような気質の神なのだ。

いい加減待つ身にもうんざりして、何とかしてグランチャーの役に立とう考えていたのだろう。

そんな神奈子達の後押しも受けられるとあっては、最早早苗に悩んだり困惑することなどなかった。

力強くぐっ、と身構えた彼女は、叫ぶような声で言う。
「よぉーし！こうなったら、三日三晩寝ないつもりで頑張りますよぉー！私だって、ガテン系の仕事はできるんだってところを見せてやる！」
が、それに神奈子が、苦笑いしながら返した。
「睡眠は取れ・・・」

※

一昨日、そして昨日が、あまりにもいろいろなことがあり過ぎたからだろうか。
今日は逆に、本当に何もない日になりそうだった。
いろいろやることがあると、一日があっという間に感じられるものだが、それは逆に、何もやることがなくても同じだった。
天狗の偵察や河童によるオルファン周辺の調査もちゃんと行われていたのだが、それも、当人以外の者にとっては正直いって関係のないことであり、結局は何もやっていないことに変わりはなかった。

しかしながら、さすがに昨日までの慌ただしさを思い出せば、退屈さも時として貴重だということはよく実感できる。
それは、永琳としてもそうだったのだ。

彼女は、今日のところの河童の調査の報告を待つ中で、地霊殿にて当てられた自室の中、椅子に座って机に肘をつき、オルファンの周

りから摘んで花瓶に植えていた二輪の花を眺めていた。
一輪の時は萎れ、もう一輪植えることで本来の鮮やかさを取り戻していたその花弁は、時間が経つにつれて少しずつ、より活き活きとしてくるように思えた。
永琳の中のオーガニックエナジーを吸いとっているのだろうか？
今はまだほんの僅かの違いで、毎日眺めている永琳でなければ分からないほどのものだったが、逆にそのほんの僅かな違いが彼女に、この花の瑞々しい色合い・・・その鮮やかさに、限りがないように思わせていた。
つまり、無限に生長するのだと。
植物が無限に生長することは難しい。それは分かっていることではあるが、オーガニックエナジーが関わってくると別なような気がした。

そう・・・今自分達が探しているのは、ビープレートと呼ばれる、無限のオーガニックエナジーに近しい存在であるのだ。
オーガニックエナジーが無限の存在であるなら、その力を受けて生長する植物だって、それに限界がないのは、ある意味当然かもしれない。
そしてそれは、手に入れたエネルギーを発散する必要があまりない植物の場合だ。
もしそれが生物・・・特に、活動的で、かつ身体の大きな生物であるなら、自らの生存のためにそれらの力の全てが消費されるのだろう。
それが即ちオルファンだ。
オルファンはそうやって、他者からオーガニックエナジーを吸収することを必要とせず・・・つまり、人間が食事を取らずとも生きていけるのと同じようになることで、エネルギーの貯蔵庫のような存在でしかなかった他者に対して、別の見方ができるようになる。
そうして、もっと深く理解しようとする意思も持てるということな

のだろう。
そして永琳達・・・というより、永琳が協力する者達は皆、オルファンがそうなるべく、ビープレートを見つけようとしている。

・・・・・・

永琳は、机の上に肘を立て、手のひらの上に顎を置きながら呟いていた。
「だけど・・・」

だけども、今の段階ではまだビープレートの存在は、微かに・・・本当に微かにしか見えていなかった。
いうなれば、霧とも靄(もや)とも言えないような、うっすらとしたものとしか、だ。
下手をすれば、何かの拍子で消えて見えなくなるほどだ。
どうもこの調子では、ビープレートを見つけだすのは、当分先のことになりそうだった。
それこそ、二年も三年も・・・いや、それは、ビープレートがどういうものなのかはっきりと分かり、それを入手する方法を見つけ出すまでの期間かもしれない。
それを実際に手に入れるとなると、十年二十年でも足りないかもしれなかった。
無限のオーガニックエナジーなどというものは、それほどのものなのだ。
なんせ無限だ。
無限という言葉を得るためには、それこそ無限の努力と時間を必要とするのではないか？
無限の時間ならば、永琳にとっては欲しくなくともその手の内にあ

るものだったが。

実を言うと、無限に近しい（無限そのものではない）オーガニックエナジー・・・それほどの膨大な量の生命力を生み出す方法なら、大体永琳にも見当はついていた。

そうして、ビープレートの代わりにそういうものが見えてくると、逆にビープレートを見つけ出すことが不可能なことのような気がして、一段階下のもので妥協しようという考えが首をもたげてくるのだ。

オルファンだって、生物である。ブレン達の母なる存在であることを考えれば、人妖と同じように、生身の心をもった。

いつまでもビープレートが見つけられないこちらに、いつ愛想を尽かして、幻想郷の生命力を吸い尽くすかも分からないのだ。

そのことを考えると、今の内に、『そのもの』と、折り合いをつけるべく話をした方がいいのではないか、とも思えてしまうのだ。

「・・・ふー・・・っ」

永琳は珍しく、大きなため息をついていた。

その息が、光る花に当たり、反応して、花弁の周りを照らしていた淡い光が、少しだけ強くなった。

永琳にはそれが、こちらに何かを呼びかけているように思えた。

実際は、アンチボディのような知能と意思は持たないはずだから、何も呼び掛けてはいないはずだ。

だからこそ、自嘲気味な笑みを浮かべつつ、永琳は呟いた。

それもまた、意思を持たない植物に対しては不要なことだったが・・・

「・・・あぁ、別に慰める必要はないのよ。なんでもなく、ただついたため息なんだから」

※

山からの天狗が来てくれたことで、椛としてはすっかり余裕ができた。
だからこうやって、にとりと共に、勇儀から貸してもらった盤と駒で将棋を打てるのだ。
にとりは河童の調査隊の内には入っておらず、永琳と共に、ブレンの生態の調査を任されていた。
もっともそれも、すでに大体分かっていることも多いので、そこまで気張る必要もなかった。
要するに、こうやって椛と将棋を打てるほどには余裕があるということだ。

静かに将棋を打つふたり。
その様子は、普段妖怪の山でたまにやっていることと、まるで同じだった。
違うとすれば、環境ぐらいのものだ。
滝の音が聞こえてこないから、それで逆に静かになりすぎて集中できないとか、そういうことだけだ。
それ以外は、これまでと本当に何も変わっていないように思えていたのだ。

互いの思索の結果として、駒が動き、盤に打たれるその乾いた音だ

けがやけに大きく響く中で、椛は何の気なしにこう呼びかけていた。

「あの、にとりさん」

「・・・なんです？考えを乱す作戦ですかぁ？」

「まぁ、そう思ってくださって構いません・・・あのですね、なんというか、その・・・なんだか私達、こうやって将棋を打っていていいのだろうか？・・・・って思うんですよ・・・

あ、これ王手です」

「うわ、早いなぁ・・・その分巻き返しは効くけど。

・・・やらなきゃいけない分の仕事はしてるんでしょ？なら、それでいいんじゃないですか？

・・・これで、どうです？

・・・気持ちは分かりますよ」

「へえぇ～、してやられた。

・・・私達に、オルファンのために何かやれることはないんでしょうか？

・・・こうさせて頂きましょう。

・・・なんていうか、私の努力が不足しているような気がしてならないのです」

「・・・・・うん。うぅ～んむ、こ、れ、は・・・

・・・ふふっ・・・えっへへ、椛さんは考えすぎなんですよ。失礼承知、手打ちを覚悟して酷なことを言うようですけど、あんたがどんなに頑張ったところで、やれることなんてないですよ。

でも、あんたひとりじゃやれないことが、ここにいるみんながのんびりしてるだけでも、できちゃうもんなんですよ。あたしは、そういう風に考えてますよ。

・・・もちっと考えさせてください」

「いいですよ」

「・・・だから椛さんは、あんまり気負わず、やらなきゃいけないことはしっかりやってればいいんです。

そうですね・・・もしやれることがあるとすれば、そうやってオルファンのために何かしようかな～、って気持ちを、持ち続けることじゃないですかねぇ？

・・・お待たせしましたぁ～、これでどうだ？」

「・・・・・・そういうことなんでしょうかね・・・ふふっ

いや、にとりさんにはいつも、こういうところで助けになって頂いてます。私のような者にはない考えをお持ちですから・・・

・・・・・・王手」

「んえぇ、またぁっ？

・・・いえいえ、何も考えてないから逆に今みたいなことが言えるんですよ。尊敬されるほどのことじゃぁ・・・

・・・・・・こりゃ駄目だ、負けました。いやはや、見事に集中力が削がれた、見事な作戦でしたよぉ」

「そりゃどうも・・・もう一局ぐらいやります？」

実を言うと、にとりに勝つためにこのような話題を切り出したつもりは毛頭なかった椛（当然にとりもそれは承知だ）が再戦を申し出、にとりがそれを

「ん、そうしましょうか」

と引き受けた、ちょうどその時だった。

突然背後から、声が聞こえてきた。

「楽しそうだねぇ」

「んっ？」

真後ろから聞こえてきたその声に、にとりがびくりと身震いしつつ、慌てて後ろに振り返った。

椛も身を乗り出し、にとりの後ろに隠れている声の主を覗き見る。

次いでにとりは、眼の前にぬっ、と見えたその顔に、飛び上がるほどに驚愕しながら、その名を呼んでいた。

「うわあぁっ!?びっ・・・っくりしたぁ!こいしちゃんかぁ・・・」

第十七話　その2

それこそいつものことだが、いつの間にやらにとりの真後ろにいたこいし。

その顔を間近でみたにとりは、驚くことも早々に止め、笑顔を浮かべてこう言っていた。

「あっははははっ、そういやぁ、あんたはよく山に遊びにきてくれたっけなぁ。んでもって、あたしと椛さんの対局もよく観戦してた。最近そういうことなかったんでびっくりしたけど・・・なんか懐かしい気分だなぁ」

そんな言葉を聞きながら、いつも変わらないにこにことした笑みを浮かべつつ、こいしはこんなことを聞いてきた。

「何の話をしてたの？」

それに、にとりが応える。

「聞いてなかったのか。今来たんだねぇ。いやね、椛さんが、オルファンのために何かやることはないのかな、ってね。自分のやってることが不足なのかもしれないって」

それを聞いたこいしは、僅かに視線を下に下げ、考え込むような様子を見せながら、呟いていた。

「何かやること・・・私にも、何かないかなぁ・・・」

「こいしちゃんもそういうこと言うのかい？あんたは、ブレンの身

体を洗ってやったり、たまの遊び相手になってあげればそれでいいじゃないか」

そう語るにとりに対して、こいしは言い返した。
そこに表情は無く、感情的には何も考えていないことを暗に示している口調でもあった。
なんといおうか、感情よりも理屈で考えているような感じだ。
しかし、だからこそそれは、倫理的に正しいことであるのかもしれなかった。
それに、彼女が語るのは、全くもって感情がなく、まるで真っ白な紙に明朝体で文字を刷っただけのような、そんな味気のない言葉でもなかった。
僅かながらの色で、水彩のようにうっすらと染められてもいたのだ。
それは、唯一と言ってもいい肉親に対する、無意識の内の想いなのか・・・

「でも、お姉ちゃんの手伝いをしてあげたいよ。お姉ちゃんばっかり、ブレンと一緒に怖い思いをするのは、なんだかやっぱり・・・かわいそうな気がして」

そんなこいしの声に、さすがに困った様子で、頬を人差し指で撫でるように掻きながらも、にとりは親身な態度で返した。
「私はその手のカウンセラーじゃないんだけどねぇ。それでもまぁ、親切心で言わせてもらうなら、別にそれでもいいと思うよ。少なくともねぇ、さとりちゃんのようにブレンに乗って戦うと、向こうも逆に心配すると思う」
「それは分かるよ。なら、他に何か・・・」

珍しく押しの強い気がするこいしに今度返したのは、椛だった。
「なら、危険じゃないように、何かできることを探してみますか？」

「危険じゃないこと？」

椛の言葉に続いて、ぼーっと考え込んだにとりは、何かを思いつきはっ、として、続けてこいしに呼びかけていた。

「そういやこいしちゃんは、さとりちゃんと同じくらいにブレンと相性がよかったねぇ。んでもってさぁ、さとりちゃんが、オルファンについていろいろと調べてきてくれたんだよね、あれと話をしてさ。

ならもしかすると、こいしちゃんだって、オルファンと話をして、あれの意思ってものに触れることも、出来るんじゃないかなぁ？」

「えぇ？」

それにこいしは、特別驚くわけでもなく、戸惑うわけでもなく、こんな声を漏らした。

ある程度の感情があれば、彼女も少しはびっくりしていたかもしれない。

そんな彼女に、にとりはにかっ、と笑って人差し指でその顔を指差しながら、言った。

「そうさっ・・・まぁ、私としては、さとりちゃんに何言われるか分からないから何とも言えないけど、こいしちゃんになら、自分が何をすればいいのか・・・何をして、お姉ちゃんをびっくりさせればいいのか、分かるんじゃないか？

ほら、太陽の畑のグランチャーも大人しくなってる、今がチャンスだと思うよ」

「・・・・・？」

こいしは、ぼんやりと眼を上の方に向けて、にとりの言葉を反芻しながら考えこんだ。

いくら理屈的になんでも考えられると言っても、時としてある程度

感情的な考えも踏まえなくては、常人に比べて判断力が鈍くなる、というのも大いにあり得ることだった。
そういうのとはまた別なのかもしれないが、にとりの言う言葉の意味はすぐ理解できても、その先が思いつかないこいしは、ひとまずこう応えておくことにした。

「・・・考えとくよ。それじゃあね」

「ん、あんたが自分で決めた後なら、あたしもある程度なら協力するよ。仕事がある時は別だけど」
「私も、定期の偵察が終わった後でなら、力をお貸ししましょう」
というにとりの椛の返事に、
「ありがとう」
と応えつつ、こいしは立ち上がりふたりの前から離れ、部屋を出て行った。

そのまま、どこに向かうともなく、地霊殿の廊下の中を、夢遊病にでもかかったようにふらふらと歩く。
こいしの見た目があるからそれほどでもなかったのだが、あまり明るいといえない屋敷の廊下の中をこうやって徘徊する様は、中々に不気味であった。
それはともかくとして、ゆっくりと歩を進めながら、こいしは考えていた。

さとり・・・姉にできることなら、自分もできる、のかもしれない。
しかしそれは、戦うことではない。
そんなことをすれば姉が心配して、哀しい思いをするのはよく分かっている。

なら、何をすればいいのだろう。
にとりは、オルファンのことを言っていた。

いつか、ブレンと初めて会った日、『そのもの』の身体の中で感じた温かさは、今でも思い出すことができる。

・・・・・・

一度、ブレンの下に行ってみようか・・・

※

さらにいくらかの時間が経つ。
もう当に昼は過ぎ、じきに夕方になろうとしていた。
本当に、日が経つのが早い。
このまま、河童達が戻ってくるまでの三日か四日の間はずっと、何事もなく時が過ぎていくのだろうか。
しかし、いずれは太陽の畑のグランチャー達が攻勢を仕掛けてくるだろう。
なんというか、嵐の前の静けさという言葉がよく分かるような気分だった。

河童達の調査が終わって、その報告を聞いた永琳が、調査により分かったことをさとりにも伝えようと、河童の一匹を使って部屋にまで呼び出してきた。
実際、オルファンの記憶に触れてその過去を知ったこともあるが、

永琳はどうやらさとりが、この異変を解決に導くのかもしれないと期待しているようだった。
さすがにそれは買いかぶりすぎだとは思うが、そういう謙遜するような意識があるからこそ何もやらなくなる、というわけはなかった。

ひとまずさとりは、永琳が遣わした河童からの伝言を聞き入れて、永琳のいる部屋へと赴くことにした。

ちょうどその間だった。
こいしが中庭へとやってきて、ブレンの胎内へと入っていったのは。

彼女としてはもう何度か入ったこともあるブレンの胎内であるが、スリットウェハーの柔らかさと、そこを伝う熱は、いつだって新鮮なものに感じられた。

多分、さとりがずっと座っていたであろう場所に、さとりがそうするのと同じようにもたれかかって座りながら、こいしは一度、大きく深呼吸をした。

そうして、ブレンが生み出す澄んだ空気と共に、慕う姉の薫りを感じながら、吸い込んだ息を吐き捨てて、彼女は言った。
それは、ブレンに対して呼び掛ける言葉であった。

「そういえば、ふたりきりになったのは初めてじゃない？そうだよ

ね、ブレン」

それに応えるように、ブルブルと何かが振動するような音が聞こえる。

それが、ブレンの鳴き声であることは、こいしでなくとも皆分かっていることだった。

その言葉はもちろん、感情の希薄なこいしにも伝わるのだ。

そして彼女は、ブレンに対して言う。

「そういえばブレンは、わたしのことはどう思ってるのかな？わたしは、お姉ちゃんのように優しくないからね・・・」

それにブレンは応えた。

優しいからとか、優しくないからとか、そういうことではないのだ。もっと感覚的に、肌で感じる気持ちとしてさとりのこともこいしのことも好きなのだ。

ふたりだけではない。

お燐とお空もそうだった。

「そうか・・・そぉ、か・・・」

こいしは、いいようのない感覚を受けながら、その感覚が何なのか分からない自分を哀しむこともできないまま、ただぼんやりとブレンのその言葉を聞き入れ、ただぼんやりと、前を見つめていた。

それから十秒か十五秒かの間、沈黙がこの場を包む。

あることをふと思いついたこいしがその沈黙を破って、ブレンに呼びかけていた。
ふと思いついた、とは言うが、彼女がここに来た目的を思い返してみると、決して思いつきだけで言った言葉でもないはずだった。

「そういえば、ブレン・・・わたしって、貴方のやりたいことをちゃんと聞いてなかったような気がする。
ブレンが何のために生まれてきたとか、そういうことを」

勿論、さとりや魔理沙達にはすでに当たり前のように知られていることだし、彼女達から聞くことで、こいしにだって分かってはいた。
だが、実際にブレンの言葉として聞いていないような気がしたのだ。
だからこそ、今一度ブレンの目的、生まれた意味を知ろうとしたこいしのこの言葉に、ブレンは応えた。
そうして、彼女の問いの答えも返していた。

今となっては、多くの者がいい加減聞かずとも分かっていることだった。
ブレンパワードの目的・・・その上位にはオルファンがいて、『そのもの』はビープレートなるものを見つけようとしている。
そしてブレン達は、そのビープレートを手に入れるために生み出された。
ビープレートの手掛かりとなるかもしれない、幻想郷の人妖達から、オーガニックエナジー、そして意思というものを読み取り、自分達のものとするために。
それだけではなく、自分達と根底を同じとしながら、相反する存在であるグランチャーと戦うことも、目的のひとつだった。

改めてそれらを聞いたこいしは、またしても、考え込むようにしば

らく黙っていた。

しかし、突然顔をぱっ、と輝かせると、弾けるような声で言った。
その声はスリットウェハーの弾力により跳ね返り、澄んだ反響をその場に響かせる。

「そっかぁー！わたし達のことを知れば、ビープレートが見つかるかもしれないのねっ？
だったら・・・」

さとりのために、何かできることはないかと探していたもの。
それが見つかったような気がした。
それは、いとも簡単なことであり、だからこそ一番大切なことであるのかもしれなかった。

「わたしのことも、お姉ちゃんと同じように知ればいいんだよ。教えてあげるよっ。
いろんなところを、わたしとブレンの、二人きりで冒険しましょう！
お姉ちゃんも、お燐とお空にも内緒で、わたし達だけで！
それから、オルファンさんにも会いに行こう。あの人にも、わたしのことを知ってもらうのっ」

その声に、ブレンは少しの間だけ何も応えず、しんとしていた。
しかし次いで、ぶるぶると、胎内に積み重なったスリットウェハーを震わせて鳴く。
その声は、こいしがやろうとしていることに賛成するような声・・・
心に聞こえる声と共に鳴り響いた。

こいしの顔が、より一層輝いていた。
が、そんな中でも、気を取り直したように彼女は言う。

「でも、内緒でいくなら、みんなに気づかれないようにね・・・今日の夜中とかにいこうね」

それにもブレンは、ぶるぶると鳴いて応えた。

その返事を聞きつつ、こいしは、スリットウェハーの壁面を右手のひらで撫でながら、笑っていた。

「ふふ・・・それじゃぁ、よろしくねブレン・・・よろしく」

※

グランチャーが去り、紅魔館には、この異変が始まる以前の雰囲気が戻ってきていた。

屋敷のすぐ傍に、深紅の姿のアンチボディがいないその光景も、思ったよりも大きな感慨はもたらさなかった。

初めから何もいなかったのだと考えると、それで何とか、事実を受け入れることはできそうだった。

まぁ、実際、ここではない別の場所にグランチャーの意思をくみ取ったブレンチャイルドはいるのだ。

今生の別れではないのだし、そこまで深く哀しむこともない。

元の、メイド長としての立場にすっかり戻ろうとしていた（別にその立場から一時でも離れたわけではないのだが）咲夜。

しかし彼女は、廊下を歩いている中で、周りの迷惑を顧みずに突然

響いたその叫び声を聞いた。
そして、自分の肌にはまだ、彼の者のもたらす熱さというものが残っていることを思い出した。

「咲夜さぁーん！大変です、大変なんですよぉっ！」

その、美鈴のものと思われる叫びは、グランチャーが紅魔館にやってきた時と、まるで同じものだった。
咲夜は、自分の心臓が一回だけ、その鼓動がはっきりと分かるほどに強く拍動するのを感じ、頭の裏側では、煉瓦造りの塀を崩しながら横たわる深紅の巨人の姿が浮かび上がっていた。

「ど・・・どうしたの？」

声のした方向に振り返りつつ、あの時よりかは戸惑った様子の返事をする咲夜の眼には、こちらに駆け寄ってくる美鈴の姿が見えた。
慌てふためいたその様は、やはりあの時とそっくりそのままだ。

咲夜は無意識の内に、胸中である考えを抱いていた。
ある意味では、期待と言っても過言がなさそうな、そんな感情を。
そしてその期待は、ある意味では叶えられることになるのだ。

咲夜の眼の前にまで駆け寄りつつ、荒れた息を喘がせながら、美鈴は言った。

「ブレン・・・ブレンチャイルドが、この館に近づいていて・・・」

「え・・・っ！？」

咲夜は、ぴくりと震えながら驚嘆していた。
そうしてその次の瞬間には、衝き動かされたように廊下の中を駆けだして、美鈴のことも無視して館の外へと向かっていた。

「さ、咲夜さん！」

美鈴も慌ててその後を追い、外へと向かう。

さながら獲物を前にした獣・・・あるいは逆に獣を前にした獲物のように駆けだした咲夜のその姿は、朱鷺子の意思を尊重して、彼女にブレンチャイルドを譲り渡した彼女が、自分自身の心には嘘をついていたということを、はっきりと示していたのだろう。

急ぎ館の正面扉を開け、完全で瀟洒らしくもない様子でその扉を閉めることもせずに、バルコニーの下をくぐって館の外に躍り出た彼女は、次いで先程以上に大きな驚嘆を漏らしていた。
今日という日は、日が傾くのが早かった。

「あぁっ！」

眼の前に、深紅の肉体を持つアンチボディ・・・他ならぬブレンチャイルドが降りたって、膝を立ててしゃがみこもうとしていた。
朱鷺子に譲り、当分は見ることもないだろうと思っていたその姿が今、これほどに早く咲夜の眼の前にあったのである。

彼女に続いて外に出た美鈴もその姿を見て、驚いた様子で呟いてい

た。
「早いっ、やっぱりここに来るつもりだったんだ・・・」
そして、咲夜を追っていたのは彼女だけではなかった。
日傘を差しながら、レミリアとフランの二人。それと、こあが出てきた。
ブレンチャイルドが近づいてきているということを聞いて、出てきたのだろう。
咲夜と美鈴同様、屋敷の前にしゃがみこむブレンチャイルドの姿を見ながら、フランが言った。
「グランチャーっ？死んじゃったはずじゃ・・・・・・あ、いや、あれが例のブレンチャイルド？」
それに、姉が応える。
「そうでしょうね。細かい姿や大きさがグランチャーと違うし」
こあが続く。
「よく分かりますよぉ、グランチャーのことは覚えてますから・・・確かにあれは、ちょっと違う気がします」
さらにそれに続いて、開けっぱなしにされていた扉の向こうから、息も絶え絶えな様子でパチュリーが、駆け足なのにのろのろとした動きで出てきた。
「むきゅ・・・むっきゅ・・・・・・む・・・っきゅぅ・・・っ」
彼女も、美鈴の大声を聞いて慌てて出てきたのだろうか、顔を真っ青にして、今にも倒れそうだった。

こんな彼女の様子を見れば、こあなどはブレンチャイルドどころではなくなり、すぐさま駆け寄りその身体を抱きかかえながら、パチュリーに呼びかけていた。
「だ、大丈夫ですかぁっ？」

パチュリーはその声も無視して（もしかしたら、走ってきた疲れで聴覚がどうかしてしまっていたのかもしれない・・・１００ｍもないほどの距離だったのだが）、虫の息を必死に吐き出しながら呟いていた。
「あ・・・あれが・・・再、リバイバル、とか・・・いうので、生まれた、新しい・・・アンチボディ・・・・・・ブレン、チャイルド・・・・なのねぇ・・・」

末成り（うらな）にような顔をしているパチュリーのことは心配だが、彼女には悪いが、そんなことはどうでもよかった。
眼の前に降り立ったブレンチャイルドの姿をじっと見つめる咲夜の視界の中で、ブレンの股間部を覆っていた装甲が、乾いた音を鳴らして開いた。

ブレンが装甲を開くのは、ふたつの時だけだ。
中に誰かを招き入れるか、中から誰かが出てくる時。
咲夜は勿論、今ブレンの装甲が開いたのは後者のためだろうということは分かっていたのだが、心の奥の方では、前者であって欲しい願望のようなものもあった。
そして、招かれているのは自分であるという・・・

勿論、そんなことはなかった。
表向きの予想通り、装甲が開いたその奥からは、ひとつの影が出て

きていた。

このことに関しては、今更驚くことでもない。

朱鷺子だ。

咲夜からブレンチャイルドを譲り受けた当人である朱鷺子が、胎内から出てそのまま飛び降り、宙を浮遊しながら地面へと降り立っていた。

咲夜は咄嗟に、降りた朱鷺子の方へと、小走りで駆け寄っていった。

美鈴とレミリア、フランもその後を追い、パチュリーも、こあに抱きかかえられながら、足を引きずり追おうとする。

小さく開かれた口からは

「・・・ひ・・・日の当たる場所へ・・・・・・今なら、光合成ができるかもしれない・・・」

などという、錯乱したようなうわ言が吐き出されていた。

「何言ってるんですかぁっ！気をしっかりもってください！」

そんなパチュリーとこあのことはやはり無視しつつ、朱鷺子の前へと駆け寄った咲夜は、挨拶も無しにこう問いただしていた。

「な、何故ここにいらしたのですっ？」

朱鷺子には、咲夜がこのように慌てる理由がよく分かっていた。

だからこそ彼女は、すぐさまこの問いに応えた。

もっともそれは、質問に対する答えというより、そのための前置きの言葉であったのだが。

「咲夜さん。驚かないで聞いてください」

「なんです・・・？」

「このブレンチャイルド・・・やっぱりここに置かせてもらいます」

「え・・・っ」

驚くなと言われたその矢先に、咲夜は身を固まらせるほどに驚愕した。

しかしながら、朱鷺子の言う言葉の意味が分からないわけではなかった。

石のように身を固まらせながらも、すぐにその緊張を弛緩させた咲夜は次いで、すぐさまさらなる質問を投げかけていた。

「ど、どうしてですっ？この子は、貴方にお譲りしたではないですか・・・例え断っても無駄だとも・・・っ」

「別に、そちらに返すんじゃないんです・・・その・・・確かにこの子はブレンですけど、グランチャーでもあります。だから、私のものかもしれないけど、そちらの・・・咲夜さんのものでもあるんじゃないですか？」

「・・・・・・」

「この子は、そちらの傍にいさせてください・・・でもそのために、ひとつ条件があります」

「条件・・・それは・・・？」

咲夜は、こうやって聞き返す中でも、朱鷺子の言う条件というものが何なのか、すでに分かっていた。

そして実際、朱鷺子の言った条件は、その通りのものであった。

「何度か私を、この子に会わせてください。そのために、この館に入ることも許して欲しいんです。

それが駄目なら、この子はまた魔法の森に連れて帰ります。

・・・どうでしょうか？」

「・・・・・・」

咲夜は、投げかけられた朱鷺子の問いには、すぐには応えなかった。
ほんの僅かに俯くその様子を、美鈴も、レミリア達も、のろのろとこちらに近づいてくるパチュリー達も見守っていた。

今回ばかりは、この問いに応えるのは咲夜でなければならなかった。
グランチャーの宿主であった咲夜でなければ・・・

しかし、美鈴としてもレミリア達にしても、正直この問いへの応えはひとつであると考えていた。
折角ブレンチャイルドをこの館にいさせてくれるというのに、それを断る理由などないはずだ。
しかしそれも、今の咲夜の立場から一歩離れたところにいるからこその考えかもしれなかった。
紅魔館の住人の多くは、それなりに自尊心が強い。
相手の気持ちを尊重して譲り渡したブレンチャイルドが、またこちらに返される気分というのは、どれほどのものなのかは、決して想像できないものではなかった。
誤りはあるだろうが、嫁いだ娘が破局して戻ってきた時の父親の心境とはかくありき、とは言えないだろうか？

そう考えれば、この朱鷺子の申し出を頑なに拒むことも、不可解なことではないのかもしれなかった。

しかし、咲夜はそんな自尊心以上に、朱鷺子に対する敬意をもっていた。
なにより、もし自尊心が傷つくとすればそれは、自分の方が朱鷺子よりも強い心をもっていると勘違いし、本当の彼女を理解できなかったことに対してだ。

朱鷺子は、ある種咲夜以上に、相手の気持ちを考えることのできる者だったのだ。
遥かに純粋に、だからこそ場合によっては無思慮とも思えるほどに・・・

咲夜の心は、悩むまでもなくすでに折れていた。
朱鷺子のこの申し出を、全てその通りにすることにしたのだ。

長い沈黙を破り顔を上げて、咲夜は応えた。

「分かりました。何もかも全て、貴方の言った通りにします」
そう言いつつ、レミリアの方に振り返りつつ、
「構いませんね？」
と問うた。

主人はそれに、
「言うまでもなくね」
とだけ応えた。

そうして、もう一度朱鷺子の方に振り向いた咲夜は、小さな笑みを浮かべた。
その笑みを見た朱鷺子は、深々と頭を下げて、その頭を上げもせず、あたふたしたような声で言った。

「あ・・・ありがとうございます！それと、その、ごめんなさいっ・・・私にブレンを預けてくれたその心遣いは、本当に有難いし・・・それを無碍にするような真似をしてしまって・・・その・・・無礼なことをしたとも思います」

それだけ言ってからようやく頭を上げた朱鷺子は、無理をしている

ような笑顔を浮かべながら、落ちつかない足取りで咲夜達から離れようとしていた。
早々にこの場を去ろうとしていたのだ。
心からの笑みとはとても思えない表情のままに、彼女は続けて言った。

「そ、それじゃぁ、私はこれで失礼しますっ・・・ブレンのことを、よろしくお願いします。その内来ますから、その時も、よ・・・よろしくお願いします。
それじゃあねぇ、ブレンチャイルド！また・・・また、会いましょっ」

こんな様子を見れば、咲夜にしても誰にしても、察することができた。
紅魔館から、朱鷺子のいる魔法の森は、そう近い距離ではない。
往復するだけでも一苦労だ。
そんな距離を越えて、この場所に何度も訪れることができるか、と聞かれれば、はっきりと応えることはできないだろう。
魔理沙とか天狗のように、軽々とひとっ飛びできるようなヤツならいざ知らず、かなりの距離を置いてブレンと離れ離れになることが、朱鷺子にとって平気なのだろうか。

今分かったことだが、咲夜にはそのことは、何も平気なものではなかった。
正直、ブレンチャイルドのことは、見ようと思えばいつでも見えるような場所にいてほしかった。
そして、咲夜に平気でないことが、朱鷺子に平気であるわけがなかった。
彼女は、無理をして紅魔館にブレンチャイルドを預けにきたのだ。

これでは、咲夜のやったことと何もかも同じではないか。
肝心な部分が、何ひとつ変わっていない・・・

「・・・・・・っ」

これでは駄目だ。

この上ない歯がゆさを感じ、思わずその先のことも考えず、そのまま去ろうとする朱鷺子を呼びとめようとする咲夜だったが、そんな彼女よりも先に、大声を上げるものがいた。

レミリアだ。

「少し待て、そこの者・・・そこのおチビっ」
そんな声が、紅魔館の広々とした庭先に響き渡る。

その声に、ようやくこの場に追いつくことができたパチュリーが、少し落ち着きながらも、まだまだげっそりとした声で返す。
「貴方だっておチビじゃない」

「うーるーさーいーっ！パチェは黙っていろ！」

第十七話　その3

気を取り直して、レミリアは続けて朱鷺子に言った。
「この異変が終わるまでの間は、貴方はこの紅魔館に住まいなさい」
「え・・・えっ？」
びっくりして聞き返す朱鷺子。
が、レミリアは、眼を丸くする彼女に対して、もう一度先の言葉を繰り返すようなことはしなかった。
「二度目を言う必要はない」
それはつまり、朱鷺子には二度も三度も説明する必要はなく、一度言うだけでしっかりと聞き取れているはずだからだ。
だから実際のところは、朱鷺子はこうやって聞き返す必要もなかったはずなのだ。
「・・・ここに住む、って・・・？」
うわ言のように彼女が呟くことで、ようやくレミリアは朱鷺子のこの問いに応え、改めて説明することとなった。
「その言葉通りよ。このブレンに会いたいと思うなら、いつでも会えるようにしておきたいとは思うでしょ？
そのためには、ブレンのいるこの館の中に住まうのが一番だとは思わないかしら？そこで私が、こうやって寛大な心で貴方を招き入れようと考えているのよ」

このようなことを言うレミリアに驚いているのは、何も朱鷺子ではなかった。
さすがに、事前の説明もなく突然このようなことを言われれば、咲夜にしてもパチュリーにしても、誰だって驚く。
咲夜とて、呆気らかんとした表情で、レミリアの方を見つめていたのだから。
のみならず、彼女は微かな声で呟いていた。
「お嬢様は・・・・・・」

もちろん、驚いてはいるが、皆レミリアのやろうとしていることは理解できていた。
なるほど、ブレンに会う許可を欲しいというのなら、そのために紅魔館に入ることを許可して欲しいというのなら、そもそもここに住まわせてやる方がてっとり早いし、それがいい方法なのだろう。
これは確かに、もっともなことだ。
そのような視線を一身に受ける中で、レミリアはさらに言う。

「どうかしら？これなら貴方の言う条件というものにも叶っているし、悪いことじゃあないと思うが？」

返答や如何に。
口外にそう付け足すレミリアの声が聞こえたような気がした朱鷺子は、しばしの間ぼーっとした表情でレミリアのその顔を眺めていた。
香霖の隣に立てば、妹か、下手すれば娘にでも見えるような朱鷺子よりもさらに幼く見えるレミリアが、その見た目に似合わない不敵な笑みを浮かべる様子が網膜の裏に映り込むと、朱鷺子の顔も少しずつ笑顔に変わっていった。
ブレンの傍にいれるということは、朱鷺子にとってはどこまでも大きな意味を持つものだった。

そうして彼女は、深く頭を下げ感謝の意を表しながら、大きな声でレミリアにこう応えていた。
「あ・・・ありがとうございまーす！本当に・・・その・・・感謝します！」

その言葉を受けて、レミリアはますます不敵に、得意満面の表情を浮かべて、朱鷺子に返した。
それと共に、傍にいた咲夜に命じていた。
「よいよい・・・ふっふっふ・・・そういうわけなんで、咲夜。この者を適当な空き部屋にご案内して差し上げなさい。なるべくいい部屋にね」

その命を受けた咲夜も笑みを浮かべ姿勢を正しつつ、応答する。
「心得ました。すぐに・・・」

が、それを聞いた朱鷺子が、急に慌てた様子で頭を上げ、こう言ってきた。
「あっ・・・ちょっと待ってください！お部屋に案内してもらう前に、行かなくちゃいけないところがあるんです・・・」

「行かないといけないところ・・・？だったら、ここに来る前に行けばよかったでしょ」
レミリアがこう返すのももっともだった。
何か用事があるなら、それを済ませてからここにくるのが普通であるし、それが礼儀というものではないか？
が、それは勿論そうだが、朱鷺子としては、紅魔館に住まわせてもらえるようになるとは考えても見なかったのだ。
いざ、この館に一時でも居候になるというのなら、そのことを伝えておかなければならない者がいた。
朱鷺子が、この紅魔館へと赴く心を決めるのを後押しした者だ。

朱鷺子はその顔を脳裏で思い浮かべつつ、レミリアに応えていた。
「どうしても、すぐ行っておきたい場所なんです。このことを、伝えないといけない人がいて・・・」

その声を聞いて、咲夜と美鈴が眼を合わした。
朱鷺子の言う者が誰なのか、なんとなく分かる気がしたからだ。
ちょうどぴったりと美鈴と視線が合って、咲夜は多分そうなのだろうと確信した。
美鈴もその者の顔を見知っていたのだから。

次いで彼女は、朱鷺子に対して呼びかける。

「森近　霖之助さんのところですね」
「あ・・・うん。そうです」

その名を聞いたレミリアが、咲夜に聞き返す。
「霖之助っていうと、貴方が時々世話になってるっていう、何でも屋みたいなところの？」
「えぇ、そうですわ・・・何でも屋かどうかは分かりませんが」

「・・・なるほどねぇ、分かったわ。何をしたいのかは知らんが、すぐに戻ってくるなら、どこへなりと行ってきなさい。
その後は咲夜。先に言った通りにね」
レミリアは改めてこう言った。
別に、用事があるからひとまず失礼すると言われて、それに喰いつく必要など何ひとつない。
いずれ戻ってくるというのなら、朱鷺子の自由にやらせることにした。

「そういうことです」
と、朱鷺子に呼びかける咲夜の声に、彼女はもう一度深く頭を下げて、これから居候させてもらうことになる紅魔館の主人に対し、感謝の意を示していた。

「・・・もう一度、ありがとうございます！・・・そんなに長くない間かもしれませんけど、よろしくお願いしますっ」

その声を聞いたレミリアはやはり、自信に満ち溢れているような不敵な笑みを浮かべたまま、
「ふふん・・・」
と鼻息を鳴らして笑っていた。

陽が沈み始める西の空は、水に絵の具が溶けるようにじわじわと紅く染まるが、血の色ほどに紅くなることはなかった。

※

魔法の森の入口にある香霖堂は、常日頃から静かだ。
人の寄りつかない辺鄙（へんぴ）な地に建っている場所な上に、こういう場所にこそ数多くいる妖精や妖怪にとっては、物の価値というものはいまいちよく分からないのだろう。
だから、人が寄りつかなければ妖怪も寄りつかない、そんな場所であったのだ。
もし、この閑散として雑貨屋（香霖としてはそう思ってほしくはな

いのだが）に訪れるものがいるとすれば、それは真っ当な物を探しにきた客か、そうでなければ変人と偏屈ぐらいのものだった。
あるいは、物の価値を知る、香霖と同じ貴重な人妖ぐらいなものか……

さて、そんな閑散とした香霖堂は、今この時に関しては、いつも以上に静かであるような気がした。
そのはっきりとした理由は分からない。
もしかしたらただの勘違いかもしれない。
別に、店内にいつもと違うようなところなどなかった。
が、おぼろげに、なんとなく考えれば、この言い様のない寂漠とした雰囲気にも、やはり理由はあるような気がした。

何故だか知らないが、顔が妙に綻んでいるのに気づいた香霖は、椅子に腰かけて、机の上に右肘を立て、手のひらの上に顎を置きながら、何の気なしに前の方をぼーっと眺めていた。

朱鷺子は、ブレンチャイルドを咲夜の下に送るために、紅魔館へと向かった。

そうするように背中を押したのは、香霖であったと言ってもいいかもしれない。

自分が咲夜から、半ば一方的にブレンチャイルドを託されて、それで本当にいいのか。
悩む朱鷺子に対して香霖は、自分なりによく考えて行動しろとだけ伝えた。

その結果が、咲夜のいる紅魔館に、ブレンを送り届けることだったのだろう。

だが、それでは結局、彼女がまたブレンと離れ離れになるだけで、堂々巡りになるのではないかと思えたが朱鷺子は香霖の言う、よく考えるという行動が実践できる妖怪であるはずだった。

咲夜のことを考えるあまり、自分が寂しい思いをすることになる。

そのことも、覚悟した上のことなのだろう。

なら、もうこちらとしては、何も言わずに送り出すしかなかった。

きっとその内朱鷺子も、紅魔館にブレンを置いて、森に戻ってくるだろう。

その時、彼女がどんな心持ちになるのか、心配でないわけがなかったのだが、多分何事もなく大丈夫なはずだろうとも思えていた。

香霖は頭の中に浮かんでくることをそのまま口に出して、ひとりごちていた。

「別に、永遠に会えなくなる訳でもない。会おうと思えば、なんとでもして会いにいけるはずだ。そこまで落ち込むほどのことでもないんだろう」

それに、だ。

「もし彼女が寂しがるというのなら、僕にできるかどうか分からないけど、僕がブレンの変わりにもなってみるさ・・・」

静かに呟いた声は、ほとんど無音に近いほどの香霖堂の店内においても、それほど大きくは響かなかった。

夕焼け空。

窓から差し込む、西に沈む陽の光だけに照らされた店内は、温かな

孤独を香霖にもたらすような気がした。
そしてそれは、ある意味では正しかったのだ。

夕陽すらも沈み見えなくなり、濃い群青の色が空を覆う頃に、ブレンチャイルドは戻ってきた。
なんでも朱鷺子はこれから、紅魔館に居候し、常にブレンの傍にいるという。

つまり、そういうわけだったのだ。
しばらくの間、彼女は魔法の森からはいなくなる。
香霖としては、そう簡単に会う事はできなくなるだろう。
先程感じた寂しさというのは、そういうことだったのだ。

だが、それも構わない。
今の朱鷺子は、ブレンの傍にいるべきだったし、咲夜達がそのために配慮してくれるというのなら、それを甘んじて受けておかなくてはならなかった。
香霖と朱鷺子は、その気になればいつでも会える。当分は別れの時などこないだろう。
だが、ブレンとは、多分いずれ会えなくなるのだ。
この異変が解決してしまえば、きっと。
彼の者達がこの世界にいるのがその時までというのなら、その時が来るまでの間・・・すなわち今この時は、できるだけ傍にいてやった方がいいのだ。
朱鷺子だって、ブレンとは一緒にいれても、香霖と離れ離れになってしまうのは寂しいようだったが、このことをよく分かっていた。

香霖とはそれこそいつでも会えるだろうが、ブレンとは一度別れると、もう会えなくなる。

だからこそ、彼女は紅魔館にいさせてもらう事に決めた。

そのことを香霖に伝えると、彼女とブレンはまた去っていった。
夜も更けてくるという時期だ。早い内に紅魔館に戻らなくてはならないのだろう。

その後、熱や香り・・・そんな、朱鷺子がいたという形跡すら残さず、尚更寂しい場所のように思えてきた香霖堂の店内で、彼はひとり呟いていた。

「・・・なに、寂しければそれを紛らす行動できるのが僕達だ。しかも、いつでもそれができる。そこがブレンやグランチャーと違う。余程寂しいというのなら、いい加減僕も、長い散歩ぐらいはするべきということなのだと解釈しよう。
妖怪の山の麓の湖に建つ、洒落た洋館までのな・・・」

そうして彼は、自分にとっての朱鷺子が、頭で考えていたよりも、さらに大きな存在であるということを実感していた。
もっとも、その大きな存在・・・朱鷺子に対する感情といいものがどういうものなのかということは、どうしても分からないのが香霖だった。

※

既に日も変わり、宵闇が最も深くなる頃合いだ。
それこそ、こいしが考える出発の最高のタイミングであった。

ほとんど・・・というか多分、一人残らず眠りに入ったであろう中、ただひとり眼を覚まし、ひっそりと中庭に出てきたこいしは、そのまま（何故かは知らないが）地上の夜に応じて暗くなっている中庭の中でもぼんやりと見分けられるサトリブレンの方へと、歩み寄っていった。

ブレンの方もこいしに気づいたらしく、ゆっくりと、微かにスリットウェハーが擦れ合い、軋む音を鳴らしながら、その場にしゃがみこんだ。
きょろきょろと周りを見渡しつつ、どこにもこちらを見ているような眼はないと感じたこいしは、しゃがんだブレンがさし出す手のひらに乗り、そのまま開いた装甲の傍へと持ち上げられ、胎内へと入った。

いつも新鮮なものに感じる弾力を持つスリットウェハーにもたれかかり、装甲を閉じさせつつ、こいしはブレンに呼びかけた。
出発の合図だ。

「よぉ～し・・・いこう」

その声に呼応して、ブレンの周囲の空気が音を発する。
それはどこか、ブレンの鳴き声に似ているような気もしたが、どこ

か違った。
ブレンの声は、小刻みに震えるようなぶるぶるという音だが、この音は、もっと長い波・・・池に広がる波紋を思わせる、ぶぅんぅんという音だった。
オーガニックエナジーが干渉している音だろうか？
その音と共に、ブレンの身体はゆっくりと浮き上がっていた。
オーガニックエナジーにより空気を押すことで、浮力を得ているのだろう。

「そうそう、静かにね・・・みんな寝てるのに、起しちゃったらかわいそうだからね・・・・・・ブレンも眠たいの？そうだったらごめんね・・・」

そう呼びかける声にブレンは、眠たくもなければ、こいしが謝る必要はないと応えた。
それを聞いて、彼女はぱっ、と笑顔を浮かべた。

「そうなんだっ、ありがとうブレン。貴方のこと、好きよ」

そんな声には、当に分かっていたとブレンは返す。
もっとも、こいしが好きと言った・・・そしてずっと頭の中で考えていた（想うのではない）その好意は、感情的なものとは別の意味合いをもっていたのだが。

ゆっくりと上昇しつつ、地霊殿の屋根を越えたブレン。
そうなれば、もうこそこそしている必要はなかった。
さとり達に気づかれないのなら、どんな動きでもすればいいのだ。

もちろん、地底に眠る多くの妖怪達を起こすのは申し訳ないので、できる限り静かにしつつ、ブレンを僅かに加速させた。

ブレンにとっては微かな加速であっても、彼の者達の身体のスケールとこいしの身体のスケールは大きく違う。

彼の者が感じる速度の十倍を、彼女は感じているのかもしれなかった。

ブレンにとっては歩くような速さだって、彼女にはそれなりに速く感じられるのだ。

眼下では、昼間の賑やかさもさすがに見えない、真っ暗な旧都が見える。

そこに立ちならぶ家々の形すらも、はっきり見受けることはできない。

ところどころに、夜遊び好きの妖怪が照らす灯りが、夏草に留まる蛍のように点々と見えていたが。

ただ、それらに照らされてもなおはっきりとは見えない家々が、揺れる水面に跳ね返る光がそこかしこで違うように、わずかな隆起となって前から後ろへと流れて行くのが、こいしには見えた。

当然、それも弱い加速であるため、十倍だろうが何倍だろうが空気が肌を押すような感覚もほとんど感じることはなかったが、そうでなくとも彼女は、ブレンの動きをその感性で感じ取っていた。肉体的な感性でだ。

彼女は、スリットウェハーに背中を預けながら、感嘆を漏らしていた。

「うわぁ～・・・」

こうやって、ブレンの胎内にたったひとりでいて、ブレンとふたり

きりで何かをするというのは、こいしにとっては初めてのことだった。
ブレンとの時間を自分だけが共有するというその感覚は、こいしにとっては、何とも言えないものだった。

彼女には、どんな感覚も、如何なる現象も、この世何もかも、何とも言えないのだが・・・何とも言う事ができないのだが。
ただ、彼女だって何もせずに日々を生きているわけではない。
この感覚がきっと、ある種の享楽なのだろうなということは分かるぐらいには、彼女は勉強家だったのだ。

彼女はにこやかな笑みを浮かべて、ブレンに呼びかけていた。

「あぁ・・・そうなんだねぇ、楽しいよブレン。楽しいわ・・・」

薄暗く、まるで地底の地盤がそのまま盛り上がったかのような旧都もやがて抜ける。
その先に待っているのは、正真正銘の岩盤であり、地の底の荒野といってもいい場所だった。
さすがに殺風景で、何の感慨も感じられないその場を過ぎれば、後は地上へと続く抜け穴があるばかりだ。
そしてさらにそこを抜ければ、こいしにとっては正直いってそれほど特別でもない、地上が待っている。

周囲をごつごつとした岩に囲まれる中を真っ直ぐに進むブレン。
その視界の先には、何か、小さな穴のようなものにいくつもの小さな光が詰め込まれているのが見えた。
その光が真っ直ぐにこちらに差し込み、ブレンの身体を、そして、

こいしの顔を淡く照らす。

それは、夜空に浮かぶ星々が成す光だった。
こいし達が向かう先に、待ち受けているのだ。

訂正しておかなければならなかった。
こいしにも、地上とは、うち震えるほどに偉大なものであるのだと分かるのだ。

こちらを囲い込むように真っ直ぐな洞穴を形作っていた岩盤が突然取り払われた。
その次の瞬間、こいしの視界は、濃い青色と、無数の・・・本当に無数としか形容できない光で埋め尽くされた。
どこまでも果てが見えない無限の広がりと、白に見えたり、水色や黄色に見えたりする、砕けた宝石の粒のような光。
こいしとブレンは、そのほんの一端に投げ出されたちっぽけな空気の塊のようだった。
絨毯を広げるのとはわけが違うその広大な空が、何故だかその広がりに反して、こいしとブレンのふたりをすっぽりと包みこんで押しつぶしてしまいそうな気さえするほどだった。

そして、こいしには分かるのだ。彼女は宇宙というものを知っているから。
実際自分達は、この闇と光に囲まれて・・・そして、その広さに逆に圧迫されながら、生きていることを。
そして自分達も、この無限の闇の中のひとつであることを・・・
指でなぞれば弾けて消えてしまいそうなその光の一粒一粒が、実は太陽の友達であるということだって・・・

こいしは、無意識のうちに声を上げていた。
腹の底・・・身体を形作るありとあらゆる細胞が上げた小さな声がひとつに結集したような、そんな歓声を。

「うわぁー・・・っ。いつ見ても・・・キレイだなぁーっ！」

もう何度も何度も、飽きるほどに見ているはずなのに、何故だか本当に飽きてしまうことはなかった。
この夜空と星の灯りは、いつ見てもこんな声を発させる。

こいしには、こんな声を出させる何かがこの身体の内にあることは分かっても、それが一体何なのかということは分からなかった。
ただ、自分の閉ざした心の一片が揺れ動かされている。
そのことはなんとなく分かるのだ。

「あっははは！はははははは！」

この大きな笑い声もきっと、理屈では分からない、身体の奥にある物では表せないものが発しているはずだった。

それがなんとなくでも分かる。
そのことは、こいしにとって何よりも幸福なことである。
そして、その幸福をこいし自身が感じられないということもまた、幸福なのかもしれなかった。

ブレンチャイルドは、竪穴を抜け、夜空の中へと躍り出ていた。
地面に対して角度をつけて穴を抜けたため、その視界には本当に、

空しか映っていなかった。
やはり無意識の内に、こいしが身を乗り出してその星空の成す光景を見渡す中で、ブレンは少しずつ身体の向きを地面と水平にしていく。

「あ・・・」

そうすると当然、無限の星空しか見えなかった視界に突然、まるでどこからともなく湧き出てきたように地面がせり出してくる。
そうしてやっと、こいしの興奮は収まることとなった。

真っ青な空を突然遮った、黒いなだらかな面。
それこそが、自分達が・・・いや、自分達を除くいくつかの人妖達が生きている地上の世界なのだ。

そうして自分達はこれから、この地上の世界をの上・・・青と黒の狭間にある場所を飛びまわりながら、言葉ではなく、もっと別の何かで語り合い、互いを理解するのだ。

そしてその先にあるのは、オルファン達があの群青と光の世界・・・銀河の果てへと旅をすることなのだ。
自分達が、あの透き通るような闇の一部であることを知るために。

こいしは今度は、使命感というものがどういうことなのかを思い出したような気がした。

「よぉ～しっ。ブレン、いこう！」

にっこりと笑んだ彼女の声に呼応し、ブレンは大地に足を向けながら、加速を開始した。

闇夜の冷えた空気を裂きながら、薄紫のアンチボディが、その明るい色を神秘的な暗さに対比させながら飛んだ。

その姿は、こいしの第三の眼に見える真黒な闇の中へと、心を探しに行く旅の始まりのようでもあった。

第十八話『震える生命』　その１

こいしとブレンは、妖怪の山の山頂にいた。
紛いなりにも幻想郷最標高のその山の頂きに上れば、逆に雲に遮られ、大地の姿など見えなくなる。
だが今度は、雲がまるで波立つ海・・・幻想郷ではもう見れない海のように思えて、面白いのだ。

が、それも、夜になるとただの満遍なく広がる暗い色だった。
夜中になると、雲の数も疎らになっていた。
水が蒸発してできた雲が、朝と昼の間にすっかりなくなってしまうのだろうか。
そもそも、海もない幻想郷にそんな雲がいくつもできるものなのだろうかという疑問も感じるかもしれないが、それが当たり前だと思えば、当たり前になるのが幻想郷だ。

なんにせよ、こいし達の眼下に広がるのは闇でも、頭上を見上げれば、眩いほどの・・・ある意味では、真昼の陽光よりも、光量が少ない分はっきりと見えるほどの星の灯りがあるのだ。
空がより一層近くなって、なおさらその光は鮮やかに見えるようだった。

「綺麗だな～・・・綺麗だねぇブレン」

スリットウェハーの囲まれながら上を向き、先程も言った言葉を繰り返すこいし。

そのまま、しばらく黙っていた彼女は、突然上に向けていた顔を降ろして、呟くような声で言っていた。

「なんだか懐かしいわ・・・早苗さんという人間がいてね、ブレンも知ってるでしょ?その人と会ったのがこの山だったの。ちょっと理由があってこの山にきたんだけど、ずっと近くにいたのに、中々気づいてくれなくてね・・・でも、私のことに気づいてからは、いろいろ親切にしてくれて・・・面白い人だったのよ。今はグランチャーのところにいるっていうし・・・もしかしたら、戦うことになるかもしれないっていうのは、分かるよ。でもねぇ・・・早苗さんは、本当にいい人なの。妖怪退治はするけど、全然悪い人じゃないのよ。私にも、思い出っていうものはできるの。その思い出の中に、早苗もいてね・・・」

その声は静かに・・・水の流れるように、温かい空間の中を漂った。そしてその流れが、ブレンの身体に染みわたり、自分の身体の内にも広がるのを感じながら、こいしは続けていた。

「・・・ブレンには何か、いい思い出とかないの?ほら、貴方達って、オルファンさんから生まれたっていう話だし、もしかしたら、オルファンさんの思い出を一緒に覚えてるかもしれないわよ?」

その声に、ブレンは分からないと応えた。
これまで、銀河の中を旅してきたオルファンのことは、確かに感覚的には分かる。
しかしそれもただ、粘性のある水の中を、何も考えず、成るがままに流れているような・・・そんな感覚でしかなかった。
幾度となく、銀河の果てにいる何者かと接触し、そこからオーガニ

ックエナジーを吸収していたことも分かる。
だがそこにも、何の感慨もなかったのだ。

その返事を聞いたこいしは、笑顔のままだが、いつも浮かべているのとは何かが違う表情をして、
「そっか・・・」
と声を漏らしてから、さらに言った。

「わたしといたことが、ブレンの思い出になってくれればいいね。
お姉ちゃんや、みんなと一緒にいたことが・・・
私もねぇ、思い出だけは残ってたから、生きることって楽しいって、分かったの」

その言葉もまた、静かに空気の中を波となって漂った。
温かいスリットウェハーの空気に溶け込むように、優しく。

そして、こいしのこの言葉に応えるブレンの声もまた、温かかった。
彼の者は言う。

きっと、思い出にはなっているはずだ・・・と。

これまで、本能に従い、ただ無心にオーガニックエナジーを吸い取るだけの存在であったオルファンが、もうひとつの己との接触を経て、他者の存在を感じるようになった。
他者への理解を望むようになった。
そうしてそれを今、この幻想郷で実践しているのだ。
今のブレンは、こいしのことを理解し、さとりのことも理解しようとしていた。
そしてそれは、ほんの少しずつだが、達成できているようだったの

だ。
他者の理解は即ち、記憶の形成であった。
だからこそ、こいしの言葉もよく分かる。

思い出があると、生きることに価値があるのだということが分かってくる。
生きることそのものへの感謝の意が、身体の内側から湧き立ってくるのだ。

「・・・・・・」

その返事を聞いたこいしは、無性に嬉しくなった。
だが、いつものように、ころころと声を出して笑ったりはしなかった。
ただ、微かに口元を綻ばせて、はにかむような笑みを浮かべるだけだった。

その表情は、頭上に輝く満天の星空とそこに浮かぶ月の、静かで厳かな光がさせているものなのかもしれない。

※

ふたりは今度は、人間の里の上空へと来ていた。
妖怪にとっては、来ることも容易いし、暴れ回るぐらいどうという

ことはない場所なのだが、一応いろいろと理由やら事情やら、厄介事やらがあり、滅多には訪れない場所だ。

しかしそこも、夜更けになってしまえば、静かなものだ。
人間は妖怪以上に、夜は眠るものだった。
まぁ、勿論妖怪はこういう夜に悪さをすることも分かっているのだから、最低限の警備というものはしているのだろ。
が、こうやって遥か上空から（とはいっても、それほど高い高度ではないが、夜中だから視界が悪く、どの道こちらの姿は見えないだろう）眺めていては、気づくわけもない。

眼下の人間の里・・・静まりかえった家屋と、頭上に見える夜空を交互に見渡しながら、結局流麗なる夜空にだけ眼を向けたこいしが、またブレンに語りかける。

「人間達は、毎日こういう風に夜空を眺めてるのかなぁ～・・・だったら、地底の妖怪に人間を羨むのがいるのも、分かる気がする。多分人間はさ、あんまりにも毎日見てるもんだから、この空にも飽きてるんだよ」

その言葉には何か、人間に対する侮蔑とか批難というものがあるようにブレンには聞こえていたようだ。
それに気づいたこいしは、ふと何かを思いついて、はっ、とした。
そうして数秒間、ぼーっとした表情を浮かべていたかと思うと、先の言葉にこう付け足したのだ。

「いやね、別に人間を馬鹿にしてるんじゃないんだよ。飽きるっていうのはさ、多分、自分のいる場所に慣れたってことなんだよ。それは、いいことなんだと思うよ。私達も、地上の生活に慣れたからね。今じゃ、地底の光景も見飽きてる。そこは、人間とおんなじね。

で、慣れるっていうのはきっと、自分がその場所で生きるっていうことを受け入れられるってことなのよ。
だからきっともう、地底がわたし達の故郷になってるのね。
それで・・・こうやって星空が綺麗だな～って思えるのは、私達が・・・もう、地上で生きる存在じゃなくなった・・・ってことなんじゃないかしら」

そこまで言い終えて黙りこんだこいしからは、何故だか笑顔が消えていた。
それは、彼女が滅多に見せない、哀しそうな表情であった。
哀しみも分からないはずの彼女が見せる・・・

彼女がこんな表情をする理由は、先の発言とはまた別のところにあった。
先の言葉が、その理由のきっかけになったのかもしれないが。

彼女が、続けて言う。
その言葉は、囁(ささや)くように静かであった。

「・・・実は、わたしね。ここにも何度かきたことがあるの。今もきてるの、お姉ちゃんには内緒よ。
でもね、ここの人達は、誰もわたしのことに気づかないの。
すぐ近くに妖怪がいるのに、誰もがわたしのこと、見向きもしてくれないの。
わたしのことをいじめてた人達もいれば、こうやって、いないやつみたいに扱う人達もいて・・・それで・・・」

こいしは続く言葉をすぐには言わなかった。
ただ、膝を抱えて座り込み、その膝に額を乗せて、隠すように顔を俯けた。

ようやく言葉を続けることができたのは、それからだった。

「・・・寂しかった。でも、地底の人達には、わたしは見える、誰もいじめない。それで、ブレンにもわたしが見えてるし、貴方はとても優しくしてくれる。
そのことが・・・嬉しいの」

ブレンは何も応えない。
本当に、ぶるぶると震えるように鳴くことすらもなく、ただじっと、宙に浮遊しているばかりだった。
だがそれは、こいしの言葉を聞き流していたり、そもそも聞こうとしていないからではなかった。
むしろ逆だ。
ブレンは、一切の肉体的な活動を意識出来得る限りに停止させながら、親身になってこいしの言葉を聞いていたのだ。
全ての神経を、彼女の語る言葉に向けて。
それは、彼の者達の目的を達成するための利己的な行動であったかもしれないが、本当に全てがそうであるとは言えるだろうか？

そしてこいしにはやはり、そのことは分からない。
だが彼女は、ブレンがこちらの言葉を聞いていようが聞いていまいが関係なかった。
いや・・・必ず聞いてくれていると思えるからこそ、言葉を続けるのだ。

「ブレン・・・ずっと、なんて言わないけど・・・わたし達、一緒にいようねぇ。それで、お姉ちゃんのことも助けてあげて・・・」

やはり、ブレンは何の返事も寄越さない。
だがこいしは無意識の内に、自分の語る言葉がスリットウェハーの

奥へと染みわたり、ブレンの心へと届くのを感じていた。
そうしてそれが、ブレンの奥底に宿っている生命の塊のようなものを、揺り動かしているということも・・・

宵闇の世界で黙りこんでしまえば、そこに待つのは無音の世界だった。
とはいえ、風の吹く音、自分の呼吸の音、あるいは鼓動の音・・・
その他いろいろの雑多な音が、こいしの耳には聞こえていた。

そう・・・雑多な音響だ。
沈黙というのは、その言葉の響きほどに静かではないということを、こいしは今になってようやく知った。
本当の沈黙というのは、きっと、これよりも遥かに恐ろしい静寂であるのだろう。
多分、さとりや他の妖怪達も、分かっているようで分かってはいないことではないだろうか。
この静けさは、好きかもしれなかった。
もし、好きだという気持ちをはっきりと知ることがこいしにできるのなら・・・

静寂の中で、確かにブレンと心を繋ぎながら。
ブレンの生命が、この閉じた心・・・彼女自身でも触れることのできない心に触れるのを感じながら、こいしはぼんやりと前を見た。

濃い青色と、真黒な色。
似ているようでいてどこか違うふたつの闇の、でこぼこしたその境界。
じっとそこを見つめていると、何か熱いものが、不意にその姿を、這い出るようにして覗かせるような気がした。
そうしてこいしは、多分それを直視することはできないのだ。

それが何であるのかは、彼女には勿論分かっていた。
そしてそれは、確かにあの青と黒の境界・・・東の地平線から、昇ってくるのだ。

『それ』の真似事をしているお空の姿を脳裏に思い浮かべつつ、こいしは静かに呟いていた。

「じきに朝だねぇ・・・お姉ちゃん達も起きるわ・・・」

さとり達が起きれば、すぐにでもブレンがいなくなったことに気づくだろう。
そうして、こちらを探しにくるはずだ。
見つかれば多分、こいしは叱られるのだろう。

幻想郷の各地には、グランチャーがいる。
そのグランチャーと不意に出会ってしまえばとても危険であるし、そもそも深いの闇夜に、地底の妖怪が考えなしに地上に出ることは、やはり慎むべきであったのだ。
こいしにはそういうことも勿論分かる。
叱られることは決して嫌ではないのだ。
ただ、この行動を叱りつけながらも、自分自身のためにやってくれたことなのだということを、さとりが分かってさえくれれば。

そして彼女には、さとりに叱られるより前に、まだブレンと共に行きたい場所があった。
会っておきたい者がいた。

・・・オルファンだ。

※

翌朝。

こいしが予想した通りだった。

ただ、当初の予定と大きく違うところは、彼女とブレンが、夜明けを過ぎても地底に戻らなかったことだ。

さとりは早朝から、サトリブレンが忽然と姿を消しているのを発見した。

昨日までは普通にいたはずの者が急にいなくなるのだから、彼女が中庭で慌てふためくのも当然のことだった。

事態を察して、魔理沙達も集まってくる。

当然、こういう騒ぎになると、お空とお燐だって中庭に出てくる。

そうしてそこで彼女達は、こいしもいなくなったことに気がついた。

普通なら、お空達と一緒にいるはずの彼女の姿がまるで見えないからだ。

ブレンに先達（せんだつ）てまずは彼女を探すことにしたのだが、人手という人手を使って（さすがに偵察任務のある天狗などは協力させられなかったが）地霊殿を隅々まで探したのだが、どこにもいない。

となれば、考えられることはひとつだった。

屋敷の中をひとしきり探り終え、地霊殿にいる者達のほぼ全員が中庭に会する中で、魔理沙が言う。
「こりゃ、ブレンと一緒に出ていったな？」
それを聞いたさとりが、ひとしきり慌てふためいてさすがに落ち着きながらも、まだまだ混乱は隠しきれない様子で、
「出ていったって・・・どうして・・・」
と返していた。
そんな彼女の様子を傍から見ていたにとりと椛が、互いの顔を横目で見合う。
ふたりにはすぐに分かった。
こいしがブレンと共に出ていった理由がだ。
昨日、こいし本人の口からあんなものを聞かされれば、どんな？（バカ）にでも分かることだった。
何をする気なのかは知らないが・・・
いや、それも分かる。
ブレンと共に、オルファンに会いにいったのだ。
こいしがさとりには内緒で出ていったということは、にとり達が知ることではない。
ふたりはすぐに、さとりに昨日のことを話した。
椛が、あたふたするさとりに向かって言う。
「さとりさん・・・さとりさんっ」
「なん・・・なんです・・・っ？」
「こいしさんは多分、ブレンと共にオルファンに向かったのだと思

います」

それだけ伝えてから、続けて昨日のこいしとの会話を事細かに説明した。

それを聞いたさとりとしては、言う事はひとつだった。

「なら、探しにいかないと、勝手に出ていったりして、あの子は・・・

魔理沙さん」

突然呼ばれてびっくりしつつ、魔理沙が応える。

「おっ？おう、なんだ」

「私を連れて、ブレンと共にオルファンの下にいってください」

「あぁ・・・それはいいけど・・・こいしがオルファンにいると分かったなら、わざわざこっちから出向かなくてもいいんじゃないか？その内帰ってくるはずだぜ」

「いえ・・・ブレンとあの子のふたりだけでは、何か会った時に危険すぎるでしょう・・・

それに、せめて私に断りぐらいは入れてくれてもよかった。そのことを、叱ってあげないといけないわ」

「・・・・・・」

こいしの居場所がひとまず分かって、それなりには安心した様子のさとりであるが、まだまだ焦りは隠し切れていない。

にとりと椛の話は聞いたが、まだこいし達がオルファンにいるという確証はないわけだし、そもそも、いつからいなくなっているのかが気になった。

もしかしたら、夜中、こちらが寝ている間に出ていったのかもしれない。

だとして、朝になっても戻ってきていないというのは、それこそお

かしなことだったのだ。

そんなさとりの様子を見て、彼女のこいしに対する心配が並み大抵のものではないのだということを察した魔理沙は、なんであろうと、第一に彼女をこいしと会わせることを考えることにした。

そうして、しばらく黙りこんでいたが、徐に口を開いて、さとりの声に応える。

「分かった、いこうぜ」

それに、傍にいた輝夜が続く。

「私も一緒にいこうか？」

が、それには魔理沙はこう返しておいた。

「いや、いいだろう。オルファンに行くまでだし、危険なことにはならないだろうぜ」

「分かった」

輝夜の返事がくる。

が、魔理沙に向かって呼びかける声はこれだけではなかった。

お空とお燐が、さとり以上に切羽詰まった様子の声で言ってくる。

「あたい達も連れてけよー！」

「そうだそうだっ。わたし達だって、こいし様の友達なんだ。いく権利はあるわー！」

中々、迫るような迫力があるため思わずたじろぎ、ぐっ、と迫ってくるふたりの顔に両手のひらを向けてなだめるつつ、魔理沙は応じた。

ふたりの申し出にも、断る理由はない。

「分かった分かったっ、あんたらのことを忘れてたな。さとりと一緒に、あたしのブレンの手に乗っけてやるよ」

その声を聞いてお空とお燐が頷く。

が、さらにまだ、呼びかけてくる声があった。

椛だ。

「何もないとは思いますが、もしもが大当たりみたいなら、皆さんをお呼びすることにもなるかもしれません。

私もご同行しましょう。オルファンの周囲を警戒させていただきます。不測の事態に際しては、いち早く然るべき行動を取らせて頂きたく思います。

際しましては、霊夢と輝夜様にも、すぐ出られるように用意をしていただきたく――――・・・」

くどくどと長引きそうな椛の言葉を、魔理沙が途中で遮った。

「あぁー分かった分かった!それは勿論だ～っ。んじゃぁとりあえずあんたもついてきてくれ」

次々と聞こえてくる声にその都度応え、ようやく次の声が聞こえなくなったところで、魔理沙はもう一度さとりに呼びかけていた。

「よし・・・じゃあいくぞ」

「はいっ」

さとりの返事と共に、魔理沙達はマリサブレンの方へと歩み寄っていく。

椛の方は先んじて中庭から飛び立ち、地上へと向かった。

そんな中でさとりは、にとりと椛のふたりから聞いたこいしの想い・・・というか、考えを胸中で何度も何度も反芻していた。

自分のために彼女が何かをしようとしてくれることは、確かにとても嬉しかった。
だが、嬉しい中で、少しだけ寂しいような気もした。
寂しいというか、こいしに対し、それは違うと伝えたい気持ちがあった。
確かにさとりは、自分だけがブレンに乗り込み、過酷な戦いの中に身を投じているのは確かだと思った。
こいしやお空、お燐も、永琳が発見したオーガニックエナジーの特徴を考えると、さとりと同じようにブレンを扱うこともできるはずなのだ。
彼女ら三人と一緒に、この前のように乗り込めば、ブレンの能力はさらに飛躍的に上昇する。

が、さとりは決してそうするつもりはなかった。
その理由にはもちろん、こいし達を危険な眼に会わせたくないということがあったのだが、理由はまだもうひとつあった。

こいしは、さとりが一人で戦うことが可哀想だと言ったそうだ。
だが、決してさとり自身はそう思ってはいなかった。
さとりは、彼女達に見守られながら、自分が率先して地霊殿の主として行動することが、喜ばしかったのだ。
長らく、何ひとつ他者と・・・物事と関わることの無かった自分が今、こうやって積極的に・・・しかも、家族やペットを纏める長として、威厳をもって行動できる。
そのことが、とても誇らしく思えるのだ。
だから、何もこいしやお燐、お空が無理をして頑張る必要などなかったのだ。
彼女らの代わりに自分が努力をすることが、さとりにとっては喜びであったのだから。

彼女はこいしに対して、そのことを伝えようと思った。
だが、もしかしたらそうするべきではないのかもしれなかった。
さとりにさとりの考えがあるように、こいしにもこいしの考えはあるかもしれなかった。
心のない彼女が理知的に考えた、精一杯の個性というものだろうか。
それがあるはずだった。
さすがに、その個性を無視してまで、自分の意思を押し通すことはできなかった。

もう、心がないから心が読めないということを理由にはできない。
一度、こいしの・・・こいしだけではない、お燐達の言葉を親身に聞いてみることも、大事なのかもしれないと、さとりは思った。
思えば、ブレンと出逢ってからというもの、自分の意識と第三の眼は、彼の者へと向き過ぎていたのかもしれない。
それを今一度、正す時かもしれないのだ。

※

こいしとブレンがオルファンの体内へと入ったのは、もう太陽が地平線の向こうから顔を出し、彼女の考えていた通りの光景が見えてきた頃だった。
ブレンと旅をするのが楽しくて、ここまでくるのが大分遅れてしまった。

多分もう、さとり達もこちらがいなくなったことに気づくだろう。

だが、ここまでくれば、向こうに見つかるよりも早く、目的は達成できそうだった。

こいしには、どこで何をすればオルファンと対話できるのか、実はよく分かっていなかった。
だが、サトリブレンはすでにオルファンの中枢部には何度か訪れており、その道のりも覚えている。
だから、こいしのために、黙々とその場所へと向かっていた。
ブレンの胎内・・・スリットウェハーがさらに大きくなって形を変え、幾度となく歪曲を繰り返し、まるで一本の巨大な管のようなものを形成している積層装甲の道を、ブレンが進む。
すでにこいしも何度か見ている光景ではあったが、いつ見てもこの光景は、生物の消化管の内部はきっとこうなっているのだろうと思わせるものだった。

いや、そうだ。この光景は、消化管・・・胃とか腸の内面に似ている。
何故はっきりとこいしにそれが分かるかというと、彼女がそういう趣味をもっているからに他ならなかった。
彼女の趣味は実をいうと、相当にアブノーマルなものだったりする。
しかし彼女は、似ているとは考えながらも、悪臭を放ち、ぎとぎととした光沢を持つ腸壁に比べて、今見える光景はとても清潔で綺麗なものに見えた。
なんといおうか・・・生命の持てる最大の美しさというものを、こちらに示しているかのようだ。

そんな思考をしている内に、ブレンは目的の場所に到達した。
スリットウェハーの道が段々と狭くなり、ついには、ブレンでは通

れないほどになりつつある、そんな場所だった。

ブレンから降ろしてもらいつつ足場に降り立ち、その柔らかい感触を確かめながら、

「そっかぁ、この奥に・・・・・・じゃぁブレン、いってくるわ」

と呼びかけつつ、すぐに、スリットウェハーが一点に収束していくようなその奥へと歩いていった。

そうして、どうしてあるのかも分からない階段を上り、さすがにうんざりするほど足を動かしたその先に、それは見えた。

何か透き通った、色のない結晶のようなものに透過された朝焼けの空。

そしてそこから差し込む光に照らされて淡く輝く、無数の溝の入った青い足場。

四方をスリットウェハーに囲まれ、閉鎖的な印象を与えていたこれまでの光景とは一転して、開放感に溢れたその空間。

ここよりも広い空間は他にもあるはずなのだが、そんな場所よりも遥かに広く感じることが、こいしにはできた。

眼で見えたものを頭で判断して、そう結論付けただけであるのだが。

こいしは一目見て、ここが確かに、オルファンの核となる場所であると判断できた。

そしてここで姉は、オルファンと対話したのだ。

こいしが、きょろきょろと周囲を見渡す。

どこかに、さとりがオルファンとの対話のために使ったという、何かがあるはずなのだ。

そしてそれは一目で見つかった。
青っぽいスリットウェハーが一点に集まり、そこに黄色い色素を集めたかのような、四角い黄金色に輝く物体。
そしてその上部にある、真黒な板だ。
それは、ブレンの胎内で、時折スリットウェハーの表面に見える黒い映像に似ていた。
そこに、ブレンの言葉が文字として変換されて見えてくるのだ。
それはどうやら、幻想郷の人妖の事を理解でき始めたブレン達が、こちらの言葉での対話を図っているということなのだろうと、永琳が言っていた。

実はこいしも、地霊殿から出発する前にその、ブレンが見せる文字を見ていた。
『ひとりか？』
と問いかけてくる文章だった。

きっとあの巨大な黒い板も同じように、オルファンの言葉を文字として表すためのものなのだろう。

こいしは、すぐにその黄金色に輝く・・・研磨された鉱石のような物体に駆け寄りながら、その名を大声で呼んでいた。

「オルファンさぁーん！」

そうしてそのまま、四角い物体の表面に手を付くと同時に、次々に語った。
まずは自己紹介だ。
初めて会う相手には自分から名乗るというのは、礼儀だった。

「こうやって話をするのは初めてですね。わたしはね、古明地　こ

いしって言うんです。古明地　さとりの妹なんです。
ほら、貴方と何度もお話した、あの・・・」

そう言い終えてからしばらくすると、こいしの頭の中に、直接声が響いてきた。
それは、ブレンがこちらに呼びかけてくる声とよく似ていたが、それよりもさらに強く、澄み渡るような反響であった。
頭の奥はおろか、さらにその奥・・・魂というか、認識できる自己というものの最深部にまで、突き刺さるように届く、そんな声だった。

知ってる。
と言ったような気がした。

その声を聞いたこいしは、呆気らかんとした表情を浮かべた。
それは、オルファンの声のその透明な響きのためだけではない。

なんだか、胸に、そして全身に染みわたるその声が、こいしに何かを伝えようとしているような気がしたからだ。
だが、こいしにはやはり、それが何なのか分からない。
自分の気持ちはともかく、他者の気持ちを感じることのできないこいしには、オルファンの伝えようとしていることが、すぐには分からないのだ。

だが、その事が分かると同時に、胸の奥で沸き立ってきた何か・・・それの正体を知った時、こいしにはようやく、オルファンの気持ちも判断することができた。
他人の心は分からなくても、自分の心は、段々と分かるような気がする。
それはきっと、姉であるさとりや、お空達・・・そして、ブレンが

そうさせてくれたことなのかもしれなかった。

きっと『そのもの』は、今のこいしと同じ気持ちを抱いているのかもしれない。

それは、哀しいと分かる．．．そんな感情だった。

第十八話　その2

「オルファンさん・・・どうしたの？」

こいしがそう呼びかける声は、開放感に溢れる印象とは裏腹に、実際はそれほど広くない空間の中を幾重にも反響した。
だが、こいしの心に返ってくる響きはない。
オルファンは、何も応えてはくれなかった。

それでもこいしは、呼びかけ続けた。
なぜオルファンはこんな哀しい想いをしているのだろう（実際のオルファンの気持ちを感じ取ったわけではないが、きっとそうだと思えた）、という純粋な疑問と共に、その哀しみをどうにかする方法はないのだろうかという欲求もあった。

「オルファンさん・・・わたしね、貴方と話をして、貴方のお手伝いをしたいの。
わたしは、お姉ちゃんみたいに貴方の気持ちを分かってあげることはできないかもしれないけど、それでも、貴方の方からわたしに、あんなことをやってほしいとか、あんなことを知りたいって言ってくれればね、みんなしてあげるし、教えてあげるんだよ？そこはきっと、私もお姉ちゃんも変わらないよ」

そんな言葉が、またスリットウェハーに囲まれた空間をこだまする。
今度の声は、その奥にまで染みわたっていったような気がした。
そしてようやく、こいしの心にも、オルファンの声が聞こえたのである。

――それは本当？――

「・・・・・・」

ますます透き通るような・・・心に深く食い込みながら、そのまま水の流れのように通り過ぎるようでもあるその声に、こいしは呆気にとられたようにぼーっとしていた。

だが、一瞬だけ真っ白になった胸の内に、血の色を思わせる紅い色が、微かな熱と共にうっすらと広がっていく。

やがて、その紅い色と温かさの存在を感じて、こいしは満面の笑みを浮かべながら、オルファンの声にこう返していた。

「もちろん、なんでもするよ！」

――なんでも？――

「なんでも！」

そう応えた瞬間だった。

こいしは、突然自分が光の中に呑みこまれたような錯覚を受け、思わず驚嘆した。

「あ・・・っ？」

いや・・・呑み込まれたような、ではなく、実際呑みこまれている。

それもまた錯覚なのかもしれないが、こいしにはそうとしか思えないほどに、この光には迫りくるような、肌に張り付くような存在感

があった。

彼女の視界が、隙間なく白い色に埋め尽くされ、それと共に、網膜・・・その奥に繋がる脳さえも、その白色光に支配されそうになった。その光により、眼の前に見えていたはずの光景・・・スリットウェハーやオルファンとの交信器（と思しきもの）や、真黒い板が、その全てがどこかに消し飛んだかのように見えなくなった。もしかしたら、本当にどこかに消えてなくなったのかもしれない。こいしは、真っ白な光を眼に焼きつける中で、自分がどこか、まったく別の世界に引きずりこまれたのではないか、という錯覚さえも起こしていた。そして、それもなんだか、錯覚でないように思えていたのだ。

じっと、眼の前の光に眼を向ける。その光は、眼の前で白い絵の具を何度も何度も重ね塗りしたかのように真っ白でありながら、決して眼に痛いほどのきつい光ではなかった。眩しいはずなのに、眩しくなかったのだ。身体が眩しくないと感じていた。なんだかとても、柔らかい光であるように思えた。

もしこの光が、この身をどこかに運んでいるというのなら、それはきっと、波もたたないような清流の中を、船に揺られて進んでいるようなものなのだろうと・・・そんなことも考えていた。そういえば、三途の川を渡るというのは、これと同じように感じるのだろうか。

何故だか、こんな場違いなことも考えてしまっていた。

「・・・なに・・・？」

ようやく口を出たその声は、その声量の小ささもあってか、わんわんと反響していた先程の声音よりも、遥かに微かな音響となってこいし自身の耳に入った。

そうして、真っ白な光が・・・いつ消えるとも分からない光が視覚を支配し続ける中で、こいしはまだ、オルファンの哀しみ・・・と思える何かを感じ取っていた。
また彼女は、哀しみだと分かる感情の中から、時折抜け出るように、もっと別の感覚が現れるのも感じていた。
それは、氷よりは温かく、しかし、冬の北風よりかは寒い冷気となって、この肌に吹きかかるような気がした。
しかしそれは、実際に温度として感じられるような類いの寒さではなかった。
心に吹きつけてくる寒さであった。

こいしには、オルファンの哀しみは分かっても、この、肌寒いと感じられる何かが、どんな感情からもたらされるのかは、さすがに分からなかった。
ただ、哀しみとはもっと別のものだといいことは分かった。
オルファンの哀しみは、こんな凍える寒さとは真逆で、温かいのだ。

なんなのだろう・・・

そんな疑問の声が脳裏をよぎった時、すでにこいしは光の中にはいなかった。
彼女はさすがに、一瞬だけ自分の眼を疑った。
が、それに続いて、自分の感性と、さとりが以前言っていたことを思い出すことで、その心をすぐに落ち着けることができた。

彼女は、色とりどりの花に囲まれた花畑の中に立っていた。
眼下を見れば、その香りだけが頭の中を満たしそうなほどにいろいろな花があった。
赤に黄色に青・・・そういう色を混ぜ合わせたような色の。

視線を少しだけ上げると、この花畑の無限の広がりをその眼で確かめることができる。
さらに視線を上げて頭上を見上げれば・・・夜空がとても近かった。
妖怪の山の頂きで見た時よりも、ずっと。
なんというか、見えないけれど、確かにある薄い膜・・・うっすらと靄のようにかかって、夜空をほんの僅かにぼやけさせていた膜が取り払われたかのようだ。
オルファンの体内に入った時は、もう朝だったというのに・・・

間違いなかった。
こいしは、自分が別の世界に引きずり込まれていると感じたが、その通りだったのだ。
ここは、先程までこいしがいたのとは、まったく別の世界であった。
そしてここに彼女を誘ったのは、他でもないオルファンだ。

こいしは、ここがオルファンの世界・・・『そのもの』の心の世界であるのだと判断しながら、さとりが以前、『そのもの』の記憶に触れた時のことも思い出していた。
その時も、こんな広大な花畑の中、怖いほどに透き通った夜空に押しつぶされそうになっていたという。
そんな中で、頭上を見上げた時、ふたつのオルファンが互いにその身をぶつけ合うのが見えたのだという。

つまりこいしは、多分その時と同じ状況にいるのだ。
となればきっと、さとりと同じように、オルファンの心・・・もしかしたら、記憶とはまた別の何かに、触れることができるかもしれないのだ。

どこからともなく、静かな風が吹きつけ、足元の花がそれと分からない程度に揺れる中で、こいしはその事を何故だか純粋に喜ぶことができなかった。
なんだかよく分からないが、とても不思議な気分がしていた。

「ここは・・・・・・オルファン・・・オルファンさんが呼んでる・・・」

こいしは、気がついた時には足を一歩踏み出して、花畑の中を前に向かって進み始めていた。
誰かが・・・いや、オルファンの呼ぶ声が聞こえた気がしたから。

数歩・・・数十歩と歩く中で、その視界に、何かが見えた。
緑の葉や茎に囲まれて色鮮やかな花が咲く中、その一角に、真黒な色彩が、一点の染みのように広がっていた。
頭上に広がる夜空の大半を占める漆黒と同じ色だ。
まるでそこだけが、黒百合の花だけで埋めつくされたかのようだった。

「・・・・・・」

無意識の内に、その黒い色の方へと歩みよっていったこいしは、や

がて、はっとした。

それは、黒百合の花などではない。
小さな人間のような何かの、影だったのだ。

こいしよりもまだ背丈の小さな少女が、うずくまって座っていた。
こいしは思わず、息を呑んだ。

こんな場所に、初めて見るような少女（人間なのか妖怪なのかも分からない）がいる。
オルファンの心の中の世界である、この花畑の中に。

最早疑う余地はないように思えた。
というか、この唐突な出逢いを、こいしはこう判断することしかできなかった。

この少女こそが、オルファン・・・その意思を見える形として具現化したものだ。
今、会おうと願っていた存在が、眼の前にいる。
そして、うずくまって座り込むその背中はやはり、とても寂しそうなものに見えた。

こいしは、僅かに眼を見開いたまま、眼の前の少女・・・オルファンに向かって呼びかけた。
「・・・どうしたの？・・・哀しいの？寂しいの？」

少女は何も応えないし、反応もしない。
多分、聞こえてはいるだろう。
聞こえている上で、応えないのだ。

こいしは、もう一度だけ呼びかけた。
「ひとりきりが嫌なら、わたしが来たから、もう大丈夫」
その声を聞いた後だった。
眼の前でうずくまって少女が、徐にその場で立ち上がった。
はっきりと人の形が見えるようになっても、まだその姿からは黒百合の花などの・・・つまり、黒色を呈する花を思わせた。
そうして、そんな花のような印象を与える少女が、立ち上がる時と同じようにゆっくりと、こいしの方へと振り返った。
そうして、こちらを見据えてくるその眼を見返した時、こいしは、自分の心臓の鼓動が、ただの一度だけ、そのまま潰れてしまいそうなほどに強くなったのを感じた。
それと同時に、いいようのない感覚・・・一体なのか、まったく理解できない感覚が彼女を襲った。
「・・・本当?・・・本当に大丈夫?」
そう聞いてくる少女の声・・・この世界にくる前に聞いた、オルファンの声と思わしきものとは違うが、それでいて全く同じものにも思えるような、心に澄み渡る声だ。
だがこいしはそれに、すぐには応えることはできなかった。
胸の内から湧き上がる正体不明の感覚に苛まれ、それどころではなかった。
本当に、わけがわからなかった。
なんだか、何かが自分の身体の中心からどんどん外の方へと広がって、この身を内側から破裂させようとしているような気がした。
そしてそこには痛みはなく、ただ、身体が満遍なく外へ外へと広げられていくという、そういう感覚があるだけだった。

こんな感覚は初めてだった。
こいしには、これが一体なんであるのか理解することは、到底できなかった。
多分、さとりにしても、あの永琳にしても、分かるものではないだろう。

だからこそ、オルファンのこの声も、聞いているようでほとんど聞いていなかったように思えた。
だがそれは、意識的に分かる範囲でのことだった。
その耳は確かにその声を聞き、こいしの中の無意識が、その寂しそうな声音に反応し、オルファンがこんな声をする、その原因をどうにかしたいと願った。
それがこいしの、声のない返事を誘発していた。

「・・・・・・」

彼女はただ、呆然とした表情のままで、こくりと頷いた。
それはつまり、オルファンが、こいしの言ったことが本当かどうか聞いてきた声に、応えるものであった。
それは本当だと。

頷く彼女を見て、オルファンの少女が、微笑んだ。
しかしこいしは、その笑顔の柔らかさを感じることはできなかった。

少女が笑むと同時に、また、心臓がドクンと大きく鼓動するのを感じた。
それと共に、身体が外へと広がるような感覚もさらに強くなる。

そこで、こいしには分かった。
身体が外へ外へと広がっていくという表現をしたが、それだけでは

ない。
満遍なくうっすらと、もうほとんど霧のように拡散した身体は、今度はどこか一点へと向かって吸い込まれていたのである。
それこそ、眼の前にいるこのオルファンの少女であった。
少女の胸の内へと、まるでそこにぽっかりと穴でも空いているかのように、まっすぐに吸い込まれ、染み込んでいく。

当然のことであるが、こいしの身体は、実際には内側から広げられても、霧のようになってもいない。
しかしすでにこいし自身の頭の中では、自分の身体は、細胞のひとつひとつから粉となって、それがこの花畑の空気と混じり合い、そのままオルファンに吸い込まれている最中であったのだ。

「・・・・・・あ・・・貴方・・・貴方は、一体・・・？」

器を失い、宙をぼんやりと漂うだけになった魂が、そう呟く。
こいしには、もう何も理解できなかった。
オルファンが何をしようとしているのかも、その何かで、自分の身がどうなるのかも。

ただ彼女の魂に分かること。
それは、きっとこれが、オルファンにとっての誰かと一緒にいるということなのだ、ということだった。
そうしてそれは、こいしにとっては、何だかとても寂しく、どこかで恐ろしさを感じさせるものであったのだ。
自分の身体に、冷たいそよ風が吹きつけるような、そんな気分だった。
それは、自分の第三の眼を閉じたその日感じたものと、どこか似ているような気がした。

もう、みんなの下にはいられないと思った、その時と。

霧となった身体が残らず吸い込まれ、残った魂までも、今まさに吸い込まれ、オルファンの胸の内で溶け込もうとした、その瞬間だった。

一筋の光明のごとく、静かに、しかし鋭く響く声が、その魂を揺さぶり、こいしをこの不可解な幻覚から覚醒させた。

「おやめなさい」

そんな声が鼓膜を揺らした瞬間、こいしは・・・その身をはっきりと保っているこいしは、長い夢から目覚めたように、はっとして、一瞬だけ強烈な目眩を感じ、足の力が抜け、その場に尻餅をついて座り込んでしまった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

微かに呼吸が荒くなり、心の臓の鼓動も、うっすらと感じることができた。

一体何が起こったのかこいしには理解できなかったが、しっとりと汗ばんだ両手のひらを眼前にかざして、その奥に流れる血潮を見据えることで、自分が何か、取り返しのつかないところにまで引きずり込まれそうになっていたところを、堪えることができたのだと察することができた。

気を落ちつかせつつ、オルファンの少女の方へと、もう一度眼を向ける。

その少女は、すでにこいしの方を見てはいなかった。
右の方へと顔を向け、何かをじっと凝視していた。
こいしもそれに釣られて、彼女が見る方向に同じく眼を向ける。

そうして、もう一度静かにこの場を過る静かな声と共に、こいしはその姿を見た。

「そうするには、あまりにも早すぎる」

ブレンと初めて出逢ったあの日見た、地上の妖怪・・・
そう、八雲　紫、その者であった。

「・・・なに？」
こいしは、端から見れば平然としている様子だが、彼女なりには慌てて、座り込んでいた身体を立ち上がらせた。
そうして改めて、花畑の向こうからゆっくりとこちらに歩いてくる紫の姿を眼に焼きつける。

彼女は尚も、静かに、こちらに言い聞かせるような声で、続けた。

「自らの抗体となるものがいれば、確かにそれは、無限と見紛う力となる。
しかし、真の意味での無限に到達することはない・・・
貴方は、自らの欲求のために行動し、彼女の生命と引き換えに挫折を得ようとした。

その先に何が待つのか、分からないわけではないでしょうに・・・」

そんな声を聞くなかで、こいしはちらりとだけ、オルファンの横顔を見た。

先程よりもさらに、哀しそうだった。

なんとかしてあげたいと思えたが、先の一瞬を経て、こいしは理解していた。

今自分達が、オルファンのこの哀しみをなんとかしたいと思えば、できることは、生命を捧げることだけなのだ。

こちらの生命と引き換えに、『そのもの』の生命を繋ぐことだけ・・・

だがさすがにそれは、こいしにも怖いのだ。

紫の声が、尚も静かに響く。

無限の広がりを見せる花畑の割には、なんだか、とても狭い空間の中を反響するかのように。

「彼女を解放してほしい・・・そして、もう少し貴方には、我慢をさせてしまうことになる・・・」

その声を聞いた途端こいしは、眺めていたオルファンの横顔が、思いつめたように、はっとするのを見た。

それからすぐに、彼女が再びこいしの方に眼を向けた。

その眼はやはり寂しそうではあったが、先程までと違うのは、それと一緒にほんの少しだけ、怒っているような印象があることだった。

子供が大人の悪いところを見た時に抱く、純粋な怒りだった。

疑問と共に湧き出てくる、制御不能の・・・

そうして、じっと見据えてきたその眼が、再びこいしの胸の内から、

あの正体不明の感覚を呼び起こそうとする。

だが、その感覚が怖いものであると分かってしまったこいしは、自らの無意識でそれを抑え込んだ。

身体の内側から膨れあがり、やがて霧散しようとするその何かを、心の腕で抑えつけたのだ。

そうしようと望めば、いともたやすく抑えられた。

その何かに力があると仮定して、その力は、赤子の腕が押すよりも弱々しいものだったのだ。

こいしには、オルファンの眼の中にあった怒りがすぐに消え、そのまま大きな哀しみに変わっていくのが分かった。

何故それが哀しみだと分かったかというと、簡単な話だった。

怒りと一緒に見えていたもの・・・哀しみだと分かっていた感情と同じものが、そのまま増えていたのだから。

哀しみと哀しみが一緒にいれば、それは足されてひとつの大きな哀切となる。

そしてそれはつまり、オルファンが抱いていた怒りは、哀しみと同じものだったということなのだ。

その眼を見たこいしは、不気味な感覚を抑えつける代わりに、逆にそのまま心の臓を押しつぶすような、切なさを感じた。

オルファンに、申し訳ないことをしてしまっている。

それが、なんとなくでも分かってしまったのだ。

それでも、先程オルファンがやろうとしていたことが何なのかも分かっていた。

詳しくは分からない。

それでも、そのことでこいし自身がどうなるのかということは、やはり、なんとなくだけれど・・・

そのことをどうしても許容できないこいしは、オルファンに対する誠実さ・・・彼女のために何かをしようとしたのに、結局それが叶わないものだと分かった、その焼きつくような感覚・・・悔しさなのだろうと思える感覚に苛まれながら、じっとこちらを見つめるオルファンから眼を逸らし、俯きながら、吐き捨てた。

「その・・・ごめん・・・っ」

そんな声と共に、紫の口調が僅かに荒くなる。

「オルファン、貴方は・・・っ」

それと同時だった。

オルファンの少女は両手のひらを広げ、それをこいしに向けた。

その動きはゆっくりとしていたが、まるでこいしの身体を突き飛ばすようにも見えた。

いや、実際そうだったのだ。

広げた手のひらから、眼に見えない衝撃波のようなものが放たれ、

それがこいしの身体を後ろへと吹き飛ばした。

「あ・・・うわっ!?」

身体と共に、その奥底に根付いた魂も一緒に吹き飛ばされるのを感じながら、こいしはきつく眼を閉じ、突きつけられる衝撃に為されるがまま、花畑から空の彼方まで吹き飛ばされ、そのまま、言い様のない力の流れに乗った。

そして、その瞬間だった。

こいしは、風が吹き荒ぶような音が鼓膜を揺らす中で、紫の呟く声

を、何故だか聞きとることができていた。

「・・・我々は、貴方の為すがままにされるわけにはいかない。可哀想だけど、一度・・・教えてやらなければならないわ・・・」

※

次に眼を開けた瞬間、こいしの視界には、ついさっきまで見ていたはずなのに、ひどく懐かしく思える光景が広がっていた。
眼の前には、スリットウェハーの成す壁面、やや頭上には、真っ黒な板が見え、少し視界を下げれば、黄金色に輝く正方形の物体が見えた。

「・・・・・・」

戻ってきたのだ。オルファンの体内に。
ただそれだけの認識ができずに、こいしはしばらく、その場に立ち尽くしたまま呆然自失としていた。

そんな中でまず、じわじわと身体の芯から広がり、感じられるようになったのは、オルファンに対しとても酷いことをしてしまったのではないかという意識だった。
そして、他のありとあらゆる意識と感覚はそれに遅れてやってきて、罪悪感ばかりが膨れあがるように大きくなり、こいしの精神を麻痺させていた。

まるで夢のような・・・もしかしたら本当に夢だったのかもしれない、あの邂逅。
しかし、あのあまりにも短く、だからこそはっきりとしていた一瞬に自分がやったことを思い返すと、こいしは、自分の心に一陣の寒風が吹き抜けるのを感じてしまっていた。

「・・・さ・・・寒い・・・どうして？」

温かいはずのオルファンの体内が、何故かその温もりを感じさせてくれなかった。
そのことが、なんだかとても不吉なことであるような気がして、こいしの身体は俄かに震えだした。

だが、それからすぐだった。
身体の震えも、胸の内からあふれ出てきた罪悪感も全て吹き飛ばすように、大きな声がどこからともなく響いて、スリットウェハーの中をこだまし、こいしの耳に届いた。

「こいしー！いるのっ？返事をなさいっ！」

他でもない、こいしの愛する姉の声だった。
彼女はすぐに、その声に応えた。

「お姉ちゃーん！いる、いるよぉ！ここよーっ」

そう返事してからしばらくしてだ。
先程こいしが入ってきたのと同じ場所から、慌てた様子でさとりが入ってきた。

お空とお燐も一緒だし、魔理沙もいた。

こいしの姿を見ると同時に駆け足で近づき、その両肩に手を置いたさとりは、息を荒くしながら大声で呼びかけていた。

「はぁっ・・・こいし、大丈夫なのねっ?怪我とかもしてなければ、怖い目にも会わなかったのね?」

そのまま小さく身体を揺さぶられる中で、こいしは、独りごとを言うような調子で応えた。

「ん・・・なんにもなかったよ。大丈夫・・・」

それに続いて、お空とお燐も、

「こいし様ー!」

「無事でーっ!」

と叫びながら、こちらに駆け寄ってきた。

そんな中で、さとりはさすがに厳しい眼つきを浮かべながら、さらにこう呼びかけてきた。

こいしも、その眼をしっかりと見据えながら、その声を聞く。

「貴方がどうしてこんなことをしたのかは後で聞くし、大まかな事情は聞かせてもらったわ・・・貴方の気持ちもよく分かった。

でも、地上には危険なことだっていっぱいあるのよ・・・残念だけど、ブレンと一緒にいれば尚更ね。グランチャーといつ出くわすかも分からないのよ・・・

もしかしたら、貴方もブレンも、今この場にいなかったかもしれないの。

もしもの話よ。でも、もしもって考えられる内は、私も怖いの・・・怖いことなのよ。それは分かるわね?」

「・・・うん」

「私を喜ばせたくて、ブレン達の役に立ちたいなら、わざわざ秘密にしないで、ちゃんと言ってくれればよかった・・・こうやって心配させるようなこいしは、悪い妹よ」

悪い妹と語るその言葉は、胸に刺さって、心臓を破り、紅い鮮血と一緒に温かさを溢れださせるようだった。

本当はさとりも、こちらを悪い妹とは思っていないということが分かるから、尚更心に痛かった。

だからこいしは、自分なりに精いっぱい、自分が悪いことをしたのだということを意識しながら、応えた。

「ご・・・ごめんお姉ちゃん。ごめんね・・・分かったよ」

「本当に分かったのね？」

「うん」

こいしが軽く頷くと同時に、さとりの眼の中にあった険しさは、まるで嘘であったかのように消えてなくなった。

そうして彼女は、こいしの肩においていた手を離すと、そのまま彼女の頭を抱き寄せて、静かに言った。

こいしは、姉の胸の中に顔をうずめる中で、そこに薫る匂いを、今しがたちょうど嗅いでいたような気がした。

「分かったならそれでいいのよ・・・厳しいことを言って、こちらこそごめんなさいね・・・後で、いろいろ話しましょう。これからは、貴方のやりたいことがあるなら、やってみればいい。勿論、私と相談しながらだけどね・・・」

その声に続いて、お空とお燐も、涙を流しながら、さとりとこいし

のふたりに、いっぺんにしがみ付くように抱きついてきた。
「あぁ～、よかったーっ！」
「ホントに、心配してんですよぅ～！」

ふたりが、さとりとこいしをぺしゃんこにするほど強く抱きしめる中で、魔理沙がゆっくりと歩み寄りながら、にやにやと笑顔を浮かべて言った。
まるで、喜劇の幕引きでもするかのような台詞だった。

「サトリブレンから話は聞いたぜ？星空を見上げながらの、夜の散歩だ。さぞ楽しかったんだろうぜ・・・・・・ひとまず、これで一件落着という・・・」

いや、まだ幕引きではなかった。
魔理沙の台詞は、最期まで語られることはなかった。

突然彼女達は、足の裏から伝わり、腹の底にまで響くような震動を感じた。
また、なんと言おうか、腹を空かした時によく聞くあの音にどことなく似た、ごろごろと響くような音を聞いた。
その震動と音は決して大きなものではなかったが、気のせいだと割り切られるほど小さなものでもなかった。
確かに、その揺れを感じることもできたし、空気の波が鼓膜に伝播するのも感じた。
ごろごろという音は決して、腹の虫の鳴き声などではない。
確かに、外部からの音響であった。

そしてそれは、ほぼ間違いなく、このオルファンの身体から起こっ

ていたのである。
あるいは、さらにその向こうから伝わったものが、オルファンの身体からこちらにまで伝播してきたのか。

「・・・・・・」
「・・・・・・」

魔理沙もさとりもこいしも、鳴き喚いていたお空達でさえ、まるでぜんまいの緩んだからくり人形のごとくその動きを止めて、黙り込んだ。
せいぜい、訝しむような顔つきになって瞬きするほどの動作しか起こらない。

静寂がこの場を支配する。

ようやく呟いたのは、こういう張りつめた空気の中で、比較的自分勝手でいられるお空だった。
「・・・なに？」

その声に返事をしたのは、二度目の揺れ。
身体が跳ねあげられ、浮き上がらんばかりの大きな震動と、何かが・・・空気か、あるいはもっと別の何かが膨張して弾けるような轟音であった。

そうしてそれと共に、魔理沙のさすがにうわずった声が、その轟音にかき消されながらも、スリットウェハーの空間の中を響き渡った。

「一件落着じゃっ！な・・・ないってことかぁーっ！？」

1960

第十八話　その3

椛には、眼の前の光景が俄かには信じられなかった。

彼女は、魔理沙とさとりがオルファンの体内にいる間、不測の事態が起こらないか監視するために外で待機し、周囲に眼を凝らしていた。

が、そんな中で突如、どこからともなく一体のアンチボディが出現し、オルファンの肉体目掛けて、チャクラ光を発射したのである。

全くもって信じられなかった。

千里眼を用いれば、遠くは見えるかわりに近くには死角ができることもある。

だから、敵の接近に気づかないということもなくはない。

しかし椛は、そのことをしっかりと踏まえた上で、基本的には他の天狗と変わらず普通の視覚を用いて広い範囲を見渡し、時折千里眼により遠方を見る、というのを繰り返していた。

これにより、遠近両方とも、ある程度はカバーできていたはずだ。

念のために、オルファンのさらに上空や、地上にさえも眼を向けていたのだ。

だから、例えいかなる範囲から何者が接近しようとも、それを察知することができないわけがないはずである。

例外があるとすれば、最速を発揮した天狗ぐらいのものだが、少なくともアンチボディがそのレベルの速度を出せるわけはない。

「こ、これは一体・・・っ」

呻く椛は、眼前、宙を漂いながらオルファンを見下ろすそのアンチボディの姿を見据えた。

濃い紫色をした、初めて見るアンチボディだ。
ブレンとも、グランチャーとも・・・魔法の森で再リバイバルしたというブレンチャイルドとも（文から写真を見せてもらった）違う。
どちらかと言えばグランチャーに似ているような印象を受けるが、頭部からは身体の半分を占めるのではないかと思えるほどの巨大な鶏冠（とさか）のようなものがせり出しており、肩からは、無数のヒレのようなものが伸びていた。
そしてその無数のヒレが、まるでそれぞれ別に生きているかのように揺れ動いている様は、不気味であった。
また、武器のようなものは一切持っていない。
胸のあたりから直接チャクラ光が打ち出され、オルファンを襲っていた。
その光は、オルファンが展開する薄いチャクラシールドによって相殺されはしたが、武器を使わずに攻撃するの姿も異質なものに見えた。

「・・・っ」

息を呑む中で、椛は考えた。
このアンチボディは、一体どうやってこちらの眼を掻い潜り、オルファンに接近したのか。
これは速さとか、そういう領域の問題ではない。
もっと根本的に、距離を無視して瞬間移動でもしてきたかのようだ。

瞬間移動・・・

静かに佇んでいた紫色のアンチボディが、ゆっくりとこちらを振り向く。
その姿にただならぬ脅威を感じる中で、椛は答を見つけ出した。

「・・・これが例の、バイタル・ジャンプというものかっ？」

さとり達から話は聞かせてもらっていた。
オルファンが放出するオーガニックエナジーの道のようなものに乗り、長距離、あるいは短距離を瞬間的に移動するバイタル・ジャンプ。
おそらくこのアンチボディは、それを実行してきたのだ。
となれば、視認できない位置から一気にこちらに接近してくることもできる。
しかし、だとして、千里眼でもこの敵の姿を視認できなかったのが奇妙であった。
が、今のところ思い付くもっとも可能性のある回答はこれだった。

そんな結論が脳裏をよぎると同時に椛は、自分がこんなことを考えている場合ではないのだということを思い出していた。
自分の負うべき役目は、不測の事態が発生しないか警戒し、いざ発生してしまった時に、迅速に報告することなのだ。
まずはオルファンの中のさとり達、そして次に、地底だ。

「いったい全体、何がなんなのか皆目見当がつかないが、そう易々とやらせは・・・しない！」

椛は、音の壁を突破しながら飛び立ち、近くに開いてあった入り口からオルファンの体内へと進入し、さとり達がいるであろう中枢部へと向かった。

敵が一瞬で眼の前に近づいてきたのを信じられないという椛だったが、彼女自身も、似たようなことができるほどの素早さを持っていたのだ。

その場から一瞬にして姿を消した彼女を追うこともせず、紫のアンチボディは、もう一度オルファンへと眼を向けた。
三日月を思わせる形の、その中心。球形の窪みのちょうど真ん中にある、人の形をした彫刻のようなものに。

そうして、じっとその彫刻を見据える中で、紫色のアンチボディ・・・バロンズゥは、静かに笑った。
頭部と思しき場所で微かに光るオレンジ色の眼が、その淡い光を怪しく揺らしていた。

それは、彼の者の胎内に宿る彼女の嘲笑に釣られたかのような、不気味な笑みだった。

バロンズゥの肩から伸びていた無数のヒレ・・・フィンが、ゆっくりと伸び、まるで髪の毛が逆立つようにゆらゆらと揺れ動きながら、四方へと広がった。
それは、一部の鳥類が威嚇するために羽根を広げたりする動きに、どこか似ていた。
しかし、それらよりも遥かに不気味だった。
広げられる、左右合わせて十四か十六本あるように見えるフィンは、まるでバロンズゥの放出する異様な気質を、空気中にばら撒こうとしているようでもあった。
・・・実際、そうだったのかもしれない。

広げられたフィンが僅かに歪曲し、その先端部・・・グランチャーが使うソードエクステンションの銃口に似た鋭利さを持つその先端部が、一斉にオルファンの彫刻へと向く。

それと同時に、それらの先端の全てからチャクラ光が打ち放たれ、女性の肢体を思わせる金色の像が、淡い光と、チャクラシールドとの衝突によるスパークに包まれた。
まるで、緑色の澄んだ水の中に浸かって、それが波打ち起こる飛沫に呑まれるかのように。
うち放たれるチャクラ光は、生命力の海だ。
焼き付くような熱に満ち溢れた、暴力的な奔流だった。

※

何が起こったのかは分からないが、とにかく、椛が言っていた、まさかが大当たりが現実になったことだけは分かったさとり達は、一目散にオルファンの中枢部から出て、それぞれのブレンの下へと戻ることにした。

階段を駆け下り、細い通路へと出て、そのまま全速力で駆けだそうとした、その時だった。
しばらくなりを潜めていた揺れが、再びこちらを襲ってきた。今度の揺れは、先程よりもさらに大きい。

「あ・・・っ!?」

さとりは脳髄まで揺さぶるような激震で思わず足がもつれ、身体を

メトロノームのように揺らしながら、その場にうつ伏せに倒れ込んでしまった。

十数秒ほど間延びして続く揺れに自分自身よろけながらも、倒れたさとりに歩み寄りしゃがみこんだこいしが、彼女の身体を抱き起こしながら呼びかける。

「大丈夫っ？」

「え、えぇ。ありがとう、こいし・・・」

そう返事しながら、こいしに支えられて起き上がったさとりは、

「急ぎましょう」と返事してから、改めて駆けだした。

その後も、先の揺れよりかは弱い揺れが断続的に発生していたが、さとり達はなんとか、もう一度倒れるようなこともなく、ブレン達の下へと辿り着いた。

彼の者達も、突然の事態に驚いているのがよく分かった。

そして、折しも同じタイミングで、椛もこの場に辿り着いていた。

二体のブレンとさとり達の姿に気づいた彼女は、急停止しつつ、大声で呼び掛けてきた。

「た、大変です、緊急事態が発生しました！」

「どうしたーっ？」

と呼び掛ける魔理沙に対し、続ける。

「突然アンチボディが現れて、オルファンを攻撃しているんです」

「だ、大丈夫なんですか！？」

とさとり。
「チャクラシールドが展開されていましたから、大丈夫でしょう・・・報告が遅れたことへの弁明は後でしますから、お二人はどうかブレンと共に外に出て、攻撃を食い止めてくださいっこちらもすぐに地底の方に伝えますから、霊夢と輝夜様がくるまでの間は、無理しないで！」
そう応えつつ、すぐにでも飛び去ろうとする椛を、魔理沙が呼びとめた。
「それはそうするが、敵は何体だっ？どんなヤツだ！」
「一体だけです！しかし、初めて見るアンチボディでした、何だかとても不気味です・・・油断だけはしないでください！分かりましたね、いいですねっ？」
「あぁ、行っていいぞー！」
魔理沙の質問に応えると、椛は再び加速をかけ、オルファンの体内から出るべく、飛び去っていった。
その後を眼で追うようなこともせず、魔理沙とさとりのふたりは、互いのブレンに乗り込もうとする。
サトリブレンがしゃがみこんで右手のひらを差しだし、さとりがその上に上がろうとした時だった。
突然こいしがしがみ付いてきて、こう言ってきた。
「お姉ちゃん！わたしも一緒にいくよっ、お姉ちゃんの手伝いをする！」
「えぇっ？」
驚くさとりに、お燐とお空が続けて言ってくる。
「そういうことなら、あたいらだって、一緒にいきますよぅ！」

「わたし達みんながいれば、ブレンは元気になるんですよねっ？それはちゃんと覚えてるんですからーっ」

「そ・・・それはそうだけど」

さとりは、三人のこの申し出に、すぐに返事することができなかった。

こいし達のやろうとすることを、思うままにやってみればいいとは言った。

だが、アンチボディ同士の戦いに駆りたてることはまた別だ。

危険の度合いが違うのだ。

さとりは、もしもの危険というものをよく理解しているからこそ、臆病な性格もしていたのだ。

もしかしたら、ブレンが敗れ、自分達が揃って生命を落とすことになるかもしれないという考えがあると、どうしてもこいし達のこの願いを聞き入れることができないでいた。

いっそ、しがみつくこいしの身体を振り払ってそのまま行ってしまおうとも思ったが、優しいさとりにはそれもできなかった。

どうすればいいのか分からず、おろおろとしていた彼女は、次いで、再びこいしの声を聞いた。

その声は、彼女には珍しく、とても固く引き締まったような雰囲気があり、しがみ付いたまま上目づかいに見上げてくる眼にも、強い光が隠れているような気がした。

「怖くなんかならないよ。だって、怖いと思う心なんてないもの・・・でも、怖い気持ちがない代わりに、お姉ちゃんを助けたいって気持ちはたくさんあるのっ。

お姉ちゃんと一緒に、大変なことを乗り越えたいの！」

その強い声音と目線は、さとりにはなんだか、ひどく久しぶりに見たもののような気がした。
もうそれは、ほとんど初めて見るのと同じようなものだった。
さとりは、こいしにもこういう顔ができるということを．．．こういう顔が、本来は出来たのだということを知った。
それは何だか、とても貴重なことだと思えた。
こんな貴重な感覚を味わえたのなら、こいしの願いも、聞き入れてやった方がいいのではないかと思えた。
ふとお燐とお空の方に振り向くと、ふたりも、似たような表情をしていた。

その顔を見れば、今回ばかりは、皆の願いを突っぱねてしまえば、姉として示しがつかないと分かった。
妹とペット達を愛するのなら、この願いは、叶えてやらなければならない。

さとりは数秒だけ眼を閉じ、そして開くと、しがみ付くこいしの身体をゆっくりと離しつつ、マリサブレンの方を向きながら、言った。
すでに魔理沙を胎内に乗せたブレンは、オルファンの外に出るべく、狭い通路の中、僅かにつま先を浮き上がらせているところだった。

「魔理沙はもう動こうとしている．．．急ぎましょう。みんな、手のひらに乗って！」

その声を聞いたこいしとお空達は、強く頷きながら、さとりの後を追ってブレンの手のひらに乗り、そのまま胎内へと入っていった。

四人が揃ってスリットウェハーにもたれかかると、やはり、さすがに窮屈さは感じた。

しかし、肉体的な窮屈さに反して、精神的な部分では、なんというか、自分達の力が外へ外へと広がって、この世の全てを自分達のものにするような高揚感があった。
さとり達、ふたりと二匹のオーガニックエナジーがブレンに集まり、何倍、何十倍にも高められ、その身からあふれ出ているのだ。
等しくブレンを愛して、彼の者のために頑張ろうとする意思が、ひとつの大きな力となっていた。

コックピットの設置が済めば、胎内はさらに狭くなる。
とても、四人揃って入ることはできなくなるだろう。
これが、最初で最後、さとり達とブレン・・・五つの魂の戦いとなる。
なら、もうこいし達の生命への心配は捨てる。
このただ一度の戦いを、無事に生き残ればそれで済むことなのだ。
そうなるために、彼女らを守るのが、自分の役目であると。

例え、ふたりと二匹が等しくブレンの胎内にいようと、それでもさとりは、彼女達をまとめていく姉であり主人として、心を強く持とうと決めていた。
そうすることで、ブレンの中で膨れ上がった強靭な力が、より大きく、鋭くなると信じていた。

「いきましょう・・・みんな！」
「よぉーし！」
「いくよぅー！」
「地霊殿に何者がいるのか、教えてやるわー！」

さとりの凛々しい声にさとり達の喊声が続き、サトリブレンもその身を浮き上がらせ、オルファンの外にいるという謎の敵を食い止めるべく、動き始めた。

※

さとり達に先んじて、ブレンと共にオルファンの外へと向かう魔理沙。
最短のルートで体内の道を通り、流れていくスリットウェハーの壁面には眼もくれずに、そのまま細い出口をくぐり抜け、未だ朝焼けの陽の光も弱い青空へと飛び込むように、外に出た。

それと同時に、椛の言う見たこともないグランチャーの影を探し、辺りを見回す。
そうするとすぐ、ブレンから見て右の方に、それは見えた。
しかし、魔理沙はその者の姿を見た途端、思わずこう漏らしてしまっていた。

「霊夢・・・じゃない、なんだあいつはっ？」

ハクレイブレンとまるで同じな、濃い紫色をしている。
だが、姿形はブレンとは全く別物だった。
そして、グランチャーとも、ブレンチャイルドともまったく違う。
本当に、アンチボディという種族として扱っていいのかも分からないほどに、特異な姿をしていた。

しかし、滑らかな体表・・・スリットウェハーの延長と思わしき、珊瑚を削って表面を滑らかにしたような装甲は、ビットが構成するそれに間違いなかった。

となればあれもまた、オーガニックエナジーによって生きるアンチボディなのだろう。

ブレンを急停止させ、すぐさま件のアンチボディに対し正面を向けつつ、魔理沙は、息を呑んで敵の動きを見極めた。
不可解さを眼の前にすると、人間というのはどうしても、その不可解さに解答を見つけようと身構えてしまうものだ。
しかしそれは実際、身構えるというほど高尚なものではない。
傍から見るとそれは、ただ単にぼーっと突っ立っているだけにしか見えなかったりするのだ。
今の魔理沙と、マリサブレンもそうだった。

しかし、スリットウェハーの中で身を固まらせていた魔理沙は、滑らかな壁面を伝って、ブレンがじわりじわりと恐怖しているのに気がついた。
その恐怖は、初めて彼の者がリバイバルした時、グランチャーに対して感じた恐怖と、根底を同じものとしていた。
それがより鋭利に、剃刀のような危うさを持っていたのである。

それに気づいたおかげで、魔理沙はいち早く行動することができた。
眼前により迫ったチャクラ光に反射的に反応し、紙一重のところで回避させることができたのである。

「うわぁあぁ〜っ！？」

素っ頓狂な悲鳴が、胎内でこだました。

スリットウェハーに必死にしがみ付きながら、ブレンに反撃するように命じる。
体勢を整えつつ、ブレンバーを敵目掛けて構え、一射する。

真っ直ぐに伸びたチャクラの淡い光が、紫色のアンチボディに突きつけられる。
これは、直撃だ。

しかし、その光が敵を貫くことも、装甲を炙るようなこともなかった。
光は、敵に命中する直前に、見えない膜のようなものに引き裂かれ、放射状に拡散していた。
いまさら、よく見慣れた光景だった。

魔理沙が続けて呻く。
「案の定、チャクラシールドかっ。こいつは強いぞ！」

チャクラシールドで無力化されるのなら、攻撃する意味はない。
魔理沙は、（元々出過ぎた真似をするつもりなどなかったが）椛の言う通り無茶はせず、霊夢達が出揃うまで相手を惹きつけるのに専念することにした。

幸い、といおうか。
敵の動きはそれほどよくない。
というか、むしろすこぶる悪いといってもよかった。
ほとんど棒立ち状態になって、時折胸部からチャクラ光を撃ってくるだけだ。
この状態が続くというのなら、充分この場をやり過ごすことはできるだろう。
多分、そんなことはあり得ないのだろうと分かるが・・・

魔理沙がそう考えた時、彼女から遅れて、サトリブレンもようやくオルファンの外へと出てきた。
その時だ。

紫色のアンチボディが、妖しく笑んだ気がした。
アンチボディの表情というものは魔理沙に分かるわけがないのだが、彼女にははっきりと、敵が嘲るような笑みを浮かべていたのが分かった。
オーガニックエナジーに乗って、その嘲笑の声が聞こえるような気がしたからだ。

それと共に、これまで積極的な動きを一切見せなかった敵が、水を得たように躍動し始めた。
そうして魔理沙は、その眼に映る光景に、さすがに息を呑むしかなくなった。

紫色のアンチボディの肩から伸びていたいくつものヒレ状の物体が、ゴムを引っ張るように四方へと伸びて、広がった。
それはまるで、蛸が足を広げて獲物を捕えようとする動きにも見えたし、海を見たことがないから蛸が何なのか分からない魔理沙には、巨大な手がその五指を広げるようにも見えた。
いずれにせよ、それをすぐ眼の前で見れば、脅威的に感じないわけはない。
まして今、それらの例えとまるで同じように、自分の肉体の一部を広げてみせているこのアンチボディは、まったくもって不可解な、謎の敵なのである。

「・・・な、なにをする・・・っ？」

本来なら、一目散に距離を取るべきなのだろうが、魔理沙は敵の異様に竦んでしまったのか、あるいはこの期におよんで、敵が何者なのか見極めようとしているのか、次なる敵の行動を待つべく、ブレン共々身構えてしまっていた。

その次の瞬間だ。
四方に広げられていた紫のアンチボディのヒレ・・・その先端が、それぞれぴくりと揺れたような気がした。
魔理沙がそれに気付いた時、十数本あるヒレは一斉に鞭の如くしなり、伸びた。
その鋭利な先端を突き刺すように、それぞれが別の動きをしながら、ある一点に目掛けて突きつけられたのである。

サトリブレンだった。
紫のアンチボディは、彼の者を狙っていた。
これが攻撃であるということは、伸びるヒレの猛々しさを見れば、考えなくとも分かることだった。

魔理沙は、敵の攻撃がこちらに飛来しなかったことに、肉体が本能的に安堵するのを感じながらも、さとりに向かって叫んでいた。

「いったぞ！かわすんだ！」

耳元で、こいしとお燐とお空が三人揃って何か叫んでいたのが、さとりにはよく聞こえた。

「きた・・・っ！」

彼女は、出会い頭からの敵による問答無用の攻撃に呻き、全身の筋肉が緊張し、硬直するのを感じながらも、ブレンに回避するように命じた。

アンチボディの身体から四方に広げられたヒレが、最終的にブレン

のいる位置に集まる様に、伸びてくる。
一点に収束するのなら、回避することは困難ではなかった。
彼の者は急上昇をかけ、燕のごとく飛び上がる。

それから一瞬の間を置いて、ブレンがいた位置に無数のヒレが飛来し、その柔らかく弾力のありそうな見た目に反して、金属質な音を鳴らしながら互いに擦れ合い、幾重にも交錯した。

無事にヒレによる攻撃を回避したブレンの胎内の中で、さとり達にはまだ、安堵する余裕が与えられることはなかった。
交差するヒレの、伸びすぎたツタが絡まっているようにも見えるその様を見下ろす中で、彼女は、こちらを捉えられなかった先端部が、再びこちらに向かってその鎌首をもたげるのを見た。
直観的に何かマズイと感じた彼女は、ブレンに今度は横方向、敵から離れるように回避行動を取らせた。

それと同時に、ヒレの先端部から、それぞれチャクラ光が発射され、真っ直ぐにブレン目掛けて伸びてきた。
あのヒレは、単に突き刺すためのものではなく、チャクラ光を発射するためのものでもあったのだ。
いわば、あのヒレひとつひとつが、グランチャーの持つソードエクステンションと同じものであると考えていいのだ。

直前で回避することで、無事にこの攻撃も回避することができたのだが、今しがたブレンのいた位置を、今まで見たこともないような数と密度のチャクラ光が通過する様には、さすがに恐怖を感じずにはいられなかった。
あのヒレのひとつひとつがソードエクステンションだというのなら、いわば、それだけの数の敵を相手にしなければいけないというのと同じなのではないか？

「・・・・・っ」
「ひゃあぁーーーっ！」
さとりの声にもならない呻きに、こいしの悲鳴が相乗する。
それと共に、オーガニックエナジーに乗って、魔理沙の声が聞こえてきた。

「やらせないぜーっ！」
魔理沙は叫びながら、反射的にブレンを敵に向かって突撃させていた。
このままこちらが行動を起こさなければ、サトリブレンがやられていたという判断もあった。
敵を撃破するつもりはない。
ただ脅かして、サトリブレンへピタリと定まっていた焦点をずらすだけだ。
ブレンバーを構え、紫色のアンチボディに肉薄した漆黒のブレンが、振りかざしたチャクラの刃を、勢いよくなで斬りに切りつけた。

「ブレンバー、チャクラ斬りだっ！」
しかし、降り下ろされた刃は、伸びたゴムが縮むように一瞬にして収縮した一本のヒレに受け止められていた。
紫色のアンチボディの手が、そのヒレの一部を掴んでいる。
それは紛れもなく、剣を握る姿そのものだった。
魔理沙は呻く。

「何もかも、ソードエクステンションとおんなじってわけかー・・・っ！」

しかし、やっていることは同じでも、根本的な部分・・・『格』というものが違った。

紫色のアンチボディが、ヒレを握る腕を勢いよく振る。

そうするとマリサブレンは、ヒレとぶつけていたブレンバーの刀身ごと払いのけられ、ちり紙を叩(はた)いたように吹き飛ばされた。

そう。こちらの攻撃など、ちり紙がまとわりつくのと同じようなものだと言わんばかりだ。

「・・・パ・・・パワーが！違いすぎるーーっ！」

喚きながら、すぐさまブレンに体勢を立て直させる。

しかし、こちらを見据える敵のアンチボディと、魔理沙、そしてブレンの視線が交錯する中で、彼女の戦意は確実に萎えようとしていた。

こっちだって全力でぶつかったのだ、それを、いともたやすく受け流されたのでは、勝ち目がないと思うのも無理はなかった。

「くぅ～・・・っ！」

再び攻撃するべくブレンを動かせようとするのだが、それができずに、呻く魔理沙。

ブレンも、この正体不明の敵の能力に対する恐れを隠しきることができていなかった。

そうして、攻めあぐねている彼女達を尚もあざ笑うかのように、敵の方が攻撃を仕掛けてくる。

ヒレを握っていた手を離すと同時に、離されたヒレが真っ直ぐにこ

ちらに伸びてきた。

「こいつぅっ！」

直線を描くような軌道で迫り来るそのヒレの攻撃には、対応することはできた。

ブレンをすぐさま右に回避させる。

だが、その行動も必要なかった。

ヒレは何故か、こちらに迫り来る途中で、少しずつ左方向に軌道をずらし、最終的には、ほとんど見当違いの位置に伸びていた。

こちらが回避運動を取らなかったとしても、１０m近く離れていたであろう場所をヒレが通過している。

それは、逆に不気味だった。

ヒレはこちらが回避運動を取った後から軌道をずらしていた。

こちらの動きが見えているなら、普通はこちらを追って右方向に逸れるはずだというのに、何故逆の方向に逸れるのだろうか。

向こうは何かする気だ、という魔理沙の予想は的中した。

紫色のアンチボディが、肩を振るようにその身体を左に捻った。

その動きに呼応するかのように、伸びきったヒレが巨大な一本の刃となって振り抜かれ、横一閃に空気をなぎ払いながら、マリサブレンへと迫った。

何かあると疑ってかからなければ、これでやられていた。

直前に上方へ回避したおかげで、刃のついた鞭のようにしなりながらも鋭利なヒレによる斬撃を、やり過ごすことができた。

しかし、つま先を刃が掠めるのを感じてしまえば、魔理沙は胸の奥が冷たくなるのを感じた。

「んなくそ～っ・・・なんなんだ、こいつっ！」

叫びながら、彼女は半ばやけくそになって、ブレンにブレンバーを

一射させた。
チャクラ光が真っ直ぐに伸び、伸張したヒレを再び縮めようとする紫色のアンチボディに迫り、浴びせられる。
しかし、アンチボディの周囲に展開していたチャクラシールドが、いともたやすくそれを受け流してしまう。
ガラス玉に水をかけても、その奥にまで水が染みわたることなどない。
それと同じように、こちらの攻撃はほとんど無力だったのだ。
ガラスそのものを砕くことができていない今は。

霊夢と輝夜が来るまでの間、耐える。
が、この敵を相手に、それができるのか？

そんな疑問の声が脳裏を過ぎる中で、魔理沙の脳裏に、突然不気味な笑い声が響いた。

――ふ・・・ふ・・・ふ――

まるでスローモーションにでもなったかのように、あるいは、こちらの心臓の鼓動にでも合わせているかのように、間を置いて小刻みに聞こえてくるその静かな笑い声。
空気を揺らすというよりかは、かき混ぜながら、流し込むように耳に入り、そのまま鼓膜を染みだしてくるようなその声に、魔理沙は息を呑んだ。

この声は恐らく、あの紫色のアンチボディの宿主が発するものだ。
どこまでも不気味で、この世にも、あの世にも、どの世界にも在らざるべきものに思えるような声だったが、魔理沙は何故か、それを

どこかで聞いた覚えがあった。
こんな不気味な笑い声、生きている内に聞くことになるとも思っていなかったのに、何故聞き覚えがあるというのか。
まったく分からなかった。

そうして彼女は、脳にねっとりと絡みつくその笑い声と共に、ある名前を語る声が聞こえてくるような気がした。
それもまた、他でもない。
眼の前にいる、あの異様なるアンチボディの名前であるらしかった。

「バロンズゥ・・・っていうのか?あいつは・・・」

第十八話　その４

バロンズゥという名は、さとり達にも聞こえていた。
そしてさとりにもまた、心臓の行動に合わさるような不気味な笑い声は聞こえていた。
彼女にとってもその声は、聞き覚えのあるものであり、今すぐにでも誰の声なのかも思い出せそうだった。
だが、思い出せそうという予感ばかりが先走って、実際に思い出すことがどうしてもできなかった。
すでに頭の中で結論を形作るための部品はできているのに、それを繋ぎ合わせることができないのだ。
そうしてさとりには、脳裏でバラバラになった部品をひとつひとつゆっくりと組み合わせていくほど、時間の余裕もなかったのである。

紫色のアンチボディ、バロンズゥが、再び肩から伸びたヒレをゆらゆらと風にはためかせながら、伸ばす。
花弁が開くようにゆっくりと四方に広がった十数本のヒレが、再びサトリブレン目掛けて伸びた。
今度は一斉にではない。
一本一本のヒレを、時間差で伸ばしていた。
続けざまの攻撃で、こちらに回避をさせないつもりだろう。

「うぅ・・・っ！」
さとりは息を呑みながら、ブレンを必死に回避させた。
一本のヒレを紙一重のところで回避すると、その動きを先読みして飛来した次のヒレが襲い来る。

それも、とにかくブレンに身体を動かせることで回避させた。
命中するその直前の場所に留まらなければいいのだ。
とにかく、無心になってめちゃくちゃに動きまわれば、やり過ごせるはずだ。
降下したり、左右に逸れたり、身体を捻りながら斜めに上がったりと、ひとどころに留まらない動作で、ブレンは何とか飛来するヒレを全て回避することができた。
しかし、数本のヒレが装甲を掠め、薄紫の身体にいくつかの白い筋を描いていた。
これぐらいの傷なら、すぐにでも再生するが・・・
いくらダメージにはならないといっても、敵の攻撃が身体を掠めるのが恐ろしくないわけがない。

伸びきった全てのヒレが再びバロンズゥの肩に戻っていく中で、さとりとしては冷や汗をかくような気分だった。
先の攻撃が、敵の本気でないということが、ありありと伝わってきたのだから。
あのヒレの先端から、チャクラ光が発射できるということはすでに分かっている。
なら、ヒレによる刺突の合間にチャクラ光を撃って、こちらを攻撃することもできたはずだ。
さとりとしても、そんなことをされれば、回避することなどできやしないと思っていた。
それをしないということはつまり、向こうが手加減をしているということに他ならないのだ。
一体何故、本気を出さないのか？
それはまったく分からないが、手加減するということはつまり、こちらを撃破するつもりはないのではないか、という考えが首をもたげてきていた。

そんな中でだ。
さとりは、スリットウェハーの中、こいしが身を乗り出して、苛烈な攻撃を繰り出しながらも、今なお静けさを保っているバロンズゥに対して叫ぶ声を聞いた。

「こいつっ、お姉ちゃんとブレンを困らせるなー！わたし達が、あんたなんかやっつけてやる！」
それに、お空とお燐も続いた。
「ブレン！私達の力をあげるわよー！」
「やっこさんを死体にしてやりなぁ～！」

「あ・・・貴方達・・・」
こいし達の、恐怖を知らないような真っ直ぐな声に戸惑いつつ、さとりは、この真っ直ぐな気持ちが、この状況を打開するきっかけになるのではないかと思った。
霊夢達が来るまで待てという話だったが、それまで防戦一方でいたのでは、いずれこちらの根気が萎えてやられてしまう。
ならば、こちらからも一度や二度反撃し、敵の動きを牽制しておかなければならない。
しかし、ただ攻撃するだけでは、牽制にもなりはしない。
敵の反撃を誘発して、逆にどんどん追い詰められるだけだ。

だが、こいし達のオーガニックエナジーをブレンに集めれば、より強力な攻撃を繰り出すことができるかもしれない。
バロンズゥが展開しているチャクラシールドを破ることができるほどの、強力な攻撃を。
さとりは、それに賭けてみることにした。

「・・・なら、いきましょう、みんな！」
こいし達にそう応えつつ、オーガニックエナジーを通じて魔理沙に

も呼びかける。

「もう一度だけ攻撃してみますっ。魔理沙さんも続いてください！」
（通用するのかっ？）
「驚かせるぐらいのことはできるかもしれません」
（・・・分かった、いくぜーっ！）

魔理沙の返事に続いて、マリサブレンが再びバロンズゥに向けて攻撃を開始する。
ブレンバーを構え、肩から伸びるヒレ以外は微動だにしない敵に向けて、数発連射する。
真っ直ぐに飛来したチャクラ光が、頭部、左肩、脇腹、左腿に直撃するが、すべてチャクラシールドにより無効化されていた。
オーガニックエナジーが弱まり、結界が破れるような様子もない。
相当に強力なチャクラシールドであるようだ。
だが、そんなことはお構いなしだ。

「いけぇーーっ！」
こいしの叫び声に応じるように、さとりは自分の意思がブレンの身体を伝え、その右手に握られているブレンバーに収束していくのをイメージした。
そうして、ブレンに、その銃口を敵に対して真っ直ぐに突きつけるように命じる。

冷たい金属の質感を持つその銃口が、ぴたりとバロンズゥの胴体に合わさった時、さとりは叫んだ。
その射線上には、他に何者も存在していない。
マリサブレンも、オルファンもだ。
せいぜい、雲の塊があるぐらいだ。
遠慮をする必要はない。

「集束（コンセントレイト）っ！」
それと同時に、ブレンバーから巨大な光の渦が打ち出される。
さとり達全員のオーガニックエナジーをブレンに集めたチャクラ光だ。
その光の大きさと発せられる熱は、チャクラエクステンションにも通じるほどに強力だ。
これだけの一撃ならば、いくらチャクラシールドが強力であろうと、あの敵も無傷では済むまい。

その予想は的中した。
今まで、こちらを侮るようにまったく動きを見せなかったバロンズゥが、素早くその場から回避し、チャクラ光を回避したのである。
その動きは俊敏で、光に接触するだけではなく、掠めるだけでもダメージとなるチャクラ光を何の問題もなくやり過ごすほどのものだった。
だが、回避するということはつまり、こちらの攻撃が、回避しなければならないほどに強力であるということに他ならない。
充分に、あの敵に打撃を与えることは可能だということだ。
なら、このまま攻撃を続けていけば、バロンズゥの動きを制することもできる。
霊夢達が到着するまでの時間稼ぎは、できるはずだ。

「まだまだーっ！」
膨大な光の波が通過すると同時に、マリサブレンはブレンバーを振りかざし、続けざまに敵を攻撃するべく突撃した。
接近してのチャクラ光の刃による攻撃ならば、敵のシールドも破り、無理やりにでも装甲に届くはずだった。

サトリブレンの攻撃を回避して隙ができた今が好機。なんなら、霊夢達が来る前に敵を倒すこともできるはずだ。
それは、椛の注意を無視するような驕った考えではあったが、勢いに乗った今、その勢いを維持し続けることは大事だった。
一度でも相手を押すことができたのなら、ここでまた一歩引くわけにはいかない。そうすると、また敵にじわじわと追い詰められるだけだ。
このまま巻き返しの機会を与えず、波状攻撃を加えるべき。

そのような思考を一瞬で終え、魔理沙は眼前に迫ったバロンズゥを攻撃するべく、ブレンに命じた。
高々と振り上げられたブレンバーが薄い光が纏い、その光と共に勢いよく振り下ろされた。

しかし、その斬撃が敵を捉えることはなかった。
ブレンバーは、空を切り、チャクラ光が空気を焼く独特の音を響かせるだけで、何の手ごたえもないままに振り抜かれた。
バロンズゥは、魔理沙の視界から忽然と姿を消していた。
回避したとか、高速で離れたとかいうのでもない。本当に消え去ったのだ。
彼女の眼の前にあるのは、バロンズゥが残す、僅かばかりのオーガニックエナジーの余韻であった。

「こ・・・い、つぅっ？」

魔理沙は嫌な予感がして、咄嗟にサトリブレンのいる方へと眼を向けた。

マリサブレンの前から姿を消したバロンズゥが、さも当然のことのように、サトリブレンのすぐ眼の前にいたのである。

バイタルジャンプだ。
瞬間的にオーガニックエナジーの帯に乗って、サトリブレンの眼の前にまで移動したのだ。
そして、バロンズゥの右手には、肩から伸びるヒレの内の一本が握られており、その腕は、今まさにブレンを切り付けんと振りあげられていた。

「よ・・・よせって、おいっ！」
魔理沙は思わず叫んだ。

「あぁっ！？」
「うわあぁーーーーっ！」

さとりの小さな悲鳴は、こいしの大きな悲鳴にかき消されていた。
突然眼の前に現れたバロンズゥが、その眼に宿る光を怪しく煌めかせながら、ヒレを握る右腕を振りかざしていた。

ほとんど無意識の内だった。あるいは、こいしの無意識にブレンが反応したのか。
彼の者は咄嗟にブレンバーを眼前にかざし、可能な限り強力なチャクラ光で刀身を覆った。

続けざまに、バロンズゥが掲げた右腕を振り下ろし、あらゆるものを切断するような鋭利さをもったヒレで、袈裟斬りに斬りつけてきた。
その斬撃をブレンバーが受け止め、衝撃波と共に、水の塊が勢いよく弾けるような音が響き渡った。
そのまま、オーガニックエナジーが干渉し合う音を響かせながら、

バロンズゥのヒレが押し込まれてくる。
薄いヒレが、ブレンバーを覆うチャクラ光に少しずつ喰い込んでいた。
敵の刃の方が、こちらよりもはるかに鋭く、強力であるのだ。
もしチャクラ光を展開していなければ、ブレンバーの刀身は両断され、そのままブレンの身体も真っ二つになっていたであろう。

「・・・・・・っ」
爪先から頭のてっぺんにかけて満遍なく怖気(おぞけ)が奔るのを感じながら、さとりは、鍔迫り合いによる光の外側で、バロンズゥの肩から伸びる残りのヒレが、妖しく揺れているのを見た。
まるで、まだ自分達がいるということをこちらに示し、笑っているようだった。
そうだ・・・このバロンズゥはいわば、この場に十数体のアンチボディがいるのと同じような存在なのだ。
一体の敵と今のように鍔迫り合いをしていたら、別の一体に攻撃されるのが当たり前だった。

「まずいっ！」
さとりは呻きながら、ブレンを全速で後ろに退かせた。
バロンズゥの右腕がヒレごと振り抜かれ、鋭い切っ先が空を切る。
それに続くように、三本ほどのヒレが一斉に伸び、先程までブレンがいた場所を交差しながら伸びた。
後一瞬でも動きが遅れれば、あれの全てに串刺しにされて、一巻の終わりだっただろう。
そして、敵の攻撃はまだ終わりではないのだ。
まだ健在である残りのヒレが、回避するサトリブレンに食らいつくように一斉に伸びる。
そうして先程と同じように、時間差による連続攻撃で、ブレンを襲う。

一度回避した攻撃であるし、今度はヒレの数が少ない。
それでも、頭の中が空っぽになるような感覚を味わいながら、さとりは必死にブレンに回避するように命じていた。
絶え間なく飛来するヒレの刺突を回避し、最後の一本が眼前に飛来し、ブレンがそれを上方に逃れて回避しようとした時だった。
ヒレは、こちらを突き刺そうとする直前、その動きを止めたかと思うと、急激に軌道をずらして下に逸れた。
続いて、その先端部をブレンのいる上空へと向けた。
ヒレの先端があるのは、ブレンの真下だ。そしてブレンは、真上に向かって回避している。

「・・・っ！」

さとりは、口を真一文字に噤んで息を呑み、ブレンに急後退をかけさせた。
ブレンの身体が、上昇による慣性に乗りながら後ろに下がったその瞬間、ブレンと、その胎内にいるさとりの眼の前を、淡い光の海が広がった。

そう・・・一面の液体だ。まるで、自分達がこの光る液体の中につけこまれたようだった。
その光る液体は、緑色のような、オレンジ色のような、形容できない色彩をしており、とても美しいもののように思えた。
だが、熱かったのだ。
肌が焼けつくような熱を孕んでいた。
それだけでもさとりは、眼の前の美しい光の海を、恐怖の対象として見ることしかできなくなった。

直前、ブレンはチャクラシールドを限界まで強めて展開していた。
そのため熱量の波もなんとか遮り、ヒレの先端から放たれるチャク

ラ光も、何とか無傷でやり過ごすことができた。
しかし、衝撃や熱は受け流すことはできても、脅威そのものはどうあっても打ち消すことはできない。
さとりの戦意は、確実に萎えようとしていた。
チャクラ光が通過し、伸びたヒレがバロンズゥに戻っていくのを見ながら、さとりは口を噤んだまま、呻くことも喚くこともできないでいた。

「・・・・・・っ」

敵のアンチボディの異様な強さを目の当たりにして、負けるかもしれないという考えが、幾度となく脳裏を過ぎ去っていた。

そんな時だ。
さとりの隣で、こいしが大声をあげて泣き始めた。
「う・・・うぅ・・・うわぁぁーーーん！」

それはまるで、ダムが決壊して、せき止められていた水が一気に流れ出るような泣き声だった。
これほど大声で彼女が泣くようなところを、さとりは見たことがなかった。
びっくりする彼女に気づかないまま、こいしは、口を大きく開けて、ほとんど叫ぶような声をあげながら、泣き声に混じって言った。

「や、やっぱり怖いよおぅ～っ！死んじゃうよぉ～！」

その声に釣られて、お燐とお空も大声をあげて泣き始めた。
「あたい、死体になんてなりたくないぃ！」
「嫌だよそんなの～～っ！」

「・・・・・・」

さとりは、こいし達の泣き声に驚きこそしたが、それも一瞬のことだった。
彼女は、妹達の涙を見て、驚く以上に、釣られて泣きだす以前に、もっと別の何かを感じていた。

こいしが、怖いと言った。死ぬことを恐れてもいた。
それは、今までで初めてのことだったのだ。少なくとも、彼女が今のこいしとなってからは。
心を失い、喜びだとか、逆に恐怖とかいうものを、理解こそできても実感することができないでいたこいしが、今この時、心の底から死ぬことを恐れ、生きることを懇願している。
それは紛れもなく、失われた感情の再生と考えてよかった。
誰が・・・何がそうさせたのか？

ブレンだ。ブレンとの出逢いがそうさせた。
ブレンが、こいしの心にある、閉ざされた籠の中で眠っていたものを呼び覚ましたのだ。
今思えば、ブレンに出逢ってから、こいしが少しずつ変わっていることに、さとりは今になってようやく気づいていた。
そうして今日この日、こいしは、確かな感情を・・・ブレンに対する信頼をもって行動し、ブレンと共に戦うことを決心して、そして、死ぬことを恐れているのだ。

過程が何にせよ、それは何にも勝るいい傾向だった。奇跡といってもいいぐらいだ。
失われたものを取り戻そうとしているのだから。
だが、その奇跡が、眼の前のあのアンチボディ・・・バロンズゥによってかき消されようとしている。

あの者がこちらの生命を駆りとり、消してしまおうとしている。
さとりはそれを、許し、受け入れるわけにはいかなかった。

泣き喚くこいし達に向いていた注意が、バロンズゥへと向いた。
そうしてさとりの胸の内には、自分自身信じられないほどに強く固まったある意思が芽生えていた。
その意思に身を任せようと決めた時、さとりは、大声で泣くこいし達に、空気を揺らすのではなく、押しのけるような、静かでありながらよく響く声で呼びかけていた。

「何を言っているの、死にはしないわ」

その声を聞いて、こいしもお燐達も、一瞬で泣きやんだ。
その変わり、不思議そうな顔をして聞いてくる。
「死なないって・・・大丈夫なのっ？」
それにさとりは、はっきりとした声で応えた。

「心配ないっ。私とブレンが、みんなを守る」

そんな声がスリットウェハーの中を響いた、その瞬間だった。
バロンズゥが、再び肩にあるヒレを伸ばし、こちらを攻撃してきた。
こいし達が再び呻く。
だが、何故だか今の彼女達は、それほど強い恐怖を抱くことがなかった。
奇妙な安心感が胸の内にあって、それが湧き出てくる恐怖を抑えつけているような気がした。
静かに響いたさとりの声と、ブレンの肉体が発する力が、そうさせているのかもしれない。

「貴方はぁーっ！！」

さとりの、今まで誰一人として聞いたことのないような雄たけびと共に、ブレンは何故だか、飛来するヒレに逆に突っ込むように加速を開始した。
それと共に、ブレンバーを射撃体勢で構えつつ、チャクラシールドを展開する。
オーガニックエナジーの膜が肉眼で見えるほどの、分厚い結界だった。

さとりの心は真っ直ぐだった。
彼女は、こいし達を守ることだけを考えていた。
それはすなわち、この戦いを生き残ることだ。
相手を倒すとか、そんなことはもう関係ない。
ただ、生きることだけを考えた。
それが、こいし達の死を恐れる心と相乗して、異様なまでに強力なオーガニックエナジーをブレンの体内で発生させていた。
それが、この分厚いチャクラシールドを形作っているのだ。

一本のヒレが、真っ直ぐにブレンの頭部に突きたてられる。
しかし、そのまま頭を貫通するはずのヒレは、チャクラシールドに受け流され、油を塗りたくった鉄の玉を滑る様に、球形の膜を滑りながら、そのまま後方へと逸れていった。
後から次々と飛来するヒレも、残らずブレンに直撃するはずだったのが、シールドに受け流され、軌道を逸らされていく。

ヒレの攻撃を悉く受け流しながら、尚も紫色のアンチボディへと迫るブレン。
バロンズゥが初めて動揺するのが、さとりには分かった。

やがて、バロンズゥのすぐ眼の前にまで接近したサトリブレンは、

その大きな鶏冠を持つ頭部にブレンバーの銃口を突きつけた。
そこにはすでに、膨大な量のオーガニックエナジーが、今まさに撃ちだされんと収束されている。

「・・・っ！」

さとりは、噤んだ唇の奥で歯を食いしばりながら、自らの意思・・・家族を、ブレンの生命を守ろうとする意思をブレンバーへと乗せ、撃ち放った。

魔理沙が、思わず叫ぶ。
「こいつは・・・すごいぞぉーーっ！」

飛来する無数のヒレを、眼に見えるほどに強力なチャクラシールドで受け流しながら敵に迫ったサトリブレンが放ったブレンバーの一撃。
それはさながら、熱や衝撃というものと関係なく、光そのものではないかとすら思えた。

光の大きさ自体は、先程の一撃よりも小さく、撃ちだされた光の柱も細かった。
だが、限界まで収束されたオーガニックエナジーは、その代わりに異様なまでの加速度を生み、一瞬にして雲を突き破り、空の彼方にまで消えていった。
それこそ、光の速さに達しているのではないかとすら思えた。
撃ったと思ったその瞬間にはもう、魔理沙の眼には、一筋の光の線がどこまでも遠くへ伸びていくのが見えたのである。
そしてその細い一筋の光の線は、バロンズゥの頭部を僅かに掠めて

いた。直撃ではない。
しかし、周囲に展開されていたチャクラシールドを粉々に打ち砕き、オーガニックエナジーを四方に拡散させたその一撃は、例え掠めただけだったとしても、強力な衝撃波をその場から発生させていた。
バロンズゥの身体は後方へと勢いよく吹き飛ばされ、攻撃を放ったブレン自らもその勢いに負け、押し流された。

ドゥン、という、巨大な物体がドロドロした液体で満たされた池の中に沈められたような音が耳元を通りすぎたと思うと、叩きつけるような衝撃波が、遅れてマリサブレンを襲った。

「おぉっ!?」

突風が吹きつけてきたような感覚に驚きつつ、そのまま流されまいと、ブレンを踏ん張らせる。
バロンズゥとサトリブレンも、互いに吹き飛ばされながらすぐに体勢を立て直し、再び睨みあうような状態になっていた。

一瞬の突風が吹きぬけていったのを感じつつ、息を呑んで両者の動きを見極めようとしていた魔理沙は、オーガニックエナジーを通して脳裏に直接語りかけてくるようなその声を聞いた。
それと共に、大きく両腕を広げたサトリブレンの身体から、淡い光が漏れ出し、周囲をオーロラのような光の波となって漂い始めた。
膨大なオーガニックエナジーが、体内に収まりきらず、あふれ出ているのだ。

――――・・・貴方が何のために、何をしようとなさっているのかは、分かりません――――

「さとりの声だ・・・これは、さとりが言っているのかっ?」

――ですが、貴方がどれほど強かろうと、私の妹やペット達の生命を奪うようなことは、絶対にさせません。
私達を倒そうというのなら、どうぞいらしてください・・・私達は、必ず生きて帰る。
さぁ・・・来るのなら、来なさい！消えない悪夢を想起する日々を迎えたいのならば、ね・・・――

その声は、驚くほどの威厳と、力強さに満ち溢れていた。
魔理沙は、自分の頭の中にあるさとりの人物像を思い出しながら、その妖怪がこのような声を発することができないように思え、戸惑った。
それでもこの声は、確かにさとりのものであると分かるのだ。
そうして、その事実をひとまず受け入れてからもう一度考える中で、やはり、このような声を出すことができるのも、さとりであるような気がした。
さとりは、親切丁寧で、僅かばかりに暗く臆病な性格もしている少女であったが、はっきりと敵対する意思を見せた時、彼女は不気味で異様なる地底の妖怪そのものであるような、強さと恐ろしさを持って立ちはだかるのである。
悲痛な過去の全てを塗りたくった強固な壁となって、眼の前にそびえ立つのである。
魔理沙の記憶の中にもそんな、不気味なまでの威厳を湛えたさとりの姿は、確かに残っていたのだ。
いや、あの時は多分、そこまで本気ではなかったかもしれない。
なんであれ、今のさとりはきっと、その時と同じか、それ以上に怒っていたのだ。

どこまでも澄み渡るようでありながら、胸の奥でヘドロのように沈殿するようでもあるその声が響いた、その時だった。

バロンズゥの眼の奥に宿るオレンジ色の光が再び怪しく揺らめいたかと思うと、その紫色の肉体が、またしても姿を消した。

「またバイタルジャンプか・・・！」

そう呻きながら、周囲を見渡し、敵の姿を探す魔理沙だったが、どこを見ても、その姿を見つけることはできなかった。

ブレンの中にあった緊張感が、少しずつ無くなっていくのを感じる。周囲の空気に張りつめていた不気味な瘴気がなくなっていることを、魔理沙も遅ればせながら気がついた。

尚もきょろきょろとあたりを見回すが、とうとうどこにもバロンズゥの姿を発見できなかった彼女は、ぼんやりと前の方を向き直しながら、小さな声で呟いていた。

「・・・逃げたのか・・・？」

それからしばらくぼーっとしていた彼女は、ふと、サトリブレンの方へと眼を向けた。

広げていた両腕を降ろしている。

身体からあふれ出ていたオーガニックエナジーも、すでに弱まり、体内に留まっているようだった。

朝焼けの空は薄い青色に澄み渡り、オルファンには傷一つついておらず、その金色の身体を、朝日の反射で輝かせていた。

サトリブレンの身体に奔っていたいくつもの切り傷も、いつの間にやら塞がっていた。

「・・・・・・」

なんといおうか、何もかも実感が湧かないような気分だった。
敵が現れ、戦ったということも、ただの夢だったのではないかと思えた。
嵐が、何も吹き飛ばさずにそのまま去っていったような、そんな呆気にとられたような気分が、胸の中といわず、全身の隅々を満たしていた。
ただ、あの紫色のアンチボディ・・・バロンズゥというらしいアンチボディの姿だけは、網膜にしっかりと焼きつき、忘れられることはなかった。

言いようのない気分を味わっているのはさとりも同じだった。
グランチャーが姿を消したその瞬間などは、自分の身体の中で湧き起こっていた昂りをどこにぶつければいいのか分からなくなっていた。

しかしそれも、段々と落ち着いてくる。
こいしとお燐達が、何が起こったのか分からないといった様子でぼーっとしている中で、段々と気持ちが落ち着いてきたさとりは、異様なまでの疲労感を覚えている自分に気がついた。

どうやら、無理をし過ぎたらしい。
大量のオーガニックエナジーを、ブレンに送り過ぎていたようだ。
そのおかげで、こちらの身体の中にあるオーガニックエナジーは、大分少なくなっているようだった。
今まで何ともなかったはずなのに、急に目眩が起こり、眼の前の光景が掻き混ぜられるように歪み始めた。

空の青色と雲の白色、そして金色に輝くオルファンがぐるぐると回転しながら、ぼんやりとした霧のようなものに変貌し、混ざりあっていく。
その光景が不気味で、思わずこいしの方に振り向いても、その顔もはっきりと見ることができないことが分かったさとりは、そのまま眠るように、スリットウェハーにもたれかかって、気を失った。

「お姉ちゃん!?」
「さとり様ぁー!」

という呼びかけてくる声は、聞こえなかった。

椛から報せを受けた霊夢と輝夜がブレンと共に駆けつけてきたのは、それからすぐのことだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3889u/

東方有機愛 ～Brain Powerd～

2011年12月10日19時56分発行